

遊☆戲☆王 THE HANGS

CODE : K

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私の名前は鳥乃とりの沙樹さき。陽光学園高等部二年の女子高生。そして、レズである。

そんな私が巻き込まれたのは、とある美術館で起きた強盗事件。犯人は催涙ガスを使い4枚のカードの窃盗を企……あ、ごめん訂正。私、巻き込まれたわけじゃないわ。思いつきり関わってるのよその事件に。

——その強盗を討伐する側でね。

私の名前は鳥乃とりの沙樹さき。陽光学園高等部二年の女子高生。

その正体は殺しに警備、探偵等を行っている組織「ハングド」の構成員だ。

※ 突っ込まれる前に言っておきます。「ハングド」の仕事内容はシ〇イーハンターの「スイーパー」が元ネタです。

● 2017/01/03 追記

正気山脈さん著「遊☆戯☆王―昏沌狂躁ピカレスク―」とシェアワールドをさせて頂きました。

● 2016/08/29 追記 (08/30 一文追加)

タグに「クトゥルフ神話要素」「R-17・9Gギャグ」を追加。

(クトゥルフに関しては知らなくても問題ない程度にしたいです)

● 2018/10/11 追記

こっそりトップページのGERIchtに関する記述を削除

● 2019/02/12

MISSION25の影響でタグ「ダーク(鬱)」「ドラッグ」を追加。

この度、正気山脈さん著『遊☆戯☆王―昏沌狂躁ピカレスク―』とシェアワールドさせて頂くことになりました。

昏沌狂躁ピカレスク共々、今後ともよろしくお願いいたします。

『遊☆戯☆王―昏沌狂躁ピカレスク―』へのリンク

<https://novel.syosetu.org/10797>

7／

※ 閲覧注意回

MISSION12

MISSION25

※ 遅れても感想への返事は必ず行いますので、可能なら削除はしないで頂けると嬉しいです。

目次

序章＋第1章

MISSION1ーフィール・カードを護れ!	1
MISSION2ーもつと食べてみやくち もつと食べてみやくち 名小屋とはいえばKasugayaラーメン 宇宙の果てまで Kasugayaラーメン	17
MISSION3ー尚、沙樹への報酬は0、必要経費ドン!の大赤字となりました。	46
MISSION4ーレズとゲイとロリコンと巻き込まれしアイドル	77
USUALLY1ー梓視点の「遊☆戯☆王THE HANGS」その1	113
MISSION4. 5ーフィール・カードを護れ! 2 (幕前)	135
MISSION5ーフィール・カードを護れ! 2	169
MISSION6ーレズの過去1	218
MISSION7ー2年越しの遺言 (前編)	241
MISSION8ー2年越しの遺言 (後編)	280
MISSION9ーアンバーカラーの思い出 (前篇)	314
MISSION10ーアンバーカラーの思い出 (中篇)	346
MISSION11ーアンバーカラーの思い出 (後篇)	379
MISSION12ータキオン・ドラゴン大勝利! 希望の未来へレディ・ゴーツ!!	446
MISSION13ー軌跡	487

第2章 (ハイウィンド編)

	M I S S I O N 1 4	—	新たなる脅威	560
	M I S S I O N 1 5	—	その名はハイウインド	607
	M I S S I O N 1 6	—	絶対正義(ジャステイス)	665
	M I S S I O N 1 7	—	かすが店長の華麗なる昼時	726
	M I S S I O N 1 8	—	処分人(スローター)	782
	M I S S I O N 1 9	—	2日目Side木更	837
	M I S S I O N 2 0	—	幸せのエピローグ	884
	M I S S I O N 2 0 . 5	—	されど変わらぬもの	960
	M I S S I O N 2 1	—	絶対正義(ジャステイス) v s 絶対正義(ジャステイス)	1007
	M I S S I O N 2 2	—	2年越しの遺言(残響)	1082
1135	M I S S I O N 2 3	—	2年越しの遺言(残光 Part 1)	1135
1174	M I S S I O N 2 3	—	2年越しの遺言(残光 Part 2)	1174
	M I S S I O N 2 4	—	イーグル・フレイムショット	1228
	M I S S I O N 2 5	—	天神(ゼウス)の寿司 / 卯の花(後半閲覧注意)	1291
1349	M I S S I O N 2 6	—	決闘! レズV S ハイウインド(前編)	1349
1392	M I S S I O N 2 6	—	決闘! レズV S ハイウインド(後編)	1392
	フィーア外伝			
	V I E R 1	—	転校生は処分人(スローター)!	1448
	V I E R 2	—	フィーア外伝: 友達	1484

第3章 (フィール・ハンターズ編)

	USUALLY 2	—	からかい上手の藤稔さん	1526
	MISSION 27	—	暴食	1568
	MISSION 28	—	輝きと陰り (前編)	1618
	MISSION 28	—	輝きと陰り (後編)	1644
1680	MISSION 29	—	愛は果てしなきバイオレンス (前編)	
1698	MISSION 29	—	愛は果てしなきバイオレンス (後編)	
	USUALLY 3	—	trick or treat (だったもの)	
	MISSION 29	—	5レズの過去2	1738
	MISSION 30	—	最後のジョーカー (前編)	1781
	MISSION 30	—	最後のジョーカー (後編)	1806
	MISSION 30	—	1 最後のジョーカー (余談)	1841
1850	MISSION 31	—	それぞれの2nd stage (前編)	
1866	MISSION 31	—	それぞれの2nd stage (後編)	
	MISSION 32A	—	状況開始Side木更	1886

序章十第1章

MISSION1―ファイル・カードを護れ!

私の名前は鳥乃トリノ 沙樹サキ。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「あー、女の子抱きたい」

と、私は教室の机に突っ伏してると、

「もう。またそんな事いつて」

と、前の席に座っていた徳光 梓（とくみつ あずき）はいった。

「だってー。女体が恋しいのよ」

私はだらけたまま。

「女の子のカラダって全身ドスケベボディでしょ性的じゃん。思いつきり抱きしめて全身を愛撫して、唇奪って滅茶苦茶してやりたい」

「そういう沙樹ちゃんも女の子だよお」

「あーおっぱい揉みたい、痣が残るまで揉みまくりたい」

「だったら自分のお胸を揉んでてよ」

「自分の胸揉んで何が楽しいの」

「そこだけ正論言わないでー」

ちよつとだけ困った顔をみせる梓。かわいいなあ、私の内心はとてもほっこりだ。

「あー誰かおにやのこファツキュー」

「もうー知らない。勝手にして」

梓はぷいっと顔を逸らすも、確実に呆れてはいるだろうけど、本当に怒ってるわけではないのはすぐ見て取れた。もちろん、私の危険人物さに拒絶したわけでもない。

私と梓は幼馴染なのだ。もうかれこれ十年以上の付き合いなので、私の言動なんてとつくに聞きなれてる。でなければ私はとつくに彼女から白い目で……いや、そんな風に拒絶するだろうか、あの梓が。

梓は、とてもマイペースでぼわわんとした子だった。

小さく緩んだ口元に威圧を感じさせない目つき、制服の上からでも

分かる豊満なバストに、ちよつとだけ栗色に染めてカールをかけたセミショート髪。外見からしてもう、ふわふわして抱き心地がよさそうな感じが物すご……実際すごく抱き心地が良い。

そして、性格も外見からみえる印象とまったく違わず緊張感を感じさせない。

だからのかな、なんて最近考えてしまう。

ガチレズで危険人物さを思いつきりカミングアウトした私に全く拒絶や警戒を見せないのは、幼馴染の特権なんかじゃなくて、この性格にあるのではと。

「あ、そうだー」

事実、さつきそつぽを向いてたのに梓は緩い笑顔で、

「つい先日、美術館でねー」

と、そこへ私のスマホにメールが届いた。

「あ、ごめんね」

私は一言断ってメールを確認する。そして席を立ち、

「梓ごめん、ちよつと電話入れてくる」

「あ、う——」

彼女の返事を最後まで聞かず、私は急いで教室を出た。こんな時、彼女は一体どんな顔をしたのだろうか。

その日、私は最後まで教室には戻れなかった。

——同日、14:30

この日、某美術館では『都市伝説くファイルとデュエルモンスターズ展』が開かれていた。

館内に展示されてるものは、どれもデュエルモンスターズのカード。それも、市販では手に入らず、例え決闘者であっても殆どの人たちによつては初めて見るカードばかりである。

デュエルモンスターズというカードゲームには、何もない所からカードが出現するといった都市伝説が存在する。

それらのカードは「ファイル・カード」と呼ばれ、その名の元になったファイルと呼ばれる立体映像を実体化させたり、衝撃や異常現象を

引き起こす特殊なエネルギーを内包してるとされる。今回展示されているカードの殆どは提供された情報を元に再現されたレプリカだった。

フィール・カードで有名なのはナンバーズだろうか。巨大パネルで展示されてるカードには《No. 10 黒輝士イルミネーター》と明記されている。

そんな美術館を、コートの襟を立てサングラスと帽子で顔を隠した男がひとり歩いていった。

彼の向かう先には、他の展示品と同じ……いや、他のカードと比べて目立たずひっそり展示されてる4枚の原寸大のカード。

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》

「……これか。ククッ」

男はニヤリと笑い、コートにそつと手を突っ込んだ。直後だった。

館内が無色の煙幕と爆発音に包まれたのは。

『キヤー』

館内の至る所から来客の悲鳴が響き渡る。平日の昼過ぎで人が少なかったが、逆に警備員も完全に警戒しておらず、非難口への誘導は間に合わなかった。

発生した煙幕の正体は催眠ガス。館内にいた殆どは、その場で意識を手放してしまったのだ。

「(こうも簡単に上手くいくとはな。順調すぎて笑えるほどだぜ)」

とても、コートの男は思っていたのだろう。彼は催眠ガスの中倒れる様子なく堂々と4枚のカードに手を伸ばす。いまや襟で顔を隠す素振りさえない。

そんな男の背後で、

「はいストップ」

私はいった。

「なッ！」

男は振り返り、そしてもう一度驚いてくれる。

そこにいたのは制服姿の麗しき若い乙女（自称）。整った顔立ちから勝気で快活な瞳、髪はポニーテールに縛っており、胸は……梓と比べる程でもないけど、Cくらいあるんじゃない？

左腕には起動済のデュエルディスクが装着され、そこから召喚された模型サイズの戦闘ヘリがコートの男に銃口を向ける。

私の名前は鳥乃とりの沙樹さき。陽光学園高等部二年の女子高生。

その正体は殺しに警備、探偵等を行っている組織「ハングド」の構成員だ。

私は一步踏み込んで、

「ちよつとある人から依頼があつてね。この美術館にある『本物のフィール・カード』を狙う輩がいるつて」

戦闘ヘリからコードが伸び、男の首へと巻きつかれる。

そして、私が脳裏で指示を下すと戦闘ヘリから機銃が放たれる。ソリッドビジョンではあるが、フィールで実体化してる為に殺傷能力はある。事実、銃弾はコートの襟を撃ち飛ばした。

「で、見つけ次第捕らえろ。場合によっては殺傷も許可されてるんだけど。……投降の意志は？」

なんて分かりやすくヘリの銃口で男の首元を狙う。

「チツ」

男は一回舌打ち、コートの内側からデュエルディスクを取り出し、「誰がするか、死ぬのは貴様だ！」

なんてデュエルディスクを起動する。そしたら、何処に隠れてたのかが出るわ出るわ部下モブ集団（沙樹視点）たちが私たちを取り囲む。彼らが持つてるのは、フィールを使った光線銃だと一目で分かった。

「さあ、デュエルだ。貴様が負けた時、俺の部下共が一斉に貴様を撃ち抜く」

基本的にフィールによる攻撃や現象は同じフィールをぶつける事で相殺できる。つまり、いま男たちが光線銃を撃った所で私はフィールを使って防ぐ事ができる。しかも、あの光線銃なら体力が続く限り

10時間でも20時間でも可能だろう。……反撃にフィールを使いながらも。

しかし、私にフィールを使えなくさせる手段がひとつだけ存在する。

それはデュエルで敗北させることだ。しかし、逆を言えば私が勝てば逆に男のほうにフィールを損失するんだけど。

「ふくん」

私は軽くほくそ笑んで、

「分かったわ。そのデュエル乗った」

だって、フィールでターゲットを殺せる最初で最後のチャンスは威嚇射撃に使ってしまったもの。私としても相手のフィールを消す機会は歓迎してモノ。

お互いのディスクが対戦相手を認識する。そして、

『デュエル』

と、ふたりの言葉を認識し、ディスクは画面にデュエル開始を告げたのだった。

沙樹

LP 4000

手札 5

コートの男

LP 4000

手札 5

デュエルディスクにはランダムで先攻プレイヤーを決定する機能を持っている。

今回の先攻は、私だ。

「先攻は貰ったわ。私のターン」

私は早速5枚の手札から2枚を引き抜き、ディスクに裏向きで読み込ませる。すると、拡大表示されたカードのビジョンが私の前方に映し出された。

「モンスターと伏せカードを1枚ずつセット。私はこれでターン終了よ」

「しけた初手じゃねえか。俺のターンだ、ドロー」

と、男は「余裕だわwww」とか内心思っただけでそんな顔でカードを引き抜き、

「相手だけにモンスターが存在する時、こいつは手札から特殊召喚できる。……来い《墮天使ベリス》！」

男のフィールドに出現したのは、馬に跨り一本のランスを握った全身甲冑の槍騎兵。どうみても名称に「ガイア」とかつきそうな戦士族にしか見えないが天使族。攻撃力は1700と表示された。

「バトルだ。《墮天使ベリス》で貴様のセットモンスターに攻撃！貫けベリス！」

男の指示を受けたベリスはフィールドを駆け、カードのビジョンに槍を突き立てようとする。それを防いだのは、カードの上から浮かび上がったエイに似た外観のステルス爆撃機。

「私のセットモンスターは《幻獣機レイステイルス》、守備力は2100よ」

レイステイルスはまさにエイのような平たさでベリスの槍を受け流し、反撃の爆撃で追い払う。その余波は奥に立つ男にまで及び、

コートの男 LP4000↓3600
そのライフを僅かばかり削る。

「さらに《幻獣機レイステイルス》のモンスター効果、このカードが相手に戦闘ダメージを与えた場合、私の場に幻獣機トークンを1体特殊召喚するわ。守備表示」

レイステイルスによる爆風が消散する。すると、そこにはレイステイルスにそっくり、しかし半透明でより立体映像らしい外観のトークンが浮遊していた。

が、男はトークンに目もくれずに笑い、

「助かったぜセットモンスターの守備力が高くて。おかげでこいつを召喚できるぜ。……バトル終了、再びメインフェイズだ！」

と、男はベリスを墓地に送り、新たなモンスターをディスクに読み

込ませる。

「《墮天使ベリス》は墮天使モンスターをアドバンス召喚する際に2体分のリリースになる。俺はこいつを召喚だ！ 来い、《墮天使ルシフェル》！」

ベリスの肉体が2つに割れつつ光の粒子となって天へ昇ると、そこから漆黒の穴が浮かびあがって1体の墮天使が降臨する。

「へえ、攻撃力3000とかドデカい大物出してきたじゃない」

「余裕ぶってるのも今のうちだ！ このデツキの最強カード《墮天使ルシフェル》のモンスター効果！ このカードのアドバンス召喚成功時、相手の効果モンスターの数まで手札・デツキから墮天使を呼び出す」

ああ、なるほどね。私はちよつとだけ納得した。

——おかげでこいつを召喚できる。

この意味は、まさに私のモンスターが破壊されなかったおかげでルシフェルのモンスター効果を使用できる、という意味だったのだ。

トークンは通常モンスター扱いなので、私のフィールドの効果モンスターはレイステイルス1体。

男は、デツキ……ではなくわざわざ手札からカードをフィールドに置いて、

「俺は手札から《墮天使アスモディウス》を特殊召喚！ こいつはデツキ・墓地から特殊召喚はできないが手札からの特殊召喚は可能だ！」

ルシフェルに続くように降臨したのは新たな墮天使の男。このカードの攻撃力も、また3000だった。

「ブルーアイス級の攻撃力が2体……」

私は、さすがに軽く驚くも、

「まだだ！ 《墮天使アスモディウス》には1ターンに1度デツキから天使族を1体墓地に送る能力がある。こいつの効果で俺は《墮天使ブリュンヒルデ》を墓地に送るぜ。そして、墓地のブリュンヒルデとベリスの効果をそれぞれ発動！」

男の前に、先程の槍騎兵と闇に墮ちたヴァルキリーの幻影が浮かび上がる。

「《墮天使ベリス》の第三の効果、こいつは墓地のベリス自身を除外する事で、俺はもう1度墮天使を通常召喚できる！　そして《墮天使ブリュンヒルデ》は墮天使をアドバンス召喚する際、自身を除外する事で1体分のリリースとして扱う」

つまり、この2体を組み合わせて使えば本来の召喚権とは別にもう1体上級の墮天使をアドバンス召喚できるという事らしい。……が、男は更に、

「そして俺が召喚するのは《墮天使ディザイア》！　こいつはレベル10の最上級モンスターだが、天使族なら1体のリリースでアドバンス召喚ができる。……現れるオ！」

男の咆哮と共に召喚された三体目の墮天使。……その攻撃力は、
「また、3000」

「その通り、これで俺のフィールド上には攻撃力3000の墮天使が3体！　俺はこれでターンエンド、次のターン、このデッキのスリーエースで貴様を粉碎してくれる」

と、なんかフラグを立ててくれちゃってるコートの男。

私はデュエルディスクからディザイアの効果をみて「あれ？」と思った。

墮天使ディザイア

効果モンスター

星10／闇属性／天使族／攻3000／守2800

このカードは特殊召喚できない。

このカードは天使族モンスター1体をリリースしてアドバンス召喚する事ができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時にこのカードの攻撃力を1000ポイントダウンし、相手フィールド上に存在するモンスター1体を墓地へ送る事ができる。

このモンスターの効果には、攻撃力こそダウンするものの1ターンに1度、相手モンスターを墓地送りにできるって書いてあるのだ。

それをしなかったのは、ただの慢心なのか、それともこのデッキこのカードを理解していないからなのか。

トークン以外の幻獣機には大抵『自分フィールドにトークンが存在する限り、このカードは戦闘・効果では破壊されない』って効果を持つてるが、デザイナーならその効果さえ無視して除去できるというのに。

「ま、いつか」

「何だどうした怖気づいたのか？」

「まっさかー」

私は笑って、

「こつからどう貴方をブチのめせばいい顔見せてくれるのかなって脳汁出してたトコ」

なんて冗談半分にからかいなながら、

「私のターン。ドロー」

と、私はカードをドローする。

そして、

「助かったわ。貴方が慢心すぎるフラグ立ててくれて。おかげでいいカードを引くことができたわ」

って、私は顔芸ばりに邪悪な笑みで、つい先程の男の『感謝の言葉』を真似して言ってみる。

「じゃあまずは、このカードは1ターンに1度だけ、幻獣機トークンが存在する場合に手札から特殊召喚できるカード、チューナーモンスター《幻獣機モールツカノ》を特殊召喚」

フィールドに出現したのはもぐらの顔のついたCOIN機の幻獣機モンスター。

「幻獣機モールツカノのレベルは1、だけどこのカードはフィールドの幻獣機トークンのレベルの合計だけアップする。幻獣機トークンのレベルは基本一律3、数は1体。これでモールツカノのレベルは4になるわ」

実は、このレベル上昇効果は先程の破壊耐性同様に殆どの幻獣機が持っていて、レイステルスもちゃんとレベルが3から6になってるのだけど。今回は意味がないのでわざわざ補足はしない。

「そして私は、レベル3の幻獣機トークンに、レベル4となった《幻獣

機モールツカノ》をチューニング！」

私が宣言すると、モールツカノは4つの円に姿を変え、それを幻獣機トークンが潜る。すると、トークンの機体が3つの光に変わり4つの円と混ざり合って光を放つ。

「大空を駆ける機械の怪鳥よ。その巨体にて勝利の旅路へ私を導け、シンクロ召喚！ 発進せよ、レベル7 《幻獣機コンコルダ》！」

光の中から駆け上がったのは、先端が怪鳥の頭部の形状をした旅客機を思わせるシルエット。

「そして、私はまだ通常召喚を行っていないわ。私は手札から《幻獣機テザーウルフ》通常召喚」

と、さらに私はこのターン引き当てたモンスターをフィールド上に呼び出した。

「このモンスターは？」

男が驚く。なぜなら、このモンスターこそ最初に男の首にコードを巻きつけ、コートの際を打ち抜いた戦闘ヘリなのだから。

「《幻獣機テザーウルフ》のモンスター効果。このモンスターは召喚成功時に幻獣機トークンを1体呼び出す」

テザーウルフの真横に空間の歪みが生じると、そこから迷彩を解除したかのように今度はテザーウルフそっくりの立体映像が出現する。

「《幻獣機テザーウルフ》のレベルもまた幻獣機トークンのレベルの合計だけ上昇する。いまフィールド上のトークンは自身が生み出したトークン1体だから、そのレベルは7よ」

「レベル7モンスターが2体。まさか貴様、狙いは」

ここで男が何かに感づいた模様。私はいった。

「正解。私はレベル7の《幻獣機コンコルダ》とテザーウルフでオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！」

今度は床に銀河の渦が出現し、2体の幻獣機は靈魂の姿になって銀河の中に取り込まれ、そして銀河は爆発する。

そこから駆け上がったのは、先端に竜の首を模した部位の追加された大型の航空機の姿。そして、機体の周りを銀河に取り込まれたはずの靈魂が2つ飛び回っている。

「竜の名を持つ機械の鳥よ。いまこそ空を支配し、私に勝利を輸送せよ！ エクシーズ召喚！ 発進せよ、ランク7《幻獣機ドラゴサック》！」

すると、

「……ククツ」

突然、男は笑いだした。

「貴様の狙いがどんなモンスターかと思えば、攻撃力たったの2600じゃないか。……これでは俺の堕天使を倒せないぜ、どうやら負けを認める前の最後の自己満足だったってワケか」

私は、

「……貴方」

ポカーン、つてなった。ものすごく、ポカーンつてなった。

正直アニメの世界だけだと思ってた。こういうモンスターを攻撃力だけでしか判断できないデュエル音痴。

とはいえ、

「(ま、いつか)」

私はこいつに教示なんてしてやらない。たぶん時間が掛かるし、時間の無駄だし、それに。——いまから、その「攻撃力」でブチのめすのだから。

「エクシーズモンスターは、他のモンスターと違って自身の召喚に使用した素材を下に重ねてオーバーレイ・ユニットとする。私はそのうちの1枚を取り除いて《幻獣機ドラゴサック》のモンスター効果を発動。1ターンに1度、幻獣機トークンを2体特殊召喚する」

ドラゴサックは先端の口を開くと、周りを飛ぶ靈魂をひとつ飲み込んだ。

すると、上空からドラゴサックそっくりの立体映像が2機ほど降臨する。

「そして」

フィールドにはドラゴサック、レイステルス、そして幻獣機トークンが3体。モンスターゾーンが見事に埋まったこの状況で、私は伏せていたカードを表向きにする。

「リバースカードオープン。装備魔法《団結の力》！」
「ッ!？」

さすが攻撃力でしか判断できない男、このカードの効果は知っていたらしい。その顔が途端に青ざめる。

「このカードは装備モンスターの攻撃力・守備力を、私のモンスターの数×800アップさせるカード。私はこれを《幻獣機ドラゴサック》に装備！」

すると、残り4体の幻獣機から光が伸びドラゴサックを包み込む。

味方機のエネルギーを授かったドラゴサックは、その機体を金色に輝かせる。

その攻撃力は。

《幻獣機ドラゴサック》 攻撃力2600↓6600

「嘘……だろ」

負けを覚悟したのか、男の腕がだらんと垂れる。

「そんな、そんなはずがない。……俺が、この俺が。ボスから授かったこのデッキがあつてこのお——」

「《幻獣機ドラゴサック》で《墮天使ルシフェル》に攻撃！」

私は、男の愚痴を最後まで聞かず、ドラゴサックでとどめを刺した。

コートの男 LP3600↓0

ルシフェルの攻撃力は3000、ドラゴサックの攻撃力との差分3600が男のライフへのダメージとなる。

ジャストキル成立だった。

デュエルが終わり、男のデュエルディスクが機能停止すると同時に3体の墮天使も消え去る。

すると、途端に周りを囲んでた男の部下たちがバタバタと倒れていったのだ。

「こ、この——」

男がコートの内側から拳銃を抜いたのが見えた。その銃口が私へと狙いを定める。

しかし、その銃が火を噴くことはなかった。

彼が引き金を引くより先に、ドラゴサックの機銃が男の脳天を貫い

たからだ。

最期の言葉を発することなく男は倒れ、そして絶命した。すると、男の体が光の粒子へと変わっていき、私の体へと取り込まれていく。

同時に、部下からも体から抜け出るように光が浮かび上がり、やはり私の体へと取り込まれていった。

これは、私の能力だった。

ファイルを用いて殺した相手を取り込み、自分が持っているファイルの血肉にできるのだ。相手が持つてるカードごと。

私はこの能力を、ターゲットを殺害してしまった際の証拠隠滅として利用している。

ところで、気になるのはあの男の部下たちだ。

男がファイルを失うと奴らは一斉に倒れ、肉体を保ったまま光の粒子が抜け出たのだ。

私は、試しに近くの部下の下へと歩み寄る。そして、腕を掴んでみた所で、

「そういう事ね」

と、納得した。

その腕からは人の温もりがなく、人工皮膚の内側は血管ではなく幾つものコードが通っている。

つまり、コートの男がファイルを動力源に動かしてた機械人形だったのだ。

さて、そろそろ催眠ガスの効果が切れる頃だ。

私は男がいた場所に転がっている4枚のカードを手に取り、元の位置へ戻そうとする。

その時だった。

「——っ」

何だろうか、私は「カードに強い拒絶を受け」ながら「その内の1枚に強く共鳴する」ものを感じる。

「もしかして私が？ いや、ありえないでしょ。そもそもだったらなんで同時に拒絶されてるのよ」

私はなんとかカードを展示しなおし、元いた持ち場へと帰還した。残りの数日は、館長に頼んでモニターを持たせたモンスターをオブリジェクトとして配置させて貰い、私は日常に戻りながら監視を続けさせて貰った。

結果、あの日以後に新たな襲撃犯が現れることはなく、依頼を満了するのだった。

「いやー。助かったよ」

と、依頼人の陽井氏はグラスふたつにワインを注ぎ、そのうちひとつを私に差し出した。

童顔もあって若くみえるが、調べによると娘がひとりいるらしい。前髪が長く掴みどころのない風貌をしているものの、私の直感は悪人ではない……と告げている。

「あ、いいの？ 私一応未成年なんだけど」

「いいよいいよー。14歳でアル中だった子とか、小学生なのにビール好きの子とかウオツカ中毒の子とか知り合いに結構いるからー」

「それ全然よくないじゃん」
とはいえ、職業柄行きつけのバーさえある私なので、ここは有難くご馳走になる。

夜。

私は任務満了の報告をした所、報酬の受け渡しを兼ねた会食に誘われ、館内レストランの個室にきていた。

陽井氏は今回狙われた4枚のカードの所有者である。しかし、彼は所有者にも関わらずこれらのファイル・カードを使いこなすことができなかつた。

どうやら、この4枚にはその話題で有名なナンバーズを超える程のファイルを有してるのだが、陽井氏にはその内の半分も使うことができず、その手の研究者の下で数々の実験を行ったが結果は変わらずだったらしい。

そんな中、陽井氏は知人が今回の美術展を開くことを知り、何か変化が起こる事を期待して4枚を目立たないフロアにこっそり数日だ

け展示させて貰ったのだとか。

しかし、美術展に本物のファイル・カードが展示されてることが外部に漏れてしまい、それを狙う輩が今日行動を起こすという情報が流れた。

陽井氏は事情があり、4枚のファイルを引き出そうとしても手放す気はないらしい。その為、私に今回の依頼が届いたのだ。

なお、私がカードに触れた時の経験は陽井氏には伝えていない。カードに拒絶された以上深追いたくないし、何より面倒だったから。

ま、そんな事はどうでもいいんだけどね。

そんなわけで、私は早速切り出す。

「ところで陽井さん、約束の報酬の件だけど」

「ああ、うん。分かってるよ、事務所のほうに振り込んでおけばいいんだよね？」

「それもそうだけど、私が言ってるのは個人的な報酬のほう」

実は今回の件、事務所としての契約の他に私自身も個人的に約束を取り付けてるのである。

「ああ」

陽井氏は思い出したかのようにいい、

「ちよつと熟した人でもいいかな？ うん大丈夫性格以外は保障するよ」

「まさか自分の奥さん売る気だったとか？」

「あ、ばれたー？」

その要求とは……。

極上の美女を一晩寄越せ！ というもの。

「年齢次第だけど、どうせなら娘さんが希望かなー私」

にやにや顔で一応私は希望をいつてみるも、

「あ、それは駄目ー」

と、当然だけど返事はあっさり却下。とはいえ、酒の勢いもあったのかも。私にはもう少し粘って、

「なら。お金を幾ら落とせば考えてくれる？」

「いやー。そういう問題じゃないんだよ」

突然、表情を沈ませる陽井氏。それだけで、私は単純に「娘は差し出さない」っていう親心とは別の問題があるのを察する。

そして、彼はいった。

「病院から出られない子に、そんな無茶はさせられないよ。もちろん健康でも差し出したりしないけど」

「……」

さすがに、私もふざけたことを言う気にはなれなかった。

陽井氏は続けて、

「もって半年かな？ 一年は難しいって言われてるよ。……僕はね、ファイルのエネルギーであの子の命を繋ぎ止めたいと思ってるんだよ」

「だから、貴方は4枚のファイルを全部引き出したいと」

「うん」

陽井氏は頷いたのだった。

MISSION2ーもつと食べてみやくち もつと
食べてみやくち 名小屋とはいえばKasugaya
aラーメン 宇宙の果てまでKasugayaラー
メン

私の名前は鳥乃とりの 沙樹さき。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「愛液を吸ってき、イツた時に相手にピュッピュできるデイルドあつたら最高だと思わない?」

そんなわけで、私は今日も教室の机に突っ伏してると、

「私にはレベルが高すぎるよー」

なんて、前の席の梓は困りながらもちゃんと相手をしてくれる。

「言うなら、女の子のえっちなお汁を使って擬似的に射精できる大人の玩具があつたら素敵って話」

「誰も解説してなんて言っていないよ」

「およ? およよ? それってつまり多少は通じてたって事?」

「何その口調!? それに意味が分からなくてもろくでもない事だけは分かるよ」

「ろくでもなくないってば、全国おち●ぽ要らないけどおにやのこ
臆○射精な○だししてみたい同盟(総勢1名)の夢よ! 自分のえっちな体液
を相手の子宮に流し込めて、しかも男性器なんていう汚物と違って妊
娠事故は発生しない。公然と生し放題、最高じゃないの!」

「最高どころか最低の発想だよ!」

「およ? およよ? それってつまり“最低の発想”と感想抱く位に
は通じてたって事?」

「だからその口調何!? それと、さすがに妊娠や子供は邪魔っていう
哀しい発想だっくらいいは伝わるよ」

「おーそこまで分かったか偉い偉い」

梓の頭を撫でてあげると、

「えへへへ」

と、途端に緩やかな顔になる。かわいい。

実の所、レズである私は幼馴染……性欲のせの字を覚える以前から付き合いのある梓にさえ劣情を覚えていたりする。いや、むしろ私が本当に一番手を出したい筆頭ってレベルかもしれない。

だけど、なんだろうなあ。……幼馴染っていう近すぎる距離感と梓のこんな性格のせいか、なんか私らしくなく「バレて嫌われたくない」なんて考えてしまってる。

親より大切な子だからか、変に弱気になっちゃうのだ。

私は梓の胸部に視線を向ける。

相変わらず、制服の上からでも主張しまくるいいおっぱい。揉みたいー！

目の前の幼馴染がそんな欲望丸出しで見てるなんて知らない梓は、緩々な顔のまま、

「あ、そういうえば沙樹ちゃん。Kasugayaラーメン知ってるよね？」

「当たり前でしょ」

Kasugayaラーメンとは、主に私たちが暮らしてるこの名小屋市近辺で出店しているラーメンチェーン店のこと。

チャーシュー麺が大盛りでさえワンコインという破格な値段、そして長く愛されてきた味と実績から地元では半ばソウルフード化してる。

「実はね、私最近知ったんだけど駅前のKasugayaラーメンがなんと」

「一号店なんでしょ？」

「え!？」

梓は目をまん丸にして数秒後、

「知ってたの、沙樹ちゃん」

「むしろ梓が知らなかったことに、こっちが驚きなんだけど」

そのあまりにもの情弱さに。

「そんなあ、沙樹ちゃんを驚かせようと思ったのに」

しよぼんとする梓。私は心の中で萌えながら、

「悪かった悪かった、お詫びに帰りにKasugayaチャーシュー
麺奢ってあげるから元気だして」

すると梓は、

「Kasugayaプレミアムチャーシュー麺大盛り」

とか、のたまってきた。

「はい、Kasugayaプレミアムチャーシュー麺大盛り煮たまご
トッピングに普通のKasugayaラーメンお待ちどう様」

と、店長（残念ながら年齢40歳くらいのおっさん）が運んできた
のは、私たち地元民にとって馴染みの深いとんこつラーメンである。

Kasugayaのラーメンは、他所のラーメンと比べて手軽に食
べれる軽食といった色合いが強い。とんこつと魚介による和風ス
ープはあっさりしてて女性でも簡単に飲み干せてしまい、具もチャー
シュー、ネギ、メンマだけとごちゃごちゃしてなく小腹がすいた時で
も朝食でも良さそうな一杯だ。

……尤も、梓が頼んだものは少し例外だけど。

「つて、梓本当に食べれるの?」

「うん♪ いただきます」

梓は満面の笑みで食べ始めた。

チャーシューが普通より厚く切られネギとメンマも通常の2倍更
に煮たまごのついたプレミアムチャーシュー麺。それだけならまだ
しも梓は大盛りで煮たまごをもう1個追加した、Kasugayaに
あるまじき食べ応え抜群のラーメンを、それも放課後に食べるとい
うのだ。

ちなみに値段は680円。

ここまでやって680円。

「おいしー♪」

天然の女子力の塊みたいな女の子が、幸せそうに大盛りラーメンを
食べ続ける姿。

「可愛いけど、可愛いんだけど、なんだろうねこれ」

「?」

きよとんと首をかしげながらも、梓の箸は止まる気配を見せない。

「いや、梓のどこにそれだけの食べ物詰め込める胃があるのかなって、あ……」

私はハツと気づいて、

「あったわね、梓が栄養を溜め込んでる所」

と、私は梓の二つの果実をガン見する。しかし梓は、
「??？」

食べることに頭が行ってるせいで、露骨なセクハラ発言にさえ気づこうとしない。

「ううん何でもない。いただきまーす」

と、私もラーメンに箸をつけ始めた、その時だった。

「い……いらっしやい、ご……ご注文は」

「店長のスマイル一生分、テイクアウトで」

「ぶふう」

私は思わずむせ返った。

「きや、沙樹ちゃんどうしたの突然」

「ご、ごめん。なんだか変な言葉が聞こえた気がして」

私は何とか水を飲んで落ち着く。

「変な言葉？」

「気にしないで。たぶん気のせ——」

「スマ……スマイルはメニューにはございませ……」

「うふう♪ つまり『スマイルなんていわず俺をテイクアウトしろよBABY』といたいいのね、悦んで♪」

「ぶふうっ」

今度は梓がむせ返った。しかも、麺を思いつきり頬張ってたせいで被害は私の比じゃない。

なにこれ、美少女相手ならともかく店長ってさっきの40代のおっさんでしょ？ 誰よそんな物好きは!!

私は、会話が聞こえるほうへ顔を向ける。

「さすが店長……いいえ、かすが様。素敵♪」

「お……おきや……さ、ま……」

そこには、いまにも営業スマイルが崩壊しそうな店長と、それを

うつとりした眼差しで眺める若い女の子の姿。

年齢はたぶん私たちと同じくらいだろう。しかし、手入れの行き届いた長い髪に、スレンダーな体躯。顔もすっぴんに見えるが、たぶんあれはナチュラルメイクだろう。バストが控えめな点を除けば、男受けの良い清純・清楚な風貌を模った美少女がそこにいた。

女受けは悪そうだけど、正直いって私の心のチ○ポは「もっこりー！」って反応しちゃう。もう清純系○ツチでもいいわ！ やらないか、。

「ああん♪ かすが様、そんな眼差しで見つめられると私妊娠しちゃうわ」

「頼む気がないなら帰ってくださいお客様。仕事の邪魔です」

「分かりました♪ ご希望は水着ですか？ ランジェリー？ それとも生まれたままの……」

「なんの話だ！ この私は帰れって言ってるんだ!!」

あ、敬語が崩れた。その一人称からも垣間見える小物臭く高圧的な本性が露になる、も。

「ですから、かすが様のご自宅に」

「貴様の家に帰れ!!」

「素敵♪ かすが様が私のご両親に挨拶にきてくれるなんて」

「誰もそんな事言っていない!!!」

「うふふ、分かってるわ」

「ならさつさと帰——」

「今宵の夜這い、半脱ぎでお待ちしてませ♪」

「その筋のモン送りつけられたのかっ!!!」

「そんな、NTRプレイがお好きなんて……!!」
「さつさと出てけええええええええええつ!!!」
「なら木更は♪」

ついには盆を投げ捨てるかすが(？)店長。これ、暴力事件として警察呼んだらどうなるだろう？ とはいえ、店長の奇声怒声に何割かの客は逃げ帰ったものの、常連にとっては日常茶飯事なのだろう。残った人たちの大半は見世物でもみるかのように楽しんでるようだ。

映った。

そして木更というらしい少女は、

「うふふ、さすが様だったらからかうと可愛らしくて素敵♪ Kasugaya野菜ラーメンの HALF をお願いします」

と、ちやつかり注文をしていた。

ちなみに野菜の原価が高くなった現在、Kasugaya野菜ラーメンの HALF は店で一番儲からないメニューだと聞いたことがある。「クソツ、食ったらさっさと帰れ」

悪態をつきながらも店長はオーダーを受け奥へと進んでいく。

「……もう我慢できん！ 警察も頼りにならんし、本当にその筋を送ってやる」

賑やかな店内。その厨房で、さすが店長が口にしたのを私は聞き逃さなかった。

——そして同日、深夜。

閉店後の Kasugaya ラーメン 一号店に私はいた。

「Kasugaya チャーシュー麺とビールでいいか？」

疲れた形相のさすが店長は、自分と私ふたり分のラーメンとドリンクを運び、いった。

「悪いわね、ご馳走になっちゃって」

「ふん、構わん。私もいまから夕食だからな」

と、店長は対面に座る。

「そういえばお前、夕方頃に客で来てたな」

「まあね。だから事態は多少把握してるつもり」

私たちが店を出てから程なくして、ハングド事務所の下に店長から依頼の連絡が入った。内容は「護衛及びターゲットの討伐」と聞いている。

「なら話は早い。事務所に伝えた通り、私を護衛しつつあの木更とかいうガキを手段を問わず追い払って欲しい」

「まあ、それはいいんだけど。……ん、やっぱ何度食べても Kasugaya 美味し」

私は事前に軽く調べ上げた資料を片手にラーメンをすすする。

「藤稔 木更。今年16になる現役女子高生。両親がどちらもピンピンしてるのにひとり暮らしなのがちょっと気に掛かるけど、いくら調べても埃が立つ様子はなし。……わざわざウチに依頼する程でもないんじゃない？」

と、私は今回の依頼に対する疑問を投げかけてみる。すると店長は、

「フィールを扱うストーリーカードとしてもか？」

「……なるほど、いや。やっぱりね」

多分そうだと思うってはいたものの、これで確信に変わった。

フィールというものは一種のオカルトみたいな要素が強いが、実はさほど特別なものでもなく誰にでも持ちえる可能性のある代物だったりする。

何より、このエネルギー自体フィール・カードさえ所有していれば誰にでも使うことができる。なので、運よく手に入れちゃって悪用したり自衛の武器にしてる人は結構そこらじゅうにいるのだ。……とはいえ。

「悪いけど、それでも私が動く理由としてはまだ弱いわね」

「なに？」

ギロツと店長は睨み付けた。相当気の短い性格らしく、たったこれだけでキレル寸前に映る。

「だって、フィール絡みの問題と踏まえても、この程度幾らでも警察や役所に突き出す手段はあるでしょ。見た所あの子は『貴方を殺してでも添い遂げる』って方向には行かなそうだし、わざわざ殺しも辞さないような手段に出なくても——」

「そんなもの分かんだらう！」

怒声をあげる店長。その顔は、どこか怯えてるようにも映る。

「どうやら、お前は知らないようだな。奴のストーリーカードとしての行動力を」

「なら教えてくれる？ 詳しい経緯を」

残念だけど、現状では神経質な店長がノイローゼを起こしたようにしか見えないのだから。

「分かった」

店長は煙草に火をつけながらいった。

「ヤツと初めて出会ったのはTōkyōのI市ってトコだ」

「Tōkyō? こつちじやなくて」

「ああ、私は生まれは名小屋だが去年までTōkyōの支店で店長をしていた。だが、一号店の先代店長……親父が亡くなったのを機に店を継ぎに戻ってきた身だ」

「そうだったのね。……あれ? でもTōkyōって確か」

「その通りだ」

少々苦味の混じった顔で、店長はうなずく。

「私がこつちに戻ってから大体2ヶ月後にKasugayaはカントーを撤退、俺が前いたI市店もすでに閉店している。そして、木更は元々そのI市店の常連客だったのだ。……はあッ」

店長は、思い出しては深くくぐい溜息を吐き、

「毎日店にきては私をキレさせ、そして最後に野菜ラーメンのハーフを食べて帰っていく。思えばあの頃の奇行はまだマシなほうだったが、それでも私には苦痛でしかなかった」

「そういえば今日も彼女は野菜ラーメンのハーフを食べてた。もしかしたら、いやがらせで頼んだのではなかったのかもしれない。」

「そういえば手を出そうとは考えなかったの? ちよつとひんぬーだけど見た目は可愛いじゃん。ちよちよいと誘導すればあのカラダを好きにできたものを勿体無い」

「お前は何を言っているんだ」

真顔で返された。

「当時はまだ中学生だったのだが? 胸もない上にそんな乳臭いガキに興味を持つわけがないだろう」

「あ、なるほどね」

「そういえば、いまでこそ女子高生でも当時は中学生な子供だったわけ。それなら仕方ない。私でも手を出すかは分からないわ。」

「そんな時だったな、親父が死んだのは。I市で働くのが限界だった私はここぞと次の店長を志願し、生まれ育ったこの街に戻ってきたわ」

けだ。これであのガキともお別れだ、という解放感と共に。……しかし」

え、それって。

「もしかして」

「そうだ。奴はこつち高校に入学してまで私を追いかけてきたのだ」

血管が切れそうなほど青筋を立て、ビールを一気に呷る店長。

「うっわー」

これは確かに神経やられてもおかしくないわ。

あー、だからひとり暮らしで。うわあああ。

「しかも、単身こつちに乗り込んだから親の目というストッパーがなくなつた！ 昼夜を問わず店に現れ、度々私の家に忍び込んで下着を盗み、勝手に風呂を沸かして入りだし、飯を作つてエプロン1枚で待機、逆夜這いも仕掛けてくるから夜も眠れん！」

部分的に聞くと身の回りを世話する良妻に聞こえるのがまた……。

「もう諦めて監禁してキメセクでもして潰してあげたら？」

それこそ、溜まりに溜まったストレスも発散できてお勧め。

「どうしてソツチの発想しかないんだお前は！……それも相当危険な」

「いや私レズだから」

「まるで全てのレズが同類かのように言うな!!……コホン」

店長は一回咳払いして落ち着き、二本目の煙草を口に啜える。

「とりあえず、これで分かつただろう。木更というガキがどれだけ危険な存在かを」

「うん。そうだね」

何より、いつ店長がダウンして入院になつても変じやないのが分かる。そして、間違いなくその木更が毎日過剰なお見舞い面会に来るだろうというのも。

「なら、依頼を受けてくれるな？」

「んーまあ」

正直、それでも裏稼業が動く程ではない気はするんだけどね。とりあえず「手段は問わず」とは言われてるけど、一番楽な殺処分は駄

目っぽいわ。

むしろ今回は穏便に、かつ合法的な手段による解決じゃないと。ターゲットが「何かに巻き込まれて」解決って形にすると、状況的にまず店長が疑われ最悪依頼人を社会的に抹殺してしまう。

なまじ「法に護られた世界」の問題なせいで下手な事ができない。どうすれば……。

「(あ)」

あつた。それも最高のアイデアが。

「分かった、その依頼引き受けるわ」

「本当か!」

身乗り出す店長。が、そこを私は「ただし」と指を立て、

「もう一度確認するけど。『手段は問わなく』ていいのよね?」

すると、店長は眉を寄せ、

「まさか『殺る』気なのか?」

「うん」

私はいった。

「『犯ら』せてもらうわ」

——日付が変わり、現在深夜1:30。

かすが氏の自宅は高級マンションの一室にあつた。

曰く元々木更対策で選んだわけではなく、神経質な店主は最新の防犯設備でないと不安で不安で仕方なかったのだそう。

なら、どうしてそんな人間がラーメン屋をと一瞬思ったが、Kasugayaラーメンは完全に工程がマニュアル化されている為、1分1秒をキツチリ護りその神経質さで店内を清潔に保つかすが店長の仕事はとても好評価なんだそうなの。

それはともかく、24時間体制のフロント、何重もの監視カメラ、過剰すぎるセキュリティ。これを突破するのは相当に困難なはずだ。

私は、かすが氏の自室に隠れながら、いつものようにカメラを持たせた《幻獣機レイステイルス》でマンションの内外を監視していた。程なくして、ターゲットの藤稔 木更がやってきた。デュエルディ

スクを起動し、しかし隠密活動を行う様子なく堂々とマンションの入り口に立つ。

この建物は専用のカードキーがないと入ることさえ不可能な仕様になってるのだけど、彼女はデュエルモンスターズのカードを挿入すると一発で照合。中へと進んだ。恐らくハッキング系やプログラムに関係したファイル・カードを使ったのだろう。

次にフロント。ここでは実際に入居者名を伝えチェックインする方式になってるのだが、ここでも彼女は、

「藤稔 木更です」

なんて堂々と名前を言っでは、

「藤稔 木更……はい、確かに。お帰りなさいませ」

と、フロントも入居者リストに彼女が含まれてたとばかりの対応。私はすぐハングドの事務所に連絡し、

「もしもし、私。……突然だけど〇×マンションの入居者リストに不正書き換えが起こってないか調べてくれない？……うん、お願い」と、保険に裏を取っておく。

一方、木更はエレベーターのセキュリティも突破し、かすが店長のいる5階へとやってきた。

そして最後のセキュリティ。自室のドアは電子ロックと鍵錠ロックの二重構造だが、電子ロックはやはりファイル・カードで解除。そして鍵錠はというと。

木更は懐から針金を一本出して、ここでもまさかの物理的ピッキング。

こうして見事かすが邸に乗り込んだ木更。真っ暗な部屋の中、ドアが閉まると同時に、私はモンスターの機銃で彼女の足元を威嚇射撃した。

「……な、なに？」

一見、思ったより乏しい反応。とはいえ、よく見ると彼女の顔は青ざめ、漠然と立ち付くしてるのが分かる。

当然だ。やってる侵入手段は“こちら側”でも、あくまで彼女は法律に護られた“あちら側”。それも平和ボケした日本人なのだ。

「Good evening! 藤稔 木更さんでしょ。初めまして」

私は奥の部屋から顔をだし挨拶した。

「どなたですか?」

「私は鳥乃 沙樹」

ここはあえて本名でいい、逆に組織名は伝えず、

「まあ言っちゃえば。あなたの大好きなさすが様に雇われたボディガードってトコ?」

「ボディガード?」

「そ。ストーカーに昼夜問わず迫られて怖いから追い払ってくれて」

「えっ」

と、木更はガーンといった顔で、

「そんな! 私のかすが様にストーカーなんて、しかも怖がらせてるなんて。誰なのですか、そのストーカーは」

「あなたよ、あなた」

「これは非常事態です。ああ……私が1日27時間、1分1秒欠かさずお傍にいればこんな事には。もう、こうなったら学校を停学してでも」

「あ、あのー」

1日は24時間だけど。

「ってというか話聞いて?」

「鳥乃さんといいましたね。よろしければ、私にもお手伝いさせて頂けませんか?」

「駄目だこいつ。早くなんとかしないと」

アカン。この人会話が全然通じない。

こうやって実際に接してみても、私は事態を甘く見ていたことを痛感する。うん、こんなのに毎日迫られてたら並の精神でも逝くわ。

木更が部屋の電気をつけると、

「……あらっ!」

と、明るくなった部屋で私を見、きよんとした顔をみせる。

数秒後。

「すみません、もしかして……鳥乃先輩ですか？」

「え？」

「入学式に校内で私をナンパした」

「へ？……あ」

そういえば、名前は聞いてなかったけど大人しそうな子を口説いた気がする。新入生狩りみたいなノリで、強引に迫れば断れなそうな処女っぽい子を狙って。

「もしかして……これから彼氏に会いに行くので」って断った」

「はい。私です」

「……………えー」

どうしよう、いま私すごく半日前にタイムリープして梓とKasuga ya に行こうかって段階からやり直したいんだけど。

だって仕方ないじゃん。Kasuga ya で見た時はメイクしてたから創られた清纯系と思っただけど、この子って制服姿のノーメイクでもガチで清纯系っぽい見た目してんだもん。

それも大人しそうで、聞き分けがよくあまり前に出て意見を言わなそうなの……だから彼氏持ちって聞いたときショックだったなー。既に悪い男に汚された後だったのかーって。あ、ちなみに私はグルメで雑食（女前提）であって処女厨ってワケじゃないから。

ただね、アレよ……イタリアに行って中国料理を食べるかっていうのと同じニュアンスで、入学直後の新入生狙うなら垢抜けしてない未開の青い果実だろと！

稚魚の踊り食いだろと!!

まあ、ともかくとして、

「……………えっと、聞いていい？」

「はい。あの時の『彼氏』はもちろん『かすが様』のことです」
「やっぱり……」

聞く前に返事を貰ってしまった。

はあ、まさかあの時のオチをこんな所でぶり返すなんて。私は一気に疲労を覚えながら、

「行けなくしたメカニズムは、ぶっちゃけファイルよ。デュエルディスクに干渉して強制デュエルを執行、同時に私たちだけを閉じ込める不可視の壁……デュエルリングのほうか聞こえいいかな？ まあそういうのを出したってだけ」

「では、行かせて下さらない理由は」

「言つたでしょ、私はボディガードだって。だから貴方を行かせられないのよ」

「……。わかりました、そのデュエルお引き受けします」

観念したのか、木更は私に向き直る。早く愛しの“かすが様”の下に向かいたいのだろう、そわそわしてるのが見て取れる。

「ちなみに、負けたほうは数時間程度ファイルを使えなくなるから」
「!？」

驚く木更。その顔には僅かに絶望が映る。彼女はファイルを使って無断侵入してるのだから、ここでそれを損失するのは危険なのだ。

私は笑って、

「大丈夫だいじょうぶ、いまの所あなたを警察に突き出すようなつもりはないから。さっきも言ったけど、”少し付き合つて”欲しいしね」

「本当ですか？」

ほっとしつつも、それでも彼女から不安は晴れない様子。

本当に、彼女って店長さえ絡まなければ標準的な感性を持った純朴な子だったのね。

「あなたに追い討ちみたいなお条件ばかりだけど、それがファイルを用いたデュエルだから諦めてくれる？……ま、詫びに先攻後攻好きなの譲るから許して」

「では。……先攻を頂きます」

口調も丁寧だし、店長の不満を聞くに家事スキルも高い、料理も不味くない。……割と大和撫子じゃないか。この子。

沙樹

LP4000

手札5

木更

LP4000

手札5

『デュエル!』

と、ふたりの発した言葉によって、互いのディスクはデュエルの開始を認識する。

「では、先ほどの通り先攻はいただきます」

最初の手札5枚を引き抜き、木更はいった。

ドロローができない先攻を取ったということは、初手で突破の難しい布陣を敷けるデツキなのか、それとも展開の途中で《サイクロン》されるに厳しいタイプのデツキなのか。

「まずは魔法カード 《強欲で謙虚な壺》を発動します」

最初に木更が発動したのは、デメリット付の手札調整カード。

「強欲で謙虚、つまり私のかすが様への愛ですね」

「え、むしろ強欲で貪欲では?」

「ああ……かすが様かすが様かすが様かすが様かすが様かすが様かすが様かすが様かすが様♪」

「おーい、戻ってきてー」

まさかデュエル開始早々いきなり暴走されるなんて。

しかし、今回はただ暴走したわけではないようで、

「ふう、これで何とか不安を吹き飛ばすことができました」

と、木更は柔和に微笑み、しかしその視線はこちらをしつかりと捉え、

「負けるわけには行きませんので、全力で望ませて頂きますね」

その言葉は嘘ではないようで、彼女を中心に空気が明らかに変わる。

「《強欲で謙虚な壺》はデツキからカードを3枚めぐり、その内1枚だけを手札に加えるカードです」

そういつて木更がカードをめくると、3枚のビジョンが彼女の前に

表示される。

《成金ゴブリン》《強欲で謙虚な壺》《スキルドレイン》

「私は《スキルドレイン》を手札に、残りをデッキに戻します」
「うわっ」

半端なく厄介なカードを。

《スキルドレイン》とは、その名が指すようにフィールド上のモンスター効果を全て無効にしちゃう永続罠カードなのだ。

このカードを使うデッキとなると、

「そして、《クリフオート・ゲノム》を召喚」

木更のフィールドに、螺旋状の機械装置みたいなモンスターが出現する。

——最悪だ。

「カードを2枚伏せて、私のターンは終了します」

更に裏向きのカードが2枚敷かれ、彼女のターンは終了する。

「私のターンね、ドロー」

私はカードを1枚引き、フィールドを確認する。

まず伏せカードは2枚。この内1は《スキルドレイン》だろうけど、正解か分からない状態で伏せ除去に入るのは危険だ。両方とも不正解という可能性だってあるのだし。

次に、相手の場にいる《クリフオート・ゲノム》。このモンスターはレベル6だけど、レベル4・攻撃力1800のモンスターとしても召喚できる。

そして、通常召喚したゲノムは「自身のレベルよりも低いレベル・ランクのモンスターの効果を受けない」効果を持つ。しかし、それ以上はこのモンスターは本来レベル6・攻撃力2400のペンデュラムモンスターなのだ。

つまりは《スキルドレイン》が発動すると、このカードは攻撃力2400に戻り、破壊しても墓地には行かずエクストラデッキに行き、ペンデュラム召喚によってレベル4・攻撃力1800のモンスターとしてだが何度でも召喚される。もちろん《スキルドレイン》下ならレベル6・攻撃力2400だ。

幸い、相手はペンデュラム召喚の準備が整ってない様子なので、フィールドが暖まる前に終わらせないと。

「私は《幻獣機メガラプター》召喚、攻撃宣言」

私は攻撃力1900の幻獣機モンスターを召喚し、早速攻撃に入る。このままバトルすればゲノムは破壊されてしまうので、木更は恐らく。

「永続罫《スキルドレイン》を発動します」

2枚のうち片方が表向きになり、警戒していた罫が顔をみせる。

「そこね。チェーンで《サイクロン》発動。その《スキルドレイン》を破壊するわ」

もう片方の伏せは発動しないのか、そのまま私が生み出した竜巻は《スキルドレイン》のカードを飲み込む。

「《スキルドレイン》の効果は、チェーン上で効果が解決する前に破壊されちゃったら無効になるわ。これで《クリフオート・ゲノム》の攻撃力は1800のまま、メガラプターで戦闘破壊！」

メガラプターから機銃が発射されると、ゲノムは全身蜂の巣になって破壊される。

木更 LP4000↓3900

「《クリフオート・ゲノム》はペンデュラムモンスターです。その為、墓地には行かずエクストラデッキに行きます」

「カードを1枚セット、ターンを終了」

本当は、相手が動く前に徹底的に対策しておきたかったのだけど。実の所私が使ってる幻獣機ってデッキは見た目に反して速攻性はあまり高くないのよね。

「私のターン、ドローします」

そして再び木更のターン。彼女はドローすると、その顔色が僅かに変わる。

私は咄嗟に気づいた。

「遅かった、仕掛けてくる！」

心の中で叫んだ刹那、木更はカードを発動する。

「私は魔法カード《召喚師のスキル》を発動。効果で《クリフオート・

ツール』を手札に加えます」

きてしまった！

《召喚師のスキル》とはレベル5以上の通常モンスターを1体、デッキからサーチする魔法カード。そして、《クリフオート・ツール》こそ、間違いなく彼女のデッキの軸。

「そして私は、スケール1の《クリフオート・エイリアス》とスケール9の《クリフオート・ツール》でペンデュラムスケールをセッティング！」

木更の左右に光の柱が並び立つと、それぞれの内側にクリフオートモンスターが昇っていく。

「これで私はレベル2と8のクリフオートモンスターを同時に召喚が可能。ペンデュラム召喚！ 来てください、《クリフオート・ゲノム》！」

上空に穴のビジョンが発生すると、そこから《クリフオート・ゲノム》が再び舞い降りる。ペンデュラム召喚は説明の通り1度に手札・エクストラデッキからモンスターを同時に特殊召喚できるが、今回はゲノム1体だけの模様。

「次に《クリフオート・ツール》のP効果を発動、1ターンに1度、800ライフを払ってデッキからクリフオートカードを1枚サーチします。私は装備魔法《機殻の生贄》^{サクリファースト}を手札に加えてそのまま発動、ゲノムに装備」

木更 LP3900↓3100

木更のライフポイントが減少し、ゲノムに幾つもの球体が入り込む。

「《機殻の生贄》を装備したモンスターは、攻撃力が300アップして戦闘破壊されなくなります。そして、クリフオートモンスターをアドバンス召喚する際、装備モンスターは2体分のリリースとして扱うことができます」

「素晴らしい、木更はすぐさまディスクからゲノムと《機殻の生贄》をフィールドから取り除く。

「私は《機殻の生贄》をゲノムをリリース。プログラム実行、クリフオ

ト・ドット・エグゼ。起動せよ、アデイスエスの円盤！ アドバンス召喚、来てください《クリフオート・ディスク》！」

出現したのは1体の円形型のクリフオート。レベル7攻撃力2800とビジョンで表示される。

「そして、《クリフオート・ゲノム》《機殻の生贄》《クリフオート・ディスク》3つの効果が同時に発動されます」

と、木更がいった所で私は、

「待った。私はチェーンでさらに永続罫を発動。《空中補給》！」

エアリアル・チャージ

すると、お互いのデュエルディスクに積み上げられた今回のチェーンが表示される。

チェーン4：《空中補給》

チェーン3：《クリフオート・ディスク》

チェーン2：《機殻の生贄》

チェーン1：《クリフオート・ゲノム》

チェーンが積み上げられた場合、それぞれ効果は上から順番に処理されていく。

「まずは《空中補給》の効果で、私のフィールド上に幻獣機トークンを守備表示で特殊召喚するわ」

最初は私が発動したカードの処理により、ホログラムによる幻獣機のデコイが出現。

「では、次に《クリフオート・ディスク》の効果です。このカードはクリフオートをリリースしてアドバンス召喚に成功した時、デッキからクリフオートを2体特殊召喚できます。この効果で私は《クリフオート・アーカイブ》と2枚目の《クリフオート・ゲノム》を特殊召喚」

それにより、木更の場にも新たなクリフオートが2体も出現し、「《機殻の生贄》はフィールドから墓地へ送られた場合にデッキからクリフオートモンスターをサーチします。私は2枚目の《クリフオート・ツール》を手札に」

木更の一度使い切った手札が僅かに肥やされ、

「最後に《クリフオート・ゲノム》はリリースされた場合にフィールドの魔法・罫カード1枚を破壊します。《空中補給》を破壊」

と、おまけに私の《空中補給》さえも破壊してくれちゃう。尤も《スキルドレイン》の時と違って、《空中補給》は1度効果をチェーン上で解決した後なので役割は果たしてるけど。

そして、効果の処理はまだ終わってない。

「《幻獣機メガラプター》のモンスター効果。私のフィールドにトークンが特殊召喚された時、このカードはさらに幻獣機トークンを1体特殊召喚するわ」

これにより、こちらも幻獣機のデコイがもう1体出現し、お互いのフィールドにモンスターは3体ずつ存在する形となる。

……強さは月とすっぽんだけど。こちらがすっぽんで。

しかも、木更は特に説明してないけど《クリフオート・エイリアス》のP効果も現在発動している。

このカードはフィールド上のクリフオートを攻撃力3000アップさせる。その為。

《クリフオート・アーカイブ》 攻撃力2400↓1800↓2100

《クリフオート・ゲノム》 攻撃力2400↓1800↓2100

《クリフオート・ディスク》 攻撃力2800↓3100

特殊召喚したゲノムとアーカイブはレベル4・攻撃力1800になるとはいえ、エイリアスによって2100に。

ディスクに至っては先日の墮天使たちより1000高い攻撃力3100に到達。

「バトルフェイズに入ります。まずは《クリフオート・アーカイブ》と《クリフオート・ゲノム》でトークンにそれぞれ攻撃」

トークンたちは全員守備表示とはいえ守備力0。ホログラムたちは反撃する様子なく排除されてしまい、

「最後に《クリフオート・ディスク》で《幻獣機メガラプター》に攻撃」
残ったメガラプターもトークンの護りを失い、ディスクの一撃で墜落する。

沙樹 LP4000↓2800

「っ、や……ばいわね」

メガラプターは攻撃表示だった為、超過ダメージが私のライフを1200ポイントほど削る。

「ターンを終了します。ディスクによって特殊召喚されたクリフオー
トたちはエンドフェイズに破壊されます。ですけど、どちらもペン
デュラムモンスターなのでエクストラデッキに」

「ふう」

相手のターンが終わり、私は一旦息をつく。良かった、場は一掃さ
れたけどまだ絶望する状況ではない。

「私のターン、ドロー」

私はカードを引く。そして、

「じゃあ、そのPゾーンのカードもエクストラデッキに送ってあげ
るわ。魔法カード《ハーピィの羽根帚》！」

《ハーピィの羽根帚》は相手フィールド上の魔法・罫を全て破壊する
伝統ある魔法カード。

これにより《クリフオート・ツール》と《クリフオート・エイリア
ス》はエクストラデッキに行き、ついでに最初のターンから伏せられ
てたカードの除去も終わる。

「あ」

と、木更が呟いた時にはすでに効果解決後。伏せカードは
《アポクリフオート隠されし機殻》だった。

このカードはエクストラデッキのクリフオートを3枚手札に戻す
カードで、最初のターンならブラフにしかないけどいまなら発動
条件は満たしてる。

危なかった、木更が「発動を忘れる」というミスをしてくれて。使
われてたら再びツールの効果を使わずして次のターンP召喚できる
状況が確実に起こり、アドバンス召喚したいカードをツールでサー
チ、という形になる所だった。

そして、こっちも準備が整った。

「じゃあ行かせて貰うわ。私は手札から《幻獣機テザーウルフ》を召
喚、召喚成功時に幻獣機トークンを発生。次に幻獣機トークンがいる
場合にこのカードは特殊召喚できる。《幻獣機モールツカノ》！」

モールツカノとテザーウルフのレベルは幻獣機トークンのレベルの合計アップ！ レベル3幻獣機トークンにレベル4になった《幻獣機モールツカノ》をチューニング！ 不死鳥の名を継ぎし輸送機よ、永遠を泳ぐ機翼で勝利を運べ！ シンクロ召喚！ 発進せよ、レベル7《幻獣機ブリックス》！」

と、一気にカードを展開させフェニックスを連装させる赤い輸送機を召喚し、

「《幻獣機ブリックス》は特殊召喚の成功時に幻獣機を1体特殊召喚する。これで再びテザーウルフのレベルは4+3で7、私はレベル7の《幻獣機ブリックス》と《幻獣機テザーウルフ》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！ 竜の名を持つ機械の鳥よ。いまこそ空を支配し、私に勝利を輸送せよ！ エクシーズ召喚！ 発進せよ、ランク7《幻獣機ドラゴサック》！」

と、そのままランク7のエクシーズモンスターへと繋げる。

「ドラゴサックの効果、オーバーレイ・ユニットの《幻獣機ブリックス》を使い、幻獣機トークンを2体特殊召喚、守備表示」

これでフィールドに幻獣機トークンの数は3体。私はそのうちの1体を取り除き、

「そして、ドラゴサックのもうひとつの効果。1ターンに1度、フィールドの幻獣機を1体リリースし、フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。私はディスクを破壊！」

《クリフォート・ディスク》にも「通常召喚したこのカードは、このカードのレベルよりも 元々のレベルまたはランクが低いモンスターが発動した効果を受けない」って効果を持っていたけど、ドラゴサックのランクは7なので問題なく破壊できる。

「この効果を使ったターン、ドラゴサックは攻撃できない。カードをセットしてターン終了」

相手の手札は《クリフォート・ツール》1枚。次のドローで新たなクリフォートを引きさえしなければ流れはこちらに傾くんだけど、

「私のターン、ドローします。そして《クリフォート・ツール》と《クリフォート・アセンブラ》でPスケールをセットイング」

そんな気はしてました。

「ペンデュラム召喚！ 来てください、私のモンスターの方々。《クリフォート・ツール》《クリフォート・エイリアス》《クリフォート・アーカイブ》《クリフォート・ゲノム》《クリフォート・ディスク》！」
前のターンとはうって変わり、今回は一気に5体の同時召喚。

「さらに、800ライフ払ってPゾーンの《クリフォート・ツール》の効果を発動します」

木更 LP3100↓2300

「デッキから《アポクリフォート・カーネル》を手札に」

アポクリフォート!?

「そしてこのモンスターは特殊召喚できず、クリフォート3体をリリースした場合のみ通常召喚できます。私はツール・ゲノム・アーカイブをリリース」

3体のモンスターが光の粒子になって消え、木更がカードをデッキに読み込ませると、辺りが虹色に輝き数度ほど店長の部屋がまるで3Dの立体映像に変わったかのように映る。

「プログラム実行、クリフォート・ドット・エグゼ。起動せよ、《アポクリフォート・カーネル》！」

虹色の輝きが終わると同時に出現したのは、まるで要塞かのような巨大なモンスター。

私は、このモンスターに見覚えがなかった。

恐らくこの「アポクリフォート」こそが彼女の持つフィール・カードなのだろう。そのレベルは9攻撃力は2900、その召喚条件もあって間違いなく彼女の切り札だ。

「そしてリリースされたゲノムとアーカイブの効果で幻獣機トークンをバウンズし、その伏せカードを破壊します」

ゲノムの効果は先ほどの通り、アーカイブにはリリースされた場合にモンスターを1体手札バックハンドに戻す効果がある。

私は破壊される前に、

「罫カード《緊急発進》スクランブル、トークンを2体ともリリースして発動！

デッキから《幻獣機ブルーインパラス》《幻獣機コルトウイング》を特

殊召喚！」

2体のトークンが出現すると、私の背後に空母の甲板が出現し、そこから2体の航空機が発信する。その内のコルトウイングはヘリと航空機を併せた形状をしていた。

これによりトークンのバウンスはサクリファイイス・エスケープが成立し、ゲノムの効果も、すでに効果を終えた《緊急発進》を破壊する事になる。

「そして《幻獣機コルトウイング》のモンスター効果！ このカードが特殊召喚に成功した時、他の幻獣機がいるなら幻獣機トークンを2体特殊召喚する！」

この効果によって、元いたドラゴサック、《緊急発進》で呼び出したブルーインプラスにコルトウイング、そして幻獣機トークンが2体出現した事で、私のフィールドにはモンスターが5体埋まった。

もちろん全員守備表示。ここまですればフィールドにモンスターが1体は残った状態で次のターンを迎えられるはず。

「《アポクリフオート・カーネル》のモンスター効果。1ターンに1度、エンドフェイズまで相手モンスター1体のコントロールを得ます。私は《幻獣機ドラゴサック》を頂きます」

……と、思ってたけど甘かった。まさかコントロール奪取の効果を保持してるなんて。

「そしてバトルフェイズ。全員で一斉攻撃を仕掛けますね」

私のフィールドのモンスターは4体。木更のモンスターも4体。一応、ライフを護りきることはできたものの、全滅だった。

「そして最後にドラゴサックの効果で自壊すれば。……あ」

どうやら、そういう魂胆まで考えて奪ってたらしいけどここでミス。先ほど説明したようにドラゴサックは、1ターンに攻撃と破壊効果どちらかしか行えないのだ。

「私のフィールドも4体ですから、オーバーレイユニットを無駄撃ちすることもできませんね。ターンを終了してドラゴサックはお返しします」

そして、他にドラゴサックを始末する方法もなければ、このターン

で決める手段もないらしい。

「とはいえ、《アポクリフォート・カーネル》は魔法・罠の効果を受けず、他のクリフォートと同じく自身のレベル9未満のレベル・ランクの効果を受けません」

つまりは他の効果をほぼ受けないに等しい効果である。攻撃力も高いので、デツキによっては正面からまともにはぶつかろうと思うと詰んだも同然になってしまう。

「そして《クリフォート・アセンブラ》のP効果。この効果は私がクリフォートをアドバンス召喚したエンドフェイズに発動でき、そのリリースしたクリフォートの数だけドロウできます」

その上ただでさえやばい状況で駄目押しでのドロウ効果。しかもアポクリフォートの時にリリースした数って、

「この効果で私は3枚ドロウします」

と、木更はここで一気に手札を3枚も費やす。

「改めて、私のターンは終了します」

デュエルディスクのタ第一話ではモニターと表記してたブレット画面が私のターン開始を告げる。

「は……ははっ」

私は軽く髪をわしやわしやし、乾いた笑みを浮かべた。

「ぶつちやけこの状況、ドラゴサックはいるもののほぼ詰んじやつてるのよね。トークンを出して壁を作っても、そっちにはペンデュラム召喚があるから数で押し切られ、ドラゴサックで取り巻きを1体破壊しようともやっぱりペンデュラム。なんとか逆転の一手でカーネルを退けたとしても、木更さんの手札は3枚、次のドロウで4枚。畳み掛けられないほうがおかしいわ」

だから、私に求められるドロウはただ1点。このターン、この状況で木更のライフをゼロにするカードを引く。

「ホントはこんな所で使っている能力が、じゃないんだけど」

そういつて私は手を掲げる。すると、その腕にフィールのエネルギーが集まり、闇色に輝きを帯びる。

私は、チート技の行使を宣言した。

「暗き力はドロークカードをも闇に染める！——ダークドローク！」

闇色に輝くその手で、私はカードを1枚引き抜く。

カードは黒い光を放ちつつ闇に染まり新たなカードに変貌する。そこには、主に動物のシルエットを模した航空機である幻獣機ではなく、それらに搭載される武器と一体化した動物のモンスター《幻獣機》アベンジャガー》が描かれていた。

「ダークドローク……そのフィールは、一体」

状況が分からず動揺をみせる木更。

私はとりあえず、

「最後のオーバーレイ・ユニットを使い。ドラゴサックの効果を発動。幻獣機トークンを2体生成するわ」

と、ドラゴサックと同じ外見をしたホログラムのデコイを2体生み出す。

「そして」

引き抜いたカードを提示し、私はいった。

「私は、たったいま創造した《幻獣機アベンジャガー》の効果を発動！

このカードはルール上「幻獣機」カードとして扱う。そして手札・フィールド上からこのカードを含む幻獣機を素材に、融合魔法カードなしで融合させる」

「えっ」

木更は目を見開き。

「幻獣機で融合？」

「そして、《幻獣機アベンジャガー》は炎族モンスター。私は手札の炎族のアベンジャガー自身と、フィールドから機械族の幻獣機トークンを融合！」

上空に時空の歪めて発生した渦が出現すると、2体の素材モンスターは取り込まれ、混ざり合う。

「火器の力を得し半機獣よ、龍の力を得し航空機よ、科学の力にて混ざり合い、命の冒流の上に進化せよ！ 融合召喚！ 撃ち貫け、レベル6 《起爆獣ヴァルカノン》！」

こうして出現したのは、両肩に機関砲を積んだ機械の一角獣。

「《起爆獣ヴァルカノン》のモンスター効果！ このカードが融合召喚に成功した時、このカードと相手モンスター1体を破壊する。私は《クリフオート・ディスク》を破壊」

ヴァルカノンは円盤のクリフオートに狙いを定めると、左右の機関砲でそれを撃ち貫き、しかし自身も衝撃に耐え切れずその身が四散していく。

「その後、墓地へ送られた相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。……ここで重要なのは、破壊する時はフィールド上でのディスクを参照するけど、その後のバーン効果は墓地のディスクを参しよ——」

「あの、すみません」

「え？」

「《クリフオート・ディスク》は墓地には行かないのですけど」

「え？」

……………あ。

沙樹 LP2800↓0 (サレンダー)

その後、私は事務所に連絡入れた。

「9期テーマには勝てなかったよ」
って。

……………。

罰のため鉄の貞操帯着用させられた私は、こここの所ずっと夜のライディングデュエルできません。

ボスケテ。

余談。

依頼自体は、保険で不正書き換えの証拠を抑えたおかげで木更は一度警察のお世話になった。現在は釈放されたが、かすが邸への侵入も困難となり、店内でも警察を呼べるようになった等かすが店長の生活環境は間違いなく改善されたとのこと。

依頼は一部達成という事で事務所は報酬を半分受け取ったらしい。
もちろん、私の懐には一銭も入らなかつた。
いや、現物支給はあつたつけ。——鉄の貞操帯。

MISSION3―尚、沙樹への報酬は0、必要経費
ドン！の大赤字となりました。

私の名前は鳥乃トリノ 沙樹さき。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「けど、ドMの喜びは一理解できないわ」

鉄の貞操帯生活3日目。いま私は、生き地獄の最中にいた。

「沙樹ちゃん、まだ外れないの？」

前の席に座っているマイエンジェル梓が、心配そうな目で私に訊ねる。ちなみに彼女には「知人の女の子を襲おうとして、鍵錠ロックの鉄の貞操帯をつけられた」と説明してある。一応、木更「ちゃん」（もうターゲットでもないし、今後ちゃん付けで呼ぼうと思ってる）を襲おうとしたのは事実だから間違っではない。

「正直心折れそう。……だつて濡れる度に責め苦に襲われるのよ」

まず、この鉄の貞操帯。汗が篋りやすくすぐ蒸れる形状になっているのだ。仮にこの状態でもっこり美少女を見て濡れてみる。すると、やはり股間が蒸れ、最終的には痒くなる。それはもう地獄の程の痒さ、しかも鉄の貞操帯故に掻くこともできず、貞操帯自体を揺らしたり、擦らせたりする事もできない殺意の程のフィット感。

そんなものを、隙あらば女の子を目で追って発情するこの私が着ければどうなるか。

濡れる。蒸れる。痒くなる。濡れる。蒸れる。痒くなる。

ほぼ四六時中この繰り返し。

「もしドMだったら、これさえご褒美なのかな」

なんて考えることこれで三桁。しかし私は、残念ながらこの苦痛を快感を受け止める感性は持ち合わせてないので、ただただ痒みに耐えるしかない。

「辛そうだね沙樹ちゃん。私としては暴走が減って助かるけど」

何か酷いこと言われた気がするけど、癒しの天使がそんなこと言うはずがない。たぶん気のせいだ。

「それに、何よりこれだと夜のライディングに支障が」

「それ聞く度に心配必要ないかなって思いそうになるよー」

「心配して？ もう梓だけが癒しだから」

「はいはい。大変だねー」

と、梓が私の頭を撫でてくれる。責め具と強制された禁欲生活で荒んだ心が……。

「ツッ!!」

ビクンビクン。

「……」

梓が手を止め、絶句する。そして、ちよつと間を置いて、

「沙樹ちゃん。いま……もしかして」

「うん。イッちやった。梓の手でイッちやった♪」

貞操帯の内側に噴いた潮が一気に。ああ、く荒んだ心がぴよんぴよんするんじゃあ、く。

「もう、どうして沙樹ちゃんは何でもそつちに受け取るのー」

梓が困った顔をしている。

段々絶頂が抜け落ち着いてくると、噴いた潮が貞操帯の穴から流れだしてるのがわかった。一応ナプキンが吸ってはくれてるけど、一度トイレで全部抜け出るのを待って、ナプキンも交換してから戻ったほうが良さそう。あと臭い対策も。

「梓、ごめん。ちよつと席離れるわ」

「うん。先生には今日も私が説明しておくね」

うん、今日も。

ここ数日、経緯は様々ながらトイレに駆け込んで梓に色々と誤魔化して貰ってる。こういう時、無条件の味方がいるというのは真面目に頼もしい。性的な意味なしに。

「ありがとう」

と、私は一回合掌してからトイレへと走るのだった。

この貞操帯は普通より排尿用の穴が小さい。そのせいで、一度潮を噴いたり尿を出す場合、貞操帯の外に全て出し切るのに結構な時間が掛かる。もちろん、その間にじっくり股部を蒸らせ、カブラせ、私を

痒み責めにしながら。

「はあ……」

一体、いつになったら解放してくれるのだろう。早く夜のライディングしないと排卵が終わってしまいそう。

なんて、誰かが聞いたら「阿呆か」と言われそうなことを割と本気で考えながら、ひとりトイレの個室に座ってた。すると、

「失礼します。大丈夫ですか？」

と、私は個室の外から話しかけられた。

「その声は木更ちゃん？ 正直キツい」

「私も辛かったです。鳥乃先輩、警察に突き出さないって言ったのに」
ここ数日、愛しのかすが様とろくに接触できてないのだろう。木更ちゃんの声は苦しげだった。

「悪いわね。私が勝ってたら通報なしに終わらせれたんだけど、こちらも仕事だから。おかげで私も木更ちゃんと夜のライディングできなかったんだから、痛み分けってことで」

「……いま、衝撃の真実を聞かされた気がしましたけど。ツツコミは控えさせて頂きます」

「いやボケで言ったつもりじゃないんだけど」

「余計性質悪いのですけど」

そういえば、私が勝った時の詳細彼女に言っただけ。まさか負けてたら自分が襲われてたなんて、夜のライディングを経験させられてたなんて知っただいまの木更ちゃんは、一体どんな気持ちでいるんだろう。……あ、しまった！ また濡れてきた。

「で、話はそれだけ？ 悪いけどいま軽く鬱いから」

主に、濡れた結果、潮の出が悪くなったせいで。

「いえ、今日はお願いがあつてきました」

「お願い？」

「はい。……今度は私のボディガードをしてくれませんか？」

「っ」

その言葉を聞いた私は、扉に背を預け、彼女だけに聞こえるよう小さな声で。

「詳しく」

「はい」

木更ちゃんの声量も、同じように下がる。

「今朝、私はフィールを用いた強制デュエルを仕掛けられ、《アポクリフォート・カーネル》を奪われました」

「!? まさか、負けたの?」

「はい」

信じられない。あのデッキで負けるなんて。

「実は、釈放された日からなのですけど、どうも誰かに監視されてる気配があります」

なるほど。いま木更ちゃんは警察のお世話になり社会的に立場がかなり悪くなっている。警察の目さえ掻い潜れるだけのコネか情報があれば、いまの彼女はとも狙いやすい。

「その時は特に気にしてなかったのですけど。昨晚、かすが様のお宅に侵入を試みた所を狙われて」

ちよつと待て。

「相手は二人組の男でした。夜ずっと逃げてたのですけど、早朝ついに補足されて」

と、そこへ誰かの足音がトイレに近づく。すると、

「っ、先輩。……少し失礼します」

ドアノブからカチャカチャと音。刹那、かけていた鍵がピッキングで開けられ、木更ちゃんが個室に飛び込んできたのだ。

「き、木更ちゃん!? え?」

私は咄嗟にドアから飛び退きながら、入ってきた彼女の姿にハッとなった。木更ちゃんが着ていたのはチェックのブラウスにプリーツスカート。私服だったのである。しかも、所どころ破け、埃がついて、彼女自身にも小さな傷が幾つか見つかった。

「あなた、もしかして」

私は物音を立てず、そつとドアを閉めなおし鍵をかける。

「はい。まだ逃走の最中です」

木更ちゃんはいった。

「デュエルで負けてカードを奪われた後、私は口封じで殺されそうになりました。ちょうど学校の傍でしたから逃げ込んで、ずっと隠れてました。まだ停学も解除されてませんから、先生に助けを求めるわけにもいかなく」

「そう」

私は、そつと彼女の体を抱き寄せた。

「先輩……?」

「怖かったでしょ。もう大丈夫だから、木更ちゃんの安全は私が保証する」

「それって」

「依頼、受けるわ」

「あ……」

すると、木更ちゃんは私にもたれかかって、

「ありがとうございます」

と、弱い声でいう。最初は震えていたけど、頭や背中を撫でてあげると私の胸の中で段々落ち着いていき。

ああ、弱りきった女の子のこういう姿って最高にそそるわね。ついでこんで陥落させちゃ駄目かな?……いやむしろかすが店長の為にも、ここで寝取ったほうが。あ、そうなるとこの子のストーカーが私に移るのか。それは嫌ね、店長には「あなたを殺して私も」はないって言ったけどいざ自分がその位置に立つと考えると……予感するわ。すごく怖いわ。やっぱりヤク打ってつぶ——

「沙樹ちゃん」

と、軽くトリップしかけた所で、私は個室の外からの梓による声でハッと現実戻った。

「ちよつと様子を見てくるっていつて授業抜け出してきたんだけど。大丈夫?」

「あ、梓。うん、心配しなくてもだいじよ——」

私は、返事しかけた所で、ふと木更ちゃんのことを思い出し、

「ぶ、と思うけど。ごめん梓、ちよつと今日は落ち着いたら早退するわ。先生に伝えといて」

すると、梓は心配気な声で、

「そっかー。うん、分かったー。無理しないでねー」
程なくして、梓の足音が遠のくのがわかった。教室に戻ったの
う。

「ごめんなさい、早退させてしまつて」

木更ちゃんがすまなそうにいう。私は笑つて、

「大丈夫。仕事上よくある事だから」

「そんなによく頼まれるのですか？ ボディガードのお仕事」

「んー。まあね」

と、私は誤魔化した。

そういえば、彼女は「法に護られた」表の世界の住人だっけ。そも
そも、私の「仕事」をどこまで正確に認識してるのだろうか。あの時は
ハンドルの事も教えなかったし、木更ちゃん暴走してたし、それで私
も対話を諦めて説明とか脇に置いてたし。

私の仕事が慈善事業じゃなくて、完全にアウトローの裏稼業ってこ
とは教えないほうが良さそうだ。

「ま、心配しないで。仕事のほうはちゃんと完遂するから。……
ちよつとひとつ頼まれてくれれば」

「えっ？」

「いま私、貞操帯つけられてるんだけど。外してくれない？」

木更ちゃんのピッキングは、組織特性の鍵錠ロックでさえ20分で
攻略した。

……の、だけど。

「その後個室をいいことに依頼人を襲おうとしたら、貞操帯をつけ直
されてしまったと」

ハンドグドにおける幹部のひとり。立花^{たちばな} 鈴音^{すずね}さん（38）は、頭を
痛めながらいった。

「ある事情」もあつて、その見た目は二十代前半。気難しそうな吊
り眉に2対6本の縦ロール髪。これでゴスロリならお嬢様系のコス
プレで通じるものの、残念ながら大真面目にスーツ姿。しかも童顔で

もロリ属性でもないのに小柄な背丈に極貧乳なのもあって、一目で「残念」な印象を与えてくれる。

「針金でより強力な鍵錠を施されてね」

「自業自得ですわね」

何故か話し方も「ですわ調」だし。

鈴音さんはラウンジテーブルに紅茶とケーキを置き、微笑んでいた。

「藤稔 木更さんでしたわね？ わざわざご足労様ですわ、こんなものでよろしければお召し上がり下さいませ」

いま私たちはハングドが拠点としてるビルの一室にいる。

表向きは漫画家事務所「スタジオミスト」として活動しており、その日もスタジオの副代表を兼任してる鈴音さんを筆頭に、一部の構成員たちが表稼業のアシスタントとして働いていた。

私？ 私は表のスタッフには登録してないからヘーキヘーキ。

木更ちゃんの対面には席がふたつ置かれ、そのうちひとつに私は座って。

「という事で、事件が落ち着くまでの間あなたにはここで寝止まりして貰うけど、平気？」

「はい。それは構わないのですけど」

と、木更ちゃんは辺りを見渡し、

「よろしいのでしょうか？ ここの方々も仕事があるのに」

ちなみに彼女には、ここが殺しも請け負うプロの巣窟だとは伝えていない。

「構いませんわ」

鈴音さんがもう片方の席に座って、

「このスタッフも、何人かはファイルの扱いに長けてますもの。大体のことは仕事の片手間で対応できますわ」

だから避難所として利用されるのは日常茶飯事なのだと言音さんは説明した。

本当は何人どころか全員長けてるけどね。私より強いのもごろごろいるし。

「わかりました」

木更さんはいった。普段の彼女がみせる柔和な微笑み顔。しかし、心の底では納得してないんだろうなーって風に見える。そんな様子は、当然鈴音さんにも伝わったのだろうか。

「ただ、もし暇でしたら。ボランティアで臨時アシスタントをして頂けませんか?」

「え?」

「このスタジオの代表、まるでスタッフを使い潰す前提のブラックスケジュールを組むものですから。できれば手伝って頂けると助かるんですけど」

「……私でもできる仕事でしたら」

木更ちゃんはゆつくりと頭を下げた。お引き受けします、と。

「話は決まったわね」

私は立ち上がって、

「じゃあ木更ちゃん。私はちよつと奥に用事があるから一旦失礼するわ。何かあったら極力鈴音さんに聞くといいよ。ここの面子、この人以外基本非常識だから。私含めて」

「ありがとうございます、何からなにまで」

感謝を告げる木更ちゃんに、私は笑顔でいった。

「別にいいわよ、今晩夜のライディングに付き合ってくれたら」

「では早速、鈴音さん。鳥乃先輩のこういう時の対処方法を教えて頂けますか?」

ちよつ、待っ!?

「あとでファイルのついた《ハンマーシユート》をお渡し致しますわ」「行つてきまーす」

既に溜息吐きそうな鈴音さんを尻目に、私は奥の資料室へと足を運んだ。

この部屋には、事務所メンバーによる単行本やその掲載雑誌が保管されており、辺り一面が棚に覆われている。

そして、一箇所だけキャスターのついた移動棚が引き戸代わりに使われており、奥に進むとヘッドホンをつけた男がひとりデスクに座り

パソコンに向かい合っていた。

こっそり、私はパソコンのモニタを覗いてみる。

フルスクリーンで表示されゲーム画面だった。そこに映るのは、小学生くらいの女の子。ボブヘアーに八重歯がチャームポイントの、明るく元気そうな子だ。……それが、夜のライディング的な行為をしている。

この男は、職場でエロゲをしたのだ。

私は、こいつの背後から、

「何やってるのよ、増田」

「何って、今日買ったばかりの『相思相愛イカヅチの性活』お兄ちゃん、私がいるじゃない」をだな。……って、うわっ」

ここでやつと私に気づいたエロゲ男こと増田は、

「と、鳥乃か。脅かさないでくれよ」

「ヘッドホンでエロゲしてるほうが悪いんですよ」

私はマウスを奪ってゲームを終了し、「あああああああ!!」と嘆く増田に向かって、

「それで。私が頼んでおいた件は？」

増田はショックからか、死んだ魚のような目で、

「イカヅチがモニターから消えた。この人でなし」

「また後で起動すればいいんですよ」

「イカヅチは私の母になってくれたかもしれない女性だ。……その想い出を殺したお前に言えたことか!」

「セーブ……してなかったのね」

それは、愁傷様。

「で、何しにきたんだよ」

「だから、さつきから報告をつて」

「ああ。そうだったそうだった」

ロリコンエロゲ男の増田は適当にあしらうような素振りで、

「勿論、大体の調べはついたよ」

と、パソコン上で一個のフォルダデータを開く。その際パスワード入力画面が表示され「youjo」と打って解除していた。——確定

ではないけど、キーを打つ指の動きから特定できた。

木更ちゃんを事務所に連れてくる際、私は同時に「木更を襲った人を調べてくれ」と依頼していた。そして、担当してくれたのがこの増田である。

ちなみに、その木更ちゃんからは男の詳細やデュエル内容は聞かない。何故って……股間が限界で、最低限の聞き取りもすっかり忘れてたのよ。それで、ハンドに依頼して木更ちゃんを事務所に連れてきてって所で「あ、依頼者から情報収集できるじゃない」と気づいたわけで。もつとも動揺してて正確に状況を記憶してるとも限らないので、結局こちらで調べてもらったとは思うけど。

「確か、木更ってバ……君の後輩を襲ったふたりの男性だっけ？ なんとか特定に成功したよ」

おいロリコン。いま去年まで義務教育だった子をババア呼ばわりしなかった？

「どうやら、彼女を襲った者たちは『黒山羊の実』という組織の者らしい」

「黒山羊の実？」

聞いたことのない組織だった。

「どうやら一種の宗教組織のようだけど、やってる事はマフィアと同じさ。カードの窃盗・偽造・密売、麻薬も取り扱ってると聞いたことがある」

「麻薬ねえ」

さすが店長の目の前で木更ちゃんレズキメセクしてみたい。

「ただ、この組織は科学力が群を抜いてるようで、規模としては弱小ながらファイルで動かす機械人形を所有していたり、構成員たちに偽造コピーだけで作った【墮天使】デッキを支給しているようだ」

「ファイルで動かす機械人形に、墮天使？」

私は、少し前に引き受けた依頼でのことを思い出した。たしか美術館の時に戦ったコートの男も、機械人形を部下に配備し、墮天使モンスターを使ってたような。

「それはともかくとして、今回彼女を襲った構成員だけ」

と、増田はひとつのフォトファイルをクリックする。そこに映ったのは、顔や背丈、体格までそっくりの、ふたりの牧師の姿だった。もみあげと繋がった特徴的な顎鬚にブロンドの髪。その眼差しは一見優しげだけど。

「彼らは通称テストタメント兄弟といい、左から兄のボブ・テストタメント、弟のバイブル・テストタメント。普段は近辺の教会で寝泊りしている」

「双子？」

「ああ。表の顔では人々にとても人望があるらしい牧師なのだけど、どうやら揃って男色のようでね」

うげっ。

「元々彼らは熱心なプロテスタントだったようだが、そのせいで自らの性癖に悩んでたらしい。そこを『黒山羊の実』に付け込まれたそう。いまでは表向き牧師を続けながら、裏では従順な奴らの手駒」

「あー。そういう系かあ」

こういうタイプは忠誠心や執念が強いから、付け入る隙が見つけないと下手な狂人よりずっと厄介な場合がある。もう少し情報が欲しいわね。

「そういえば、ふたつ程気になったんだけど」

「なんだ？」

「さつき、黒山羊の実を宗教組織って言ったけど、何の組織かわかる？」

「いや。そこまではまだ調べがついてない」

増田は首を横に振った。

「ただ、一種の悪魔崇拜に似た雰囲気はある。それも現存のサタニストではなく、一般的にイメージするサバトの類でだ」

「調べがついてないって、その状態で遊んでたの？」

「あのなあ」

増田は肘をついて、

「何も脳筋ばりにしらみつぶすばかりが情報収集じゃないんだ。他所

と連絡を取ったり、罨を張ったり、色々あるだろう」

「つまり、こうしてる間も調査は続いてるってこと？」

「そうだ。別に早くイカヅチともっこりしたくて、こういう手段を取ってるわけじゃないさ」

そういうことね。

「で、気になることもうひとつつていうのは？」

「あーうん」

まあ、これでも優秀なスタッフなんだしいか。と、私は切り替え、「えつとハラスメント兄弟だっけ？ そいつらつてそんなにデュエル強いのか？ あの木更ちゃんが負けるなんて」

「ハラスメントじゃなくてテストメントな。それで、デュエルだけど実力は並程度だ。しかし、今回彼女が負ける理由は俺調べで3つも見つけた」

3つも？

「その理由って？」

「まずひとつは、兄弟が仕掛けたデュエルがライフ・フィールド・墓地共有、兄・木更・弟・木更といった具合にターンを進行する良心的な2対1だったとはいえ、結局はハンドアドバンテージが圧倒的に不利だった事だ」

けど、それだけでは理由にならない。木更ちゃんのデッキは一度型に嵌れば相手がふたりでも纏めてジリ貧に追い込むカードパワーを持ってる。

「そしてふたつめは。鳥乃は彼女を高く表現してるけど。君が負けた理由は、あの時苦し紛れにいった『9期テーマには勝てなかった』が9割9分正解なんだ。つまりは」

あ……。

「気づいたみたいだな。そう、彼女はデッキが強いだけでデュエルの腕は並程度だ」

そういえば、木更ちゃんとのデュエルも付け入る甘さは結構あったっけ。すっかり忘れてたよ。

「そして最後の理由だが。彼女はフィールを用いたデュエルの初心者

だ」

そこは、もしかしたらと考えるはいた。

「やっぱり」

「テストメント兄弟は最初から飛ばしすぎず比較的堅実なプレイを好み、かつタッグの相性も当然良いせいで、彼女のほうがジリ貧に追い込まれて負けてたよ」

「え」

私は、さっきの増田の言葉に強く反応する。

「いま。最初は飛ばさず、堅実なプレイをして、タッグの相性が良いって?」

「ああ」

増田はうなずいた。

見えてきた。

予想外の所から、兄弟の付け入る隙を。

「ありがとう、増田」

私はいった。

「これで、何とかなるかもしれないわ」

——現在時刻23:00

いま、私はテンペスト兄弟（間違い）の教会に真正面から突入する所だ。

兄弟には、増田から入手したテンペスト兄のメールアドレス宛に「今晚、23時頃に《アポクリフォート・カーネル》を取り返しにアンティデュエルを仕掛けに行く」と、これまた正々堂々と果たし状を送りつけておいた。

話を聞いている限り、兄弟は揃ってとても真面目で根が善人だ。木更ちゃんに対しても、強襲はしても不意打ちはしない。恐らく真正面から追いかけて、真正面から追い詰め、真正面からデュエルをしたのだろう。

そして木更ちゃんが負けた後逃げ切れたのも、恐らくわざと「見失った」気がする。でなければ、木更ちゃんはとっくにフィールで実

体化したモンスターに殺されてるはず。

私は教会の扉を開けた。

広がるのは、明かりの灯された礼拝堂。その奥に、テンペスト兄弟は立っていた。

「ジャスト23時半」「ようこそ来て下さった。ごきげんよう」

「わざわざ待ってくれるなんて律儀ね」

「時間を指定され」「出迎えを怠る等、失礼な行いはできぬ性分故」

兄弟は言うど、ゆっくりと歩み寄る。

「初めまして、ミス鳥乃。ボブ・テストメントと申します」

「弟のバイブル・テストメントです」

「鳥乃 沙樹よ」

お互いに自己紹介を終えた所で、本題に入ることにする。

「早速だけど、一応アンティを仕掛けるとはいったけど、好意で返してくれる気はない？ 条件付きでも多少は考えるけど」

例えば寝取りたい彼女持ちのイケメンを攫ってくれとか。もちろん彼女のほうは私が頂くけど。

「残念ながら」

テンペスト兄は首を振り、弟が、

「他のカードなら、フィール・カード同士でトレードでもといたいのですが、《アポクリフオート・カーネル》は上が求めているもので、渡すわけにはいきません」

そして兄が、

「本当なら既に上に献上していたはずのものを、貴方の連絡を受けて待つて頂いてるのです。どうかご理解頂ける様」

「なるほどねー」

この話が本当なら、呆れるほどガチでいい人だわこの兄弟。恐らく「このカードを餌にもうひとつカードを献上できます」とか報告したんだろうけど、それでも私のために相当頭を下げたんじゃないかな。「じゃあ、いっそ組織を抜けて他所の善良な組織に匿って貰う気はない？ いいトコ紹介できるよ」

なお、いいトコとはハングドではない。

世界の裏には、名小屋周辺でも色んな組織があって、その中のひとつにNLT^{ナルツ}っていう治安維持組織がある。

その組織は警察と連携しており、またこの地域の地主にして裏で官界・政界にも進出してる白樹家もバックについてる、いわばこの近辺の裏の守護神だ。

ハングドとは直接協力関係にあるわけではないものの、共通の外部仲介業者と契約しあい任務や依頼を住み分けたり、時に互いに依頼を出し合う仲でもある。

ハングドでもいいんだけど、テンペスト兄弟（まだ間違えてる）の性格から考えると、NLTのほうがいいんじゃないかなって思ったのだ。

だけど。

「お気持ちには感謝致します。ですが」

「上は私共に一筋の光明を与えてくれた。私はあの方を裏切るわけにはいきません」

「例え自分たちがただの手駒だったとしても？」

『勿論』

兄弟は、真っ直ぐこちらを見据え、口を揃えていった。

分かっていた事だけど、これは平和的に解決する手段はないわね。貞操帯で本調子じゃないから、できれば安全に解決したかったのだけだ。

「了解。私もこれ以上は駄々をこねないわ」

私はデュエルディスクを構えている。そして、ふたりのディスクを強制的にデュエルモードへ移行させ、

「じゃあ、宣言通り私とアンティデュエルをして貰うよ。私が勝ったら木更ちゃんから奪ったカードを返して貰う」

『私たちが勝つたら？』

「ひとり一枚ずつ、好きなファイル・カードを持ってっていいわ、それでオツケー？」

「構いません」「私も構いません」

兄弟はいい、そして既にデュエルモードになってるデュエルディスク

クを構える。

「ルールは木更ちゃんにしたのと同じ、ライフ・フィールド・墓地共有、私のターンを挟んで交互にそちらのターンを行ってもらおう。これでいい?」

『承知した』

デュエルディスクが音声認識機能によって、タブレット端末画面にルールが表示される。三人全員の承認が確認され、

『デュエル!』

三人の発声によつて、デュエルは開始された。

沙樹

LP 4000

手札 5

テストメント兄弟

LP 4000

ボブ：手札 5

バイブル：手札 5

「先攻を頂きました」

デュエルディスクは先攻プレイヤーに兄弟の兄ボブを指した。

「私は手札から邪典……《墮典使ボックス》を召喚」

ボブのフィールドに現れたのは、《ホーリー・ライトニング光天使ボックス》を2Pカ

ラーの黒色にしたようなモンスター。

「このカードは聖典の典の文字で表記されてるがルール上墮天使として扱う。そしてボックスのモンスター効果! 1ターンに1度、手札の墮天使魔法・罫1枚を墓地に送る事で発動。私は《墮天使の戒壇》を墓地に送って発動。手札から《墮天使アスモディウス》を特殊召喚する」

《墮典使ボックス》の効果もまた《光天使ボックス》の亜種みたいな効果。そしてフィールドに現れたのは、またあの攻撃力3000墮天使のひとつ。

前のコートの雑魚と微妙にデッキは違うっぽいけど、同じテーマなだけあって、また目にする事になるなんてね。

「《墮天使アスモディウス》の効果、デッキから《墮天使スペルビア》を墓地に送る」

スペルビアは墓地から特殊召喚した時に、墓地の天使族1体を引って張ってくる。そしてボブは墮天使専用の蘇生カード《墮天使の戒壇》を墓地に送った。そして、一部の墮天使モンスターは揃って墓地の「墮天使」魔法・罫の効果を使う共通効果を持っている。

増田のいう通り、堅実に準備を整えてきたわね。

「私はこれでターンエンドになります」

とはいえ、伏せカードを敷かずには終わってはこっちとしてはラツキーといえる。

「私のターン。ドロー」

次は私の手番。カードを1枚引き抜き、手札を確認する。

どうやら、このターンはアスモディウスを除去するので精一杯みたい。

「私は《幻獣機テザールフ》を召喚。召喚成功時、効果によって幻獣機トークンを1体生成」

私はフィールドに一機の戦闘へりを呼び出し、その横に同じ形状をしたホログラムのデコイを作り出した。

「そして、装備魔法《団結の力》をテザールフに装備、攻撃力を私のモンスターの数×800アップ」

テザールフに装備魔法が付与されると、先ほどのデコイから一筋の光が伸び、テザールフと繋がる。

《幻獣機テザールフ》 攻撃力1700↓3300

「そして、攻撃力が3300になったテザールフで、《墮天使アスモディウス》を攻撃」

攻撃の指令を受けたテザールフは、鎖を飛ばしてアスモディウスの体を拘束し、デコイと連携した射撃攻撃でモンスターを爆破した。

テストメント兄弟 LP4000↓3700

アスモディウスは攻撃表示だった為、その差分だけテストメント兄

弟のライフを削る。けど。

「アスモディウスは破壊された場合、アスモトークンとデウストークンの2体を特殊召喚する。両方とも守備表示」

しまった。そんな効果もあったっけ、すっかり忘れてた。

とはいえ、いまの私の手札にこれを対処する手段はない。

「カードを1枚セット。ターンを終了よ」

うーん、作戦が上手くいかない。皮肉にも男相手のおかげで貞操帯の内側は今日一番に落ち着いてはいるけど。

「では、次は私のターンですね」

弟、バイブルがいった。

「バイブル、頼みましたよ」

「ええ、兄さん。行かせて頂きます。ドロ」

バイブルは既にやるべき行動を決めてたのだろう、すぐ手札を2枚引き抜き、墓地へと送った。

「私は《墮天使イシユタム》の効果を使用します。イシユタム自身ともう1体の墮天使カードを墓地に送る事で発動。私は《墮天使マステイマ》と一緒に捨ててカードを2枚ドロします」

これで相手は手札交換をしつつ、スペルビアで蘇生するモンスターを墓地に送ることに成功。

「そして墓地の《墮天使の戒壇》をデッキに戻し、魔法カード《墮天使の祭典》を発動。このカードは墓地の墮天使魔法・罫をデッキに戻して発動し、その効果を適用するカード。私は《墮天使の戒壇》の効果を用いし、《墮天使スペルビア》を守備表示で特殊召喚」

「待つて」

私は《墮天使の祭典》にチェインし、手札からカードを墓地に送る。

「その前に、私も手札の《幻獣機ジエイクローチ》の効果を発動」

すると、教会の床を海面に一機の黒光りする水上偵察機が姿を現した。

「このターン、私は相手がモンスターを特殊召喚する度に幻獣機トークンを特殊召喚する。これによって《墮天使の祭典》によってスペルビアが特殊召喚されて1体、スペルビア自身の効果を使うならもう1

体トークンを呼び出すわ」

顔をしかめるボブ。けど、ターンプレイヤーのバイブルは何てことなさそうに。

「承知した。改めて私は《墮天使スペルビア》を守備表示で特殊召喚し、スペルビアの効果で《墮天使マステイマ》を特殊召喚。トークンを2体生み出してください」

「はい」

言われた通り、現れた2体の墮天使に続いて、ホログラムの水上偵察機が2体顔を出す。よく見ると先端の形状は……Gとよばれる生きた化石。

私が呼び出してあれだけど。……うん、キモい。

とはいえ、これで幻獣機トークンは3体。これ全部破壊しなければテザールフは破壊できない上、

《幻獣機テザールフ》 攻撃力3300↓4900

そのテザールフも、《団結の力》でこんな風になってるのだけど。「で、その様子を見るに何かこの状況に対策でも?」

「当然」

バイブルはいった。すると相手のトークン2体が光の粒子に変わり、上空へと吸い込まれていく。

「私はアスモトークンとテウストークンをリリースし、《墮天使ゼラート》をアドバンス召喚」

そして、上空から降臨したのは攻撃力2800の新たな墮天使。

「私は手札の《墮典使ブックス》を墓地へ送り、《墮天使ゼラート》の効果を発動。このモンスターは、手札から闇属性モンスター1体を墓地へ送る事で相手フィールドのモンスターを全て破壊します」

ゼラートがその手に持つ剣を天に掲げると、教会内の空間が闇色の曇り空に変わり、一本の稲妻が落ちた。

「っ、けど《幻獣機テザールフ》は私のフィールドにトークンがいる限り破壊されない。3体のトークンは破壊されても、テザールフは生き残るわ」

稲妻は全てのデコイを破壊するも、テザールフはなんとか被害を

免れる。でも、

《幻獣機テザールフ》 攻撃力4900↓2500

フィールド上のモンスターが1体だけになったことで、《団結の力》の影響も大幅に減ってしまった。そして、現在フィールドにいる墮天使はブックスを除いて全員最上級モンスター。守備表示のスペルピアはともかくとしても、いまのテザールフなら、ゼラートでも^{攻2600}マステイマでも素で戦闘破壊できてしまう。やっぱ墮天使ってパワー高いわ。

「バトルフェイズに移行しましょう。《墮天使ゼラート》でテザールフに攻撃」

攻撃の指示を受けたゼラートは、今度は先ほどの剣を直接テザールフへと向け、斬りかかる。

「手札の《幻獣機ジョースピット》を墓地に送って効果発動！」

そこへ現れたのは、一機の絞口の戦闘機。

「この効果は、幻獣機が戦闘を行うダメージステップ時からダメージ計算前にジョースピット自身を墓地に送って発動可能。ターン終了時までテザールフの攻撃力を400アップし、さらに幻獣機トークンを1体生成」

さらに、ジョースピットと同じ外見をしたホログラムのデコイが現れ、3機で陣形を組みつつ《団結の力》によってトークンから伸びた光がテザールフと繋がる。

結果、ゼラートの剣撃は3機のフイームーションによって回避し、反撃の機銃で返り討ちに成功。相手のライフを更に削る結果に持ち込んだ。

《幻獣機テザールフ》 攻撃力2500↓3700

テストメント兄弟 LP3700↓2800

「そして、トークンがフィールドに現れたことで、再びテザールフは破壊されなくなったわ」

「ううっ」

さすがに今度はバイブルのほうも顔をしかめる。

ボブはいった。

「仕方ありませんね。せめてマステイマでトークンを破壊しまし
よう」

「分かりました、兄さん」

バイブルはうなずく。

気づいちやってたか。いまテザールフの攻撃力はジョースピツ
トの効果でも上昇して、トークンなしでも攻撃力2900。攻撃力2
600のマステイマでは破壊できないことを。

ここでトークンを仕留めるのは、ブックスではなくマステイマで行
うのが正解なのだ。

「《墮天使マステイマ》でトークン破壊します」

マステイマの一撃がデコイを粉碎し、

「カードを1枚セット。《墮典使ブックス》を守備表示にしてターンを
終了しましょう」

うーん。ブックスでトークンを攻撃ってしてくれたら、表示変更で
きなくなつて、次のターンにいい的になつただけだ。仕方ない。

沙樹

LP4000

手札1

場：《幻獣機テザールフ》《団結の力（テザールフに装備）》《伏

せカード（×1）》

テストメント兄弟

LP2800

ボブ：手札2

バイブル：手札2

場：《墮天使マステイマ》《墮天使スペルビア（守備）》《墮典使ブツ

クス（守備）》《伏せカード（×1）》

再び私のターンがまわってきた。さて、早速だけどここのターンが勝
負所ね。私はドロローする指にフィールを多く集める。

こうする事でドロロー運を高めることができるのだ。そして、この

フィールを多めなんていわず殆ど使い切る勢いで行うドローが、この前木更ちゃん相手にやってみせたダークドローである。

「私のターン。ドロー」

私はフィールを込めた指でカードを引き抜く。

「む」「仕掛けてくるか」

兄弟たちも気づいたようで、警戒を強める。

そして、引いたカードは。

「きたきた。私は《幻獣機メガラプター》を通常召喚」

私は、早速いまだドローしたカードをフィールドに召喚し、

「さらに永続罫カード《空中補給》を発動。効果でフィールド上に幻獣機トークンを1体生成。さらに《幻獣機メガラプター》は1ターンに1度、トークンが特殊召喚された時に幻獣機トークンを更に1体生成する効果を持つ。これで私は2体の幻獣機トークンをフィールドに呼んだわ」

出現するメガラプターと同じ外見のホログラムデコイ。

「そして、手札から魔法カード《マジック・プランター》を発動。《空中補給》を墓地に送って2枚ドローする」

私は再び指にフィールを込め、そしてカード引き抜く。しかし、

『させません』

ここで兄弟は両の掌を突き出し、フィール・エネルギーで作った波紋を放ってきた。

「しまっ」

以前もちらつと触れたけど、基本的にフィールは同じフィールをぶつける事で相殺できる。指に込めた私のフィールは、兄弟の放った波紋によって消失してしまった。

私の手には、すでに引き抜かれた後の2枚のカード。もちろん、このドローにはフィールの補正は入っていない。

「(不味いわね)」

このターンだけで結構フィールを消費してしまった。リアルファイトする分には問題ないだけのフィール量だけど、そろそろふたりがデュエルにフィールを込めた行動、例えばモンスターの攻撃をリアル質量をもつ

ソリッドビジョン化させて攻撃したり、私がしたようなフィールド込みのドロローをされると少々防ぎきれないかもしれない。

「だけど、私にはここまでしないといけない理由があった。なぜなら、このターンで決めないと私はどの道負ける。」

「やっぱり、2対1はハンドアドバンテージに差がありすぎるのよね。それでも私が勝機ありとみてアンティを挑んだ理由は、相手が「最初から飛ばしすぎず比較的堅実なプレイを好む」みたいだから。」

「つまりは逆転の発想だった。ふたりのエンジンが入りきる前に、具体的には相手に二巡目がまわってくる前に倒してしまえと。」

「さて、現状を把握しよう。」

「現在、私のモンスターは4体いるからテザールウルフの攻撃力は4900だけど、相手の表側表示モンスターの《墮天使マステイマ》と戦闘しても相手のライフは500残ってしまう。メガラプターで守備表示のブックスを破壊し全滅させた所で、幻獣機トークンの攻撃力は0、そもそも守備表示で出している。」

「いまのフィールドのままでは勝利することができない。」

「私は、ここで初めて引いた手札を確認した。」

「1枚は《弾幕回避》^{バレル・ロール}。幻獣機トークンを全てリリースして発動するカウンタースキルト。といっても、このターン使えない時点で、ねえ。」

「そしてもう1枚は《RUM―エージェント・カオス・フォース》。」

「(あ)」

「私はふと気づいた。」

「いま幻獣機トークンは2体。フィールドのメガラプターとテザールウルフは、いまレベル10になってる。つまり、ランク10のエクスシーズモンスターを召喚可能。」

「そして、このRUMがあれば。」

「頭の中で勝利の方程式が組みあがっていく。これは、いけるかも。『どうやら、せっかくフィールドで妨害したのに無駄になったみたいね』とりあえず、私は虚勢を張ってみる。」

「む」「何か引いたのですか」

「相手はまんまと虚勢に乗せられた。まあ、確かに引いたことは事実」

ではあるけど。

「私は、レベル10となったメガラプターとテザールフでオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」
教会の床に銀河の渦が出現すると、2体の幻獣機は霊魂となって取り込まれる。

「なんと！」「ランク10ですか」

驚く兄弟。私はエクストラデッキから目当てのカードを出し、

「古代国家の名を持つ空の宮殿よ、いまこそ降臨し、私に勝利と繁栄をもたらしして！ エクシーズ召喚！ 発進せよランク10、《超巨大空中宮殿ガンガリディア》！」

現れたのは、とにかく巨大な一機の母艦。その攻撃力もランク10なだけあって素で3400と青眼超え。

『なんと……』

驚く兄弟。

「だが」「しかし」

とはいえ、まだ対処手段を残してるらしいふたり。やっぱり、あの伏せカードなのだろうか。

「ガンガリディアのモンスター効果。オーバーレイ・ユニットをひとつ使って、相手フィールド上のカードを1枚破壊し、相手に1000ポイントのダメージを与える」
『なっ』

「私は、その伏せカードを破壊」

ガンガリディアは機動する。その下底部から、オーバーレイ・ユニットとして消費された《幻獣機メガラプター》が無数に発進すると、伏せカードは機銃の弾幕を浴び破壊される。

伏せカードは《次元幽閉》だった。

「《超巨大空中宮殿ガンガリディア》の効果は1ターンに1度しか使えずなく、このターン中、ガンガリディアは攻撃できなくなるわ」

説明すると、兄弟はどこか安堵の様子をみせた。

さっきの《次元幽閉》が秘策だったのだろう。これなら確かにトーンで耐性持ったテザールフだろうと除去することができる。破

壊はされてしまったが、結果的には攻撃を止めることができてほっとなったのだろう。

「だから、さらにエクシース素材になって貰うわ」

『!?』

そして一転驚愕の表情。

私は言葉で兄弟を振り回してから、

「《RUM―アージェント・カオス・フォース》を発動！」

と、カードを発動した。

「私はこの効果で《超巨大空中宮殿ガンガリディア》をランクが1つ高いCX化させる。私はガンガリディア1体でオーバーレイ・ネットワークを再構築」

今度は上空に銀河の渦が出現し、ガンガリディアは霊魂となって吸い込まれる。

「冒険なる科学の力よ、いまこそ国家を要塞へと改造し、私の勝利を磐石にして！ ランクアップ・エクシース・チェンジ！ 機動せよランク11、《CX 超巨大空中要塞バビロン》！」

銀河の中から降り立ったのは、一機の戦艦型の要塞。その攻撃力は3800と更に上がっている。

「これで私はバビロンで攻撃が可能」

私は一体の墮天使に向けて腕を向け、いった。

「《CX 超巨大空中要塞バビロン》で《墮天使マステイマ》に攻撃。砲撃開始！」

バビロンはゆっくりとマステイマに標準を合わせると、ビーム状の主砲をマステイマに浴びせ、塵ひとつ残さず消滅させる。

「この戦闘でマステイマとの攻撃力の差分、1200ポイントのダメージが入る。そして、バビロンは破壊したモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える」

主砲は勢い余って兄弟の下へも届き、そのライフを一気に削り切った。

「これで私の勝ちね」

テストメント兄弟 LP1800↓600↓0

兄弟の前に、ライフ0と勝敗の決定を告げるビジョンが表示され、デュエルは私の勝利で幕を閉じた。

「そんな、私たちが」「負けた……」

放心する兄弟。他のビジョンが消える中、私はバビロンだけを召喚したままにふたりの下へと歩み寄る。

「じゃ、約束通りあの子のカードは返して貰うわよ」

私というと、ボブの服の内側から一筋の光が浮かび上がる。それはゆっくりとこちらに向かってきて、私の手で《アポクリフオート・カーネル》に姿を変えた。

「これでミツシヨン終了っつと」

私というと、

「こ、こっとなつたらー!」

弟のバイブルは懐から銃を取り出し、構える。

「よせ、バイブル!」

兄のボブは止めるも、

「止めないでください兄さん。これを易々渡しては私たちの身が」

と、バイブルはトリガーを引きかける。けど、

「なっ」

驚くバイブル。

その瞬間、私の撃った銃弾が彼の銃を弾き飛ばしたからだ。

弾丸は本物。しかしフィールドでコーティングしたことで、逆にゴム弾のように威力は弱まり、兆弾で相手を死傷させるような危険は抑えてある。

「銃を隠し持っておりましたか」

ボブは転がった弟の銃を拾い、懐へとしまう。

「しかし、銃を取り出す姿は見えなかった。一体どこから」

「秘密」

私はいった。なぜか手首に煙があがってたので、私は衣服でさっと払い、

「今回は殺さないよう配慮はしたけど、二度目はないからね」

その言葉にバイブルは苦味の入った顔で睨み付ける。

「……」

一方、ボブは無言でバイブルをみてから、

「弟がすみませんでした」

と、頭を下げた。

「ん」

私は、そんな兄の態度ごとさらっと流し、

「じゃ私はこれで失礼するわ。早く木更ちゃんに夜這いのライディング仕掛けに行きたいし」

貞操帯はずして欲しいし。

『ん?』

すると、なぜか兄弟はきよとんとして、

「失礼ながら」「もしや、そういうご趣味をお持ちで?」

「レズは人生」

『おお、同士でありましたか!』

兄弟は嬉しげにいい、

「そう言っ頂ければ」「好意でカードをお返ししたものを」

え?

「何か夜這いに必要なものはありますか?」「拘束具や聖油などならお貸しできますよ?」

は?

『私たちは『黒山羊の実』に誓いました。この世全ての同性愛者の友となることを。……私たちはあなたの夜を全力で応援しましょう』

えっと、『黒山羊の実』って一体何の組織なの? 易々渡したら身が危ないんじゃないの? そもそも敵にそんな施していいわけ?

ああ。そこもカオスな組織なのね、ウチみたいに。

「あ、ありがとう。けどいいや」

とりあえず私は断った。男の汗の染み込んだ拘束具とか使いたくないから。

「そうですか」「力になれず申し訳ございません」

こうして、私は兄弟に見送られながら教会を後にした。

——現在時刻0:05

「ただいまー」

ギリギリ日付変更の間に合わなかったものの、私は事務所へと帰還完了。

「ミッション終了。カード取り返してきたから」

「お疲れ様ですわ」

迎えてくれたのは鈴音さんだった。いや、厳密にいうと鈴音さんが遠隔操作しているAIBOに似た人型ロボットだ。本体は恐らく帰宅済なのだろう。一応あの人シングルマザーだし。そう、あの髪あの見た目あの口調だよ。

「今日はお疲れでしょう、カードの返却は私がやっておきますからシャワーでも浴びてすつきりして下さいませ」

とはいっても、見た目と口調以外は組織一の良識人で常識人。気配りもあって本当に助かる。普段は残念な部分のせいで対象外だけど、見た目の若さと大人の心遣いのせいで、たまくに血迷って襲いたくなってしまうのよね。さすがに偽AIBOを押し倒そうとは思わなけれど。

それに、いまは……。

「貞操帯つきで？」

「失念してましたわ」

偽AIBOの動きが止まる。恐らくリアルのほうで頭を抱えてるのだろう。

「というわけで、鍵を返してほし……あ」

そういえば、木更ちゃんの魔改造が施されてたんだっけ、貞操帯。

「木更さんなら給湯室にありますわ」

鈴音さんはいった。

「え？ まだ起きてるの？ それに給湯室って」

「アシスタントを頼みましたでしょう。そしたら予想以上に小回りの利く方でしたので、普段私がしている雑用全般を教えてください」

いま、さらりと雑用を自分の仕事とか言っちゃってるけど、この人スタジオとしては副代表なのよね。

「そしていまは皆の夕食を作っておりますわ」

木更ちゃんの夕食かあ、そういえば炊事とか結構得意なんだっけあの子。まあ私は夕食に木更ちゃん本人を食べたいけど。

「あ」

私はハッと気づいた。

いまなら台所に立つてる彼女を後ろから襲って悪戯できるじゃない！

「じゃあ、顔を出してくるわ」

こうなったら居ても立つてられない。私は急いで給湯室に向かった。

「かゝすがゝのゝかゝゝはゝかわいいゝのゝかゝゝ」

木更ちゃんは、変な歌を歌いながら給湯室に立っていた。それで、「ぶほっ」

その歌の内容に私はむせた。

「かっちゃんはね。かすが様っていうんだホントはね」

しかし、幸運にも木更ちゃんは私に気づかず歌い続ける。つていきなりサツちゃんの替え歌に!?

「いいな〜いいな〜かすが様っていいな〜」

そしてまた別の替え歌に移行する。脊髓の反応するままに口ずさんでるのだろう。なんていうのかカオスとしか言いようがない。さすが様の顔も性格も知ってるものだから余計に。

しかし、炊事をしている木更ちゃんの後ろ姿そのものはとても天使だった。ロングヘアの見た目清纯美少女がベージュのエプロンを着込み、歌にあわせて体とかお尻が僅かに揺れ動いてるのだ。もうね、貞操帯で禁欲性格強いられてる身としてはたまらんわけよ。

私はしのび足でそーっと近づく。

「はあ、はあっ」

やばい私。興奮しすぎてキモい位に息荒くしてる。けど、仕方ないわよね? もうすぐ……もうすぐ目の前の女の子を毒牙にかけられるんだから。

とはいえ、蒸れに蒸れた私の股間も正直限界に近い。興奮しすぎて

さつきからえつちなお汁が大洪水だし、痒くて痒くて仕方ない所を発情のムラムラがダブルパンチで責めたてる。さらに尿意まで催してきたせいで、辛さのあまり意識が朦朧としてきた。

けど、負けられない。

せめて背後から木更ちゃんの胸をまさぐる。それだけでも完遂しなければ私のプライドが。

「I z y, K e e——!! も——く——」

木更ちゃんはまた別の曲を歌いはじめる。しかし、すでに私は彼女の歌に耳を傾け発音を聞き取るだけの余裕はない。いま私の脳裏で流れる幻聴は、某UC。ん？ 流れ変わったな。

そして。

一步、また一步、気づかれないよう細心を払い、私はついに手が届く位置まで接近できた。脳内BGMもちょうど完全勝利するタイミング。さあ、夜のライディングデュエル！ アクセラレ——。

「いくぜ K a s u g a M i n d !」

「ここでC l e a r M i n d ! ?」

私は反射で突っ込みを入れてしまい、

「え?」

「あ」

振り向く木更ちゃん。

その瞬間、私は限界に達した。

「あー…あー…あー…」

抑え込んでた防波堤が決壊し、一切の緊張が途切れ脳裏での盛り上がり併せて——失禁ア○メ！

「ア—ア—ア—ア—ア—ア—」

天を仰ぎ、私はひとりコーラスしながら腰から崩れ落ちる。ああ、おしつこでアソコを洗う刺激がこんなに気持ちいいなんて。

そのまま私は大の字で倒れ、白目を向きつつ床に聖水を施しビクンビクン。

「鳥乃先輩。いつ戻…っ、て……」

木更ちゃんの顔がみるみるうちに青く、そして真っ赤になる。

そして、おもむろにデュエルディスクを装着し《ハンマーシユート》
を握ると、

「き、きゃああああああああああああああああ!!!」

真っ直ぐ、私に振り下ろしたのだった。

MISSION 4ーレズとゲイとロリコンと巻き込まれしアイドル

私の名前は鳥乃トリノ 沙樹さき。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

——といつも名乗ってたけど。

「もしかして、私がレズ名乗るって、他のレズに失礼？」

なんて、弁当をぱくつきながら私がいうと、

「やつと気づいたの？」

対面の席で梓はいった。

昼休み。現在私たちは互いの机を連結させ一緒に教室で食事をしている。

貞操帯は《ハンマーシユート》で気絶してた間に、木更ちゃんに解除してもらった。曰く鈴音さんが頼んでくれたらしい。

おかげで気分はもうハッピー。次の日には学校サボって街へナンパしに行きましたとも。レズナンパしに逝て全滅きましたとも。

「じゃあ次回はレズですと名乗るのはやめたほうがいっつかあ」

「次回？」

「あー。う、うん」

解放感で浮かれてたせいだろうか。つい口を漏らしてしまい私は慌てて、

「今週末、一日バイトすることになってね。警備バイト」

「今月、厳しいの？」

「うん。レズ系のソープにハマっちゃって一気に」

「そっかー。今度パンの耳を分けてあげるね♪」

満面の笑みで割とのたまう梓。なんか今日は一言一言がキツいなあと思ったら、そういうえば生理の周期ど真ん中だっけ。

なお、ソープ通いしたというのは嘘。実際には木更ちゃん関連で立て続けに二度も報酬が入らなかつた為の金欠である。うん……木更ちゃんの依頼、無報酬で受けちゃったのよ。

で、私ちよつと事情があつて毎月ぶつ飛んだ額のお金が消えてくのよ。それがハングドで所属してる原因のひとつ。合法的な手段ではとてもやっていけない。だから、さっきのバイトつてのも本当はハングドで受けた依頼。

「それで、どうして今更突然そんなことを？ 普段気にしなさそうなのに」

と、訊ねる梓。私は笑顔で、

「そりやあ勿論……そういうことよ」

「また美少女絡み？」

「そ、グへへへ」

とはいつても、今回の目的は依頼人でも警備つていうか護衛対象でもないんだけどね。

「もう」

梓は一回すねたように言うのと、

「そんな笑いするから、おしおき」

と、梓は私の弁当から卵焼きをひよいぱく、から揚げも続けてひよいぱく。

「あああああ!!」

貴重なタンパク源が！

「梓く。なんてことを」

「だって、お腹がすいてたんだもん」

えつと今日の梓の昼食は。重箱の弁当に、購買で買ったやきそばパン、ジャムパン、フルーツサンド。K a s u g a y a カップ麺まで。

「え、この量を完食？ それでまた食べたらないと？」

「変かなー？」

正直変です。しかし、笑顔の梓にそんなこと言えるはずもなく、

「へ、変じゃないけど勘弁して。せつかく木更ちゃんが用意してくれたのに」

「え。木更ちゃん？」

「梓にも紹介したでしょ、最近知り合った後輩の子」

そうそう、木更ちゃんだけど某ゲイ兄弟共は安全でも次の刺客がい

つ狙ってくるか分からないという配慮で、いまま事務所で寝泊りして貰っている。もちろん形式上は住み込みのアシスタントとして。

最初決定を聞いた時、さすがに私も驚いた。確かにハングドはカオスな組織だけど、それは人が良すぎるだろうと。

しかし、蓋を開けてみると表稼業限定とはいえ木更ちゃんの参入は、貴重な雑用手伝いに鈴音さんが万歳、給湯要員の増員に深夜組が万歳、若い女の子の登場に男衆&私も万歳と士気向上効果が物凄かった。特に反応を示さなかったのはロリコンでエロゲーマーの増田くらいだったけど、そんな彼も深夜のホットコーヒー一杯で万歳勢に堕ちた。

そして、今日私がどうして木更ちゃんの愛妻弁当なのかというと、実は週末の依頼も関わってて。

——前日。深夜2：20

「え?」

私は目をぱちくりさせていった。

「私に指名で依頼?」

「そつ」

と、スタジオオミストの代表にしてハングドの司令代行、たかむら高村 きりこ霧子 (37) はビール片手にいった。

適当に切り揃えた感のあるセミロングの髪にドライな眼差し。黒のライダースーツに身を包み、胸の膨らみは全くみられないが、逆にそれが彼女のスレンダーで無駄のない肢体をより印象的に際立たせる。

鈴音さんと違いこちらは歳相応に熟し、というより格好良さの滲み出るアダルティな魅力をかもしだしてて、基本タチ専の私だけど、この人には関しては「抱きたい」より完璧に「抱かれない」かな?……中身を知ってさえなければ。

「いや鈴音から聞いたんだけど、アンタ任務失敗に加えあの木更の件無償で引き受けたじゃん。今月かなりピンチじゃないの?」

「まあ。だからこうして今日ここに居るわけです」

この日、私は少しでも賃金を稼ぐために普段は専門外の調査や支援

などの事務についていた。

今日、任務にあたってたのは、まさに目の前にいる高村司令直々、しかもパートナーに同じく鈴音さんをつけてという錚々たるメンバー。なお、任務自体は「デュエルギャングの殲滅」と数こそ多いものの他の構成員の手に余るようなものではない。スタジオミストのほうで入稿が終わったらしく、その打ち上げの肴に嫌がる鈴音さんを引っぱって討伐任務で出かけちゃった。そんな人間の下に動いてる組織なのだから、ハングドがカオスなのは必然というもの。

そんな周りの胃がやられそうな任務が終わり、増田と鈴音さん、そして私の三人で情報整理をした所、司令に呼ばれて現在に至る。

「って、もしかしてだから私に仕事回してくれるって、轟眞？」

「まあ、轟眞半分適材半分ってトコ？」

高村司令はいった。

「依頼内容は護衛。今週末、名小屋市クレイン公園にて襲撃が計画されてることを先の任務中に偶然確認したから、あなたには当日までに詳細を調べあげた後、警備スタッフに紛れて現場へ侵入、園内の無事を確保しつつ襲撃犯を未然のうちに潰して」

「ふんふん。……あれ？」

私は頷くも、程なくして違和感に気づく。

「その言い方だと、まだ他所から依頼が届く前よね？ どうしてそんな金にもならない慈善事業みたいな事を」

その件については、私も事務側で関わってた以上知っている。普段事務サイドにいる鈴音さんも初耳っぽかったし、間違いなくこの類の依頼はなかったはず。

「問題ないわ」

高村司令は煙草を一本啜え、

「これ、依頼人は私だから」

「え？」

司令からの!?

「私の娘のことは、少しくらい知ってるわよね？」

「まあ。……ジュニアアイドルやってるんですけどっけ？」

確か名前は高村^{たかむら} 苺^{いちじ}（11）。たまにテレビにも出演するので顔く
らいは知っている。洋服の下にボンテージを着用し鞭を振るうドS
系の我侭ロリお嬢様路線で売り出して、唯我独尊ってイメージが強
く残っている。

ぶつちやけ、レズだけどロリコンじゃない私にとっては、ただの悪
ガキだ。

高村司令……いや、親馬鹿はいった。

「その娘が今週末クレイン公園でロケ」

「あ」

察し。

「けど、どうしてその護衛に私が適任なのよ。司令が直接行くなり他
の構成員だって」

と、訊ねると、

「いや私が行ったら娘の仕事に茶々入れそうで邪魔じゃん」

「……親馬鹿」

「それに鈴音とかも顔見知りだし苺に見つかりかねないわ。あの子目
星99%だし」

「それCCC版」

なお元々95%だった所、1クリ成長でカンストしたとか。

「あとウチの子可愛いから下手なメンバー送ったら性犯罪起こしそう
だし」

「デ○ノネタ言っついていい?」

「その点アンタなら幼女は対象外だから問題ないでしょ」

「この依頼断つちや駄目?」

正直、公園がどうなってもアイドルひとり死んでも構わない。いま
私、馬鹿親の娘自慢から逃げたくて仕方ないんだけど。

しかし、唯我独尊の遺伝子元。高村司令には知ったこっちゃなく。
「で、おまけにアンタあのテストメント兄弟牧師と友好的な関係で
しよ」

あちらからの一方的にね。

「アンタには、あのゲイ牧師に接触してそれとなく今回の襲撃に黒山

羊の実が関係してるのか探って欲しいのよ」

「断るって選択肢はないの？」

「ん？ 平社員同然のいち構成員にそんな権限があるとでも」

酷い！

いや、この組織は平気で権限あります。と言いたいけど、この司令は「なら今日からアンタ限定で権限ないことにするから」とか言っちゃう人だからなあ。

上がこんな感じで自由だからこそ、こっちも普段自由にさせて貰えるわけでもあるけど。

「まあいいわ。一応聞いておくけど」

と、司令は改まって、

「なにがそんなに不満なわけ、今回の任務」

「まず親馬鹿のモンペ級娘自慢に巻き込まれたくないから」

私は、はつきりといった。続けて、

「あと、私はレズだけどロリコンじゃないから。ぶっちゃけ護った所で夜のライディングに誘う価値もないガキの子守をしたって、ねえ」
「ちなみに美人キャスターとグラビアアイドルも共演」

「受けますー！」

さっすが司令。私にこんな最高のお仕事を与えてくれるなんてハングド所属してて良かったわ。

「了解。ってワケでいまから依頼書作成してアンタ指名で提出するか
ら、手伝いなさい」

「ピヤッハー。悦んでご主人様」

そんなわけで、ビールとつまみで自堕落な仕事開けを過ごす司令の手となり足となりで私は仕事をし、1〜2時間の仮眠を取るともう早朝。

朝のコーヒーでも飲むと給湯室へ向かった所、木更ちゃんが朝食の準備をしてて、今日は事務所から直接登校すると伝えると、

「でしたら、先輩のお弁当も一緒に詰めておきますね」

と、いつてくれたのだ。曰く、最近では朝のうちにメンバーの昼食も弁当の形で作り終えて登校してるらしく、ひとり分増えた所で手間

にさして問題はないのだそう。

そんなわけで、私は「じゃあ、遠慮なくお願いするわ」と、美少女の愛妻弁当持参で登校にありつけることができたわけだ。

「ふーん、あの子が作ったんだー」

話は戻って、梓との昼食の時間。

「今日、沙樹ちゃんどころなく嬉しそうだったけど。そういうことだったんだねー」

梓はなぜか半眼だった。って、どうしてそんな反応？

「ま、まあそりゃあ可愛い子の弁当だし嬉しいことは嬉しいけど」
すると、

「えい」

と、梓はまさかの右手に箸、左手にフォークで白米と焼き鮭まで取ってつちやった。私の弁当、これにて空。

「私の昼食」

がつくり頂垂れる私。一方梓は幸せそうに、

「美味しかったーごちそうさまー」

と、手を合わせてた。

「同志よ。それは恐らく嫉妬ではないでしょうか？」

と、ゲイ牧師の兄、ボブ・テストメントは私の前に一杯の紅茶とケーキを置いた。

私はいま、教会内の食堂にお邪魔している。学校の帰りにテストメント兄弟と連絡を取り、時間を作ってもらったのだ。

「嫉妬？」

私は聞きながら、ケーキをぱくり。ああ、昼食殆ど取られたから、胃が泣いて喜んでりゆううう。

「はい。聞いている限りではその幼馴染様、あなたが他所の女性の愛妻弁当で嬉しそうにしているのをみて気分を害されたように窥えます」

「いや、さすがに無いでしょ。その幼馴染、ノーマルよ？ それに、普段から他の女の子の話を性欲丸出しでしてるし」

「だからこそでしょ」

ゲイ牧師の弟、バイブル・テストメントはいった。

「普段、他の女の子のことを情欲で語るあなたが、情欲なしで他の女の子の話をしたんですよ？　木更さんが本命なのではと勘ぐられても不自然ではありません」

この兄弟、双子なだけあつて見た目も第一印象も全く同じながら、接してみると兄は理性的、弟は逆に情熱的と性格に違いがみられる。

「例え彼女がノーマルであろうと、おふたりは今日びまで姉妹のように過ごした幼馴染。恋愛感情はなくとも『あなたを取られる』危機感を覚えたのでしょうか」

「いや、そうなの……かな？」

梓が私に、ねえ。正直想像できない。梓はなんていうのか、白馬の王子様を待つてる夢見る乙女つて感じのイメージだから。

「仮に、他の女性の話をしたら機嫌が悪くなる事例が何度かあるなら、疑ってみたほうが良いですね」

「ん」

確かに、今日の私はレズソープに行つたと言つて、週末バイトで他の女狙いグヘへと行って、そして木更ちゃんの愛妻弁当。その度に梓は気分を害したように取れなくはない。

とはいえ、今日の場合は梓が生理の真つ最中。それだけで断定するには早すぎる。

「まあ、幼馴染の件はこれ位にしておきましょう」

私がひとり悩みはじめたせいだろうか、兄のボブは弟を制止するよううにいい、

「それよりも、同志には要件が別にあるのでは？」

「あ、そうそう」

助かったわ。ボブがいなかったらすっかり忘れる所だった。元々幼馴染の件は本題の前の雑談のつもりだったのに。

私は鞆から校内図書室で借りたモテる本やナンパテク本諸々をテーブルの上に出して、いった。

「今週末だけど、クレイン公園でグラビアアイドルがロケに来るらしいのよ。それで警備バイトすることになったんだけど、何とかしてお

近づきにならないかなって」

そんなわけで、現在私は必死に調査しています。

どうすれば美人キャスターやグラビアアイドルと夜のライディングデュエルできるのかを。

いやだって、先日のレズナンパではガチレズの人にも「ないわー」言われちゃったし、登校前に事務所のパソコンで調べたら私のレズ感って一般的なレズとズレてるっぼいしね。

「それは難しいですね」

しかし、ボブの第一声は非情そのもの。

「恐らくはロケのスタッフでさえ大半は挨拶止まりでしょうから、警備のバイト程度となると」

「百も承知よ。でも、レズには犯らなければいけない時があるの」

「それは分かります」

反応したのはバイブルだ。

「私も以前、公園のベンチに立ち寄った時思いました。ここには青いツナギで来て、ベンチで予備校生を誘わなければと」

続けてボブまでも。

「それでしたら、私にも経験がありますね。そう、あれは岡山の北部に足を運んだ時でした」

どちらも糞尿の臭いがしそうなエピソードなんだけど。なにこれ。

そして、ふたりは口を揃えていった。

『ですので、週末は予定を開けて可能な限り、あなたに協力致します』
「えっ？」

私は、一瞬頭が真っ白になる。そうだった、この兄弟同志への協力はどこまでも惜しまない人たちだった。

「では我々は悪役となりましょう。バイブル、こんなのはどうかな？」

当日、アイドルたちをブリーフと仮面姿で襲撃しよう」

「なるほど、ではその際にアイドルたちに群がるドルオタの殿方に一言伝えるとしようか」

『私はゲイヴンだ……それ以上でも以下でもない、ハメさせてくれ』
どうしてこうなった。

「どうせでしたら、オスカル兄さんも呼びましようか」

と、ボブはいった。……って、この人長男じゃなかったんだ。そもそもこの双子の兄もゲイなの？

なんか、どんどん話が勝手に進んでいく。しかも相当カオスに。

「待って。ストップストップ落ち着いて」

仕方なく、私は一回ふたりを制止し、

「ふたりがしなくても、実はすでに本物の悪役が紛れ込んでるのよ。そもそもバイトっていうのは方便で、実は警備員に紛れて行う護衛のお仕事」

「なんと」「そうでしたか」

やっと鎮まるふたり。って、本当のこと言って大丈夫だったのかな？ もし本当に黒山羊の実が襲撃犯で、私に「襲撃防ぎに来ます」と言わせる為の一芝居だったとしたら大惨事なんだけど。

もう、こうなったら黒山羊の実が無関係なのを願って、概要の一部を吐いてしまったほうが良さそうね。

「これは偶然掴んだ情報なんだけどね。どうやら今週末にクレイン公園を狙って襲撃をかける動きがあるそうなのよ。それで、ちょうどその日ロケがあるらしくてね。アイドルを狙ってのことかは不明だけど、当日までにどこが計画してるかを特定し、襲撃前にそいつらを潰して欲しいって」

『なるほど』

うなづくふたり。

「まあ、この際聞いてみるけど、ふたりには心当たりはある？」

「いや。申し訳ない」

ボブは首を横に振った。その表情をみるに、どうやらふたりの知る限りでは黒山羊の実関連でもなさそうだ。

「一応こちらでも調べてみましょう」

と、バイブル。

「いいの？」

「ええ。ただし、それでもし『手を引く』と伝えた場合は察して頂けるとありがたいですが」

つまり、その時は黒山羊の實の仕業なのが確定すると。本人たちは善意でやってるのだろうけど、こちらとしては思いがけず優秀なスパイを手にした気分。

「わかったわ」

私はいった。

「それじゃ、改めてどうしたらグラビアアイドルをホテルに連れ込めるか作戦を練らないと」

『本当にブレませんね、同志は』

後日。テストメント兄弟より「襲撃犯はフィール・ハンターズという組織らしい」と連絡を受けた。

——任務当日。朝9：20

『お待たせしました』

現地で一足先に警備をはじめると、私は後ろから声をかけられた。

「お疲れ。わざわざこなくてもいいのに……って、うげっ」

振り返り、そして私は濃ゆい「4人」の姿に思わず仰け反る。

「せっかくですので」「兄弟をお連れしました」

と、なぜか狩猟者の目でいったのはテストメント兄弟。このふたりは知り合いだからまだいい。しかし、

「あなたが鳥乃 沙樹さんですな。私は堀尾 オスカル。普段はゲイ専門のプロレスラーをしております」

と、意外にも紳士に挨拶するダウンジャケットを羽織ったジ○ツク・○姿の男に、

「初めまして、堀尾 小杉です。普段は田村崎研究施設という所で研究員をしています」

白シャツからボンテージが透けて見える、覆面姿のダー○ホーム似の男。

曰くオスカルさんが長男で、双子が真ん中、小杉さんが末っ子とのこと。

確かに、今日ここで任務に出ることは話した。テストメント兄弟が

好意で協力してくれ、この時間に来るとも聞いている。だけど。

「どうしてこうなった(どうしてこうなった)」

「ふむ。どうされましたかな?」

あまりの光景に目まいを起こしていると、突如オスカルさんが私の額に手を当ててきた。

「ぎゃっ」

思わず、私は飛び退くも、

「ふむ。熱はないようですね、恐らくはお疲れでしょう」

と、オスカルさん。まあ確かに疲れてなくはない。公園には早朝4時にきてるから、もう5時間半張り込んでるわけだし。

「それは心配だなあ、となると早々に獲物を捕らえて彼女に楽させてあげましょうよ兄さん」

小杉さんも濃ゆい服装に見合わぬ爽やかな物腰でいうと、

『そうですね』

テストメント兄弟はいい、そしてボブが、

「どうですか同志。いまの所、ファイル・ハンターズとやらの動きは」

「いまのトコこれ位」

私は、傍に置いてある防弾ボックスを開けて4人に見せる。中にはすでに解除済の時限爆弾が2〜3個。

「おおう」

驚くオスカルさん。

「まさか、あなたがひとりで解除したのですか? なんて危険な」

と、心配してくれる小杉さん。

「大丈夫よ。これがあるから」

私はデツキホルダー内のサイドデツキから《アポクリフオート・カーネル》を4人にみせる。どうやら木更ちやんがセキユリテイ解除に使ったのはこのカードの力らしく、前日に頼みこんで借りてきたのだ。

「ところどころで」

今度は私のほうから彼らに話しかけてみる。オスカルさんが見た目に反して紳士で、小杉さんも中身は好青年だったので、案外4人の

濃さに早く慣れることができたのだ。

「オスカルさんも小杉さんも『堀尾』よね？　なのにどうしてボブとバ
イブルはテストAMENTなの？」

するとボブが、

「元々私たちも堀尾姓だったのです」

続けてバイブルが、

「ただ、前の牧師様からお願いしてテストAMENTの洗礼名を頂きました
て、以後『堀尾』を省いて名乗っております」

「なるほどね」

しかし、いまは腹の底では黒山羊の実。ふたりが再び堀尾を名乗る
日も近そうだ。

「ところでして」

オスカルさんがいった。

「今回の獲物ファイル・ハンターズというのはどういう組織なので
しょうか？」

そういえば、テストAMENT兄弟も組織の詳細はあまり分かってない
らしい。

「簡単に言うと、ファイル・カードを手段を選ばず回収するハイエナ共
の代表格よ。日本中に支部が散らばってるけど、活動する方針や目的
がそれぞれ違ってるから支部同士で対立することも珍しくない。そ
んな組織」

で、調べた限り今回の相手は組織内でも末端に位置するような小規
模支部。すでに敵支部長の顔は特定済でテストAMENT兄弟にもフォ
トデータを送信してある。

名前は緒方おがた銃ライフル。年齢は30代前半。迷彩の軍服に眼帯、ベレー帽
姿の軍オタで、部下にも軍服を着せて、自分たちの支部を小隊と名乗
らせてるらしい。なお、これらの情報はすべてボブにメールで送信済
だ。

「うーん、トップの顔は覚えてるけど、もう少し情報が欲しいですね」
と、小杉さんがいうので。

「じゃあ捕虜捕まえとくっ？」

私はいった。

『え？』

4人が聞き返す刹那、

「うわあああー！」

私たちの背後。雑草の影に隠れた位置から男の悲鳴が聞こえた。

4人が雑草をかきわけて確認すると、そこには実体化した《幻獣機テザーウルフ》の鎖で拘束された軍服の若者がひとり抵抗していた。

『これは』

訊ねるテストAMENT兄弟。

「この人、ずつとあなたたちを後ろから追跡してたのよ。撃ち殺すのは簡単だったけど、小杉さんの言う通り捕虜にしたくてね。テザーウルフでそーつと後ろから狙ってたってわけ」

そういつて、私は男の手から転げ落ちたライフル型の改造エアガンを拾い、

「命拾いしたわね。あなたがさっさと引き金を引くタイプだったら、今頃命はなかったわよ」

と、エアガンを小杉さんに投げ渡す。

「はい。研究施設にお土産」

「あ、ありがとう」

小杉さんはいった。私は続けて。

「そんなわけで、来てもらって悪いけど、フィールの扱いに心得のない人は正直邪魔なの。ボブとバイブルは戦力に数えてるけど、おふたりは」

と、伝えた所で。

「それなら問題ありませんな」

オスカルさんがいった。

そして、ジャケツトを裏返すと、一転して衣服と一体化したデューエルコートへと早変わり。

「僕も最初からつけるべきでしたね」

続けて小杉さんはシャツの内側からDEXALに出てるスカウターのような片眼鏡D・ゲイザーと

DEXALタイプのデューエルディスクD・パツドを出し、装着する。そして、

「元よりこういう場なのは百も承知。その上で私は女性を危険に晒すまいとこの場におります」

と、オスカルさん。

「鳥乃さんとは面識なかったし初対面ですけどね。僕はこれでもハンドの外部協力者なんですよ」

と、小杉さん。

「嘘……」

私は驚いた。主に小杉さんに。

「さて」「改めて二手に分かれませんか？」

テストメント兄弟がいった。

「二手に、ですか？」

訊ねるオスカルさんに、ボブは。

「はい。具体的には同志鳥乃と共に警備員に紛れて芸能関係者を護衛する組と、小杉と共に捕虜から情報を聞き出す組です」

「でしたら、私は鳥乃について護衛にまわりましょう」

オスカルはいった。じゃあテストメント兄弟はというと、

「では、兄さんは同志鳥乃についていてください。私は小杉と一緒に情報を聞き出します。『その体に』」

と、バイブル。……その体に？

(あ)

私は気づいてしまった。小杉さんとバイブルの股間がおつきしてること。

このふたり、拷問と称して犯る気だ。捕虜の若者と。

「わかりました」

ボブはいった。その顔はどこことなくしょんぼりしてるように見える。

「ボブよ。しょんぼりしてる暇はありませんぞ」

オスカルはそんなボブの肩を叩き、

「テレビ局のお出ましですな」

その言葉に、私もハツとなる。

いつの間にか公園には数人のカメラマン、正規の警備員たち、そし

て美人キャスター、グラビアアイドルらしき美少女、そして高村 苺の姿がそこに立っていた。

「あつっーい。誰かスポーツドリンク買ってきて頂戴」

と、グラビアアイドルがいった。ハーフパンツにブラウス一枚という薄着もあつて抜群のプロポーションが目立ち、さらさらの黒髪ロングに清涼感を出すように仕上げられたナチュラルメイク。

「貴方、アタシに何いやらしい目で見てるのよ。さっさとドリンク買ってきて、じゃないと訴えるから」

グラビアアイドルは適当にスタツフを指さし、脅す。間違いない、この人は天狗鼻もいい所な性格ブスの勘違い女だ。いいねいいね、その鼻ヘン折りながらベッドの上で飼育するの大好きよ私。

「あー嫌だ嫌だ。あんな風に他人をパシって何様のつもりなのかしら。ねえ、監督さん」

と、いったのは美人キャスター。七三分けのショートヘアに白を基調としたシャツとフレアースカート姿で接しやすそうな外見を取り繕ってるけど、こつちはこつちで他人を蹴落とし搔き分けて進む野心と腹黒さを隠しきれてない。事実撮影監督に猫撫で声で媚売ってるし。

まあ私は大好きだけどね。もしここがフィールを用いた戦場になつたら真っ先に自分が生き延びることを考えて私みたいに護つてくれそうな人に媚を売る。フィール・ハンターズを利用して私に媚びて貰おうかなハアハア。

「こらこら、ふたりとも。苺ちゃんが文句ひとつ言わないのに、なに大人のがぎやーぎやー言ってるんだ」

しかし監督は美人キャスターの誘惑に目もくれず、大人しく出番を待つ苺ちゃんを指してふたり窘める。

『チツ』

直後、ふたりが同時に舌を打つのが見てとれた。

で、ここで苺ちゃん。

「でも確かに暑いことは暑いよねえ」

なんていうと、ポケットからスマフォを出して、

「監督？ 収録って何時からだっけ？」

こうしてリアルで見ると、司令が親馬鹿になるのがわかる。確かに可愛い。

蠱惑的でかつ生氣に満ちた勝気な瞳。ケアの行き届いた長い髪。母親譲りのスレンダーな肢体はシェイプアップで魅力が上乘せされ、パンクロックなゴスロリという今日のチョイスも妙に似合っている。

「10時からにしようかなって思ってるよ。何か用事？」

「そ、なら間に合いそうね」

苺ちゃんはスマフォをしまい、

「ちよつと自販機でジュース買ってきてもいい？ スタッフをひとり荷物持ち兼ボディーガードにつけたいんだけど」

「あ、じゃあ僕が」

若く冴えない顔した男が挙手した。さつきグラビアアイドルに指名された男だった。

「一花ちゃんにドリンク買って来いと言われてますしね」

しかし苺ちゃんは、

「駄目」

と、一蹴。

「あなたは今から機材する点検する仕事があるじゃない。撮影を遅らせる気？」

「い、いえ」

引き下がる冴えない男。

「いーじゃない少しくらい遅れても」

しかし、そこでぶーたれるのはさつきのグラビアアイドル。確か一花ちゃんだっけ？

「それに、こいつにとっても私たちにコキ使われるほうが幸せでしょ。ねえモブ夫くん」

恐らくモブ夫つてのは本名じゃないだろう。うわあ、酷い有頂天ぶり。性的に心折ってやりたい。

「ははは、ソノトオリデス」

モブ夫(仮)もモブ夫で逆らえないのだろう棒読みで話を合わせる。

テレビの裏って見るもんじゃないわねえ。

「どうするのよ監督さん。一花ちゃんと『莓ちゃん』のせいで収録遅らせる気い?」

美人キャスター。さりげなく莓ちゃんの株も落とそうとしてるよ。ほんと狡猾。

そんな嫌なやりとりを莓ちゃんは見事にスルーし、

「確かあなた、撮影まで暇よね? ちょうどいいわ。来てくれる?」

と、スタッフの中からサングラスをかけた無骨なオッサンを指名していた。

「わかりました」

オッサンから許可を得ると。

「じゃあ、ついでに一花の分も買ってくるわ。遅れても本番10分前には戻るから」

と、莓ちゃんは輪から離れ、オッサンを連れて移動を開始する。

(あれ?)

オッサンが私の前を横切った時、何だか妙な感じを覚えた。

スタッフにしては妙にガタイが良く、サングラス越しに凍えるような眼力を放っている。とても堅気とは思えない。それに、あの顔どこかで見たような。

そんなオッサンが一瞬ニヒルな笑みを浮かべたのを見て、私は本能的に「やばい」と確信。

「ボブ?」

小声で私はいった。

「私はあの子を追跡するから、あなたは引き続きテレビ局を監視して。オスカルさん、ついてきてくれる?」

『わかりました』

ふたりが答えると、その横で小杉さんとバイブルが、

「では僕たちも拷問を開始しましょうか」

「そうですね」

いつの間にか軍服の若者は本物の縄と猿轡による亀甲縛りで拘束され、うーうー唸ってる。

と、笑った。

「そいつなら今ごろトイレで寝ているだろうさ」
「!?」

奴の言葉がなにを意味してるのか悟ったのだろう。苺ちゃんの顔が蒼白になる。まあ、命はないだろうね名前的に。

「あなた、目的は一体何なの?」

「これから死ぬ者に教えると思うか?」

奴は懐から銃を取り出し、いった。

「……冥土の土産って言葉があるでしょ」

自分も命を狙われてると知り、恐怖に唇を、そして全身を震わせながら。

普通の人なら腰を抜かすなりパニックを起こすなりして命乞いをしそうな所を、苺ちゃんは必死に踏みとどまり、立ち向かっている。

「勇敢だな」

奴はいった。私も同意だった。

「貴様の度胸に免じて教えてやる。俺の目的は……」

「あなたの目的は……」

勿体ぶるように数秒の間を開け、奴はいった。

「貴様のカラダだ。ハメさせてくれ」

「はいアウトー」

私は咄嗟に駆け出し、苺ちゃんの盾になりながら奴のサングラスと銃目掛けてそれぞれ弾丸を1発ずつブチ込む。

今回もフィールでコーティングしたそれは、見事に奴の銃を弾き、しかしもう片方の弾丸は、本当は目玉一個潰したかったものの回避行動を取られ、残念ながらサングラスを破壊するだけに留まった。

そして、奴の素顔が露になり、

「あ」「お」

私、そしてオスカルさんは同時につぶやいた。

だって、だって。

そこにいる変態ロリコンレイパーさん、今回のターゲットおがた緒方ライフ銃
だったんだもん。

「貴様。どこから銃を、いやどこに銃を隠し持っている」

レイパー緒方は怪訝そうな顔していった。

「さあね」

私は、手首の煙を払う。

「迂闊だった。まさかNLTナルツに計画が知られてたとは」

おろろ？ おろろ？ もしかして私を治安維持組織NLTの構成員と勘違いしてるっぽい？

するとオスカルさんが、

「おや、確か鳥乃さんの組織はハニー」

言いかけた所を、私は人差し指を立て「しーっ」する。勘違いしてくれるなら、してくれたほうがこちらとしては都合がいいのだ。

というよりも何だかんだいってフィール・ハンターズは桁違いに規模の大きい組織。因縁を避けれるなら他所を売つても避けたほうがいい。

「だがしかし、こちらも小隊の総力をあげて予てより計画していたアイドル集団もつこり計画、貴様らの安い正義感で潰されるわけにはいかない！」

ド真面目な顔で言い放つレイパー緒方。って、そんな計画だったの!?

もうね、一見かつこよく聞こえること言ってるのに、内容があれだったり、股間がおつきしてて色々台無しよ。

(しかし)

アイドル集団もつこり計画。もしこれに協力すればあのグラビアアイドルも美人キャスターも犯りたい放題できるんじゃない。いやだけど、男も一緒かあ。究極の選択ね。

なんて一瞬迷ってる隙に、私のデュエルディスクはレイパー緒方によって強制デュエルモードへ移行されてしまう。

「NLTよ。ここは正々堂々デュエルで決着をつけよう。命は頂かない、しかし負けたほうは部下協力者一同速やかに撤収して貰う」

レイパー緒方はいった。……あれ、これってもしかして。いいこと思いついた。

「いいわ。ただし、ただ撤収するだけじゃ面白くないわ。条件を変更させて貰ってもいい?」

「言ってみろ」

「私が負けたら、生殺与奪に抵触しない範囲であなたの計画に協力してあげるわ。……もちろん、苺ちゃんの初めてもあなたの物よ」

「え……。……。ちよつと、え!」

苺ちゃんが数秒遅れて反応する。どうやら私という助け船が入ったことで緊張の緒が切れて放心状態に逆戻りしてたみたい。

「ちよつと、勝手に決めないですよ。そっちのロリコンもそうだけど、アంతも一体、それにNLTって?」

その混乱した様をみるに、苺ちゃんは母親から“こつち側”の世界を知らないみたい。まあそうだろうね、この私ですら知らないなら知らないほうがいい世界って思ってるくらいだし。

だから、私はいった。

「ん? ただの警備員のバイトだけど? 区域内で騒動が起こったんだから、仕事だし動かないとね」

「……。そう。警備員なら仕方ないわね」

あれ? てつきり興奮してる手前「お前のような警備員がいるか」ってツツコミ入ると思つたのに。銃弾だって撃つたしね。

どうやら苺ちゃんは、この歳ですでに自分が踏み込んでいい境界線をわきまえてるらしい。さすが回避99%。

「だけど人の貞操を勝手に差し出さないで頂戴。警備員にそんな権限はないでしょ!」

「いや、あのね」

とはいえ、命の危機に冷静を欠いてるのは間違いない。私はいった。

「いちいちツツコミ入れてる暇があるなら、私がロリコンと対峙してる間にさっさと逃げたらどうなのよ」

「え?」

「オスカルさん、苺ちゃんをロケ地まで護衛してあげて。ついでに途中、もう片方の自販機に連れてってあげると嬉しいわ」

「承知した」

オスカルさんは飛び出すと、筋肉質の巨体で苺ちゃんを覆うようにし、

「さあ戻りましょうぞ」

と、苺ちゃんを誘導する。

苺ちゃんは、一回こちらを見るも、素直に従い、何もいわずこの場から離れてった。

「兎も角にも人命優先、ということか」

辺りが落ち着いた所で、レイパー緒方はいった。

「そういう事だろう。撤収では面白くないから協力するというのは方便。己の部下・仲間を撤収に巻き込むのを防ぎ、協力するといいながら、その実彼女らが殺害されないよう監視を続ける。といった所か」
「半分大正解」

私は彼の推理にこう返す。

「真の目的。それは全責任をフィール・ハンターズに押し付け、公然と美人キャスターとグラビアアイドル相手に3Pレイポウ。私、レズなのよ」

「貴様。……NLTではないな?」

「あ」

バレた。しまった、NLTのフリするなら終始真面目にしないといけなかったんだった。

「そして趣味嗜好から察するに、恐らく貴様はハングド一の性犯罪者

“レズの肌馬” 鳥乃 沙樹と見受ける」

「なにその二つ名。大正解だけど」

私もいつの間にか知られるようになったのね。性犯罪者扱いだけど。

「ともかく、俺のやる事は変わらない」

私がNLTじゃないと知ってなお、レイパー緒方はデュエルディスプレイを構え、いう。

「俺の情報においてハングドは性癖も仕事の質も変態級、となるなら我々に対峙するなら脅威以外他にない。貴様にはここで任務失敗の

引導をくれてやる」

「ま、そうなるわね」

私もまた、デュエルディスクを構え。

そして、私たちは同時に叫んだ。

『デュエル！』

〃レズの肌馬〃 沙樹

LP4000

手札5

〃レイパー〃 緒方

LP4000

手札5

デュエルディスクのやつ。しつかりさっきの会話を聞き取って私の名前を二つ名表記にしやがってくれた。しかも、相手のほうは口に出してないのにレイパー表記。

「な、なんだこれはーッ！」

あっちのデュエルディスクも同様の表記になってるのだろう。タブレット画面をみて思わず叫ぶレイパー緒方。

「クッ、まあいい。先攻は頂いた。俺のターン！」

5枚のカードを手に、レイパー緒方はいうと。

「まずはこれだ。俺は《ヴォルカニック・ロケット》を召喚。この召喚が成功した時、効果で俺はデッキから《ブレイズ・キャノン・マガジン》を手札に加える」

レイパー緒方はデッキから目当てのカードを引き抜くと、そのままディスクに挿し、続けてもう1枚、計2枚のカードをセットし、

「カードを2枚伏せ、俺はターンを終了する」

相手のデッキは「ヴォルカニック」。この情報は増田と鈴音さんより既に仕入れてある。

「私のターン。ドロー」

私はカードを1枚引く。

あのデッキは、最近追加された《ブレイズ・キャノン・マガジン》によって、相手ターンで《ヴォルカニック・バックショット》を射出することが可能になっている。と、するなら。

「私は手札から《幻獣機テザーウルフ》を通常召喚」

とりあえず私は、今ごろバイブルと小杉に夜の強制ライディングを受けてるだろう男の拘束にも使った、1機の戦闘ヘリを呼び出す。

「《幻獣機テザーウルフ》の召喚成功時、私は幻獣機トークンを1体生成」

さて、幻獣機はトークンが存在する間効果破壊されなくなる効果を持っている。その効果をすり抜けてテザーウルフを破壊するタイミングは、このトークン生成効果にチェーンして放つ今しかない。

ここを逃せば、私の展開を止めるのは少々厳しいはず。

さあどう出るロリコンレイパー。

「チェーンはない。通す」

緒方はいった。

「了解」

トークンを除去しつつバックショットする手段があるのか、もしくはここでバックショットは勿体ないと判断した可能性もあるけど、私はレイパー緒方の行動を「バックショットは握ってない」と判断する事にした。

だったら。

「じゃあ、私は幻獣機トークンを特殊召喚するわ、攻撃表示で」

「攻撃表示だっつ」

驚くレイパー緒方。私はニヤリと笑い。

「そして魔法カード発動《強制転移》！」

「なにい!?!」

続けてさらにレイパー緒方は驚愕をみせる。

「馬鹿な、貴様のデータは過去数回取ってるが一度もそんなカードを使った形跡は」

「私、そういう相手を驚かせたくて週1回は5枚以上カードを入れ替えてるのよ」

まあ理由は冗談だけど、かく乱目的は本当。それに幻獣機はとても構築に幅があるから、弄るが楽しいのよね。

「そんなわけだから素直に《ヴォルカニック・ロケット》を頂戴？ 私も攻撃表示の雑魚トークンあげるから」

「要らん！」

とはいうものの効果の仕様上どうしようもなく、攻撃力1900の《ヴォルカニック・ロケット》が私の手に、攻撃力0のトークンが攻撃表示でレイパー緒方の手に渡る。

「バトル！ 《ヴォルカニック・ロケット》で幻獣機トークンに攻撃！」「くっ、永続罫《ブレイズ・キャノン・マガジン》！ 《ヴォルカニック・バレット》を墓地に送ってードローする」

やっぱり、手札に《ヴォルカニック・バックショット》はなかったらしい。

手札交換するレイパー緒方を他所に、早速相手から拝借したモンスターは幻獣機トークンを戦闘破壊し、ダイレクトアタック同然のダメージをレイパー緒方に与え、

〃レイパー〃緒方 LP4000↓2100

「続けて《幻獣機テザールフ》で攻撃」

と、連撃。これが決まれば勝利はほぼ目前だったんだけど、

「待て。俺は墓地の《ヴォルカニック・バレット》をゲームから除外し永続罫《ファイヤー・ウォール》を発動。そのモンスターの直接攻撃は無効だ！」

と、2枚あつたうちのもう片方の伏せカードで防がれてしまう。

「防がれたかあ、なら次はこれね。バトルフェイズを終了、そして魔法カード《融合》を発動」

「《融合》まで！ まさか、《強制転移》の真の狙いは」

私は、フィールドの《ヴォルカニック・バレット》と《幻獣機テザールフ》を墓地に送り、

「火山の力を宿しき弾丸よ、狼を模した戦闘へりよ、冒瀆なる力にて混ざり合い、邪悪なる不死鳥を降臨させよ。融合召喚！ 飛翔せよ、

レベル8 《重爆撃禽 ボム・フェネクス》！」

現れたのは炎の体に翼付きの黒き鎧、猛禽の顔と悪魔の顔のふたつを備えた炎族モンスター。その攻撃力は2800。

ところで余談だけど、このモンスターの融合素材は《起爆獣ヴァルカノン》と同じで、増田曰く木更ちゃんとのデュエルでこっちを出してれば勝てたと言われたのを思い出した。そんなボム・フェネクスの効果はというと。

「私はカードを1枚セット。そしてボム・フェネクスのモンスター効果！ 1ターンに1度、フィールド上に存在するカード1枚につき300ポイントのダメージを与える。現在フィールドにはお互いカードが2枚ずつ計4枚、1200ポイントのダメージをロリコンレイパーに与える！」

ボム・フェネクスは空高く飛び上がると、悪魔の口から4体の爆弾を抱えた火の鳥を吐き出し、レイパー緒方へと突撃そして爆発する。「ぐっ」

「レイパー」緒方 LP2100↓900

一瞬、レイパー緒方の周りを光のオーラが包むのがみえた。フィールドで防御行動を行ったのだ。

対しこちらはボム・フェネクスにフィールドを「全く」使っていない。警戒のしすぎか、結果的に相手はフィールドを無駄遣いしてしまったのだ。

「フィールドなしか……」

辺りを確認し、レイパー緒方はいった。

「戦いが甘いな。貴様が少しでもフィールドを込めてたら、モンスターが放った炎はいまごろ辺りの草木に燃え移り、俺は辺りの炎から身を護るため更なるフィールドを消費しなければならなかった」

「そんな事したら、悲鳴や騒動巻き上がって、あのアイドルたち口ケどころじゃなくなっちゃうでしょ」

もしそうになったら、夜のライディングに誘うこともできない。

「そこまで考えてたか。……」本取られたな。いや、二本か」

と、緒方はこちらを真っ直ぐ見据え、

「トークンを維持したまま《幻獣機ドラグサック》でくると思っていた

が、まさか《ファイヤー・ウォール》を読んで畳みかけてくるとは。おかげで俺は《ヴォルカニック・バレット》を失ってしまった」

「いや、さすがに《ファイヤー・ウォール》は読んでないんだけど」

「何!?! だとするなら何読みだ!」

「ん? あなたの驚く顔読み。自分のカードでボコスカされるって結構くるでしょ?」

呆然する緒方。私はついでに、

「それじゃ私はターンエンド。きやぴっ♪」

とかやっておいた。煽るの楽しい。

「……っ」

「つて、ちよつと! 少しはツツコミとか入れなさいよ。言ったこつちが恥ずかしくなるじゃない!」

前言撤回。私がギャースとばかりに文句を言うと、

「コホン。俺のターン、ドロー」

と、咳払い一回にレイパー緒方のターンが始まる。

「と、とりあえずアレだ。俺は《ファイヤー・ウォール》のコストを払う。このカードは自分のスタンバイフェイズ毎に500ライフポイントを払わなければ自壊するからな」

「レイパー」緒方 LP900↓400

と、なぜか動揺しながら、緒方は残り少ないライフを更に削ってカードを維持。なんて自殺行為を、と思ったら。

「そして魔法カード《マジック・プランター》! 《ファイヤー・ウォール》を墓地に送り2枚ドローする」

なるほど、そのための維持だったわけね。

「よし! いま引いた《ヴォルカニック・バックスショット》を墓地に送り《ブレイズ・キャノン・マガジン》の効果を発動する!」

ついに引いてきたわね。

「《ブレイズ・キャノン・マガジン》の効果でデッキからカードを1枚ドロー。そして《ヴォルカニック・バックスショット》が墓地に送られた時、貴女に500のダメージを与える」

しかも、「ブレイズ・キャノン」カードで墓地に行ったから。……っ

て、あれ？ こいつ私のことさつきまで貴様扱いじゃなかった？

「さらに《ヴォルカニック・バックショット》が《ブレイズ・キャノン・マガジン》によって墓地に送られたことで、デッキから《ヴォルカニック・バックショット》2体を墓地に送ることで貴女のモンスターをすべて破壊する。もちろん先ほど同様に2体分のバーンも入るぞ」

全身炎を纏った《ヴォルカニック・バックショット》3体がボム・フェネクス向かって飛び掛かり、映像的にはどうみても効果なさそうなのに、ボム・フェネクスは爆破四散、墓地へと送られ、

「レズの肌馬」 沙樹 LP4000↓2500

私のライフが合計1500削られる。

「まだまだ。《炎帝近衛兵》 召喚、そして効果によって墓地の炎族モンスター4体。バックショット3体とロケット1体をデッキに戻し、2枚ドローする」

これで再びバックショットはデッキの中。そして《ブレイズ・キャノン・マガジン》は墓地にある時、除外することでデッキのヴォルカニックを墓地に送る効果を持っている。増田曰く、こうやって自他のターン問わずバックショットによるリセットを使いまわしながらバーンで削り殺すのがレイパー緒方の基本プレイングだとか。

「《炎帝近衛兵》で貴女へダイレクトアタック。御受け頂こう」

下半身が大蛇の魔物が私に向かって襲い掛かり、その衝撃波が私の肌を刺激する。フィールを込めてきた！

モンスターはすぐ至近距離へと到達し、その蛇の胴で私の脇腹を薙ぎ払いにかかる。私は咄嗟にバックステップで避けつつ、それでも長い胴が私をとらえる前に手札を1枚、墓地へと送った。

「手札から《クリ瑞雲》を墓地に送って発動！」

すると、私の前に1機の偵察機が現れ、クリボーを落とす。

「この効果によって、私のフィールドに幻獣機トークンを1体生成し、《炎帝近衛兵》には幻獣機トークンを相手にダメージ計算を行って貰う。とはいえ、この戦闘では幻獣機トークンは破壊されず、当然守備表示で出すけどね」

クリボーは無数に増殖を繰り返しながら《炎帝近衛兵》の攻撃を

受け止め、上空から新たに出現したホログラムの偵察機がそのうち1体を吊るて回収すると、残りのクリボーは一斉に爆発。《炎帝近衛兵》を破壊はしないまでも弾き飛ばした。

「危ない危ない。この攻撃を受けたら次のバックショットでお陀仏だものね」

「貴女の喘ぎを聞きたかったが仕方ない。カードを3枚セットしてターン終了だ」

「ちよい待てコラ」

さつき聞き捨てならない事言わなかったかロリコン。

「まあいいわ。私のターン、ドロー」

前のターンにボム・フェネクスの火力を上げる為に伏せたカードが放置されたおかげで、既に勝利の方程式は出来かかっている。

とはいえ、相手の伏せカードは3枚。そのうち1枚は《ブレイズ・キャノン・マガジン》を墓地に送るカードの可能性が高いから、どうにかして二度目のバックショットに耐えるかしないと。

となると。

「魔法カード 《死者蘇生》。墓地の 《重爆撃禽 ボム・フェネクス》を特殊召喚」

これでまずは、ボム・フェネクスで墓地からの《ブレイズ・キャノン・マガジン》を消費させー。

「え?」

「え?」

なにこの反応。え、嘘、もしかして。

「そして、《重爆撃禽 ボム・フェネクス》効果発動」

“レイパー” 緒方 LP400↓0

終わったああああああああああああああああああ!!?

「え、嘘、待って? 伏せカード3枚もあつて対処手段ないの? 一体、何を伏せてたの?」

するとレイパー緒方はいった。

「《アヌビスの裁き》マジック・シンダー 《魔法の筒》そしてブラフ兼トークン破壊用の

《破壊輪》」

「……」

私は、そつと最初から伏せてた罨カードに心の声で告げた。
出番なかったわね。《超音速波》。

デュエルで負けたほうは、一度ファイル残量が一気にゼロになる。
これで緒方はアイドルを襲うことが困難になった。いや、素で鍛えてるだろうし改造エアガンもあるので強行に出るのは簡単だろうけど、警察でも取り押さえられる程度には落ちた。

私は、自分の片腕とボム・フェネクスを緒方へ狙いを定め、いった。
「じゃあ約束通り部下もろとも撤退してもらおうわよ」
「……フンッ」

緒方は悔しげに顔を歪めるも、すぐ鼻を鳴らし、
「果たしてどうかかな?」

「どうということよ」
「今から撤退指示を出した所で、すでに公園は俺の小隊たちの慰安施設と化している。……周りをみろ」

言われて私はチラッと周囲をうかがう。この辺りが静かで、公園の外れもいいトコで中央の状況がうかがい知れない。だけど。

明らかに、警察が数人動いているのがみえた。警備員ではなく警察。
「もしかして!」

「そうだ。すでに『アイドル集団もっこり計画』は始まっている。いまから止めに入った所で時すでに遅しというわけだ」

「そんな……」
「じゃあ、じゃあ私の取り分は?」

「ふむ」
「そこへオスカルさんが、」

「ひとつお訊ねしたい。貴公の小隊たちは全員男ですか?」

「いや。女性も混じってはいるが、この作戦に参加しているのは全員男だ」

「なら問題ありませんな」

オスカルさんは、股間をおつきさせていった。

任務は満了。バイトの収入だって食費の足しと思えば十分過ぎる額が振り込まれる予定だ。けど、私の心は満たされない。

「どこで間違えた。どうしてもすれば、あの最高級の女体をゲットできたの」

空を見上げ、私はつぶやく。ああ、今日の空はどうしても忌々しい程に澄んでるの？

「私は飢えている！ 渴いている！ 女体に！ 私は！ 抱あく！！」

「何大声で馬鹿してるのよ」

突如、背後から女の子の声。

振り向くと、そこにはとつくの昔に帰ったはずの苺ちゃんが立っていた。一度着替えてきたらしく、カジュアルパンツスタイルにサンダラスといった服装に変わっている。

「よかった、まだ帰ってなかったのね」

「まあ、いまから帰る所だけど」

私はいつて。

「で、どうしたの？ 帰ったんじゃないの？」

「ちよっと用事を思い出してね」

「用事？」

すると、苺ちゃんはいった。

「朝はありがとう。おかげで助かったわ」

まさか、この子。

「それ言う為だけに引き返してきたの？」

「そうだけど？」

「好きものね、あなた」

「感謝もひとつ言わない思い上がりの天狗鼻にだけはなりたくないだけよ。実際、共演したふたりは牧師に助けられて感謝の気持ちひとつ起こさなかったしね。助けられて当然って態度。そんなの見たら逆にね」

牧師というのは、恐らくボブのことなのだろう。

「我儘で唯我独尊なDSお嬢様路線とは思えないセリフね」

「我儘路線だからこそでしょ」

苺ちゃんはいった。

「心から他人を見下し誠意なく接して、人がいつまで我俣に付き合うわけがないじゃない。TVの中でもプライベートでも我俣を通してふんぞり返るには、自分がどれだけの器だって正しく知って己の価値を常に高めないと。アイドルは消耗品だもの、下からどんどん新鮮で良質な新人がやってくるのに、一時の待遇で腹の底まで思い上がったたら来年の今ごろは『あの人はいま』よ」

私は思わず感心のため息を吐きそうになる。それはもう「アイドルにひたむきなんだな」ってレベルじゃない。現実を見据えその上で彼女は理想を追及している。私は彼女にそんなカリスマを覚えた。

まだ、小学生の糞ガキなのに。

「だから私は、ファンもスタツフも全力で大事にする。もちろんあなたのように縁あって助けてくれた人もね。だからこそ私の鞭には有難みがあるし、ファンは踏まれて感謝を言える。私がファンを見捨てないから、ファンも私を見捨てない。そして、彼らの声援を励みに私はこれから頑張つていける。……私さ、キャラ作りじゃなくて本当に我俣で唯我独尊が好きなのよ。だから、その為の努力は惜しまない、そんな自分らしい完璧主義者でいたいよ」

ああ。

ほんと、なんで今日の空は忌々しい程に澄けがれんでるんだろ。曇りさえも輝きに変える、まるで、目の前にいるガキみたいなね。

そういえば、あの時もジュースを買いに行った理由、ただ不信なスタツフを確認しただけじゃなくて本当はスタツフ全員分の水分を用意しに行つたんじゃないだろうか。「これだけ暑くて、誰かが倒れたりしたらたまらない」とかいつてね。

何となく、彼女ならやりそうな気がした。

「まあ、私の用事はそれだけ。じゃあ、私は先に帰るから、あなたも変な男に絡まれないうちに帰るのよ」

そういつて、苺ちゃんは背を向けて駆け出して行った。

口先だけ聞けば、憎たらしくふてぶてしい子供の言葉そのものだけど、彼女の信条を聞いた後だとそれが妙に胸に響く。

だって、彼女は「思い上がらず」そんなセリフを言える人間になろうとしてるわけで、それだけの努力を十二分にしているんだから。「全く。爪を煎じて飲みたいくらい、とんでもない子がいたものね」私はたぶん初めて子供に性欲を抱いたかもしれないなかった。

USUALLY―梓視点の「遊☆戯☆王THE H ANGS」その1

私の名前は徳光とくみつ 梓あずさ。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズで評判の沙樹ちゃんの幼馴染です。

「レズはホモっていうけど、あれ絶対違うと思うのよ」

ある日の週明け。

今日も席が後ろの沙樹ちゃんは妙なことを言い出します。しかも月曜の登校直後、さすがにちよつと辛いかもー。

「一応聞くけど、どこが違うの?」

とりあえず私はいつものように相槌を打つけど、たぶん。

「レズはあんな糞塗れでやらない!」

「例えが極端すぎるよー」

やっぱりこうなっちゃった。私、普段は天然担当とか言われるくらいで、ツツコミ役とか無縁なはずなのに。

「尿はまだいいのよ、私もカテーテルとか使って女の子の直腸に放尿したいって思ったことあるし」

「その時点で同類の自覚は?」

「ない!」

沙樹ちゃんは腕を組んで、うんうんと、

「私、上にも下にも飲ませたいけど飲まされるのはノーサンキューの攻め専だからセーフでしょ」

「アウトの上ってどういえばいいのかなあ?」

「アウトの上? 一周まわってセーフとか」

「じゃあもうアウトでいいよ」

だからその「つまり私もセーフなのよ」とばかりのドヤ顔やめてー。

「えー」

「えーじゃないよー」

私、そろそろ心折れそうー。毎日折れそうだけど。

「いや。これ本気だから、私なんてホモと比べたら月とすっぽんよ」

「沙樹ちゃんが月？」

「ホモが月。月経とかないけど」

そういうの、もういいよ。

「あいつらの○交なにあれ？ 『お前俺のケツの中でシヨンベンしろ』なんてまだ可愛いほうよ。ス○ト口で糞がドバーで塗りたくって茶色い○ーションで公衆トイレを清掃員さえ近寄らない魔境にして。……もうSAN値下がりそう」

げっそりした顔で沙樹ちゃん言うから、もしかしてと思って、

「もしかして、目撃しちゃったの？」

「週末のロケの裏側でね」

「うわー」

それはさすがに同情しちゃうよ。

「鳥乃、徳光、はよー」「沙樹ー梓ー、おはよ」「フツ…… Goodモルゲン、鳥乃に徳光よ。今日も忌々しき朝日が闇夜に生きる極死の英雄ーミッドナイト・ヘルブレイヴたるこの私を襲う」

そんな辺りで、後から登校してきたクラスメイトたちが私たちに挨拶してきます。

あ、最後の人は気にしないで。「英語とドイツ語を混ぜた我が挨拶こそ至高」とか言ってる人だから。沙樹ちゃんと同じくらい可哀想な人だけど、いつものことだから。

「おはよー」「おはよー」

そんなクラスメイトたちに、私と沙樹ちゃんは挨拶を返します。

ところで、まずは沙樹ちゃん続けて私の順番でみんな挨拶してるように、実は沙樹ちゃんってあれで結構人気があるの。

レズで変態で下半身に生きてる感じの子だけど、意外と快活で人当たりがいいって評判で。程良いさばさは系女子って評価も聞いたことあるくらい。

見た目だって、ポニーテールがチャームポイントの明るい顔つきにしなやかで健康的な肢体、バストも程ほどの大ききで羨ましい。私なんて無駄に大きいせいで男子の視線はすぐ胸にいくし女子はすぐ嫉

んでくるもん。

人氣がいい証拠に、実際に今日も。

「鳥乃悪い、科学の課題写させてくれね？」

と、そのうちの男子生徒が話しかけてきて、

「あ、じゃあ私逆に日本史やってないから交換ってことでどう？」

「それ午後の授業じゃないか。まだ十分時間あると思うけど」

「んーそんな時間あるなら梓と駄弁ったりクラスメイトと駄弁ったり、はたまた校内俳諧して可愛い女子視姦してたい」

「ホント欲求に素直だなお前、っていうか眺めるとかじゃなくて視姦かい！……まあいいけど。はいよ日本史のノート」

「交渉成立ね。はい、化学のノート」

なんて、課題の写しあいしちゃってたり、

「ねえ沙樹、私にもあとで科学のノートおねがぁい」

「ひゃっほい。いいねいいねその媚びた言い方、もう一声」

「おねがぁい♪」

「持つてけドロボー！ あ、花寺ごめん女の子優先」

「おゝい！」

女子生徒の露骨な色仕掛けに乗って、さつき渡したばかりの科学のノートを奪いその生徒に渡し、

「鳥乃。……おねがぁい♪」

『キモッ』

その奪われた男子生徒が声真似をし、私を除いた周囲全員に言われちゃう。内心、私もちよつと気持ち悪かったけどね。

「まあごめんごめん。花寺って数学も苦手だったでしょ。購買の焼きそばパンかあんぱんで手打ってあげるから」

「さりげに無償じゃないのな」

「百円玉ひとつで数学の単位に1ポイントなら安いもんでしょ」

「ホント遠慮のないな鳥乃は。了解りよーかい。昼休みにはどっちか確保しとくから、貸してくれ」

「ん。ほい」

「サーンキュ」

沙樹ちゃんから数学のノートを受け取る男子生徒改め花寺くん。

「まあさっきの花寺もキモかったけど、ああいう媚び媚び大好きな沙樹も十分キモいからね」

って、媚びた本人が言うと、

「え、嘘。さすがにその程度じゃキモくないでしょ」

「じゃあさっきの沙樹の反応を男子がやったら？」

すると沙樹ちゃんは笑って、

「あ、キモいわ。前言撤回」

そしてみんなが笑います。

気づけば、沙樹ちゃんは沢山のクラスメイトに囲まれてました。さっきまで私と喋ってたのに、いつの間にか私ひとり輪から外れてる感じで、なんだか疎外感。沙樹ちゃんは私だけのものじゃないって分かってるし、私自身そんなこと望んでないはずなのに。

沙樹ちゃんと私は、お互い物心ついた頃からいつも一緒でした。それこそ同じ歳だけど姉妹みたいに。

昔の沙樹ちゃんはいまよりずっと我侷で自己中心で凶々しかったかな。だけど、いつも私の傍にいてくれて。そういえば小学校の頃、私がクラスの男子に虐められた時、沙樹ちゃん私の代わりに喧嘩してくれたっけ。それで沙樹ちゃん私を護るためにクラスのガキ大将になって、逆らえなくしちゃったの。

やり方は横暴なことも多かったけど、沙樹ちゃんはいつも私の味方でした。

「(だから、かなー?)」

沙樹ちゃんを中心とした空間で私だけがハブられてるのは、なんだから凄く嫌なの。

何かないかな? 私はそう思いながらふと時計に視線を送って、

「あ、そうだった」

気づけば、もう結構な時間。私は急いで弁当と水筒を机に出して、「沙樹ちゃんごめん私朝食べ損ねてきちゃったから、早弁していいかな?」

「え?……うん、別にいいけど。予鈴に間に合うようにね」

「うん♪」

沙樹ちゃんから許可を貰ったので、私はクラスメイトたちに「ごめんね」と一言謝り、自分の机を沙樹ちゃんのと連結させてから弁当を開けます。すると沙樹ちゃんは「あれ？」って。

「白米だけ？」

弁当の中身は一面ご飯。だけど私は「ううん」と首を振って、水筒を前に出しました。

「これを上からかけるんだよ。ドバーって」

「ど、ドバー？」

どうしたのかな、突然顔を青くする沙樹ちゃん。カレーライスって嫌いだったっけ？

「だ、大丈夫か鳥乃」

花寺くんが聞くけど、

「う、うん。たぶ——」

私は水筒を開けて中のルーをかけます。真っ白だった弁当の中身はすぐ茶色一色に。美味しそう♪

「ぎゃあああああああご飯がスカ○口で犯されるううううおげええええええ」

突然絶叫そしてトイレに駆け込みだす沙樹ちゃん。

「え……う？」

カレーがうの付いた汚物に見えたんだって気づいたのは、カレーを完食して程なくでした。

「はい。沙樹ちゃん食べれそう？」

お昼休み。

今日は沙樹ちゃん、お弁当は持ってきてきてないみたいだから、私は購買で買ったパンをひとつ分けてあげることにしました。

現在、沙樹ちゃんはカーテンコールで囲った保健室のベッドの上で、布団を被ったまま半身起こした状態です。

「ありがとう、梓」

沙樹ちゃんは嬉しそうに受け取るけど、すぐ表情をなくして、

「……。みそかつ…サンド?」

「あれ? 沙樹ちゃんってみそかつサンド嫌いだったっけ?」

私の記憶ではそんなはずはなかったのに。

「くそ…みそ… ……サンド(♂)」

「ごめんね」

私はすぐパンを買い物袋に戻しました。体力つげなくちやと思つて選んだんだけど、今日の沙樹ちゃんは週末のトラウマでそれっぽいワードや光景に敏感すぎて駄目だったみたい。

「他には、何かないの?」

って訊ねる沙樹ちゃん。

「あ、あるにはあるけど……」

でも今日私が食べるつもりで買ってきたパンって、

「チョココロネ」

「とぐろ巻いて黒くてドロドロしてるのピュツて出る。アウト」

「濃厚クリームシチューパン」

「せめてビーフシチューだったら……あ、駄目だ茶色い」

「丸ごと一本バナナロール」

「今だけはバナナが男性器に見える」

「白子パン」

「直球すぎる無理!」

「カレーメロンパン」

「またカレー!!!」

分かってたけど見事に全滅。一応、あと一個残ってるけど、あれだけは。

そこへ沙樹ちゃんが、

「ん、あれ? 梓、さつきチラつと見えただけど、まだ一個残ってなかった?」

うわあん、見つかったちゃった。

「え、そ、そんなことないよ」

「動揺してるのが余計怪しいんだけど。だったら中身一度出してみてもいいわよね?」

「そ、それは……」

「梓のスリーサイズ、学校裏サイトにバラするのとどっちが希望？」

「や、やめてよー。そんな事したら私虐められちゃう」

「おおよ？ 余程自分のカラダに自信があると見える」

「もう沙樹ちゃんの馬鹿、意地悪」

仕方ないので私は買い物袋の中をベッドの上に全部開けます。中にはさっきのパン6種類の他にもうひとつ。

数量限定！サイコロフレンチ。

切り分けず型から出したそのままのサイコロ食パンを丸々1個使った超ビッグサイズのフレンチトーストが重量感たっぷりに布団の上を転がります。

「梓、これ……買ッえッたんだ」

買った、ではなく買った、という沙樹ちゃん。実はこのサイコロフレンチ。見た目に反して女の子でもペロリと食べれちゃうのと比較的安価な値段もあって、購買の目玉商品のひとつだったりするんです。

その上1日10個限定だから、授業が終わって真っ先に購買部に行っても売り切れの場合が殆どで。

「ねえ梓」

沙樹ちゃんの目がキラんと光った。い、嫌な予感が。

「それ、頂戴」

やっぱり。私は上目遣いで、

「は……半分なら」

「ううん、全部」

「だめええええっ」

私は両手でサイコロフレンチを抱え、拒否します。だって、だって、食べたかったんだもん。滅多に食べれないんだもん。

「私、誰のために保健室送りになったんだっけ？」

沙樹ちゃん痛い所を突いてくるけど、

「そ、それでも駄目」

私はぶんぶん首を振って、

「それに沙樹ちゃん、いま顔色いいもん。途中から授業さぼる為に休み続けてたんじゃないの？」

「……うっ」

その反応。やっぱり！

「こ、こうなったら」

沙樹ちゃんは、いきなりデュエルディスクを展開していいました。

「梓、久々にデュエルで決着つけない？」

「嫌。早くご飯食べたい」

即答しました。

「そんな。決闘者^{デュエリスト}がデュエルを断るなんて……」

わざとらしく「がーん」ってする沙樹ちゃん。

確かに、沙樹ちゃんとの付き合いでデツキは持つてるよ？ でも私、そこまでデュエル脳じゃないもん。同級生にもカミングアウトしてないライトユーザーだもん。

「それに私が勝ったら沙樹ちゃん何かしてくれるの？」

「心の童貞をあげる」

「いらない」

「ド○クエで『それをすてるなんてとんでもない！』って出るくらい貴重品よ。私の108番目の心の童貞」

「どこから突っ込んであげればいいの？」

「え!! 心の童貞じゃなくて処女が欲しいの？」

「そういう意味じゃないよ。それに処女なの？」

あんなに普段から下半身で生きてて。

「仕方ない、そんなに言うならこれ分けてあげるわ」

話を逸らした!?

「これって?」

なんだか衝撃の真実を有耶無耶にされた気がするけど、一応私は食いついてみます。

沙樹ちゃんが出したのは一枚のチケット。

『都市伝説〜ファイルとデュエルモンスターズ展〜』の最終日無料入場券。倍率高くて1枚しか入手できなかった正真正銘の貴重なアイ

テムよ」

……。……どうしよう。

実は私も1枚だけ持つてる、ううん。持て余してる、なんて言えない。

というのも、本当は2枚注文するはずだったの。ここの所沙樹ちゃんとは校内でしか会えてないから、久々にふたりで外出したいなあって。

だけど、その最終日は完全予約制、無料チケットは抽選式で、平日チケットなのに手に入ったのは1枚だけ。有料チケットは学生には高くて、どうしようかなって思ってた所だったんです。

「あれ？」

ふと、私は気づきます。

これって、チケットを2枚にするチャンスじゃないのって。

別に沙樹ちゃんからのアンティで手に入れたチケットで、沙樹ちゃんを誘ったらいけないわけでもないんだもん。

「……ゴクリ」

「お、まさか梓が食券じゃないのに食いつくなんて」

「酷いよ、沙樹ちゃん」

まるで私が胃袋で動いてるみたいに。

「さすがに吉○屋の牛丼並50円引きレベルでは食いつかないよー。特盛じゃないと」

「梓が思ってた以上に胃袋で動いてる件について」

どうしよう、何か言われちゃった気がする。

「もう。それよりデュエルするんだよね？ 早くしないとお昼終わっちゃうから、すぐ始めよ？」

って、なんとか私は誤魔化してみるけど、

「あ、うん。そうね……いまのやり取りの後だと異質の意気込みを感じるわ。時間の問題的に」

とかなんか変なことを言われます。それはともかくとしても、すぐにデュエルするって意図は伝わったみたいなので、私もデュエルディスプレイを装着。

オプション画面でソリッドビジョンを小型化。これでカーテン
レールの中でもデュエルができるはず。
そして、私たちは同時にいいました。

『デュエル』

暴食

LP 4000

手札 5

色欲

LP 4000

手札 5

とりあえず、私はいいます。

「沙樹ちゃん。デュエルディスクに名前チェンジして貰ってもいいか
なあ？」

「奇遇ね、私もいま確認取ろうと思ってた所よ」
ということに改めて。

粹

LP 4000

手札 5

沙樹

LP 4000

手札 5

今度はタブレット画面から直接名前を打ち込んだので、正常に起動
してくれました。

「あ、先攻♪」

デュエルディスクを用いたデュエルでは基本公平にランダムで先
攻が決まるんだけど、今回は私のほうに先攻がきてくれました。

逆に、私の手の内を知ってる沙樹ちゃんは「あ。やば」って顔をし

ています。

私は手札を眺めながら、どうしようか考えます。

うーん、あの手もいいしこの手もいいなあ、でも。サイコロフレンチとチケツトのために、やっぱり。

「じゃあ、沙樹ちゃんいくね」

「うん」

「ファイナルターン♪」

「ああ、やっぱり」

沙樹ちゃんがガクツと項垂れるけど、私は気にせず、

「まず私は手札の《ヘカテリス》を墓地に送って効果発動。デッキから永続魔法《神の居城―ヴァルハラ》を手札に加えて、そのまま発動するね」

《神の居城―ヴァルハラ》は私の場にモンスターがない場合に、手札の天使族を特殊召喚できる効果を持つてるの。そして、私が出すのは。

「《神の居城―ヴァルハラ》の効果。手札から《アテナ》を特殊召喚」
フィールドに降臨したのは、大きな杖と盾を装備した戦いの女神。

「そして《神秘の代行者 アース》の召喚。その効果で《創造の代行者 ヴィーナス》を手札に、さらに《アテナ》の効果も発動するね」

この《アテナ》ってカードは、天使族が召喚・特殊召喚・反転召喚された時に相手に600ダメージを与える効果を持つてるの。だから、

「《神秘の代行者 アース》が召喚されたことで、沙樹ちゃんに600ダメージだね」

「待って」

沙樹ちゃんは、手札を1枚墓地に送っていいいます。

「一応、手札の《幻獣機コウライデン》の効果を発動するわ。このターン、私は効果ダメージを受ける場合、代わりに幻獣機トークンを1体特殊召喚する」

《アテナ》が手に持つ杖から電撃を放つと、コウモリの特徴を持ったホログラムの航空機が現れて、その電撃を機銃で撃ち落とします。

「これで私は、このターン5回までならアテナバーンを防ぐことができらるってワケ。あー、手札にあって良かったわ」

ほっとする沙樹ちゃん。

「ふーん」

私は数秒ほど考えてから、

「でも、6回目からは《アテナ》の効果が入るんだよね？」

「まあそうね」

「だったら」

私は笑顔でいいました。

「12回アテナバーンすれば問題ないよね？」

「……」

あ、沙樹ちゃんの顔が青ざめてく。

ごめんね沙樹ちゃん。サイコロフレンチのために犠牲になってね。

「魔法カード《トランスターン》。このカードはモンスター1体をデッキの同じ種族・属性のレベルが1高いモンスターにチェンジするカード。私はフィールドの《神秘の代行者 アース》を墓地に送って、デッキから《創造の代行者 ヴィーナス》を特殊召喚。そしてアテナバーン」

「幻獣機トークン生成2回目」

「《創造の代行者 ヴィーナス》のモンスター効果、ライフを500

払ってデッキから《神聖なる球体》を特殊召喚。そしてアテナバーン」

「幻獣機トークン生成3回目」

「ヴィーナスの効果は回数制限がないよ。そして私のデッキにはまだ《神聖なる球体》が2体残ってる。ヴィーナスで2体目特殊召喚、そしてアテナバーン」

「4回目」

「そしてもう1体」

「5回目……って、もう終わった!？」

梓 LP4000↓2500

梓

LP2500

手札2（うち1枚は《創造の代行者 ヴィーナス》）

場・《アテナ（攻撃表示）》《創造の代行者 ヴィーナス（守備表示）》

《神聖なる球体（×3／全部守備表示）》

沙樹

LP4000

手札4

《「幻獣機」トークン（×5／全部守備表示）》

すでに私たちのフィールドはモンスターでいっぱい。でも、

「次からはダメーシだね。私はレベル2 《神聖なる球体》2体でオーバーレイ、2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚！ ランク2 《セイント・デクレアラ聖光の宣告者》！ そしてアテナバーン！」

「うわっ」

沙樹 LP4000↓3400

ついに沙樹ちゃんのライフを削ることに成功。私は続けて、

《セイント・デクレアラ聖光の宣告者》のモンスター効果。オーバーレイ・ユニットをひとつ使って、墓地のモンスターを1体手札に戻し、手札を1枚デッキに戻す。私は取り除いた《神聖なる球体》自体を手札、そしてデッキに戻すね」

《神聖なる球体》をデッキに戻すと、デュエルディスクは自動的にオートシャッフルするけど、私はすぐ《神聖なる球体》をデッキから抜き取って、

「そして、《創造の代行者 ヴィーナス》の効果でライフを払って再び特殊召喚。そしてアテナバーン」

梓 LP2500↓2000

沙樹 LP3400↓2800

「これでフィールドの《神聖なる球体》は2体だから、2体目の《セイント・デクレアラ聖光の宣告者》をエクシーズ召喚だね。はい沙樹ちゃん、アテナバーン」

沙樹 LP2800↓2200

「もちろん、この《セイント・デクレアラ聖光の宣告者》もオーバーレイ・ユニットの《神聖なる球体》をデッキに戻して、《創造の代行者 ヴィーナス》の効果で特殊召喚。アテナバーン」

梓 LP2000↓1500

沙樹 LP2200↓1600

「で」

「ここまでアテナバーンのサンドバックに徹した辺りで、沙樹ちゃんが口を開きます。」

「いままでの梓だと、この方法ならあと2回しかアテナバーンできなくて私のライフ削りきれないよ?」

あれ、さつきまで絶望的な顔してたのに。目が虚ろだったのに。もしかして演技?」

「さてこっからどうするの? もしかしてノリノリでアテナバーンやって手順間違えたとかじゃないわよね」

一転して煽りだす沙樹ちゃん。その様子だと、私に調子付かせてミスを誘う作戦……ううん、そこに賭けてみたい。確かに今までの私のプレイングだと、ここから《アテナ》の「場と墓地の天使族を1体ずつ入れ替える」っていうもう1つの効果でヴィーナスをアースにして1回、場の《神聖なる球体》とエクシーズして3体目の《セイント・デクレアラ聖光の宣告者》でもう1回で打ち止め。

だけど。

「大丈夫だよ沙樹ちゃん」

私は笑顔で返しました。

「えへへ、実はちよつと気づいちゃったの。このルートから更にもう少し多くアテナバーンする手段」

「え、このルートで問題ないの?」

「うん」

私はいつて、

「《アテナ》のもうひとつの効果を発動するね。この効果は《アテナ》以外の場の天使族1体を墓地に送って、《アテナ》以外の天使族1体を墓

地から特殊召喚する効果」

「そこは前と同じで」

「うん」

でも、ここから違うんだよ。

「私はこの効果で《セイント・デクレアラ聖光の宣告者》を墓地に」

「あ」

この手段は沙樹ちゃんも気づいてなかったみたい。びっくりする幼馴染を愉しみながら私は、

「そして、墓地から《神聖なる球体》を特殊召喚。そしてアテナバーン」

沙樹 LP1600↓1000

「《神聖なる球体》2体で3体目の《セイント・デクレアラ聖光の宣告者》をエクシード召喚。

アテナバーン」

沙樹 LP1000↓400

「そして、《セイント・デクレアラ聖光の宣告者》の効果で《神聖なる球体》をデッキに戻して、《創造の代行者 ヴィーナス》の効果で特殊召喚。アテナバーン・ラストシュート！」

梓 LP1500↓1000

沙樹 LP400↓0

最後のアテナバーンが沙樹ちゃんのライフを削りきる。良かった

あ、沙樹ちゃん相手に先攻1ターンキル成立。

「……」

沙樹ちゃんは、今度こそ本当に目を虚ろにしてみました。

「私が勝ったからサイコロフレンチは私のものー」

デュエルが終わり、ソリッドビジョンが解除されます。

私は放心してる沙樹ちゃんの目の前で袋を開け、サイコロフレンチに齧り付きました。

「ん〜程よく甘くて美味しい♪」

「私の……私のお昼」

恨めしそうに沙樹ちゃんはいいます。

「ごめんねー。他のパンなら食べていいから」

「その他のパンが食べれないからサイコロフレンチ一択だったんじゃない」

「あ」

言われて、ハッてなりました。本当に私、言われるまで全く気づかなくって。

私がいゆんってなると、

「何？もしかして梓の楽しさを悪戯半分で奪おうとしてた、とかと
思ってた」

「うん」

だって、本当にいつものノリだったんだもん。

沙樹ちゃんは乾いた笑みでいいました。

「まあ半分正解だけど」

「私の罪悪感が台無しだよー」

もういいもん。私は一気にサイコロフレンチに貪りついて、数分で
完食します。

「早っ」

驚く沙樹ちゃん。そこへ。

「失礼します。……あらっ？」

誰かが保健室に入ってきたみたい。カーテンコールで顔は見れな
いけど、あれは女性の声。それも以前聞いたことがあるような。

「あれ？」

すると、沙樹ちゃんはベッドから出ると顔だけカーテンの外に出
て。

「木更ちゃん？」

「あ、鳥乃先輩こちらでしたか」

ああ。聞いたことあると思ったら藤稔さんだったんだー。

「早朝に倒れたと聞いたのですけど、大丈夫ですか？」

「厳密には違うんだけど、まあうん。午後の授業には出れそうかな。
今からだと食堂も購買も難しそうだから、お昼抜きだけど」

「だと思いました。少しお邪魔してもよろしいですか？」

「ん。まあいいけど」

「では、失礼します」

と、藤稔さんが入ってきた。柔らかな微笑みと長い髪の似合う、清純そうな子。実は腹黒いってわけでもなくて、そんな子がどうして沙樹ちゃんと絡んでるのか不思議なくらい。

私はペコリと一回。

「こんにちは」

「あ、こんにちは徳光先輩」

藤稔さんはペコリと返すも、すぐ私のパンの入った袋を見つけて、

「あれ？」

となるのが見えたので、

「実は私もいくつか沙樹ちゃんにパンを持ってきたんだけど、見事に全部沙樹ちゃんのトラウマ刺激しちゃって」

て、私は藤稔さんに中身を見せます。

「変態糞ゲイヴンのくそみそ事件のね」

沙樹ちゃんが補足すると、藤稔さんは「ああ」と納得します。

「あれ、藤稔さん知ってたの？」

「はい。とても酷い光景を見た時、その日の夜に」

「そっかー」

藤稔さんのほうが先に、しかも当日に耳に入れてるんだ。ふうん。

「どうしたのですか？」

「ん、なんでもないよ？」

むしろ逆にどうしたの？

私がかよとんと藤稔さんに返すと、

「そうですか」

それ以上は何も聞かずに藤稔さんは沙樹ちゃんに向き合って、

「実は今日、ちょうどお昼を別に衝動買いしてしまって。私のお弁当、よろしければ食べて頂けますか？」

と、藤稔さんが出したのはひとつの風呂敷。中を開けると、ポリスチレン製の弁当箱がひとつ。先日沙樹ちゃんが食べてた彼女が作った弁当と同じ箱。

「え？ いいの？ ホントに？」

「はい。さすがにこれとK a s u g a y aカップ麺両方は胃に入りませんから」

と、藤稔さんはカップ麺をひとつ出していいました。

え？ 片方しか入らないの？ 藤稔さんってそんなに小食だったんだあ。

「じゃあ、ついでにデザートも貰っていい？」

「デザート、ですか？……今日は持ってきてはいませんが」

「ここにあるじゃない。ここに」

沙樹ちゃんは藤稔さんを指して、

「藤稔って確かぶどうの品種よね？ ちょうどベッドの上だしとびっきりのぶどうと昼に行う夜のライディングでも」

「お弁当、要らなかったみたいですね」

藤稔さんが弁当箱を下げると、

「ああ、ごめんごめん。普通に頂きます」

沙樹ちゃんは改めて弁当を受け取ると、がつつくように食べ始めました。

「ん、美味しい。ああ、胃が喜ぶ」

「お口に召したみたいでよかったです」

藤稔さんはほっとしたように言い、

「ところで、あのパンですけど残った分はどうされるのですか？」

「もちろんここで全部食べるよ？」

「え？」

藤稔さんは驚いて。

「徳光先輩、大食いなんですね」

「そんな事ないよー」

みんなから言われるけど、どうしてだろう？

「ところで鳥乃先輩。デュエルモンスターズ展のチケットありがとうございます
ごぎいます」

突然、藤稔さんがいったから。

「え？」

今度は私が驚きました。

「沙樹ちゃん、どういうことなの？」

もしかして私がアンテイで貰う予定のチケットって。

「あれ？ 徳光先輩にまだ話してなかったのですか？」

藤稔さんがいいました。

「鳥乃先輩、今週の水曜日に徳光先輩と私と三人で美術館に行かないかって計画してたんですよ」

「え、でも沙樹ちゃんチケットは1枚だけだって」

「無料」 入場券はね」

沙樹ちゃんはいいました。

「残りは自腹切って確保しましたともふたり分」

「嘘……」

確か有料って1枚6千円とか、前日までの4倍くらいしたはずなのに。

「まあ、実際に払うのは当日だけだね」

って沙樹ちゃんは言うけど。それでも1万2千円払うつもりだったってことだよ？ びっくり。

それに。

「沙樹ちゃん、デュエルモンスターズ展になにかあるの？」

「え、どうして？」

「だって、どうしてわざわざそんなに高いお金を払ってまで。それにメンバーだって、私と藤稔さんってあまり面識ないよ？」

「んー。まあね」

沙樹ちゃんは、ちよつと困った様子を見せた後、藤稔さんに、

「言っちゃってもいい？」

「私は構いませんけど」

「了解」

と、一回確認取ってからいいました。

「木更ちゃんさ、実は少し前に不審者に襲われて、いまは私の安全な知り合いのトコに匿って貰ってるのよね。そんな立場だからさ、ちよつと息抜きとか外の空気を吸わせてあげる機会ないかなって思ってた。そんな時、ある筋から無料招待券を1枚貰っちゃって。いい機会だか

らって誘ったのよ、1枚自腹で買うつもりで。で、有料チケットがアホみたいに高いのに気付いたのは誘った後」

「じゃあ、私も一緒なのは？」

「木更ちゃんの要望。私とふたりきりは身の危険だから信頼できる人をひとりつけてくれって。なら、私が一番信頼してるのって梓一択じゃない」

……。どうしてかな。納得からくる同情と、嬉しい気持ちと、寂しいような煮えたぎるような変な気持ちと、三つ同時に襲ってきてきちゃう。

確かに沙樹ちゃんと女の子同士ふたりきりでお出かけは間違いなく危険。たぶん安全なのって小学生くらいの子供か、もしくは私くらいじゃないかな？

そして、沙樹ちゃんは信頼できる人に私を指名してくれた。幼馴染だからだとは思うけど、それはすっごく嬉しい。でも。

無料券を前にして、沙樹ちゃんは私より藤稔さんを優先した。それが何だか、私よりあの子が大切って言ってるみたいで。私の特等席が奪われたような、そんな嫌な気持ちもすっごく強い。

「というわけでさ」

そんな私の心の内側を知らない様子で、沙樹ちゃんはいいました。「今週の水曜だけど、私に対する木更ちゃんの護衛、頼まれてくれない？」

なんて、ちよつとだけすまなそうに。

私は。

「……うん」

って、ほんの少しの間の後にいいます。

「鳥乃いるか」。約束のあんぱんと焼きそばパン両方確保してきたぞ」

花寺くんがやってきたので、この話は一旦お開きになりました。

沙樹ちゃんが変わっちゃったのはここ1〜2年のことです。

前々から同性愛者だっていうのは本人から聞いてたけど、昔はいま

ほど変態じゃなかったし煩惱欲望に忠実な性格ではあったものの、いまほど性欲一本じゃなかったはず。

ある日数か月間くらい行方不明な時期があつて、もう皆が生存を諦めた頃にひよっこり戻ってきてくれたの。だけど、その間に相当辛い経験をしたみたいで、何があつたのかはいまも教えてくれない。

ただ、戻ってきてからの沙樹ちゃんはすごい荒れてた。完全に自暴自棄になつて、人に暴力も振るつて、性的にも。それでも沙樹ちゃんは私にだけは危害を加えず味方でいてくれて。程なくして、開き直つたのか居直つたのか、次第にいまの変態さんになつてつたの。

あ、別人に入れ替わつた可能性はゼロなのは知ってるよ。実は、沙樹ちゃんには秘密だけど最近その原因知っちゃつたから。——あんなの、私なら立ち直れないよ。

そんな沙樹ちゃんは、いまでも私にだけは手を出そうとしない。たぶん、今まで通り私のことを大切に思ってるからじゃないかな、家族や姉妹のように。

だから、私だけは性の対象外。家族や姉妹を性的な目で見ないみたいに。その分他の人には言えないくらいディープな話を包み隠さず吐露してくれる。

それは、とてもうれしいこと。だって、沙樹ちゃんにとって私は特別つてことだもん。

でも、でもね。

実は「梓だけは女の子として見れないんだ」って言われてるみたいで、ほんのちよつとだけ辛かつたりします。

私はたぶんノーマルだから。この想いは恋愛じゃないけど。だけど、沙樹ちゃんの一番でいたい、沙樹ちゃんを誰かに取られたくない、私を見てほしいって気持ちは、たぶん誰にも負けないつもりだから。

「梓、帰ろ」

放課後。午後からは授業に参加してた後ろの席の沙樹ちゃんが、私の肩をトントンと叩きます。

私は振り返つて、

「沙樹ちゃん、藤稔さんと帰るんじゃないの？」

「ん、どして?」

「だって、あれだけ仲がいいんだもん」

本当なら、まだひとりには危険だとか言うべきだったと思うのに、出たのはそんな言葉。

「そう? ラブホ誘っても断られるんだけど」

「普通は断ると思うよ」

「ええ? 仲がいいなら夜のライディングだって」

「沙樹ちゃんの『仲がいい』の定義どれだけズレてるの?」

「まあ、それはそうとして」

と、沙樹ちゃんは改めて、

「今日はもう少し梓とじやれてたい気分なのよ。ベヒんもスバーガー奢るからさ」

もう。沙樹ちゃんはずるいよ。

今日の私、すっごく気が苛立ってたのに、変態な言動で振り回してからそういう言葉をかけて。

ここで機嫌直しちゃったら、さすがにチョロいかな?

でも、仕方ないよね?

ベヒんもスバーガーを奢ってくれるんだもん。

「じゃあ、ダブルもスチーズのオニポテセット、あと単品で……」

「え? ちよつ、梓少しはセーブしてくれると嬉しー」

「そうと決まったら沙樹ちゃん。早速レッツゴーだよ」

表情の消えた沙樹ちゃんを引っ張って、私はるるん気分で教室を出ます。

その際、扉の前で花寺くんが温かい眼差しで見送ってくれました。

「徳光、じゃあまた明日なー。鳥乃、ドナドナー」

今回は沙樹ちゃんが一番じゃなくて、私はちよつとだけ嬉しかったかな。なんでドナドナなのは分からないけど。

MISSION 4. 5―フィール・カードを護れ! 2 (幕前)

私の名前は鳥乃トリノ 沙樹サキ。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

――話は少し遡り、高村司令によりアイドル護衛の依頼を持ちかけられるよりほんの少し前。

現在時刻 23:10。この日、私は少しでも賃金を稼ぐために普段は専門外の調査や支援などの事務についていた。

「といっても、何もないんだけどね」

と、私は椅子にもたれながら半身伸びの欠伸すると、

「そう思う前に、ちゃんと手を動かして?」

アシスタントの女の子がペンを走らせていった。細身で小柄ながら私の見立てでは間違いなく着やせするタイプで、脱いだら中々のプロポーションを持つてそう。一度剥いで確認してみたいけど、残念ながら彼女は今年15になる中学生。宗教上義務教育以下は対象外(?)の理由で夜のライディングに誘うにはあと1年待たなくちゃいけない。名前は確か董すみれちゃんだったかな? セミロングの髪に控えめなフレアワンピースの、どこか憂いを感じさせる子だ。

まあ、実はあの子も高村司令の娘だから手を出したら殺されるんだけどね。

現在、ハングドは仕事不足なのにどうしてこうもスタジオミストは修羅場なんだという話題を構成員仲間たちと話してたのだ。

スタジオミストのアシしながら。

なお、木更ちゃんはお客様待遇の為、すでに休ませている。

「まあ、世の中を考えればハングドが閑古鳥なのはいい証拠じゃないかな」

増田がいった。ハングドの仕事がないせいとか、今日は彼も臨時アシスタントに参戦している。なお、現在の原稿はコミックL〇という成年向け雑誌に掲載するロリ物。

「うん。平和が一番、だよな？」

さっきの女性アシがいうと、

「いやそういう意味じゃなくてな」

と、否定する増田に、横から私が、

「まあでも平和が一番なのは違わないでしょ。私たちみたいな変態でキャラ濃すぎる人間は動いてくれないほうが世の中安心するんだから」

「あ……そういうことだったの」

と、董ちゃんは納得しつつ苦笑い。そこへ別の席で作業してた鈴音さんが、

「自覚してそれなのですから世話ありませんわ」

なんて言いながら背景の完成された原稿を何枚か私たちの席に置いた。

副代表だけあって、原稿作業の大半を水準以上にこなせる鈴音さんだけど、彼女は特に背景のスペシャリストだ。これは業界でも有名な話らしく、スタジオオミストの評判のひとつである細部に行き渡った高い画力は鈴音さんなしでは成立しないとされている。

もつとも、製作現場に携わる側としてはもつと別のことで鈴音さん必須と思われてるんだけどね。

「鈴音ー。冷蔵庫のレッドブル取って」

その原因筆頭である高村司令がいった。鈴音さんは困った顔で、「位置的に霧子さんのほうが近いじゃないですか」

「嫌、メンドい」

「まったく」

鈴音さんはため息一回に冷蔵庫へ歩いていった。そして中を確認して、

「霧子さん、レッドブル切れてますわ」

「じゃあ買ってきて」

当然とばかりに言い放つ高村司令。鈴音さんは、さすがに半眼で、「木更さんが作り置きして下さったお茶か水出しコーヒーで我慢してくださいませ」

「いや飲み飽きたし」

「少しは感謝というものを覚えてください」

「いや感謝はしてるってば。で、鈴音レツドブル」

「……」

鈴音さんは頭を抱え、

「私だってまだ作業が残ってるのに。ここで私が持ち場離れたらどうするつもりなのですか」

霧子さんは煙草をふかし、

「どうにもなんない。遅れた分だけ鈴音の負担が増えるだけ」

「嫌ですわ!」

「てか、駄々こねてる暇あったらさっさと行ったほうが得じゃん。早く用事済ませればアンタの負担も済むし。それとも私が行ってもいいけど、立ち読みで1時間は粘ってくるけど」

さすがにスタジオミスト代表が1時間抜けるのは作業遅れるレベルなんかじゃない。その間に高村司令なしで進めれる作業を済ませるって考えもあるけど、鈴音さんとはとにかく間に合う人なのだ。そんな作業、もう殆ど終わっている。

「もう分かりましたわ! 行けばいいのでしよう行けば」

鈴音さんは血涙で嘆きながら、ロッカーからバッグを取り出す。そんな鈴音さんに私はいった。

「お疲れ、鈴音さん」

「沙樹……」

「じゃ、私コーラね」

「沙樹までですか!?!」

同情でもして貰えたと思ったのかな? 嘆き悲しむ鈴音さん。すると増田も便乗し、

「なら俺はスポーツドリンクで。……君は?」

「え、じゃあミルクティーで……あ!?!」

つい言ってしまった董ちゃんは慌てて、

「わ、私は大丈夫だから……」

「もういいですわ。もうここまできたら3つも4つも同じですもの」

鈴音さんは疲れた様子で玄関のドアノブに手をかけ、

「あ、鈴音。ついでに玄関前のゴミ袋出しについて」

霧子さんまさかの追い討ち。私より酷い。

結果、鈴音さんはちゃんと買出し前にゴミ出しを済ませていった。それも、作業の邪魔にならない程度の掃き掃除と飲み終えたペットボトルの回収までして。

おかげで机の上が片付き、みんなの作業効率はグンとアップ。

「そんな風に雑用にも気を利かせ過ぎるから」

私は作り置きの水出しコーヒーをコップに人数注ぎながら思った。

鈴音さんってとにかく間に合う人なのよね。それも仕事に限らず雑用や経理にすべてに至って。背景描写の画力を除けばどれも特化してるわけではないんだけど、何でも任せられ、痒い所に手が届く。いや届きすぎちゃう。

だから、みんなついつい鈴音さんに甘えちゃうのよ私含めて。それがさっきの「もっと別のことで必須と思われる」部分。

実際、高村司令は鈴音さんをあごで使ってるし、便乗して私や増田もパシリに使ってる。だけど、誰ひとりとして彼女を本気で下にみたり嘗めてかかっている構成員はいやしない。

だって、みんな一度は彼女に相談に乗って貰ってるし、数えきれないくらい借りを作ってるもの。そもそもハングドやスタジオでの必要性は高村司令より鈴音さんと思ってる人多いんじゃないかな、高村司令が無茶苦茶に組んだスケジュールを調整・管理するのも鈴音さんだし、金銭の出入りも実質鈴音さん管理、高村司令の浪費や暴走を最後の一线でコントロールしつつ構成員の福利厚生に手をまわすのも鈴音さん。

私たちにとって、鈴音さんは給仕から副代表・秘書・会計まですべてこなす実質的な組織の裏ボスなのよ。

何より、ほんとハングドの常識人って彼女だけだし。仮に目の前の董ちゃんや木更ちゃんを含めたとしても。（特に後者は「MISSI ON2」でご存知の通り）

それから30分以上が経過し、

「すみません戻りましたわ」

と、鈴音さんが戻ってきたのと、

『終わったーっ!!』

パソコンからの入稿を終え、メンバーが一斉に叫ぶのはほぼ同時だった。

現在時刻23:55、締め切りが23:59なので何とかギリギリ間に合ったって所。

「間に合ったのですか。お疲れ様ですわあ」

そして、鈴音さんもまた修羅場からの解放をきいて心底ほつとしたようにいう。

「遅かったじゃん、なにかあったの?」

高村司令がいった。確かに、生真面目な鈴音さんがわざと時間を潰して戻ってくるとは考え辛いのよね。

「ええ、仕事に捕まってしまいました」

「仕事?」

「はい。入ってくださいませ」

誰かを外で待たせてるらしい。鈴音さんは戸を開けると、奥からひとりの女性が入ってきた。

「失礼する」

黒のロングヘアに凜とした風貌。長身で上からトレンチコートを羽織ってるも下はへそ出しのタンクトップで、割れた腹筋と豊富なバストのアスリートじみたわがままボディを見せつけてくれる。年齢は恐らく20代前半かな。まだ若いけど、学生ではなさそう。

「最大討伐対象発見」

高村司令がボソリといった。その瞳にはゆらめく闘志が濁って映る。そして、奥の指定席から立ち上がると、

「巨乳撲滅、氏ねえええええ!!」

と、いきなり客に殴りかかりだした。

「そうくると思いましたわ」

鈴音さんが《ハンマーシユート》を発動し振り被る。が、それより早く女性は一步前に出て、クロスカウンターで逆に殴りとばす。

「いふっ」

高村司令は背中から作業機に衝突し、反動で前方へヤムチャ倒れ。

「……。……………申し訳ありません、大丈夫でしたか？」

鈴音さんは、一度呆然と立ち尽くした後、女性に頭を下げる。

「問題ない。ハンドルの司令が一部の女を前にすると迎撃に走るのは有名だからな」

「寛大な配慮感謝しますわ」

鈴音さんはほっと胸を撫で下ろした。

高村司令の趣味は巨乳狩りである。

大まかな基準は目視と気分次第ながら大体Dカップ以上の女性を見つけると、司令は真正面から飛び掛るか、気配を消し背後から物音立えず近づいて奇襲をしかけようとする。とはいえ、大抵は怪我を負わせるのではなく背後から怨恨込めて胸をもぐ程度。私がいうのも変だけど、その辺の分別はできてるみたい。

鈴音さん曰く、本気で殺意を持つてるわけではなく、あくまで性質の悪いライフワークらしいのだけど。胸部の膨らみが皿ほどもない司令だし、たぶん過去に何かあったのだろう。

まあ、とりあえず私がすべきことは。

「すごいわね、司令を返り討ちにするなんて。事前に知ってたとはいえその様子だと初見でしょ？」

と、女性の前に駆け寄り、まじまじとそのえろい肢体を眺めつつ、「けど相当血の気が強そうね。どう？ 用事はあると思うけど、まずはその昂ぶりを静めてかない、ベッドの上で」

「その様子だと、貴方が鳥乃 沙樹か？」

「知れ渡ったものね私の名も。そ、大正解」

なんていって、私はおもむろに女性のおっぱい驚つかみ――。

「うん。ナイスおっぱい」

「天誅！」

――した所で、女性は私の脳天にげんこつ一発。

「あざっ」

私は殴られた衝撃であごから床に崩れる。な……なんて馬鹿力。

「おや、永上ながみじゃないか」

増田がいった。すると女性は、

「お、久しぶりだな。噂には聞いていたがやはりハンドに所属してたか」

「まあね」

「え、増田知り合い？」

たんこぶを撫でながら起き上がり聞くと、

「まあ。前の職場でペア組んでたんだ」

「そういえば、増田でこつちくる前何してたの？ 今更だけど」
すると女性こと永上さんは、

「刑事だ」

と、いった。

「え？」

予想を超えすぎた答えにきよとんとする私。永上さんは続けて、

「どたばたして自己紹介がまだだったな。私は警視庁特捜課の永上ながみ 門子かどこ。その増田とは以前までペアを組み、共に事件に立ち向かいあつた元相棒の関係にある」

『ええええええっ！』

室内に驚愕の声があがる。発してないのは当事者ふたりと、鈴音さん高村司令の計4人くらい。

増田が不満そうにいった。

「みんな俺のことどう思ってるんだよ」

なので、私たちは思い思いに、

「ロリコン」「エロゲ廃人」「性犯罪予備軍」

「おい」

増田はさらに不満気だ。

「とりあえず永上様お座りくださいませ」

鈴音さんが来客用のソファを指していった。

「すぐにお茶を用意しますわ」

「ありがとう」

永上さんがソファに腰かけると、

「悪かったわね、用件を聞くの遅れてさ。ウチのモンみんなカオスだから」

と、対面の席に司令が座りいった。

「いや真つ先に用件聞くタイミング消し飛ばしたの司令じゃ」

私はいうも、

「で、早速特捜課がウチにきた理由を聞いても？」

完全にスルー。

「ハングドに依頼したいことがある。それも緊急で」

「詳しく話を聞かせて？ 増田、鳥乃。録音と調査の準備お願い」

『了解』

指示を受け、増田は即座にノートパソコンを広げて司令の隣に座る。同時に私も録音機を起動。

永上さんはいった。

「ルートは不明だが、ある近辺のデュエルギャングがフィール・カードを手にしてしまったらしく、悪戯に力を行使して暴動を始めている。ハングドには、民間人に被害が及ぶ前に至急彼らを殲滅及び鎮圧して欲しい」

すると、司令は鈴音に買わせたレッドブルを飲みながら、

「なるほどね。特捜課が動けるのを待ってるのでは間に合わない」と

「ああ。しかも私たちでは鎮圧はできても殲滅はできないからな」

「ま、そういう意味では確かに私たちのほうが適任ね」

司令がうなづく。そこへ鈴音さんがお茶と茶菓子を持ってやってきたので。

「鈴音、早速だけど大急ぎで依頼書作成して」

「分かりましたわ」

うなづく鈴音さん。そこへ増田が、

「もう大体は済ませたけどね。いま立鈴音さんの苗字花さんのパソコンにデータ送ったから最終確認だけお願いしても？」

「助かりますわ」

鈴音さんは自分の席に戻り、パソコンをちよちよいと操作。程なくしてプリントを1枚永上さんの前に出し、

「こちらが今回の依頼に関する規約になりますわ。一度目を通して頂き、問題なさそうでしたら続けて値段の交渉に——」

こうして、増田、鈴音さん、高村司令3人による依頼の交渉フェイズが始まった。その間、私は少し暇になってしまったので木更ちゃんの寝室に堂々侵入しようかなと考えた所、

「……」

ひとり、眠たそうに首をこっくりこっくりさせる子を見つけた。例のアシスタントの女の子、董ちゃんだ。

私は鈴音さんが買ってきたミルクティーを彼女の前に置いて、

「董ちゃんて、確か今日ハングドは非番だったよね？」

「うん……」

董ちゃんは消え入りそうな声でうなずいて、

「原稿が終わったなら、お母さんか鈴音さんに家まで送ってもらはずだったんだけど……」

と、交渉に入っちゃった自分の母親をチラと見ながら。

「送ろつか？」

「え？」

「いやまあ私もあの交渉が終わるまで暇だろうし、何より可愛い女の子が辛そうなのにノータッチなんて無理でしょ。私レズだから」

と、私は高村司令に、

「司令、鈴音さん、私ちよつと董ちゃん家まで送ってくわ。任務開始までには戻ってくから」

そこでふたりは初めて思い出したのか、

『あ』

って、なって。

「じゃあ頼むわ鳥乃、そう高くは出せないけど一応依頼扱って事にしとくから」

つまり小遣い程度の金銭は発生すると。ラッキー。

「司令、助かるわ。じゃ董ちゃん行こう」

私は董ちゃんの手を引き、

「あ、うん。……じゃあ、私はお先に失礼するね。おやすみなさい」

董ちゃんは一回メンバーに挨拶してから、事務所を後にした。

既に0時を過ぎた深夜。繁華街の外れに位置してるせいか、外は明かりも車の通る気配もなく暗闇が広がっている。

「沙樹ちゃん、お家まではちよつと歩くけど大丈夫?」

董ちゃんはいった。私は笑って、

「大丈夫よ。車より早く移動するから」

「え?」

首をかしげる董ちゃん。私はデュエルディスクにカードを2枚読み込ませ、いった。

「召喚、《幻獣機レイステイルス》! そして装備魔法《巨大化》!」

私たちの前に一機のエイ型のステルス機のモンスターが出現し、《巨大化》によって実際の小型航空機程度のサイズに変化する。

「あ!?!」

ここで意図に気づきはつとなる董ちゃん。

私はコクピットを開けていった。

「じゃ、乗って」

「う、うん。じゃあ、お邪魔します」

おずおずとモンスターに搭乗する董ちゃん。とはいえ、

「中々浪漫でしょ、飛行機に乗って帰るって」

「うん……」

と、首を振る董ちゃんは、控えめな態度ながら興奮を抑えきれない。

私は「1年後だったら夜のフライディングできたのになあ」なんて思いながら、レイステルスを運転した。

董ちゃんを送り届け、同じレイステルスで事務所に帰還した私。

そこで見たのは、駐車場でまさにいまDデュエル機能を搭載したパイロットホイールに跨ろうとする高村司令と鈴音さんの姿だった。

「え、ちよつと待って司令どこ行くの?」

私は慌ててコクピットを開けふたりに訊ねると、

「何って任務に決まってるじゃん」

当然とばかりに言い放つ高村司令。

「いや決まってるって言われてもあなた組織のトップじゃない。鈴音さんどういうこと?」

さすがに動揺しちゃった私は、今度は鈴音さんに聞いてみる。常識人の彼女なら私の心情を察してちゃんと説明してくれるはず。

「あ、沙樹。霧子さんの暴走を止められなかった私を許してくださいませ」

鈴音さんは生氣のない瞳でいった。

「いまから私たちは、修羅場開けの打ち上げに行つてきますわ。あなたは直ちに事務所に戻り、支援に入つてくださいませ」

「……。……つて、いやいやいや待つて待つてちよつと。もう少し概要教えてよ」

アカン。鈴音さん心がポキポキに折れて説明能力が欠けちゃつてる。大体、司令が暴走し鈴音さんが止めに入るも失敗し巻き込まれたんだな、といったことは分かるけど。

「つてわけで、ちよつと行つてくるわ」

司令に至つてはこれ以上説明する気さえなく、エンジンをかけ走り出してしまふ。

「あ、待つてくださいませ。ごめんなさいですわ、余裕があれば移動中に通信で説明しますけど、無理そうでしたら増田さんより聞いておいてくださいませ。行つてきますわ」

そして、鈴音さんもそう言うてからDホイールで司令を追いかけた。

私は、ほんの数秒ポカンと立ち尽くすも、

「ただいまー」

と、事務所に帰還。

「おかえり」

パソコンに向かったまま増田がいった。

「早速だけど、永上からの任務がもう始まつてる。至急準備してくれ」
「あー。やっぱり任務つてあれだったのね」

見ると、すでに永上さんの姿はなかった。ハングドとしての内側を簡単に見せるわけにはいかないので、今日の所はお引取り願ったのだ

ろう。

と、思ったら。

「ああ、ちなみに永上は、マスク姿のナガカド仮面を名乗って現地で集合、加勢してくれるらしい」

「……………え？」

……………ま、まあいいや。

私もまた自分の席に座ってパソコンを起動した。「m o k k o r i」とパスワードを打って専用のプログラムを起動すると、鈴音さんを背後から追いかけた映像が映し出される。

「鳥乃 沙樹。いまから任務支援に入ります」

映像先とは無線マイクで繋がってる。私はマイク連結型のD・ゲイザーを装着していうと、

『鳥乃構成員からの受信を確認。よろしくお願ひしますわ、沙樹』

と、鈴音さんからの返事が届く。

『増田さんから話は？』

「まだ。現地で永上さんが加勢するって聞いたくらい」と、

『逆にそれこつちが初耳なんだけど』

と、高村司令から返事が。

「あ、悪い。言ってなかった」

増田はいった。鈴音さんは呆れた声で、

『次回からは情報共有をしっかりとお願いしますわ』

それに対し私は、

「私への概要説明を疎かにしたのは誰だっけ？」

『ゴフツ』

鈴音さんのDホイールが右に傾き、危うく事故になりかける。

「つて、おいおい大丈夫ですか鈴音さん」

増田がいうと、

『え、ええ。連日の修羅場と霧子さん相手のストレスで発狂寸前ですけど、何とかギリギリ踏みとどまっていますわ』

そこへ司令はしれつと、

『だからストレス解消に連れ出したんじゃない』

『素直に休ませてくださいませええええ』

無線越しに鈴音さんの嘆き絶叫が響き渡った。

「とりあえず増田、司令。一応どうしてこうなったのか概要を教えてください」

私が改めて訊ねると、司令は『ああ』と。

『いやマジで修羅場から生還した打ち上げに任務という肩書きの下、ギャングを殲滅してストレス解消しようってだけなのよ。他意はない』

「え、本当にそれだけで組織のトップが直々に動いちゃってるの?」

『ええ。阿呆らしいことに』

疲れ通り越して死にそうな声で鈴音さんはいった。

「少なくともうちのボスにとってはな」

と、増田も同意しながらいう。……ん? 司令にとっては?

「じゃあ司令以外にとっては?」

「相手はデュエルギャングとはいってもフィール・カードの持ち主。それを殲滅しろとなると、どう考えても多勢に無勢だ。となれば、それなりに多くフィールを持ち高い実力を持った精鋭が向かわないと数の暴力でじわじわフィールを消費させられ返り討ちになってしまふ。だから、非番のメンバーに救援を呼ぼうとしたんだけど」

『私が司令の権限で却下し、鈴音連れて今に至るわ』

司令は鈴音さんの前を走り、彼女に向けてグツと親指を立てる。

『ふ……フフフ……』

あ、やばい鈴音さんが壊れた。

「まあ、そんなわけだ。司令と鈴音さんならこれ以上ないほど問題ないいな」

増田は言いながら「そう納得しとけ」と目で訴える。ああ、鈴音さんと一緒に彼も「説得の末に心がポキポキ」なのね。

「霧子さん、確か先ほどストレス解消のために連れ出したとのたまわられましたわよね?」

って、なんて増田の話の聞いてる間に、鈴音さんいまにもDホイー

ルで司令にアタックでもしそうな程接近してるんだけど。

『いや、まあ、否定はしないけど』

と、司令はいいながらも速度を落とし逃げようとするけど、すぐさま鈴音さんも同じようにして司令を追いかける。確かにさつき鈴音さん壊れてたけど、想像以上にヤバイ状態だった。

明らかに危険な状態の鈴音さん。一体何をやる気なのかと思ったら、

『でしたら霧子さん、永上さんと合流する前に一度デュエルしませんか?』

『は?』

意外な言葉に、司令だけでなく私や増田もきよとん、としてしまう。

鈴音さんは続けて、

『スパーリングですわ。沙樹たちと違って私たちは毎度毎度出撃してるわけではありませんもの、いきなり実戦の前に一度肩慣らししたほうがいいのではないですか?』

『あ、ああそういえばそうね』

司令は怪訝な顔を残しつつも頷き、

『じゃあ、ちょっと付き合ってくれる?』 鈴音』

『分かりましたわ』

と、ふたりはDホイールに搭載されたデュエルディスクを起動しました。

私はどっと疲れを感じながら、

「増田。止めなくていいの?」

「緊急デュエル終了プログラム。いつでも起動できるようにしておく」

増田はいった。そして、もう諦めた様子で、

「普段限界以上に溜め込んでる鈴音さんが爆発したんだ。俺たちに止められるはずがないだろう」

高村 霧子

LP4000

手札5

立花 鈴音

LP4000

手札5

『先攻は頂きましたわ』

デュエルが始まった。鈴音さんはDホイールを走らせたままいうと、

『私はモンスターをセット、さらにカードを2枚セットしてターンを終了しますわ』

恐らくオートパイロットに切り替えてると思うものの、鈴音さんはDホイールを片手運転しながらデュエルディスク部分にカードを3枚差し込み、残りの2枚をDホイールのホルダー部に挟む。

そういった動作をモニターから確認した際、私は鈴音さんのフィールドに《スピード・ワールド―ネオ》が発動されてるのに気づいた。

Dホイールに乗って行うデュエルには、通常のルール以外に、Dホイールに内蔵されてる専用のフィールド魔法を用いて行う決闘疾走デュエルというものが存在する。《スピード・ワールド―ネオ》はその内の1枚であり、現状最も制約のないスタンダードな決闘疾走を行うためのカードだ。

例えば今回の決闘疾走ルールだと。

・レースのように同時にスタートし、デュエルの先攻後攻の決定権は指定されたラインを先に通過した者が取る。

・勝利条件は「相手LPを0にすること」「指定のゴールを先に通過すること」「相手のD・ホイールを走行不能にすること」とする。

・スピードカウンターの代わりにターン数を参照として「Sスピードスヘルp」魔法カードを使用できる。

・決闘疾走に命を賭ける伝説の痣を持つ者を5D'sと呼ぶこと。といった感じだったはず。いや、まあ最後のはあってもなくてもいいんだけどね。

「(あれ?)」

私はふと気づいた。ってことは鈴音さん、先に指定されたラインを

抜けたってこと？ 司令って確かバイク技術すつごく高いのに。

『私のターン、ドローするわ』

そしてその司令のターン。

『私はまず手札から《光波追走》フォロワー・サイファーを発動するわ』

司令がまず使ったのは1枚の永続魔法。

『このカードは、1ターンに1度、私が光波モンスターを召喚・特殊召喚した時、デッキから同名カードを1枚手札に加えるわ。続けて手札から《光波翼機》サイファー・ウイングを召喚。《光波追走》フォロワー・サイファーの効果でデッキから2体目の《光波翼機》をサーチ。そして《光波翼機》は私の場に光波モンスターがいるなら手札から特殊召喚できるわ。この効果で2体目の《光波翼機》を特殊召喚』

司令の場に、一気にレベル4のモンスターが並んだ。

『更に永続魔法《光波干涉》サイファー・インターファイアーを発動。そしてバトルフェイズ！

1体目の《光波翼機》でセットモンスターに攻撃』

2体のうちの1体が、鈴音さんのセットモンスターに飛び掛かる。裏側のカードのビジョンから機械武装した二足歩行のサイが姿を現し、モンスターの衝突を受け破壊される。

『セットモンスターは《TG ラッシュ・ライノ》。守備力は800ですから、攻撃力1400の《光波翼機》には敵いませんわ』

『なら、続けてもう1体の《光波翼機》で鈴音に直接攻撃。ここで《光波干涉》の効果発動、このカードは同名の光波が2体以上いるならその内1体の攻撃力をバトルフェイズ終了時まで倍にするわ』

《光波翼機》 攻撃力1400↓2800

ここでいきなり攻撃力2800でダイレクトアタック。しかし、鈴音さんは伏せカードを1枚表向きにして、

『通しませんわ。罨カード発動、《バトル・スタン・ソニック》！相手モンスター1体の攻撃を無効にし、手札のレベル4以下のチューナー1体を自分フィールド上に特殊召喚しますわ。私は《TG サイバー・マジシャン》を特殊召喚』

鈴音さんのフィールドに、鎧にもなりそうな機械のローブを身に纏った少年モンスターが出現し、《光波翼機》の攻撃が止まる。

『さらに、手札の《TG ワーウルフ》も特殊召喚。このカードはレベル4以下のモンスターが特殊召喚に成功した時、手札から特殊召喚できるカードですわ』

続けて、左腕が肩まで機械に変わった人狼が姿を現す。

『チツ、バトルフェイズは終了よ』

少し不機嫌そうに司令はいった。そして、

『まあいいわ。じゃ先にフェイバリット出させて貰うから』

え、ここです!?

ダブル・エクスポージャー

『私は永続魔法《二重露光》を発動しその効果を使うわ。同名モンスター《光波翼機》2体のレベルを倍の8に。そしてレベル8となった《光波翼機》2体でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！』

Dホイールで移動したまま、その前方に銀河の渦が出現すると《光波翼機》は靈魂となって取り込まれ、光の柱が夜空に伸びる。

『闇に輝く銀河よ。狩猟の鬼神に宿りて我がしもべとなれ！ 巨乳撲滅、慈悲はない！ エクシーズ召喚！ 殺れ、ランク8！ 《銀河眼の光波竜》！』

光の中から出撃したのは1体のドラゴン。その攻撃力は3000。つて、鈴音さん相手なのにその口上なのね。つと思つたら。

『鈴音。最初のレースで私から先攻をもぎ取つたり、私に1キルされないよう運命力を操作したり。使ったわねフィールを』

えっ!?

最初のレースを見逃してたのもあって、私が驚いてると。

『うん、彼女はほんの少しだけどフィールを使つてたよ』

と、増田がいう。

『ええ。私とあなたの実力の差は昔から開く一方、フィールを使わないと練習相手にもならないでしょう』

つて鈴音さんはいうけど。フィールを用い出した時点で、このデュエルは敗者のフィールが空になっちゃうのに。

「鈴音さん何やってるのよ。まだ本番前なのに仲間割れみたいなこと、らしくない」

私がいうと、

『仲間割れ、か。……なるほどね』

と、司令はつぶやく。そしていった。

『やっぱそういう事なのね、鈴音』

『ええ』

と、鈴音さんはうなづく。いや一体どういうこと？

「一応説明してくれないか？ プライベートならともかくいまは任務中だ。差し障りがなければ俺や鳥乃も事情を知る権利がある」

増田がいつてくれた。良かった、私も気になつてたし状況が意味フ状態だったけど上手い聞き出し方が浮かばなかったのよね。

『いいわ。じゃあ教えてあげる』

司令はいった。なぜか鈴音さんに敵意を向けながら、

『ゴイツは……立花 鈴音は。寝返つたのよ、巨乳派に』

「……へ？」「……へ？」『……へ？』

私たちは全員変な声をだした。増田も、そして当事者である鈴音さんも。

しかし、司令はスルーして、

『そして鈴音は、依頼に同行する口実を作つて私を外に連れ出し、助けが入り辛いライディングデュエルで私を始末しようとしてる。巨乳の狩猟者であるこの私を』

『い、いえちよつと待つて下さいませ』

鈴音さんは慌てて、

『どうしてそうなるのですか？ 確かにライディングデュエルに誘つたのは私ですけど、依頼に連れ出したのはあなたじゃないですか。それも強引に』

『黙つて、髪型だけ豪華な凡人』

ひ、酷い。

『思えば、そのデュエルを誘つた際の不可思議な態度。アンタがああ程度でキレた時点で察するべきだったのよ』

『ただの眠気とストレスと深夜テンションのトリプルパンチなだけですわ！』

たの!?

『■■■■ー、私ノ：ターン！ ですわ！』

そして、まともな発音を取り戻し、ぜえぜえと息をする鈴音さん。よかった、何とかバーサーカーから脱却できたらしい。

司令はほつとした顔で、

『やつと戻ってきたわね凡人』

『戻ってきた途端それですか!?!』

『いやあんな簡単にバーサーカー堕ちした裏切り者の小物なんて凡人で十分でしょ』

『ですから別に裏切り者でも何でも』

『ところで、「おれは しょうきに もどった」とか言わないの？ 立

花 カイン』

『もう裏切り者でいいですわー！ーっ！』

再び嘆き叫ぶ鈴音さん。不憫。

『とりあえず続けますわ。私は手札から《TG カタパルト・ドラゴン》を召喚、効果で《TG ストライカー》を特殊召喚ですわ！』

《TG カタパルト・ドラゴン》には、1ターンに1度、手札からレベル3以下の「TG」チューナーを特殊召喚する効果を持っている。

しかし、これで鈴音さんは一気に手札を2枚全部使い切ったことになる。さつきまでの鈴音さんを見たせいかな、何だかヤケクソに展開してるように見えたのは私だけ？

『いきますわ。私はレベル3《TG ワーウルフ》にレベル2《TG ストライカー》チューニングですわ！』

《TG ストライカー》の体が2つの光の輪に変わると、その間を《TG ワーウルフ》が潜る。ワーウルフの体は3つの光に変わり、輪と交わって強く発光した。

『リミッター解放、レベル5！レギュレーターオープン！スラストーウォームアップ、OK！アップリンク、オールクリアー！GO、シンクロ召喚！カモンですわ、《TG ハイパー・ライブラリアン》！』

こうして出現したのは、一冊の本を持った魔術師の姿。

『続けてリバーカードオープン！ 《TG X3—DX2》を発動しま

すわ。私の墓地から《TG ストライカー》《TG ワーウルフ》《TG ラツシユ・ライノ》をデッキに戻し、私はカードを2枚ドロースわ』

ヤケクソな展開に見えてそうでもなかった。鈴音さんはシンクロ召喚を利用して墓地のモンスターを肥やし、《TG X3—DX2》の発動に繋げてきたのだ。

『そして《TG サイバー・マジシャン》は、TGモンスターのシンクロ素材に使用する際、手札のTGを使うことができますわ。私はレベル1《TG ドリル・フィツシユ》にレベル1《TG サイバー・マジシャン》をチューニングですわ』

今度はサイバー・マジシャンが光の輪に変わり、手札から出現したドリル・フィツシユが潜って混ざり合う。

『リミッター解放、レベル2！レギュレーターオープン！ナビゲーション、オールクリアー！GO、シンクロ召喚！カモンですわ、《TG レシプロ・ドラゴンフライ》！』

立て続けに2度目のシンクロ召喚。そして、

『ここで《TG ハイパー・ライブラリアン》の効果発動。このカードは誰かがシンクロ召喚に成功した場合に、カードを1枚ドロースわ』

と、鈴音さんはカードを1枚引き抜く。

『まだまだいきますわ。私は《TG レシプロ・ドラゴンフライ》の攻撃力を1000下げ、手札から《TG ギア・ゾンビ》を特殊召喚。そしてレベル2《TG レシプロ・ドラゴンフライ》にレベル1《TG ギア・ゾンビ》をチューニング。GO、シンクロ召喚！カモンですわ、レベル3シンクロチューナー《TG デジタル・シードラ》！ハイパー・ライブラリアンの効果で1枚ドロースわ。そしてレベル2《TG カタパルト・ドラゴン》にレベル3《TG デジタル・シードラ》をチューニング、GO、シンクロ召喚！カモンですわ、レベル5シンクロチューナー《TG ワンダー・マジシャン》！ハイパー・ライブラリアンの効果で1枚ドロースわ』

うわあ、ひとりでやってるわ。これだから回り始めたシンクロって

やつは。

『そして《TG ワンダー・マジシャン》の効果ですわ。このカードはシンクロ召喚に成功した時、フィールドの魔法・罠カード1枚を破壊しますわ』

鈴音さんが宣言すると、小さな魔女のようなモンスターは、生やしてる4枚の翼を羽ばたかせフィールド込みの超音波を発し、司令のDホイールがぐらぐら揺れる。

『ちよつ、鈴音危ない』

『デュエルギャングはもつと危ないことしてきましたわよ。私はこの効果で《光波干渉》を破壊』

サイファー・インターフェイス

と、鈴音さんは永続魔法の破壊にかかる。けど、

『やっぱアンタ裏切者決定』

『どうしてですか、それに本気で危険な目にあわせるつもりなら霧子さんのDホイールをスピンさせにかかりますわ』

『その時はスピンしながらフィールド全開でアンタに突っ込むだけだから。とりあえず《光波追走》フオロー・サイファーの第二の効果。このカードは光波サイファーと名のつく魔法・罠1枚が破壊される場合、このカードを強制的に身代わりにするわ』

『それでも本番なら。……ああもういいですわ。とりあえず《光波干渉》は無理でしたけど、これで霧子さんのハンドアドサポートは断りましたわね』

鈴音さんはそう言うのと、突然Dホイールのアクセルを全開にし、一気に司令を追い抜く。その速度は間違いなく法廷速度を超えて、

『つて、ちよつ、鈴音。こんな所でアレする気?』

あのフリーダムで唯我独尊な司令さえ「ファツ」と反応。鈴音さんは叫んだ。

『それだけあなたの相手で日々ストレスを溜め込んでるのですわ! いきますわ、クリアマインド!』

鈴音さんの体がDホイールごと光に包まれ、さらに速度が増している。

『私は、レベル5《TG ハイパー・ライブラリアン》にレベル5シン

クロチューナー《TG ワンダー・マジシャン》をチューニングですわ』

グングン正面を突き進む鈴音さん、その先は突き当りの曲がり角になつてるといふのに。

『リミッター解放、レベル10！メイン・バスブースター・コントロー
ル、オールクリアー！無限の力、今ここに解き放ち、次元の彼方へ突
き進みなさいませ！GO、アクセルシンクロ！』

衝突する！ そう思った刹那、鈴音さんを追いかけてたモニターは
まばゆい光一色に切り替わり、

『消えた！』

と、司令の声が聞こえる。

『カモンですわ、《TG ブレード・ガンナー》！』

比喩じゃなく光を抜けて再び鈴音さんと夜の風景がモニターに映
ると、そこには何故か前方に司令の姿が見えた。

鈴音さん、司令のずっと前を走ってたのに。

「え、あれ？」

私が状況が読めず驚いてると、増田がいった。

「鳥乃は見るのは初めてか？ 決闘疾走での鈴音さんのアクセルシン
クロは」

「ん、まあ」

私はうなづく。

「クリアマインド。その名の通り明鏡止水や無○の境地に達する
ファイルの高等技術。その状態でシンクロモンスター同士をシンク
ロ召喚するのがアクセルシンクロだ」

と、説明しだす増田に私は、

「いや。その位は知ってるから」

ライディングデュエル

「まだ話は続いている。この技術を決闘疾走で行う場合、アクセル全
開のフルスロットルで行わなければならないんだ。このとき、Dホ
ールは機体性能の限界を超えてスピードが出る。そしてアクセル
シンクロする際、光速を抜けてワープするように世界一周して相手の
隣へと追いつく。先程モニター画面が光一色になつたのは文字通

り光速で移動してたからだ」

「」

「……え？ さつき、さらつと光速とか世界一周とか聞こえなかった？ ま、まあいいわ。それはともかく。」

「演出上の理屈は理解できないけど分かったわ。けど、鈴音さんはどうしていまそんなクリアマインドをしたの？ それだけ聞くとファイルの無駄じゃない？」

「ファイルは半有限で、使えば使うほど不利になっていくのだから。そんなものを、ただの演出の為に使うとは到底思えない。」

「分からないか？ クリアマインドは明鏡止水なんだ」

増田がいった。けど、残念だけど私って教養高くないのよね。

首を横に振ると、鈴音さんがいった。

『クリアマインドで行うアクセルシンクロには、心身をリフレッシュさせ万全な状態に戻す効果があるのですわ』

「つまり鈴音さんは、霧子さん相手に疲弊した精神やストレス、眠気などを回復させ万全な体調に戻す為に行ったというわけだ」

と、増田の言葉に私は「ああ……」と納得する。さつきパーサーカー狂戦士化するほど発狂してたしね。

『ついでにクリアマインドはファイル補給っていうチート効果があるわ』

と、司令。さらつと本当にチートが聞こえた気がした。

『だから、デュエルディスクの充電、Dホイールの燃料補給、デュエル中に消耗したファイルの回復などを一度に行うってワケ。これが今回鈴音を呼んだ理由の一部よ。ファイル回復能力持ちなんて無双デュエルの最終兵器投入しない手ないでしょ』

「なるほどね……」

私は頷くも。

『けど、ヤツは裏切った』

「……………」

司令、まだその認識続いてたの？

とりあえず、鈴音さんのファイルドに降臨したのは片手にビーム

銃、片手にブレードが内蔵された1体のサイボーグ。その攻撃力は3300で、《銀河眼の光波竜》を超えている。

『バトルですわ。《TG ブレード・ガンナー》で《銀河眼の光波竜》を攻撃！』

鈴音さんが宣言すると、ブレード・ガンナーは光の残像を残しつつ一瞬で光波竜の背後へとまわり、そのブレードで両断。ビーム銃で分断された体を纏めて飲み込んだ。——はずだった。

『罨カード《サイファイ・スペクトラム光波分光》を発動』

司令が罨を発動すると、ビームに飲まれた光波竜から虹色の光が伸び、その先から《銀河眼の光波竜》がそれぞれ1体ずつ。

『このカードは、素材を持った光波サイファイモンスターが破壊された場合に発動するカード。その効果で破壊された《銀河眼の光波竜》を即座に蘇生し、さらにエクストラデッキから同名モンスター、つまり《銀河眼の光波竜》をもう1体特殊召喚する』
「うわっ」

私は、自分がデュエルしてるわけじゃないのに露骨に仰け反ってしまふ。すると再び増田が、

「もしかして鳥乃、司令のデュエル見るのも初めてか?」

「ううん、むしろ1回デュエルしたことはあるけど。その時は《銀河眼の光波竜》を最後まで倒せないまま負けちゃって」

その時点で、司令のデュエルの強さは痛感してたけど。まさか倒しても2体が増えるカードまで持ってたなんて。

増田がつぶやいた。

「もしかしたら」

「え?」

「いや、もしかしたら鳥乃に一度見せておくって意図もあったのかもしれないなど。本番前にいまのふたりのデッキの動きを」

確かに、今日の私の仕事はふたりの支援だから。事前に手の内をじっくり拝めるのは凄く助かる。

「なるほどね」

そういえばデュエルを仕掛けたのは鈴音さんからだっけ。だとす

るなら、増田の推測はより現実味を帯びてくる。だって鈴音さんだもん。

『私はカードを2枚セットしてターン終了ですわ』

鈴音さんの場に2枚のカードが敷かれ、《銀河眼の光波竜》を結局除去できないままターンは再び司令に。

『私のターン、ドロー』

ここでふたりは突き当たりの曲がり角に入り、モニターからはDホイールを傾かせてカーブしながらも器用にカードを引き抜く司令がみえる。

『鈴音、私は何もしないでバトルフェイズに入るわ』

一瞬「え？」と思ったけど、そういえば司令の場には

《サイファー・インターフェイス光波干渉》が発動しているんだった。

このカードはサイファー光波モンスターが同名で2体以上いるなら片方の攻撃力をバトル中倍にするから、司令はすでに鈴音さんに対してのワンショットキルの準備が整ってたのだ。

『なら、そのメインフェイズ終了時に動かせて頂きますわ』

鈴音さんがいった。

『まずは墓地の《TG ドリル・フィッシュ》を除外して《TG ブレード・ガンナー》の効果を発動。このカードは相手ターンに1度、除外ゾーンに一時退避することができすわ。そして私はこの効果にチェーンし速攻魔法《ダブル・アクセル》を発動ですわ』

鈴音さんの伏せカードが1枚表向きになる。

『このカードは、私の墓地のシンクロモンスターを場のシンクロモンスター^①の素材としてゲームから除外し、デュアルのようにもう1度シンクロ召喚を行うカードですわ。クリアマインド！ 私はレベル2《TG レシプロ・ドラゴン・フライ》とレベル5《TG ハイパー・ライブラリアン》に、レベル3シンクロチューナー《TG デジタル・シードラ》をチューニング。リミッター解放、レベル10！メイン・バスブースター・コントロール、オールクリアー！無限の力、今ここに解き放ち、次元の彼方へ突き進め！GO、ダブルアクセル！カモンですわ、《TG ブレード・ガンナー》！』

アクセルシンクロで再びモニター画面は光一色。

そして、光を抜け《TG ブレード・ガンナー》再度召喚を決めるも、すぐ自身の効果で除外される。

『再度召喚した《TG ブレード・ガンナー》は即座に先程の自身の効果で除外。ですけど《ダブル・アクセル》は、再度召喚したモンスターがフィールドを離れた場合、ゲームから除外されている素材一組をフィールドに特殊召喚しますわ。カモンですわ、《TG レシプロ・ドラゴン・フライ》《TG ハイパー・ライブラリアン》そして《TG デジタル・シードラ》!』

《TG ブレード・ガンナー》が時空に姿を隠すと、入れ替わりに鈴音さんの場に3体のシンクロモンスターが出現する。

『そして、《TG デジタル・シードラ》のモンスター効果。このカードは相手メインフェイズにシンクロ召喚を行いますわ。私はレベル2《TG レシプロ・ドラゴン・フライ》に、レベル3シンクロチューナー《TG デジタル・シードラ》をチューニング。リミッター解放、レベル5!ブースターランチ、OK!インクリネイション、OK!グランドサポート、オールクリアー!GO、シンクロ召喚!カモンですわ、《TG ワンダー・マジシャン》!』

相手ターンなのに再びソリティアを始める鈴音さん。

『ハイパー・ライブラリアンの効果で1枚ドローですわ』
しかもドローまで。

『《TG ワンダー・マジシャン》の効果、このカードがシンクロ召喚したとき、フィールド上の魔法・罫カードを1枚破壊する。私はサイファー!インターフェイス《光 波 干 渉》を破壊ですわ』

上手い。わざわざ相手ターンに強引な分離と再シンクロを繰り返したのはそういう事だったのね。

『……ふうん』

ついにサイファー!インターフェイス《光 波 干 渉》を破壊された司令。なのに、あまり堪えないように見えない。むしろ余裕そう。

『そして《TG ワンダー・マジシャン》も相手ターンでシンクロ召喚する効果を持ってますわ。私は続けてレベル5《TG ハイパー・ラ

イブラリアン』に、レベル5シンクロチューナー《TG ワンダー・マジシャン》をチューニング。——クリアマインド!』

「またもやモニター画面が光一色に。もう見慣れて飽きたわ。」

『リミッター解放、レベル10!メイン・バスブースター・コントローラ、オールクリアー!無限の力、今ここに解き放ち、次元の彼方へ突き進め!GO、アクセルシンクロ!カモン、《TG ブレード・ガンナー》!』

と、今回3度目のアクセルシンクロで《TG ブレード・ガンナー》が再び出現すると、

「このターンを耐え抜けば、次のターンにはブレード・ガンナーが最大2体か!」

増田が感心した様子でいった。

「そつか、最初と2度目のアクセルシンクロで出したブレード・ガンナーと、いま出したブレード・ガンナーは別個体だっけ。」

自身の効果で除外したブレード・ガンナーは次のスタンバイフェイズ時に特殊召喚される。このターン、場のブレード・ガンナーを護り抜くことができれば増田のいう通り、今度は鈴音さんが切り札2体で自分のターンに入ることになるのだ。

しかも、司令がブレード・ガンナーを倒すのに必要な

サイファア・インターファイア
《光波干渉》は破壊済。

『これで全部?』

司令が聞くと、鈴音さんは、

『ええ、私の行動は以上ですわ!』

『なら行かせて貰うから!』

司令はホルダーに挟んだ手札から2枚引き抜き、

『前言撤回、メインフェイズ続行。私は手札から《光波双顎機》サイファア・ツイン・ラプトルを通常召喚し、効果発動。手札を1枚捨て、デッキから光波モンスターを特殊召喚する。私は《光波異邦臣》サイファア・エトランセを捨てて効果発動。2体目の《光波双顎機》を特殊召喚!』

司令の場に2体の《光波双顎機》が出現すると、

『《光波異邦臣》は墓地に送られた場合に、デッキから光波魔法・罫をサイファア

1枚手札に加える。私はデッキから2枚目の《光波干渉》サイファア・インターファイアをサーチ

うげっ、せっかく鈴音さんが除去したのに。

『そして《ダブル・エクスボージャー重露光》の効果で《光波双顎機》2体のレベルを倍の8にして、この2体でオーバーレイ！ 殺れ、《銀河眼の光波竜》！』
「ちよっ」

私は驚いた。

「嘘、司令あの《銀河眼の光波竜》を、ランク8モンスターを3体揃えちやっただけだ」

『よくあることですよ』

鈴音さんがいった。ってよくあるんだ。あんな悪夢みたいな光景。かつて私が攻略した《墮天使ルシフェル》《墮天使アスモディウス》《墮天使ディザイア》の攻撃力3000墮天使勢ぞろいとはワケが違う。使い手が司令な以上、一体一体の対処難易度が段違いなのだ。

『鳥乃アンタ、もしかして自分の組織の司令を過小評価してる？』

しかも司令からもそんな反応を貰ってしまう。とはいえ私は一応正直に、

『んーそうかなのも。まさか鈴音さん相手にここまでやれちゃうとまでは思ってたから』

『じゃあ鈴音を過大評価しすぎたのね』

と、司令。

『霧子さん酷すぎですよ』

鈴音さんは軽く嘆くも、

『なら光波竜3体の攻撃も余裕で対処できるのよね？』

《光波干渉》サイファア・インターファイアを発動。X素材を持つてる《銀河眼の光波竜》で《T

G ブレード・ガンナー》を攻撃』

司令はスルー。そして遠慮なく司令のドラゴンから光のブレスが放たれ、

『当然、《光波干渉》で攻撃力を倍にするわ』

ブレスの質量は一気に倍に。鈴音さんは何もすることなく《TG ブレード・ガンナー》は簡単に破壊された。

立花 鈴音 LP4000↓1300

しかし、鈴音さんはここでもう1枚の伏せカードを使う。

『永続罨《リビングデッドの呼び声》！ これで《TG ブレード・ガンナー》を蘇生しますわ』

即座に墓地から舞い戻るブレード・ガンナー。元々の攻撃力は司令のドラゴンより300高いので、

『バトルフェイズ終了』

と、司令はいう。さすがにここから追撃はできなかったようだ。

しかし、ここで増田は小声で、

「鳥乃、アレの準備に入るぞ」

それは、デュエルが間も無く終わるという合図だった。

「あ、うん」

私は「例のプログラム」のプロテクトを解除し、あとはエンターキー1回で起動できるようにしておく。

って、え？ ということは、増田は司令の攻撃がまだ終わらないと読んでるってこと？

『対処させて貰いましたわ、霧子さん』

鈴音さんはいった。しかし司令は、

『いや。もう終わったから』

『え？』

『永続魔法《エクトプラズマー》を発動。ターン終了時に《銀河眼の光波竜》を射出。1500ダメージよ』

増田の判断は正しかった。

バトルが終わったかと思っただ刹那、《銀河眼の光波竜》が1体、だらんと頂垂れるとそこから霊魂が出現し鈴音さんに襲い掛かったのだ。

「な……え……？」

私は、思いもよらないカードの登場に目をぱちくり。

「鳥乃！」

増田の声。私はハツとなって、慌ててエンターキーをクリック。

鈴音 LP1300↓ERROR

霊魂の直撃を受けた鈴音さんのライフは0に、ならなかった。

増田が司令、私が鈴音さんのデュエルディスクにそれぞれ「緊急デュエル終了プログラム」を起動したからである。

なんとか、間に合った。

増田がいった。

「決着が確定した所で、このデュエルは強制終了させて貰ったよ。これで、司令と鈴音さんは10分ほどデュエルできなくなるが、フィールはどちらも空にはならないはずだ」

それをきいて鈴音さんは、

『「迷惑をおかけましたわ」

なんて、ほっと安堵していた。

正直、鈴音さんも弱くはないはずだった。むしろ相手ターンも使つてあれだけ展開しつつ司令のプレイングの対処に出る様は、間違いなく私より高度なプレイングをしてるように見えた。

なのに、なのにねえ。

終わってみれば、司令は無傷とはいえかすり傷程度のダメージしか受けてない。しかも、《銀河眼の光波竜》が対処されるのも逆手にとり、鈴音さんを更に追い込んだ。

『MY WIN PERFECT』

『パーフェクトではありませんわ。一応300喰らったではありませんか』

Dホイールを運転しながら、立ち上がりサ○デーナイトフィーバーのポーズを取る司令に、それを必死でツツコミ入れる鈴音さん。

「ああ……。これが私たちのボスなのね」

私は、思わず呟いてた。

尊大で唯我独尊、野良猫みたいに自己中心でフリーダム。クール&ドライで（おっぱいがないけど）おっぱいのついたイケメンに見えて、現実には巨乳狩りを趣味とし存在自体ふざけてる私たちハングドの司令、高村 霧子。

だけど、その実力はあんなに高かったのだと私は改めて実感する。正直、頼もしい。

『とりあえず、プレイングが雑になってなくて安心しましたわ』

不意に、鈴音さんはフフツと微笑んでいった。

『アンタもね。鈴音』

と、司令はポーズをやめて両手でハンドルを握る。

「あれ？」

私はふと、

「そういえば、いつの間にか鈴音さん裏切り認定消えてる？」

『あんなの、ただのノリよ』

司令はいった。

『そういう事にしたほうが本気でデュエルできすし、燃えるじゃん』

『私が発狂したのはノリでも何でもないんですけど』

『知らないわ。そんな事は私の管轄外よ』

『まったく、あなたという方は』

なんて、疲れた顔して鈴音さんはいうけど、同時に微笑む。そして、モニター越しに見えるふたりは互いにとても信頼しあってるように映った。

『ところで、霧子さんのほうは眠気覚ましにはなりましたか？』

『なるわけないじゃん。鈴音程度が相手じゃ生温くて』

『フィールまで使ったのに、さすがですわ。でしたら途中でコンビニに寄りましょう。事務所を出た時は忙しくて顔を洗う暇もありませんでしたから』

『賛成、レッドブル1本じゃカフェインも足りないわ。鈴音は？』

『せっかく10分デュエルできない状態ですもの仮眠でも取りますわ。いくらクリアマインド連発したからといっても限度はありますもの』

『了解』

そういつて司令は鈴音さんのDホイールの隣についた。ちょうど右側には夜の公園がみえる。

『じゃ鈴音、司令任務よ。私ちよつとコンビニ行くから、アンタはそこで休んでて』

『ええ、任務開始までには体調間に合わせますわ』

そういつて、ふたりはDホイールを運転したままハイタッチ。その

まま鈴音さんは右折して公園へ、司令は前方を走りぬけてコンビニへ向かう。

まるで、少年漫画みたいな青春の熱さとハードボイルドの格好良さを併せたワンシーンだった。

そういえば、このふたりって学生時代からの腐れ縁なんだっけ。

「なんか、いいわね」

気づくと私はつぶやいていた。

「ん？」

反応したのは増田だ。

「ああいや、あんな風に大人になっても一緒に仕事してふざけあって信頼しあう。ああいう関係っていいなって思っただけよ」

「あーレズには無理な人間関係だろうなあ、そうなる信頼生まれる前に性欲がくるだろうし」

「全くな」

「……ツツコミなしかよ」

ガクツとしてる増田は無視するとして、私はふとモニター越しのふたりに、昔の私と梓を重ねてみる。私が梓にも発情するようなレズじゃなかったら、10年後20年後にはああいう関係になれてたのかな？

「まあ、いずれ鳥乃にもできるよ。お前だけが築ける関係ってものが」
突然増田はいった。

「別にあのふたりの模倣じゃなくてもいいじゃないか。背中を預けたい相手に恋しても発情しても別にいいだろ、人と人の関係ってものは十人十色なんだから」

「増田……」

「何より、特別な関係になりたい相手がいる。そういう目をしてたぞ、さっきのお前」

「うっ」

そう指摘されるのが恥ずかしくて、なんとなく私は顔をそらす。

「大切にしろよ。特に大切な人との絆は、繋がりはな」

その増田の言葉は、なんとなく「俺はもう切れちまったから」と言っ

てるように見えた。

「もしかして増田。永上ながみさんと」

特に根拠も何もないけど、電波受信っていうのかな？ そんな気がして私は聞くと、

「俺が、刑事をやめて犯した、たったひとつの後悔だ」
肯定する代わりに増田はいった。

この日増田と交わした言葉が、今後大きな意味を持つだなんて。いまの私は知らない。

MISSION 5—フィール・カードを護れ! 2

私の名前は鳥乃トリノ 沙樹サキ。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「ところでさ、『ご〇文はうさぎですか?』ってタイトルだけ聞くと卑猥よね?」

水曜日、放課後。

現在私たちは美術館に向かって徒歩で移動中。もちろん、一旦家で着替えてからだけど。

「どうしたの、今度はなに?」

と、隣で歩く梓が聞いてくれた。今日の彼女の私服は胸元にフリルリボンのついたシフォンブラウスにフレアースカート。色彩は白、ベージュ、ピンクの薄い暖色に統一され、梓のふんわりした雰囲気にとっても合ってる。

「いやだってさ。バニーさんご指名……いやメイクアウトのお持ち帰りでしょ」

「たぶん、動物のほうだと思うよ?」

「人間だって動物じゃない」

「そういう事じゃなくって」

「まあ分かるわ。ウサミミのヘアバンドなんて可愛いもの付けておきながらおっぱいが露出したバニースーツに、しかもぷりぷり太ももから繰り出される尻尾のぷりぷり、これはもう襲ってくださいつて言ってるようなものよ」

と、私は自分でいって「うんうん」とうなずく。

実際、ワイ〇ペディアによるとうさぎは年中発情期だから「いつでも夜のライディングできますよ」って意図があるらしいしね。

「ああ、どつかでバニーちゃんレンタルできないかな。バニーちゃんのおっぱいばにばにしたい。おっぱい、ばにばに」

梓は疲れた笑いで、

「つまり、もう我慢できないほど女の子の胸に飢えてるんだね」

「胸じゃないわ。おっぱいよ、ボインよ!」

私はキリツとドヤ顔で、

「今日だけは私、十〇夜咲夜はPAD長ではなく生乳派に浮気したい気分。……作者もいま、執筆しながら潮っぱいのキラ付けに精出してるしね」

「作者ネタは禁句だよーもう」

もう、なんて困った顔をする梓かわいい。

私は視線が梓の胸部に向きそうなのを堪えつつ思う。言ってしまったみたいと。本当にバニーちゃんにしたのは梓だって、一番興味のある巨乳おっぱいは梓のだって。

「今日の先輩、朝からこうなんですよ」

あ、そうそう。

現在、私たちは木更ちゃんとも一緒なのである。現在の彼女は白いブラウスの上に薄手で紺のパーカーを着ている。下はプリーツスカート。

「知ってる。同じクラスだから」

梓は一回ぼわわんと笑顔で答えてから、

「って朝からって、沙樹ちゃんと藤稔さん、今日一緒に登校してきたの？」

って驚く。かわいい。梓の百面相とてもかわいい。

「ん、まあね。例の木更ちゃん匿わせてるトコに朝ちよつと用事があって、そのついで」

とはいったけど、実際は昨晚ハングド事務所で寝泊まりしたのだ。

理由は勿論、美術館の入場券分を稼ぐ為に夜通しで事務に入ったから。

「ふああ」

おかげで眠気のあまり欠伸が出る。すると、

「ふーん」

なぜか梓は半眼で、

「とかいって、実は泊まったんじゃないの？ 昨晚はお楽しみだったかなー？」

「ご心配なく。私そういう関係はお断りですから」

木更ちゃんはお淑やかなほほえみでいった。

私はそこに捕捉して、

「まあ夜這いは仕掛けに行ったんだけどね」

「え、そうだったのですか？」

驚く木更ちゃんに、私は一回項垂れながら、

「けど、途中で家主らに見つかって袋叩き」

もちろん、家主とは方便。実際には寝室に忍び込む寸前でうっかり鈴音さんが設置した赤外線センサーに引っかかり、慌てて一回屋外に逃げるけど、高村司令と董ちゃんが阿○羅閃空みたいな動きで追いかけてきて瞬○殺っぽいことされました。

何なの、あの拳を極めし母娘。

怖かった。

「でも、泊まったことは事実なんだね」

と、梓はいった。どうしよう、近頃の梓は機嫌悪い日が多い気がする。

「沙樹ちゃん。嘘ついたの？」

怖っ！ 梓、いつの間にそんな恐ろしい満面の笑みできるようになったの？

「ちよっ、ちよっと待って梓。どうしてそんな『浮気した彼氏を問い詰めてます』みたいな反応なの？」

「えー？ そんな顔してないよ？」

そんな言葉をニコニコと。

そういえばゲイ牧師がいつてたっけ。

いつも一緒の幼馴染だからこそ、『誰かに取られる』と嫉妬してるの
ではって。

「梓……」

私は頬をポリポリしながら、どう返事すればいいか分からなかった。

これが他所の子だったら寧ろ悦んでベッドの上で黙らせればいい。
しかし、相手は梓だ。しかも嫉妬はしても私に恋愛感情を抱いてるわけじゃない。

私自身、梓に対してはこの下半身事情も弱気だから、確認することもできないしね。

「あの、徳光先輩？」

そこへ助け船を出してくれたのはもうひとりの当事者、木更ちゃんだった。

「何を勘違いされてるかは存じませんが、私、別に想い人がいますから」

「え？」

きよとん、とする梓。

「そういえば、以前鳥乃先輩とおふたりでK a s u g a y a ラーメンの一号店に行った際、その店長に猛アタックしてる方を見かけたのを覚えてませんか？」

「え？ うん、それは覚えてるけど」

「その方の顔、思い出せませんか？ あれ、私ですよ？」

「……え？」

驚愕のあまり立ち止まる梓。そして木更ちゃん、私、木更ちゃんと交互に見て、

「本当なの？ 沙樹ちゃん」

「うん。残念ながらね」

私は何とか苦笑いをつくっていった。やっぱり信じられないわよね、普段の木更ちゃんとかすが店長を前にした木更ちゃん、キャラ全然違うもん。

「何なら証拠見せよつか？」

私はいった。そして、梓にはラジコン飛行機と誤魔化した上で小型サイズの《幻獣機テザーウルフ》を召喚。かすが店長の写真をテザーウルフに鎖で持たせ、

「それいけ」

と、テザーウルフを飛ばした。すると、

「あれは……かすが様！」

早速目の色変えて反応する木更ちゃん。

「ああん、待ってかすが様ーっ！ かすが様かすが様かすが様かすが

み込ませる。

「こ、これはまさ〜」。

「ぐへっ〜」

私は、抵抗も命乞いもする間もなく、ハングド製のフィール・カード版《ハンマー・シユート》でクレーターに沈められた。

「んー使い心地抜群。藤稔さんありがとう」

すつきりとした満面の笑みでのたまう梓。うう……ついには幼馴染が、あの梓が暴力女に。榎○ 香に。

「藤稔さん、早速見て回ろうよ」

「え？ カードを渡しておいて言うことではないですけど。大丈夫なのですか鳥乃先輩を放置して」

「大丈夫だよー。沙樹ちゃん頑丈だもん」

「そう……ですね。では行きましようか徳光先輩」

なんて、私がメメタアされた蛙みたいになってる間に勝手に話を進めるふたり。

「あ、すみませんお客様。入場券をお願いします」

ここで、呆然としていたのだろう孔雀舞コスの受付嬢が慌てた様子でいったので、私は痛みを堪えながら立ち上がった、

「あ、無料券2枚と有料券1枚こっちにあります」

と、チケットを提示。

「ありがとうございます。有料券は6000円になります」

「これで大丈夫？」

と、私は千円札を6枚受付嬢に渡し、かけた手で彼女の胸を鷲掴み。

「え、きやつ」

「おおお、似合う似合うさすがナイスおっぱい」

「お客様」

盛り上がる私の肩をポンポンと叩く男定員。

「これ以上迷惑行為をするならお引取り頂きます」

振り向くと、男定員はア○ン・ガラムコスだった。

「こう見えても腕力には結構自信があるんですよ……」

「す、すみませんでした」

何だろう。ただのコスプレなはずなのに《ユベル》じゃないと勝てる気がしない莫大なフィールを感じる。

私は改めて紙幣を受付嬢に渡していった。

「いいおっぱいもつと揉みたい。じゃなくて」

「はいお引取り決定ー」

まだ言いかけてるのに、男は私の腕を強く握り、いう。

「え、ちよっ」

「お嬢様、署まで案内しましょう。どうぞ」

「ままま待つ待つ待つ」

私は必死になってじたばた暴れる。そこへ、

「あ、ちよつと待ってー」

と、遠くから声。

見ると、小走りでペガサスのコスプレをした陽井氏がこちらに向かうのが見えた。彼は、以前美術館の護衛を依頼してきた人である。

「あ、陽井さん」

腕を掴んだまま男がいうと、

「悪いけどー。この子、僕の大切なお客さんなんだ。放してあげて」

「このセクハラ女がですか？ わかりました」

陽井氏にいわれ、男は渋々と手を放す。

私は掴まれた箇所をハンカチで払いながら、

「助かったわ陽井さん」

「ううん気にしないで。むしろ間に合ってよかったよー」

相変わらず陽井氏は掴みどころのない風貌をしている。しかも、今回は長い前髪を上手くペガサスの前髪に流用してる為に胡散臭さ抜群。

「(とはいえ)」

プライベートで出会って思ったけど、語尾の伸びた緊張感のない口調。そういうえばどこか梓に共通点を覚えるのよね。

事前の調べでも梓と親戚ってことはない、ただの偶然だったのは分かっているんだけど、興味が無い異性にしては少し親近感にも似たのを覚えてしまう。

「ところで」

私はア○ンから離れる為にも少し歩きながら、ひとつ話を切り出した。

「もう美術展に用事がないはずの陽井さんがここにいるって事は、なにかあつて私を呼んだってこと？」

実は、私に無料招待券を渡してくれたのは、この陽井氏なのであつた。

当時の私は某くそみそ事件でグロッキーだったのもあつて、純粹に最終日への招待だと思つてただけど、4枚のフィール・カードの展示が終わつたはずなのに彼がスタッフとして美術館にいるのだ。これはもう、疑うしかない。

「察しがいいねー」

陽井氏はいつた。

「いま、少し時間あるかな？」

私はちよつと考えてから、

「んー。ちよつと待つて、今日連れも一緒だから」

と、デュエルディスクのタブレット画面を開き、梓のディスクにボイスチャット機能で連絡を入れてみる。

『もしもし。沙樹ちゃんどうしたのー？』

数秒後、梓から応答が入った。

「ごめん梓、知り合いに捕まっちゃつて。少しの間ふたりで楽しんでてくれる？」

『うんわかつたー。じゃあ沙樹ちゃんが落ち着いたらまた連絡してー』

「了解」

ボイスチャットを閉じると、陽井氏が少しだけすまなそうに、

「ごめんねー。せつかく楽しんでた所だったのに」

「別に。ま、ちようどいい機会だと思つたしね」

梓と木更ちゃんが仲良くなつてくれる為の。

「じゃあ、場所は館内レストラン？」

私が尋ねると、陽井氏は「んー」となつてから、

「その前に、ちよつと展示品見て回らない？ お茶はそれからで」

言われた瞬間は頭にクエスチョンマークだったけど、陽井氏に展示品を何点か案内されるとすぐ「なるほど」と思った。これは一度見て貰ったほうが早い。

そして、陽井氏が最後に案内された場所はあるの目立たないフロアの隅っこ。

再び展示されてあったのだ。

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》。4枚のフィール・カードが。

「……」

嫌な予感を感じてた私に向かって、陽井氏はいった。

「それじゃあ、お茶にしょーか」と。

陽井氏に案内されて分かったこと。

それは、今日展示されてるカードはすべて本物のフィール・カードだということだった。

「どう、何か勘付いたことはあった？」

陽井氏は注文した自分の紅茶にミルクを入れながらいった。

「ん、まあ。陽井さんが言いたいことは大体察したつもり」

同じ展示会なだけに内装自体は以前と変わらない。美術館特有の雰囲気の中で、展示されているものは《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》を始めとする等身大フィギュアや彫刻。そして、特大パネルで拡大されて非売品のカードの数々。

しかし、以前は情報提供を元に再現されたフィール・カードのレプリカの数々だったものが、最終日である今日だけすべて丸々入れ替わってたのだ。

「つまり、再び館内のカードが奪われないよう警備して欲しいと。しかも、今回は以前も担当した私を直接指名で」

「大正解」

と、ミルクティーを飲む陽井氏に、私はいった。

「悪いけど断るわ」

「え、どうしてー?」

断られるのは予想外だったのだろう。私は『とりあえずミルクでも貰おうか…』を飲みながら、

「だって今回正規の手順を踏んでないじゃない。ウチの方針でね、指名依頼でもまずは事務所を通して貰うことになってるのよ。一応、規約違反ながら個人で受けることも黙認はされてるけど、その場合は一切のバックアップを受けられないのよ」

そして、ミルクを一気に飲み干し、

「悪いけど、これだけの展示品を私ひとりで護るのは無理よ。責任負いきれないから他当たって頂戴」

と、私は席を立った。

「……。そっかー」

視線を落とし、陽井氏はカップの中の紅茶をスプーンでかき回す。

「そもそも、だったらどうして事前に言ってくれなかったのよ。そうしてくれたら私だって対応変わってたのに」

「本当はそうしたかったんだよー」

陽井氏はいった。

「ファイル・カードを展示する条件でねー。館長に口止めされてたんだよー。当日まで一切口外するなってね。前回は情報漏れたせいで大事に至っちゃったからねー」

「あー」

「その上、事前に沙樹ちゃんを雇っちゃったら口外しなくてもばらしてるものだからね」

そんな陽井氏の様子に、私はちよつとだけ良心を揺さぶられる。だけど、

「さつきも言っただけど、私今日は友達連れて本当に観光に来たのよ。もし何か起きたらカードは二の次、友人を護らないといけないわ」

「そうだったねー」

「悪かったわね」

私はミルク代だけ置いて陽井氏から背を向ける。そのときだった。「でしたら、いまから緊急で事務所に通せばいいだけですわ」なぜか、そしていつの間にか。

私の後ろには鈴音さんが立っていたのである。

「え!?!」

私はびつくりした。

「あ、鈴音ちゃん久しぶりー」

陽井氏はいった。って、え!?!

「あなたもお変わりなさそうですわね」

「鈴音ちゃん程じゃないよー。僕なんて、もうおじさんだもん」

「え、え?」

なぜか親しげに話すふたりに、私は状況を理解できずにいる。すると、

「彼と私は同期ですわ」

鈴音さんはいった。

「嘘……」

「嘘いっても始まりませんわ。彼とは中学高校と同じ学校の同級生ですわ。……とここで」

鈴音さんは私が座ってた席の隣に座って、デュエルディスクを外しテーブルの上に置く。

「改めて、いま私は彼女の組織で上司をしておりますわ。状況が状況ですもの、いまここであちの事務所と通信を繋いで依頼書の提出と交渉を同時に行おうと思うのですが、よろしいでしょうか?」

デュエルディスクからフィールドゾーンのかわりにキーボードとマウスが出現し、鈴音さんのディスクはノートパソコンに早変わり。「さすが鈴音ちゃん、話が早くて助かるよー」

「頑固者でも霧子さんと何十年も一緒に仕事したらこうなりますわ。ほら、時間が無いのでしょう」

と、私を置き去りに鈴音さんは完全に仕事モード。かと、思いきや。「沙樹? ここから先の仕事は私が代行しますから、あなたはご友人と楽しんでらっしゃい」

なんて、鈴音さんは優しい声で言うのだった。まるで母親のような目で。いや、血に繋がりはないけど実際娘のようなものだろう。それだけの縁が、私と鈴音さんの間にはあるのだ。私はいった。

「ん、じゃあお言葉に甘えるわ。たぶん夕食後になると思うけど、予定が済んだら合流するからそれまでお願い」

「悪いねー」

と、陽井氏はいうので、

「その台詞は鈴音さんに言って頂戴。じゃ私は先に」

私は背を向けながら軽く手を振り、一旦レストランを後にしかけ。――その足が止まる。

うん、今度はレストランを出た所で、いま正に入ろうとしてた梓と木更ちゃんにばったりしちやったのよね。

「あ」「あ」「あ」

残念ながらタイミングまで一緒ではなかったものの、三人揃って同じ反応。

「沙樹ちゃん。どうしてレストランに？」

「あーうん。さっきまで例の知り合いと休憩してて、いま解放された所」

と、私は梓にいい、

「というわけで、今からふたりに連絡入れようと思ってた矢先だったんだけど。ちやうど良かったわ。で、ふたりはいま休憩する所？」

すると木更ちゃんが、

「はい。ですけど、鳥乃先輩と合流できるのなら中止にしたほうがいいですね。先輩もお茶をされた直後でしょうから」

あ、とたん梓が残念そうな顔を。

「別に私はいいわよ。ミルクしか飲んでないし」

「ほんとう？」

途端、なんだかすっごく嬉しそうにいう梓。あー、これはもしかして。

「藤稔さん、沙樹ちゃん何でも奢ってくれるってー」

やっぱり。とはいえ、梓は私の頼みで来てもらった身だし。

「待って、何でもってのは無理。せめてひとり千円で、超えた分は自腹」

「えー」

なのに梓は不満気な顔をしている。それには木更ちゃんも驚いたみたいで、

「徳光先輩。一体、なにを頼もうとしていたのですか？」

「これだけど？」

梓は入口前の食品サンプルからひとつを指していった。

そこには、たらい一つに緑色の麺がこれでもかと超山盛りに盛り付けられ、その上に生クリーム、果物、あんこがトッピングされた奇々怪々なメニュー。

その名も『たらい甘口抹茶スパ』というものが。なお値段は3800円。

正直、なんで美術館のレストランにこんなメニューがあるのかわからない。正気を疑ってもいいのよね？ え、売る店側か頼む梓のどっちかって？ もちろんどっちも。

「鳥乃先輩。さすがにこれは」

木更ちゃんがドン引きする中、私は財布の中身を確認する。

「徳光先輩さすがにやめませんか？ ほら、鳥乃先輩の目が死んでます」

「じゃあアラビアータの¹0^人分^分」

なんか更に恐ろしい言葉が聞こえた気が。……うん、『たらい甘口抹茶スパ』丸々奢るのは無理だけど。

「梓、提案」

「え、なにー？」

『『たらい甘口抹茶スパ』だけど、半分なら出せるわ。だから1900円は自前で払えない？』

「う、うーん」

途端、葛藤しだす梓。やっぱり学生の、それも女の子の財布だとサ

ポでもしない限りこの値段は厳しいのだ。

「お願い、折れて梓。じゃないと私、明日からお昼が食塩になっちゃう」

すると木更ちゃんが、

「鳥乃先輩。明日からお弁当毎日先輩の分も用意しましょうか?」

と、心配して言うと。

「1900円だね。いいよー」

途端、梓は笑顔で了解しだす。一体どういうこと?

「そういえば、もう17時は過ぎてますよね」

木更ちゃんがいった。時間を確認してみると現時刻は17:20。時間って経つの早いわ。

「先輩がた、少し早いですけど夕食にしませんか? 徳光先輩は食べる気満々ですし」

「え? これおやつのもりだけど」

梓が変なこといつてるけど無視して、

「そうね。いまなら席も比較的空いてる時間帯だし、いまのうちに済ませちゃいませよ」

「じゃあ私『たらい甘口抹茶スパ』のダブルで」

『え?』

今度はしつかり私と木更ちゃんですテレオだった。

—— 現在時刻20:00

ふたりと別れた私は、一度美術館を出てしまってたので、陽井氏に開けて貰った裏口から再入館。入れ替わりに車で一旦この場を後にする陽井氏を見送ってから、私は事務室へと足を運んだ。

「もう、よろしいのですか?」

中では鈴音さんがひとりテーブルに座って、デュエルディスクをノートパソコンに作業していた。私はうなずいて、

「もう大丈夫。お疲れ様、いまから任務に入るわ」

私は対面の席に座る。21:00頃から閉幕イベントをやるらしく、本当はそこまで粘るはずだったのだけど梓が門限だったらしくて

早めに解散になったのだ。

「とうわけ、早速今回の任務の詳細を教えてくださいませんか？」

「分かりましたわ」

鈴音さんはいった。

「今回の任務は、館内のフィール・カードとスタッフたち。そして、あの少女の護衛となっておりますわ」

「ある少女？」

「ええ。依頼者のひとり娘、陽井^{ひのい}花梨^{かりん}さんですわ」

「え!？」

私は驚く。だって、陽井氏の娘さんって、確かいま闘病生活で病院から出られないはず。

「以前、彼がこの美術展にフィール・カードを置いた理由、そして何故彼がフィール・カードに携わってるかは聞いたことがありますわよね?」

「うん、まあ」

陽井氏は、フィールのエネルギーで娘の命を繋ぎとめる手段を探している。そして、当時置いた4枚のカードは持ち主の陽井氏ですらフィールを引き出す事ができず、何か変化があるのを願って数日だけ外界に晒す。その為にこの美術展の力を借りたらしい。

「今回の目的は、館内をフィール・カードでいっぱいにし、その膨大なフィールで娘を治療できないかという最終手段らしいですわ」

「何て無茶苦茶な」

私は一旦立ち上がり、備え付けの給湯ポットでふたり分のインスタントコーヒーを淹れる。

「それにフィール・カードを一か所に集めるだけなら、場所取らないんだし病院に直接持ち込めばいいんじゃない」

「持ち主が何人か拒否したらしいですわ。そんな意味不明なことを言っつて、実は持ち逃げする気なのだろう、と」

「……」

確かに、そう解釈されても仕方ない。納得しちやっただせいで、私は何も言えなかった。

「そんな折、美術展を開いてた知人が最終日に閉幕イベントをしたいと思つてたらしく、依頼者の話を聞いて『なら、またうちで展示しよう。そして閉幕イベントにかこつけて娘さんを治療だ』となつたらしいですわ」

更に捕捉すると、決めたはいいけどイベントの設備費やカードのレンタル費が想像より高くついてしまい、結果があの有料チケットの法外な値段とのこと。しかし、ネットで「何かある」と噂されてたせいか見てる限り法外な値段が逆に大成功に導いているようだった。

「一般の方には開始まで伝えられない情報ですけど、閉幕イベントの内容は装置による館内フィール・カードの一斉召喚によるリアルソリッドビジョン体験ショーですわ。あなたにはショーの間、花梨さんの付き人として護衛をしながら一般客のトラブルを未然に防いでくださいませ」

「えっ?」

私は驚きつつも嬉しさを隠しきれず、

「いいの? 花梨ちゃんの護衛。それって有事の際には臨機応変に夜のライディングしてもいいってことよね?」

「できるものならしてくださいませ。重病人相手に乱暴できるものでしたら」

「ぐ……」

しまった。そうじゃない、相手は病人だからベッドに誘えない。

「仕方ない、事故にみせかけてパイタッチで我慢するか。……あと着替え」

「したら任務未達成にしますわ」

「それでも後悔はしない」

「はあ」

鈴音さんは頭を抱えた。

「仕方ありませんわね。どなたか別の方に代用を」

「わー待って待って。やる。ちゃんと仕事するから任務降ろさないで」

その場で土下座まですると、鈴音さんは、

「もう分かりましたわ」

と、折れてくれた。

下着は不覚にも確認し忘れた。

それから約40分後、陽井氏が娘さんを連れて戻ってきた。

鈴音さんの話によると、あくまで花梨ちゃんには外泊許可を利用し知り合いの美術展に好意で招待されたという話になってるらしい。

私は受付の傍で待機し、入館してきたふたりを迎え入れる。

「陽井 花梨ちゃんだね。初めまして」

花梨ちゃんは陽井氏の引く車椅子に乗っていた。セーターの上にもストールを羽織ったその少女は、今年16歳と聞いてはいるがひとつかふたつ位幼くみえる。

病人だからだろう華奢で色白の肌にも、まだこの世の汚さを知らなそうな純朴な瞳。そんな花梨ちゃんは私に向かって笑顔で、

「初めましてーだよー」

父親似の伸び語尾口調もあってか、口を開けば更に幼さが極立つ。見た所、おっぱいは控え目ながら程ほどにはありそうだけど、正直私のストライクゾーン的にはグレーゾーンかも。

代わりに、やっぱり梓にも似た緩い雰囲気を持ち、かつ笑顔の裏に儂さをどこか感じ、庇護欲のようなものを掻き立てられる。

「花梨、この人が鳥乃 沙樹ちゃん。今日一緒に美術館をまわってくれるんだって」

「よろしくね、花梨ちゃん」

陽井氏に紹介され、私は手を差し出す。

「ありがとーよろしくねー」

花梨ちゃんはその手を握ると、弱弱しい力で、しかし子供みたいにぶんぶん振り回す。

ぶんぶん、ぶんぶん。

「けほっ、けほっ」

それだけの動作でも体には負担だったらしい。口元を手を押しさえ、花梨ちゃんは咳き込む。

「花梨ちゃん、大丈夫？」

背中をさすってあげると、次第に落ち着いたのか。

「うん大丈夫ー。ありがとーもう平気ー」

なんて、屈託ない笑み。

「良かった。でもちよつと心配だからベッドで休もうか」

と、花梨ちゃんを抱きかかえようとして、

「沙樹ちゃんそれはやめてあげてくれると嬉しいなー」

陽井氏が笑顔でいった。ここ数日の粹みたいに人を殺すようなニコニコじゃなくて、「あ、困ってる」って感じで。

つていうより、しまった。さつきグレーゾーンと判断した矢先なのに花梨ちゃんに夜のライディング誘おうとしてた!?

「ベッドは嫌ー。せつかく病院から出たんだもんー」

しかも、当の花梨ちゃんは私の意図を理解してなかった模様。助かったというべきか、一生の不覚と取るべきか。

「まあ、確かにそうよね。じゃあ花梨ちゃんさえ大丈夫ならちよつと館内見てまわろっか」

私は花梨ちゃんに話をあわせて言うと、

「うん」

と、嬉しそうに。元気だったら、もつとはしゃいでたんだろうなあ。それこそ、学校なら机にじつとしてられないタイプだろうに。そんな子が普段一日中ベッドの上なんて。

せめて自慰の仕方でも教えておこうかな？

「あれ〜？」

なんて真面目に考えてたら、花梨ちゃんは展示品のカードをいくつか指さしていった。

「もしかしてーこれ全部ファイル・カード？」

「え？」

驚いたのは、陽井氏だった。どうやらファイル絡みの話は全く娘に教えてなかったみたいで、

「花梨、ファイル・カード知ってたのー？」

陽井氏が聞くと、

「うん。前に持ってたからー知ってるよー？」

「持ってた!?!」

さらに陽井氏は驚く。

花梨ちゃんはうつむいて、

「どうしよーかなー。言ったほうがいいのかなー?」

と、つぶやくのが聞こえた。そして、

「ねえお父さんー」

「なにー?」

「もし私がー変なこと言ってもー。二度とカードを触っちゃ駄目って
言わないー?」

そんな娘のお願いに、陽井氏は花梨ちゃんの頭を撫で、

「もちろん。そんな酷いことは言わないよー」

「本当。じゃあ言うね」

と、花梨ちゃんはいった。

「実はねー。私が持ってたファイル・カード、強制のアンティデュエル
で奪われちゃったのー。それからなんだよー、私が病気になっちゃっ
たのー」

「えっ」

「言ったら、カード全部没収されちゃうと思って言えなかったー。だ
けど、お父さんファイル・カードのこと知ってるみたいだからー」

そこまで花梨ちゃんの話聞いた陽井氏は、

「ありえなくもない、か」

と、少し考えた後に口にした。

「沙樹ちゃん、ちよつと聞いてもいいかな?」

「ん、なに?」

「実はねー、つい最近科学的に明らかになった事なんだけど、全ての人
間にも僅かながらに生まれ持ったファイルを持つてるらしいんだ。
しかも、そのファイルはデュエルに負けて一度ファイルが空になるタ
イミングでも損失されず、カードから供給されるものと違い常に一定
量を保ち続けるんだ。その正体、聞いた事はー?」

「……ない、わね。全部初耳よ」

私は正直にいう。

陽井氏はいった。

「生命エネルギーなんだよー。命だったり、気だったりーそういう類も全てフィールに分類できるのが分かったんだよー。だから、生まれ持ったフィールを全損した時にヒトは死ぬんじゃないかなーって学説が発生したんだよー」

なるほどね。

そこまで聞いて、私は「陽井氏がフィールで娘を延命できる」と思った発端がそこにあるんじゃないかと察した。

「その上でーなんだけど」

と、陽井氏は本題に切り出す。

「ヒトの命と繋がってるフィール・カードって、沙樹ちゃんは聞いたことはー？」

その問いに、私は数秒ほど間を置いてから、

「地縛神、それとオーバーハンドレッド・ナンバーズ」

「え？」

「命と繋がってるフィール・カードって言われてる分類よ。花梨ちゃん。もしかしてあなたが奪われたカードってその内のどれかだった？」

と、訊ねると。

「うんー」

花梨ちゃんは、ゆっくりと首を縦に振った。

私は改めて陽井氏に向けて、

「現状、それらのフィール・カードは他のフィール・カードとは比べ物にならないフィールを有してるらしいわ。だから、フィール・ハンドーズ辺りが花梨ちゃんを狙ったのかもしれないわね」

「奪い返せそう？」

「そこは鈴音さんに聞いて？ 特定できるまでは私の専門外だから」

「そっかー」

残念そうにする陽井氏。そんな時だった。

『21:00になりました。これより閉幕イベントを開催致します』

各スピーカーからアナウンスが流れ、すると展示されていたカード

が光り輝き、モンスターが飛び出るように召喚されたのだ。

「わあ」

花梨ちゃんが目を輝かせていった。

「フィール・カードのモンスターがいっぱいだよー」

カードが発する光は、そのまま優しい輝きになりながら辺りに広がり続ける。私は、その光を浴びてフィールが供給されてくのを感じた。

これならば花梨ちゃんを助けられるかもしれない。

「凄いでしょ。花梨ちゃんのために用意してくれたんだよ」

実際は少し語弊があるけど。

「そーなのー？ お父さんありがとーだよー」

「花梨が喜んでくれて何よりだよー」

そんなふたりの父娘の光景を見て、私も自然と頬が緩む。と、同時にちよつとだけ寂しい気持ちも。私、父親の顔って知らないのよね。その上シングルマザーで育ててくれた母も働いてた上に放任主義で、正直梓の小母さんからのほうがよっぽど母親らしいこととして貰ってる。

小母さん、私たち家族のことは寧ろ嫌ってる位なのにね。その辺のエピソードは脱線しすぎるからまた後日だけど。

「お父さーん。あのモンスターはー？」

花梨ちゃんがモンスターを指さし、陽井氏が車椅子を引いて近へ向かう。私は、一応真面目に周りにも気を配りながら付いていく。そんな繰り返しが何分か続き、気づくと人通りの少ないフロアの隅まで来ていた。

奥には例の4枚のフィール・カードからそれぞれドラゴンが召喚されている。しかし、

「あれー？」

花梨ちゃんはいった。

「ねえお父さん。あのモンスターたちー、リアルソリッドビジョン化してないよー？」

「あれー？ 沙樹ちゃんごめん車椅子お願いできる？」

と、陽井氏は花梨ちゃんを私に預け、小走りで奥へと向かう。そして、モンスターに触れようとするも、手が通り抜けてしまい。

「あー。本当だー。ごめんごめん」

デュエルディスクのタブレット画面で何やら操作をはじめ陽井氏。しかし問題は解決しなかったようので、

「あれ。おつかしいなあ」

「ちよつといい？」

私は、遠目ながらカードのほうに違和感を覚え近づいてみる。

やっぱり、私は思った。

4枚のカードに触れてみるも、以前に感じた私への強い拒絶も、その1枚から受ける共鳴も感じなかったのだ。

私は確信した。

「これ、偽物とすり替えられてるわ」

「え、本当？」

驚く陽井氏。その時だった。

「きゃーっ！」

突然の悲鳴。恐らくはエントランスの辺り。そして、あの声は恐らく例の孔雀舞コスのボインボインな受付嬢。

「な、なにー？ なにがあつたのー？」

すると、花梨ちゃんは自分で車椅子をUターンさせて、悲鳴の起こった位置へと向かいます。

「あ、ちよつと花梨ちゃん」

私は花梨ちゃんを追いかける。追いかけているが、ふと思った。

「(花梨ちゃん、元気になってる)」

もしかしたらフィール治療は本当に花梨ちゃんに有効かもしれない。だって、最初ちよつとはしゃいただけで咳込んだのに、閉幕イベントが始まってから花梨ちゃんそんな事一度もなかったんだから。

エントランスへUターンしてみると、そこで見えたのは両腕で胸を抱えぺたり込む受付嬢だった。襲いたい。

「ぜえ……ぜえ……」

一方、私の背中では花梨ちゃんが苦しそうに肩で息をしてる。先頭

私は、真剣な顔でいった。

「あのボインちゃんにセクハラしていいのはレズの私だけよ。絶対に見つけてみせるわ、そして男なら殺って、女なら犯ってやる」

「分かりました。どうやら貴女には刑務所ではなく精神病院へ送るべきのようだ」

あれ？ どうしてそうなるの？

「お兄ちゃん」

そこへ受付嬢のボインちゃんが男に向かっていった。って、兄妹!? 「あの人は嘘は言っていないと思うわ。だって、思えばさっきの……2回目の時は少し様子が違ったもの」

「え?」

と、反応するア○ンコスの男、もう偽アモンでいいや。

「じゃあ、本当にさっきの悲鳴は貴女のせいじゃないのか?」

「だから言ってるでしょ。ところで」

私はボインちゃんに向かって、

「少し違うって、どんな感じだったの?」

するとボインちゃんは、

「えっと、後ろから胸を揉まれたんですけど、なんか怨恨でもぎ取る感じだったんです」

「その時相手は何か喋った?」

「はい。確か『巨乳死すべし、氏ねええ!』と」

「うわあ」

それって、もしかして犯人……司令? 高村司令?

「あー。じゃあやつぱり沙樹ちゃんは犯人じゃないよー」

突然、背中で疲れきってたはずの花梨ちゃんが会話に入ってきて、いった。

「だって沙樹ちゃんおっぱい大好きだもん。さっきも、私疲れてぐったりしてーお胸が背中に当たったら沙樹ちゃん幸せそうにしてたもんー」

気づかれてた!? 色気とか知らない頭してそうで、ベッドとかホテルとか分からないくせに、こういう事はちゃんとしてるなんて。

偽アモンは頭を抱えいった。

「何なんだ貴方は」

「レズよ」

「全国のレズに失礼なことを言うな」

「じゃあレズクイーン？」

「もういい黙れ犯罪者」

ちよ、酷い。

そこで、私のデュエルディスクに通信が入った。鈴音さんからだ。

私は通話を受け、

「もしもし、ちょうど良かった鈴音さんいま……」

『フィール・カードの件とふたり目のセクハラの件ですわよね？』

「さすがね、その通り」

どうやら鈴音さんは、もうすべてを把握してたらしい。

『その二件の事件、犯人は同一人物ですわ』

「えっ、じゃあもしかして司令が……」

『いいえ。霧子さんではございませんわ。……ただ、あの姿は』

「なにが覚えが？」

『い、いえ。こちらの思い過ごしですわ。それよりも』

鈴音さんはいった。

『犯人は、黒いローブを身に纏った女性。年齢は恐らくあなたと同じくらい。犯人は客に紛れて有料チケットで入場、一直線で隅の4枚のカードの下へ向かい、隠す素振りなく堂々と入れ替えてましたわ。ただ場所が場所だけに発見者はゼロ。私も発見が少し遅れる失態を晒してしまいましたわ、お許しくださいませ』

「そんなのはいいわ。鈴音さんが見落とすなら他の人ならもつと発見が遅れるだろうし」

『っ』

突然、無言になる鈴音さん。

「ん、どうしたの？」

『いえ。なんでも御座いませんわ』

鈴音さんの声は、少し涙声になりかけてるようにも感じた。

ああ、この人って裏ではすっごく評価されてるけど、直接いわれることって滅多になかったっけ。

『恐らく犯人は他のファイル・カードも狙ってるのでしよう。彼女はその後も他の展示フロアを見てまわっておりますわ。どうやら、セクハラはその最中に起こした衝動的犯行みたいですからね』

「ということは、まだ館内にいるのね？ その犯人は」

『ええ。……ですけど』

と、口ごもる鈴音さん。

「見失ったのね」

私がいうと、鈴音さんはすまなそうに、

『すみませんですわ。どうやら私の監視に気づかれたみたいで』

「ん、なら足で探すしかなさそうね。何かあつたらまた連絡して」

私は通信を切り、陽井氏に向き合う。

「陽井さんごめん。ちよつとの間、花梨ちゃんの傍から離れても大丈夫？」

「うん。いいよー」

陽井氏はいつものやんわり笑顔でいった。

「その代わり、ちゃんど取り返してきてねー。花梨に見せてあげたいからー」

「もちろんよ。じゃ」

と、私は小走りでこの場を離れる。その際、

「待ちなさい。話は終わってないぞ」

と、偽アモンが止めようとするけど、

「ごめんねー。おふたりともちよつと事務所に来てもらっていいかなー?」

なんて、陽井氏がいうのを私は後ろから聞いた。

程なくして、私は妙に目立つ黒ローブの女を見つけた。

「巨乳死すべし慈悲はない」

「きゃあああああああ」

女は、まさに巨乳にセクハラに及んだ所だった。

上着一枚であれだけの存在感を出しておきながら、音を出さず、闇

に溶け込むように完全に気配を消し女性の背後にまわり、両手で被害者のおっぱいを鷲掴み。しかも、受付嬢のポインちゃんの言う通り怨恨を込め、もぐように。

『あの方ですわ』

と、鈴音さん。

「了解」

私は応え、そしてセクハラを終え距離を取ろうとする黒ローブの女の肩をトントンと叩いた。

「っ」

黒ローブの女は一瞬ビクツとしてから振り返り、

「何よ突然」

と、冷たい瞳で喧嘩腰にいった。

適当に整えられたセミロングの髪にスレンダーな肢体。行動だけじゃなくて見た目も高村司令に似てる。というより、見た目も態度も、司令をそのまま私くらい年齢まで若返らせたようだった。そして、巨乳を狩るその性質までも。

違う点をいえば、瞳は真紅、肌は青白く銀髪だ。

「Are you Big boobs faith? Or is flat

黒ローブは英語で質問してくる。

私は胸を張って、

「Of course, it is Big boobs faith!」

いきなりのローリングソバット。

「がはっ」

私は腹を抱えて蹲った。

「大丈夫ですか?」

被害者の巨乳ちゃんが心配そうにのぞき込む。シンプルなVネックのセーターだった為、位置的に内側のボインがブラ越しモロだった。幸せ。

「ん、ありがと大丈夫」

私は蹲ったまま言った。もちろん、おっぱいをもっと見ていたいか

ら。

「さっきの人は？」

「まるで忍者みたいな動きで、あの後すぐに」

「そう」

「どうやら逃してしまつたらしい。けど同時に、まだ犯人は館内にいることが確定した。それに顔も見ることができたので、いまは十分つて思おう。」

「それよりも。」

「うーん、しかしねえ」

「我慢できず、私は胸元からセーターの内側に腕突っ込み、ブラをめぐって直接揉み揉み。」

「きやつ」

「これだけエロい服にけしからん体してたら、レズじゃなくても襲いたくなるわ。うん、ナイスおっぱい」

「思いつきり頬にビンタされました。」

『何してるのですか、あなたは』

「再び鈴音さんから連絡が。モニターから見たらしい。」

「いや目の前にあれだけ素敵なボインをだらしなく覗かせてたら、レズとしては襲つて欲しいんだつて解釈するべきでしょ」

『そんな発想するのは沙樹だけですわ』

「なんて言いあつてる間に、ボインちゃんはぷりぷり怒つて去つていった。さて、」

「ところで本題は？」

『沙樹。いますぐカードを2枚ダークドロウしてくださいませ』

「え？」

「なんでわざわざ。」

『現在の私たちでは彼女を追尾するのは不可能と判断しました。ですので、あなたには彼女を索敵するカードを創造し、調査を続行して欲しいのですわ』

「あー。なるほどね」

「使えばファイルの殆どを失うカードの創造。それをこんな形で活

用するなんて考えたことがなかった。正直賭けみたいなものだけど、まあ司令の指示ならともかく鈴音さんだから信用するしかない。

「ん、わかったわ」

私は一旦通信を切り、ドロローする手に意識を集中する。

「暗き力はドロローカードをも闇に染める！」

口上を発しながら指先にフィールを集めると、手は闇色の輝きを帯びる。

「ダーク・ドロロー！」

言いながら、私はカードを2枚引き抜いた。闇色のフィールがカードを侵蝕すると同時に、私の中からフィールエネルギーがごっそり消えるのが分かった。

で、引いたカードはというと。

「私は、スケール2の《幻機獣ゼータセクト》と、スケール5の《幻機獣サーチャイオネット》でPスケールをセッティング！」

デュエルディスクに2枚のカードを置くと、私の左右に光の柱が伸び、中からモンスターが浮上する。それは、電探と探照灯だった。

同時にディスクのタブレット画面に2次元座標が表示され、私の向きにあわせて《幻機獣ゼータセクト》が索敵を行い、結果が随時表示される。索敵の対象はフィール・カードのようで、座標上には幾つもの光点が表示されるも、動いてるものはないに等しい。

「なるほどね」

つまり、動いてる光点が見つければ、それが黒ローブとみて間違いないというわけだ。

「(鈴音さんの作戦、当たったわね)」

しかも、こうしてゼータセクトの使い方を確認してる間に、普段よりずっと早くダークドロローで消費したフィールが回復していくのを感じた。

「あ」

そういえば、いまこの館内は花梨ちゃんを助ける為に一面フィールで満ちている。その副産物が私のフィール回復にも役立つようだ。

もしかして鈴音さんはそこまで計算して？　だとしたら、更に株が上がるじゃない鈴音さんの評価。

「(じゃ、いきますか)」

こうして、しばらく私はゼータセクトを頼りに探索を始め、10分くらいしてかな？　私は見つけた。

移動する光点。それが他の光点と接触すると程なくして光点がひとつになる。その間違いなくファイル・カードを偽物とすり替える瞬間を。

私はすぐ指定された座標へと移動する。そこには、

「げっ」

と、私をみて驚愕の声をあげる黒ローブの姿が。

「やっと見つけた」

私かというと、

「まさかアンタ。私を探しにきたの?」

と、黒ローブ。

「そつ。悪いけど事務室まで同行願える？　あなたにはちよつと窃盗容疑が掛かってるのよね」

「チツ、断るわ」

黒ローブはデュエルディスクにカードを差し込むと、眩い光が辺りを包み込む。

「わっ」

その光に、私は目をやられる。その隙に、

「ガフツ」

追撃の掌底を叩きこまれた。しかも、これ暗勁つて類だっけ？　内臓を直接やられるようなダメージが襲ってきて、私は一度倒れ伏す。

幸運にも崩れた視線から腕のデュエルディスクを確認でき、タブレット画面から移動する光点をしっかりと目で追う。私は激痛と嘔吐感に堪えながら立ち上がり、よろつきながらも目標を追った。

黒ローブが向かった先は、一般客立ち入り禁止の倉庫だった。

先ほどとはうって変わって暗闇が辺りを支配する。しかも、相手は黒いコートに身を包んでるから闇の中で視界に捉えるなんて困難と

いうもの。

やばいわね。私がそう思った瞬間だった。

もう片方のPスケールに立つ《幻機獣サーチライオネット》^照から光が放たれ、いま正に私を殴り飛ばそうとする黒ローブを映し出す。

「!?」

驚く黒ローブ。その一瞬の間に、私はフィールでバリアを発生し、その拳を弾く。

「チツ」

舌打ちする黒ローブ。私はデュエルディスクを掲げ、いった。

「さてと、もう逃げ場はないのは辺りを見ての通り分かってるよね？」

大人しく捕まってくれない?」

「そういわれてハイと屈するだけでも?」

黒ローブはデュエルディスクを構え、いった。

「ていうか、どうしてアンタは無事なわけ?」

「え?」

「さつき掌底をぶつけた時よ。私はあの一撃でアンタの肺とか心臓とか破裂させるつもりで打ったわ。んでもって手ごたえもちゃんとあった。なのに、なんでアンタの臓器は無事なのよ」

と、問いかける黒ローブに私は。

「安心して。ちゃんと肺も心臓もつぶれたから」

「は?」

「けど、それでも動けるのが私って美少女なのよねえ」

「ならッ」

黒ローブがいうと、私のデュエルディスクは自動的にデュエルモードへと移動する。どうやらフィールで強制デュエルを仕掛けられたらしい。

「アンタのフィールを消し、今度こそ復活できない程のダメージを与えてやるわ。巨乳撲滅、巨乳派も同罪、慈悲はない!」

「待って、その前に聞きたいことがあるわ」

と、すぐにも噛みついてきそうな黒ローブを制止して、私はひとつ訊ねる。

「あなた、名前は？ それにどこかの組織に所属してるの？ フィール・カードを奪いに出て、しかも私を殺そうとか。何か事情がありそうだけど」

「言うわけないじゃん。そんなの」

「まあ、そうよね」

当然。そう返事がくるのは分かってたことだけど。

「どうしても知りたければ、デュエルにでも勝って力づくで聞き出せば？」

「そうさせて貰うわ」

私はデュエルディスクを構え直し、いう。

黒コートの女はいった。

「黒山羊の実、ミストランⅡヘイズ。目標を駆逐する」

「つていきなり全部ばらしたああああああ!!」

しかも、また黒山羊の実だったのね。そんな気はしてたけど。

沙樹

LP4000

手札5

ミストラン

LP4000

手札5

デュエルディスクからもしっかり名前が表記される中デュエルは開始される。

「先攻は貰ったわ」

しかし、当の本人は気にしてないのか気づいてないのか、特にこれといった反応もなく、

「私は手札から《ギャラクシー・ウイザード銀河の魔導師》召喚。効果でレベルを4つ上げて8に」

ギャラクシーデッキ!? 見た目言動だけじゃなく、デッキまでも司令に類似したカードを使うなんて。

「そして、魔法カード《ギヤラクシー・エクスぺディション銀河遠征》！ このカードは私の場にレベル5以上のフォトンかギヤラクシーがいる場合に発動可能。デッキからレベル5以上のフォトンかギヤラクシー1体を特殊召喚するわ」

ミストランはデッキから目当てのカードを1枚抜き取ると、

「私がデッキから特殊召喚するのはこれよ。レベル8ギヤラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン《銀河眼の光子竜》！」

相手のフィールドに出現したのは、司令の切り札に似て全く異なる1体の竜。その攻撃力は3000。

けど、相手の場にはこれでレベル8が二体。となると、恐らく相手はこの銀河眼をエースとして呼んだ訳ではなく。

「私はレベル8の《銀河の魔導師》と《銀河眼の光子竜》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

やっぱり。睨んだ通り、2体のモンスターは霊魂へと変わり天井に発生した銀河の渦へと飲み込まれる。

しかし、直後に銀河の中から出現した「107」というナンバーズの数字に私は「え」となる。

「エクシーズ召喚！ 殺れ、No.107！ 宇宙を貫く巨乳撲滅の雄叫びよ、遥かなる時をさかのぼり銀河の源よりよみがえれ！ 顕現

せよ、そしておっぱいこのやろう！ ギヤラクシーアイズ・タキオン・ドラゴン銀河眼の時空竜！」

銀河の渦から翼を広げ降り立ったのは、黒くシャープなボディを持った1体の竜。その攻撃力は他の銀河眼と同じ3000。

「カードを1枚セット。私はこれでターン終了」

「嘘……でしよ？」

私は、とんでもないモンスターの前に、つい棒立ちしてしまった。

初めて見た。オーバーハンドレッド・ナンバーズ。

陽井氏と花梨との会話の中でちらと触れた命と繋がってるフィール・カード。

実はナンバーズをはじめ殆どのフィール・カードは2枚以上同時に存在していることが確認されている。しかし、地縛神とオーバーハンドレッド・ナンバーズは話が別。

他のフィール・カードとは比較にならないほどのフィール量を有し、一部の特別な人間の下にしか出現しない完全なワンオフ品なのだ。

「なんでNo. 107を。こんなの、どうやって手に入れたのよ？」

「いや生まれた時から」

ミストランはいった。

「生まれた時から？」

「ソー○ワールド2. 0のド○イクが魔剣を持って生まれるとかあるじゃん。あれみたいな感じ？」

「いやその例えは伝わらない人多いでしょ」

「じゃあ柚子シリーズのブレスレット？」

とりあえず、信じられないけど言葉通りらしい。

「けど、いいの？ こんなカード晒しちやって」

私はいった。

「このナンバーズは、あなたからアンティして引き剥がせば、それだけで命に関わるはずでしょ？ そんな心臓狙わせるような真似を初手からしちやって」

「いや、私負けないから問題ないわ」

言ってくれちやって。

「だったら、何がなんでもその鼻を折ってやらないとね。私のターン」

私はカードを1枚引き抜き、そしてテキストを確認する。

どうやら、相手ターンで動ける効果は持ち合わせてないらしい。

だったら。

「私は手札から《幻獣機ブルーインパラス》を召喚。このカードは手札の幻獣機とシンクロ召喚できる。私は手札のレベル4《幻獣機メガラプター》に、レベル3《幻獣機ブルーインパラス》をチューニング。シンクロ召喚！ 発進せよ、レベル7《幻獣機バザードルフ》！」

フィールド上に出現したのは、巨大な白い怪鳥を模した航空機のモンスター。なお、ルフとはロック鳥の別名らしい。

「《幻獣機バザードルフ》はシンクロ召喚に成功した時、幻獣機トークンを1体特殊召喚できる。そして、このトークンを即座にリリースし

て効果発動。バザードルフは1ターンに1度、幻獣機トークンをすべてリリースして、墓地の幻獣機を1体特殊召喚する効果を持つてるわ。私は墓地の《幻獣機メガラプター》を蘇生。そしてメガラプターは特殊召喚した際にトークンを1体生成する」

こうして、メガラプターは自身の効果でレベルが上がりフィールドにはレベル7が2体。

「私はレベル7のバザードルフとメガラプターでオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

今度は床に銀河の渦が発生すると、私のモンスターたちは靈魂の形となって取り込まれていく。

「竜の名を持つ機械の鳥よ。いまこそ空を支配し、私に勝利を輸送せよ！ エクシーズ召喚！ 発進せよ、ランク7《幻獣機ドラゴサック》！」

銀河の中から駆け上がったのは、先端に竜の首を模した部位の追加された大型の航空機の姿。

「ふうん」

ミストランは大して脅威にも感じてなさそうに小さく鼻を鳴らす。

「《幻獣機ドラゴサック》は私の場にトークンが存在する限り、戦闘や効果では破壊されないから」

「っばいわね」

ディスクのタブレット画面を見ながらミストランはいう。テキストを確認してるのだろう。

「けど、見る限り破壊以外なら問題ないってワケね」

「う……」

確かにそうなのが。

「でも、だからって時空竜にはこのターン何かやらかそうって効果はないはずよね？ 私は《幻獣機ドラゴサック》の効果発動。オーバーレイ・ユニットを1つ取り除いてトークンを生成」

ドラゴサックの中から小型ドラゴサックのホログラムが2体発進する。

その時だった。

「カウンター罫、《タキオン・トランスミグレイション》！」

伏せカードをオープンすることなくミストランはいうと、突如フィールドの光景が巻き戻されていく。

トークンはドラゴサックに戻り、銀河が逆回転で発生するとドラゴサックが中へと引き返し、霊魂がふたつ飛び出して2体の幻獣機に戻り、そこを時空竜はブレスを吐いて迎撃する。

「《タキオン・トランスミグレイション》は、チェーン上にある相手の効果モンスターの効果・魔法・罫カードの発動を無効にし、すべてデッキに戻すカウンター罫。そして、銀河眼の時空竜がフィールドにいるなら、このカードは手札から発動できるわ」

「手札からカウンター罫!?!」

まさか、そんなサポートカードが存在するなんて。

おかげでトークンこそ残ってるけど、ドラゴサックがエクストラデッキに戻ってしまった。これでは何もできない。

「カードをセット、ターンを終了」

仕方がないので、せめて私は伏せカードだけでも敷いておく。十分に手札がありながら攻撃力3000の、相手のエースを対処できなかったのは痛すぎる。

「私のターン、ドロー」

ミストランはカードを1枚引き抜く。

この時点で、ミストランの伏せカードは《サイクロン》ではないのが判明した。なにせ私が伏せたのは1枚だもの、エンドサイクしない手はないはず。

なんて情報アドを得たのも束の間。

「私は《銀河騎士^{ギャラクシー・ナイト}》を召喚。このカードはレベル8だけど私の場にギャラクシーがいるからリリースなしで召喚可能。そして、この効果で召喚した場合、私は墓地から《銀河眼の光子竜》を守備表示で特殊召喚する」

まさかの手札消費1枚でレベル8が再び2体。

「私はこの2体でオーバレイ。巨乳派をぶつ潰せ！ ランク8、《神竜騎士フェルグラント》！」

「……は？ げっ」

私は、思いつきり血の気が引いた。この状況でフェルグラなんて。このカード、1ターンに1度、発動ターンの間モンスター1体の効果を無効にして他の効果を受け付けられなくするっていう最高に厄介な効果を持つてるのよ。何よりフリーチェーンで使えるってオマケ付き。攻撃力も2800と高いし。

「バトル。フェルグラントで邪魔なトークンを蹴散らし、時空竜でアインタに直接攻撃」

フェルグラントの一撃で幻獣機トークンは消滅し、そこを時空竜のブレスがフィール込みで私に襲い掛かる。

「っ」

私は即座に自分からブレスに飛び掛り、自らのフィールで耐え抜く。ここは倉庫だから、下手にフィールを用いた攻撃で辺りに飛び火すると不味いのだ。

けど、ミストランは相当多くフィールを所有してるらしく、私はこの一撃で一気にフィールが削れたのを実感。ダークドローの分は割と回復してたはずなのに。

沙樹 LP 4000 ↓ 1000

「私はこれでターンエンドよ」

「なら私のターンね。ドロー」

再び手番がまわり、私はカードを引き抜く。フィールの損失が激しいのもあって、ドロー運にフィールはそこまで上乗せできなかった。

しかし、そのせいで。

現在の手札は《幻獣機サンダークロウ》《幻獣機ウォーブラン》《団結の力》《フル・フラット》。どうしよう、フェルグラントを対処する方法が思いつかない。

「っ」

私は歯を噛みしめる。やばい。しかも、相手は本気で私を殺しにきているのだ。

LPもガンマンラインとはいかなくても既にギリギリ。相手のモンスターは2体それも高攻撃力。相手の手札は3枚。

楽観的に考えなければ、このターン全力で使い捨ての壁を並べた所で次のターンは回ってこない気がする。

「何? どうしたの? 早くして!」

ミストランは腕を組み、苛々をみせて急かす。

「分かってるって!」

《幻獣機サンダークロウ》はサイドラ方法で特殊召喚できトークンも出せるレベル3。ウォーブランはレベル1チューナー。《フル・フラット》は幻獣機トークンを出せるフィールド魔法。いま出せそうなのは、間違いなくシンクロ。

焦りながら、私はエクストラデッキを確認。

《幻獣機コンコルダ》、《幻獣機ブリックス》、《幻獣機ヤクルスラーン》。どれも駄目。幾ら悩んでも、打開できそうな策は思い浮かばない。

仕方ない。壁を立ててターンエンドしよう。いま立てれる壁は最大4体。これなら方にひとつ可能性がある。——と思うしかない。

「私は……!」

手札から《幻獣機サンダークロウ》を抜き取り、場に置きかける。その時だった。

『ヨビヨセヨ』

私の奥底から、個人的に吐き気を催すような声が響き渡る。

「(っ……。やめて、出てこないでよ)」

私は、心の中で唸る。

それは、私が持つてる「命と繋がったフィールド・カード」の声だった。うん、実は私も持つてるのよ、そういうの。

そして、このカードは私に死が近づくと、こうやって話しかけてくる。囁きかけてくるのだ。だから、この声を聞くと心臓が止まるような恐怖を覚える。

そして、確信するのだ。

いまのままだと、次のターン私は殺されるって。

フィールド・カードはいった。

『ヨビヨセヨ、アレハオマエノカードダ』

「(だから、呼び寄せろって何よ)」

私は心の中で反論した。

すると、カードから返事が返る代わりに、私の脳裏で答えが駆け巡る。

それはミストラランが奪った4枚のフィール・カードのうち1枚を手元に引き寄せろ、ということだった。

同時に、私は当時覚えた疑問の答えにやっと到達する。

「(そういうことだったの)」

初めて4枚のカードに対面した時の、1枚と共鳴する感じとそれ以外に拒絶される感じ。その原因は、共鳴する1枚が私を求めてるからであり、同時に残りの3枚が私の中の、いま私に語りかけてるカードのフィールと反発しあってるからだった。

いや、厳密には共鳴してるカードも私に話しかけるカードとは反発してる。けど、あのカードは私のものだったのだ。私の味方だったのだ。あのカードに教えられたのは癪だけど、理屈じゃなく感覚でわかったのだ。

そして、ルールとか無視して、私はあのカードを自分のエクストラエツキにある扱いで召喚できる。何となく、でも確信めいたものが生まれた。

私は、改めて《幻獣機サンダークロウ》を手取る。

「相手の場にモンスターが存在し、私の場にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できる。レベル3《幻獣機サンダークロウ》！ さらに、この方法で特殊召喚した際、サンダークロウはトークンを1体生成。これで幻獣機共通の効果でサンダークロウのレベルは6に、そして《幻獣機ウオーブラン》召喚」

《幻獣機ウオーブラン》はレベル1チューナー。これで私の場には、レベル6のサンダークロウと、レベル1チューナーのウオーブランが。

「私は、この2体でチューニング！」

ウオーブランがひとつの光の輪になり、そこをサンダークロウが潜る。と、同時に私のエクストラエツキには、いつの間にかあのカード

が。

「未だ穢れに染まらぬ無垢なる翼よ。その透明さで敵を討て！シンクロ召喚！飛翔せよ、レベル7！《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》！」

「んなっ」

私の場に現れた竜を前にしてミストランは驚き、

「なんで、そのカードがそっちに」

と、ミストランはエクストラデッキを確認。

「は、ちよつ、え？ 無い!? なんで消えてるのよクリアウイング」

どうやら、同じフィール・カードが2枚出現したわけではなく、ミストランが盗んだカードがこっちに移ったらしい。

しかも、聞いた話では誰もクリアウイングのフィールを引き出せないという話だったけど、私はこのカードを手に入れた途端、一気に所有するフィール量が増大したのを感じた。

引き出したのだ。このカードのフィールを。

続けて、たつたいま場に出したクリアウイングの効果を確認。これはいけるかも。

「私は手札から《団結の力》をクリアウイングに装備。このカードは私の場のモンスターの数×800だけ、装備モンスターの攻撃力を強化する」

《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》 攻撃力2500↓4100
いつものようにホログラムのデコイから光が発し、今回はクリアウイングと繋げて攻撃力を一気に底上げする。

「はっ？ 攻撃力4100?」

「バトルよ。クリアウイングで時空竜に攻撃」

デコイと連携を取りながらクリアウイングは周囲を舞い上がり、空高くから時空竜を見据える。

「チツ、《神竜騎士フェルグラント》の効果。クリアウイングの効果を無効にし、このターンの間《団結の力》の効果を受けなくさせるわ」

恐らくは焦ったのだろう。かつ、まだクリアウイングの効果は確認してなかったらしい。

「なら、クリアウイングの効果発動」

私はいった。

「このカードは1ターンに1度、場のレベル5以上のモンスター1体を対象とするモンスターの効果を無効にし、そのカードを破壊できる」

「なッ」

フェルグラントが持つ剣から光が伸びるも、対応してクリアウイングの翼が発光し、相手の光を鏡みたいにはじき返す。

フェルグラントは自身の力を受けて弱り、そこをクリアウイングはブレス攻撃を吐いて破壊。

「さらに、クリアウイングは自身の効果でモンスターを破壊した場合、ターン終了時まで破壊したモンスターの攻撃力を自分の攻撃力に加える」

「ちよっ、待っ」

さらに焦るミストラン。しかし効果は正常に受理され、

《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》 攻撃力4100↓6900

クリアウイングの攻撃力が、なんだか愉快なことに。

ミストランはいった。

「なんかさ、言わせて貰うわ」

「どうぞ」

「インチキ効果もいい加減にしろ！」

まあ、ごもつともね。

「ということで改めてバトル！ 《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》で《No.107 銀河眼の時空竜》攻撃！」

クリアウイングは空高くから急降下し、ジャイロ回転しつつまるで巨大な弾丸のように時空竜の腹をブチ抜く。

「時空竜！」

叫ぶミストラン。同時に、彼女のライフも一気に降下し、

ミストラン LP4000↓100

一瞬のうちに鉄壁ラインへ。

「私はこれでターン終了」

ここで、《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》の効果は終了し、攻撃力が元に戻る。

《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》 攻撃力6900↓4100
といつても、《団結の力》の効果は残ったままだけどね。

沙樹

LP3200

手札1

場：《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン（攻撃／《団結の力》装備）》《幻獣機トークン（守備）》《団結の力》《伏せカード（×1）》

ミストラン

LP100

手札2

場：《伏せカード（×1）》

「私のターン。ドロー！」

ミストランはカードを1枚引く。そして、いった。

「アンタがそうくるなら、私も使つてやるわ」と。

「私は手札からギャラクシー・ネクロマンサー《銀河の霊術師》を通常召喚。そして、効果で墓地から《銀河の魔導師》を特殊召喚」

相手フィールドに現れたモンスターはいずれもレベル4。まさか、今度は。

「私は、《銀河の霊術師》と《銀河の魔導師》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！」

床に出現する銀河。2体のモンスターは霊魂となって取り込まれる。

「漆黒の闇より愚鈍なる巨乳に抗う反逆の牙！今、降臨せよ。エクシーズ召喚！殺れ、ランク4！《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》」

現れたのは、下あごに巨大な牙を持つ黒い竜。例の4枚のファイ

ル・カードのうちの1枚だった。

「《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》のモンスター効果、このカードのオーバーレイ・ユニットを2つ取り除いて発動！ 相手モンスター1体の攻撃力を半分にし、その数値だけこのカードの攻撃力に加えるわ」

「なら、クリアウイングの効果発動。ダーク・リベリオンの効果を無効にして破壊！」

「聖闘士に同じ技は通じない！」

「いや聖闘士じゃないでしょあなた」

「どうでもいいわ。速攻魔法《禁じられた聖杯》！ クリアウイングの攻撃力を400上げて、その効果を無効にするわ」

「あっ!？」

しまった、これではクリアウイングの効果を使えない。その上。

「そして改めてダーク・リベリオンの効果よ。聖杯で攻撃力が上がった所から、その数値を半分にし、ダーク・リベリオンの攻撃力に加える」

《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》 攻撃力4100↓4500
↓2250

《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》 攻撃力2500↓4750

まさか、クリアウイングの効果をこうも簡単に対処しつつ、聖杯のデメリットまで利用してくるなんて。

「バトル。《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》で、《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》に攻撃！」

クリアウイングとは対照的に、ダーク・リベリオンは床スレスレを低空飛行する。伏せカードは《緊急発進》。このターンに発動することはない。

「《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》を破壊」

ダーク・リベリオンは下顎の牙でクリアウイングを両断。破壊する。その際、フィールドを纏った余波が襲い、私は宙を舞った。

「っ、あああ！」

一応、ちゃんとフィールのバリアをつくった。なのに防ぎきれない。私は背から壁にぶつかり、その衝撃で上に積まれてた荷物が落ちてくる。

フィールで壁を作り直す余裕もなく、私は荷物の下敷きになった。「……終わった、っぽいわね」

私は意識を手放しかけてたけど、ミストランが口にしたのをきいてハツとなる。

「まだ。……終わってないわ」

私は落ちてきた荷物の山の中からいった。けど、言っただけで言っただけの、そこから出ることができない。荷物のひとつが片足の重石になって抜け出せないのだ。

試してみたもののフィールで弾き飛ばすこともできない。荷物に銃で撃つてみたもののビクともしない。こうなったら、私にできることはひとつだけだ。

「痛いだろうなあ」

いまから自分がすることを想像し、私は自分で寒気に身を震わせる。けど、やるしかない。

私は。

自分の足を銃で撃った。

「——ッ！　が、ああっ」

声にならない悲鳴。あまりの痛さに気をやられそうになる。だけど、脱出する為に私はもう一発。

「ぎあああああああッ!!」

今度は断末魔のような絶叫。ここでミストランも様子を察したよう。うで。

「ちよっ、アンタ一体なにを」

更にもう一発。

「っっっ!!」

この3発目の弾丸で、私の片足から骨や筋肉が完全に断裂したのを自覚する。ここで私はフィールで身体能力を上げ、足を引きちぎるようにして前方を這い進む。

「そして」

私は、自分の中で奥の手とも禁じ手とも思ってるこのカードをデュエルディスクに叩きつけた。

「フィールドの2体の幻獣機を、私は生贄にささげる」

本来はリリースって用語が正しいのだけど、このカードに限っては生贄って表現のほうがしっくりくるのだ。

デュエルディスクがカードを読み込む。すると、《フル・フラット》で発生した青空は黒い雲に覆われ、辺りは再び暗闇に支配される。そんな空に紫色の光で描かれたのは鯨模様のナスカの地上絵。

ここで、2体のデコイは光の粒子へと変わり、フィールドに出現したのは、一匹の鯨だった。

同時に私自身にも変化が走る。

全身の血の気が一気に引き、心が吹きざらしにあうような感覚を覚えた。肌は死者のように青白く変わり、瞳孔が開きっぱなしになる。何より、痛みが引いた。こっちは単純に足の感覚を失っただけかもしれないけど。

私はいった。

「アドバンス召喚。現れよ《地縛神 Chacu Chailhua》！」

「待つ」

ミストランは仰け反り、いった。

「地縛神って、アンタも持ってたの、命と繋がるフィール・カード」

「そういうこと」

そして、地縛神には同時に現世と冥界を繋げる力も持っている。いま私は、地縛神を召喚した副作用で冥界のフィールを取り込み、一時的に死後の世界の住人に姿を変えてしまってるのだ。とはいえ、所有者全員にこの傾向があるわけではない。冥界のフィールで姿を変えるには、ある一定の条件が必要であり、単純に私はその条件を満たしてしまっている。

その条件とは、「一度死んだことがある」だ。

溢れ出す冥界のフィール。私はこの力を行使し、思いっきり地縛神

にフィールを注ぎ込む。

「バトルフェイズ。《地縛神 Chacu Challhua》でミストランに直接攻撃。このカードは相手プレイヤーに直接攻撃ができるわ」

空に浮かぶ地上絵の下を泳いでいた鯨は、私の指示に従いミストランへと狙いを定める。

「これで終わりよ」

鯨がミストランへと襲い掛かる。しかし。

「そうね。これでアンタの終わりよ」

ミストランは最初のターンから伏せてたカードを表にし、いった。それを見て私は「あ」となる。

「速攻魔法《サイクロン》。《フル・フラット》を破壊するわ」

直後、下から甲板を突き破って巨大な竜巻が出現し、空母が墜落する演出の下、倉庫内だけ局地的な地響きが発生する。

「な……なんで」

私はつぶやくように問いかけた。

「なんでその伏せカードが《サイクロン》なの？」

それは、デュエルの序盤で「ない」と確信してた伏せカードだったのだから。

「あー」

ミストランはいった。

「エンドサイクし忘れてた」

私は啞然とした。

「ま、けど。こういうプレイングミスひとつが最高のファインプレイに変わったんだから結果的にOKでしょ」

絶望的にファインプレイすぎる。

「あ、ついでにアンタが積荷の山の中で何したのか確認させて貰うから」

竜巻はそのまま私の下へと直進し、私ではどうしようもなかった積荷をいとも簡単に巻き上げる。私は冥界のフィールでバリアを張り必死で身を護るも、隠れてた半身が露になった。

太股から下が千切れた片足。断面からは骨と肉に加え幾つもの千切れたコードが風に舞い、流れ出た血とオイルが飛沫をあげる。

それは、明らかにヒトの断面ではなかった。しかし義足でもない。

「半機人？」

ミストランがいった。

「もしくは融機人だっけ？ 現実性の無い伝説として知ってるわ。一度死んだ人間の体を機械との混ぜ物にして強引に蘇生された人間。黒山羊の実ですら到達していない、田村崎財閥の森口博士だけが踏み込むことに成功したとされる超技術。まさかアンタがそれだとはね」
私は、それに応えることができなかった。冥界のフィールを失い、足を切断した痛みが戻ってきたから。

「納得したわ。半機人なら臓器を破壊されようとも問題なく活動できておかしくないしね」

竜巻はついに上空の地上絵さえ貫き、雲を割り開いた。そこから光が差し込むと、鯨は悲鳴をあげながら消滅する。《地縛神 Chac u Chailhua》はフィールド魔法が存在しないと破壊されてしまう効果を持っているのだ。

で。
「壮大な演出と語ってる所悪いけど、私はミストランの眉間を弾丸で貫いた。それも2発。」

「っ、が……はッ」

油断大敵。フィールで護る暇もなかったせい、ミストランは白目をむいてその場で倒れた。

普通の人間なら、このまま間違いなく死亡する。しかし、

「残念だったわね。私も普通の人間じゃないのよ」

倒れたまま、ミストランはいった。

「ならッ」

お互い床に這いつくばった姿勢のまま、私は片腕をミストランに向け。
「あなたが死ぬまで、弾丸をブチ込むだけ」

冥界のフィールどころか本来のフィールも殆ど失い、意識が持つて

かれる寸前の中、私は最期の抵抗に何度も何度も銃を撃つ。が、今回はその度にフィールドのバリアを張られ、いとも簡単に防がれる。

分かっていた。不意打ちじゃない限り、弾丸でこの相手を殺すなんて不可能なこと。しかし、抵抗しないと自分が死ぬ。策を練るだけの思考も、時間さえも残ってなかったので、本当にこれしかないのだ。

デュエルは続いてたけど、私の手札は0、モンスターもない。伏せカードは幻獣機トークンがないと機能しない罠カード。一方、ミストランの場にはダーク・リベリオン。事実上の敗北なのだ。

「っ」

そして、すでにボロボロな体。何発もの発砲の衝撃に耐えられず、片足に加え今度は片腕が弾け飛び、手首の中に内蔵していた愛銃が露になった。

いよいよ、視界さえ薄れていき意識が閉じはじめる。

私の脳裏に走馬灯が流れた。その思い出の傍らにいるのは、梓。梓。梓。

「嫌だ、死にたくない……」

もつと一緒にいたいよ……梓……あず、さ……。

走馬灯の梓に、私は語りかける。必死に、必死に。そして、彼女の後姿に手を伸ばし、叫んだ。

「梓……っ!!」

私の意識は、闇に沈んだ。

MISSION 6―レズの過去1

これは、確か私がまだ中学に通ってた頃だったと思う。レズだったけど、まだいまほど性欲に生きてなくて、視野が狭くて、少しだけ厨二病な思想を患った、そんな幼く青臭い思春期の最中。そう。いま私がみてる夢は、そんな頃に起きた実体験である。



「あ、そうだ梓。夕食頃にまたお邪魔するから」
学校の帰りだった。

9月中旬。空は夕日で真っ赤に染まり、どことなく物悲しさを感じさせる。私はいつものように梓とふたりで下校していた。

「またなの？ お母さん、その度に不機嫌になるのにー」

前を歩いてた梓が振り返る。あまり歓迎しない顔をしてるのだろうけど、太陽の光が逆光してよく見えない。

「仕方ないでしょ、あのクソババ。娘の食費ひとつ口クに残さないんだもん」

「それは沙樹ちゃんが仕送りを遊びで使っちゃうからー」

「クソババ呼びは咎めないんだ」

「あ、それは……」

口ごもる梓。私は意地悪に微笑んだ。とはいっても、表情筋がうまく動かず本当に顔に表れてたかは分からないけど。

「まあ。それに、梓の家で食べたほうが無料だし美味しいし」

「それお母さんに言ったら二度と入れてくれないよ？」

「だろうね」

小母さん、私のこと嫌いだから。

「ま、だから梓にしか言わない予定」

幼い頃から、家には私ひとりなのが殆どだった。

親はシングルマザーのくせに冒険家だから家には殆どいない。それでも、私が物心つくまでは内職に切り替えてただけど、いつの日

からか「数日娘を預かってくれ」って梓の家を託児所扱いにして、その味覚えてからは完全に復帰。

それも、梓家族が外出中に私を玄関前に座らせ、小母さんが保健所に相談したら母はすでに外国、なんていうとんでもない手口で。そんな姿を目の当たりにしてるんだから、さすがの梓も私の母は大嫌いだ。さつき私の「クソババ」を否定できなかったのが何よりの証拠。

まあ、私も私で梓の家に寄生する生き方を覚えちゃったんだけどね。それも梓と仲良くなったのを馬を射るように利用しちゃった形で。だから、梓の小母さんは母も私も纏めて快く思っていない。

だけど、私は別に小母さんに嫌われようとも構わなかった。だって、私は梓さえ味方なら十分だったから。この世界に必要なのは梓だけ。他はもやしより価値のない道具だし、どう思われようとうとうと知った事じゃない。

その上、人をどれだけ信じられるかという点、実は梓でさえ信じてなかった。腹の底では私を邪険してても不思議じゃないってね。だから私は、現実から目を逸らし仮初の絆に浸るのだ。私には梓しかないから。

この世界この人生に希望も未練もない。だけど、まだ生きてるんだから。だからせめて虚像の世界で“私のことが大好きな”梓との日々を楽しませてよ。

当時の私は本気でそう思っていた。むしろ、そんな自分に少し酔ってる感さえあったと思う。

「そんなわけで梓、また後で」

その日は生活費の支払いをしないといけなかったのだ。私はもう少しで梓の家って所で立ち止まる。

「うん、でもあまりお母さん怒らせないでね」

逆光が剥がれた梓の顔は、やっぱり歓迎とは無縁の困った顔だった。それでも梓は手を振ってばいばいしてくれる。

「まあ善処はするわ」

私は、梓の後ろ姿を数秒ほど眺めてから来た道を少しだけ引き返し、バスに乗って銀行へ向かう。

事件はその途中に起きた。

「フッフ……やれ、《重爆撃禽 ボム・フェネクス》」

私は、爆破テロに巻き込まれた。

車は突如爆破し、一瞬にして世界が炎とパニックに見舞われる中、私はとっさにバリアを張って身を護る。私は、この頃にはすでにファイル・カードを所有し、ファイルを扱えたのだ。当時はそれが何なのかを知らず、特別な力という厨二な認識だったけど。

目の前で他の乗客が次々と倒れていく。爆発に巻き込まれたり、炎に包まれたり、煙を吸ってコロつと逝つたり。私はそれを冷ややかな目で立ち尽くし、次第に「この場に残ったら唯一の生存者として厄介事に巻き込まれる」と思い至り、急いでドアから脱出し、傍が雑木林だったので身を隠すために逃げ込んだ。

冷静だった。冷静だった上で、救助するという発想は脳裏を過ぎりもせず、倒れた乗客が邪魔で動きづらいとさえ思った程だった。

「利口な子だ」

声が出た。後ろを振り返ると、3人の男が立っていた。顔ぶれはそれぞれ、オールバック髪のおっサン、ワカメ髪の高校生、そして金髪ヤンキーといった所。

その内のオールバックのおっサンがいった。

「事故の中を冷静に、そしてここまで自分の身の安全の為だけに動ける者など中々いやしない」

「ん……」

なんか猿が3匹吠えてる。そんな程度にしか感じなかった私は、再び背を向け奥へと足を進めようとする。そこを。

「おっと、何逃げようとしてんだよ」

金髪ヤンキーが詰め寄り、後頭部に拳銃を突き付けてきた。

「別に逃げてません。ただ、あなたたちに視界に入れるほどの興味さえないだけです」

私は正直に、しかしわざと丁寧語でいった。もちろん、撃つならどうぞ。私にはそれを防ぐ力があるから。そんな認識だった。

「そうかよ」

ヤンキーは引き金を引いた。私は事前に張っていたバリアで防ぐ。これで、銃弾は衝撃ひとつ私に届かない。――はずだった。

確かに弾丸は私を貫通しなかった。けど、その発火で後頭部は「熱っ」となり、硝煙の匂いが鼻をくすぐる。

「っ」

ハツとなり、私はすぐ飛び退いた。

「どうして？ 私の能力なら煙ひとつ届かないはずなのに」

すると、ヤンキーは笑い、

「バーカ。フィールがテメエだけの力だと思ってるのかよ」

「ふい、フィール？」

「おいおい、まさか知らねえとは言わせねえぞ。そんな無知が許されるのは小学生までだろ？」

「よしましようよ赤司さん」

そう言ったのはワカメ頭だ。

「ああん？」

赤司というらしいヤンキーはこめかみをヒクヒクとさせ、

「どういう意味だ矢場神。事と次第によつちや手前えから殺るぜ」

「まあまあ抑えて、せめて無知の不幸に憐れんであげましようってだけですよ」

「ああ、そりやあいいや」

ケラケラ笑うふたり。私はついイラツとなり、傍の石コロを拾っては男がフィールといった力を込めて投擲。しかし。

「ナメんなよ」

ヤンキーは片手で簡単に払い退けた。普通の人間なら一発で病院送りできる威力なのに。

「嘘……」

唾然とする私に、ヤンキーはまたもや笑い。

「おいおい、さっきの攻撃ケツコー込めてたぜフィール。そんな無駄遣いしちまっていいのかア？」

「何がいいいのよ？」

「ハア？ んなモン言わなくても分かるだろ常識だろ。馬鹿にしてん

のか？ それとも池沼か？」

「そこまでだ」

ここで、オールバックのオッサンが口を開いた。

その一言でふたりが後ろに下がると、オッサンは「これだから名小屋民は」と事実無根かつ失礼なことを呟きながら、

「初にお目にかかる。我々はフィール・ハンターズという組織の者だ。早速だが、お前の持つてるフィール・カード。お前がフィールという能力に目覚めるきっかけとなったカードを貰い受ける」

「……」

私は少し考えた後、

「素直に渡さないと危なそうね。分かったわ」

と、カードを一枚抜き取って地面に投げ捨てた。

「なんだ、やけに聞き分けがいいな」

ワカメはカードを拾う。直後、

「だが残念だったな。俺はテメエらを生きさない主義でな、死ねえ！」
ヤンキーは《ダーク・ダイブ・ボンバー》を召喚し、私に向かって急降下爆撃を行った。

「ヒヤハハハハ！」

高笑いするヤンキー。そこを、私はすかさずエクストラデッキから本当のフィール・カードを召喚し、

《—————》、ダイクロイツクミラー！」

ドラゴンのモンスターが現れて私の盾になると、その翼が発光し、《ダーク・ダイブ・ボンバー》の爆撃を全て送り返す。

ただ、私はそのモンスターが何だったのかを思い出すことができない。何度同じ夢を見ても、カードに記された名前も、自分の叫んだ言葉も思い出せないのだ。

「なにっ！」

驚愕するヤンキー。そこへワカメが、

「赤司さん、これ《ゴキボール》！ フィール・カードなんかじゃない！」

その間に、私は事故現場へUターン。駆け出した。

恐らくテロを行ったのはあの3人だろう。となれば、フィール・カードの為に乗客もろともバス一台爆破するようなやつが私を生かして帰すとは思えなかった。

加えて、やつらは私を狙ってテロに出たわけではない気がする。直接狙うなら、もつと足のつかない手段に出るべきだからだ。推測だけど、私みたいな生存者を炙り出すためにバスを攻撃したのだろう。しかも、手慣れた手口から過去にも同じことをしてる可能性がある。

そんな過激な集団なのだから、私が逃げる先にもやつらは平気で攻撃するはず。なら、その攻撃に野次馬や警察を巻き込ませてもつと大事件にしてやろう。ゴキブリ民とハイエナ警が追加で犠牲になるだけで、世間や政府が無視できない事態に発展する。これでフィール・ハンターズとかいう猿山も終わりね。

なんて、私は浅知恵にして人でなしなことを考えてた。でも。

「永続罨《デモンズ・チェーン》！」

突如、空間を突き抜けて現れた鎖によって、私は拘束される。

「悪知恵を働かせおって」

やったのはオールバックのオッサンだった。

「お前にはこの私とデュエルしてもらおう」

デュエルディスクを私に向け、オッサンはいう。直後、私のディスクが強制的にデュエルモードに切り替わり、かわりに《デモンズ・チェーン》の拘束が解かれた。

「するわけないでしょ」

私は再び駆け出す。けど、見えない壁に阻まれて遠くにいけない。

「知らなかったのか？」

オッサンはいった。

「フィール・ハンターズからは逃げられない」

「待つ……」

それ、どういうこと？

「フィールを用いたデュエルの敗者はフィールもフィール・カードも失う。お前が取る方法はふたつにひとつだ。この私にデュエルで勝

ち、後に続くふたりにも勝って生き延びるか、ここで負けて死ぬかだ」
何で逃げられないのかは分からなかった。でも、分かった所で本当に私が取れる方法はそのふたつだけなのは理解できた。

「拒否権はないみたいね」

「ああ、ない」

オッサンは断言した。

「だったら、やるしかないでしょ」

私はデュエルディスクを構え、いった。

大丈夫。デュエルは学内でも強いほうだ。相手のレベル次第だけど、可能性はゼロじゃない。

当時の私は、本気でそう思ってた。

沙樹

LP4000

手札5

オールバックのオッサン

LP4000

手札5

「私の先攻だ」

と、オッサンはいうと、

「まずはこれだ。魔法カード《渇きの主》！ このカードはデッキから通常召喚可能なブラッドモンスターかレベル6以上の闇属性モンスターを1枚手札に加える。私は《魔王ディアボロス》をサーチ。ダメージリットとして私はそのレベル×200のダメージを受けるがな。そして手札から《ヴィシヤス・キマイラ》を捨て効果発動。デッキの《ヴィシヤス・キマイラ》を2枚サーチ」

オールバックのオッサン LP4000↓2600

なんて一気に手札を整える。《渇きの主》は「ブラッド」ってテーマで最大限に活きるカードみたいだけど、どうやら相手は汎用サポートカードとして使ってる様子。《ヴィシヤス・キマイラ》はタブレット画

面で確認する限り、《サンダー・ドラゴン》と同様の効果を持つてらしかった。

そして、

「《ヴィシヤス・キマイラ》は闇属性モンスターをアドバンス召喚する際、手札からリリース素材にできる。私は手札の《ヴィシヤス・キマイラ》2体をリリースし、現れる《魔王ディアボロス》！」

フィールド上に1体の禍々しい悪魔竜が出現し、

「《渴きの主》は、このカードの効果で手札に加えたモンスターを発動ターンに通常召喚した場合、召喚したモンスターの装備魔法となる。カードを1枚セットしてターンエンドだ」

召喚された最上級モンスターに装備カードが付与され、さらに伏せカード1枚。一見突破可能な布陣にみえ、私は「なんだ」と舐めてかかりながら、

「私のターン、ドロー」

と、カードを1枚引――

「ドロー前に《魔王ディアボロス》の効果だ。デッキの一番上を確認させて貰う。……ふん、いいだろう。ドローするがいい」

そう言われ、改めてドローしたカードは《幻獣機ブラックファルコン》だった。

「じゃあ、私は手札からフィールド魔法《フル・フラット》を発動して、800ライフ払って効果を使用。これで私は通常召喚を実質2回行える。召喚、《幻獣機テザールフ》そして《幻獣機ブラックファルコン》！」

辺りの光景が半透明ながら飛行甲板の上に切り替わると、奥から発進するようにして2機の幻獣機が姿を現す。

沙樹 LP4000↓3200

「さらに、《幻獣機テザールフ》の効果でトークン生成。これで私のモンスターは両方レベル7に。私はテザールフとブラックファルコンでオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

本物の夕日とフィールド魔法の晴天が重なった空に銀河が発生し、

2機は靈魂へと変わって取り込まれる。

「エクシース召喚。《幻獣機ドラゴサック》！」

こうして出現したのは、背中に《幻獣機ウォーブラン》を背負った新たな幻獣機。

「ドラゴサックのモンスター効果。このカードのオーバーレイ・ユニットを1つ取り除いて幻獣機トークンを2体特殊召喚。更にそのうち1体をリリースし、もう1つの効果で《魔王ディアボロス》を破壊。あれだけ手間かけて貰ったのに悪かったね」

トークンの内1機がドラゴサックに搭載されると、ミサイルのように発射され、ディアボロスへと突撃する。

「それはどうかな？」

オツサンはニヒルな笑みを浮かべていった。

「え？」

「罨カード《イージスの盾》を発動。このカードは私のモンスターの闘か効果による破壊を無効するカードだ」

ディアボロスの前に罨カードのビジョンが出現し、そのイラストから更に1個の大盾が出現する。ミサイル扱いのトークンは、盾に直撃するも、盾は風穴どころか焼け跡ひとつ残さない。

しかも、盾は役目を終えるとカードのイラストに戻っていく。この流れ、もしかして《くず鉄のかかし》と同じタイプ？

「《イージスの盾》は発動後、フィールド上にセットされ直される。攻撃権とトークンを消費したのに悪かったと返しておこう」

オツサンは見下すようにいった。

ドラゴサックは、この破壊効果を使ったターンに攻撃できない制約を持つてるのだ。元々ドラゴサックの攻撃力ではディアボロスを戦闘破壊できないけど。

「ターン終了」

私は、こう言うしかなかった。

とはいえ、私の場にはまだトークンが2体存在する。ドラゴサックはトークンが存在する限り、戦闘・効果では破壊されないのだから、「このターンはまだ耐えられるはず、か？」

オッサンは、私の考えをズバリと言い当てる。

「っ」

「その程度のタクティクスでこの私に勝てると思うな。私のターンだ。ドロロー」

オッサンはカードを1枚引くと、

「《魔王ディアボロス》を選択して、魔法カード《オールレンジ》を発動。このターン私はディアボロスでしか攻撃できなくなる代わりに、ディアボロスで全てのモンスターに攻撃できる」

「全体攻撃?」

「さらに、装備魔法化した《渇きの主》には、装備モンスターに貫通効果を付与する」

それってつまり、攻撃力2800での全体貫通攻撃?

私のフィールドには守備力0のトークンが2体。伏せカードはなし。

負けた。

「《魔王ディアボロス》で1体目のトークンを攻撃!」

ディアボロスは一瞬の内にトークンの至近距離に詰め寄ると、その腕でトークンを薙ぎ払う。しかも、衝撃は余波となって私に襲い掛かった。

沙樹 LP3200↓400

「が、はっ」

私は突き飛ばされて宙を舞い、見えない壁に叩きつけられた。

「更にもう1体で攻撃だ」

更にディアボロスはもう1体のトークンを腕で突き刺し、そのまま私に向かってくる。

「終わりだ。死ねえ!」

私は、壁に叩きつけられた苦しみで抵抗さえできず、ディアボロスの腕はトークンごと私の胸を貫いた。

沙樹 LP400↓0

ライフポイントが0になり、デュエルが終了する。

「あ……あ……」

ソリッドビジョンと一緒に背中の中の壁も消滅すると、私は人間にあってはいけない風穴をつくり、血を吐きながら地面に倒れた。

「この程度か」

オツサンは私を見下しながらいった。

意識が朦朧とする中、私のエクストラデッキから――
―が光になって飛び出し、オツサンの下へと渡っていく。

同時に、自分の中のフィールというらしい何かが無くなるのがわかった。

「これでお前のカードは我々フィール・ハンターズのものだ」

そんなオツサンの言葉を最期に、私は死んだ。

そう、死んだはずだった。

どれだけ時間が経ったのか。数秒のようにも何時間のようにも感じる間の後、私は暗闇の中から声を聞いた。

『キサマハ選バレタ』

私は、ぞつとした。

何か選ばれてはいけないものに目をつけられたのだと、私の直感が警告を鳴らす。このまま死ぬのを選択できるなら、素直に死んだほうがいいって。

『サア、立チアガレ。貴様ハ冥界ノ使者。邪神ノ眷属トシテ生き続ケルノダ』

「別にいいわ」

意識は混濁してたけど、それでもはつきり言った。

そもそも私はこの世に希望も見出してないし、生きる意味も未練だって無いんだから。生きてる間は仕方なく生きあがくけど、死んだのなら静かに休ませて欲しいのよ。何より、私の直感が選ばれたら駄目って言うてるのに、よく分からないのに手を伸ばしたくなんかないって話。

なんて私は訴えたんだけど。

『ダカラ選バレタ』

『サア、立チアガレ』

『マズハ、目ノ前ノ奴ラダ』

『我ラガ冥界ノ贅ニシロ』

「~~~~~つつつ！」

怒涛の勢いで嘯かれ、私は強烈な頭痛を覚える。しかも、ただの頭痛じゃない。

脳が揺さぶられる。視界が、思考が、五感がぐるぐる回転する。体だけじゃなく心にまで風穴が開いて、腐敗した風に吹きざらしになる。

『サア、主ヲ樂シマセロ。望マヌ現世デ逝キ続ケル絶望ニ踊レ』

私の意識はぐるんと反転し、そこから先の記憶はぷつつんと途絶えた。

気づくと、私はカプセルの中で寝ていた。

「……」

目を覚まし、私がつぶやくと。

「無事、起動成功ですな」

カプセルの外から声が出た。老けた男の声だった。

「待つてくださいませ、すぐ開けますわ」

更に今度は女性の声が出て、間もなくしてカプセルが開く。

私は半身起こした。ここで私は胸の風穴が綺麗ぴったりなくなっているのに気づいた。

そこはラボだった。近未来的な装置やコードで部屋中が覆われ、まるでSF世界に迷いこんだかのような錯覚を覚える。その片隅に私が入ったカプセルは設置されて、傍に白髪の老人と、(見た目)若い女性のふたりが立っていた。

その内の老人がいった。

「ここは田村崎財閥が所有する研究施設になります。そして申し遅れましたな、私は森口という者です」

「娘の鈴音ですわ」

続けて若い女性が一礼する。

「田村崎財閥？」

って何だっけ？ 名前からして凄い場所なのだろう位は分かるけ

ど。

それより。

「どういうこと？　なんで私こんな所に。それに、その財閥が私に何の用なのよ」

すると森口という老人は腕を組み、

「ふむ。少し記憶が混乱してるようですね」

「してないから。そんな混乱するほど繊細な神経は投げ捨ててるから質問に答えて」

「ふむ」

森口は言いづらそうに、

「落ち着いて聞いてください。鳥乃　沙樹さん、あなたは一度死にました」

「っ」

私が、死んだ？

記憶が曖昧だったせいか、私は素直に驚愕する。

「お父様、いきなりそこからはショックが強すぎますわ」

鈴音という女性がいう。しかし森口は続けて、

「私共は、そんなあなたの遺体を回収し体の一部を機械化させることで蘇生させた次第で御座います」

「蘇生……？」

一瞬、言ってることがわからなかった。

「待って、そんな事いわれても誰が信じれるわけ……」

「嘘だと思うなら手首を捻って間接を外し、思いつきり引っ張ってみてください」

「お父様!!」

森口を怒鳴りつける鈴音。

「沙樹さん、いまはやらないほうがよろしいですわ」

と、鈴音は言うけど。しかし、

「……」

私は、少し無言で森口に問いかけたのち、言われた通り私は手首を捻ってみる。するとカチツと人が出していけない音を発しながら間

接が外れ、しかも手首の先の感覚が完全に消える。そのまま思いつきり引つ張ると腕と掌が分離して、鉄の人口骨、人の筋肉、コードが混ざったグロテスクな断面が顔をだした。

「っ!? う、おえっ」

ショッキングな光景を前に、私は口元を押さえ、催した嘔吐きに耐える。

鈴音は慌てて駆け寄り、私の背中をさすった。けど、私はその手を乱暴に払い、

「な、なんでこんな事をしたのよ」

喉まで逆流した胃液に苦しみながら、私は森口を睨んだ。

「頼んでもいないのに。こんな体にする位なら素直に死なせてよ」

「それはごもつとも。ですが、それができない理由がありまして」

「理由?」

「ええ」

森口はいった。

「あなたは邪神を名乗る者の眷族に選ばれた。違いますか?」

言われて思い出した。

そうだった。私はオールバックのオッサンが召喚したモンスターに貫かれ、確かに死んだのだ。

死んだはずなんだけど、なんか妙な声を聞いて、それから。

「あのままですと、あなたは動く死者リビングデッドとなり、邪神の好きに体を掌握され、時に意識や記憶を書き換えられ、はたまた完全に邪神の言いなりの人形として、あのフィール・ハンターズにしたみたいに生贄を狩り続ける存在となっていたことでしょう」

「あの猿共どうなったの?」

私が訊ねると、はつきりと森口は、

「仕切っていたオールバックの男は逃げましたが、残りふたりはあなたに殺され取り込まれました」

え?!

「殺した?」

私が?

「それに、取り込まれたってどういうこと？」

すると森口はいった。

「邪神の眷属は、他者を取り込む際に被害者が所有していたカードもすべて我が物にすると思います。私たちがあなたを発見したとき、ここで見たのは、おふたりの体がまるでアドバンス召喚のリリース素材みたく光の粒子状に分解され、あなたの体に取り込まれる姿でした。恐らくあなたはデュエルする寸前で記憶が途切れたのでしょう。ですが、恐らくいまのあなたでも、記憶にはなくとも体が何か覚えているのではないのでしょうか？」

そう言われると。

私は胸の前で手をかざし、フィールドとかいう力を使う要領でカードを創造する。すると、出てきてしまった。あのヤンキーが使ってた《ダーク・ダイブ・ボンバー》。さらにワカメのカードという認識の下に、一度も使うのを見てないはずの《重爆撃禽 ボム・フェネクス》や《起爆獣ヴァルカノン》まで。

森口はいった。

「このまま放置してれば、あなたはこれからもこのような事態を引き起こすことになる。これが、私共があなたを回収した理由ですな。いま、あなたの体には邪神に身や自我を支配されないよう処置が幾つも施されております」

つまり、私はただ機械として蘇生されただけじゃないということ。それに私を回収した経緯を聞く限りだと。

「それって」

私はいった。

「逆にそっちが私を掌握してるんじゃないの？」

すると、森口は首をかしげ、

「といますと？」

「聞いている限りだと、いまの私って明らかに人類の脅威じゃない。何か目的がない限り、二度と動く死者リビングデッドにならないよう徹底的に殺処分するか、もしくは実験体としてここみたいな所で一生飼いなされるか、の二択だと思うのよね。違う？」

「……そうでしょうな」

森口は、否定しなかった。

「その上あなたは私がフィール・ハンターズを取り込む所まで見たって言ったじゃない。つまり最初から私がああなるのを予知してたって話でしょ？」

私がそこまで言うと、森口は、

「賢いお子さんだ。それでいて希望という言葉を全く考慮に入れない悲しい考えだ」

なんて少し悲しそうにつぶやいた。娘の制止をスルーして散々シヨック強いこと言いまくったくせして。

「確かに、私たちはあなたが邪神に選ばれるのを想定しておりました。ですが、実験体としてあなたを連れてきたわけではありません」

「じゃあ」

「身も蓋もないことを言いますと、これになりますな」

森口は親指と人差し指をくっつけ丸をつくる。つまり、金だ。

「実は、事件当時ナスカの地にいるあなたの母親から依頼がありました。自分の娘が邪神の眷属になる運命にあると分かったと、だから最悪の事態になる前に我々の力でその運命から救って欲しいと」

「あのクソババから？」

信じられない話だった。どうしてあの母が私を？

「費用はすでに頂いております。それとあなたの母親から『向こう数年分の仕送りを前借りした』と伝言も」

クソババだ。そんなこと言う人はクソババしかいない。

「ですが、一足遅かった。あの日私はあなたの家の前でご帰宅を待っていたのですが、そこへあなたが眷属に堕ちたとの報告を受け」

慌てて向かった結果、見えた光景が生贄として取り込まれるフィール・ハンターズだったのだろう。

「なるほどね」

確かに、いま母はナスカの地上絵の辺りにいたはずだし、母絡みの内容的に信用するしかない。

「大体、事情は分かった」

私は静かにいって、現状を受け入れた。
涙はでなかった。

「普通なら泣き叫んで錯乱して当然なのに。あなたはとても強い子
ですのね」

鈴音は、私の頭を撫でていった。

そんなはずはなかった。

その日の深夜。私は部屋中の機械を破壊した後、施設を脱走したの
だ。

泣き叫ばなかった？

錯乱しなかった？

だから私が強い子？

おかしすぎて笑いが出る。私に錯乱できる感情とか泣き叫ぶだけ
の涙があるなら、私は毎日錯乱したし泣いてただろう。そんな感情が
消えうせる程、生前からとくに希望もクソもなくなってたただけだ。

おまけに、その一番の原因がクソババのくせに、そいつの金で助
かったときたものだ。もう笑えてくる。

「ああ、助かったとは限らないんだっけ」

一度死んで、機械になつて蘇生されたというなら、果たして私は本
当に「鳥乃 沙樹」なのだろうか。

いまの私の心が「沙樹」というヒト科を模した人工知能だって可能
性もあるわけだし、実はクローンだって可能性もある。

実は取り込んだファイル・ハンターズのカードを創造できたことが
私が鳥乃 沙樹である証拠だったのだけど、そこに気づかない程度に
は、ちゃんと平常を失ってたのだ。私は。

道中、スリで財布を確保し電車に乗り、自宅近くの駅で降りる。目
的地は、梓の家だった。

私は梓を襲おうと思っていた。それも強○、○害両方の意味で。

それは復讐だった。それは自傷だった。それは嘆きだった。

鳥乃 沙樹には梓しかいなかった。

沙樹にとっては梓は幼馴染であり、心の拠り所であり、ただひとり

心を開ける存在であり、密かに想いを寄せ、この世の全てを敵にまわしてでも護りたい存在だった。例えば相手の笑顔が偽物であっても。

だからこそ、沙樹の姿をしたナニカである私は、自分の中の沙樹を否定する為に沙樹の全てである梓を踏みにじろうと思ったのだ。

そういえば。私は外のホームを出てやつと気づく。

まだ夏だと思ってたのに、外は異様に寒かったのだ。たまらずホットコーヒーを買おうとコンビニに入ると、室内の放送で今日が12月24日、クリスマススイブなんだと知った。

すでに、沙樹の死後から3ヶ月が経過してたのだ。

私はホットコーヒーを飲む。缶が冷え切った手を冷やし、熱い液体が喉を通ると、あの日梓との夕食を食べ損ねたと思いついた。

それだけじゃない。梓との思い出が3ヶ月も空白になったのだと、その間のイベントである中学最後の体育祭や文化祭も梓の傍にいれなかったのだと、ただただ梓のことばかり考ながら、私は初めて涙を流した。

沙樹は、梓との日々がとにかく幸せで、楽しかったのだ。

コンビニを出て、私は再び梓の家向けて歩き出す。

程なくして雪が振りだした。

「あ」

珍しい、ホワイトクリスマスだ。私は足を止めて夜空を見上げる。

黒一色の世界から、ひらりひらりと白い雪が舞い降り、電灯の光がそれを照らす。こうして静かに眺めると、中々に幻想的な光景にみえた。

梓も、いまごろ夜空を見てるのだろうか。私の中では結構ロマンチストな印象があったから、窓から見上げ「きれい」なんて呟く幼馴染の姿が容易に想像できる。

でも、なぜだろう。

これは、私の想像の梓。なのに、その梓の目が笑ってない。とても哀しそうに、まるでいまにも泣き出しそうな目してたのだ。

どうして、そんな顔をするの？

私は、空想の先にいる梓に語りかける。そして、ハッと気づいた。

「ああそっか。沙樹が梓を置いてひとり逝っちゃったからか」

実際の梓が私のために泣いてくれただろう自信は正直ない。たぶん小母さんは嬉しさに泣いただろうけど。

だから多分、私が視た梓は願望。

このくらい梓の中でも沙樹が大きな存在であって欲しいって願いなのだ。だから、本当の梓がいまどう思ってるかなんて分かりっこない。

でも。

「梓……会いたい」

私は夜空につぶやいた。

早く梓を安心させてあげたい。梓の笑顔を取り戻して、梓の温もりを確かめて、この夜空を梓と共有したい。

私は沙樹じゃないかもしれない。でも、梓への想いは沙樹そのものなだから。

その時だった。

「沙、樹、ちゃん？」

不意に声が聞こえた。

「え？」

私は前を見渡す。

そこには、梓がいた。

ダツフルコートとマフラーそして手袋の完全防寒体制で、白い息を吐きながら、信じられないものを見たような目で。

「沙樹ちゃん。沙樹ちゃんだよね？」

もう一度、梓はいった。その瞼が、その声色が段々涙で滲んでいく。

「梓……」

「どこ、行ってたの？ ねえ、どうして勝手にいなくなったの？ 私、心配したんだよ。私……私い……」

それは、同じ顔だった。

哀しげに空を見上げる空想の中の梓の顔と。ううん、空想よりもっともつと私の為に泣いてくれる梓がそこにいた。

「沙樹ちゃん、沙樹ちゃああああん！」

梓は小走りで飛びつき、私の胸でわんわん泣きだす。

彼女の体温が、涙が、とても暖かい。

なのに、その温もりは鋭い氷の刃のように私の心を突き刺す。

いや、違う。

冷たい氷は私の心のほうだ。梓の温もりに触れ、やっと私の心がどれだけ冷え切ってたのか気づいたのだ。

私は。

「……。……全て棄てようと思った」

気づいたら、胸の奥の気持ち語り始めていた。

「私が沙樹じゃないかもって重圧に耐え切れなくて、いっそ沙樹の生きる理由も生きた形跡も全て壊せば楽になれると思った」

「沙樹、ちゃん？」

「でも」

私は笑った。泣きながら微笑んだ。今度は表情筋もちゃんと動いてる。

「無理だったよ。梓の顔を一目見たら、とてもそんな事できなかつた。私が沙樹かじゃない。そんな事したら私が私として二度と立ち直れそうにないのよ」

それがどんなに救済だったか。梓の中で私がどんなに大きな存在かを知って、梓に酷いことをせず済んで。

3ヶ月梓を哀しませた後悔があつて、償えることができるんだって喜びがあつて。

何より、私の生きる意味がこんな近くにあつたのだ。

「ただいま、梓」

私は梓を抱きしめた。

梓は、涙でぼろぼろの顔で私を見上げ。

「おかえり、沙樹ちゃん」

微笑んでくれた。



私の名前は鳥乃 沙樹（とりの さき）。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「あず、さき……っ」

なんて、自分の声で目を覚ました私は、あまりの夢見の悪さで寒気と恐怖に襲われる。あの夢を見た後はいつもこうだ。死の体験と悴の涙が脳裏に焼き付いて離れず、しばらく布団から出られない。

「（あれ？）」

と、私は自分が寝てる場所の違和感に気づいた。家の寝室でもなければ、事務所の仮眠用ベッドでもない。

私は、カプセルの中で寝かされていたのだ。辺りを見る限り、ここは田村崎研究施設。それも私を半機人なんかにした場所だ。部屋全体が装置とコードで覆われた、まるでSF世界のラボみたいな光景が広がっている。

「（あ、そういやそうだったけ）」

ここでやっと、私は黒山羊の実のミストランに負けたのだと思い出した。本当なら私は殺され、再び目を開けることもなかったはず。救援が間に合ったのだろうか。

程なくして夢の余韻が抜けた頃、不意に私のカプセルが開いた。

「おはようございますわ」

鈴音さんだった。いつも着ているスーツの上に白衣を一枚羽織り、カプセルの横にパイプ椅子を置いて座っている。夢とは違い、森口……いや、死者を機械化蘇生する技術の第一人者である森口博士の姿は見当たらなかった。

「おはよう鈴音さん」

私は半身起こす。気づくと、もげた片腕片脚が復元されてた。

「なんか私助かっちゃったみたいね、幸運なことに。助けてくれたのは、鈴音さん？」

「いえ」

鈴音さんは首を振り、

「確かに、こちらにあなたを運んだのは私ですけど。どういうわけか、ターゲットはあなたにとどめを刺さずに立ち去りましたわ」

「え？」

私は軽く驚き、

「どうして？」

「私にも分かりませんわ」

言いながら、鈴音さんの瞼が閉じかけ、一回こっくりする。その様子だけで寝ずに私を見てたのが分かった。

「とりあえず、任務は失敗ですわ。復帰次第、始末書を提出下さいませ。私もまだですから、一緒に終わらせましょう」

「はい」

そう言つて、私は再びカプセルに横になる。

「また、あの日を夢見たようですわね」

鈴音さんはいった。

「……うん」

どうやら鈴音さんにはお見通しだったらしい。

——あの後。

梓と一緒に数ヶ月ぶりに自宅へと向かうと、そこには玄関前で鈴音さんがひとり待っていた。

雪除けに傘は差してたけど、施設にいたままの格好で防寒を全くせず。真冬の夜にひとり。

あの時は何でいるのとか思ったけど、この人は面識も殆どなかった人間の為に、施設の損害やパニックよりも優先して私を追いかけたのだ。誰かの指示だったり、役割分担で来たなら上着の一枚羽織る余裕はあるだろう。

それだけじゃない。

あれからすぐ私は調整や検査の為に施設へ連れ戻されたんだけど、そこでも甲斐甲斐しく世話をしてくれたのも鈴音さんだった。

「あの時はほんと迷惑かけたわ」

當時を思い出しながら、私は呟くと。

「私も経験してますもの気になさらないでくださいませ」

と、鈴音さんは優しく返してくれる。実は鈴音さんもまた半機人だったのだ。

彼女は、父親である森口博士の研究中に起きた爆発事故に巻き込まれ、母親と一緒に死亡したらしい。その後、脳に損傷がなく四肢が残った鈴音さんだけ回収できた森口博士は、娘を蘇らせる一心で研究を重ねた末に半機人としての蘇生に成功したらしい。

「それでもね、悪夢のついでにちよつと言わせてよ」

私は、少しずつ襲ってきた微睡みに身を任せながらいった。

「ありがとう。鈴音さんいなかったら、私絶対に立ち直れなかったわ」
鈴音さんは、まるで義母か姉のように私を大切に扱ってくれた。実際、ある意味姉妹機ではあるんだけど。それでも、母親の愛を知らず、梓以外を信じられなかった私には、鈴音さんの存在がどれだけ身に沁みたか。

こういう言い方は恥ずかしいけど、私は鈴音さんに懐いてる。

世界で一番大切なのはもちろん梓だけど、私はこれからも彼女にだけは心酔にも似た感情を抱き続けるのだろう。

なんて考えてる内に、いよいよ私の意識が遠くなってきた。

鈴音さんは私の頭を撫でる。

「おやすみなさいませ、沙樹。私の大切な——」

私の意識は途切れた。最後の言葉は妹だったのか娘だったのか、どっちかだった気がするけど上手く聞き取れなかった。

今度の夢は、子供の姿の私が鈴音ママの膝枕で甘える夢だった。

MISSION 7―2年越しの遺言（前編）

私の名前は鳥乃とりの 沙樹さき。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「女学生が被害にあう殺人事件ってさ。痛々しいわよね」

美術展から二日後の金曜日。

「今日も私は、前の席に座る梓と取りとめのない談話をしたた。

「あれ？ 今日の沙樹ちゃんまともな事いつてる？」

「ちよつと、それまるで普段の私はまともな事言つてないみたいに」

「だって本当に変態な話しかないんだもん」

梓、酷い。

「でも、どうして突然そんな善人みたいなことを」

「まるで私が悪人みたいなの」

「だって本当に昔から悪い子だったもん沙樹ちゃんて」

「そんなまさ。……ごめん言い返せないわ」

どうしよう、自分の子供時代を頭の中で辿ってみたけど、梓を護つたこと以外一度として良い子した覚えないんだけど。むしろハングドに入つてよりアウトローな人生辿つたいまのほうが善行してる気がする。

「まあいつか」

私は気を取り直し、

「いやほら。せっかくの若くて可愛い果実なのに殺しちゃうなんて勿体無いと思わない？ 憤りを感じるわけよ、レズな私は」

「前言撤回。いつもの沙樹ちゃんだったね」

なーんだって顔しながら、だけど梓はどこか安心してるように映る。

「おろろ？ なんか嬉しそうね梓。何なに、ついに私のゲスエロトクが癖になっちゃった？」

「違うよー。あーでも、ゲスでスケベなトークしてる自覚はあったんだ」

とか言いながら、梓は幸せをかみ締めるように一度瞳を閉じ。

「ただね。突然変な事いうから、昨日の間に沙樹ちゃんまた人が変わっちゃったのかなって」

「梓……」

「美術展のあと、沙樹ちゃん突然昨日学校休んじやうだもん。お見舞いに行っても沙樹ちゃん家にいないし、藤稔さんに聞いても会っていないっていうから」

「どうやら、梓には私が一度死んで半機械化蘇生してた間の、行方不明扱いになってた数ヶ月のトラウマを刺激してしまってたらしい。」

「ありがとう。戻ってきてくれて」

「梓……」

「どうしよう。すごく抱きしめたい。それでもって、押し倒して私の存在を文字通り梓の体に刻み込みたい。」

ああ、もう。

何でこうも可愛いのも私の梓は、私の天使は。

レズりたい！レズりたい！レズりたい！

「あ。そうだー」

突然、思い出したように梓はいった。

「沙樹ちゃん。中学の頃同じ学校だったロコちゃん覚えてる？」

「え？ うん、まあ」

とはいえ、私にとつては中3の頃同じクラスだった程度の面識しかなく、本当に一応ねって程度だけど。あ、そういえばロコちゃんと梓は友達だったっけ。

本名『川泥^{かわで} 炬子^{ろうこ}』。背がちよつと低めで、ツインテール髪の小動物みたいな子だったはず。

「一昨日。美術展から帰った後、久々に連絡があつただけ。変な事を聞くんだよー」

「変なこと？」

「『ハングド』を知らないか？ って」

「ぶふっ」

不意打ちだった。

予想もしてなかったタイミングで出てきたワードに、私は自分の唾

液でむせる。

「けほっ、けほっ」

「だ、大丈夫？ 沙樹ちゃん」

「ん、な……なんとか」

それでも咳が止まらず、私は一旦机に伏せて収まるのを待つ。程なくして落ち着くと、梓はいった。

「もしかして、その『ハングド』っていうの知ってるの？」

「い、一応ね」

私は、自分がその構成員だつてことは隠したまま、

「シティーハンターって漫画の始末屋スレイバーみたいな事をしてるキチ集団だったかな？ 私、レズ性犯罪者として狙われたことあるのよねえ」

これ実は嘘はいつてない。

実際にあつたのよ。殺しの依頼がきて他の構成員が任務に当たつたけど、ターゲットを調べたら私だつたつて話が。

「そ、そうなんだー」

案の上、梓はドン引き。けど、むせちやう程に反応した以上、下手に「知らない」とか「噂には」なんて誤魔化して疑われるよりはずつといい。

「じゃあ、沙樹ちゃんお願いできる？ もしハングドを知ってる人がいたら伝えて欲しいって伝言まわされたんだけどー」

「まあ無理だと思うけど一応ね」

すると、梓はいった。

『ドラゴン・キャノン』だつて」と。

先ほど例えに挙げたシティーハンターという漫画にはXYZというワードがある。

これには『もう後がない』という意味が込められてて、作中では駅の掲示板にこの3文字と連絡先を書くことが主人公への依頼方法だ。

対し、基本的にハングドでは外部の仲介業者を伝つて事務所に依頼が通る仕組みになっている。その方法は複数存在するものの、悪戯を避ける為、そして関係者・依頼者双方の個人情報が出ない為にも、

定期的に方法は変更されつつ隠蔽され、難解な経緯を経て事務所にたどり着く。どちらかというところゴルゴ13に近い。

しかし、これとは別に緊急の抜け道も用意されている。それが『ドラゴン・キャノン』だ。

方法は簡単。手段を問わずハングドに所属する誰かの耳にこのワードを届けばいい。

ただし、この手段を取れば、依頼した事実は確実に外に漏れ、個人情報や命の安全に支障をきたす。事実、過去に学生が悪戯目的で『ドラゴン・キャノン』を叫び、結果過剰反応した無関係の犯罪者の手によって殺害された事例が存在する。

また、組織側にとつても、依頼に危険性が上がる為に通常より高く金銭を要求せざるを得ない。これらを全て受け入れ、それでも『もう後がない』と訴えられる者だけに、この手段を取ることが許されるのだ。

このワードはデュエルモンスターズの《XYZ―ドラゴン・キャノン》から取ったもの。

そう、ロコちゃんはハングドに向けてXYZを叫んだのだった。

「あ、ロコちゃんいたいた」

その日の放課後。私は早速ロコちゃんの学校に足を運び、接触を図ることにした。

張り込みを続けて数十分。校門を出て帰る所だったロコちゃんは、「えっ」

と、私を見ていった。

相も変わらずツインテール髪に小動物みたいな愛らしさ。けど、二年の歳月の賜物だろうか、頭身が少し上がり、それに伴い色気が増したように見える。まだ平均より背丈は低いと思うけど以前ほどではない。まったく、一丁前にロリ系からJKにランクアップしちゃって。犯りたい。

でも、そんな彼女だけどいまの表情は完全に沈みきってる。何かあったのは間違いなさそうだった。

私はそんなロコちゃんに近づいて、

「久しぶり、覚えてる？ いつも梓と一緒にいた鳥乃 沙樹よ」

「う、うん……」

ロコちゃんは暗い顔でうつむいたままだ。心もここにあらずって感じ。

「あれ？　もしかして本当は覚えてなかったり？　まあ、中学時代あまり接点なかったもんね」

「ううん、覚えてはいるよ？」

慌ててロコちゃんは否定した。ううん、正確には「慌てる」って感情を必死に搾り出し、取り繕って、かな？　ただ、嘘を突き通そうとしてる感じではない。

「でも、どうして私の学校に」

「いやー。今日梓からロコちゃんと久々に話したって聞いてね、思い出したら異様に会いたくなかったってわけよ。中学時代殆ど口交わせなかった心残りってやつなのかな？」

「そ、そう……」

「だから。最後の授業フケって来ちゃった」

なんて笑いながらいうと、

「そうだったんだ。……って、えーっ！！」

ここで、やっとロコちゃんから暗い顔が吹き飛んで消える。うん、可愛い。やっぱりこの子も暗い顔は似合わないわ。

「そう驚くほどでもないでしょ。学校同じだった頃から私不良美少女だったし」

「そ、そうだけど」

なんて、ロコちゃんは一同意しかけるも、

「でも、やっぱり驚くことかも」

「え？」

「沙樹ちゃんが、アズちゃん梓以外の子に会おうとするなんて」

「あー確かに、中学時代は卒業間近まで梓以外に心開いてなかったしね」

「自分で美少女っていうキャラでもなかったよね？」

「あれ？　そだっけ？」

と、一瞬思ったけど。

「確かに」

ああ、そういや当時は軽いノリもおふざけも梓の前限定だったっけ。その梓の前にしても、自分を美少女とは言わなかった。

「振り返ってみると、いまの私別人ね」

「うん……」

ロコちゃんは再び暗くなる。地雷に触れたわけじゃない。たぶん私が焚きつけた興奮が収まってきただけだろう。

「うーん、勿体無い」

なら、趣味と実益兼ねてまた興奮させてやればいい。私は彼女の背後にまわった。

「え?」

「ロコちゃん高校デビューしてこんなに可愛くなったのに、そんな暗い顔しちや魅力半減じゃない」

なんて、彼女の胸を驚づかみ。

「え、きやつ」

「ほらほら笑って、それとも笑顔じゃなくて私好みのアへ顔が希望?」

おお、これは意外とC以上? この子こんなに素敵に膨らみ持ってたのね。もみもみもみもみ。

「え、ちよつ、沙樹ちやつ」

ロコちゃんは顔を真っ赤に硬直する。しかし抵抗しないので、さらに私はスカートの上から下着をずらし、太股を撫でる。

「つつつ」

しかし、やっぱり逃げないし暴れない。だったら。

「抵抗しないの? ならラブホいこつか」

「え? え、え、えええっ!?!」

ここでやつとロコちゃんは拘束する腕を振り払い、涙目の怯えた様子で私を見る。残念。

「さ、沙樹ちゃんってそういう趣味だったの?」

「あれ? 知らなかったっけ? 行方不明から帰還した後、割と問題起こしてた自覚あるんだけど」

「あ……」

思い出したらしい。ロコちゃんは引きつった笑みを浮かべ、そーつと私から距離を取ろうとする。酷い、レズと知った途端に拒絶するなんて！

そんな時だった。ロコちゃんに向けられた攻撃的なファイルに気づいたのは。直後、遠くから何か金属が太陽の反射でキラリと光る。「危ない！」

私は瞬時にロコちゃんに飛び込み、彼女を抱えながら地面へ倒れこむ。同時に、ロコちゃんが立ってた場所へ銃弾のように何か突き抜け、着弾した場所を基点に電磁波が発生し空間が歪んだ。その際、ロコちゃんの手から離れた学生靴は空間の歪みに巻き込まれ、この場から消えてしまった。

「大丈夫？」

私は、辺りを警戒しながらロコちゃんを気遣う。

「う、うん」

ロコちゃんは怯えながらも小さくうなずいた。私はそんな彼女を立てさせてあげ、電磁波のあつた地点を確認する。

地面には1枚のカードが落ちていた。拾うと、それは《亜空間物質転送装置》だった。恐らく私が間に合わなかったら、いまごろロコちゃんは一瞬で別の所に転移されてたのだろう。

「沙樹ちゃん、いますぐ逃げて」

ロコちゃんが、怯えながらいった。

「いま、実は私狙われてるの。私と一緒にいたら沙樹ちゃんまで危険な目に遭っちゃう」

そんなロコちゃんに私は、

「悪いけど、それはできない相談ね」

と、マジな顔で返す。

「え？」

「だって私、その危険からロコちゃんを護りに来たんだもの」

「沙樹、ちゃん？」

きよとんとするロコちゃんに私は、

『ドラゴン・キャノン』でしょ？』

「!?」

驚くロコちゃんに、私はいった。

「改めて自己紹介させて頂戴。私は鳥乃 沙樹。ハングドの構成員よ」

改めて依頼の確認を取るため、私はハングドメンバー行きつけの喫茶店へと足を運んだ。

孤児院の近くに建てられたその店の名前は、『喫茶なばな』。

和と昭和レトロの混ざったどこか懐かしく落ち着いた内装になっており、白熱電球の明かりが暖かい。席は長いカウンターとボックスが幾つか。

客は、一番隅のボックス席に小学生くらいの女兒がひとりシヨットグラスで水らしきものを飲んでいた。

私たちはその隣、隅から2番目のボックス席に対面で座る。

「沙樹ちゃんは、ますがわ たえこ鱒川 妙子って子覚えてる?」

ロコちゃんは早速切り出してきた。

「覚えてますとも。中学時代はロコちゃんより妙子のほうが面識あったくらいなもの」

ああ、そこに絡むのね。

私は早速胸の痛む思いをしながら、水を一杯口に含む。

「じゃあ、いま妙子がどうなってるかは」

「ニュースで見た程度なら」

妙子は、すでにこの世にはいない。

今年の3月、ちょうど春休みの時期だったかな。山奥での遭難事故だった。

妙子は、母親に捨てられ、この喫茶店の傍に建ってる孤児院で暮していた。同じく母親に人生を狂わされた者としての同情か、私も少しは気にかけてたし、口を交わしたこともある。ただ、私が半機人になってからの荒れてた時期は、妙子も切羽詰まった様子で互いにお互いを視界に入れる余裕がなく、ついに口を交わすことなく卒業そして音沙汰ないまま今日に至った。

「私、妙子と幼馴染だったの。まだ、あの子に母親がいた頃からの」

ロコちゃんはいった。

「妙子ね、中3になって他県の学校から来ないかって誘われてたみたいなの。だけど、妙子は言ってくれた。私は行く気はないって、地元で一緒の高校に行こうって。だけど」

「行っちゃったのよね。他県の学校に」

「うん」

ロコちゃんはどうも。

その話は、私も以前任務の流れで孤児院に足を運んだ時に聞いていた。ついでに顔見せようと思ったなら、もういないってね。

「妙子は、約束を破って行っちゃったの！ 私、最初は寂しかった。そして憎んだ。裏切られたと思ったよ！ だって、あれから妙子から一度も連絡来ないんだもん！ 引越先も教えてくれなかったし、私……」

彼女の嘆き叫びが静かな喫茶店に響き渡る。けど、「声抑えて」とは言えなかった。言えるわけがない。だって、その結末が。

「……それから1年後。私はニュースであの子が死んだって知った。捜索願は出されてなかったけど、山奥に迷い込んで餓死したって」
「だったよね」

何となく、ロコちゃんと妙子の関係が私と梓に重なって見えた。もし私が行方不明のままそして遺体で発見されたとしたら、いまごろ梓も、って。

10秒だったか10分だったか、うって変わって沈黙がふたりを支配した。注文したコーヒーは、まだどちらも手をつけてない。

そんな沈黙に耐えきれず、いまなら堂々とテーブルの下に潜って下着覗いてもバレないかな？ なんて考えだしちゃった辺りで、

「私ね、おかしいと思ったの」

ロコちゃんが、消え入る声でいった。

「どうして捜索願が出されてなかったのかなって。それに、死後何日経ってたとか報道されなかったし、何より妙子って山登りする子じゃないはずなのに」

「実際、圧力が入ったみたいによく報道されなくなったしね」

私の言葉に、ロコちゃんはごくんとうなずく。

「だから私、調べようと思ったの。この事件、絶対なにか裏があるって確信があったから。そしたら先月、家のポストに『これ以上関わるな』って脅迫状が入ってて、数日前はついに誘拐されかけ、そして今日も」

「明らかに狙われてるね」

「うん」

ロコちゃんは同意しながら、

「ただね、これを見て？」

と、懐から一枚のカードを取り出し、私に見せてくれる。それはデュエルモンスターズの魔法カードだった。しかし、カード名とイラストは塗りつぶされ、テキスト部分に『君は既にドラゴン・キャノンだ。これ以上関わったらいけないらしい』と何故か他人事なメッセージ。しかも。

「ドラゴン・キャノンね」

まるでハンドグドを頼れとばかりの専門用語。犯人がこんな文章を送りつけるとは到底考えられない。恐らくこれは脅迫状ではなく、彼女に危険を知らせたいが為の助け船。

「最初は意味が分からなくて無視してたんだけど。誘拐されかけてから意味を調べて、それでハンドグドに辿りついたの。沙樹ちゃん、もしかして沙樹ちゃんがこの脅迫状を？」

「残念だけど」

私は首を横に振り、ここでやつとコーヒーを飲む。すでにぬるい通り越して中途半端に冷たくなっていた。

「そっか」

と、残念そうにロコちゃんもコーヒーに手を伸ばす。口に入れた途端、落胆が倍増したのが見てとれた。

「……」

再び、ロコちゃんは無言になる。ただし、今回は単純に話す言葉が見つからないからに見えた。もちろん、コーヒーが温くなっていたことへのショックでもない。

「依頼するに至った経緯はこれで全部？」

「え？ う、うん」

ロコちゃんは慌てていった。しかし、どこか歯切れが悪い。どうやら胸の中に溜め込んだものは吐ききってないみたいだった。

「大丈夫？ まだ話してないこと、あつたら教えて頂戴」

「ううん。大丈夫」

ロコちゃんはいった。うーん、聞き出したいけど、いまは交渉に話を進めるしかなさそうだ。

私は懐から契約書を出す。

「了解。じゃあ、改めて依頼内容を確認してもいい？」

「あ、うん」

ロコちゃんはどうなくも、

「えっと、この場合、どこまで頼んでいいの？」

と、早速少し困った様子。

「割とどこまででも。ただまあ、一応経緯を聞く限りだと、探偵と護衛って所？ 具体的にはロコちゃんを四六時中護りながら妙子の調査も同時に行うって所」

「じゃ、じゃあ。それでお願いします」

嬉しそうに、ペコりと頭を下げるロコちゃん。

「分かった。じゃあ、もし……っていうかほぼ確定と思うけど、妙子の死に事件性が発覚した場合、犯人の処遇はどうすればいい？」

「どうって……」

きよとん、とするロコちゃんに私は、

「ぶっちゃけ、逮捕に留めるか、殺すか」

「っ」

殺す。と聞いた途端、ロコちゃんの全身が震え上がる。

「まあ怖いこと言ったと思うけど、ハングドってそういう所だからね。もちろん、命を奪うのを良しとしないなら私たちもその希望に従うけど」

「よかった。なら、逮捕で」

ほっとした様子でロコちゃんはいった。

「了解。じゃあ、問題の依頼料なんだけど」

今度は私がちよつと躊躇いながら、けど内心ある意味嬉々として、「今回の依頼は『ドラゴン・キャノン』だから、悪いけど普通に依頼出すより高くついちゃうのよね」

「そ、それなんだけど」

ここでロコちゃんは食いついた。

けど、すぐに目を泳がせ、深呼吸をすーはーすーはー、そして再び目を泳がす行為を何回か。なにか言いづらい事なのだろうか。

「なに?」

私が聞くと、ロコちゃんは意を決した様子で冷めたコーヒを一気に飲み干し、

「沙樹ちゃんごめんね。……依頼を受けてくれる人、指名させて!」

「え?」

ちよつ、このタイミングで?

「あれ? 私じゃ駄目って感じ?」

「ご、ごめんね」

まるで顔文字の(◇◇)な顔をして手を合わせるロコちゃん。

そんな!?! もう少して夜のライディングに誘えそうだったのに。

そうよ。嬉々してた理由は不足分を体で払ってもらおうとか、そういう企みだったのよ。ううつ。

私は、ちよつとどころじゃなく動揺しつつも。

「ん、まあいいけど。誰を指名?」

なんとか訊ねる。

するとロコちゃんは、「うん」とうつむき、申し訳なさそうにいった。

「えつと。『レズの肌馬』って人、ハングドに……いる?」

「は?」

いま、なんと?

「もしかして、いない?」

「う、ううん。いる、けど」

私は、ある意味もつと動揺した。私。それ私だから。

「あのね。私、実は依頼できるほどお金なくて。一応、頑張ってるアル

バイトしてるからちよっぴりはあるけど、それでも払えそうになくて」

まあ当然である。腐っても裏稼業、幾ら変態集団でもそういう組織なんだから。このご時世、社会人でも難しいのに、学生が払えるわけがない。

「だけど、ハングドの『レズの肌馬』って人は女の子限定だけど、条件付で立て替えてくれるみたいで」

あれ？ これもしかして元同級生の口から体で払います宣言？

それも自分から。なにこれ、背德的すぎて天国なんですけど。

「ごめんね。私、その『レズの肌馬』さんに頼らないと依頼頼めなくて。だから」

言いながら罪悪感で小さく丸まっていくロコちゃん。

それでも、もう一度意を決し、

「沙樹ちゃん。私に、その『レズの肌馬』って方を紹介して？ 私、何でもするから」

「ん？ いま何でもって」

「うん。私にできることなら、だけど」

マジレスされた。しかも肯定。

まあ、それはともかく、

「我が世の春がきたあああああああ！」

とりあえず、私は吼えた。

「えっ？」

途端、ビクツとなって私を見るロコちゃん。

でも仕方ないじゃない。獲物が逃げたと思ったら自分から捕まりにきてくれたんだから。

「我が生涯に一片の悔いなし！」

続けて私は立ち上がり腕を振り上げる。『レズの肌馬』大勝利
希望の未来へレディ・ゴー！

「え……………えっ」と

一方、ロコちゃんは目を丸くし、ぽかんと私を見上げる。

私は契約書の依頼料の覽に0を書いて、

「交渉成立ね。じゃ、ロコちゃん。改めてその依頼、受けさせて貰うわ」

「え？　でも私はレズの肌馬さんを指名して……あ」

「ここで私がレズなのを思い出したのだろう。ロコちゃんはハツと
なった。」

「もしかして、沙樹ちゃんがその『レズの肌馬』さんなの？」

「Yes, I do.」

興奮のあまり、私は英語で答え（しかも使い方間違え）てしまう。

「沙樹ちゃん、だったん……だ……」

眩くロコちゃん。そして、力が抜け過ぎたのか椅子に座った姿勢のままだらんとなり、テーブルの下へと滑り落ちてしまう。

「ちよつ、ロコちゃん大丈夫」

私は軟体動物みたいになってるロコちゃんに手を伸ばした。

「ごめんね、大丈夫……たぶん」

ロコちゃんが手を受けると、優しく引つ張りつつ、途中から両手で抱えるようにして救出。隣の席に座らせた。大事なことなので2度言いました。私の隣に座らせた。

「良かった。沙樹ちゃんが噂の『レズの肌馬』さんで」

さりげに私はロコちゃんの肩に腕をまわし、抱き寄せるみたいなきとしたんだけど、ロコちゃんは身の危険に気づいてない様子。

「本当はね、調べた所だと本当におすすめでできない最終手段つてなつてたから凄く怖くつて」

最終手段なんてとんでもない。これは後でそのサイトを聞きださないとい。

「でも、辛かったー。友達に向かってチェンジだなんて、もう二度と言いたくないよー」

「どうやら、これが胸の内に溜めてた最後だったらしい。心底安心したロコちゃんは、ほっと力が抜け机に突っ伏す。」

「ところで沙樹ちゃん」

「ん、なに？」

「依頼料の話なんだけど、どうすれば立替えてくれるの？」

「……あれ？」

と、ロコちゃん。

『ドラゴン・キャノン』だからその100倍でも足りないんだけど、払えそう?」

「さ、300万いじよ」

驚愕するロコちゃん。だけど、

「そっか」

金銭的に現実を突き付けられたせいだろうか。突然、ロコちゃんはクールダウンを始め、

「そうだったね。私、レズの肌馬さんを指名してる時点で後がないだった」

と、私を真直ぐ見る。

「沙樹ちゃん。お願い! その条件でいいから、だから助けて!」

その目には強い決意が溢れていた。

「わかった」

私はいった。

「金銭面は心配しないで、可能な限りこちらで立て替えるから。その分、体の心配は覚悟して貰うけど」

いつの間にか、時刻は17:30を過ぎていた。

店内からはジャズが流れ、店は「落ち着いた」をそのままに大人な空間へと変わっていた。

実はこの店、昼と夜でふたつの顔を持っていて、夜は『BARなばな』として営業してるのだ。

店員が看板を変えるのを確認してから、

「ってわけだけど。何か知らない?」

私は隣のボックス。つまり私たちが来たときからいた女兒に話しかけた。

「え?」

突然のことにロコちゃんは驚き、そーっと隣のボックスを覗き込む。

「ハラショー」

女兒はいった。

それはロシア語だった。しかし本場のアクセントは全く見受けられず、どう聞いても日本式の発音。

「日本育ちだからね」

女兒はなんかナチュラルに地の文に返事をしながら、

「とりあえず面会料から頂こうか」

と、私に請求する。

「いま飲んでるの。店からサービスで渡されたものでしょ？　そういうことよ」

「スパシーバ。^{ありがとう}交渉成立だよ」

女兒は私たちのボックスへと移動し、ちやうど開いてた私たちの対面の席に座った。

それは白人だった。腰まで届く銀の長髪に透き通るような色白の肌。帽子を深く被り、一見ポーカーフェイスのようにも見えるが、その目つきはとても眠そうに緩んでいる。

「実際、少し眠いんだ」

また地の文に反応する女兒。

ロコちゃんは首をかしげ、

「沙樹ちゃん。この子は？　なんかさつきから変なこと喋ってるけど」

そりゃあ、普通は地の文を読むなんて芸当できないんだから「変なこと」に見えて当然だ。

「この子はヴェーラちゃん。まだ小学生だけど、ウチでご鼻屑にしてるプロの情報屋」

ついでにいうと、依頼人と事務所を繋ぐ仲介人のひとりでもある。例えば最初に陽井氏の依頼をこちらに仲介したのは彼女だったり。

「この子が、情報屋さん？」

驚くロコちゃん。

「その上、実はハラショーなこと妙子と顔見知りでもあるんだ」

ヴェーラはいいながら、ショットグラスに注がれてる水のようなものを飲んで、

「うら〜」

と、幸せそうに喉を鳴らす。

「妙子と!? って、酒臭い」

ロコちゃんは鼻を押さえていった。だって、私たちが来たときからずっと飲み続ける水みたいなの、それ酒だもん。それもウオツカのロツク。

『BARなばな』でウオツカを1杯奢る。これが情報屋としての彼女に接触する為の条件だった。

私は笑い、

「妙子と同じ孤児院の子なのよヴェーラは」

「エザツト」

今度はイタリア語だった。

「ところで作者、そろそろ本題に進まなくていいのかい？」

しかも、ついには第四の壁にまで干渉しだした!?

「作者って？」

首をかしげるロコちゃんに私は、

「そつとしといてあげて。有能だけど可哀想な子なんだから」

「プローハ酷い。そんなに情報料の値上げがご希望かい？」

「マスター。この子にウオツカのロツクもう1杯」

「おお、ハラショー」

ヴェーラの目が輝く。うん、この子って表情に乏しそうに見えるけど、本野生の小動物だから案外扱いやすいのよ。

「で、本題だけど」

注文したウオツカがテーブルに置かれてから、私がいうと、

「ハラショー。妙子の事故に関する情報だったね。もちろんあるよ」

「料金はいつもので大丈夫？」

「スパシーバありがと。問題ないよ」

私は予め用意してたポチ袋をヴェーラに手渡す。

「確かに。じゃあ情報の提供に入ろうか」

ポチ袋の中身を確認してから、ヴェーラはいった。

「ふたりが考えてる通り、妙子の事故はただの遭難じゃない。むしろ、

ほぼ人為的に殺されたような死に方をしたみたいなんだ」

その言葉を聞いて、早速ロコちゃんの顔が曇る。予想はしてたのだろうけど、だからといってシヨックを回避できるわけがない。慣れる私だって多少シヨックなんだから。

「具体的な経緯の情報もあるけど聞くかい？ ただ、とてもハラシヨ^{シヨック}ン^グな内容だから聞くのは鳥乃だけにするのを勧めるよ」

ヴェーラは、元々深めに被ってた帽子を更に深々と被り直す。それだけ、彼女にとっても話すのが辛い内容なのだ^と推測できる。

「どうやら真実は相当やばいみたいね。ロコちゃん、私からも言っておくわ。これは下手に知れば立ち直れなくなるよ」

「ううん」

しかしロコちゃんは首を振って、

「大丈夫。聞かせて」

と、唇を震わせながらいった。

「ハラシヨ^{シヨック}ン^グ。わかったよ」

ヴェーラはいった。彼女は帽子で目を隠しながら、重々しく口を開く。

「まず、妙子の死因はそもそも餓死じゃない。……長時間の監禁生活と、その間に幾度なく行われた違法ドラッグそして性的暴行による衰弱死だったんだ」

「——っ」

早速のヘビイすぎる真実に、ロコちゃんが硬直する。

私もダメージを受けた。普段こそ「女の子監禁して性調教してみた」なんて言ってる私だけど、親しい人間が現実に被害にあつてシヨックを受けないわけがない。それも死ぬまで使い潰されたとあつては。

私は動揺を隠しながら腕を組んで、

「やったのは？」

「牡蠣^{かきね}根^{すい} 水^{すい}一^い。表では製薬会社の社長をしてるけど、裏では「^{カキネ} 暴王^{すい}」という通り名を持ち、追星組というヤのつく業界の組長をしている男だよ」

その名前は聞いたことがあった。確かこの辺りで麻薬の密売に関わってる組織のひとつだ。

「牡蠣根 水一という男は好色家として有名だね。専属の奴隷売買業者を雇い、お気に入り娘を何人も手元に置いている。妙子もそのひとりだったわけなんだ」

「ま、待って！」

ロコちゃんが首を乗り出しいった。

「どうして妙子が、そんなヤクザの組長に目をつけられたの？ だって妙子は孤児だったけど、それでも普通の女の子だったのに」

するとヴァーラはいった。

「牡蠣根の奴隷売買業者は、表でそれぞれ別の職に就いて一般人に紛れながら被害者を選別してるんだ。例えば教師とかね」

『っ』

その言葉に、ロコちゃんだけじゃなく私まで驚愕を覚える。それって、当時の先生の中に妙子を牡蠣根に売った奴がいるってことじゃない。

そんな私たちの気づきに察してか、それとも地の文を読んだのか。ヴェーラは続けて、

「確か妙子はテニス部に所属してたね？ 顧問の名前は吉月よしづき 広樹ひろき。彼がその奴隷売買業者だよ」

「吉月先生が!？」

ロコちゃんが更に驚く。正直、私も信じ難かった。だって、吉月先生は若くて爽やかイケメン風の、当時女子からの人気No.1男性教師だったのだから。私は興味なかったけど。

「吉月が妙子を商品にすべく行動を開始したのは、中学最後の夏の大会が終わった辺りらしい。当時妙子は吉月をとても信頼してたらしくてね、特に警戒もなく妙子は業者の調教部屋に連れ込まれ、学業の傍らに商品開発を受ける日々が始まった」

「商品開発?！」

ロコちゃんが聞くと、

「性的な意味で奴隷に仕立て上げる為の教育だよ。一部始終はすべて

撮影されて、口外したら孤児院がどうなるかと脅迫をされ従うしかなかったみたいだ」

と、ヴェーラはいう。

「恐らくその頃からだったと思うよ、君たちの耳に『妙子が県外の学校から勧誘を受けた』って話が入ったのは」

『あ……』

私たちは同時に気づく。確かに、この話が出たのは夏の終わり頃だ。

「そう言うように教えられてたんだ。彼女が卒業を機にそつと皆の前から姿を消しても、誰も不審に思わないようにね。孤児院のほうには進学の際に下宿先が提供され特待生待遇で入学を受け入れるって話になってたよ」

「じゃあ妙子は高校には」

「カニエーシナ。もちろん入学していない。妙子はそのまま奴隷として牡蠣根の屋敷直行だったよ。後は最初に言った通り消耗品の如く使い潰されて、飽きたら山奥へポイ。その頃にはクスリで脳をやられ廃人状態、体もボロボロでそのまま衰弱死さ」

「——ッ」

ロコちゃんが、顔を青くし全身をガタガタと震わせる。

「私が提供する情報は以上だよ。質問や気になることはあるかい？
少しくらいはサービスするよ」

「なら」

私はロコちゃんを優しく抱きしめ、

「実は彼女の下に一枚の脅迫状が届いてるのは聞いているよね？ これ
なんだけど」

少し悪いとは思いつつ、私はロコちゃんの荷物を漁り、先ほど見せてもらったカードを提示する。

「これの送り主を探して欲しいのよ。この事件に第三者が絡んでて、それが敵か味方なのか分からないまま任務を続行するのは少し危険だからね」

「ああ……」

ヴェーラはカードを手にとると、

「ハラショー。私なんだ」

「え？」

「このカードを送ったのは私なんだよ」

と、いった。

「妙子が孤児院を退所する数日前かな？ 彼女に頼まれたんだよ。」

『自分を探さないで欲しい、そして探そうとする人がいたら危険だから止めて欲しい』ってね」

「妙子……が……？」

消え入りそうな声で、ロコちゃんは反応する。

「まあね又。特に君を名指しで警戒して欲しいと言ってたよ妙子は。少なくとも彼女は君と同じ学校に進学するのをずっと諦めてなかったからね。たぶん……私に頼んだあの日、彼女の心は完全に折れたんだ。でも、当時まだ受験戦争の最中だった君に『約束守れない』なんて言えなかったんだろうね。だから、彼女から別の遺言も受け取ってるよ。実は送ったカードの表面、剥がれる仕組みになってるんだ」

確かに、よく見るとカードの表面は上から貼り付けたシールみたいになっていた。

「剥がしてみてくれ」

と、言われたロコちゃんはカードの表面をめくる。すると、塗りつぶされてた箇所から《遺言状》のカード名とイラストが顔を出し、カードテキストの上からマジックで書いた「ごめんね」の文字。

「この字……」

ロコちゃんが声を震わせる。

「真正正銘、妙子が書いた字だよ」

ヴェーラがいうと、

「た……妙子、妙子。うわあああああああああああああ!!!」

ついに耐え切れず、ロコちゃんはその場で泣き崩れた。

「彼女はまだ運がいいほうさ。本当なら行方不明という報さえ世に出回らず完全犯罪が成立するはずだったんだ。妙子の遺体が発見されたのは、本当に偶然なんだよ」

ヴェーラはぼそりと呟いた。



——同時刻、ある廃墟の一室にて。

「それで、何だね。私に用事とは」

壊れたソファに腰かけ、牡蠣根 水一はいった。年齢は40代辺りだろうか。社長や組長と呼ぶにはまだ働きざかりの男に映る。

牡蠣根の前には、20代の男がひとり立っていた。

「社長、俺は今日を持って契約から手を引かせて貰う」

男はいった。

牡蠣根はタバコを一本口に咥え、

「突然だな。どういった風の吹き回しだ？」

「俺たちの動向を探ってた奴が、ハンドグドを雇いだした」
「!？」

牡蠣根は驚く。

「ヤツらを、だと？」

「ああ。奴らは変態集団なだけに予測不可能で性質が悪いのは社長もご存知のはずだ。その上、小規模ながらに精鋭揃い。俺だって命が惜しいからな、ただの雇われの側で追星組と心中するつもりはないだけの話だ」

「そうか」

牡蠣根はうなずくと、

「なら貴様は用済みだ」

懐に隠し持ってた銃で、男の眉間を2発撃ちぬいた。

「がッ——！」

倒れる男。牡蠣根は立ち上がると、見下ろしいった。

「残念だよ。君は優秀で忠実な犬だったのだがね」

掌を返した以上、身の安全の為に元上司を売るかもしれない。牡蠣根にとって、すでにこの男は身から出たさびになる要因でしかなかったのだ。

死んだ男の名前は、吉月よしづき 広樹ひろきとあった。



——現在時刻19:30

「失礼する。警察だ」

突然だった。『BARなばな』にそう名乗る男がやってきたのは。

現在、私たちはヴェーラへの用事も終え、時間的にここで夕食も済ませようとしている真っ最中だった。

「ここに川泥かわで 炉子ろこという女はいるな？ 案内しろ」

警察はいう。とはいえ店員も客の名前を全員把握してるわけがない。

「え？ 川泥様ですか？」

なんて店員が反応すると、

「早くしろ！ 容疑者をかばうのなら貴様も同罪だ！逮捕する！」

なんて、滅茶苦茶なことを言い出したので、

「炉子ろこは私よ」

私は、嘘をついて席を立った。

「貴様が川泥か」

警察は私の前に立つと、いきなり胸倉を掴みかかり、

「吉月よしづき 広樹ひろきの殺害容疑だ。一緒に来てもらおう」

『えっ』

私、そして本物のロコちゃんは驚く。

「吉月先生が死んだって、どういうこと？」

私は訊ねる。しかし、

「貴様がやったのだろう！ いいから来い！」

と、手錠までかけて強引に店の外へと連れ出された。

「待って！ さ——」

ロコちゃんが追いかけて、私の名前を言いかけるも、
「しっ」

私は手錠で上手くできないなりに指を立て口チャックの指示をする。

正直、この警察には違和感があった。異常な強引さ以上に、普通容

疑者の顔を知らずに逮捕するだろうか。それが困難な状況ならともかくとして。

「——ということらしいから、君は残ったほうがいい。ハラシヨ^K？」
ヴェーラがロコちゃんを止める姿がみえた。また何か地の文を読んだみたいだけど、

「乗れ！」

私は警察にパトカーに力づくで押し込まれたので、それ以上ふたりの様子を確認はできなかった。

警察は運転席へと乗り込み、まるで逃げるように車を発進させた。私は車内を軽く確認する。一応、構造をみる限り本物のパトカーらしい。

「私、やってません！」

『BARなばな』が見えなくなった辺りだろうか。私は、ちよつと『無実の罪を被せられ、怯えながらも何とか気丈に振舞おうとする美少女』を演じ、問いかける。

「だって、私さつきまでずっと友達と会ってたのに。先生を殺せるわけがありません」

あーこれ。やってるのが他人なら例え演技でもすつごく可愛いだろうに、自分がやると恥ずかしいとかむず痒いとか通りこして笑えてくるんだけど。

「ククッ」

しかし、耐えきれず笑いだしたのは私ではなく、なぜか警察。

「そんなものは知っているさ。吉月を殺したのは社長なんだからな」
「え？」

「吉月はな、貴様がハングドを雇ったから怯えて手を引くと言い出したんだ。だから社長は殺した。口封じってやつだ。そして、後任が俺ってワケだ」

「っ!? もしかして、警察じゃないの？」

「警察だよ。俺は本物のな。警察であり、社長直属の奴隷売買業者ってやつだ」

「奴隷売買業者？」

「ああ。……ククツ、妙子とかいうガキは何万で売れたっけな？」
「っ」

「クククツ、そういえば貴様は妙子の足取りを辿って口封じ兼ねて社長に目をつけられたんだっけな？ 教えてやるよ。貴様の友達の身に何が起きたのか、貴様自身の体でな」

警察……いや奴隷売買業者の男は高笑いし、

「見れば中々の逸材じゃないか。こりやあ高く売れるぜ、逃げてくれた吉月様様だ」

などと、バックミラー越しに舐めるように私を見る。気持ち悪い。さて、と。

私はちらつと車のサイドミラーに視線を移す。

パトカーの後ろには一台の車。運転席には増田が座り、助手席にはMISSTION⁴参照の永上ながみ 門子かどこが座っていた。

さすが増田と鈴音さん。想定以上の仕事をしてくれる。

実は、この一連の流れはすべてデュエルディスクのタブレットを通して事務所に垂れ流しだったのである。応援がガチの警察を連れてやってきた。となれば、私もこれ以上演技を必要はなそうね。(しつつかし、この三流業者なんでも喋ってくれちゃうからヴェーラ情報半分近く無駄になっちゃったじゃない)

なんて考えつつ、私は腕に内臓した銃で手錠を破壊。そのまま懐から予備の銃を抜き、男の後頭部に突き付けた。零距离で。

「!？」

「はい余計な動きは無駄だからね。分かってるでしょ？ ここまで密着させた銃ならフィールドで護つても頭ブチ抜けるって」

もちろん、こちらもフィールドを込めて発砲が前提だけど。

「このまま私を連れ込もうとした場所まで案内して頂戴。大丈夫、指示に従う限り殺しはしないから。それが今回の依頼者との契約だもの」

「ぎ、貴様。川泥じゃないな？ 一体誰だ？」

「私の名前は鳥乃トリノ 沙樹さき。ハングドの構成員のひとりよ。そしてレズである」

「ッレズの肌馬か！」

うわ、こいつにも私の名前知れ渡ってる。

「勿体無いな。これだけ可愛くて貴様がノーマルなら、男なんてとつかえとつかえだろうに」

イラッとしたので、私は男の右薬指の爪だけを丁寧に打ち抜く。

「——っ!？」

「大丈夫だいじょーぶ。平気でしょ殺してないから」

「こ、この……」

「私、男に性的な目で見られるの嫌いって話なのよね。次いったら少しずつ自分から死にたいって言わせてあげようと思うんだけど、OK？」

「OK」

男は震えた声でいった。

程なくして、パトカーは一軒の廃家へとたどり着いた。

「ここだ。この家の地下に川泥を調教する為に集まった業者仲間が数人待機してる」

こちらから聞くまでもなく喋ってくれる男。やはり牡蠣根に雇われてるだけの男だからか、滑稽にも自分の命の為に社長も同業者もどんどん売ってく気満々のようだ。

もしくは、まだ手を隠し持つてるのか。

「替えの手錠ある？ 車の外ではもうちよっとロコちゃん演じてたいから」

「ほらよ」

私の両手に男は新たな手錠をかけ、

「これが手持ちの最後だ。これを壊せば次はない」

「りよーかい」

私はパトカーを降りた。男も降りると、私の手を引き、

「こっちだ」

と引っ張っていく。

合鍵はないのか、男は針金で玄関の鍵を開ける。通された屋内は、やはり薄暗く、蜘蛛の巣が張りかび臭い。

「靴を脱ぐ必要はない」

男はいった。確かに床は何度も土足で出入りした形跡もあり、とても脱ぐ気にはなれない状態になっている。ドブネズミや黒く光るアレが踏み殺された跡もあるしね。

「そういうえば、地下っていったけど？」

「リビングの床下に隠し階段がある。そこを降りれば調教部屋へと続いている」

そろそろ私との会話が垂れ流しになってるのに気づいてるはずなのに。男はここでも丁寧に喋ってくれる。さすがに罨だと読めたけど、その上で従ったほうがいいと私は踏んだ。

もちろん、後続の戦力を期待して。

「当然だけど」

男が床下の壁を外し、隠し階段をみせた辺りで私はいった。

「最初は私は川泥かわで 炬子ろこってことをお願いね」

「わかった」

男はいった。けど、その口角が僅かに「にやっ」となったのを見て、私は腕に内蔵されてるほうの銃で、男の膝をブチ抜く。

「んがッ！」

床に倒れ、男はもがきながら、

「この……ッ」

と、懐から銃を取り出す。そこを私は蹴り上げ、銃を弾き飛ばした。「最初から、ここで始末するつもりだったのか？」

「まさか」

私は男の利き腕を踏みつけながら、

「にやけが顔に出てたのよね三流業者さん。あんな顔してたら罨に嵌めてますって丸分かりでしょ」

「っ」

男は脂汗を滲ませながら私を睨むも、

「大丈夫。殺しはしないから。社会的には死んで貰うけど」

私は男に麻酔針を打ち込み、動けなくなったのを確認してから地下への階段をゆっくり下りる。もちろん手錠は解除済だ。

階段を下りきった先には鉄製の扉がひとつ。聞き耳を立ててみると、確かに人の気配を感じた。あえて隙間程度に扉を開け中を確認すると、何人かが機関銃を肩で担ぎ、扉の先で私をどう犯そうかと駄弁ってた。運よく気づかれなかったのも、私は小さな煙玉をこつそり転がしてから扉を閉める。

数秒後、扉の先から一斉に人が倒れる音が聞こえた。先ほど転がした煙玉は催眠ガスを巻き上げるものなのだ。

私はガスマスクを装着して中に入る。見る限り全員昏睡してる様子だったので、ひとり残らず亀甲縛りにしてから調教部屋を後にした。

階段を上りリビングに戻ると、ちょうど増田と合流する形になった。

「遅かったじゃない。もう少し近くを尾行してると思ったのに」

私というと、増田は、

「道中で偶然業者とばったりしてね。デュエルで拘束したら手間取ってしまったんだ」

「ああ……」

増田も弱くはないんだけど、専門ではないからね。

「少し鍛え直したほうがいいな。たまには前線で任務を受けてみるか」

なんて呟いてる増田に私は、

「そういえば移動中サイドミラーから永上さんが見えたけど？」

すると奥から、

「お前の依頼人を護るよう車内で待たされた」

と、当の永上さんがやってきた。

「が。暇なので突入させて貰ったぞ」

今日もその腹筋と豊富なバストを活かしたタンクトップ&トレレンチコートがえろかつこいい。

しかし、そんな永上さんの後ろには、なんとロコちゃんの姿。え、ちよ、危険な現場に連れ出したのこの人。

「沙樹ちゃん！」

不安気に永上さんの背にしがみつくとココちゃん(かわいい)。が、視界に私が映ると駆け出し、

「よかった、無事だったんだね」

と、私の胸に飛びつく。

「当たり前でしょ。私これでもプロなんだから」

「プロなら依頼人をひとりにしないで欲しいな」

横から増田がいった。正直耳が痛い。

永上さんは腕を組み、

「全くだ」

「君も人のことを言えないだろう市民を護る刑事さん」

増田は呆れながらいった。が、永上さんのほうは不満を露に、

「どうしてだ。私は離れず川泥の傍にいるし現に彼女は無事ではないか」

「彼女をひとりにするのも現場に連れてくのも危険だから車で一緒に待機してくれと言ったのに、それを守らなかった時点で同じだろう」

「……………」

なんだろう。脳裏で音がする。

チツチツチツチツチツチ： チーン！

「そういう意味だったのか！ そうならそうと言ってくれ！ てつきり私は邪魔だと言われた気がしたんだぞ！」

ガーン！と衝撃を受けた様子の永上さん。

「かつてペアを組んだ仲として恥ずかしい」

増田は頭を抱えながら、

「鳥乃、そして川泥さんだったね。今のうちに伝えておくよ。彼女は超がつくレベルで脳筋だ」

「えー……………あー」

あちゃあ、と思いながらも私は初めて会った時を思い出し、妙に納得した。

セクハラした私に躊躇いなく馬鹿力でのゲンコツ。そして自分の立場では動けないからとハンドグドに依頼しておきながら自身も覆面

被って現場に向かう行動力。なるほど、そういう事だったのね。

「そして、俺の同類でもある」

と、増田はいった。

「同類って……？」

「言うな！ 増田！ そこから先は私の尊厳に関わ——」

止めようとする永上さんをスルーし、増田は一言。

「ロリコンだ」

なんだろう。また脳裏で音がする。

チツチツチツチツチツチ： チーン！

「ロリコンじゃぬああああああああい！ 私はただ子供たちを可愛らしいと愛でてるだけだ」

それをロリコンというんだけどね。

「ああ、そうだったね」

増田は更に、

「確かに俺はロリコンなだけだが、永上はロリもショタもストライクゾーンだったな」

もつと深刻だった。

「14歳がグレーゾーンと罵るお前と一緒にするな！ 私は一部のJKもグレーゾーンながらアリだ！ だから私はギリギリその川泥もイける！」

「えっっっ」

衝撃の事実を聞かされ、私の背中に隠れるロコちゃん。

増田は厳しい顔で、

「そうか、見損なつたよ永上いや元同志。確かに彼女はロリ顔で背も小柄なほうだ。……が、彼女はド○ゴンボールでいうとラ○チさんだ。顔がロリでも体がしっかり発育してムツチムチじゃないか！

これがミ○مامAVなら脱いだ途端失望するパターンだ！」

「そこは私も残念に思っている。しかしだな——」

ふたりが醜い言い争いをする中、

「戻ろっか」

私は、そつとロコちゃんを庇いながらいった。

「うん」

うなづくロコちゃん。といった様子で、私たちがそつとこの場を離れようとする。

「あ、待ってくれ鳥乃」

増田がいった。

「道中で倒した業者からひとつ情報を聞き出してる。ふたりは永上と一緒にここの寝室へ向かってくれ」

「寝室？」

「どうやら吉月よしづき 広樹ひろきの遺体が放置されてるらしい。ふたりには身元確認をお願いしたい」

『えっ』

増田の言葉に、この場の全員が反応した。

永上は訊ねる。

「お前は どうする気だ、増田」

「俺は業者共を一箇所に纏めて監視してるよ。鳥乃、一応ガスマスクを貸してくれないか？」

という事は、私が煙玉を撒いた地下室にも行くのだろう。私は「ん」とマスクを渡す。後で念入りに殺菌しないと。

「なら私たちは早速向かうぞ。鳥乃、ついて来い」

「はい」

私は永上さんの後ろにつき、その場を後にした。

老朽化しギシギシと音の出る階段を上った先、二階の一番手前に寝室はあった。

壊れて綿のはみ出たベッド、埃を被った机、業者が参考資料にしたのか陵辱系のエロ漫画が収納された本棚、部屋の隅にはさほど大きくない何かが風呂敷にかけられている。

そんな部屋の中央で、吉月先生は頭から血を流し絶命していた。目を開けた状態で。

「っ、嘘……せん、せい」

ロコちゃんは口元を押さえ、青い顔をして私の背でガクガク震える。当然だ。普通の世界で生きてきた人間が、知人の無残な姿を前に

平常でいられるはずもない。正直、私だってこの惨状は見ててキツイ位なんだから。機械になる前の私なら何とも思わなかった気がするけど。

「その様子だと、彼が吉月という男で間違いないな？」

永上さんはいった。面識はないとはいえ、彼女もあまりいい顔はしてない。

「はい。間違いなく吉月先生です」

震えた声でロコちゃんはいった。

「そうか」

永上さんは遺体の傍へ寄って脈を確認し、

「脈もない。フィールで強引に生き延びてるわけでもないようだ」

と、彼の瞼をそつと閉じさせる。

「私が。私がハングドに依頼したから？ だから先生はこんな事に」

恐怖と罪悪感からか、ロコちゃんはその場で頭を抱え体を丸める。

私はイエスともノーともいわない。代わりに、

「けど、もし依頼しなかったらあの姿になるのはロコちゃんだった」

「え……？」

「たぶん、あの瞬間にロコちゃんは《亜空間物質転送装置》で誘拐されて、今頃はこの廃墟で牡蠣根や吉月先生の慰み者になってたんじゃないかな？ そして数か月後ロコちゃんは妙子と同じ死に方をする」

私は部屋の隅にかけられてた風呂敷を剥いだ。すると、出てきたのはロコちゃんの代わりに《亜空間物質転送装置》で転送された彼女の学生鞆。

「わ、私の鞆が!?!」

驚くロコちゃん。

「やっぱりね。《亜空間物質転送装置》はこの廃墟に繋がっていたのだ。私をここに拉致した奴隷業者がいつてたわ。ここ数日ロコちゃんを狙ってたのは吉月先生だってね」

その言葉に無言でうつむくロコちゃん。たぶん、私が事務所に流した音声を増田の車内から聞いてたのだろう。

「ロコちゃん、一応何か取られてないか確認してくれる?」
「うん」

まだショックが緩和してない様子だったけど、なんとかロコちゃんは鞆を開ける。

「あれ?」

直後、ロコちゃんはずぶやいた。

「沙樹ちゃん。これ」

中から出してみせたのは、1枚の封筒だった。

「見せてくれ。中は何が入ってる?」

永上さんが半ば取り上げるようにして中身を確認する。しかし、そこにあったのは。

「ただの白紙?」

だった。

「どういうことだ?」

首を傾げる永上さん。

「なんでこんなものが私の鞆に」

と、ロコちゃんも分からない様子。

「……ん、白紙?」

「もしかして」

私はハツとなり、

「永上さん。それ貸して。ロコちゃん、この白紙にちょっと手を加えるけどいい?」

「鳥乃? どうする気なんだ?」

と、訊ねる永上さんに私は、

「これよ」

と、懐から使い捨てライターを出してみせた。

「ここでロコちゃんも気づいて、

「もしかして、あぶり出し?」

「ああっ!」

永上さんも、やっと分かったらしい。

「まだ分からないけどね」

私はライターの火に紙を近づける。すると大正解、白紙だった紙に文字が浮かび上がったのだ。

そこには。

『レストラン追星の地下だ 牡蠣根は大抵そこにいる』
と。

「これ、吉月先生の字」

ロコちゃんがいった。

「なんだとー」

永上さんが驚く。

「たぶん、雲隠れする際にこっさり社長を売って自分だけ助かろうと
か思ってたのね。追っ手が自分を殺しにくると踏んで」

と、私は推測したけど。

「違うよ」

ロコちゃんは、大きく首を振り、涙を流していった。

「たぶん、吉月先生は心のどこかで後悔してたんだよ。妙子のことも、
私のことも。だからこんな形で助け船を」

私からすれば「そんなわけないでしょ」な内容だった。けど、ロコ
ちゃんはいま本気で吉月先生の為に泣いている。

「そっか」

こんなロコちゃんを見てまで、我を通す気はない。

「いや、さすがに鳥乃の説が正しいだろう」

空気を読まない永上さんに、

「ごめん黙って。じゃないと犯す」

私はいつてから、ロコちゃんを正面からそっと抱き寄せた。

「沙樹ちゃん。沙樹ちゃあああん」

私の胸にしがみつき、号泣するロコちゃん。

「ごめんね、妙子だけじゃなくて先生も護れなかったわ」

私は、しばらくロコちゃんの髪を撫で、慰めながら、

「永上さん。ロコちゃんが落ち着いたらこの場を増田とふたりに任せ
てもいい？」

「なにをいう、駄目だ！ 私も行かせる。刑事が事件に立ち会わなく

てどうする!」

と、まるで駄々をこねるような永上さんに、

「刑事だからよ」

私はいった。

「こつから先はアウトローな人間の仕事よ。刑事さんが違法行為に手を貸す気?」

「ならばマスクを被ってナガカド仮面だ! それなら問題ないだろう」

「諦めてここの業者の一斉逮捕に入って? そつちは逆に私も増田もできない仕事だから」

「む」

永上さんはやつと気を静めてくれ、

「……仕方ない。承知した」

と、心底残念に呟いた。

「私も暴れたかった」

この人、もう刑事じゃなくてハンド入りしたほうがいいんじゃないのかな?」

「そういえば、さっきの醜い言い争いで思い出したんだけど」

移動中、《巨大化》した《幻獣機レイステイルス》の機内にて。私はふと助手席に座るロコちゃんに話しかけた。

「私さ、実は今日ロコちゃんと再会するまで『今回は生理的にベッドは無理そうかなー』なんて思ってたわけよ」

時刻はすでに21時に近づこうという頃。

程よい上空を飛んでるせいかな、正面の窓からは展望台で見えるような街の夜景が広がり、しかし街の騒然が届く様子はない。

疲れもあるだろう。ロコちゃんは、ただ無言で放心していた。

「私の中にあつたロコちゃんって当然だけど中学の頃の姿だから、1く2年くらい年下に見えるほど小柄で、お酒も恋も似合わない無邪気な小動物ってイメージだね。私は子供って趣味じゃないから、たぶん今日会っても襲いたくはならないんだろうなーって思ってたのよね」

もしかしたら本人の耳には届いてないかもしれない。

「だからびびったりしたわ、いつの間にかロコちゃんすつごく女子高生らしくなっちゃってるんだから」

けど、私は語り続ける。

「確かにまだ平均よりは小柄かもしれない。無邪気な笑顔が似合いそうな小動物みたいな子ってイメージもそのまま。でも、間違いなく頭身は上がって見えたし、体つきもロリコン共が言った通り。可愛らしさはそのままに、なんかすつごい美人になっちゃってるんだもん。レズとしてセクハラせずにはいられなかったわ」

私は機体を僅か上に傾け、正面の窓に星空を映す。

「妙子がいまのロコちゃん見たら、きつと自慢の親友って言ってたんじゃないかな。もしくは眩しくて嫉んじやうか。見せてあげたかったなー、妙子にいまのロコちゃんを」

一瞬、星がひとつ輝いた気がした。

私はちらと横をうかがう。ロコちゃんは涙をこぼしながら、*「無邪気な笑顔」*とは真逆の表情を浮かべている。

ここで私は真面目な顔をつくり、本題を切り出した。

「ロコちゃん。依頼内容、変更する気はない？」

「え？」

ここで初めてロコちゃんは反応。涙を拭うのも忘れたまま私に振り向く。

「いまのロコちゃん。悔しさのあまり牡蠣根が憎くて憎くてたまらない。そんな表情してたよ？」

「っ」

ハツとなるロコちゃん。しかし、否定はしない。

「正直、君にはあんな顔似合ってた欲しくなかったわ。たぶん、妙子が好きだったロコちゃんはいつも元気で笑顔だったはずだから」

そこまでいって、

「……ねえ」

と、私はロコちゃんに顔を向ける。

「本当に警察に引き渡すだけでいいの？ 私には、そうは見えないけど」

ロコちゃんは即答ができず俯く。

「牡蠣根を逮捕してロコちゃんの笑顔がいつか戻ってくれるなら、私はそれでいい。けど、それだと奴は生きてるわ。それにたぶん牡蠣根は死刑にも無期懲役にもならないよ」

「えっ?」

「ヴェーラが言ってたでしょ、奴が雇った業者は色んな業界に潜伏してるって。警察にもいたんだし、弁護士に裁判官、政治家に手が伸びてもおかしくないじゃない。業者はいなくてもコネって線もありそうだしね」

「じゃ、じゃあ」

ロコちゃんの顔が段々と悲愴に染まっていく。

「少なくとも妙子や吉月先生を殺した罪を直接は問われなと思う。莫大な裏金を使つてすぐシャバの空気を吸い、次の犠牲者を作るだろうね」

「そ、そんな……本当?」

「冗談」

私はいった。声だけ笑つて、顔はシリアスなまま。

「けど、ロコちゃんが望むような結果にならない可能性は十分にある。それが、法で裁くつてこと」

「つつつ」

ロコちゃんは静かに怒りを煮えたぎらせる。けど、彼女は努めて平常の声を絞り出し、

「沙樹ちゃん、もしかして誘導してる? 私に牡蠣根を殺せつて言わせたくて」

そんな彼女の顔を、私は真っ直ぐ見据え、

「私は1日でも早くお墓で眠るふたりにロコちゃんの笑顔を見せてあげたいだけ」

「そんなの、できない! 二度とできないよっ」

ロコちゃんは嘆く。

「なら、依頼は破棄ね」

私はあえて冷たくいった。

「報酬は確かロコちゃんの体でしょ？ 私、呪縛に囚われた生き霊を抱く趣味はないから」

固まるロコちゃん。私は正面に向き直り、彼女の肩を抱き寄せる。「妙子や吉月先生が、君に一生苦しみ続けるなんて望むと思う？ 特に妙子なんて自分に関わるなってロコちゃん護ろうとした子よ？ ふたりを大切に想うなら、1日でも早く笑顔のロコちゃんを見せてあげないと」

「っ……うん。でも、だけど」

できないよ。そう言いたそうに、ロコちゃんは全身を震わせ涙を滲ませる。

「その為ならロコちゃんは何をしてもいいのよ。いまここは法から外れた世界なんだから。君が本当に望む依頼は何なのか、いまずぐじやなくていいから、答えを出しておいて？」

無言が機内を支配した。

ステルス機のエンジン音だけが静かなBGMとして流れ、星空と街の電灯が暗い機内をほのかに照らす。

「なら沙樹ちゃん。ひとつお願いしてもいい？」

しばらくして、ロコちゃんがぼつんといった。

「もちろん。なに？」

「慰めて、沙樹ちゃん。怖い、寂しい、辛い、寒い。手を出していいから、私を安心させて？」

「了解」

私は微笑みかけ、彼女をやさしく抱きしめる。

そして、そつと唇を重ねた。

MISSION 8―2年越しの遺言（後編）

——現在時刻21:15

「私の名前はヴェーラ・バルティスカヤ。陽光学園小学部に通う小学生。そしてフリーダムである」

まさかの定型文ジャックだった。

なぜか現地で待ってたヴェーラは、到着した私たちを見るや一言。

「やあ、奇遇だね」

私は呆れ顔で、

「奇遇で会える状況じゃないでしょ。何しにきたの情報屋、個人に肩入れできる立場じゃないでしょうに」

「カニエーシナ。もちろん、商品の仕入れだよ」

「商品？ なにを？」

「情報屋の商品といえば情報に決まってるじゃないか」

ヴェーラはいい、

「今日は新しい奴隷を仕入れる予定らしくてね。こっそり潜入して内部情報を仕入れついでに牡蠣根の終焉を笑おうという魂胆さ」

と、ヴェーラは背中を抱えてたバッグからダンボールをだして、

「だから、ちゃんとアーティファクトも完備してるよ」

それをアーティファクトと申すか。

というわけで、現在私たちはレストラン追星の前にいる。

「ところで、新しい奴隷って」

私が訊ねると、

「恐らく君の依頼人のことだろうね。もしくは鳥乃を含めたふたりかもしれない」

「考えただけで舌噛み切りなくなる話ね。私を男の慰みものにしようとか」

冗談めかして言いながら私は目の前のレストランを眺める。窓越しに中をみる限り、中々に盛況の様子だった。

レストラン追星は、名小屋の繁華街で若い女性を中心に人気を集める薬膳中華のお店だ。

製薬会社が経営する店であることを最大の売りにしており、レ
ディース誌でも何度か特集が生まれ、健康的で安全そして美味しいと
の評判を勝ち取っている。

「このお店、私好きだったのに」

ロコちゃんが残念そうにいった。

「来たことあるの？　ここ」

「うん。1度食べたなら病みつきになるくらい美味しくて2、3回通っ
ちやっただかな？」

するとヴェーラが、

「ハラショー。そういうリピーターを作るために変な油増々のドラッ
グ入りらしいからね」

「嘘……」

途端、固まるロコちゃん。

「この背後が誰か忘れたかい？　麻薬密売と奴隷売買に精出す追星
組だよ。ついでに店のアルバイトやリピーターからも過去何度か奴
隷被害者が選別されてるらしい」

「知りたくなかったー」

なんて嘆くロコちゃんをヴェーラは眺め、

「マジエッツ。思ったより元気そうで良かったよ」

「ほんとにね」

私はうなずいて同意する。とりあえず、メンタルの応急手当は間に
合ってくれたみたいだ。

「じゃ、そろそろ行こうか」

私はいった。するとロコちゃんは「うん」とお店のほうへ進みだし
たので、

「ああ、違う違う」

と、止める。

「え？　でもレストランの地下に行くんだよね？」

「レストランから堂々と地下に行けるわけじゃないじゃない。そろそろ顔
も割れてる頃だろうしね」

私は店の横にできた細い隙間を通り、「こっちこっち」と手招きで誘

導する。

抜けた先は一転して暗く静かな裏通りになって、店の裏には「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた扉があった。

「実はここ、店の裏口じゃないのよ」

そういつて私は堂々と扉を開ける。

鍵は掛かってなく、扉の先はエレベーターになっていた。

「入るよ?」

そういつて乗り込む私たち。

地下へと潜る途中、私はヴェーラに向かって聞いた。

「実は私、この先がどうなってるかって知らないのよね。サービスで教えてくれない?」

「マジエッツ。知らないで乗り込んだのかい? すばらしい行動力だ。——と、私は一度褒めてからいつた」

ヴェーラは地の文を代弁しつつ、

「この先にあるのは、奴隷売買所だよ」

「えっ」

反応したのはロコちゃんだ。

「妙子みたいに牡蠣根が予約済みの奴隷は屋敷に直通だけど、それ以外の子はこの地下で裏オークションにかけるんだ。アスタロージナ、ふたりとも覚悟したほうがいいよ。妙子がどんな顔して牡蠣根のモノになったのか、その一部を目の当たりにする事になる」

程なくしてエレベーターは最深部に辿り着く。降りると、そこは廊下のど真ん中だった。

床一面にはカーペットが敷かれ、壁に飾られた幾つもの絵画。光源の絶妙な明るさもあり、まるで洋風のホテルやクラシック劇場を思わせる。しかし道幅は狭く、仮に挟み撃ちにあったら逃げ場は無さそうにみえた。

「さて、ここから先は別行動を取らせてもらおうよ」

ヴェーラはいつた。カメラ片手に、ダンボールを本当に被って。

「どこへ行くの?」

「盗品や奴隷たちを撮影してブンヤやマスゴミに売りつけるんだ。」

きつと高く売れるよ」

さすがヴェーラ。この歳で情報屋なんてしてるだけある。なんて思ってたなら、

「そして、ニユースを着に妙子の墓前でウオツカの酒盛りだよ」

「ヴェーラ」「ヴェーラちゃん」

私とロコちゃんはもそもそ動くダンボールにつぶやく。

そうだった。ヴェーラも私たち同様大切な人の命を奪われた同志だったのだ。

まあそれはそれとして。

「待って」

私はヴェーラの後ろを2、3歩追いかけて、

「奴隷ちやんの所行くなら私も行かせて？ せつかだから、ついでに味見もとい傷ついた体にカウセリングしたいし」

「台無しってレベルじゃないよね、それ」

ああ!? ロコちゃんが半眼で呆れてる。

「……プローハ。悪いけど必要ないよ」

僅かな間の後ヴェーラはいった。

「そんな事しなくても恐らく君はいい思いができるだろうさ、選択次第だけだね」

「？」

どういうこと？ 私は思ったけど、こちらが訊ねる前に。

「という事でダスヴィダーニャ。少しだけお別れだよ」

と、行ってしまった。

私は彼女の後ろ姿を目で追い、ダンボールが右折し見えなくなつた所で、

「行こうか」

「うん」

うなづくロコちゃん。私は回れ右し、ヴェーラと逆の道に足を進める。

正直、どこへ進めばいいかわからない状況だけど、恐らくヴェーラが向かった先に私たちの目的地はないのだろう。

「にしても」

道中、ロコちゃんが未だ呆れながら、

「沙樹ちゃん、驚くほど欲望に忠実なんだね」

「まあ、私の人生それが楽しみで生きてるようなものだからね」

それ以上に梓、という事実は触れずにおくけど。

「でも」

ロコちゃんは私の顔を覗き込んで、

「その割には、機内で結局しなかったよね? 『体にカウセリング』」

「あー」

私はつい顔を逸らす。

レイステイルスでの移動中。結局私はロコちゃんにキス以上のことをしなかった。ううん、できなかったのだ。

「まあその、私にだってレズのプライドがあるって話」

「どういうこと?」

「抱くならやつぱり元気なロコちゃんじゃなくちや嫌ってこと。勿体ないでしょ、君の真の魅力がどこにあるかを知ってるのに、全部消えてる状態で手を出すなんて」

「ふえっ!?!」

途端、真っ赤にし、激しい動揺をみせるロコちゃん。

「ん、どうしたの?」

「ななっ、なんでもないっ」

激しく目を泳がせ、ロコちゃんは慌てて必死に、

「本当になんでもないから」

と、私の後ろに隠れる。

「んん?」

この反応って、もしかして。私はついにやにやしなながら、

「おろろ、もしかしてドキっとしちゃった? ロコちゃんレズに墮ちちゃった?」

「墮ちかけたけどいまの沙樹ちゃんて冷めたよ! 台無しだよっ」

「ええっ」

「ええっ、じゃないよ」

「じゃあ、ひでぶ？ それともうわらば？」

「誰も指先でダウンしてとか言ってないってば」

背中をポカポカするロコちゃん、可愛い！ アへ顔にしたい！

けど、そんな背中への攻撃が終わると、ロコちゃんは再びしがみついて、

「ありがとう」

「……」

「沙樹ちゃんが絶妙なタイミングで重い空気を吹き飛ばしてくれるから、私の心崩れずにいれるんだよね？ だから、ありがとう」

私は何も言わず歩き続ける。

言えるはずがない。逆に私の心が崩れそうだなんて。ロコちゃんの胸が背中に当たって、お股が濡れ濡れ大洪水の理解崩壊寸前だなんて！

それから程なくして、廊下は行き止まりへとたどり着いた。

「沙樹ちゃん」

「うん」

私たちは小声で確認しあう。

左側に大きな扉がひとつ。恐らく奥に何かがあるに違いない。

私は周囲に気を張りながら、扉に耳をあて中の様子を探る。

すると。

『社長、今日ほどの奴隷の味見をなさいますかな？』

扉の先から会話が聞こえた。しかも、社長ということは牡蠣根がそ

こにいる可能性は高い。

『9番の子にしよう』

『左様ですか』

私はつい驚いた。

だって、9番ってことは扉の奥では少なくとも9人以上の女体から選び放題って状況なんですよ、羨ましい。

しかも私の理性は、いまガタがきている。

「うらやまけしからん！」

私は、つい欲望に逆らえず扉を勢いよく開けてしまった。

「さ、沙樹ちゃん!？」

驚く口コちゃん。そんな彼女の声を他所に、扉の先の桃源郷が私の目を釘付けにする。

そこには、番号札を乳首のピアスで吊るした全裸の女性が20人近く壁際に繋がれていたのだから。一同にして空ろな瞳に媚びるような眼差しが彼女たちの状態を痛々しく語ってるも関係ない。素材をそのまま愉しむのも好きだけど、生きたダッチワイフや調理された娼婦だって素敵じゃない。

一応、執事らしき白髪の男性と椅子にコートをかけて座る牡蠣根 水一という汚いツーショットもあつたけど。

「だ、誰だ!？」

執事が懐から銃をだす。私は即座に腕に内蔵された銃で弾き飛ばし、

「私の鳥乃トリノ 沙樹サキ、ハングドの構成員よ。そして、レズである」

「レズの肌馬か!？」

執事がいった。その額には脂汗を滲ませ、銃を持った手を庇うように膝をつく。恐らく指の骨が何本か逝つたのだろう。

一方、牡蠣根は冷静な物腰で、私を一度品定めするように舐め見る。

「君が鳥乃かね? 待っていたよ」

「待っていた?」

「君の噂は色々伺ってるよ。どうやら、同性愛の好色家だそうじゃないか。どうだ? ひとつ交渉を受ける気はないかね?」

牡蠣根は立ち上がった。

「この私の頼みを受けてくれれば、この女たちを格安で提供しよう。手始めに部屋にいる彼女たちで酒池肉林を愉しみ、気に入った娘を買うといい」

なるほど。これがヴェーラのいう「選択次第でいい思いができる」ね。

「一応、条件は?」

訊ねると、牡蠣根は視線を私の後ろへと移し、

「君の依頼者、川泥カワで 炬子カマコを引き渡して欲しい」

やっぱりそうなるわよね。

「沙樹ちゃん」

後ろからロコちゃんの不安そうな声が耳に届く。

「悪いけど、断るわ」

私は、はつきりいった。

「ほう」

牡蠣根は意外そうに、

「どうしてかな？　悪い条件ではないと思うが」

「私この娘の体を報酬に依頼受けてるのよね。なのに、約束された報酬を受け取らずに豚に売り渡すなんて愚行すると思う？」

さりげに牡蠣根を豚扱いしたんだけど、相手は動じることはなく。

「そうか、残念だ」

しかし、いいながら牡蠣根は奴隷9番の背中をぽんと叩いて、

「とはいえ、私はこれでも気が長いほうでな。考えを直すまで猶予をやりたい。彼女は私からのプレゼントだ。抱きたまえ」

拘束を解かれた奴隷9番は情欲を駆り立てる仕草でゆっくり近づき、そつと私に絡みく。恐らく20代だろう。長い髪に均等の取れたプロポーシヨン。私もまだJK、彼女にお姉さんフェロモン感じちゃいまして正直たまらない。

「もちろん、格安で提供する奴隷は引き渡し後の川泥も含まれている。予約さえ入れてくれれば、処女を残すなり君に心酔するよう人格操作を施すこともできる。どうかね？」

それはそれは魅力的な提案をしてくれる。けど、私は制服の上着を脱ぎ、彼女の肩にかけてあげた。そういえば、シ〇イーハンターにいまそっくりのシーンがあったつけ。せっかくだから私はそのオマージュっぽく、

「この上着のポケットに、ハンドグダがごひいきしてる医師の名刺が入ってるわ。この人なら、きっとクスリの中毒も更正させてくれる」
「えっ」

「大丈夫。君から全て奪った男はすぐ潰すから。代わりに、終わったら改めて夜のライディングに誘わせて頂戴。もちろんクスリなしの

健全な、ね」

と、彼女の首筋にそつとキスし、彼女を後ろに下がらせた。

「ロコちゃん、この人と一緒に避難してて」

「き、貴様！」

ここで初めて牡蠣根が声を荒げた。

「レズの肌馬ともあろう者が、彼女を、そしてこの女共を今すぐ抱きたいと思わないのか？」

「ん、抱くよう？」

私は即答した。しかも、*“抱きたい”*ではなく*“抱く”*と。

「だから、先に牡蠣根社長っていう豚を駆逐して、自由の身になった彼女たちを独占させて貰うって話」

「ならばデュエルだ。君にはここで倒れ、奴隷のひとりになって貰う」

牡蠣根は椅子にかけてあったコートを羽織る。デュエルディスクと一体化された上着、デュエルコートだった。さらにタブレットの代わりのDゲイザーを装着。

「やれるものならね」

デュエルディスクを構え、私は返す。お互いのディスクが対戦相手を認識し、タブレットからデュエル用の画面が映し出された。

『デュエル』

私たちは同時に叫んだ。

性欲の権化(♀)

LP4000

手札5

性欲の権化(♂)

LP4000

手札5

「ひ、酷い」

ソリッドビジョンに表示された私たちの名前に、ロコちゃんがドン引きする。

しかし。

「良いではないか、性欲の権化。さあ、どちらのもっこり欲が高いか、雌雄を決する時がきた」

なぜか牡蠣根は気に入ってしまった模様。これはもう、あの名前のままデュエルするしかない。

「そして、先攻は頂いた。私はモンスターとカードを1枚ずつセット。ターンを終了しよう」

先攻は性欲の権化(♂)こと牡蠣根になった。彼は5枚の手札からモンスターと伏せカードを1枚ずつセットし、堅実に終わらせる。

「私のターンね、ドロー」

と、私はカードを1枚引いて。

「さてと。私は、まずスケール2の《幻機獣ゼータセクト》と、スケール5の《幻機獣サーチライオネット》でPスケールをセッティング！」

2枚のカードをディスクの左右に置いた。

「なにつー！」

驚く牡蠣根。私の左右に光の柱が伸びると、中から昆虫の姿をした電探と額が探照灯になった機械の仔獅子が浮上する。

「幻機獣というのは、ペンデュラムモンスターを持たないテーマではないのか？ いや、そもそも幻機獣とは何だ。まるで意味が分からんぞ」

「見たことがないモンスター」

ロコちゃんもつぶやく。

当たり前だった。これは元々私がダークドローで作り出した存在しないカードをハングドで複製した物なのだから。

「これで私はレベル3と4のモンスターを同時に召喚可能。生と死の境界よ。いまこそ歪を開き、幻世より甲板を下ろせ。ペンデュラム召喚！ 発進せよ、私のモンスターたち！」

私が口上を終えると同時に、上空から光の穴が開き、中から2つの靈魂が舞い降りてフィールドでモンスターへと姿を変える。

「私が召喚するのは、レベル4《幻機獣メガラプター》、そしてレベル3チューナー《幻機獣 甲豹》」

それは、恐竜の顔をした戦闘機と、豹の顔をした潜水艇であった。

「《幻獣機 甲豹》の効果。このカードはP召喚に成功した時、幻獣機トークンを1体特殊召喚する。そして、《幻獣機メガラプター》は私がトークンを特殊召喚した時、幻獣機トークンを1体特殊召喚する。これで私は2体の幻獣機トークンを特殊召喚に成功」

「すごい。一度に4体もモンスターを」

驚くロコちゃん。が、対し牡蠣根は、

「だが、所詮その内2体はトークンだ。そこから何をしようというのだね？」

と、動じることなくいった。

「相当セットカードに自信があるみたいね」

私はチラとペンデュラムモンスターの片方を見て、

「なら。ちよいと確認させて貰うわ。《幻獣機ゼータセクト》のP効果を発動。フィールド上の守備表示モンスター1体を表側攻撃表示に変更させる。」

ゼータセクトが流した電磁波が辺りに広がり、牡蠣根のセットモンスターを捕らえる。セットという隠れ蓑を剥がされ、杖を持った吸血鬼の魔女《ヴァンパイア・ソーサラー》が姿を現した。その攻守はどちらも1500。私のモンスターは2体ともそれを上回っている。

「さらに、《幻獣機ゼータセクト》の効果を受けたモンスターに対し、私は効果を無効にし攻守を半減させることを選択できる。もちろん私は適用するわ」

《ヴァンパイア・ソーサラー》 攻撃力1500↓750

さらに電磁波が強さを増すと、4体の幻獣機は《ヴァンパイア・ソーサラー》にレーザーを当て、心臓部を探し出しロックオンする。

「バトルよ。《幻獣機メガラプター》で《ヴァンパイア・ソーサラー》を攻撃。さらに《幻獣機 甲豹》で直接攻撃」

《幻獣機メガラプター》がロックオンした箇所を中心に機銃をばら撒くと、いとも簡単に相手モンスターは爆破四散し、続けて《幻獣機 甲豹》が放った魚雷は牡蠣根へと命中する。

牡蠣根は、伏せカードも手札からの誘発効果も使う様子はない。
た。

性欲の権化(♂) LP4000↓2850↓1250
「ぐうう」

牡蠣根は顔をしかめるも、

「だがしかし、これで《ヴァンパイア・ソーサラー》の効果は発動される。このモンスターは相手によって墓地に送られた場合にデツキからヴァンパイアカードを手札に加えるのだから。私はこれで《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》を手札に加える」

まるで倒してくれて感謝するとばかりにデツキから目当てのカードを抜き取る牡蠣根。たぶん、状況やライフの消耗がどうであれ《ヴァンパイア・ソーサラー》の効果を使うことができれば想定内の動きだったのだろう。

「《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》って確か。沙樹ちゃん、気をつけて」

ロコちゃんがいった。ちらと後ろをうかがうと、奴隷9番も心配気に私を見る。

「ありがと、でも大丈夫だから」

私はふたりに返した。

牡蠣根は笑い、

「ほう。どう大丈夫なのか見てみたいものだな」

「そう？　じゃあお言葉に甘えて」

私は宣言した。

「《幻獣機メガラプター》と《幻機獣サーチャイオネット》のP効果それぞれ幻獣機トークンを1体ずつリリースして発動。この2体はトークンを1体リリースする事で、デツキの幻獣機を1枚手札に加える効果を持つてるわ。この効果で私はデツキから《幻獣機レイステイルス》と《幻獣機テザールフ》をサーチ」

と、ここで消耗した手札を4枚まで肥やし、

「そして続けて私はレベル4《幻獣機メガラプター》にレベル3《幻獣機 甲豹》をチューニング」

「ふん、自らトークンを除去する事でレベルを調整してきたか」

牡蠣根はいった。もちろんサーチ自体も意味があるけど、概ね正解。

「未だ穢れに染まらぬ無垢なる翼よ。その透明さで敵を討て！シンクロ召喚！飛翔せよ、レベル7！《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》！」

《幻獣機 甲豹》が3つの輪となり、メガラプターが潜って4つの星に。

輪と星が発光しつつ混ざり合い、誕生したのは近いうちに陽井氏に返却する予定の、盗まれた四龍のうちの1体。攻撃力は2500。

「さらに《幻獣機 甲豹》の効果。このカードが風属性モンスターのS召喚の素材として墓地へ送られた場合、デッキから幻獣機1体を墓地に送る事ができる。私は《幻獣機オライオン》を墓地に送って、オライオンの効果で幻獣機トークンを特殊召喚。このカードは墓地に送られた際に幻獣機トークンを発生する効果を持つてるわ」

と、ここまで軽く回してから、私は締めめにカードを2枚ディスクに置く。

「カードを2枚セット。私はこれでターン終了」

これで手札は先ほどサーチしたモンスターだけになってしまおうけど、私はまだ問題ないという確信を持っていた。

性欲の権化 (♀)

LP 4000

手札 2 (《幻獣機レイステイルス》《幻獣機テザーウルフ》)

場：《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》《伏せカード (×2)》

性欲の権化 (♂)

LP 1250

手札 4 (《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》)

場：《伏せカード (×1)》

「私のターンだ。ドロ」

牡蠣根はカードを1枚引き、

「そんなドラゴン1体と伏せカード2枚で何ができるといえるのだね。私は《ヴァンパイア・ソーサラー》のもうひとつの効果を使用。墓地のこのカードを除外し、このターン私は1度だけ上級ヴァンパイアをリリースなしで召喚できる。舞い降りろ、《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》！」

フィールドに出現したのは妖艶なフェロモンを放つ女性ヴァンパイア。攻撃力は2000。

「どうだね、この色香。レズで好色家の君にはたまらないだろう」

胸ポケットから煙草を出し、煙をふかせて牡蠣根はいった。

「否定はしないわ」

でも牡蠣根とかいう豚のフィールが詰まったモンスターでしょ？
なんか嫌。

しかし牡蠣根は私の地の文を（ヴェーラと違って）察することはなく。

「なら、その妖艶なる力を愉しんで頂こう。代金は君の未来だがね。《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》は召喚時に自身より攻撃力が高い相手フィールドのモンスター1体を装備カードにする。さあ、《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》よ。我が僕の美女に飼われたまえ」
手を伸ばした《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》がフツと息を吹きかけると、ピンク色の煙がクリアウイングに向けて飛ばされる。

《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》のモンスター効果。1ターンに1度、フィールドのレベル5以上のモンスター1体のみを対象とするモンスターの効果の発動を無効にし、破壊する」

「なに!?!」

「悪いわね、サーチされてからの対策って余裕だったのよ」

直後、クリアウイングの翼が輝くと、その光にピンク色の煙が弾かれ、逆に《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》へと襲い掛かる。

「くっ。罨カード《ヴァンパイア・シフト》を発動。デッキから《ヴァンパイア帝国》を発動する！」

《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》が破壊される寸前、辺りは紅い月

の照らす夜の街のビジョンに切り替わる。そして《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》は破壊されるも、

「《ヴァンパイア・シフト》はその後、墓地のヴァンパイアを表側守備表示で蘇生する。舞い戻れ《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》！」

再び舞い戻る《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》。しかし守備表示だ。

「……カードをセット。ターンを終了する」

そう口にした牡蠣根の顔には「遺憾」の二文字が表れていた。

「私のターン、ドロー」

私はカードを引きすぎさま、

「《幻獣機レイステイルス》を召喚」

ディスクにカードを読ませると、私が移動用モンスターとして愛用してるステルス爆撃機がフィールドに出現した。もちろん攻撃表示。

「レイステイルスだど?!」

驚く牡蠣根。当然の反応だ。このモンスターの攻撃力はたったの100なのだから。

私は、クリアウイングにフィールを込めて、

「《幻獣ゼータセクト》のP効果。《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》を攻撃表示にして攻撃力を半分に。そしてクリアウイングで攻撃」

「だが、《ヴァンパイア帝国》はダメージ計算の間だけアンデット族の攻撃力を500アップさせる」

「それでも攻撃力はクリアウイングには届かないから」

《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》 攻撃力2000↓1000↓1500

性欲の権化(♂) LP1250↓250

クリアウイングが上空へと舞い上がり、ジャイロ回転しながらの急降下で《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》を貫く。すると、フィールでリアル化した衝撃が牡蠣根を襲い、

「な、ぐあああああつ」

と牡蠣根は宙を舞い、一度壁に叩きつけられてから床に倒れる。

「ぐうう。きさ、ま……何のつもりだ」

手をつき、何とか起き上がろうとしながら牡蠣根は、

「人をおちよくなるようなプレイングに加え、テザーウルフを出せばとどめを刺せるであろう所でレイステイルス。しかも私に負けを確信させてからフィールを込めた攻撃で痛めつけるなど、まるでいたぶつて愉しむような」

「まるで、じゃなくて実際愉しんでるのよ、いたぶつて」

私はいった。

「なっ」

顔を蒼白とさせる牡蠣根に、私はにこりと笑い、

「《幻獣機レイステイルス》で攻撃。今回は直接攻撃だから相当痛いのが覚悟して頂戴」

レイステイルスは上空に飛び上がると、無数の小型ミサイルを牡蠣根に向かって撃ち込む。

「くっ、私を護りたまえ、我がフィールようわあああああ！」

咄嗟に牡蠣根はフィールによるバリアを張り、身を護ろうとする。が、小型ミサイルは最初の数発だけでバリアを破り、無防備になった牡蠣根を爆発に巻き込む。

性欲の権化(♂) LP250↓150

以前の私だところこまでの威力は出せなかったと思う。それを可能にしたのはクリアウイングだった。あれを手にしたから、私のフィール量は笑える程にぐんと上がったのだ。

「沙樹ちゃん……」

後ろから、ロコちゃんの眩きが聞こえた。横目で覗くと、彼女は少し怯えた様子で私を見える。

「ごめんごめん」

私は努めて笑い、

「でも、私にも少しくらい報復させてよあいつには」

「はあ……はあ……」

そのあいつが煙の中から姿を現す。息を切らせ、衣服をぼろぼろにし、ふらついた足取りで。しかし、血走った目で私をじっと睨む。

「許さん！ 許さんぞ肌馬アアアアア！ 私をここまでコケにした事、後悔して貰う！」

なんて叫ぶ牡蠣根を、私はとりあえずスルーし、

「《幻獣機レイステイルス》は相手に戦闘ダメージを与えた際にトークンを発生させる。私はフィールドに再び2体目のトークンを呼び出しバトル終了」

しかし、ターンはまだ終えない。私は出現したトークンをすぐさま取り除き、

「《幻獣機サーチライオネット》のP効果。私は幻獣機トークン1体をリリースし、デッキから《幻獣機ネシエルファイ》を手札に。そして墓地の《幻獣機オライオン》除外して効果発動。私は手札から幻獣機を1体召喚できる。《幻獣機ネシエルファイ》を通常召喚」

フィールドに出現したのは、貝の模様が描かれた幻獣機モンスター。

「《幻獣機ネシエルファイ》のモンスター効果。このカードはトークンを1体リリースして、幻獣機トークン2体を特殊召喚する。私は最後の幻獣機トークンをリリースし、新たに2体の幻獣機トークンを発生。さらにネシエルファイのもうひとつの効果が発動。このカードは幻獣機トークンの数だけレベルが上がる共通効果を持たないかわりに、フィールドの幻獣機モンスター1体とレベルを同じにできる。現在、幻獣機トークンが2体存在する《幻獣機レイステイルス》はレベル9！ 《幻獣機ネシエルファイ》のレベルを9にするわ」

これでレベル9のモンスターが2体。

「私は、《幻獣機レイステイルス》と《幻獣機ネシエルファイ》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！」
上空に銀河の渦が出現すると、2体の幻獣機は靈魂へと姿を変えて取り込まれる。

「幾多もの幻獣機を搭載せし艦よ。いまここに舞い降り、禁断の力を解放せよ。エクシース召喚！ 発進せよ、ランク9《幻子力空母エンタープラズニル》」

銀河の中から降り立ったのは、私の使うフィールド魔法の舞台にもなってる一隻の空母。

「オーバーレイ・ユニットをひとつ取り除き、エンタープラズニルの効

果発動。相手の手札をランダムに1枚除外する。もちろんファイル込みでね」

「て、手札だと。そこまでする気か貴様は」

目を見開き、ぞつとした様子の牡蠣根。私は思わずフツと嘲笑い、「『そこまでする気か』ね。あなたに廃人にされるまでいたぶられ使い潰された奴隷たちは、それを何回思ったことやら」

そこで、初めて私がいたぶろうとする意図に気づいたのだろう。

「まさか貴様、デュエルで奴隷たちの痛みを返そうと」

私は返事の代わりに宣言した。

「エンタープラズニル！ 牡蠣根を幻子力の奔流で飲み込め。アトミック・ミラージュ！」

すると、エンタープラズニルから牡蠣根に向けて虹色の光が放たれ、彼を基点に光は放射線が描く。

「こ、この光は。おっ、おおおおお！」

虹色の光の中で牡蠣根の悲鳴が発せられる。

ロコちゃんがいった。

「なんか。あの光怖い」

「ええ」

隣の奴隷9番も同意しうなずく。

まあ、カード名の元ネタが原子力空母だしね。設定レベルでヤバイ代物なのは確かだと思う。

エンタープラズニルからの放射が終わると、光の中から牡蠣根が姿をみせる。全身を震わせながら、死んだ魚の目をして立ち尽くした。

「どう？ 肉体ではなく精神に直接ダメージが入る体験は」

私はいった。

デュエルモンスターズにおける手札は、紙幣や財産の他に頭脳を司る場合がある。そして、いまファイルでリアルソリッドビジョン化した効果は幻子力による『手札の除外』。

牡蠣根は、あの光の中で過剰な放射線を浴び様々な異常に苦しみなから自分を損失していく、まるで奴隷被害者が受けた絶望のような疑

似体験をしたのだ。

もつとも現実で後遺症が残るほどの力はないけど。それでも牡蠣根はいまだ幻想から抜け出せず放心したままだった。

「つつつつつ、が、はあッ！ はあッ、はあッ」

そんな牡蠣根がやつと我に返り、荒く息を切らす。

「は、肌馬アツツッ！」

牡蠣根が睨みつける。相当苦しそうに、それでいて怒りで恐怖を裏返すように。

「この世の地獄からお帰りなさい。けど、妙子たちが体験した地獄はこんなものじゃないのよ。人として最低限の尊厳も希望も棄てられ、クスリであなたの玩具としてでしか生きれない体にされ、精神が摩擦する程自分が消えてく恐怖に怯え続ける。次第に心が崩壊し、反応しなくなったら廃棄され、その時にはすでに自分の名前さえ分からないほどに知能も人格も記憶さえ摩擦しきり、あなたの目論見通り一切の抵抗なく衰弱して死んでいく。自分という存在の全てをあなたに奪われて死んだのよ」

「だからどうした!」

牡蠣根は怒鳴った。

「この私という偉大な存在の為に死ぬるのだ。その血肉精神全て我が栄養となる。これ程の名誉はないと思え!」

「それ、本気で言ってるの?」

訊ねたのはロコちゃんだ。

「当然だとも」

牡蠣根は笑い飛ばし、

「妙子というガキも、すぐに私に媚を売り、笑顔で股を開いた。私に奉仕することだけを考えて生きてきた日々はさぞ幸福だったろう。そのまま自分が棄てられたと知らずままま死んでいったのだ。感謝されてこそあれ恨まれる筋合いはない」

「ひ、人でなし」

ロコちゃんが泣いて叫んだ。

「どうして、どうしてそんな事が言えるの? どうして、妙子を殺して

尚追い詰めれるの?」

「ならば問おう。お前は養豚場の豚を哀れと思うのか?」

「ぶ、ぶた……?」

シヨックのあまり、ロコちゃんの息が止まる。

牡蠣根は続けて、

「むしろ、こう思うのが人の心理だろう。美味しい豚肉になれと」

「つつつ」

ついにロコちゃんは、ぷつりと糸が切れたように膝から崩れ墮ちる。

一見、笑顔が戻ったようにこそ見えたものの、すでにロコちゃんのメンタルはゼロハンで繋ぎ止めたハリボテ状態だったのだ。

そこへ牡蠣根の非人道的な言葉。耐えきれぬはずがなかった。

ロコちゃんの笑顔を護れなかった。その怒りに私は叫ぶ。

「か、牡蠣根えっ!」

「フハハハ」

牡蠣根は高笑いし、いった。

「肌馬よ何か言いたそうだな? しかし貴様もこちらの世界の人間だ。よもや自分は誰からも恨まれず生きてる、などと思ってはおるまい?」

「……そりゃあ、レ○レイプ未遂だっけしたし、彼氏持ちの女と海のりゾートでワンナイトラブしかけたし、依頼人の風呂を覗いたり夜這い仕掛けようとしてこんぺいとうで叩かれた事なんて数え切れないわ」
「だけど、と怒りに任せて私は続けて言いかけたが、

「それだけではないだろう」

牡蠣根は口角を吊り上げ、

「レズの肌馬、貴様は我が同類だ。何故なら、貴様は過去に女を潰したことがあるな?」

「え?」

崩れ落ちたままのロコちゃんが、空虚な眼差しで私を見る。

私は、ハツとなり、そして顔を青くする。頭の血が一気に冷え、寒気さえ覚えた。

私はさつき何ていった？ レ○レイプ未遂、彼氏持ちの女を寝取りかけた、それと覗きに夜這いだっけ？

「川泥という少女よ、教えてやろう。貴様が信頼し雇ったこの女は、女をクスリと凌辱で使い潰す味を知った我が同類だ」

「沙樹ちゃん。本当なの？」

失望寸前の目でロコちゃんはつぶやく。いや、彼女の状態を思えばそんなレベルではない。自分を保てる為の最後の切り所を失おうとしてるのだ。

「私……」

「違う、そんなこと。ロコちゃん！」

私は否定し声をかけるも、彼女の耳には届かない。

全身をガタガタ震わせ、更に絶望に身を墮とそうとしている。

誰か。誰かロコちゃんを支えてあげて。じゃないと彼女は。

そう思った矢先だった。

「あの子の顔をみて？」

言ったのは、奴隷9番だった。羽織つてた私の上着をロコちゃんにかけ、

「あの子はいま、とても心を痛めてるわ。誰のため？ あなたのためよ。あの子は、もしかしたら本当に自分の悪行を否定できない何かあるのかもしれない。でも、見てあげて？ あの子の瞳を。あの子は悪人じゃないわ。あなたのことをとても大切に想ってる、やさしい人よ。だから信じてあげて」

と、奴隷9番は後ろからロコちゃんを抱擁する。さらに私に向かって、

「この子は私が護るわ。だから、あなたはデュエルで牡蠣根を」

私は不安のあまりロコちゃんを眺める。けど、

「わかった。お願い」

意を決し、彼女にロコちゃんを任せ牡蠣根に向き直った。ロコちゃんの唇が「だいじょうぶ」と動いた気がしたからだ。

恐らく私の都合のいい願望だろう。けど、いまはその勘と彼女を信じるしかない。

「私はこれでターンエンド」

私はいった。

性欲の権化（♀）

LP4000

手札2（《幻獣機テザールフ》）

場：《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》《幻子力空母エンター

プラズニル》《伏せカード（×2）》

性欲の権化（♂）

LP150

手札2

場：《伏せカード（×1）》

牡蠣根は嫌らしい笑みを浮かべ、

「フハハハ、その余裕のない顔。どうやら相当こたえたと見える」

「そうね。いまなら依頼を無視してあなたをコロコロしても後悔ない自信があるわ」

「それは私も同じだ」

牡蠣根はデッキに手を伸ばし。

「だが、貴様だけはただ殺すのでは惜しい。最大級の絶望と屈辱を味わった上で死んで貰おう。私のターン」

その瞬間だった。牡蠣根のドロウする指が光り輝いたのは。

「唸れ、我がフィールドよ。そして私を勝利へと導き給え。デステイニー・ドロウ！」

牡蠣根は光る指でカードを1枚引く。それは、私が使うダークドロウの亜種のひとつだった。

「行かせて頂こう。魔法カード《おろかな埋葬》を発動。デッキから《ヴァンパイア・ソーサラー》を墓地に送る。そして、いま墓地に送った吸血鬼を除外し、リリースなしで《シャドウ・ヴァンパイア》を通常召喚」

フィールドに降臨したのは、1体の巨大な吸血鬼の影。鎧武装し、

長い髪をしているのが伺える。

「《シャドウ・ヴァンパイア》は召喚成功時に、デッキから他のヴァンパイアを1体特殊召喚できる。私は《ヴァンパイア・デューク》を特殊召喚」

「なら、《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》の第一の効果。レベル5以上のモンスター効果の発動を無効にして破壊する」

《シャドウ・ヴァンパイア》の隣に闇色の煙が巻き上がり、中から1体のヴァンパイアの影が浮かび上がる。が、クリアウイングの翼が輝くと、光に照らされ中の影は消滅し始めた。

けど。

「なら、手札の《ヴァンパイア・バット》の効果が発動。このカードは私の場にヴァンパイアカードが存在する場合、手札から捨てることで相手モンスターの効果をターン終了時まで無効にする」

「えっ」

《ヴァンパイア帝国》の紅い月から紅い瞳の蝙蝠の大群が出現すると、クリアウイングの翼に張り付き、光が遮断されてしまう。

前のターンまで使う気配がなかった所から、恐らくこのカードがデステイニー・ドロローで引き当てたカードなのだろう。

「これで《シャドウ・ヴァンパイア》の効果は有効。《ヴァンパイア・デューク》を特殊召喚させて貰おうか」

消えかけた影は再び姿を現し、煙から抜け出ると同時に吸血鬼の公爵へと姿を変える。

「《ヴァンパイア・デューク》は特殊召喚に成功した際、モンスター・魔法・罫のいずれかを宣言し、相手はデッキから宣言した種類のカードを墓地に置いて貰う。私は罫カードを宣言しよう」

私はデッキからカードを1枚抜き取り、

「《ブレイクスルー・スキル》を墓地に」

「この瞬間、《ヴァンパイア帝国》の効果が発動される。1ターンに1度、相手のデッキからカードが墓地へ送られた時、手札・デッキからヴァンパイア1体を墓地へ送り、フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。私は《ヴァンパイア・ロード》を墓地へ送り、《幻子

力空母エンタープラズニル』を破壊しよう」

巨大な《ヴァンパイア・ロード》の幻影が姿を現すと、その腕で一突き。エンタープラズニルはあっけなく轟沈した。

「フハハハ。流れが私に向いてきたぞ。続けて私はレベル5《シャドウ・ヴァンパイア》と《ヴァンパイア・デューク》でオーバーレイ。2体のアンデット族モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

紅い月が渦を描いて歪み、2体のヴァンパイアを靈魂にして取り込む。刹那、月は膨張をはじめ私たちの視界を紅一色に染め上げる。

「魔法カード《洗脳―ブレインコントロール》を発動」

紅い世界の中、誰かがこっそり呟いた気がした。

「仮初のシャドウを捨て、いまここに高貴なる騎士皇が目覚める。吸血鬼を統べ紅き夜に繁栄をもたらせ。エクシーズ召喚！ 出でようク5 《紅貴士―ヴァンパイア・ブラム》！」

紅い視界に1体の《シャドウ・ヴァンパイア》が浮かび上がり、周りの紅を取り込みはじめる。

視界から完全に紅が消えた時、先ほどの《シャドウ・ヴァンパイア》は、肉体を取り戻し、攻撃力2500の吸血鬼の騎士になった。

「これこそが私の真なる切り札。この力の前には効果を失ったクリアウイングなど無力なり」

確かに、戦闘を行えば《ヴァンパイア帝国》で攻撃力は3000になり、クリアウイングは破壊される。けど、

「残念だけど《シャドウ・ヴァンパイア》の効果によってこのターンあなたは攻撃できないんだけど」

《シャドウ・ヴァンパイア》には、デッキからの特殊召喚効果を使ったターン、その特殊召喚したモンスターでしかこのターン攻撃できなくなるデメリットが存在する。

「何も攻撃とは言っていない。オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、ヴァンパイア・ブラムの効果を発動。相手の墓地に存在する《幻子力空母エンタープラズニル》を私の場に蘇生しよう」

ヴァンパイア・ブラムが剣を空に向けて掲げると、地面が紅に光りながらボコボコと盛り上がる。

なるほど、その後何らかの手段で蘇生したエンタープラズニルにオーバーレイ・ユニットを与え、効果でクリアウイングを除去する算段らしい。あのカードの除外効果は、手札だけでなく場、墓地、デッキの一番上にも対応し、その4つから1つを選んで適用する効果なのだ。

仕方ない。私はここで2体のトークンを全て破棄し、

「カウンター罠《バレル・ロール弾幕回避》！ 幻獣機トークンを全てリリースし、その効果を無効にして破壊」

演出上、ヴァンパイア・ブラムの力によって盛り上がった地面からエンタープラズニルが浮上。しかし、直後その甲板から無数の幻獣機が出現し爆撃を落としてエンタープラズニルを再轟沈。さらにヴァンパイア・ブラムに機銃で雨を振らせ、バレル・ロール弾幕回避と言いながら弾幕によって吸血鬼の効果を回避する光景が映しだされた。

「出てきて早速だけど、退場して頂戴ヴァンパイア・ブラム」

弾幕を浴びた吸血鬼は「グオオオ」と唸りをあげながら爆破四散。無数の幻獣機たちもUターンし戦場から姿を消した。

「これで終わりよ、牡蠣根」

牡蠣根の手札はゼロ。伏せカードは1枚だけど、恐らくオーバーレイ・ユニットに関係する罠カードだろう。このデュエル、私の読みが正しければ完全に牡蠣根はすべての手を失ったはず。

「フッフ、フハハハハ」

が、牡蠣根は突然笑い出し、

「それはどうかな？」

「え？」

どうということ、と私が反応した瞬間だった。

——後ろで銃声が聞こえたのは。

「!？」

私は後ろを振り返る。見えたのは、奴隷9番が口コちやんを覆い抱きしめる姿。

その奴隷9番が、血を流し倒れた。

撃ったのは、口コちやんだった。

私の上着から出した拳銃を握り、虚ろな瞳で、しかし私を真っ直ぐ見据え銃口を向ける。

(あー！)

私は思い出した。ヴァンパイア・ブラムの召喚に紛れて聞こえた《洗脳―ブレインコントロール》の発動宣言。

私はすぐ辺りを見渡す。

ロコちゃんを操ったのは執事だった。私は腕に内臓した銃で《洗脳―ブレインコントロール》のカードごとデュエルディスクを破壊し、続けて脳天に弾丸2発。

「が……」

執事は小さく唸り、頭から血を流して絶命。

私はすぐ、ふたりの下へ駆け寄る。

「あ……」

私の眼前で正気に戻るロコちゃん。彼女の腕がだらんと垂れ、拳銃が床に転がる。

奴隷9番は、私をみると消え入りそうな声で、

「無事、みたいね。……よかった」

「何言ってるの。どうして離れなかったの？」

ロコちゃんが銃を構えるのに気づかなかったはずがない。なのに、わざと自分の体で銃口を覆い塞ごうなんて

奴隷9番はいった。

「じゃない、と……あなたが、撃たれて……た」

「っ」

その通りだった。先ほどの私はデュエルに集中してたから、フィールドで防壁も張ってないし、背後から狙われてるのにも気づかなかったのだ。彼女が庇ってくれなかったら、いまごろ私は間違いなく背中を撃たれ倒れていた。

奴隷9番が私に手を伸ばす。唇はわずかに動いてるけど、すでに声は出てない。

私がそつと彼女の手を握ると、彼女は穏やかにほほえみ、そのまま息を引き取った。

「奴隷に庇われたか。運のいい奴め」

牡蠣根がいった。私を始末できず悔しげな声で。

「だが、これで川泥という少女の手は汚れた。少女は殺人の罪を一生背負って生きていくことになり、肌馬貴様は自分の不注意で少女の心を壊した後悔を背負っていくことになる。貴様に最大級の絶望と屈辱を味わった上で死んで貰うといったのを覚えてるかね？　どうか、いい絶望だろう？　フハハ、フハハハハハハハ!!」

私は、ギリツと握り拳を作る。

どつかのライトノベルで「獲物を前に舌なめずりは三流のすること」という名言がある。

その通りだった。

ただ倒すだけでは惜しいといたぶらなければこんな結末にはならなかった。もつと周囲を警戒してればロコちゃんに起きてたことも気づけた。この事態は、すべて私の失態なのだ。

「殺、して」

ロコちゃんが囁いた。それが誰を指してのことかは言わなかったけど、私は「牡蠣根を殺して」という契約変更と受け取った。

「わかった」

私はうなずき、怒りに任せ残りの伏せカードを発動する。

「速攻魔法《サイクロン》！」

牡蠣根の伏せカードの真下から竜巻が上がり、カードは《エクシード・ドロップ》という正体を曝してから破壊。さらにフィールを強く込めた竜巻からは激しい強風がリアルソリッドビジョン化し、牡蠣根の体を宙へ飛ばす。

「ぐあっ！」

壁に叩きつけられ、牡蠣根は口から血を吐く。

「あ……が、ひっ、ひい！」

デステイニードローでフィールを殆ど消費したせいもあるだろう。一転し、牡蠣根は恐怖に全身を強張らせる。

私は銃を拾い、ショックで廃人寸前のロコちゃんを庇うように抱えながら、

「デュエルディスク。対戦相手がサレンダーを申請したら自動拒否でお願い。その上で10回連続で申請したらカウントダウン10でターン継続の意思表示を確認して、応答がなかったら私のターンに移行して」

と、ハウスルールを申請。ディスクは問題ないと判断したのか要求を受け入れ、

「サレンダー！ サレンダーだ。な、拒否!? どういうことだ。デュエルは終了だ。終わらせろ、終わらせろおおお！」

予想通り、牡蠣根はデッキの上に手を置きサレンダーを宣言。しかし、当然自動拒否。

「くあwse drft gyふじこーp」

発狂してるのか、私が自動拒否にしたのも分からず人の言語を成さない悲鳴を上げ、狂ったように牡蠣根は何度も何度もサレンダーを宣言。

『対戦相手の要望によりカウントダウン10が開始されました。ターン継続の意思表示をお願いします』

双方のデュエルディスクから電子音声が発せられた。

デュエルを続行すると一言いえばいいのだけど、牡蠣根はそれさえ理解できずいまだ発狂しサレンダーばかり行う。

牡蠣根のターンが終了した。

「私のターン、ドロー」

と、私は急ぎでカードを引き抜き、

「《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》で直接攻撃！」

空高く舞い上がったクリアウイングは、ジャイロ回転しながら牡蠣根の腹を貫き、風穴を開ける。

性欲の権化 (♂) LP150↓0

「——っ！」

牡蠣根の声にならない悲鳴。直後、彼の体が光の粒子状に分解されていく。

「あなたはただの死なんて生温い。あなたは地縛神の生贄となって永劫に苦しんで貰うわ」

牡蠣根だった光の粒子は、私の体へと取り込まれていく。同時に、2枚のカードが私の手元に浮かび上がった。

《エーテルリッター紅貴士ーヴァンパイア・ブラム》、そしてデュエル中姿をみせることはなかった《ヴァンパイアジェネシス》。それが、牡蠣根の所有するフィールカードだった。

「終わったのよね？ 妙子」

私はロコちゃん越しに妙子を見、呟く。

その直後、部屋中を突然の猛吹雪を襲った。

「えっ」

何事？ 私はフィールで自分とロコちゃんを護りつつ辺りを警戒する。それがフィールによる攻撃なのはすぐ分かったけど、狙いは私たちではないらしく、むしろ私たちを避けるように冷気が舞ってるように感じた。

吹雪はすぐに止んだ。

私は辺りを見渡す。すると、先ほどの冷気によって残りの奴隷たちがひとり残らず凍り付いてるの気づく。

「そんな……」

まさか、牡蠣根が死んだ（厳密には違うけど）からって全員口封じに!? 私は一瞬思ったけど、

「フシヨーパリヤートウキエ。大丈夫だよ、全員死んではない」

直後、聞き覚えのある声が私の耳に届く。

ヴェーラだった。後ろにはフィールでリアルソリッドビジョン化した《氷結界の龍 ブリューナク》が浮かんでる。

「ど、どういうこと？ なんでこんなことを」

「イズヴィニーチェ。彼女たちを助ける手段はこれしかなかったんだ」

ヴェーラは帽子を深く被り直し、

「情報収集の結果、こここの奴隷たちは牡蠣根が死んだ際に舌を噛み切って自害するよう後催眠がかけられてるらしいんだ。一度彼女たちの意識を奪った所で催眠の元を断たない限り事態は変わらないからね。悪いとは思いつつ助ける算段が生まれるまで彼女たちには

コールドスリープして貰うことにしたわけだよ」

……結局、私は奴隷9番もロコちゃんも助けられなかったばかりか、ヴェーラの強行が間に合わなければ残りの奴隷たち全員も殺してしまふ所だったわけだ。そう追い込んでしまふ程度には、私の心は弱ってた。

不意に、ロコちゃんが私の服の裾を掴んだ。

「沙樹ちゃん。いますぐ依頼料払わせて」

一度かすれた声でいつてから、ロコちゃんは私にしがみついて嘆き叫ぶ。

「沙樹ちゃん、あの社長さんと同じことしたことがあるんでしょ？ お願い、私を妙子たちと同じにして！ 使い潰して捨てられるまで、沙樹ちゃんに払わせて、みんなに償わせて！ そして私を殺して！」

心が抉られる思いだった。あの時のロコちゃんの「殺して」は牡蠣根に向けたものじゃない。罪悪感に惜し潰れ、自分を殺してという言葉葉だったのだ。ロコちゃんを、あのロコちゃんをそこまで追いつめてしまったのだ。

「私、ずっと護ってくれてた沙樹ちゃんを疑って、銃で撃とうとして、それを体を張って止めようとしてくれたあの人を殺して、それでもまだ銃を沙樹ちゃんに向けて、撃ち殺そうとした。私なんて、私なんて！」

「違う」

私はロコちゃんを抱きしめ、

「あれはロコちゃんの意味じゃない。ロコちゃんはカードの効果で操られてたのよ。じゃなければ撃ちかけた銃を手放したりはしないでしょう」

「そんなことないよ。私、本当にあのとき憎んで」

いまのロコちゃんは、弱り切った心と罪悪感で洗脳中の自分を本心と誤認している。

「わかった」

こうなると、もう私にはいまのロコちゃんの認識を受け止めてあげられない。それでも。

「でも。そういう償い方は駄目、妙子も誰もそんなことは望んでない。逆に泣くか更にロコちゃんを許さなくなるでしょ」

「だけど……」

「何より牡蠣根が悦ぶ。癪でしょそんなの」

「……」

私の胸に顔を埋め、押し黙るロコちゃん。

「それでも、私個人にだけでも償ってくれるなら、早く笑顔を取り戻して」

「え？」

ゆつくりとロコちゃんは顔をあげる。私は努めて微笑み、

「言ったでしょ、レズにもプライドがあるって。ロコちゃんがいまを乗り越えてより魅力的な女の子になったら、頼まれなくても私のほうから襲いに行くから。死ぬほど抱いてあげるから。それまでは体の報酬も支払い拒否」

「……っ」

ロコちゃんは無言のまま小さくうなづく。

本当は、彼女の要求に頷いてしまいたかった。もちろん、「使い潰して殺す」気はしないけど。

こつちも今回はメンタルやばいからね、人肌寂しさに傷心のロコちゃんと傷を舐めあってしまったなんて思っちゃってる。けど、私は何とか理性で思い留まる。これも「レズのプライド」なのだろう。ヴェーラが《ワーム・ホール》を発動し、空間にゲートを作ったのを見て私はいった。

「帰ろう、ロコちゃん。日常へ」

「うん」

少しだけ安心してくれたのか、そのままロコちゃんは意識を手放した。

あれから数日。

催眠を解除し、即席コールドスリープから目覚めた奴隷被害者たちは身元確認と検査を行った後、現在精神病院で療養している。また、

彼女たちの証言を受け、警察は名目上牡蠣根容疑者を指名手配および捜索本部を結成したが、彼より奴隷を買ったであろう政治家そして警察上層部の圧力により世間には未だ公表されてない。

しかし、それでも踏み込もうとするマスコミは当然存在する。

この度ヴェーラから買われた情報が週刊誌に流出したと聞いた私は、事務所の買い出しを名目にコンビニへと立ち寄った。

現在時刻午前3:00。

「いらつしやいま……あつ」

店内に入ると、店員は私を見て嬉しそうにいった。

「沙樹ちゃん」

それはロコちゃんだった。

「久しぶり。知らなかったわ、ここでバイトしてたなんて」

言いながら私は雑誌コーナーへ足を進める。深夜しかも店内に他の客はいなかったので会話にさほど支障はない。

「一昨日からね。前いた所は倒れてる間にクビになっちゃって」

しかし、ロコちゃんはレジを離れ私の下へ小走りで寄る。可愛い。

「無茶しないでよ。梓から聞いたけど、学校も休学届だしたんでしょ？」

「その学校も昨日から復帰しましたー」

両手をばんぎいして妙なハイテンション。まだ空元気なのは間違いない。

「だから無茶は」

「私はいいかけるも、

「まあいいか。頑張ることにしたのね、あれから」

「うん」

ロコちゃんはどうもなずいて、

「だって、沙樹ちゃんの言うとおりだもんね。妙子も猫俣さんも、早く私が元気にならないと安心できないよ」

猫俣さんとは奴隷9番のことである。事件後ヴェーラと永上さんに身元を調べてもらった所、猫俣ねこまた 秀子ひでこさんという医学部の大学院生だったことが分かった。誘拐されたのは去年の12月で、本当ならい

まごころ学校を卒業し女医としての第一歩を踏み出すはずだったとか。
「それに」

ロコちゃんは、もじもじと照れながら、

「早く私が元気にならないと、沙樹ちゃん依頼料払わせてくれないって言うから」

それって。

「おろろ？　じゃあ、なに？　そんなに私に抱かれないの？」

と、私はからかってみたけど。

「うん」

「あーあーそんな必死で否定しなくてもいいのにこの前あれだけ犯してって言うておいて、ってええええええええ!?!」

ちよ、うわ私いますっごいコントみたいな反応しちゃった。

私は気恥ずかしさに視線を逸らし、

「あーえっと、自分で言うておいてあれだけど。本気？」

ロコちゃんはこくと頷き、

「なんだか私も目覚めちゃったみたい」

てへ、なんて舌を出しながら、顔が真っ赤つか。それでも人懐っこい笑顔を見せてくれて、「その様子だと、大丈夫そうかな」なんて私はほっと安心。

やっぱり、色々あつたけど機内や牡蠣根を倒した直後に慰めでも手を出さなくて正解だった、と改めて思った。

だって、あの時に手を出してたらロコちゃんは確実にメンヘラ化する。二度と自分で立ち上がり笑顔を取り戻すことはなかっただろう。私はレスである。でもそれは、女の子が大好きでという上に成り立ってる。私だってたまには女の子との一時より女の子の永遠の笑顔を選ぶことだってあるのだ。自分にそんなプライドあったことに、私自身が一番驚きだけど。

そんな時だった。

「金を出せ！　それも1万や2万じゃない。全部だ！」
「スツゾコラー」

二人組の男がナイフ片手にやってきた。どうやらコンビニ強盗ら

しい。

「あっちゃー」

苦笑いするロコちゃん。それ以上の修羅場を潜り抜けたただけあつて、もう余裕綽々。

それでもつて私に、

「沙樹ちゃん、『ドラゴン・キャノン』いい？」

なんて手を合わせ、小声でお願いするのであつた。

「了解」

私は手を伸ばしかけた週刊誌を棚に戻し、

「報酬は今度一緒に妙子の墓参りね。あと、その日は親御さんに友達の家に泊まるつて言つておいてくれる？」

「それつて……」

目で訊ねるロコちゃんに私は一回ウインク。ちやうど、店内のBG Mが「Get Wild」に切り替わる。

さて、任務開始ね。

私は（息を）止めて、（引き金を）引いた。

MISSION 9—アンバーカラーの思い出（前篇）

私の名前は鳥乃とりの 沙樹さき。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「プロポーション抜群のお姉さんと赤ちゃんプレイしたい」

「はい《ハンマー・シュート》」

コンビニでロコちゃん与会った翌日の朝。早速、私は教室で梓のハンマーを受けた。

「ひ、ひどい梓」

床にめりこむように倒れ、何とかピクピクしながら梓にいうも、

「だって、今日の沙樹ちゃん普段以上に気色悪いこというからー」

「私にだって、たまにはお姉さんにベッドで甘えたいのよ」

そう。理想をいうなら、この前の任務で死なせてしまった奴隷9番こと猫俣さん。抜群のわがままプロポーションで、包容力もあって、本当に惜しい人を護りきれなかった。

「だからって赤ちゃんプレイはないよ」

どうやら梓にはそこが駄目な様子。私は起き上がり、

「なら幼児プレイ？ それともばぶばぶ？」

はいハンマー二発目入りました。私は再びメメタアされたカエルみたいな顔で、

「あ、あへ」

一回生死の境を彷徨う。けど、

「あ、そういえばお姉さんで思い出したんだけど」

そんなことお構いなしに、梓は屈めていった。

「近所に住んでる神簇かむらさんって覚えてる？ ふたつ年上の、豪邸に住んでるお嬢様」

「忘れるわけじゃないでしょ」

フルネームは神簇かむら 琥珀こはく。小学生の頃は同じ学校に通い集団登下校で梓共々同じグループだったのだけど、彼女にはあまり良い印象を持ってない。というのも、登下校中に神簇さんが梓を虐め、それを見た私が徹底的に虐め返した経験があったからだ。

「それで神簇さんがどうかしたの？」

ハンマーの痛みが引き、椅子に座り直しながら訊ねると、

「うん。噂なんだけど、先日先輩のお爺ちゃんが亡くなっちゃって、いまお屋敷が色々大変なんだって。それも普通の大変さじゃなくって、この前銃声が聞こえたって」

「銃声？」

「うん」

梓は不安そうに頷き、

「私の家はまだ離れてるからいいけど、沙樹ちゃんのお家はすつごく近かったよね？ 気をつけて」

「そうね、気をつけるわ」

ちよつとだけ。

「裏側」を知らない梓が「銃声」なんてものを普通に受け止めてるのが気になったけど、タイミング悪くチャイムが鳴ってしまい、その話はお開きになってしまった。

——現在時刻12:30

「神簇 琥珀からの依頼か？」

「そ、確かりストにあったはずだけど」

昼休み。

私は食事を手早く終えてから屋上でハンドと通信を取っていた。

この学校の屋上は週に何回か一般開放されてるんだけど、今日はその日ではないからか、私以外には誰もいない。

「ああ、確かにあるな。まだ誰も手付かずだ」

通信先から増田はいった。

「受けるのか？」

「うん、お願い。ついでに詳細データも転送してくれる？」

「わかった。数分待ってくれ」

と、通信先からキーをカタカタ打つ音が聞こえた。

「ところで」

そんな音を出したまま増田は、

「何かあったのか？ 知らなかったならともかく、普段のお前なら若い女性の依頼ならすぐ受けようとしただろう」

「そう、なんだけどね」

私は一泊置いて、「琥珀さんは私が小学生だった頃の知り合いなのよ。それも、お互いあまり良くない印象のね」

それ以上に、前回友人でもある依頼人を護りきれなかったショックが残ってるから、とは言わないでおく。

「なら、どうしても突然受けようと思ったんだ。オフの時間に連絡まで取って」

「神簇のお屋敷から銃声が聞こえたっていうからね。近所には私の幼馴染だっているし、万一巻き込まれる前に解決したいだけ」

「なるほど」

直後、私の端末がファイルを受信した。

「一応データは送ったよ。届いてるか」

私は「ちよい待って」と受信したデータを確認し、

「受信完了。ありがと増田」

「いまから依頼人に連絡を取ってこちらで待ち合わせを決めておく。事前の希望から恐らく18:00にステーションホテルのラウンジになると思う」

「分かった」

それから幾つか取りとめもない確認を取ってから、増田との連絡を終える。

「さてと、仮眠でも取ろつと」

半ば予想はしてたものの、受け取った依頼内容には護衛が含まれた。となれば、私は今日この時間を逃せば夜通しの警備で寝れない可能性がある。

私は適当に身を隠せそうな場所を探し、壁に背を預けた。

それから30分くらい経った頃だろうか。ちょうどいい日差しもあつてか目を瞑ってるだけがつい寝息に変わり始める。

そんな時だった。

耳が銃声を捉えたのは。

「っ」

私はすぐ気を張り巡らせ、辺りの様子をうかがう。音からしてフィールを用いて発砲時の騒音を抑えたもの、そして屋上よりずっと遠くから撃ったものと思える。

私は警戒しながら双眼鏡を出し、屋上から外を眺める。そして、見つけた。

場所は学校からすぐ近くの路地。そこで、ひとりの特徴的な格好をした女性がコートにサングラス姿の男ふたりに追いかけてた。

女性は腰まで届く長い髪に少し気が強そうに見えるも整った顔立ち。私の見立てでは同じ歳から大学生辺りだろう。世間から高嶺の花に見られそうなタイプの美女だった。そんな人間が、よりによってハイカラな袴に下駄姿で怪しい男から逃げている。こんな光景を見たら火災現場さえ恐れない江戸っ子も回れ右して逃げ出すだろう。

よく確認すれば、男は銃を隠し持つてる様子だった。

(さて)

私は考えた。仮にいまここで彼女を危機から救うことができれば、どんな反応を貰えるだろうか。きつと「すてき、抱いて」となるに違いない。

(ぐへへ)

私は顔をにやけさせたまま双眼鏡で美女を追い続け、彼女の足が止まるのを待つ。そして、

「魔法カード《ワーム・ホール》」

私は目の前に空間の歪みを作る。すると、同時に遠く離れた彼女の傍にも同じ歪みが。

『!?!』

突然のことに、美女だけでなく3人全員が驚いてるのがうかがえる。私は歪みに手を伸ばし、

「こっちよ」

と、歪みの先にあったものを掴み引つ張る。すると、あら不思議美女は歪みの中に飲み込まれたと思うと私の下へ。二つの歪みは、まるでど〇でもドアのように繋がっていたのだ。

「きゃっ」

強引に腕を引かれた美女は、〃こちら側〃で姿勢を崩し私に抱きかえられる。そして、突然学校の屋上にきてしまったことで目をぱちくり。

「ここは」

「陽高の屋上よ」

と、彼女の胸を鷲掴み。なお陽高とは陽光学園高等部の略語だ、つてわお！ さすが和服のせいで目立たなかったけどこの人結構ぼいんじやないのよ。

なんて喜んでたら、

「きゃあッー」

バチンとビンタ一発。しかも、それが並の威力じゃなく私は空をトルネードしてからのヤ○チャ倒れ。

「な、何なのよ貴女いきなり！」

ぜーぜー息をしながら睨みつける彼女に、私はまだ痺れの残る頬を撫でながら、

「何ってそんなの、そこに揉めるおっぱいがあれば普通に揉むでしよレズの生態的に」

「意味分らないわよ。それと聞きたいのは突然こんな所に連れ込んで、何が目的？」

「ナニが目て——」

ふざけた瞬間だった。彼女が懐から何かを抜き出すと同時に光の筋が私の喉元に突き付けられる。

「もう聞いわ。何が目的？ いま私命を狙われてるから容赦はできないわよ」

それはビームサーベルだった。もしくはライトセーバー？ とにかく遊戯小説に似つかわしくない光学兵器を握り、余裕なく睨む彼女に私は冷や汗混じりに、

「い、いや正にそのピストル持った男に追いかけてたのを見つけて、つい手を差し伸べただけだ」

「証拠は？」

「つて言われても、信じて貰えないと悪魔の証明になるんだけど」
だって、突発的な行動なんだから、相手の状況も知らない以上照明する手段がなさすぎる。

言いながら私はこっさり手首の向きを調整し腕の銃でビームサーベルの握り手を撃ち抜く準備は万全にしておく。彼女の様子から、私を信じる余裕など無さそうに見えたから。

けど、意外にも彼女はすぐ殺傷には出ず、

「なら腹の底を言いなさい。でないと、こんな逃げ場のない所に連れられて、貴女が『ピストル持った男』とグルだと判断するしかないわ」

「あなたを助けて『すてき、抱いて』つて言われたくてしました」

「……は？」

突如のことに彼女の顔が啞然となる。よし！ ちゃんと聞く耳をもってくれた。私は続けて、

「あなたみたいな素敵な女性がブ男ふたりに追いかけてるなんて、レズの私としては見逃すわけにはいかなかったのよ。それでもつてここには他に人いないしね。上手く口説いて堂々と青姦に及べるかなって。迷惑だった？」

「嘘、じゃなさそうね。信じられないことに目が本気なもの」

彼女は盛大なため息一回に、

「まあ一応、助けてくれたことには感謝しておくわ、ありがとう。……その下心さえなければ」

と、ビームサーベルの刀身を収める。

「褒めても発情しかでないからね」

「何なの貴女」

「レズである」

「頭痛してきたわ」

頭を抱え彼女はいった。

私は笑い、双眼鏡でもう一度外を眺めながら、

「まあ、外が落ち着くまで避難してるといいわ。あいつら、まだ君を探してるみたいだしね」

男共は二手に別れいまま現場近くをうろちよろしてた。

「そうさせて貰うわね」

彼女は言うも続けて、

「ただし。セクハラしたら痛い目にあって貰うからそのつもりで」

と、展開前のビームサーベルを見せて笑った。よかった。少しは肩の力抜いて安心してくれてるみたい。

こうして間近で見ると、改めて彼女は魅力的に映った。

ただ強気なだけでなくお淑やかも併せ持ち、一度微笑めば満開の桜みたいに周りが彩る。その上驕ったりする所もなく、多きつめの態度が棘をつくる場合もあるものの一度接してみると案外打ち解けやすい。

「そういえば、お互い自己紹介まだだったわね」

そんな様子のまま、彼女はいった。

「私は神簇かむらこはく 琥珀こはく、よろしくね。貴女は？」

なんて訊ねられる中、私は静かに思考停止した。

OK、話をしよう。

実は受け取った資料には当然、顔写真も添付されてたんだけど私はまだ確認してなかった。何故なら、神簇 琥珀という人間には私の中で悪い印象が強すぎて、「いまま醜悪な中身が見た目に露見したブスでしょ」と思い込んでたせいで、視界に入れるのを拒んでたのだ。

知っての通り私は女の子には目がないレズである。けど、私にだって数え17年生きてきて受け入れられない女性というものは存在する。唯一ひとりだけ。それが、神簇 琥珀だったのだ。

ぶつちやけ、体が頭が現実を拒絶しているのだ。認めてしまったら、何か大事なものが音を立てて崩れてしまいそうで。

「? どうしたの?」

そんな事も知らず神簇 琥珀は固まった私の顔を覗き込む。しかも、先ほどまでのピリピリしたものもなく、友達に接するようなフレンドリーな態度で。

「神簇……琥珀、サン?」

数秒ほど固まった後、やっと私は口だけ動く。

「ええ、そうだけど」

「もしかして、陽光学園小学部を卒業して中学は某お嬢様女子中へ移った、あの？」

「よく知ってるのね、その通りだけど」

「小学部時代にある子を虐めて、その子の友達に返り討ちにされた、あの、あの？」

「な、何でその黒歴史知ってるのよ貴女！」

「アイエエ!? カムラ!!サン!? カムラ!!サンナンデ!?!」

私は腰を抜かしお尻から床に倒れる。ジョバババババ。

「そこまで驚くことなの? どういうことなの、貴女一体だれ?」

「ドーモ。カムラ!!サン。匿名希望です」

「名乗ってないじゃないの」

「いや本当。せめてあなただけは、せめて今だけは想い出ブレイクせず冷静でいて?」

彼女から依頼を受けた以上時間の問題なのは分かるけど。黒歴史って言ってたから私のことも覚えてるみたいだし。

「という事は、過去に面識のある人なのね? 私の知り合いに貴女みたいな危険人物の変態はいないはずだけど」

「酷い! レズ代表の私を侮辱するってことはこの世のレズを侮辱するって話じゃないの」

「貴女こそこの世のレズを侮辱してるじゃないの。一応、私は女子高の出だからそういう趣味の友達だって何人かいるけど、貴女のこと話したらみんな怒りを覚えるんじゃないかしら。こんなのと一緒にされたくないって」

「そんな、そんなことは!」

「ない、とは言い切れないわね。さすがにそろそろ「自分のレズ定義」が他所と違うことくらい自覚はしてる。だからって自分のキャラを変える気もないけど。」

「まあそれはともかくとして」

神簇さんは私の手から離れた双眼鏡を手にとると外を眺め、

「まだ私を探してるわね。どうしよう、このままだと……」

と、神簇さんは言いかけた口を止める。

「何か緊急の用事？」

訊ねると、神簇さんは「ええ」と頷き、

「人と会う約束をしてて、けどこのままだと連絡を取ることもできないわ」

その相手とは間違いなく。

「それって、ハングド？」

「え？」

神簇さんは驚き、

「ど、どうしてそれを」

やっぱり。

「そりゃあね」

私は立ちあがり、いった。

「いまから会う予定のハングド構成員って私だから」

「っ!？」

ついに声さえ出ないって様子の神簇さん。けど、

「この位って驚かれたら困るって話なんだけど。本当の地雷はこの後なんだから」

そこまで言ってから私は彼女の正面に立ち、それでいて気まずさに視線を逸らしいった。

「改めて、今回あなたの依頼を担当することになったハングドの鳥乃トリノ 沙樹さきよ。んーまあ何、久しぶり？」

数秒後、神簇さんは絶叫した。

「アイエエエ!?! トリノ!! サキ!?! トリノ!! サキナンデ!?!」

「あの人たちが狙ってるのは、私の祖父が残した財産なの」

神簇さんはいった。依頼内容の詳細である。

「うちは代々古武術と古物を扱ってた家の分家だね。本家から預かってる貴重な品もそれなりにあるわ。両親は神簇を名乗ってないから、いずれ家を継ぐのは私だと聞かされてきた。けど、それは遠い遠い未来の話。そう思ってたんだけど」

「この前、亡くなったんだっけ。その祖父が」
「ええ」

私の正体を知った神簇さんは最初こそ激しく取り乱したものの、意外にもすぐ「それはそれ」とすぐ仕事の話に入りだしたのだった。

仮にも自分を虐めたことがある相手なのに。それだけ余裕がないのだろうか。

「これを好機と様々なやり口で財産を狙われたわ。私では神簇の当主は務まらないと思われたのか内部からも、そして」

神簇さんは、一拍置いていった。

「ある日、ついに金庫が盗まれた」
「なるほど」

「うちの金庫って大人が数人掛かりでやっと持ち運びできるかどうかってレベルの重さなのよ。だから、まさか丸々持つてこうとするなんて。けど」

「けど？」

「恐らく、あの人たちは金庫を盗むことはできても、中を開けることはできなかったんだと思うの。金庫には特殊な加工が施してあって、開錠手段を知ってるのは祖父と私だけ」

「だから狙われてたのね、さっきの男に」
「ええ」

神簇さんはうなずいた。

「ですので、ハングドには私たちを追ってる男たちの特定と対処。及びその間私たちの護衛をお願いしたいの。できれば2人雇いたいわ。報酬は金庫の中に。本家の財産は出せないけど、神簇の財産だったら最悪全額提供するわ。ただし、依頼執行の結果金庫の破壊に至った場合、報酬は無いに等しくなるわね」

「つまり、報酬が欲しければ可能な限り金庫を無事な状態で回収しろと」

「逆に要らなければ爆破でもいいわ。あの男たちのものになる位ならそれでもいいと思ってるから」

「了解」

私はいって、

「人数については問題ないわ。元々ハンドは担当の他に支援がついての最低2人体制で任務に入るから。それよりも確認したいのがひとつ」

「なに？」

「さつき、私たちって言ったけど。一応詳しく聞いても？」

私の記憶が正しければ、たしか神簇さんにはアンっていう妹がいたはずだ。

「任せるわ」

神簇さんはいった。

「任せる？」

「現在、私の屋敷の中は誰が敵で誰が味方か分からないわ。確実に言い切れるのは妹だけよ。貴女も敵を護ろうとは思わないでしょう」

しかし、説明する神簇さんはどこか雲って見えた。嘘をついている。そんな目だった。

「依頼は正直にお願い」

「え？」

「依頼者はあなたよ。そちらの希望に私は従うだけ。敵ごと全て護られていうなら従うわ」

「貴女……」

一回、驚いた顔。それから神簇さんはすまなそうに、

「撤回はしないわ。名目を都合よく使って臨機応変に対応して下さい。でも、私の我侷を言わせてもらうなら屋敷の人たちも敵と確定した人以外は可能な限り護って欲しい。これが本音よ」

「分かった」

私はうなずいた。

「依頼内容は以上と思つて構わない？ それなら、早速任務に入ろうと思うんだけど」

「お願いします」

頭を下げる神簇さん。

「じゃ、早速」

私はデュエルディスクのタブレットから梓に電話をかけ、

「もしもし、梓？ ごめん悪いけど早退するわ」

とだけ伝え、電話を切る。

「一応、学業が終わるまでは待てたのよ？」

すまなそうに言う神簇さんに、

「ああいや、そうじゃないのよ」

と、校舎の外に視線を向けていった。

「ちようど尋問しやすそうなのが二匹うちよろしてるじゃない」

その後、男共をデュエルで拘束した後、幾つか質問の後
MISSION³、⁴参照
ゲイ牧師に献上した。

「いまの所はこんな感じかな？」

「そうね」

神簇邸に徒歩で向かいながら、現在私たちは現状の再確認を行っていた。神簇さんが先ほど追いかけてた経緯についても。

先述の通り神簇邸は現在誰か敵で誰が味方か分からない状況にある。その為に神簇さんはハングドに連絡を取ろうと外へ出たのだが、そこを男共に襲われた。しかも、うっかり部屋着のまま外出した為デュエルディスクを持ち忘れ、振り返ちにもできず、逃げ続けるしかできなかつたらしい。

男共は、どこかの組織の構成員らしい。実のところゲイ牧師に預けたのは、彼らが黒山羊の実だったら牧師は「同業者だったので解放しました」と馬鹿正直に報告してくれるだろうと思っただけだった。組織絡みなら、ハングドが介入した情報を掴まれるのも時間の問題だろうしね。

なんて話してるうちに、私たちは神簇邸に到着した。

敷地は背の高い塀に覆われ、門の隙間からのみ内部を覗かせる。そこを潜れば車で移動するのを前提とした、まるでアニメや漫画でみるような庭という名の大自然。鳥の囁きを聞きながら、私たちは徒歩で更に数分。やっと屋敷の玄関へと到着した。

「ただいま」

中に入り神簇さんがいうと、

「お帰りなさいませ」

と声。奥からひとり少女がやってきた。

「姉上様、そちらのお方は？」

「この子もしかして。」

「お客様よ。アン」

「やっぱり。彼女は妹のアンちゃんだ。」

「初めまして、神簇 アンと申します」

「一礼するアンちゃん。それがもうホント作法礼儀弁えたご丁寧な
それで、

「初めまして、鳥乃です」

「私もついつい畏まってしまおう。」

「鳥乃様、ですね。姉がお世話になっております」

少し小柄で、凜としてる姉とは反対に腰も低く大人しい印象を覚える。しかし、そのバストだけは別。幾ら彼女が自己主張しない雰囲気をしてても、胸の目立ちづらい袴姿であろうとも、隠しきれない巨乳がそこにあつた。決して小さくない姉でさえ袴の上からは全然目立たないというのに。この妹さん脱げばどれだけの凶器をお持ちなのだろうか。

「悪いけど後で私の部屋にきてくれる？」

「わかりました。でしたら先にお茶をご用意致しますね」

そんな私の視線にも気づかず、アンちゃんはおっとりした微笑み顔で「3人分ですよろしかったですか？」なんて訊ねる。特大肉まんふたつ付いてくるから、これは立派な飲茶ね。

「ありがとうアン。彼女のことはその時改めて紹介するわ」

姉の神簇さんはいい、

「ごっちよ」

と、私を自室に案内する。

「悪いわね。本当ならもっとちゃんとした部屋で話したかったのだけ
ど」

「別に大丈夫よ」

私は返す。自室ならこつそり寝床をくんかくんかしたり、下着を頂いたりできるしね。幾ら正体が昔嫌ってた神簇さんだからといって、これだけの美女になったとあれば性欲に生きるのが私ことレズである。

「それよりアンちゃんだっけ。大きくなったわね」

確か神簇さんより3つ下だから、木更ちゃんと同じ歳のはず。

「うん。ほんと、いい子に育ってくれたわ」

「特に胸がね」

「あの子に、しっかり注意を呼びかけないと」

頭を抱える神簇さん。

「って」

突然、神簇さんは驚いた顔で、

「あの子とまだ会ってなかったの？」

「え?」

どういうこと?

すると神簇さんは、

「アンが通ってる学校、陽光学園なんだけど」

「え!」

今度は私が驚き、

「アンちゃん、神簇さんと同じ学校行ってないの?」

「中学は私が卒業した女子中だったのだけど。どうやら、あの子あつちで虐められたみたいで」

「あー」

確かに、ああいう大人しい子は虐めのターゲットになるよね。

「もしかして、だからここまでキャラ変わったの? 元虐めっ子の神簇さん」

「黒歴史穿り返さないで」

神簇さんはため息一回に。

「私が変わったと思うなら、原因はあな……別にあるけど。でも、思うところがあつたのは確かね」

何か言いかけてたのは分かったけど、すぐ言い直されてしまい、仕

事的にも追求する必要はなさそうだったので私はスルーし、

「そりゃあるでしょうね。梓とか梓とか昔の梓とか」

でも、弄りはやめない。

「やめて本当に」

「えー」

「それでも弄るなら担当のチェンジも辞さないから」

「うっ」

どうやら、これ以上遊ぶのはやめたほうが良さそうだ。

「それより。ここよ」

神簇さんは部屋のドアを開けていった。どうやら到着したらしい。

そこは、いうなら旅館の寝室を思わせる和室だった。畳の匂いが鼻を抜け、ちゃぶ台に掛け軸がどこか落ち着く。

横隅には給湯設備もあり、やろうと思えばトイレ以外この部屋を出ず一日を過ごすことも可能にみえた。

「いい部屋じゃない」

「ありがとう。適当に楽になってて」

座布団を用意してくれたのでありがたく座らせて貰っていると、程なくして。

「姉上様、お茶が入りました」

と、アンちゃんが人数分の湯飲みと饅頭を持ってきてくれた。

「ありがとう、そこに座って」

「はい」

促されてアンちゃんが座ると、

「さて、早速だけど本題に入るわね」

神簇さんはいった。

「現在、この屋敷で信頼できる人間は私とアンのふたりだけ。それ以外は誰が敵で誰が味方なのか分からない状況にあるのは知っての通りね？」

「はい」

アンちゃんは頷いた。ふたりとも表情に緊張と不安が入り乱れる。

「そこで」

と、神簇さんは目で私を見て。

「この度、私は事態の早期收拾のため奪われた金庫そのものを報酬にハングドを雇うことにしたわ。こちらにいる鳥乃さんが私たちを担当して下さい方よ」

「えっ」

アンちゃんが驚き、

「ハングド、ですか？ 姉上様。もしかしてここ数日行動されてたのは」

どうやらアンちゃんには知らされてなかったらしい。

「ごめんね黙ってて。貴女のこととは信じてるけど、どこで誰が聞いているか分からなかったから伝えたくてもできなかったのよ」

「そう、ですね」

納得した、というより分かってますといった様子のアンちゃん。普通なら一言二言いってやっても良い内容なのに。それだけアンちゃんが理解の良すぎる子なのか、それだけ厳しい状況にあるのか、それとも。

「それで、今後からの行動だけど。ハングドの方には先述の通り私たちを護衛しながら奴らを特定、かつ対処して頂きます。それで」

と、神簇さんは視線を私からアンちゃんに移し、

「鳥乃さんには、明日から彼女と一緒に通学し、学校生活の傍ら可能な範囲で彼女を護ってくれないかしら？」

「え？」 「姉上様？」

驚く私とアンちゃん。神簇さんは私がアンちゃんと同じ高校の先輩であることを告げ、

「学生兼任なら留年させるわけにはいかないでしょう。それに何より、ここ数日危険だからとアンには学校を欠席して貰ってたから」

「ああ」

私は納得した。

しかしアンちゃんのほうは、

「けど、姉上様が」

「鳥乃さんへの依頼はこの屋敷の方たちの護衛、当然対象にアンは含まれてるわ」

「ですけど、それでは姉上様が!」

「半日自衛する程度はできるわ。今日はうっかりデュエルディスクを忘れただけで」

不安だ。不安だけど私ひとりでは離れた場所にいるふたりを同時に護ることはできない。

「……わかりました」

アンちゃんも同じ気持ちだったのだろう。すごく不安を顔に表して、しかし姉の意志を尊重しますといった様子で彼女は折れる。

「一応、ハングドのほうでも私が離れてる間どうにかできないか相談してみるわ。もし何かあったら私だけの失態では済まないしね」

「この際、強がりには言わないでおくわ。ありがとう」

つまり本当なら強がっておきたい所なのだろう。やはり彼女はプライドの高い人間なのだ。それでいてプライドより現実を優先させる器量も弁えてる。

「あ、そだ」

私はふと。

「しばらくの間、私もこの屋敷に寝泊りしても大丈夫? 依頼内容からして、私24時間体制で目を光らせてたほうがいいと思うのよ」
するとアンちゃんが、

「では、私がお部屋の準備を致しますね。姉上様」

「そうね。悪いけどお願い、アン」

「はい」

よし。私は心の中でガッツポーズした。

これでいつでも夜這いができる!

「それと食事や入浴も基本的に外で済ませることになるわ。家での水分補給はアンが部屋に給湯器などを置いてるから彼女に頼んで頂戴」

「アンちゃんが? けど」

私は部屋の給湯設備に視線を向ける。

「アンのほうが上手なのよ。お茶を淹れるの」

「そうなの、アンちゃん？」

「えっと」

アンちゃんは困った笑みを浮かべるだけ。すると神簇さんが、

「べ、別に私が不器用ってわけじゃないのよ？」

なんて見事に自爆してくれる。

「不器用なのね？」

「べ、べべ別に不器用じゃないってば。剣道薙刀合気道は段持ちだし」
うわなにこのいきものかわいい。

けど、剣道に薙刀しかも合気道まで有段者だったの神簇さん。怖い。

「そ、そんな事よりも！」

あつ、誤魔化した。

「ハングド側から何もなければ、いま説明した態勢で進めてこうと思うだけ構わないかしら？」

神簇さんの真剣な瞳。

私はからかうのをやめて頷いた。

「なら話は以上よ。アン、悪いけど鳥乃さんと話があるから、少し下がって頂けるかしら？」

「はい」

席を立つアンちゃん。

「ごめんね、アン。こちらから呼んでおいて」

「いえ、私のことはお構いなく。では」

と、アンちゃんは一礼してから部屋を後にした。

神簇さんは妹の足音が聞こえなくなるのを待ってから、

「やっ」

と、改まっていった。

「ここからはプライベートの話よ」

プライベート。わざわざこう口にした時点で、私は気づくべきだったのだ。

この時、私はすっかり無防備だった。

年月を経て、公私を使い分ける次期当主として遜色ない美女に生ま

れ変わった彼女を前に、私は完全に心を許してしまってた。

神簇さんは。——いきなり私の胸倉に掴みかかった。

「鳥乃沙樹！　なんで貴女がハンドグドなんかにいるのよ！」

「え、ちよつ、神簇さん？」

突然のことに軽く混乱する私。

「貴女絶対そういうタイプじゃなかったでしょ！　寧ろ始末される側でしょ、なに正義のヒーロー面してるのよ。性格最悪なくせに、性格最悪なくせに！」

そこにいたのは、まさに想い出の天敵である神簇　琥珀そのものだった。な、なんて奴！　いまのいままでずっと猫被ってやがったっていうの？

「そ、それはこつちの台詞って話よ！」

ここでイニシアチブを取られるわけにはいかない。遅れて私も彼女の胸倉を掴み返す。

「そちらこそ未だ梓に謝りもせず、虐め被害者の家族面？　自分の失態は権力でもみ消す気なのが丸分かりなんだけど。一体どつちが性格最悪だか」

「そんな性根悪いことするわけないじゃない！」

「するから梓が虐められたんじゃない。家のコネで周り味方につけていて」

「それは……」

凶星なのか押し黙る神簇。が、次の瞬間。

「そんなの、虐められる態度をするあの子が悪いんじゃない！」

言いやがった。私は口角を吊り上げ、

「ほう、それアンちゃんが聞いたらどんな反応するかなく？」

「あ」

ハツとなる神簇。

「あの子を出すなんて卑怯よ！　このクズ！　鬼！　悪魔！」

「そのまま返してあげるわ、このクズ！　鬼！　悪魔！」

「なによ！」

「なによ！」

そのままお互い胸倉を締めあい、真正面からにらみ合うふたり。

「こうなったらデュエルよ。貴女との長年の宿命、ここで決着つけてあげようじゃない」

「望む所じゃない」

私は喧嘩腰のまま返し、

「せっかくだから、勝ったほうは何かひとつ言うこと聞くってのはどう?」

「いいわね。貴女に一生物の恥を与えてあげるわ」

「なら私が勝ったらあなたに一生物の傷をつけてあげるから」

その貞操に。

しかし、神簇は私の意図には気づかなかったようで。

「もう勝ったつもり? 勝つのは私なんだから」

と、真正面からデュエルディスクを起動する。

私もデュエルディスクを起動し、互いの機械が目の前の人を対戦相手と認識。デュエルモードへと移行する。

『デュエル』

こうして、全くもって自然な流れでデュエルが始まった。

沙樹

LP4000

手札4

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

琥珀

LP4000

手札4

※ 試験的にリンク導入後の表記を以上の形で行います。今回はスピードデュエルになります。

「先攻は貫うわ。私のターン」

ディスクの決定を見て神簇はいい、

「私は手札から《先史遺産ネブラ・ディスク》を召喚」

神簇が召喚したのは、1体の先史遺産^{オーパーツ}モンスター。その攻撃力は1800。

「このカードは召喚成功時にデッキから先史遺産^{オーパーツ}モンスターを1体手札に加える。私はデッキから《先史遺産ゴールドデン・シャトル》を手札に加え、カードを2枚伏せるわ。ターン終了よ」

確か《先史遺産ネブラ・ディスク》には、自分の場のモンスターが先史遺産のみの時に墓地から特殊召喚する効果を持っていた。つまりここで戦闘破壊しても、次のターンにはサーチしたゴールドデン・シャトルと併せてフィールドに舞い戻ってくる。

そしてゴールドデン・シャトルの効果は「フィールドの先史遺産全てのレベルを1上げる」もの。

レベルはどちらも4、つまり彼女の狙いは次のターンにランク5のエクシーズ召喚。

「私のターン、ドロー」

だったら、どんなモンスターがくるかは分からないけど出来る限りの対策はしておこう。

「私は手札から《幻獣機ブラックファルコン》を召喚。更に装備魔法《団結の力》で攻撃力を800アップ」

私の場に1体の幻獣機が出現すると、《団結の力》を受けたそれはオーラに包まれ攻撃力上昇がビジョンで表示される。

《幻獣機ブラックファルコン》 攻撃力1200↓2000

「攻撃力がネブラ・ディスクを超えた」

つぶやく神簇。けど、その程度で終わるはずはない。

「ブラックファルコンでネブラ・ディスクを攻撃。ここでブラックファルコンの効果が発動。私の場に幻獣機トークンが発生。そして《団結の力》の効果は場のモンスターの数×800攻撃力を上げる効果。つまり」

《幻獣機ブラックファルコン》 攻撃力20000↓28000

ブラックファルコンの攻撃力は更に上昇する。そして《幻獣機ブラックファルコン》は場にトークンがいる限り戦闘や効果では破壊されない。トークンが生成される前に《炸裂装甲》とかされたらやばかったけど、賭けには成功。これで次の相手の一手に対処する準備は整った。

と、思ってたたら。神簇はいった。

「そうするわよね、読んでたわ」

「え？」

しかし、攻撃自体は成立したようでネブラ・ディスクはブラックファルコンの攻撃に打ち抜かれ破壊される。

琥珀 LP4000↓3000

攻撃力の差分が琥珀のライフを削るも、ここで彼女は2枚の伏せカードの片方を表向きにし、

「罨カード。《先史遺産の呪い》発動」

と、宣言した。直後、紫色の瘴気が怨念の如くブラックファルコンの機体に絡みつく。

「このカードは私の先史遺産モンスターが相手モンスターによって破壊された場合に、その相手モンスターを対象に発動するカードよ。この効果でブラックファルコンは以後攻撃と表示形式の変更が不可能になり、さらに効果も無効にする。また、私はこの戦闘で発生したダメージの倍の数値だけライフを回復するわ」

琥珀 LP3000↓5000

回復していく神簇のライフ。実質的にダメージが回復に変換されてしまった。

「でも、ブラックファルコンの攻撃力上昇は《団結の力》によるものだから。《先史遺産の呪い》では消えないから」

しかし琥珀は、

「だからいいのよ」

「え？」

それって。しかし本人からの回答はなく。

「私のターン」

今回のデュエルルールであるスピードデュエルではメインフェイズ2が存在しない。ターン終了時にすることもなく、そのままターンは神簇へと切り替わる。

沙樹

LP 4000

手札 2

「《団結の力（ブラックファルコンに装備）》」□□

「《幻獣機ブラックファルコン（攻撃）》」□□「《幻獣機トークン（守備）》」

□□ー□□

□□□□

□□「（伏せカード）」□□

琥珀

LP 5000

手札 3

《幻獣機ブラックファルコン》 攻撃力12000↓2800

「行かせて貰うわ。私は手札から《先史遺産ゴルドン・シャトル》召喚、更に墓地から効果によって《先史遺産ネブラ・ディスク》特殊召喚。そして《先史遺産ゴルドン・シャトル》の効果で2体のレベルを5に」

予想通り、神簇は2体のモンスターを並べレベルを5にしてきた。

「そして私は、レベル5になったゴルドン・シャトルとネブラ・ディスクでオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

部屋の天井に銀河の渦が出現すると、2体のモンスターはいつものように靈魂へと姿を変え取り込まれていく。そして、銀河の中からまず浮き出たのは、なんと33の文字。

「え!?!」

私は驚いた。だって、その演出から推測されるモンスターは、ナンバーズと呼ばれるフィール・カードなのだから。

「エクシーズ召喚！ 現れなさいNo. 33！ 空に浮かぶ要塞マチュllピチュよ。いまこそ無数の砲を構え、敵を殲滅せよ！ ランク5、先史遺産―超兵器マシュllマック！」

フィールドに現れたのは口上の通りその存在そのものが巨大な兵器と化した空中要塞。その攻撃力は2400、ってそんな事よりも。

「ちよ、ちよつと!？」

私は驚きながら叫んだ。

「神簇、なんであなたがフィールカードなんて持つてるのよ」

「当たり前でしょ、古物を扱う家なんだから」

「まるで古物を扱うなら持つてて当然みたいに言わないで」

しかもこの断言どこか既視感。ああ、そうだ普段の私の「レスなら当然」発言と同じなんだ。

「それに、フィールカードもなしに『半日なら自衛できる』なんて言わないわよ」

そこはごもつとも。

「でも、肝心のデュエルディスクを忘れて外に」

「そんな事よりいまはデュエルよ！」

あ、また誤魔化した。

「マシュllマックのモンスター効果。オーバーレイ・ユニット1つを取り除いて、相手モンスター1体の攻撃力とその元々の攻撃力の差分のダメージを相手に与え、同じ数値だけこのモンスターの攻撃力をアップ」

「えっ」

待つて、いまブラックファルコンは《団結の力》で強化されてるから。

「この効果によって、鳥乃沙樹！ 貴女に1600点のダメージを与え、マシュllマックの攻撃力を1600上昇！」

神簇の言葉と同時にマシュllマックから召喚口上でも触れてた無数の砲身が顔を出し、私に向けて一斉に掃射される。

沙樹 LP 4000 ↓ 2400

《No. 33 先史遺産―超兵器マッシュマック》 攻撃力2400
↓4000

とはいえ、さすがにフィールド込みで攻撃する気はないらしく、私は砲撃の雨を浴びるも痛みひとつ感じることはない。でも、ビジョンで表示されたマッシュマックの攻撃力には「やばっ」となる。

「お返しよ。マッシュマックでブラックファルコンに攻撃！」

ブラックファルコンの攻撃力は2800、このままだと私はさらに1200のダメージを受けてしまう。

けど。

「あ、じゃあダメステいい？」

「え？」

一瞬硬直する神簇。まあ、オのつくモンスターみたいなカードは使えないんだけど。私は手札を1枚墓地に送って、

「手札の《幻獣機ジョースピット》の効果発動。このカードを墓地に送り、ブラックファルコンの攻撃力を400ポイントアップ。さらに私の場に追加の幻獣機を特殊召喚するわ」

フィールドに半透明のジョースピットが浮かび上がると、ブラックファルコンの攻撃力を上昇させつつ、その横に新たなデコイの幻獣機が出現する。

神簇はほっとして、

「なんだ400アップね。驚かせないで頂戴よ」

なんて様子の彼女に、私はついにやけながら一言。

「で、《団結の力》」

「え？ あっ」

途端、ピシッと固まる神簇。気づいたらしい。

「幻獣機トークンが新たに出現したことで、ブラックファルコンの攻撃力はさらに800ポイントアップ。これで私のモンスターの攻撃力も」

私は表示されたビジョンを指し、

《幻獣機ブラックファルコン》 攻撃力2800 ↓ 3200 ↓ 400

「4000つて話よ」

いった。

「嘘、追いつかれた!？」

「じゃあ迎撃しちゃってブラックファルコン」

マシュー・マックとブラックファルコン。互いの攻撃が互いを撃ち抜き、戦闘は同時討ちという形で双方とも墓地に送られる。

「なら、リバーズカード!」

神簇はいった。

「《ストーンヘンジ・メソッド》を発動。このカードは、……って、あれ?」

神簇はきよとんとした顔をみせる。発動を宣言はずの《ストーンヘンジ・メソッド》が表側表示にならないのだ。

「どうして、デュエルディスクの故障?」

と、状況を把握できない様子の彼女に私は一言。

「ネブラ・ディスク」

「え? あっ」

再び、ピシツと固まる神簇。

彼女が使ったネブラ・ディスクには、自身の効果で墓地から特殊召喚したターン。先史遺産カードの効果しか使用できなくなるってデメリットがあるのだ。

《ストーンヘンジ・メソッド》はデッキから先史遺産を呼ぶ効果を持つてるから確かに先史遺産サポートのカードではある。けど、カード名に先史遺産がない以上、ネブラ・ディスクの制限に引っ掛かってしまうのだ。

「あ、うー……あー」

自分の失態に、すつごく顔真っ赤な神簇。ほんといつの間にこの子は可愛い反応をするようになったのだろう。

「べ、別にネブラ・ディスクのデメリット忘れてたわけじゃないのよ。ちよつと熱くなって、うっかりしてただけなんだから」

「ふ〜ん」

にやにや。

「な、なによー!」

「ううん別に」

「なら何でにやにやしてるのよ! 言いなさい! 正直に言いなさいよ鳥乃沙樹!」

きやんきやん騒ぐ神簇萌え。

「あーもう、バトル終了」

そんな頭に血が上がったままの神簇(可愛い)は、吐き棄てるようにフェイズの移行を宣言し、

「メインフェイズ2にカードを伏せ……え、なんでターン終了になってるの?」

と、再びやらかしてた。

スピードデュエルには、メインフェイズ2は存在しないのである。

「じゃ、私のターンね。ドロー」

私がさっさとカードを引いた頃、やっと神簇は気づいたようで。

「あ、そういえばメインフェイズ2はないルールだったわね。って、鳥乃沙樹なんでもうドローしてるのよ」

「可愛い(いやそう言われても)」

「なななななななな!」

まるで茹蟄になる神簇。あ、しまった心の声が表になってた。

「も、もういいわ。どっちにしても私のライフは5000あるんだから。対して貴女は場にトークンが2体と手札が2枚。私のライフを削りきるには少し手が足りない状況のはずだもの」

なんて、ご丁寧の説明フラグまで口に出してくれちゃう。

「じゃありクエストにお答えして」

私はまず、真ん中のモンスターゾーンに存在してた幻獣機トークンを取り除き、

「私は通常モンスター、幻獣機トークン1体をリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン!」

「えっ」

突如、辺りは暖色の電脳空間に書き換わり、前方に八方のマーカー

が出現する。幻獣機トークンは矢印となって下を指し示すマークに取り込まれ、

「リンク召喚！ 起動せよ、リンク1《リンク・スパイダー》！」

EXモンスターゾーンに出現したのは、1体の電脳蜘蛛。

「え、ちよつ。鳥乃 沙樹！ 貴女、リンクモンスターなんて持つてるの!?! しかもトークン1体で呼び出すような」

驚く神簇。

「《リンク・スパイダー》の攻撃力は1000。まずこれで1000点確保ね。続けて《リンク・スパイダー》のモンスター効果、1ターンに1度、このカードのリンク先に手札の通常モンスターを特殊召喚できる。《リンク・スパイダー》のリンクマークは下。リンク先のゾーンはさつきまで素材モンスターがいた場所だから、いまモンスターはいない。特殊召喚可能よ」

私は手札の1枚をフィールドに置き、

「手札からレベル4チューナーモンスター《バルジザン》を特殊召喚
出現したのは、水兵服を着た機械兵士の群れ。

神簇は「うわっ」て顔で、

「チューナーって事は、もしかしてトークンを使って今度はレベル7
の」

「大正解。レベル3幻獣機トークンにレベル4《バルジザン》をチュー
ニング」

機械兵士が4つの輪に変化すると、中を幻獣機トークンが潜り、3
つの星になって輪と混ざり合う。

「未だ穢れに染まらぬ無垢なる翼よ。その透明さで敵を討て！シンク
ロ召喚！飛翔せよ、レベル7！《クリアウイング・シンクロ・ドラゴ
ン》！」

口上と共に出現したのは、やっぱりまだ本来の持ち主に返却できて
ない1体のドラゴン。

「クリアウイングの攻撃力は2500、これで合計3500点ね」
「ま、まだ1500足りてないじゃない！」

虚勢を張る神簇。けど、私は最後の手札を見せて一言。

「そしてこのカードを通常召喚」

「あ……」

神簇の唇が小さく動く「終わった」と。

そのカードは攻撃力1700の《幻獣機テザールフ》だった。

琥珀 LP5000↓4000↓1500↓0

「む、無効よこんなの」

デュエルが終わるとすぐ、神簇は喚くようにいった。

「わ、私の手札にはミラフォがあっただから。それをちゃんと伏せてたら勝ってたのは私のほうじゃない。だから無効よこんなの」

とかなんとか言ってるけど、そんな我侭が通用すると思ってるのだろうか。

「確かに伏せてたら神簇が勝ったかもしれないわね。……それで？」

「それで、って」

「ミスがあっても勝ち負けは勝ち、負けは負けでしょ。さすがに性格最悪だった神簇のお嬢様でも、いまのあなたならその位の事は分かると思ってたんだけどね」

「それは……」

押し黙る神簇。しばし訪れた静寂。私は、彼女への落胆で「はあ」となりかけた頃。

「あの頃に戻りたかったのよ」

神簇はいった。そして、涙目で詰め寄り、

「貴女キャラ変わり過ぎなのよ。貴女元々は人間嫌いの人間不信で徳光さん以外この世に必要ないって感じの孤高なキャラだったじゃない。それが何でレズビアンで正義の味方になってるのよ」

彼女の嘆きが痛いほど伝わってきた。

どうやら、思った以上に神簇の中で私の存在は大きかったらしい。恐らく宿敵として、ある意味好敵手として。

けど、決着をつけるべき相手は、すでに想い出とはかけ離れた人間になって、それが自分の人生の一部を否定されたようにシヨックで。彼女のいう通り「梓以外この世に必要な」かった私でさえ、いま

のvari過ぎた神簇にショックがあるのだから、彼女の言葉を聞けばどれ程のものかなんて凄く分かる。

だから。

「プライベートなんだから、我儘ひとつ言わせなさいよっ」

涙を一粒浮かべる神簇の姿が、取り残された一羽の雛鳥みたいに痛々しく映る。

「ごめん」

居たたまれなさに、私は視線を逸らした。

「私も、神簇があまりにキャラ変わりすぎて、ううん……人間的に成長しすぎて甘えちゃってたわ」

正直いまの神簇はレズ目線抜きでも魅力的な人間に見えた。優れた人格者で、だけど隙が多くて程々に抜けてて、いい意味で完璧じゃない。

だから、つい「いまの」神簇に攻撃してしまったのだ。

僅かな間、静寂が訪れる。私はどうすれば神簇に「ごめん」って気持ち届かせれるか必死に言葉を探すも、正解は頭の中に出てこない。

「ごめんなさい、困らせちゃったわね」

静寂を打ち消したのは、神簇だった。

「少し、喋っていい?」

訊ねる神簇に私は、

「うん」

と頷く。

「ありがとう」

神簇はいった。

「昔の私は、自分が誰より偉いと思ってたわ。通せない我侭はなかったし、周りの人間はすべて私に従うものかだと思ってた。そりや家族っていう例外はあったけど、まだ幼かったからそういう矛盾には気づかなかったわね。祖父の教育はむしろ厳格だったけど、その分使用人に我侭言いたい放題してたわ」

確かに。私の知る神簇 琥珀という人間はス○夫の財力を持ったジ○イアンともいうべき、親のスネでふんぞり返るテンプレ的な傲慢

我侬お嬢様だった。

「だけど、貴女は私に屈しなかった。私が教師も世界も味方につけても、貴女はだから何って態度で私に向かってきたでしょ」

うん。確かに神簇の姿が目映るたびに執拗に殴りかかってたわね。覚えてますとも。

「でも」

神簇はやさしい微笑みを浮かべだす。

「あそこで貴女に報復されなければ、私はいまも虐げられる側の気持ちも、誰しも自分に従うわけじゃないことも知らなかったかもしれない。だからね、貴女から見て私が変わったって見えたなら、それは間違いない。だからね、貴女が私を変えてくれたのよ。不思議な話だけど、私いま貴女には感謝してるのよ。そりや当時は屈辱が先にきてたから、絶対貴女を屈服させてやる、報復に報復で返してやろうって思ったけど」

私は、驚きのあまりに言葉を失う。まさか、昔の自分の行動をそう受け取られるとは思わなかった。ハンドグドに入る前の自分って終始クズだったのに。

「次に貴女と会った時には、もう性格最悪とか言わせないし卑劣な手段に出たら正統な手段でやっつけようと思ってたわ。さすがに元が元だからある程度は仕方ないとしても、前みたいに性根酷いキャラはしてないはず。……って思ってたけど」

神簇はぼつの悪そうに笑い、

「やっぱり駄目だった。気づいたら完全に昔の私に戻っちゃって、また返り討ちに遭うし。……ほら」

と、神簇はデュエルで使わなかった3枚の手札を見せる。そこにはミラフォなんてないし、そもそも私の攻撃を耐えるようなカードさえなかった。

「伏せてれば勝ってたなんて嘘ついちゃうんだもの。私、まだ昔と全然変わってなかったのね。屋敷の皆も私を見限るわけよ」

なんて笑いながら自棄に配する神簇に、

「いや」

気づいたら、私は微笑み返してた、

「むしろ、いまの神簇は凄いい人格者になったわ。人として尊敬できるし、いまなら神簇家の当主になっても問題なくやってけると断言できる。まあ、完璧な人間とは口が裂けてもいえないけど。そこがまた、いまの神簇の魅力でしょ？」

「……」

今度は神簇のほうが驚きで言葉を失ったらしい。

「けど」

今度は真面目な顔で、

「いま正にそんな神簇の全てを脅かす存在がいる。改めて約束するわ。仕事としてだけじゃなく昔の悪友のプライドとして、絶対にあなたを護ってみせるって。今度は、メンタルのほうもしっかりと」

つい昔に戻った、なんて言ってたけど。本当はただただ不安だったのだろう。誰が敵で誰が味方か分からない現在が辛くて、つい想い出に逃げてしまったのだ。過ぎ去った過去なら決して自分をこれ以上裏切らないって。けど、私は彼女が求めたものを裏切ってしまった。「だから神簇、もう1度だけチャンスを受頂戴。もう、二度と裏切らないから、私を信じて」

私は、やっと「正解」を彼女へと届ける。

「鳥乃。……ありがとう」

神簇はいった。

「ここで貴女に逢えて、本当に良かった」

今日一番の安心を顔に出して。

ところで、こんな空気に吞まれて私はデュエルに勝利した特典を要求するのをすっかり忘れてしまった。なんとという不覚！

MISSION100—アンバーカラーの思い出（中篇）

私の名前は鳥乃トリノ 沙樹サキ。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「和服って、エロいよね」

お昼休み。今日も私は、梓に向かつていつもの妄言をのたまう。けど、今回その場にいるのは私の天使梓だけではなく。

「鳥乃さん、私たちのことをそういう目で見てらしたのですか？」

と、フリ程度に驚いてみせる神簇 アンちゃんと、
「相変わらずですね、先輩は」

と、最早いつものことと微笑んでる木更ちゃん。現在私たちは四人で弁当を食べていた。

少し前の移動教室の時、私と梓が1階の科学室に向かう途中、偶然その科学室から教室に戻る木更ちゃんとアンちゃんコンビにエンカウントしたのだ。どうやらふたりは校内ではクラスメイトで友人だったらしく、梓の提案で一緒にお昼を食べることになったのだ。

そんなわけで、いま私たちがいるのは学校の屋上。これまた運がいいことに今日は週に数回ある屋上の開放日だった。

「沙樹ちゃん、具体的には？」

ああ、梓が既に《ハンマー・シユート》の準備ばっちり。けど、訊ねられたんだからレズの私としては応えずにはいられない！

「そりゃ、和独特の色彩が女の子を華やかに魅せ、服の上からは物凄く着痩せして映すのに、一度開ければ途端におっぱいの強烈な存在感。あのギャップこそ日本の心！ 遺伝子に刻まれた和の記憶が和服工口に浪漫を感じさせずには——」

「はいアウト」

「メメター！」

最後まで言わせず放たれた梓のハンマーに、私は絶叫をあげつつ床にめりこむ。

ピクピク痙攣する私を尻目に梓は笑って、

「ごめんねアンちゃん。いまの沙樹ちゃんって救いようがない変態さ
んだからー」

「そ、そうみたいですわね」

さすがに乾いた笑いを浮かべるアンちゃんはぼそつと、

「けど、私としては、どちらかというと梓さんの暴力のほうか」

「アンちゃん、何かいった？」

「……いえ、お気になさらず」

うわ、私以外の子に笑顔で黙らせる梓なんて見たくなつた。

「大丈夫ですよ。徳光先輩は鳥乃先輩にしか暴力で訴えませんか」

と、木更ちゃんがフォローを口にし、しかし続けて、

「あ、先輩。もしアンさんに手を出そうとしたら私もハンマー制裁に
参加させて頂きますから。そのおつもりで」

まさかの木更ちゃんからハンマー宣言。私はやつとメメタアの痛
みが引いて起き上がり、

「心配しないで、和服エロいといつても、アンちゃんとお姉さんとは
全く別の感情抱いてるから」

すると梓が、

「どこが大丈夫なのか分からないけど、じゃあとりあえずアンちゃん
は？」

「アンちゃんは愛玩欲と庇護欲？」

「じゃあ琥珀さんは？」

「……。……昔の関係の延長でブチ犯したい」

「はいアウトですね。……あれ、徳光先輩」

てつきりニ発目のハンマーが飛ぶと思ってた木更ちゃんは、私のア
ウトな台詞に反応しない梓に首を傾けた。

「え？……あ、ごめんね」

聞き逃してた、といって笑い誤魔化す梓。けど、ふたりに反して私
とアンちゃんからはふつと笑顔が消える。

梓は、決して聞き逃してたわけではない。いまでも彼女は神簇 琥
珀を許してはいないのだ。

「で、一応聞くけど。今日は大丈夫だった？」

「はい。今日の所は特に問題はありません」

私の問いに、アンちゃんは顔に「ありがとう」とも「すみません」とも取れる腰の低い態度でいった。

あの後、木更ちゃんと梓は先に屋上を後にし、他の生徒たちもひとりまたひとりと教室を後にして昼休み終了10分前。いま現在屋上は私とアンちゃんの二人きりだ。

「なら良かった」

一応、ドローン代わりに《幻獣機テザーウルフ》で監視してはいたけど、実際彼女に問題が起こった形跡は見られない。

「それにしても、鳥乃様……」

「呼び捨てでいいよ」

「で、でしたら鳥乃……さん？」

「ん、なに？」

躊躇いがちにいうアンちゃんに、私は似合わなくも「くすつ」となりながら訊き返すと、

「鳥乃さんって、あの鳥乃沙樹さんだったのですね」

「驚いた？」

「はい」

アンちゃんは頷くも、特に怯えたり敵視する様子は見られない。

「まさか、初日から姉上様の布団に潜り込もうとして簀巻きで一晩過ごされたようなお方が、元姉上様の宿敵だったなんて」

と、アンちゃんは顔を赤くする。

「おかげでアンちゃんの部屋に夜這いに行けなかったわ」

なんて私は冗談をいう様に本音いつたら、

「え？ 私に、ですか？」

驚くアンちゃん。

「あまり前でしょ。じゃないと泊り込みで警備に入った意味がないわ」

「いえ、そういう事ではなくて。鳥乃さんの狙いは姉上様なのでは？」

「両方に決まってるじゃない」

言いながら私は、制服の上からアンちゃんの桃まんを鷺づかみ。

「きゃっ」

「確かに成長した琥珀さんも魅力的だけど、アンちゃんだって魅力的よ。お淑やかなのに体は超ドスケベボディで私のレズ性欲を刺激しまくる逸材って話なのよね」

とか言いながら、服にしわを作らずして彼女の胸を撫で回す。つかホントデカい！

「ん、あん……あ、その……」

アンちゃんは艶かしい声を漏らしつつ、顔を真っ赤にして。

「こ、これ以上は」

「大丈夫よ」

そのまま私は彼女の手を引いて、おっぱい触ったまま優しく抱き寄せる。

「いま屋上には誰もいないから」

よし、イケる！

こういう大人しい子は強引に迫れば断りきれないパターンが多い。いままでの反応を見る限り、恐らくアンちゃんも同じはずだ。私はこのまま青姦に及ぼうとし、

『♪』

最悪なタイミングでハングドから通信が入った。デュエルディスクから着メロが流れる。

「あ」

と、私が反応した際に、

「申し訳御座いません。私、そろそろ教室に戻らせて頂きますね」

と、アンちゃんは私からそっと離れ、二三回ぺこりとお辞儀しながら屋上を後にしてしまう。

残念。私はデュエルディスクのタブレット画面を操作し、

「はい鳥乃だけど。何いまいいトコだったのに」

と、露骨に不満をもらす。

「そうか、お前の奇行を止められたのなら幸いだよ」

しかも通信先の増田は言ってるやがるし。

「で、要件はなに？ それで何でもない話だったら増田もゲイ牧師送りにしてあげてもいいんだけど」

「まさにそのゲイ牧師関連だよ」

増田はいった。

「先ほどふたりから連絡が入った。依頼者を襲ったふたりの男だが、どうやら黒山羊の実らしい」

「そう……」

予感はしてたけど、まさかここで奴らと当たるなんて。

「で、その同業者はどうしたって？」

「ああ。『おいしく頂いてから解放した』そうだ」

「うわ」

そこは予想外。自分の仲間もお構いなしって話？ まあ、ある意味嬉しい誤算ではあるけど。

とはいえ相手が黒山羊の実と分かったからには、これ以上ゲイ牧師は外部協力者に使えないことになる。

「分かったわ。要件はそれだけ？」

「いや、それとは別に個人的な話がひとつある」

増田はいった。

「鳥乃、おまえ俺のカードを勝手に持ってっただろ。具体的には《リンク・スパイダー》」

「あ、バレた？」

実は昨日の神簇とのデュエルで使った《リンク・スパイダー》は本来私のカードではない。過去にもいった通り私は最低でも週1回はM I S S I O N 4 参照デッキのカードを入れ替えてるんだけど、

「仕方ないじゃない。今回はどうにも手持ちだけでは一手足りなかったんだから」

「全く」

タブレット越しに呆れた顔をする増田が脳裏に浮かぶ。

「ならふたつ約束してくれ。1つはこの依頼が終わったらすぐ返して欲しい。2つ目は、この依頼絶対に結果を出してくれ」

「言われなくても。もっとも2つ目は増田も協力してくれるんでしょ？」

「勿論だ。だから俺の協力を無駄にしないでくれ」

「りよーかい。じゃ、もうすぐ授業だから通信切るわ」

私は通信を切った。

(ぐへへ。姉が駄目なら妹から)

その日の夜。私は日付が変わった頃を見計らい、アンちゃんの部屋へと夜這いに向かった。

目の前には既に寢室の扉。これからあの子の大盛り桃まんを直接拝めると思うと、もっこりならぬ大洪水が止まらないわ。

「じゅるり。お邪魔しまゝす」

そくつと扉を開けた。部屋の主は既に就寝中みただけど真つ暗闇は危険だからか豆電球が灯ってる。

これで光源も十二分にクリア。私は忍び足でアンちゃんの布団に潜り込み、

(おおっ)

となった。

アンちゃんの浴衣が開けかけてたのだ。帯が緩み、左肩が露になったことで豊満な谷間が見え隠れする。たまらない！

ヤバイ、いまずぐ窒息するまでおっぱいダイブしてしまいたい。私はそつと浴衣を脱がせようと手を伸ばす。

「んんっ」

そんな時だった。アンちゃんの体かもぞつと動き、その瞳がゆつくり開いたのは。

「あ」

同時ではなかったけど、互いが互いに気づいて眩く。

私の手は。うん、手は伸ばしてるけど浴衣に触れてはいない。セーフ。

「あーえっと、寝巻き開けてたよ」

「鳥乃さん、夜這いですか？」

「レズの嗜みよ」

あ、しまったつい反応してしまった。夜這いといえば相手が寝たふりして待ってるか、起きたときには既に行為の真つ最中つてのがおつなののに！ 襲う前に起こしてしまおうとか失敗もいいところ。……あれ？

「アンちゃん、もしかして最初から起きてた？ むしろ襲われる気でした？」

なんて思ったのはアンちゃんの格好が私の理性を飛ばす気満々過ぎたのと、あまりに目覚めるタイムミングが絶妙だったからだ。

少し恥ずかしそうにアンちゃんはいった。

「さすがに休んではいましたけど、何となく襲われるような予感はしておりました。そして、もし襲われたら受け入れる覚悟も」

「覚悟？ それは嬉しいけど、どうして？」

「姉上様は莫大な対価を払って鳥乃さんに護って頂いてるのに、私は何もハングドに御支払しておりますから」

「気にしなくてもいいのに」

私は、くすりと笑って彼女の頬を撫でる。

「心配しないで、アマチュアや友達の口約束とは違ってこれは書類もある正式なプロとの契約なんだから。護衛対象にアンちゃんも含まれてる以上、しっかり護らせて貰うわ」

だから安心して私に抱かれて？

「鳥乃さん、ですけど」

潤いの入った瞳で見つけるアンちゃん。衣服の開けた姿も相まつてなんかえろい。

「そんなに、自分からお支払いしないと信じきれない？」

「はい……」

アンちゃんはずき、そのまま続けて。

「けど、家の資産を継いだ姉上様と違い私には出せるものは何もなくて。もし私と姉上様が同時に襲撃にあったら、きっと私は見捨てられてしまうのでしょうか」

「そんな事は」

私は否定しようとするけど、

「いいえ。依頼人は姉上様なのですから、仕方のないことです」

と、体を震わせる。

私としては勿論そんなつもりは毛頭ない。アンちゃんみたいな美少女を見捨てるなんてレズの美学に反するんだから、仮に護衛に含まれてなくなつて両方とも助けようとするに決まつてる。幸い、私の体は半分機械だから自分の身も犠牲にしやすい。けど。

(難しいよね)

言つた所で、アンちゃんは私の言葉を受け入れてくれるとは思えなかつた。

どうにもアンちゃんは自分の価値を極端に低く受けとめてるのだ。恐らくは過去に虐められた後遺症だろう。結果として他人に対するの不信に繋がつてる。有事の際には裏切られる、真つ先に切り捨てられる、そもそも大事に思われてない。つてね。私も元人間不信だったから、方向性こそ違えど分かるのだ。

思えば、姉に対して聞き分けが良すぎるのも「そういうこと」だったのだろう。

「ですから。今日のお昼、鳥乃さんが私を魅力的だといつて手を出そうとした時、あの時は逃げてしまいましたけど、後になってこれしかないと思いました」

そういつて、アンちゃんは私の手にそつと触れる。

「鳥乃さん。私は私の体を報酬として姉上様とは別に私の護衛をお願いしたく思います。鳥乃さんが護衛に就かれてる間、いつでも私も私に手を出されて構いません。そして、無事に私を護りきつて下さつたら、改めて私は貴女の物となります。そういった御支払方は受け付けはおりませんか？」

そんな言葉を、色つぽい恰好でいわれて首を横に振れるはずがない！

「悦んでー!」

鼻息荒く私はいった。その刹那だった。

「なにが悦んでなのかしら?」

背後から見下ろされる殺意にも似た冷たい視線。

「え、えーと」

全身ガタガタさせながら振り返ると、そこには鬼の形相をみせる神簇さんの姿。

「確かに貴女にはアンの護衛を依頼したけど、布団に潜り込んで何をしようとしたの?」

「ま、待って落ち着いて、話せば分かるわ!」

私は慌てていうも、神簇さんは「ふうん」と一瞥し、

「アンをあられもない姿にしておいて、何が分かるっていうの?」

「そこ! まさにそこが誤解だから! これはアンちゃんが自分から」

「問答無用!」

神簇さんは私の腕を掴むと見事な背負い投げをご披露。痛みに呻く間に私は手際よく簀巻きにされてしまうのでした。

「今日はもう護衛はいいわ。そこで反省してなさい」

そういつて自室に戻っていく神簇。私は芋虫みたいにもぞもぞしながら、

「あー。アンちゃん悪いけどこれ解いてくれない?」

しかし、アンちゃんはすまなそうに開けた寝巻を整え、

「解くのは構いませんけど、見つかったら烏乃さん解雇されてしまうのではないのでしょうか?」

「う……」

「それだけでなく、もし屋敷を出入り禁止になってしまわれては、代わりに私が雇うことも難しくなります。ですので、申し訳ありません」
アンちゃんの推測は正しい。さっきの神簇さんの様子からして、恐らく言い訳は通用しないだろう。

「あくあ、せつかくアンちゃんが乗り気だったのに」

と、私は一回嘆息。とはいえ、これで諦める私ではない。

「ねえアンちゃん。物は相談だけど」

「はい」

「この場で脱いでくれない?」

「はい。その程度でしたら……ええ!」

目を丸くするアンちゃん。

「だって仕方ないじゃない。手足が使えないんだから、せめて目と口と鼻で堪能しないと」

「あの、そこまでして私の裸見たいのですか?」

「見たい」

即答した。

「あ、えっと、うう」

顔を真っ赤にアンちゃんが動揺する。

「で、ですけど鳥乃さん。姉上様と違って私の裸なんてそんな価値のあるものでは」

「十分に価値アリってことは昼に教えたはずだけど」

「そ、それは……」

「それにアンちゃん、賃金払わず体だけ報酬に私雇ったでしょ。さすがの私でも金銭ゼロまでくると簡単には引き受けないわよ。ハングドも私ひとりで作ってる仕事じゃないからね、赤字になった分は私のポケットマネーから出てるのよ」

「えっ」

アンちゃんは驚き、

「そうなの、ですか?」

「そ。つまり大赤字してでも私はアンちゃん襲いたいって話なのよ」
「っ」

再び顔を赤くし、さらに今度は布団を被って体を隠そうとする。可愛い。

「それに鳥乃さん。まだ依頼を受けたわけでは」

「受けたけど?」

「こちらも再び即答。」

「だから堂々と襲おうとしたんじゃない。受けてなくても襲ったけど、私の中では和姦未遂だったけど違った?」
「っっっ」

そのまま布団にぎゅーして縮こまる姿に、私は一瞬理性が飛んで、

「というわけでアンちゃん！」

私はアンちゃんにルパンダイブする。簀巻きの芋虫状態のまま。そんなもって。

「鳥乃 沙樹！」

お姉さんが勢いよく扉を開けて、

「手足拘束されて尚妹を襲うとか！ どこまで貴女の根性腐ってるのよー！」

簀巻き状態の私を掴みあげると。

「一晚、反省してなさい！」

部屋の窓を開け、私を放り投げるのだった。

「え、ちよつ、待っ」

その日私は庭で一晚を過ごした。

——任務開始3日目。

「では、行ってらっしゃいませお嬢様」

まさにセバスチャンつて雰囲気の初老の執事がいった。

「はい、行ってまいります」

丁寧にお辞儀するアンちゃん。その隣では、

「セバスチャン、何かあったら連絡するのよ。すぐに戻るから」

と、神簇さんはいった。私が信用できないらしく学校前までついて行くらしい。って、本当にセバスチャンだった。

「分かりました。鳥乃様、お嬢様をよろしくお願い致します」

セバスチャンが見送る中、私たちは徒歩で学校に向かう。

「青姦日和のいい天気ね」

空を見上げ、私はいった。

「学校、サボってホテル行かない？ 3人で」

「どうして朝っぱらから発情してるのよ貴女は」

半眼で呆れる神簇さん。一方、アンちゃんも苦笑いし、

「それに先ほど青姦日和と申されたのにホテルなのですか？」

「気にしたら駄目な気がするわ、アン」

「……。そうですね」

仲睦まじい姉妹の図にこっそり股を濡らせてると、

「けど、いまだに信じられないわね」

と、神簇さん。

「何が？」

「貴女のことよ。昔は徳光さん以外の全人類を敵視しかねないレベルで人間不信だったのに」

「なのに、いまはハングドで活動してるって話？」

と、1日目は言われたけど。

「そこもだけど。いま私が不思議に思ってるのは貴女の性癖のこと」「性癖？」

「そうよ。あの鳥乃が女の尻追いかけて生きてるような変態性犯罪者になるなんて誰が想像できるのよ」

「あ、あー」

確かに。

「しかも、元宿敵をナンパして、互いに身元判明した後も変わらず肉体関係求めてくるとか」

「そこはまあ私も元宿敵を口説く日だけは来ないと思ってたけどね」「だったら」

どうして、と訊ねる神簇さんに、

「ここまで綺麗なお姉さんを前にして抱かない選択肢あるわけないでしょ」

「なっ、えっ」

神簇さんが顔を真っ赤にすると、アンちゃんが「ふふ」と微笑み、「満更ではなさそうですね姉上様」

「ちよっ、あああアン！」

激しく動揺する元宿敵萌え。

「べ、ベベべ別にそんなわけないじゃない。こ、これはそうよ破廉恥な発言に動揺しちやっただけよ」

「何だそうだったの残念」

と、私にもやにやしなから食いついてみる。

「当たり前前じゃない。抱くしかないとかセクハラ発言されて誰が不覚

にもドキツとなるのよ。女性同士なのに」

「不覚にもドキツとしたのね、女性同士なのに」

「だから違うって言うてるでしょ！」

と、神簇さんは私の頭にげんこつ一発。暴力に訴えるほどですかそうですかにやにや。

「ふふ、本当に仲がよろしいのですね」

一方アンちゃんはそんな私たちのやり取りをやっぱり微笑ましげに眺めてた。

「ところで、鳥乃さん」

学校に到着した。

神簇さんは校舎近くに差し掛かった辺りで私たちと別れ、屋敷へと引き返す。

私たちはその後ろ姿をしばらく見送ってたけど、神簇さんの姿が見えなくなった辺りで、アンちゃんが話を切り出した。

「鳥乃さんの目から見て、いまの姉上様はどういう風に映っておられますか？」

「どうって」

抽象的な質問を前に、私はちよつと返事に困るも、

「まあ、半端なく凄い人だとは思うわ」

「凄い人、ですか」

「まあね。不器用で、見栄っ張りで、その上ちよつと抜けすぎてる。それで神簇家の当主継ごうっていうんだから、ある意味凄い人よ」

「ふ、ふふっ」

姉の散々な言われ様に思わず嘖き出してしまうアンちゃん。

「けど」

私は続けていった。

「不器用で見栄凄くて抜けてるけど、筋は通すし状況や立場はしっかり弁えてる。完璧でも万能でもないけど、あの歳で家を神簇の財産を受け継ぐだけあるわ。凄い器よ」

「その通りです」

アンちゃんはうなずいて、

「姉上様は、周りの方が一目見て思うほど完璧でなければ万能でもありません」

寂しそうに話した。

「姉上様は自分に厳しい努力型なだけで、実は潜在スペックはあまり高くありません。でも、あの見た目と態度で皆に誤解されてしまうんです。完璧で万能な高嶺の花と」

「むしろ実はアンちゃんのほうが天才肌で何でもこなせそうよね」

「え？」

何気なくいった言葉。けど、本人には相当意外な反応だったらしい。

「だって、お茶の淹れ方ひとつもそうだし、社交だってアンちゃんのほうがずっと上手くこなせてるしね」

「ありがとうございます」

アンちゃんはペコリと一回。

「自惚れに受け取られるかもしれませんが、実際そうなんです。でも姉上様は本当に本当に努力して、最後には本当に皆の期待に応えてしまいます。だから、姉上様の正体は屋敷の中でさえ一部の御存じありません」

アンちゃんはそこまでいってから、改めて私の正面に向き合う。そして、

「ですから鳥乃さん、よろしければ姉上様の弱さをどうかご理解下さい。等身大の姉をみてあげてください」

と、想いのこもった言葉を私に伝えてきた。

「もしかしたら神簇って、内心アンちゃんのこと羨ましく思ってるかもね」

「え？」

「だってアンちゃん、お姉さんと違って何でも出来て器用なもの」

少なくとも、いまのアンちゃんみたいな交渉術は神簇さんにやれと言っても難しいだろう。

「大丈夫、ちゃんと見てるから。アンちゃんのこと、お姉さんのこと

もね」

言いながら、私はアンちゃんのを頬を撫でる。

トロンとなった瞳の前に、私は濡れた。

『鳥乃、緊急だ』

連中が動いたのは、それから30分後。まるでこちらが動けない夕イミングを狙ったようにホームルームの真っ最中だった。

私は何とか理由をつけてトイレの個室に駆け込む。しかし思ったより時間ロスを食ってしまい、

「増田、何が起きたの?」

『依頼人が屋敷内の庭で襲撃された。既に交戦開始から数分経っている』

「敵の数は?」

『6名だ。どうやらデュエルを介さずリアルファイトで仕留めようとしてるらしい』

「分かったわ」

数分、か。既に手遅れとかになってなければいいけど。

そこへ、

「鳥乃さん」

個室の外からアンちゃんの声が。

「先ほど姉上様が襲われたと連絡が入って、本当なのですか?」

「本当よ。こっちにも連絡が入ったわ」

「そんな」

扉越しに悲痛な声。

「というわけで、ちよつと行ってくるわ」

「行かれるって、どちらへ?」

「もちろんアンちゃんのお家。そこの庭で襲撃を受けてるらしいわ」

数秒ほどの静寂。扉の外からはどことなく不安で弱弱しい気配を感じる。

「私は」

アンちゃんはいった。

「私はどうすればよろしいでしょうか？」

「アンちゃんはそのまま授業を受けてくれる？　そして、放課後になっても迎えが来なかったら何かと理由をつけて職員室にいて。大事なのは誰か大勢と一緒にいること。ひとりになるのは危険だから」
ゲスい考えだけど、アンちゃんを護るため、この際無関係者には盾になって貰うことにする。神簇さんは何いうか分からないけど、護る範囲は屋敷の人間に限定されてるし、「名目を都合よく使って臨機応変に対応しろ」と言質も貰ってる以上、契約に問題はない。何よりハングドはアウトローの組織であって正義のヒーローではないのだ。

もちろん手が回れば無関係者も助けるけど、それはあくまで手が回ればって話。

「鳥乃さん、私を見捨てになられるのですか？」

しかし、アンちゃんはここで予想外な台詞を口にした。

「もしかしたら罠かもしれない。真の狙いは私で、鳥乃さんを私から引きはがす為に姉上様を襲撃されたとしたら。いまここで鳥乃さんが離れるのは、私不安で御座います」

扉の先から震えた声。

「鳥乃様、私からの依頼も受けて頂けましたよね？　何なら契約通りいまこの場で私をお抱きになられても構いません。ですから、姉上様だけではなく私も護ってください！　お願い致します」

そして、泣きすぎるような声。私は極力優しくなだめる声で、

「心配しないで、既に手は打ってあるから。でなければ、授業中是否応なしに離れてるのにアンちゃん護るなんてできないでしょ」

「ですけど」

「それに、例え罠でもいま危険に晒されてるのはお姉さんのほうなのよ。それなのにアンちゃんだけを護ったら、それこそ契約違反になるわ。両方にね」

「それでも……」

納得できない様子のアンちゃん。

「アンちゃんを疎かにするわけじゃないんだから信用して。私はアンちゃんだって護りたい。けど、いざって時にアンちゃんが信用してく

れないと護りきれないわ」

「分かりました」

落胆混じりの声が聞こえる。納得してないけどここは折れます。そんなオーラが扉を超えて胸に突き刺さった。

幸いにも書類上の二重契約回避の為、彼女との契約はまだ口約束だ。

元々色欲に負けて引き受けちゃった依頼ながらこれでアンちゃん
が安心してくれたらと思っただけのもの、これは依頼を断る方向で話を進
めないといけなそうだった。

「ありがとう」

それでも、私には時間がない。

私は感謝だけ伝え、すぐ《ワーム・ホール》を発動して神簇邸に向
かったのだった。

神簇さんは森林の中（庭の一部）に身を潜めていた。

増田の情報通り敵の数は6体。いずれも神簇さんの正確な位置こ
そ特定してないようだが、ほぼ包囲完了してると見て差し支えない状
況にある。

「っ」

息を殺し、じつと一瞬の隙をうかがう神簇さん。以上の光景を私は
樹の上から拳銃片手に眺めていた。

（うーん残念、見えない）

神簇さんの谷間が。神簇さん割と胸大きいから着崩れてワンチャ
ンと思ってたんだけど。

なんて考えてたら敵が2名ほど射程圏内に入ったので、私は引き金
を2回引く。いつものようにフィールドで非殺傷弾となった弾丸は、相
手の銃を両方とも弾き飛ばした。

「うわっ」

ふたりが声をあげる。そこを続けて撃とうとしたけど、

「はあッ!!」

それより先に神簇さんが動いた。

獣が駆け抜けるように一瞬で敵の懐に踏み込むと、隠し持ってたビームサーベルによる居合抜きでひとりを両断。血の代わりに火花が飛び散り、悲鳴をあげる間もなく気絶したのが見えた。

「っ、このー！」

もうひとりが懐からナイフを抜くも、そっちは今度こそ私の獲物。特性の麻酔弾を受けた相手はその場で意識を手放した。

「よっと」

私は樹から飛び降り、神簇さんの傍で着地した。

「鳥乃 沙樹！ あなた学校にいたはずでしょ」

言いながら神簇さんは袈裟斬りの構えを解く。

「それで駆けつけられない様ならこの仕事やってけないって話よ」

と、私はいい。

「それより、さっさとこの場を何とかしましよ。一応アンちゃんの防衛措置も十分してるけど万一ということもあるから」

「そうね」

神簇さんはうなずいた。

「お嬢様、覚悟！」

残り4人。その内ふたりが私たちの前で拳銃を構える。よく見るとそれは屋敷で働く使用人だった。私も1度か2度顔を合わせたような気がしなくもない。

「また銃器。日本の銃刀法はどうなってるのよ」

なんて神簇さんは言うけど、彼女も彼女でビームサーベルなんて握ってる。

「銃は剣よりも強しっていうけど、正にそうなのよね」

武器を構えて呟く神簇さん。って、それ実際には「ペンが剣よりも強し」のパロディだから、元はジ○ジョって漫画の台詞だから。

「どうすればいいのよ、これ」

つぶやく神簇さんに私は、

「構わないわ。突っ込んで神簇さん」

「えっ？」

「どうやら、私の銃よりあなたの刀のほうが非殺傷に向いてるみたい

だからね」

「そういう事を聞いてるんじゃないくて、ああもう分かったわ」

駆け抜ける神簇さん。使用人たちは引き金を引くも、私の銃撃でふたりの弾丸は弾かれる。

「――」

そして、驚く一瞬の隙に神簇さんは懐に飛び込み、ふたりをビームサーベルで横一文字。声ひとつ発する暇なく崩れ落ちた。

神簇さんは振り返り、

「弾丸を弾丸で弾くって、貴女どういう精度してるの、――つて鳥乃、後ろ！」

と、叫ぶ。

気づくと、5人目が私の背後すぐ傍まで肉薄し、いまにも日本刀を振り下ろそうとしている瞬間だった。

(しまった！)

と、私は一瞬思うけど。焦らず相手の一撃より早く腕に内蔵してる銃で撃ち抜く。

「き、きさ……ま。どこから、銃を」

血を流して倒れる5人目。フィールを込める暇がなかったので殺してしまっただけけど仕方ない。何より、ここまで気配を悟られず接近してきたって事は、神簇さんと同じかそれ以上の剣豪だった可能性は高いわけで、下手すれば本気で自分が殺られてたのだ。

「そんな、先生までもあちら側だったなんて」

言いながら、神簇さんは日本刀を拾う。

「先生？」

「うちの道場で剣術を教えてる先生のひとりよ。アンと仲が良かったわ」

「アンちゃんと」

これはやつちやったかも。しかし直後、神簇さんのデュエルディスプレイが勝手に動き出し、デュエルモードに移行する。

「こうになりましたら、先にデュエルでフィールを奪う所から始めるとしましょう」

樹と樹の間から6人目がやってきた。サブマシンガンを担いだ初老の執事で、D・パッドとD・ゲイザーをつけている。

「セバスチャン、そんな貴方まで」

悲痛な顔で神簇さんはいった。

「ええ」

セバスチャンはニヒルに笑い、

「個人的にお嬢様には恨みも不満もありませんが、私にも事情がありまして。ここで倒れて頂きます」

言いながら、銃器を背中のホルダーで固定しD・パッドを構えるセバスチャン。

「気を付けて。ファイルを用いるデュエルはルールが同じなだけの別物よ」

「分かってるわ」

まだシヨックから抜け出てない様子ながら、なんとか神簇さんはデュエルディスクを構える。

不安だ。しかし、私は自分のデュエルディスクを確認する。タブレット画面には、魔法・罠カードの発動確認を要求するウィンドウが複数。すべてアンちゃんに忍ばせた魔法・罠カードの起動スイッチである。

つまり、ここで私がデュエルに混ざったら画面がデュエルモードに切り替わり、カードを発動できなくなってしまうのだ。

「心配なさらず、殺す気はありません。お嬢様が雇われた方は別ですが」

セバスチャンはいった。

琥珀

LP4000

手札4

□ □ □

□ □ □

□ ー □

□□□□
□□□□

セバスチャン

LP4000

手札4

「先攻は頂きます。私のターン」

セバスチャンは初期手札の4枚を確認すると、

「完璧な手札だ」

ニヤリと笑った。

「これなら最初から全開でいける。私は手札から《アンティーク・ギアハウンドドッグ古代の機械猟犬》を召喚」

フィールドに現れたのは機械でできた一匹の犬。その犬は、地面に降り立つと同時に口から火球を飛ばし、いきなり神簇さんへと攻撃してきた。

「このカードは召喚の成功時に相手に600ダメージを与えます。お嬢様、覚悟下さい」

「え、きやつ」

やはり私の注意は耳に届いてなかったのか。神簇さん火球の衝撃に耐えきれず、宙を舞い地面に倒れる。

琥珀 LP4000↓3400

「神簇っ」

私は駆け寄るも、

「大丈夫よ」

と、神簇さんはビームサーベルを杖に何とか自力で起き上がる。

どうやらフィールドの防壁自体は間に合ったらしく傷を負った様子は見られない。しかし、和服の一部が焼け焦げ素肌が露になっていた。

(ごくり)

欲望に逆らえず、私は横乳を覗き込む。

「おおっ」

と、大きくともハリのあるおっぱいに大興奮してたら、私は神簇さんのビームサーベルでばっさり斬られた。

実際に肉を裂かれたわけではない。しかし、自分の身に鋭利な刃がスパツと入る感覚。直後、切り口からバチバチと音を立て強烈な電流が私を襲った。

「——っ!!」

私は全身を痙攣させながら地面に倒れる。い、痛い。しびれて声も出せない。

「今度不真面目なことしたら、斬るじゃなくて突き刺すからね」

神簇さんは、いまの私にとって最も恐ろしいことを言ってから、「先攻バーンをしてくれて逆に感謝するわ」

と、迷いを断ち切った様子で、対戦相手を真正面から見据える。

「おかげで、貴方を倒す覚悟ができたもの」

「強がりと言えるのも今のうちです。私は《古代の機械猟犬》のもうひとつの効果を使用。このカードは《融合》なしでアンティーク・ギア融合モンスターを融合召喚できる。私はフィールドの《古代の機械猟犬》自身と手札の《古代の機械贗作》を融合」

セバスチャンが宣言すると、手札から更に1体の機械人形が出現。

「《古代の機械贗作》は必要な融合素材モンスター1体の代わりにできる。私はこの効果で贗作を《古代の機械参頭 猟犬》の代わりに使用。融合召喚、現れ出でよ《古代の機械究極 猟犬》！」

《古代の機械贗作》が3つの頭を持った《古代の機械猟犬》の偽物に姿を変えると、2体のモンスターは混ざり合い、長い3つの首と無数の尻尾を持った、魔改造の成れの果てともいべき機械猟犬が姿を現す。

「《古代の機械究極猟犬》の効果。このカードが融合召喚に成功した場合、相手のLPを半分にする！」

琥珀 LP3400→1700

先攻1ターン目にして、いきなり2000以上削られる神簇さんのライフ。しかし、神簇さんは半減していくライフを前に全く焦った素振りを見せてない。

「その余裕、いつまでお持ちになられますかな？ 私はカードを2枚伏せてターンを終了させて頂きます」

琥珀

LP1700

手札4

□□□□

□□□□

□―「《古代の機械究極猟犬》」

□□□□

「《セット》」「《セット》」□

セバスチャン

LP4000

手札0

先攻1ターン目から相手のライフを2300削り、最上級モンスター1体に手札全伏せ。随分と「完璧な手札」だったらしい。

「沢○さん、《大嵐》っすよ！」

「誰が○渡さんよ。変に敗北フラグ立てないで頂戴」

神簇さんは「全く」と嘆息し、

「それに《大嵐》は禁止カードじゃない。いまは《ハーピイの羽根帚》よ」

「そうともいうわね」

私は冗談っぽく言いつたものの、《古代の機械究極猟犬》自身に破壊耐性がない以上、この局面で伏せカードを除去さえできれば、セットカードの内容にもよるけど勝利が一気に近づく。なにせ相手は手札0だから、手札誘発効果を使うこともないのだ。

「まあ、言われなくても使うつもりだけど」

神簇さんはいった。直後、彼女の片手にフィールが集まり、光り輝く。

って、これって!?

「私のターン。ここで私はスキル《デステイニー・ドロー》を宣言するわ」

やっぱり。

「スキル!」

と、セバスチャンが驚く中。

「このスキルは私のライフが2000ポイント以上減った場合に使用可能。私はこのターン、ドローフェイズ時に通常のドローを行うかわりに、任意のカードを選んでドローするわ。最強デュエリストのデュエルはすべて必然! デステイニー・ドロー!」

神簇さんはカードをデステイニー・ドローし、すぐデュエルディスクに読み込ませる。

「魔法カード《ハーピィの羽根帚》! その2枚のセットカードは破壊させて頂くわ」

セバスチャンの傍に1つの羽根帚が現れ、セットカードをスマートに払い除けられる。2枚は《導爆線》と《聖なるバリアー——ミラーフォース——》だった。

しかし、デステイニー・ドローは私のダーク・ドローと同じく強烈にフィールドを消耗する能力だ。実際、私の目にも神簇さんのフィールドが3分の1ほどごっそり失われて映る。

「大丈夫なの神簇」

「仕方ないじゃない。フィールドをケチって負けるわけにはいかないもの。もっとも、このデュエルではもうフィールドの残量を心配する必要もないけど」

と、神簇さんは続けてカードを1枚デュエルディスクに置く。

「私は《先史遺産ネブラ・ディスク》を通常召喚。効果でデッキから《RUM——先史遺産ザ・バプティズム・オブ・フォース》を手札に」

神簇さんはモンスターを呼びつつ目当てのカードをデッキから引き抜き、

「続けて永続魔法《オリハルコン・チェーン》! このカードの発動後の次にX召喚する場合、素材を1つ減らしてX召喚する事ができる。これで勝利の方程式は揃ったわ」

と、堂々たる勝利宣言。

「あ……」

直後、セバスチャンの顔が青くなる。どうやら相手はこれから神籬さんが何をするのか察してみたようだ。

「私はレベル4《先史遺産ネブラ・ディスク》でオーバーレイ！ 1体の先史遺産モンスターと《オリハルコン・チェーン》でオーバーレイ・ネットワークを構築」

上空に銀河の渦が出現すると、靈魂となったネブラ・ディスクが《オリハルコン・チェーン》と一緒に取り込まれる。そして、爆発する銀河と共に浮かび上がったのは36の数字。まさかの新たななるナンバーズだった。

「エクシーズ召喚！ 現れなさいNo. 36！ 結界に護られし遺跡チャタル・ヒユク！ いまこそ機動し、勝利へ導くコアとなれ！ ランク4、先史遺産―超機関フォークIIヒューク！」

こうしてフィールドに舞い降りたのは、球状の結界に護られた古代遺跡のモンスター。その攻撃力は2000。

「フォークIIヒュークのモンスター効果。このカードのオーバーレイユニットを1つ取り除き、相手モンスターの攻撃力をターン終了時まで0に！」

神籬さんが宣言した瞬間、ソリッドビジョンの映像上辺りのあらゆる光がシステムダウンを起こし、光源がフォークIIヒュークの結界だけになる。程なくして電力は回復し太陽も光を取り戻すも、ただ1体、《古代の機械究極猟犬》だけはエネルギーを根こそぎ抜かれたように動作を停止、ぐったりしていた。

《古代の機械究極猟犬》 攻撃力2800↓0

「そして、私は続けて魔法カード《RUM―先史遺産ザ・バプティズム・オブ・フォース》を発動！ このカードは私のXモンスター1体をランクが1つ高い先史遺産モンスターにランクアップさせるカード。私はランク4フォークIIヒューク1体でオーバーレイ・ネットワークを再構築。ランクアップエクシーズチェンジ！」

再び上空に銀河の渦が出現すると、今度はXモンスターであるはず

のフォークⅡヒューク自身が靈魂へと姿を変え、渦に取り込まれる。そして出現したのは33の数字。

「エクシース召喚！ 現れなさいNo. 33！ 空に浮かぶ要塞マチュⅡピチュよ。いまこそ無数の砲を構え、敵を殲滅せよ！ ランク5、先史遺産―超兵器マシユⅡマック！」

続けて出現したナンバースは、昨日の私とのデュエルでも出してきた空中要塞。その攻撃力は2400。

（そういうこと。うわ、えぐっ！）

私は、やつと神簇さんの狙いに気づき、そのえげつなさにゾツと身震い。

「マシユⅡマックのモンスター効果。このカードのオーバーレイ・ユニットをひとつ取り除いて効果発動。相手モンスター1体の現在の攻撃力と元々の攻撃力の差分だけ相手にダメージを与え、同じ数値だけこのカードの攻撃力をアップさせるわ。《古代の機械究極猟犬》の攻撃力は、現在フォークⅡヒュークの効果によって0！ それによりセバスチャン、貴方には実質的に《古代の機械究極猟犬》の攻撃力分のダメージを受けて貰うわ。インファイニティ・キャノン！」

マシユⅡマックから召喚口上でも触れてた無数の砲身が顔を出し、セバスチャンに向けて一斉に掃射される。しかも今回はフィールドでリアルソリッドビジョン化。

「ぬわあああー！」

無数の砲弾を浴び、絶叫をあげるセバスチャン。元々のフィールド量が少なかったのだろう、フィールドを消耗してる神簇さんの攻撃でさえ完全に防御しきれずダメージを受けてるように映った。

セバスチャン LP4000↓1200

《No. 33 先史遺産―超兵器マシユⅡマック》 LP2400↓5200

「これで終わりよ。マシユⅡマックで《古代の機械究極猟犬》ごと相手プレイヤーに攻撃。ヴリルの火！」

砲撃による煙が落ちつき、背中の子ブマシンガンも壊れボロボロなセバスチャンが姿をみせる。そこへ神簇さんは無慈悲にも攻撃力5

200のファイル攻撃を元屋敷の執事だった人にぶつけるのだった。
セバスチャン LP1200↓0

——現在時刻9：40

「……はっ」

1時間近く気を失ったセバスチャンが目を覚ました。現在、私たちは神簇さんの部屋にいる。もちろんアンちゃんも一緒だ。

「そうか、私は作戦に失敗したんですね」

縄で拘束されてせいか、抵抗する素振りも見せない。

「他の人たちはどうなりましたか？」

「生存者は全員この部屋に転がってるわ」

神簇さんの言葉に、セバスチャンは辺りを見渡す。部屋には男女問わず使用人が4人ほど同じように縄で拘束された姿で気絶していた。

「先生がおりませんね」

「先生は死んだわ」

「そうですか」

沈痛な空気が辺りを支配する。その殺した張本人である私としては居たたまれない。

その後、私たちは改めて被害者の容体を確認したけど既に脈はなかった。神簇さんにはあとでハンドグドが死体処理すると伝え、生存者をいまいる自室に運ぶ最中、私はこっそり遺体を地縛神の生贄に取り込み「死体処理」とした。

「姉上様、お茶をお淹れしてきます」

そんな空気に堪え切れなかったのだろう。アンちゃんは席を立って一度自室に戻る。しかし神簇さんから反応はなく、結局彼女が3人分の湯飲みを持って戻ってくるまで、この空気は続いた。

「ありがとう」

湯飲みを受け取り、やっと神簇さんは口を開く。そして、淹れたてのお茶を一口飲むと、

「私、そこまで人望がなかったのかしら？」

不意に、神簇さんは眩いた。

「貴方とも先生とも、まだ起きない使用人のみんななどだって良好な関係を築けてると思ってた。そりゃあ、私がまだ小学生だった頃は酷いことしてたと思うわ。けど、今回の6人で昔の私を知ってる人なんて貴方と先生くらいじゃない。誰かをぞんざいに扱った覚えもないし、それどころか屋敷の人たちは全員大事にしてきたつもりよ。ねえ、教えて！ 私の何がいけなかったの？ 私がまだ若いから？ 昔の私のツケ？ それとも私、まだ皆に恨まれるような人間だったの？」

涙を流し、抑えきれない感情が彼女の言葉に強く強く込められる。私は彼女の嘆きを聞きながらお茶を一口。——って、このお茶!?

「この屋敷において、お嬢様と双璧を成す立場の人間」

「え?」

「その人の誘いで、私たちはお嬢様から離反しました」

「それ、……って」

詰め寄ろうとする神簇さん。その体が、突如として崩れる。お茶に仕込まれてた睡眠薬の効果だ。

「神簇!」

遅かった。私は手を伸ばすも直後首筋に痛みが走る。注射針だった。

「な、あ……」

薬剤を流し込まれた私もまた、意識が急速に薄れていく。

一体、誰が。

私は最後の力を振り絞って後ろを向く。そして、私と神簇さんは同時に「そこに立ってた黒幕」の名を呼んだ。

『ア……ン……』

〈SIDE: Anzu〉

私の名前はアン。神簇の家で次女として生誕し、現在陽光学園高等部の一年に在籍しています。

そして、これから真の神簇家当主となるものです♪

「見苦しい姿を見せてしまいました」

「いいですよ、セバスチャン」

私は情けない執事に微笑みまして、

「私も失敗してしまいましたから」

と、注射器を捨てました。ふふ、この薬剤の中身が全部裏切り者の鳥乃様に流し込んだのだと思うと、いい気味だと興奮してしまいますね？

「ありがとうございます、アンお嬢様。いえ」

「アンそのまま構いません。私もそのほうが聞き慣れてますから」

アンというのは愛称。本当の私の名前は神簇^{かむら} 杏^{あんず}といえます。

もつとも、原作遊戯王に登場する杏子さんとは正対な人間ではありませんけど。背もあまり高くありませんし、勝ち気というには内気。ダンスはダンスでも私は得意なのは社交ダンスのほうで、性格もあまり「いい人」ではありません。

「ではアンお嬢様。鳥乃様は如何致しましょう」

「もちろん、始末します」

当然じゃないですか♪ 籠絡できるようなら組織から引き抜いて

私の犬にとも思いましたけど、彼女は信用できないですもの。

私はデュエルディスクを起動し、手持ちのカードを読み込ませる。

浮かび上がったのは15の数字。そこから出現したのは1体の巨大な機械人形♪

「ジャイアントキラー、よろしくお願いしますね」

私がジャイアントキラーと呼んだモンスターは指から糸を伸ばし、意識のない鳥乃様を捕らえます。そして、そして♪ モンスターの胸部が開くと、そこには凶悪な粉碎機^{ローラーミル}♪ いまから鳥乃様は粉碎機にかけられて肉片になってしまわれるんです？

ローラーがギューイーンと回転を始め、粉碎機に運ばれていく鳥乃様♪♪ 貴女が悪いんですよ？ 貴女が私より姉上様を優先したのですから???

ですけど、もう少しでローラーが鳥乃様のお綺麗な脚を粉碎するその時でした。突如として鳥乃様の体から紫色の瘴気みたいなフィールが浮かび上がると、中から見たこともない鯨のモンスターが顔を出して、ジャイアントキラーを逆に体当たりで粉碎したのです。

「え、な、なに？」

と、私が呟いた時には既に瘴気も鯨も消えておりました。いまのは一体何だったのでしょうか？

「セバスチャン、あれが何かは……」

言いかけて私はやめました。だって、セバスチャンも困惑してたんですもの。

「申し訳ありません」

セバスチャンがいいました。

「ただ、私に分かることは鳥乃様は気を失っても尚フィールを使って迎撃に出たということですよ」

「そうみたいですネ。……でしたら」

先にフィールを頂いてしましましょう。

私は鳥乃様のデュエルディスクにデュエルを申し込み、フィールと違法プログラムの合わせ技で強引にデュエルを開始させます。そして、こちらから彼女の手を操作してサレンダーを宣言。フィール・

カードはデュエルのアンティか本人の意思でしか奪うことができません。けど、どのような形であれ私は正式にデュエルをし、そして勝利致しました。

鳥乃様の体から何枚もの光が浮かび上がって、私の手元でカードに姿を変えます。

《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》に《幻子力空母エンタープライズニル》そして《CX 超巨大空中要塞バビロン》。《ダーク・ダイブ・ボンバー》《重爆撃禽 ボム・フェネクス》《起爆獣ヴァルカノン》。エーデルリッター《紅貴士ーヴァンパイア・ブラム》に《ヴァンパイアジェネシス》なんてカードも持ってらしたのですね。他にも沢山、たくさん頂きました♪

ですけど、再び殺そうとしたらやっぱりさっきの鯨が反撃してくるんです。ジャイアントキラーじゃなくて、私自ら毒を彼女のお口に流し込もうとしたときも。決闘者の勘でフィール現象なのは間違いないと思うのですが、既に鳥乃様のフィールは0のはず、なのはどうしてでしょうか？ そもそもカードなら先ほど全部奪い取ったはずですので。

「恐らく鯨のモンスターには有事の際に自立行動できる特殊なフィールを持つてるのかも致しません」

とは、セバスチャンの推測。根拠はないものの「まだ未解明な部分の多いフィール・カード故に」だそうです。

「どちらにしても、殺せないのでは仕方ありませんね。残念ではありますけど」

姉上様のフィール・カードも同様に奪いながら私はいいます。せつかく、鳥乃様が死んで姉上様の悲鳴を聞けると思ったのに。……ああ、いいこと思いつきました♪

私はセバスチャンに一言断り自室からカメラを持ってきます。少し機械音痴気味の姉上様と違って、多機能かつ高画質の最新版です♪「お嬢様、何をされるおつもりですか？」

訊ねるセバスチャンに、私はうきうき顔で、

「撮影しようと思ひまして。セバスチャンや皆様が粉ジャイアントキラー砕機にかけら

れるお姿を」

言っちゃいました？

「なっ!？」

セバスチャンは驚き、

「正気ですか、お嬢様。あなたは自分についてきた従者を殺すというのですか？」

「はい」

だって、だって？

「姉上様は皆様のことにも信頼してましたから、皆様が死ぬ動画をご覧になればきつとショックを受けて下さると思うのです。それを何度も何度も繰り返し見せて心が壊れる姉上様。想像しただけでうつとりしませんか？」

「っ」

顔を真っ青に絶句するセバスチャン。私、何か変なこといいましたか？ ふふ、気のせいですね？

だって、だってだって♪ こんな素敵なアイデアなんですもの???

「ア、アンお嬢様。そのような非道をなぜ。やはり作戦に失敗した罰ということですか？」

「罰？ とんでもありません」

私はいいます。

「不器用で抜けてる姉より私こそが当主になるべき。そんな私の言葉に皆様は賛同して下さい、今日まで尽くして下さいました。先にも言いましたけど、今回の失敗の原因は私にもあります。命を掛けて戦ってくれた皆様に感謝こそしても失望などしておりません」

「で、でしたら何故？」

「二度も言わせないで下さい、姉上様に見て頂く為です」

けど、確かにそうですね。セバスチャンが言うように「作戦に失敗した罰で殺した」と伝えれば、姉上様へのショックはもつと大きいはずです？ だって、セバスチャンを倒したのは姉上様ですもの???

数分後、ローラーが騒音をたてながらセバスチャンの脚を、胴を、そしてお顔を砕いていきます♪ 部屋を染めるのは真紅の血飛沫。昨

日まで姉上様が心を許してた人間が、全てを投げうってでも逃げようと暴れ、敵わず恐怖そして死の痛みに顔面を崩壊させるその様♪

悲鳴と絶叫。断末魔の叫びをあげ、セバスチャンというひとり人間が血と骨の分別さえつかない肉片になり果てるその瞬間まで♪♪

全部♪ 全部♪ 全部ぜんぶぜんぶ♪♪♪ 撮影しちゃいました????

姉上様、どんなお顔を見せて下さるでしょう??? その綺麗なお顔が絶望に変わるのが楽しみ??? そうですね、動画を見せた後もたつくさん

追い込んで「くっ殺」でも言わせてみせましょう????

うふふ、楽しみにしてくださいね。私の大切な愛おしい程に憎らしい姉上様?

MISSION11—アンバーカラーの思い出（後篇）

私の名前は鳥乃^{とりの} 沙樹^{さき}。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「許せない女性？ 普通にいるけど？」

それはいつの話だったか。梓に「許せない女性とか嫌いは女性っているの？」って聞かれたことがあった。

「とりあえず嫌いなのは小学生や園児くらいの生意気なメスガキ。あれは駄目ね」

「あー。沙樹ちゃん子ども駄目だもんね」

納得する梓。

「あとは、梓をたぶらかす女、梓に危害加えた女、梓を殺そうとする女、そのくらいかな」

「私限定なの？」

「梓限定だけど？」

「じゃあ、例えば猟奇殺人犯とか愉快犯とか、そういう人たちは？ 私
が関わってない前提で」

「そうね」

私はちよつと考えてから、

「美女や美少女なら、何とか性的に好きでい続けるんじゃない レズの
プライドにかけてね」

と、いったのだった。

『……………の……………とり……………の……………』

誰かに揺すられ、私は起きる。

「鳥乃、よかった。無事だったか」

増田だった。

「あれ、増田？ どうして」

私は神簇さんの護衛をしてたはずなのに。なんて、わずかな間記憶

が混乱してたけど、頭が回転し始めると同時に直前に起きたことを思い出す。

「そうだった。私」

アンちゃんに薬物を注射されて。

「どうやら強烈な鎮静剤だったらしい。先ほど研究所から分析データが送られてきたよ」

研究所の技術で蘇生した半分機械の私は、不測の事態に対応するためあちらのコンピュータと繋がっている。だから、今回みたいに外から薬物を注入された場合、即座に情報が博士たちの下に届くのだ。

「私じゃなかったら後遺症が残ってたわね」

脳内で分析結果を確認し、私はいった。下手すれば昏睡状態に陥ってもおかしくない。これで殺す気がないと言うなら、限度を知らないとしか言い様がない薬品だった。

「ところで」

ここで私は辺りを確認する。

神簇さんの部屋だったそこは、肉片が飛び散り、ピンクの塗りたてみたいに辺り一面真っ赤つか。

控えめにいつて酷い有様だった。私は顔を真っ青に、

「もしかして、神簇？」

だとしたら私は依頼人と悪友を同時に失ったことになる。

「いや、依頼人は無事だよ。今のところは」

増田はいった。

「この肉片は君たちが倒した5人のものだ。全員、アンが殺した」
「っ」

危険な注射を打たれて言うのもあれだけど、どうしてあのアンちゃんがこんな事を。

「鳥乃、お前の任務は失敗だ。続きは俺が引き継ぐ。鳥乃は支援にまわってくれ」

突然の言葉に私は驚き、

「どうしてよ」

と、睨んだ。「まだやれる。やらせてよ」って。

しかし増田は全て察した上で首を横に振り、

「ファイル・カードを持たないお前ではこれ以上は無理だ」

「え？」

それって。

「すべて持つてかれたんだ。クリアウイングも含めすべてアンに」

「嘘!」

「残念だが、嘘じゃない」

増田は懐からUSBを出し、いった。

「事務所から見た一部始終だ。確認してくれ」

私はデュエルディスクのタブレットにUSBを接続し、中に入ってた映像データを再生する。

そこにあつたのは、悪夢としか思えない光景だった。

アンちゃんに奪われる私と神簇さんのファイル・カード。セバスチャンや皆が彼女のナンバーズによって粉碎される様、それを撮影しながら恍惚の笑みを浮かべる私の知らない神簇アンの姿。すべてが終わった後、神簇さんを《ワーム・ホール》の中に放り投げ、最後に自らもホールを潜って動画は終了していた。

「彼女は弱者の仮面を被った狂人だ」

増田は怒りを露わにいった。

「彼女を放っておけば、依頼人のみならず被害は確実に広がって行く。奴は早急に対処しなければならぬ」

確かに、増田のいう事は正しい。この映像が真実ならアンちゃんは確実に人格が破たんしている。

(けど)

いま私の手元には市販のカードに後から細工してファイル・カード化したものしか残ってない。そんなカードをどれだけ所有しているも、一応「ファイルが使える」程度の力しか持てない。某RPGで例えるなら、スライムにメラと一発分のMPを与えた程度を超えられないのだ。

「悔しいけど、いまの私では無理って話ね」

落胆する私。その時だった。

「鳥乃様ーっ、増田様ーっ」

外から戸をたたく音。増田があけると、ひとりのメイドがそこに立っていた。それも恐らく小中学生くらいの女の子。

確か名前はヒロちゃんっていったかな。うん、そう呼んで欲しいって言われた気がする。

「良かった。お目覚めになられたのですね」

天真爛漫にヒロちゃんは喜ぶ。しかし、アンちゃんとセバスチャンが敵側だった以上いよいよ屋敷の人は神簇さん以外全員敵でも不思議ではない状況。油断はできない。

「大丈夫、彼女は味方だよ」

増田はいった。

ヒロちゃんは血塗られた部屋に一步足を踏み入れると私に向かって一礼。

そして、似合わないシリアスな顔をしていった。

「鳥乃様、意識が戻られて早急申し訳ないけど、お渡ししたいものがあります。一度前当主の部屋に来てくれますか？」

(さて)

ヒロちゃんに案内され廊下を歩きながら、私は腕を組み考えた。

(彼女は一体何者?)

屋敷の使用人とは一通り顔合わせしている。その中に彼女の顔は確かにあった。

けど、それだけだ。

元々私が子供嫌い基本高校生以上しか興味ないのも少しは影響してるだろう。けど、それにしたってヒロちゃんはあまりに私の目に止まらな過ぎていたのだ。

ロコちゃんやアンちゃんみたいなむしやぶりつきたくなる発育もなければ、神簇さんや苺ちゃんのようなオーラもカリスマもない。あるとすれば、こんな幼くしてメイドしてることと、その天真爛漫さ。

いや。言い換えよう。

それだけ十分な個性も特徴も持っていないながら、私はつい先ほどまで

モブ以下レベルにまで彼女を視界に映さなかったのだ。

「増田、どうして彼女が味方だといったの？」

私は小声で訊ねる。

「協力してくれたんだ」

増田はいった。

「あの映像を確認して、すぐ俺は屋敷ここに向かったんだが、室内に入った所で敵の手先に襲われたんだ。で、それを追い払ってくれたのが」

「彼女ってわけね」

「ああ。それもフィールを用いたリアルファイトで」

「ここの屋敷の人たち。妙にデュエルよりリアルファイトを重視しすぎてる気がする。」

「こちらです」

到着したらしい。ヒロちゃんに促され、私たちは中へと入った。

畳の和室に掛け軸と内装は神簇さんの部屋とだいたい一緒。ただし、敷かれたままの布団と枕元に置かれた一冊の本。恐らく部屋の主が亡くなった当時のままなのだろう。埃ひとつ見当たらない所から掃除はされてるみたいだけど。

「今更だけど、いいの？ この部屋に私たちを入れて」

「大丈夫です。許可は取ってありますから」

屈託ない笑顔でヒロちゃんはいった。恐らく何かあつた際に神簇さんが伝えたのだろうか。なんて私が思った所へ。

「本家から直接」

と。

「え、本家？」

ちよつと待って。なんで一介のメイドが本家とパイプ持ってるって話なのよ。

しかし当のヒロちゃんは私たちの疑問に触れることなく、

「あ、扉閉めちゃってください。会話が外に漏れると不味いですから」
なんて、客人を動かさやがる。

「ありがとうございますー」

増田が戸を閉めるとヒロちゃんはいい、

「それでは、早速本題に入っちゃいますね」

と、軽快な言葉遣いとは裏腹にシリアスな顔になった。

「そういえば、渡したいものがあるって」

「はい。鳥乃様には金庫の鍵を受け取って欲しいんです」

「え？」

いま、この子金庫の鍵とか言わなかった？

「現在金庫はアンお嬢様の下にあるけど、開けることができないのは琥珀お嬢様から聞いてますよね？」

「ま、まあ。それで金庫は神簇……。琥珀さんしか開けられないって聞いているけど」

「いいえ、実は琥珀お嬢様でも開けられません」

「はっ？」

どういうこと、それ？

「先代様は偽の錠を琥珀お嬢様に与えていたんです。自分がいなくなっても、財産を間違った形で使われない為に」

「……信用されていないのね、神簇」

「神簇家の伝統ですから。そして、真に当主と認められた時に初めて本家から本物を受け取る形になってるんです。私は、その鍵を預かり見極める役割として、本家から派遣されてきた人間なんです。先代が雇ったメイドって形で」

「なるほどね」

今までの疑問が大体解決した。確かに本家側の人間ならそこまで出来てもおかしくはない。

「こちらが、その鍵です」

ヒロちゃんは懐から2枚のカードを私に差し出す。受け取ると、私の中で力が湧いてきた。

間違いない、これは2枚ともデュエルモンスターズのカード。それも本物のファイル・カードだ。

「この鍵を使った解錠方法自体は琥珀お嬢様もご存じのはずです。どうか、あのカードを餌にアンお嬢様と接触し琥珀お嬢様を助け出してください。それが本家から鳥乃様に。いいえ、ハングドの鳥乃様では

なく琥珀お嬢様の友人である鳥乃様に宛てられたメッセージになります」

「分かったわ」

私は2枚のカードをデツキホルダーに入れる。

ところで。

私はヒロちゃんに今更ながら妙な違和感を覚えていた。といっても、まだ彼女を疑ってるわけではない。気になるのは、彼女の存在自身。

見た目にして子供と判断してる以上、性的に反応しないのは当然だけど、こうして接していると、何かもつと本質的な所でレズセンサーが違和感を持つてるのだ。

「どうしましたか?」

ヒロちゃんがきよとん、として覗き込む。正直、その仕草はすつごい可愛い。

だけど、うん、やっぱり私のレズハートは妙な反応を示す。具体的には幼い抜きに、仮に彼女が実は16歳以上だったとして反応しているのか悪いのか凄く迷ってる的な。

「あ、ううん」

私は一回誤魔化し、

(せつかくだし)

ここでちょっと彼女が何者なのか、もう少し聞き出してみることにしよう。

まずは名前から。

「そういえばヒロちゃん?」

「はい?」

ここで、まず私が聞こうとしたことを察したのか、

「これからも、私のことは『ヒロ』って呼んでくださいね」

「フルネームは?」

「秘密です」

と、満面の笑顔。あ、もう嫌な予感が天元突破しそう。けど私はその「予感」にはまだ触れず、

「なら次に、けっこう幼い気がするけど、年齢は？」

「今年13になります。中学1年です」

良かった。これで16歳と言われたら更にセンサーが混乱する所だった。

さて。

その「予感」に触れよう。

「えっと、ヒロちゃん？」

「はい？」

「もしかして、あなた。……………男だったりする？」

うん。これが私のセンサーとハートが導き出した推測なのだ。もし外れてたら失礼なレベルじゃないけど、果たして。

「!？」

驚くヒロちゃん、そして。

「どっ」

「どっ？」

「どうして分かったのですか!？」

正解だったらしい。

「そんなあ、先代様もお屋敷の人もみんな男に見えないって言うてくれたのに、ほぼ初対面の人にばれちゃうなんて」

ショックだったらしく、悲しそうな顔で瞳を潤わせるヒロちゃん、いやヒロくん？　ぶっちゃけ、男と分かっても普通にめちやくちや可愛いんだけど。これで16歳以上と言われたら駄目な扉を開きそうな程には。

「ま、まあ私ほらレズだから。性別の違いは第六感で分かるのよ」

「ぐすつ、じゃあ私……………ちゃんと女の子に見えていますか？」

「見えてる見えてる」

「可愛い女の子に」

「見えてる見えてる」

「よかった」

安心し、ぱあっと明るくなるヒロちゃん。

「まあ、彼の性別はともかくとして、だ」

増田がいった。その瞳には一筋の涙。あ、このロリコンかなりシヨック受けてる。ヒロちゃんが男で。

「これから、カードを使うにしてもどうやってアンを誘い込み、依頼人を助けるかだけど」

言った直後だった。

「話は聞かせて貰った!!」

部屋の扉が、外から蹴飛ばされたのだ。

「ヒロくんちゃんの為に、この私が力になろう」

と、入ってきたのは警視庁特捜課の永上 MISSTION4.5参照 門子 ながみ かどこ さんだった。

『……』

啞然となる私たち。えっと、この事態はどこから突っ込みを入れればいいのか。どうしようか。

「ん、どうしたんだ?」

一方、この空気の元凶は一切自覚がないらしく首をかしげる始末。

「あ、あう。鳥乃さまあ」

そんな中、ヒロちゃんがおずおずと私の背に隠れる。ああ、これは以前にも何かあったな。YesロリータGOタッチされた的な。

増田が呆れ顔で、

「色々言いたいことはあるが。永上、まずどうやって屋敷に入ってきた?」

「正面から直接だ!」

「この家はセキュリティが強くて普通なら入れないはずだけど?」

「だから壊すしかなかった」

と、堂々とのたまう一応現職の警察。

「むしろ、どうすれば壊さずに入れるというのだ、どうやっても開かない扉に」

「鳥乃と俺は《ワーム・ホール》、ヒロは本家から支給されたカードキーだそうだ」

すると永上さん驚きのあまり仰け反って、

「《ワーム・ホール》、その手があったか!」

むしろ、どうして気づかなかったのか。

「まったくお前は」

増田が頭を抱えながら、

「次に、どうしてこの部屋の扉も壊した」

「この部屋も鍵が掛ってたからだ」

なお、この部屋は電子ロックではなく、ただの心張り棒である。

「なら最後の質問だ」

全身を震わせながら増田は、

「そもそも、お前はなぜここにいる」

「ここにヒロくんちゃんがいるからに決まってるだろう！」

言い切る永上さん。

「事件現場に可愛い子を野放しにしろというのか、そんな恐ろしいこと私にはできない！」

「その本人はお前に怯えてるようだが」

「何故だ!!」

ああもう、そんな大声でいうからヒロちゃんさらに怯えてるよ。

「ご、ごめんなさい鳥乃様。私あの方苦手で」

本人に聞こえないよう小声で囁くヒロちゃん。うん、苦手っていうか怖いのは見てて分かるよ。

「何された？ あのロリコン兼シヨタコンの脳筋に」

「だ、抱きしめられて、匂い嗅がれて、お股触られて『男の娘だったのか』って」

「うわぁ」

これは酷い。

「鳥乃様みたいに初見でばれたのも初めてだったけど、あんな力技でばれたのも初めてでした」

「でしようね」

私は内心ヒロちゃんに同情する。普段の自分の行いからは目をそらして。

「まあ、私のことはさておきだ」

永上さんはいった。

「接触方法についてだが、正面突破なら私にいい考えがある」

『……』

誰も何もいえなかった。私にいい考えってそれフラグだから。そもそも正面突破って言っちゃってるし。

「ん？ どうしたお前たち」

「い、一応聞いておこうか」

そんな中、最初に対応できたのはやはり彼女と付き合いの長い増田だった。

「うむ」

永上さんは嬉しそうにふんぞり返る。

そして、ドアップの集中線でも発生しそうなドヤ顔で、いった。

「私の提案は。——正面突破だ！」

『……』

辺りが、再び何もいえない沈黙に包まれる。

「ん？ どうしたお前たち」

しかも当の本人はやらかしの全く気付いてないし。

「ま、まあ実際、上手い奇策が思いつかなかった場合正面突破しか手はないらしい」

増田がいった。そして自前のデュエルディスクのタブレット画面を見せていう。

「アンの現在位置を特定した。依頼人も一緒のようだ」

「本当？」

私は覗き込む。そこには、地下鉄のホームを表す3Dマップ画像と、そこから続く一本の筒が表示されていた。

「彼女は現在、名小屋駅から続く地下調整池にいる」

「調整池？」

すると永上さんが、

「だから言っただろう。先日その調整池が占拠されたと。場所柄正面から進むしかないから警察として互いに協力関係を結びたいと」

『そんなの一言も聞いてない』

満場一致の反応。そんな時だった。

私のデュエルディスクに通話がかかってきたのだ。相手はアン

ちゃん。

通話に出ると、

『ごきげんよう、鳥乃様』

それは間違いなく本人の声。

「アンちゃん、まさかそつちから連絡をよこしてくれるなんて手間が省けたわ」

『ハッキングの形跡があったものですから。やはりあのハッキングは鳥乃様？』

「まあね」

厳密には増田だけど、ヘイトは自分に集めておく。

『残念ですけど、私たちはもう貴女と面会する気は御座いません。』

……うふふ、聞こえますか？』

すると程なくして、タブレット越しに遠くから「ぎゃあああ」悲鳴が聞こえた。

「神簇っ」

その声の主は、間違いなく神簇さんのものだった。

『はい、いま私は姉上様を尋問にかけてる最中でして』

アンちゃんはいった。

『姉上様ったら酷いんですよ。金庫を開けると言ってるのに、開けないとか分からないとかしか言わないんですよ。そんなはずありませんよね？ 金庫の開け方を知ってるのは姉上様ただひとりだということに』

危ない所だった。いま私たちがアンちゃんと接触できなかったら、神簇さんは延々と悪魔の証明を強いられる所だったのだ。いまのアンちゃんは何をしてもおかしくないというのに。

「神簇が言ってることは本当よ」

私はいった。

『あら、今さらそんな冗談を言って、そんなに姉上様に酷い目にあつて欲しいみたいですね』

「厳密には、偽の鍵を与えられてたみたいなんだけどね」

すると、タブレット越しにアンちゃんの様子が変わる。

『何かご存じなのですか?』

「ん、ぶつちやけると。まだ神簇は本家から真の当主に認められてなかったって話。まさか偽物の鍵を与えられてたなんて知らなかったはずよ。で、いま本家の人から本物の鍵を預かってるんだけど」

「そこまで言ってるから、私は少し声のトーンを変え挑発するように、でも、アンちゃんもう私と面会する気ないんだっけ?」

『……気が変わりました』

アンちゃんはいった。

『その様子だと、恐らく私たちがどこにいるかも特定されてるのでしよう。ですから、私たちはここから動かず、貴女がいらっしやるのを姉上様で遊びながら待つことにします』

「神簇で遊びながら?」

『はい。姉上様を後遺症なく返して欲しければなるべく早く、よく考えて来てくださいね』

そういつて、アンちゃんは通話をきった。

これらの会話は、三人には丸聞こえにしてある。最初に口を開いたのはヒロちゃんだ。

「つまり、なるべく早くかつ鳥乃様ひとりで来いつてことでしょうか?」

「恐らくな」

増田が同意する。

「いえ」

そんな空気に私は首を横に振つて、

「私はこの4人全員で今すぐ向かうべきだと思うわ」

「おおつ、私も同意だ」

何も考えてない永上さんから支持を貰つても嬉しくない。

「一応、理由を聞こうか」

訊ねる増田。私はいった。

「まずは構造ね。いまアンちゃんがいる所の」

そういつて、増田のタブレットを借りて全員に見せる。

「たぶんだけどここの筒型のフロアが例の地下調整池なんですよ?」

「ああ、ここが地下調整池だ」

増田がうなずく。私は続けて、

「だとしたら、敵の暫定アジトはこの通りに一本道。ここにアンちゃんその他に彼女側についたメイドや黒山羊の実のメンバーが何人かついでるとしたら、その全員を突破してアンちゃんの下にたどり着く形になる。そんなの現状厳しいって話でしょ」

「確かに。仮に突破できたとしても、いまの鳥乃のフィール量は少ない。それを更に消費してアンに対峙した所で、ということか」

「そういう話。だから、勝てる見込みのある戦いに出るなら、少し危険だけど私たちが正面突破を仕掛けるしかない」

と、そこまでいってから。

「つていうのが私の案なんだけど、意見聞いてもいい？」

「なるほどな」

すると、増田はいった。

「だけどまだ甘い。その作戦、俺が考えてしまってもいいか？」

駅のホームから関係者以外立ち入り禁止区域に入った私たち。地下深く続く階段を下りながら増田はいった。

「さて、作戦を確認するぞ。俺、ヒロ、永上、そして鳥乃の4名は、これよりアンのアジトに突入する。恐らく相手も応戦の体制が整っている中の正面突破になる」

すると永上さんが、

「正面突破という時点で作戦もなにも無いではないか」

『お前が言うな！』

満場一致のツツコミ。

増田は続けて、

「鳥乃は極力デュエルもリアルファイトもせず、万全の状態でアンの下にたどり着いてくれ。反対に俺たち3人は積極的にリアルファイトを行い、敵対する者を気絶に追い込む。ただし、デュエルは極力避けてくれ」

「デュエルなしだと！ 何故だ！」

驚く永上さんに、ヒロちゃんが、

「デュエルに捕まったら鳥乃様を護れなくなるからですね」

「その通りだ」

増田はうなずいた。

「恐らく相手も最初はリアルファイトを仕掛けてくるだろうが、すぐ俺たちを足止めする為にデュエル中心に切り替えてくるだろう。気をつけてくれ」

「わかりましたー」

と、笑顔のヒロちゃん。

「よし」

地下調整池に辿り着いた。階段を降りきつてすぐの位置に、円筒形の白いトンネルが口を開けて待っている。

調整池とは豪雨などの洪水を一時的に溜める施設をいう。ここ最近豪雨も振ってないので、見たところトンネルの床も所々濡れてる程度みたいだけど。

「作戦開始だ」

増田の言葉を皮切りに、私たちは突入した。

最初に対峙したのは、トンネル付近で待機していた機関銃を構えたメイドさん2名。

『きた!!』

ふたりは私たちに向けて銃を乱射するも、永上さんがフィルの防壁を張った肉体で自ら盾になり、そのまま1名にタックル。

「温い、温い！ 温いぞっ!!」

などと叫びながら、突き飛ばしたメイドが手放した機関銃を拾うと、ふたりにフィルの非殺傷弾にして発砲。逆に2名を気絶に追い込む。

「敵陣だぞ、叫ぶな永上」

と、増田は小声でいうも、恐らく本人には聞こえてない。私はそんな増田を盾に走ってたけど、

「鳥乃様、左に跳んで」

そこへヒロちゃんの言葉。

言われるまま反応し、私は左に跳ぶ。直後、私の隣を上から一筋の赤外線が突き抜けた。

危ない。この赤外線を受けたら、私のデュエルディスクは強制的にデュエルモードになったのだ。

ヒロちゃんが懐から何かを取り出し、天井に向けて投擲。すると、壁に張り付いてたらしいひとりの男が落下した。

胸にはビームサーベルとよぶにはあまりに小型の光学兵器が突き刺さっていた。というより、その武器の形状はどうみてもクナイ。いや、ビームクナイ。

「に、ニンジャ?」

私が反応すると、

「はい。黒瀬一族は遠い昔に影武者や隠密の役目を果たした忍者の一族なんです」

「黒瀬一族?」

私、この子の名前「ヒロ」という愛称しか知らなかったんだけど。

「どうしましたか、鳥乃様……あ!」

ここで、やっと失態に気づいたらしく慌てるヒロちゃん。

その後、私は改めてヒロちゃんから黒瀬くろせ 洗緒ひろつぐという本名を教えてくださいました。って、そんな事よりも。

「やられた」

と、悔しげに言ったのは増田。

ヒロちゃんから改めて自己紹介を受けてた横で、彼はひとりのメイドから強制デュエルに捕まってしまったのだ。

「私もだ」

そして、永上さんも。

「ヒロくんちゃん! 鳥乃を頼む!」

叫ぶ永上さんに、ヒロちゃんは。

「承りましたーっ!」

と、うなづくヒロちゃんは、円筒形のトンネル道を縦横無尽に飛び回りながら現れる敵を殲滅していく。もしかしたら、私が今日の今日

までロクに彼女を視界に映さなかったのも、ヒロちゃんが忍者だったことに影響してるのかもしれない。独特のファイルの使い方をしていると、気配を消してるとかね。あ、ぱんつ見えた。熊さん。

しかしそんな彼女も、

「鳥乃様、危ない！」

と、私の前に立つと、トンネルの奥から放たれた赤外線を浴びデュエルモードに。

「ヒロちゃん！」

「私は大丈夫。1ターンキルしてすぐに追いつきますから」

そこへデュエルを追えたらしい増田が、

「鳥乃、もうすぐ終点だ」

と、合流しては再び奥からの赤外線を受けデュエルモードに。遠距離からの赤外線強制デュエル。まるでスナイパーの狙撃だ。

「分かったわ」

私が見た所、さっきの2回の遠距離赤外線は、普通に伸びる赤外線のそれより速く見えた。恐らくファイルで高速化させているのだろう。

さすがに次に同じような赤外線を飛ばされたら今度こそデュエルを覚悟しなければならない。

私は覚悟して進んだ。

道中、D・パッドとD・ゲイザーをつけた男2名とすれ違った。増田とヒロちゃんをデュエルで拘束した人たちだろう。そして、あのふたりが最後だったらしく私は妨害を受けないまま出口を視界に映す。そこには、アンちゃんが立っていた。後ろには機械装置のようなものでがんじらがめに拘束された神簇さんの姿も。

「ごきげんよう、鳥乃様」

アンちゃんが淑やかに頬笑みいった。しかし、以前に会ったときと違い目は笑っておらず、ずっと眺めてるとどこか寒気を覚えてしまっている。

「例の鍵はっ？」

「ハンナ」

私はデツキホルダーから該当のカードを抜き取ってみせる。

「意外だったわ。まさかアンちゃんが元凶だったなんて」

「ふふ、私もです」

アンちゃんは頬に手を添え、

「まさか鳥乃様が、ここまで私をないがしろにして姉上様を優先するなんて思いませんでした」

「どっちかを優先した覚えはないんだけどね。襲撃を受けたのがアンちゃんだったら、神簇を増田に任せてでも助けに向かったし」

アンちゃんから反応はない。まるで「そんな嘘信じるとでも？」と言いたげに笑顔のまままだ。

そこへ神簇さんが、

「と……りの……さ……き……」

「神簇、大丈夫？」

「あ……う、あ……」

どうやら意識が朦朧としてるらしい。それでも私を見つけ何かを伝えようとしているのが分かるが、残念ながら上手く聞き取れない。

「アンちゃん。どうしてこんな事をしたの、良かったら教えてくれない？」

すると、アンちゃんはいった。

「嫉妬です」

「嫉妬？」

「はい。鳥乃様は、姉上様が私を嫉妬してると言っていましたけど本当に嫉妬してたのは私のほうなんです」

そういつて、アンちゃんは憎らしげに、

「だって、そうじゃないですか。姉上様はとても不器用で私と比べて何もできない御方なのに、神簇の第一子で、将来が約束されて、周りから期待されて。それに、小さい頃から振り飾す権力があって、虐めの加害者になることだって許されたんですよ？ 鳥乃様だってご存じでしょう。姉上様が梓さんを虐めてた時も、周りの大人がどちらの味方をして、どちらの言い分に耳を傾けたか」

「……そうね」

「生意気だそうです、私。一步引いて、自分より周りを優先して、皆の脇役に徹して。そしたら、人生余裕ぶって馬鹿にしてる、うざい。おどおどしたフリしてぶってるつもり？ 気持ち悪い。次女のくせに何様のつもりよ、死ぬ。同じ空気を吸いたくない。学園の恥。色々言われました。お弁当も食べてはいけません。蓋を開けたら砂塗れでした。私の机にクラスメイトの筆箱が入って窃盗犯にされました。階段から突き落とされた傷はまだ残ってます。もちろん、学校の先生も虐めなんて存在しないといって助けてくれません。だから、自分で解決しようとしても何倍にも返ってきますし、私だけじゃなく家ごと潰そうとされて泣き寝入りを強いられました。そのうえ私の転校が決まった時、学校の裏サイトでは『何であいつ自殺しないの、最悪』って」

これでもかと、自分の虐め体験談を語るアンちゃん。その内容は酷いといしかいい様がなかった。

「それからでしょうか。私、努力することも、我慢することも、頑張ることも、全部嫌いになってしまったんです。何をやっても、報われませんから」

「アンちゃん……」

「不公平ですよ？ 姉上様は祖父のスネを乱用して散々使用人や梓さんを虐め抜いて女王様ごっこをしたのに、いまだに地位も信頼も能力も、家の資産までも独占するんですよ？ 一方私は地位も信頼も与えられず、能力だって姉に明け渡して籠の鳥を強いられ、与えられたのといえは従順な次女を演じて刻まれた弱者の烙印。そして家の姉の代わりに被るやつかみ。その結果、私は虐められたというのに」

「あ……アン……」

神簇さんが悲痛な顔で妹に言葉をかける。しかし、アンちゃんが振り返ると、機械装置が触手みたいに蠢き、神簇さんを締め上げる。

「アアア……あ、がっ」

声量こそ小さいのに、妙に響くうめき声。アンちゃんは笑い、「だから、姉上様の地位も信頼も能力もすべて奪おうと決めたんです。そして、新たな当主になろうと思ったんです」

アンちゃんはいった。

「私はまず以前から私と親しくしてくれた先生を味方につけ、使用人の何人かに姉の過去の行いを吹き込んで不信を抱かせ、とどめの一言を吐いて私側につかせました。こんな感じに」

アンちゃんは怯えた顔をつくり、

『もし姉上様が当主になったら、化けの皮を剥がして恐怖政治を始めてしまいます』

迫真の演技だった。これを当事者の使用人たちが聞けば、本気で自分のことを心配している天使様だと錯覚してしまいそうな程に。

「あとは、物量作戦でセバスチャンを籠絡しました。彼自身、完璧とは言いがたい姉に次期当主を任せることに不安を抱いてたみたいですから、私の手腕を見せれば簡単でした」

「けど、セバスチャンはあなたが」

すると、アンちゃんは愉快げな笑いに戻り、

「はい。姉上様ったらセバスチャンの残虐ミンチショーの映像をみたら、軽く発狂してくださって。他の使用人のショーも見せましたけど、やっぱり彼が一番でした」

と、自分がした行いに少しも罪悪感を感じる様子もなく、

「セバスチャンを味方につけて正解でした。とても役に立って頂きました」

などとのたまう。

「狂ってる……」

仮にもあなたを信じついできた人なのに。

私は、ついいつてしまった。

「あら、ふふふふ」

すると、アンちゃんは再びお腹を抱えて笑い、

「狂ってるのは鳥乃様のほうじゃないですか。自分の大切な方を虐げた人間なのに、他の誰かを犠牲にしても護ろうだなんて。梓さん、未だ姉上様を許してなかったですよ？ それなのに、鳥乃様は姉上様の側につくのですか？」

「一番は梓よ」

私は即答する。

「けど、私が抱きたいと思った美女美少女もみんな大切。それは、アンちゃんも、いまの神簇だってね。だから、護れる限りはみんな護るわ。私のレズのプライドに誓って」

「やっぱり狂ってるじゃないですか。その時点で梓さんを裏切ってますのに」

アンちゃんはまだ笑ってる。いや、これは嘲笑ってるのか。

「まあ、私もこの前まで許してなかったけどね」

私はいった。

「けど、久々に会って神簇は変わってた。見栄っ張りで強情な所は残ってたけど、筋は通すし、責任感もある。何より周りを大切に人間になった。梓もいまの神簇に会えばきつと分かってくれるわ」

「随分な自信ですね」

「だって、現在進行形であれを見ればね」

と、私は神簇さんを指さす。

神簇さんは泣いていた。アンちゃんが胸の内を吐露し、その内容に耐え切れず泣きだしたのだ。

「いまの神簇は当時の下種じゃない。それどころか、あれだけ酷いことをしたアンちゃんの為に心を痛め泣けるのよ。そんな姿を見て、梓が分からないはずがないわ」

私はいった。言いながら、

『私、そこまで人望がなかったのかしら？』

『私の何がいけなかったの？ 私がまだ若いから？ 昔の私のツケ？』

それとも私、まだ皆に恨まれるような人間だったの？』

と嘆いた神簇さんを思い出す。

彼女は今日までどれだけ努力して自分を変えたのだろう。そして、アンちゃんが虐められ、かつて自分がしたことを目の当たりにし、どれだけ心を痛めアンちゃんを想ったのか。そのすべてが裏目に出る様はむご過ぎる。

もし、すれ違いさえしなければ、互いに互いの今の想いが伝わってれば。

こんな悲劇は起こらなかつただろうに。

「ふふ、本当に鳥乃様は姉上様の理解者で救世主ですね」

アンちゃんはいった。

「貴女が姉上様に報復しなければ、姉は目が覚めることもなかった。私の刺客から貴女が姉上様を逃がさなければ、いまごろ姉は依頼人と会うこともできなかつた。そもそも貴女が姉上様の依頼を受けなければ、姉のハングドに向けた嘆きは届かなかつたのですから」

言いながら、アンちゃんはデュエルディスクを構える。そこから赤外線が伸びると、私のデュエルディスクもまた強制的にデュエルモードに。

「そして、いまの貴女はここまで姉を理解し味方してください。ずるいですよ？ 私にはそんな理解者ひとりもないのに」

「それがいるのよ。それもあなたの真後ろに！」

私は叫んだ。

「アンちゃん！ あなたはこんな形で報復するんじゃないで、胸の内をお姉さんに打ち明け、正面からぶつかるべきだったのよ」

しかし、直後アンちゃんから放たれたフィールの衝撃を受け、

「うっ」

と、私は弾き倒される。そんな様をアンちゃんは不気味な笑みで見下ろし、

「ふふ、もうそんな戯言を聞く気はありません。ここで貴女を殺せば、姉上様は目の前で最後の支えを失い、一生立ち直れない傷を負う事でしょう。それから、例の鍵もデュエルで回収させて頂きますね」

「まあ、こうなつた以上デュエルは避けられないって話よね」

私は起き上がり、デュエルディスクを構える。そして。

『デュエル』

私たちは同時に叫んだ。

沙樹

LP4000

手札4

□□□□
□□□□
□□□□
□□□□
□□□□
□□□□

アン

LP4000

手札4

「デュエル開始時、私はスキルを発動させて頂きます」

デュエルデスクにフィールドとライフが表示されると、いきなりアンちゃんはこう宣言した。

「スキル《エクシーズチェンジ・マイスター》。この効果によって、私はエクストラデッキにないカードをエクシーズチェンジできます」

つまり、「自分のモンスターの上に重ねてX召喚する」効果でX召喚する場合、エクストラデッキの枚数制限を無視した展開が可能ということらしい。

「けど、先攻はこっちが貰ったわ」

私はいい、最初の手札を4枚引く。が、同時にアンちゃんからフィールドの奔流が私を襲い、

(あつ)

気づけば事故っていた。見事にモンスターばかりで、かつ絶妙に展開できない。恐らく、さっきのフィールドでドロ―運や流れに干渉されたのだ。いまの私とアンちゃんとは圧倒的にフィールド量の差が生まれてる。私にこれを止める術はない。

「どうされましたか?」

微笑んで訊ねるアン。分かっているくせに。恐らくいま彼女の手札は「完璧な手札だ」状態なのだろう。

「私は手札から《幻獣機テザールフ》を召喚」

フィールドに出現したのは、1機のヘリ。

「このカードの召喚に成功したことで、私は場にトークンを生成。」

ターン終了よ」

いまはこういう形でやり過ぎすしかない。その為にテザールフを使うしかなかったのが余計心苦しい所だけだ。

「では、私のターンに入りますね。ドロロー致します」

アンちゃんはカードを1枚引き抜き、

「では参りますね。私は手札から《ギミック・パペット》ギア・チェンジャー》を通常召喚、そして、鳥乃様の場にモンスターがおり、私のモンスターがギミック・パペットだけの場合、手札から《ギミック・パペット》マグネ・ドール》を特殊召喚します」

アンちゃんの場に現れたのは、2体の不気味な形相の人形。

「ギア・チェンジャーの効果。これにより、ギア・チェンジャーのレベルをマグネ・ドールと同じ8に致します。そして、私はこの2体でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

天井に銀河の渦が出現すると、2体のギミック・パペットは靈魂の姿になって取りこまれる。そして、浮かび上がったのは15の数字。「おいでなさいませ、No. 15！ 運命の糸を操る地獄の粉碎機！

さあ、私に立ち向かう愚か者に残虐なるおもてなしを、ギミック・パペット―ジャイアントキラー！」

現れたのは、1体の巨大な機械人形。その胸部には巨大なローラー粉碎機が搭載されてある。

「早速、きたわね」

私はいった。このモンスターは、映像に映ってたセバスチャンをミソチにしたモンスターだったのだ。

「ジャイアントキラーのモンスター効果。オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、特殊召喚されたモンスター1体を破壊します」

やっぱり、効果は破壊関連みたいね。

セバスチャンがされたように、ジャイアントキラーの指から糸が伸びる、幻獣機トークンを胸元に引き寄せる。そして胸の粉碎機で飲み込み、ローラーが起動する。フィードでリアル化してるようで、振動は実際にトンネル全体に響いていた。

「い……いやあああああああ!!」

神簇さんが悲鳴をあげた。大切な使用人を何人も殺した音に、トラウマを呼び起こしてしまったようだ。

「あ、ああ……セバスチャン……みんな、な……ごめ……ごめん、な……許して……許して……」

フラッシュバックに支配され、わなわな震え、謝り、錯乱しながら許しを請う神簇さん。

「許しません」「許さない」「許すわけない」

そんな姉に、アンちゃんが追い打ちをかけるように囁く。しかも微妙に毎回トーンを変え色んな人の怨念を表現する徹底ぶり。この子、演劇部の適正でもあるんじゃないだろうか。

「いい趣味してるわね、アンちゃん」

私はいった。目は笑わず。

「あら、お褒め頂いてしまいました。ありがとうございます」

アンちゃんはわざと頭を下げる。

「ジャイアントキラーの効果は1ターンに2回使用できますけど、通常召喚したテザールーフはこの子の粉碎機にかけることはできません」

そういつて、アンちゃんは手札を1枚ディスクに差し込んだ。

「ですので、こうします。魔法カード《RUM―エージェント・カオス・フォース》」

やっぱり手札にあったみたいね、RUMカード。一部を除けば「自分のモンスターの上に重ねてX召喚する」効果というのはほぼRUMを指す効果なのだから。

が、直後だった。

「ぎゃあああああああああ!!」

機械装置が怪しく光ったと思うと、神簇さんが再び悲鳴をあげたのだ。それも先ほどのトラウマではなく、物理的な激痛にみえる。

「ちよっ、アンちゃん。一体何をやる気?」

慌てて訊ねると、アンちゃんは愉快げな声で、

「あら、いつから私が手持ちのカードを使っていたか?」

「え？」

カードを創造する気なの？　けど、なんで神簇さんが苦しんで。つて、まさか。

「ましてや、私のフィールを使うとも」

神簇さんの胸元から光るカードが浮かび上がる。それをアンちゃんの手にとると、神簇さんは意識を手放しその場で項垂れ、

「あぎゃあああ!!」

装置から電流が走り、強引に起こされる。

「私はジャイアントキラード体でオーバーレイ・ネットワークを再構築。ランクアップ・エクシードスチェンジ！　おいでなさいませ、CN 0.15！　続けて残虐なるおもてなしの第二幕ーチップソー粉碎機による演舞になります。主役はこの、ギミック・パペットーシリアルキラード！」

再び天井に銀河の渦が出現すると、今度はジャイアントキラードが靈魂になって取りこまれる。こうして出現したモンスターは1体の金色の機械人形。

「如何ですか？　いま姉上様を拘束してる機械装置には、姉上様のフィールを私のフィールの代わりに使用する機能が備わっております。それも、姉上様に命を抜くような激痛を与えて。もちろん、耐え切れるはずもなく姉上様は気絶されてしまいますけど、機械装置にはそんな安息も許しません。姉上様が意識を失った時、高圧電流を流し込んで強制的に起こす機能も備わっております」

「……な」

なんてことを。

「姉上様には誘拐してからずっとこの機械装置で拘束してあります。もちろん睡眠も許しませんから、鳥乃様が来るまで既に数回電流を浴びちゃってます。さて、姉上様はあとどれくらい耐え続けるでしょうか？　鳥乃様がデュエルを続ければそれだけ姉上様は苦しみ続きます。ひよつとしたら、デュエルが終わった頃には死んじやってるかもしれないですね。ふふ、うふふふふふ」

「酷い……」

愉快気に声をあげて笑うアンちゃんに、私は必死の形相で叫んだ。
「そんな、神簇の喘ぎ声を何度も聞かされるなんて、濡れてデユエルに集中できないじゃない!!」

「……は？」

途端、笑い声が止まり、目を丸くするアンちゃん。

「美女が拘束されて、電流で喘ぐのよ。一種のハードSMじゃない！」
力説する私に、神簇が叫んだ。

「鳥乃 沙樹！ 貴女、こんな時になに考えてるのよ」

「私はいつもナニ考えてるわ！」

「ブレなさすぎでしょっ」

言い終えると、再び神簇は項垂れる。いまにも再び意識を手放しそうだ。

けど、あえて私はいった。

「そこまで叫ぶ気力があるなら問題なさそうね」

「振り絞った……のよ、気力」

「なら言い換えて、突っ込みに気力振り絞る元気あるなら問題ないわね。神簇、ささっと終わらせれる保証はないけど、何とか耐えてくれる？」

「鳥乃……」

神簇は呟く。そして、

「当たり前でしょ」

彼女の首がゆっくり縦に振られた。

「……。……ああ、なるほどそういうことですか」

アンちゃんが頬笑みいった。

「フィールに差がありすぎるから、せめて口頭で流れを掴もうとされたのですね？ けど、無駄なことですよ。姉上様のフィールを取り込んだ、いまの私のフィールの前ではそんな足掻きは通用致しません」

あー。そう解釈しちやっただか。そう思わないと理解できたなかったのね。

「神簇、妹に現実教えてあげたら？」

「そんな気力残ってないわよ、鬼」

とはいっても、私の目には最初に見たときよりずっと元気を取り戻しているように見える。

「《CNo. 15 ギミック・パペット―シリアルキラー》のモンスター効果です。このカードのオーバーレイ・ユニットひとつを取り除いて、相手フィールド上のカードを1枚破壊し、それがモンスターだった場合は元々の攻撃力分のダメージを与えます。対象は勿論テザールフになります」

シリアルキラーの胸部が開くと、そこから複数の丸鋸が飛ばされテザールフを切り刻む。しかも、フィールドを入れてるらしく風を裂く衝撃やモンスターを破壊した爆風がこちらにまで届いてきた。

「ふふ、では攻撃力1800分の、身を裂かれる痛みを味わってください。そして、直接攻撃でジ・エンドになります」

嬉しそうなアンちゃん。テザールフを切り刻んだ丸鋸は、そのまま私に襲い掛かる。しかし、私の体に届く直前、1機の幻獣機の立体映像が出現し、盾になった。

「えっ」

驚くアンちゃんに私はいった。

幻獣機「コウライデンのかわり」

「《幻獣機「ビーバー」》を手札から捨てて効果発動。このターン、私は効果ダメージを受ける場合、代わりに私の場に幻獣機トークンを呼び出す」

さらに、テザールフは破壊されたけど新たにトークンと呼んだ以上、このままではシリアルキラーで直接攻撃もできない。もつとも、このカードも1ターンに2回使える場合は話は別だけど。

「……。カードをセット。シリアルキラーで邪魔なトークンを破壊してターンを終了します」

どうやらシリアルキラーの効果は1ターンに1回だけの模様。顔を苦め、アンちゃんはいった。

しかし、威圧なのかトークンに対しての攻撃さえもアンちゃんはフィールドでリアル化し、ライフが削れないにしても衝撃が私にまで届く。

「私のターンね、ドロー」

と、カードを引く瞬間、再びアンちゃんのフィールド妨害。引いたカードはやっぱり使えそうにない。

「モンスターをセット。ターン終了するわ」

「私のターン、ドローします。今度こそお受けください、シリアルキラの効果です」

再びシリアルキラの胸から丸鋸が飛び、セットモンスターを切り刻む。破壊する寸前に正体を現したモンスターは。

「《幻獣機オライオン》の効果。このカードが墓地に送られたことで幻獣機トークンを呼ぶわ」

「また……」

アンちゃんはうんざりした顔で、

「ですけど、効果破壊のほうは防げません。今回は受けてくださいね」と、鬱憤で必要以上にフィールドのこもった丸鋸が私を切り刻む。

「っー」

強烈な激痛。裂かれた全身から血のビジョンが流れ、さらにリアルな味のする血のビジョンが吐き出される。

沙樹 LP4000↓3400

数秒後には映像は消えるも、脳に刻まれたダメージの体験に私は一回膝をついた。

「あら、反応はそれだけですか？ むっと苦しんでも良いのに」

「生憎私はMじゃないからね」

私は、軽くよろめきながら起き上がり、

「相手を悦ばせるような喘ぎは慣れてないのよ」

「まだ言いますか。残念です」

再び、アンちゃんの顔が不満気なものになり、

「では、もう1度シリアルキラの攻撃でトークンを破壊。ターン終了します」

再びシリアルキラに破壊されるトークン。その際にリアル化した衝撃で爆風が舞い、よろめいてた私は再び倒れる。

「私のターン、ドロー」

その姿勢のまま私はカードを引くも、やはりアンちゃんのフィールで逆転のカードを引けずに終わる。

「モンスターをセット、ターンを終了するわ」

「私のターン。もう1度シリアルキラーの効果で」

そこまでいって、アンちゃんはハツとなる。

「オーバーレイユニットが」

シリアルキラーは、すでに手持ちのオーバーレイユニットを使い切っていた。

「これで、破壊効果は使えないわ」

私はまた立ちあがる。

「でしたら、普通に攻撃するだけですー！」

吠えるようにアンちゃんはいった。思うように私を蹂躪できず苛々してるのが見てとれる。

「シリアルキラーでセットモンスターを攻撃」

やはりモンスターは戦闘破壊され、リアル化した爆風が舞いあがる。しかし。

「《幻獣機ハムストラット》のリバース効果。今度は幻獣機トークンを2体出すわ」

出現する2体の立体映像。

「む、無駄なことを」

言いながらも、一歩たじろぐアンちゃん。

「そのような雑魚をいくら並べても壁にしかありません」

「その割には、その壁に気押されてるみたいだけど」

「っ」

より一層、アンちゃんの顔が歪む。

そして、鬱憤が爆発した。

「煩い、煩い、煩い！ 貴女が何をされようと、間違いなく私はデュエルに勝って、姉上様から全てを奪うんです！ 真の当主になるんです。……既に私は鳥乃様より姉上様より上の存在です！ 権力も、財力も、信頼も、フィールも！ だからっ」

「で、何が言いたいのか？」

訊ねると、アンちゃんは全然やり慣れてない威張り顔で、

「私が見たいと言っているのです。早くぶざまな敗北と死に様を晒してください!!」

なんて言ったので、私はいった。

「昔の神簇みたいね。私の宿敵みたいな当主ぼうくんになりたいの？」

「っ」「っ」

ハッと衝撃を受けた顔をするアンちゃん。その後ろで神簇さんも昔を思い出してハツとなる。

「い、いけませんか？」

アンちゃんは体をぶるぶる震わせながら威圧的に、

「私だって神簇の娘なのに、ずっとできなかつたんですよ？ 少しくらい、いいじゃないですか！」

と、怒鳴る。

「ターンを終了します。さっさとドローしてターンを終了してください！」

「じゃあお言葉に甘えて、私のターン」

沙樹

LP3400

手札2

□□□

□□「《幻獣機トークン》」「《幻獣機トークン》」

□□—「《CN〇・15 ギミック・パペット—シリアルキラー（アン）》」

□□□□

「《セット》」□□

アン

LP4000

手札3

ドロー！ と、私はカードを引く。当然フィールでパツとしない

カードを引かされたけど、すでに手札事故なりに準備は整っている。
「私は《幻獣機ハリアード》召喚、続けてハリアードの効果でトークン1体リリースし、手札の《幻獣機ブラックファルコン》を特殊召喚」
出現する2体のモンスター。幻獣機の共通効果によってレベルはそれぞれ4から7に上昇する。

「レベル7が2体。……もしかして」

まさか動かれるとは思ってなかったのだろう。驚くアンちゃんを前に私はいった。

「私は、この2体でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

今度は床に銀河の渦が出現すると、私の幻獣機たちは靈魂の姿になって取り込まれていく。

「竜の名を持つ機械の鳥よ。いまこそ空を支配し、私に勝利を輸送せよ！ エクシーズ召喚！ 発進せよ、ランク7《幻獣機ドラゴサック》！」

銀河の中から浮上したのは、先端に竜の首を模した部位の追加された大型の幻獣機。表示形式は守備表示になっている。

「ドラゴサックの効果。このカードのオーバーレイ・ユニットをひとつ取り除き効果発動。私の場に幻獣機トークンを2体発生。その後、幻獣機トークン1体をリリースしてもうひとつの効果。シリアルキラーを破壊」

ドラゴサックの周りに新たな幻獣機の立体映像が2体出現すると、その内1体がドラゴサックの背に搭載され、発射される。

本来ソリッドビジョン上の世界でも立体映像でしかない幻獣機トークンだったが、シリアルキラーにカミカゼ突撃すると爆発を起し、モンスターを撃墜する。

「後者の効果を使ったターン、ドラゴサックは攻撃できない。もつとも最初から守備表示で攻撃できないけどね。私はカードを1枚セツト。これでターン終了」

と、ターンを明け渡すと、

「どうして、ですか？」

アンちゃんが訊ねた。

「どうしてシリアスキラーを倒せたのですか？　鳥乃様、貴女本当は手札事故を起こしてなかったのですか？」

「ん？　おもつきり事故ってたけど？」

私はいった。

「それでも、いまの手札で出来る最善の一手を狙っただけ。粘って粘ってシリアルキラーのオーバーレイユニットを使い切らせ、《幻獣機ハムストラット》の2体のトークンを残して私のターンを迎える。そこまですれば何とか動くことはできたって話」

「粘って、粘って……」

復唱するアンちゃん。その表情が、だんだん険しいものへと変わって行く。

「やっぱり、どうして皆は努力が、我慢が報われるのですか？　私は、

私はこんなに……」

そんな怒りをぶつけるように、

「こんなに報われないのに！　私のターン！」

カードを引くアンちゃん。しかし、新たな手札を確認すると、

「ふふっ」

と、笑顔に戻る。

「鳥乃様、どうやら無駄な努力だったみたいですね。《ギミック・パペット―死の木馬》^{デス・トロイ}を召喚し、効果で自身を破壊します」

アンちゃんのフィールドに人型の人形をつなぎ合わせて作られた不気味な人形が出現し、すぐ分解される。

「《ギミック・パペット―死の木馬》^{デス・トロイ}はフィールドから墓地に送られた時、手札からギミック・パペットを2体特殊召喚致します。現れなさいませ、《ギミック・パペット―ナイトメア》《ギミック・パペット―ネクロ・ドール》」

分解された人形を触媒に、新たに2体の不気味な人形が出現する。そのレベルはどちらも……。

「またレベル8が」

「はい。私はこの2体でオーバーレイネットワークを構築します」

再び上空に現れた銀河に、2体のモンスターが靈魂になって取り込まれる。

「エクシーズ召喚！ おいでなさいまで、No. 40！ 神の糸を操りし運命の奏者よ、これより天獄の音楽会を開幕せよ！ ギミック・パペットーヘブンス・ストリングス！」

現れたのは弦楽器と剣を持った一体の片翼の人形。その攻撃力は3000。

「ランク5以上のエクシーズモンスターが特殊召喚されましたので、墓地の《RUM―アージェント・カオス・フォース》を回収しますね。そして、ヘブンス・ストリングスのモンスター効果」

と、RUMを手札に戻し、アンちゃんはいった。

「1ターンに1度、このカード以外のモンスターの上にストリングカウンターを1つ置きます」

ヘブンス・ストリングスが音楽を奏でると、上空から私のモンスターに糸が伸びる。

「次の鳥乃様のターン終了時、ヘブンス・ストリングスはカウンターの乗ったモンスターをすべて破壊し、その数×500ダメージを与えます」

つまりこれは、時間差のある全体破壊？ けど、幾らなんでも悠長すぎる。

「そんな鈍い効果、通用するとも？」

「もちろん、このままでは通用しないと思っております。ですので、ここで私はもう一度あのカードを使います」

っ!? さつきアンちゃんが手札に戻したカードって、確か。

「まさか。……神簇っ！」

咄嗟に私は神簇を見る。彼女もまた察したみたいで、恐怖で体を強張らせていた。

「ふふ、いいですね。その反応」

うっとりした顔でアンちゃんはいった。

「では、ご希望にお応えしましょう。魔法カード《RUM―アージェント・カオス・フォース》を発動」

アンちゃんが今回2回目のRUMを発動する。すると、再び機械装置が怪しく光り、

「い、いや。やめ……て、いやあああああああああ!!」

再び走る激痛に悶え、悲鳴をあげる神簇。その胸元から光るカードが浮かび上がると、アンちゃんは奪い取り、ディスクに読み込ませる。

「ヘブンズ・ストリングス1体でオーバレイ・ネットワークを再構築。ランクアップ・エクシーズチェンジ! おいでなさいませ、CNO.40 天獄による音楽会その第二幕―運命の奏者は転調し、必然の死を奏でる悪魔となる。響け、殺戮の鎮魂歌^{レクイエム}! ギミック・パペット―デビルズ・ストリングス!」

靈魂になった巨人の人形が銀河の渦に飲み込まれ、現れたのは鍵爪のような翼を持った、巨大な悪魔の人形。攻撃力は3300。

「あ……あ……」

瞳から光が消えうせ、事切れるように意識を手放す神簇。

「神簇―」

まさか、本当に……! 最悪な可能性が脳裏に過り、私は必死に叫びあげる。

直後、神簇の体に高圧電流が流れた。

「ぎ……あ……っ」

声にならない悲鳴をあげ、意識を取り戻す神簇。酷い光景だけど、今回ばかりは生きてたことにほっとする。

「お、おげっ」

しかし、彼女の内臓は限界だったらしく、その場で神簇は嘔吐。

「あらあら、お姉さま汚いことを」

言いながら本心かわざとか、言葉通り汚物を見る目で少しだけ距離を取るアンちゃん。

「と……とり、の……」

神簇が、声を絞り出していった。

「みな……見ない、で。……こ、こんな……吐いてる……私、なんて……」

こんな状態になっても、そんな事を心配するなんて。

私は心の中で彼女のプライドに尊敬を覚えつつ、いった。

「この馬神簇ばかむら」

「ぼっ……」

「心配しなくても神簇はゲロってる時も素敵だから、いまは耐え切ることに集中して」

「っ……いい、いわれなくても。耐えはするわよ」

何とか返事する神簇。しかし彼女は続けて、

「……でもっ」

「神簇……」

「嬉しかった。……人格者になったって、尊敬できるって。そう、なりたくて……いままで頑張って、一番認めてもらいたかった人に……認めて貰えたんだもの」

今度こそ事切れそうな途切れ途切れの声で、まるで命がけで。神簇は何とか伝えようとする。

「だから。……その評価を、崩したく、ない……に。……き、決まってるじゃない。……やつと……やつと、聞けたんだからっ」

彼女のプライドに尊敬、なにを馬鹿な勘違いしたんだろう。

神簇がそんな風に私をみてたなんて思わなかった。そりゃあ、数年ぶりの喧嘩をしたときに胸の内を少しは聞いてたけど。

私はそれで、知った気になってただけだったんだ。

なら、尚更言わなければいけない。

「やっぱり馬神簇ばかむらじゃない」

って。

「なっ!？」

「あの時、一緒に言った言葉忘れたの？ 完璧な人間とは程遠いけど、そこが神簇の魅力だつて。そのままでもいいのよ。完璧じゃなくても、私が見たそのままの神簇を私は尊敬してるんだから。目の前で吐いた？ そんな程度で幻滅するわけじゃないじゃない。——それが分からないっていうんだから馬鹿って言ったのよ、この馬神簇ばかむら!」

恐らく、こんな言葉梓にも言ったことないだろう。私にとっても、いつのまにかそれだけ大切な存在のひとりになってたのだ。神簇は。

「ば、馬鹿馬鹿馬鹿って、何度も馬鹿って言わないでよ！」

「馬鹿だから馬鹿って言って何が悪いって話よ！」

「この、馬鹿！」

「そっちだって馬鹿言ってるじゃない！」

違う。この遠慮のない子ども喧嘩みたいな関係、梓と比べるなんて畑違いだ。悪い意味で。

「と、とりあえず」

しかし、ここは私より2つも上のお姉さん。神簇は一足先に口喧嘩を降り、いった。

「私は大丈夫なんだから、鳥乃は早くデュエルでアンを救うこと。いわね！」

それも一番に助けられるべき存在が自分だというのに、妹の心配を。

「分かったわ」

私は再びアンちゃんとデュエルに目を向ける。

アンちゃんは、とつても白い目をしていた。

「あの……。鳥乃様」

「なに？」

「どうして、こんな状況でイチャつけるのでしょうか？」

いや、イチャついてないんだけど。

とはいえアンちゃんは完全に気分が白けてしまった模様。このまま終わってくれるなら嬉しかったんだけど。

「はあ。……もう、鳥乃様をいたぶる気も失せてしまいました」

アンちゃんはいいい、召喚したデビルズ・ストリングスの足を一回撫でる。

「ですから、さっさと殺しておくことにしますね」

口元だけで笑みを浮かべるアンちゃん。不覚にもえろい。

「デビルズ・ストリングスは特殊召喚した時、フィールド上のストリングカウンターに乗ったモンスターをすべて破壊し、私はカードを1枚引きます」

なるほどね。

実質的に、カオス化することで破壊効果を時間差なしで使用できるわけだ。ドロー付きで。

「更にその後、破壊したモンスターの内、一番高い元々の攻撃力分のダメージを相手に与えます。ドラゴサツクの攻撃力は2600！これで鳥乃様のライフは残り800」

破壊されていく私のトークンたち。しかし、彼女にとって破壊した本命だったドラゴサツクは、デビルズ・ストリングスの破壊を免れる。

「残念だけど、ドラゴサツクは幻獣機の共通効果で破壊されない」

「えっ?」

「殆どの幻獣機は、場にトークンが存在する限り戦闘・効果では破壊されないのよ」

全体破壊を受けた瞬間は、まだ場にトークンがいた。その為、トークンは全部破壊されたけどドラゴサツク自身は生き残ったのである。

「そんな」

「どうやら、本気で知らなかったらしい。」

「で、このターンで私を倒すつもりらしいけど、ここからどうするの?」

「なんて煽ってみると、」

「つつっ……デビルズ・ストリングスで、ドラゴサツクを改めて戦闘破壊、ターン終了します」

ぐぬぬ顔でアンちゃんはいいい、そしてターンを明け渡した。

「じゃあ、いくわ。私のターン」

私はカードを引く。瞬間、今回もアンちゃんからフィールの波で妨害が入る。

「いや、入りはしたんだけど。」

「あれ?」

私は思った。フィール量が低い。相殺できそうなのだ。いまの私のフィールでも。

「ドロー」

私はフィールを込めてカードを引く。こうして手札に加わった

カードは。

「魔法カード《貪欲な壺》！」

天然のデステイニードローだった。

「そんな！ フィールで妨害したはずなのに」

驚くアンちゃん。私はいった。

「アンちゃん、あなたこのデュエルで何回フィールを使った？ 攻撃

の度に割と大盤振る舞いに消費してた気がするけど」

「それは……」

「あれだけ使えば、幾らフィール量に差があってもこうなるわよ。フィールは消耗品なんだから」

とはいったけど。経験上それだけではないのは分かっていた。

以前、人間の生命エネルギーの正体もフィールなのではないかという学説を聞いた。それなら、扱う人の気力やメンタルでもフィールの出力は左右されるのではないだろうか。実際、デュエル開始時と今とでアンちゃんのテンションは間違いなく違うのだ。

でなければ、いまのアンちゃんのフィールがたった数ターンで尽きるはずがない。

「私は墓地から《幻獣機テザールフ》《幻獣機ハムストラット》《幻獣機ハリアード》《幻獣機ブラックファルコン》《幻獣機ドラゴサック》の5枚をデッキに戻す。そして、2枚ドロー」

攻めるなら今！ 私は、フィールを込めてカードを2枚引き抜く。

「《幻獣機テザールフ》召喚！ 効果でトークンを1体生成」

まず引いた1枚は、このデュエルで最初に召喚した狼型の幻獣機モンスター。効果でトークンも一緒に出し、さらに私は墓地のカードを1枚抜き取る。

「墓地の《幻獣機オライオン》を除外して効果発動。《幻獣機ハムストラット》通常召喚！」

こうしてフィールドに出現する2体のモンスターと1体のトークン。2体は効果によってレベルがそれぞれ7と6に。

「そして」

私は、伏せていたカードを表向きにする。

「永続罨《マーシャリング・フィールド》を発動！ 効果で2体のモンスターを9に！」

「レベル9!？」

驚くアンちゃん。そして、私がいまから出すカードに気付いただろう。

「もしかして、金庫を開く為の、あのカードを」

（名答。）

「私はレベル9となった《幻獣機テザーウルフ》と《幻獣機ハムストラット》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

天井に銀河の渦が出現し、2体のモンスターは霊魂となって取り込まれる。そこから浮かび上がったのは、ナンバーズを示す9の数字。

「エクシース召喚！ 機動せよNo. 9！ 未来より建造されし球体の建造物よ。時を超え、いまこそ降臨し天空を覆え！ 天蓋星ダイソン・スフィア！」

銀河の中から、いや銀河の広ささえ飲み込むように出現したのは球状のスフィアのついた巨大な宇宙建造物。それはあまりに大きすぎてソリッドビジョンでは表示されず、下を向いたダイソン・スフィアが上半分にも満たない程度にトンネルの天井を突き抜けて出現していた。

その攻撃力は2800。

「これは、お爺様のエースだったカード！」

神簇が驚きいった。

「え、そうだったの？」

「ええ。亡くなる数日前に手放したと言ってたけど」

実際には、本家に預かって貰ってた。ということみたい。

まあ、それはともかくとして。

反撃開始といきますか。

「ダイソン・スフィアの効果。相手フィールド上にこのカードより高い攻撃力を持つモンスターが存在する場合に、このカードのオーバーレイ・ユニット1つを取り除いて効果発動。このカードは相手に直接

攻撃できる」

「えっ!?」「攻撃力2800で?」

どうやら、姉妹揃って効果は知らなかった模様。私はダイソン・スフィアからハムストラットを取り除く。

私は叫んだ。

「ダイソン・スフィアの攻撃! ブリリアント・ボンバードメント!」

「ひっ!」

オーバーレイユニット

霊魂のひとつがダイソン・スフィアの中央に取り込まれると全身が輝き、その全てから無数の光の雨がアンちゃんに向けて降り注ぐ。

わざわざ攻撃名まで言ったせいだろう。アンちゃんは両手を突き出し、全力でフィールの防護壁を張る。とはいえ、アンちゃんの思考的にフィールで防御するとは思ってたけど、ここまで怯え、必死に防御してくれるのは嬉しい誤算。

しかし、手ごたえが全く感じられないのに気づき、

「え?」

と、アンちゃんは茫然とする。

「入れると思った?」

「どう、して……」

「だって、フィールの無駄でしょ? デュエルより先にリアルライフを0にする気なら別だけど」

「なら」

アンちゃんはわなわなとしながら、

「さつき攻撃名を叫んだのは」

「もちろん、アンちゃんにフィールを使わせるため」

「そんなんっ」

仕様なのか気づいてないのか、アンちゃんつてばカードの創造以外に姉のフィールを使おうとしてないからね。しかも、フィールの扱いは全くの素人。ただ莫大なフィールを手に入れて最強になった気味にいるだけの三流決闘者だ。そこを突かない手はない。

「これがプロのデュエルよ」

「あ……あつ」

ショックで呆然とするアンちゃん。しかし、すぐ何か思いだした模様で。

「そ、そうでした。と、罨カード《ギミック・ボックス》！」

ここで伏せカードか。

「このカードはプレイヤーへの戦闘ダメージが発生した時に発動する事ができます。その攻撃を無効にし、その後無効にした数値と同じ攻撃力を持つレベル8のモンスターとして特殊召喚します」

攻撃を無効にされた上、ここにきて攻撃力2800のモンスターが相手の場にも出現してしまう。

しかし、ダイソン・スファイアはオーバーレイ・ユニットを持つ限り、このカードへの攻撃を無効にできる。しかも、オーバーレイ・ユニットが無い状態で攻撃されたら、墓地のモンスター2体をオーバーレイ・ユニットに補給し、即座に攻撃無効の効果に繋がられる。

だから、このままでは幾ら高打点のモンスターを並べようとも私には傷ひとつ付かない。

(つて、何だかフラグっぽいわね)

なんて考えてしまいなから、

「ターン終了」

と、伝えた所。

「わ、私は……」

アンちゃんは、私の宣言が聞こえてないようで、茫然とした顔で辺りを見つめていた。

沙樹

LP3400

手札0

□□□□

□□□□

「《No.9 天蓋星ダイソン・スファイア(沙樹)》——「《CNo.4
0 ギミック・パペット—デビルズ・ストリングス(アン)》」

「ギミック・ボックス」□□

□□□□

アン

LP4000

手札2

「やっぱり、私は無力なのでしょう。ただ姉上様の脇役で、家の足手まといでい続けるしかできないのでしょうか？」

誰かに向けられた言葉ではない。ただ漠然と現状に絶望するアンちゃんの姿。

そして、彼女の呟きは嘆きが変わる。

「あれだけ有利な状況でデュエルしたのに！ 確実に勝てるデュエルだったのに！ いつの間にか、流れも、フィールも、何もかも鳥乃様の手の下にわたってしまった！ どうしてですか？ 私には何かを掴み取る運命がないということですかッ!!」

「だったら諦めてサレンダーする？」

私はいった。

「そうしてくれると私は助かるんだけどね。神簇を助けて依頼は達成。あなたの手に渡らない為にも金庫の中身は報酬で全部頂ければこれ以上なくスマートに全部解決でしょ」

「だ、駄目です。そんなの」

しかし、それはそれで駄々こねるアンちゃん。まあ、私がそう誘導させたんだけど。

「ならドロウしてみればいいじゃない」

すると、アンちゃんは「え？」となる。

私は続けて、

「別に努力が足りないって言ってるわけじゃないし、どつかの元プロテニス選手みたいに頑張れ頑張れ諦めるとか暑い言葉を押し付ける気もない。ただドロウするだけ。どうせ無理って気分で引いてもいいし、フィールを使っていいカードを引き当ててもいい。それ位ならできるでしょ」

「わ、私は……」

唇を震わせ、アンちゃんは眩く。そして、彼女の表情が諦めの境地に達したものになると、

「そうですね。せっかく、ことごとく私が何しても駄目だって思い知らされたんです。だったら、デッキに裏切られてもつとつと深い絶望と諦めに冒されても」

なんて、マイナスなことを言いながら “ただ” カードを引き、

「……え？」

と、なった。

彼女のデッキは応えてくれたらしい。

私は神簇さんにいった。

「神簇、悪いわねもう少し我慢できる？」

「仕方ないわね」

神簇さんは半眼でいってから、「心配しないで」と言いたげに笑みを浮かべる。

まあ、「諦めるなどは言わない」なんて言ったものの、実際の所諦めるには早すぎるのだ。

この時点でアンちゃんの手札は3枚あるのに対し私は既にゼロ。ライフだって彼女は無傷だし、ぶっちゃけちよつと私が噛みついただけで流れもアドバンテージも、まだ全然アンのほうに分がある。

「で、どうするの？」

私はいった。

「デュエル、続ける気？」
すると、

「私はデビルズ・ストリングスをリリースして《ギミック・パペット―ナイトメア》特殊召喚。このカードは私のXモンスターをリリースすることで特殊召喚できる効果を持つモンスターになります」

返事のかわりに、アンちゃんはプレイで応えた。

攻撃力3300のモンスターを使ってまで出現したのは、幾つもの人形の人形が絡まって構成されたような不気味な人形。以前《ギミック・パペット―死の木馬^{デス・トロイ}》の効果で特殊召喚され、ヘブンス・ストリ

ングスの素材になったうちの1体と同じモンスターだ。

これでレベル8が2体。再びエクシーズ召喚する気なのだろう。

「この方法で特殊召喚に成功した時、私は手札もしくは墓地から《ギミック・パペット―ナイトメア》を特殊召喚することができます」

「レベル8が3体」

墓地から出現する2体目のナイトメアを前に私はつぶやく。

「え、まさかアン」

その上、何やら神簇さんまで驚いてる模様。

「行かせて頂きますね。私は《ギミック・ボックス》と2体の《ギミック・パペット―ナイトメア》でオーバーレイ。3体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築致します」

今回何度めかの銀河の渦。3体のモンスターが霊魂になって飲み込まれると、ナンバーズを示す88の数字が浮かび上がる。

「おいでなさいませ、No. 88 玉座に座りしカラクリの鉄獅子、ギミック・パペット―デステニー・レオ！」

現れたのは、玉座に座った巨大な二足の獅子の姿。

「なんか、いままでのギミック・パペットとはどこか違うわね神簇」

「ええ」

神簇さんはうなづく。

「あのカードはアンの奥の手よ。実際、見た目だけじゃなくて効果までいままでの戦術のどれとも毛色が違うわ」

「奥の手？ 切り札じゃなくて？」

「アンのフェイバリットはジャイアントキラー。最後の切り札はデビルズ・ストリングスよ」

もしかしてアンちゃんやんはCNo以外のエクストラデッキのカードは3枚しか持ってないのかもしれない。だとすると、確かにデビルズ・ストリングスが駄目になった時点で負けたと判断してもおかしくない。

「デステニー・レオのモンスター効果。1ターンに1度、私の魔法・罠ゾーンにカードが存在しない場合に発動可能です」

きた！ アンちゃんが「その奥の手」の効果を起こしだす。

「私は、このカードのオーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、このカードにデュステニー・カウンターを1つ置きます。この効果を使用したターン、私はバトルフェイズを行いません、そして」

と、ここまで一気に喋ってから、アンちゃんは喋りつかれたように深呼吸。そして、

「このカードにカウンターが3つ乗った時、私はデュエルに勝利します」

「うわっ」

まさかの特殊勝利効果。これはやばい。

現在、私にはダイソン・スフィアが存在している。このカードのおかげでアンちゃんは高攻撃力を並べても戦闘で私を殴り倒すことが不可能な状況にあるが、逆に私も攻撃を1度《ギミック・ボックス》で止められてしまい、削りきることができずにいる。

そんな状況で私があと2ターン以内にデュステニー・レオを倒すというのは。

「ですけど」

そこへアンちゃんはいった。

「ただのデュステニー・レオでは鳥乃様を倒すことは不可能。これは貴女とのデュエルでしつかり学ばせて頂きました」

つまり、私視点だと実はピンチだというのにアンちゃんは私を評価した結果さらに行動に出るというらしい。

「そこで。さつき鳥乃様のおかげで引き当てたカードを使わせて頂きます」

と、アンちゃんはデュエルディスクにカードを叩きつける。とはいっても、怒ってるわけでも、虚勢を張ってるわけでも、もちろん私を煽ってる様子でもない。

ただ必死なのだ。

「私は《RUM—エージェント・カオス・フォース》を発動します」

直後。

『えっ』

私と神簇さんは同時に驚く。

「鳥乃、今度は貴女も覚悟して！」

神簇さんが余裕なく叫んだ。

「持ってなかったのよ。アンはデステニー・レオのカオス形態を。だから、何が出てくるのか私も分からないわ」

「えっ」

つまり、この先は神簇さんさえ知らない。いや、むしろアンちゃん本人でさえ未知の領域。

「スキル《エクシースチエンジ・マイスター》の効果」

手を掲げ、アンちゃんがいうとやはり機械装置が怪しく光る。しかし、今回は今までの半分ほどしか怪しく光らず、代わりに掲げたアンちゃんの手からもフィールドの光が。

「うっ……ああっ」

実際、神簇さんも苦しみ声をあげるも過去2回ほど悶える様子はなく、アンちゃんの頭上でふたりの光が混ざり合い、1枚のカードを創造しアンちゃんの手元へと降りてくる。

アンちゃんはカードを掴み、ディスクに置いた。

「ランクアップ・エクシースチエンジ！ いきます、C N O . 8 8 !

私の持つ負のフィールドよ！ 姉上様の正なるフィールドと混ざり、カラクリの鉄獅子に全てを滅ぼす混沌なる災厄を刻め！ デイザスター・レオ！」

こうしてフィールドに表れたモンスターは、球状の爆弾の上に乗った翼を持つ黄金の獅子。その攻撃力は3500。

「デイザスター・レオのモンスター効果。このカードのオーバーレイユニットをひとつ取り除いて、相手に1000ポイントのダメージを与えます」

アンちゃんが宣言すると、デイザスター・レオの口から炎が溜めこまれる。

「バーン効果。なるほど」

互いに拮抗してる現状を考えるとこれ以上ないベストな創造だ。

「この効果でしたら直接攻撃を貴女に与えられるはずです。マキシマム・カラミティー！」

効果名の宣言。同時にデイズター・レオから激しい炎のブレスが吐き出される。

防ぐ手はない。炎は広範囲に放たれ避ける事もできない。諦めて私はフィールのバリアを張ってやり過ぎす。けど、全部は防ぎきれない。

「あ……ぐ、あ……」

直火焼きは防げても、バリア超しの熱だけで肉焼く痛みが全身を襲う。必死に意識しないとフィールの出力が弱まってしまいそうだ。

程なくして炎は弱まる。耐え切った。

沙樹 LP3400↓2400

「はあっ、はあっ」

膝をつき、私は荒く息を吐く。

「まだ、終わっておりません」

アンちゃんはいった。

「鳥乃様のライフが2000以下かつデイズター・レオのオーバーレイ・ユニットが0の時に私のターンが終了される場合、私はデュエルに勝利します」

「その効果って、デステニー・レオの」

忘れてた。このカードはデステニー・レオのカオス態なのだから、特殊勝利効果を強化した形で受け継いでてもおかしくないじゃないか。

「残念ながらデイズター・レオのオーバーレイ・ユニットはまだ2つありますけど、これで鳥乃様の未来は焼かれて屈するか、特殊勝利に屈するか、ふたつにひとつになります。じっくり追い詰めてさしあげますから、ごゆっくり考えくださいませ。私はこれでターンを終了します」

そんな言葉を、さつきまでの愉悦で恍惚な顔ではなく、必死な形相で叫ぶアンちゃん。じっくりなんて冗談、いまのアンちゃんに相手をしたぶって愉しむ余裕なんてない。本気で私のリアルライフを焼き切るつもりでフィールを行使してるのだ。

だから私は、ここは真正面に少年漫画みたいなノリで返す。

「どつちもお断りよ。ディザスター・レオを倒して、デュエルに勝利してみせるから。私のターン、ドロー」

叫びながらカードを引――。

「させません」

アンちゃんが叫び、手を突きだす。そこからフィールの波が私を襲い、ドローカードが事故る。

「ふふ、引かせませんよ逆転のカードなんて」

だから真面目な顔でDS発言しないでアンちゃん。ギャップで濡れるから。

「なら、ダイソン・スフィアの効果を発動。オーバーレイ・ユニットを1つ使い、アンちゃんに直接攻撃」

アン LP4000→1200

その巨大なモンスターで攻撃を行うも、フィールを使ってはいないのでアンちゃんに傷ひとつ入らない。もつとも、アンちゃん自身も今回は無駄な防御にフィールを使うことはしなかった。しかも油断ではなく、一応に両腕を突き出して防衛体制を取り、五感を総動員し、ビジョンがリアル化してるかを一瞬で嗅ぎ分けた様子。何でも器用にこなすとは聞いたけど、これ程とは。

「私はこれでターン終了」

「私のターン、ドローします」

一息つかせる暇なくアンちゃんのターン。

「もちろん、オーバーレイ・ユニットを使ってディザスター・レオの効果。マキシマム・カラミティー！」

そして、まだ肌に痛みが残った状態で受ける2度目の炎。

沙樹 LP2400→1400

「鳥乃様のライフは2000以下ですけど、ディザスター・レオのオーバーレイ・ユニットは残ってる以上特殊勝利にはなりません、カードを1枚セットしてターンを終了します」

とはいえ、次のアンちゃんのターンがまわってきたら、そろそろ炎を浴びて気絶するパターンも、特殊勝利効果で負けるパターンも両方ありえる。

「そういえばアンちゃん、忘れてないよね?」

そんな状況の中、全身から立ち上る煙を払い私はいった。

「? 何を、でしょうか」

と、アンちゃん。

「依頼よ」

「依頼?」

反応したのは神簇さんだ。

「依頼人が姉だから、もしもの時は自分は切り捨てられる。だから、姉の依頼とは別に護衛の依頼をした。忘れてるとは言わせないけど?」
「ちよつと待って、そんなの私聞いてないわよ。それに二重依頼でしよ」

と、叫ぶ神簇さんに私は、

「まあ、本来御法度だけど。アンちゃんを安心させる為に契約通り臨機応変に対応させて貰ったわ」

「うっ」

言い返せないらしい。

「あ、あんなの無効です!」

代わりに反応したのはアンちゃん。

「鳥乃様は、護るといいながら契約違反で護らなかつたではないですか! 姉上様が襲撃されたときに」

「実は護つてたのよね」

私は返す。

「監視用の《幻獣機テザーウルフ》、迎撃用の《万能地雷グレイモヤ》、アンちゃんを護る為の《安全地帯》に緊急避難用の《強制脱出装置》、セキュリティに《ギャクタン》。それでも突破されたらすぐアンちゃんの下に向かうよう《ワーム・ホール》も抜かりなく」

「え……」

本気で驚くアンちゃん。

「すでに手を打ってある」ってあの言葉、嘘じゃなかったのですか?」

「逆にあそこで嘘つく理由がどこにあるのって話。神簇の契約アン

ちゃんの契約どつちから考えても、神簇のためにアンちゃんを危険に晒していいはずないでしょ」

「そ、それでも私が危険に晒されたら」

「だから《ワーム・ホール》も入れた」

「っ」

今度こそアンちゃんは押し黙る。

「で、契約の報酬だけど」

私にはやりと笑い、

「確か依頼料はアンちゃんの体だったよね？」

「は？ 待ちなさい鳥乃沙樹！」

姉が反応しムキチャーしてるけど無視。

「特に、無事にアンちゃんを護りきって事件を解決したら改めてアンちゃんは私の物になる。だったよね？」

「っ、そ……そう、だったと思います」

どことなく、顔を青くするアンちゃん。

「そして現状。まず私は一度も攻撃にフィールを使つてないからアンちゃんを危険に晒してない。そこはOK？」

「はい。私は無傷です」

「次、事件の解決つまり黒幕だったアンちゃん本人を止め、神簇を救出。これで依頼は達成とみていいのよね？」

「で……できるのでしたら」

そして、一歩また一歩と後ずさるアンちゃん。

「そっ」

直後、私のドロウする手が闇色のフィールに包まれる。

「なら行かせて貰うわ。私のターン、ドロウフェイズにスキル《ダークドロウ》を使用」

「こ、ここでスキルを!?!」

驚くアンちゃん。

「このスキルはドロウ時に発動し、ドロウするカードをデッキの内外問わず別のカードに書き換える効果。暗き力はドロウカードをも闇に染める! 《ダークドロウ》!」

口上と共に私はカードを1枚引き抜き、同時に私の中からファイルがごっそり抜け落ちた。《ダークドロワー》を使うには、某漫画というメロリア並のファイルを消費してしまうのだ。

結果、不覚にも私のファイルはこれでゼロに。

それでもつて、ここまでして引き当てたカードはというと。

「速攻魔法 《ダブル・サイクロン》！」

残念ながらOCGで既に存在するカードだった。もつとも、いま私のデッキにもサイドデッキにも投入してないカードではあるけど。

「この効果でアンちゃんの伏せカードと私の《マーシャリング・フィールド》を破壊」

お互いのフィールドに1つずつ竜巻が発生すると、お互いにカードが1枚ずつ破壊されていく。彼女の伏せカードは《安全地帯》。偶然にもさつき私が「アンちゃんを護るカード」に挙げてた1枚だった。「そして、《マーシャリング・フィールド》の効果。このカードが破壊されたことで、デッキから《RUM―アージエント・カオス・フォース》を手札に加える」

「えっ」「あっ」

神簇姉妹がそれぞれ驚く。

「ま、そんなわけで私も使わせて貰うわ。魔法カード発動 《RUM―アージエント・カオス・フォース》！」

アンちゃんが今回のデュエルで3枚も使ったRUM魔法カードを、今度は私が使用。このデュエル実に4回もこのカードが発動されたことになる。

「この効果で私は《No. 9 天蓋星ダイソン・スフィア》1体でオーバレイ・ネットワークを再構築。ランクアップ・エクシーズチェンジ！ 脈動せよCNo. 9！ 冒涔なる科学の力、未来のスフィアに隠されし禁断の扉を開放せよ。森羅万象を取り込む混沌にして不吉の星となれ！ 天蓋妖星カオス・ダイソン・スフィア！」

天井に銀河の渦が出現すると、ダイソン・スフィアが霊魂となって取り込まれ、花のような形の宇宙建造物へと姿を変える。その攻撃力は3600。

「カオス・ダイソン・スファイアのモンスタースター効果。1ターンに1度、このカードが持っているオーバレイ・ユニット1つにつき300ダメージを与える。さらにもう1つ。このカードがダイソン・スファイアをオーバレイ・ユニットに所有している場合、任意の数だけオーバレイ・ユニットを取り除き、その数×800ダメージ。私はオーバレイ・ユニットを1つ取り除き、300ダメージと800ダメージ、合計にして1100ダメージを与えるわ」

まず最初にスファイアの中央からの拡散レーザー。続けてカオス・ダイソン・スファイア全身から放たれる闇色の光の雨。2つのバーン効果がアンちゃんを襲う。当然フィールドを注いでない（実は注ぎようもない）のでリアルダメージは入らない。とはいえ、

アン LP1200↓900↓100
デュエルのなライフポイントは、これで風前の灯にもっとも。

「終わった、わね」
神簇さんはいった。

「カオス・ダイソン・スファイアの攻撃力は3600、対してデザスター・レオの攻撃力は3500。ここで鳥乃が攻撃すれば、差分のダメージがアンに入って、ジャストキルが成立するわ」

「……はい」
アンちゃんもうなずく。

「いまの私には、手札・フィールド・墓地ともにカオス・ダイソン・スファイアの攻撃を防ぐ手立ては御座いません。私の負けです」

デッキに手を当てアンちゃんはいった。これはサレンダーを意味する。

『対戦相手が降参しようとしています』

デュエルディスクのタブレットに以上のメッセージが表示された。私は画面を操作し、そのサレンダーを受け入れた。

アン LP100↓0

ソリッドビジョンが、アンちゃんの手前で「LOSE」と表示される。同時に、機械装置が神簇さんの拘束を解除。その場で落下した。

「きやつ」

「神簇っ」

私は慌てて飛び掛かり、アンちゃんの横を抜け、床にダイビングしながら神簇さんをキャッチ。そのまま腕から装置に衝突。骨が折れたかとも思うくらい激痛を受けたが、なんとか彼女に傷はない。

「っ、神簇、大丈夫？」

「え、ええ」

神簇さんはうなづく。

「結局、終わってみれば姉上様から何も奪えず終了、ですか」

アンちゃんがいった。現在の位置からは彼女の顔はうかがえないが、

「やつぱり、私はこういう運命みたいです。姉に友人にあらゆる人々に従順に従い、家に溜まった負の捌け口に使われ、たまに他者が愉悦するための計になって、自由もなく、地位もなく、籠の鳥生活を強いられるのがお似合いな、人間未満。——鳥乃様、姉上様。完敗でした」

ここぞとばかりに自己卑下に浸るアンちゃんは、悔しさと落胆と、だけど「やりきった」と感じさせる顔をしているように見えた。

アンちゃんは私たちに背を向けたままいった。

「姉上様、改めて当主の座はお譲りします。鳥乃様、依頼通り私のことは性奴隷にでもサンドバッグにでも、お好きなように使い下さい」
「それがさ」

そんな彼女に、私はいった。

「そうともいえないって話なのよ」「そうにもいかないのよ」

いや、なぜか神簇さんもだった。

『えっ？』

そして私と神簇さん、互いが互いに驚き、顔を見合う。

「どういうことですか？」

アンちゃんが私たちに振り返る。涙を押し殺してる以外は、大方想像通りの表情だった。

「じゃあまず私から」

痛みの残る腕をあげ、私はいった。

「いや実はさっきのデュエルんだけど、勝つたには勝ったけど、任務って視点で見ると事実上の相打ちなわけよ」

「え？」

「うん、さっきの《ダーク・ドロ》でフィール全部使っちゃつて。いまなら銃一本あれば私の命イチコロなのよ、正直な所万事休す」
「ちよっ」

驚く神簇さん。アンちゃんも啞然としている。

——実は、増田、ヒロちゃん、永上さんの三人はデュエルに勝利しフィールも残してるのだけど、この時点で私は味方の存在をすっかり忘れてた。

「で、では姉上様は」

アンちゃんが訊ねる。神簇はいった。

「あのねアン。貴女、私から全て奪いたいって言ってたけど、もう全部ちゃんと奪ってるのよ」

「私が、姉上様から……もっ？」

信じられなそうに聞き返すアンちゃん。神簇さんは「ええ」といい、「あれだけ沢山のウチの関係者を引き抜いた時点で、私では当主なんて務まらないって痛いほど思い知らされたわ。その上あれだけされれば地位も信頼も能力も貴女のおかげでガツタガタよ」

「そ、そんなことは。私はまだ」

「まだ、なに？……なにを奪い足りないの？」

段々、神簇さんの瞳から力が抜けていく。

「その強さです！」

アンちゃんは叫んだ。いや、嘆いた。

「この状況にあってもまだ立ち直ろうとする強さです。その強さがある限り、姉上様はまた努力されて、すぐに私を超えてくるじゃないですか！ 私は知ってるんです。数日あれば、私が引き抜いた使用人も全て味方につけ、姉上様は何事もなかったかのように立派に当主をしていられるって」

「……そうっ」

対し神簇さんは、ただ微笑みを浮かべるだけだった。

「何ですか！ それは余裕の笑みですか？ やっぱり、姉上様も内心は私を馬鹿につ」

憤慨するアンちゃん。しかし神簇さんは首を横に振るだけ。

そこへ。

「本当にできちゃうと思いますか？」

奥からヒロちゃんが歩いてきた。デュエルで苦戦したのか、割とぼろぼろだ。

「え？」

と、振り返るアンちゃんに、ヒロちゃんは続けて。

「お嬢様は完全燃焼しちゃったんですよ。全てを失い、精魂尽き果て、絶望に打ちひしがれながら、残された執念に今日まで突き動かされてきたんです。……それが、たったいま終わったんです」

「それって」

「はい。先ほどアンさんがされてた顔と同じ理由になります。……そして」

ヒロちゃんは続けていった。

「残ったのは希望のない世界。これから琥珀お嬢様が辿る道は、万事尽き、立ち上がる心もなく、無力に甘え他者を嫉む生活。それが、これ程なくぬるま湯で心地よい日々」

「ご、御冗談をヒロさん」

アンちゃんは笑った。顔を引きつらせ、唇を震わせ、

「それって。私のことでは御座いませんか？」

「その通りですよ。良かったですねアンお嬢様。明日からの琥珀お嬢様は昨日までのアンお嬢様です」

どうやら、ヒロちゃんは全て見据えてるらしい。さすが本家の遣いにして忍者の一族。

「姉上様……」

再び、アンちゃんは姉の様子をうかがう。神簇さんは依然として微笑み浮かべるままだ。

「そんなはずはありません！」

アンちゃんは叫んだ。

「あんなに強かった姉上様が、そんな簡単に堕ちるなんてありえません！ 私の計画だって、何もかもが上手くいっても、恐らくその顔は見られないって想定ですのに！」

「だから言ったじゃない。すでにアンは私から何もかも奪ってるって」

ここで、神簇さんが口を開いた。

「そもそもね、貴女が滅茶苦茶してくれたおかげで神簇の家は地位も名誉も失って没落同然なのよ。神簇家のブランドに修復不可能な傷がついたから外からの信用も失ったし、内部に至っては、こちらから言うまでもないでしょ？」

「ですけど、まだ財産があるじゃないですか」

「事件の損害と修繕で借金が確定してるわ」

「えっ」

驚くアンちゃん、しかし当然ではある。

「アンティーク類などの現品は可能な限り本家に引き取って貰って残りは質屋で換金になるわ。それでも人も死んでるから多分全然足りないでしょうね。だから、先にハングドへの報酬や残った使用人の退職金にまわしてから、アンにはどこか安全な所に匿って貰って、私は家を売ってできた金で夜逃げするしかなかったのよ。——たとえ今日この戦いに勝っても負けても」

「そんな。……私、家がそこまで悲惨な事になってるなんて考えても」「人殺しておいて何よ今更」

なんて笑う神簇さん。痛々しい、怒る気力も叱る余裕もないのだ。いまはただただ、アンさえ無事ならそれでいい。そんな悟りを開いてるようにも映る。

「もつとも、その『安全な所』もセバスチャンか先生を頼りにするつもりだったから、もう無いのだけど。……その辺はアンが鳥乃と二重依頼したのを幸と取るしかないわね。鳥乃、アンをよろしく」

まさか、あの報酬内容がこんな形で姉公認になるなんて。

「ま、待ってください。やっぱりおかしく思います」

それでも、アンちゃんはいう。

「暴君で権力を使つて何でも解決した姉上様が、それでいて努力でも何でも乗り越えられた姉上様が、どうしてこの程度を解決できないのですか？　姉上様は、やろうと思えば地球を掌で転がせるのではないのですか？　昔は転がして遊んでたではないのですか？」

瞳で懇願するアンちゃんに、

「アン……。そうね、確かに昔の私は地球だって掌で転がせられる。そう信じてたわ」

神簇さんはいった。

「けど現実には、当時も今もそんなはずないじゃない。昔の私だって、もし祖父にたてついたら、もしよそ様の家に火を放ったら、もし万引きでもしたら、もし飛行機で暴れて緊急着陸でもさせたら、もし人を殺したら、きつと私は許されなかった。運が良かったのよ、それをしなかった私は」

そして、そつとアンちゃんを抱きしめる。

「けど、そんな事もう関係ないわね」

「え？　そ、そんな事つて」

アンちゃんは聞き返すも、神簇さんは触れず、

「色々あつたけど、私がここまで頑張ってきたのはアンの為だった。けど、足掻いて……。耐えて、努力して。一矢報いようとしてきた先にあつたのは、先生とセバスチヤンの死、そして何より大切だったアンが、実は黒幕だつたつていう真実」

「姉上様……」

「私にはもう這い上がる力なんて残つてないわ。ただ、貴女がここまですぐ強くなれた。よくここまでやり遂げた。それだけが私に残つた全て。……。アン、貴女は私の誇りよ」

すると、

「ふ……。ふふ、うふふ……。あはははハハハハ」

突然、アンちゃんが笑い出した。もちろん、それは歓喜によるものではなく、哀しみのそれ。

そして、アンちゃんは語る。

「不思議ですね。ずっと、ずっと姉が潰れる瞬間を愉しみにしてたのに。……いま私、とても辛いんです。求めてた以上に最高の結末なのに、こんな結末見なくなかったって思ってしまうんです。それに、『どうしてですか？ 先生、セバスチャン』って訊ねそうになるんですよ。おかしいですよね？ ふたりとも私のせいで死んだのに」

結果だけいえば、前回に引き続き今回も、デュエルには勝った、黒幕も倒した、だけど護衛は失敗したっていう後味の悪い結果に終わってしまった。

抱き合いながら、疲れ切った顔で涙を流す姉妹を前に、私は何もいえなかった。

——それから数日後。

「はい、これでいいかしら」

神簇さんは私の渡した書類に印鑑を押し、

「了解。これで今回の依頼は無事満了ね」

私はそれをファイルに戻す。

現在、私は神簇家の応接間にいる。椅子の隣にはバッグが幾つか。任務の為、ずっと神簇家に滞在してた私だけど、今日をもって慣れ始めた神簇家を後にする予定になっている。

結局。

事件に対するハングドの手回し、現場に居合わせた永上さん（一応警察）の証言、そして本家のバックアップもあつて神簇家はギリギリの所で没落を免れた。

使用人も半数は辞めていったけど、住み込みで帰る家もない人たちが「クビにしないで」と神簇家の残留を希望した為、いまでも家は何とか機能している。

ヒロちゃんは、最年少の使用人にしてメイド長に就任。セバスチャンの抜けた穴を埋めるべくひーひー言いながら奮闘中だ。

「けど、良かったの？」

と、神簇さん。

「ん、なにが？」

「報酬よ。金庫の中身が丸々無事だったというのに、貴女ったら殆ど持ってたかなかったじゃない」

「え、そう？　これでもお言葉に甘えて相場以上に持ってたつもりだけど」

今回の依頼。報酬はアンちゃんが盗みだした金庫の中身ということになっていた。金庫の中にはアンティークの品々を所有する権利書も含まれており、神簇家の財産なら没落するまで奪い取れるような状況だった。

こつちも商売なので、毎回無報酬というわけにはいかない。特に今回は増田にもかなり動いて貰ったので、神簇の財政を圧迫し過ぎない程度に欲張った金額を頂戴したわけだけど。

「無欲過ぎるわよ。アンの依頼料も払うっていつてるんだから、あの増田って方と併せて相場の4倍取るくらいしなさいよ」

と、当の当主様はこんな調子である。そんな思考回路してたらセバスチャンが不安に思うのも無理ない。その辺はアンちゃんのほうがまだしつかりしてそうだしね。

「あーもう分かった分かった。それなら神簇家が安定してきたら、残りの2・5を取り立てに行くから」

「本当ね？」

「本当本当」

「なら、いいわ」

ようやく収まってくれた神簇さん。……いや、もう地こころのなかの文でも神簇と呼び捨てでいいか。ビジネスの繋がりも終わって、今日からは昔の悪友に戻るのだから。

ところで。

もう言うまでもないけど、神簇はアンちゃん化を免れた。彼女には、まだひとつだけ希望が残されてて、それを立ち上がる理由に今必死に傷ついた心の療養中なのだ。

もちろん、その「希望」というのは、

「失礼致します」

と、たつたいま応接間に入ってきたアンちゃんである。

ちなみに彼女もハンドの手回しによって襲撃犯の黒幕ではないことになっている。もちろん、セバスチャンを殺した犯人も彼女以外ということになり、法律上では問題なく無罪に落ち着いている。

もつとも、当然ながら、これで彼女に罪がなくなったわけではない事は再三伝えてあるし、本家の下にはいつでも真実を公開できるだけの証拠が保管済。

「姉上様、鳥乃さん。お茶が入りました」

そうそう。黒幕として対立してた間、再び私を「様」で呼んでたアンちゃんだけど、事件後はまた「さん」付けで呼んでくれるようになった。

「ありがとう、アン。机の上に置いてくれる？」

「はい」

姉に従い、〃以前と変わらず〃アンはお茶を配る。

「あらっ？」

早速一口飲み、姉はつぶやいた。

「このお茶、以前より味が落ちてるような」

「あ」

すると、アンちゃんはすまなそうに、

「実は、今日からはいつもの茶葉ではなく安物を使うことに致しまして」

「え、どうして？」

「勿論、節約の為になります」

アンちゃんはいった。

「これからは身近な所から贅沢を取っ払おうと思ひまして。とはいえ食材はスーパーだと幾ら安くても粗悪品ですので、今後は形が悪くて根下がりしたものを中心に取り寄せてコストカット。それと、残念ながらシエフの方々が昨日を最後に全員辞められましたので、あえて新しいシエフを雇わず屋敷の皆で楽しく当番制にしようと思っております」

うわあお。しかも私のお茶はしっかり「いつものお茶」な辺り、しっかりしている。

すると神簇は慌てて、

「え、ちよつと待って。屋敷の皆で当番制つてことは、もしかして」
「はい」

アンちゃんはわざとらしくおっとりした笑みを浮かべ。

「もちろん、私も姉上様も当番に参加致します」

「ま、待ってよ！ 私、家事は苦手」

「努力は姉上様の領分です。頑張ってください」

「そんなっ！」

ガンンつて顔する神簇に、アンちゃんは更に追い打ち。

「あ、私は昨日一昨日と二日間ほど料理長から師事を受けてきました」
「ずるいー！」

「うふふっ」

これはある意味で雨降って地固まるとでもいうのだろうか。

事件の前後で比較して、アンちゃんは一見前の性格に戻ったように見えて遠慮がなくなつた。やさしい笑みのまま姉を転がすことを覚えた気がする。——それができる程度には、ふたりの間に壁がなくなつたのだろう。

「ねえ、神簇」

と、私もそんな空気の恩恵に預かつてみた。

「な、なに？」

「あなたが療養を名目に呆けてる間に、こっちの当主はずいぶん仕事に精出してらみたいだけど」

「……………」

「いいの？ このままだと本当に今度こそ元当主って言われるかもね」

そうそう。この度、アンちゃんは正式に新当主に就任した。厳密には、琥珀とアンふたりで当主という1つの席に座ってる形になるけど。

これは、ヒロちゃんの提案である。つまりは、

『確かに、琥珀お嬢様は不器用過ぎて誠実過ぎて当主には駄目駄目ですけど、アンお嬢様も継続が苦手でマイナス思考癖つてそれも当主と

して駄目じゃないですか?』

とか、いずれ誰かが言わないといけない爆弾をさらつと投下なされたのだ。終いには『細かい調節は私がやっちゃいますから、ふたりで当主されるのはどうですか?』と。実際、ものの見事に片方の短所はもう片方の長所みたいな姉妹だから、二度とふたりが対立しないのを前提に考えれば、これ以上ない程の名案だった。

「し、仕方ないじゃない。手回しとか仕事の早さとか、そういう所でア
ンには敵わないんだから。……いくら努力しても」

『え?』

私とアンが驚き眩く。ここで初めて、姉側にも「いくら頑張っても敵わない」というコンプレックスがあつた事実が発覚したのである。

「そ、それはそうとして!」

顔を真っ赤に神簇はいい、

「鳥乃、貴女実はずっと無理してたんじゃないの?」

突然そんなことを言い出した。

「ちよつと気になつて、ここ数回の貴女のハンド内の成績を調べてみたのよ」

え、どうしてそんな事調べられるの?」

「そしたら、前回は今回の依頼とまるでそっくりな名目上満了の實質グレイゾーン、その更に前は作戦中の交戦に負け重傷を受けての任務失敗」

「……だから?」

自分の恥部を覗かれた気がして、つい私が口調が強くなつてしま
う。直後、神簇の目が「やっぱり」となる。

(やばっ)

墓穴を掘つた。しかし、既にもう遅い。

「貴女が私に連絡入れたの、私が依頼して数日後だったでしょ。ずっと、単純に優先順位が下で他の依頼優先してたのだと思つてたけど……もしかして」

「大正解」

神簇に言われる前に、私は自分から打ち明けることにした。

「ついでに言うとき、さっきの『実質グレーゾーン』だった任務、依頼人が知人だったのよ」

「えっ」

そこまでは調べてなかったのだろう、神簇は驚く。

「だから、それもあつて余計に今回の依頼には消極的だったわ。護りきれぬ自信とか全然残ってなかったし、実際護れなかったものね」

その言葉を聞き、そこまで追い込んだ本人であるアンちゃんの顔が沈む。

……この状況でいうのは、かなりきついけど。

「で、『交戦に負け重傷』のほうだけど、実はそっちもそっちで相手は『黒山羊の実』よ」

「えっ」

今度はアンちゃんが驚く。

事件中に彼女が雇った黒コートの男は、『黒山羊の実』のエージェントであることが発覚している。つまり、アンちゃん自身も組織に席を置いてる可能性が高いのだ。

「もしかして、その相手とはミストラランですか？」

しかもピンポイントでその名を。

「正解」

するとアンちゃんは、

「やっぱり、あのエージェントは鳥乃さんでしたか」

「え、もしかしてあの場にいたの？」

「いいえ」

アンちゃんは首を振り、

「私を組織に誘ってくれた幹部の方からお聞きしました。何でもミストラランは、鳥乃さんが発したあるワードを聞き始末するのを辞めた」と

「あるワード？」

あの時、何か言っただけ？

それはともかくとして、これでアンちゃんが『黒山羊の実』の人間であることは確定してしまった。こんな身近に。

「まあ、それはまた後に話すとして。それでも、今回この依頼を受けようと思ったのは。……まあ、またかと思うかもしれないけど、原因は梓の為だったのよ」

「徳光さんが？」

と、反応する神簇に私は、

「梓が銃声の噂を聞いてちゃってね。だから、近所に怯えたりしないようにそういう種は早めに積んでおかないとって。……ま、こういう話は本来依頼人にすべきじゃないけど、悪友相手だし問題ないわよね」

「悪友……」

「でしょ、昔もいまも。だから神簇にだけは終わったことをいつまでも心配される筋合いはないってこと」

「……ああもう、そうくるのね貴女は。全くもう」

助けになりたい、とか何か言うつもりだったのだろう。私を心配するあまりに。だから私は言われる前に丁重にお断りした。これを本当に丁重と捉えるかは人それぞれだけど。

「もつとも、アンちゃんも別だからね。何だったら、ベッドの上でその大きなお饅頭に顔埋めて甘えてみたいって話だけど」

「駄目に決まってるでしょうがあッ!!」

机をバンと叩き、ヒステリックに怒る神簇。ま、そんな感じで余計な心配する気は失せたでしょ。

神簇が脱力混じりにいった。

「まあいいわ。私もまだボロボロだもの、本当なら鳥乃に構ってられる余裕なんてないんだったわ」

その言葉に私は、

「奇遇ね。私もボロボロだから、依頼じゃないのにこれ以上あなたたちの面倒見るのはお断りよ」

と、返し。

「くすっ」

「ふふっ」

ふたりして変な笑いを漏らす。

「あ、姉上様？ 鳥乃さん？」

いまの私といまの神簇。

その独特の距離感と信頼感に、アンちゃんがひとり困惑する中、

「鳥乃 沙樹。勝負よ、どちらが先にボロボロから脱出するか」

「望む所よ、神簇。恥垢洗って待機してて頂戴」

私たちはハイタッチするのだった。

MISSION12ータキオン・ドラゴン大勝利！
希望の未来へレディ・ゴーツ！！

私の名前は鳥乃トリの沙樹さき。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「Eカップ以上のおっぱいに顔を埋めて一日怠慢に過ごしたい！」

「はい 《ハンマー・シユート》 《ハンマー・シユート》 さらにもう一回 《ハンマー・シユート》」

神籐家を後にした当日の朝。私は教室でやっぱり梓のハンマーを受けた。

しかも今回は3連発。もうメメタアなんて言ってもらえない。

マイエンジェル梓は満面の笑みで、

「そのEカップ以上のって、絶対アンちゃんのこと言ってるよね？」

「な、何でわか——」

はい4発目入りましたー。

「駄目だよー。アンちゃんは私の友だちだから」

最早本当に動けない私を見下ろし、梓はハンマーを担いでいった。

「あ、あれ？ MISSION8、9参照 猫俣さんとMISSION10参照 セバスチャンが見える。久しぶり、元気してる？」

私は生死の境で過去の犠牲者と再会する。そこへ。

「失礼します。鳥乃先輩はいらっしゃいます……」

木更ちゃんがやってきたらしく、いまの私を見て声が止まった。

昼休み。私は改めて木更ちゃんと時間を取り、先に昼食を終えてから人通りの少ない校舎裏に来ていた。

「え、それ本当？」

「はい」

木更ちゃんはいった。曰く、彼女が登校する寸前に事務所から某ゲイ牧師より連絡が入ったらしい。どうやら組織内で木更ちゃん及び《アポクリフト・カーネル》が完全にターゲットから外れ、それどころか上から直接「彼女に危害を加えないように」と指示が入ったの

だそう。

つまり、その話が真実なら今日を最後に木更ちゃんは事務所を出ることになる。元々彼女は匿ってもらう為に住み込んでたのだから。

「まだ事実確認しなくちゃいけないけど、良かったじゃない」

「はい」

嬉しそうに、しかしちよつとだけ寂しそうに木更ちゃんは無言でうなずく。

「でも、これで皆さんとお別れなんですネ」

そんな木更ちゃんに私は、

「また手伝いに行けばいいじゃない」

「え？」

「木更ちゃんが手伝ってくれて鈴音さんもアシスタントも助かってたみたいだし、木更ちゃんが帰っちゃうのって案外あそこにも痛手なんじゃないと思うのよね。そんなわけで、明日からはアルバイトとして来てくれるって言えばみんな大喜びじゃないのかなって」

「それができれば嬉しいんですけど」

木更ちゃんは、いつもの微笑み顔に憂いを覗かせ、

「いいのでしょうか？ 私、未だ簡単なお手伝いしかできませんでしたから」

「まあ私には決定権はないけど、考えてみてよ。雑用に掃除それと給湯とか、鈴音さんしかやろうとしないし、まともに自炊できるのトップのおふたりだけだから、木更ちゃん消えた後どうなると思う？」

言われて木更ちゃんは想像し、微妙な顔をみせる。

「ね。あそこに自分が必要って認識できた？」

「は、はい」

苦笑いしながら木更ちゃんという。良かった、これで木更ちゃん事務所に残ってくれる。まだ夜這い成功してないのに逃がしたくはないからね。

「じゃ、決定ね。私も放課後すぐスタジオに向かうから、一緒に伝えるって話でOK？」

「ありがとうございます、鳥乃先輩」

木更ちゃんはぺこりと頭を下げた。

放課後。

ふたりに事務所に顔を出してみると、そこは準備中のパーティ会場だった。

「ちつす、お疲れ」

出迎えたのは高村司令だった。しかも黒のライダースーツの上にエプロンなんていう突っ込み所しかない格好で。

「あの、高村さんその格好は」

木更ちゃんが訊ねると、

「ん？ 見て分からない？ 飯作ってるのよ飯」

と、司令。いやそれはわかるけど、私たちが言いたいのはそうじゃなくって。

「と、とてもお似合いです高村さん」

って木更ちゃん、この子ゴマすりだした、ずるっ！

「サンキュ」

司令はいつてから、

「まあ、そんなわけで今日は木更の送別会を開くことにしたから。鳥乃、きて早速だけど手伝いよろ」

「え？」

「そこに董がいるからフロアの装飾に入って？ 開始は18時だからそれまでには終わらせる感じで」

「ちよっ、待っ」

「それと増田がアンタに用あるみたいだから、先にいつもの部屋に顔出しといて。じゃ、そういうことで」

「あの……」

私がおか言おうとする前に、司令は一方的に連絡を伝えてしまう。

「高村さん、手伝います」

そこへ木更ちゃんがついて行こうとするも、

「今日の主役が手伝ってどうするのよ。アンタは部屋で休んでおいで、荷造りだってあるだろうしさ」

「あ……」

「そうそう鳥乃はこき使つとくから襲いに行く暇ないだろうけど万一あつたら遠慮なく《ハンマー・シユート》なり防犯ブザーなりしして」

と、木更ちゃんも今後のことを相談できず。司令は忙しそうに厨房へと向かっていき、

「あ。鈴音、これ隠し味に醤油小さじ1加えると美味しくなるわ多分」
「わかりましたわ」

なんて会話が聞こえてきた。意外と高村司令つて鈴音さんより料理上手なのよね。鈴音さんの料理スキルが「普通に食べれる」止まりというのもあるけど。

「なんだか言い出せない空気になっちゃったわね」

「そ、そうですね」

木更ちゃんは困った笑みを浮かべる。彼女の為にみんなここまでしてくれてるのだ。嬉しくないはずがない。そこがなまじ困った所で、

「やっぱり、私これで最後にします。ここまで盛大に見送って頂いたのですから、私もそのお気持ちを汲みたいと思います」

なんて木更ちゃんも木更ちゃん決意を固めちゃう。とはいえ、私も下の欲求のため逃がす気は毛頭ないので、

「まあ、呼ばれてるみたいだから私も一度増田に顔出してくるわね。ついでに一応この事伝えてはおくから」

「ありがとうございます」

と、木更ちゃんは自分の部屋へ戻る。恐らくまず着替えだろうから覗こうと思っただけど、グヘへと一歩足を踏み出した途端、周囲の不特定多数から無言の威圧をかけられたので、諦めて私は、いつもの場所“こと資料室へと足を運んだ。

引き戸代わりの移動棚の先に、今日も増田はパソコンに向き合ってた。画面を覗くと、この日はエロゲではなくちゃんと仕事中的の様子だった。

「鳥乃か、おかえり」

私に気づいた増田は、椅子に座ったままこちらへ向き合う。

「ただいま。で、用事って聞いたんだけど。なに？」

「ああ」

増田は横目でパソコンのキーを打ちながら、

「実は昼頃だったかな、君を指名して依頼が一件入ったんだ」

「私指名で？」

「依頼主は脳筋だ」

「永上さんから？」

「この脳筋＝警視庁特捜課の永上ながみ 門子かどこさんで通じてしまう現状もどうかとは思いますが、実際に正解だったらしく増田は続けて、

「本日19時頃、市内M地区で『黒山羊の実』による集会があるとの情報を得たらしい。あの組織は行動原理が解明されていない部分が多い。その為、君に現地へと侵入し何かしら情報を持ち帰って欲しいとのことだ」

「女の子拉致して性的に尋問しても？」

「できるのか？」

「……上層部に見つからなければ」

まあ、本気度は半分程度だけど。集会の規模次第では分が悪い。

「なら無理だな。今回の集会は上層部も顔を出すそうだから」

あー。

「それに、鳥乃には今日はここで藤稔の相手をして欲しい」

「え、じゃあ依頼は？」

「代わりに俺が出るよ」

増田はいった。

「鳥乃は送迎会に参加しながら、他の構成員たちと交代で支援にまわってくれ。この話はすでにうちの司令や永上にも伝えて了承済だ」
了承済なら仕方ない。

「わかった」

私はいった。

「けど、よく踏み切ったわね。普段支援専の増田が」

「この前言っただろう、たまには前線M I S S I O N 7に出て鍛え直参照そうと」

確かに、そんな事言つてたつけ。

「まあ大丈夫だ、先日も前線M I S S I O N 1 参照支援はしたから勘は十分取り戻してる。それに、依頼内容からして深追いする必要もないしね」

実際、増田のいう通りではある。けど、

「もしかして、私の為でもある?」

訊ねると増田は?

「? どういうことだ?」

と、やさしい笑顔。

「いや、何でもないわ」

私は追及するのをやめた。

だって、分かつちやつたからね。

美術館でのミストランとの交戦、依頼は成功したものの護りきれなかったロコちゃんと神簇。現在、私のメンタルはこう見えてシヨックでガタガタ。自信だつて喪失して前線任務を万全にこなせる保証がないのだ。

「ありがとう」

私はぼそつと言つた。

「ん、どうした?」

「いや、何でもないわ」

よくある難聴みたいな反応してくれたけど、恐らく聞こえてはいるのだろう。

「まあ、そんな事より」

黒山羊の実に関わるなら、言つておかなくてはいけない言葉がある。

「ミストランには気を付けて」

「ああ。確か鳥乃を負かした相手だったか」

増田は眩き、

「わかつた」

と、マウスを動かしてフォルダを開く。現状掴んでるミストランのデータを確認してるようだった。既に何度も確認済のような手慣れ

た手つきで。

「俺からは以上だ。持ち場に戻ってくれていいよ」

「あ、ならちよつといい？」

私は木更ちゃんの件を切り出すことにした。

「ん？ まあいいか、時間は余裕があるから」

「ありがとう。木更ちゃんの事なんだけど」

と、私は一連を増田に伝える。

「なるほど」

増田は納得したようにうなずくも、

「俺は反対だな」

「え？」

まさかの返事に私は驚く。

「どうして？」

「鳥乃、彼女が関わってきたスタジオはあくまで表の顔、本来この場所
はどんな場所か分かってるな？」

「え？ そりゃあ」

「なら分かるだろう、この場所は世界の裏側に踏み込んだ組織。そし
て、彼女は表の世界の人間なんだ。真実を伝えないまま、そつと日常
に帰してあげるべきじゃないか？」

「でも、みんな木更ちゃんに加わって助かってたじゃない」

「これ以上関わりすぎると危険だと言ってるんだ」

「あ」

私はハツとなる。

そうだった。スタジオが助かっているとか助かってないとか関係な
い。本来彼女はここにはいけない人間だったのだ。

木更ちゃんを逃がしたくないあまり、どうやら知らず知らず自分の
感情を正当化してみたみたい。

「その事は既に他の人には？」

「まだ」

「なら良かった」

増田はほんのり笑い、

「司令の耳にでも届いてたら説教を喰らってたぞ。普段があんなでも締める時はしつかり締めれるから司令なんだしな」

「もつとも。」

「それに、お前が彼女を手放したくない理由は夜這いだろう？ だったら、彼女の家に直接向かえばいいじゃないか」

「え？」

「既に友達と呼び合えるだけの関係は築いてるんだろ？ だったら年頃の女子高生として堂々と遊びにいけばいい。何だったらかすが店長の依頼のアフターサービスで目を光らせてるって名目でもいいじゃないか。スタジオの敷地内に拘らなければ幾らでも方法はある」

「あ」

まさに目から鱗だった。考えもしなかった手段の数々に「はー」となる。しかし、

「……遊びに行つて、いいものなのかな？」

なんて私は呟いてしまう。すると、

「ぶっ」

増田は突然に吹き出したのだ。

「えっ、ちよ、何笑つてるのよ突然」

「いやすまんすまん」

言いながらも増田は笑いながら、

「レズの肌馬といわれるお前が、プライベートではここまで人付き合いに慣れてないとは思わなくつてな」

「う」

私は適当な壁に背を預け、

「し、仕方ないじゃない。割と最近まで……」

梓さえいれば何も要らない、梓以外のすべてが色あせて見えるような人生だったんだから。

「手放すなよ。人生を通して本当に大切だと思える人間は思ったより多くないものだ」

増田は、パソコン越しに何を見てるのか。遠い目をしていった。

資料室から出た私は、早速報告することにした。

「木更ちゃん、沙樹だけどいま大丈夫？」

彼女が自室にしてる客室の前に立ち、戸を数回叩いて呼んでみる。

「先輩？ はい、大丈夫です」

返事があつたので、私は戸を開け中へと入った。

既に荷造りは終えてたらしい。棚や机の上はがらんとしてて、ガムテープの貼られたダンボール箱の上に明日学校に持っていく鞆が置かれてる。

そんな部屋の中で、木更ちゃんはひとりベッドに座って漫画を読んでいた。スタジオから借りたものだろう、かつて鈴音さんが月刊誌で連載してた少女漫画だった。

「もう、いつでもさよならできますって状態ね」

「元々最低限の荷物と貴重品しか持ち込んでませんから」

なんて、ちよつと寂しそうに木更ちゃんは笑った。

「荷物は、明日私が学校に行ってる間に届けて下さるそうです」
「そっか」

私も隣に腰かける。木更ちゃんからシャンプーの匂いがした。もう、お風呂は済ませた後らしい。

「一応、今後のこと増田に話してみただけど。やっぱり駄目だつて」
「そう、ですか」

予想はしてたみただけど、やっぱり木更ちゃんの表情からは「落胆」の二文字が浮かぶ。

「ごめんね。何とかしてみたかったんだけど」
「いえ」

木更ちゃんは首を振って、

「先輩はよくしてくれました。ありがとうございます。先輩がこれからもつて誘って下さっただけでも、私本当に嬉しかったですから」
「ありがとう」

優しいなあ、なんて思った。そして暖かい。

こうして隣にいと、触れずとも梓や鈴音さんとはまた違った“人の温もり”みたいなものを感じる。ふたりより力強さはないけど、梓

より穏やかで、鈴音さんより柔和な。ちよつどベッドの上だし、何ていうの、優しく抱きしめながら激しく抱いてみたい。

まあ、そんなレス衝動抜きにしても。

増田のアドバイスも影響してか、彼女を手放したくないと思った。

「ねえ、木更ちゃん」

「え、はい？」

突然のことにかしこまる木更ちゃん。私は、ちよつと勇気を出して。

「ここでの繋がりが終わってもさ、私たちこれからも友達として関係続けられないかな？」

「……え？」

「今日を最後に、私たちの接点なくなったら嫌って思ったわけよ。だからこそ、なのよね。これからもスタジオで働かないかなんて提案しちゃったの」

そこまで伝えてから、私は木更ちゃんの顔を見て一言。

「どうかな？」

我ながら不器用な申し出とは思う。けど仕方ないじゃない。「友達になって」なんて言うの初体験なんだから。

木更ちゃんは驚いた顔をした。それが、次第に動揺したものへと変わり、

「あ、えつと、あの……」

なんて、もじもじします。あれ？ 私、愛の告白したわけじゃないよね？

「木更、ちゃん？もしかしてお困りだった？」

それはそれで反応違う気もするけど、私が訊ねてみると、

「い、いえ。決してそういうわけでは。ただ」

「ただ？」

「実は、私も同じこと言おうと思ってタイミング伺った所だったから。驚いたのと、気恥ずかしいのと、それと嬉しくなっちゃって」

ああ。なにこのいきもの可愛い。

私はたまらず彼女を抱き寄せる。木更ちゃんは一瞬びくつと怯え

るも、すぐ私に体を預けるようにし、

「あの、変なことしないでくださいね？　そういう関係はお断りですから。けど、もう少し抱きしめられていいですか？……っというの
は、我儘ですか？」

「んくん、別に」

変なことさせてくれないのは残念だけど、正直女の子の体って全身性器だから抱きしめるだけでも割と最高なのよね。まあ、今回は「レズ抜きに抑えられず」って健全な衝動もあつたけど、せっかくの機会このまま終わらせる気も到底ない。

「ありがとうございます、先輩」

ゆったりした声で、木更ちゃんはいった。

「そういえば、最初にボディガードをお願いした時もこうやって抱きしめてくれましたよね？」

「そうだったっけ？」

「はい」

木更ちゃんはやんわりと微笑み、

「あの後、すぐに襲われかけた印象が強くて忘れてましたけど、暖かいんですね先輩って」

「暖かい？」

「はい。なんだか落ち着くんです先輩の抱きしめ方。まるで人を駄目にする枕のような」

なるほどね。それにはちゃんと理由があるのだけど、あえて言わないでおく。しかし木更ちゃんは、

「恐らく先輩のことですから、女の子が気を許しやすい抱きしめ方も心得てるのでしょうか？」

「う」

凶星である。

「いまも、頭の中では『どうやって「抱いて」と言わせようか』とか考えてそうですし」

「ぐ」

大正解。

「おまけに、本当はまだ夜這いを成功させてないから『今日を最後に接点なくなったら嫌』なんですすよね？」

「う」

なんでそこまで分かっているの。

「それでも、いまは先輩にちよつとだけ甘えたりじやれたりしたい時なんです。襲われさえしなければ、信じていいんですよね？」

なんて言いながら木更ちゃん私の胸の中で丸くなり、茶目っ気のある微笑みを浮かべると、ごろにゃんとばかりに頬を摺り寄せてくる。この子、人が発情するのを分かって愉しんでやがる!? そのうえ実は襲って欲しいとかじゃなくて、目で訴えてくるのだ。「襲ったら叫びますよ」と。

「あう……あ……」

やばい、頭に血が上っていく。私って女の子のハニートラップへの耐性0なのよね。心の中の天秤が瞬く間に本能へと傾いていく。そして。

「(据え膳食わぬはレズの恥)」

脳裏に悪魔の囁きが過ぎった瞬間、私は理性の糸がプツンと切れ。

「き、木更ちゃんー」

防犯ブザー鳴らされちゃった。

——現在時刻18:00

「全く、こういう日くらい自重できないのですか？」

場所は事務所隅の物置。木更ちゃんを襲えないよう簀巻きにされてた私は、送別会開始と同時に鈴音さんによって解放された。

「状況は何度も話したでしょ。あれは絶対誘った側が悪いって」

「はいはい、もう分かりましたわ」

鈴音さんは、もう何度目かのため息を吐いて、

「それよりも沙樹のシフトは19:00から1時間ですわ。それまではアルコール類は飲まないでくださいませ」

と、小声で伝えてくる。

「了解」

私は立ち上がり、「それまでは楽しんでいいのよね？」と倉庫を出た。

「あーシャバの空気が美味しいわ」

「何いつてるのですか、行きますわよ」

と、先導する鈴音さんの後についてパーティ会場となってるオフィスに着くと、いままさに。

『木更ちゃんの護られた日常に乾杯』

なんて、皆が杯を掲げる瞬間だった。

「あ、鈴音と鳥乃」

幹事をしてた高村司令は私たちに気づくと、

「悪い。時間だから先に始めちゃったわ」

と、紫色の液体が入ったシャンパングラスを私たちに渡す。

「ありがとう」

受け取って私は一口。中身はファ○タグレープだった。

司令は何故かドヤ顔で、

「シャンパンと思っただ？ 残念ただのジュースよ」

テーブルには開封済の瓶が一本。ちゃんと本物も用意してあるのは見て明らかだ。

「へまして渡してくれば良かったのに。木更ちゃんには既に？」

「まあね。鳥乃も後で飲ませてあげるから。ただし、私と鈴音は増田が帰ってくるまでお預け」

と、司令は自分のグラスを見せていう。中身は私のグラスのと完全に同じ色をした。

「鳥乃先輩」

そこへ木更ちゃんが輪に入ってきた。

「倉庫に閉じ込められてたと聞いてたのですけど」

「まあね、たったいま解放されてきたとこ」

私はいい、お互いのグラスをカチンして乾杯する。

パーティに合わせたのだろう。木更ちゃんは部屋で着てた私服ではなく、お洒落なドレスに身を包んだ。さらによく見るとお化粧まで。

「木更ちゃん、こんな服持ってたんだ」

「はい。着る機会は殆どないですけど」

と、木更ちゃんは少し恥ずかしそうに「似合いますか?。」と。
「ん」

言われて私は合法的にまじまじ視姦する。

色は赤一色。肩出しの露出多めなデザインもあつてか情熱的なエロスを感じさせ、それを見た目清純系の木更ちゃんが着てるのだから物凄い新感覚。

かつ、ここは人によって評価が変わる所だけど、彼女の控えめな胸部が服装のきつめな色気をマイルドにしているように映る。

「そうね。正直いますぐベツドインした……って、木更ちゃんストツプ!」

危ない危ない。もう少しで満面の笑みで防犯ブザーを鳴らされる所だった。

「ふふっ」

木更ちゃんはそのまま声を漏らして、

「徳光先輩から教えて頂いたのですけど。笑顔で先輩を脅威に晒すのって面白いですね。鳥乃先輩相手だからこそできるのですけど」

最近、梓がどんどん暗黒面に堕ちてる気がする。

「木更ちゃん。もしかしてわざと誘惑するような事言ってるからかってる?」

思えばさつきも「襲うな」と言いながら抱き着いてきたわけだし。今回だって色っぽい服着て感想求めてるしね。

「バレちゃいましたか」

いつもの微笑んだ顔に戻って、木更ちゃんはいった。

「程々にしないと、いつか噛みつかれますわよ」

困った顔でいう鈴音さん。しかしその横で司令は、

「別にいいんじゃない、そうなくても」

なんてのたまひ、

「その時はちよつと取材させて貰うけどOK? エロ漫画のネタにするから」

途端「うおおお」と辺りに歓声があがる。まるでオタサーの姫のサービスに悦ぶ豚のように。

「え、えっと」

さすがに少し引いちゃってる木更ちゃんの傍で、

「せめてそうならない日を願いますわ」

鈴音さんは匙を投げた。

——19:00

シフトの時間が始まった。

私は董ちゃんと入れ替わりで資料室に入り、本来増田の定位置である奥のパソコン机に座りヘッドフォンマイクをつける。

「シフトの交代に入りました。これより1時間鳥乃がサポートに入ります」

繋ぎっぱなしの通信機に話しかけると、

『こちら増田。現在、車で集会所に移動中だ』

実際、パソコンのモニターからは街中を移動する車内の様子が映されてる。

『予定では後5分程度で到着する。正直、このタイミングで鳥乃が入ってくれたのは嬉しいよ』

「なに気持ち悪いこといつてるのよ。まさかドがつくロリコンがJK趣味に目覚めたわけじゃあるまいし」

『逆だ逆。お互い恋愛対象の外だから気楽なんだ』

増田は笑い、

『何より、ハングド内で現状一番“黒山羊の実”と交戦経験があるお前がサポートなんだ。心強いよ』

「ま、仕事はしっかりやってみるわ」

返事をした辺りで、映像先に会館のような施設が映った。

『あそこだ』

増田は近くのコンビニに車を停める。

「ここまでは順調みたいね。それで、どうやって侵入する算段？」

『内部に協力者が紛れ込んでる。彼女にこっそり裏口の鍵を開けて貰

う手筈だよ』

車を降りた増田は、会館の敷地内に足を踏み入れ、誰かに見つからないよう慎重に建物の裏へとまわりこむ。

「彼女ってことは、その協力者は女性ってわけね」

しまった。そんな情報があるんだったら私が向かえばよかった。

『お前が期待するようなものじゃないよ。じゃあ、行こうか』

階段を上り、その先のドアから増田は突入する。もちろん、先に隙間開けて覗き中を確認してから。

まず最初にモニターに映ったのは、白い壁の廊下だった。ドアの上には緑色に光る『非常口』の標識。

増田は腰の銃に手を伸ばし、忍び足で慎重に進む。程なくすると下に続く階段、その手前に大きなドアを発見した。

まず増田はドアに耳を傾けて内部の様子を確認し、そしてからドアを隙間程度に開けて中を確認する。

そこは、いうならホールだった。

黒いローブに身を纏った黒山羊の実メンバーがずらつと並び正面を向いて祈りを捧げている。その中にはゲイ牧師の姿も見えた。彼らの視線の先はステージになっており、ローブを深く被って顔を隠した3人の人間が立ち並び、さらに背後には1枚の絵が飾られていた。

絵に映るのは、山羊のようではつきりとした不自然さを持ち、何本かの触手があつて、冷笑的な、しかし人間的な感情を感じさせる化物の姿。

(つて、これもしかして!?)

私には、この絵の正体に思い当たりがあつた。推測が正しければ、これはクトゥルフ神話という架空の神話に登場する邪神の1柱だ。その名前まで特定できるほど知識があるわけではないけど。

『我々は豊穰神の子、黒い子^{ダーク・ヤング}山羊である』

3人のうちのひとりがいった。性質から、ボイスチェンジャーとスピーカーマイクを併用してるのが分かる。続けて別のひとりが、

『豊穰神は、我々ひとりひとりの愛ある願いが実を結ぶことを望んでおられます。汝、崇高なる願いを祈りましょう。汝、愛を唱えましょう。』

う。汝、私たちの下で共に幸福になりましょう』

そして、最後のひとりが、

『神は我々に手を差し伸べてくださる。我々は願いを叶えなくてはならない。我々は幸せになるのを諦めてはならない。幸せこそが神の大地に愛の実を生らせ、神への供物となるのだ』
なるほど。

願いを叶え幸せになること。要約すればそこがこの宗教組織の教義にあたるらしい。確かに言っていることは素晴らしいし、神もそれを供物にする為に協力を惜しまない設定から互いに需要と供給ができてるように映る。ここだけ聞くと魅力的な言葉だ。

けど、願いを叶える為、そして幸せになる為に、奴らは手段を選ばない。きれいな言葉を盾に民間人に危険を晒すテロ集団であることを私たちは知っているのだ。

そんな時だった。

『ちっす』

誰かが、増田の肩を叩きながら話かけてきたのだ。

そのドライブでクレバーで声、

(え、高村司令?)

一瞬思ったけど、すぐ違うと気づく。だって、そこに司令がいるはずないのだから。そして、私は司令によつくりな黒山羊の実の人間を知っている。

『っ』

増田が警戒しながら後ろを向く。

そこにいたのは、適当に整えられたセミロングの銀髪、膨らみのまったくない胸部。

「増田、ミストランよ」

私は通信機越しに小声で伝える。

返事はなかったけど、増田の顔が一瞬強張るのがわかった。

『アンタ、入んないの? ホールに』

ミストランがいった。この組織の人間と認識してるのだろうか。

増田はいった。

『ああ、入るタイミングを逃してね。いまから入ると目立ってしまうから、外から話を聞かせて貰ってるんだ』

『そういうことね』

『で、ミストラン。君こそこんな所でどうしたんだい?』

『サボりだけど何か?』

うわ、司令がやりそうで言いそうな返事をドンピシャで。

『大体あんなの信仰する気ないし』

しかも、ステージの三名に聞かれたらヤバそうな台詞を堂々と。

『あ、そだ。ところでアンタ名前は?』

『米国生まれの谷似得だ』

ちよ、増田なんて濃い偽名使ってるのよ。

『そ、じゃあダニエルちよと聞いていい?』

しかもミストランは不審に感じることなく、

『Are you Big boobs faith? Or is flat

うわ、出た。

「増田。ここで出す答えは分かってるわね」

しかし増田は、

『どちらでもない』

『なに?』

『そんなもので俺は女性の価値を定めたりはしない。何故なら俺は、
幼女派だからだ!』

とかのたまったのだ。

「うわあ」「うわあ」

私とミストラン双方からドン引きする声か。

『更に言う普通のロリとロリ巨乳を区別する気もない。ただし童顔
なだけの巨乳BBAは駄目だ。俺が愛するのは14歳以下の幼女で
あつてロリータではない』

『ちよ……おま、何いって』

ミストランが生理的に受け付けなそうに顔を青くする。

『しかし、君はどうしても宗派を聞きたいそうだ。貧乳か巨乳かを聞
くように、幼女の何を信仰するのか』

『いや聞く気は無——』

しかし増田は無視して、

『俺が最も信仰するのは、バブみだ！』

と、ガッツポーズ。それも「俺の大好きなバブみは最強なんだ！」とか言いそうなポーズで。

『俺の夢は、雷ちゃんに甘やかされながら、桃華ちやまにママと叫び、ナナコンを発症させつつ、みりあに抱きしめられてオギヤる。そんな人生を送ることだ。そして——』

『わ、分かったから寄るな変態』

未だ語り続ける増田に怯え、ついに自分から逃げ出すミストラン。彼女の姿が完全に見えなくなると。

『ふう』

と、増田はスマホを開き、さつき挙げた幼女たちの画像を眺めながら、

『ようやく行ったか。これで彼女も好き好んで近づこうとはしないだろう』

わざと拒絶させて離す作戦だったらしい。しかし、これは酷い。

『増田。今度から私も距離を取ってもいい？』

『心配するな。永上と違って普段からあんな言動は取らないよ。これでも俺は、アニメや漫画が好きと言っただけで後ろ指をさされ犯罪者予備軍とよばれた世代のオタクだからな』

が、直後だった。

ホールの前で騒がしくしすぎたせいか、ミストランと入れ替わりに今度は扉が開いて、

『騒がしいなあ、一体だれだい？』

と、ボーイッシュな口調とは裏腹の、見た目文系少女みtainな子が話しかけてきた。

同時に、ホール内の視線が増田とその少女に集中する。

『増田。慌てず冷静に切り抜けて。何なら一員のふりして輪に混ざるのも手よ』

私は通信機から指示した。増田は返事の代わりに、

『すみませんでした。先日入信したばかりで色々と分からなくて。
谷^{だにえ}似得といます』

と、再び名を偽って取りつくろう。

しかし、誰かがいった。

『ごいつ、増田だ！ 元警視庁特捜課で現在ハングドに所属している』
しまった。身バレした。

『チッ』

増田は銃を構えたまま非常口に引き返す。しかし、増田の手がドアに伸びるより先に。

『逃がすと思う？』

先ほどの文系少女が非常口の外からやってきた。なるほど《強制脱出装置》で一回室外に出てから入りなおしたらしい。

『悪いけど、ボクはこれでも組織の戦闘要員なんだ。拘束させてもらうよ、デュエルで』

少女はデュエルディスクを掲げいった。しかもボクっ娘とはポイント高い。

どうやら先日の赤外線タイプではなく半径数mのデュエルディスクに強制デュエルを働きかける、いうなら円形タイプのようなだった。

増田はすぐ後ろに跳びのく。良かった、強制デュエルの射程からは逃れたらしい。

が、そのまま増田は後ろに逃げようとするも既に遅くホールから直接追跡してきた者たちによって挟み撃ちになってしまう。

『悪いけど、そろそろ観念してくれると嬉しいな』

強制デュエルモードを起動しながらじりじりとにじり寄る少女。恐らく増田が《ワーム・ホール》で逃げようとしたら誰かがフィールド帳消しにしてしまうだろう。

完全に逃げ道が塞がってしまった。

『ここまでか』

増田が呟いた。その時だった。

『おいでください、No. 15！』

それは、突如として発せられた。

『運命の糸を操る地獄の粉碎機！ 強き瞳に絶望を、勇氣ある魂に残虐なるおもてなしを！ ギミック・パペット・ジャイアントキラー！』

ホール側の集団の最後尾から巨大な機械人形が出現し、その指から糸が伸び、前列の人たちを次々に拘束する。

そして、胸の粉碎機で骨砕くローラー音を響かせながら人々を飲み込み、数人ほど犠牲になった所で胸のローラーが砲身に変形、犠牲者を弾丸に発射した。

ホール側の集団はモンスターの射撃によってドミノ倒しに倒れる。そこで気づいたけど、さっきのローラー音はあくまで演出で誰ひとりとして血を流す様子は見られない。

続けてジャイアントキラーは二発目の砲撃で非常口側の少女を狙うも、彼女はファイルのバリアで身を護る。しかし、その間に増田は《強制脱出装置》を発動。モニターの映像が瞬く間に光に塗りつぶされ、次の瞬間には既に増田は会館の外、非常階段を降りきった場所に立っていた。

直後、同じように《強制脱出装置》でひとりの少女が増田の隣に降り立つ。

『助かったよ。君がきてくれなかったら俺は今頃どうなってたか』

『お気になさらず』

それはアンちゃんだった。もっとも現在は袴姿でも制服でもなく、他の黒山羊の実同様黒いローブに身を包んでいるけど。

「増田、もしかして協力者って」

『彼女だよ』

増田はいった。すると隣のアンちゃんが、

『もしかして鳥乃様ですか？』

『ああ、いまハングドの事務所から通信で後方支援にまわって貰ってる』

『そうでしたか、先日は失礼致しました』

ペーリと頭を下げるアンちゃん。しかしすぐに、

『とはいえ、のんびりしている余裕は御座いません。すぐ移動致しま

しょう』

『分かった。こっちだ』

こうしてふたりは、コンビニに停めてある車へと駆け出す。途中、黒山羊の実に見つかってしまったけど既にふたりが車に乗りこんだ直後。アケセルを踏み車が動けば所詮は生身の人間、轢かれないように避けるしかできない。

そんなわけでふたりは見事に脱出に成功したのだった。

『ふう、何とか振り切ったか』

運転席で増田がいった。

『時間的にもお腹が空いてるだろうし、走った直後喉も乾いてるだろう。もう少し我慢してくれ』

『いえ、お気になさらず』

アンちゃんは辺りに視線を配りながらいった。

『今日の集会、一階フロアで立食パーティもやっていたんです。そこで幾らかつまみましたから』

『そうか』

増田は運転しながら、

『実は俺たちのアジトも、いまある事情でささやかな祝会をやってるんだ』

『そうだったのですか』

『この時間なら何とか合流できそうだよ。君のおかげだ、ありがとう』
『いえ、そんな……』

アンちゃんは控えめに微笑んだ。

『そういえば、藤稔さんがもう大丈夫ということは』

藤稔とは木更ちゃんのことである。フルネーム藤稔ふじみのり 木更ちゃんきさら。

『ああ、今朝連絡を受けたよ。知ってたのか、彼女が組織に狙われてたのは』

『はい。私とテストメント兄弟は同じ幹部の下で動いておりましたから』

アンちゃんがいうには、黒山羊の実には実質的にトップを担う三人の幹部がおり、名前通り三幹部様と呼ばれている。そして、大抵のメ

ンバーは三幹部様の指揮下に置かれるとのこと、

『私とテスタメント兄弟は三幹部のひとり、グラトニー様に仕えておりました』

なお、アンちゃんはそのグラトニーに誘われて黒山羊の実入りしたらしい。

『グラトニー。確か七つの大罪のうち暴食の英語読みだったか』

増田はいった。……暴食かあ。

『美術展の襲撃も2回ともグラトニー様の計画です。もつとも2回目はプライド様という他の三幹部が戦力を提供してくださいましたけど。それがミストランになります』

「そういえば、MISSION 1 今朝 ミストランが私を逃がしたのは、私の言葉が原因だつて聞いたけど」

と、ここで私は訊ねた。現在、通信は車内のスピーカーと繋がっているため、ちゃんとアンちゃんの耳にも届く、

『鳥乃さん!? あ、そういえば通信で繋がられてたのでしたね』

アンちゃんは突然私が会話割り込んだことで一回驚くも、

『はい。その件ですけど、私が確認した限りではグラトニー様の意向が影響しているようでした。プライド様は鳥乃さんを逃がしたことに立腹なされてましたし』

『つまり、今度鳥乃がミストランと相対したら』

増田が訊くと、アンちゃんは小さくうなずいて、

『そうなりますね。恐らくミストランは鳥乃様を殺害するでしょう』

『俺が出て正解だったな。いまの鳥乃にミストランの相手をさせるわけにはいかない』

そんな会話を聞きながら、私はふとバックミラーにモニターのカメラを動かす。

直後、一台のバイクが交差点を曲がって車の後ろについた。体格も趣味も高村司令そっくりなヘルメット&ライダースーツ姿の女性だった。

『あ』

すると、周囲に気を配ってたアンちゃんが反応する。つてことは

やっぱり、奴はミストラン。

「増田！ バックミラー見て、後ろ！」

私は通信先に呼びかけた。

『分かっている』

増田がバイクを振り切ろうと車の速度を上げる。

しかし、車とバイクの追いかけてっこだと、小回りの利くバイクに利がありすぎる。バイクは車の全力についていくどころか、そのままファイル攻撃を仕掛けれる余裕さえみられる。

「増田。ここでリアルファイトされたら」

『分かっている。これしか無いか』

増田は運転席にデュエルディスクを連結し、強制デュエルモードを起動する。車を基点に円形状にプログラムが伸び、巻き込まれたミストランのデュエルディスクが強制的にデュエルモードに入ったのが確認された。

『デュエルカー！ モードチェンジ！』

更に増田が別のスイッチを押すと、車はローラーダッシュ式の二足ロボットに変形し、機体の胸部からコードに巻かれた状態の増田が上半身だけ顔を出した。

一応言っておくけど、私と違って増田は純然たる生身の人間だ。しかし、その姿は正に「Dホイールと合体」そのもの。

『こ、このお車は一体……』

状況が読み込めずポカンとなるアンちゃん。彼女は増田の下、ロボットの腹部の辺りのコクピットに搭載されている。なお、こちらは外気に晒されてはいない。

『車のままデュエルすると先に車体が破壊されてしまうからね。機体をファイルで護りやすい形状に変形させて貰った』

増田は説明し、

『大丈夫か？』

『はい。私は平気です』

アンちゃんは辺りを見渡し、

『このような時に言うのは不謹慎ではありませんけど、何だかかっこい

いすね』

『意外にも少年漫画やロボット物が好きなノリか？』

『ここ最近から』

アンちゃんは「ふふっ」と淑やかに頬笑み、

『先日、め〇かボックスというものに出会いまして』

そこから入る漫画やアニメの世界って凄く歪んでない？

『まあ現実には喜びに浸ってられる状況ではないけどね』

と、バイクで横に張り付いたミストランを見下ろす増田。

『先ほどぶりだな』

『げっ』

ミストランは増田の顔を見ると露骨に嫌な顔をし、

『討伐対象ってアンタだったの？』

『嫌なら辞めてもいいんだぞ、そのほうが俺は嬉しい』

『それはそれで私の首と命に関わるわ。プライドに増田とアンを殺せ
と言われているし』

と、ミストランがいうと、

『プライド、先ほど言ってたミストランを指揮する幹部か』

『はい』

増田の確認に、アンちゃんが応える。

『まあそんなわけだから大人しく死んで』

ミストランが、まるで「淡々と仕事を処理する時の司令の目」でいっ
た。

そして、前を向き続けて言う。

『ミストラン。これより害獣駆除に入る』

『いや俺は害獣では』

増田が反論すると、

『ああ、そうね。子どもにも母性覚える変態ロリコンを害獣と言ったら、
害獣に失礼だったわ』

『おい』

悪いけどここはミストランに同意。

そんなやりとりをしながら、だけどミストランの淡々とした殺意を

前に増田の頬からは脂汗が滲むのがみえる。
ライディングデュエルが始まった。

増田

LP4000

手札4

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

ミストラン

LP4000

手札4

『先攻は貫った。俺のターン』

先攻は増田だ。

『お気をつけください、ミストランのフィールド量はすでに鳥乃様と戦った頃とは比べ物になりません』

と、アンちゃんは心配そうに助言する。

『分かった。だが、やる事は変わらない』

増田はロボットを運転し走らせながら、

『まずはこれだ。俺は手札から《アップデート・ドロ》を発動。手札のサイバースを捨て、カードを2枚ドロ。そして墓地に送った《ドットスケーパー》の効果、このカードが墓地に送られた場合、自身を特殊召喚する。続けて俺は手札から《苦渋の決断》を発動。デッキからレベル4以下の通常モンスター《デジタル》を墓地に送り、同じく《デジタル》1体をデッキから手札に加える』

まず増田は手札を消費せず、手札・墓地・フィールド全部を整え、

『《サイバース・ガジェット》を召喚』

と、1体のサイバース族モンスターを場に呼び出す。

『《サイバース・ガジェット》は召喚成功時に墓地のレベル2以下のモンスターを特殊召喚する。現れる、《デジトロン》!』

そして現れたのは先ほど《苦渋の決断》で墓地に落としたモンスター。

『早速行かせて貰う。現れる、俺のサーキット!』

前方に八方のマーカーが出現し、増田はアンちゃんごとく中に飛び込む。すると辺りは暖色の電脳空間に書き換わり、

『アローヘッド確認。召喚条件は通常モンスター1体! 俺は《デジトロン》をリンクマーカーにセット! リンク召喚! 現れる、LINK-1 《リンク・スパイダー》!』

《デジトロン》が靈魂の矢印になってマーカーに取り込まれ、現れたのは以前私も増田から拝借して使った蜘蛛のリンクモンスター。

召喚の演出が終わると、辺りの電脳空間も消え街中へと光景を戻した。

けど、増田の行動は当然まだ終わらない。

『《リンク・スパイダー》のモンスター効果。1ターンに1度、手札からレベル4以下の通常モンスターを特殊召喚する。現れる《デジトロン》! さらに《デジトロン》と《サイバース・ガジェット》をリンクマーカーにセット! リンク召喚! 現れる、LINK-2 《ハニーボット》! 《サイバース・ガジェット》が墓地に送られた事で効果発動。場に《ガジェット・トークン》を特殊召喚、さらに、現れる三度目の俺のサーキット!』

なんとというソリティアを披露する増田。

『アローヘッド確認。召喚条件はモンスター2体以上。俺は《リンク・スパイダー》と2体分のリンク素材となった《ハニーボット》をリンクマーカーにセット! リンク召喚! 現れるLINK-3 《デコード・トーカー》!』

こうして出現したのは1体のサイバース族の戦士。増田のフェイバリットだ。

『カードを2枚セット。俺のターンはこれで終了する』

と、増田はターンを終了する。それをみて私は、

「って増田。これ大丈夫なの？」

と、思わず聞いてしまった。だって増田。

増田

LP4000

手札0

『《セットカード》』『《セットカード》』□

『《ガジェット・トークン（守備）》』『《ドットスケーパー（守備）》』□

□―『《デコード・トークー（増田）》』

□□□□

□□□□

ミストラン

LP4000

手札4

手札が既に、ゼロなのだから。

『大丈夫だ。これで布陣は完成している』

増田はいった。確かに『《デコード・トークー》』の元々の攻撃力は2300ながら、リンク先のモンスターの数×500攻撃力を上げる効果を持つ。その為、

『《デコード・トークー》』 攻撃力2300↓2800

現在は十分な攻撃力を持っている。そして、リンク先のモンスターも守備力2100の『《ドットスケーパー》』。2枚の伏せカードで恐らくタキオン・ドラゴンを対処する予定なのだろう。手札の残りさえ確認しなければ悪い布陣には見えない気はする。

けど、相手はミストラン。正直不安だ。

『これだけ？』

ミストランが訊いた。

『ああ、これで問題ない』

『そ』

ミストランはいい、

『私のターンね。ドロー』

ミストランはカードを1枚引き抜く。

『結構色々ソリティアしてたから少し期待してたけど、まあこんなもんよね』

と、一回落胆した顔を見せてから、

『相手フィールド上に攻撃力2000以上のモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる。《限界竜シュヴァアルツシルト》』

ミストランの場に現れたのは、長い胴で∞の文字をつくる竜。レベルは8。

「増田、早速出す気よ」

『そのようだ』

増田がうなづく中、

『魔法カード《エルゴスファイア》！ このカードはフィールドに《限界竜シュヴァアルツシルト》が存在する場合、同じ《限界竜シュヴァアルツシルト》を手札に加える。そして、こいつも特殊召喚！』

現れる2体目のシュヴァアルツシルト。

「厄介ね。召喚権も使ってないし、ここで対処するには分が悪いわ」
『ああ』

このモンスターたちは効果故に、仮にバウンスしても《デコード・トーカー》を場から離さないと何度も特殊召喚されてしまう。

『じゃあ早速行かせて貰うわ。私はこの《限界竜シュヴァアルツシルト》2体でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築』

ミストランが宣言すると同時に、上空に銀河の渦が出現し、2体のドラゴンは靈魂となって取り込まれる。

「増田！」

『分かってる』

増田が構える中、銀河からナンバーズを示す107の数字が顔をだす。

『エクシーズ召喚！ 殺れ、No. 107！ 宇宙を貫く巨乳撲滅の

雄叫びよ、遥かなる時をさかのぼり銀河の源よりよみがえれ！ 顕現
せよ、そしておっぱいこのやろう！ 銀河眼の時空竜！』

銀河の中から、黒くシャープなボディの竜翼を広げ降り立つ。その
攻撃力は3000。

『ここだ。俺は罠カード《奈落の落とし穴》を発動する』

増田が動いた。

『《奈落の落とし穴》は召喚されたモンスターを破壊してゲームから除
外するカード。その厄介な竜は墓地にも置かせず消えて貰うよ』

上手い！ 確かに墓地と違って除外されたカードは、元々それを利
用したデッキじゃない限り対策が苦手な場合が多いのだ。

『なら、手札からカウンター罠《タキオン・トランスミグレイション》
を発動』

『想定済だ。俺もカウンター罠だ。《魔宮の賄賂》！』
『チツ』

舌打ちするミストラン。どうやら2枚目の《タキオン・トランスミ
グレイション》は握ってなかったらしい。

タキオン・ドラゴンの下に時空の穴が発生し、例え飛行しようとも
異次元からの重力によって強引に引きずり込んで破壊する。

『ふうっ』

増田はほっと一息。

『第一関門はクリアね。後は《銀河眼の時空竜》を複数積みしてなけれ
ばいいんだけど』

と、私は呟く。その刹那。

『なめられたものね』

ミストランはいった。

『タキオンを排除しただけで、もう勝った気分ではいるとか』

『まさか、複数積みなのか？』

『してるけど、そんな次元の話してるわけじゃないから』

さりげなく複数積み確定。

『どういうことだ？』

『《銀河眼の時空竜》は罠よ。見てる限り対策されてるみたいだし、あ

えて出せば全力でリソース使い切ってくれると思ったわけよ。で、大正解』

『あっ』

増田そして私は気付く。すでに増田のフィールドにセットカードはないのだ。

『じゃ、行かせて貰うわパート2。手札の《銀河眼の光子竜》墓地に送って《銀河戦士》特殊召喚。効果でデッキの《銀河騎士》をサーチして、《銀河騎士》を自身の効果でリリースなしで通常召喚。この方法で召喚に成功したから第二の効果、墓地の《銀河眼の光子竜》を守備表で特殊召喚』

《銀河眼の時空竜》を全力で対処したと思ったら、すぐに上級モンスターが計3体も。

『で、ここで私はスキルを使用』

言いながらミストランは、エクストラデッキから何故か《サイバー・ツイン・ドラゴン》を出し、フィールドを用いて指先でカードをくるくる回す。

『《サイバー・ツイン・ドラゴン》よ、過去へ渡り、より現在いまに適した未来を辿れ！そして、現れる、巨乳撲滅すべく私の無乳道サーキット！』

《サイバー・ツイン・ドラゴン》のカードが光の粒子に変わり別のカードへと構築し直されていく。さらに、ミストランの前方にも八方のマーカーが出現し、

『召喚条件は光属性モンスター2体。私は《銀河眼の光子竜》と《銀河戦士》の2体をリンクマーカーにセット。リ・コントラクト・ユニバース！現れるLINK-2 《サイバー・タキオン・ドラゴン》！』

《サイバー・ツイン・ドラゴン》が青色のカードに変わると、ミストランはそれをディスクに読み込ませる。

《銀河眼の光子竜》と《銀河戦士》が靈魂の矢印となってマーカーに取り込まれると、現れたのは黄金色に輝く《サイバー・ツイン・ドラゴン》の姿。その攻撃力は2000。

「《サイバー・ツイン・ドラゴン》が」

『タキオンの名を持つリンクモンスターに……』

私と増田が驚く中、ミストランはいった。

『私のスキル《リ・コントラクト・ユニバース》は、手札・エクストラデッキのカードを任意の枚数だけ、別のカードに書き換える事ができる。そこにタキオンの「過去に渡り自分に有利な未来を選択し直す」って設定を付与したのが私流のこのスキルよ』

つまりは運命操作と書き換え系のスキル。しかし、私の知る限りこの系列の能力には多大なフィールを消費するテキスト外コストを持っている。《ダークドロロー》や《シャイニングドロロー》はメローア級。《ステイニードロー》だってダ○の大冒険版のベ○ン級だ。

なのにミストランは、《リ・コントラクト・ユニバース》を使い確かにフィールを消費した形跡を感じるのに、未だピンピンしているように見える。

『魔法カード《死者蘇生》を発動』

ミストランは更に展開してきた。

『効果で、私は墓地の《銀河眼の光子竜》を、《サイバー・タキオン・ドラゴン》のリンク先に特殊召喚。ここでサイバー・タキオンの効果。このカードはリンク先のモンスター1体につき攻撃力を400上げ、リンク先にモンスターが存在する場合、1度のバトルフェイズにモンスターを2体まで攻撃できる』

《サイバー・タキオン・ドラゴン》 攻撃力2000↓2400

効果自体は《サイバー・ツイン・ドラゴン》より弱体化しているとはいえ、いまの増田のフィールドには十分脅威な効果だ。

『バトル！ まず《銀河騎士》で《ガジェット・トークン》を戦闘破壊』
まず、リンクと繋がってない《ガジェット・トークン》が増田のフィールドから退場し、

『次！ 《サイバー・タキオン・ドラゴン》の第一打。《ドットスケーパー》を粉砕』

サイバー・タキオンの首の片方から光線のブレスが放たれ、まともに《ドットスケーパー》の体が爆発する。直後、モニター先が軽く振動。

「フィール攻撃?! 増田、アンちゃん大丈夫?」

私が確認を取ると、

『大丈夫だ』

と、増田。

『俺自身は不意を喰らってしまったのだが、彼女が予想以上に間に合
う子で助かった』

「アンちゃんが？」

すると、

『はい、確認させて頂いた所、どうやら同乗者のフィールも機体から発
動できるみたいでしたので』

このロボットは、言うなら本来操縦者の使うフィールを機体から直
接発動する為の機構である。

例えば、フィールでバリアを張る場合、車や通常のバイクから発動
するとなると機体を包むほど広範囲にフィールを張らなくてはなら
ず、必要なフィール量もそれだけ多くなる。

しかし、ロボットの機体から直接発動する場合、生身の時と同じ要
領で膜を張るようにバリアが形跡でき、最小限のフィールで済むの
だ。

そして何よりこのロボット最大の特徴は同乗者もこの機能を使え
る。その機能をアンちゃんは、誰かが伝える前に自力で確認し行使し
てくれたのだ。

『ふふ、ですからミストランに攻撃するときはお任せください。一撃
で潰して差し上げますね』

と、アンちゃんドSな色気たつぷりの黒い笑み。うわあ、改心した
と思っただけどそのヤバイ部分まだ残ってたのね。
が。

『それはどうかな』

会話に割り込むようにミストランがいった。

『続けてサイバー・タキオンで《デコード・トーカー》を攻撃。100
点分の超過ダメージを受けろ！』

サイバー・タキオンのブレスが続けて《デコード・トーカー》に放
たれる。

「あつ」

そうだった。

リンク先の《ドットスケーパー》がいなくなったので、《デコード・トーカー》の攻撃力は2300に戻ってたのである。

一瞬で消し炭になる《デコード・トーカー》。その光線ブレスは勢いこそ弱まるも、ロボットの腹部つまりアンちゃんの操縦席にまで届き、

『きゃ——』

一瞬の悲鳴。直後、光線はロボットの機体を貫通したのだ。

増田 LP4000↓3900

「アンちゃんー！」

機体の腹部が爆発し煙をあげる中、私は叫ぶ。しかし、アンちゃんから返事はない。

そして。

煙が消えた時、ロボットは何とか動作を続けるもアンちゃんの操縦席があつた箇所は丸々空洞になっていた。

たつた100ダメージの攻撃で。

「え、うそ、そんな……」

アンちゃんが死んだ？ それも、あんなに呆気なく？

私は顔から血の気がサーツと引くのを感じる。同時に、両腕が机から離れだらんと垂れ落ちた。

『まずは一匹』

淡々と喋るミストランの声が、とても恐ろしく感じる。

『じゃあ、これでライフが残ってもフィニッシュね。《銀河眼の光子竜》で変態に直接攻撃。死ね、フォトン・ストリーム！』

銀河眼のブレスがロボットを横一文字になぎ払う。

増田は明らかに全力でフィールドを展開し護ろうとしたが、機体が一瞬で消し炭になるのを防ぐのが精いっぱい。

小さな爆発を幾度となく起こしながらロボットは上半身と下半身が千切れ崩れ堕ちて行く。

増田 LP3900↓900

『まだ、終わってない。俺のターン』

それでも、増田は未だ諦めずカードを引く。しかし、ミストランからフィールが放たれ、ドロートしたカードは《ビットロン》。ただの通常モンスターだ。

そして、上半身は床に墜落し炎をあげ大爆発を起こした。

「ま、増田?」

いま、何が起こったの?

まず最初に、アンちゃんが死んだ。

次に、モンスターの攻撃でフィールの上からロボットを両断した。

そして、いま増田が。

『まだまだ! 俺はこの爆風をデータストームと見立て、スキル《ストーム・アクセス》を発——』

モニターから映像が途切れた。

「増田ああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

私は叫びながら部屋を出た。

ちようど、資料室の前にいた鈴音さんが、

「鳥乃、一体何が……」

「鈴音さん、鳥乃 沙樹出撃するわ!」

理由も語らず、何も知らない鈴音さんを突き飛ばし、私はパーティ会場となった出入り口前のオフィスに。

「鳥乃?」

と、驚く司令と目があった。私は、

「ミストラン!」

見間違え、私は胸倉に掴みかかってしまう。が、すぐ気づき、

「あ、し……司令」

一瞬、私は顔を青くするも、

「鳥乃先輩?」

その横で私を止めようとする木更ちゃん。私は一瞬だけ冷静を取り戻し、

「木更ちゃん、ごめん!」

また司令とミストランの見分けがつかなくなる前に私は逃げるように外へ。そして共用のDホイールに乗って私は戦いのあつた場所へ向かった。

現場は既に人だかりがいっぱいだった。

「増田、増田！」

人と人をかきわけ、私はいまだ炎の舞い上がる壊れたロボットの傍に。しかし、増田の姿はない。

けど、上半身の胸部からコードを引き千切った跡がみられた。増田はまだ生きている。

私は人だかりの外に出て辺りを見渡した。そこへ。

「ここだ、鳥乃」

増田の声。

「どっ、増田？」

言いながら、私はビルとビルの間隙から、壁によりかかった状態の増田を見つける。

「増田！ 良かった、生きてたのね」

私は駆け寄る。しかし、近くまできて私は気付いた。

増田は、片腕が焼け落ちて既になく、ロボットの破片が心臓辺りに深々と突き刺さってたのだ。私なら生きてる所だけど、生身の人間である増田は。

「お前が来てくれると信じてな。ディアン・ケト等の回復魔法カードで……生き永らえてたんだ」

「それって、フィール。でもデュエルは」

ライフは残ってたけど、《ビットロン》だけでは。

「それが、勝ったんだよ」

増田がいった。その声が段々かすれ弱くなりながら、

「ミストランの奴……俺が死んだと早まって……デュエルを終了、させたんだ。そしたら、俺は……まだ、ライフ900……残ってたから、な。逆に……ミストランのフィールが全損、そのまま撤退して……いったよ」

そして、逆に増田のフィールは僅かに残った。

「けど、ここまでだ」

増田はいった。

「直に……俺のフィールは尽きる。その上、回復……するにも限度があるから……な。心臓……潰されて、まだ息してるんだ。いまの俺は、ゾンビみたいなもの、だよ」

と、増田は笑い、

「鳥乃、お願いがある」

「お願い？」

「ああ……。俺を、地縛神の贄に、取り込んでくれ」

「えっ」

増田を？ そんな事できるわけが。

「理由は三つある」

と、増田はいった。

「ひとつ、鳥乃に……俺のフィール・カードを、デッキごと、託したい」

増田のデッキを私に？

「ふたつ、相手は黒山羊の実だ。……俺の遺体を残すと、後々……面倒になりかねない」

確かに。クローンを作るような組織だ。最悪、洗脳した状態で増田を蘇生なんて考えられてしまう。

「みつつ、生きたまま取り込んだ者は……死んでは、いない、ん……だろう？」

「あ」

確かに生きたまま地縛神の贄に取り込んだ者は、その状態のまま魂ごと光の粒子に分解されている。だから厳密には生きてるわけでも死んでるわけでもないのが正しいのだけど、もし、その後被害者を取り込む寸前の状態で元の姿に戻せたとしたら。

「分かったわ」

私は、地縛神のフィールを行使。増田の体が段々と光の粒子に変わっていく。

「これが……お前の贄になる、感覚……なの、か」

既に半透明となった増田がいった。

「正に、俺という存在が消滅するのが分かる。これは……恐ろしいな」
「悪いわね、こんな体験させちゃって」

「気にするな」

増田の瞼が閉じていく。

「鳥乃、後は……た……の……」

言い切ることなく、増田の体は完全に粒子に変わり、私の体に取り込まれていく。

直後、〃私の中に〃 収納される増田のカード。そして何枚ものフィール・カードが私の手元に浮かび上がった。その中から、増田が最期にスキルで手に入れたカードに気付く。

「《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》？」

増田のスキル《ストームアクセス》は、サイバース族のリンクモンスター1枚をランダムに1枚エクストラデッキに加える効果を持つ。もしかしたら増田は、最後の最後でこんなカードを手に入れたから、自分のすべてを託そうと思ったのかもしれない。

(アンちゃん、増田……)

ここまで気を張って崩れないようにしてたけど、アンちゃん、そして増田を失ったショックはとつくに限界を超えていた。

意識が遠のく。視界が暗転しだす。

そんな直後、通信機から連絡が入った。

『鳥乃先輩？』

「っ」

その言葉に、私はハツなり卒倒しかけてたのを踏みとどまる。

「木更、ちゃん？」

『はい』

どうして木更ちゃんから通信が。まあ、そんなことより。

「見ちゃっ……たんだ」

『はい。高村さんや鈴音さん、他にも数名と一緒にです』

ということとは、恐らく公認で木更ちゃんはモニタ前に立ってるのだ。たぶん私があれば取り乱したせいだろう。

「なら、木更ちゃん。ちょっとだけ泣きぐ」と言わせて」

私は倒れるように壁に寄り掛かった。さっきまで増田がよりかかってた壁と対面になる形で。

『……………皆さんがご一緒でもよろしければ』

モニタ前で皆と目を配りあっていたのだろうか。反応は少しだけ遅かった。

「ありがとう」

私は、起爆寸前の感情を抑え、絞るような声でいった。

「私、助けられなかった。増田も、アンちゃんも、みんな……………みんな……………」

『え、アンちゃん……………って、もしかしてアンさん?』

驚く木更ちゃんの声。私はうなずいて、

「今回の任務の外部協力者よ。……………けど、いま木更ちゃんが見てるモニター越しに、私の目の前で」

『そんなんっ』

「そして、間もなく増田も」

『っ……………』

モニターから、涙を抑える声が聞こえた。それも複数。

「でも、その時点で増田はまだ生きてて、でも……………もう虫の息で、フィールも尽きかけてて。それで、私にすべて託して……………」

『自ら地縛神の贄になったと』

と、高村司令。

「……………はい」

『で、ふたりを殺したのはミストラン。私のクローンを名乗る黒山羊の實の小娘ね』

「たった100ダメのフィールでデュエルロボの装甲を貫く化け物よ」

私は肯定する代わりに、ミストランの恐ろしさを伝える。そして、「そもそも、ここで負けて死ぬのは私って話だったのよ! だって、元々あれって私を指定して出された依頼なんですよ?」

気付いたら、私は吐きだすように感情を吐露していた。

さらに、一度起爆してしまったものは、もう抑えようもなく、

「けど、私は実質的に任務を3連続で失敗してて、私が依頼人を助けられ

なかったショックから立ち直れてなかったから！ 増田は代わりに
依頼を受けてくれた！ そして、死んだのよ！」

涙が零れた、そう気付いた時にはすでに視界がかすみ、声が泣き
じやくったもの変わる。

別に、増田には特別な感情を抱いてたわけではない。レズな私が
ノーマルな恋愛に目覚めてたわけでもない。

増田がいうように、私たちはお互い恋愛感情を抱きようがなく、お
互いの性の対象が被ることさえない。だからこそ安心感や信頼感を築
きあつてたのだ。いなくなつてみれば、増田は最高のビジネスパー
トナーで相棒で頼れる先輩だったのだ。

「増田は私のサポートを信頼してくれた。でも、私は何もできなかつ
た！ おかげでアンちゃんも、増田も護れなかった、死なせてしまつ
たのよ、私のせい！」

——手放すなよ。人生を通して本当に大切だと思える人間は
思つたより多くないものだ。

増田の言葉が脳内で再生される。

あの言葉は、ずっと私にとつて梓と木更ちゃんを指す言葉と思つて
た。まさか増田も大切なひとりだったなんて、なんでいま気付いたん
だろう。

そういえば高村司令と鈴音さんがデュエルした時、私はふたりの関
係を「いいなあ」と言った。そのとき増田は「お前だけが築ける関係
がある」と言ってくれた。

私はずっと「梓と」とばかり思い浮かべてたけど、すでに増田と築
いてたんじゃないか。

『先輩……』『沙樹……』『鳥乃……』

木更ちゃん、鈴音さん、高村司令がそれぞれ呟く。

私は最後の力を振り絞り、いった。

「鈴音さん、司令、ごめん……回収をお願い」

恐らく、この局面で冷静に伝えられたのは私が半分機械だったかも
しれない。後からそう思う程度には、直後にはもう一切にも考える
ことができなくて。

「うあ、うわあああああああああああああつ！」
ハングドのメンバーに回収される瞬間まで、私は増田の消えたその場所ですつと泣き崩れていた。

私は夢を見る。

辺り一面増田のリンク召喚時みたいな暖色の電腦空間。前方は途中から雲の上になっており、長い長い階段が見られる。

階段は途方もなく遠くまで伸び、しかも昇りきった先は眩い光に遮られ窺い知れない。しかしその光は何故かとても心地よいものに映った。

私の体から光の粒子が抜け出た。

粒子は階段を辿るように上空へ飛びながら、次第に半透明の増田へと姿を変える。

「……増田？」

私は、わけもわからず手を伸ばすも、彼を捉えることはできない。代わりに、どこからか猫俣さんとセバスチャンが現れ、増田の肩を担ぐ。そして、ふたりは私に頭を下げてから光の先へと飛び上がっていった。

「ま、待って。……待ってよ！」

私は叫んだ。

「逝っちゃ駄目よ、増田！ 猫俣さん、セバスチャン、連れてかないですよ。増田はまだ生きてるのよ？ だから！」

しかし、3人は振り向くことも立ち止まることもなく、ついには光の奥へと去っていった。

「増田！ 増田！ 増田あつ！」

私は何度も何度も叫び、雲の上を駆ける。

しかし、夢の中で私の足はおぼつき、スローモーションでしか動けず、一向に階段に辿り着けないのだ。

こうして目を覚ました時、《地縛神の贄》の中に増田の抜け殻はあっても魂はすでに存在していなかった。

MISSION 13 — 軌跡

私の名前は鳥乃^{とりの} 沙樹^{さき}。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「そうだ。ソープに行こう」

いつものように私はふざけた事をいうも、今回ばかりは誰からも反応がない。

現在時刻 22:00。いま私たちは病室にいる。消灯時間は過ぎており、中は暗い。

病室は個室で、私の他には、梓、木更ちゃん、そしてベッドの上で昏睡状態のアンちゃんと、傍でつきっきりの神簇。

アンちゃんは生きていた。重傷を負い未だ目を覚まさないけど、ちゃんと息はしている。

神簇がいうには、グラトニーを名乗る黒山羊の実がアンちゃんを助けてくれたらしい。最初に病室に駆け込んだ時に彼女(推定)がいて、頭を下げ謝罪されたのだとか。

「鳥乃様」

やっと貰えた反応は、一本の光学兵器の刃。

「さすがにこの場面でこれ以上のおふざけはお部屋の退場かこの世の退場かの二択ですよー」

ヒロちゃんが背後にドロンと現れ、私の喉元にビームクナイを突きつけたのだ。

なお突然のヒロちゃんに誰も驚かない程度には、いまの空気は重苦しい。

私はフツと笑って、

「猶予を残してくれるならクナイ引っ込めてくれると嬉しいんだけど」

「皆それだけ怒ってるってことですよ」

ヒロちゃんが言うも、そこで神簇が、

「凶器をしまつて頂戴。じゃないと鳥乃、クナイに向かって倒れ込むわよ」

「っ」

ヒロちゃんは、ハツとした顔で私をうかがう。

大正解だった。

いまの私の精神状態は、喉元に突きつけられた刃があのだ世という逃げ道行きの片道切符に見えている。先ほどのおふぎけも、つい魔が指して、いやつい気が狂って起こしてしまったものだった。

本当なら、私が犠牲になるはずだったのだ。

だけど、度重なる失敗で自信を喪失してたから、ショックから立ち直れてなかったから、私のかわりに増田が任務に出て、私はサポートにまわった。その結果、増田は死んで、協力してくれたアンちゃんが未だ目を覚まさない。

「承知しました。鳥乃様すみませんでした」

一度憐れみの目で私を見てから、ヒロちゃんは再びドロンと消える。すると、

「ま、まるで『海に行こう』みたいなノリで言わないでよー」

梓がいった。その顔は、必死に苦笑いを取り繕っている。無理しても、いつものノリに付き合ってくれるらしい。

「行かせてよ梓、死ぬほど疲れてるから性的に癒されたいのよ」

直後、梓の《ハンマー・シユート》。

私がいっものようにメメタアすると、梓は皆に向かって笑顔で、

「沙樹ちゃんを起こさないであげてね、死ぬほど疲れてるみたいだから」

と、いった所で神簇と目があり、

「あ……」

と、梓は途端萎縮する。

神簇が呆れた顔で、

「貴女たちね……」

と、何か言うか言わないか、そんな折だった。

病室の戸が開き、ふたりの女性が入ってきたのだ。

「な」

私は、その女性を前に全身を強張らせ、

「ミストラン！」

と、叫んだ。

あろうことか、やってきたのはアンちゃんを昏睡状態に追い込んだ本人、そして増田とアンちゃんが会場から逃げる直接の原因を作った、あのボクっ娘文系少女だったのだ。

「ん？」

ミストランは私を見ると、

「ああ、アンタは確か」

「鳥乃よ。まさかアンちゃんが生きてたからって追い打ちを仕掛けに来るとは思わなかったわ」

「は？ いや、別にそういうわけじゃ」

「これ以上犠牲者は出させないって話よ。アンちゃんと増田の仇！ 強制デュエル受けて貰うわ」

「だから今は危害加える気はないって」

何かほざいてる気がするけど、私は関係なくデュエルを仕掛け、

沙樹

LP0

手札1

□□□□

□□□□

「《サイバー・タキオン・ドラゴン（ミストラン）》——□

「《銀河眼の光子竜》」「《N.O. 107 銀河眼の時空竜》」□

□□□□

ミストラン

LP4000

手札0

ワンショットキルで終わらせられました。これで私のフィールは一旦全損。

「だから落ち着けて言ってるでしょ」

私のファイルを全損させつつ、ミストランはしかめっ面という。

「嘘、ファイルでとどめを刺さないなんて」

「だからさつきから、まあいいわ」

ミストランは何故か折れた様子を見せ、

「ハングドにも用事があったのよ。ちよつとコイツの頭冷やすついでに借りてくわ」

「は？ え、ちよつ、待つ」

服の襟の後ろを掴み、ミストランは私を引きずって連行した。

こうして連れてこられた場所休憩室。縦長のスペースの最奥には自販機と流し台と、その横に電気ポットと湯飲みも備え付けられている。もつとも、すでに消灯時間の為に自販機以外は使えない状態だけだ。

「理解ある病院で助かったわ。普通の病院だとこんな時間じゃ個室でも面会謝絶だしさ」

ミストランが椅子に座った。続けて文系少女も座ったのを見て、私も対面の席に座る。

「で、少しは頭冷えた？」

「少なくとも、あなたたちがいま誰かを殺す気がないって程度にはね」と、私は返す。正直、正常に戻るほどメンタルが回復したわけではないけど、病室から離れたせいだろうか少なくとも彼女たちに耳を傾けられるだけの思考は取り戻せた。

「そう、なら良かったわ」

ミストランはいい、そこへ続けて文系少女が、

「今日ボクたちがきたのは、黒山羊の実はこれ以上アンちゃんも関係者も攻撃する気がないこと、そして死傷者を出したことを謝る為なんだ」

「ふうん、あれだけ散々殺る気満々にやっておいてねえ」

私はじとつと睨みつける。

「増田とかいうのとデュエルした時、すでにふたりへの処罰は放免になつてたのよ」

ミストランがいった。続けて文系少女が、

「グラトニー様が動いてくれてたんだ」

「確かあなたたちのトコの幹部のひとりだっけ？」

「うん。元々グラトニー様は幹部の中でも一番の穏健派でね、今回も『ここで殺害したらハングドとの対立を激化しかねない』って」

「けど、増田を殺してアンちゃんも意識不明に追い込んだ」

「いちいち痛い所をついてくるね」

苦い顔で応える文系少女。

「全速力でバイク運転してたからさ、通信受ける暇なかったわけよ」

と、ミストランはいった。

「フィールが0になった後、撤退しながら上に報告にでたらさ、もう何回も私に連絡したって。で、内容を確認したら……うげっ!? ってわけ」

ミストランは煙草を一本取り出し、火をつける。

「で、そんなわけで増田とアンにしてしまったことはもうどうにもならないけどさ、グラトニー様はふたりの関係者にも危害加えられないよう手まわしてくれたから、せめてそっちのほうは厳守させて貰うわ」

「そんなの信用しろと？」

私は半眼でいった。

「確か黒山羊の実って三幹部の誰かの直属になるわけで、ミストランはプライドとかいう人の部下なわけでしょ」

「うわ、アンの奴そんな事まで洩らしやがった」

げつと嫌そうな顔するミストラン。すると文系少女は自分の髪を弄りながら、

「まあ、確かにボクもミストランも上司はプライド様なわけだけど。正直いって、ボクたちプライド様嫌いなんだよね。だから、部署は違いうけど気持ち的にはグラトニー様の言葉を優先したいんだ。今回の黒山羊の実全体に向けた決定だからプライド様だって無視できないだろうしね」

嘘は言っていない様子だった。ミストランもぼそっと「あのクソババアが」とか漏らしてるし。けど、私にとってはグラトニーこそ。

そう、言いそうになった所に文系少女は続けて、

「まあハンドグドにとつてはグラトニー様こそ信じられないと思うけどね。でも実際、最初に美術展を襲撃したときも、グラトニー様が藤稔さんつて人の命を奪おうとしたのも、この前アンちゃんやんが殺戮の限りに出たときだつて、どれも皆驚いたくらいなんだよ」

そこまで言つて文系少女は立ち上がつて、

「信じる信じないは君たち次第。けど、ボクたち黒山羊の実は今回の件から手を引いたのは事実だよ。だから、この通り」

と、頭を下げた。

「謝つて済む問題じゃないけど、ごめんなさい」

一方、殺つた張本人であるミストランは、罰の悪そうにそっぽを向いている。文系少女が気づくと、

「ほら。ミストランこそ謝らないと」

「つつつ」

しかし、ミストランは顔を更に歪めるだけで何もいわない。

「もういいわ」

私はいった。その態度に苛々となりながら。

文系少女は焦つて、

「ああもうミストラン！」

「仕方ないじゃん、こんな状況どう謝つたつて刺激するだけよ」

「だからつて余計刺激することしなくなつて」

「これからの行動で示すわ」

言い合うふたり。そこに、

「鳥乃先輩」

と、やってきたのは木更ちゃん、そして梓のふたり。

「琥珀さんが帰れつて」

梓がいった。

「神簇が？」

と、訊ねると。

「いまの沙樹ちゃんは見てて苛々するからつて」

「言つてくれるわね」

私はオーバーにため息を吐く。やれやれって。

「それと、いまの鳥乃先輩がまた暴れておふたりに迷惑かけないか見て欲しいとも」

「……そう」

としか、私は言えなかった。

神簇どうしてそんなに冷静でいられるのよ。アンちゃんは実の妹じゃないのよ。これじゃあまるで私のメンタルが相対的に豆腐に見えるわ。

……違う、神簇も潰れる寸前なのか。

だから私を追い返した。先に潰れた私が目障りにしか映らないから、いや……もつといえば。

「沙樹ちゃん？」

梓に覗き込まれて、私はハツとなった。いけない、思考がダークな方角に嵌りかけてたわ。

「帰るんだね」

と、文系少女。

「まあそうなるわ」

私がいうと、

「じゃあ、最後に伝えて欲しいことがある」

「誰に？」

「アンちゃんに」

強い後悔の眼差しを真つすぐ向ける彼女。

「分かったわ」

私はいまだけ向き合うことにした。

「アンちゃんが目を覚ましたら伝えて欲しい。ごめんって、それと……もう二度と会う事はないと思うけど、今度こそ幸せになつてつて、ボクは君の分まで、君の幸せを神様に願ってるよ、って。以上だよ」

強く強く想いのこもった伝言。

私は訊ねた。

「名前は？」

「え？」

「そういえば、まだあなたの名前は知らなかったから」

「フェンリル」

文系少女はいった。

「ボクの名前はフェンリル。ミストランと同じく、プライド様の手で造られた作品のひとつだよ」

「ところで」

病院を出た辺りで木更ちゃんがいった。

「鳥乃先輩も、あんな風に不機嫌になる時もあるんですね」

「まあ人間だからね」

私はいいながら、

「木更ちゃんこそ大丈夫なの？ ショッキングなのはそっちも同じはずだけど」

すると木更ちゃんは小さく嘆息してから微笑み、

「自分よりずっとショックを受けてる人を見ると、逆になんだか冷静になれますよね？」

とのことらしい。

「それに、決めたこともありますから」

「決めたこと？」

「あ、気にしないでください。つい口から洩れただけですから」
「そう」

木更ちゃんがいうので、私はこれ以上追及しないことにした。

手前の車道を車が一台通り抜けた。程なくしてもう一台。その度に輝くライトの眩しさに私の視界は黄色に染まる。

大切な相棒が死んで、一度助けた悪友の妹が意識不明の重体。だと
いうのに、夜道は私たちにいつも通りの光景を見せてくれる。

まるで私たちは踏みつぶした蚊に悲しんでたかのよう。その位、増田の死やアンちゃんの重体なんて他人にとって意味のない出来事なのだ。

世界とか運命とかに色々と否定された気がして、なんだか心が凍え

そうになった。

「ねえ、みんな小腹空かない?」

程度の差こそあれ、この場の三人全員がショックを受けてる中、一番重傷の私が突然言ったものだから、ふたりは「え」となる。

「う、うん。確かにちよつと小腹空いたかもー」

それでも、すぐに対応してくれたのは梓だった。

「どこかバイキングないかな」

「いや、食べ放題行くほどガッツリじゃなくって」

そもそも梓、小腹程度で店ひとつ潰す気なの?

「なんだー、残念」

「ま、まあ適当に目についた店に入ってみない?」

と、提案したら。

「そうしましょう!」

突然、木更ちゃんが激しく食いついた。そんな様子に今度は私が驚くも、

「なら梓もそれでいい?」

「あーここなら。うん、いいよー」

何故か梓も察した様子。

この時点で私は気付くべきだった。

アンちゃんが運ばれた病院は駅前に位置する。そして、木更ちゃんが強く反応し、梓も好意的な反応を示すもの、そんなの一軒しかないことに。

私たちは適当に歩い……たつもりで、最前列を歩きだした木更ちゃんに誘導され、数分であるお店に辿りつく。

Kasugayaラーメン。木更ちゃんが本性を遺憾なく発揮する魔境だ。

「あつ」

私が呟くと、

「どうしましたか?」

と、目を輝かせる木更ちゃん。

「今日は沙樹ちゃんの奢りだって」

誰もそんな事言っていないのに、梓も梓で。

「本当ですか？ でしたら今日は奮発してK a s u g a y a野菜ラーメンを大盛りで頼んでみます。徳光先輩はいつものですか？」

「うん、K a s u g a y aプレミアムチャーシュー麺大盛りの煮たまごトッピング」

ふたりとも、なんて遠慮のない。

とはいえ、こちらも温かくてほっとするものが食べたかったのは事実、その点K a s u g a y aは地元のソウルフードでしかもラーメン。これ以上適任の食事はない。

「まあいいけど、いま言ったもの以上は各自払ってよ」

私は財布の中身を確認し、店内に入る。
すると、

「えっ？」

と、正面のテーブル席でラーメンをすすってた女の子が、私たちを見て驚いた。

「沙樹ちゃん、アズちゃん、どうしてこんな時間に」

ロコちゃんだった。

「それはこっちの台詞だよー」

梓が訊ね返す。続けて私も、

「どうしたの、こんな時間にひとりなんて」

「私はバイト帰りでいまから夕食だけ」

と、ロコちゃん。

「みんなは？」

改めて訊かれるけど、正直どう答えればいいか分からない。

(どうしよう)

私はふたりと視線で会話する。しかも、ふたりは知らないけどロコちゃん増田と会ったことあるのよね。

なんてやっていると、厨房のほうから頭にタオルを巻いた中年の男がひとり、

「いらっしやいま……出たあああああああああ」

と、即座に奥に逃げようとするかすが様、直後、

「ふうっ」

と、安堵の息を漏らした。ショックで冷え切った心が、少しだけ温まった気がした。

「世界って狭いねー」

そんな中、すでに食べ終えたロコちゃんが私たちを見ながら、

「まさかアズちゃんたちとかすが店長大好きっ子が同じ学校でお友達だったなんて」

「ほんとだよー」

梓はラーメンをすすりつつ、

「ロコちゃんが藤稔さんのこと知ってたなんて」

「といっても、お顔くらいだけど」

はにかむロコちゃん。

お互い電話やメールではよく話してる仲みただけけど、実際に会うのは久しぶりらしい。ふたりはしばらくの間会話に花を咲かせる。けど、私ほどでないにしろ梓も傷心なのを察してか、ロコちゃんは時折言葉を選び、元気づけるように話してるのが窺えた。

そして、私が麺を食べ終えある程度落ち着いた頃、

「ところで沙樹ちゃん」

ロコちゃんは、ついに話を切り出してきた。

「何があったの？」

「っ」

途端、私は全身を硬直させた。ふたりの死が脳裏に何度もフラッシュバックし、再びショックに飲み込まれそうになる。

しかし、私は梓と木更ちゃんの様子を確認してから、

「事故だね。バイト先の先輩が死んで、私たち共通の友人が意識不明の重体なのよ」

と、一部嘘を交えて私は伝えた。なお、梓にもこの表現で伝えてあげる。

「そっか」

ロコちゃんは表情を沈ませる。

「それは辛いよね。私も妙子を失ってるから、わかるよ」

「ロコちゃん……」

私は呟く。

「沙樹ちゃん、アズちゃん。私で良かったら聞くよ？ それくらいしか、できないけど」

それが、何より嬉しかった。

別に何かしようってわけではなく、ただただ親身になって、一緒に哀しんで、聞き手に徹しようとしてくれるのが。

私は。

「最近、ずっと失敗ばかりだったのよ」

気づいたら口を洩らしていた。ある程度ぼかしはしたものの、事情も知らない梓の前で、胸のうちをだらだら垂れ流した。ロコちゃんは、何も否定することなくうんうんと頷いて聞いてくれた。

「ねえ、ロコちゃん」

ある程度話した後、私はふと訊ねる。

「ロコちゃんは、どうやってここまで歩きだせるようになったの？ 妙子のショックから、どうやって抜け出せたの？」

失敗して、ミストランに殺されそうになって。

失敗して、ロコちゃんを助けきれなくて。

失敗して、神簇を危険に晒してしまって。

もう、自力でも最前線に立てないほど心が弱って。その状態で任務に関わった結果、とどめに増田とアンちゃんを失った。いまの私は、正直自力で立ち上がる術なんて残ってない。あともう一度、私の心に木枯らしが吹けば、私のメンタルは砂のように舞って形を失うだろう。

すると。

「うん」

と、梓がうなずき、

「私も聞きたいなー。教えて、ロコちゃん」

気づくと、梓もまた思いつめた末に疲れ切った顔をしていた。

「え」

驚くロコちゃん。そして、

「私、それをふたりに教えて貰ったんだけど」

今度は私たちが「え？」となり、

「梓が？」

「沙樹ちゃんか？」

「それに私？」

「それに私？」

なんて妙に息ピッタリに訊き返してしまう。

「うん……」

ロコちゃんはやさしい笑みを浮かべて、

「シヨックでいつまで落ち込むのも自暴自棄に身を投げ出すのも妙子は望んでないって、それを望んでるのは妙子を殺した加害者。そんな癪なことしたくないよねって教えてくれたのは沙樹ちゃんだったよね？」

確かに。それを教えたのは誰でもない私だ。

「そして、いつまで落ち込んでても何も動かない。願い叶えるのも、希望を掴むのも、どんな形でもいいから私がまず一步動かないと届かない。アズちゃんからはそう教えて貰った」

「あ……」

梓が小さく呟く。

知らなかった。梓がそんな前向きで強い考えを持ってて、それをロコちゃんに教えていたなんて。

「だから私、まずアズちゃんの助言に従って妙子の真実を知ろうって動いて、したら沙樹ちゃんと巡り合ってた。全てを知った代償に、私とんでもない罪背負っちゃったけど、妙子も猫俣さんも、きつと罪に押しつぶされる事なんて望んでないよね？ だから今度は沙樹ちゃんの助言も加えて、どうしたらふたりが天国で安心できるかなって。そしたら、まずバイトを続けて、学校にも通って、特別なことはなくていいから、頭が動かなくても足だけは動かそうって」

ここでロコちゃんは「ふふっ」程度に笑いをこぼし、

「いまやっとなんか強引に続けてた日常生活に心が順応してきた所」と、いった。

ロコちゃんの経験は、聞いてみれば私と梓が教えた事を120点満点で実行しただけのこと。なのに何故だろう、こんなに胸にズドンとくるのは。

元は自分の言葉だったのに。私は、それをロコちゃんに教えられていた。

増田もアンちゃんも、いまの私を望んでなんかいない。私が潰れて喜ぶのは黒山羊の実なんだって。

そして、かつての自分の言葉に教えられたのは梓も同じだったみたいで、見れば涙を流して感動してた。

「ありがとうロコちゃん、まあ何とかやってみるわ」

私はいった。ロコちゃんは、

「良かった」

と、ほっとした顔を見せてから、

「ごめんね私の話ばかりしちゃって」

「ううん、私たちが聞いたんだもん。私もとりあえず足を動かしてみるね」

梓はいった。彼女がどこを向いていまの決断をしたのかは、いまの私には分かり様もないけど。

ところで。

私はふと《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》の今後を考えた。

いままでずっと頼りにしてきたカードだけど、本来このカードは自分が持つてはいけない物である。しかも、任務の過程で一度奪われたこともあった以上、そろそろ力を借り続けるのも潮時だろう。

ただ足を動かすだけなら、身軽でいたほうがいい。

私は、カードを返すことに決めた。

翌日、現在時刻10:30。私は再び病院に赴いていた。

手には見舞い用のフルーツ籠がふたつ。もちろん片方はアンちゃんの分だけど、今回病院にきた理由はもう片方の為。鈴音さんに訊ねた所、どうやら陽井氏の娘である花梨ちゃんもこの病院で療養していると分かったのだ。

クリアウイング本来の持ち主である陽井氏とは、事件後から一度も直接連絡が取れていない。その為、彼と会うためには娘さんの見舞いに行く口実で張り込みするしかなかった。

私は室内に入ると、まず花梨ちゃんの病室に向けて足を進めた。エレベーターからアンちゃんの病室より1つ上の階層に出ると、まず顔を出したのは広々としたリビングと、そこで談笑している患者たち。長期入院してる方たちのフロアだからか、みんな顔なじみらしい。正直、満員電車に乗るサラリーマンよりよっぽど生気に溢れている。

私は脳内でファイルを開き、メモを確認する。それによると、花梨ちゃんの病室は505号室。この病院は4の数字を省いてるから、本来は404号室と不吉な部屋だ。

(あつたあつた)

廊下を歩くと、程なくしてその部屋はあつた。私は扉の前に立つと数回ほどトントン。

「どうぞー」

中から声がした。男の人の声だった。

入ると、そこにはベッドの上から半身起こした花梨ちゃんと、傍のパイプ椅子に腰かける陽井氏の姿。

「あ、陽井さん」

私は小さく驚いた。さっきの返事からまさかとは思ったもの、いきなり会えるなんて。

「あー沙樹ちゃんこんにちはーだよー」

私という来客を喜び手を振る花梨ちゃん。その傍で、

「待ってたよー」

陽井氏はいった。

「待ってた?」

「うん、鈴音ちゃんから連絡があつてね。いまから君がクリアウイングを返しに向かうって」

「……」

鈴音さん、陽井氏と連絡取れてたのね。思えばふたりは昔馴染みで同期だというし、最初から鈴音さんの繋がりを頼りにするべきだった

と私は反省しつつ絶句する。

「結論から言うと、クリアウイングは引き続き沙樹ちゃんが持つてて欲しいんだよー」

「え?」

どうして?」

「理由は幾つかあるかなー」

私が訊ねる前に、陽井氏はそう答え、

「まず沙樹ちゃん。聞いた話だとクリアウイングのフィールを引き出せたんでしょー?」

「ん、まあね」

元々クリアウイングは他のカードより高いフィールを有するカードだった。しかし、陽井氏にはどれだけ手を尽くしても、その内の半分も使うことができず、そんな現状に変化が起きるのを期待して最初の美術展に関わった程だった。

そして、私によってその「変化」が生れたのだ。

「次に、実はあのカードあまり褒められたルートで手に入れたカードじゃないんだよ。流れ流れて僕に縁が回ってきたけど、元はフィール・ハンターズが強奪したカードって噂があるくらいでー」

フィール・ハンターズが?」

「そして最後。沙樹ちゃん、君は以前、そのフィール・ハンターズにカードを奪われてるよねー?」

「っ!?!」

その通りだった。

私は、一度目の死を体験する原因となったデュエルで、私が一番最初に手に入れたフィール・カードを奪われている。しかも、名前や見た目とか、そのカードの記憶だけが切り抜かれたように無くなってるのだ。

「もしかして、そのカードが」

「かもしれない、って程度だけどねー」

陽井氏はうなずいた。

確かに、クリアウイングを手に入れた時、このカードは私のカード

だという妙な実感はあったけど。

「そうでなくても、クリアウイングは自分の主人を何度も失ってる憐れなカードなんだよ。だからねー、もう二度とこの子に辛い経験させないであげて欲しいなーと思うんだよー」

「優しいわね陽井さんは」

そういう事なら、と流れのせいで一瞬思いかけたけど、そもそも私が手放す為に彼との接触を急いだのは、私自身がカードを護りきれない自信がないからだだったのだ。

「一声足りない?」

そんな私の様子を、今度は間違って受け取ったらしい陽井氏はいった。

「それなら、ひとつ頼まれて欲しいことがあるんだけどー」

「え?」

「花梨に見せてあげて欲しいんだ。リアル化したクリアウイングの姿を」

なるほど。そういえば前の美術展では、あの4枚だけリアルソリッドビジョンの姿で見せてあげられなかったのだった。それがなぜ「一声」かは分からなかったけど。

「そういうことなら」

デュエルディスクを起動し、ご希望通りクリアウイングを召喚する。

「わあー」

花梨ちゃんの眼前に現れる白いドラゴン。彼女は目を輝かせてモニターの顔をぺたぺた触る。

「乗ってみるかい?」

陽井氏はいった。

「できるのー?」

「大丈夫だよー。いいかな?」

と、確認を取る陽井氏に私は、

「ご希望なら、窓を出てお空の散歩まで」
「だって」

と、頭を撫でられ花梨ちゃんは嬉しそうにしていた。

「じゃあー乗るよー」

そういつて花梨ちゃんがドラゴンをよじ上る中、

「護りきれる自信なくなっちゃったんだって？」

突然、陽井氏が訊ねてきた。

「え？」

「詳しいことは聞いてないけどねー」

「まあね」

情報源は鈴音さんだから問題ないだろう。私は肯定した。
すると、

「確かに、ギリギリの状況にあっても、他人を頼れない人はいる。けど、幸運にも君は違うよね？」

「まあ……」

元々ハングドは個人で行う仕事ではないから協力を要請することはできるけど、

「大丈夫なんて言葉は無責任だけど、失った自信を皆から補うといいんじゃないかな。もちろん、クリアウイングからも」

「失った自信を、皆から……」

「クリアウイングもね、たぶんこう思ってると思うよ。いままで護って貰ったから、今度は自分が沙樹ちゃんを護るって」

そういつて、陽井氏は私の頭を撫でてくれる。

もし私に父親がいたらこんな感じなのだろうか、私はちよつとだけ不思議な気持ちに襲われた。

「沙樹ちゃん、人という字は人と人が支えて合ってるんだよ。たまには支えさせてよ、僕やクリアウイング、それにみんなにも君のことを」

なんて陽井氏の言葉に、私は一瞬甘えそうになる。けど、頼るのと甘えるのは違う。少なくとも、私はハングドのみんなにこれ以上甘えてはいけない。すでに、最近は任務の成績が悪くハングドの評判に悪影響与えてるかもしれないのに在籍している。この時点で既に温情に甘えてるというのに。

そして、私は裏側の人間なのだから、木更ちゃんや梓が相手でも甘

えられない。

それに人という字は支え合ってるのではない。本当はひとが腕を垂らして立っている姿、人は一人で立って歩いていくもの。私は所詮ひとりなのだ。

(とはいえ)

言った当事者なら、いまなら嫌でも断れないだろう。私はいった。

「じゃあ早速甘えさせて貰うわ」

そして、クリアウイングに乗る花梨ちゃんを眺める。

「もう少し、花梨ちゃんの相手させて貰ってもいい？」

「もちろんいいよー」

陽井氏は笑顔でいつてくれた。

この父娘といると何となく心が休まる。それは恐らく、私の慣れ親しんだ梓の“ほんわか”オーラを何倍にも凝縮したような人たちだからだろう。

さすがに外に出るまではしなかったけど、花梨ちゃんはしばらくの間、クリアウイングに乗って病室の中を飛び回って愉しんだ。

和やかな空気を愉しんだ一方、体面の為に寄ったもうひとつの病室では未だ重苦しい空気が続いていた。

「しばらく来るなと伝えたはずだけど」

扉の前で仁王立ちした神簇が、白い目で私を見ていった。

「別の用事のついでよ。病院来たのに寄らないのも失礼でしょ、はいお見舞いのフルーツ」

初耳だったことはともかく、私は不機嫌な顔で籠だけ渡し、すぐ立ち去ることにした。

まわれ右して十数歩、

「待ちさない」

神簇は声をかけてきた。

「帰る前にひとつだけ言わせて」

振り返ると、彼女は沈痛な顔をしながら、

「鳥乃、どんな時でも、現実から目を逸らしたり、驕ったり、逆に塞ぎ

「こんだり、後ろ向きになつたりしたら駄目よ」

それでも、真つすぐ私の顔を見ていったのだ。

「これは、たつたいま私の体験談からの忠告だから」

「たつたいま？」

「ええ」

神簇は小さく、けど強く強くうなづく。

「もう少して、再び貴女との絆が断ち切れてしまう所だったから。いま貴女をそのまま帰してしまつたら、絶対後悔することになるってギリギリで気づけたから」

確かに。

いま私がこのまま帰つたら、次に会うときどんな顔をして彼女の前に立つのだろうか。いや、そもそも姉妹との接触を避ける私の未来が強く想像できた。

「さつきまで私自身がショックで、まるで自分が一番悲しいんだみたいに驕つて、塞ぎ込んで、現実から目を逸らして後ろ向きになつたのよ。貴女の前でまた過ちをまた繰り返す所だったわ」

そこまで言うてから、神簇は努めて優しい笑顔をつくつた。

「鳥乃 沙樹。さつき来るなど言つたばかりだけど、撤回させて頂戴。私は貴女をもう責めようとは思わないわ。だから、貴女がしっかりアーンに向き合えるようになったら、その時に来てあげて」

私は、こつそり神簇の姿に尊敬と劣等感、そして僅かな嫌悪感を抱いた。

彼女はこれだけ深い闇の中から、自分の力ひとつで抜け出したのだ。そして、自分が犯してしまう所だった間違いをギリギリで回避した。

一方の私は、彼女が堕ちた闇よりずっと浅い所にいるのに未だ浮かび上がる気配がない。それどころか、足を動かせば動かすほど深みにはまつてはいないだろうか？

（ああ、そういうことなのか）

アンちゃんがあそこまで歪んだのは、きつとこんな体験を幾度となく経験したからなのだろう。そして、私もまたそんなアンちゃんの

辿った経緯をなぞり始めていた。

——神簇ほど強い人間に、私の見せてる世界がどこまで理解できるのよ。
って。

昼からはちゃんと学校に登校した。

コンビニで買った栄養補給のゼリーで手早く昼食を終え教室に入ると、梓が鞆の中身を机の引き出しに入れてる所。偶然にも私たちは揃って午前を休んでたのだった。

「おはよう、梓」

言いながら私は自分の机に鞆を置く。

「おはよう、沙樹ちゃん」

梓は瞼の下に隈をつくっていた。お疲れと寝不足だろうか、だけど気が休まらず眠気を自覚できない様子だ。

「沙樹ちゃん、瞼の下に隈できてるよ？」

梓がいった。

「それは梓のほうでしょ」

「え、嘘」

どうやら、気が休まってないのは私も同じだったらしく一緒にトイレに駆け込み鏡で確認すると、ふたり揃って疲れ切った顔をしていた。

「お揃いだね」

鏡の前で、梓が力なく笑った。

「揃って酷い顔よね」

私も力なく笑って返す。

それから、しばらくの間私たちは並んで鏡越しのツーショットを眺め続けた。特に理由はない。あえていうなら、気力が疲弊しきつて、このタイミングで完全にストップしちゃったからだろう。助言に沿って、ただただ動かしてた足が。

「ロコちゃんって、強いね」

程なくして、先に口を開いたのは梓だった。

「確かにロコちゃんの言ったのは私たちの言葉だよ？ でも、こうして私が実行するとすっごく難しくって」

「ほんとにね」

そして二人揃ってため息一回。

「思えば、あの時できたのって心が限界超えてたからなのに」

その場に私は「え？」と振り向き、

「あの言葉、梓の体験談だったってこと？」

「うん」

梓はうなづく。

「沙樹ちゃんが行方不明になってた時の、あのクリスマスイブの日覚えてる？」

「ん、まあね」

覚えてますとも。あれがあつたから、ある意味私はいまも生きてるのだから。

「私、沙樹ちゃんがいなくなって、世界の終わりみたいない気分だった。ずっと落ち込んで、ずっと泣いてて、気づいたら幽霊みたいに外を彷徨い歩いてた。けど、それがいつの間にか明確に『沙樹ちゃんを捜す』になってて、それであの日ついに」

「私を見つけた」

「うん。だから、何でもいいからまず一步踏み出すことが重要だって私は思ったの」

まさか、ここであの日のエピソードと繋がってくるなんて思ってた。なかった。

「でも」

しかし、梓はうつむき、

「今回はそんな私のせいで」

「梓？」

「あ、ううん。何でもない」

どうやら、梓は梓で、自分のせいでアンちゃんがああなった、と思いを悩んでるらしい。

(そんなこととは無い、実際は私の支援ミスよ)

本当ならそう言いたかった。けど、それが私の裏の立場を、そして組織の情報を無関係者に伝えてしまうことになる。だから、梓に真実を言えないのがもどかしい。

それに、もしかしたら言った所で納得はしてくれないかもしれない。いいい。

どうやら私の知らない所で、梓とアンちゃんだけの背景があるようにも映ったから。

「そういえば」

梓は訊ねた。

「沙樹ちゃんのほうは、ロコちゃんに言ったアドバイスはどうやって出たの？」

「……悪いけど、こっちは特別な背景ないのよね」

私はいった。

「経験談でもなければ、中身もないし根拠もない。ただその場で慰め彼女を諭す為に口から出た言葉よ。だから、いざ自分がその言葉を言われると、最初はガツンときたけど、思えば私がこうなってるのをアンちゃんが望んでない根拠は何もないし、悪意持った人が望んでるつてのは確かだろうけど、だからって、癪だからって簡単に動ける問題じゃないわよね」

そこに梓の言葉を加えたとしても、すでに失敗から何度も踏み出した末のとどめなのだ。

「あ」

そっか。私はいま初めて、自分がここまで抜け出せないのか理由に気付いた。

失敗から傷を残したまま立ち上がりを繰り返し、完膚なきまでに心を折られたから。それも多分あるだろう。

でもそれ以上に、いまの私、自分に自信も信頼もないんだ。

そして、だからこそ私に接してくれる人たちも信じきれないでいる。

私自身が周りの信頼に応えられないし、そんな私を周りが信頼するはずがない。

もう消えたと思ってた、けどまだ私の中にはしっかり残っていたらしい。

人間不信という私本来の性格は。

昼休みが終わり午後の授業が始まった。

自覚というのは恐ろしいもので、一度人間不信を自認してしまうと、梓以外の全てが色あせて見えてしまう。世界が一度死ぬ以前に逆戻りした感じだ。

あらゆるものへの拒絶が強く授業が身に入らないので、休憩時間に入ると同時に私は教室を抜けだし、授業をフケた。実は依頼関係なくサボったのは久々だった。

そんなわけで、現在私は立ち入り禁止の屋上で日向ぼっこをしている。

次の授業は体育だったらしい。グラウンドを見ると、クラスメイトの女子たちが体操服姿で組体操をしていた。が、その中には梓はいない。少し探すと、隅で見学してるのが見えた。どこことなく瞳は虚ろだった。

「駄目ですよ。授業は受けないと」

突然、誰もいないはずの隣から声がした。振り返ると、

「木更ちゃん?」

がいた。

「そっちこそ、授業はどうしたのよって話だけど」

「早退です」

木更ちゃんはいった。

「早退?」

「いまから試験があるんです。ですから、午前うちに先生には伝えられています」

「試験って?」

「いまは秘密で」

木更ちゃんは詳細に触れることなく、

「本当はこのまま帰るはずだったんですけど、いま先輩のクラスが体

育の授業だったじゃないですか。なのに先輩の姿が見えませんでしたので《ワーム・ホール》で屋上に来てみれば」

木更ちゃんはくすりと笑って、

「ビンゴでした」

そして、木更ちゃんは私の隣に腰を下ろす。

「お隣、よろしいですか？」

「って既に座ってるじゃない」

「そうですね」

最初から断らせる気のない木更ちゃんは、その場で体操座りした。柔らかな頬笑みは健在。けど、よく見るとその瞳に力がなく疲弊しているのが見て取れた。一見私や梓と比べたら余裕があるように見える木更ちゃんだけど、彼女だってお世話になった人が死んで友人が意識不明の重体なのだ。精神が参っててもおかしくない。

「アンさん、昨日復学したばかりなのにまたこんな目にあってしまったって、クラスでも沈痛な空気が広まってきました」

彼女の口から長いため息が漏れる。その原因は私にあるのだけど。しかし、悪意もなければ地雷を踏んだ自覚もない様子。

そういえば、アンちゃんは（本人が主犯の）襲撃事件で自宅待機してて、私が任務に就いたことで復学するも二日で再休学、そして昨日復学した当日夜に意識不明の重体、中学時代は虐められてたというし、アンちゃんもしかして学校生活に厄でも憑いてるのではないだろうか。

「何人かはむしろ喜んでそうだけどね」

私は、自分が酷い返事をしてることに気付かずまま、

「アンちゃん中学時代や酷い虐めを受けたらしいわ。高校ではまだ問題は起きてないみたいだけど、いまでも当時と同じようにアンちゃんが癪に障ってみえる生徒だっていると思うのよね」

「そうですね」

お互い地雷を踏み合ってるのに気づかないまま、

「実際、いました」

と、木更ちゃん認める。

「やっぱり」

「けど、私のクラスには彼女に好意的な生徒が多かったですから。それでも何かしようなものならリアルPKKが動きます」

「リアルPKK?」

PKって、リアルと付いてる以上サッカー用語じゃなくてネットのプレイヤー・キラーのほうよね?

「クラスメイトです。法律を勉強してる子で、虐めっ子とかDQNのような方を社会的に潰すのを趣味にしてるんです」

「濃いというよりえげつないわね」

ああ、だからリアルにPKをKするっていう。

「クラスの敵に回したくない人NO. 1と評判です」

むしろNO. 1が他にいたら、木更ちゃんのクラスは魔境である。

「あと、それにこれからは鳥乃先輩もいますから」

「私が?」

まあ、確かに護れそうならアンちゃん護るとは思うけど。

木更ちゃんは笑顔をつくり、

「下手にアンさんを虐めて先輩の目に止まったら、レスナンパのターゲットにされてしまいますから」

「私に話しかけられるのって罰ゲームか何かなの?」

なんとというクラスだ。

木更ちゃんは「ふふっ」と、

「下級生や同級生ならまだしも先輩は上級生ですから、誘いを軽々しく断れないからだと思います」

「それはそれでいい気分しないって話だけどね」

「下級生ならナンパの相手をしてくれると受け取ればいいと思いますよ」

と、木更ちゃんは良い面だけをピックアップして提示してくれる。

「むしろ、クラスメイトに受け入れられてないのは私のほうで」

「……え?」

木更ちゃんが?

「といっても、虐められてるわけでもないのですけど。機械的で不気

味に映るのだそうです、私」

機械的で、不気味？　むしろ彼女は笑顔が多く、特に柔和に微笑んでる姿が魅力的な子なのに。

「心当たりは？」

「いえ」

首を振る木更ちゃん。確かに、いまの木更ちゃんも「少し哀しい」って顔に出てるも、笑顔といえれば笑顔をしている。でも、それが機械的ってどういうことだろうか。

「だからでしょうか、アンさんと先ほどのリアルPKKと私の三人が揃うと、たまに腹黒トリオって」

アンちゃんは事実腹黒だったし、そのリアルPKKは露骨に腹黒キャラなのだろう、だけど。

「木更ちゃんって、実際腹の底で黒いことを考えてたりは？」

「いえ」

木更ちゃんは否定し、

「一面真っピンクのかすが様色です」

「よね」

恐らく冗談なのだろうけど、私からすれば木更ちゃんが機械や腹黒っていうのは正直考えられない。一体彼女のクラスメイトは何をみて彼女をそう言うのだろうか。

なんて話してて数分。気づくと、私は段々「いつもの私」のノリで談笑しつつあった。あれだけやさぐれてたというのに。

「それでは、私はそろそろ行きますね」

木更ちゃんはそつと立ちあがった。

「あ、もう行くの？」

「はい。そろそろ、行かないと遅刻してしまいますから」

と、木更ちゃんは元から笑顔なのに、また微笑み直す。

「では先輩、実技試験はよろしくお願い致しますね」

「え？」

「では」

私は強く振り返るも、木更ちゃんはそのままだデュエルディスクを起

動し《強制脱出装置》で消えてしまった。

校舎に視線を移すといま正に歩いて校門をでる木更ちゃんの姿が映る。

「……木更ちゃん。一体何をしようとしてるの？」

その答えは、同日の夕方に知ることとなる。

『至急、本日17:30より開始する実技試験を担当せよ』

という、ハングドからのメールによって。

午後16:00、学校が終ると私は《ワーム・ホール》で真つすぐ事務所へと向かった。

「ちつす。早いじゃない」

室内に入ると、まず高村司令がデスクに座ったまま迎え入れる。

「何が起こったのか気になったしね」

オフィスは現在、表の原稿作業の真つ最中らしかった。インクの匂いと慌ただしい空気。とても、あと1時間後に裏の仕事があるとは思えない。

「木更ちゃんでしょ？」

「なんだ知ってたの？ その通りよ。……あ、そのページの背景は鈴音を回して」

司令はハングド構成員という名のアシスタントに指示しながら、

「昨日の帰りにハングド入りするって言いだしてさ、まあ決意の眼差いで断れなかったから、落とすつもりで突貫作業の筆記試験用意してみたのよ。そしたら予想に反してクリアされちゃってさ」

ちなみにハングドは試験を通過しないと入れないとかそういう規定はないし、いつでも加入の門が開いてるわけでもない。

言ってしまうえば、高村司令と鈴音さん、さらにふたりの奥には元帥とよばれる私も知らない真の司令がいるらしくって、その2〜3人の判断によって決まるのだ。

「で、これが実際あの子を落とす為に用意した筆記試験だけ」

はい、と手渡された数枚の用紙に目を通す。1枚はデュエルの知識を指す問題だったけど、残りは軍事知識や戦闘知識など一般人が分か

るはずのない問題がズラリと。

「え、これ木更ちゃんがクリアしたの？」

私でも満点は難しい上、ハングド加入前ならデュエル以外1問も解けなような内容なのに。

「まあギリギリではあったけど。どうやらうちの漫画から色々知識吸収しちゃったらしくてさ」

「あー」

その道のプロがやってるだけあって、どうしてもスタジオオミストの漫画は軍事や戦闘において凝った作りになっている。少女漫画やレディース物が主流の鈴音さんでさえ、代表作に海軍舞台のBL物（曰く気の迷い）がある程だ。

「ま、そんなわけでひとつ頼まれてくれない？」

「断るわ」

私は即答した。

「理由は？」

「言ってしまうえば、デュエルで木更ちゃん負かして不合格にしるとかそういう話なんですよ？」

「ま、そうなるわね」

肯定する司令。

「けど、私はすでに一度木更ちゃんに負けてるのよね。そんなのが適任とは思えないわ」

「だからよ」

「え？」

と、訊ねると。

「アンタの最近の成績はあまり良くないわ。一応任務成功を続けてるけど、依頼人の匙加減ひとつで失敗扱いとして処理されてもおかしくないものばかりなのは分かるわよね」

「まあね」

残念ながら否定する材料はない。

「さらに私が支援に入った結果、増田という大事な人材を失った」

「わかってるじゃない。まあ、そんなわけさ」

司令はいった。

「ついでにアンタの契約更新試験も行うわ。あんまり結果が悪いとハングドから登録抹消するからそのつもりで」

「ああ」

なるほどね。

「ひとつの席をかけてふたりで潰しあえと」

まあ当然だ。いまの私はハングドの癌なのだろうから、首切る目処がつくなら切りたい存在だろう。そこへ木更ちゃんが筆記試験を突破してきたのだから、私は用無しというわけだ。それが嫌ならまだ戦えることをアピールしろと。

しかし。

「いや、そんな易しい話じゃないから」

司令はわざわざ手を振って。

「いま一番可能性が高いのは、どっちも受け入れない」だから「え？」

木更ちゃんが採用され私が切られるのが内定してる、ならともかくとしてもどっちも切る気って。

(なるほど)

つまり、人員が更に減るリスクより私を追い出すリターンのほうが高いつて算段だったわけね。かつ、木更ちゃんは最初から本当にハングドに迎え入れる気はないと。妥当な判断だ。今日までが温情が過ぎてただけで、私だって立場が逆ならそうする。

「試験内容はスピードデュエルとライフ4000のマスターデュエルを1回ずつ行って貰う。で、木更には最低限どっちか片方には勝利しないとハングド入りはないと伝えてあるわ」

「で、私は最低限全勝しない限り明日から私の席はないわけね」

「少なくとも全敗したら素で無いわ」

微妙にはぐらかされたけど、意味は同じと私は受け取る。

「木更はいつもの部屋で待機してるわ。時間まで会いに行くのは自由よ。それとデッキ調整は資料室の奥で行って頂戴。以上」

そこまで言い終え、司令は再び原稿作業に戻ってしまった。

必要以上に誰かと会う気はなかったのので、私は早速資料室へと向かう。

奥のデスクには花瓶が飾られてあった。

午後17:25。

そろそろ時間だ。私は資料室を出てオフィスへと向かう。

「ちっす」

他の人たちがまだ原稿作業に精を出す中、高村司令はひとりコーヒーを飲んでいた。まだ木更ちゃんはおフィスに来てないらしい。

「鈴音は先に試験会場をセッティングしてるわ」

司令はいった。

「木更がきたらすぐ出発するから」

「お待たせしました」

言った傍から木更ちゃんがやってきた。学校制服の上から紺色のパーカーを羽織り、私服にみせている。

司令は振り返り、

「きたわね。デツキ調整は大丈夫？」

「はい。試験に臨める最高の仕上がりになったと思います」

「そ、じゃあこれより現地に向かうわ。ついてらっしゃい」

一足先にオフィスに出る司令。私と木更ちゃんはそれについていく。

ビル共有のエレベーターに乗り、ハングド専用の隠しボタンを押して地下2階へ。

扉が開くと、そこは射撃場だった。

入ってすぐ防弾ガラスに覆われた一室があり、中では鈴音さんがひとり射撃訓練を行っていた。

「拳銃!？」

驚く木更ちゃん。そういえば彼女は、まだ私たちが発砲する姿さえ見たことがないのだった。モンスターの攻撃でなら見せたものの。

「アンタもハングド入りしたら握ることになるわ」

司令は扉を開けながら、

「怖気付いた？」

「い、いえ……」

首を振る木更ちゃん。

「そ」

「来ましたわね」

鈴音さんが振り返りいった。

「もうお聞きとありますけど、おふたりには実技試験と称しここでデュエルを2回行って頂きますわ」

「はい」

緊張した声で木更ちゃんはいった。

「鳥乃、一応試験官として合格条件を」

司令に諭され私は、

「合格条件は最低限私に1勝はすること。その後、私たちがデュエル内容を審査して欲しい人材と判断されたら合格となるわ」

「はい。よろしくお願い致します」

ペこりと丁寧に頭を下げる木更ちゃん。私はそれを虚無を見るような目で眺めた。

彼女がなぜハンドグドに入ろうと思ったかは分からない。

だけど、合格させるわけにはいかない。何故なら、私がここで組織を去るわけにはいかないからだ。

私は生きるためにこの組織にいる。

私は一度死に、森口博士らの手で半機械化蘇生された。その為、定期メンテナンスや生命維持には莫大な資金が必要で、その賃金をハンドグドから稼がなくてはならない。

それを辞め、梓に別れを告げるわけにはいかないのだ。

「先輩……？」

木更ちゃんが心配そうに私を見つめる。

「何でもないわ」

私は返す。

「では、最初はスピードデュエルから行いますわ」

鈴音さんの言葉に、私たちはデュエルディスクを起動する。

「……」

木更ちゃんは目を閉じ、数回ほど深呼吸する。そして、
「行かせて頂きますね。鳥乃先輩」

柔らかな頬笑みからの決意の籠った眼差しが、私に真つすぐ向けられ、

『デュエル』

私たちは同時に叫んだ。

沙樹

LP 4000

手札 4

□ □ □ □

□ □ □ □

□ | □ □

□ □ □ □

□ □ □ □

木更

LP 4000

手札 4

「今回のデュエルの先攻後攻の決定権は木更さんに、マスターデュエルは前回の敗者に与えるものとしますわ」

と、鈴音さんが宣言すると、デュエルディスクは自動的に選択権を木更ちゃんに譲り渡す。

「では先攻を頂きますね。私のターン」

そう言うと、木更ちゃんは早速1枚のカードをデュスクに読み込ませた。

「魔法カード《強欲で謙虚な壺》発動します。デッキから3枚のカードをめくり、そのうちの1枚を手札に加えます」

木更ちゃんの前に、3枚のカードが姿を現す。

《クリフオート・アーカイブ》《スキルドレイン》《スキルドレイン》

「私は《スキルドレイン》を手札に、残りをデッキに戻します」
「早速きたわね」

しかも私の記憶が正しければ、前にデュエルしたときもこの流れだった気がする。

「そして、《クリフオート・ゲノム》を召喚して、カードも2枚伏せて私はターンを終了します」

「なら、私のターンね」

私は少しフィールを込め、

「ドロー」

と、カードを引く。そして、

「ライフを1000払い、《スキルドレイン》を発動」

と、予想通り使ってきた罫カードを。

「速攻魔法《サイクロン》」

いまフィールで呼び込んだ速攻魔法で対処。そのまま手早くプレイングを進める。

「《幻獣機テザールフ》を通常召喚、効果で幻獣機トークンを生成。カードをセットして《クリフオート・ゲノム》に攻撃。ダメージステップ時にトークンをリリース。攻撃力を800上げて撃破。ターンを終了」

突き放すように、かつノータイムで自分の手番を終えると、

「……え？」

木更ちゃんがきよとん、となった。

瞬きひとつして間に再び自分のターンがまわってきた。狙い通りに事が進んでるなら、いま彼女はそんな心境にあるだろう。

「何で、こんなに私のライフが削れて」

《幻獣機テザールフ》 攻撃力1700↓2500↓1700

木更 LP4000↓3000↓2300

《スキルドレイン》も効果の適用前に破壊された為にゲノムの効果無効は不発。発動コストはしっかり払われた分、想定以上のダメージに思考が追いついてないらしい。

「どうしたの、木更ちゃんのターンだけど」

私はわざと急かした。

「は、はい。私のターン。ど、ドロロー……します」

木更ちゃんは困惑を残したままカードを引き抜く。が、そんな状態で引き抜いたカードは、やはりあまりよろしいものではなかったらしい。彼女の表情が一瞬落胆したのが見えた。

「私は《クリフオート・シエル》を通常召喚し、テザールフに通常攻撃します」

その結果、テザールフが攻撃力1700だからと攻撃力1800で戦闘破壊に掛かる短絡的な戦術に至るわけで。

「ダメージ計算前に、手札の《幻獣機ジョースピット》を墓地に送って効果を発動。テザールフの攻撃力を400アップさせて、幻獣機トークンを1体生成」

《幻獣機テザールフ》 攻撃力1700↓2100

テザールフの攻撃力は2100、これでシエルの攻撃を返り討ちに。

「でしたら、私もリバーズカード《禁じられた聖杯》を発動します」

え？

「この効果によって《クリフオート・シエル》の効果を無効にし、攻撃力を400アップします」

《クリフオート・シエル》 攻撃力1800↓2800↓3200

もしかして、短絡的な攻撃じゃなかったって話？

ジョースピットの援護射撃と連携しつつテザールフは《クリフオート・シエル》を鉄網で括りつけようとするも、シエルは全ての攻撃を防護フィールドで弾き、代わりに光線を一発テザールフに叩きこむ。本来ならこれで破壊されていたのだろうけど。

「つ、私の場にトークンがいる場合、テザールフは戦闘・効果では破壊されないわ」

言ったものの、揺さぶりが失敗していた事に私は内心ショックと苛立ちに囚われてしまう。実際には《禁じられた聖杯》は前のターンに既に伏せられてたカードなので、テザールフが攻撃した前のターンに使ってれば逆に返り討ちを狙えたので「ちゃんと揺さぶりは成功し

て自分のターンで持ち直した」のだろうけど。

(そんな、もつと何もさせずに勝つ位じゃないと私の首が危ないのに) なんて、元々メンタルがボロボロだったのと焦りとで、少なくともデュエル中は気づくことがなかった。

沙樹 LP4000↓2900

「私はこれでターンを終了します」

木更ちゃんの手番が終わる。私はここで手と口が勝手に動き、

「速攻魔法《バードストライク航空衝突》を発動」

と、脊髄反射でカードを発動してしまう。

「え？」

今度は木更ちゃんからこの反応。私も心の中では同じ反応をしたけど、思えばこれが正解だったのだ。

「このカードは私の幻獣機と相手カードを1枚ずつ選択して発動し破壊するカード。私は《クリフォート・シエル》と《幻獣機テザーウルフ》を選択して破壊。だけどテザーウルフはトークンがいる限り効果破壊されない効果を持つ。その為」

「私のシエルだけが破壊、ですね」

木更ちゃんが認めたと同時に2体のモンスターは衝突し、《クリフォート・シエル》だけが破壊される。

危なかった。

どうやら焦って頭のほうはやるべきプレイングを忘れてたけど、ハングド生活で培ってきた体はちゃんとプレイングを覚えてくれてたらしい。

そして、木更ちゃんの変な手札を握ってなければ、この勝負は終わった。

「私のターン」

と、私はカードを1枚引いて、

「ユニオンモンスター《幻獣機カジキソード》を通常召喚」

フィールド上に出現したのは鋭い剣のような吻を持った幻獣機。

「そして、カジキソードをテザーウルフに装備。この時、カジキソードの効果によって幻獣機トークンを1体生成」

カジキソードが幾つものパーツに分解されると、それぞれがテザーウルフの追加装甲として装着されていく。最後にテザーウルフの鉄網の先に吻が取り付けられ一本の長い凶器へと早変わり。

「カジキソードを装備したモンスターは自身のレベルまたはランク×200ポイントアップ。そして私の場には幻獣機トークンが2体いるから現在テザーウルフのレベル10」

《幻獣機テザーウルフ》 攻撃力1700↓3700

表示されたテザーウルフの攻撃力を前に、木更ちゃんは少し残念そうに柔らかな表情を浮かべ、

「これは、スピードデュエルは私の負けですね」と、認めた。

「まだ終わった気になるのは早いって話よ」

私はそう伝え、

「《幻獣機テザーウルフ》で木更ちゃんにダイレクトアタック」

攻撃を宣言。

テザーウルフは木更ちゃんに向けて鉄網を伸ばし、フィールでリアル化した凶器で木更ちゃんの腹部を貫く。

木更 LP2300↓0

「——え？」

何が起こったのか分からない、といった様子で目を見開く木更ちゃん。その口からは一筋の血が垂れ落ち、テザーウルフが刃を引き抜くと、傷口から血を流しながらその場で倒れた。

「ちよ、鳥乃!？」

「沙樹、一体何を!」

驚いた司令と鈴音さんが声を荒げる。

「大丈夫、殺してはいないから」

私はいった。

実際リアルに傷がつかないようフィールは調整してた為、程なくして血のビジョンは消滅。先に彼女の口から垂れたものもただの嘔吐物がビジョンで血に映しててたものと判明する。しかし、

「やり過ぎですわ、沙樹」

鈴音さんはいった。続けて司令も、

「確かにハングドに所属すれば死の危険性はあるわ。これが実戦ならあの子は死んでたわけだし、実際それで増田は死んだわ。けどさ、さすがに試験でアレはないわ。幾ら肉体傷つけてはいなくても、シヨツク死だつてありえたでしょ」

けど私は、

「これで死ぬなら、どっちみちハングドじゃ不採用じゃない。それに幾ら試験だからって簡単に無防備晒すような人をハングドに入れないって話よ。違う?」

と、突っぱねてやった。

言ってることは間違つてないはずだ。いまの木更ちゃんの失態はハングド加入を検討する上で大きなマイナスになったのは確実。しかし、

「アンタもね」

直後、腹部で覚える激痛。それが司令の放った腹パンと気づいた時には、私は胃からこみ上げるものを我慢しながらその場に蹲つていた。

「不必要に人殺しかけるような奴はウチの組織に要らないから」

司令はそういつて、床に転がる私を蹴飛ばした。

「ぐっ」

更に転がる私。

「沙樹ー」

こちらに駆け寄る鈴音さん。

そんなふたりを背に、司令は木更ちゃんに手を伸ばし、

「立てる?」

「は、はい……なん、とか」

未だ痛みに顔を歪ませながら、木更ちゃんは司令の手を受けて何とか立ち上がった。

「次のデュエル。何ならチェンジ受け付けるわよ?」

「いえ、私は大丈夫ですから」

司令の言葉に木更ちゃんは首を振って断る。

「いいの？ こんな試験で命を賭けなくても」

「ありがとうございます。けど、賭ける必要ありませんから」

木更ちゃんはいつもの柔和な微笑みを取り戻して。

「先輩が私を殺すつもりなんてありえませんか」

「けど、さつき」

「先ほどは加減を忘れていただけなのでしょう？ 寧ろ、増田さんとアーンさんを失って、それだけ心に余裕がないのに試験官を引き受けて下さったんです。そのお気持ちを無下にはできません」

なんて事情を知らずにのたまう。

「木更……」

その異様な程にプラス思考な言葉を聞かされ、司令は啞然となる。

私は彼女の言動に苛立ちを覚え、

「どうして笑顔でいれるのよ」

と、自力で起き上がりながら訊ねた。

「木更ちゃん、あなた死ななかつたにしても死ぬほどの痛みは受けたはずでしょ。なのに、どうしてその加害者を前に笑顔でいられて、そして私を味方してるのよ」

私だって、腹貫かれて平気でいられるなんて無理なのに。

「先輩を悪者にしたくありませんから」

木更ちゃんはいった。その柔和な表情のまま。

「もちろん、私も人間ですから、怖くないはずがありません。またあんな目に遭うかもしれないですし、いまだって先輩に睨まれて、さっきのトラウマで体震えてるんですよ、ほら」

と、木更ちゃんは貫かれた腹部に両手を当てる。確かに震えていた。いや、ここで木更ちゃんの全身がずつと怯えるように震えてたのに気づいた。

その笑顔のせいで気づかなかつたのだ。

「けど、私も覚悟と目的があつてこの場にいるのですから逃げるわけにはいきません。そして、先輩を悪者にしたまま私がハンドグド入りするのは望むものではありませんから」

だから微笑むの？ あんなに全身震えてるのに。

そういえば、屋上でも木更ちゃんは疲れ切ってたのに柔和な笑みを浮かべていた。あのときは気にならなかったけど、木更ちゃんは普段から無理してでも笑い続けているのだろうか。

それも、頬笑み慣れて、痛々しきを見せないほどに。

「この世に、そういう方は割といるそうですね」

鈴音さんがいった。

「人の特徴なんてものは千差万別ですから一概には言えませんけど」「けど？」

「心の闇を抱えてる方のパターンのひとつに、普通の人間では笑えない状態でも笑顔を出せる方がいるそうですね」

え？

「木更ちゃんが、心の闇？」

私の知る木更ちゃんは、いわゆる清純系の見た目、立ち振る舞いも丁寧で、微笑んだ顔が魅力で、力強さは足りないけど柔和で穏やかな子だ。

そして、とても間に合う子でもあった。家事ができて、気配りも上手で、聞き分けもよくて従順。程々に自分の意見はいうけど逆らったりせず、だけど許される範囲で相手を困らせる程度の茶目っ気も見せる。

だけど、私が好意的に見てた木更ちゃんが全て作りものだとしたら、心の闇を隠す為の仮面だったとしたら、私は木更ちゃんの何を見てたのだろうか。屋上で彼女が言っていた「腹黒くない」も嘘だったのか。

私は彼女のことを何も知らなかったのだ。彼女を機械的で不気味と称する彼女のクラスの子たちよりずっと。

「私はもう大丈夫ですから、実技試験の続きをお願いします」

木更ちゃんはいうも、今度は周囲のほうが動揺している。

程々に感情豊かにみえてた彼女の思考が、いまは全く読めない。機械的とはよくいったもので、「円滑な対人と進行」というプログラミングに沿って動いている人間を相手にしてるかのよう。

感情を感じさせないのだ。笑顔からも、一見自然に見える言動から

も。

「分かったわ、司令も鈴音さんも、それでいい？」

いつもの私なら、その本心を引き出しワンナイトラブにとか言っただんたろうけど、いまの私にそんな余裕はない。

心が折れたままだからか、“レズの肌馬”になる前のキャラに戻ってるせいか、それだけ木更ちゃんの正体にシヨツクを受けてたからか。

「霧子さん、私からも、もう一度沙樹にチャンスを与えてあげてくださいませ」

鈴音さんが頭を下げると、

「いいわ」

司令がいった。

「ただし鳥乃、今度は木更を殺しかねないことはしないように」

「分かってるわ」

私はうなずき、

「私だって、ここでハンドを辞めるわけにはいかないって話だし」
そういつて私は木更ちゃんに向き直る。

そして、

『デュエル』

私たちは同時に口にした。

沙樹

LP4000

手札5

□□□□□□

□□□□□□

—□□—□□—

□□□□□□

□□□□□□

木更

LP4000

手札5

今回のデュエルは、前回の敗者に先攻後攻の決定権がある。そして、このデュエルは変則マッチ戦として受理されたらしく先ほど一度ライフが0になった木更ちゃんのフィールは全損していいい。

「先攻を頂きます」

木更ちゃんは宣言しながら手札を5枚引き抜く。その際、いきなり結構な量のフィールを初期手札にぶち込んだのが見えた。

恐らく、木更ちゃんの手札はかなり『完璧な手札だ』状態のはず。「いきますね」

木更ちゃんは早速手札からカードを2枚私に見せると。

「私はスケール1の《クリフオート・アセンブラ》とスケール9の《クリフオート・ツール》でペンデュラムスケールをセッティング！」

木更ちゃんの左右に光の柱が並び立つと、それぞれの内側にクリフオートモンスターが昇っていく。

「これで私はレベル2と8のクリフオートモンスターを同時に召喚が可能。ペンデュラム召喚！ 来てください、私のモンスターたち」

上空に時空の穴が発生すると、中から3つの光が降り立ち、3体のクリフオートに姿を変える。

「私が召喚したのは《クリフオート・エイリアス》2体、そして《クリフオート・ゲノム》になります」

Pゾーンを埋めて、いきなり3体のPモンスターの召喚。しかし、これで木更ちゃんの手札はゼロだ。

でも、Pゾーンに置かれてる《クリフオート・ツール》には、「ツールのP効果。ライフを800払ってデッキからクリフオートを手札に加えます。私はこの効果で《アポクリフオート・カーネル》を

サーチ」

カーネルをサーチって、まさか。

「私は《クリフオート・エイリアス》2体と《クリフオート・ゲノム》をリリース。アドバンス召喚。プログラム実行、クリフオート・ドット・エグゼ。起動せよ、《アポクリフオート・カーネル》！」

3体のモンスターが光の粒子になって消え、出現したのはまるで要塞かのような巨大なモンスター。そのレベルは9。

確か《アポクリフオート・カーネル》は黒山羊の実に狙われ、スタジオミストに匿って貰う原因にもなった彼女の切り札にしてファイナル・カード。そんなカードをまさか初手で、それも手札をフルで使った出してくるなんて。

「私はこれでターンを終了します」

木更ちゃんの強烈な初手が終わる。しかし、それでは終わらず、

「そのターン終了時、アセンブラのP効果。私がアドバンス召喚の為にリリースしたクリフオートの数だけカードをドロウします」

「あ」

「私はこれでカードを3枚ドロウします」

ハンドレスだったはずなのに、一気に手札を肥やす木更ちゃん。

そういえば、私が前にデュエルしたときも、このカーネルとアセンブラで詰み同然になりダーク・ドロウを使ったのだ。しかも、今回は初手で。軽く悪夢を覚えそうな光景である。

「私のターン、ドロウ」

カードを引くも、私の手札にはいますぐカーネルを対処できるカードはない。

あのモンスターは攻撃力は2900な上、魔法・罠・レベルもしくはランクが8以下のモンスター効果を受けず、1ターンに1度《心変わり》効果を使ってくる極悪カード。下手なデッキだと、この1枚を対処する為にリソースを全て注ぎかねない上に、機会を待つにも上手く耐えないと希望の目を根こそぎ奪われかねない。

(なら)

私は手札からカードを2枚選び、ディスクに差し込んだ。

「私はこのターン、モンスターを召喚しない。カードを2枚セットしてターンを終了するわ」

私の前方に2枚の裏側表示のビジョンが浮かび、すぐさま手番は木更ちゃんに戻る。

沙樹

LP4000

手札4

□「《伏せ》」「《伏せ》」□□

□□□□□□

—□—□—

□□□□「《アポクリフオート・カーネル》」□

「《クリフオート・ツール》」□□□□「《クリフオート・アセンブラ》」

木更

LP3200

手札3

一方、外野でも、

「あれが鳥乃を倒したっていう木更のフィール・カードね。何というかアレね。初手ラスボス」

司令の呟きに、

「その通りな性能なのがまた恐ろしいですわ」

と、鈴音さんは同意し、

「沙樹にとつてもプレッシャーですわね。自分を負かした盤面に初手から立ち会うんですもの、けど」

「まあね。幾らメンタルにガタが来てるとはいっても、前回と違って手札に余裕がある以上ここを乗り越えられないようなら素でハンドは諦めて貰うわ」

と、更にプレッシャーをかけてくる。

「私のターン、ドローします」

木更ちゃんはカードを引くと、

「まずはツールの効果です。800ライフを払って、デッキから《クリフオートダウン機殻の凍結》を手札に加え」

木更 LP3200↓2400

忘れずサーチを行った後、

「《クリフオート・アーカイブ》を通常召喚します」

と、新たなクリフオートを場に出す。つて、EXデッキからP召喚できるのにどうして？

「そして、このまま《クリフオート・アーカイブ》で先輩に直接攻撃します」

アーカイブから一本の光線が私に向けて放たれた。そこへ、クリボーを垂らした一機の偵察機が現れ、攻撃を代わりに防ぐ。

「手札から《クリ瑞雲》を捨てて効果発動。私の場に幻獣機トークンを特殊召喚し、代わりにこのトークンと戦闘を行って貰う。そしてこの戦闘では幻獣機トークンは破壊されないわ」

そしてカーネルの攻撃を幻獣機トークンで受ければ、このターンは耐えられる。

「やっぱり、幻獣機トークンで防いできましたね」

そこへ木更ちゃんの言葉。

「え」

読まれてた？

「ごめんなさい、ハングドに記録されてる先輩のデュエル戦歴はすべて確認させて頂きましたので」

「はア？」

反応したのは司令である。

「ちよ、木更アンタ。どうやってそのデータ入手したのよ。ハングドだってセキュリティティガバガバじゃないのよ？」

慌てる司令に木更ちゃんは、あの柔らかな顔で。

「昨日ハングドのパソコンから先輩と通信していたときに、《アポクリフオート・カーネル》のファイルで直接」

「な……」

そういえば、木更ちゃんは元々かすが店長のマンションのセキュリティをハッキングして突破するようなファイルの持ち主だったのだ。タブレットから回線を繋いでハッキングするならともかく、起動中のパソコンに直接手を出したのなら何とかなってしまうのかもしれない。

そもそも何故か神簾までも情報を色々入手してたようだし、あっちは忍者のおかげかもしれないけど。

「と、とりあえず。ハングドで雇う上でハッカーや斥候の適正が高い

ことが発覚しましたわね」

鈴音さんが頭を抱えいった。

「確認した所ですけど、鳥乃先輩は幻獣機トークンを使っての防御力が高いようでしたから今回も直接攻撃に対し使ってくるものと思っ
てました」

そう木更ちゃんはいうと、

「《アポクリフオート・カーネル》で攻撃はしません。メインフェイズ
2に移行します」

と、宣言。

「《アポクリフオート・カーネル》のモンスター効果、ターン終了時
で幻獣機トークンのコントロールを得ます」

破壊せず、カーネルの効果でモンスターを奪ってきた木更ちゃん。
しかし、すでにモンスターの通常召喚は終わったはず。なら一体何を
？

「これで、私のフィールドにはアーカイブとトークンで機械族が2体」
木更ちゃんはそつと手を伸ばす。すると、彼女を基点に眩い光が放
たれ、瞬く間に辺りは真っ白の世界に切り替わる。

その中心から、木更ちゃんはいった。

「かすが様に届け、私のサーキット！」

『えっ!?!』

驚き声を発したのは、私たち3人全員だった。

木更ちゃんの真上にリンクマーカールが出現する。いまの私でさえ
「ここにきてかすが様なの?」と言いたくなる口上はともかく、これは
リンク召喚。

「召喚条件は機械族モンスター2体。私は《クリフオート・アーカイ
ブ》と幻獣機トークンをリンクマーカールにセット。プログラム起動、
クリフオート・ドット・エグゼ。リンク召喚、解放せよリンク2、《クリ
フオート・ゲニウス》！」

光の世界が終わると同時に出現したのは、クリフオートの中から一
体の黒い精霊が半身抜け出たモンスターの姿。攻撃力は1800。

「霧子さん! あのカード、フィールド・カードですわ」

鈴音さんが即座に解析を終え、いった。

「ちよ、木更が持ってたフィール・カードってカーネルだけじゃなかったってこと?」

驚く司令。

まさか、ここにきて新たなフィール・カード、それもリンクモンスターがくるとは思わなかった。

「更に、私はここでペンデュラム召喚を宣言します。再び来て下さい、私のモンスターたち。《クリフオート・ゲノム》! 《クリフオート・アーカイブ》!」

そしてゲニウスのリンク先にEXデッキから2体のクリフオートが召喚される。

「ここで《クリフオート・ゲニウス》の効果が発動します。このカードのリンク先にモンスター2体が同時に特殊召喚された時、私はデッキからレベル5以上の機械族モンスター1体を手札に加えます。私を手札に加えるのは2枚目の《クリフオート・ツール》」

と、デッキから目当てのカードを探し、木更ちゃんは手札に加える。「生前の増田さん曰く木更さんはデュエルの腕は並程度だそうですわ」

「ここで、鈴音さんと司令の会話が耳に届いた。

「このターン、木更さんはEXデッキのクリフオートをペンデュラム召喚できる状況でわざわざアーカイブを通常召喚してましたわ。私のはあの時プレイングミスとってたのですけど」

「最初から鳥乃のトークンを使うつもりで手札のクリフオートを使つた」

「ええ」

「その結果、リンクモンスターを介して2体のモンスターをEXデッキから呼び出しサーチまでやってのけた。相当デュエルの腕が上がったってわけね」

「いえ、問題は別にありますわ。考えてみてくださいませ、そもそも沙樹の戦歴を調べるために『昨日の時点で』データを収集してたのですわ」

「あ、滅茶苦茶研究する時間あるじゃん」

「そこじゃないですわ」

鈴音さんの呆れた声。

「そこも正解ですけど、私が言いたいのは。……この実技試験まで、それも試験官に沙樹が選ばれるまで全て木更さんの計画のうちだったのでは、ということですよ」

「ちよっ」

驚く司令。しかし、

「そしてカードを2枚セットしてターンを終了します」

木更ちゃんのターン終了宣言。会話が凄く気になる内容に入りだしたのだけど、これ以上耳を傾ける余裕はない。

しかも、ここにきて2枚のセットカード。恐らく1枚は《クリフオートダウン機殻の凍結》なのだろうけど。

「なら、こっちもターン終了時に速攻魔法《スケープ・ゴート》を発動。場に羊トークンを4体特殊召喚」

「えっ!？」

今度驚いたのは木更ちゃんだった。このカードは間違いなくハンドの戦歴にない、私が初めてデュエルに使ったカードだからである。

沙樹

LP4000

手札3

□□《伏せ》□□

□《羊トークン》□《羊トークン》□《羊トークン》□《羊トークン》□

—□□—《クリフオート・ゲニウス(木更)》—

□□《クリフオート・アーカイブ》□《アポクリフオート・カーネ

ル》□《クリフオート・ゲノム》

□《クリフオート・ツール》□《伏せ》□《伏せ》□《クリフオート・

アセンブラ》

木更

LP2400

手札3

「そして、私のターン」

私はカードを1枚引き抜き、早速羊トークンを1体フィールドから剥がす。

「座標確認、私のサーキット。ロックオン！」

「っ!？」

木更ちゃんは更に驚き、

「サーキット、ということとは先輩もまさかリンク召喚を」

「召喚条件は通常モンスター1体。私は羊トークンをリンクマークーにセット」

上空にリンクマークーが出現した。ただし、木更ちゃんと違うのは辺りの風景を書き換える事はなく、位置も前方、大体私と木更ちゃんの位置のちょうど真ん中に浮かび上がっている。そこに羊トークンがカタパルトから射出されるように地を滑り飛び上がり、音速を超える演出でマークーに搭載された。

「リンク召喚！ 起動せよ、リンク1《リンク・スパイダー》！」

こうして出現したのは、以前増田から勝手に借りて神籬とのデュエルで使った電子の蜘蛛。現在は増田を取り込んだ事で私のカードとなっている。

「そして続けて、座標確認、私のサーキット。ロックオン！」

「二度目!？」

またまた驚く木更ちゃん。

「召喚条件はモンスター2体。私は羊トークン2体をリンクマークーにセット」

同じように出現したリンクマークーに、今度は2体の羊トークンが射出され、マークーに搭載される。

「リンク召喚！ 起動せよ、リンク2《セキュリティ・ドラゴン》！」

2体目のリンクモンスターは、電子で出来た小型の竜。

《セキュリティ・ドラゴン》のモンスター効果。このカードが相互リンク状態の場合に1度、相手モンスター1体を持ち主の手札に戻す」この効果で私は《クリフオート・ゲニウス》をバウンスしようと思っ

たけど、

「ですけど、《クリフオート・ゲニウス》は魔法・罫、そして自身以外のリンクモンスターの効果も受けません」

と、木更ちゃんがあるので。

「だったら《クリフオート・アーカイブ》を手札に戻して貰うわ」

この効果ならカーネルを戻す選択もできた。けど、何となくこの選択は駄目な気がしたのだ。このカードはちゃんと破壊し墓地に置かないといけないって。

「そして、三度目の座標確認、サーキットロックオン！」

再びリンクマーカーを出現させる。さすがに今度は木更ちゃんも予想してみたいで驚かれなかった。

「召喚条件は効果モンスター2体以上。私は《リンク・スパイダー》と《セキュリティ・ドラゴン》をリンクマーカーにセット。リンク召喚！

起動せよ、リンク3 《デコード・トーカー》！」

こうして出現したのは、ミストラン戦で増田も使った、彼のフェイバリットだったモンスター。

「そして《幻獣機メガラプター》を通常召喚」

続けて1体の幻獣機を《デコード・トーカー》のリンク先に召喚しておく。攻撃力は1900。

「《デコード・トーカー》はの攻撃力は、このカードのリンク先のモンスターの数×500アップするわ。いまこのモンスターのリンク先には羊トークンとメガラプターの計2体、それにつき攻撃力は1000ポイントアップする」

《デコード・トーカー》 攻撃力2300↓3300

この効果によって、《デコード・トーカー》の攻撃力は3000以上。これでカーネルを戦闘破壊可能になった。

「じゃあ行かせて貰うわね。《デコード・トーカー》で《アポクリフオート・カーネル》を、《幻獣機メガラプター》で《クリフオート・ゲニウス》をそれぞれ戦闘破壊」

私が宣言すると、まず《デコード・トーカー》がカーネルに飛び掛かり、手に持つ剣で横薙ぎに両断し、続けてメガラプターが機銃の雨

を降らせてゲニウスを蜂の巣にし、破壊する。

木更 LP2400↓2000↓1900

「私はこれでターン終了するわ」

まだ木更ちゃんの場合には《クリフオート・ゲノム》が残ってるけど、それも対処するだけの手札は残念ながら持ち合わせてなかった。

とはいえ。

「一応、増田さんのカードは使いこなしてるみたいですね」

と、鈴音さん。一応アピールには成功したらしい。

「じゃなければ浮かばれないわ」

けど司令は不満のようで煙草を一本啜え、煙を吐いた。

沙樹

LP4000

手札3

□□《伏せ》□□

□《羊トークン》□□《幻獣機メガラプター》□□

—《デコード・トーカー》(沙樹)—□□—

□□□□《クリフオート・ゲノム》

□《クリフオート・ツール》□《伏せ》□《伏せ》□□《クリフオート・

アセンブラ》

木更

LP1900

手札4

「私のターン、ドロウしますね」

しかし木更ちゃんはカーネルを倒されたというのに、柔和な表情を崩さずカードを1枚引き抜く。それが無言のプレッシャーになると分かってやってるのか、もしくは本当にショックという感情を刺激されなかったのか。

「私はここで罨カード《機殻の凍結》クリフオートダウンを発動。このカードは発動後、機械族の効果モンスターとして場に特殊召喚されます」

その上、この《機殻の凍結》クリフオートダウンは1体で3体分のリリース素材になるのだけど、すでにカーネルは破壊済。問題はない、と思いきや。

「再びかすが様に届け、私のサーキット！」

まさかの再リンク召喚？！

「召喚条件は機械族モンスター2体。私は《クリフオート・ゲノム》と《機殻の凍結》をリンクマーカーにセット。プログラム起動、クリフオート・ドット・エグゼ。リンク召喚、解放せよリンク2、《クリフオート・ゲニウス》！」

しかも、また《クリフオート・ゲニウス》だった。

「2枚目の同名フィール・カード!?」

司令が驚く。続けて鈴音さんが、

「しかも解析した所複製フィール・カードではありませんわ」

つまり、木更ちゃんは本物のフィール・カードでかつ同じゲニウスを最低2枚所有していることになるのだ。

「そして再び来てください私のモンスターたち。EXデッキから《クリフオート・エイリアス》と《クリフオート・アーカイブ》をペンデュラム召喚。これにより、ゲニウスのリンク先に2体同時にモンスターが特殊召喚された事で効果を発動、デッキから」

と、木更ちゃんはデッキから目当てのレベル5以上の機械族を探し当て、

「《アポクリフオート・キラ》を手札に加えますね」

と、思考停止したくなるような言葉をさらっといった。

え？ いま、アポクリフオートって？ しかもカーネルではなくキラっていった？

「《クリフオート・ゲニウス》のもうひとつの効果を発動します。私のモンスターと先輩のモンスターを1体ずつ対象として発動し、ターン終了時まで効果を無効にします。私が選択するのは《クリフオート・エイリアス》と《デコード・トーカー》」

ゲニウスはそんな効果まで持ってたらしい。だけど。

「自分フィールドのカードを対象とする相手の魔法・罠・モンスターの効果が発動した時、このカードのリンク先の自分のモンスター1体をリリースして、……あ」

しまった。そうじゃないか。

「はい。《クリフオート・ゲニウス》はリンクモンスターの効果を受けません」

《デコード・トーカー》には、リンク先のモンスターをリリースする事で、私のカードを対象する効果を無効にして破壊できる。しかし、ゲニウスはその効果を受け付けけないのだ。

「では、2体の効果をターン終了時まで無効にしますね」

《デコード・トーカー》の体を闇が絡みつき、効果を封じられる。これにより、

《デコード・トーカー》 攻撃力3300↓2300

攻撃力のほうも元々の数値へとダウン。一方、《クリフオート・エイリアス》のほうは。

《クリフオート・エイリアス》 攻撃力1800↓2800

と、効果が無効化され攻撃力が寧ろアップしている。

「装備魔法《機殻サクリフオートの生贄》を《クリフオート・アーカイブ》に装備します。このカードは装備モンスターの攻撃力を300アップし、戦闘で破壊されず、クリフオートをアドバンス召喚する際に2体分の素材にできます」

そして、木更ちゃんの手札にはさつきサーチした。

「私は《クリフオート・アーカイブ》と《クリフオート・ゲニウス》リリース。このモンスターは特殊召喚できず、自分フィールドのクリフオートを3体リリースしてのみ通常召喚できます」

予想通り、出してくるらしい。

「アドバンス召喚。プログラム実行、クリフオート・ドット・エグゼ。起動せよ、《アポクリフオート・キラール》」

2体のモンスターが光の粒子に消え、代わりに現れたのはカーネルとはまた別の巨大な要塞のようなクリフオート。レベル10、攻撃力3000。

「《アポクリフオート・キラール》のモンスター効果。このカードは魔法・罠カードの効果を受けず、このカードのレベルよりも元々のレベルまたはランクが低いモンスターが発動した効果も受けません」

ここまではカーネルと同じ効果。予想できたもの。しかし、

「そして、このカードがモンスターゾーンに存在する限り、特殊召喚されたモンスターの攻撃力・守備力は500ダウンします」

「……は？」

私は、つい半眼でガン付けるようにいった。普段の私ならそこまでヤンキーな反応はしなかったと思うけど。

それでも、カーネル耐性のレベル10で、攻撃力3000のくせに、特殊召喚されたモンスターの攻守が500下がる？ それだけでカーネルが優しく感じるレベルの性能だ。効果がそれだけだったなら嬉しいのだけど。

《クリフオート・エイリアス》 攻撃力1800↓2800↓2300
《デコード・トーカー》 攻撃力2300↓1800

現状の救いといえば、この効果は木更ちゃんのクリフオートにも効果が及ぶことだろうか。

「墓地に送られた《機殻サクリフオートの生贄》の効果、デッキから2枚目の《クリフオート・アセンブラ》をサーチします」

しかも、さらにクリフオートをサーチする木更ちゃん。さりげに彼女の手札には2枚目のツールとアセンブラが握られていることに。

「そしてリリースされた《クリフオート・アーカイブ》も効果を発動します。このカードがリリースされた場合、フィールドのモンスター1体を持ち主の手札に戻します。私は《デコード・トーカー》を選択します」

「なら、羊トークンをリリースして《デコード・トーカー》の効果を「残念ですけど、ゲニウスの効果で無効になってますから」

「あつ」
しまった。

「では、ここで戦闘に入ります」

《デコード・トーカー》がフィールドを離れたのを確認してから、木更ちゃんはバトルフェイズへと移行する。

「まずは《クリフオート・エイリアス》で羊トークン戦闘破壊します」

羊トークンの守備力は0、耐えられるはずもなくエイリアスの光線を浴び一瞬にして消し炭に変わり、

「《アポクリフオート・キラー》で《幻獣機メガラプター》を攻撃します」

トークンを失った所へ、キラーの巨体が起動、巨大なビーム光線をメガラプターに向けて放つ。しかし、私が伏せカードを使用すると、そのホログラムのデコイが出現し、攻撃の囷となる。

「エアリアル・チャージ《空中補給》を発動。1ターンに1度、このカードは場に幻獣機トークンを生成するわ。そして《幻獣機メガラプター》はトークンが場にいる限り戦闘・効果では破壊されない」

「けど、戦闘ダメージは受けていただきます」

ビジョン上ではトークンが代わりに受けたように映ったものの、ルール上は間違いなく《幻獣機メガラプター》が攻撃を受けた。結果、攻撃力の差が私のライフから削られる。

沙樹 LP 4000 ↓ 2900

「そして、メインフェイズ2に入って《アポクリフオート・キラー》のモンスター効果」

やっぱりキラーは他に効果を持っていたらしい。

「この効果によって、相手は自身の手札・フィールドのモンスター1体を墓地へ送らなければなりません」

は？

「なにそれえぐい」

言ったのは私ではなく司令である。私は再びガン付けながらも、最早声さえ出ない。

「幻獣機トークンを墓地に送るわ」

フィールドから消滅するトークン。《エアリアル・チャージ空中補給》のコストが払う余裕がなくなるものの仕方ない。

「私はこれでターンを終了します。この時、私は《クリフオート・アセンブラ》のP効果でカードを2枚ドロウし、手札が7枚になった為いまドロウした《クリフオート・シエル》を捨てますね」

そして肥やされる木更ちゃんの手札。むしろ肥やされ過ぎる木更ちゃんの手札。

気づくと4枚も開いてる私とのハンドアドに、このままだとキラー

を対処しても手遅れなのでは思わせられる状況に、私は《空中補給》エアリアル・チャージを墓地に送りながら、脳裏に敗北の二文字を浮かばせずにはいられなかった。

沙樹

LP2900

手札3

□□□□□□

□□《幻獣機メガラプター》□□

—□—□—

□□《クリフオート・エイリアス》《アポクリフオート・キラー》

□

《クリフオート・ツール》《伏せ》□□《クリフオート・アセ
ンブラ》

木更

LP1900

手札6

「私のターン」

言いながら、私はこのターンで必ずキラーを倒そうと自らの手に闇色の輝きを浮かばせる。

「あ」

反応したのは木更ちゃんだ。続けて鈴音さんが、

「沙樹！ まさか、実技試験で使うつもりなのですか？」

「負けるわけにはいかないもの、当然って話よ」

私は返事し、

「暗き力はドローカードをも闇に染める！——ダークドロ！」

手持ちのフィールを総動員し、私はカードを1枚引き抜く。

「私はスケール0の《幻獣機カイテング》とスケール5の《幻獣機アベンジャガー》をPスケールにセッティング」

そして引いたのがこの《幻獣機カイテング》である。木更ちゃんの時同様私の左右に光の柱が並び立つと、それぞれの内側にモンスターが昇っていく。

「そのカードは」

と、木更ちゃん。そういえば、このアベンジャガーは木更ちゃんとのデュエルでダークドロワーして創造したのだった。

「これで私はレベル4のモンスターを同時に召喚可能。生と死の境界よ。いまこそ歪を開き、幻世より甲板を下ろせ。ペンデュラム召喚！ 発進せよ、私のモンスター！」

私が口上を終えると同時に、上空から光の穴が開き、中からひとつの靈魂が舞い降りてフィールドでモンスターへと姿を変える。

そのモンスターは、つい先ほど木更ちゃんの腹を貫いた《幻機獣力ジキソード》。

「あっ」

一瞬だけ、木更ちゃんからついに笑顔が消え、その表情が恐怖に染まる。

「そして《幻機獣カイテング》のP効果。私がペンデュラム召喚に成功した時、フィールド上の魔法・罫を全て破壊する。そして、私の場の幻機獣モンスター1体につき互いのプレイヤーは400ポイントのダメージを受けるわ」

光の柱が私たちのフィールドに傾くと、中のモンスターは靈魂へと姿を変え、床目掛けて突撃、爆発する。

直後、木更ちゃんは最後の伏せカードを表向きにして、

「罫カード《^{アポクリフオート}隠されし機殻》を発動。EXデッキから《クリフオート・エイリアス》と《クリフオート・ゲノム》を手札に加えます」

更に肥やされる木更ちゃんの手札。伏せカードの除去は意味のないものに終わってしまったけど、

「私の場の幻機獣はメガラプターにカジキソード。計800ダメージが双方に入る、っ」

爆発の余波は私たちにまで及び、無意識にフィールドが入ってたらしく爆風に巻き込まれ私は自らのフィールドで一度床に倒れる。ダークドロワーでフィールド量が激減してたおかげで、爆風のリアル化が弱くて気づかなかったのだ。

沙樹 LP2900↓2100

木更 LP1900↓1100

「ら、ライフが……」

呟く木更ちゃんの声。舞い上がる煙のビジョンが薄れると、彼女も一度床に倒れており、そこからゆっくりと起き上がる姿が見えた。

「もちろんこの程度じゃないって話よ。続けてカジキソードの効果。このモンスターはユニオンだから、《幻獣機メガラプター》に装備」

前回のデュエル同様、カジキソードは一度分解されメガラプターの追加装甲となっていく。最後にメガラプターの口が開くと、そこに剣のような吻が微妙に形状を変えつつ搭載される。

「カジキソードを装備したメガラプターの攻撃力はレベル×200ポイントアップする。さらに、カジキソードがモンスターの装備カードとなった際、場に幻獣機トークンを生成し、メガラプターも場にトークンが発生した場合に幻獣機トークンをさらに1体特殊召喚するわ。これにより幻獣機トークンの数は2体、メガラプターのレベルは10」

伝え終わると同時に、デュエルディスクは効果による攻撃力の変動を処理し終え、

《幻獣機メガラプター》 攻撃力1900↓3900

一気に攻撃力を4000手前にまで上昇させる。

「っ」

その攻撃力を前に、今度こそ木更ちゃんから完全に笑顔が消え、目を見開き「そんな……」と呟いたかのような顔へと変貌する。

先ほど「ライフが」と木更ちゃんが呟いた通り、彼女のライフはカジキソードを介することでキル圏内に入っているのだ。

《バトルフェイズ。《幻獣機メガラプター》で《アポクリフオート・キラー》を攻撃」

私は攻撃を宣言した。

「え?」「え?」「え?」

直後、三者からそれぞれ同じ反応が飛ぶ。

メガラプターに搭載された長砲の吻から、大型の弾丸が無数に掃射される。一撃一撃受けるほどにキラーはよろめき、煙をあげ、そして

最後に爆発した。

「《アポクリフオート・キラー》爆殺。そして、これで木更ちゃんのライフは」

ゼロに。

木更 LP 1100 ↓ 200

「え？」

ならなかった。

「ど、どうして」

もしかして木更ちゃん何か手札誘発を？ しかし、どうやら彼女の手札が減ってる様子は見られない。墓地に変なカードが落ちてた様子もないし、一体どうして。

「キラーに攻撃では駄目なんです先輩」

木更ちゃんが言った。どこかすまなそうな、けど真つすぐ見据えた視線で。

「やっぱり、キラーに効果が」

「いいえ」

木更ちゃんは否定し、

「魔法や罫を使ったわけでも、手札誘発を使ったわけでも、墓地効果でもありません。普通に攻撃力3900で攻撃力3000のキラーを攻撃した所で、私のライフ1100を削りきることはできません」

あ。

「先ほどの攻撃は、《クリフオート・エイリアス》を狙うのが正解でした」

こちらなら攻撃力2300なので、十分相手のライフを0にすることが出来る。恐らく木更ちゃんは、そしてみんなはエイリアスを狙うものと見てたのだ。それを私が凡ミスで。

「っ」

何て様だろうか。私は小さく床を踏み抜いて当たる。こんな姿を、よりもよって司令や鈴音さんに晒してしまうなんて。

「カードを1枚セット。ターン終了」

私は最後の手札である《死者蘇生》を伏せてこのターンを終える。

「先輩」

木更ちゃんが話しかけてきた。笑みも怯えもなく、代わりに真つすぐ私を見据えて。

「どうして、そんな躍起になってるのですか？」

「え？」

「ずっと、私は先輩が増田さんやアンさんのシヨックで動転してるのだと思ってました。私をフィールで攻撃したときも、先輩が本当はデュエルできる状態ではなくて、だからつい攻撃的になってと」

「その通りよ」

だから何だというのだろうか。

「いえ、それだけはない気がします」

木更ちゃんはいった。

「それでも試験されてるのは私なのでから、私のほうが必死にならなくてはいけないのに。まるで先輩のほうが勝たなくてはいけないと追い詰められてるみたい。私にはそう見えたんです」

「それは……」

私が口ごもると、

「ああ悪い、それ私が原因だわ」

司令がいった。

「このデュエル、鳥乃は鳥乃でハングド継続を賭けた試験になってるのよ。あんまり酷いデュエルしたらクビってね」

「え、本当なのですか？」

驚き訊ねてくる木更ちゃん。

「本当よ」

私はいった。

「だから負けるわけにはいかなかったって話。ここで木更ちゃんに二度も負ける程度の決闘者はハングドに要らないじゃない。それに木更ちゃん、私の戦歴見たなら最近ガタガタなの知ってるでしょ？」

「……はい」

僅かな間の後、うなづく木更ちゃん。

「それでもって前線を離れてサポートに入ったら、その私の不手際で

増田とアンちゃんがああなった。私が司令や鈴音さんの立場ならとつくに戦力外通告してる所を、こうやってチャンスを与えられるってわけ」

そこまで言ってから、私は自虐的に笑ってみる。

「ま、でもさっきのミスで私の手崖から離れたわ。私はここでさよならだけど、入れるといいわねハングド」

「そんな、そんなこと私は望んでは……っ」

木更ちゃんは訴えようとし、出かかった言葉を嚙む。そして、

「いえ、まだ大丈夫。私のターン、ドローします！」

木更ちゃんは、いままで見たこともない程力強い言葉でカードを引き抜いた。

沙樹

LP2100

手札0

□□「《空中補給》」「《幻獣機カジキソード（装備）》」「《伏せ》」

□□「《幻獣機トークン》」□□「《幻獣機メガラプター（装備）》」「《幻獣機

トークン》」□□

—□□—□□—

□□「《クリフオート・エイリアス》」□□

□□□□□□

木更

LP200

手札9

「私はスケール1の《クリフオート・エイリアス》とスケール9の《クリフオート・ツール》でペンデュラムスケールをセッティング」

再び木更ちゃんの左右にそびえる光の柱。

「先輩が消える、それでは意味がないんです」

木更ちゃんはいった。昂る感情を抑えたような、静かで落ち着いた機械的な声色。

「私が入ると決意したのは鳥乃先輩のいるハングドです。決して先輩と入れ替わりに入る組織ではありません」

ゆっくり、木更ちゃんの手が私に伸ばされ、

「友達として先輩を助けたくて、手を差し伸べたくて、今度は私が先輩を支えたいと思って。——ペンデュラム召喚、来てください。私のモンスターたち」

彼女の語りの合間に出現したのはEXモンスターゾーンも含めて5体のクリフオート。元々いるエイリアスを含めて使用可能な6つのゾーンが全て埋まった。

「そして、少しでも増田さんの穴を埋めて、増田さんの遺志を継いで、先輩を支援しようと、そう思っています。——私は2体の《クリフオート・アーカイブ》と《クリフオート・ゲノム》をリリース」

3体のクリフオートが光の粒子に変わって消滅すると、

「ですから、そんな希望をつかみ取らせて頂きます」

伸ばされた手はやさしく宙を掴み、胸元に引き寄せられる。そして、

「プログラム実行、クリフオート・ドット・エグゼ。起動せよ、《アポクリフオート・キラー》」

木更ちゃんは2体目の《アポクリフオート・キラー》を召喚したのだった。

「リリースされた2体の《クリフオート・アーカイブ》と《クリフオート・ゲノム》の効果。これらのカードがリリースされたことで、先輩の幻獣機トークン2体をバウンスし、先輩の伏せカードを破壊します」

《アポクリフオート・キラー》から3つの光線が放たれ、トークンと伏せた《死者蘇生》を消滅させる。

「続けて《アポクリフオート・キラー》の効果。先輩は手札かフィールドからモンスター1体を墓地に送らなければなりません」

選択肢はひとつ。メガラプターをカジキソードごと墓地に送るしかなかった。

これで、私の場合はガラ空き、手札はゼロ。

「解析完了、この2枚目の《アポクリフオート・キラー》は複製ファイ

ル・カードですわ」

鈴音さんがいった。

「はい」

木更ちゃんはうなずき、

「生前、増田さんが護身用にとこつそり複製してくれました。そして、キラーを複製した際に副産物で発生したのが《クリフォート・ゲニウス》です。ですからこのカードは、鳥乃先輩が使ったサイバースと同じ、増田さんの想いを継いだカードになります」

つてことは、木更ちゃんの下にも増田の形見が。

「高村さん、鈴音さん」

ここで木更ちゃんはふたりに話しかける。

「今日、実技試験を見てきて私のデュエルと情報収集能力に御不満はありましたか？」

「いえ、想像以上ですわ」

鈴音さんがいった。すると木更ちゃんは、

「では」

と、柔和な顔で、

「元々先輩は万全の状態ではありません。そんな状態で、私に何度も追い詰められたのですから、きつと強いプレッシャーを受け続けていたはず。そう考えると先ほどのミスは十分考えられる失敗と思うのですけど、如何でしょうか？」

ここにきて、自分を売り、自分を高く評価し、私のメンタルをデイスリ、それを使って私をフォローしようとする木更ちゃん。

実際は、カーネルもキラーも割と適切に対処してたのだから、私自身は追い詰められたしプレッシャーに悩まされたけど、見る分にはそれほど苦戦は感じなかった可能性がある。だけど、いま現在私は手札もフィールドもなく、木更ちゃんの場合にはキラーを含む4体ものクリフォートに、手札もいまだ2枚残している。

結果的に木更ちゃんの圧倒的勝利を物語る構図を前にすることで、彼女の自分あげあげのアピールに説得力が生まれていた。

「つまり、今回のデュエルで鳥乃は登録を抹消されるほど無様な負け

を曝していない、そう言いたいわけね」

司令がいった。

「はい」

木更ちゃんほうなずく。

「なら条件がひとつあるわ」

司令はちらつと視線を鈴音さんに。そんなアイコンタクトを受け取ると、

「木更さん、これから何と少しでも沙樹を支え立ち直らせてあげてくださいませ。言いたくはありませんけど、いまの心の折れた沙樹ではハングドを名乗り続けるのは難しいのは事実ですもの」

「はい。言われるまでもなく」

木更ちゃんはいった。

「ならもう茶番はいいわね。実技試験は文句なしの合格、鳥乃もウチとの契約は更新。以上だから藤稔、さっさとデュエルを終わらせちゃって」

と、司令は新たな煙草を口に啜える。また、お客様からメンバーに変ったからだろうか、いままで木更と呼んでいたのが藤稔と苗字に変っている。

「わかりました」

キラーの攻撃が、私の体を飲み込む。

そこ一撃はフィールでリアル化しており、だけど痛みとは無縁の、どこかほっとする温かさだった。

沙樹 LP2100↓0

沙樹

LPO

手札0

□□「空中補給」□□

□□□□

—□□—「クリフオート・アセンブラ」—

□□「クリフオート・エイリアス」□□「クリフオート・アセンブラ」

「アポクリフオート・キラー」

『《クリフオート・ツール》』□□□『《クリフオート・エイリアス》』

木更

LP1000

手札2

「おふたりとも、元々ここを追い出す気なんてなかったと思いますよ？」

実技試験が終わり、現在ハングド内の木更ちゃんの部屋。私と木更ちゃんはベッドの上に腰かけていた。

増田が死んでばたばたしてたせいで、まだ木更ちゃんの荷物は置きっぱなしだ。

木更ちゃんは、いつもの柔らかな笑みで、

「だって、凄く先輩のこと心配してましたから。特に鈴音さんなんて、あれはまるで娘を心配する母親のそれでしたもの」

「そう」

と言われても信じきれないわけだけど。まあ、ハングド継続にはなったから結果オーライではあるか。

「それに、おふたりだけではありません。昨日出会った神簇さんという方やロコさんという方も、みんな先輩を心配をしてました。いままです先輩は、ただ仕事としてではなく、下心もあつたのでしょうけど真心から皆を助けてくれました。だから、そんな先輩のピンチにみんな手を差し伸べたいんです。もちろん、私もそのひとりです」

そういえば、ロコちゃんに陽井氏に神簇。昨日今日と私は、過去に引き受けた依頼人たちから慰めや助言を貰いっぱなしではある。特に陽井氏には同じことを言われた気さえある。もっとも、まともに聞き入れたのはロコちゃんだけだったけど。

「だからハングド入りしたってこと？」

「私は私のできることをしただけですよ？」

「むしろ過ぎたことでしょ」

そんな為になんか裏世界に足踏み込むなんて。

「けど、デュエルでは先輩に勝ちました」

「スピードデュエルでは軽くあしらったけどね」

「それは今後の課題ですね」

木更ちゃんの笑みに苦みが混ざり、

「その為に先輩の戦歴まで入手して対策したのに」

あ、そういえば。

「てことは、やっぱり私が試験官になる所まで計算の内だった？」

「いえ」

木更ちゃんは否定し、

「ですけど理想の流れではありませんでしたね。どちらにしても先輩からは反対されると思ってましたので、デュエルで勝利すれば実力面で安心して頂けるかなと」

なるほど。実技試験あるなしさえ関係なく、私のことはデュエルで勝利しないといけない壁とみられてたわけだ。それを鈴音さんは深読みすぎて変に勘ぐってしまったと。

とはいえ実際、マスターデュエルの木更ちゃんは脅威だったものの、スピードデュエルだと案外大したことがなかった。任務をする上でどちらがより頻度があるかというスピードデュエルのほうなので、これは大きな不安要素になる。

「それに、元々私もこちら側の世界を何も知らなかったわけではありませんから」

「え？」

そうなの？

「まだ、かすが様と出会う前の話なのですけど」

と、木更ちゃんは語りだした。

「私には昔、双子の姉がいたんです。二卵性だからそこまで似てるわけでもありませんでしたけど。そんな姉がフィール・ハンターズに狙われて、デュエルに負けて攫われたんです。私の目の前で」

「え？」

木更ちゃんにそんな過去が。

「犯人の顔は覚えてませんが、確か髪型がオールバックの男だった気がします」

「オールバック!？」

それって、もしかして。

「ご存じなのですか？」

「知ってるっていうか、その男もしかして『魔王ディアボロス』使ったりする？」

「!? は、はい」

間違いない。あの男だ。

「木更ちゃん、いま私の体がどんな状態かとか、ハングド入りした経緯とかはすでに知ってる？」

「はい。手に入れた戦歴と一緒に」

なら私が一度死んで半分機械なのも知ってるのだろう。私はいた。

「私を一度殺した男よ」

「えっ」

驚く木更ちゃん。

「そう、ですか……」

驚いてから一回深呼吸、一度柔らかな笑みを取り戻すも、ここで笑顔はないと判断したかのように木更ちゃんはシリアスな顔になり、

「私がこの街にきたのも、かすが様を追いかけて、というのもそうですけど。実はその男を追いかけてきたのもあるんです」

「え、ということとは」

「はい。オールバックの男は、いまこの近辺にいます」

「そっか」

あの男が、またこの街にいるのか。

恐怖はあれど怨恨は残ってないつもりだった。だけど、木更ちゃんまでもが奴の犠牲になってるのなら、もし次に会ったときには必ずデュエルでリベンジを果たし、全てを聞かなくてはいけない。

とか何とか考えてた所、ふと私は再び自分の情緒が落ち着いてきてるのに気付く。もしかしたら、木更ちゃんと談話することが私にとっての特効薬なのかもしれない。

「話を戻して、それからですね。姉は無事でいつか戻ってきてくれ

るって、そんな希望を捨てないように逃さないようにしてるうちに、希望や理想に沿って物事を考えるようになったんです。いま思えば、私が機械的で不気味ってそのせいかもしれないですね。どうすれば目的に近づけるか考えて動くから、そこを重視しすぎてたまに人間味の欠けた私になってるのかもしれない」

確かに、腹を貫かれたのに笑顔を向ける木更ちゃんは理解に困った。鈴音さんでさえ心の闇を疑った。

だけど蓋を開けてみれば、心の闇は確かにあったたかもしれない。けど、彼女の本質は光だった。それも、闇を土台に更に輝く強い光。

「木更ちゃん、強いわね」

私は自虐的にいった。しかし、

「先輩も強いんですよ？ 私が先輩だったら、さすがに試験官にもならない程に潰れてると思いますから」

と、木更ちゃんはいってくれる。恐らく彼女のいう理想や目的に沿って慰めを口にしてるのだろう。本心ではないのかもしれない。しかし、彼女の言葉は妙に救われる。

「けど、私はいま何とか潰れずにここにおります」

そういって、木更ちゃんは私をそっと抱き寄せてきた。

「先輩が私の分まで傷ついてくれたから、私は無事なんです」

「木更ちゃん」

「先輩知ってますか？ 人という字は人と人が支えて合ってるんです。私も辛くなったら先輩を頼ります。ですから、先輩も私を頼っていいんですよ？ 私は理想や信念のままに動いてるだけの人間ですから、遠慮しないでください」

いまの私が人間不信気味なのを知っての言葉だろうか。木更ちゃんの言葉は下手に「私を信じて」と言われるよりよほど信頼が持てる。「まるで機械は嘘をつかないとか言ってるみたいね」

「言িয়েて妙ですね。機械がするのはプログラムに沿った計算ですか」

木更ちゃんは笑った。いつもの柔和ではなく、声に出して笑った。

「おはようございます、朝ですよ」

と、起こされて目を覚ますと、そこが家の天井ではないことに気付いた。

久々に熟睡したせいか寝ぼけること数秒、

「あ、木更ちゃん。おはよう」

私を起こしにきた声の主である木更ちゃんに挨拶しながら、そういう日は事務所で寝泊りしたのだと思いだした。

あの後、私たちは司令の運転する車で葬儀館に向かい、増田のお通夜に参加した。参列者は私たちの他に永上さんたち警察時代の仕事仲間たち。天涯孤独だったらしく家族や親戚らしき顔は見られなかった。

その帰りに、今日は葬儀館で寝泊まりするらしい司令より、今日は事務所まで寝泊まりしろと指示を受けた。戦線復帰の為に、いまは心も体も休めるのが先決。しかし職業柄ひとり暮らしの自宅では夜襲を警戒して熟睡できないのを見越して配慮してくれたのだ。

すでに明日の学校の準備は終わらせた後だったし、そんなわけで昨晩は木更ちゃんの部屋とは別の宿泊スペースを借りさせて貰った。

「朝食の準備はできてますから、着替えたらオフィスにきてくださいね」

木更ちゃんはすでに制服姿だった。エプロンを上にかけてたらそののだけど仕方ない。

私は木更ちゃんの腕を掴んで、

「オフィスに行かなくても朝食ならここに……あ、待つてブザーはやめて」

朝のイッパツと思ったのだけど、危うく防犯ブザー鳴らされそうになり私は慌てて手を放す。

「それでは先輩、待つてますから」

ブザー片手に微笑み一回、木更ちゃんは部屋から出て行った。

「おはよう」

『はよーっす』

オフィスでは、スタジオオミストの留守番兼徹夜組である構成員たちが数名、眠たげな顔して朝食を食べていた。ちらつと周りを伺ったが、司令や鈴音さんはいない。司令はいまも葬儀館だろうし、元々鈴音さんはシングルマザーで家庭があるので、有事でなければ定時で帰る形になっている。その割には主にスタジオの仕事で帰れない日も多いのだけど、昨晚は無事帰宅されていた。

「先輩、席はこちらでいいですか」

「ん、ありがとう」

木更ちゃんに促され、私は席に座って木更ちゃん手製の和朝食を頂く。

「そういえば鳥乃先輩。昨晚は一度も夜這いにこられませんでしたよね?」

隣で朝食に箸を伸ばしながら、木更ちゃんに訊ねられると、

「そういえば、そうだったわね」

疲れてたのもあったのだけど。思えば増田が死んでからの昨日一昨日とレズセンサーが反応してなかった気がする。どうやら、性欲までも一度死ぬ前に逆戻りしてたら嬉しい。

「そのままマトモになってくれたら嬉しいのに」

徹夜組のひとりである董ちゃんの言葉に、

「それは無理でした」

と、木更ちゃん。

「だって、今朝早速防犯ブザーを押しかける事態になっちゃいましたから」

『おい、ちょっとツラ貸しな』

何人かの男がギロツと睨みつける。私はそれを無視して、

「ごちそうさま」

と、食器を持って流し場へ。

「あ。そいつは俺らがやっつくから、学生組は遅刻する前に早く学校行きな」

さつき睨みつけたうちのひとりがいった。

「じゃあお願いするわ」

私と木更ちゃん、次に董ちゃんの三人は洗い物を大人組に任せ、先に私と木更ちゃん、次に董ちゃんの順番で事務所を後にした。

道中、バス停に向かって歩いてると、車を運転する神簇とエンカウントした。

曰くたつたいまアンちゃんが目を覚ましたそうで、いまから急いで病院に向かうのだとか。うっかり事故らないでよと言ってあげた所、「大丈夫よ、そう遠くないんだから」

と、全然安心できない返事。

神簇と別れた後、木更ちゃんと「学校が終わったら梓と三人でお見舞いにいこう」と約束した。

向かう病室がふたつになってなければいいのだけど。

バスに乗ると、今度は中でロコちゃんと再会した。

一昨日のアドバイスを改めて感謝を伝えた所、「そんな感謝されるほどのこと言っていないよ。あ、そうそうこの前コンビニで新しいスーツが」といった流れで、木更ちゃんも交えた珍しいトリオでガールズトークに花を咲かせた。

そうそう、事務所に置きっぱなしの木更ちゃんの荷物だけど、今度こそ放課後には木更ちゃんの家が届くそうだ。

完璧に護りきれたわけではない。けど、確かに助けることはできたのだ。だからこそ、彼女たちはそれぞれの道を歩み進んでいる。

ロコちゃんは妙子の分まで日常を生き、神簇はこれから妹と手を取り合って生きて行くだろうし、木更ちゃんはハングドに入る道を選んだ。

そして、そんな彼女たちに今度は私が助けられた。

護りきれなかった軌跡ではなく、助け続けた軌跡が実ったのだ。

そう感じた時、確かに猫俣さんやセバスチャンなど助けられなかった人はいるけど、皆が許してくれる私を少しだけ許すことができた。深い闇から抜け出せる瞬間は、もう近い。

大丈夫。

私は、やっていける。

だから私は、学校に到着し教室に入ると、梓と「おはよう」を交わ

してから、いつものおふざけをいった。

「梓、この世にセクサロイドは必要だと思ふのよ」

私の名前は鳥乃とりの沙樹さき。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

これからも。

第2章（ハイウインド編） MISSION 14―新たなる脅威

私の名前は鳥乃^{トリノ}沙樹^{さき}。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「梓、神簇姉妹のレオタード見たくない？」

「見たくない」

即答だった。

「どうしてよ神簇は中身はともかくスタイル抜群だし、アンちゃんは
おっぱいだし絶対映えるでしょ」

「そういう目でアンちゃん見ようとするからだよー」

困った様子で梓はいった。

お昼休み。現在私たちは、弁当をつつきながらアンちゃんの退院祝
いを何にしようか相談しあってる所だった。

元々昏睡状態の原因は外傷よりも精神的なフィール攻撃のダメー
ジが大きかったらしく、一度目を覚ましてしまえばめきめきと回復を
みせた。とはいえ、移動には車椅子が必要だったりと、まだ完全復活
とは程遠い状態なのだけど、アンちゃんの強い希望に医師がGOサイ
ンを出したのだ。

「それに、どうして琥珀さんの分まで」

「勿論見たいから……というのは半分冗談で」

また梓の《ハンマー・シュート》が飛びかけたので、慌てて私は撤
回し、

「今回、病室で騒いじやったり迷惑かけたじゃない。そのお詫びよ」

「それでレオタードはないと思うよ」

「だとしたら、後はもうマイクロビキニしかごへえー！」

結局《ハンマー・シュート》が入りました。

床で潰れた私を、梓はハンマー担いだまま気乗りしない顔で、

「それに私、まだ琥珀さんは……」

「まあ、そうよね」

小さい頃に、梓は神簇に虐められた。

いまの神簇は随分変わってるし梓を虐めたことも後悔してるけど、だからといって簡単に許せるわけでもないだろうし、恐怖だって残ってるはず。何より、バタバタしてたせいで、まだ神簇は梓に謝れない可能性があるのだ。

「分かったわ」

心のダメージがどれだけ人の人格を歪ませるか、つい最近身をもって知ったし、ここは神簇と梓を接触させるような流れは避けることにしよう。

「なら諦めてアンちゃんだけにするわ。レオタード」

起き上がろうとした所、二発目の《ハンマー・シユート》が脳天を直撃した。

なぜ、いま私がこんなにレオタードに拘ってるかというところ、前日のある出来事が由来していた。

時刻は20:00頃、その時私は依頼の真つ最中だった。

受けた内容は、とある男が所有する宝石製の彫刻を奪うこと。曰く、依頼人と男は愛人関係にあったのだが、後に男が妻子持ちであると判明。自分が遊びであったと知った依頼人は、せめてもの復讐に彼が大事にしてる彫刻を奪うことに決めた。しかし、男が闇金融や麻薬密売に関わっていると分かかってしまい、自分から動くのは危険と判断。こうしてハングドに依頼が流れてきたというわけだ。

なお、この依頼を受けないかと提案したのは木更ちゃん。彼女は舞い込んできた依頼から難易度の低いものを探り当て、リハビリとして私に充ててきたのだ。今回の依頼も、一見潜入作戦のようだけど彫刻を奪う手段は問わないので、方法は破壊。しかも、ターゲットとの接触を極力避ける為に狙撃を提案された。

(私、遠距離からの狙撃は苦手分野なのだけどね)

とはいえ、いまの私にとって必要なアクションは少ないほうがいい。そんなわけで、私は目星をつけたビルの屋上からライフル銃を構えている。

標準の先には、豪邸の一室で男が例の彫刻を磨いている。私はじつ

と機会をうかがい、男が部屋を離れた所を狙って引き金を引く。
その瞬間だった。

明りが消え、暗くなった一室にひとりの女性が飛び込むように現れ、不運にも彼女の脚を弾丸が貫いてしまった。

(あ)

と、思うも仕方ない。彫刻を庇ったわけではないらしく、突然の負傷に驚きつつ苦痛に顔を歪める女性。私はもう1回発砲、彫刻の破壊に成功する。

さて、と任務を遂行した所で女性を《ワーム・ホール》でこちらに呼び込もうとした所、女性はすでに部屋にいなかった。

私は激しく後悔した。

引き金を引くという1秒に満たないタイムロスを惜しんでさえいれば接触できたかもしれないのに。不意に第三者を負傷させた。それも女性相手に。そんなショックから逃れるために、体は冷静に脊髄のまま依頼を全うするマシーンになってたのだ。

女性は恐らく十代後半から二十歳前後の白人。

そして、レオタード姿だった。

「私、近いうちに厄払いでもして貰ったほうがいいかもしれないわね」
放課後、私は木更ちゃんと屋上に向かいながらいった。

一応依頼は完遂したものの。こんな簡単な任務でさえ予測不可能なトラブルに見舞われ「依頼は満了したけど任務に失敗した」記録がまた更新されてしまったのだ。ここまでくると、何かに憑かれてるか思っても仕方ない。

「厄払いというと、神社ですか？」

「まあね」

私はうなづく。

「この近辺だと何になるのでしょうか、神社は」

そういえば木更ちゃんは、この街にきてまだ1年未満なのだった。

「ん、白樹神社」

私がいようと、

「白樹神社ですか。あれ、どこかで聞いたことがあったような」

「NLT^{ナルツ}協力組織の白樹家」

「あつ」

ハングド入りした際、資料に色々目を通して真面目な木更ちゃんだ。私の一言で思い出したようで、

「確か、この地域の地主さんでもあって、神主さんの人望が凄くて一部で非公認の新興宗教化してるという」

「そうそう」

私はうなずき、

「実際、オーラもあって人格者よ。凄過ぎて逆に胡散臭いけど」

「お会いされたことあるのですか？」

「神主さん美人なのよ」

レズとしては、そんな人にコンタクトを取らない選択肢は無いわけ。

「ただ数分口を交わしただけで洗脳されるかと思ったけど。初めてD I〇に会ったア〇ドウルの気持ちが分かったわ」

「危ないですね、それは」

木更ちゃんはため息一回、

「でしたら仕事の合間に私のほうで良さそうな神社をピックアップしてみますけど、どうでしょうか？」

「いや、いいわ。性質悪いことに祈祷やお祓い除霊何でもござれの分野のスペシャリストだから」

「わかりました、でしたらいまのお仕事の話に入りますね」

と、木更ちゃんは話を切り替える。

一見、秘書やマネージャーのような応対。だけど、表情や声色のひとつひとつが柔和でさほど事務的という印象を覚えない。

「改めて、今度の依頼者は」

「あ、言ってる所悪いけど。もう屋上」

眼前の扉を指し、私は言った。

「あ」

「ちよっと白樹神社の話題しすぎちゃったわ」

謝りつつ、「まあそれに、チェックは私もしてあるし大丈夫よ」と、ドアノブに手を伸ばす。今日は屋上の開放日ではなかったのだけど、先客がピッキングしてくれたおかげで、問題なく扉は開いた。

そして。

「おおっ」

そこで待っていた依頼人を見て、私は歓喜をあげた。

「昨日のレオタードきたー！ー！ー！ーっ！」

「ファツ、What?」

動揺する昨日のレオタード。もちろん、いまは制服だけど。

「あ」

そして木更ちゃんも、

「グレイスさん」

と、驚き、

「What?」

もう一名、あちらから驚く声か。

屋上にいたのはふたりの白人の女性だった。姉妹なのだろう、姉は日本女性としては長身でスタイル抜群、対し妹は150前後くらいの背丈に幼児体型と対照的だ。なお、髪色はどちらもブラウンで、姉はロングヘア、妹はセミロングのツーサイドアップ。

もちろん、私が見たレオタードは姉のほう。それを証明するように、現在彼女は左脚を怪我し、松葉杖で立っている。そして、私が撃ち抜いてしまったのも左脚だ。

「知り合い?」

木更ちゃんに訊ねると、

「クラスメイトです。妹さんのほうと。それと先輩、もしかして」

「ビンゴだったわ」

「Hey. アナタがハングドの皆さんデスカ?」

姉のほうが声をかけてきた。外国訛りが残るも割と流暢な日本語だ。

「はい」

木更ちゃんが頷いて、

「あなたが怪盗ユニオン・ジャックさんですね。初めまして、ハングドです」

今回の依頼主は、この二人組の泥棒である。

つまり、あの時彫刻は私だけでなく彼女たちも狙ってたのだ。そして、男が部屋を離れた瞬間に彼女も動き出し、盗み出そうとした所に私の狙撃が当たってしまったのだ。

「Yes. ワタシたちがユニオン・ジャック、アメリカ・バートといひマス。ソシテ」

「妹の」

「グレイス・バートさんですね。先ほどぶりです」

と、微笑みながら木更ちゃんが自己紹介を奪う。

「グレイス、お知り合いですか？」

アメリカさんが妹に訊ねると、

「クラスメイトデス、Oh. キサラちゃんがハングドなんて驚きマシタ」

挨拶をさせてくれず、しよんぼりする妹さんことグレイスちゃん。

「ワタシも驚いたネ、てつきりガチムチのスーパーマンが来ると思ったらキュートな女の子がふたりでシタから」

「キュートなんて嬉しいこと言ってくれるじゃない」

私は近づいてアメリカさんの肩を抱き、

「どう？ これからホテルで依頼交渉の続きでも」

「Oh... この反応、もしかしてアナタ」

「私は鳥乃 沙樹、巷ではレズの肌馬と言われてるわ」

「やっぱリデスカー」

なぜか嘆息をつかれてしまった。

「つてことは、もしかして姉サマを撃つたのつテ」

訊ねるグレイスちゃんに私は、

「ん、私」

「Oh... No.....」

さらに項垂れるアメリカさん。なんで私だとそんな反応されるつて話なのよ。というよりも、

「その様子だと自分を撃つた人を狙って依頼を出してきたわけね」
「え、どういうことですか？」

首をかしげる木更ちゃんに、
「ハンゴド側としては、今回無関係者を巻き込んでしまったわけよ。
つまり誤射されたレオタードが誰なのかを早急に特定する必要があつたわけ。下手なことをされない為にね」

最悪、口封じも兼ねて。

「だから、そこに餌をまけば食いつくって話」
「なるほど……」

木更ちゃんは納得し、

「でも今回は完全な偶然ですよ。それとは関係なく依頼を受けたのですから」

「What!?! ソーなのデスカ？」

驚くアメリカさんに、

「特定が済んだ時にはすでに木更ちゃんが受託してたからね」
とか言いながらアメリカさんのお尻をさわさわ。

「ひゃっ」

「レズの成せる運命力の結果って話なのよ。うん、ナイスお尻」

「や、や、や、やめてください」

顔真っ赤に困った様子のアメリカさん。てっきり松葉杖で腹突いてくると思つたのに。非暴力最高！とか思ってたたら。

『鳥乃先輩、アメリカ先輩に痴漢する』と、徳光先輩にメール送っておきますね」

うふふと笑顔で木更ちゃん。

「やめてー」

慌てる私を他所に、木更ちゃんはさりげなくアメリカさんから私を引き剥がしつつ、

「それでは、依頼の詳細をうかがってもよろしいでしょうか？」

「まあ、はいデス」

アメリカさんはいった。

「ワタシたち怪盗ユニオン・ジャックは、明日夜にファイル・カード《N

0.7 ラツキー・ストライプ》を盗みだす予定でシタ。ケド、昨晚脚を負傷したせいでワタシたちだけでは任務達成が困難になってしまいマシテ」

「つまり責任持って協力しろと?」

「Yesネー」

うなづくアメリカさん。

「まあ、そこは構わないわ。まだ内容の途中だから一概には言えないけど、上からすでに迷惑料・医療費・口止め料を引くように言われているから、格安で引き受けさせて貰うわ。ただね」

と、私は一拍置いて、

「《No.7 ラツキー・ストライプ》、噂では聞いたことがあるわ。それを所有していると神掛った幸運を手に入れると。道を歩けば財布を拾い、ダイスを振れば狙った目を出せ、ギャンブルに手を出せば大成功って」

「そんなカードがあるんですか?」

驚く木更ちゃん。あなたも相当大概にやばいフィール・カード持ってるんだけどね。

「逆にいえば、危険な欲を持つてる人が所有したら酷いことになるわ。理由、聞かせてくれるのよね? そんな危険なカードを欲しがらる理由。内容次第ではさっきの三つを払って依頼はお断りしないといけないレベルよ」

するとアメリカさんは、

「欲しがってるのはワタシたちではありません」

「え?」

「ワタシたちは依頼者から頼まれて盗むだけなのですカラ」

「依頼者?」

つてことは、彼女たちは人に頼まれて泥棒を?

「ワタシたちユニオン・ジャックは依頼者からお金を受け取って盗みを働く怪盗ナノデス」

「では、その依頼者はどうしてラツキー・ストライプを求めるのですか?」

木更ちゃんが訊ねる。しかし、

「ハングドは自分の依頼者のコトを他人に洩らすのデスか？」

と、グレイスちゃんが返す。

私は納得し、

「なるほどね。分野は違っても私たちは同業者って話か」

「オフコース！」

肯定するアメリカさん。

「でも、どんな依頼でも受けるワケではありません。恐らく判断基準はハングドと同じニュートラルデス」

「……分かったわ。その話信じるわ。木更ちゃんもそれでいい？」

「は、はい」

木更ちゃんはどうも、どこか疑問が残ってる様子。

「どうしたの？」

訊ねると。

「いえ。いま聞く話題ではありませんから。その代り、先輩あとで時間を頂いても？」

「ん、了解」

と、私は再びふたりに向き直る。

「じゃあ改めて依頼は受ける方向で。それで私たちは具体的には何をすればいい？」

すると、アメリカさんはいった。

「まずワタシたち四人で潜入します。場所は先日デュエルモンスターズ展をした美術館倉庫」

「うわ」

またあの美術館に関わるなんて。しかも今度はカードを奪う側として。

「現在美術館はデュエルモンスターズ展の最終日に使ったファイル・カードを返却している最中デス」

最終日、つまり私がミストランに負けた日のイベントに使われた中に今回のターゲットも公開されてたということになる。

「ラツキー・ストライプは三日後、いまの持ち主の下に返されマス。デ

「スから、それまでにカードを盗みださなくてはなりません」
「っ」

「いまのときか。」

「カードの下に辿りつくには、まず警備員、次に各扉のロック、道中の赤外線と幾つもの難関があります。肌馬サンはワタシを連れてセキユリテイを突破して下サイ」

「脚負傷してる人をつて、無茶なことを」

「まあ依頼受けたからにはやらなくちゃいけないんだけど。」

「カードの下に辿りついても問題はまだあります。そのままカードを取ろうとすると床に電流が流れサイレンも鳴る仕掛けになってます。解除する二ハ、カードの傍のセンサーに特殊なフィールを送るか、そのセンサーを破壊するしかありません。そして、センサーは特殊なフィールと防弾ガラスで護られてマス」

「既に下調べは済んでるみたいね。だったらその時に取れば、あ……」
「言いかけ、そういうえびさつき」床に電流が流れサイレンも鳴る仕掛けに」つて。もしかして。」

「……すでに2回失敗してマス」

「グレイスちゃんがうなだれた。」

「うそ……」

「ちよつと待って、本業がすでに二回失敗してるつて。それつてつまり、当然、美術館側も警備をさらに強めてるだろうし。」

「これは大変な任務だわ」

「私はゾツとした。」

「ああ、属性の話ね」

「ユニオン・ジャックと別れた後、私たちは《ワーム・ホール》で事務所に直接向かった。そして、先日花瓶が撤去されたばかりの資料室で話を聞いた所、ニュートラルとは何かと訊ねられたのだ。」

「ハングドが保有する情報にも幾つかありましたけど分からなくて。属性、ですか？」

「そ。善悪を計る指針でね、大きくロウ・カオス・ニュートラルで分け

てるわ。せっかくだから他の業者のことも兼ねて説明要る？」

「お願いします」

「了解」

私はパソコンの前に座り、適当に散布図を作り、左にロウ、右にカオスと打ち込む。

「まずはロウ、これは基本的に正義を表す属性ね。法治安維持を目的としてたり、法律に殉じた活動をしてるのがここに当たるわ。代表組織は分かる？」

「NLTですか？」

「正解。NLTは警察と連携関係にある正真正銘の正義の組織よ。あとはネビュラ財団っていうのもロウ側とみられてるわ」

私は散布図の左端にNLT、その隣にネビュラ財団と打ち込む。

「次にカオス。これは正義の反対で悪を指す属性に使ってるわ」
すると木更ちゃん。

「ここは分かります。フィール・ハンターズですよね？」

「正解。フィール・ハンターズは原作遊戯王というゲームズみたいに、フィール・カードを手段を選ばず回収するハイエナたちよ。組織自体は日本中に分布してるけど、支部ごとに活動する方針や目的が違ってるのが特徴ね。あと」

「あと？」

「黒山羊の実もこっち側っていうのが、私たちハングドと警察それにNLTの見解よ」

「……」

木更ちゃんにとって、その組織は複雑だろう。かつて自分の命を狙った組織であり、しかも友達が所属してた組織でもあるのだから。

僅か数秒、重い表情を浮かべていた木更ちゃんだけど、すぐ普段の表情を取り戻し、

「では、ハングドが分類されてるニュートラルというのは」

「どっちつかず」

私はいった。

「基本的には無法の世界よ。だけど悪に魂を売ってるわけでもない。

護衛から殺しまで請け負うけど、無法で自由だからこそ独自の『超えてはいけない一線』てのを持つてる。それが私たちハングドの属性」
言いながら、私はさつき打てなかったフィール・ハンターズと黒山羊の実を右側に、そして中央にハングドと打ち込んだ。ただし、他の組織は散布図の下なのに対し、ハングドは表の上部。

「法で裁けない相手を裁くダークヒーロー気取りもニュートラルの領分よ。あとは近頃噂のトワイライトもこっち側ね」

と、同じようにトワイライトの名前も。

「だけど、いまここに出てる名前は全部『同業者』ではない。どうして分かる?」

「外から依頼をとってないからですか?」

「正解。フィール・ハンターズは支部ごとに違うから一概には言えないけど、NLTは一応あるみたいだけど法律の下の世界だからね。NLTが銀行や法律事務所の仲間なら、私たちは殺し屋や闇金融とかヤバイ所のお仲間さん」

「なるほど」

一回納得する木更ちゃん。だけどすぐ、

「でも、いま例えた同業者はみんなカオスですよね? ニュートラルではないのでは?」

「そりゃあ同業者だからってニュートラルとは限らないからね。せつかくだから属性別にハングドが注目してる同業者でも確認してみる?」

「はい。させて頂けるなら」

「わかったわ」

私はいい、別のフォルダを開いて写真データを3枚ほど開き、

「基本的に私たちの同業者はシステム上個人も多いのよね。組織は既に資料で目を通してるだろうし、今回はこっち中心でいくわ」と、そのうち1枚を全画面表示にする。

映されたのは、ひとりのスリ姿の麗人。

「まずは私たちと同じニュートラル。彼女はアインス・ハイ。性癖がバイで、口説き文句や立ち振る舞いのキザさから女性なのに『王子』」

と呼ばれてるわ」

「ニユートラルの人は性癖がおかしい人が多いのでしょうか？」

「さすが様偏愛のあなたにだけは言われたくないわ」

私は軽く乾いた笑いを浮かべ。

「基本的に彼女はハングドにも友好的だから、任務中ばったり会っても衝突不可避な状況じゃなければ説得が利くわ。実際私も組織外では一番共闘経験あるのは彼女かもね。交戦したこともあるけど」

そう言ってから、続けて私は別の写真を全画面に。

今度は、バイクに跨ったセミショート髪のボーイッシュな女性と、その隣に長身でロングヘアの大人しそうな女性のツーショット。

「次はロウの同業者、『絶対正義』ジャスティス。ボーイッシュなほうがシユトルムで、通称シユウ。大人しそうな子が後方支援のシルフィードで、通称シルフィ」

「写真をみるに、まるでヒーローとヒロインみたいですね」

「実際そんな感じ。シルフィはハッカーみたいな所業もできないし、どっちかというシユウの精神的支えって感じみたい」

「なるほど。私ではなく徳光先輩と鳥乃先輩のコンビみたいなの」

「そうそう」

否定する気はないのでうなずき、

「シユウは私たちに友好的なほうだけど、シルフィが超潔癖でハングドでさえ悪人扱いだから注意して。このふたりは依頼に報酬を要求せず、仕事というよりは、日々パトロールに出て困った人を助けるボランティアみたいな感じらしいわ」

と、私は最後の写真を全画面にする。

「で、最後にカオスだけど。彼女だけは絶対に交戦も接触も避けて欲しい」

出てきたのは、バイザーで顔を隠したポニーテールの女兒。

「スローター処分人”フィーア。見た目は子どもだけど、ターゲットのみならず自分を発見した人も殺害してる危険人物よ」

「発見しただけで？」

「実際、この写真はフィール・ハンターズが偶然撮影に成功したものが

流れてきたものだけど、撮影者とその支部はもうない。全員デュエルするまでなく処分人に暗殺された」

「そんなんっ」

さすがの木更ちゃんも、この話には驚き、素で顔を青くする。

「とりあえず、もし前線に出ることがあれば彼女だけには気をつけて」と、伝えた所で。

「あ。鳥乃、藤稔」

高村司令がやってきた。

「何かあったのですか、高村さん」

木更ちゃんが訊ねる。司令は重い顔をしていた。

「ここにいたのね。他に人は？」

「私たちだけだけど」

と、私が伝えると司令は「そう」と呟き。

「ふたりとも覚悟して聞いて頂戴」

司令はいった。

「速見が死んだわ」

「えっ」

私たちは同時に驚く。速見とはこの構成員のひとりで、先日の木更ちゃんのパーティーにも顔を出してた男だった。

「原因は？」

訊ねると、

「処分人スローターにやられたわ。護衛任務中に衝突してね。護衛対象も殺られたらしいわ」

早速、たったいま話したばかりの人物の名が。

「ただ。速見最期の連絡内容が気になるのよ」

「どんなの？」

すると、司令はいった。

「シウトウルムと一緒にだったと」

「え、それって絶対正義ジャスティスのシユウ？」

訊ねると、司令は「恐らく」と頷く。

驚いた。

絶対正義と処分人なんて属性でみると水と油みたいなものなのに。

「鳥乃、藤稔。悪いけどふたりの繋がりを調べてみてくれない？」

「分かりました」

木更ちゃんはいったが、しかし結局私たちの任務当日まで何一つ情報を掴むことはできなかった。

——現在時刻、午前01:00

「Oh...それは本当なのデスか？」

潜入前。私たちは美術館近くの路地裏で待ち合わせし、揃った所で駄目元で処分人の件を情報提供し、何か知ってないか聞くことにした。なお、アメリカさんはレオタード姿だ。

「昨日、どうしてか処分人が人の命そのものではなく被害者の物品狙いで動いてたのは把握してましたケド、まさかシユウと一緒にだったナント」

その言葉に、

「え？」

「物品狙い？」

私たちは同時に反応した。ハンドグドがまだ入手してない情報だったからだ。

「ファイルを有する特別な指輪デス。処分人は被害者を殺して指輪を強奪しまシタ」

「まず殺してから奪ったのはいかにも彼女らしいけど」

言いながら私は首をかしげる。処分人は私たち同業者の中でも「殺し屋業」以外の戦歴がほとんどない人物なのに。

「処分人が絶対正義と行動し、物品目的でターゲットを殺害した。なんだかクレイジーなことが起こってる気がしマスね」

「そうね」

シリアスな顔で頷きながら、私はこっそりアメリカさんのお尻をさわさわ。レオタード越しに触るお尻ってすごい。

「嫌な緊張で手が落ち着かないわ」

「ひゃっ」

ビクツと可愛らしい反応のアメリカさん。直後、上から1枚のカードが私に投擲される。避けると、カードは地面に落ちた途端フィールでリアル化した火が舞う。《火の粉》だった。

「油断大敵デスよ肌馬サン」

ビルの屋上から、ワイヤーを伝ってグレイスちゃんが降りてくる。

「グレイスさん」

驚く木更ちゃん。しかし、彼女が突然やってきたからというだけではない。彼女は彼女で、蝶マスクに中世貴族を思わせる服、さらにイギリスの国旗が描かれたマントという絶対に目立つ格好だったからだ。イメージ的には怪盗っぽいけど現実的には機能性の欠片もない。

「ハローデス、キサラちゃん」

1メートル程度の高さから、木更ちゃんにピースサインを送るグレイスちゃん。

「今日の私はサポーターデス。肌馬サンもキサラちゃんもバツチリサポートしちやいマスね」

「グレイスさんが？」

「Oh...キサラちゃん不満デスか？」

「いえ、よろしく願います」

お得意の柔和な笑顔で取りつくろう木更ちゃん。

「ハイ、任せてクダサイ」

しかしグレイスちゃんは素直に嬉しげにワイヤーで屋上へと戻っていった。

(ああ)

説明されずとも私は納得した。さっきのを素直に受け取るようでは色々と不安すぎる。

「あ！ すっかり忘れてマシタ」

と、そこへグレイスちゃんは再び降りて来て、今度は飛び降りるには明らかに高い位置から、

「肌馬サン、さっきみたいに姉サマにセクハラしたら、マタ私のフィール・カードをシュートしマース」

「残念。ならターゲットを変えるのでしょうか」

私は彼女に歩み寄り、上を見上げ、

「ベージュね」

「ひあつ」

慌てて両手でスカートを押さえるグレイスちゃん。うん、両手で。

ワイヤーから手を離れたグレイスちゃんは、

「What? Oh! NO! NOOOOOOOO」

!!!!!!

悲鳴をあげながら、真下へと落下。

「……。……。ちよつ、グレイスちゃん」

さすがの私も一瞬思考が停止してた。まさかここまで残念だなんて。

私は銃が内蔵されてないほうの手首からワイヤーを射出。グレイスちゃんに巻きつかせ、地面に衝突する前にワイヤーを引き戻し、グレイスちゃんを抱き止める。

「大丈夫、グレイスちゃん?」

「し、死ぬかと思ったデス。肌馬サン、ソーリー」

ほつとするグレイスちゃん。……の胸元を私は一回撫でまわし、

「A……いや、AA?」

「ひにやつ」

顔を真っ赤に慌てふためくグレイスちゃん。可愛い。まあ可愛いんだけど。

「うーん残念。色気が足りないわ」

と、私はグレイスちゃんを解放。

「高校以上なら大体性の対象な私だけど、さすがにグレイスちゃんほど中身も体ほど幼児だとアウトって話よね」

「うう、助かったのに何だか複雑な気分デス」

微妙くく顔をするグレイスちゃん。だって、

「仕方ないじゃない、身長だって低いし幼児体型で、頭もおっぱいも見た目通り」

「何でわざわざ言うんデスカ?」

「大丈夫よ、ロリコンには需要があるわ。おっぱい年齢11歳ちゃん」「酷い認定されたデスー!!」

絶叫するグレイスちゃん。うん、この子可愛い。すつごく可愛いんだけど、性的な興味なしの素で弄りたくなるわ。ただ、高校生以上で知ってるから抱こうと思えば抱けるだろうけど、知らなかったらアウトそう。

残念だけど、グレイスちゃんは私にとってグレーゾーンだった。

「皆サン、おしゃべりはそこまですて仕事に入りマシヨ」

「皆様。そろそろ仕事に入りませんか？」

アメリカさんと木更ちゃんが、私のグレイス弄りの制止を兼ねていつてきた。

「あ、そうだったわね」

私はグレイスちゃんを遊ぶのをやめ、

「それじゃあ、出発しましょうか」

「ソーデス、じゃあ私も持ち場に戻ります」

グレイスちゃんは言うのと、足にフィールをかけて壁キック。飛び跳ねるように数メートル上空のワイヤーを掴んでは再び屋上へ戻っていった。

「元気な子ね」

私がというと、

「それが、とりえみみたいな子ですから」

「ソレがとりえみみたいな子デスからネー」

と、ふたりは返す。ただしアメリカさんは続けて、

「ケド、肌馬サン。ワタシの可愛い妹にセクハラするのはいただけマセン」

指をさし、ビシツというアメリカさん。だから私はいった。

「じゃあ、アメリカさんセクハラさせて？」

「What?」

再び顔真っ赤にするアメリカさんに、

「正直、妹さんよりお姉さんの体のほうがよほど興味があるのよね私」

「What? NO! アワワ」

「むっちりお尻に大盛りおっぱい、これはもうベッドの上で丸一日弄りたいって話よね？」

「だだだ駄目デス肌馬サン、わわわワタシはノーマルなのデスから」
「それを目覚めさせるのもレズの悦びに」

「Oh No! ア、そそソレよりはは早くお仕事に入りマショー」
逃げるように閉館した美術館に向かうアメリカさん。本当に可愛い姉妹だ。性的な意味ありでもなしでも。
私たちは今度こそ任務を開始した。

まず最初の障害は、裏口前で待機している警備員ふたり。

「どうしマスか？」

小声で訊ねるアメリカさんに、私は。

「ん、これ使うけど」

と、フィールを込めた催眠ガスの煙玉を転がす。警備員たちはすぐ気付くも、アクションを起こす前にガスを吸いその場で倒れた。

「Wow!」

と、驚くアメリカさんを尻目に、

「木更ちゃん」

「はい」

続いて動くのは木更ちゃん。扉の前に立つとカードキーにクリフォートカードを指し込み数秒後、

「開きました」

「What?」

目をまん丸にするアメリカさん。

「うん、そういうフィール・カードを持つてるのよ」

「Oh... チートです。本業顔負けのピッキングツールにワタシ自信失いマス」

「分かるわ。私だって一般人時代の彼女にマスターデュエルで二連敗してるし」

「彼女は何者デスか？」

「立派な変態ハンクドよ」

言いながら私たちは木更ちゃんと合流し、裏口の扉を隙間程度開ける。

中は真つ暗の為、暗視ゴーグルをつけて人がいないのを確認。扉を開けかけた所、

「伏せてくだサイ」

突然のアメリカさん。言われるまま咄嗟に伏せると、私の頭上を赤外線が抜けたのが分かった。

「ソーリーデス。まさか既に赤外線センサーなんて」

ということは、前回はなかったのだろう。やはり、セキュリティが相当強くなってるらしい。

「木更ちゃん」

「はい。……………切りました」

今度はデュエルディスクから電子機器に潜入し、赤外線センサーを直接切る所業。

「……………」

すでにアメリカさんは開いた口が塞がない模様だ。

「さすが木更ちゃんね」

「けど気をつけてください。この部屋のセンサーは突貫作業でつけたらしくて解除できましたけど」

「他の部屋は無理だったわけね」

「はい。すみません」

「問題ないわ」

むしろ、そこまで万能だったらチートにも程があるくらいなんだから。

「なら、こつから先はアメリカさんお願いできる?」

「Yes! Off Course!」

元気に応えるアメリカさん。そこへ木更ちゃんが、

「あの、大声出して大丈夫なのですか?」

「Oh…: ソーリーデス」

そんなこんなで、改めて私たちは館内へと侵入。

扉の先は関係者用の通路になっており、奥に左右の扉がみえた所で再び赤外線が私たちを通せんぼする。

「確か右側は事務室だったわね、なら左?」

するとアメリカさんは、

「いえ、ハングドたちは先に事務室に向かって下サイ。恐らくセンサーは事務室からストップできます」

「了解」

そういつて私がアメリカさんを抱えようとする時、

「Why? 肌馬サン何する気デスカ?」

「何って、骨折してるんだからセンサー突破するの難しいでしょ?」

「デスから先に事務所に忍び込んでセンサーを切って欲しいのデスケド」

「あ」

しまった、そうことなの? そういえば、ハングドたちは「ってことは自分は向かわないって言ってるじゃないか。」

「って、それじゃあアメリカさんと一旦離れるってこと?」

「そうなりますネ」

「離れたらセクハラできないじゃない」

「そもそもさせマセン」

「じゃあさせて?」

「安心してください先輩」

そこへ木更ちゃんが割り込んで、

「私がアメリカ先輩の傍について護っていますから」

「それじゃあ木更ちゃんとも離れるって話じゃない! センサーの中を四つん這いで進むときとか後ろからパンモロ覗くチャンスなのに」

「あ、その発言ボイスレコーダーで記ろ……」

「行つてきます」

よーし、私頑張っちゃうぞー。私はセンサーの包囲網を危なげなく潜り事務室へ。

中に人はおらず罨もなかったもので、そのままパソコンを開いて数分、センサーを切るとすぐふたりが合流してきて、

「センサーの解除を確認しました。ありがとうございます(ぎ)います先輩」

「思ったよりずっと早くてビックリしたネー」

「ま、電子機器の操作は苦手じゃないからね」

むしろ私自身が電子機器だし。

「後は目的のカードのフロアだけデス。急ぎマシヨ」

と、アメリカさんがいうものの、当の本人が松葉杖なのでいうほど急げれる話でもなかったのだけど。私たちは事務室を出て、もう片方の道へと進む。途中、幾つか扉を横切り、最奥の突き当りまで来たところで。

「こちらデス」

と、最後の扉を指してアメリカさんはいった。

「分かったわ」

うなずき、私は隙間開けて中を確認する。

そこは、縦に奥行きのある長方形型の部屋だった。その最奥の台の上に透明なケースがひとつと、内側に小箱ひとつと棒状のセンサーらしきものが一本立っている。しかし、それだけ。

倉庫とよぶにはあまりに何もない殺風景な一室だった。下手に色々置くと電流で破損してしまうせいでろう。

中に人も赤外線センサーも見当たらなかったの、私は改めて扉を開けた。

「部屋には入らないで下サイ」

アメリカさんはいった。

「センサーを破壊しなければなりませんケド、破壊した瞬間に部屋は電流で包まれてしまいマス。デスから、私たちは部屋の外から狙撃しなくてはなりません」

「ハングドの射撃場よりずっと距離がありますね」

と、木更ちゃん。うちの射撃場だと的までの距離は15 m程だったけど。

「確か50 mはずデスネ」

アメリカさんがいった。ざっと3倍強か。

「さらに見ててクダサイ」

と、アメリカさんは懐からカードを出し、

「魔法カード《ファイヤー・ボール》ネ」

幾つかのリアル化した火球をケースに向けて飛ばす。すると、部屋

全体が半透明の極彩色に光り、フィールがたちまちに分解され、ケースに届く頃にはただのソリッドビジョンと化していた。

「なるほど、フィールは使えないわけね」

「そうなりマス。デスから弾丸をフィールで細工することも空気抵抗を無視することでも出来ません。真正銘本人の実力でセンサーを撃ち抜かなくてはなりません。ワタシには無理デシタ」

と、アメリカさんはいい、

「そこで肌馬サンのライフルネ！ あんな遠くからワタシを撃ち抜いた腕があれば。ところでおふたりトモ今日は銃の所有ハ？」

「これだけけど？」

と、私は懐から拳銃を一本出し、続けて木更ちゃんも銃を一本。彼女はまだ射撃精度がなっていないので、フィールを使うのを前提にした滅茶苦茶軽い玩具の銃ではあるけど。

「Oh… ライフルは？」

「ないわ」

「Oh my God！」

頭を抱えるアメリカさん。

私はとりあえず拳銃を構え、一発発砲してみた。

銃弾は一応ケースに当たるも、貫通することなくめりこんだ状態で停止。しかもケースは即座に自己修復を始め、弾丸を砕きながら傷跡ひとつ残さず元通り。

続けて更に数発発砲したものの、やはり結果は同じだった。

「これは数発のワンホールショットが必要っぽいわね」

「ワンホールショット、ですか？」

訊ねる木更ちゃん。私はいった。

「銃などの射撃で貫通痕を残し、それを的に連続射撃する技術よ。しかも今回は少なくとも2発じゃ足りないに分かったわ」

先ほど撃った弾丸の中には、偶然1回だけワンホールショットが成功したものがあった。しかし結果、最初の弾こそケースの内側に転がったものの、2発目の弾丸がセンサーを貫くことはなかった。

「って、私は推測してるんだけど。アメリカさんそれで正しそう？」

訊ねると、

「恐らくネ。恥ずかしい話ですケド、ワタシたちではケースがあそこまで特殊とまで判明してなかったのデス。銃を所有するルートを持ってませんカラ」

「ああ」

依頼説明にケースが自動修復するなんてなかったのはそういうわけなのか。

木更ちゃんが訊ねた。

「けど、どうするのですか先輩。見たところ、先輩でもこの距離からセンサーの位置に3発以上のワンホールショットは難しいのですよね？」

「そうね。この銃の精度も悪くはないんだけど、ライフルで狙うような距離だとさすがに分が悪いわ」

どんな弾にも微妙な弾道のズレはある。今回も射撃場の15mながらもつとワンホールショット成立した弾は多いだろう。しかし、50mもあるとそのズレが大きくなり今回のような結果にしかならない。もちろん、手持ちの弾丸を使い切るつもりでチャレンジという手はあるけど。

「アメリカさん、タイムリミットはどのくらい？」

「急いほうがいいのは間違いありません。銃声も何発も出していれればいずれ間違いなく気づかれマス。むしろもう気づかれてるかもしれマセン。もちろん、その時はグレイスから連絡がくるはずですよ」

「よね」

つまり、チャレンジする時間の余裕はない、と。

なんてアメリカさんと会話してる間に、私は「腕に内蔵してる銃」で3発のワンホールを決め、センサーを撃ち貫いた。

直後、部屋全体からフィールを纏った高圧電流が流れ、最後にケースが光の粒子に変わって消滅した。どうやら、あの特殊ケースもフィールによるものだったらしい。

「え」

「え」

驚くふたり。

「いい、一体何があったのデスカ？ 肌馬サン、アナタの銃ではこの距離カラのワンホールは無理ナノでは？」

「ごめん、実はもう一本隠し持ってたのよ」

私はいった。

「シティーハンターに出てくるワンオブサウザンドって聞き覚えはある？」

「エ、Yes... 機械で量産される銃の中に偶然生まれるという、凄く精度を持った銃デスヨネ？ 千丁製造して一丁できるかできないかというレベルの」

「そ。その銃を使ったのよ。大変貴重な銃だから、人前には絶対見せないようにしてるのよ」

嘘はいつてない。私の腕に内蔵してる銃には腕から直接発砲する為に様々な仕掛けが施してあって、その副産物で並の銃では敵わない精度を持つていたりするのだ。

「ま、そんなわけで最後の仕掛けもクリアしたわけだから、早く回収して撤収しましょ」

「そ、そーデスネ」

あんまりさらつと片付いて、まだ思考が追いついてない。そんな顔を曝しながらアメリカさんはうなずいた。

しかし。

「悪いけど、そうはいかないんだ」

突然、天井から声。

「誰ですか？」

訊ねる木更ちゃん。一方私は、

「その声は……」

「久しぶりだね、鳥乃。元気そうで何よりだよ」

そういつて、天井の通風孔からひとりの女性が降りてきた。下をスカートにした男物のダンススーツ姿で、髪を縛ってショートに見せており、一見中性的な男性にも見間違えそうな容貌をしている。年齢は

17か18の高3、推測ではなく知っている。腰にはパヨネットのついたシヨットガンを2丁も携帯し、顔にはDゲイザーを装着していた。

私はいった。

「アインス、久しぶりじゃない」

「この方が」

呟く木更ちゃん。すると、

「おや、見られない顔ですが私のことはご存じのようですね」

アインスは近づき、木更ちゃんの手を取ると、

「君みたいな天使に知って貰えて光栄の極まり。改めて私はアインス・ハイといえます。今後ともお見知りおきを」

と、彼女の手の甲に口づけ一回。

「何やらかしてるのよ！」

即座に私は内臓銃で発砲。アインスは咄嗟にバックステップしつ

「相変わらず過激だなあ鳥乃は」

「自分のモノに手を出されたら怒るに決まってるって話でしょ」

しかも、こいつバイだからしつかりそういう目で見てるだろうし。

「おや、そうなのかいお嬢さん」

「いえ。私がかすが様のモノですから」

「いやそれも違う」

私は突っ込むも、すでに木更ちゃんは「かすが様かすが様」と恍惚な顔でトリップ突入し始めたので、私は正気に戻すことにする。

スカートの中に腕を入れ、下着の上からお尻をさわさわ。

「ひあっ」

びくつと驚き、飛び退く木更ちゃん。

「せ、先輩こんな場所でセクハラは」

「すぐトリップするからでしょ」

「あ」

木更ちゃんは、ここぞでやっとな気付いたようで、

「すみませんでした」

「相変わらず、ハングドは愉快は人たちだね」

くすりと微笑むアインス。

「待ってくださいサイ」

そこにアメリカさんが割り込んで、

「アナタはどうやってここまで来たのデスカ？ 誰かが接近してくるなら、ワタシたちに情報が届くはずなのに！」

「ああ、彼女のことかい？」

アインスは一枚のカードを出した。直後、彼女の前で電磁波が発生し空間が歪み、中から現れたのは意識のないグレイスちゃん。

カードは《亜空間物質転送装置》だった。

「グレイス！」

叫ぶアメリカさんに。

「大丈夫、眠ってるだけだよ。もちろん、鳥乃と違って手を出してもいい。ただ、デュエルで負けてフィールは空になってるけどね」

「待った。私、眠らせて手を出す趣味はあんまり無いんだけど。途中で起きる前提ならともかく」

指摘する私に、

「あんまりという事は、絶対ではないんですね」

と、木更ちゃん。

「失礼。君のことだから『それも一興』と思ってる認識だったよ」

アインスは上着を脱いでグレイスちゃんのかけ布団にする。

「アインス、目的はなに？」

私は訊ねた。

「その様子から邪魔しに来たっていうのは分かったけど、何しにここにきたわけ？」

もしかして美術館側から護衛の依頼を、と思ったけど。

「もちろん、そのフィール・カードさ」

どうやら違うらしい。アインスはポーズを決めて、

「ああ、なんとという偶然、なんとという悲劇。どうやら私たちは、たった一枚のカードを巡って争わなければならないらしい」

なんて、まるで劇場の上で王子でも演じてるかのよう。相変わらず

呆れるほどキザなキャラだ。

「ほんとふざけた偶然があったものね」

アインスのことを木更に伝えた矢先に、本人とこんな形で対峙するはめになるのだから。

「で」

私はいった。

「そのカードはどこにあるんだっけ」

「おや、そんなの。……あれ？」

アインスはちらとケースのあつた台に視線を向け、小箱が無くなつてゐるのに気付く。

「残念デスネ」

アメリカさんがいった。続けて気絶していたはずのグレイスちゃんか。

「例のフィール・カードはすでに私たちのモノデス」

と、姉の隣で小箱を開けてみせた。中には目的の品である《NO.7 ラッキー・ストライプ》が確かに。

「どうして、君は薬品で眠らせていたはず」

驚くアインス。グレイスちゃんは「ノンノン」と指を振り、

「腐つても怪盗、ユニオン・ジャックをナメないで下サイ。肌馬サンが催眠ガスを使ったのを見て、モシーヤと思ひ対策をしておいたのデース」

「こっそりワタシが指示しておきマシタ」

と、ドヤ顔を決めるユニオン・ジャック姉妹。

「で」

その一瞬を見逃さず、私はデュエルディスクの強制デュエル機能を使用。アインスのDパッドが自動的に展開され、デュエルディスクとなつて彼女の腕に装着された。

「あつ」

「これでアインスはユニオン・ジャックを追跡することができないつて話。受けて貰うわよ王子^{プリンス}」

と、言つてから続けて味方サイドには、

「木更ちゃん。アメリカさんとグレイスちゃんを連れて撤収をお願い。私もすぐに追いつくから」

「分かりました。行きましよう、ふたりとも」

木更ちゃんとグレイスちゃんがアメリカさんの肩を担ぎ、《強制脱出装置》を使い一瞬でこの場から消える。

「してやられましたよ、鳥乃」

わざとらしいリアクションを取り、アインスはいった。

「例えあなたを倒したとしても既に遅くユニオン・ジャックはカードを手に安全圏へ避難されてしまい、これでは私の任務は間違いなく失敗に終わってしまう。……と、思いましたか？」

「えっ」

「今回、私はひとりではないんですよ。あと2名仲間がおりまして」

そういうと、アインスはデュエルディスクを通信機に、

「絶対正義、ユニオン・ジャックたち3名がカードを手に脱出しました。彼女と協力して捕らえてください」

「ちよっ、待っ、いま」

さつき絶対正義ジャステイスって。

「まさかアインス。仲間のふたりっていうのは、シウウとフィーアとかいう話じゃ」

「ふふっ」

口に出して肯定はしないが、その様子間違いない。

「さて、追い込まれたのはどちらだと思えますか、鳥乃？」

「くっ」

そんなの、私に決まってる。早く合流して処分人から三人を護らなくちゃいけないっていうのに。

「では、デュエルといきましょう鳥乃」

アインスはいった。

沙樹

LP4000

手札4

□□□□
□□□□
□□□□
□□□□
□□□□
□□□□
□□□□
□□□□

アインス

LP4000

手札4

「先攻は頂こうか。私のターン」

アインスはというと、まず手札から1枚をディスクに挿し込んで、

「まずは君と再会できたことを祝福といこう。1000ライフ払い、私は手札から《ドラゴノイド・ジエネレーター》を発動。このカードは1ターンに2度まで場にトークンを呼び出せる。この効果で私はフィールドに2体のドラゴノイドトークンを特殊召喚。そして2体をリリース」

2体のドラゴンがアインスの場に現れるも、それらはすぐ光の粒子へと変わり、

「電脳を蹂躪せし破壊竜よ。いまこそ降りたて、この世界こそ貴方のステージだ！ アドバンス召喚！ Sh a l l W e D a n c e ？ 《クラッキング・ドラゴン》！」

現れたのは1体の電脳竜。そして、早くも攻撃力3000の登場でもある。

「カードを1枚セット。私はこれでターン終了となりますが、ここで《ドラゴノイド・ジエネレーター》の効果。このターン私が呼び出したトークンの数だけ、鳥乃のフィールドに同じドラゴノイドトークンを呼び出します。受け取って頂けますか？ 私からの祝儀を」

嫌だ、といっても強制効果なので仕方がない。

「……。私は2体のドラゴノイドトークンを特殊召喚」

私の場に二体のモンスターが出現した。すると、《クラッキング・ドラゴン》から衝撃波が放たれ、特殊召喚したドラゴノイドトークンの

体にブレが生じる。

「ですが、なんとという事でしょう。《クラッキング・ドラゴン》は相手フィールドにモンスターが召喚・特殊召喚された時に、そのモンスターのレベル×200ポイント攻撃力を下げ、同じ数値だけ相手にダメージを与えてしまう効果を持っているのです」

「あからさまにマッチポンプじゃない」

「否定はしません。それでは鳥乃、400ダメージ分のダンスを踊って頂きますよ」

続けて衝撃波は2体のトークンから発せられ私を襲う。演出程度に微弱なフィールドが込められたバウンドダメージに、私はつい必要以上のフィールドで身を護ってしまった。

沙樹 LP 4000 ↓ 3600

「改めて、私はこれでターン終了」

「私のターン、ドロー」

さて、《クラッキング・ドラゴン》はスムーズに攻略しないと一気にライフがなくなりそうだ。私はカードを引き、いかに《クラッキング・ドラゴン》を無力化しつつ対処できるか考え、

「これが一番ね。座標確認、私のサーキット。ロックオン！」

と、前方にリンクマーカーを出現させると、

「おや？」

と、反応するアインス。

「召喚条件は通常モンスター1体。私はドラゴノイドトークン1体をリンクマーカーにセット！ リンク召喚！ 起動せよ、リンク1《リンク・スパイダー》！」

トークンがカタパルトから射出されるようにマーカーに搭載されると、出現したのは1体の蜘蛛のモンスター。

「これは驚いた。鳥乃がサイバースを、そしてリンク召喚を使うなんて」

「死んだ仲間の形見よ」

すると、アインスは小さく驚き、

「もしかして、フィーアが殺害した速見のカードを」

「違うわ」

私はいった。

「そうか」

後ろめたい気持ちでもあるのだろうか、アインスはどこかほっとしていた様子を見せる。そこへ私は、

「増田よ」

「……。そうか」

それを聞いて表情を沈ませるアインス。彼女は増田のことを知ってるのだ。

「デュエルを続けるわ。《リンク・スパイダー》は1ターンに1度、リンク先に手札からレベル4以下の通常モンスターを特殊召喚できる。私は《幻獣機ソユーズピニ》を特殊召喚。そして再度座標確認、私のサーキット。ロックオン！」

沙樹 LP3600↓3400

私は場に寄生虫の巣食ったような宇宙船の幻獣機を出し、私はソユーズピニの攻撃力200ポイント分のダメージを受けつつ、前方に再びリンクマーカーを発生させる。

「召喚条件はモンスター2体。私はドラゴノイドトークン1体と《幻獣機ソユーズピニ》をリンクマーカーにセット！ リンク召喚！ 起動せよ、リンク2 《セキュリティ・ドラゴン》！」

こうして現れたのは1体の電脳竜。

「《セキュリティ・ドラゴン》のモンスター効果。このカードが相互リンク状態の場合、一度だけ相手モンスター1体を持ち主の手札に戻す。私は《クラッキング・ドラゴン》を選択」

「やりますね。ダンスを踊って頂くはずが、逆に《クラッキング・ドラゴン》が踊らされるとは」

「で、よ」

私はいい、本日3度目のリンクマーカー。こうして《リンク・スパイダー》と《セキュリティ・ドラゴン》を素材に出したのは、

「リンク召喚！ 起動せよ、リンク3 《デコード・トーカー》！」

増田のフェイバリットでもあったサイバースの戦士。

「《デコード・トーカー》のリンク先に《幻獣機テザールフ》を通常召喚、効果で幻獣機トークンを特殊召喚」

さらにモンスターを展開し、

「《デコード・トーカー》は元々の攻撃力こそ2300だけど、自身のリンク先のモンスターの数×500ポイント攻撃力を上げる。バトル！ 《デコード・トーカー》でアインスにダイレクトアタック」

《デコード・トーカー》 攻撃力2300↓2800

私の指示を受けると《デコード・トーカー》は飛び上がり、アインスに向けて巨大な剣を振り下ろす。しかし、突如出現した花びらによって攻撃は防がれてしまう。

「おっと危ない危ない、罨カード《フローラル・シールド》を発動。その攻撃を無効にして私はカードを1枚引くでしょう」

そのまま花びらから花粉が舞うと、《デコード・トーカー》は力を失い、重力に引かれるように私の傍へととんぼ返り。

「けど、《幻獣機テザールフ》の攻撃は残ってる」

「そこらは受けようか」

アインス LP3000↓1300

テザールフから銃撃を受け、減少するアインスのライフ。

「うん、いい攻撃だ。だけど、せつかくのダイレクトアタックなのだから、もう少しフィールで演出を強化してもいいんじゃないかな。例えば、そのテザールで私を括り付けて銃撃するとかさ。私も脱出シヨールを披露して愉しめるのだけだ」

「メンタルを追い込む為にならするけど、悦ばせる為にやってどうするのって話よ、ターン終了」

私はいった。

沙樹

LP3400

手札3

□□□□

「《幻獣機トークン》」「《幻獣機テザールフ》」□

□——《デコード・トーカー》（沙樹）《》

□□□□

□□□□「《ドラゴノイド・ジエネレーター》」

アインス

LP1300

手札3

「つれないなあ。もう少しデュエルを愉しんだらいいじゃないか」

アインスはいった。

「それとも、余裕がないのかい？」

「当たり前でしょ、早くしないとふたりが危ないんだから」

「いや」

アインスはニヒルに笑い、

「負けるのを怖がってる。失敗を恐れている。失うのが怖い。そつちのほうさ」

「っ」

思わず肩に力が入る。恐らく、いまの私はものすっごい余裕のない、怖い顔をしているのだろう。

「デュエルにもその傾向が表れている。目先の《クラッキング・ドラゴン》のバーンダメージを恐れ過ぎて、《ドラゴノイド・ジエネレーター》の存在を忘れていたね」

「あ」

「それでは、次のターン再び《クラッキング・ドラゴン》を出してしまおうよ。攻撃力2800の《デコード・トーカー》では返り討ちだ」

「っ」

睨みつけると、アインスは「ふふっ」と笑い、

「私のターン。ドロー」

と、カードを引く。

「魔法カード《トレード・イン》を発動。《クラッキング・ドラゴン》を捨ててカードを2枚ドローする」

「え」

どうして、まさにさっき言ったプレイングをすれば私を追い込めるのに。

「どうして驚くんさい？ 普段の君だったら、手札に戻った《クラツキング・ドラゴン》の対策をしてないわけじゃないか。踊らさせるのも嫌いじゃないけど、ただ術中に嵌ってるだけでは一緒に踊れないからね」

アインスはいうけど、間違いなく、いまの私〃は対策できてない事も気づいてたはず。なのに。

「相変わらず食えない人間ね」

「何をいうんだい、私は君が大好きな女性だ」

「そういう食えないじゃないわよ。それにあなたは、見た目も中身も美青年過ぎて対象外よ」

「おや失礼。だけど私は、鳥乃のことは毎日口説きたいと思っているよ」

「気持ち悪いこと言わないで頂戴」

全く、このアインスという女はいつもこうだ。

「気持ち悪いとは心外だな。なら、いまの君にどんなアピールが有効なのか運命とやらに聞いてみるとしよう」

そういうながら、アインスは手札を1枚ディスクに置き、

「まずは、その下準備だ。相手フィールド上にリンクモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる。《ゲートウェイ・ドラゴン》！」

空間に突如ゲートが現れ、開くと中から1体の竜が。さらに同じゲートから別の竜が出現し、

「《ゲートウェイ・ドラゴン》は1ターンに1度、手札のドラゴン族・閻属性モンスターを特殊召喚する。《スニツフィン・ドラゴン》を特殊召喚」

と、一気に2体のモンスターを展開。

「《スニツフィン・ドラゴン》のモンスター効果。このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、同名モンスターを手札に加える」

アインスの手札に2体目の《スニツフィン・ドラゴン》が加わり、
「開け、私のステージよ」

彼女の足下に、リンクマーカーが出現した。

「きたわね。アインスのくっそ濃いリンク召喚」

突然流れ始める舞曲。それをバツクに、アインスはリンクマーカーの上でひとりワルフを踊りだす。

「召喚条件はトークン以外のレベル4以下のドラゴン族モンスター2体。私は《ゲートウェイ・ドラゴン》と《スニッフィンク・ドラゴン》をリンクマーカーにセット」

リズムを刻んだままアインスは腰のライフル銃を二丁とも抜くと、2体のモンスターは光の粒子、いや弾丸となってライフル銃に装填される。

アインスは踊りながらリンクマーカーにそれを撃ち込み、

「リンク召喚、Shall We Dance? 《ツイン・トライアングル・ドラゴン》！」

リンクマーカーから出現したモンスターとポーズを決めるのだった。

「長い」

BGMがフェードアウトする中、私はいった。

「御不満なら、次は私と一緒にステージに上がらないかい？ Shall

ll We Dance?」

「いやもういいわ」

上がりたくもないし、これ以上突っ込みたくもない。

「そうか、残念だ。なら《ツイン・トライアングル・ドラゴン》の効果処理に入ろう。このカードのリンク召喚に成功した時、ライフを500払い、墓地のレベル5以上のモンスター1体をリンク先に特殊召喚する。私はこの効果で墓地の《クラッキング・ドラゴン》を特殊召喚」
アインス LP1300↓800

「げっ」

何だかんだで再び出現する《クラッキング・ドラゴン》に私は身構えるも、

「ご安心を。この効果で特殊召喚した《クラッキング・ドラゴン》は効果が無効となり、このターン攻撃も行えないからね」

なら、まだいいのだけど。

「ですが、別の意味で安全ではないでしょうけど」

そういうと、アインスは突然片手を天に伸ばした。

「準備は整った。改めて運命に訊ねてみるとしよう」

すると、天井が突然渦を巻き、そこから竜巻を発生させてアインスを包む。

「私はここで、スキル《ストームアクセス》を使用」

「な、えっ」

《ストームアクセス》って、確か増田のスキルと同じ。

「このスキルは私のライフが1000以下の場合に使用可能。ゲームに使用してないサイバース族・リンクモンスター1体をランダムにエクストラデツキに加える」

暗視ゴーグルを使って竜巻の中を確認すると、アインスの天に伸ばした手が光り、竜巻の中から1枚のカードを引き抜く姿が見えた。

そして、カードをつかみ取ると竜巻は四散し、

「良き力です」

アインスはいった。

「答えができました。いまの鳥乃には、過剰なくらいに激しいアピールが必要だとね」

と、アインスはカードをディスクに置いて、

「《スニッフィング・ドラゴン》を通常召喚。そして再び幕を開けよ、私のステージ」

再びリンクマーカーの上で踊りだす。

「召喚条件は効果モンスター2体以上。私は《ツイン・トライアングル・ドラゴン》《クラッキング・ドラゴン》《スニッフィング・ドラゴン》をリンクマーカーにセット。リンク召喚！ Shal! We Dance!! 《トポロジック・ボマー・ドラゴン》！」

現れたのはLINK4、攻撃力3000のサイバース。

これが、さつき《ストームアクセス》で手に入れたカードなのだろう。

「カードをセットし、バトルといこう。《トポロジック・ボマー・ドラゴン》で《デコード・トーカー》を攻撃。終極のマリシャス・コード

！」

《デコード・トーカー》の攻撃力は2800の為、攻撃力3000のトポロジックには敵わない。それでも《デコード・トーカー》はブレス攻撃を耐えようとするも、

「そして、トポロジックは相手モンスターを攻撃したダメージ計算後に、相手モンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。エイミング・ブラスト！」

続けてトポロジックは無数のかまいたちを放ち、立て続けの二連撃に耐えられず《デコード・トーカー》は破壊。かまいたちのほうは私にも直接襲い掛かり、私の肌に傷を作らず、器用に服だけを切り刻む。「っ、脱がすのは好きでも、脱がされるのは趣味じゃないんだけどね」私は言いながら、すでにボロボロで邪魔にしかならない衣服を破り捨て、上半身を下着一枚にする。スカートは無事だった。

沙樹 LP3400↓3200↓900

「そんな鳥乃も私は好きですよ。どうです、仕事が終わったら一緒にBARでも」

「お互い未成年」

「真面目ですね、とおりののお」

「何その言い方」

「最近Infinit Forceというアニメを嵌ってて、丁度この想いを誰かに伝えたい所だったんですよ、たあけえしい」

突然、説明しないと分からないような時事ネタされても困るって話なんだけど。

「とりあえず、私はこれでターンを終了。ピンポ〜……っ」

言いかけ、顔を赤らめるアインス。ああ、自分のキャラとかけ離れたネタはできない性質なのね、意外。

沙樹

LP900

手札3

□□□□

「《幻獣機トークン》」「《幻獣機テザールフ》」□

「《トポロジック・ボマー・ドラゴン（アインス）》——□□□□

□□《伏せカード》」「《ドラゴノイド・ジェネレーター》」

アインス

LP800

手札1

「私のターン、ドロー」

手札を肥やし、私は《トポロジック・ボマー・ドラゴン》の性能を考える。いまの所、攻撃力3000で直火焼き効果持ちと判明している。けど、相手はLINK4のモンスター。効果がそれだとは到底思えない。

何をもつてしても、まずトポロジックを破壊することを優先したほうがよさそうだ。

「私は手札から《幻獣機ブラックファルコン》召喚。そして2体でオーバー」

レイ、といいかけた所で。

「ストップです、鳥乃」

アインスはいった。

「焦るのもいいですけど、ブラックファルコンの召喚成功時に、私はセットカードを使用します」

「え?」

「速攻魔法発動。《クイック・リボルブ》！」

「え!?!」

そのカードって、たしか。

「《クイック・リボルブ》の効果で、私はデツキからヴァレットモンスター1体を特殊召喚。さあ、共に舞いましょう、《アネスヴァレット・ドラゴン》！」

フィールドに出現したのは、頭部が弾丸を備えた一体の竜の姿。

「この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、エンドフェイズに破壊されます」

知っている。何故なら、さっきまでアインスは機械族の《クラツキ

ング・ドラゴン』とドラゴン族・闇属性の汎用モンスターしか使つてなかつたのですけど、実は彼女の主力モンスターはこのヴァレット・モンスターなのだから。

「けど、だったらこのタイミングで出したって意味なんてあまり」

「あるんですよ」

アインスはいった。

「《トポロジック・ボマー・ドラゴン》のモンスター効果。フィールドのリンクモンスターのリンク先にこのカード以外のモンスターが特殊召喚された場合に発動。お互いのメインモンスターゾーンのカードを全て破壊します」

「なっ」

他に効果を持つてゐることは警戒してた。だけど、そんな効果を持つてたなんて。

「けど、私のモンスターは幻獣機2体と幻獣機トークン1体。幻獣機はトークンがいる限り破壊されないわ」

だから、破壊されるのは幻獣機トークンだけ。なのだけど、「もちろん分かってますよ。ですけど鳥乃。今回のデュエルはスピードデュエル。このルールではエクストラデッキの枚数は最大5枚です。あなたは既にリンクモンスターを3体使い、先ほどランク7のエクシーズモンスターを出そうとした。しかし、幻獣機トークンのレベルの合計だけ自身のレベルを上げる幻獣機の共通効果を利用して以上、いま鳥乃のモンスターはどれもレベル4」

「何が言いたいのか？」

いや、言いたいことは分かっている。つまりは、

「鳥乃。あなたは今回のデッキにランク4は入ってますか？ 入っていたとして、私のトポロジックを対処できるでしょうか？」

ということなのだ。

「……。テザーウルフを準備表示に。ターン終了」

ちなみに、実は使おうとしてたドラゴサックも今回入れてなかつたことには現時点で私は気付いていない。

「では、先ほどトポロジックの効果で幻獣機トークンと一緒に破壊さ

れていた《アネスヴァレット・ドラゴン》の効果が発動しましょう。このカード、いやヴァレットモンスターは戦闘・効果で破壊され墓地へ送られたターンのエンドフェイズにデッキから他のヴァレットモンスターを特殊召喚する共通効果を持っております」

「そうだったわね。って、あ、え?」

ちよつと待つて、さつき《トポロジック・ボマー・ドラゴン》の全体破壊効果って1ターンに1度とか言つてたっけ?

「私はトポロジックのリンク先に《メタルヴァレット・ドラゴン》を特殊召喚。トポロジックの効果でメインモンスターを一掃。今度はテザールもブラックファルコンも破壊されますよね?」

「そう、なるわね」

破壊され、墓地に送られる幻獣機、そしてアインスのヴァレットモンスター。これで私の場は空。

「そして《メタルヴァレット・ドラゴン》のモンスター効果。デッキから《マグナヴァレット・ドラゴン》をトポロジックのリンク外に特殊召喚としましょうか」

対し、アインスはトポロジックに加え絶えず補充されるヴァレットモンスターもいるという安定した布陣。

沙樹

LP900

手札3

□□□

□□□

「《トポロジック・ボマー・ドラゴン(アインス)》——□

□□《マグナヴァレット・ドラゴン》

□□《ドラゴノイド・ジェネレーター》

アインス

LP800

手札1

「私のターン、ドロ」

そんな状態で、次はアインスのターンなのだからたまつたものじや

ない。

「如何ですか、私の『過剰なくらいに激しいアピール』は」

「正直、最悪よ」

「それは残念、ですが。最早私は止まりませんよ。カードを1枚セツト。そして、『トポロジック・ボマー・ドラゴン』で鳥乃に直接攻撃」
「だけど、何もできないわけじゃない。」

「ここで私は手札を捨て、」

「相手が直接攻撃を宣言した時、手札から『クリ瑞雲』を捨て効果発動。私の場に幻獣機トークンを呼び出し、トポロジックにはそのモンスターと戦闘を行って貰うわ」

「そして、この戦闘では幻獣機トークンを破壊できない」

「覚えていたらしい。」

「その通りよ」

「だけど、破壊されないのはこの一回だけ。続けて私は『マグナヴァレット・ドラゴン』で『クリ瑞雲』を戦闘破壊」

「アインスが言った通り、今度の戦闘ではどうしようもなく、幻獣機トークンは破壊される。それでも、このターンは耐えきった。」

「さすがだね鳥乃は。私はこれでターンを終了だ」
「さて。」

そして現状をみるにこのターンで何かしなければ、私はこのデュエルに負ける。

しかし、手札のカードは『幻獣機オライオン』と『幻獣機ジョースピット』。これでは残念ながら、私のデッキの残りを思い返す限り、何を引いてもこの場でトポロジックを突破できなければ、アインスのライフを0にもできない。

できれば使いたくなかったのだけど、『あれ』に頼るしかなさそうだった。

「私のターン。ドローフェイズ時に、私はスキルを発動」

「宣言すると同時に、私のドローする手が闇色の輝きを帯びる。」

「暗き力はドローカードをも闇に染める！——ダークドロー！」

一気に私のフィールドが消耗するのを実感。それを代償に私が書き

換えたドローカードは。

「相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、このカードを手札から特殊召喚する。《幻機獣ランシャーク》！」

フィールドに表れたのは、背ビレがミサイルランチャーと化した一匹の鯨。

「そして《幻機獣オライオン》を通常召喚。私はレベル5《幻機獣ランシャーク》にレベル2《幻機獣オライオン》をチューニング」

オライオンの体がふたつの光の輪になると、ランシャークは内側を潜って5つの星に。輪と混ざり合って発光し、

「未だ穢れに染まらぬ無垢なる翼よ。その透明さで敵を討て！シンクロ召喚！飛翔せよ、レベル7！《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》！」

現れたのは、未だ陽井氏に返せずにいる、半ば私のエースになりつつある一匹のドラゴン。

「これが、最近鳥乃が手にしたというクリアウイング。美しい」
アインスがつぶやく。

「ですが、このモンスターの情報は取得済。このカードでは私のトポロジックを倒せませんか？」

その通りだ。しかし、
「まだよ。《幻機獣オライオン》が墓地に送られたことで、場に幻機獣トークンを特殊召喚。さらに墓地のオライオンを除外して《幻機獣ジョースピット》を召喚」

手札を使い切り、展開された3体のモンスター。

「そして、座標確認、私のサーキット。ロックオン！」
「四度目のリンク召喚だって」

アインスが驚く中、私の前方にリンクマーカーが出現する。

「アローヘッド確認。召喚条件はモンスター2体以上。そして、このモンスターを召喚する場合、《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》はLINK-2として扱う。私は《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》《幻機獣ジョースピット》そして幻機獣トークンをリンクマーカーにセット！」

「ということとは、リンク4を」

音速を超え、リンクマーカーに飛び込む3体のモンスター。こうして現れたのは、増田が残してくれた新たなクリアウイング。

「リンク召喚。起動せよLINK-4 《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》！」

見た目はほとんど《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》で攻撃力も2500。しかし、その体はより3Dで描いたような電子的な見た目と化し、種族もサイバースへと変わっている。

「《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》のモンスター効果！ このカードのリンク召喚に成功した場合、クリアウイング以外の素材の数までリンク先にラピッド・ドラゴントークンを置く。私はクリアウイングの下のモンスターゾーンにトークンを生成」

続けてフィールドに出現したのは、小型の《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》のようなモンスター。種族がサイバースである以外、性能は幻獣機トークンとほぼ同じ。

沙樹

LP900

手札0

□□□

□□□「《ラピッド・ドラゴントークン》」

「《トポロジック・ボマー・ドラゴン（アインス）》——《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン（沙樹）》」

□□□「《マグナヴァレット・ドラゴン》」

「《伏せカード》」□□「《ドラゴノイド・ジェネレーター》」

アインス

LP800

手札1

「このカードは一体。鳥乃の情報に、いままでこんなカードはなかったはず」

驚くアインス。私はいった。

「喜びなさいアインス。このモンスターを召喚したの、今回が初め

てって話なのよ」

「!? そうか」

アインスは、新たなクリアウイングを見上げ、

「それは光栄だ。今日、鳥乃とデュエルできて良かったと心底思うよ」と、つぶやくも。

「ですが、デュエルの手を休めるわけにもいかない。クリアウイングのリンク先にモンスターが特殊召喚されたことで、《トポロジック・ボマー・ドラゴン》の効果再び発動。メインモンスターゾーンのモンスターを全て破壊させて貰おうか」

「残念だけど」

私はいった。

「その効果にチェーンして、《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》もモンスター効果を発動。リブート・プロト！ 1ターンに1度、このカードのリンク先のモンスターの数まで、フィールド上のモンスターの効果をターン終了時まで無効にする。クリアウイングのリンク先のモンスターは、ラピッド・ドラゴントークンと《マグナヴァレット・ドラゴン》の2体。これにより、私は《マグナヴァレット・ドラゴン》と《トポロジック・ボマー・ドラゴン》の効果は無効化させるわ」

クリアウイングの両の翼が輝くと、そこから光を撒きながら竜の巨体が舞い上がる。

光を浴びたアインスのモンスターは、一瞬その体がデータ化し、プログラムが真っ白に書き換えられる。

「そして、この効果で無効化したモンスター1体につき、ターン終了時まで《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》の攻撃力は500アップ」

《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》 攻撃力2500↓3500
クリアウイングの攻撃力が3500にまで上昇する。これでトポロジックを戦闘破壊することは可能ではあるけど。

「バトル。《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》で《マグナヴァレット・ドラゴン》を攻撃。イニシャルイズ・タイピング！」

クリアウイングの体が半透明な球状になると、そこから《クリア

ウイング・シンクロ・ドラゴン」同様に飛翔からの急降下ダイブ攻撃でマグナヴァレットに突撃する。

これが決まればアインスのライフはゼロになる。しかし、

「悪いけど鳥乃、ステージの結末は私の負けでは閉幕させれないんだ。例え禁じ手に出ても」

そういつて、アインスはセットカードを表向きにする。

「罨カード《ドゥーブルパッセ》を発動。実際の効果処理は少し違うけど、疑似的にこう表現しよう。マグナヴァレットとクリアウイングの戦闘を、お互いの相手への直接攻撃に変える」

直後、《マグナヴァレット・ドラゴン》はクリアウイングの攻撃を避け、私に向けて頭部の弾丸を私に発射。そしてクリアウイングはそのままアインスへのダイブ攻撃へと変更され、

沙樹 LP900↓0

アインス LP800↓0

お互いのライフはゼロに、引き分けに持ち込まれてしまった。

ライフがゼロになったことで一度全損する私のフィール。しかしそれはアインスも同じ。

「やっ」

そんなアインスがいった。

「もうそろそろ処分人が君の連れと接触しているはずだ。絶対正義がついてはいるとはいえ、もしものことがある。死人が出る前に私たちも早く向かうとしようか」

「そつちから接触させておいて、よくまあそんな事言えたものね」

「まあ、そうだね」

アインスは同意し、

「私たちも任務の為にNO.7 ラッキー・ストライブを確保する必要はあった。絶対正義ひとりだと情で逃がしてしまうかもしれないからね。だけど、速見のときのように犠牲者を出す気もない。両方を満たす為には私だけがフィールを失うわけにはいかなかったんだ。勿論私のひとり勝ちなら万々歳。だけど、こういう手段もある」

そういつて、ライフル銃を私の喉下に向け。

「お互いフィールを全損し、銃弾一発で死ぬるようになった私たちが、互いが互いを人質に皆と合流。その時、《N.O. 7 ラツキー・ストライプ》を所持していたほうがこの衝突の勝者だ」

と、再びライフル銃を仕舞うアインス。

「という賭けは嫌いかい？」

「私に分が悪すぎじゃない」

と、私はいうも、

「けど、誰も犠牲を出さないためにはそれしか無さそうね、乗ったわ」

「助かるよ、鳥乃」

アインスは私の手を取り、口づけしようとする。私は咄嗟に振り払
い。

「だからアインスは趣味じゃないのよ。行きましょ」

と、外へ向かって駆け出した。

そして、私たちは美術館の外で犠牲者をひとり見つけてしまうことになる。

MISSION 15—その名はハイウインド

——時刻は少し遡る。

ボクの名前はフェンリル。宗教組織『黒山羊の実』で生まれたプライド様こと鷹野^{たかの}メイコの作品のひとり。

そして、たぶん病んでる人なんじゃないかな。

——現在時刻23:00

「うーん65点かあ」

鷹野邸の人形部屋。辺りには所狭しと人形やぬいぐるみ、フィギュアが並んでる。そんな中で、ボクはいまダンボールで作った簡易机で勉強をしていた。

問題集の1ページを解き終え、答え合わせまでしたけど、結果はあまり良くない。

「フェンリル。アンタまた勉強してんの?」

ミストランが入ってきた。シャツ、ジーンズ、ジャケットのラフな格好にコンビニ袋がひとつ。その袋から頼んであったお茶と弁当をダンボール机に置いて、

「で、注文はこれでいい?」

「うん。ありがとう」

「金は後日貰うから」

「別にいいじゃないか」

ボクはちよつとだけ辟易しながら、

「どうせ盗って稼ぐしかないんだから」

ボクたち作品は、自由に使えるお金が存在しない。戸籍も履歴もないからアルバイトすることもできず、鷹野に養われるしかないのだ。なのに、基本的にボクたちは食事というものを与えて貰えない。

鷹野にとつて、ボクたち作品は人形であつて人間ではないのだ。人形は飲食も排泄も必要ないからね。だから、よく今日みたいに万引きや窃盗で食いつないでいる。

「で、フェンリル」

ミストランは話を戻し、

「今日も勉強してるみたいだけど、ぶつちやけ意味あんの？」

「もちろんあるよ。人間は学校で勉強するものだからね」

ボクはかつて人間だった。それも、フィールどころかデュエルさえ知らない完全な一般人だったんだ。

だけど、家族旅行中に観光バスがフィール・ハンターズっていう集団にハイジャックされてね、そこから先はあまり覚えてない。記憶が曖昧なんだ。そして、気づいたらボクは鷹野の作品フェンリルとして生まれ変わっていた。元の名前はもう思い出せない。

「ボクはもう一生鷹野の人形だから学校には行けないけど、それでも、せめて人間らしい苦悩や努力を味わってもいいじゃないか。じゃないと、心の中でさえボクが人間だったことを忘れそうになる」

「まったく。よくやるわ」

ミストランは腕を組んでいった。

「ボクの勝手でしょそんなの」

言いながら、ボクはふと思いつき、

「あ、そうだミストラン」

と、彼女に数学の文章問題をひとつ指す。

「これ分らないんだけど、解き方教えてくれる」

「ん」

ミストランは内容を確認すると、隣にシャーペンでささつと書いて、

「式はこんなもんよ。解き方は自分で考えて？」

「やっぱりミストランも勉強してるんじゃないか」

ボクがにたと笑うと、ミストランはそっぽ向いて、

「いや、クローン元の記憶よ」

「ほんとー？」

「……ちっ」

ミストランは舌打って罰悪そうに、

「私はフェンリルみたいに悲観主義ペシミズムな考えてやってるわけじゃないし」

「じゃあ何なのさ」

「鷹野の呪縛からさつさと卒業する」

「え？」

ミストランは何を言ってるの？

「鷹野なしでも生命維持できる手段を見つけて、戸籍も何とか取得して、世界の果てでも何でもいいからヒトとして生きていく」

「そんなの、無理に決まってるじゃないか」

ボクたちが鷹野の下から離れられない一番の理由。それは、正規の手段で生誕してないボクたちは生命として不完全で、彼女の力に頼らないと生命維持さえままならないからだ。彼女が調合するナノマシン入りの薬で体調を整え、定期的にメンテナンスを受けて異常が起きてないかチェックする。それができるのは全世界において鷹野だけで、これを断つたら、ボクたちは1週間生きられるのかどうかさえ分からない。

なのに、ミストランはというと。

「だって面倒くさいし疲れるじゃん。ずっと鷹野の人形として生きるとか」

普通、そこに居直るほうが楽で立ち向かうほうが面倒くさいじゃないかな？　なんてボクはそう思う、だけど。

「フェンリルこそ、黒山羊の実の信仰者ならもつと自分の幸せに生きたほうがいいわよ」

ミストランにとっては、それじゃあ駄目なんだ。全く眩しいよ。だ
けどさ、

「信仰心ゼロの人に、しかも人の勉強にケチつけた人に言われてもね」
「嘘は言ってるわ。そんな夢も希望もない勉強に何の意味があるのって」

「でも、そうだね」

ミストランの返事に反応はせず、ボクはいったんだ。

「これでもボクは十分幸せなんだと思うよ。だって、人間じゃあなくなっただけど、ボクは、ボクだけは生きてるんだから」

ボク以外の家族は生きてないのかもしれない。そう思うと、生きてること以上を求めるのは、きつと贅沢なことなんだから。

ミストランはため息一回に、

「やっぱアンタとは仲良くなれそうにないわ」

「奇遇だね。ボクも毎日そう感じてるよ。まあ、ミストランのことは嫌いでもないけど」

「私は嫌いだけど。アンタのマイナス思考っぷりが」

そう言い残しミストランは部屋から出る。しかし、すぐ扉を開け直し、

「あ、忘れてた」

ミストランはいった。

「鷹野が呼んでたわ。あいつの寝室で待ってるはずよ」

「ん、分かった」

となると、急がなくちゃいけない。ボクは参考書を片付けて、貰ったばかりのお茶を口つけずインド飲みで一口。残りはミストランの胃に入るものとして、

(弁当、食べたかったな。お腹空いた)

と、思いながら鷹野の部屋の前に立ち、

「失礼します。フェンリルです」

戸を数回叩いて中に。

鷹野はバスローブ姿でベッドに座り、ワイングラス片手にテレビを見ている。

「遅かったわね、フェンリル」

リモコンでテレビを消し、鷹野……ううん、鷹野様が振り返る。長身で長髪、そしてバスローブの下には何も着てないらしく、胸元からはグラマラスな谷間が映る。見た目だけなら格好良くてすごく綺麗な美女。だけど彼女は、人形性愛者という歪んだ性癖の持ち主だった。

「ご、ごめんなさい」

「まあいいわ」

鷹野様は微笑み、ボクに手を伸ばす。

「さあ、来なさい」

ボクは心の中でため息を吐いた。

鷹野様には感謝している。ボクを生かしてくれたのだから。けど、ボクは鷹野のことが大嫌いだ。

せめて食事を与えてくれたら、せめてボクたちの幸せを少しでも考えてくれたら、ボクは忠犬みたいに彼女を慕ってたのかもしれない。だけど、ボクは彼女の欲を満たす玩具でしかないのだ。この肌は機械でも樹脂でもない。人と同じ細胞で造られ生前と同じ血が流れている。ただ、鷹野様の手で改造を施されただけなのに。ボクは、ボクの創造主に「生物」だって思われてないのだ。

さつき、ボクは「生きてるんだから幸せだと思う」といった。だけど、実は少し違う。

ボクは「だから幸せなんだと思わないといけない」んだ。じゃないと、生きることさえ出来なかつたみんなに失礼だからね。

「はい。鷹野様」

ボクは、服を脱いで鷹野様の下に歩み寄った。

さあ、今日も日課じこくの始まりだ。

——現在時刻0：15。

鷹野の部屋から出たボクは、ちよつとふらつく体を何とか踏ん張って人形部屋に戻る。そして、外出着に替えようとした所、

「あれ、どしたのフエンリル外出？」

と、ダンボールに包まって寝ていたミストランに訊かれた。

「うん。鷹野に頼まれてね、これから任務」

行為の後、やっと眠れると意識を手放そうとした所を、鷹野より命令を下されたのだ。内容は、美術館倉庫から《N0・7 ラッキー・ストライプ》を盗みだせとのことだった。

正直辟易した。ベッドの上で乱暴され疲弊しきつてる所に食事も採れずに任務に入らされるのだ。けど、理由を知ったからには頑張るしかない。だって、鷹野の新しい作品。つまりボクたちの仲間を作る作業を成功させる為らしいから。今度の仲間は酷い生涯の末に山に廃棄され亡くなったらしい。その子が生まれ変わり、もう一度人生をやり直せるというのなら、ボクは。

「と行った所だから行ってくるね」

迷彩兼ねて黒いコートを羽織り、内ポケットに拳銃を仕舞う。そこでミストランから、

「じゃ、ついでにアレ外でこっそり処分しといて」

と、指さした先には未だ手つかずの弁当とペットボトルのお茶。

「あれ？」

ミストラン、全く手をつけなかったんだ。

「分かった。じゃあ鷹野に見つからないようこっそり処分しておくよ」

なお、鷹野に見つかったら「人形には必要ないでしょ」と没収されるのだ。

ボクは買い物袋に弁当とお茶を戻し、鷹野邸を後にした。

それから公園で遅めの夕食をとり、コンビニでついてくるおしぼりを水飲み場の水で何度も濡らしながら茂みに隠れて体を拭いた。任務でどうせ汗もかくし汚れるのは分かっていたけど、鷹野と肌を重ねた跡をそのままにする気はなかった。

服を着直し、何気なく後ろを振り返ると、近くの茂みから、誰かがサツと気配を隠したのが分かった。どうやら見られてたらしい。

(はあ……)

なんだかな。どうして男って生き物はこうも女の裸を見たがるものなのかな？ と、ボクは思った。だけど、どうやら違ってたようで、

「き、気づかれてマセンか？」

「大丈夫です。恐らく」

「よかったデスー」

聴覚も改造されたボクでなければ耳に届かないような小声。それは女性三人のものだった。かつ、そのうち一人からは聞き覚えがある。

「誰だい？」

訊ねると、ふたりの驚く気配。程なくして、

「気配を消してこちらに来てください」

と、聞き覚えのあるほうの声。

言われた通り茂みに向かうと、そこには清純な感じの女の子ひとり
と、白人の女性がふたり隠れていた。白人のひとりは長身の大人で怪
我してるのか松葉杖姿、逆にもうひとり少し幼い感じだ。

ボクは、その内の清純な子を指して、

「君はたしか、アンちゃんの病室にいた」

「木更です」

と、その子はいった。

「どうしたの、こんな所で」

ボクは言いながら、ふと彼女が小箱をひとつ握ってるのに気付い
た。

「その小箱」

訊ねる。すると、

「え、あっ」

木更ちゃんは気付くとすぐ、

「な、何でもありません」

と、小箱を背中に。

「隠しておいて何でもないわけ無いじゃないか」

「ほ、ホントーにナニもありマセン」

長身のほうの白人がいった。続けて幼いほうの白人女性が、

「い、Yesデス！ ベベべつに私たちは《No. 7 ラッキー・スト

ライブ》を盗み出してなんかいないデスよー」

なんて自爆していた。って、

「ラッキー・ストライブだっ!?」

それ、正にいまボクが狙ってるものじゃないか。

「木更ちゃんだっけ、どうして君がそんなものを」

「え、えーっと」

木更ちゃんが苦笑いして反応に困っていると、

「き、気にしないで下サイ、別にワタシたちは怪盗ユニオン・ジャック
ではありマセンし、ハングドに協力を依頼したなんてアリマセン」

なんて、今度は長身で大人なほうの白人女性が自爆し、

「Yesデス！ その末、同じくラッキー・ストライブを狙って現れた

“処分人”から逃げてる所なんて絶対ないデス！」
幼いほうの白人が見事に現状まで言ってくれた。

「信じてくだサイ」「信じてくだサイ」

そして、この駄目押し。

ボクは、ふたりの残念っぷりに心の中で盛大にため息を吐きつつ、

「“処分人”か。厄介なのに狙われたものだね」

「はい」

うなづく木更ちゃん。と、そこへ茂みの外を誰かがふたり歩くのが見えた。片方は髪をポニーテールにした、見た目小学生くらいの女の子。しかし、表情はバイザーで隠れており、見た目に似合わぬ重々しいオーラを感じる。

顔を見るのは初めてだけど、ボクの持つてる情報と合致する。間違いないく処分人だ。

もうひとりとはセミショート髪のボーイッシュな感じの女性。処分人と組んでるとは考え辛いけど。

「ところで、フェンリルさんはどうしてここに？」

と、木更ちゃんに訊かれたのでボクは正直に、

「偶然にもボクも同じだよ」

「え？」

「そのラッキー・ストライプを盗りにきたんだ」

「えっ」

驚き、木更ちゃんは必死に小箱を抱える。ボクは、木更ちゃんを探してるだろう処分人を観察しながら考え、

「ボクが囷になろうか？」

「え？」

驚く木更ちゃん。大人のほうの白人女性も、

「アナタがデスか？」

「うん、これでもボクは黒山羊の實の戦闘員だ。君たちの誰かよりは生き残る目があると思うよ」

すると幼いほうの白人女性が、

「く、黒山羊の實デスか？」

と驚き、

「キサラちゃん。ハングドつてもしかして黒山羊の実と協力関係にあるデスか？」

「いえ、基本敵対みたいですけど」

木更ちゃんは応え、だからこそ「どうして？」と目で訴えてくる。

「うん、確かにハングドとは現状敵対関係に近いけど」

ボクはもう一度処分人に視線を向けて、

「処分人とハングドどっちの側につくかと言われたら、ボクは断然ハングドかな。それに、ここで君たちからカードを奪うにもフィールドを全く消費せずなんて無理だろうし、そこから処分人と相手する位なら先に処分人の相手をしたほうがまだ安全だよ。ラッキー・ストライプは後からユニオン・ジャックを狙えばいいからね」

「う……」

顔を歪めるユニオン・ジャック。

「それに」

ボクは木更ちゃんをみて、

「君がアンちゃんの友達だから、かな」

ボクは、絆とか友情とか、そういうのに凄く飢えている気がする。

一度全ての繋がりを失ったせいか、それとも新たな親鷹野がボクを物扱にするせいかな。誰かと笑い合いたくて、誰かと対等ともだちになりたくて、誰かを好きになりたくて、だからこそボクは皆と一定の距離を保とうと心掛けている。ボクの「友情」とか「愛」が重すぎるって知ってるから。

恋人なんて出来たら、悪い虫を排除してでも独占しそうだ。鷹野に好意を持っていたら、人形はボクだけで十分ってミストランに手をかけてたかもしれない。

この前だったそうさ。例えば友達ならアンちゃんが黒山羊の実を抜けようというなら、ちゃんと理由を聞いて影で手を貸せば良かったんだ。なのに、黒山羊の実だけが繋がりだと思ったから。ボクはショックで何もしなかった。鷹野がミストランに「殺せ」って命令を下したときも、ボクは心のどこかで「ボクの捨てるやつなんて死んでしま

え」って思ってたんだ。きつと。

そして今度は、友達の友達であって、ボクの友達じゃないのに。つい助けようとしてる。

全く馬鹿な選択をしていると思う。敵の為に別の敵と戦おうっていうんだから。それも、敵の敵は味方って流れでもないのに。

「死なないでください」

そんなボクに、木更ちゃんはいってくれた。そんな一言がボクには結構響くんだ。

「任せて」

そういつてボクは外に出た。

直後、フィールの竜巻がボクを襲う。

「うわっ」

《サイクロン》？ いや、これは腕の振りで巻きあげた風をフィールで強化したものだ。しかし、たったそれだけの動作でこの威力、なんてフィール量だ。まるでミストラン級じゃないか。

ボクはフィールでバリアを放ち何とか相殺するも、直後ボクの喉元と胸に一発ずつ弾丸が迫っているのに気づいた。

(っ!?)

駄目、反応が間に合わない。

ふたつの弾丸は、ボクの動作と次の動作のタイムラグを正確に射貫いてきてるのだ。

(そんな、足止めどころかデュエルさえできないなんて)

迫る死にボクの全身は恐怖に包まれる。

さつき、死ぬなって言っつて貰ったばかりなのに。嫌だ、いやだいやだいやだいやだいやー。

直後、激痛と共にボクの意識は途切れた。

私の名前は鳥乃トリノ 沙樹サキ。 陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「だけどグロは専門外」

「同意だ」

うなずくアインス。

現在、私は木更ちゃんとは合流する為、来た道を引き返していた。

すでに赤外線センサーは解除してあるので、ただ真つすぐ走り抜ければいい。

「で、どうして王子と プリンス “絶対正義” と ジャステイス “処分人” が手を組んでるのよ」

私は外へ急ぎながら訊ねた。

「あなたがどちらかと手を組むならまだしも、絶対正義と処分人は水と油みたいなものじゃない、特にシルフィなんてあなたさえ受け入れないでしょ」

「まあ、そうだね」

否定せず微笑むアインス。

「事と次第によつては、今度あなたと鉢合わせした時の対応も、組織レベルで考えなくちゃいけないわ。積極的に敵対する気がないなら説明して欲しい話なんだけど」

すると、アインスは数秒ほど無言を貫いてから。

「本当は、断るつもりだったんだ。今回の仕事は」

「え?」

「だから、受ける条件にわざと無理難題を出したんだ。絶対正義と処分人も誘えとね。そしたら、まさか本当にシユウとフィーアを雇ってきたんだから、断れなくなっちゃったよ」

とか言いながら、どこか満足そうにアインスは笑う。

「ただフィール・カード1枚を奪うのに業者を3人も雇うって、どんな依頼人なのそれ」

私が訊ねると、

「いや。それはちよつと違うな」

アインスはいった。

「誘われたんだ。組織に加入して欲しいと」

「え、それじゃあいまアインスは」

「ああ」

アインスはうなずき、

「いまの私たちは個人じゃない。ある組織の構成員だ。非正規の所属ではあるけどね」

「ちよっ、待っ」

「そして、いまの私たちの雇い主からハングド宛に伝言を預かっている。『私たちの組織の名を掴んでみせろ』だそうだ」

伝言。いや、それってむしろ挑戦状の類じゃ。

「ただ、これだけは言いたい」

アインスがいった所で出口に辿り着いた。アインスは戸に手を伸ばし、

「雇い主は、君の味か……」

言いかけた手が止まった。

扉を開けた先で見える公園で、いま正にファイアが第三者を撃つていたのでから。

しかも、撃たれた子には見覚えがある。一本の三つ編みに眼鏡姿の一見文系らしい少女。確か名前はフェンリルといたはず。その彼女が、喉元と胸に銃弾を受け、まるでスローモーションのように、その場で倒れたのだ。

「……」

そのファイアが、そのまま茂みの先に手を伸ばし、指を鳴らす。直後、それだけの小さな音がフィールドで膨張し、破壊音波のようになって辺りを破壊。すると、ユニオン・ジャックふたりをフィールドのバリアで護る木更ちゃん顔を出した。

「ターゲット発見。処分かい——」

そのままファイアが銃を3人に向ける。そこを、

「開始すんな！」

『絶対正義』 シュウがジャンプキックで蹴り飛ばした。

「何するのですか、シュウ」

地面に倒れつつ首だけ起こしファイアがいうと、

「それはこっちの台詞だ。あれだけ殺傷するなと言われてるだろうが」

「問題ありません。これは処分ですから」

「屁理屈いうな！」

「？ 屁理屈とはどんな効果ですか？ いつ発動する？」

「カードじゃねえよ」

「いえ、私は作戦名を聞いただけで」

「もういい黙れポンコツ!!」

なんてやり取りしてる間に、私とアインスは皆の下へ向かう。そして、

「シュウ、ファイア」

と、アインスが叫ぶと。

「アインス！」

シュウが反応する。

「良かった、無事だったのか。って何でおまえ敵と一緒にいるんだよ！」

「その事なんですけど。鳥乃」
「ん」

私はアインスとアイコンタクトを交わすと、互いに銃で急所を狙いあう。

「なっ」

驚くシュウ。

「鳥乃せんば、えっ」

一歩遅れて木更ちゃんも私たちに気づき、現状を見てやっぱり驚く。

アインスがいった。

「悪い、デュエルで同時討ちになってしまったね。作戦で死傷者を出すわけにもいきませんから、ひとつ私と鳥乃で賭けに出ることにしました」

「賭け、ですか？」

訊ねるファイア。「はい」とアインスはいい、

「現状を見て分かる通り、私たちは互いに引き金を引くだけで相手を殺せる状態にある。ですから、私たちが合流した時点で、カードを所有していた側を勝者とし、負けたほうは潔く身を引くことにしま」

と、伝えようとした所、ファイアは私に発砲しだした。
「ちよつ」

私が避けると、アインスが。

「ファイア、一体何を」

「互いが互いを殺せる状態にあるのなら、ターゲットがアインスを殺す前に私が処分すればいいのですよね？」

「馬鹿野郎！」

シユウ、ファイアに今度はかかと落し。

「互いが互いを殺せる状態ってのは言葉のあやだ！ おまえがそうやってすぐ人を殺すから、アインスが協定を組んできたんだろうが」
その言葉にファイアは痛む頭をさすりながら、

「なるほど。分かりませんが分かりました」

「で、賭けはアタシらの負けだ。そこも理解したか？」

するとファイア。

「え？」

「は？」

「………わかりました」

「おい理解してないだろ」

大きなため息を吐くシユウ。

「すまねえアインス。例のカードはまだあいつらの誰かが持つてる」

「そうか」

アインスはいい、

「賭けは私の負けみたいだ。鳥乃」

「二重の意味でね」

私はフェンリルの傍に寄り、

「犠牲者も出ちゃったわけだしね」

「……ええ」

表情を落とすアインス。

シユウは被害者の下に駆け寄って脈を測り、

「駄目だ。心臓が停止してやがる。どうすんだよおい！ アタシは嫌だぞ、このまま放置するのも、不正に遺体処理するのも」

「処理するしかないでしょう」

アインスは懐からカードを取り出し、シユウに渡そうとする。そこを、

「ちよつと待ってくれない?」

私は制止していった。

「アインス、そしてあなたは絶対正義のシユウよね? ここでひとつ交換条件といかない?」

「そういえばテメエは?」

訊ねるシユウに、私はいった。

「ハングドの鳥乃 沙樹よ。巷では」

「ゲツ、レズの肌馬」

こちらが言う前に、シユウは仰け反る。

なんて失礼な人だ。今度ホテルで私の安全さをしっかり教えてあげないと。見た所年齢も問題なさそうだし。

アインスがいった。

「それで、交換条件というのは?」

「この子の遺体、こちらで預からせて貰うわ。試してみたいことがあるからね」

「まさか、屍姦!?!」

と、反応するシユウに、

「いやレズだからって美女なら死体でも犯したいとかあんまり無いから」

「少しはあるのかよ」

「それはともかくとして」

と、はぐらかし。

「その代わり、ラッキー・ストライプからは完全に手を引いて頂戴? 一度撤退し時間を改めて取りに行くとかそういうの一切ナシで」

「アタシはOKだ」

シユウがいった。

「その代わり、被害者を出した責任自体を放棄するつもりは無え。もし死より悲惨なことにしたら、いまの取引は即刻解除だ。いいな?」

「分かったわ」

「勿論、被害者に手を出すのもナシだからな」

「そこも心配ないわ」

こうして改めてフェンリルを見ると、彼女はなんとなく中学生くらいな気がするのだ。

「アインスは？」

「勿論OKだ。フィーアもそれでいいかい？」

「分かりました」

と、フィーアもうなづく。

「なら、私たちは退散するでしょう」

アインスが仲間ふたりにアイコンタクトを取りいった。そして、

「鳥乃、せっかく交戦したのだから、ひとつ君の上司に伝えておいてくれないかい？」

と、アインスはいったのだった。

「私たちアインス、シュトゥルム、フィーアの三人は、これよりある組織の下で『ハイウインド隊』を組むことになった、とね」

—— 現在時刻、深夜2：30

「つまり、その出来立てほやほやの『ハイウインド隊』に宣戦布告されたわけね」

通信機超しの高村司令に私は、

「まあ、宣戦布告っていうわけでもないけど。アインスの言葉を信じるなら優先的に敵対する気なさそうだし」

「いやあつちになくても私らにあるから」

まあね。フィーアに構成員をひとり殺されたんだから。

私だってアインスやシュウと共闘はしても、フィーアだけはお断りって話。

「しかしその『ハイウインド隊』ってのはどこ所属なのよ全く。アインス・ハイは私も欲しい人材だったのに」

「今更だけど、何でハングドは人格に問題ある人を優先的に欲しがるの？」

「私の組織だから」

納得するしかない。

「ま、じゃあ引き続き何かあったら報告よろ」

司令が通信を切った。私は後ろを振り返って、

「それで、フエンリルはなんとかなりそう?」

訊ねると、後ろにいた森口博士と堀尾 M I S S I O N 4 参 照 小杉さんが、

「今すぐというわけにはいきませんが、なんとかしましょう」

現在、私たちはユニオン・ジャックと共に田村崎研究施設、つまり私を半機人にした施設の廊下にいる。

試してみたいことは、この施設の力を借りることだった。

フエンリルは自分のことをプライドの作品と呼んだ。そして同じくプライドの作品であるミストランはクローン人間。つまり彼女も何かしらの技術をうけて生誕している可能性が高い。それなら、田村崎研究施設の科学力なら、フエンリルの人体構造を解析して蘇生させることも可能かもしれない。そう思ったのだ。

「つまり、助かる可能性はあるのね」

「ええ、鳥乃さんの目論見通り」

と、小杉さんはいった。

「ですが心臓が止まってるのも確かです。蘇生の見込みは五分五分より悪いと思って考えてください」

「分かってるわ、ありがとう」

私は自販機でホットドリンクを4つ買って、

「じゃあ、私たちは先に戻るわ」

と、後ろにいた木更ちゃん、ユニオン・ジャックの3人に、

「好きなの取ってって。奢るわ」

「サクスデス」

予想通り、アメリカさんはストレートティー、グレイスちゃんはミルクティーと、姉妹は紅茶系を真っ先に選んでいった。

続いて木更ちゃんがゆずのホットドリンクを取ったので必然的に私はホットコーヒー。

木更ちゃんがドリンクを一口飲んで、いった。

「よかったですね。フェンリルさんの件」

「まだ安心はできないけどね」

移動中、木更ちゃんから話を聞いた。曰く、黒山羊の実もラッキー！ストライプを狙ったこと。そして、フェンリルは木更ちゃんの囮になる為にフィアの前立に立ったらしいこと。私たちとユニオン・ジャック相手なら後で奪えばいいからって話らしいけど、それが理由ならもっと狡猾い選択もできたはず。

友達の友達を助けようとした。それが彼女の本当の理由なんだろう。私はそれを信じたい。

「さてと」

私はコーヒーマシンのプルタブを開け、

「じゃあ、後はカードをふたりの依頼者に届けば任務完了ね。どこまで手伝えばいい？」

「え、どこまでツテ」

アメリカさんが驚き、続けてグレイスちゃんが、

「まだ手伝ってくれるのデスか？ 確か依頼はカードを手に入れるまでだったはずデス」

「ハングドはアフターフォローも重視してるのよ」

私はいった。

「何よりハイウィンドに加え黒山羊の実とふたつも組織が狙ってるのよ。ここでおさらばしたら、絶対どっかで狙われるじゃない」

「それに、おふたりの依頼者から『ドラゴン・キャノン』を頂くチャンスでもありますから」

ふふつと笑顔でいう木更ちゃん。言えない、そんな狡猾い策は考えてなかったなんて。

「なるほどデス」

納得するユニオン・ジャックのふたり。

「でしたら、早速同行を」

と、アメリカさんがいった所だった。

突然、施設が激しく揺れだしたのだ。

「What? oh... No! 地震?」

驚くアメリカさん。

森口博士が、

「み、皆さん。避難を、この施設は耐震はできておりますから、大丈夫とは思いますが」

とはいうものの、横揺れとはいえ地震あまりに激しく、そして突然すぎて「机の下に隠れる」的な行為さえできそうにない。

「Wow! ガツ」

そんな内に、まず松葉杖のアメリカさんが姿勢を崩し、壁に体をぶつけてしまう。

何か適当な所に捕まりたい所だけど、揺れが激し過ぎてそれさえまならない。反面、不幸中の幸い到这里が廊下だったので落ちてくるものはないが、それでも自販機やベンチはあるし、各ドアの先から色んなものが雪崩出てくる危険性はある。

「鳥乃先輩」

《クリフォート・アーカイブ》を召喚し、上によじ登って避難した木更ちゃんが、アメリカさんに手を伸ばし救出に出ながらいった。

「この地震なんだか変です。一向に収まる気配が」

「もしかして、フィール攻撃?」

私がいうと、森口博士はハツとなり、

「制御室にアンチ・フィール装置がある。誰かがそれを起動できれば」

「なら、それこそ木更ちゃん!」

「はい」

アメリカさんがアーカイブにしがみついたところで、木更ちゃんがデュエルディスクで施設のコンピュータにハッキング開始。さすが研究施設のセキュリティなので時間は掛かったものの、5分か10分か。突如辺りが緑色の光に覆われ、

「起動しました」

と、木更ちゃん。同時に地震もピタッと止まった。

「誰かが襲撃してきたのかもしれませんが。僕たちは室内に侵入してないか調べますので、鳥乃さんたちは外をお願いします」

と、小杉さんというので。

「分かった。木更ちゃんはグレイスちゃんとアメリカさんを、どこか施設で一番安全な場所に誘導して頂戴。外は私ひとりで向かうわ」

「私もいきます！ と、言いたい所ですけど分かりました。通信は常に繋いでおいてください」

ただ庇護したわけじゃないと察してくれて嬉しい。

「言われなくても」

私はいつて、外に出た。そこを一筋の火花が私を襲う。

「っ、うわー！」

咄嗟にフィールのバリアで護ったつもりだった。しかし、火花は着弾と同時に大爆発を起こし、私は巻き込まれる。アインスとのデュエルでフィールを全損してしまったせいで、一応自然回復分の発動はしたけど、この一撃を防ぎきるには足りなかったのだ。

施設で借りたポンチョが焼き焦げ、私の体はパンティー一枚を残してすっぽんぽんに。しかも肌の一部が火傷というおまけつき。

「っ」

誰？ と視線を動かす必要はなかった。真正面からフィーアがショットガンを構えてたからだ。

「処分」

フィーアがショットガンの引き金を引く。すると、先ほどの火花が。

今度被弾したら絶対にやばいので私は避ける。

フィーアが使ってるのは恐らくドラゴンブレス弾。それをフィールで強化してるのだ。

「フィーア、早速約束を破るとはいいい度胸してるじゃない」

言いながら私は2・3発ほど腕に内蔵してる銃で発砲。それをフィーアはその場で宙を殴り、幾らフィールなしの弾丸とはいえフィールを用いた拳圧で銃弾を纏めて弾き落すバケモノじみたことをやってのけ、

「別に約束は破ってません」

と、今度は宙を一振り引つ搔く。それをフィールでかまいたちにして攻撃してきた。私は内蔵のワイヤーを屋根に引つ掛け、上空へ避け

ながら、

「だったら、何で襲撃してるって話なんだけど」

膝に内蔵したミサイル発射。そのまま屋根に登って走りながら腕の銃で狙う。ファイアはミサイルをフィールバリアで防ぎつつ、再びドラゴンブレス弾を発射しながら、

「取引の内容はラツキー・ストライプから一切手を引くという内容だったはず。なら、カードは二の次にしてターゲットを殺処分すればいいだけのこと」

「なんて屁理屈。さすが処分人って話ね」

火花を避けながら、私は施設の後ろに飛び降りた。もちろん、ワイヤーを使って安全に。

そして息を殺し、ファイアが私を探して施設の裏側にくるのをじつと待つ。

「……」

しかし幾ら待ってもファイアがやってこない。どうして、と思った所にデュエルディスクから木更ちゃんの通信が。

『鳥乃先輩、処分人が施設への侵入を開始しました』

「うげっ」

そっか。彼女のターゲットは私だけじゃないのだ。

ここで私を追いかけけるのではなく、後回しにして残りのターゲットを優先しに行くとは。そうされると私もファイアを追いかけけるしかないのだから、成る程いい判断をしてくれる。

「分かった。すぐに追いかけるわ。ルートの指示をお願い」

しかし、木更ちゃんは、

『いえ、先輩は待機してください』

「え？ どうして？」

『ごめんなさい、私もうつかりしてました。先輩のフィールが一度空になってたことに気付かなかったなんて。いま、そんな先輩を危険な場所に送らせるわけにはいきません』

「大丈夫だから」

私はいった。

「私ならフィールがなくても、全身に内蔵した武器である程度戦えるから。それに依頼人やこの人たちが危険に晒されてるのに逃げるわけにはいかないでしょ」

『ですけど、駄目です』

と、木更ちゃん。そこへ、

「いや、案内して」

後ろから、誰かが私たちの会話に割り込んできた。

「え」

私は振り返る。そこには、

「処分人の処分は私がやつとくわ」

黒山羊の実際のミストランが、デュエルディスクを装着した姿で立っていたのだ。

「で、実際の所なにしに来たの？」

フィーアを追いかけ、施設に突入しながら、隣を走るミストランに訊ねる。

正直、頼もしいことこの上ないけど、それ以上にゾツとした。

ミストランが強いのは認める。高村司令のクローンなのだから、人格面も過ぎる程に自由ではあれど悪じやないだろう。しかし、彼女は私を一度殺しかけ、増田を殺し、前日まで彼女サイドだったアンちゃんも未遂とはいえ殺そうとしたのだ。

そんな因縁の相手が、一時的とはいえ共闘を申し出たなんて。

「もちろんフェンリルの迎えよ」

ミストランがいった。

「ついでにフェンリルに危害加えた奴に制裁を加える為？ ま、そんな所だから。フェンリルが何の任務であんたたちと接触したか言わないでくれると嬉しいわ」

「え？」

普通、逆じゃないの？ と、思ってたなら、

「それ知ったら私が引き継がないといけないから、任務」

「なるほどね」

どんな裏があつて、そんなことを言ったのかは分からない。ただ、あちらから敵対したくないと言つたのだから、こちらとしてはそれに従う他ない。

いや、彼女に頼る他ないほど私たちは追い込まれてるのだ。

『次の道を右に曲がつた所に処分人がいます』

木更ちゃんがデュエルディスク越しにいった。

『なるべく急いでください。研究員二名と交戦中です』

「ちよっ」

これはやばいと私は隣に視線を向ける。しかし、そこにはすでにミストランの姿はなく、

(え)

視線を前に戻すと、猛スピードで走り抜けたミストランが、一足先に右の道へと飛び込んでいた。

私も追いかけて右に曲がると、そこにはすでにファイアに強制デュエルを仕掛けるミストランの姿が。直前まで襲われてたと思われる施設の研究員は、無傷とはいかないものの何とか無事の模様だった。

「〃処分人〃ファイアね」

ミストランがいった。ファイアは何でもなさそうに彼女に顔を向け、

「誰？」

「今だけハングドの協力者。ミストランよ」

「分かりました。処分します」

なんだこの会話。しかも、この突っ込みたくなるやり取りのままふたりは、

『デュエル!!』

と始めてしまったのだ。

ミストラン

LP4000

手札4

□□□

□□□□
□□—□□
□□□□
□□□□

ファイア

LP4000

手札4

「私の先攻です」

ファイアは淡々といい、まずは手札から1枚のカードをディスクに差し込む。

「まずは永続魔法《地獄門の契約書》を発動。1ターンに1度、デッキからDDを手札に加える。効果で私は《DDバーゲスト》をサーチ。そして召喚する」

フィールドに現れたのは一匹の黒犬の姿をした悪霊。実はファイアのデュエルに関する資料はまだハングドの資料にない。ミストランのデータも不足している以上、このデュエルはしっかり記録しておかないと。

「ステージ解放。開け、時空の扉」

ファイアがいった。すると、彼女の背後に電流が走り、空間に裂け目を作るようにリンクマークーが出現する。

「召喚条件はDDモンスター1体。私は《DDバーゲスト》をリンクマークーにセット。リンク召喚、目覚めろ《DD魔導賢者ゲイツ》！」
リンクマークーから竜巻が出現し、バーゲストが取り込まれる。こうして出現したのは、0と1の数字だけで構成されたマントに体を包む、眼鏡をかけた一体の悪魔。

「《DDバーゲスト》はPモンスターの為、墓地ではなくエクストラデッキに。続けて手札の《DDスワラル・スライム》の効果。このカードと手札の《DDラミア》を墓地に送り2体を融合させる」

どうやらファイアは融合使いらしい。再び次元に裂け目を作り、今度は融合の渦が出現すると2体のモンスターが混ざり合う。

「未来に流れる血よ、神秘の渦とひとつになって、新たな王を生み出せ。融合召喚！ 目覚めろレベル6 《DDD烈火王テムジン》！」

こうして出現した融合モンスター《DDD烈火王テムジン》は、間違いなくフィール・カードだった。それも、コピーでも後から科学技術でフィール化したものでもない、天然の。

「手札の《DD魔導賢者コペルニクス》を墓地に送り、墓地のチューナーモンスター《DDRミア》の効果。自身を特殊召喚」

しかし、フィーアは更に展開を続ける。つて、いまさつきチューナーって？

「レベル6《DDD烈火王テムジン》にレベル1《DDRミア》をチューニング。次元の扉よ、疾風の速さを触媒に新たな王を生み出せ。シンクロ召喚！ 目覚めろレベル7 《DDD疾風王アレクサンダー》！」

「融合召喚に続いてシンクロ召喚!？」

私は、つい声をあげてしまった。そこをミストランが、

「融合、シンクロ、エクシーズ全部使う奴が何言ってるのよ」

「ま、まあそうだけど」

あれ？ けどミストラン相手に融合は見せたっけ？ どうやら黒山羊の実側も私の過去のデュエルのデータを持ってってるらしい。

それはともかくとして、テムジンに続きこのアレクサンダーも見た所天然物のフィール・カードにみえる。

「《DD魔導賢者ゲイツ》の効果。このカードは自身をリリースして墓地のDDモンスターを手札に加える。かつ、それがエクストラデッキに戻る場合、かわりに特殊召喚が可能。私はゲイツをリリースし、墓地の《DDD烈火王テムジン》を特殊召喚」

こうして融合・シンクロそれぞれの上級モンスターがフィールドに。

「《DDD疾風王アレクサンダー》の効果。このカードが場において、DDが召喚・特殊召喚された場合に発動。墓地からレベル4以下のDDを特殊召喚できる。墓地の《DD魔導賢者コペルニクス》を特殊召喚」

まだ展開する気？ 彼女の手札はとづくにゼロなのに。これでメインモンスターゾーンも全て埋まったのにな？

「《DD魔導賢者コペルニクス》は召喚・特殊召喚成功時にデッキからDDか契約書を1枚墓地に送る。私は《DDユニコーン》を墓地に送る。このカードは墓地に送られた場合に私のライフを1000回復する。そして、エクストラデッキの《DDバーゲスト》の効果。私の場に融合・S・X・Pモンスターの内、2種類以上存在する場合、エクストラデッキ・墓地からこのカードを特殊召喚する。さらに、その後私のDD1体と同じにできる効果を使用し、レベルをコペルニクスと同じ4に」

ファイア LP4000↓5000

これで、レベル4が2体。って、ちよつと待って？

「この効果で特殊召喚したバーゲストは、場から離れた場合に除外される。しかし、この方法なら問題ない。私はレベル4の《DD魔導賢者コペルニクス》と《DDバーゲスト》でオーバーレイ！ 2体の悪魔族モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

ファイアの足元に銀河の渦が出現し、コペルニクスとバーゲストが霊魂となつて取り込まれる。

「次元の渦よ、この世を統べる王を生み出せ。エクシーズ召喚！ ランク4 《DD怒濤王シーザー》！」

こうしてフィールドには融合・シンクロ・エクシーズそれぞれのDDがフィールドに降臨した。それも全て天然のフィールド・カード。

私はミストランにいった。

「さすがに私はあんな芸当できないから」

「え、出来ないの？」

なぜか残念そうにミストランがいい。

「ふーん」

と、ファイアに感心するようだった。

「つてことは、あいつやるじゃん」

「まあ、相手はあの処人だしね。見た目に騙されたら駄目って話よ」と、私は返すものの。私ができないプレイングをしたから「やるじゃん」になるって。それだけ自分が強すぎて基準が分からないということなのだろうか。それとも、私がそれだけ評価されてる？

「私はこれでターン終了」

ファイアはいつた。彼女の1ターンの間に、研究員はちゃんと逃げられたのが見えた。

ミストラン

LP 4000

手札 4

□ □ □ □

□ □ □ □

□ — 「《DDD怒濤王シーザー（ファイア）》」

□ 「《DDD烈火王テムジン》」「《DDD疾風王アレクサンダー》」

「《地獄門の契約書》」 □ □

ファイア

LP 5000

手札 0

「なら、私のターンね。ドロー」

ミストランはカードを引き、直後辺りが暗転し、暗闇を細切れに切り裂いて一体のモンスターが出現する。

「まずはフォトスラ」

ミストランが出したのは《フォトン・スラッシュャー》。通常召喚できず、自分の場にモンスターがない場合に特殊召喚できるモンスターだ。

「続けて、私の場のモンスターがフォトンかギャラクシーのみの場合、ギャラクシー・ガイド《銀河の案内人》を特殊召喚。そして、現れる、巨乳撲滅すべく私のサーキット無乳道！」

ミストランの前方にも八方のマーカーが出現し、

「召喚条件は光属性モンスター2体。私は《フォトン・スラッシュャー》とギャラクシー・ガイド《銀河の案内人》をリンクマーカーにセット。《サイバー・ツイン・ドラゴン》よ、過去へ渡り、より現在いまに適した未来を辿れ！ リンク召喚！ 現れるLINK-2 《サイバー・タキオン・ドラゴン》！」

2体のモンスターが靈魂の矢印となってマーカーに取り込まれると、現れたのは黄金色に輝く《サイバー・ツイン・ドラゴン》の姿。そ

の攻撃力は2000。増田とのデュエルの中でスキル《リ・コントラクト・ユニバース》によって書き換えられたモンスターだ。

「さらに《ギャラクシー・ネクロマンサー銀河の霊術師》を通常召喚。そして、効果で墓地から《ギャラクシー・ガイド銀河の案内人》を特殊召喚」

このカードは私とのデュエルでも出てきたギャラクシーモンスター。確か効果はレベル5以下のギャラクシーモンスターを蘇生させるものだったはず。

「《ギャラクシー・ガイド銀河の案内人》のモンスター効果。このカードの特殊召喚に成功した場合、このカードのレベルを、他のフォトンかギャラクシー1体のレベルかリンクと同じ数値にする。《銀河の案内人》の効果を《銀河の霊術師》と同じレベル4に」

これで、ミストランの場にはレベル4が2体。って、もしかして美術館から奪ったあのカードを!?

「私はレベル4の《銀河の霊術師》と《銀河の案内人》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

床に出現する銀河。2体のモンスターは霊魂となって取り込まれる。

「漆黒の闇より愚鈍なる巨乳に抗う叛逆の牙！今、降臨せよ。エクシーズ召喚！殺れ、ランク4！《ダーク・リベリオン・エクシーズドラゴン》」

サイバー・タキオンのリンク先に現れたのは、下あごに巨大な牙を持つ黒い竜。

「ミストラン。あなた、まだこのカード使ってたのね」
てつきり、上に献上したものと。

「私じゃないと、こいつのフィールドを引き出せないって分かったのよね。で、私のカードになった」

「え」

それって……。

クリアウイングを含む美術館の4枚のカードは、強大なフィールドを保有しつつも、普通の人では殆ど引き出せないことが分かっている、陽井氏は娘さんの為にも4枚のカードを使いこなせる人を探してい

た。その内のひとりがミストランだっていうの？

「《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》の効果。このカードのX素材を2つ取り除いて効果発動。相手モンスター1体の攻撃力を半分にし、その数値だけダーク・リベリオンの攻撃力に加える」
「なっ」

ここで、ずっと最低限の受け答えしかなかったフィーアが初めて反応した。

《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》 攻撃力2500↓3750

《DDD疾風王アレクサンダー》 攻撃力2500↓1250

攻撃力が半減するアレクサンダーと、逆に攻撃力の膨れ上がるダーク・リベリオン。相変わらず凶悪な効果だ。しかも、確か私はこのモンスターのフィール攻撃を防ぎきれず、結果的に一度片足を失う事態になったんだっけ。

って、やばい。

「ミストラン。さつき一応、いまだけハンゴド協力者」を名乗ったんだから、殺しちや駄目よ?」

「え?」

固まるミストラン。やっぱり殺る気だった。

「え?」

しかも、なぜかフィーアのほうからも。しかもこちらからは、「デュエルとは殺しあいではないのか?」

と、色々ブツ飛んだ言葉が。

「いや、そこは私も違うというけど」

さすがのミストランもフィーアの言葉を否定はしたものの、

「とはいえ正気? 相手は処分人よ? 幾ら一度フィールを全損させても、一度狙った獲物は死ぬまで殺しにくるわよ」

「前ならね。けど、いまは本来あのお子様は容易に人を殺したらいけない環境にあるはずなのよ。ちゃんと死者を出さず最後まで協力してくれたら、報酬代わりとしてその件についてあなたに情報提供するわ」

私がいうと、

「ま、情報に興味はないけど。分かったわ」

ミストランはいった。

『ま、待ってください』

そこへ木更ちゃんからの通信。

『黒山羊の実に情報提供するのですか？』

「そうなるかはミストランの自由よ。だって私が情報提供するのは組織じゃなく個人だし」

何より、事情次第ではゲイ牧師以外の黒山羊の実だって共闘の意志があると分かったのだ。ここでコネ作っておくのは悪くない。増田の仇という私個人の恨みは抑えるとして。

「悪いけど、フェンリルとグラトニーには言うわ」

ミストランはいった。

「ただ、殺したら駄目なら予定は変更ね。《ギョラクシー・ガイド銀河の案内人》のモンスタ

ー効果。X素材のこのカードが墓地に送られた場合、デッキからRUMを手札に加える。私はデッキから《RUM―デス・ダブル・フォー》手札に」

「ちよっ、えっ？」

私はつい聞き返しそうになった。《RUM―デス・ダブル・フォー》ってRR専用のRUMじゃない。

「大丈夫よ、問題ない」

しかしミストランはいう。どこか古いネタみたいな台詞にも聞かせるけど。

「あ、そだ2つほど忘れてたわ」

と、ミストランは思いだしたようにファイアに向けて、

「まずひとつ。《サイバー・タキオン・ドラゴン》は自分のリンク先のモンスターの数だけ攻撃力が400アップ。これにより攻撃力2000のサイバー・タキオンは攻撃力2400になったわ。で、ふたつ目が大事なだけどさ」

なんて改まった様子で。何を言うのかと思いきや、

「処分人、さっ？」

「何ですか？」

「Are you Big boobs faith? or is flat」

出た。それ、フィーアにまで聞くの？
するとフィーアは真顔で、

「何の言語だ、それは」

「いや普通に英語だけど」

「日本語かドイツ語でお願いしたい」

ドイツ語は分かるんだ。

「……。……アンタは巨乳派？ それとも貧乳派？」

日本語で言い直すミストラン。しかし今度は。

「何々派とはなんだ？」

「なら言い換えるわ。アンタは巨乳と貧乳どっちが好きでどっちが嫌い？」

「好き嫌いとはどんな効果だ、いつ発動する？」

「アンタの好みが分かるという効果よ」

「好みとはどんな効果だ、いつは——」

「もういいわ」

あ、あのミストランが折れた!?

「バトル。《サイバー・タキオン・ドラゴン》でアレクサンダーとテムジンにそれぞれ攻撃」

ミストランが宣言すると、フィーアのモンスター2体にそれぞれ、アンを重体に追い込んだ光線ブレスが放たれた。

ブレスがモンスターを貫き、そのままフィーアの下へ飛来する。それは明らかにフィールでリアル化してて、

「待つ、ミストラン！」

まさか、あれだけ言ったのに殺す気？ しかし、止めるなんてことは敵わず、ブレスはフィーアに当たり、爆風が舞い上がる。

フィーア LP5000↓3850↓3450

「いや、殺す気はないから安心して」

ミストランがいった。

「ただ手足を一本ずつ折って、しばらく人殺せない状態にしてやろう

と思ったんだけど、さ」

とか、恐ろしいこと言う中。爆風の中からファイアが出てきた。その様子は全く無傷であり、

「私フィール量には自信あるはずんだけど、防がれたわ」

と、少し残念そうなミストラン。ファイアから反応はまるでなかった。やはり余計な事は喋らないタイプらしい。もしくは、いままでの彼女の言動から、常識とかコミュニケーションとか感情とか嗜好とか、そういうものを知らずに今日まで育ってきたのかもしれない。

「なら、続けてダーク・リベリオンでシーザーに攻撃」

続けてダーク・リベリオンが床スレスレを低空飛行しつつ、下顎の牙でシーザーを両断。その直前、

「オーバレイ・ユニットをひとつ取り除き、シーザーの効果発動」

と、ファイアはいい、モンスター効果が発動された所でシーザーは破壊される。

ファイア 3450↓2100

「シーザーの第二の効果。このカードが場から離れた場合、デッキから契約書を1枚手札に加える。私は《戦乙女の契約書》を手札に」

ファイアの手札に契約書カードが加わる。しかし、その効果は第二の効果によるもの。第一の効果は発動が間に合わなかった様子はなかったのだけど、現状さっきの効果で様子が変わったようには見えない。

「ターン終了よ」

ミストランがいった。すると直後、ファイアの前に3つの次元の穴が開き、そこからテムジン、アレクサンダー、シーザーがそれぞれ現れたのだ。

「怒濤王シーザーの第一のモンスター効果。このターンに破壊されたモンスターをバトルフェイズ終了時に、墓地から可能な限り蘇生する」

ちよ、それ何て効果よ。

「ふうん」

しかし、ミストランは特に驚いた様子を見せず、

「で、デメリットは？ まさか2体素材のランク4程度がそんな効果デメリットもなしに持つてるとも思えないけど」

「次の私のスタンバイフェイズ時、私はこの効果で特殊召喚したモンスターの数×1000ダメージを受けます」

なるほど。だからミストランは驚きもしなかったのか。そして、ファイアが蘇生したモンスターは3体。つまり3000のダメージがファイアに入るわけだけど、現在ファイアのライフは2100。このまま通ったらミストランの勝利になる話で。

ミストラン

LP4000

手札2

「《伏せカード》」□□

□「《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》」□

□「《サイバー・タキオン・ドラゴン（ミストラン）》」□

「《DDD怒濤王シーザー》」「《DDD烈火王テムジン》」「《DDD疾風王アレクサンダー》」

「《地獄門の契約書》」□□

ファイア

LP2100

手札1

「私のターン」

ファイアはカードを1枚引き、

「ここで私はシーザーの効果で3000ダメージ、さらに《地獄門の契約書》の効果でさらに1000ダメージを受ける」

計4000ダメージ。初期ライフでも終わる数字である。

「ですが、私がここで《DDユニコーン》を除外して効果を発動。このターン、私は自分のカードの効果でダメージを受けない」

「やっぱり対策してあったわけね」

私は呟く。しかし、《DDユニコーン》の効果はそれだけでは終わらず、

「さらにユニコーンは自身が除外された場合に手札の契約書を発動す

る効果を持つ。永続罨カード《戦乙女の契約書》を発動」

ここでファイアの場合に新たな契約書カードが。

「《戦乙女の契約書》もスタンバイフェイズ時に1000ダメージを受ける効果を持つ。しかし《DDユニコーン》の効果でダメージは受けない。そして、手札から2枚目の《地獄門の契約書》を発動」

これでファイアの魔法・罨ゾーンが3枚の契約書で埋まってしまった。これでファイアは以後最低でも毎ターン3000ダメージを受けることに。

「2枚の《地獄門の契約書》の効果。デッキから《DDユニコーン》と《DDD覇龍王ペンドラゴン》を手札に加える」

と、思ったら再び手札に《DDユニコーン》のカードが。

「《戦乙女の契約書》の効果。この契約書は1ターンに1度、手札のDか契約書を墓地に送ることでフィールド上のカードを1枚破壊する。私は《DDユニコーン》を墓地に送ってダーク・リベリオンを効果破壊」

《戦乙女の契約書》から光の奔流が放たれ、ダーク・リベリオンが浄化されるように破壊される。

「ダーク・リベリオンがいなくなった事により、サイバー・タキオンもリンク先のモンスターを失い攻撃力が400下がるはず」

ファイアの問いにミストランは、

「その通りよ」

うなずく。

《サイバー・タキオン・ドラゴン》 攻撃力2400↓2000

「そして、《DDユニコーン》が墓地に送られたことで、私は1000ライフ回復」

ファイア LP2100↓3100

何だかんだで気づけばファイアのライフは初期ライフに近い数値に戻っていた。この子供、何だかんだで攻めも守りもかなり優れる。もしデュエルしたのが私だったら負けていたかもしれない。

だけど、ミストランが負ける凶は想像できなかった。

「バトル。《DDD怒濤王シーザー》で《サイバー・タキオン・ドラゴ

ン》を攻撃」

ファイアの宣言を受け、シーザーがサイバー・タキオンに向かうも、直後ミストランは手札を1枚墓地に送って、

「手札の《クリフォトン》の効果を発動。このカードを捨て2000ライフ払うことで、このターン私が受けるダメージを0にする」

と、サイバー・タキオンこそ破壊されるも、このターンにミストランのライフが削り切られることはなくなった。

ミストラン LP4000↓2000

「ターンを終了します」

ファイアは、少しだけ悔しげにいった。

ミストラン

LP2000

手札1

「《伏せカード》」□□

□□

□—□

「《DDD怒濤王シーザー》」「《DDD烈火王テムジン》」「《DDD疾

風王アレクサンダー》」

「《地獄門の契約書》」「《戦乙女の契約書》」□

ファイア

LP3100

手札1

「私のターン、ドロ」

ミストランはカードを引き、確認すると、

「ふうん、ここできたか」

と、つぶやきいてから、

「あ、えつと鳥乃だっけ?」

いきなり私に話しかけてくる。

「ん、なに?」

「いまデュエルして何分くらい経った?」

「えつと」

言われて時間を確認しようとした所、

『約20分です。先輩』

と、木更ちゃん。途中、割と雑談とかあったから思ったより時間が経過していた。

「なら、十分ね」

ミストランがいった。

「え、どういうこと？」

訊ねると、

「時間稼ぎよ。その位時間経ってれば、施設の人らも大体ファイアから避難するなり非常口から脱出してるでしょ。強^{強制脱出装置}脱だつてあるし」

「え!？」

私は驚き、続けて木更ちゃんも、

『た、確かに。施設の方たちの避難は完了しています。依頼人のおふたりも既に施設にはいません。ですけど、処分人を相手にまさかそこまでして下さったのですか?』

「何となくよ。それに、最初は時間稼ぎなんて考えず後攻1ターン目にワンキルで殺す気だったし」

うわ。ミストラン、前のターンですでに倒そうと思えば倒せたんだ。

「けど、もう終わらせるわ」

「ですが、ここで《戦乙女の契約書》の効果」

突然ファイアがいった。

「《戦乙女の契約書》は、相手ターンの間、私の悪魔族モンスターの攻撃力を1000ポイントアップさせます」

《DDD烈火王テムジン》 攻撃力2000↓3000

《DDD疾風王アレクサンダー》 攻撃力2500↓3500

《DDD怒濤王シーザー》 攻撃力2400↓3400

ミストランが倒す宣言した矢先、いきなりファイアの3体のDDDは揃って攻撃力3000超えの化け物へと姿を変える。

しかし、

「関係ないわ。その雑魚モンスターと一緒に地獄に逝け」

関係なかった!!!

ミストランはいい、指一本の上に《RUM―デス・ダブル・フォー》を立て、フィールを用いてくるくる回しだす。この動作は確か、《サイバー・ツイン・ドラゴン》を《サイバー・タキオン・ドラゴン》に変えたときと同じもの。

そして、もう片方の手でディスクを操作し伏せカードを起動し、「スキル発動!」《RUM―デス・ダブル・フォー》よ、過去へ渡り、より現在いまに適した未来を辿れ! そして、伏せカードオープン。《戦線復帰》を発動。墓地の《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》を守備表示で蘇生!

前のターンに破壊されたダーク・リベリオンが再び姿を現す。すると、指先でくるくるされてたRUMが別のカードに姿を変え、

「速攻魔法《RUM―タキオン・ダブル・レイズ》を発動!」

さつきまでデス・ダブル・フォーだった魔法カードが発動される。「このカードは墓地のドラゴン族Xモンスターが特殊召喚された場合に発動可能。そのモンスターを倍のランクを持つタキオンモンスターにランクアップさせる」

ダーク・リベリオンのランクは4、その倍であるランク8のタキオンといえよ。

「リ・コントラクト・ユニバース! 殺れ、No. 107! 宇宙を貫く巨乳撲滅の雄叫びよ、遙かなる時をさかのぼり銀河の源よりよみがえれ!」ギヤラクシーアイズ・タキオン・ドラゴン 顕現せよ、そしておっぱいこのやろう!

銀河眼の時空竜!」

ダーク・リベリオンが靈魂となつて銀河の渦に取り込まれると、ナンバーズを示す107の数字が浮かび上がり、そこから一体のギヤラクシーアイズが姿を現す。その攻撃力は3000、そして恐らくミストランの真のエースモンスター。

「出た」

ついに現れたこのモンスターに私は眩くも、

「けど、これでどうするのって話だけど。フィアアのモンスターの攻撃力は全員、いまのギヤラクシーアイズより上だけだ」

「あ、そっか。アンタはまだ時空竜自体の効果は見てなかったっけ」
「そういえば。タキオンをサポートするカウンター罠のほうは印象に残ってたけど。」

「関係ないのよ。幾ら効果で強化してもコイツの前には」

ミストランはそういつて、

「バトルフェイズ開始時、《No. 107 銀河眼の時空竜》のオーバレイ・ユニットを1つ使い効果発動」

私の目の前で、初めてその効果を行使した。

「この効果によって、このカード以外のフィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの効果は無効化され、その攻撃力・守備力は元々の数値になる。つまり、《戦乙女の契約書》で強化されたアンタの雑魚モンスターの攻撃力も」

ミストランが効果説明する間に、3体のDDDに表示された攻撃力がどんどん減退を始め、

《DDD烈火王テムジン》 攻撃力3000↓2000

《DDD疾風王アレクサンダー》 攻撃力3500↓2500

《DDD怒濤王シーザー》 攻撃力3400↓2400

「こうなるわ」

と、いった時には、3体の攻撃力はすべて銀河眼の時空竜の攻撃力を下回っていた。

「バトル。時空竜で《DDD怒濤王シーザー》を攻撃」

時空竜のブレス攻撃によって、まずはシーザーが飲み込まれ、墓地へ還される。

フィーア LP3100↓2500

「《DDD怒濤王シーザー》の効果。このカードがフィールドから墓地に送られた場合、デッキから契約書カードを手札に加える。この効果は墓地から発動される効果だから発動可能。デッキから3枚目の《地獄門の契約書》を手札に」

「なら、私も銀河眼の時空竜第二の効果」

「えっ」

あのモンスターに、他にも効果が？

「銀河眼の時空竜が効果を使ったターンのバトルフェイズ中、相手がカードの効果を発動させる度に。このカードの攻撃力は1000ポイントアップする」

《No. 107 銀河眼の時空竜》 攻撃力3000↓4000

ファイアがシーザーの効果を使ったことで、時空竜の攻撃力がアップし、

「そして、この効果で強化された時空竜は、このターン2回目の攻撃を行うことができる」

しかも連続攻撃!?

「バトル。私は続けて《No. 107 銀河眼の時空竜》で《DDD烈火王テムジン》に攻撃」

2発目のブレスが、今度はテムジンを墓地へ還す。

ファイア LP2500↓500

しかし、ファイアのライフは残ってる。

「……良かった」

呟くファイア。

「でき」

そこを、ミストランはいった。

「処分人、アンタいま『良かった。私のライフはまだ残ってる。これで次のターン《戦乙女の契約書》で目の前のトカゲを倒し、アレクサンダーの一撃で処分完了』とか、ロマンチストなフラグ考えてたりしてない?」

「ッ」

ファイアの顔が硬直する。凶星のようだった。

「残念だけど、アンタのターンはないわ。速攻魔法カード《RUMードラゴン・レイズ・ラッシュ》発動!」

このターンにドロウした、ミストラン最後の手札がディスクに挿しこまれる。しかも、RUMということは。

「このカードは私のターンのみ発動できる速攻魔法。私の場のドラゴン族Xモンスター1体を、ランクの1つ高いドラゴンにランクアップさせる」

ミストランは、《No. 107 銀河眼の時空竜》を更にランクアップさせる気だということだ。

「私は《No. 107 銀河眼の時空竜》1体でオーバーレイ・ネットワークを再構築。エクシーズ召喚！ 殺れ、CNo. 107！ 逆巻く銀河を貫いて、ホルスタイン生ずる前より蘇れ。永遠を超える巨乳撲滅の星！ 顕現せよ、そしておっぱい死すべし、慈悲はない!!!
ネオ・ギョラクシーアイスタキオン・ドラゴン
超銀河眼の時空竜」

現れたのは、まるでキ〇グギドラを連想させる長い三首の黄金の龍。その攻撃力は4500と《青眼の究極竜》と同等。

「で、処分人。こいつの攻撃を止める手段は？」

「……ありません。私の負けです」

「そ。なら超銀河眼の時空龍でアレクサンダーに攻撃」

ミストランが宣言すると、三つの首からそれぞれブレス攻撃が放たれ、アレクサンダーを過去に還すように破壊する。

ファイア LP500↓0

今度こそファイアのライフはゼロになった。

「ですが」

この一撃がフィール攻撃であることを読んでたファイアは、フィールが全損する直前、片手の掌に全てのフィールを注いで時空龍の攻撃を受け止め。

「殺処分は執行する」

そのままフィール攻撃を受け流すようにして、私の懐に飛び込んできた。そして、デュエルが終了時彼女のフィールがゼロになったと同時に隠し持ってたナイフで私の喉下へ刺殺を狙う。

まあ、私も読んでただけだね。

私は喉を片腕で庇い、ナイフで刺されながら、もう片方の腕に内蔵してあるワイヤーをファイアの喉に巻き付ける。

「一切の武装を解いて頂戴。余計なことをしたらワイヤーであなたの喉絞め殺すから」

「ッ」

しかし、ファイアは武装解除はせず私を睨みつけるまま。恐らく諦

めず一瞬の隙を狙ってるのだろう。もしくは、自分の死を重く考えてないのか。

ミストランが近づく。それを私は、
「骨折処分はちよつと待って」

と、制止し、

「フイーアちゃん？　ほんと、武装解いて投降してくれない？　そうしたらアインスに引き渡すだけだから」

「ありえません、その程度で済むなんて」

睨みつけたまま、フイーアはいう。

「……はあ」

しばらく視線を合わせ警戒した後、私は一回ため息を吐く。

「だから子供は嫌いななのよ。こいつは殺戮者で、すでにハングドのメンバーも殺されてる。だけど、子供ってだけである程度は許されてしまうし、ハングドとしては裁いちゃいけないのよね」

「裁けない？」

フイーアの目が「何故だ」という問いかけに変わる。本当に、何もわかってないのだ。このガキは。

私は彼女の問いに応えず、

「木更ちゃん。私のタブレットの電話帳にハッキングしていいからアインスと連絡取って頂戴。迷子の仔犬を迎えにこいって」
すると、

『すでに司令からの指示でさせて頂きました。もうじき到着するそうです』

恐らく木更ちゃんのほうから司令に連絡を取ってたのだろう。仕事事が早い。

私はポーズだけ「ほっ」とした様子でミストランに顔を向け、警戒を解かないまま。

「助かったわミストラン。保護者がきてくれるそうだから、これで何とかなりそうよ」

すると、ミストランとは別の位置から。

「保護者とは誰のことだい？」

「アインズとかいう名のバイ王子よ」

私はいい、続けて、

「遅かったじゃない」

あえて「いつからいたの」的なノリはせず、到着していたアインズに背を向けたまま声をかける。

「悪いね。まさに迷子の仔猫を探しに持ち場を離れてたんだ。おかげで連絡を受け取るのが少し遅れてしまったよ」

アインズは私の傍に歩み寄り、

「それより鳥乃、まだ服を着てなかったのかい。さすがに下着一枚はレディとしてどうかと思うよ」

と、私の肩に上着をかける。

「最初に服を駄目にしたのはアインズのほうじゃない」

「そうだったかな？ まあ、それはそれとして」

「全然よくないって話だけど」

しかし、アインズは私との会話を打ち切り、フィーアの下へ。

「アインズ」

フィーアがすまなそうにいった。

「申し訳ありません。任務を失敗した上、後始末もできずこのような」

「大丈夫だ」

アインズはフィーアの頭を撫で、

「もう、後始末なんてしなくていいんだから」

「え、それはどういう」

「それを正しく伝えられなかった私のミスだ。おかげで君にこんな姿を晒してしまった。すまない」

「アインズは悪くありません。これは私の」

「鳥乃」

いきなり、アインズは私に向かっていった。

「彼女の拘束を解いてくれないか？」

「ん」

分かった、と私は彼女の首に巻き付けたワイヤーを緩め、回収する。直後、フィーアは銃を抜くも、アインズが彼女の銃口に手を添えて、

首を横に振る。

ファイアの銃が下を向いた。

「懐いてるのね、アインスに」

「ハイウインドのリーダーは私だと伝えてあるからね。上には忠実なんだこの子は。ところで」

アインスはミストランに向かって、

「君はもしかして、黒山羊の实の」

「ミストランよ」

「やつぱり。君が相手なら、ファイアが負けるのも納得だ」

そう言いながら、アインスはファイアの肩をやさしく抱く。

「まさか黒山羊の实まで。今回は様々な組織が同時に動いてしまったようだ」

「NLTとフィール・ハンターズが関わらなかったのは不幸中の幸いだったって所ね」

私がというと、

「いや。どちらも関わってるよ」

アインスはいった。

「今回、私たちの組織はNLTと協力体制の下で動いてたからね。そして、ラツキー・ストライプの現在の持ち主はフィール・ハンターズの息がかかった人間だ」

うわ。

「つまりハンドは間接的にNLTと敵対してたって話？」

「さて、私たちはそろそろ失礼しようか」

あ、ちよつ。話はぐらかしてきた。それって肯定と受け取っていいのよね？

「鳥乃、今回の損害賠償諸々は私に送って欲しい。その後、こちら側みんなで何とか工面して払おう」

どうやら、本当にこれ以上情報を漏らさず帰る気らしい。仕方なく私は、

「分かったわ」

「それじゃあ、ファイア行こうか」

「了解しました」

こうして、王子と処分人改めハイウインドは来た道を引き返し、施設を後にした。

「んじゃ」

ふたりの姿が見えなくなつてから、ミストラランがいった。

「早速だけど、報酬代わりの情報提供、聞かせて貰つても構わない？」

ハイウインドとは何か、どうして処分人と王子が一緒なのか、とかさ
「そういう約束だったわね」

私はうなずき、

「といつても、私たちも全貌を知つてゐるわけではないけど、実は——」
言いかけた所。

「その話、ボクも聞いてもいいかな？」

と、奥から女の子の声。

「え」

驚き、ミストラランが振り向く。続けて私も。

そこには、喉に包帯を巻いたフェンリルが、森口博士と一緒に立つていた。

博士はいった。

「何とか、応急手当は完了しました」

続けてフェンリルが、

「迷惑かけて悪かつたね、ありがとうミストララン」

「別に、アンタのためにしたわけじゃないし」

ミストラランはぶいっと視線を逸らし、

「あの部屋から出る口実と、それとまあ暇潰しつてやつよ」

なんて、すつごく分かりやすい照れ隠し。

私は、ふたりにハイウインド隊の情報を包み隠さず提供した。

——現在時刻、午前06:30

ユニオン・ジャック、木更ちゃん、そして私の4人は、店を開けたばかりの『喫茶なばな』にいた。この店は、以前^{M I S S I O N}ロコちゃんとの^{参 照}依頼交渉で利用した『BARなばな』の昼の顔である。

あの後、黒山羊の実と別れた私は木更ちゃんと合流し、一足先に避難したユニオン・ジャックをふたりで夜通し護衛。仮眠を取って貰った彼女たちを連れてモーニングに出かけたというわけだった。

「お待たせしましたです、モーニング4人前になりますです」

BARではマスターを務める、なばな副店長が4人分のプレートとホットコーヒーを運んできた。市松人形のようなおかつぱをセミロングにした髪型に狐目の、見た目小6前後くらいの女兒。だけど、実は鈴音さんと同期という噂が。

確か名前は、

「今日は水菜みずなさんのシフトだったのね、運が良かったわ」

とは、ロリ対象外の私なのだから当然性的な意味ではない。単純に、彼女が厨房に入ったときの料理は普段に増して美味しいのである。

「やごと」

私はコーヒーで睡眠不足の脳にカフェインを投下しながら、

「一晩警備したけど、あれからハイウインドからも黒山羊の実からも襲撃が無かったのはさつき伝えた通り。それで、あなたたちの依頼人には、いつカードを渡すかって話なんだけど」

「ウーム」

アメリカさんは腕を組み、

「出来れば早いほうがいいのは間違いありません。その二つの組織が引き渡し後を狙ってなければの話ですケド」

「実際、フェンリルさんも後から狙えばいいと言っていましたからね。ふあ」

言いながら欠伸する木更ちゃん。相当眠そうだ。私も眠いけど。

「やってもいいなら、依頼者との接触に同伴したいわね。護衛を押しうる気つても間違いじゃないけど、下手に連絡を取ると、そこからハイウインドと黒山羊の実に場所を特定され、先回りで襲撃されかねないわ」

「その辺は心配ないデス」

グレイスちゃんが得意気にいった。

「依頼者とはすでに連絡を取りまシタ。いまこつちに向かうそうデス」

「ちよっ」

驚く私たち。それには姉のアメリカさんも啞然としてた。

「It's Speedyデス。これなら特定される暇はありません」

と、グレイスちゃんはいうも、

「あの、連絡を取ったのはいつ頃ですか？」

訊ねる木更ちゃんに、

「出発直前デスから20分くらい前デスね」

「連絡手段は」

「普通にメールデス。返事もきてマス」

「暗号は使いましたか？」

「暗号？ 何のデスカ？」

きよとんと返すグレイスちゃん。駄目だ、これはリアルタイムでハッキングされてたら特定余裕だ。

私は頭を抱えた。

「最悪ね。もし先回りされてたら今更護衛に向かっても手遅れって話よ」

「OH! Oh My Godネー」

と、しゅんとなるアメリカさんに、

「これはアメリカさんの貞操で追加料金ね」

「こごぞとばかりに言わないでくだサイ」

脱力した声でアメリカさんが突っ込むも、

「手遅れ、デスカ？」

何もわかってないグレイスちゃんが首をかしげる。

「とりあえず行動は起こしておくわ」

私はデュエルディスクのタブレットでインターネットを開き、

「ラブホの予約はこつちでやつとくから、アメリカさん依頼者の情報を教えて頂戴、秘匿義務には反するけどそんな場合じゃないのは分かるわよね？」

「……」

葛藤を顔に出して数秒、アメリカさんはうなずき、

「ウーン、分かりマシタ。人命には替えられません」

やった、今晚はお楽しみね。私は心の中でガッツポーズする。

そんな時だった。

「お取込み中すみません」

不意に、私たちはひとりの女性に話しかけられた。

「貴女たち、イギリス国旗の方で間違いないですか？」

イギリス国旗の通称はユニオン・フラッグもしくはユニオン・ジャック。つまり、彼女たちのことをいつてるのは間違いなさそう
だ。

席の前に立ってたのは、腰にビームサーベルを帯刀した、長い髪に
ハイカラな袴姿の美女。あれ、え？

「Yes. 私たちがユニオン・ジャックデス」

アメリカさんがいうと、

「初めまして、依頼をした神簇 琥珀です」

「……え？」

私が呟くと、依頼人を名乗ったそいつは初めて私に気づき、

「え」

「え」

「うそ……」

「うそ……」

「アイエ？」

「アイエ？」

「アイエエエ!? トリノ〓サキ!? トリノ〓サキナンデ!?」

「アイエエエ!? カムラ〓サン!? カムラ〓サンナンデ!?」

お互い、いつぞや再会したときと全く同じ反応をみせるのだった。

「ちよつと鳥乃、なんで貴女がそこにいるのよ」

「それはこつちの話よ。神簇がふたりの依頼人ってどういう話よ」

「まずは貴女から説明しなさいよ。こつちは貴女以上に状況分かって
ないんだから」

「私だって混乱してるって話なんだけど」

喧嘩腰で返しながら、ちらつとアメリカさんに視線で確認を取る。そして、小さくうなずいたのを見てから、

「任務中、私が撃った流れ弾で彼女を怪我させちゃったのよ。そのおかげあなたからの依頼の実行が困難になっただけで、弁償代わりに護衛と協力の依頼を受けただけ」

と、私は説明する。ユニオン・ジャックの不利になるような情報は省いて。例えば、すでに彼女たちが2度盗むのを失敗してるとか、思い返してみせば多重依頼というこの業界の禁忌を破ってるとか、そういうの。

「全く、何やってるのよ貴女は」

呆れ顔の神簇。

「何やってるのっていうのはこっちの話なんだけど」

私はいった。

「何で神簇が《No. 7 ラッキー・ストライプ》なんて反則じみた物を求めているのよ。まさかアンちゃんの回復ならまだしも、家の復興に利用する気なんじゃ」

「そ、そんなわけないでしょー!」

神簇は顔を真っ赤に起こり、

「そうじゃなくて家の仕事よ。私の家が古物を扱ってるのは依頼した日に話したでしょ。その中には危険な古物を回収するのも含まれるの。事件でアンが使った、あの機械装置とかね」

ああ、あの神簇を拘束した機械触手ね。それはともかくとして、
「古物って。仮にも他に持ち主がいるのを盗み出して言う事じゃないでしょ」

「合法じゃないから回収したの」

なんとまあ強引な。確かに所有者がファイル・ハンターズの時点で正規に所有してるものじゃないのは確定的に明らかだけど。

「えっと、横から失礼します」

僅かな間を縫うように、アメリカさんが会話に割り込み、

「肌馬サン、ワタシたちの依頼者とお知り合いだったのデスか？」

「うん、まあ。前に彼女の依頼を受けたことがあるのと、小学生時代の宿敵って所」

「Wow」

アメリカさんは驚き、

「日本の言葉に『世間は広いようで狭い』とありマスけど、正にその通りネ」

むしろ神簇に対しては狭すぎる。なんでここにきてまたエンカウントするのだろうか。

「私たちの関係はいいわ」

神簇はいつて、

「それでユニオン・ジャックさん。例のカードの回収に成功したと聞いたのだけど」

「ハイデース」

グレイスちゃんがいい、カードの入った小箱を神簇に渡す。

「こちらでよろしかったデスか？」

神簇は中身を開けると、デュエルディスクに挿し込んで何かのプログラムを起動する。恐らく本物かどうかを識別するプログラムなのだろう。しかし、扱いに慣れてないのか傍からみても操作がたどたどしく、見てて可愛い。

「確かに。これでユニオン・ジャックさんへの任務は以上になるわ。報酬は後日指定された口座に振り込みで構わないかしら？」

「ノープログラムネー！ むしろ期日を大幅に遅れてソーリーデス」

アメリカさんがいった。ああ、2度も失敗してるだけあって、すでに遅れてたのね。

「別にいいわ、その件で私も迷惑かけたもの」

「え？」

「いえ、こちらの話よ」

神簇は何故だか、はぐらかす。

「あ、そうそう神簇」

私はふと思いつき、

「せっかく喫茶店に来たんだから一緒にモーニングでも食べてかない

？ 早朝から足を運ばせたお詫びってことで奢るわ」

「そうね。せっかくだから頂いていくわ」

席に座る神簇。私は水菜さんと呼んで、

「すみません、モーニング追加で一人分」

と、神簇の分も注文。

「ところで神簇、今回の依頼の件だけど、確かにカードはあなたの手に渡ったものの、まだ完全に解決したとは言い切れてないのよね」

「どういうこと？」

「狙ってる組織がいるのよラッキー・ストライプを。黒山羊の実も狙ってるし、所属不明のハイウインド隊ってトコがNLTと協力関係な上に交戦があったわ。それに元々フィール・ハンターズの所有物なら奴らが狙ってくる可能性も高いでしょうし。そんなわけだから」

と、言いかけた所、

「ありがとう、けど必要ないわ」

神簇はいった。

「ハングドに護衛の依頼を頼まないかってことでしょ？ 残念だけど、こちらで手は打ってあるわ」

「え」

手を打ってあるって。

「大体、フィール・ハンターズを相手にするかもしれないのに、回収してからを考えないわけじゃないでしょ」

なんてのたまう神簇を、私は半眼で眺める。

「……」

不安だ。この人、しつかりしてるようで割と致命的にうっかり屋だから。……なんて見てたら、たった今ひとつ発見。

「な、何よその目は。まさか、また私がミスするとも思ってるの？」

「うん」

「何で信用ないのよー！」

つい声のトーンが上がる神簇。この時点で煽り耐性がないのを露見してることさえ気づいてないのだろうか。と、まあそれより。

「じゃあ木更ちゃん。頭の体操にちよつと問題」

「え、私ですか？」

突然振られ驚く木更ちゃんに、

「いまの神簇、すでにうっかりミスやらかしてるんだけど何かわかる？」

「煽り耐性の無さですか？」

「ぐはっ」

柔和な笑顔でさらっと返した木更ちゃんに神簇がまず一回ノックダウン。

「まあ、それもそうなんだけど。例えば持ち物でほら」

「持ち物ですか？」

木更ちゃんはきよとんと神簇を眺め、数秒後「あれ？」となる。

「腰につけてるもの、それって」

「え？ ああ、これのこと？」

神簇は腰につけたビームサーベル(?)を抜いて、

「あ」

となった。

神簇がビームサーベルのつもりで護身具に持ってきたそれは、ただの玩具のライトセーバーだったのである。それも、ご丁寧にトイザラスのお買い上げシール付き。

「……。あ、えつと。……。……たまたまよ」

神簇が顔を真っ赤に硬直する。なんだろう、この面白い生き物は。本当にかつての宿敵で梓を虐めたこともある人間なのだろうか。

「鳥乃様ー。心配はご無用ですよー」

突如、玩具のライトセーバーから煙幕が巻き上がったと思うと、中から現れたのは男の娘メイドにして忍者であるヒロちゃん。

「!?」「!?」「!?」「!?」

神簇を含め、私以外の全員が驚く中、

「今回の件はアンお嬢様とも相談してますし、最終的に私もチエツクを通してますから」

「そう言われて安心できない程度には惨状を一度見てはいるんだけどね」

私はいいながらも、

「ま、いいわ。そこまで言うならいまの神簇家の手腕を信じてみることにするわ」

「ありがとうございますー」

えへへーと嬉しそうに、ヒロちゃんがはにかむ。そこへ、

「あの一。失礼します」

アメリカさんが口を挟んできた。

「アナタは一体」

「あ、失礼しましたー」

ヒロちゃんは軽くしなを作り、

「初めまして。私は神簇家のメイド長をやっています。ヒロちゃんって呼んでくださいねー」

「アーいえソーいうワケではなく」

なぜだかアメリカさんは視線を泳がせ、

「何だか違和感のようなモノを感じマシテ」

「違和感、ですか？」

きよとん、と首をかしげるヒロちゃん。

「うゝムムム」

アメリカさんはずっと顔を覗かせ、半眼でじーつとヒロちゃんを眺める。

「あ、あの一」

ヒロちゃんが照れ照れし始める。その時だった。

「やっぱりネー！」

突然、アメリカさんは大声で叫んだ。

「ヒロちゃん！ Youはもしかシテ男デスか？」

「ええっ!？」

ヒロちゃんは驚き、

「どうして分かったのですか!？」

するとアメリカさんは喜びだし、

「Wow! イッツジャパニーズ名物、男の娘デース」

と、ヒロちゃんにハグしだす。松葉杖とは思えない、小回りの利い

た俊敏な動きで。

「ひゃっ」

驚くヒロちゃん。その瞳にはうつつすら涙。

そんな様子を前に私は、

「え、えーとグレイスちゃん聞いていい?」

「何デスカ?」

「もしかしてアメリカさんって」

「ハイ」

珍しくグレイスちゃんは疲れた顔をみせてうなづく。

「お姉ちゃんは俗にいうシヨタコンというクリーチャーデス」

なんてことだ。私は軽くシヨックを受けた。

すでにユニオン・ジャックはポンコツという印象のある私だけど、その点を除けばアメリカさんはちよつとリアクションオーバーなだけの人畜無害な常識人というイメージがきつつあった所なのだ。セクハラしても暴力に訴えないし、言動ほどキャラがぶつ飛んでるわけでもなし。そう思ってた所にこのぶつ飛んでた一面なわけで。

「お、お嬢様あ……鳥乃様あ」

恐らく某脳筋のトラウマで怯えるヒロちゃん。涙は数粒ほど垂れ、マジ泣き号泣寸前だ。

「OH! イッツ、ベリーベリーキュートネー」

しかし、アメリカさんのヒートアップは止まらない。これはやばいと思った私は、彼女の後ろに回り込む。

そして、お尻を撫でた。

「ひあっ」

驚き、姿勢が崩れるアメリカさん。そのまま私はヒロちゃんから引きはがすように抱き寄せ、

「ヒロちゃん。いまのうちに」

「は、はいー」

ヒロちゃんはすぐアメリカさんから離れ、そのまま数歩ほど距離を取る。

「あ、あああ。ヒロちゃん。ななな、何するネー」

アメリカさんが悲愴な顔でヒロちゃんに手を伸ばす。私はそのまま後ろからアメリカさんの片乳も鷺掴み、お尻と同時に揉み揉みしながら、

「何って当然じゃないヒロちゃん怯えてるんだから」

「What? なぜデスかー? って、それ以前にセクハラは駄目ネー!」

じたばたするアメリカさん。しかし今回はグレイスちゃんも、

「肌馬サン、せめてセクハラはやめて下サイデス」

と、言いながらも強く止めれない模様。むしろヒロちゃんの前立って姉から護る盾になってくれちゃって。そういえば木更ちゃんは。そうチラツとみて、

「ふふっ」

と、素敵な笑顔を浮かべてタブレットで撮影してるのを見て、私は顔を青くしながらアメリカさんを解放。

「木更ちゃん、それ」

「ごめんなさい。徳光先輩から先輩がセクハラしてたら報告してと言われてますから」

「やめてーっ!」

私が悲鳴をあげると、木更ちゃんはわざとらしく考える素振りを見せ、

「仕方ありませんね。ですけど、次セクハラしたら送信致しますから」

「残念。なら代わりに木更ちゃんです」

「送信しました」

「ぎゃーっ」

しかも木更ちゃんのタブレットからピロンとか音したよ、これ本当に送信されたって話じゃない?

「キサラちゃんって、こんなに強かでお茶目な子だったのデスね」

私たちのやり取りを見て、グレイスちゃんがいった。

「あれ、知らなかったの?」

訊き返すと、

「ハイ。クラスではそんな姿見せないデスから」

「だって、クラスでやったらお茶目ではなく腹黒にしか取られそうになくて」

木更ちゃんがいった。あー、そういえば木更ちゃんクラスでは無償の笑顔が不気味とか思われてるんだっけ。

「まあ、本当の腹黒がいるとどうしてもデス」

グレイスちゃんが苦笑いしていった。おそらく例のリアルPKKのことだろう。

「ねえ、そっちの会話で盛り上がってる所悪いんだけど」

神簇がいった。

「アメリカさん、だっけ？ 彼女、ついに泣きそうなんだけど」

言われて「え？」となりながら私はアメリカさんに視線を向ける。

そこでは、

「Oh… どうして怯えるネー。ワタシはタダ…ぐすつ」

と、この世の終わりみたいな顔をするアメリカさん。みると、ヒロちゃんもそんな彼女の姿に罰の悪そうな顔でおどしている。

「ま。まあ急に襲われたら誰でもびっくりするって話だから」

私が宥めるようにというと、

「お、襲っ!? そ、ソソソそんなハレンチなことしてないネー！ 肌馬サンと一緒にしないで下サイ」

と、顔を真っ赤に反論。さりげに酷い扱い受けたのはともかく。

「いやでも、さすがにあのまま放置したらあなた、キスしたり押し倒したり股間弄ったり」

「無いデスカラ！ そんなコト致しマセンカラ！」

必死に否定するアメリカさん。

「じゃあ、何しようとしたのよ」

「デスから何モ」

「ナニも？」

「違いマスー！ー！」

もうアメリカさん叫びすぎて息が切れてらっしやる。他に客がないからいいものの、ここ喫茶店なのに。

まあ、叫ばせたのは私だけ。

「なら何をしたいと思った?」

「で、デスから何モ」

「本当に?」

すると、アメリカさんは照れ照れと、

「あ……」

「あ?」

「アーン、してあげたり。一緒に公園で遊んであげたり……」

「平和だっ!」

私は思わず仰け反ってしまった。私に木更ちゃんにアインス、高村司令にアンちゃん、何より永上さんと、いままでぶっ飛んだ人格の持ち主ばかりで、こんなピュアなことをのたまう人はいなかったのだ。

「あ、あの……」

トラウマ持ちのヒロちゃんも、さすがに安堵し、

「その位でしたら、たぶん大丈夫です」

「ホントですか?」

アメリカさんが、すぎるような目でいう。

ヒロちゃんはもう一度笑顔で、

「はい」

「OH! サンキューネ」

感動し、アメリカさんは再びヒロちゃんを抱きしめに向かう。しかし、その際松葉杖を放って両足で走ろうとしてしまい、

「ひぎひぎひぎ」

怪我した足の激痛で呻き声をあげ、そのまま床に転がったうち回る。

「ヒロ、私のことはいいから、彼女の傍についてあげなさい」

神簇は朝から疲れた顔を見せた。

色々ばたばたしたものの依頼はとりあえず終了。朝食後、木更ちゃんとも一旦別れてから私は自宅に戻り、シャワーと身支度を済ませ、学校に向かう。

「おはよう」

教室に入ると、まず私の視線はひとりの女子生徒を探す。そして目に飛び込んできたのは、栗色のセミショートカール髪に制服越しでもわかる豊満なバストをしたゆるふわ系女子、私の幼馴染にしてマイエンジェル徳光 梓。とくみつ あずき

「あ、沙樹ちゃん」

梓は私に気付くと、笑顔で近づく。

私もまた笑顔で、

「おはよう、あず——」

さ、と言い終える寸前、私は梓の《ハンマー・シユート》を脳天で受け、床に倒れた。

梓は満面の笑顔で、

「藤稔さんからメールが届いたよ。沙樹ちゃん、朝からアメリカさ
んって先輩に悪質なセクハラ行為したって」

「あ、へ、いや、その……」

何とか言い訳に及ぼうと思うも、苦痛のあまりに上手く声が出せない。今回は完全に不意打ちで心身共に構えることもできなかつたと寝不足で普段以上にダメージが大きい。

私は倒れたまま上目で梓を見上げる。

梓は満面の笑み。恐ろしい。

(誰か、助け……)

私は視線で周囲に助けを求めるも、

「おお開幕ハンマー。やっぱ一日一回はこれ見なくちやなあ」

「ねえねえ、今度私にもハンマー持たせて？ 私も一度殺つてみたい」

「フツ …… 鳥 乃 よ、こ の 闇夜ネに生きる極死トの英雄
—ミッドナイト・ヘルブレイヴ人に助けを求めるならDMMカード2
000円分を用意するがいい、我が秘術『零式絶対蘇生術』アブソルート・ヒーリング・ゼロを伝授し
よう」

なんて、いつの間にかクラスメイトたちは梓のハンマーに馴れ親しんでらっしゃる。誰も私を助けようとしな。絶望した。

ふと、私は思った。

もしかして、私たちの周囲で一番ぶつ飛んだ人格の持ち主って、実

は梓なんじゃなからうか。
なんて考えながら、私の意識は闇に沈んだのだった。

MISSION 16 —絶対正義（ジャスティス）

私の名前は鳥乃とりの 沙樹さき。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「梓、最近の中学生って進んでるよね」

「え、っ?」

梓の顔がピシッと固まった。

「沙樹ちゃん、もしかしてついにロリコンに」

「いやいや無いから無いって話だからそれに “ついに” って梓、私がガキ嫌いなもの知ってるでしょ」

けど、思えば当然だった。

基本高校生以上の子しか相手をしなない私がそんなことをのたまったのだ。警戒されても仕方ない。

「ってより聞いてよ梓。昨日かなりショックな話があったってわけなのよ」

「なに、一応聞くけどー」

うわっ! 梓ジト目だ。

「いや、私のキャラからして当然なんだけど、あの子可愛いなって前からチエックしてた子って何人かいるわけよ」

「うん。この時点で《ハンマー・シユート》で窓の外に突き飛ばしたいけど続けて?」

この時点で!?

「えっと、もう何かこの時点で身の危険しか感じないけど。うん、まあそれで昨日ちよつとあつて、ついにその内のひとりと話できる機会ができちゃったわけ」

「うん、それで?」

あ、梓ハンマースタンバイでした。

私は冷や汗だらだらしながら続ける。

「……その子、中2だった」

「沙樹ちゃん」

梓は笑顔で、

「刑務所でも元気だね」

「待った！ 手は出してないから、その前に真実知っちゃったから何もしてないって話だから」

言いながら私はタブレットからフォトデータを開き、

「これがその子の写真なんだけど、見てよ。梓だつて絶対間違えるつて話でしょ。私は悪くない！」

そこに写っていたのは、ひとりの白人ハーフの女の子。

高い背丈にモデルのような抜群のスタイル。髪型はロングヘアで、身なりを見るに真面目で整然。それでいて大人しい印象を覚える。

彼女の名前はシルフィード・フォス。

現ハイウインド所属の絶対正義シユトウルム（ジャスティス）（通称シユウ）のパートナーだつた子である。

——昨日、放課後。

「失礼しまーす」

その日、私はハングドの依頼で母校である陽光学園中等部、その武道場に足を運んでいた。

なお今回、木更ちゃんとは組んでいない。殆ど私専属の後方支援でハングド入りした感のある彼女だけど、この度董ちゃんの後方支援に入ることが決まったのだ。どうやら潜入任務を行うらしく、木更ちゃんのチートじみたハッキング能力を必要としてるらしい。

その為、片耳には通信機と繋いだイヤホンをつけてるが、通信先の構成員は別の子だ。

扉を開け、私は適当に近くにいた女子生徒に声をかける。

「すみません、島津先生に用事があるんですけど」

「はい、分かりま——」

反応したのは、剣道部所属らしい女子生徒だつた。

女子生徒は私の顔を見ると一回絶句し、

「は、はい。すぐ」

と、怯えて逃げるように奥へと向かっていく。

（ああ）

そういえば、中学時代の私はレズより不良とか問題生徒って評判の
ほうが強かったのだ。そして、現在の中学三年生は、当時の私を知っ
てる最後の在学生なのである。

気付くと、私の周りに生徒は誰ひとりとして立っていないかった。み
ると最上級生らしき生徒たちが率先して下級生を私から遠ざけてる
のが見える。数か月の行方不明を経て卒業まで暴れまくった私の経
歴は、未だ根強く残ってるらしい。

「あ、沙樹ちゃん」

程なくすると、ひとりの女の子、いや女性教師が手を振りながら向
かってきた。

「島津先生、お久しぶり」

「沙樹ちゃんも元気そうで何より」

陽光学園中等部教師、島津先生こと島津しまづ 鳳火ほうか。彼女が今回の依頼
人である。

先生は剣道部の顧問なのだけど、小学生という程ではないが背が低
く幼児体型で、顔立ちも容貌相応に幼い。その為、いまなんか部員と
同じ剣道着姿なものも相まって、遠目にはとても教師には見えず、むし
ろ最上級生に映るかも怪しい程だ。

結い上げた総髪風のハーファアップヘアも、焼石に水程度の威厳を与
えて逆に幼さと可愛らしさを強調させてしまってる。基本ロリ専門
外のレズ目線としては、間違いなく年上なのに全く性欲に響かない女
性だった。

「で、どう？ いまは学校生活は順調？ 梓ちゃん以外に友達はある
？ ひとりぼっちになってない？」

最後の最後で色々あったものだから仕方ないけど、先生はいまも心
配でたまらないらしい。会う度会う度、そんな事を聞いてくるのだ。

「大丈夫って話だから、心配しないで」

「そっか、良かった」

えへへと笑う先生。変な意味なしに純粹に可愛らしい。

「それで先生、今日私を呼んだ理由は？」

「あ」

先生は、一回ハツとした顔を見せてから、

「そうそう。その件なんだけど、ちよつとついてきて貰って構わないかな？ 話を聞いて欲しい子がいるの」

「ん、まあいいですけど」

「本当？ 良かった」

もう一度先生はにっこり笑顔をしてから、部活中の生徒たちに向かって、

「みんなー、先生ちよつと用事があるから席離れるけど練習サボっちゃ駄目だからね」

と、言ってから再び私に、

「じゃ行く？」

と、先生は私を連れて武道場を後にした。

その移動中。

「一応、簡単な詳細だけ教えてくれない？ 先生」

私は小声で訊ねる。なにせ今回、私を指定した依頼であること、そして依頼主と待ち合わせ場所の指定しか書かれてなかったのだ。顔見知りでお得意様だから受けたものの、そうでなければスルーする所だ。

「ごめんね、内容もギリギリまで伏せておきたかったから」

先生はいつた。

「さつき、話を聞いて欲しい子がいるって言ったよね？ 沙樹ちゃんには自分がハングドってことを隠して、私の知り合いのライディングデュエリスト決闘疾走者って体で、その子の頼みを引き受けて欲しいの」

「そういう話ね」

私は納得し、

「で、どういう内容なの？」

すると先生。

「それが、私もまだ知らなくって」

「えっ？」

「あの子もあの子でギリギリまで伏せたいみたいで、決闘疾走者の力を借りたいってこと以外分らないのよ」

「よくそんな状況でハングドに頼んだものね」

「それでも沙樹ちゃんに頼みごとするなら、ハングドを介したほうが間違いがないからね」

「まあ、ね」

確かにハングドへの依頼にすれば支援もつくし、準備に組織の備品やコネが使えることを考えれば、結果的に私個人を雇うより金銭面も安上がりになる。

「だけど、先生だから引き受けるけど。この内容他の依頼者だったら切ってる所よ」

「うん。いつも無茶な依頼を受けてくれてありがと、沙樹ちゃん」

全く、信頼しきった屈託のない笑顔を出してくれて。

島津先生と親密になったのは卒業後だけど、思えば在学時代からこの先生はこうだった。本人が子供みたいな先生なのに、他のどの先生よりも生徒を想い、考えてくれて、そして信頼してくれる。それでいて時に友達のように隣を歩き、時に教育者として真摯に生徒と向き合う。

失礼ながら教師としては少し頼りない。だけど、「本気で教え子をいつでも大好きでいてくれる」そんな教師だった。

私は、元担任がそんな素敵な教師だったのに気付くのが遅すぎたわけだけだ。

(ま、仕方ないか)

そんな先生だから、今回も教え子のために必死なのだろう。私も在学中、この先生に迷惑かけまくったのだ。当時ならともかく、いまの私はそんな恩師の頼みを足蹴りにできるほど冷血にはなれない。

「確かこの辺りにいるはずなんだけどお。……あつ、いたいたー」

人目のつきにくい校舎裏に足を運んだ所で、先生はそこで待ってたひとりの女性に手を振った。

高い背丈にモデルのような抜群のスタイル。白い肌と顔立ちをみるに恐らくハーフだろう。髪はロングで、着崩した様子は一切なく、真面目で整然それでいて大人しい印象を覚える子だった。中学の制服を着てるけど、恐らく校内に侵入する為に用意したもの、私の見立

てでは恐らく女子大生くらいか。

「あ、島津先生」

女性はこちらに気付くと、ぱつと笑顔を見せる。

(あれ?)

私はふと思った。この人どつかで見たことあるような。

「シルフィちゃん、おまたせー」

島津先生が女性に駆け寄る。って、シルフィ?……あ!?

そんな私を余所に、先生はシルフィの隣に立って、

「紹介するね。この子は私の教え子のシルフィード・フォスちゃん、通称シルフィね。それでシルフィちゃん、この子はこの学校のOGの」
言いかけた所で私は、

「中東生まれのダニエルです」

つい、言ってしまった。しかも増田が使ったのと同じ偽名。

直後、

『ぶふっ、あつははは』

通信先から大笑いが聞こえたが、私は無視。

シルフィはきよとんとし、

「ダニエルさん?」けど、明らかに日本人」

「アジアですから」

だから「日本人顔でもおかしくない」という理屈は間違いにも程があるのだけど、ここは勢いで誤魔化しておく。そもそも中東はアラブ人(白人)が大半だしね。

すると先生が「えー?」といった顔で、

「えつと、沙樹ちゃ」

「ダニエルです。イイネ」

「アツハイ」

私はアイデア判定に失敗した先生を黙らせる。

このシルフィって女性は裏の世界を知ってる人間。つまり顔は知らなくても私の名前を知ってる可能性は高い。

そして、情報通りなら超がつく勸善懲悪かつ潔癖な人間なので、協力してくれるのがハンドの人間と知った途端、断られる可能性は高

いい。それだけならまだしも、シルフィと先生の間にさえ亀裂が入りかねない。その為、意地でも私の情報は隠す必要があった。

「それで、頼みたいことがあるって聞いたんだけど」

「はい、えっと」

シルフィは私を少し怪しみながらもうなずき、

「ダニエルさんは、今度の日曜に開催される決闘疾走大会ライディングデュエルの、ネオトヨタシティカツプってご存知ですか？」

「ああ、まあ一応ね」

高村司令がマスク被って出場しようかとか言ってた気がする。

ネオトヨタシティとは、名小屋近郊の都市のひとつだ。某自動車メーカーが本社を置く、自動車とDホイール産業で有名な地である。

すると、シルフィは突然懇願するように、

「お願いします。どうか、その大会に出場してある選手を優勝させないようになしてください」

「ある選手？」

するとシルフィはいった。

「絶対正義ジャスティスのシユトゥルム・ハイツヴァイテ。通称シユウという女性です」

「っ」

えっ？

私は、つい声が出そうになったのを抑え、心の中で驚く。

絶対正義ジャスティスのシユウといったら、元シルフィのパートナーじゃないか。いまはハイウインドらしいけど。

「理由を聞かせてくれる？」

私は何とか口を開き、訊ねる。

シルフィは、唇を震わせながらいった。

「シユウは、もう正義なんかじゃない。悪魔に魂を売ったの」

その表情からは失望と憎悪、そして深い深い悲しみがうかがえる。

「そして、シユウは悪魔の命で今度の大会に出場する。狙いは、優勝者に贈られる副賞のネットワークス」

「副賞のネットワークス？」

「はい。どうやらそのネックレスには不思議な力があるみたいで」「フィール?」

訊ねると、私がそれを知ってることに、シルフィは「えっ」と一回驚きつつ、

「はい。そのネックレスには身に付けた人にフィールを与えるみたいで」

つまり、この前フィーアが狙った指輪と同じものというわけだ。どうやらハイウインドは、カードのみならずそういった特殊なアクセサリも集めてるらしい。

「状況は分かったわ」

と、私は言うも、

「けど、話を聞くにあなたとシユウって人はどんな関係だったの?」

「え?」

「あなた、シユウのこと話しながら凄く悲しそう顔してるのよ。良かったら、何があったのか教えてくれない?」

するとシルフィは、

「私とシユウは腹違いの姉妹なんです」

と、語り始めた。

「そして幼馴染でもありません。シユウはとても正義感が強い人で、いつも私を護つて、そして絶対正義ジャスティスと名乗って日夜悪い人たちからこの街を護っていた正義のヒーローでもありました。だけど、少し前からシユウは悪い人たちとつるみだして、そして悪の組織に所属してしまっただんです」

「まるで日曜朝の特撮番組みたいな話ね」

「信じられないと思うけど、本当に特撮番組のヒーローみたいな事をしてたんです。けど、いまのシユウはもう」

本来シユウがやつつけるはずの、悪の戦闘員、か。

「その時、シユウって人なにか言ってた? お互い大事に想ってたなら無断で組織に入るとは思えないけど」

するとシルフィは、

「知りません! だってシユウは、正義のヒーローだったのに。私ご

とこの街を裏切ったんだもん、言い訳なんて聞きたくない！」
と、ヒステリックに嘆く。

「……分かった」

私はこれ以上なにも追求せずにならずいた。

「大会に出場してシユウを止めればいいんだね？」

「はい」

うなづくシルフィ。

「けど、あらかじめ言っておくけど、シユウを警察に突き出すことはできないわ。それだけの材料がないもの、それでも構わない？」

「構いません」

「そ」

私は、そつとシルフィの体を抱き寄せる。

「なら任せて、必ずシユウは私が止めてみせるから」

「ダニエルさん。ありがとうございます」

シルフィは私の胸で小さく泣きじゃくった。

そんな流れの後、私はシルフィと別れ、先生の通勤用の車を個室代わりに同乗する。

先生は一回ほつとした後、笑顔で、

「ありがとう、引き受けてくれて」

「ま、依頼だからね」

「けど、どうしてよくわからない偽名を使ったの？」

訊ねる先生。どうやら本当に分かってないらしい。こつちの世界に無知な人ではないはずだけど。

「さつき彼女が言ってた絶対正義ジャスティスなんだけど、巷ではシユウとシルフィの二人組って言われてるのよ」

「えっ？」

驚く先生。

「ってことはシルフィちゃんそっち側だったの？」

「見たところ実際は私たち組織が思ってるより彼女自身は裏に関わってなかったみたいだね。けど、鳥乃 沙樹って名乗ったらハングドってバレる可能性は十分あったって話よ」

「そうだったの、ごめんね言いそうになっちゃって」

「気にしないでください、結果的にバレなかったんだから」

私はいいつつ、

「けど、今日は役得だったわ」

と、座ったまま一回伸びする。

「役得？」

「だって、教え子っていうから期待してなかったのに、まさか私より年上のOGを紹介してくれるなんてね。さーて、難易度は高そうだけど、どうやって堕とそうか」

シユウがハイウインド入りしただけであの反応なのだから、夜遊びの「よ」の字を受け入れさせるだけでも大変そうだけど。何とこのか、さっきの特撮じゃないけど悪堕ちとか闇堕ちとかすつごく似合いそうな子なのよね。他の色を受け入れない純白だけあって、欲望色に染めてみたい。スタイルも凄くいいからボンテージも似合いそうだし。

(ぐへへ)

なんて考えてると、

「えっと、あのね沙樹ちゃん」

先生がなにやらすつごく言いづらそうに、

「シルフィちゃんだけど、あの子、在學生だから」

「……え？」

さつき何か受け入れ難い言葉が聞こえたような。

「いま先生、2年生の担任をやってるんだけど。そのクラスの教え子なのよシルフィちゃん」

「嘘……」

「はい、クラス名簿。特別に見せてあげる」

と、渡された紙には確かにシルフィード・フォスの名前が。

唾然としてる私の隣で先生はいった。

「すつごく綺麗よねあの子、背も高くて、モデルさんみたいで。だからあの子、小学校の頃から虐められてたらしいの。デカ女とか、おっぱい星人とか、見た目は外国の子なのに英語が話せるわけじゃないから

偽物だーとか」

「ああ」

小中学生の頃ってそういうのでよく虐められたりするのよね。

「でも、いくら娘が虐められても親は無関心」

「……」

私は、そこには上手く反応できなかった。何故なら、

「沙樹ちゃんなら分かるよね。そういう子の気持ち」

「まあね」

私の親もそんな感じだったから。

「だから、あの子は段々人を許せれなくなっていったの。みんな敵に見えちゃうのよ」

「なるほどね」

私はうなずき、

「そんなシルフィの唯一の心の支えがシユウで、そのシユウに裏切られたわけね。シルフィにとっては」

「うん」

先生はしよんぼり俯く。

「中学に入ってから、シルフィちゃんね、少しだけだけど友達もできたのよ。みんな、いつもシルフィちゃんの味方になってくれるいい子ばかり。だけど、つい最近その友達とも喧嘩しちゃってね、ていうか一方的に友達を悪者扱いして拒絶しちゃった感じ」

「絶対シユウに裏切られたダメージね」

「うん。だから、沙樹ちゃんお願い。シルフィちゃんを助けてあげて」
どうやら、それが私に依頼した本当の意図なのだろう。

「分かったわ」

私はうなずく。

「じゃあ私は先に失礼するわ。任務前にやっておかなくちゃいけない仕事もできたし」

「やっておかなくちゃいけないこと？」

「まず、大会の登録、次に大会のルールの確認、そして勝ち進む為の作戦って所」

そういつて私は車から降りた。

それから私は事務所で調査や準備に入ったのだけど。

「でも、ダニエルは絶対ないよね。うけるー」

パソコンで調べ物をしてる私の横で、パイプ椅子に座り脚を組んだ女性が笑いながらいった。

「咄嗟だったんだから仕方ないって話でしょ。飛奈ちゃん」

言いながら私は、そんな女性の下着を覗き込む。

女性は「きやつ」とすぐスカートを押さええるも、

「沙樹ちゃん先輩、ブレなさすぎー」

と、ノリの良い返事。

今回、私の支援に入った構成員はふたり。その内のひとりが、この双庭 飛奈である。学校は違うけど現在高1の木更ちゃんと同じ歳。左側で結んだサイドテールが特徴の、ノリの良い子だ。

現在、飛奈ちゃんは学校指定のブラウスに短めに穿いたスカート姿。パンティの色はベージュだった。

「でもねー。さすがにダニエルだと男になっちゃうから絶対おかしいでしょ。せめてエバとかしとかカマル・マジリフとか。あ、そうだ旅行者ナツシユとかどう？ あとはクワトロ・バジーナとか。あ、せつかくハングドみたいな組織いるから……うーん山田妙子？ ちなみにオススメは藤田五郎だよん」

と、飛奈ちゃんは首を乗り出してマシンガントーク。なお、この中で元ネタが女性の名乗った偽名なのはエバだけである。一応、山田妙子はあるゲームの男主人公が女装したときの偽名だと聞いた事があるけど。高村司令から。

そこへ。

「飛奈、鳥乃さん、コーヒー淹れたよ」

と、別の女性がコーヒーカップをふたつデスクの上に置いた。私の支援に入ったもうひとりの構成員、双庭 弓美だった。歳は私より1つ上の高3。飛奈ちゃんの姉であり、妹とは逆にショートカットでクールな印象。こちらも現在は学校指定のブラウスにスカート姿だ

が、下にスパッツを穿いてるせいで下着は覗けそうにない。

「ありがとう、双庭先輩」

なので、私は下着を覗くかわりにスカートの上からお尻を触ることにする。

「っ」

先輩は一回びくんと反応し、

「鳥乃さん、あんまり触らないで」

と、控えめに懇願する先輩をあえて無視し、お尻撫でたまま、

「それじゃあ、今回のチームが揃った所で現状の確認でも行おつか」

「鳥乃さん、話聞いて欲しいんだけど」

「ん、何かあった？」

私は難聴のフリして、

「とりあえず先輩が調べてくれた結果だけど、大会は今週の土曜に複数の会場で予選を行って、翌日の日曜に予選を勝ち抜いた32名による本戦が開催って流れらしいわ。で、飛奈ちゃんが調べてくれた結果だと、大会ルールは《スピード・ワールド2》を使ったライディングスピードデュエルだっけ？」

「そうそう、決勝だけはライディングマスターデュエルだけだねん」

「飛奈〜」

わざとシカトしすぎた結果、双庭先輩が涙目になって妹に助けを求め。可愛い。

「もう沙樹ちゃん先輩、お姉ちゃん虐めちやめっ！」

怒られちゃった。けどそんな妹も可愛い。

ところで、今回のルールである《スピード・ワールド2》を使ったデュエルでは、基本的に通常の魔法カードを使用することは禁止されている。代わりに、

「あ、ちゃんと高村司令から備品のS ^{スピードスベル} p持ち込みの許可は取ってきたから。その代わり『おい、デュエルしろよ』ってスパリング押し付けられちゃったから後で付き合っただけね」

と、飛奈ちゃんがいうように、このルールではS ^{スピードスベル} pという専用の魔法カードが使用でき、《スピード・ワールド2》の効果もあってS p

の使い方がとにかく重要な変則ルールになっているのだ。って、

「高村司令それ絶対ストレス解消のサンドバックにする気でしょ」

実際殴ったりリアル化したフィードで怪我させるって意味じゃないだろうけど、スタジオでの仕事ストレスの捌け口に、全うなデュエルでさえボッコボコにやられる未来がみえる。

「ご愁傷様、頑張つて」

ああっ、双庭先輩も助けるの放棄してる。むしろ、これさっきの意趣返しされてる？

「ところで」

飛奈ちゃんが聞いた。

「大会にはやっぱりダニエル名義で出場するの？」

「まあ、それしかないわね」

そして週末土曜。

私は見事予選を突破した。

——予選終了後。時刻20:20

「ごめん、遅くなったわ」

予選会場から飛ばしてきた私は、ライダースーツ姿のまま『BARなばな』の戸を開けた。ジャズが流れ、和と昭和レトロの混ざった内装を白熱電球が薄暗く灯す大人の空間。客はふたり。一番隅のボックス席に、小学生の女兒が水のようなものを嗜み、そのひとつ前のボックスに女性が1名待ちくたびれた顔でノンアルコールカクテルを飲んでいた。

その後者が私を見つけると「あ」と席を立ち手を振る。

「遅いよ沙樹ちゃん先輩」

飛奈ちゃんである。この日、私は彼女と20時頃を目安に待ち合わせしていたのだ。

「ごめんごめん、予選決勝の相手がフライング寄生遅延デッキで長引いちちゃったのよ」

と、私は隣の席に座る。

「で、ちゃんと勝てた？」

訊ねる飛奈ちゃんに、

「当然。所詮は表の住民相手だものフィールをこつそり使えばね」

と、言いながら私は店員に向かつて、

「ウォツカとオレンジジュース」

と、注文。

「で、そっちはどう？ 何か起こった？」

「ううん平和そのもの。事務所は地獄そのものだったけど」

「修羅場だしね」

と、さりげなく私は飛奈ちゃんの腰に腕をまわす。

「もしかして飛奈ちゃん、手伝いに駆り出された？」

「ちよつとだけ。つて、沙樹ちゃん先輩いまは工作中、セクハラ禁止」

「いいじゃない、ちよつとだけ」

「ちよつと、つてどこまで？」

「ホテルまで」

「それちよつとじゃないよー」

と、ケタケタ笑う飛奈ちゃん。その隙に胸揉もうとしたらペチンと

手の甲叩かれ、

「だからいまは駄目だってば」

なんてじゃれてる間に注文のウォツカとオレンジジュースが運ば

れてきた。

さて、私はウォツカを誰も座ってない対面の席に置き、

「ヴェーラ、仕事の時間よ」

私は後ろのボックス席に声をかける。懲りずに飛奈ちゃんの胸に

手を伸ばしながら。

「ハラシヨKー」

反応したのは、水らしきものを飲んでいた女児、ヴェーラだ。

ヴェーラは一旦、最奥のボックス席を離れ、ウォツカの置かれてる

体面の席に座る。

「プリベエツト。やあ、今日は何の用事だい？」

「ちよつと聞きたいことがあってね」

言いながら、私は飛奈ちゃんの胸を。……あ、距離取られた。え、メ

モ？ なになにに「明日の任務後にカラオケに付き合っ」？　そこでならセクハラ許してくれるんだらうか。私はメモの裏に返事を書いた。「我慢できない、いますぐ揉ませろ」って。

「絶対正義のシユウとシルフィが、いま仲違いしてるのは掴んでるよね」
「またね」
「またね」

「で、その原因はシユウが王子や処分人プリンス スローターとつるみだしたからっていうのもっ。」

「ハイウインドだったね。あ、そうだ作者そろそろ地の文をジャックしてもいいかい？」

私は後半部分は無視して、

「ま、当然そこも掴んでるって話よね。じゃないと私も困るって話だったけど」

「という事は、今回の依頼はハイウインドの雇い主の名前かい？　プローハ、悪いけどそれは教えられないんだ」

「なんで？」

訊ねると、

「又……まあ、この前その本人が私と接触してきてね。その情報は売らないでくれて本場スコットランド産のスミノフを譲ってくれたよ。理由はすでに掴んでたからね。面白そうだったからその話は受けることにしたんだ」

「そう」

まさか先に手回しされてるとは。しかも日本で流通してる韓国産じゃなく本場物を餌にすると彼女は彼女への交渉を弁えてる。それがロシアじゃないという点も、そういう少しひねくれた選択が逆に良かったのだろう（創業はロシアだけだ）。

「まあ、いつかは聞くと思ってたから予定外の収穫だったけど、今回ヴェーラ了解に聞こうと思ったのは別件よ」

「アガ。なら改めて話を聞こうか。あ、地の文のジャックはなしになったよ。作者からNOを出されたんだ。それをあえてジャックしてもいいけど、スムーズな執筆の為に今回は許してあげたよ」

まるで作者コメントの中にあるキャラとの対話ネタみたいにならないで。

「実際、対話したからね」

地の文を読まないで。

「プローハ、悪いねそれは無理なんだ」

OKわかった。もうこの件は無視しよう。

「それで、今回の要件は何だい？」

訊ねるヴェーラには私は札束の入ったポチ袋を出し、

「シユウがふたりとつるむ理由。特にシユウ視点での情報を買いたい」

「ハラシヨー。なら料金を頂くよ」

ヴェーラはポチ袋を受け取り、中身を確認する。

「^{ありがと}スパシーバ。じゃあ情報の提供に入ろうか」

ヴェーラはいった。

飛奈ちゃんはメモの内容を誰か^{木更}に写メールで送っていた。恐らく週明けには梓にまで流れてるだろう。

——日曜、本戦当日。

会場となるネオトヨタ内のサーキットに飛奈ちゃん、その姉の双庭先輩との三人で向かった所、受付の近くで島津先生とシルフィを発見した。

「おはよう」

私はDホイールを引きながら、ふたりに手を振った。現在時刻8時半。十分、朝といえる時間帯だ。

「おはよう、と……ダニエル」

「おはようございます、ダニエルさん」

挨拶を返すふたり。つてか先生早速本名言いかけないで。私が視線で追及し、先生が両手を合わせ「ごめん」としている中、シルフィは、

「シユウは、もう中にいます」

と、いった。

「ごめんね。予選で潰せれたら良かったんだけど、これも運だから」

大会の予選は、それぞれ数日前に封筒で自分の予選会場を通知され、それぞれの会場から1〜2名が本戦に選ばれるという仕組みだった。そこでシユウと同じ予選会場なら良かったのだけど、残念ながら今回はそうはならなかったのだ。

「それは仕方ないことだから分かってます。けど」

本戦では必ず勝て。言葉には出さないけど、彼女の瞳からしっかりとそれが伝わる。

「勿論、本戦では任せて頂戴」

「ありがとうございます」

シルフィはやりわりと笑顔を出し、

「ところで、後ろのおふたりは」

「あ、私のピットクルーよ」

すると、ふたりはそれぞれ、

「ティモシーだよ、よろしくねん」

「エバです」

と、挨拶する。なお、ティモシーが飛奈ちゃんで、エバが姉の双庭先輩だ。

「じゃあ、私たちは先にゲートの先に行くけど。その前にシルフィちゃん一言だけいい？」

「え？ はい」

きよとんとするシルフィに、私はいった。

「あなたの味方は、いつだってあなたを見てるし手を差し伸べてるわ。忘れないでね、その意味を」

「？ はい、ありがとうございます」

いまは、その「味方」が私たちだと思って感謝を告げるシルフィを横切り、私たちは受付前へ。

「32番ダニエルです」

予選景品であり本戦出場者の印であるホログラフィックレア仕様の《S P―アクセル・ドロ―》を見せると、

「二代目ダニエル様ですね。はい、確認致しました」

と、受付がゲートを開き、私たちは奥へと進む。

ところで、二代目ダニエル名義でエントリーした経緯なのだけど、大会に向けて調査を続けていた内、どうやら増田が過去に一度ダニエル名義で決闘疾走ライディングデュエルの大会に出場してるのが分かったのだ。その為、3人で相談した結果、初代ダニエルの名を継ぐ弟子という設定で出場することを決めたのだ。

その移動中。

私は進みながら後ろを向いて、

「ところで飛奈ちゃん、さっきはよく我慢できたね」

とは、先ほどのシルフィを前にした時だ。彼女はテンション高くお喋りな性格なので、いつボロを出さないと心配だったのだけど、

「だって、沙樹ちゃん先輩。事前にボロ出したら犯すとか言ったじゃない。シーカーも市販の媚薬をフィールでガチでヤバいのにして潰すとかできることできないこと色々」

「そりゃあ、ここでボロ出されたら任務失敗な上、私の恩師に泥塗ることになるし、飛奈ちゃんの半生くらい私に出来ないかと割に合わないって話でしょ」

私としてはそっちでもいいんだけどね。見知った友達や同僚を性奴隷にして滅茶苦茶にするって、興奮しない？

すると双庭先輩が、

「鳥乃さん、飛奈に何かしたら」

と、腐ってもお姉さん。実妹に危険が及ぶような発言を前に静かに睨まれ、

「ご、ごめんごめんワンナイトラブに留めるから」

「NLTに通報されたい？」

「ごめんなさい」

そんなこんなしてる内に、私たちは他の選手もいる待機スペースに到着した。自分の持ち場を目指し足を進めていた所、

「うげっ」

と、私に向かって嫌そうな声。見るとそこには、

「なんでテメエがここにいるんだよー」

と訊ねる、今回の討伐ターゲットであるシユトウルムことシユウがいた。

「ん、依頼でだけど？」

「何のだよ」

「あるターゲットが優勝できないよう大会で正々堂々と潰して欲しいって話。それ以上言えないのは業界上察してくれると嬉しいわ」

言いながら、私はシユウをまじまじと眺める。

ワイルドさを感じさせる癖毛の入ったセミショート髪に、勇ましさを感じさせるバシツと決まった顔立ち。よく見ると彼女も外国の血が混ざってるのが肌質と顔の造形で分かる。

背はそこまで高くなく胸も控え目。だけど、少年のようなイケメンさのおかげでライダースーツがバツチリ似合い、それでいてボーイッシュの中にも所々「女の子」を感じさせるのがとてもグッド。

なんてジロジロ見ると、シユウが半眼で、

「な、なんだよ。アタシになにかついてんのか？」

「ん？ いや何でもないわ」

「そっか、ならいいケドよ」

と、シユウが落ち着きかけた所を見計らって、

「ただシユウって裸にひん剥いたら相当可愛い顔見せそうよねって」

「何でもなく無いじゃねーか！ 出会って早々何考えてやがるテメー」

「何って、ナニ？」

「当然のようにその返しするなよオイ！」

ヒートアップするシユウ。そこへ更に飛奈ちゃんが、

「わかるー。この子見るからに脱がせたら絶対乙女だと思うよねん」

「分かるなー!!」

まさかの同意と追い打ちだった。

「でしょ。一度ホテルで優しく激しくしてみたいと思わない？」

私もそんな飛奈ちゃんに食いつき返してると、

「てゆうか、まさか後ろのふたりもハングドなのか？」

と、話題を変えようと訊ねるシユウ。

「そんな所よ。ちなみに今日私たちはそれぞれ二代目ダニエル、ティモシー、エバで参加してるから」

「5D，sかよその偽名」

おいおい、とシユウは呆れながら、

「てか、何で勝手に二代目襲名してやがんだよ」

「そりゃまあ仕方ないって話でしょ。ダニエル名乗ろうとしたら既にダニエルが存在してて、ついでにダニエルはもういないから継がせて貰ったって話」

すると、シユウは顔色を変え、

「え？　おい、いま何て。初代ダニエルがもう居ねえって？」

「飛奈、鳥乃さん、そろそろ行かないと間に合わないよ」

会話を遮って双庭先輩がいった。ダブルットから現在時刻を確認すると、そろそろDホイールのメンテナンスを始めないとやばそうだった。

「ん、分かったわ先輩。じゃ、そういう事だから大会で当たったらよろしく」

私はシユウとの会話を打ち切り、急ぎ足で再び持ち場へと向かう。

「お、おい！　さっきの話」

後ろでシユウが呼び止めようとしてたけど、時間をみるに振り返る余裕はなさそうだった。

「レディースエンドジェントルメエン！　これよりイイツ！　決闘疾走ネオトヨタシテイカップを開催しまアアッス！　実況はアアツ、このワタクシイティモンズ剛田がお送りしまアス！」

現在時刻9時50分。本戦が始まった。

「あー。やっと始まったー。これならもつとシユウと話しても良かったんじゃないの？」

飛奈ちゃんが待ちくたびれた顔でいった。持ち場についてから1時間以上、彼女は何もすることがなく暇で暇で仕方がなかったのだ。

もつとも、暇を持て余したのは彼女だけ。双庭先輩はダブルットで

念入りに選手の情報を集め、私も双眼鏡で念入りにレーススクリーンを眺めながら時間ギリギリまでDホイールの整備をしていた。

「何もなかったのは良いことよ、飛奈」

双庭先輩がいった。その横で私はうんうんとうなずき、

「じゃ、そろそろ選手紹介が始まるから行っていくわ」

私はヘルメットだけ持って持ち場を離れ、案内役(男だった残念)の指示に従って移動。PRIDEのテーマ曲としか思えないBGMをバックに、他の選手たちに混ざってサーキットに入る。

実況のテイモンズ剛田が叫んだ。

「地上最強の決闘疾走者を見たいかー!!」

『オー!!』

「ワシもじゃ、ワシもじゃみんな。全選手入場!!」

なぜかグラップラー○牙のノリだった。早速キャラも一人称も変わってるし。

直後、ソリッドビジョンのスポットライトが選手のひとりを照らし、サーキット上空にひとり選手の立体映像が表示される。

それは、中指立ててブチギレしてるツインテールの女の子。

「覚えてろ竹○房。地べたを這いドロ口水すすってでもネオスズカカツプにもどってきてやる。そう言い残し表舞台から出禁された伝説の少女は生きていた! 更なる研鑽を積みクソ決闘疾走者が蘇った!

だが、この大会はネオスズカじゃない、ネオトヨタだ! エントリーNo.1、今大会覇権候補、ボブ子だアー!!」

何だろうこの空気、いまずぐ逃げ帰りたい。

それから普通の選手とネタ極振りな選手が半々くらいの比率で紹介されていき、そろそろ頭が痛くなってきた辺りで、シュウの立体映像がサーキットに表示された。

「絶対正義イイイス! 説明不要! しかし今回はピットクルーのシルフィちゃん無し単独での出場だ。どうした! 何があった! エントリーNo.18、絶対正義シュトウルム・ハイツヴァイター!」

なんて、実況から紹介されたとき、シュウの顔は深く沈んでいた。シルフィの名が出たせいだろう。

しかし、なんて元ネタ的に一回戦敗退しそうな紹介の仕方だろうか。

なんて思ってたなら、最後に私の立体映像が映され、「若き王者が帰ってきたッ！ どこへ行っていたんだッ、チャンピオンッッ！ しかし、そこに立つのは、チャンピオンの名を襲名したひとりの少女！ 残念、別人！ しかし、我々はあえて言おう！ 俺達は君を待っていたッッッ二代目ダニエルの登場だ————ッ！」

しかも主人公だったという。

とはいえ、このまま○牙ネタのまま事が進んでくれれば好都合この上ない。だって、選手紹介の元ネタに沿うなら、初戦の相手はシユウになるのだから。

ちなみに、驚くことに初代ダニエルこと増田がチャンピオンなのは事実である。とはいえ、数年前の話だけど。当時特捜課だった増田が大会参加者に紛れ込んだ凶悪犯罪者を捕まえる為にダニエル名義で参加したと、ハングドの資料にあった。

「しっかし初代ダニエルこんなに大人気って話だったのね」

私の紹介を前に、サーキットは今日一番の歓声に包まれていたのだ。私はダニエル本人じゃないっていうのに。

「当たり前だろ。かつてのチャンピオンが肩書だけでも戻ってきたんだ」

と、後ろから私の独り言を拾ったのはシユウだ。

「数年前に突然と現れ、颯爽とチャンピオンの座を搔つ攫った伝説のDホイラー。しかし、奴が出場したのはその1度きり。彼の決闘疾走を見たい声がいまでも多く寄せられる中、奴は二度と大会の表舞台に姿を現さなかった」

シユウは言いながら、私の前に立つ。

「その大会の時、アタシはあそこにいたんだ」

指さした先はサーキットの客席。

「ダニエルの決闘は凄かったんだ。風に乗り、流れを掴み、クールでスタイリッシュで、まるであの大会は奴の為に用意されたステージだっ

たぜ。比喻じゃなく風に乗ったようにみえるライディングテクニクを披露したり、ソリッドビジョンだったはずのスキルで出した嵐から本当に風を感じたって声が続出したりよ。いまになってみると、全てフィールの賜物だったんだけど、当時フィールを知らないアタシがそんな決闘疾走を見た気持ち、テメエも少しは分かるだろ？ そんなフィールを知らない表舞台の住人がいまもアイツの帰りを待つてるんだ」

私は、そんな熱く語るシユウに何も言えなかった。

まだまだ私のメンタルは回復してなかったらしい。ダニエル伝説を知る生の声を聞いて、自分がどれだけ大それた名前で参加したのかわけると同時に、ダニエルのファンに伝えられるかどうか不安が押し寄せてきたのだ。

以前の私なら「任務で名前借りただけだから何言われても知った事じゃない」って、割り切ることもできたのだろうけど。

「それでは早速トーナメント表を発表しまアス！」

実況のテイモンズ剛田が叫ぶと、サーキット上空にソリッドビジョンで巨大なトーナメント表が映し出される。その左上、第一回戦の対戦カードを告げる箇所には、予想を裏切らずダニエルとシュトルムの名前が。

「○牙ネタから予想はしてたけどよ。早速当たっちゃったな」
表を見上げ、シユウはいった。

「二代目ダニエルよ。その名を名乗ったからには、ファンたちを裏切るような決闘疾走するんじゃないやねえぞ」

そのままシユウは私を指さし、

「そして、この絶対正義がテメエを倒す！」

といったシユウの言動はスピーカーとソリッドビジョンの中継で見事晒され、

「おおっと！ シユウ選手、早速対戦相手のダニエル選手に宣戦布告だアアアツ!!」

再び包まれる歓声。

仕方がない、気は乗らないけど私もリップサービスといこうか。

「シユウ、そろそろお家に連絡しておいたほうがいいわよ。予定が狂って午前中に帰るってね」

「しかしダニエル選手も黙ってはいない、シユウ選手に勝利宣言で返したぞオオオツ!!」

更に高まるサーキットのボルテージ。

「では、これより早速第一試合ダニエルvsシユウの試合を始めまアツス！ 両選手Dホイールと共にスタート位置についてください」

ダーニエル！ ダーニエル！ ダーニエル！

早速応援コールが響き渡る中、私はDホイールに乗る為、一旦持ち場へと戻る。

さて、これで私は逃げられなくなった。

Dホイールに乗ってスタートラインにつくと、まず私は小声で、

「先輩、周囲の状況は」

すると耳に装着した通信機から、

『不審な反応なし。大丈夫よ』

と、双庭先輩から反応が返る。続けて飛奈ちゃんから、

『頑張ってるね〜ん。私も全力で応援しちゃうよ〜』

『飛奈、愉しんでないで仕事して。鳥乃さんも、熱くなるのはいいけど私たちは任務で来てるのを忘れないで』

「勿論って話よ」

私は返事する。

「おい、二代目」

シユウがスタートラインについた。私の隣で試合開始の合図を待ちながら、彼女は横目で鋭い視線を私に向け、

「アタシが勝ったら、さつきテーマエが言ってた『ダニエルがもういい』って言葉の真相聞かせて貰うからな」

「ん、いまこっそり話してもいいけど？」

私は周囲に聞き取られないよう気を配りながら、

「初代ダニエルの正体はハンドグドの増田よ。その名の構成員がどう

なつたかはアインスから聞いてない?」

「な……」

ショックを受け、固まるシユウ。

増田の名前でならちやんと耳にしていたらしい。

「それでは、両者揃った所でカウントダウンを始めるぞオツ!」

そんなシユウの動揺に気づかない実況は、「5……4……3……2……1……ライディングデュエル! アクセラレーション、同時にサーキットの上空に実況に併せて数字が映し出され、Dホイールのモニターからも同様の映像が表示されていき、

「3……2……1……ライディングデュエル! アクセラレーション!」

試合開始。

私はアクセルを踏み、走行を開始する。

「おおっと! シユウ選手スタートが僅かに遅れたぞ。これはダニエル選手の有利かあ?」

決闘疾走では、最初のコーナーを先に曲がった者が先攻というルールがある。そして、シユウは私の狙い通り動揺してスタートダツシユを失敗。このまま彼女のメンタルが復活する前に終わらせれたらいいのだけど。

「先攻は、アタシだあああああああッ!」

後ろから絶叫をあげるシユウ。直後、彼女のDホイールが猛加速し、私の機体を一気に追い抜く。

一般の人たちからは分からない事だけど、それは明らかにフィールだった。

「おおっと、意外や意外。第一コーナーを制したのはシユウ選手。シユウ選手の先攻でライディング・スピードデュエルスタートだ!」

ダニエル

LP4000

手札4

□□□

□□□

□—□

□□□□
□□□□

シユウ

LP4000

手札4

サーキット上空、そしてDホイールのモニター画面にデュエル状況が表示される。私はとりあえず最初の手札を引き、Dホイールのホルダー部に挟む。

同時に、互いのフィールドに《スピード・ワールド2》が発動される。

「アタシのターン」

シユウがいった。

「いつくぜええつ！ アタシは手札から《剣闘獣ラクエル》を召喚！

さらにカードを2枚セットしてターン終了だ」

シユウの場に現れたのは、腰に特徴的な炎の輪をつけた、武装した虎型の獣戦士。その攻撃力は1800と下級としては高め。

さらに伏せカードが2枚。

「じゃ、私のターンね。ドロー」

私は片手でハンドル操作しながら、カードを1枚引き抜き、

ダニエル スピードカウンター0↓1

シユウ スピードカウンター0↓1

直後互いのフィールド魔法にスピードカウンターが1つ置かれ、Dホイールが僅かに加速する。

《スピード・ワールド2》にはお互いのスタンバイフェイズ毎にスピードカウンターを1つ置く効果がある。ただし、テキストには無いが先攻の1ターン目には発動しない仕様だけだ。

そして、このスピードカウンターを使って、スピード・ワールドの効果を使用したり、専用の魔法であるS^{スピードスペル}pを使って戦うのが、このルールの最大の特徴である。

「手札から《サイバース・ウィザード》を召喚」

私は1体の魔術師を場に出す。すると、

『おおっ』

それだけで周囲が歓声に包まれる。

「出たアツ！ 初代ダニエルも使っていたサイバース族モンスター、
《サイバース・ウィザード》だアアアツ!!!」

どうやら、増田も大会で出したことがあるらしい。

「握ってやがったか、そのカードを」

うげつと嫌そうな顔でシュウはいい、

「つていうか。そのカードもしかして」

「ご名答、正真正銘初代ダニエルの物よ」

私はいって、

「そして《サイバース・ウィザード》は1ターンに1度、相手モンスター1体を守備表示することができる。私は当然ラクエルを守備表示に」
魔術師の杖から光が放たれると、ラクエルは跪いて防御態勢に。

「この効果を使用したターン、私のモンスターはラクエルにしか攻撃できない。かわりに私のサイバース族がラクエルに攻撃する場合、貫通効果を得る」

ラクエルは攻撃力こそ高いが守備力は400しかない。攻撃が決まれば比較的高ダメージを与えた上で対処できる。

「バトル！ 《サイバース・ウィザード》で《剣闘獣ラクエル》を攻撃」
宣言すると、魔術師はその場で高く跳躍し、杖を鈍器に力いっぱい振り下ろす。その一撃がラクエルの脳天に直撃する寸前、シュウの伏せカードが1枚オープンした。

「破壊はさせ無え！ 畏カード《攻撃の無敵化》！ このバトルフェイズ中、ラクエルは戦闘・効果じや破壊されない」
「けど、ダメージは受けて頂戴」

バリアが出現し、ラクエルこそ破壊を免れるが、魔術師のフィジカルな一撃による衝撃を免れることはできず、余波がシュウを襲い、

シュウ LP4000↓2600

と、彼女のライフが一気に削られる。

「だが、そのバトルフェイズ終了時にラクエルの効果発動！ このカードをデッキに戻す事で、デッキからラクエル以外の剣闘獣を特殊

召喚する。ここはコイツだ。来い、《剣闘獣ムルミロ》！」

ラクエルのビジョンが縮小しながらシユウのデッキに戻ると、入れ替わりにデッキから現れたのは魚族の剣闘獣。

「《剣闘獣ムルミロ》は剣闘獣の効果で特殊召喚された場合にフィールドの表側表示モンスター1体を破壊する。《サイバース・ウィザード》を破壊！」

魚族の剣闘獣はそのまま奇襲とばかりに魔術師に一撃を入れ、討ち取る。

「随分と攻め急いだプレイングね」

私は《サイバース・ウィザード》を墓地に送りながら、

「てつきり《剣闘獣ベストロウリイ》でこのターン伏せたカードを破壊しに来ると思っただけど」

ベストロウリイには、いまのムルミロのような形で特殊召喚された際に、場の魔法・罫を1枚破壊する効果を持つ。エンドサイクという言葉があるように、発動できない状態のうちに伏せカードを破壊するアドバンテージは大きいはずなのだ。たとえ次のターンに2枚とも破壊する手段があつたとしても。

「どういうプレイしようと勝手だろ？」

気に障った様子シユウ。もしかして。

「……手札に他の剣闘獣がない？」

私が指摘したベストロウリイは攻撃力1500と、1800の《サイバース・ウィザード》には敵わないものの、剣闘獣には《融合》なしで特殊召喚できる融合モンスターが幾つか存在する。この方法を取れば急いでムルミロで対処する必要はないはずなのだ。

「チツ」

舌打ちするシユウ。どうやら正解だったらしい。

「おおっと！　ここで二代目ダニエル選手の舌戦が炸裂ウ！　シユウ選手、これはメンタルを揺さぶられた上、手札の状況を晒してしまつたかあッ？」

会話に反応する実況。そうだった、このデュエルには大勢が見ている上実質ジャッジを兼ねたような実況もいるのだった。

今回の心理フェイズは好評だったみたいだけど、いつ反則扱いになるか分からない。気をつけないと。

私は通信機に小声で、

「先輩、一応私の言動にもちよつと注意凝らしてくれる？」

『まっかせてー』

反応したのは妹だった。まあ伝わったならいいや。

ダニエル

LP4000

手札2

スピードカウンター1

□「《伏せカード》」□「《伏せカード》」

□□□

□—□

□「《剣闘獣ムルミロ》」□

□□「《伏せカード》」

シュウ

LP2600

手札1

スピードカウンター1

「アタシのターンだ！ いよつし、実況、実況！」

突然、シュウが実況を呼ぶ。

「おお？ どうしたことかシュウ選手突然私に向かって喋り出したぞお！」

反応する実況に向かってシュウは。

「もう半分バレてるようだから言わせて貰うが、いまアタシの手札にモンスターカードはいねえ。更にいまアタシの場にいるモンスターは攻撃力たった800のムルミロだ。ダニエルの場にモンスターはいねえが、奴の場に伏せカードは2枚。そのカード次第によっては、次のアタシのターンは無いつて可能性さえ想定できる！」

と、わざわざ自分のピンチをアピールし、
「だが！」

と、シユウは続ける。

「アタシのデッキには、そんな現状を突破できるカードが眠っている。その名は《剣闘獣ベストロウリイ》！ 宣言するぜ。アタシはこのドローでベストロウリイを引き当ててやる！ 初代ダニエルの神引きの株を二代目から奪ってやる！」

「なんとおおおっ！ シユウ選手、ここで初代ダニエルの技を逆に使う宣言だあっ！」

実際はシユウの場にも伏せカードが1枚残ってて、ムルミロの攻撃が通ればデッキの別の剣闘獣と入れ替わるので盤面は互角といえる状況。さらにいうと、私が伏せたのは《スキル・サクセサー》と《ブレイクスルー・スキル》。どちらもシユウの攻撃自体を止めることはできない。

しかし、周囲はシユウのパフォーマンスに中てられ、

『おおっ』

と、興奮に包まれた。

「いづくぜええええええええっ！ ドローー！」

シユウがカードを引き抜く。普通の人には分からないだろうけどそれなりにフィールを込めたドローになっている。つまり、ドロー運が上がってるので高確率でベストロウリイを引き当ててくる。

やろうと思えばフィールで相殺はできそうだけど、あえてしない。

ダニエル スピードカウンター1↓2

シユウ スピードカウンター1↓2

「運命のドロロー！ シユウが引いたカードは一体」

スピードカウンターが増える中、実況の言葉から数秒ほど間を置いてシユウは、

「アタシは。——召喚、《剣闘獣ベストロウリイ》！」

と、宣言と同時に二足歩行のバードマンタイプの剣闘獣を呼び出す。

「きたあああああああ！ 宣言通り、シユウ選手ベストロウリイを引き当てたあああっ」

沸きあがる会場。

「いつくぜえ、ダニエル！ アタシは場のムルミロとベストロウリイをデツキに戻す。いにしえに生きる猛禽の闘士よ！ 戦友との絆ここに束ね、いまこそ歴戦の勇者になれ！ コンタクト融合！ いくぜレベル6、《剣闘獣ガイザレス》！」

2体の剣闘獣がデツキに戻ると、新たなバードマン型の剣闘獣が姿を現した。その攻撃力は2400。

「《剣闘獣ガイザレス》は場の素材モンスターをデツキに戻すことでEXデツキから特殊召喚できる専用の融合モンスターだ。そして、こいつの特殊召喚の成功時、場の魔法・罠を2枚まで破壊する。喰らいやがれえい！」

シユウが力強く拳を突き出すと同時に、ガイザレスから双つの竜巻が放たれ、私の伏せカードを巻き込む。けど、そのうちのひとつを私は表向きにし、

「残念だけど、罠カード《ブレイクスルー・スキル》を発動。その効果は無効よ」

「させねえよ！ デツキから《剣闘獣ノクシウス》を墓地に送ってカウンター罠《剣闘獣の柔術》！ このカードは場に剣闘獣がいる場合に、デツキの剣闘獣を墓地に送って発動。罠カードの発動と効果を無効にし、デツキに戻す」

「デツキに!?!」

ちよつ、待つて。《ブレイクスルー・スキル》の真価は墓地からも発動できることにあるのに。

「テメエがアタシのデツキを対策してることくらい想定済なんだよツ！」

シユウは吐き捨てるようにいい、Dホイールを私の真横に張りつかせる。そして、実況に伝わらないよう小声で、

「シルフィなんだろ？ テメエに依頼したのは」

「……黙秘権を行使するわ」

私がいうと、通信機の中から「それって肯定にしか聞こえないのよねん」とケタケタ笑う声。

「まあ無理もねえ。アタシだってアインスならまだしもファイアとつ

るむなんて言ったら悪魔に魂に売ったって思うだろうしな。どつかでシルフィがアタシを悪魔の手先認定して倒しにくるだろうとは確信してた」

「売ったの？ 悪魔に魂」

「……」

シユウは僅かな魔の後、

「さあな」

と、シユウは打ち切り、私の前についてバック走。

「だがな、アタシはここで負けるわけにはいかねえ！ 《剣闘獣の柔術》の効果で《ブレイクスルー・スキル》は無効。伏せカードは全て退場して貰った。バトルだ！ 《剣闘獣ガイザレス》、二代目ダニエルにダイレクトアタック！」

再び双つの竜巻が、今度は攻撃として私に直接襲いかかる。しかも、僅かながらフィールが掛っており、私を飲み込んだ竜巻は観客席にまで突風を浴びせ、

「きゃあ」「うわ何だ！ ビジョンなのに風が」「レースクイーンはどこだ？ いまならスカートがめくれて」

と、シユウのパフォーマンスに周囲が反応を見せる。勿論、私は風でめくれたレースクイーンの下着は拝みました。じゃなくて、何かを吹き飛ばすほどの威力ではないので被害といったものはなく、

「おおっと！ ソリッドビジョンなのに風！ これも初代ダニエルが起こした奇跡！ シユウ選手、完全に二代目の株を奪いにきてるぞ！」

実況が大興奮で叫ぶ中、シユウはいった。

「二代目、初代はこのパフォーマンスもやってのけたぜ？ テメエは当然できるんだろうな？」

パフォーマンス、か。

増田がそういう意図でフィールを使ったかは分からない。けど、相手がここまで観客を沸かせようとしているのに、私がそれに乗らないのはダニエルの名に傷がつくというもの。

「勿論って話よ」

私はいった。

ダニエル LP4000↓1600

「バトルフェイズ終了時にガイザレスの効果発動！ このカードをエクストラデッキに戻し、デッキから剣闘獣を2体特殊召喚する。来い、《剣闘獣アウグストル》そして《剣闘獣エクイテ》！」

そして現れる2体の剣闘獣しかも、そのうちのアウグストルは攻撃力2600の最上級モンスターときたものだ。そして、もう片方も攻撃力こそ1600だけど、

「《剣闘獣エクイテ》のモンスター効果。このカードが剣闘獣の効果で特殊召喚された場合、墓地の剣闘獣1体を手札に戻す。アタシは《剣闘獣ノクシウス》を手札に戻すぜ」

こうして、柔術で墓地に送ったモンスターが見事シユウの手札に。しかも、このノクシウス。直接攻撃時に特殊召喚されて盾になる手札誘発モンスターなのだ。

私はいった。

「ジャステイスだ何だ言ってる割には、盤上の動き自体はセコくてチマチマしてて地味なデッキよね、それ」

「失礼だなおい」

シユウが突っ込む。

「むしろヒーローらしい結束とコンビネーションのデッキだろ！ 例え場のモンスターはひとりでも、そいつは単独で闘ってるんじゃないやねえ！ デッキの仲間と常に一緒に闘ってるんだ。熱いだろっ！」

「ああ……」

なるほど、そういう取り方もできるわけね。

「そのテメエのいうチマチマしてセコいっていうのも、基本戦闘を介してらつてのがポイントだしな。メインフェイズでガンガン回してワンショット狙いにくる奴とは違い！ ってわけだアタシはこれでターン終了」

さて、と私はドロウする前に現在のデュエル状況を確認する。

ダニエル

LP1600

手札2

スピードカウンター2

□□□□

□□□□

□□□□

□□「《剣闘獣アウグストル》」「《剣闘獣エクイテ》」

□□□□

シユウ

LP2600

手札2

スピードカウンター2

お互い手札は2枚。だけど、シユウの場には2体のモンスターが、しかもその内1体は最上級モンスターがいるのに対し、私の場は空っぽ。そのうえライフも私のほうがちょうど1000低いと完全こちらの不利。

そして、私の手札はというと。

(なるほどね。あのカードが足りないって話)

そうと決まると、私は指先にフィールドを込め、

「私のターン、ドロー」

と、目当てのカードを呼び込む。

ダニエル スピードカウンター2↓3

シユウ スピードカウンター2↓3

スタンバイフェイズに私たちのカウンターがひとつ増える。

私はいった。

「なら見せてあげようじゃない。それもダニエルらしく」

そして、私は手札を1枚フィールドに置く。

「《ドラコネット》召喚。このカードの召喚に成功した時、私は手札かデッキからレベル2以下の通常モンスターを特殊召喚する。私はデッキから《デジトロン》特殊召喚」

すると、

「おおっと！ このカードは、そしてこのサイバースの通常モンス

ターは！ まさしく、まさしく初代ダニエル！」

と、実況。

「そして、座標確認、私のサーキット。ロックオン！」

私は前方にリンクマーカーを出現させると、Dホイールを加速させ、マーカーの中央へと飛び込む。すると辺りは暖色の電腦空間に書き換わり、

「アローヘッド確認。召喚条件は通常モンスター1体！ 私は《デジタルロン》をリンクマーカーにセット！ リンク召喚！ 起動せよ、LINK-1 《リンク・スパイダー》！」

《デジタルロン》が靈魂の矢印になってマーカーに取り込まれ、現れたのは蜘蛛のリンクモンスター。

召喚の演出が終わると、辺りの電腦空間も消え私は僅か上空からサーキットに着地する。なお、リンクマーカーに飛び込んで召喚するのは増田つまり初代ダニエル式のリンク演出だ。

「《リンク・スパイダー》のモンスター効果！ 1ターンに1度、手札からレベル4以下の通常モンスターを自身のリンク先に特殊召喚。再び来て頂戴、《デジタルロン》！ さらに場にサイバース族がいることで手札の《バックアップ・セクレタリー》を特殊召喚」

こうして、EXゾーンを含め私のモンスターゾーンが全て埋まり、「再び座標確認、私のサーキット。ロックオン！」

私はもう一度マーカーの中央へと飛び込む。

「アローヘッド確認。召喚条件はモンスター3体！ 私は《リンク・スパイダー》《デジタルロン》《バックアップ・セクレタリー》をリンクマーカーにセット！ リンク召喚！ 起動せよ、LINK-3 《パワーコード・トーカー》！」

こうして出現したのは、増田のフェイバリットだった《デコード・トーカー》に類似するコード・トーカーモンスター。攻撃力は2300。

「決まったああああ！ 二代目ダニエル、初代お得意の通常モンスターを使った連続リンク召喚に成功だあああああああああああああああ!!!」

実況が叫ぶ中、

「きやがったか。待ってたぜコード・トーカー！」

と、シュウも興奮気味。そういえば彼女も初代ダニエルのファンだったんだっけ。

「さあ、二代目ダニエルのファンサービス、とくと味わって頂戴。バトル！ 《ドラコネット》で《剣闘獣エクイテ》に攻撃」

《ドラコネット》から電子のブレスがエクイテに向けて放たれる。しかし、《ドラコネット》の攻撃力は1400と200ほど届かない。

「ダメージステップ時、墓地の《スキル・サクセサー》を除外して効果を発動。この罨カードは自分のターンに墓地から除外して発動することで、場のモンスター1体の攻撃力を800上げる」

《ドラコネット》 攻撃力1400↓2200

その効果を受け、モンスターの攻撃力が膨れ上がり、

「《剣闘獣エクイテ》撃破！」

シュウ LP2600↓2000

エクイテの攻撃力を超えた分だけ、シュウのライフにダメージが入る。

「ちいっ」

と、舌打ちながらも、ダニエルのエース級モンスターを相手に嬉しそうなシュウ。けど、

「その笑顔もどこまで続くって話だけどね」

「なにっ」

と、流れに乗ってくれたシュウに対し、

「《パワーコード・トーカー》で《剣闘獣アウグストル》に攻撃。ダメージ計算時、パワーコードの効果が発動」

宣言すると、《ドラコネット》の体が光の粒子に変わり、パワーコードに取り込まれる。

「《パワーコード・トーカー》はダメージ計算時にリンク先のモンスター1体をリリースすることで、そのバトルのみ攻撃力を倍にする」

すると、《パワーコード・トーカー》はスーオーサイヤ人のように闘気の奔流を沸きあがらせてから、腕からワイヤーを飛ばしアウグスト

ルに巻きつかせ、そのまま跳躍する。そして、引っ張られ全身の自由の利かないまま宙を舞ったアウグストルに、ラ○ダーキックをお見舞い。

《パワーコード・トーカー》 攻撃力2300↓4600

その脚はアウグストルを突き破りつつ破壊し、その爆風によって景色は消し飛び辺りは荒野のビジョンに早変わり、《パワーコード・トーカー》はポーズを決めて着地する。

その際、爆風にはフィールが込められており、観客たちは爆風の軽い衝撃と荒野の砂の匂いを感じとったことだろう。

「うわあ、また風が!」「す、砂が目に……あれ、痛くない」「この砂嵐だ。いまなら隣の子にセクハラしたって!」

再び観客たちはフィールでリアル化したビジョンに反応を。

「って待った誰、三人目それは私がす——!」

思わず言いかけ、けど私はやめた。三人目はオカマで、セクハラのターゲットは青年だったから。

と、とりあえず。

「アウグストル撃破!」

何もなかったかのように、私がいうと、

「な、なにか妙な一幕があった気がします! き、決まったあああああああああッ!」

実況の絶叫が響き渡る。

「パワーコードの攻撃力は4600、対しシユウ選手のモンスターは2600、ライフは2000、ダメージも2000! 二代目ダニエル選手、シユウ選手を相手にジャストキル成り——!」

言い切りかけた所だった。

「まだ終わっちゃいねえっ!!!」

荒野のビジョンに巻き込まれ、姿を消したままシユウが叫ぶ。そして、ビジョンが消え本来の光景に戻ると。

シユウ LP2000↓1

シユウのライフは、たった1残っていた。一体何が?

「スキル発動、《根性》!」

シユウは叫んだ。

「このスキルは、アタシのライフが0になる場合、このターン、アタシのライフを1未満にならなくするスキルだ。発動するかしないかは運次第だがな」

「え、ちよっ」

なんてギャンブル的なスキルを。いや、その未確定なスキルをファイルで発動確実化させたのか。

「な、ななな、なんとおおおおお！ シユウ選手、《パワーコード・トーカー》の一撃を耐え切ったあああつ」

そんな予想外な展開に、実況も驚きを隠せていないようだった。なにせ手札誘発ならともかく、発動するか分からないようなスキルを使って耐え切ったのだから。

「まさか、こんな方法で耐えきるとは思わなかったわ」

隣について話しかけると、シユウは「へへっ」と鼻をかき、

「当たり前だろ。ついにテメエのコード・トーカーモンスターを出させたんだ。このままフィニッシュユなんてさせるかよ」

なんて。ホントに男の子みたいな熱い返事。

「なら見せて頂戴、私はこれでターンエンド」

「おう！ アタシのターンだ」

ダニエル

LP1600

手札0

スピードカウンター3

□□□□

□□□□

「《パワーコード・トーカー》——□□

□□□□

□□□□

シユウ

LP1

手札2

スピードカウンター3

シユウはまだまだ元気有り余ってる様子でデッキに手を伸ばし、「ドロー」

と、カードを引き抜く。

ダニエル スピードカウンター3↓4

シユウ スピードカウンター3↓4

同時にお互いのスピードカウンターが4になり、そろそろフィールド魔法やスピードスペルの効果が牙を向いてくる頃。

「一手足り無え」

シユウが呟くのが聞こえた。その声は実況の耳にも止まり、

「おっとシユウ選手、ここでいいカードを引けなかったようだ。どうなるシユウ選手」

と、心配そうに。

「シユウ、あれだけ会場を盛り上がらせといて酷いオチつけたりしないですよ?」

なんて私がいうと、通信先から、

『鳥乃さん、任務なのだから熱くなつては駄目だ』

「分かってるって」

私は双庭先輩に返す。

『なら、何か作戦でも?』

「まあね」

と、私は再びシユウに向き直り、

「で? まだ手はあるんでしょ?」

「当たり前だ」

シユウはいった。そして、手札を1枚直接ディスクに差し込み、

「ここでアタシは《SPオーバー・ブースト》を発動! この効果でアタシのスピードカウンターを4つ増やす。代わりにターン終了時にアタシのスピードカウンターは1になっちゃまうけどな」

シユウ スピードカウンター4↓8

魔法カードの発動が受理されると、彼女のDホイールは急加速を始めグングンと私のDホイールと差を広げていく。おかげで私は

ファイルの妨害が届かない。

「そして、続けてアタシは《スピード・ワールド2》の効果を使用、スピードカウンターを7つ取り除き、デッキからカードを1枚ドロースる。いくぜ、ダニエル！ この1枚でアタシは流れを引き戻してやる！」

シユウが一旦Dホイールをマニュアル操作からオートパイロットに切り替えたのが見えた。眼を瞑り、ドローに意識とファイルを集中させてるのが見える。

「いくぜ！」

Dホイールがヤバいほど加速する中、シユウが目を開く。

「ドロー！」

そして、突風の中でカードを1枚引き抜く。

シユウ スピードカウンター8↓1

シユウのカウンターは1に減り、失速していくDホイール。さて、引いたカードは？

「よっしやあー！」

シユウが叫んだ。

「アタシは手札から《スレイブ・キメラ》を召喚」

シユウが召喚したのは、象の胴にライオンの前足、そこから伸びる熊の上半身に猿の顔を持ったまさにキメラモンスター。

「《スレイブ・キメラ》のモンスター効果。こいつをリリースし、手札の剣闘獣を表側守備表示で特殊召喚する。来い、《剣闘獣ノクシウス》！」

続いて現れたのは、柔術で墓地に送ってエクイテで回収していた二足歩行のチーター型剣闘獣。

「《スレイブ・キメラ》による特殊召喚は剣闘獣の効果による特殊召喚として扱う。《剣闘獣ノクシウス》のモンスター効果、デッキから剣闘獣1体を墓地に送る。アタシは《剣闘獣ラクエル》を墓地に送る」

わざわざ手札誘発用のカードを場に出してまで、ラクエルを墓地に？

(まさか)

そう思った所へ。

「続けて墓地の《スレイブ・キメラ》第二の効果を発動！」

と、シユウは宣言した。

「墓地の《スレイブ・キメラ》をゲームから除外して効果発動。アタシの墓地のモンスターを素材に、剣闘獣のコンタクト融合を行う！」

やっぱり。

「アタシは墓地の《剣闘獣エクイテ》《剣闘獣アウグストル》《剣闘獣ラクエル》の3体をデッキに戻す。いにしえに生きる猛虎の闘士よ！

戦友との絆ここに束ね、いまこそ英雄の皇となれ！ コンタクト融合！
いくぜレベル8、《剣闘獣ヘラクレイノス》！」

シユウの墓地から3体の剣闘獣の魂が降り立ち、融合の渦で混ざり合い出現したのはラクエルをベースに様々な剣闘獣の特徴の見られる大型モンスター。

「出たあああああ!!! 攻撃力3000の超大型モンスターの登場だアツ！ その名前は、《剣闘獣ヘラクレイノス》！ 二代目ダニエルこの大型モンスターを相手にどう立ち向かう？」

やはり、観客にとつて攻撃力3000のエースモンスターはデュエルの華なのだろう。「いいぞー」「やれー」といった熱意の籠った応援が大勢シユウに投げられる。

「これがアタシの真のフェイバリットだ。いくぜ、バトルだ！ 《剣闘獣ヘラクレイノス》で《パワーコード・トーカー》に攻撃！」

それは、ただの斧の一振りだった。

しかしその重い一振りは、パワーコードを正面から叩き潰すには十分で、身を守って尚、力任せに両断され破壊される。

沙樹 LP1600↓900

こうして私のライフはついに1000を下回った。

「《剣闘獣ヘラクレイノス》には手札を1枚捨てる事で魔法・罠カードの発動をカウンターできる。手札の尽きた終盤でこのモンスターだ！ 突破できるものならしてみやがれ、アタシはこれでターンエンドだ」

ダニエル

LP900

手札0

スピードカウンター4

□□□□

□□□□

□□ — 「《剣闘獣ヘラクレイノス》」

□□ 「《剣闘獣ノクシウス》」 □□

□□□□

シユウ

LP1

手札1

スピードカウンター1

シユウの手札は1枚。つまり1回は魔法・罠の発動を無効にできるというわけだ。その上攻撃力3000、次のドロ1枚で突破しろなんていうのは確かに難しい。

「これは、もしかすると、もしかするぞおおおつ！ 二代目ダニエルまさかの初戦敗退かあっ？」

実況の言葉が地味に突き刺さる。実際、やばいのだ。

とりあえず、私はDホイールを加速させ、失速し私の傍まできたシユウを逆に追い越し、ホイールの妨害が届かない位置まで距離を広げる。

「ちっ、妨害はさせないってか？」

苦そうにいうシユウ。

「その通りって話。私のターン、ドロ」

ホイールを込めて私はカードを引く。そして、新たな手札を見てあることを決意する。

私は一旦、Dホイールをマニュアル操作からオートパイロットに切り替え、目を閉じる。そして、暗闇の深層に潜るように私はそつと瞑想に耽った。

……………。

……………。

…。

気づくと、目を閉じた先の世界は、海のど真ん中だった。

空は黒い雲に覆われており、そこに紫色の光で描かれた鯨模様のナスカの地上絵が、幾多もの光の粒子と共に光源になっている。

私は、そんな粒子の中から目当てのものを探し出す。粒子はどれも同じ姿形をしていたけど、波長が違うのだろうか1つ1つ私には別なものに見えた。

これらは、私が過去に地縛神の贄に取り込んだ被害者たちだった。実際、探している最中にいまでも憎くて仕方ない牡蠣根と思われる光の粒子も。私は牡蠣根を無視して更に探し、ついに目当ての粒子を見つけた。

私は、その粒子に手を伸ばし、いった。

「増田。力を借りるわ」

そして私は現実世界で目を見開く。

ダニエル スピードカウンター4↓5

シユウ スピードカウンター1↓2

Dホイールはちょうどカーブに差し掛かっており、私はすぐマニュアル操作に切り替え、スピードを落とさず曲がりつつ、自ら描いた曲線の軌道にホイールを注ぎ、嵐を創り出す。

「こ、これはまさか」

その様子に何かを察した実況が呟き、シユウもまた、

「そーいやアイツのライフは1000以下。って、おいおいまさか!？」

と、反応する。

「そのまさかって話よ」

私は自ら作りあげた嵐にDホイールごと飛び込む。

私は叫んだ。

「スキル発動、《ストームアクセス》！」

『え、ちよつとおおおっ』

嵐の中、通信先で飛奈ちゃんがいった。

『確か沙樹ちゃん先輩、今回デュエルで使うスキルって《ステイニー・ドロー》でしょ？ なんでスキル変更されてるの?』

「そりやあまあ」

私はDホイールにしがみつきつつ波に乗りながら、

「三人目の協力者がいるって話」

『えええつ、待ってそんなの聞いてないよ』

「そりや話さなかつたんだから」

ちなみに姉のほうには伝えてあったり。

それじゃあそろそろ。私は嵐の中で腕を伸ばし、

「《ストームアクセス》は私のライフが1000以下の場合に発動可能。私はこの効果で、データストームに眠るゲームに使用してないサイバース族・リンクモンスター1体をランダムにエクストラデッキに加える」

伸ばした腕の先で、光の粒子が集まり1枚のカードに姿を変える。

私はそれを逃さずキャッチし、嵐の中から脱出する。

「なるほどね。思った通りのカードがきたわ」

私は呟く。つまり増田はあのカードを使えといってるのだ。

飛奈ちゃんがいったように、先ほどまで私が使うスキルは《デステイニー・ドロ》で登録されていた。そもそも、実は私は《ストームアクセス》のスキルを所有していなかった。その為、私が《ストームアクセス》を使うには、一度増田の光の粒子にもう一度会い、スキルを借りなければいけなかったのだ。

そして、まだ名を明かしていない3人目の協力者には、私が《ストームアクセス》を仮に行おうとした際、登録してあるスキルをこっそり変更するように頼んであったのだ。

「こ、これは間違いない！ このスキルは《ストームアクセス》！ まさしく過去に初代ダニエルが使ったスキルそのものだああああっ」

大興奮の実況。一方シユウも、

「おいおい、アインスも使えてたけど。テメエも使えるのかよそのスキル」

と、驚いてる様子だった。

「まあ、カードも手に入れたことだしデュエル終わらせましょ」
私はいい、

「《スピード・ワールド2》の効果発動。このカードの効果でスピードカウンターを4つ取り除き」

「って、ここにきてまさか」

「という野暮はやめて《S P E E N ジェル・バトン》を発動。デッキからカードを2枚引き、その後手札を1枚墓地に送る」

と、フェイクをひとつ置いてから私は魔法カードを発動する。

「な」

シユウは驚き、

「ちよつと待てよ。《スピード・ワールド2》のカウンター4つの効果といったら、手札のスピードスペルの数×800ダメージだろ？ それを使えば勝てたのに、何故それをしなかったんだよ」

「だから言つたじゃない。そんな野暮はやめたって」

「けどよ。アタシの場にはヘラクレイノスがいるんだぜ、その魔法カードだってアタシの手札1枚で」

と、言いかけた所を私は不敵に笑って返す。するとシユウは察して、

「ヤロウ。アタシの性格を察してあえて途中まで《スピード・ワールド2》の効果を使うフリしやがったな」

「ご名答」

わざと勝てるプレイングをやめて、正面からヘラクレイノスに立ち向かおうとしたのだ。シユウの性格なら「負けるはずの試合が続いた」のに、その恩と熱いパフォーマンスに仇で返すことはできないだろう。

『鳥乃さん。あれほど熱くなつては駄目だと言ったのに』

通信機の中から双庭先輩のブーイングが入る。しかし、同時に。

『そう？ 私はアリだと思うよん』

と、飛奈ちゃん。

『シルフィちゃんの依頼を聞くだけなら勝てばいいけど、確か今回の本当の依頼人って、先輩の恩師さんだったよね？』

『なら尚更』

『恩師さんの依頼はシルフィちゃんを助けるだったよね？ 沙樹ちゃ

ん先輩こう思ってるんでしょ？ ただシユウを倒すだけだと、あの子を助けたことにはならないって』

その言葉に押し黙る双庭先輩。

『だけど』

と、飛奈ちゃんはいった。

『それで負けたら元も子ないんだから、沙樹ちゃん先輩分かってる？』

「当然」

私は返す。

「いいぜ、引けよ」

シユウはいった。

「その代わり、テメエの持つ最高のドロウでアタシのヘラクレイノスに立ち向かって来い！ それ以外は認めねえ！」

「言われなくても」

私は指先に意識を集中させ、フィールを込める。

「ドロウ」

私はカードを2枚引き、その内の1枚を墓地に。

「いいカードは引けたか？」

訊ねるシユウに、私はこの言葉で返した。

「墓地に送った《幻獣機オライオン》のモンスター効果。私の場に幻獣機トークンを1体生成する」

私の場に出現したのは、本来私のデッキで見飽きるほど出るはずの、1体のホログラムのデコイ。

「つて、おい！ なんで入れてんだよ」

ツツコミを入れるシユウ。続けて実況も、

「なな、なんと！ ここで二代目ダニエル選手。サイバースではなく機械族、それもチューナーモンスターを使用したあ！」

なお、今さらながら幻獣機トークンはチューナーではないけど、オライオンはチューナーである。

「続けて、私は手札から《サイバース・ガジェット》を召喚。墓地の《幻獣機オライオン》を特殊召喚」

「なっ！ サイバースと幻獣機をかみ合わせてきただと」

驚くシユウ。最近は割とこういうデッキを使ってるのだけど、恐らく持つてる情報が増田の死ぬ前のものだったのだろう。

「まだ驚くのは早いって話よ。実況もね」

「ここで私は初めて実況にも言葉を伝え、

「座標確認、私のサーキット。ロックオン！ 召喚条件はチューナー1体以上を含むモンスター2体！ 私は《サイバース・ガジェット》と《幻獣機オライオン》の2体をリンクマーカーにセット！ リンク召喚！ 起動せよ、LINK-2 《ラピッド・プロト・ドラゴン》」

と、私は先ほどのストームアクセスで引き当てたカードを召喚する。フィールドに出現したのは、小型かつデフォルメされたサイバースの竜で、明らかに《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》らしい特徴を持っている。

「何ということだアアアッ！ これはもしかしてストームアクセスで引き当てたカードなのか？ ダニエル選手、リンク召喚が売りのサイバース族において、リンク素材にチューナーを必要とするリンクモンスターを出してきた！ これが二代目！ 二代目ダニエルの真のサイバース戦術か？」

私は実況の反応を聞いてから、その「二代目ダニエルの真のサイバース戦術」に応えるように。

「その通りよ。《サイバース・ガジェット》のモンスター効果！ このカードがフィールドから墓地に送られた場合、ガジェット・トークンを特殊召喚する」

こうして、私の場にはLINK-2のリンクモンスター1体とトークンが2体。

「《ラピッド・プロト・ドラゴン》はリンク4以上のモンスターの素材にすることができない。その代わりに、こんな効果を持っているわ。フィールド上のこのカード自身をゲームから除外して効果発動。私のエクストラデッキからレベル7以下のクリアウイングをシンクロ召喚扱いで特殊召喚する」

「なにっ!?!」

驚くシユウ。それだけではなく、会場も異質なモンスターを前に湧

き上がる。

「いくわ。私は《ラピッド・プロト・ドラゴン》でラピッド・プロト自身にチューニング！ 未だ穢れに染まらぬ無垢なる翼よ。その透明さで敵を討て！ シンクロ召喚！ 飛翔せよ、レベル7！ 《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》！」

こうして場に現れたのは、もはや説明不要な私のエースモンスター。

「待てよ！ テメエまさか最後の最後でダニエルの名を捨てて闘う気か？」

叫ぶシユウに。

「大丈夫それはないって話。そもそも、ラピッド・プロトの効果で特殊召喚されたクリアウイングは、攻守が0になりターン終了時にリリースされるのよ」

「なら何でそんなカードを」

「こうするのよ。再び座標確認、私のサーキット。ロックオン！」

私はここで更にリンクマーカードを出現させ、中に飛び込む。

「アローヘッド確認。召喚条件はモンスター2体以上。私は《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》そして場のトークン2体をリンクマーカードにセット！。そして、このモンスターを召喚する場合、《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》はLINK-2として扱う」

「な、クリアウイングがLINK-2だと?！」

「リンク召喚。初代の魂、無垢なる翼に宿れ！ 起動せよLINK-4、《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》！」

こうして現れたのは、3Dかつ電子的な見た目のクリアウイング。その攻撃力は2500。

「お、おいおいマジかよ。チューナーだけじゃなくSモンスターも使ってリンクモンスターを出しやがった」

驚きすぎて茫然とするシユウ。私はそんな彼女の横に移動し、

「このカードは、増田が最後の《ストームアクセス》で引いたカードよ」

と、実況に聞こえないよう伝える。

「え?」

「そして、増田から直接私に渡された形見でもあるわ」

「……なるほどな」

僅かな間の後、シユウはいった。

「確かに、そんなカードを持つてるんじやあケチの付けようも無え。テメエは間違いなく二代目ダニエルだ」

「シユウ」

「だからといって、アタシのフェイバリットを倒せるってわけじゃあ」と、何気なく私に顔を向けたシユウ。その表情が一瞬にして青ざめたものに代わる。

直後。

『危険反応感知。鳥乃さん、気をつけて』

と、双庭先輩への返事。続けて、

「危ねえ！ 鳥乃伏せろ、オートパイロットだ！」

と、シユウが私の肩を跳び箱にして、私のDホイールを飛び越える。直後だった。

何処からか私を狙ったフィールの矢がシユウの肩を貫く。私を庇ったのだ。

「があっ」

「シユウ！」

倒れこむシユウ。私は即座に彼女を抱きとめ、Dホイールを止める。

矢が放たれたのはサーキットの屋上。そこに立っていたのは、一体の悪魔族の射手。しかし、直後に背後から《馬頭鬼》が現れ、手に持つ斧で叩き切られていた。なお、どちらも「協力者」が使うカードではない。一体誰が？

「大丈夫、シユウ？」

すでに矢は消えていたが、シユウの肩は出血していた。彼女もフィールで防壁を張ってはいたみたいだけど、あの矢はフィール量の差で正面から撃ち貫いたらしい。

「だい……じょうぶ、だ」

シユウは肩を抱えながら、耳元の通信機に向かって、

「フイーア！ テメエこのヤロ！ 余計な事するんじゃないやねえ！」
と、叫んだ。

「アタシがいつ対戦相手を狙えと言った。確かにテメエとはチームになったが、アタシはいまでも絶対正義だ。外道に成り下がったつもりも、悪魔に魂売ったつもりも無え！」

シユウは通信機を耳から外し、握力で握りつぶす。

「すまねえ鳥乃、余計なことに巻き込んだしまった」

言いながら、シユウは私から離れ、肩を抱えたまま自分のDホイールに向かって歩き出す。

シユウのDホイールはすでに転倒しコース上にころがっていた。

「て、ちよつと待って。まだ試合続ける気？」

実況が慌てて手配したのだろう。観客たちは慌てて避難を開始し、入場ゲートからは救護班が担架を持ってこちらへ向かっていた。

「当たり前だろ。まだアタシのフェイバリットとダニエルの遺作どっちが強いのか雌雄を決してねえんだ」

言いながら、痛めた肩で、苦痛に顔を歪ませながらDホイールを起こし再び股がるシユウ。

「分かった」

私は覚悟を決め、再びDホイールのアクセルを踏む。

デュエル続行だ。

「《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》のモンスター効果！ このカードのリンク召喚に成功した場合、クリアウイングSモンスター以外のリンク素材の数まで、クリアウイング・ラピッドのリンク先にラピッド・ドラゴントークンを守備表示で特殊召喚する」

シユウが走行を開始したのを確認してから、私は効果の発動を宣言。

「《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》以外の素材の数は2体。よつてクリアウイング・ラピッドの上下のリンク先。つまり私の場とシユウの場それぞれにトークンを生成」

「アタシの場にもモンスターが？」

直後、私とシユウそれぞれの前に小型の《クリアウイング・ラピッ

ド・ドラゴン》のようなモンスターが出現。

「さらにクリアウイング・ラピッドのモンスター効果。1ターンに1度、このカードのリンク先のモンスターの数まで、フィールド上のモンスターを選択し、ターン終了時まで効果を無効化する。私が選択するのは《剣闘獣ヘラクレイノス》と《剣闘獣ノクシウス》！」

「だが、いま効果を無効にした所でこいつらには痛くも痒くもないぜ」「焦らないで頂戴、効果はまだ終わってないわ。《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》は、この効果を受けたモンスターの数×500ポイント攻撃力をアップする」

「なっ」

「リブート・プロト！」

クリアウイングは上空を舞い上がり、両の翼から光を撒き散らす。その光を浴びたモンスターは、一瞬その体がデータ化し、プログラムが真っ白に書き換えられる。

《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》 攻撃力2500↓3500
「これで私のモンスターはヘラクレイノスの攻撃力を上回った。バトル！ 《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》でヘラクレイノスを攻撃、イニシャライズ・タイピング！」

クリアウイングの体が半透明な球状になると、そこから《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》同様に飛翔からの急降下ダイブ攻撃でヘラクレイノスを破壊。

「ちつくしょう」

その光景を見たシユウはちよつとだけ悔しそうに。

シユウ L P I ↓ O

「負けちまったぜ」

けど、それ以上に満足そうにいうのだった。

結局、この試合が終わった時点で大会は一時中断、後日改めて再開されることが決定した。

モンスターが人間に攻撃して怪我人が出た。

そんな事実は、後から介入したNLTたちによって観客たちは「凶悪犯による銃撃事件」として記憶処理され、架空の人間が特捜課に

よって逮捕された。

ついでに私はNLTにお金を払い、記憶処理のついでに「私は大会に参加していない」ことにして貰った。結果、これまた架空の「二代目ダニエルがシュウを撃破、第二回戦を辞退した」形として大会の歴史に刻まれることになる。

——同日。現在時刻12:30

「ごめんね。シルフィってば『身元を騙して接触した人に会いたくない』って」

島津先生が心底すまなそうに手を合わせて謝るので、「気にしないでください。失態したのはこっちなんだから」

パスタをすすりながら、私は「むしろごめんなさい」と逆に謝った。現在、私たちは双庭姉妹を含めた4人で、ドリアが300円前後で食べれるイタリアンの某ファミレスで昼食を取っている。

「本当にねー。あそこで素直に《スピード・ワールド2》を使ったら最後まで身元騙せてたのに。沙樹ちゃん先輩なんだかんだで本当に熱くなってたんじゃないの?」

「う……」

飛奈ちゃんという言葉が鋭く刺さる。試合が終わりクールダウンしてから思い返すと、割と否定できないのだ。

なお、私の身元がバレた原因は、幻獣機やクリアウイングを出してしまったことに加え、フィアが狙撃に出た際、シュウが誤って何度か私を「鳥乃」と呼んでしまったのが原因である。

「ところで、もしかして今回は依頼未達成になるのでしょうか?」

双庭先輩が訊ねる。確かにシュウを優勝させないというシルフィの頼みは達成したが、島津先生の「依頼」は「シルフィを助けて欲しい」なのだから、シュウに勝てばいいというわけではない。何よりシルフィが接触を拒んだ以上失敗した可能性が高いのだ。

「もしそうなら、最近の沙樹ちゃん先輩のジnkスって相当ヤバイんじゃない。いよいよ本気で白樹神社でも頼ったほうがいいんじゃないの?」

と、飛奈ちゃんはいうも、先生はいった。

「そこは大丈夫。シルフィちゃん、いまごろシユウちゃんが運ばれた病院に向かっているはずだから」

「え?」

と、私と双庭先輩が訊き返すと。

「ほら、デュエル中にシユウちゃん、沙樹ちゃんを庇ったじゃない。それを見てやつと悪い人になったわけじゃないって気づいたみたい」

「じゃ、じゃあ」

「うん。後日経過をお知らせすることになるけりよ……けど」

あ、噛んだ。

「い、依頼したのは私だからやシルフィちゃんがみんなを拒絶しても、そこは今回の依頼とは関係にやいかりや大丈夫ゆ」

しかも羞恥を誤魔化そうと一氣にまくしたてようとしたけど、酷いレベルで噛み噛みだった。この先生、見た目が幼いだけじゃなくて、時おりすごい舌足らずになるのよね。

「えつと、これで先生?」

ああっ?! 飛奈ちゃん一番言っちゃいけないことを。

「むー」

先生は頬をぷつくら膨らまし、

「もういいもん、これでも先生はちゃんと先生だもん。あ、ワインをデザートで」

と、丁度近くを通った女性店員を捕まえ、先生はいうも。

「あの、失礼ですけど年齢を確認しても」

言われてしまった。

私は間に入って、

「あ、オーダー受け付けけないでオツケーだから。この人は確かに20歳以上だけど、ドライバーだから」

「えっ?」

20歳以上といわれ店員は固まりつつ、

「し、失礼しました。ごゆっくりどうぞ」

「ところで私もオーダーあるんだけどいい? あなたを朝までテイク

アウトで」

「え」

再び固まる店員。

今度は飛奈ちゃんが間に入って、

「あ、そのオーダーも受け付けられないでオツケーだから」

「しよ、承知致しました。ではごゆっくりどうぞ」

なんて、店員は逃げていく。

「ああ、行かないで」

「はいはいこれ落ち着いて」

と、先生に飲み物を渡され一口。

「つて、これビールじゃない」

「そうだけど？」

先生はそのコップで間接キスとか気にせず飲みだす。

「あの、大丈夫なのですか飲酒運転」

と、確認をとる双庭先輩に、

「大丈夫よ。ノンアルコールだもん」

先生はいった。この飲兵衛。

「あ、そうだそうだ沙樹ちゃん先輩。どうして私だけに三人目の協力者教えてくれなかったの？ 聞いたらお姉ちゃんは知ってたみたいじゃん。ねえねえどうして、それと結局三人目の協力者って誰なの？」

と、早口でまくしたて（こちらは嘔みなし）た飛奈ちゃんに、

「ん？ 三人目？ 目の前にいるけど？」

私がいうと、

「え？」

と飛奈ちゃん。

「ごめんね。私が三人目だったの」

先生がいった。

飛奈ちゃんは驚き、

「えーっ!? 鳳火ちゃんだったのくん？ もしかして沙樹ちゃん先輩、依頼人に直接協力させてたの？」

「まあ、形としてはそうなっちゃったわね。けど」

ちらつと先生に視線を向けると、

「飛奈ちゃんだったよね？ 気にしないで、私何度かハンドグドに外部協力してる立場だから」

「正確にはNLTや特捜課とも協力経験ある中立側だけど」

先生のカミングアウトに、私は補足を入れた。

「で、まあ言わなかったのは。悪いけど飛奈ちゃんに伝えると、どっかでボロ出しそうな気がしちゃったって話」

「ひどーい。酷いよ沙樹ちゃん先輩」

ふんすかする飛奈ちゃんに、

「飛奈落ち着いて。私だって飛奈だけ知ってて鳥乃さんに伝えられてないことあったんだから」

と、双庭先輩がこちらもどこか不満そうに。

「え？ そうなの？」

きよとんとする飛奈ちゃんに私は、

「ほら、昨日の帰り、つまり本戦前日の夜になばな行っただじやない。その時のことよ」

「え？ あのことお姉ちゃんに教えてなかったの？ どうして？ 教

えても良さそうだったじやない。むしろ共有しないと駄目そうな内容だったよあれ、ねえ」

再びきよとんとする飛奈ちゃん。

「双庭先輩には、情に左右されず任務に当たって欲しかったからね」

私たちの中で双庭先輩は一番落ち着いた性格だからね。実際、デュエル中も彼女の言葉があつたから、あの熱血正義なシユウ相手のペー

スに付き合えど飲まれずに済んだと思うし。

けど、そんな私の判断を前に姉妹は、

「それって、ねえ……」

「うん。信頼はされてると思う。けど」

「信用はされてないよね。私たちをそれなり上手く起用してるとは思

うけど、やっぱりいまの沙樹ちゃん先輩」

「え？」

予想外の不評に私は目を真ん丸くする。するとそこへ、
「やっぱ、いまのアンタの相方は藤稔以外無理ね」

と、後ろのテーブル席から声が。

「え?」

と、振り向くと、そこには大会参加者のボブ子が私たちの席に体を乗り出していた。

「ぼ、ボブ子?……さん?」

すると、

「ん、私のこと分らない? てか気づいてなかったの?」

と、よく分らない返事。

「私だよ、私だよ!!」

「だから分らないって」

と、私が返すと。ボブ子は顔……に張り付けていた特殊メイクのマスクを破り、

「私だよ!!!」

『高村司令……っ!?!』

私たち三人は同時に絶叫してしまった。

確かにマスク被って出場しようかとか言ってた気がするけど、まさかボブ子の正体が司令だったなんて。

「何? 双庭姉妹も気づいてなかったわけ?」

「頭身も違ってたんだから、気づくわけ」

双庭先輩はいい、続けて飛奈ちゃんが、

「もしかして、過去の大会もずっと司令ボブ子名義で」

「あ、いや。それはないわ」

司令はいった。

「少なくとも参加登録の時点では本物のボブ子だったわ。けど、そのボブ子が大会前に拉致されてさ。ちょうど犯人が董・木更ペアの任務のターゲットだったから、行方不明って騒がれない為にも救出されるまで私がボブ子のフリしてたのよ」

司令はいい、

「で。なばなで情報買った話、私の耳にも届いてないんだけど。それ

も弓美の耳に届かせない為？」

「いや。それもちよつとはあつたけど、いまスタジオ修羅場じゃない。だから」

私がいようと、「全く」と司令はため息一回、

「修羅場でもそういう報告は聞くわよ大事な事なんだから。で、せつかくだし聞かせて頂戴。アンタが情報から買ったもの」

「分かったわ」

そして、私はヴェーラから得た情報を司令に報告する。

「とりあえず、今回の大会には元々シユウは参加予定だったらしいわ。けど、優勝景品のネックレスがフィールを有する特殊なアクセサリーであることが発覚した為、今回ハイウインドが動いたって話よ」

「それを聞く限り、ハイウインドの主な活動内容はフィール・カードやフィールを持ったアイテムの回収に集中してる感じね」

「そうね。どつかで似たような活動してる人を知ってる気がするけど」

残念ながら該当者を思い出すことはできない。

「今回ハイウインドは優勝して正規のルートでネックレスを回収するシユウと、忍び込んでこっそりレプリカ、といってもフィールが入ってないだけの同じものとすり替えるアインスに分かれて行動してたらしいわ。で、フィーアは指示が出るまで何もするなど厳重注意を受けた上で待機」

「けど、鳥乃を殺ろうとしたわね。あれは独断？」

「独断ね」

私はドリンクバーのアイスコーヒを一気に飲み干す。

司令がいった。

「弓美。今度ウチの誰かがハイウインドと接触する機会がきた場合、狙撃を頼んでもいい？」

「つまり、処分人を殺せ……ですか」

「そ。依頼料は私が直接出すわ」

司令は煙草を口に啞え火をつける。なお、ここは禁煙席だ。

「アインスとシユウは見逃してもいいけど、処分人は速見を殺したわ。」

その上今回も鳥乃の殺害を企てたとあつては、今後も処分人はウチらを殺しにくると判断するしかない。悪いけどアインスやシユウには今回の決定を納得して貰うしかないわね」

そこへ私は。

「ところが。それをするとアインスやシユウは自爆テロも辞さない覚悟でハングドを壊滅しに来るって話よ」

「何？　つまり、ふたりはあの糞処分人が自分の命より大事と？」

「その通りよ」

私はいった。

「さっきまで話した内容は殆どおまけ。ヴェーラから買った情報の本題は別にあるのよ」

と、私は一拍おいて。

「司令、ちよつと厄介なことになったわ」

私はいった。

「ハイ ウィンドのメンバー。アインス・ハイ、シユトウルム・ハイヴアイテ、ファイア・ヴィルベルヴィント、そして現在組織にはいないけどシユウの腹違いの妹であるシルフィード・フォス。この四人は、同じドイツ人の男を父とし互いに認知のない腹違いの姉妹だった事が分かったわ」

その報告を聞いて、司令の顔が険しくなる。

「そもそも、アインスとシユウは姉妹捜索という目的の為に裏稼業に就いてたらしくてね、それでアインスは一足先に三人が姉妹である真実に辿り着いていたのよ。だから、彼女が組織に誘われた際、三人が入るならという条件をつけた。そして内ふたりが受けたことで三人一組のハイウィンドは発足された。アインスとシユウがハイウィンドで活動する目的は、四人が家族になること。そして、四人の居場所と揺るがない絆をつくること。そんな中、目の上のたんこぶとはいえ末っ子のファイアが、私たちハングドの手に殺されたら、きっと半狂乱になって私たちを潰しにくるわ。仮に理屈では報復されて当然と認識できたとしてもね。買った情報は以上よ」

伝え終えると司令は煙草の煙を吐き、

「事情は分かったわ。けど、私の考えは変わらないわ」と、返した。

「ならハングドの絆は家族未満だっていうの？ 人それぞれだと思うけど私は違うわ。これ以上ウチの仲間が犠牲になる位なら、アインスもシユウも三人纏めて心の臓止めてやる。これはアンタたち三人を危険から守る為でもあるわ。その位しないと、あの処分人からこれ以上の犠牲なしではいられないって言ってるの、分かる？」

司令の言いたいことは凄く伝わった。でも、

「なら、少し時間を貰えない？」

私は少し視線を落とすという。

「その、私も両親の愛って全く知らず育ってきて、鈴音さんや司令と出会って初めて親の愛みたいなの知ったよ。だから、家族が恋しいって何となく分かるのよ。で、アインスとシユウはやつと手の届く所にそれがきたんでしょ？ 私にとってのハングドみたいなのが」

「鳥乃……」

「それにアインスはハイウインドは私の味方といった。なら、それをちゃんと証明して貰おうって話よ。フィーアの件も含めてね。その期間を頂戴」

「分かった」

うなづく司令。しかし、だからといって無条件で首を縦に振るわけではなく。

「なら、期間はこれで決めるわ」

そういつて出したのは、赤と白それぞれの色の六面ダイス。

「いまから私はこのダイスを振るわ。赤は1が時間、2・3が日、4・5が週で、6が月よ。で、そこに白のダイスで出た数字を適用する。つまり例えば6ゾロが出れば6か月猶予を与え、逆に1ゾロなら猶予は1時間になるわ」

そうでなくても、赤のダイスで1が出た時点で実質猶予は与えないということになってしまう。けど、私はそれを受けるしかない。

「分かったわ」

私がいうと、

「ちなみに期間を超えてファイア殺害の決定に逆らうようなら、鳥乃は悪いけどハングドをさよならして貰う。いいわね？」

私はそれにもうなずく。

「なら、運命のダイスロールよ」

司令がその場で私たちのテーブルにダイスを投げた。その結果は。

: d666

DiceBot : (D66) ↓ 46

(今回のダイス判定は実際にどどんとふのオンラインダイス機能を使わせて頂きました)

「6週間、つまり1か月半が猶予よ」

不満そうに、司令はいった。

MISSION17―かすが店長の華麗なる昼時

私の名前は鳥乃トリノ 沙樹サキ。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「大浴場行くたびに思うんだけど。沙樹ちゃんは男湯に行くべきだよね?」

開幕の一言。まさかの梓に奪われました。

「ちよつとどうしてよ梓。私ちゃんと性別女性よ? 女性の敵生えてないって話よ?」

私は即、反論するも、

「けど女性の裸見る目は男の子寄りだよね?」

「ちよつ待つ、梓酷い」

私の目線が男目線と同じって。……最近、ちよつとだけそんな予感
はしてるけど。

「だから、全国の女の子は沙樹ちゃんを男湯に送ったほうが安全だと思
うなー」

「いやちよつと待ってよ梓。それしたら私のほうが身の危険だから!
汚い男のオッサン共にエロ同人みたいなことをされ」

「たまには沙樹ちゃんもセクハラされる側の気持ち知らないかね」
なんて笑顔でタブレットからフォトファイルを見せる梓。そこ
は、先日飛奈ちゃんが撮って木更ちゃんに渡した、BARなばなでや
り取りしたメモ。なお、この件のハンマー制裁はすでに終わってる。

あれから数日。

今週の週末は祝日と重なって三連休。その初日である今日、私と梓
は木更ちゃんからの誘いで旅行に同伴させて貰うことになっていた。
曰く、親戚が木更ちゃんに会いに来るついでに、名小屋で観光がてら
2泊3日の旅行をするのだそう。その為、地元民である私たちに案内
役を頼みたいのだとか。

思えば木更ちゃんも去年まではTOKYOだったのだ。この機に
観光したい場所も色々あるだろう。私と梓は快く引き受けることに
したのだ。木更ちゃんサイドからの要望で1泊だけ同じ旅館に部屋

をとって。

なお、これらの宿泊費は全部木更ちゃん持ち。どうやら任務の後方支援だけじゃなく、今日の為にスタジオのアシスタントや給仕で結構稼いでいたらしい。私は自分の分は自分でといたんだけど、押し切られてしまった。曰く「先輩に自腹で払わせると、自己責任いいことに3割増に好き勝手しそうですから」って。私の特性をよく分かかってらっしゃる。

確かに木更ちゃん名義で泊まるなら、もし問題起こせば親戚もみんな旅館から退去させられかねないもんね。何かするなら気を付けてナニかしないと。

まあ、そんなわけで現在時刻午前10:00。

私たちは駅の外で待っていたのだけど。

「あ、沙樹ちゃん。きたみたいだよー」

梓がいった。見ると、総勢10名の女の子がぞろぞろとこちらに向かってくるのが見えた。しかも、その中心にいるのが木更ちゃんなわけ。

(え? 人数多くない?)

なんていう私の心の中の突っ込みを余所に、

「徳光先輩、鳥乃先輩おはようございます」

と、木更ちゃんが私たちに手を振る。今日の彼女は、シフォンブラウスとロングスカートの上に白のレースガウンを羽織っており、露出は少なめなのに透け感がエロく、しかも爽やかで可憐な雰囲気纏っている。

「おはよう木更ちゃん」

「おはよう藤稔さん」

私たちはそれぞれ木更ちゃんに手を振って返す。みると、梓も彼女が連れてきた人数に若干驚いているのが見えた。なお、今日の梓はウールのセーターの上にジージャン、そして黒のミニスカートと、いつもより若干ストリート系に仕上がっている。

「どうされましたか?」

そんな私たちに気づき、きよとんとする木更ちゃん。すると、親戚

側からひとり、

「恐らく、私たちの人数に驚いてるのだろう。だから言ったじゃないか木更姉さん。こちらの人数は伝えておけて」

と、木更ちゃんに注意し、

「姉が失礼した」

って、私たちに向けて頭を下げる。見た目からして恐らく小学生だろうか。髪こそストレートロングに伸ばしてるが、雰囲気はむしろ威風堂々としており。実際、しつかり者の御様子。

「ああ、申し遅れた。私は」

と、その子が自己紹介をしようとした所、髪を二つ結びにした元気な子が、その肩に腕をまわし、

「まあまあ。堅苦しいことは抜きにして早く自己紹介に入ろうよ」

「まさにいま名乗ろうとした所だ」

「あ、そういえば、自己紹介まだだったね」

と、反応したのは梓だ。

「初めまして、藤稔さんのお友達で2年の徳光 梓です」

「同じく2年の鳥乃 沙樹よ」

私と梓がそれぞれ名乗ると、

「じゃあ、年齢高い順で名乗ろっ」

左右非対称アシシメトリでショート髪の一見男の子みたいな子がいった。彼女たちはそれぞれうなずき合って、

「まずは……私」

と、読んでた本をしおり挟んで閉じ、もみあげの長いボブカットの子が。

「中学3年、藤稔 冥弥……です」

と、静かに名乗る。第一印象は、物静かで表情の少ない子って所か。「続けて同じく中学3年。私が神、藤稔 天神ゼウスである。畏敬を持って気軽にゼウスと呼んでくれたまえ。はっはっはー」

で、ふたり目にして早速キャラの濃いアホっぽい子が。木更ちゃんより更に長い髪を後ろでひとつに縛り、なんか馬鹿笑いしている。

「次は私ですね。中学2年の藤稔 深海ミカといいます」

今度は、長い髪にお淑やかな風貌の、木更ちゃんをそのまま一回り幼くした感じの子が挨拶する。このまま残りも普通の子ならいいんだけど。

「……………え、あー、あたしの番？　あたしは中学2年の藤稔地津^{ちづ}。じゃ、いまモンハンの真つ最中だから後でね」

続いて名乗ったのは、調髪を面倒がって伸ばしたような痛みつぱなしのロング髪に眼鏡、さらにダボダボの服でブラの肩紐見えちゃってるヲタっぽい子。しかもゲームに夢中でこちらへはちらつと一回見ただけというね。まあ、ゼウスちゃんみたいにキャラの濃い子が増えるよりずっといいけど。

「おー次はわたしー？　わたしはねー、中学1年の藤稔　メール。よろしくねー」

続いてはポニーテール髪のゆるふわ娘。中1とはいうが、パツと見10人の中でも一際幼そうな子であり、舌足らずで伸びた口調が耳に甘く響く。

「ボクは彩土姫、小6の藤稔　彩土姫^{さいつぎ}さ。よろしくつ」

そして、メールちゃんと正反対にはきはきと元気よく名乗ったのは、さっきの髪を二つ結びにした元気な子。

「同じく小6。藤稔　水姫^{みづき}だよ、よろしくね」

続けて左右非対称^{アシメトリイ}のショート髪の男の子のような子が挨拶する。短パン姿なのもあって見た目は完全にボーイッシュだけど、挨拶から受ける印象は程よく元気で程よく大人しく、雰囲気も程よく中性的と親戚組の中でトップクラスにクセがない。

そんな水姫ちゃんに続けて自己紹介するのは、例の威風堂々とした感じの子。

「先ほどは失礼した。改めて私は小5の藤稔　火竜^{ナীগ}。火竜と書いてナーガだ。改めて今日はよろしく頼む」

まさかのキラキラネームだった。しかも、これだけ大人びてるのに親戚組の中で特に年少組だとは。そして最後に、

「小5、藤稔　金玖^{きく}だ。……………火竜^{ナীগ}とは双子の姉妹にあたる」

と、見た目はナーガちゃんと殆ど同じの、寡黙な子が締める。

そこに木更ちゃんを含め総勢10名。木更ちゃんのキャラが薄くみえるほど全員キャラが立っていて、濃い自己紹介だった。

「え、えつと……みんな凄く元気だね」

梓は藤稔一族に完全に圧倒されてる模様だった。で、その隣で私は別のシヨックで全身をふるふる震わせる。

「木更ちゃん」

「はい、何ですか?」

「全員中学生以下じゃない!」

「ふふつ、そうですけど?」

と、微笑む木更ちゃん。ああっ! その顔確信犯だ。わざとその事実を教えなかったって話ねこの子。

「沙樹ちゃん。何を期待してたの?」

あ、梓がおもむろにハンマーを持ち出した。

「え、えつと梓」

手振りで弁解しようとした所へ、木更ちゃんが、

「あ、徳光先輩。できれば今日それは二人きりのときをお願いしてもよろしいでしょうか? まだ小学生の子も見ていますから」

「え、あ」

言われ、ハツとなった梓。即座にハンマーを引っ込め、

「ごめんね藤稔さん」

と。まさか、ハンマーキャンセルが実現する日がくるなんて。グツジヨブ親戚たち。

「じゃあ沙樹ちゃん。ちょっとコンビニ行こっか」

キャンセルじゃなかった。私の天使、露骨にふたりきりになろうとしている。堂々とハンマーしようとしている。

が、そこへ今度は。

「コンビニ。あーそうだ、あたしも用事あるんだった。一緒についてっいいい?」

と、ゲームしたまま地津ちゃんがいった。

「え、あうん。いいけど」

今度こそハンマーキャンセルを喰らい、改めて動揺する梓。

「でしたら、みんなで行きましようか」

と、木更ちゃんがいい、12人総出でコンビニに向かうことに。

ちょうど駅前なのでコンビニなんてすぐ近くにあり、少し前まで
○ークルKだったフ○ミマに入ると、地津ちゃんは真つ先にポイント
カードのコーナーへ向かい、眼鏡をクイッと、

「諭吉1枚をリリースしてポイントカードを召喚。旅行先で買ったポ
イント。これならFG○のピックアップガチャ大勝利ある」

「いや、諭吉1枚をリリースしてる時点で負けでしょ」

私はつい返してしまうも、地津ちゃんの耳には届いてないようでホ
クホク顔でレジへ。

(……まあいっか)

私には止める権利もないし、何より子供の矯正なんて絶対面倒にな
る。

「梓は何か買……いやなんでもないわ気にしないで」
「？」

きよとんと首をかしげる梓。その買い物カゴには、ペットボトルの
お茶に、サンドイッチ、菓子パン、おにぎり、パック寿司、カップサ
ラダ、デザートのスイーツまで。もしかしてこれ朝食、いや間食なの
かな？

私は見なかったことにした。

「木更ちゃんは……いやなんでもないわ気にしないで」
「？」

きよとんと首をかしげる木更ちゃん。その買い物カゴには、ありつ
たけのK a s u g a y a カップ麺。
私はこれも見なかったことにした。

とりあえず私も何か買おう。そう思ってペットボトルのドリンク
コーナーに足を運んだ所、地津ちゃん含めた9人がたむろしてるのが
見えた。

「どうしたの？」

訊ねてみると、

「あー。沙樹おねーちゃん」

と、メールちゃんがほわほわ笑顔を見せ、続けてナーガちゃんが、「鳥乃さんか。いまみんなで何のジュースを買うか考えてる所だ。2〜3本買ってみんなで回し飲みしようって話になって」
「なるほどね」

仲いいんだなあ、この子たち。親戚つていつてたから、それぞれ家や親が違つてたりするはずなのに。

私は、そんな彼女たちの姿にアインスとシユウが理想とする「家族の姿」があるような気がした。

彼女たちは相談した上、コーラ、スポーツドリンク、お茶を1本ずつ買った。まわし飲みには木更ちゃんも参加していた。

しかし、ほっこりできたのはここまでだった。

名古屋城では金玖ちゃんが。

「これが噂に聞く金のシャチホコか。……貴様の閃光の光、とくと見せて貰った」

と、まさかの「寡黙な私かっこいい」な厨二病だと発覚し、さらに名所への移動中ア○メイトが見えると冥弥ちゃんが立ち寄りたいたい強く希望しだし、

「あった。……ミスト亭のBL本新刊。さすが地元、置いてあるのが早い」

と、観賞用、保存用、布教用の3冊購入。なおミスト亭というのはスタジオミストつまりハンドの表事業の同人サークルとしての名義だ。あそこ、一般向け成年向け女性向け全部に手を出してるのよね。

さらに冥弥ちゃんは自宅近辺や秋葉原で揃えきれなかったというミスト亭のBL同人を沢山購入し、表情ひとつ変えないまま男と男の恋愛を熱く語る腐女子っぷりをみせつける。

そして、極めつけは昼食時。

「じゃ、そろそろ12時だけどお昼どうする？ 名小屋といえば名小屋飯ってくらい他所にない独特なものが沢山あるけど」

私が提案した所、木更ちゃん含む藤稔10名は口を揃えて、

『当然、かすがさ……K a s u g a y a 本店!!』

と。誰ひとり欠けることなくかすが店長狂いと発覚。そんなわけで、12人で店に入った所。

「いらっしやいま……ぎゃあああああぶくぶくぶくぶく」

即座に泡吹いて倒れかけるかすが店長の姿。そこからはもう、地獄絵図だったわけ。

「わわっと、大丈夫かすが様」「かすが様、お仕事そんなに大変だったの?」

と、驚き慌てて彼を抱える彩土姫ちゃんと水姫ちゃん。このふたりは(しつかり様付けな以外)まだマトモだったんだけど。

「会いたかった……会いたかったぞ、かすが様!! 乙女座の私には、センチメンタリズムな運命を感じずにはいられない」

ナーガちゃんが突然グ○ハム化し、

「大丈夫ですか、かすが様? 少し奥で休んでは如何ですか? そして私と子作りしましょう」

「何いってんだミカア……」

深海ちゃんが、どさくさに紛れ木更ちゃんよりぶつ飛んだことをいい、それを地津ちゃんが突っ込む。

「そ、そんな。かすが様私たち10人全員孕ませるだなんて、きやーっ! かすが様、新婚旅行はどこにしましょう? あ、その前に挙式ですね。うふふ、かすが様そんな目で見ないでも分かりま

す。早くウエディングドレス姿の私たち10人を踊り食いたいですよね? 他の方だったらともかく、妹たちとなら私は」

そんな深海ちゃんの影響を受け、木更ちゃんがいつもの暴走モードをしていると、

「それは駄目……です」

と、冥弥ちゃんが止める……かと思いきや、

「かすが様は……後ろも前も霞谷のもの。……ミスト亭の新刊にも描いてあります」

なんて別の意味で恐ろしい願望を吐露。なお霞谷とは表向き特捜課に席を置いたNLT幹部のひとりだったはず。もちろんノンケの男性で、かすが店長との繋がりも、私の知る限りではこの店の常連と

いう程度。

「ふっふっふ、皆が争つてる間にかすが様の社会の窓を開けて神のひとり勝ちである。さすが神、天才的なのだー」

なんて、どさくさにセクハラに及ぼうとするゼウスちゃんを、

「おら」

と、金玖ちゃんが蹴飛ばし、

「クツ……沈まれ我が脚よ。いまはまだ、かすが様を踏んで愉しむときではない」

とかのたまいながら、代用にゼウスちゃんを踏んづける。

「こらー金玖！ この神を踏むは何のつもりなのだー」

「……ハッ！ ち、違う。脚が勝手に」

「さつき思いつきり『おら』と言つて……」

「フツ、気付かれたなら仕方ない！ かすが様を見ながら神を踏んづけ、かすが様を踏んづけたつもりになろう」

「つもりになるなー！ しかも、すでにやってるではないか！ー
ーい、あつ」

うわ、この子妹に踏まれて感じてらっしやる。

「もー。みんなー。他のお客様にめーわくだから、お店で騒いだらメツなのー」

そんな中、精神年齢が一番幼そうなメールちゃんが、頬をぷくーと膨らませてみんなを止めようとする。意外にも出来た子だ。

「あ、あがが……来るな、来るなあアアア」

なのに、かすが店長は何故かメールちゃんを一番怖がつてる様子。一体店長とメールちゃんの間は何が？

「金玖やめるのだ。嫌……かすが様の前なのに、神なのに感じちゃうのであくビクンビクン」

あ、ゼウスちゃんイツた。うわあ。

「フツ……またつまらぬものを踏んでしまった。して、かすが様よ。私の前で腰を抜かすとは。……誘っているのか？ この私に踏まれるのを」

金玖ちゃんも変なポーズ取ってないで。ていうか、誘ってないか

ら。誰かこの厨二病を止めて！ あ、うんメールちゃんありがとう。けどあなたは厨二病止めるより店長から離れてあげて。って、そこ深海ちゃんこそぞと店長の股間に跨ろうとしないで、待った冥弥ちゃん店長の耳元でBL同人誌朗読しないでいま店長逃げられないから、そして木更ちゃん早く妄想から戻ってきて、ああもう……いいや。

「とりあえず座ろっか、梓」

「あ、うん。そうだね」

私と梓は、彼女たちを止めるのを放棄しテーブル席に对面で座る。すると、

「あ、ボクたちも席一緒にいい？」

と、水姫ちゃん。その隣には彩土姫ちゃんも一緒だ。

「いいよー」

梓がいうと。

「サンキュー、じゃあボクこっち」

と、彩土姫ちゃんが私の隣に座り、

「ボクはこっち座るね」

水姫ちゃんは梓の隣に座り、メニュー表をとって「はい」と彩土姫ちゃんに。今更だけどふたりともボクっ娘だったのね。

しかし、こうしてふたりを見比べてみると、見た目こそ完全に水姫ちゃんのほうがボーイッシュなのだけど、言動は彩土姫ちゃんのほうが男っぽいのがよく分かる。

こうして私たちは、現実逃避しつつ、まだ軽度なふたりと一緒にラーメンを堪能し――。

「あ、かすが様？ あたし今日のためにかすが様の絵を描いたんだ。見てよ見てよ」

と、地津ちゃんがおもむろにデュエルディスクを起動し、カードを1枚読み込ませる。すると、飲食店の中に突如として浮かび上がる「裸の上から童貞を殺すセーター1枚のかすが店長がセクシーポーズを決める」拡大ソリッドビジョン。

『おげええええええええ』

突如、店中からどんぶりに胃の中のものを吐き出す客多数。もちろん

ん、その中には私に含まれてる。

「おおおつ、可愛いよ！かすが様」「ねえ、ちづちづ。これどうやって作ったの？」

一方、同席してる彩土姫ちゃん水姫ちゃんからは大好評の模様。

「大変だったぜー。あたしが元の絵を描いて」

地津ちゃんがいい、

「私が……それを3Dに加工して」

冥弥ちゃんがいい、

「神が元のカードのイラストデータと差し替えたのだ。さすがは神、天才なのであーる」

天災ゼウスがアへ顔のまま高笑い。

デュエルディスクでカードを確認してみると、そこにはイラストだけ裸セーターかすが様で《薄幸の美少女》のカード名とテキストが。薄幸なのは間違いないのがまた酷い。

「も、もう金はいい。全員早く帰ってくれー」

心がポキポキに折れ、もはや半泣きに入りかけてるかすが様。しかし、悪夢はまだまだ続く。

「そーっと」「そーっと」

木更ちゃんと深海ちゃんがソリッドビジョンを下から覗き込もうとし、

「みつともないからやめろ姉さんたち。……しかし、これは。抱きしめたいな、かすが様」

そんなふたりを制止するナーガちゃんも末期症状。息も荒いし完全に変態の仲間入り。

「撮っていい？ ねえ、撮っちゃってもいいーい？」

止める側だったメールちゃんも、そんな事いい始めちゃうし。

先に食べ終わった彩土姫ちゃんが、ソリッドビジョンの股間部で割り箸をブンブン振って、

「さあ、飲み込めるなら飲み込んでみせろ！ このかすがのゾーク・ネクロファアデス♫をなア!!!」

と、かすが店長の口真似で恐らく「僕のエクスカリバー」を魔改造

したと思われる台詞をいい。

「やめろオー！」

ナーガちゃんが顔真っ赤になって注意する。しかし、そこへ当然のように木更ちゃんと深海ちゃんは。

「悦んで！」

「悦ぶな木更姉さん！」

「かすが様と目指す場所へ行けるんだったら、何だって犯ってやります」

「ミカア!!」

ツッコミ役のナーガちゃん、二重の意味でそろそろ倒れそう。ところで深海ちゃん、何気にガ○ダム之三〇月ネタもするのね。

「全く」

金玖ちゃんがいった。

「煩くて敵わん。……これだから、かすが様を前にした姉さんたちは」

ソリッドビジョンのかすが様の股間部に体を潜り込ませながら。

「何やってるの？ 金玖ちゃん」

水姫ちゃんが訊くと、金玖ちゃんは。

「……臭いは無臭だった」

ついにかすが様が泣き崩れた。

午後からは、かつて某ゲームで聖地といわれた舞鶴公園に行ったり、大須商店街で買い食いしたりし、一旦みんなの荷物をとりに木更ちゃんの家に戻ってから、本日泊まる旅館に到着。時刻は大体16:30過ぎ。

玄関前には女将さんや仲居さんが待機しており、私たちが近づくと「いらっしやいませ。ようこそお越し下さいました」

と、和服姿でお出迎え。

とても綺麗で美しかったので、私は早速挨拶しようかと思っただけど、

「沙樹ちゃん?」「先輩?」

と、梓と木更ちゃんが、それ以上に綺麗で美しい笑顔で言うのだから、私は苦笑いしつつ押し黙る。

旅行バッグはみんな各自手持ちだった為、仲居さんのひとりが奥から台車を持ってきて、

「お荷物をお持ちいたしましたよう」

と、みんなから確認を取って、旅行バッグを積み上げていく。

「さあ、どうぞこちらへ」

女将さんに案内され、私たちは中へ。

外観こそ和風だったものの、内装は若干洋風で広々としており、ロビーにはソファとテーブルが幾つか設置され、奥には売店や喫茶ルームなどが見える。

「徳光先輩、鳥乃先輩。受付で少し席を外しますので、妹たちをお願いしますか？」

木更ちゃんがフロントに向かい、チエックインを済ませる間、私たちはソファに座って小休憩。仲居さん曰く、簡単な飲み物をサービスで出してくれるそうで、皆で点呼を取り、私、梓、冥弥ちゃん、深海ちゃんはコーヒー、ナーガちゃんと金玖ちゃんの双子コンビは紅茶、地津ちゃんと水姫ちゃんは緑茶、残りのゼウスちゃん、彩土姫ちゃん、メールちゃんがオレンジジュースを頂いた。

水姫ちゃんがオレンジジュースを頼まなかったのが少々意外だったのと、ナーガちゃんが年齢に見合わぬ優雅さで紅茶を飲むのに反し、双子の妹である金玖ちゃんが四苦八苦しながら必死に優雅なフリして紅茶を飲む姿が印象的だった。結局飲み切れず戻ってきた木更ちゃんが金玖ちゃんの分を代わりに飲むというオチ付きで。

「藤稔様ですね。お待たせ致しました。お部屋にご案内致します」

木更ちゃんが紅茶を飲み終わるのを待っていたのだろう。ちょうどいい頃合いで女将さんがやってきて、

「皆様のお部屋は203号室、そして大部屋の212号室でございます」

と、途中浴場、売店等の施設を紹介して貰いつつ、私たちは客室へと案内される。

最初に到着したのは203号室。私と梓はこの部屋で泊まることになっており、一旦荷物を置いてから木更ちゃんたちが泊まる212

号室へと一緒に向かった。

そこで、部屋で女将さんより幾つか説明を受けてから、18:00の夕食まで自由時間。

私と梓は一旦木更ちゃんたちと別れ部屋に戻り、

「さてと、じゃ、早速温泉って話よね」

と、私が伸びしながら言った所、

「あ。沙樹ちゃんは11時までには男湯に入ってたね」

なんて梓に言われてしまう。

「えっ？　なんでよ、どうして」

しかも男湯？　まさかの冒頭ここに繋がるの？

「だって沙樹ちゃん。女湯に入ったら手当たり次第色んな人をエロい目で見たりセクハラしたりするでしょ」

「大丈夫よ。気づかれずに犯るわ」

「……」

あ、梓がにっこり笑顔でハンマーIN。

「それに、木更ちゃんの妹さんたちも襲いかねないからねー。特に冥弥ちゃん、深海ちゃん、地津ちゃん辺りを」

梓、さりげなく中学生組からゼウスちゃんを外した。

「全員中学生以下じゃない。私がガキは襲わないの知ってるでしょ」

「えっとシルフィちゃんだっけ？」

「襲ってないから！　あれも襲ってないし中学生と分かってからそういう素振りひとつしてないって話だから！」

梓、私の大失態を未だに根強く印象残してるみたい。だけど、その件に限っては結果的に中学生に発情したのは事実だから、これ以上の弁解はできない。

年上に見える中学二年生とか、地雷もいい所すぎない？

「そんなわけだから、沙樹ちゃんしばらくの間留守番お願いね」

と、備え付けの浴衣やタオル等を持って梓は行ってしまった。ああ

……ここで着替える気もないのね。

……。

さて、仕事の時間だ。

私はデュエルディスクのタブレットを起動し、木更ちゃんに「私の部屋にきて」とメールを送信。すると10秒も経つことなく、

「先輩、私です」

と、木更ちゃんの声。恐らくメールを見るまでなく向かってたのだろう。部屋を開けると、

「徳光先輩は？」

「先に温泉行っちゃった。で、私お留守番って話」

「そうでしたか、では失礼致します」

と、小声で会話し木更ちゃんが入ってきた。なお、木更ちゃんは羽織ってた上着のレースだけ部屋に置いてきたらしい。残念ながら浴衣姿ではなかった。

「で、今回の依頼だけど。木更ちゃん再確認と現在の状況お願いできる？」

「はい」

木更ちゃんはタブレットを開き、

「今回の依頼人はNLTの外部協力者です。T O k y o在住の方で、現地ではロウ属性の個人同業者をしている傍ら、互いに任務が相手側の地域まで及んだ時に現地協力をしあう間柄のようです」

「(口)でNLT、ね」

正直言つて、気が重い。

何故なら私はユニオン・ジャックの依頼の際に、知らなかったとはいえ結果的ハイウインド越しに敵対している。それで懲罰はないだろうし、それがこの裏社会の常だとはいえ、事と次第によっては完全に敵対しかねない。

「安心してください、先輩。私が最悪の結果にはさせませんから」

心情を察し、木更ちゃんがいつてくれる。実際、クラスメイトに機械的と誤解されるほどの「理想や希望に沿って」「目的に近づけるか考えて動く」という彼女の一面は、いまの私には頼らざるをえない大きな力だ。

「話を続けますね」

木更ちゃんはいった。

「依頼人は今日から3日間ほどこちらに滞在する予定で、しかも偶然にも同じ旅館に宿泊することが分かっています」

「今日、連絡は？」

「取れています。予定通りだそうで、すでにチェックイン済のはずですよ」

良かった。

「なら木更ちゃん、この部屋に依頼人を呼んで？」

現在梓は温泉に向かっているはずなので、しばらくこつちには戻って来ない。そして、この間は私たちが誰かと接触しても彼女の目に届かない貴重な時間である。

それに、部屋はオートロック式。キーを持たずに梓は出て行ったので、もし、交渉中に戻ってきていても依頼人を《ワーム・ホール》で帰してから梓を入れればいい。

「分かりました」

木更ちゃんも、ここを逃すと案外タイミングがないのを分かったのだろう。既にタブレットを「後は送信をクリックするだけ」状態にしていたのが伺えた。さすが、仕事が早い。

「返事がきました。いま向かうそうです」

それから待つこと数分、誰かが部屋の外から戸を叩くのが聞こえた。

「来たみたいですね」

と、木更ちゃん。

「そうね」

私はデュエルディスクを装着し、もし依頼が罫でも対処できるようにしてから、私は戸を開ける。

しかし直後、

「あれ？」

と、私は声を出していた。そこに立っていたのは依頼人ではなくナーガちゃんだったのだから。しかし、不思議なことに訊ねてきた彼女自身もなんだか驚いてる様子。

「どうしたの、ナーガちゃん？」

「あ、いや。鳥乃さんこそどうしてここに」
変なことを聞くナーガちゃん。

「いや、ここ私の客室だけだ」

「え？」

「もしかして、部屋間違えた？」

「いや、そんなはずは。……まさか」

何か思い至ったようで、ナーガちゃんはぼそつと呟く。

「ドラゴン・キャノン」

「っ」

その合言葉は。

「通じたようだな。なら、そういう事と受け取って入らせて貰うぞ」

「え、ちよつ、ナーガちゃん？」

動揺している私に、ナーガちゃんは「まだ分からないのか」とため息一回に、

「私が依頼人のNLT外部協力者だ」

と、いったのだった。

奥に進むと、当然木更ちゃんも目を真ん丸にして驚いてるわけで。

「嘘、ナーガちゃんが？」

「まさか木更姉さんまでハンドドだとは。お互い宿泊先が被るわけだ」

と、ナーガちゃんは適当な座布団にあぐらをかく。

「けど、納得といえば納得ですね」

木更ちゃんがいうので、

「なぜ？」

と、訊ねると。

「姉をさらったオールバックの男が名小屋にいる。その情報を持ってきたのがナーガちゃんだったんです」

「ああ」

なるほど。するとナーガちゃんが、

「その情報はNLTから得たものではないんだけどな。むしろ、その情報があったから私もNLTと接触したのだが」

「なら、その情報はどこから」

「私が現地で個人の裏稼業してるのは調べついてるんだらう？ その裏稼業こそ、行方不明の姉さんを捜索する為に始めたのだからな」

ああ、今度こそなるほど。

つてことは、年齢こそ私のほうが5つか6つ年上だけど、業界人としてはナーガちゃんのほうが先輩って可能性もありえるわけだ。始めた時期まで聞く気はないけど。

「さてと、姉さん？ 時間もないことだから。早速本題に入っているか？」

と、木更ちゃんに確認を取るナーガちゃん。

「お願いします」

「分かった。といつても、私からの依頼は件のオールバックの男への調査だ」

ナーガちゃんはいった。

「現在、私はNLTと連携して調査した結果、奴が名小屋でフィール・ハンターズとして活動してる所までは掴んでいる。が、そこから先はさっぱり。いまの私が持つ情報網では限界だと思ってな、パイプを広げたいと思い今回依頼に踏み切らせて貰ったわけだ」

それは、ぶつちやけ言うと私たちも同じだったりする。もつとも、情報屋を頼れば色々分かるのかもしれないけど、現状だと組織の金で買うわけにもいかないなので実行してない。木更ちゃんサイドが絡んでくるまで、そこまで深追いする気もなかったしね。

情報屋の件は木更ちゃんにも伝えてあるので、ちようど二人で溜めている所へ今回の依頼が舞い込んできた形だった。

「期限は無制限、報酬は情報の提供に応じてその都度相応の金額を払う形を希望したい。ただ、私に提供された情報はまずNLTにも流れると思ってくれ。そんな所でどうだろうか？」

「その資金はどこから？」

木更ちゃんが訊ねると、

「大半は私の自腹で払う。それだけの金銭の用意はある。加えて、NLTも一部負担してくれるそうだ」

なるほど。しかし、そうすると金を貰う以上仮にハングドが不利になる情報が入ったとしても、NLTに流れることを拒否できないわけであって。これは考えないといけない。

「でしたら、私は受けてもいいと思います」

しかし、木更ちゃんはいった。

「調査に費用がかかった情報はその分多めに請求すればいいですし、NLTに伝えたくない情報は依頼の外で無償提供してもいいんですよ?。」

「ちよつと木更ちゃん。その言い分がNLTに知られたら」

「大丈夫ですよ」

木更ちゃんは微笑んで、

「恐らくNLTも外部協力程度の繋がりな以上、すべての情報をナーガちゃんに伝えてると思えません。それに、逆にナーガちゃんも無償提供された情報ならNLTに対し同様の黙秘権もあるはずですから。何より、今回は一応ナーガちゃん個人の依頼と分かった以上、NLTに対し不必要にごまをする必要もありませんよね?。」

「ま、まあ」

確かにそうなのだろうけど。だからといって、曲がりなりにもNLTの息のかかった人間の前でここまで堂々というのも。

「勿論ナーガちゃんがチクるようでしたら、組織の人間としても姉としても、今後の妹への対応を考えなくてははいけませんけど」

最近、木更ちゃんが本当に腹黒いんじゃないかと思えてきた。

「分かったよ姉さん。NLTにはプライベートのくだりは省いた上で交渉成立と伝えておくよ」

「ありがとうございます」

「別にいいさ。私が入りゃれば想定よりお互いの利のある契約に収まったんだ。何より、勝手知る仲だからできる交渉なんだろう?。」

「ナーガちゃん、あなた本当に小学生」

その大人すぎる対応に、私はつい聞いてしまう。ナーガちゃんはフツと笑い、

「あの親戚たちの輪でストップパーしていると自然とこうなるさ。この木

更姉さんだつて暴走する側なんだから、私が頑張らないとストッパー不在だ」

と、苦勞人過ぎる台詞を吐く。

「さて。私からの依頼はこれで以上のはずだったのだが、担当が身内と知るなら、実はもうひとつ頼みたいことが」

ナーガちゃんが続いての要件に入り始める。そこへ、

「沙樹ちゃん」

と、部屋の外から梓の声。

「タイムリミットね」

私は小声でいい、相手がナーガちゃんだったので《ワーム・ホール》は使わないまま、戸を開け梓を中に入れる。

梓は笑顔で、

「ただいまー。いい湯だったよ。あれ、藤稔さんに、ナーガちゃん？」

「おかえりなさい徳光先輩。お邪魔してます」

木更ちゃんがいい、続けてナーガちゃんも、

「売店を見てたらみんな温泉に向かってしまつて、部屋に入れず一時こつちにいさせて貰つてたんだ」

と、それらしい言い訳をしていた。

その後、ふたりで温泉に向かった木更ちゃんより、メールで「続きは食後になりました」と報告を受けた。

夕食は、木更ちゃんたちの大部屋で懐石料理を食べた。

おしながきや説明の限りだと、どれも地元食材を使った料理で、かつ私たちにとつても普段口にした美味いものばかり。軽く自分たちの知らない名小屋の一面を再発見した気分になる。

「しっかし。さすが店長が絡まないとみんな割と正常なのね」

と、料理に舌鼓を打ちながら私は改めて周囲を見渡す。

さすがにこの時間になると私を含めみんな浴衣姿になっており、胸部控えめの木更ちゃんと胸部の凄い梓が、相反しつつどちらも可憐さエロさが数割増しというのは言うまでもなく、元気な彩土姫ちゃんとゼウスちゃん、そして和服の着こなしが苦手なのか金玖ちゃ

んの三人は既に着崩れしかけ、逆に着崩れなく着こなしてるのは深海ちゃんと冥弥ちゃん、そして意外にもメールちゃんの三人。地津ちゃん和水姫ちゃんは着心地や動きやすさを重視し最初から少し着崩してる模様と、浴衣ひとつ着てもみんなの個性が色強く表れてるのがわかる。ナーガちゃんに至っては浴衣姿であぐらをかく様が剣客のよう
に空気出してるしね。この子ほんとに小学5年生？

そんなナーガちゃんがお茶を呷り（これがまた熱燗でも呷るようなね）、

「この面子を普通を称するなら、鳥乃さん今日一日で相当毒されてるんじゃないのか？」

「正常とはいったけど、まともとは言ってないからね」

と、私は刺身をぱくり。

実際、K a s u g a y a のときに嘘のように平和だった。

彩土姫ちゃんと水姫ちゃんコンビの、ごく普通のガキらしい挙動が一番騒がしく聞こえるのがそのもつともで、時たまゼウスちゃんが、「この刺身はすばらしい。これこそ我が神の食べるべきも……辛く」と、誰なのだ、神の刺身にわさび塗りたくったのは」

と、彩土姫ちゃんの悪戯を受けたり。

「……究極の至高だ」

とか、金玖ちゃんが呟いたりするくらいか。

「梓おねーちゃん。これ、おいしーねー」

メールちゃんは、いつの間にか梓に懐いていたらしい。梓も笑顔で、

「そだねー」

「そだねー」

カーリング女子のあれを言い合うふたり。ゆるふわ型同士気があうみたいで、梓も楽しそう。……あれ？ ゆるふわ？ 最近ハンマーで殴られっぱなしだったせいか、梓への認識がゲシュタルト崩壊しかけてたらしい。危ない危ない。

（ん、あれ？）

と、ここで私はふたりの様子からもうひとつ違和感を覚える。梓を

みるときの、メールちゃんの目だ。

梓と視線が合いかけると僅かに視線を逸らし、梓の意識が別の所に向いてるときは、ちらちらつと胸を凝視する。だからといって恋慕の熱っぽさがあるわけでもない。それは、まるで彼女くらの年ごろの男子のようだった。お姉さんの色気にドキツとして、おっぱいが気になって仕方がないような、ね。

「あれ？　梓とメールちゃん、いつの間に仲良くなったの？」

まあ半分ほど「梓をエロい目で見るなクソガキ」って意図込みだけど、気になった私は軽く横槍を入れてみる。とはいえ、本命には直接アクションせず。メールちゃんは見る分には癒されても話す分には苦手なタイプなのだ。

その上、実は幼いフリして猫被ったなにかって疑惑も生まれちゃったわけで。

「あれ、そういえばいつからかなー？　うーん」

と、梓は思いだせないって素振りをみせる。私から見ると「これは心当たりある」のが顔にかいてあるんだけど。梓はあくまで誤魔化し、

「温泉もメールちゃんとは一緒じゃなかったよねー？　だけど、観光中も結構話してたから、いつの間にか、かなー。ねー？」

「ねー」

と、メールちゃんも笑顔で応える。ここだけ見ると仲睦まじい似た者姉妹みたいな感じなんだけど。

「気にしないでやってくれ」

ここでナーガちゃんが、小声で私に。

「え？」

「メールの目線が気になったんだろ？　大事に至ることは無いから大丈夫だ。それにメール自身も気にしてることだから、できれば見て見ぬふりしてくれると嬉しい」

「けど」

私がいようと、ナーガちゃんは「フツ」と一回笑い、

「変な所で息ぴったりなんだな。ふたりは」

「え？」

「徳光さんも全く同じことだったぞ。メールがお前をえっちな目で見てると」

えっと、ちよつと待って？ 理解が追いつかない。

メールちゃんは私にも、いまの梓への視線みたいなのをやっつて、それを梓が気にした？ どういうこと？

「とりあえず徳光さんは、いまはメールを受け入れてるようだから鳥乃さんも受け入れてくれないか？ 重ねていうが、メールが誰かにセクハラしたり襲うことはないから」

「根拠は？」

梓が大事すぎたせいとか、気づくと私は更に踏み込んで訊ねてしまった。

(あ、しまった)

後悔するもすでに遅い。さすがのナーガちゃんも「イラッ」とした顔でこちらを睨む。当然だ、自分の姉がここまで疑われたのだから。

「私たちの中にメールの性的悪戯を受けた人がいる。木更姉さん以外の誰かだ。で、その結末はメールのトラウマになっている。これでもいいか？」

それでも、そっぽを向きながらではあるがナーガちゃんはいった。しかも、内容を聞くにそれは「できれば他人に喋りたくない」だろうもの。

「そう。ありがとう、不快な思いをさせちゃったわね」

「気にするな」

ナーガちゃんは、自分の湯呑にお茶を注ぎ、一気に呷る。

「今日これで二度目だから覚悟もしていた。だが、これ以上追及するなら私も堪忍袋の緒が切れる」

二度目ってことは、梓にも同じように弁解をしたのだろう。

「分かったわ」

私は、改めて周りを見る。

すでに料理はみんな殆ど食べ終え、冥弥ちゃんと地津ちゃんがゲームで対戦をし、彩土姫ちゃんはいつの間にかタブレットを弄ってばっ

か。水姫ちゃんは料理が多かったようで少し苦しそうに横になり、そんな彼女の残した料理をゼウスちゃんと金玖ちゃんが分け合って平らげ、木更ちゃんと深海ちゃん、梓とメールちゃんがそれぞれ談笑している。

ナーガちゃんはというと、私と同じく周囲を眺めてたのだけど、その表情は眉間にしわが寄っていた。

で、そんな私の視線に気づいたようで、

「どうした？」

と、ナーガちゃんが訊ねる。私は素直に、

「ごめん、顔色伺いすぎてたわ。ナーガちゃん、ずっと不機嫌そうな顔してるから」

「ああ」

すると、ナーガちゃんは罰が悪そうに、

「さっきの事は気にしてない……とは言い切れないが、別の問題だ。そうか、そんなに顔に出てたか」

と、ナーガちゃんは立ち上がり、

「ごちそうさまでした。せっかくの機会だから少し旅館を探検してくる。一応、保護者として誰かに付いてきて貰えると嬉しいんだが」

と、私を横目でちらつと。恐らく誰かとはいいつつ、私と木更ちゃんを指名してのことだろう。

「じゃあ、私でいい？」

ナーガちゃんはフツと微笑み、

「鳥乃さんか、感謝する」

「いつてらー」

彩土姫ちゃんがいい、続いてみんなが一步も動かずま見送る。木更ちゃんは、いつの間にかメールちゃんと梓も交え4人で盛り上がり、残念ながら気づいてない様子だった。

なので、私たちは一旦そのまま部屋から離れ、後から現在位置を伝えることにした。

「あの中に、オールバックの男の味方がいる？」

ナーガちゃんがいった別の要件、そして「眉間にしわが寄っている」
本当の理由は、正直信じたくない内容だった。

「嘘。本当なの、ナーガちゃん」

合流した木更ちゃんなんか動揺して目が泳いでいる。私でさえ
ショックなのだから、彼女が受けた衝撃は相当なものはず。

「分からない。私も信じたくない情報だからな」

現在、私たちは玄関を出て、壁に沿って進んだ右端の曲がり角にい
る。ちようど旅館からの電灯も殆ど届かず、夜の暗さもあつて施設の
内外から絶好の死角になっているのだ。

「だからこそ、嘘か本当かこの3日間で突き止めなければいけない問
題でもある。私自身確定情報と思つてないのと、追加料金を払う余裕
がないせいで本当ならハンドグドを頼る気はなかったのだが」

けど、その自分の担当になったハンドグド構成員が身内と知つた為、
協力を要請したというわけらしい。

私は事務所と繋いだ通信機に、

「そういうわけだけど、こつちも引き受けちゃつて構わない？」

『サポートに掛かつた費用を何とかしてくれるなら構いませんわ』

と、返事する通信先の鈴音さんに、

「分かつた。じゃあそこは私のポケットマネーで払つておくわ」

『だと思ひましたわ。なら半額だけ払つてくださいませ、残りはこち
らで何とかしますわ』

「ありがとう」

するとナーガちゃんが、

「いや、私は鳥乃さんに依頼料を負担してくれなんて一言も」

「気にしないで。サービスの一環だから」

私がいようと、今度は木更ちゃんが、

「でしたら私も払います。むしろ払わせてください」

「木更ちゃんは今日の旅行代で金欠でしょ」

「あ……」

言われて気づいた木更ちゃんは、その場で引き下がる。

ナーガちゃんはすまなそうに、

「申し訳ないことをした。プライベートで頼むつもりだったのだが、そこまでしてくれるとは」

「プライベートだと、逆に費用がかさばるのよ」

言うのと、ナーガちゃんが「あ」となる。

「それに可愛い後輩の可愛い妹の頼みよ。レズとか関係なく恰好付けさせて」

「レズ？」

は？ と目で訊ねるナーガちゃんに、木更ちゃんが、

「ハングドの構成員としては、レズの肌馬って言われてるんです。先輩」

「つつつ」

途端、木更ちゃんの背に隠れるナーガちゃん。

「いや大丈夫よ。私中学生以下は手を出さない主義の子供嫌いだから。実際、昼も梓と比べて私あんまり皆と接触しなかったでしょ」

「そ、そうか」

ちよつと複雑そうにほつとするナーガちゃん。もちろん、残念って意味ではなく「子供嫌いだから助かった」って部分だろう。彼女の年ごろは子供扱いって嫌だろうし。

「とりあえず、これはNLTからの情報なのだが、先日名小屋近郊のとあるビルがファイル・ハンターズの襲撃を受けたらしい。首謀者は仮面をつけたオールバックの男。そして、男の部下と思われるフードとローブで身を隠した殺戮者が、ビルにいた住人を皆殺しにしたらしい」

その情報は聞いたことがある。一般的な情報機関からは真実を捏造されて報道されてたけど、ファイル・ハンターズがファイル・カードの強奪目的でビルを襲撃し、関係者無関係問わず多数の犠牲がでたって。

「殺害された被害者は、いずれも鈍器のようなもので頭部か心臓を潰されていたらしい。そして、数少ない生存者曰く、殺戮者の顔は何えなかったものの、声色から少女だったと。そして、オールバックの男から藤稔と呼ばれたそうだ」

「なるほど」

木更ちゃんがうなずく。

「女性ではなく少女ということ、まだ幼さの残る声だったのでね。そして、藤稔という姓はとても珍しいですから、私たちの中に該当者がいる可能性があると考えられてもおかしくありません」

私は通信機に向かって、

「鈴音さん、事務所のほうでその事件に関する資料って存在しない？」
『資料はありませんけど、関係があると思われる依頼なら一件ありますわね。いま残ってるメンバーで当れそうな人を探してみますわ』
「ありがとう」

私がというと、

『つてわけで、鈴音はそっちに回ったから。それまで通信は私が引き継ぐわ』

と、ここでまさかの高村司令参戦。ほんとにうちのボスはフットワークが軽い。

私はナーガちゃんに向かって、

「それで現在の経過は？」

「残念ながら手がかりなしだ。それとなく木更姉さん含む全員に一回ずつカマはかけたが、私たちの中にいないのか、上手く回避されたのか」

「そう……」

できれば、前者であって欲しいんだけど。

そんな所へ。

「ナーガちゃん、木更おねーちゃん」

と、玄関から出てきて私たちを探す声。

メールちゃんだった。

「潮時ね。戻りましたよ」

私は提案するも、

「いや、メールなら大丈夫だ」

ナーガちゃんはいいい、しかもあろうことか。

「メール、こつちだ」

と、むしろこちらへ呼び出したのだ。

「ナーガちゃん!？」

私そして木更ちゃんが声を抑えて驚く仲、

「あ、ナーガちゃん、おねーちゃん」

私たちを見つけたメールちゃんは嬉しそうに小走りで駆け寄ってくる。

「なにしてたのー？ みんな遅いから心配してたよお」

と、訊ねるメールちゃんに、

「仕事の話だ」

と、ナーガちゃん。

これって。

「もしかして、メールちゃんもこちら側なの？」

私が訊ねると、

「おー。もしかして、襲撃事件の犯人さがし？」

と、メールちゃんという。

ナーガちゃんがいった。

「改めて紹介しよう。彼女は藤稔 メール。私の個人的な協力者でもあり、ある全国展開している組織のメンバーだ」

「全国展開している組織？」

ってことは、間違いなくハングドやNLTよりも大規模になる。私
が知る限り全国規模の組織はフィール・ハンターズ以外心当たりない
のだけど、

「組織の名前は？」

木更ちゃんが訊ねると。

「ごめんねー。それは喋れないのー」

「なら、活動内容は教えれそう？」

と、しゃがんで目線を合わせる木更ちゃん。

「それなら、木更おねーちゃんになら特別にちよつとだけ。わたした
ちはフィール・カードやフィールを持ったアイテムを回収して、
フィール関係の脅威とかから、みんなを護ってるのー」

あれ、それって？

「もしかして、ハイウインド？」

私が訊ねる。するとメールちゃんは驚いた顔で、

「あ、それ。わたしたちの組織の傘下」

「っ」

驚く私。と同時に、

『鳥乃！ 聞き出さない、そのメールとかいう子の組織の名を！

それ以外にもハイウインドの創設者は誰かとか、てめーらは敵か味方か！』

と、興奮状態の高村司令。

「わたしたちはロウの組織だよー」

メールちゃんはいう。すると、さらに司令は、

『アレで正義？ ざけんじやないわ、ウチの組織はアンタのトコの
ファイアってのに護衛対象もろとも構成員ひとり殺されてるのよ。
しかも目的は正にアンタがいったアイテムの回収。説明して頂戴』
と、通信先で怒鳴りだす。

「司令、落ち着いて」

私が宥めてる間に、木更ちゃんが。

「いま、通信機の先にいるのは私たちの司令です。メールちゃん、いま
司令が言ったことは全部……」

「うん、知ってるう。生の声を聞くまで信じたくはなかったけど」

メールちゃんは、しゅんとしながら、

「あのね木更ちゃん、それと司令さんも聞いてくれますか？ 今日、わ
たしが名小屋に来たのって、みんなで旅行もそうなんだけど、組織の
お仕事もあつたのー」

「え？」

ナーガちゃんも知らなかったらしい。メールちゃんはいった。

「今回のわたしのお仕事はねー。まさに、そのハイウインドの監査と
最後通告なの。それでね、本当にやっちゃいけない人殺しをしてるの
が分かったら、良くて活動停止、最悪ハイウインドの解散と、重く
処罰をさせなくちゃいけなかったの。……けど、もう確定なんだね」

私の目には、メールちゃんがただ「処罰」を嫌がつてるようには見

えなかった。それ以上に心を痛めてるのがすごく伝わり、

「メールちゃん。もしかしてハイウインドができた経緯を」

「うん、知ってる。プリントを読んだくらいだけど」

やっぱり。形は違うけど、メールちゃんだって行方不明のお姉さんを探してる立場なのだ。同じように家族を探し、その結果が形になったハイウインド。その結末にメールちゃんは悲しんでるのだ。

「メール……」

ナーガちゃんが、メールちゃんの頭を撫で、焼け石にでも慰めようとする。そこへ、再び誰かが玄関を出る音が耳に届く。しかも、今度はふたり。

「みんな」

私はすぐ皆にいい、気配を消して様子をうかがう。

出てきたのは彩土姫ちゃんだった。しかも、見ず知らずの小太りしたオッサンとふたりでこちらの方角に向かってきている。私たちに気づいてる様子は見られないけど。

(みんな、隠れて)

私は目で皆に伝え、物音を立てないように更に奥へと逃げ、ちょうど停まっていた車の後ろに身を潜める。

「へへ。おーじさん、ここなら誰にも見つからないよ」

私たちに気づかないまま、彩土姫ちゃんは先ほどまで私たちのいた死角に辿り着くと、おもむろにオッサンの肩に腕を回し正面から背伸び。

そして、オッサンはあろうことか彩土姫ちゃんと唇を重ねだしたのだ。

「っ」

あまりに衝撃的な光景を前に、私はその場で固まる。

え、彩土姫ちゃん恋人がいたの？　けど、何だかんだあの子かすが店長LOVEのひとりなんじゃ。

「きぎ、木更ちゃんこれって」

と、説明を求めると、木更ちゃんも顔を赤く青くさせ、とても説明できる状況じゃない。

一方メールちゃんは深く落ち込み、泣きそうな目で彩土姫ちゃんを見ている。

「あいつ、こんな所でも」

と、ナーガちゃんがいった。

「どういうこと、ナーガちゃん」

訊ねると、心底言いたくなさそうにナーガちゃんは、

「サポだよ」

と。それって、

「援助交際!」

ちよつと待つて話なんだけど。確かに、小学生で援助交際に手出す子はいるって聞くし、そういえば食事中も途中からタブレットばかり弄ってたけど。彩土姫ちゃん全然そんな感じの子には見えなかったのに。むしろ、まだ色気とか知らなくて、男子に混じってサツカーとかドツジしたり、うんこだちんこだで盛り上がりたりしそうな子なのに。

ナーガちゃんがいった。

「《ワーム・ホール》で戻るぞ。さすがに姉がお金貰って好きでもない奴と行為に及ぶ姿は見たくない」

私たちは《ワーム・ホール》で逃げ、二重の意味で「会話不可能」としてこの場は解散になった。

余談だけど、暇になったので私は女将さんを探し一夜の誘いを持ちかけるも、梓に見つかりハンマーされました。

——現在時刻23:20。

やっと梓から許可をもらった私は、替えの下着とタオル、一応自衛のデュエルディスクをもって女湯と書かれたのれんを潜った。

この時間までお預けを喰ってしまおうと、さすがの私も「女体を拝む」という本来の目的より「入浴」に優先順位が向いてしまう。まあ、おかげで、がらんがらんの脱衣所を見ても「まあ、そうよね」と諦めがつけたのは幸運だったかもしれない。

私はロッカーに荷物を入れ、タオル1枚になって一直線に露天風呂

へ。すると、誰もいないと思つてた浴場には、見覚えのある女の子がひとり、ゆつたりと湯に浸かっていた。

「メールちゃん？ いたんだ」

私は、その女の子の後ろ姿に声をかける。

「っ!? ふえっ?」

そんな驚くことでもないだろうに。メールちゃんはビクツと一回体を跳ねさせ、恐る恐る私に振り返る。

「あ……っ」

メールちゃんはすぐ正面を向き直して、

「沙樹おねーちゃん。お風呂、入りにきたのー?」

なんて、すごい慌てた口調。

「ん、まあそうだけど」

「そうなんだ。ごっつ、ごめんねー。わたしーすぐ出るからごゆっくりー」

と、メールちゃんは立ち上がり、体をタオルで隠しながら顔を下向けて露天風呂を立ち去ろうとする。

「え、ちよっ」

なんで逃げるの？ 私、メールちゃんみたいな子はレズの対象外もいとこなのにな。

けど、私を見ないように逃げようとしたせいだろうか。メールちゃんは私と正面衝突し、

「きやあっ」

尻餅ついて転んでしまう。

「メールちゃん。大丈夫?」

と、私は彼女に手を伸ばそうとし、気づいてしまった。

メールちゃんの股間部についている。女の子についてはいけない、アレを。

「え……」

硬直する私、それに気づいたメールちゃんが。

「あっ」

と、慌てて股間を隠し、

「ちがうの、ちがうのー」

と、泣きじやくりながら弁解する。

「メールちゃん。もしかして男の子だったの？」

私は言ってしまうも、すぐメールちゃんの胸部が僅かだけど膨らんでるのにも気づいてしまう。何より、過去に出会った男の娘であるヒロちゃんと同類って感じは全くしないのだ。

これって一体。

「ちがうのー。わたし、ちゃんと女の子なの。体もちゃんと」

そういつて、メールちゃんは恥ずかしそうに股間の男の子をめくりあげる。確かに、そこには男の子にはついてない(らしい)一本筋が確かに。

つまり、アレだ。

基本R―18指定の漫画とかアニメの世界によく出てくる。

「両性具有」

つまり、ふたなりだ。

「うん……」

メールちゃんが、小さくうなずいて肯定する。

(なるほど、ね)

メールちゃん秘密、8割程度は分かったわ。彼女の股間の真実を知って、私は思った。

そりゃあ、メールちゃんくらいの年の男の子なら、年上のお姉さんを前にして気にならないわけがない。彼女は女の子でもあったけど、あの時私を感じた「男の子みたいな視線」は大正解だったわけだ。彼女くらいの歳なら二次成長期、性自認を強く意識する頃だしね。

残る謎は、ナーガちゃんがいった「親戚の誰かに性的悪戯し、その結末がトラウマになっている」か。誰が被害にあったのか、セクハラ程はどれ程なのか。どちらにしても、逆にいえば「メールは女を襲わない」と断言できるほど、心に深い傷を負ってるのは間違いない。

「とりあえず、お風呂入り直さない？」

私はいった。

「え？」

涙声で顔をあげるメールちゃん。が、その目の動きは激しくキョドったのが見える。タオル越しとはいえ胸とか股間とかまともに視界に映せないのだろう。私は、レズだから彼女の気持ちがかかるとか哀しい事実には自覚しないよう意識して、

「ほら、私も早く温泉に入りたいし、メールちゃんもずっと裸で尻餅ついてたら風邪ひくでしょ。それに」

私は先に温泉に入り、いった。

「メールちゃんには、仕事の話もあるから。今なら他に人いないし、うってつけでしょ?」

「でも、わたしこんな体なのに、いいのー?」

びくびくと言うメールちゃんに私は、

「ナーガちゃんが言ってたわ。メールちゃんは安全だって、だからメールちゃんを信じるわ」

言う。

「そ、それなら。ありがとう」

と、メールちゃんは温泉に入り直し、私の隣に座る。

「それで、お仕事の話ってー?」

「メールちゃん、ハイウインドの監査に来たのよね? だったら、あのチームの雇い主が誰なのか、知ってるんでしょ?」

「……うん、知ってるよ」

メールちゃんはずく。

「でも、教えられ」

「ない。とか言ってもらえない事態なのは分かってる? 私の組織はあなたの所のハイウインドに直接被害してるって話だから。それも理不尽に。はつきり言うけど、もう私と木更ちゃん以外はハイウインドを敵組織と断定してるからね。実際、トップからハイウインドと交戦したら遠慮なく殺害しろとも言われてる」

多少オーバーだけど間違っではない。

「通信機からの司令の声、聞こえたでしょ? ひとつ間違ったら、あなただって殺害対象に入りかねない」

さすがに、そんな事言い始めたら私は拒否するけど。でも、いまの

司令は感情的になりすぎてから本当に言いかねない。

「アインズがいつてたわ。ハイウインドの雇い主は私の味方だって。けど、現状そうには見えない。だから、確認しに行かないといけないのよ。メールちゃんの監査に任せるんじゃないやなくて、私自身の目と耳で確かめて、確固たる証拠と今後互いの為にも契約を持ち帰る。メールちゃんにとっても、うちの契約に持ち込めればハイウインド解散を回避する大きな武器になるでしょ」

「うん……」

「利害は一致してるはずよ、メールちゃん」

「……」

メールちゃんは、無言のまましばし考え込む。何が彼女をそれだけ縛り付けてるのか。どうして首を縦に振らないのか、口を割ろうとしないのか。

「あ、そうだー」

程なくして、メールちゃんがいった。

「ねえ沙樹おねーちゃん。いまナーガちゃんから依頼を受けてる途中みたいだけど、わたしからも依頼頼んでもいいーい?」

「え?」

「わたしの監査に同行して欲しいの。わたしが雇ったボディガードとして。この方法なら、名前を知るだけじゃなくて対面もできるよね?」

そして、わたしが協力できるうちに、おねーちゃんがいった証拠と契約を持ち帰って欲しいの」

なるほど。

メールちゃんは首を縦に振ろうとしなかったわけでも、口を割ろうとしなかったわけでもない。

どうすれば、お互いの目的をもっと確実に実行できるのか。そんな一歩先を見据えた手段を考えてたわけだ。この子、幼くみえて賢い。「いいの? 勿論、うちの組織が依頼として請けさせてくれるかはともかく、私としてはこれ以上ない話だけだ」

「もちろん」

メールちゃんはにこつといい、

「あ。だけど、ひとつだけ条件はあるかなー?」

「条件?」

「うん。一応、リアルファイトとデュエルの実力は見ておきたいかなって」

なるほどね。

「分かったわ」

私はうなづく。と、同時に手首から射出されたワイヤーがメールちゃんの首元に巻き付き、内蔵してる拳銃が彼女の心臓部を捉える。

「え」

さすがに驚くメールちゃん。私はいった。

「私の体の中には武器が幾つか仕込んであるわ。故に私の持ち味は今みたいに裸でかつフィールなしでも多少の戦闘行為が可能。加えて、一番の得意分野は早撃ち。どう?」

訊ねると、メールちゃんは「おーっ」と関心しながら、

「もしかして、わたしの組織でも都市伝説だった田村崎研究施設の半機人?」

「大正解」

「なら、リアルファイトは問題ないねー。間違いなくわたしより強いもん」

メールちゃんはいった。

「だったら、次はデュエルだねー。そうと決まったら一回戻ろー」
なんて、嬉しそうにメールちゃんは脱衣所へ戻っていく。

それは、カードを武器としてではなく、純粹にホビーとして楽しむ子供の姿そのものだった。

沙樹

LP4000

手札4

□ □ □

□ □ □

□ □ | □ □

□ □ □ □ □

□□□

メール

LP4000

手札4

迷惑行為ではあるんだろうけど、一度脱衣所で浴衣とデュエルディスクを装着し直して再び露天風呂へ。

仕事の一環ではあるんだけど、久しぶりに私は相手を傷つける必要のないデュエルをすることになった。

「先攻は私ね」

私は最初の4枚の手札を引き、

(つて、うわ)

早速、気を楽しんでいたことを後悔する。

手札事故というほど事故はしていない。だけど、ブラフ以外にセツトできる魔法・罠がないのだ。

仕方がない。とりあえず私は手札から2枚をデュエルディスクに読み込ませ、

「モンスターとカードを1枚ずつセット。私はこれでターン終了」

と、それとなく最低限の布陣っぽく見せておく。

「わたしのターン」

メールちゃんは、ゆるふわボイスでいった。

「ドロー」

お互い服を着ているせいとか、メールちゃんは恥ずかしそうな様子なく私を見据えている。

さて、彼女はどんなデッキでくるのか。見た目雰囲気は藤稔で一番精神的に幼そうで、しかし実はハンドより規模の大きな組織の構成員。事前情報も無い為、どんなカードを使うのかが全く推測できないのだ。

「じゃあ、いくねー」

メールちゃんは、まず魔法カードを1枚、デュエルディスクに差し込んで発動した。

「魔法カード《進化の秘宝》。このカードは《レベルアップ!》1枚を

デッキから手札に加えるカードなのー」

「LVモンスターデッキ!？」

これは、予想できない中でも特に予想外な。

「それでねー。わたしは《ホルスの黒炎竜 LV4》を通常召喚。《レベルアップ!》を使って《ホルスの黒炎竜 LV6》にレベルアップ」

しかもホルス軸ときた。

「カードをねえ2枚セット。バトル《ホルスの黒炎竜 LV6》でセットモンスターに攻撃い」

緊張感のない声と裏腹にモンスターが名前の通りに黒炎のブレスで私の裏守備表示のカードを炙っていく。こうして、耐えきれず姿を現したのは一機のハムスターの顔をした幻獣機。

「《幻獣機ハムストラット》の効果発動。このカードがリバーした時、幻獣機トークンを2体特殊召喚するわ」

「でも、ハムストラットは破壊するよー」

幻獣機には、トークンがあると破壊されない効果を持つものだけど、ハムストラットの効果はリバー効果同様の裁定な以上、ダメージ計算が確定してからトークンが生成される。つまり、幻獣機トークンが発生した時には、すでに戦闘破壊が確定しているのだ。

「それでねー、モンスターを戦闘破壊した《ホルスの黒炎竜 LV6》はターン終了時に《ホルスの黒炎竜 LV8》に進化」

こうして、最初は下級だった隼の頭部を持つ一匹の竜は、たった1ターンで最上級モンスターへと上り詰める。攻撃力は3000、その効果は。

「《ホルスの黒炎竜 LV8》は、魔法カードの発動をいつでも好きなだけ無効にできるのー。わたしはこれでターン終了おっと」

つまり、私は魔法カードをロックされたも同然なのだ。そういえば木更ちゃんはモンスター効果を無効にして、メールちゃんは魔法カード。もしかして藤稔一族はこういうロックデッキが好きなのだろうか。

沙樹

LP4000

手札2

□□「伏せカード」

□□「《幻獣機トークン》」□□「《幻獣機トークン》」

□□

「《ホルスの黒炎竜 LV8》」□□

□□「《伏せカード》」□□「《伏せカード》」

メール

LP4000

手札1

「私のターン」

と、いつて私はドロ。引き当てたのはようやくの罨カード《聖なるバリアーミラーフォース》。だけど、私はメールちゃんの2枚の伏せカードを眺めつつ思った。

(ホルステッキときたなら、たぶんアレ伏せてるわよね?)

前のターンに引いてたら確実にホルスを対処できてたのに。まったく来るのが遅いわミラフオさん。

まあいいわ、いまの手札なら対処は可能なのだから。

「私は手札から《幻獣機ハリアード》を通常召喚。さらにトークンを1体リリースしてハリアードの効果発動、手札の《幻獣機メガラプター》を特殊召喚するわ。続けて残りのトークンもリリースして幻獣機メガラプターのモンスター効果を発動。デッキから《幻獣機テザールフ》を手札に、さらにハリアード以外の効果で私のモンスターがリリースしたことでハリアードのモンスター効果。幻獣機トークンを1体生成」

とりあえず、私は2体の幻獣機を展開しつつ何かと握っておきたいテザールフの確保に成功。さらに幻獣機トークンを維持できたことで、

「幻獣機モンスターたちは、幻獣機トークンのレベルだけ自身のレベルを上げる共通効果を持つてるわ。その為、現在ハリアードとメガラプターのレベルは7。私はこの2体でオーバーレイ！ 2体のモン

スターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

せつかくなので、銀河の渦は温泉に発生させてみる。

フィールで演出をリアル化させた結果、夜の温泉は夜景を強く映し出しながら渦を巻き、霊魂となった2体のモンスターが温泉に呑み込まれる。

「竜の名を持つ機械の鳥よ。いまこそ空を支配し、私に勝利を輸送せよ！ エクシーズ召喚！ 発進せよ、ランク7《幻獣機ドラゴサック》！」

温泉の湯が割れ、中から浮上したのは先端に竜の首を模した部位を持つ大型の航空機の姿。

「わあー。いい演出」

何となくやった遊び心だったけど、どうやらメールちゃんにも好評だった模様。

とても嬉しそうにするメールちゃんを見て、私はやって良かったと思っただ。

「《幻獣機ドラゴサック》のモンスター効果。このカードのオーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、幻獣機トークンを2体生成。さらに第二の効果を使用し、3体になった幻獣機トークンのうち1体をリリースして、相手フィールドのカード1枚を破壊するわ。破壊するのはもちろん、ホルスよ」

幻獣機トークンがドラゴサックの背に搭載され、ホルスに向けて射出される。トークンはカミカゼアタックでホルスの腹に穴を開け、爆発。

「《ホルスの黒炎竜 LV8》撃破」

「ええっ、もう対処されちゃったのお？ でも、ドラゴサックは確かこの効果を使ったターンは」

「どうやら知ってるらしい。」

「その通りよ。このターン、ドラゴサックは攻撃できないわ」

「そっかー。なら安心」

ほっとするメールちゃんに私は、

「ドラゴサックは“ね”

「え?」

と、なるメールちゃん。私は少しだけ意地悪っぽく笑って、セットカードを表向きに。

「リバースカードオープン。魔法カード《RUM―アージエント・カオス・フォース》を発動」

「RUM!」

「このカードは、フィールド上のランク5以上のXモンスターをランクアップさせる。私はランク7の《幻獣機ドラゴサック》1体でオーバレイ・ネットワークを再構築」

今度は普通に銀河の渦が上空に出現。

ドラゴサックが光の粒子となって渦に取り込まれると、銀河の爆発と共に舞い降りたのは、ドラゴサックの面影を残す禍々しい幻獣機。「冒険なる科学の力よ、いまこそ機械の鳥に魔竜を宿らせ、銀河の海を支配せよ! ランクアップ・エクシース・チェンジ! 機動せよランク8《CX幻獣機レヴィムリーヤ》!」

確かにドラゴサックはこのターン攻撃できない。しかし、バトルフェイズを行なえないわけでも、他のモンスターの攻撃を制限するわけでもないのです、こうしてしまえば問題ないのだ。さらに、このカードの効果を用いればこのターンに勝利さえ可能だったりする。

「カードをセット」

とりあえず私はミラフォをセットし、

「バトル。《CX幻獣機レヴィムリーヤ》は、バトルフェイズ中に他の幻獣機をリリースすることで通常の攻撃とは別に追加で攻撃が可能。いま私のフィールドには幻獣機トークンが2体、つまりこのターン私はレヴィムリーヤで計3回の攻撃が可能となる。まずは一打目! レヴィムリーヤでメールちゃんに直接攻撃よ」

すると、メールちゃんは驚き、

「わー。待つて待つてえ! リバースカードオープン、速攻魔法《レベルゼロ!》を発動するからあ」

と、伏せカードの1枚を表向きにする。

「このカードは、わたしの手札・フィールド・墓地のLVモンスターの

みを素材にリンク召喚かX召喚を行うカード。開いてえ、私のサーキット！」

すると、メールちゃんの真下にリンクマーカードが発生し、そこから電子の奔流が巻き上がってメールちゃんの体が宙に浮かぶ。

「召喚条件はLVモンスター1体。私は墓地の《ホルスの黒炎竜 LV6》をリンクマーカードに挿入。さあ、飲み込んでえ……私のドラゴン」

いま、ホルスの黒炎竜だったもの股間から出なかった？ しかも矢印じゃなくおたまじゃくしの形で。

「アローヘッド受精確認！ リンク召喚。生まれて、LINK-1《ミスティック・ソードマン LV0》！」

こうして誕生したのは、《ミスティック・ソードマン LV2》そつくりの小型の戦士。……というよりね、それよりも。

(……怖い)

私は思った。

メールちゃん、何なのその召喚口上と演出。男のほうの性欲丸出しじゃない。しかも色々拗らせ過ぎて発想がそれ上級者超えて超級者だし、何なのよアローヘッド受精確認って。怖い、怖いわこの子。ナーガちゃん、本当に大丈夫なのよね？

そういえば、梓が今朝いつてたっけ。「セクハラされる側の気持ち知らない」とって。むしろいま私、生まれて初めて「同性に身の危険を覚える」体験してるんだけど。

「じゃあ、ミスティック・ソードマンのモンスター効果いくよお」

しかも当のメールちゃんは普通にデュエルを続けようとしてるし。……。……まあいいか。

見てる限り、メールちゃんは心の底からデュエルを愉しんでる。闘いの道具なんかでなく純粋にデュエルモンスターズが大好きなのだろう。いまのメールちゃんには、食後の展開とかデュエル前の空気みたいなものを引きずってる感じはみられない。もしかしたら、あえて目を背けていまはデュエルを、なのかもしれないけど。

どちらにしても、そんな彼女のテンションに付き合いこそしても、

水を差すわけにもいかないわよね。それでデュエル中断になったりしたら、仕事が絡んでる以上そこに影響してしまう。

「《ミスティック・ソードマン LV0》は特殊召喚の成功時に相手モンスター1体を裏側表示にできるの」

「うっ」

裏側表示になってしまいうレヴィムリーヤ。これでは連続攻撃どころか、このミスティック・ソードマンを対処することができない。その上、このカードもLVモンスターなのだから、恐らく《ミスティック・ソードマン LV2》を出す効果を持つてるはずなのだ。これはやばい。

しかし、私には何もできない。

「ターン終了」

「じゃあ、私のターンだねー。ドロー」

メールちゃんはカードを引き、

「あっ」

と、反応する。引いたら駄目なカードを引いちやつた。そんな顔だ。

「もお、こんな所で来ないですよ。《ミスティック・ソードマン LV0》の効果発動。このカードはリリースすることで、手札かデッキからLV2を特殊召喚できるの。私は手札からLV2を特殊召喚するね」

なるほど、さっきのドロウはデッキから呼び出す予定だった《ミスティック・ソードマン LV2》だったらしい。そして、彼女のデッキにLV2は1枚しか投入していない様子。

「続けて、《ホルスの黒炎竜 LV4》も通常召喚」

再び登場する隼の頭を持ったドラゴン。

「バトル。私は《ミスティック・ソードマン LV2》でセット状態のレヴィムリーヤに攻撃い！ ミスティック・ソードマンは、裏側守備モンスターをダメージ計算を行わず破壊できるのー」

そう。だからやばかったのだ。

「レヴィムリーヤ撃破ー」

嬉しそうにいうメールちゃん。ああもう、こんなにはしゃいじやつて。——クツクツク。

「それはどうかな？」

私は、ニヤリと笑った。

「罨カードを発動！」

伏せカードをオープンし、舞いながら私は叫ぶ。

「底知れぬ絶望の淵へ沈——」

「あ、罨カード《王宮のお触れ》でミラフォは無効にするねー」

「でしようねー」

「そだねー」

まあ、そんな茶番はともかくとして、レヴィムリーヤはミスティック・ソードマンに破壊され、続けてホルスの黒炎竜が2体いるトークンのうち1体を戦闘破壊。

「《ホルスの黒炎竜 LV4》の効果発動。このカードが相手モンスターを戦闘破壊したターン終了時、このカードはLV6にレベルアップ」

こうして再び現れる上級モンスターのホルス。今回はLV8まで一気に来なかったただけラッキーだけど。

「わたしはこれでターン終了」

沙樹

LP4000

手札1

□□□

「《幻獣機トークン》□□□

□□□

□□「《ミスティック・ソードマン LV2》」「《ホルスの黒炎竜 L

V6》

□□□「《王宮のお触れ》

メール

LP4000

手札0

「私のターン、ドロ」

私はカードを1枚引く。新たに手札に加わったのはレベル3 チューナーモンスター《幻獣機ソウルズピニ》。このターンで一気に攻めることは難しそうだ。とはいえ、ホルスはまだLV6のうちに強引でも対処しなければならぬ。

「《幻獣機テザーウルフ》通常召喚、効果で幻獣機トークンを1体生成」

私は《幻獣機メガラプター》の効果でサーチした幻獣機を出し、

「バトル！ テザーウルフでホルスに攻撃。そしてダメージ計算時にテザーウルフはトークン1体をリリースすることで、ターン終了時まで攻撃力を800アップさせる」

ホルスの黒炎竜が迎撃に炎のブレスを吐くも、デコイのホログラムが陽動し、代わりに受ける。その隙にテザーウルフは鎖を飛ばし、ホルスの黒炎竜を拘束。

《幻獣機テザーウルフ》 攻撃力1700↓2500

ホルスが身動き取れなくなった所を、テザーウルフは機銃をまき散らし撃破。

メール LP4000↓3800

「私はこれでターン終了」

沙樹

LP4000

手札1

□□□

□「《幻獣機トークン》」「《幻獣機テザーウルフ》」□

□—□

□「《ミスティック・ソードマン LV2》」□

□□「《王宮のお触れ》」

メール

LP3800

手札0

現状、私の場にはテザーウルフが1体と幻獣機トークンが1体。対して相手の場はミスティック・ソードマンと他の罠の効果が無効にす

る永続罨《王宮のお触れ》。

一応現在の場は私が有利といえる。しかし、メールちゃんのデッキは間違いなくホルス召喚特化。いまLV8を出されてしまうと、私は魔法と罨の両方を封じられてしまう。今日の私のデッキは完全に幻獣機軸。モンスターだけで展開するのは難しい分、二度目の突破は難しい。

メールちゃんが2度目のLV8召喚を成功させる前に、デュエルを終わらせるかLV8を対処する準備を終わらせなければ。

しかし。

「わたしのターン、ドロー」

メールちゃんはカードを引くと、

「魔法カード《進化の道標》を発動。このカードは墓地のLVモンスター1体をデッキに戻して、そのカードに書かれてるモンスターをデッキからサーチするカード。わたしは墓地の《ホルスの黒炎竜 LV8》をデッキに戻して、《ホルスの黒炎竜 LV6》をサーチするよ」

「あ」
駄目、このカードは。

「わたしは《ミスティック・ソードマン LV2》をリリースして《ホルスの黒炎竜 LV6》をアドバンス召喚。いくよー。ホルスでトークンに攻撃」

再び現れたホルスが、今度は最初からデコイのトークン目掛けてブレスを吐き、破壊する。

「そして、ターン終了時に《ホルスの黒炎竜 LV6》はLV8にレベルアップ」

まさか。こうもあっさりLV8を許してしまうなんて。

「わたしはこれでターン終了」

なんて、にこつと笑うメールちゃん。

沙樹

LP4000

手札1

□□□□

□「《幻獣機テザーウルフ》」□
□「」□

□「《ホルスの黒炎竜 LV8》」□

□「《王宮のお触れ》」

メール

LP3800

手札0

(さて)

私は現状を分析した。

テザーウルフが生き残ったことで、実はホルスの効果を封じるモンスターは可能になった。しかし、そのモンスターの攻撃力は2500とホルスの数値には及ばない。出しただけでは次のホルスの攻撃で沈むだけ。

現在、明らかにパーツが足りなかった。

「私のターン、ドロー」

ファイルを込め、私はカードを引き抜く。そして、ドローカードを確認し、

(なるほどね)

と、思った。勝てるかはともかく「このカードを使う状況」は間に合った。ならば、まずホルスの効果を封じる「あのエース」を出すしかない。

「私はチューナーモンスター《幻獣機ソユーズピニ》を召喚。そして、レベル4《幻獣機テザーウルフ》にレベル3《幻獣機ソユーズピニ》をチューニング！ 未だ穢れに染まらぬ無垢なる翼よ。その透明さで敵を討て！ シンクロ召喚！ 飛翔せよ、レベル7！ 《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》！」

私の場に出現したのは、そろそろ私の代表モンスターになってそうな借り物のエース。その攻撃力は2500。続けて私は、たったいま引いたカードを使用する。

「魔法カード《貪欲な壺》を発動」

「え？」

メールちゃんはきよとんとし、

「いいの？ ホルスLV8はいつでも何度でも魔法の発動を無効にできるよー？」

「別に構わないわ」

私はいった。

「けど、その効果を使った瞬間、メールちゃんの負けは確定するけどね」

「えー？ どうして？」

訊ねるメールちゃんに私は。

「クリアウイングには3つの効果を持つてるわ。1つ、1ターンに1度レベル5以上のモンスターが発動した効果を無効にして破壊する。2つ、1ターンに1度、レベル5以上のモンスター1体のみを対象にする効果を無効にして破壊する」

「あつ」

メールちゃんも気づいたらしい。ホルスの効果を発動したら、1つ目の効果で逆にホルスが破壊されてしまうことに。

さらに、

「3つ、クリアウイングは自身の効果でモンスターを破壊した場合、ターン終了まで破壊したモンスターの元々の攻撃力分アップする」

「ってことは、もしホルスの効果を使ったら、クリアウイングの攻撃力は5500になって」

「そういうこと」

言いながら私は、墓地から《幻獣機ハリアード》《幻獣機メガラプター》《幻獣機テザールフ》《幻獣機ドラゴサック》《CX幻獣機レヴィムリーヤ》の5枚を戻しカードを2枚ドロロー。

よしー！

「続けてフィールド魔法カード《フル・フラット》発動。当然、ホルスはこの発動も無効にできるけど」

「しちや駄目なんだよね」

まさか、ホルスの効果が無効化されていないのに封じられるとは思わなかったのだろう。驚きながらも目が「そんなあ」って訴えてるのが

みえる。

《フル・フラット》の効果を受理されると、辺りは一転空を舞う空母の甲板へと景色を変える。

「《フル・フラット》は1ターンに1度、800ライフ払うことで幻獣機トークンか手札の幻獣機を召喚できる。私は幻獣機トークンを攻撃表示で特殊召喚」

沙樹 LP4000↓3200

メールちゃんは「え？」で顔で、

「攻撃表示で？ 攻守0なのにな？」

そんなメールちゃんに、私は最後の1枚を見せていった。

「ところで、私の手札を見てくれ。こいつをどう思う？」

「すぐく……詰みです……」

そのカードは《強制転移》。メールちゃんはしょんぼりとテツキに手を添えた。

メール LP3800↓0 (サレンダー)

デュエルが終わり、お互いの出したソリッドビジョンが同時に消える。

メールちゃんは、がくつとなつて。

「はあつ、負けちゃったあ」

と、いいつつ。すぐぱつと笑顔で、

「でも、楽しかったー」

「それは良かったわ」

私はいつて、

「で、デュエルの実力のほうも信用して貰えそう？」

「え？ あ」

メールちゃんは、一回きよんとしてからハツとなり、

「う、うん。大丈夫だよお」

「忘れてたのね」

「ごめんなさい」

指摘すると、メールちゃんはすぐ認めて謝った。

「まあいいわ」

いい気晴らしになったみたいだしね。

「さてと、じゃ私はお風呂入り直すけどメールちゃんは？」

「あ、わたしもー」

メールちゃんは言おうとして「あ」となり、

「で、でもでも。それだとわたしおねーちゃんの裸え見ちゃうよ」

「子供に見られた所で気にしないって話よ。さ、行きましょ」

いま私すっごい嘘ついたような気したけど、大丈夫よね？

まあ、それはともかくとして私はメールちゃんの手を引いて脱衣所に向かう。

道中。

「それにしても、まさかメールちゃんにヤマジュンネタが通じるとは思わなかったわ。そんなネタ振った私も私だけど」

なんて軽く雑談。

「あ、それはね。冥弥おねーちゃんと地津おねーちゃんに教えて貰って」

「ああ」

確かに、あのふたりなら知ってそうないメージ。あと金玖ちゃんとかも数年後くらいには。

「けど、あの本でひとりエッチしたらふたりに驚かれて、それでネット上で昔流行ってたネタなんだって教えて貰ったの」

「そりゃあ驚くわよね」

今の時代、あれを本来の用途で使うような人が存在するなんて。

「じゃalink召喚の口上と演出は？ あれ自分で考えたの？」

「ううん、あれは全部ゼウスおねーちゃん」

やっぱりあの子天災か。

「ねえメールちゃん。あのリンクの演出とか自覚して使ってる？」

「ふえー？ なにが？」

もしかしてと思ったけど、どうやら本人分からずやってたらしい。

「いや、アローヘッドにセットするモンスターがお股から出てたじゃない」

「うん。それがミソなんだって」

「で、それがおたまじゃくしじゃない。普通リンク召喚だとアイコン多いのに」

「でも、最近は靈魂タイプも増えてるよね？」

「まあそうんだけど。」

「で、その上で聞くけど。受精ってどういう意味かは知ってる？」

すると、メールちゃんは恥ずかしそうに、

「え、えーと。確かえと、男の人と女の人が」

「そこまで言つて、メールちゃんはハツとした顔になり、

「あ、あああああああああああああああつ」

と、錯乱半分に絶叫する。

「アローヘッド受精完了つてそういう。つてことは口上の挿入も!!? ぜ、ゼウスちゃん。わたしそういうネタ避けてるの知ってるのに、もー」

その後、「僕のエクスカリバー」のくだりも教えてあげると、もうメールちゃんは顔真っ赤にぶんすか。

「ごめんね沙樹おねーちゃん。もしかして、あのとき怖かった？」

「う、ううん。そんな事なかったから安心して」

「実際は、すっごい怖かったけど。」

「ありがとう」

メールちゃんは言いながらゆっくりフェードアウトしていく。

脱衣所についた。

早速私はタオル諸々の入ったロッカーを開け、デュエルディスクを入れようとする。そこへ、

「あ、待ってえ」

メールちゃんがいった。

「あのねえ、脱ぐ前に聞いて欲しいことがあるの」

見ると、メールちゃんの表情は憂いに満ちていた。それでいて、何かを決意したような。そんな意志も感じる。

「なに？」

訊ねると、メールちゃんは2〜3回深呼吸してから、

「あのね、わたし前にね、彩土姫ちゃんにえつちな酷い事、しちやったことがあるの」

「メールちゃんが？」

「うん。わたしがまだ中学に入る前の話だけど」

それは、夕食時にナーガちゃんが言っていた「トラウマ」に触れるくだけりだった。

メールちゃんが語り始めた。

「最初はね、わたし女の子をみてもどきどきしなかったよ？ かすが様を見て、胸がきゅんきゅんして、おちんちんがむずむずしたくらい」
早速地雷を聞いた気が。

「だけどね、ある日おちんちんが大きくなっちゃって、その日からかな？ わたしが男の子としてもえつちな気分になれちゃったの。急に、男子が女の子をスカートめくりする気持ちに分かったり、ちよつとクラスにおっぱい大きい子がいると目がいっちゃったり。でもね、でもね、ちゃんと女の子でもあるんだよ？ 男子のお尻とかすつごく気になつたもん」

いや、それはおかしい。とは流石にいえない。

「わたし、抑えられなかった。ううん、その頃のわたしは、それが悪いことって知らなかったから。だから、まず大好きなかすが様のお尻に挿れようとして、でもそれは逃げられちゃって」

「あ……」

だから、かすが店長メールちゃんを一番怖がって。

「それで、次に目に入ったのが彩土姫ちゃんだったの。それで、お医者さんごっこっていつて、酷いことしちやった」

「……」

私は、そこに何も返せなかった。

「その後ね、地津おねーちゃんとナーガちゃんが沢山叱ってくれて。教えてくれて。それで、やつと、やつとわたし、取り返しのつかないことしちやったって気付いたの。わたし、沢山謝ったよ？ 謝っても駄目って分かってたけど、それ以外できなかつたから。でも彩土姫ちゃんはやつぱり許してくれなくて。……その内、彩土姫ちゃん引つ

越しちやった。前のお家はわたしのお家と近かったから」

言つてから、メールちゃんは後ろを向いて、風呂場とは反対側に歩き始める。

「沙樹おねーちゃん、わたしがリンク召喚した時ね、ちよつとお顔引きつってたよ？ 本当は怖がったんだよね？」

メールちゃん、気づいてたんだ。

「否定はしないわ。でも、私はもう気にしてないって話よ。メールちゃんが本当に分かってなくてやったのも分かったし」

「でも、だめだよ。あの時のお顔の意味知ったら、やつぱりわたし、おねーちゃんと一緒にお風呂入れない。入っちゃ駄目だよお」

メールちゃんが振り返る。笑顔をつくりながら、彼女は泣いていた。

「ごめんね、沙樹おねーちゃんが凄く優しいから、わたし甘えちやつてたみたい。わたし悪い子なのにね、女の子の敵なのにね。大切な彩土姫ちゃんに酷いことして、たぶんわたしのせいで彩土姫ちゃんおかしくなつたのに、体売り始めちやつたのに、なのに、まだわたし許されてるって思ってたのかなあ、そんなはずないのに」

まるで、自分を痛めつけるかのような言葉。いま、私が矯正しなければ、この子は今後ずっとそうやって自分を責め続けるのだろう。

「メールちゃん」

私は、何とか声をかけようとする。

そんな時だった。

「そんな事ないッ!!」

突然、声が響き渡った。

私は振り返る。そこには、脱衣所の入り口で、まさに話題の彩土姫ちゃんがひとり立っていた。

「ふえ、さ……彩土姫ちゃん?」

目をぱちくりするメールちゃん。

「どーしてここに?」

「さっきまでちよつと運動してて、汗かいちやつたんだよ。つて、それよりも」

彩土姫ちゃんはずかずかとメールちゃんの前に歩み寄り、

「勝手に何でもかんでも自分のせいにしてないでよ！ ボクはとつくにメールちゃんのこと許してるし、そんなうじうじしてるほうが見てて辛いんだから、もつと堂々としててよ姉ちゃん！」

と、メールちゃんの肩をガシツと掴む。

「確かに酷いことされたと思ったよ。めっちゃくちや痛かったし、怖かったし、死ぬかと思ったよ。それに、あの頃のボクはえつちな事何にも知らなかったから、てつきり虐められたのかと思ったし、嫌われたのかと思った。だからあの時メールちゃんを許さなかったの！」

と、言葉を吐き捨てるように言った彩土姫ちゃん。そこから、少しトーンを落とす。

「お父さんもお母さんも、ボクが何されたのか教えてくれなかったし、訳分からないうままメールちゃんと会わせないようにして引越したし、決めちゃうし。だから、引越した後、ナーガちゃんと連絡取って、どうしてメールちゃんボクのこと嫌いになったのか聞いたんだ。そして、ボクが思ってたのと全然違ってさ、だから転校先で先生に頼んで性教育のこと教えて貰ったんだ。その時にエンコーのことも教えて貰って」

待った、それってつまり下手したらその「性教育」って。

メールちゃんも私と同じ推測をしたようで顔を青くしてる。けど、彩土姫ちゃんは自分が爆弾発言した自覚がないようで、

「だからさ、いまはむしろメールちゃんにされて良かったって思ってるくらいなんだ」

と、更に正常な思考を疑う発言を。

「ほら、ボクって色気もないし、おっぱいもないし、男みたいじゃない。だけど、メールちゃんや先生は女の子扱いしてくれたって事だよ。ね。そう思うとすごく嬉しくて、また女の子扱いして欲しくなっちゃって。それがエンコー始めた経緯。それにさ、先生もいっぱい数こなせばさすが様も振り向いてくれるって言ってるし、慣れればすっごい楽しいし」

駄目だこの子、その先生に都合よく洗脳されている。

「だから、ボク——」

彩土姫ちゃんが何か言ってるのは分かるけど、恐らく彼女の言葉が耳に入ってる人は、この場にはひとりもないだろう。

私はメールちゃんに視線を送る。

メールちゃんは、いまにもシヨックで倒れそうな顔してたけど、私に気づくとすぐ叫んだ。

「沙樹おねーちゃん！ その『先生』の余罪を全て調べ上げて！」
よしきた。

「全額こちら持ちで引き受けるわ。で、それだけでいいの？ 冤罪は？」

「可能な限りやっちゃってー。彩土姫ちゃんの人生狂わせた真犯人には、死刑さえ生温い制裁をー」

「なら、ついでに真犯人の後ろ掘る？」
「掘るー」

こうして、「え、え、え？」と困惑する彩土姫ちゃんを他所に、私はゲイ牧師と永上さんに連絡を取るのだった。

数日後、その先生はゲイ牧師兄弟4人とメールちゃんの計5人によって後ろの穴を破壊された挙句、永上さん協力の下、冤罪増々の無期懲役で今後一生臭い飯生活が約束されるのだけど、それはまた別の話である。

——現在時刻0:00。

結局、あの後彩土姫ちゃんとメールちゃんがお風呂に入っていた為、二人きりになりたいだろうと私は脱衣所を後にした。

部屋で梓が待ってるだろうとは思ったけど、私はすぐ部屋に戻らず、途中トイレに入り誰も聞いてないのを確認してから事務所と通信を繋ぐ。

「——ってわけで、多重依頼引き受けそうになっちゃったわけだけど。許可をお願いできる、司令」

私は事の経緯を伝えた上で、司令にメールちゃんからの依頼も受けたいと懇願すると、

『鳥乃、アンタさ……』

通信先から、妙に感情の籠った司令の声。これはお叱りを受けるかな、そう思った矢先。

『グツジョブよ！ よくこんな最高の話を持ち込んでくれたわ』

と、興奮した様子で司令がいった。

「なら、許可くれるって話？」

『当然よ。ただし、多重依頼を回避する為に担当の構成員をそれぞれ変更するわ』

「え、変更？」

『元々の依頼だったオールバックの男関連は引き続き鳥乃・藤稔ペアで向かって貰うわ。けど、ナーガから請けたもう片方の依頼とメールのボディガードは両方同時は無理でしょ』

「あ」

そうだった。

『今後、藤稔は支援からナーガの依頼のメインに変更、支援には双庭姉妹を超越すわ。で、鳥乃はメールのボディガードに就いて頂戴』

「じゃあ、私の支援は」

双庭姉妹曰く、いまの私の支援は木更ちゃん以外務まらないらしい。確かに、今回の依頼を私と木更ちゃんに分けるのは仕方ないことだけど、まさか私単独で依頼に就けどでも言う気なのだろうか。

なんて不安になる私に、司令は驚きの言葉を発するのだった。

『私が入るわ』

って。

MISSION 18―処分人（スローター）

私の名前は鳥乃トリノ 沙樹サキ。陽光学園高等部二年の女子高生。
そして、レズである。

「ちよつとメールちゃんと風俗行ってくるわ」

二日目、朝。

この日は夕方まで自由行動という形をとっており、みんなで旅館を出て、さあ一旦解散といった所で私はいった。

結果、

「はいアウト」

「ひびぶー」

早速、梓からハンマーを喰らったわけで。

木更ちゃんから禁止されてるのに、皆の前でハンマーされたわけ
で。

「あの先輩気持ちは分かりますけどみんなが」

指摘する木更ちゃん。梓は、

「あ」

となつて、「ごめんなさい」と謝る。

それで朝からショツキングな光景を見た親戚組はというと、

「す、凄い。ソリッドビジョンが本物みたいに」

驚く水姫ちゃん。

「ねえ！ねえ！それどうやったの？ 昨日のかすが様のカードも実体
化できるの？」

目を輝かせ食いつく彩土姫ちゃんに、

「これが……古の魔術か」

妙な設定を見出す金玖ちゃん。

どうやら、種を知ってるナーガちゃんはともかく小学生組は誰も
ショツクを受けてない模様。というか、ビジョンのリアル化で怪我人
が出てるのに気づいてない感じ。まあ、芸人が頭はたくようにハン
マーが出たせいだろうけど。

「だ、大丈夫ー？ 沙樹おねーちゃん」

そんな中、当のメールちゃんは跪いて心配してくれ、

「あ、そうだった。まだホテルの前だから氷貰ってくる？ 頭打つたら病院に行つた方が」

それを聞いてハツとなった水姫ちゃんが応急手当をしようとするも、

「そこは大丈夫だよ。生傷は残ってないからギャグ漫画みたいに復活するよね、沙樹ちゃん」

梓がいいつつ、笑顔で圧力をかけてくる。

「跡残らないだけで、痛みは割と本物って話なんだけど梓」

とはいえ、水姫ちゃんを筆頭に段々みんな心配モードになってきたので、私は立ちあがって平気平気とアピール。

「自業自得だ」

呆れた顔でナーガちゃんがいった。一方、彩土姫ちゃんは興味津々って顔でメールちゃんに、

「で、さ。でき、本当に行くの？ 風俗、風俗」

「い、行かないよー」

メールちゃんはにこつと笑って、

「だって今日の彩土姫ちゃんの分も残しておかないと」

と、爆弾発言。

固まる周囲。

「メール、まさかお前」

わなわなというナーガちゃん。

「あ」

「ここで、やっと自分がやらかしたと気づいたメールちゃんは、

「ち、ちがうの、ちがうのー」

と、今さらな弁解。

「沙樹ちゃん、もしかしてメールちゃん男の子だったの？」

唯一事情を知らない様子の梓。私は首を横に振り、

「いや、メールちゃんは女の子よ」

そこを彩土姫ちゃんが横から、

「そうそう。メールちゃんはち〇〇もま〇〇も付いてるけど、ちゃん

と女の子だから」

「わーっ！ そういう事いっちゃ駄目え」

慌てるメールちゃん。これは埒が明かない。

「と、とりあえず風俗ってのは冗談だけど、ちよつと色々あつて今日私とメールちゃんのふたりで見えて回る約束しちゃつて、じゃ行つてくるわ。メールちゃん、ほら行こ」

私はメールちゃんの腕を引き、逃げるようにこの場を後にした。

私はスタバで甘いアイスカフェオレを買うと、

「はい。メールちゃん」

「ありがとー」

嬉しそうに受け取るメールちゃん。

私は普通のアイスコーヒーを店員から受け取り、適当な席につく。

梓や木更ちゃんたちから別れた私たちは、高村司令と合流する為、

適当にテーブル席のある店で待機していた。

「木更ちゃんというには、あの後、更に3グループに別れたらしいわ。具体的には『ゼウスちゃん、深海ちゃん、木更ちゃん』『地津ちゃん、梓』『冥弥ちゃん、ナーガちゃん、水姫ちゃん、彩土姫ちゃん、金玖ちゃん』って具合だつて」

私はコーヒーを一口飲み、いった。

「どう思う？」

とは、今回の組み合わせの件だ。更に言うなら、いま私たちが一緒に行動してる原因とは別件。「この中にオールバックの味方がいる」話題である。

「うーん、正直おかしな所はないかなー？ 小学生組とおねーちゃん組に分かれて、冥弥ちゃんは保護者で彩土姫ちゃんたちについたと思うよー？」

メールちゃんはいった。

「あえて言うなら二番目が気になるかなー。それでも確かに地津おねーちゃんは単独行動しそうだから、その保護者に梓おねーちゃんがついたって可能性が高そうー？」

「けど、梓は保護者兼地元ガイド梓でもあるから、つくなら3番目よね」

「あー、そっかー。なら警戒しないとー」

納得するメールちゃん。

「でも、白じやなくても、やつぱり地津ちゃんが例の無差別殺人犯はな
いとおもうなー。鈍器みたいなので色んな人皆殺しにしたんでしょ
？ 地津ちゃんらしくないよお」

「地津ちゃんらしくない？」

「うん、だって地津ちゃん運動神経はあんまりないもん」

自覚なく、さらっと姉をデイスるメールちゃん。

「なら、言い方を変えるわ。酷いこと聞くけど、メールちゃん的に怪し
いと思ってる人はいる？」

するとメールちゃんは意外にも「うん」とうなずき、

「いるよー」

って。

「え、いるの？」

「今朝ちよつと気になったことがあったからねー」

そういつて、メールちゃんはカフェオレをぐくぐく飲む。

「気になること？」

訊ねると、

「あのね。今朝梓おねーちゃんが《ハンマー・シユート》を実体化させ
たよね？」

「うん」

「それってファイルを知らない人には、ありえない事だと思うの。だ
けど」

メールちゃんはいった。

「わたしのおねーちゃんたち、誰ひとりとして驚いてなかったよ？」
「え」

確かに。私はさらっと流してたけど、言われるとメールちゃんの言
うとおり反応としては不自然だ。

「つまり」

そこへ横から声が。

「地津って奴も含めて複数人敵側って可能性もあるわけね」

高村司令だった。

「ちっす」

司令は私と同じブラックコーヒーのカップを持って、私の隣に座る。

「はい、その通りです」

メールちゃんはうなずき、

「あなたが、沙樹おねーちゃんの組織の司令さんですね？ 初めまし

てー藤稔メールです」

と、ぺこり。

「高村 霧子よ」

司令は名乗り返す。

ちなみに、先ほどの会話は通信機越しに木更ちゃん、ナーガちゃん、双庭姉妹など任務に関わってるメンバーに垂れ流しになっている。もちろん、司令も聞いていたはずだ。

ところで、と私は話を戻し、

「待って、さつきメールちゃんは地津ちゃんはないって」

すると高村司令は半眼で、

「例の無差別殺人犯イコール地津じゃないってだけでしょ。メールは、他にも敵がいて、その中に地津もいるかもしれないって言うてるのよ」

「あ」

なるほど。

「ったく。去年までランドセル背負ってた子に頭で負けてどうするのよ。まあいいわ」

司令はいつて、

「その件はあちらに任せて、そろそろ出発するわよ」

そうだった。今回の私の仕事はナーガちゃんの依頼ではないのだ。

「そうだね、時間も丁度いいから、行こー」

メールちゃんが勢いよく立ち上がった。その様子からは、いまの話

題を終わらせたいという意志がみえる。

(ああ)

これ以上、親戚を疑うのが苦しかったのだ。私だつてもし梓を疑う事態になったら死ぬほど苦しい。そんなこと分かつてたのに、私は当然の心理をすっかり忘れ配慮なしで接してたのだ。

(悪かったわね、メールちゃん)

私は心の中で謝った。

そんなメールちゃんから案内されたのは、名小屋駅それも関係者以外立ち入り禁止区域。偶然なのか否か、私たちはアンちゃんとデュエルしたあの場所へと向かっている。

「情報が正しければ、こっちー」

地下深く続く階段を下りていくメールちゃん、そして私。

「ハイウインドのアジトはねー、この先にあるー」

「円筒形の地下調整池」

私はいった。するとメールちゃんは驚いて、

「正解ー。その調整池を通るのー。知ってたの？」

「前に依頼でね。犯人がアジトにしたのよ」

「……。おー、そっかー」

どこことなく意味深に納得するメールちゃん。

そのまま、円筒形の白いトンネルを潜る私たち。調整池とは豪雨などの洪水を一時的に溜める施設をいうのだけど、今回も見たところトンネルの床が所々濡れてる程度だった。

私たちは真つすぐ進んでトンネルの出口へ。当然、今回はアンちゃんも待ってるわけでも、悪友が機械装置で拘束される様子もない。――はずだった。

「ごきげんよう、鳥乃さん、監査官さま」

そこに、アンちゃんはいた。それも以前と全く同じ場所で《ギミツク・パペット―死の木馬》に乗って待っていたのだ。

恐らく乗ってるモンスターは車椅子代わりだろう。最近、やっと復学したアンちゃんだけど以前様子を見に行つた所、松葉杖だったの

だ。曰く、まだ足腰にダメージが残ってるらしく放課後はいまもりハ
ビリ生活なんだとか。

「おー。お出迎えありがとうー」

メールちゃんはいった。

「まさか」

私は驚き訊ねた。

「ハイウインドの雇い主って、もしかして」

「神簇家です」

微笑んでいうアンちゃん。

「なるほどね」

司令がいった。

「やつとアンタたちやメールの組織が分かったわ。そりや組織名もい
えないし、神簇家の名を明かすこともできないわ」

「知ってるの司令」

訊ねると。

「親戚よ。高村と神簇は」

「嘘っ」

驚く私。するとアンちゃんは、

「本当です。それに気付いたのは私の事件が解決した後ではあります
けど」

「だから私は神簇家、いえその本家の更に裏にある組織に心当たりは
あるわ」

司令はそこまで言うと、

「で」

と、白い目でいった。

「ハングドのトップが親戚のおばさんだから多少のことは許されると
？」

「まさか」

そんな司令に対し、アンちゃんは挑発するような目で返し、

「身内だからなんて、そんな甘い考えで組織が成り立つと思えますか、
お婆様。いいえ、それ以前に『許す許さない』以前の問題ではないで

「しょうか？」

「は？」

「私の支部の方が、貴女の組織の方を依頼者ごと殺し、目撃者を全て殺処分する為研究所を襲撃し、後日任務の障害になった鳥乃さんを狙撃した。組織同士の対立としては別に何もおかしくないと思いますけれど」

「なッ」

「ブチッ！ そんな擬音が司令から聞こえそうだ。しかし、

「ハングドだってターゲットや対立した別組織に対し、全く殺傷加えてないわけではないでしょう。ロウに枠組みされているNLTや米警察だって必要ならその程度の権限は持ち合わせてるのですから。私はこれ以上ハングドに対し下手に出る必要も、監査で裁かれる必要もないと考えております」

「なんて、自分側の正当性を主張するアンちゃん。しかも彼女の言っていることは自分勝手かつ外道ではあれど、割と正しくはある。幾らロウ・ニュートラル・カオスに分けたからといって、いくら組織を善悪で分けれるからといって、私たち組織の活動する世界は法の外なのだから。」

「けど。さすがに少々強気が過ぎる。これではまるで「何しても私は悪くない悪いのはお前だ」な昔々の神簇のようだ。」

「あのねー。信用問題忘れてないー？」

「そこへメールちゃんが助け船に入る。しかし、

「勿論ですよ。ですけど、ここでこれ以上下手に出るほうが信用問題に傷がつく。私はそう考えております」

「と、アンちゃん。」

「ハングドのほうには、ハイウインド名義とはいえ姉上様から謝罪文が送られているでしょう、なのにハングドからは返事が来てないのですから。これは絶対に許さないという鉄の意志と鋼の強さで徹底抗戦に来ているものと」

「え？ 謝罪文？ そんなの来てないけど」

「司令がいった。」

「え？」

目を丸くするアンちゃん。

「確かに私たちの名は出してませんが、姉上様は速見様殺害時、研究所襲撃時、決闘疾走大会時と計3回謝罪文を出したはず。その全てに犠牲者への慰謝料含む金銭的要求も受け入れるとの文面も込みで」

「いや、まったく来てないから」

そんなやり取りから、

「あ」

私は嫌な予感に気づいた。

「もしかして、うっかり依頼してきた時の連絡先にそのまま送ってるんじゃない」

ちやうど神簇からの依頼の後辺りに定期的な連絡経路の変更を行ったはずだし。

「……………」

直後、アンちゃんから表情が消えた。それから数秒後、

「…………ふ、うふっ…………あ、あははははっ！　もうイヤ、何なのですかあの愚姉は！　どこまで抜けてらっしゃるのですか、勘弁してくださいませ!!」

と、アンちゃんが壊れる。

私はいった。ため息混じりに、

「アンちゃん、神簇とあなたのトコの事務所に案内して頂戴。うっかり神簇なら、ついうっかり謝罪文の履歴もそのまま残してるかもしれない。それなら証拠も確保できるわ」

「」

フオローしたつもりだったのだけど、私の言葉がとどめになって、アンちゃんの口から魂が抜けた。

トンネルを抜けた先の壁に、指紋認証で開く隠し扉があり、その先の神簇邸の真下に設置されてるといふ施設に私たちは案内された。そこは、言うなら秘密結社のアジトを思わせる未来的な空間が広がっていた。薄暗い中を至る所の機械の光が照らし、人工的で入り組んだ

構造。が、その中に和の趣も添えられ、SFと和の不思議な融合が果たされている。

「申し訳ありません。私も姉もヒロさんも揃ってメンタルやられてしまってます」

移動中。アンちゃんは司令に聞こえないよう小声で愚痴を漏らした。

「私と姉の二人三脚で始めた新事業ですけど、発足前に私が倒れて昏睡状態、私抜きで始動する事になり、その上いざ始めたらフィーアさんがあんなで、送った謝罪文も返事がなく友好関係を築こうとしたハングドと事実上の敵対。フィーアさんの不始末でデスクワークも挨拶回りも片付けても片付けても終わらない。あのヒロさんが姉のうっかりに気づかなかった時点で、私たちがどれだけパニックを起こしてたか察して貰えると嬉しいのですけど」

「大丈夫、恐ろしいほど伝わってるわ」

だって。どうしてヒロちゃんがいて「どうしてこの失態を？」って思ったもの。しかも、その答えが「ヒロちゃんがパニック起こす環境」という力技。そしてアンちゃんは本来人間不信でマイナス思考の人間だ。組織の上に立つ者として失格とはいえ、追い詰められた彼女が何も信じられず結果ハングドにも監査官にも噛みついたなんて想像に容易い。

むしろ、アンちゃんは今やっと私の前で嘆くことを許された状態なのだろう。私は時おり頭を撫でたり、うんうんと聞き手に徹して好感度アップ狙いに徹した。弱ったアンちゃんが私に身を預け「温めてください」と言いだせば作戦成功だ。

で、神簇の件。結論から先にいうと。

私の推測は一寸の狂いもなく大正解だった。履歴の件も含めて。

「ほ、本当に申し訳御座いませんでした」

高村司令に頭を下げる、ハイウインド司令にして私の悪友、神簇

琥珀。普段の彼女は色々残念な和服美人なのだけど、今日は目の下にクマができ、心身共に限界寸前なご様子で美人特有のオーラがない。

司令は、ハングドに届かなかった謝罪文のデータを一通り確認し、

「一応、送信日を捏造されてないか確認するけどいいわね」

「はい。お願いします」

「そ、ならとりあえず今更だけど謝罪は一通り受け取ったわ」

「ありがとうございます」

神簇は、ただひたすら頭を下げることしかできないでいる。

そんな彼女を司令は見下ろし、

「その上で、いまこの場で返事を下すけどOK?」

返事を「下す」。その表現に私と神簇、アンちゃんの三人は軽く身震い。どんな返事という名の制裁を下すのか。

司令はいった。

「まず、速見の慰謝料は要らないわ。アンも言ってたけど、この世界組織同士の対立は付き物だし、勿論組織の活動理念に従った誠意という形なら話は別だけど」

なお速見と一緒に殺害された護衛対象だけど、実は殺人・窃盗の罪を負った犯罪者であり、国外逃亡する為にハングドを雇ったというらしい。ウチの組織は正義の味方じゃない。当然そういう依頼だつて舞い込むし、悪に加担と知りつつ依頼を請ける構成員だつて存在するのだ。

まあ、それでも速見が請けたということは真実はもつと別にあるのだろうけど、今更である。

「ただし、そつから先は話が別よ。その依頼人の親族に誠意ある対応はして貰うし、アンタのトコのフィアは、関わった者たちを全員仕留める為に研究所を襲撃したわね。その賠償はバツチリ払って貰う。その上、敵意のない鳥乃を二度攻撃した。その件についても『これがハイウインドのやり方だ』というなら別にいいけど、その場合こちらもアンタらを敵と認識するし、特捜課にNLTをはじめ各組織にも神簇家名指しで注意勧告を流すわ。当然だけど、そうなったら分かってくるわよね?」

「はい」

神簇はうなずき、

「速見様の慰謝料も含め全賠償を払わせてください」

「ん、じゃあ各請求はこんな感じ?」

司令は書類を取り出すと幾つか数字を書き込んで神簇に渡す。

神簇は数字を前に一回くらくらつと倒れそうになりつつ、

「分かりました」

と、それを受け入れる。

「OK。じゃあ最後にもうひとつ」

司令はいった。何を追い打ちするのかわかと思ったら、

「神簇 琥珀。そして神簇 アン。今日これよりアンタらふたりに巨乳撲滅の刑を執行する」

「……は?」

目を丸くする神簇。が、直後ハツとなって。

「し、しまった。高村 霧子といったらあのムニュースのひとりじゃない」

「懐かしいわねムニュースの名も」

うわ司令の瞳にメラメラやばい炎が灯ってる。ちなみに私はムニュースという単語は初耳だ。

ポキポキと指を鳴らす司令に、神簇は怯え、

「ま、待って! 私そんな胸ないわよ。逆にアンを羨ましいと思う側だもの、ねえアン?」

その言葉を聞いた司令は、無表情でアンちゃんに、

「アン? アンタの姉のバストはどのくらい?」

「Dですね。Eにランクアップする気配もありませんけど、Cにランクダウンする気配はもつとありません」

「あ、アン!?! 貴女姉を売る気?」

「いいえ、売るだなんて道連れと呼んでください姉上様。……ふつつ、自分だけ助かろうだなんて思わないでくださいね」

と、黒くい笑みを浮かべるアンちゃん。やっぱり、この娘幾ら改心しても性格悪いわ。

司令はいった。

「小便はすませたか? 神様にお祈りは? 部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOK?」

「ああ、ムニューズのこと？」

司令からの刑罰も終わり、私たちは本来の目的であるメールちゃん
の監査に入ることにした。

神簇から施設を案内して貰いながらの移動中、私は司令に聞き覚え
のない先ほどワードを訊ねたのだった。

司令はいった。

「ムニューズというのは、私が学生時代にやってた小規模組織、いや徒
党よ」

「徒党？」

「そ、ガキの頃とか友人が集まってマルマル団だチヨメチヨメ隊だ
チームサティスなんたらとか名乗るのと同じレベル。……元はね」

元は？

「最初は校内で巨乳撲滅を掲げふざけてただけの集団だったのよ。メ
ンバーも私入れて3人だけだったしね。けど、いつの間にか活動の規
模が大きくなってさ、気づけば今でいう『怪人』みたいなサイドにい
たわけ。フィール犯罪者とかそういうのを何かにつけて巨乳派扱い
してボコツて特捜課に放り投げる、おかげで、怪人と違って警察機関
に協力的って認識を貰ってたけど」

司令にとつて、当時は楽しかったのだろう。煙草を啜えるその瞳
は、とても懐かし気だった。しかし、

「でも、3人の繋がりも恋の病には勝てなかったわ」

と、司令は続ける。

「3人のうちのひとりに相手が出来たのよ。しかも、その相手が地元
の外の人間でさ。彼女はそいつの下に行っちゃって自然と解散。――
で、その後残ったふたり、まあ私と鈴音は縁あって再び世界の裏側
に踏み込んだ。それがハングドの始まり」

「あ……」

ってことは、

「ある意味、ムニューズはハングドの前身？」

「そうなるわね」

司令は言いながら、煙草の煙を吐く。

「3人で馬鹿やってた頃を思うとウチの規模も相当大きくなったわ。まだ支部もないローカル組織だとはいえ」

「つて司令は言うけど『馬鹿』はまだ続けてるわよね？」

と、私はいった。

「ムニューズは知らなくても、巨乳撲滅の言葉はいまでも頻繁に聞いてるって話だけど」

「……。……そうだったわね」

僅かな間の後、うなづく司令。

私は続けて、

「だからハングドの空気は皆で馬鹿やってる感じだったのね。そりやあ原点がそこにあつて、トップが未だ同じノリ続けてたらそうなるわ」

「悪かったわねトップが自分勝手に」

「ん、むしろ逆。そんな賑やかな組織に巡り合えて私は幸運だつて話」
普通、少人数のノリのまま規模拡大なんてすると連携が取れなくなったり下が不満を覚え始めたりするしね。それが保てて、しかも居心地がいいなんて私はいま最高の職場にいるのだ。

思いながら、私はふと前を歩く神簇に目がいった。

彼女は、そしてアインスたちはまさにハングドにとつてのムニューズのような第一歩を踏み出した所なのだ。こちらとしては速見を殺された恨みもあるけど、彼女たちの未来をこんな所で潰したくはない。速見の件は、そして司令を怒らせた償いは、ちゃんと未来を掴んでその先で償ってほしい。

そう思いたくなる程には、私はハイウインドの経緯、そしてメンバーたちに思い入れがありすぎた。神簇とアインスに至ってはむしろ速見より親しい関係と自分では思ってるしね。

「ここが資料室になります」

神簇が足を止め、前方の部屋を指していった。

「まだ発足したばかりで数は少ないですけど、活動履歴その他諸々は当部屋で管理しています」

「なら、後で拝見するねー」

メールちゃんがいった。神簇は「はい」とうなずき、

「その後、諸々を案内してから続けて上に向かおうと思います」
「上？」

訊ねると、

「神簇邸と《テイメンション・ゲート》で繋げてるのよ。いまはハイ
ウインドも屋敷で生活して貰ってるから案内しないわけにはいかな
いでしょ」

と、神簇は私にはタメ口で答える。

そういえば、現在神簇の屋敷は住み込みの使用人が不足している。
ハイウインドを雇うということは、その空いた穴を埋める役割もある
のだろう。

(つてことは)

ハイウインドがメイド服でお世話？ アインスは執事服だろうし
興味もないけど。あのシユウのメイド服は……アリすぎる！

「何考えてるのよ鳥乃 沙樹」

顔に出てたのだろう。神簇がジト目で睨んだ。

「そういえば、沙樹おねーちゃんと神簇のおねーちゃんって、お知り合
いー？」

そんな移動中、今度はメールちゃんが私に訊ねてきた。

「まあね」

私は肯定し、

「小学校時代の悪友っていう名の腐れ縁よ。ね、神簇」

私が神簇に振ると、

「ここ最近呪いでも掛かったんじゃないかって思う程にね」
神簇はいった。

「だってそうでしょ。小学校卒業してから音沙汰なしだったのに、再
会した途端やる事成す事貴女が関わってくるんだもの」

「そりゃあ、地元で動いてるローカル組織同士だし、少しくらいあるけ
ど」

「ありすぎなのよ、もう。ハイウインド結成の件だって、今度こそ立派

になってびっくりさせようと思ったのに、ハングドに迷惑かけてそんな状態じゃなくなつたし、それどころか今のところ全部の活動に貴女が関わってるし、拳句の果てに監査に護衛で同行？　もう、嫌になるわ」

「まあ、確かに」

思えば、神簇の依頼を請けた日から、私の活動に何かとこの悪友が関わってる気がする。

……あれ？

「つまりそれって、私あの日からずっと神簇のうっかりに振り回され続けて」

「る。という判断で正しいと思いますよ？」

「ここぞと会話に加わるアンちゃん。相当フラストレーションが溜まってるらしい。

「ちよつとおー」

で、反論しようとしてしきれない神簇。そんな様子を見てメールちゃんは、

「いいなー」

と、口にしていた。

「お姉ちゃんたちみたいは何でも言い合える関係、わたしも欲しかったなー。……あーいう目で見ずにいられる相手」

後半ぼそりと呟くメールちゃん。あー、羨ましいってそういうことね。

メールちゃんは、その体のせいで男女両方の性欲を持っている。だから、性を感じずに接触できる相手が殆どいないのだ。だから、レズである私が神簇を相手に遠慮ない関係を築いてるのが羨ましかったのだろう。でも、現実は少し違う。

「メールちゃん、誤解してるようだから言っておくけど。私、普通に神簇もアンちゃんも性的な目で見てるって話だから」

「ええっ!？」

驚くメールちゃん。

神簇は頭を抱え、

「そうだったわね。貴女、人が電流で悲鳴あげてるのに喘ぎ声だハドSMだいつて大興奮してたものね、鳥乃 沙樹！」

「いやアレは実際エロかったでしょ。ねえアンちゃん」

と、その原因をつくった妹に振ってみると、

「ふふっ」

アンちゃんは微笑んで、

「せっかくですから、鳥乃さんの前で電流棒も突っ込んで膜破ってあげばよかったですね、膜」

なんて、やばくい台詞を。つて、

「ん？ 膜？」

「はい。膜です」

アンちゃんは楽しそうに、

「あ、申し訳ございません。そんなつもりはなかったのですが、姉上様が来年二十歳になるのに未だ処女の行き遅れだったことをついに知らしてしまいました」

「ちよつとアン！ 明らかに確信犯だったじゃないの。それに、未経験なのは貴女だって」

「…………ふふっ」

アンちゃんは微笑んだままどんより暗いオーラを出し、

「確かに未だ一度も彼氏を持ったことはありませんけど、……階段に突き落とされる程の虐めですよ？ 膜なんて残ってると思いますか？」

『……………』

不意打ちのように語られたアンちゃんの過去に、その場全員言葉を失う。そんな様子を見てアンちゃんは、

「冗談です。姉上様を驚かせたくて」

「し、心臓に悪いからやめてよアン！」

シヨックから解放され、げっそりした顔で息を荒げる神簇。

「ふふ、(っ)めんなさい」

アンちゃんは再び普通に微笑んでいう。けど、私は思った。

(本当に冗談?)

冗談をいうには、少しどす黒いオーラがガチだった気がするのだけ
ど。

しかし、確認するのはもつとやばそうなので、私はいまの感想を心
の奥底に封印することにした。彼女の性格悪きなら、嘘八百でも危険
な空気まき散らすことだつてできそうだしね。

「そもそも皆さん、メール様がいらっしやる中でそういう話題はどう
かと思えますよ」

いつの間にかアンちゃんの隣を歩いてるヒロちゃんがいった。

「あ」

突然のヒロちゃんはいつもの事として、私はハツとなつてメール
ちゃんを見る。

メールちゃん^エは顔を真っ赤に、腰をかがめていた。

《ディメンション・ゲート》はアジトの最奥に設置されており、潜る
とそこは神簇邸の板の間の和室だった。

先ほどまでの光景とはうって変わり、窓からはカーテン越しに日が
入り、間違いなくここが地上であることを実感させる。

メールちゃんは、まず窓をコンコンと叩き、

「あ、ちゃんと防弾ガラスになつてるねー」

「全部屋を防弾にはできませんでしたけど」

言いながら神簇は人数分のスリッパを並べる。見ると部屋の出入
り口は上がり框による段差になっており、この部屋がやつつけ程度と
はいえ第二の玄関として改装されてるのが分かる。

私、司令、メールちゃんがそれぞれスリッパに履き替えると、

「ハイウインドには現在待機して貰ってます。案内致しますのでつい
てきてください」

と、私たちは神簇の誘導で応接間へ。そこには、神簇がいったよう
にアインス、シュウ、フィーアの三人が待機しており、

「お待ちしております、メール様。って、鳥乃!? どうして」

と、立ち上がったアインスが私を見て驚く。

なお、アインスは本当に執事服だったけど、シュウはカジュアルな

私服姿。残念。

「おいテメエなんでここに」

で、そのシユウも驚きのあまりに立ち上がりこちらを指さし、最後にフィーアがふたりを見習ったのか立ち上が——。

「処分開始」

った、と思つたらいきなり私に向けて拳銃を発砲。私はすぐ服の内ポケットに携帯してた銃を撃ち、弾丸同士で相殺、二発目の弾丸でフィーアの拳銃を狙う。

「ッ」

まあ、その弾丸はフィーアが咄嗟に拳銃を手放した結果後ろの壁にめりこんだのだけど。もし握ったままの拳銃に当たってたら彼女の指の骨は折れてただろう。

私はさりげなくメールちゃんの前に出て、

「悪いわね。護衛任務の関係で手荒くいかせて貰ったわ」

「護衛……なるほど、そういう事か」

納得した様子のアインス。その隣で、

「馬鹿野郎！ テメエまた何してやがる」

と、シユウのげんこつがフィーアに炸裂し、

「シユウ、痛いです」

「当たり前だ！」

そして、フィーア以外のふたりは早速頭を下げる。

『先ほどの無礼も加え重ね重ね申し訳ありませんでした』

「琥珀、アン。どうしてこのガキを教育しなかったのよ」

早速ブチキレ寸前の司令がふたりに睨みつける。

「申し訳ありません」

謝る神簇。対しアンちゃんは、

「けど、組織の方針の説明、一般教養、毎度の説教どれも効果がなくて。仕方なく一歩間違えれば死のレベルで体罰も与えました。けど、効果がなくて」

と、言い訳。この時点で既に「終わった」と確信してるかの虚ろ目。物言いもどこか「アレを教育できるなら教育してみろ」と自暴自棄に

陥ったようにもうかがえる。

「具体的には？」

司令が訊ねると、アンちゃんは《No. 15 ギミック・パペット
—ジャイアントキラー》を出して、

「このカードを使つて粉砕機の刑を。デュエルディスクを没収した上で、死なないように跡が残らないように、だけど苦痛だけならセバスチャンと全く同じ経験をして頂きました。でも、若干トラウマになっただけで、肝心な奇行への改善が」

『うつぷ』

粉砕機の刑。セバスチャンと全く同じ経験。そのワードを前に私と神簇が揃つて口元を押さえ嗚咽に耐える。

一方メールちゃんが、

「粉砕機の刑つて？」

と、訊ねるので私は「はい」イヤホンを渡し、例の映像データを送信する。

「この動画ファイルを見ればいいのか？」

確認するメールちゃん。その顔は数秒で真っ青になり、

「アンおねーちゃん……わ、笑つてたあ」

と、私を盾にアンちゃんから距離を取り、びくびく怯えるメールちゃん。うん、そうよね。データ渡して思ったけど、これ小中学生に見せていい動画じゃなかったわ。

「フフ……あの時は楽しかったですね。そのまま正気に戻らず有頂天のままでいれたらどれだけ幸せでしたか。……ふふ、うふふ、あははははははははははははははは」

あ、アンちゃん完全に壊れてる。

「ちよつとアンちゃんしつかりして」

言いながら私は服の上から大きな乳房を揉み揉みし、

「アンタも大人しくしてろ」

と、司令に後ろから掌底を叩き込まれ、私は床に倒れる。以前ミス・トランに心臓潰された時と同じ攻撃だった。今回心臓潰れはしないけど、軽く発作を起こされ滅茶苦茶苦しい。

一方。当のフィニアちゃんは拳銃を拾い直してから素面のまま直立、アインスとシユウは未だ頭を下げていた。

私は床に倒れたまま、

「とりあえずメールちゃん。ふたりの頭上げさせてもらってもいい？」

「う、うん。……ふ、ふたりとも顔をあげてえ」

メールちゃんに言われ顔を上げるふたり。と、同時にシユウが。

「つて、そのチビスケが監査官のメールさんなのかよ」

と驚く。で、アインスがシユウの頭を押さえ、

「こらシユウ。失礼だぞ」

と。しかし、アインス自身もこの事実には驚いてたようで、

「し、失礼。ではそちらの御婦人の方は」

「私は高村 霧子。ハングドの司令代行よ」

「あ、あなたが高村さん!?!」

再びアインスが驚く。

そんなやり取りの間に、メールちゃんは少し落ち着いたらしく三人の下、いやフィニアの前に歩み寄る。

「フィニアちゃんだね？ 初めましてえ、メールだよ」

と、握手を求める。フィニアは握手を受け、

「初めまして、ハイウインド “処分人” フィニア・ヴィルベルヴィントです」

なんて、意外にも弁えた挨拶を。

メールちゃんはいった。

「君だよね？ 人を殺しちやメツて言われているのに殺しちやったり、駄目って言われているのに沢山悪い事しちやった子は」

「お言葉ですが監査官様、私が行ったのは殺傷ではなく殺処分です。

それに、私は自分のしたことを命令違反とは思ってません。組織の皆の為に必要な判断と認識しています」

「でもねー？ その殺処分をしたらみんなが悪い子って言われちゃうんだよ？ そうなったらハイウインドだって続けられなくなつて、みんな警察に逮捕されちゃうよ？」

しかしフィアは、

「構いません。でなければ私たちは今ごろ死んでいます」

「どうしてー?」

「殺さなければ殺されます。そして、私だけでなく関係者も狙われます。そして、殺処分現場を見られたなら、そこから情報が行き渡り、私たちは殺されやすくなります。ですから、生き残る為には一切の情報を外に漏らしてはいけません。すべて殺処分する必要があります」

「……」

彼女の言い分を、真正面からじつと受け止めるメールちゃん。

「監査官様、どうかご理解をお願いします」

ここで、フィアは一度頭を下げる。

「そっかあ」

メールちゃんは笑顔でいった。

「皆を助けたくて、ずっとやってたんだね。ありがとうー」

フィアの頭に手を伸ばし「いい子いい子」しながら、

「でもねー。皆を助けてくれるなら『殺処分』だと『足りない』のー」

「足りない、ですか?」

「うん」

メールちゃんは一回うなずいてから、私たちのほうを向いていった。

「琥珀おねーちゃん、沙樹おねーちゃん。わたし、いまから下に戻って資料室に向かっていーい?」

「え? 3人との面会はもういいのですか?」

驚き、訊ねる神簇。

メールちゃんは首を振って、

「まだかなー。だけど、その前に調べておきたい事ができちゃって。だから、資料室の確認が終わったらハイウインドの皆と一緒にお出掛けしたいんだけど、難しい?」

「お出掛け、ですか?」

反応したのはアインスだ。

「私たちは別に構いませんけど。シユウもフィアもいいかい?」

とのアインスの確認に、うなづくふたり。

メールちゃんは「わーい」と両手をあげて、

「じゃあ決まりー。ハイウインドの皆は悪いけど、もうちよつとだけ外出は控えてね」

と、メールちゃんは本当に真つすぐ資料室に足を運んで一通りの資料に目を通した。時に神簇とアンちゃんに質問し、時にハングド側への協力として情報を司令に伝え、その調査はハイウインドの活動を超え神簇家の普段の財政……というか家計簿のやりくりにまで及んだ。

こうして、ハイウインドと再び合流後、神簇に「案内してー」と頼んで連れ出した場所は、名小屋内の某商店街だった。大須のような観光地化した所ではなく、精肉屋とか朝採れ野菜のお店とか魚屋さんとか、そういう地元の人たちに愛される場所。

「フィーアちゃん、さつきお屋敷でした話の続きなんだけど、いいかなー?」

メールちゃんはいった。フィーアは隣で、

「はい、何ですか?」

「もしも、この商店街で銃を持った悪い人が現れて、フィーアちゃんやアインスおねーちゃんに向かって銃を撃ってきたら、フィーアちゃんだったらどうするの?」

「勿論、その場で殺害します」

はつきりと、フィーアはいった。

「でも、そんな事したら、この商店街の人みんなが見てるよー?」

「そうですね。だから全員殺処分します」

「警察がくるよー。殺人容疑で逮捕だって」

「そうならない為にも、通報される前に全員殺処分します」

聞いてると、フィーアの思考があまりにブツ飛んでるのがよく分かる。

「うん。フィーアちゃんならそう言うと思った」

しかし、メールちゃんには予想通りの反応だったようであんうんとうなずき、

「でもね。そんな事したら、いまフィーアちゃんが住んでる神簇家が

大変なことになっちゃうのー」

「どうしてですか？」

「フイーアちゃんたちって、いま神簇家のお屋敷でご飯食べてるよね？ 実はね、いまその神簇家で食べてるお肉とかお野菜とかお米とか、大体この商店街から取り寄せてるの。なのに、フイーアちゃんがここの人たち全員殺しちゃったら。みんなご飯が食べれなくなっちゃうよ？」

「え……？」

フイーアが小さく驚く。

「他にも、もしかしたら、いまこの商店街の中に琥珀おねーちゃんの友達がいたかもしれない。シュウおねーちゃんの恩人がいたかもしれない。なのに殺しちゃったら……琥珀おねーちゃんも、シュウおねーちゃんも悲しい悲しいしちゃうよ。それでもいいの？」

「……良くは、ありません」

『!?!』

初めて、フイーアから「殺して良くない」という言葉が出た。恐らく、ハイウインドたちにとつても初めての事例なのだろう。全員驚くのがみえる。

「だよねー」

メールちゃんはにこつとなり、

「あのね、人間も動物もお花さんも、みんな生きてるの。ただそこにいるんじゃないって、フイーアちゃんやおねーちゃんたちと同じように、心があつて、考えて、ご飯を食べて、家族やお友達がいて、お仕事をしつて、今日も昨日も明日もずっと生きてるの。フイーアちゃんも、お姉ちゃんが殺されたら悲しいよね？ 同じように、この世界のおんなひとりひとりに、死んだら悲しいって思う人がいるの。さっきのお家のご飯みたいに住なくなったら困っちゃう人もいるの。そして、誰かが悲しい悲しいなつたり困っちゃうたら、また別の人が悲しくなつたり困つたりするの」

そこまで言った所で、今度はアインスがフイーアの肩にぽんと手を添え、

「そして、いずれは悲しいも困ったも私たちの下に届いてしまう。私たちはみんなと繋がってるんだ。そういう事ですよ、メール様」
「うん、ありがとー」

うなづくメールちゃん。フィーアは訊ねた。

「なら、どうして人は人を殺さなくてはいけないのですか？」

「いけなくないさ。人が人を殺さなくていい人生もある」

即答するアインスに、フィーアは「え？」となる。アインスは「ふっ」と優しく、

「少なくとも、この商店街の人たちが普段から人を殺してると思うかい？」

「……」

無言のフィーア。アインスは続けて、

「私には、むしろ人の殺し方さえ知らないように見えるけど」

「私も、そう見えます」

まるで新発見でもした顔で、フィーアはいった。

「フィーアは、物心ついた頃から人を殺す術だけを教わって育ったのよ」

神簇が、そっと私に伝えてきた。

「彼女の故郷はドイツの孤児院。だけど、そこは裏で孤児たちを洗脳し人を殺す端末みたいに育て上げ、テロリストや傭兵部隊に派遣して生計を立てる違法組織だった。フィーアちゃんも何度かその派遣を経験してるわ。でも、ある日彼女がテロ組織で活動している最中、孤児院が軍隊によって制圧されてね。途端、いつ裏切ってもおかしくないと派遣先から命を狙われるようになって、逃走の末、貨物機に隠れ結果意図せず日本に入国。そのまま彼女は道徳も常識も教えられないことなく、その身ひとつで生きてきたの」

「ああ……」

それは、いままで私たちの言葉が通じなくてもおかしくない。

「アインスは……」

フィーアが訊ねる。

「アインスなら、監査官様の質問にどう答えるのですか？ この商店

街で銃を持った人が、私たちに銃を撃ってきたら」

「そうだね」

アインスは少し考える素振りを見せ、

「まず商店街の皆に被害が及ばないように立ちまわる。その上で相手を殺さず倒すと思う」

「銃は使わないのですか？」

「使うとしたら最終手段だ。その上使うならフィールで非殺傷にして、周りにはエアガンだ玩具の銃だと誤魔化さだろうね」

「それは、とても難しいことなのでは？」

「そうだね、商店街の皆ごと殺すより100倍難しい」

「でしたら」

「けど、楽だから殺していいわけではないからね。その上でなるべく問題のない形で対処しようと思うと、楽だからやる難しいから避けるなんて手段を選ぶ余地なんて生まれないさ」

「ッ……」

アインスの返事に、フィーアは明らかに驚愕していた。

「ま、急に全部理解しろってのも無理だよな」

そこへフィーアの背中をドンと叩くシュウ。

「シュウ？」

「いまは、無暗に人は殺すもんじゃねえって胸に刻んどけばそれでいいんだよ。アタシだって全部理解しちゃいねーんだしよ」

「そうなの、ですか？」

「人も動物も花もとか、完全に理解してたらメシ食べねえよ」

「その通りだ」

笑うアインス。

「だから、フィーアもできることなら難しく考えないで欲しい。君は優しい子だからすぐ理解できるはずだ」

「いえ、大丈夫です」

フィーアはいった。

「だから、監査官様は殺処分では足りないといったのですね。その程度なら分かりました」

「……」

シユウが目を見開き、きよんとする。けど、ほんの少しの間の後、
フィーアを全力でハグし、

「なんだよフィーア。分かるんじゃねえかよ」

「苦しいです、シユウ」

「それだけお前の理解の早さが嬉しいんだよチクシヨウ」

フィーアはこれ以上抵抗することなく、体をシユウに預けもみくちゃに愛でられる。しかし、フィーアの視線はどこか遠く遠くを眺めており、

「アインス、シユウ」

「ん、どうした？」

「どうしたんだい？」

優しく訊ね返すふたりに、フィーアはいったのだった。

「昔、気になることがあったんです。聞いてくれますか？」

と、突然語り始めたのだった。

——時刻は少し遡ります。

私の名前はフィーア・ヴィルベルヴィント。今年12歳。学校という所には行ってませんが、いずれ琥珀とアインスが派遣させると言っています。

そして、ハイウインド所属の“処分人”です。

これは、私がまだアインスやみんなと出会う前の話です。

その日、私はある暗殺任務を請けてまして、近辺調査で住宅街に出てました。普段つけてるバイザーを外し、髪も下ろしてたので変装にはなっていたと思います。

ただ、その時の私は手持ちのお小遣いが武器のメンテナンスや弾丸の費用諸々で全て消えた為に、数日間ほど公園の水道水以外口にしていなくて。突然体がぐらっと揺れたと思うと、気づくと見えるのは知らない天井。

自分が空腹で倒れ、誰かがそんな私を室内に運んだのだとすぐ分かりました。

「っ」

私はすぐ半身を起し、周囲の警戒。

ここはどこだろうか。見た所、民家なのは間違いなさそうでした。誰かの部屋でしょうか、デスクの上にはランドセルというらしいものが置いてあり、棚には「ち〇お」や「な〇よし」等とタイトルの書かれた分厚い紙媒体が並んでいます。

私は、そこに敷かれた布団に寝ていたのです。

服は倒れる前のままでした。腰のナイフや内側の胸ポケットに隠し持った拳銃もそのまま残っており、私は銃に手をかけじつと息を殺します。

すると、部屋の外から誰かがこちらに向かってくるのが分かりました。それは無警戒のまま扉を開け、

「あ、良かった。目、覚ましたんだね」

子供でした。恐らく年齢は私と同じくらい。ショートヘアでしたしズボンを穿いてたので男の子かと思ったのですけど、

「ここは？」

「ボクのお家。君、お家の前で倒れてたんだよ？ 大丈夫？」

「大丈夫、です」

「そっかー良かった。ボクは水姫、君は？」

「……女、ですか？」

「え？ あ、うん。やっぱりこんな格好だから男の子に見えちゃうのかな、えへへ」

と、水姫という子は苦笑い。

不思議なことに、私に何か危害を加える意思はないように映りました。

「クワトロ・ベル」

「クワトロちゃんって言うんだ。なんだかどこかの大尉みたいな名前だね」

私の偽名もバレる様子はありませんでした。なお、本名のフィーアはドイツ語で4、対しクワトロはイタリア語で4という意味だそうです。「どこかの大尉」が何を指してるのかは、いまでも分かりません。

「よろしくね、クーちゃん」

「クーちゃん？」

「うん、クワトロだからクーちゃん。もしかして失礼だった？」

「……いえ」

「これが私にとって初めての「あだ名をつけられる経験」でした。

「それで、クーちゃんは どうしてあんな所で倒れてたの？ それに、腰についてるのって」

「ッ」

「それがナイフを指してることに気付いた私は、すぐ後ろに飛びのいて構えます。けど、

「あ、ごめんごめん別に責めてるわけじゃないんだよ」

水姫はいいました。

「ただ、危ないもの持ってたから病院に連れて行くこともできなくて」
嘘をついてるようには見えませんでした。

不思議な感覚でした。

「いまでこそ私の周りには琥珀やアインス、シユウという人がいますけど、当時の私には彼女のように武器も警戒も持たず親しげに話してくる人なんていなかったのですから。けど、理解はできなくても嫌な感覚ではありませんでした。」

「大丈夫です。むしろ病院に連行されなくて助かりました」

「そっか」

水姫は、そこについてはこれ以上追及することなく、

「あ、そうだ。喉乾いてたりお腹すいてない？ 簡単なものなら用意できるよっ。」

「えっ？」

「遠慮しなくてもいいよ、これでもボク料理得意なんだ」

「いえ、そういう事では」

「なくて、払うお金がない。それに知らない人の食事は毒を盛られる危険が。だけど、言いかけた所でした。私のお腹から凄い音が鳴ったのは。」

「……」 「……」

お互い、数秒ほどの沈黙。それから、

「あははは、お腹すいてたんだね。ついてきて、すぐ作るから」

なんて言う水姫。そのまま私はリビングキッチンに案内され、出されたのはおにぎりに味噌汁、そして野菜とウインナーの炒め物。調理工程を見たけど毒を盛った様子は見られませんでした。味噌汁と炒め物に至っては本人が味見されましたし。

何より、倒れるまで空腹だったせいでしょう。目の前に出された食べ物の前に「毒が入っててもいい」という気持ちに至ってしまったわけ。つい私は毒見されてないおにぎりから手をつけてしまいました。

「温かい、美味しい」

それがおにぎりを食して最初の感想でした。当時の私にとって、食事というのは栄養補給でしかなく、普段食してるものはバナナ、カロリーメイト、ドライフルーツ。温かい手料理が美味しいという事を忘れていた私は、孤児院時代に傭兵として派遣された先で初めて食べたハンバーグを思い出しながら、気づけばぺろりと平らげました。「ごめんね。おかわりは用意できなくて」

食べ終えた食器を洗う水姫。私はどうすればいいのか分からず座ったまま。何分初めての経験でしたし、どうして食事をごちそうされたのか分からないのです。このまま立ち去っていいのか、仕事の話でもされるのか。

すると突然、水姫の体が崩れ、その場に倒れ込むのが見えたのです。

「!？」

急いで私は水姫の下へ向かいます。そして、周囲の確認。誰かが水姫に向かって攻撃したのか。しかし、窓の隙間が開いてるわけでも、破壊された形跡もありません。

水姫は。

「けほっ、けほっ」

と、咳をし、自分の胸を掴み苦しそうに蹲っています。

何が起きてるのか分かりませんでした。

私は一体どうすればいいのか。考えた末、ふと思ひ至り私は手持ち

のホルダーからフィール・カードから目当ての1枚を抜き取り、

「水姫。これを握っていきってください」

それは《No. 49 秘鳥フォーチュンチュン》でした。このカードには「自分のスタンバイフェイズ毎に自分は500ライフポイント回復する」効果を持つので、水姫に持たせればオートヒーリング機能が働くのではと思ったのです。

私の読みは当たったらしく、最初は苦しそうだった水姫の息が次第に穏やかになっていくのが分かりました。

(良かった)

心の中で思い、私は「え？」となりました。

人を殺す術しか知らない私が、誰かの命を救ったことも、誰かが助かって安堵することも、生まれて初めての体験だったのですから。いえ、遠い昔にはあったのかもかもしれませんが。

「水姫、聞こえますか？」

私は彼女の耳元でいいました。

「このカードは水姫にあげます。ですけど、誰にも持つてることを教えないでください。それと、これを持つていることで危険な目に遭うようでしたらすぐ捨ててください。いいですね？」

この言葉が水姫に届いてたかは分かりません。水姫はこの後すぐ寝息を立て始めたのですから。

私のせいで彼女が苦しんだのかは分かりません。ただ、これ以上ここにいると彼女に危害が及ぶ。

そう考えた私は、せめて私が寝てた部屋から布団を彼女にかけてあげ、私はそつと家を立ち去りました。

これで話が終われば良かったのですが、事實はそうもいきませんでした。

その日の夜を挟んだ明け方。私は殺処分の実行に出ました。

ターゲットは水姫の家から数軒先に住む川澄という36歳の男。元フィール・ハンターズで当時黒山羊の実に所属していた人間です。詳細は伏せますが、彼はスパイとして黒山羊の実に潜入しており、気づいた同胞の手によって暗殺依頼が出されました。

調査の結果、男は朝早く表の仕事に向かうことが判明した為、近辺で他に散歩などに出歩く人はいないと調べをつけた上で、私は家を出た所を撃ち殺す事に決定。

結果は成功。私は男の家の屋根の上から、玄関を出て出勤する男を後ろから頭部と心臓を狙撃。男は口ひとつ開かぬまま血を流し倒れます。

「殺処分、完了」

私がそう呟いた、その時でした。

「あ……」

近くから第三者の気配。すぐ辺りを見渡すと、道路に立ち、私を見上げるパジャマ姿の女の子。

「水姫……」

どうして、ここに。

「クーちゃん。いま何した……の?」

お互い、発した言葉は聞き取れません。けど、私は読唇術の心得があつた為、分かってしまったんです。水姫が私の殺処分の瞬間を見ていたことに。

「あ……あ……あ……」

水姫は怯えていたと思います。とはいえ、私の推測でしかありませんけど。

すでに私は、先の殺処分に使った拳銃を仕舞い、代わりにドラゴンブレス弾を装填したショットガンに持ち替え、

「殺処分……続行」

躊躇いなく水姫を撃つたのですから。

舞い上がる爆炎、巻き込まれる水姫の体。万が一の為、私は死亡確認を待ちましたのですけど、できませんでした。

彼女が死ぬ瞬間をみて、突如全身が寒気を覚え、吐き気を催し、胸が重い痛みを襲われたからです。私は、舞い上がる炎を見ることができなくなり、体が逃避を求め、それに抗うことができず、私はその場から立ち去りました。

その時、私に一体何が起きたのか、その答えはいまでも判明してお

りませんでした。

「でも、いま今日やっと初めて、答えが見つかった気がします。まだ言葉で表せるほどではありませんけど」

語り終えたファイアちゃんは、そう最後を締めくくった。

アインスは、ファイアの体をそっと抱き寄せる。

「殺したくなかったんだね」

「恐らく」

「躊躇いたかったんだね」

「はい」

「見逃したかったんだね」

「例え、通報され追われる身になつたとしても」

「やっぱり、君は優しい子だ。殺し屋には向かない」

そういつてアインスは胸に抱いたまま彼女の背中をぼんぼんと叩く。

ファイアは悲しい顔で、

「こういう時、私はどうすればいいのですか？」

「泣けばいいんだ」

「泣くとは、どうすればできるのですか？」

「悲しくて辛くて嘆きたい。そんな気持ちを認めてあげればいい。そうすれば、体が勝手に教えてくれる」

「わかり、ました」

アインスがいう通り、本当のファイアはとても優しい子だったのだろう、そして凄く素直な子でもあったようだ。

ダムが決壊したかのように、アインスの胸で号泣するファイアをみて私は思ったのだった。

「ところで」

私はふたりの光景を眺めながら、そっとメールちゃんに訊ねる。

「もしかして、さっきの語りで出てきた水姫って」

「うん、間違いなくあの水姫ちゃんだね」

肯定するメールちゃん。

「あの子、名小屋の子だったの？」

「そうだよー」

知らなかった。

「それでね、いつだったかなー。確かに、前に一度水姫ちゃん事件に巻き込まれて怪我したことがあったの。だから、フィーアちゃんが会った子はあの水姫ちゃんの間違いないと思う」

「怪我？ 死にかけたじゃなくて？」

「うん。火傷だけど軽傷ー。少なくとも誰かに発見されたときは」

「聞かせてくれる？ その話を」

訊ねると、メールちゃんは「うん」とうなづく。

メールちゃんの話はこうだった。

ある日の早朝、道端で倒れている水姫ちゃんが発見された。水姫ちゃんは軽い火傷を負っているが命に別状はなく、しかし、すぐ近くの家ではひとりの男性が血を流して死んでおり、傷口からすぐ射殺と判断された。

水姫ちゃんは軽傷な割に昏睡状態で、目覚めたのは次の日の昼。しかも、母親が水姫に1枚のカードを握らせた結果、数分で起き上がったらしい。水姫ちゃん曰く、事件前日にある人から貰ったお守りらしく、それを持つてると凄く気分がいいのだとか。母親はそれを思い出して握らせたとの事。

しかし、水姫ちゃんは目覚めた後、なぜかお守りのカードを持つことを嫌がりだし、いまは母親が預かってる。また、水姫ちゃんは件の男性の死亡について知っていたらしく、覚えてないといまも口を硬く閉じているらしい。第一発見者の水姫ちゃん以外に手がかりはなく、この事件は迷宮入りしたらしい。

「実は水姫ちゃん、昔から凄く体が弱くて。よく胸の発作で倒れてたりしてたの」

「えっ？」

水姫ちゃんが？

「だからねー。フィーアちゃんのお話だけど、もし水姫ちゃんと会ってなくてカードを渡してなかったら。水姫ちゃん今頃お空の上にい

たかもしれないね。そういう意味だと、実はフィーアちゃん水姫ちゃんを殺しかけたどころか命を救ってくれてるの。それに、あの日だけの話じゃなくて、いまはカードを手元に置いてなくても、あの日から水姫ちゃん少し調子がいい日が多くて。たぶん、数時間でもカードを握ってた効果がいまも出てるんじゃないかなー」

そういえば、思えば水姫ちゃんはボーイッシュな見た目に反して、まだ子供らしい無邪気さを残してる割にはしゃぎ回るといふ事はなかった。浴衣だって最初から気崩してたのは楽な姿勢でいる為だろうし、ひとりだけ料理を食べきれず残してた。ヒントは沢山あったのだ。水姫ちゃんの体が弱いという事実に通りつくための。

私はフィーアを見ながら思った。

(やればできるじゃない、このクソガキ)

そんな時だった。

商店街の中にある数軒先の玩具屋から5人ほどの子供たちが出てきたのだ。

「あ」「あ」

お互いのサイドから、誰かが声を出す。だって、その5人って冥弥ちゃん、ナーガちゃん、水姫ちゃん、彩土姫ちゃん、金玖ちゃんの5人だったのだから。

「メール、鳥乃さん。どうしてここに」

ナーガちゃんが訊ねる。けど、私たちの目は真っ先に水姫ちゃんのほうへ。

「あ……あ、あ……」

水姫ちゃんは怯えていた。視線の先は間違いなくフィーア。そのフィーアが呟く。

「水姫？……もしかして、生きて」

「うわ、うわあああああああつ」

直後びくつとなり、背を向け逃げ出す水姫ちゃん。

『ま、待てっ』

手を伸ばそうとするナーガちゃんに金玖ちゃん。こうしてみると、ちゃんと中身も双子の姉妹なんだと思う。……も。

「あんなに怯えた水姫は初めてだ。……なるほど、これが萌えという感情か」

「何馬鹿なこと言ってる」

前言撤回。金玖ちゃんの頭をパシンとはたくナーガちゃん。そして私たちに向かつて、

「メール、鳥乃さん。これは一体どういうことなんだ」

答える前に、メールちゃんがファイアに、

「ねー？ 話に出てた水姫ちゃんって、あの子で間違いない？」

「はい。間違いありません」

うなづくファイア。

そこへナーガちゃんのタブレットに通信が入る。

ナーガちゃんがスピーカーモードで出ると、

『ナーガちゃん、大変だ』

彩土姫ちゃんだった。気づくと、水姫ちゃんだけじゃなく彩土姫ちゃんまでこの場にいない。恐らく追いかけたのだろうか。

「何があつた彩土姫？」

『水姫ちゃんが、逃げる途中で男の人とぶつかって絡まれてるんだ』

「何？」

『本当なら、あいつの金的蹴り飛ばして一緒に逃げたい所なんだけど。あいつ……ナイフを取り出して』

その言葉に真っ先に反応したのはファイアだった。

「水姫！」

ファイアは駆けだし、

「あ、待ってーファイアちゃん」

それを慌てて追いかけるメールちゃん。そしてハイウインドに神簇姉妹。なお、現在アンちゃんは車椅子だけど意外と速い。

「彩土姫……場所は……どこ？」

冥弥ちゃんが横から訊ねると、

「商店街の裏通り。出口手前の交差点を左の細い道進んだ所」

「分かった……彩土姫は見つからないように隠れてて。……危険だから」

普段は表情が少なく、趣味のBLを熱く語る時さえ殆ど素面だった冥弥ちゃん。だけど、いまこの瞬間は焦りとか怒りとかそういうのが強く顔に表れてる……ように見えた。

「ナーガ。ここは……お姉ちゃんに任せて」

と、駆け出す冥弥ちゃん。

「お、おい。無茶だ姉さん」

それをナーガちゃんが追いかけて、その横を私と司令は走る。

「鳥乃さん。どういう事なんだこれは」

訊ねるナーガちゃんに私は、

「水姫ちゃん、前に近所の殺人事件に巻き込まれて火傷を負ったでしよ」

「ああ」

「その時の犯人がさっきのポニテの子供よ。名前はフィーア・ヴィルベルヴィント。処分人の名を持つ殺し屋よ。そして、水姫ちゃんの命を救ったカードを渡した恩人でもあるわ」

「処分人の名は私も知っている。そういう事か」

説明を終えた辺りで、私たちは彩土姫ちゃんの指定した裏通りに辿り着いた。

そこでは、服を破かれブラの肩紐が露になった水姫ちゃんが尻餅ついた姿勢で何とか逃げようとし、それを黒コートの男がナイフ片手にわざとじりじり追いかけてっこを愉しむ様。フィーアたちは道を間違えたのかまだ到着していない模様だった。

「こ、こないで……誰か助けて」

「ぎひひ。怖がるなよ、ちよつとお医者さんごっこするだけなんだからさあ」

ズボンにピラミッドを建設し、露骨に犯る気満々な黒コート。

まったく、色っぽい強○現場も相手がガキじや意味ないじゃない。普通やるならもつと大人の女性でしよ。なんて、私は下種なこと考えながら懐から拳銃を取り出す。さて、おじさんのきんのたま二つほど潰すとするか。

そう、構えようとした所。

黒コートの顔面が突如爆発に巻き込まれたのだ。

「ぐあつ、誰だ！」

瞬時にフィールで火傷を防いだ黒コート。辺りを見渡すと、私たちとは別の曲がり角からショットガンを構えたファイアが現れた。

「水姫は殺させない」

再び、ファイアはショットガンからドラゴンブレス弾を撃つ。黒コートの顔面に火花が真つ直ぐ襲い掛かり、再び爆発。

「かアアツ」

黒コートはフィールの籠った腕で爆発を振り払い、

「何しやがるこのガキが！ こうなれば手前えから先に犯つて殺る」

黒コートの男はデュエルディスクを出し、赤外線をファイアに放つ。この赤外線をデュエルディスクで受ければファイアは強制デュエルを仕掛けられてしまうのだけど。

「元より、私の狙いはデュエルです」

と、ファイアは自分からデュエルディスクを赤外線に当てに行く。そして、小走りで水姫の前に立ち。

「これでお前は水姫を追いかけることはできない。水姫、いまのうちに逃げてください」

「クーちゃん？」

どちらに怯えてるのか、呟く水姫ちゃん。

「ごめんなさい。クワトロ・ベルは偽名です。私の名前は」
と、いった所でデュエルが始まり、

ファイア

LP4000

手札4

□ □ □ □ □ □
□ □ □ □ □ □
□ □ □ □ □ □
□ □ □ □ □ □
□ □ □ □ □ □

黒コート

LP4000

手札4

「〃処分人〃 フィーア・ヴィルベルヴィント。殺し屋です」

フィーアは改めて名乗るのだった。

「処分人だどっ」

で、黒コートのほうも彼女の異名は知ってたみたいで、自分が誰に喧嘩を売ったのか気づいて顔が青ざめる。

「水姫」「水姫ちゃん」

その間にナーガちゃんとメールちゃんが駆け寄り、水姫ちゃんの肩を担いで離れる。

「水姫……もう、大丈夫だから」

冥弥が戻ってきた3人の前に立ち、盾になりながら水姫の頭を撫でる。

「ごめん、みんな。……ボク」

しゅんとする水姫ちゃんにナーガちゃんがふつと優しく微笑み、

「謝らなくていい。状況は鳥乃さんから聞いた。自分を一度殺そうとした奴が目の前に現れたんだ。逃げて当然だ」

「……うん」

皆に囲まれて、ほっとした様子の水姫ちゃん。

私は、冥弥ちゃんの更に前に立って、

「ほら、あなたも後ろに下がって」

「ですけど……」

目で訴える冥弥ちゃん、そしてナーガちゃんも。

「あなたたちの仕事は盾になる事じゃないわ。不安でいっぱいの水姫ちゃんの心を皆で抱きしめて温めること、違う?」

「……わかりました」

うなずき、水姫ちゃんの傍に寄り添う冥弥ちゃん。

「すまない、鳥乃さん」

続けてナーガちゃんもいので、彼女には、

「後ろは任せるわ」

「!? わかった」

と、その場で周囲に気を配るナーガちゃん。

これで、彼女の危険はほぼなくなった。後はファイアが黒コートを「殺さず」対処してくれたらだけど。

「私の先攻。手札から永続魔法《地獄門の契約書》を発動。1ターンに1度、デッキからDDを手札に加える。効果で私は《DDドッペル》手札に加える」

当然のように初手地獄門を引き当てるファイア。その効果で必要なカードをサーチすると、

「続けて手札の《DDスワラル・スライム》の効果。このカードは手札のDDと融合魔法カードなしで融合する。私は《DDスワラル・スライム》と《DDドッペル》を融合。時空と繋がりし無数にして単一の個よ、神秘の渦とひとつになって、新たな王の触媒となれ。融合召喚！ 目覚めろレベル6 《DDD烈火王テムジン》！」

早速、その《DDドッペル》を使って融合召喚。

「《DDドッペル》は1ターンに1度、墓地に送られた場合にデッキから《DDドッペル》を手札に加える」

そして、《DDドッペル》の効果で展開による手札消費を最小限に留め、

「ステージ解放。開け、時空の扉」

彼女の背後に電流が走り、空間に裂け目を作るようにリンクマーカーを出現させる。って、え!? いまフィールドにいるのはわざわざ《DDスワラル・スライム》を使って出した融合モンスターなのに。

「召喚条件はDDモンスター1体。私は《DDD烈火王テムジン》をリンクマーカーにセット。リンク召喚、目覚めろ《DD魔導賢者ゲイツ》！」

リンクマーカーから竜巻が出現し、テムジンが取り込まれる。こうして出現したのは、0と1の数字だけで構成されたマントに体を包む、眼鏡をかけた一体の悪魔。

「《DD魔導賢者ゲイツ》のモンスター効果。このカードは自身をり

リリースして墓地のDDモンスターを手札に加える。かつ、それがエクストラデッキに戻る場合、かわりに特殊召喚が可能。私はゲイツをリリースし、墓地の《DD烈火王テムジン》を特殊召喚」

「あっ」
観戦してた私は思わず声を出す。なるほど、融合召喚したテムジンはEXモンスターゾーンに置かれていた。それをメインモンスターゾーンに移す為にゲイツを介したのだ。

「チューナーモンスター《DDナイト・ハウリング》を通常召喚。このカードの召喚成功時、墓地のDDモンスター1体を特殊召喚する。私は《DDドツペル》を蘇生」

闇の中からひとつの口が出現し遠吠えを放つ。すると、騒音に目覚めるように、1体のヒト型のシルエットが出現。

「私はレベル5《DDドツペル》にレベル3《DDナイト・ハウリング》をチューニング。次元の扉よ、呪われし邪竜の血を触媒に、不死身の英雄を生み出せ。シンクロ召喚！ 目覚めるレベル8《DD呪血王サイフリート》！」

現れたのは巨大な剣を持つひとりの騎士。その攻撃力は2800。そして、モンスターが特殊召喚されたということは。

「《DD烈火王テムジン》効果を発動。墓地から《DDドツペル》を特殊召喚する。守備表示」

融合モンスターとシンクロモンスターを揃えた上、駄目押しとばかりに再び現れる《DDドツペル》。その守備力は上級なだけあって2100。

「カードを1枚セット。ターンを終了」

と、フィリアの先攻の布陣が終了。今回はエクシーズモンスターこそいないも、手札に《DDドツペル》を握った上で、場に5枚のカードと、アドバンテージが2増えている。

フィリア

LP4000

手札1（《DDドツペル》）

「《地獄門の契約書》」□「《伏せカード》」

「《DDD 烈火王テムジン》」「《DD ドツペル (守備)》」

「《DDD 呪血王サイフリート (ファイア)》」――

□□□□

□□□□

黒コート

LP4000

手札4

「っ、やってやる。やってやるさ。俺のターン」

黒コートの男がカードを引く。瞬間、男の顔がにやつとなり。

「手札から《墮天使イシュタム》の効果発動だ」

墮天使!?

「手札からイシュタム自身と《墮天使スペルビア》捨て、デッキからカードを2枚ドローする」

墓地に置いて効果を発揮するスペルビアを捨てつつ手札交換する男。って、それよりも。

「まさか、黒山羊の実」

「黒山羊の実？ なんだそれは」

反応するナーガちゃん。そこへメールちゃんが、

「それって、名小屋近辺で活動してるシユブニニグラス信仰の宗教組織？ ファーアちゃんの話でも出てきたけどー」

「そ」

私は肯定する。ナーガちゃんは半眼で、

「シユブニニグラスって、クトゥルフとかいう架空の神話じゃないか。何でそんなものを信仰してる組織があるんだ」

「そこまでは知らないわ」

私がいようと、メールちゃんが。

「あの神話の邪神は実在するよー」

『え？』

私とナーガちゃんは同時にいった。

そんな間にもデュエルは進行中。

「ククク。スペルビアの墓地送りを許したことを後悔するんだな。俺

は魔法カード《墮天使の戒壇》を発動。このカードは俺の墓地から墮天使1体を表側守備表示で特殊召喚する」

スぺルビアの効果を利用しようと、早速墮天使用の蘇生カードを使う男。^{ロリコン}しかし、

「無駄です。《DDD呪血王サイフリート》のモンスター効果。この効果は相手ターンでも使え、1ターンに1度、フィールドの表側表示の魔法・罠カード1枚の効果を次のスタンバイフェイズまで無効化する。手札からの通常魔法もフィールドで発動するルール上、この効果でも問題なく無効が可能」

サイフリートが飛び掛かり、《墮天使の戒壇》を大剣で突き刺す。魔法カードのエネルギーが暴走を起こすも、サイフリートはその身で全て受けきり、エネルギーを出しきらせて効果を無効に。通常魔法なので《墮天使の戒壇》はそのまま墓地へと送られる。

「チツ、なら《墮天使ユコバック》召喚。その効果でデッキから《墮天使ゼラート》を墓地に送る。そして《モンスターゲート》だ！ ユコバックをリリースして効果発動」

《モンスターゲート》は通常召喚可能なモンスターが出るまで自分のデッキの上からカードをめくり、そのモンスターを特殊召喚するカード。男は1枚目をめくると、

「早速きたぜ。《墮天使テスカトリポカ》特殊召喚」

見事レベル9最上級の墮天使を呼び出してしまう。攻撃力も2800とサイフリートと同じ。

「テスカトリポカのモンスター効果だ。1000ライフ払い、墓地の墮天使魔法・罠カード1枚の効果を適用する。俺が適用するのは当然《墮天使の戒壇》だ！ ヒヤヒヤヒヤ、もうすぐ処分人様のカラダで性欲処理できると思うと興奮がマツハだぜ」

黒コートのロリコン LP4000↓3000

早速、危ない発言がソリッドビジョンの名前表示に反映される中、一度はエネルギーを出し尽くされた《墮天使の戒壇》が再び姿を現す。そんな中ファイアは。

「監査官様」

「なーに？」

「性欲処理とは何ですか？ どうやって発動するのですか？」

と、よりにもよってメールちゃんにドがつくピュアな発言。

メールちゃんは顔真っ赤になって、

「い、いまは知らなくても問題ない効果かなー」

「わかりました」

そして納得しちやうファイア。

すると、隠れてた彩土姫ちゃんがニヤニヤと合流してきて、

「そんな事いつて、本当は何も知らないあの子に手取り足取り調教おしえたいんでしょ？」

と、後ろからがばつとメールちゃんに抱き着く。

「さ、彩土姫ちゃん。そ、それは……」

メールちゃんは顔を赤くしながら、数秒ほどファイアを見、股間を両手で押さえながら、

「そ、そんなことないよお」

と首をブンブン横に振る。

「お前ら。いま正に“それ”をされかけた水姫姉さんがいるのを忘れてないか？」

と、ナーガちゃんが静かに叱ると、

「あ」「あ」

と、彩土姫ちゃんメールちゃん。

「ご、ごご。ごめん水姫ちゃん」「ごめんねー水姫ちゃん」

ぺこぺこ謝るふたり。

しかし、当の水姫ちゃんは幸運にも姉妹の会話が耳に届いてないよ
うで、

「クーちゃん。ううん、ファイアちゃん」

と、怯えながら。しかし彼女の勝利を必死に願っていた。が、その
顔は突如絶望に染まり、

「あ、うそ……な、何なのあれ」

と、全身を震わせる。見ると、ロリコンの場には《墮天使テスカ
トリポカ》に加え、《墮天使スペルビア》と《墮天使ゼラート》の姿があつ

ただ。

「クックック、《墮天使の戒壇》の効果で《墮天使スペルビア》を蘇生。さらにスペルビアは自身が蘇生された際に続けて墓地の天使族を蘇生する。そして、この効果で特殊召喚した《墮天使ゼラート》には「有頂天の様子で男はいうも、直後一筋の光が《墮天使ゼラート》に落ち、その身を光に変え消滅させる。」

フィーアがいった。

「永続罫《戦乙女の契約書》の効果。1ターンに1度、手札のDDか契約書を1枚墓地に送り、フィールド上のカードを1枚破壊。私は《DDドツペル》を墓地に送り、《墮天使ゼラート》を破壊する」
「な……」

驚く黒ロリコン。

「さらに《DDドツペル》が墓地に送られたことで、デッキから3枚目の《DDドツペル》をサーチ

「クソォー！ なら魔法カード《墮天使の神郡》を発動だ。ターン終了時まで俺の墮天使は戦闘では破壊されず、相手モンスターを戦闘破壊する度にデッキから墮天使をサーチする。これで《墮天使テスカトリポカ》で邪魔なサイフリートを破壊可能……に？」

言いかけたロリコンの口が不意に止まる。何故なら、

《DDD呪血王サイフリート》 攻撃力2800↓3800

《DDD烈火王テムジン》 攻撃力2000↓3000

フィーアのモンスターは攻撃力が1000ポイントほど上がっていたのだから。

「《戦乙女の契約書》第二の効果。このカードが魔法・罫ゾーンに存在する限り、私の悪魔族モンスターの攻撃力は、相手ターンの間1000アップする」

「なんだとおおっ！」

何よこれ、私は思った。あの子のデュエル全く隙がないじゃない。

ミストランに瞬殺されてた時でさえ、私よりデュエルの実力が上なのだと感じたけど、まさかここまで実力に差があるなんて。

「す、凄い」

水姫ちゃんも、相手の驚異的な最上級モンスターの展開を軽々対処するファイアに目をぱちくり。

「畜生、なら俺はカードを伏せてバトルフェイズ。テスカトリポカで《DDドッペル》を戦闘破壊。効果でデッキから2枚目のテスカトリポカを手札に加える。俺はこれでターン終了だ」

ファイア

LP4000

手札1(《DDドッペル》)

「《地獄門の契約書》」□「《戦乙女の契約書》」

「《DDD烈火王テムジン》」□□

「《DDD呪血王サイフリート(ファイア)》」□

□「《墮天使テスカトリポカ》」□「《墮天使スperlビア(守備)》」

「《伏せカード》」□□

ロリコン

LP3000

手札1(《墮天使テスカトリポカ》)

テスカトリポカのサーチこそ許したものの、結果的にはまるで掌で転がされるように殆ど何もできずターンを終えたロリコン。

「私のターン。デッキからカードをドロし、契約書のリスクを払う。

《地獄門の契約書》と《戦乙女の契約書》の効果で私はスタンバイフェイズ時にそれぞれ1000ダメージを受ける」

ファイア LP4000↓2000

そうだった。彼女の使う契約書カードは無暗に沢山発動すると、すぐ自分のライフが尽きてしまう諸刃の剣だったのだ。

一気に半減するファイアのライフ。けど、何故だろうか彼女が負ける姿は全くイメージできない。

「まずは《戦乙女の契約書》の効果を発動。手札の《DDドッペル》捨てて《墮天使テスカトリポカ》破壊。デッキにはすでに《DDドッペル》がゼロのため、手札は補充されない」

「なら手札の《墮天使テスカトリポカ》の効果だ。こいつは俺の墮天使が戦闘か効果で破壊される場合に、手札の自身を身代わりにする効果

を持つ」

「構いません」

「ここまででは想定通りとばかりフィーアはいい、

「続けて《地獄門の契約書》の効果。デツキから今度は《DDD壊薙王アビス・ラグナロク》を手札に加える。さらに墓地の《DDスワラル・スライム》の効果。このカードを墓地から除外する事で、手札のDDを特殊召喚できる。私は《DDD壊薙王アビス・ラグナロク》を特殊召喚」

流れるようなプレイングで出現したのは、玉座に座った1体の悪魔。レベルは8で攻撃力2200守備力3000と、さらっと出てきていいカードには見えない。

「《DDD烈火王テムジン》のモンスター効果。DDが特殊召喚された事で、私は墓地から《DD魔導賢者ゲイツ》を蘇生。さらに《DDD壊薙王アビス・ラグナロク》の効果。1ターンに1度、このカード以外の自分フィールドのDDを1体をリリースし、相手フィールドのモンスター1体を除外する。私はゲイツをリリースし、テスカトリポカを除外する」

「うっ」

今度こそフィールドから退場するテスカトリポカ。こうして、ロリコンの場は守備表示のスペルビアに伏せカードが1枚。

「バトル。《DDD呪血王サイフリート》でスペルビアに攻撃」

サイフリートの放つ一撃がスペルビアを両断。これでロリコンを護るものはなくなった。いや、一応伏せカードはあるけど、このターンはまだサイフリートの効果を使用していない以上、そのカードの効果を通るとは思えない。

「終わりです」

フィーアは、腰のホルダーから拳銃を取り出し、銃口をロリコンに向ける。

「っ!？」

ハツと顔を青ざめるロリコン。

「ころ、殺さないでくれ。何でもするから、い、い、命だけは助けてく

れ」

自分に向けられた銃を前に、改めて相手がただの子供じゃないと思
い知ったのだろうか。途端、必死に懇願するも、

「水姫は私の初めての友達です。それを傷つけるお前を許す気はな
い」

「!? 待つんだ。ファイア!」

慌ててかけ出すアインス。しかし、彼女の手が届くより早く、

「アビス・ラグナロクとテムジンで直接攻撃。——非殺処分、執行」

攻撃と同時に撃ったファイアの弾丸は、ロリコンの足元に転がっ
た。

ファイアは、ついに男を殺さなかったのだ。

ロリコン LP3000↓800↓0

デュエルが終わり、ソリッドビジョンが停止する。直後、ファイア
の発砲で腰を抜かしたロリコンを、空から伸びた鎖が拘束する。

「悪いがこのまま逮捕させて貰うぞ」

ナーガちゃんだった。どうやら《デモンズ・チェーン》を使ったら
しい。

「普通に110番通報でもいいが、全損中とはいえ一応相手はファイ
ール持ちだ。できれば特捜課辺りと連絡が取ればいいのだが、鳥乃さ
ん誰かと連絡は取れないか?」

「あー、まあ。いるにはいるけど」

面識ある特捜課といえば永上さんだ。しかし、私は周囲を見る。

ファイア、ナーガちゃん、メールちゃん、彩土姫ちゃん、水姫ちゃ
ん。それに姿は見えないけどヒロちゃんもいるだろう。そんな所に
永上さんを送るわけにはいかない。

仕方ない。どこか別の人に頼んで時間稼ぎして貰おう。

「分かったわ。ただ、特捜課の人も忙しいだろうから、まずはしばらく
こいつの身柄を預かってくれる人の所に放り込むわ」

「警察は犯罪者を逮捕するのが仕事なんだがな、まあいい」

「ありがとう」

ナーガちゃんから許可を取った所で、私はタブレットの電話帳を開く。ゲイ牧師は黒山羊の実だから使えないとして、なら。

「もしもし、突然の連絡すみません。オスカルさんいま大丈夫？」

私はゲイ牧師の兄でゲイレスラーの堀尾オスカルさんMISSTION⁴参照に連絡を取ることにした。

『今日はオフですから大丈夫ですぞ。自主練の途中でしたが、どうされましたか？』

「まあ、ちよつと意図せず男の犯罪者を捕えちゃって。そいつを特捜課に連行するまで預かって欲しいって話」

『なるほど。ですがしかし、どうして私めに？』

「そりゃあ。……特捜課来るまで、食べる？」

『頂きます』

即答だった。

「助かるわ。じゃあ、いまからそっち送るから。ファイル抜きは済んでいるから満足するまで愉しんだらそっちで処理しちゃって」

『感謝します』

そんなわけで、私は《ワーム・ホール》を開き、ロリコンを穴の中に蹴り飛ばして送り込む。

「ま、こんな所ね。後の処理はこちらで任せて頂戴」

と私は振り返りいうも、

「……鳥乃さん。いまどこに送ったんだ」

と、ドン引きした顔で訊ねるナーガちゃん。

「ん？ 堀尾オスカルっていうゲイレスラーの所」

「それ……この人？」

そういって、冥弥ちゃんがタブレット画面でウェブを開き、オスカルさんのプロフィールを表示する。

「そうそう。この人この人、知ってるの冥弥ちゃん」

「……ファン」

冥弥ちゃんはいった。

「え？」

「……大ファン」

「ええ……」

まさかの発言にドン引きする私。

「ドン引きしたいのは私のほうなんだが」

と、ナーガちゃん。彼女は間違いなく察してるのだろう。これから、あのロリコンが逮捕までにどんな経緯を辿るのかということに。

そんなわけで《ワーム・ホール》の先から「ありがたく頂きましたぞ」と返事がきたので、穴を閉じようと思った所、冥弥ちゃんが私の裾を引っ張り、

「私……あの奥、行っっていない?」

「駄目」

私は穴を閉じた。

そんな一方、フィーアちゃんサイドでは。

「……」

銃口を下向け、しかし「これで良かったのか」と複雑そうな顔を浮かべるフィーア。アインスはそんな彼女を後ろから包むように抱き寄せ、

「敵を殺さなかったのは初めてかい?」

「はい」

フィーアは小さくうなずいた。

「護れたのでしょうか? これで、水姫を、みんなを。……殺処分しなかったことで、やはりまた狙われるのでは」

「大丈夫、とは言い切れないだろうね。……けど、間違いなく護れたものはある」

と、アインスはフィーアに後ろ向かせる。そこには、姉妹の誰かから上着を借りた水姫ちゃんの姿。

アインスは続けて、

「少なくとも、彼女はこれ以上傷つかずに済んだ」

「水姫」

フィーアは、恐る恐る一步を踏み出す。すると、水姫ちゃんは一瞬びくつと怯えてしまい、

「あ」

踏みとどまるフィア。

しかし、そんな彼女に、今度は水姫ちゃんから一步踏み出し、
「ありがとう。クーちゃ……ううん、フィアちゃん」

「怖く、ないのですか？ 私」

訊ねるフィアに、

「……怖いよ」

躊躇いながら、それでも口に出す水姫ちゃん。

「でも、嬉しかった」

「水姫……」

「ボクね、ずっと体弱かったから友達って全然いなかったんだ。だから、あの時、痛かったし、怖かったし、でも何より友達ができたって思ったのボクだけだったのかなって思って、辛かった。……だから、だからね。さつきフィアちゃんが友達って言ってくれて、すっごく嬉しかった」

そういつて、水姫ちゃんはフィアにぎゅつと抱きつき、

「ありがとう。フィアちゃんはボクのヒーローだよ」

新たなあだ名で彼女をよんだ。

「ヒーロー、ですか」

水姫ちゃんを受け止めながら、フィアは次第に微笑んでいった。

「悪くないですね」

その日の夜、メールちゃんは「ハイウインドに問題なし」と嘘の報告をしたらしい。

……と、綺麗に終わるはずもなく。

「ナーガ？ 私……辿りついたことがひとつあります」

オスカルのかだりの片手間に水姫ちゃんとフィアの友情を眺めてた所、冥弥ちゃんがいだした。

「ん？ どうした冥弥姉さん」

ナーガちゃんが訊ねると、冥弥ちゃんは表情そのままガッツポーズで、

「男の人は男の人同士で、女の子は女の子同士で恋愛すべき。……これは、生物の真理だったんです」

「……。……。……おい」

数秒固まった後、ナーガちゃんが突っ込む。

この腐女子。自分の従妹の友情エピソードを台無しにしやがったよ。

「冥弥ちゃんちよつといい？」

私はため息混じりにいった。いま彼女の目にはフィーアと水姫ちゃんの周りに百合の花が咲き乱れて映ってるに違いない。そんな妄想を吐露されては、周囲が無駄に疲れるだけ。こういう場合は少しこの場から離すに限る。

(それに)

彼女には少し聞きたいこともあるしね。

「別に……いい、ですけど」

きよとんと(恐らく)しながら、冥弥ちゃんは私についてきてくれた。

私は適当に誰も会話が聞こえないだろう場所に彼女を連れていき、

「冥弥ちゃん。突然だけど、あなたフィールのこと知ってるでしょ？」

「え？」

「普通ソリッドビジョンがリアル化するのはありえない。けど、あなたビジョンがリアル化したのを見ても当然のように受け止めてたよね？」

「何を言ってるのか……分かりません」

どうやら誤魔化すつもりらしい。彼女の表情は微変もしてないように見えて、動揺で目が一瞬きよろきよろ動くのが見えたのだ。

「そりゃまあ。さっきのデュエルでは、結局フィーアもロリコンも攻撃や演出にフィールを使わなかったけど、あなたは今日1度見るはずよ。今朝、梓が私をハンマーしたとき」

「あ」

「かつ、知ってるなら知ってるといえはいいのに、わざわざ誤魔化したのも余計怪しいって話」

まあ。さつきナーガちゃんも《デモンズ・チェーン》したけど、いちいち反応してられない状況だったからノーカウント。彩土姫ちゃんもスルーしてたしね。

「……本題に入るわ。あなたたち10人の中に、木更ちゃんのお姉さんを誘拐した男の味方がいるって疑惑が流れてるわ。それはあなた？」

すると、冥弥ちゃんは。

「誰から……聞いたの？」

「まずは私の質問への返事が先よ」

「……私じゃ、ない」

冥弥ちゃんはいった。

「なら、他にも中学生組は全員冥弥ちゃんと同じく受け入れてたけど、その内の誰か？」

「それも、ない。……私たちは、まさに……その為に動いてた、から」

「え？」

それって、

「もしかしてナーガちゃん繋がり？」

冥弥ちゃんは首を横に振り、
「違う。……え？ ということは……ナーガもこの件で動いてるので
すか？ 初耳です」

どうやらナーガちゃんとは完全に別らしい。

「ところで」

冥弥ちゃんが訊ねてきた。

「私を疑ってたなら。……そんなに露骨に情報出して、いいのですか？」

「ん、別に構わないけど」

だって。

「むしろ冥弥ちゃんが白だと思ったからこそ最終確認兼ねて踏み込んだって話だもの」

今回の水姫ちゃんの騒動で、この子は妹の為に体を張ろうとしたからね。

まあ、だから白と決めるのは早計だし、黒の可能性を捨てたのも嘘だけど、仮に彼女が黒なら話が通じるだろうし、白なら味方になってくれると踏んだからだ。

「で、さっきの返事だけど。私にそれを伝えたのもナーガちゃんよ」

「そう……ですか」

こちらを信用したのか、冥弥ちゃんがあった。

「……私たちは、ゼウス、地津、私の3人で動いています。そちらのメンバーは？」

「私、木更ちゃん、ナーガちゃん、メールちゃん。それとさっきデュエルしてたファイアって子も実質的にはメールちゃんの味方に近い位置にいるわ」

「木更さん……ですか？」

訊ねる冥弥ちゃん。どこことなく驚いてるように見えたので「どうしたの？」と訊ねると、

「私たちが、黒最有力と疑ってたのが……失礼ですけど、木更さんだったんです。……姉は笑顔の裏の本心が分かりづらい方ですし、オールバックの男のいる、名小屋の高校に入学した……から」

「現実はそのオールバックの男を探す為に名小屋に来たんだったって」

「そう……だったんですか」

こうしてみると、木更ちゃんてこんなに誤解されやすいタイプだったのだと改めて感じる。まさか親戚からも「本心が分からない」なんて思われてたなんて。しかし、となると3人は私や梓もついでに疑われてた可能性があったわけだ。

「で、冥弥ちゃん。他に黒の疑いのある子は思い浮かぶ？」

悪いけど私は個人的に中学生組に標準絞ってたから、この瞬間容疑者は全員白になってしまったのだ。

「私は……。金玖が怪しいと思ってます」

冥弥ちゃんはいった。

「金玖ちゃん？」

「はい。……だって、いつの間にかいなくなってる」
「あっ」

そういえば、確か追いかける直前までは金玖ちゃんはいたはず。なのに今は。

冥弥ちゃんの言うとおりに？ それとも。

「誘拐された可能性もあるわね」

「あっ」

今度は冥弥ちゃんがはつとなる。そちらの可能性には全く気付かなかったらしい。

「協力ありがとう冥弥ちゃん。すぐ探しに向かうわ」

「私も……。地津に連絡を取ります」

こうして金玖ちゃんの捜索が始まった。

MISSION 19—2日目Side木更

私の名前は藤稔^{ふじみのり} 木更^{きさら}。陽光学園高等部一年の女子高生。

そして、かすが様愛です。

「ちよつとメールちゃんと風俗行ってくるわ」

二日目、朝。早速鳥乃先輩が酷い台詞を吐いて、

「はいアウト」

「ひでぶー」

徳光先輩からハンマーを受けてました。

この日は夕方まで自由行動で、みんな揃って旅館を出て、いざ解散という所で起きた事件でした。

「あの先輩気持ちは分かりますけどみんなが」

私が止めると、徳光先輩は「あ」となって、

「ごめんなさい」

「気にしないでください」

だって、私もメールちゃんが巻き込まれて、手がつい防犯ブザーに伸びてましたから。

「ですけど、あんな光景を見てしまって小学生組が」

と、私は様子を窺った所、

「す、凄い。ソリッドビジョンが本物みたいに」

「ねえ！ねえ！それどうやったの？ 昨日のかすが様のカードも実体化できるの？」

「これが……古の魔術か」

「大丈夫そうですね」

私はほつと安堵します。どうやらソリッドビジョンのリアル化の衝撃が大きかったみたいで、鳥乃先輩が潰れてるのが目に入ってたなかつたみたいでした。

「姉さんは、今日はどちらへ向かわれますか？」

そこへ深海ちゃんが訊ねてきました。親戚の中では私によく似た容姿をした子で、私自身も親戚の中で一番仲が良いつもりでいます。

私は「うーん」と考えつつ、

「実は何も考えてなかったのよねえ、彩土姫ちゃんたちは何か予定は？」

と、訊ねようとした所、その彩土姫ちゃんはメールちゃんに興味津々って顔で、

「で、さ。でき、本当に行くの？ 風俗、風俗」

「い、行かないよー」

メールちゃんはにこつと笑って、

「だって今日の彩土姫ちゃんの分も残しておかないと」

なんて爆弾発言。

「え」

その言葉に、私は絶句してしまいました。見ると周囲もみんな固まって、

「うわマジかー。雨降って地固まれとは思ってたけど、たった一晩でこれかよ」

勘弁してくれて顔で地津ちゃんがいます。痛みつばなしのロング髪に眼鏡が特徴の子で、今日も伸び切ってダボダボのシャツ一枚に短パン姿と親戚の中で特に洒落っ気がないので、密かに姉として心配です。

この前なんて、珍しく自分で服買ったと聞いて姉として嬉しくなつてフォトデータを頼んだら「働いたら負け」ってプリントされた白一色のTシャツで。元ネタ知らなかったせいで、悲しきで泣きそうになりました。

「私……百合は、あまり……」

冥弥ちゃんは明らかに引いてるご様子。彼女はボブカットの髪型をした物静かな子です。感情を顔に出すのが苦手で、そのせいでミステリアスな印象を受けますけど、性格のほうも実は表情が乏しいだけで本当は凄く感情豊かな子ですし、凄く美人さんなんですよ？

まあ、実は重度の腐女子という濃い一面がすべて台無しにしてるんですけど。その上、いまはドン引きしてる冥弥ちゃんですけど、数時間後には百合にも目覚めて更に濃くなってしまおうわけでして。

「ま、まあ。仲良きことは仲良きことは美しいのだ」

ゼウスちゃんは、少し頭がショートちゃってるものの、一応祝福する側のようにでした。ただ、肉体関係のほうに頭が追いつくのはもう少し後かもしれない。

私や深海ちゃんより更に長い髪を後ろでひとつに縛り、大きく「神」と書かれた黒一色のTシャツ姿。洒落っ気がない地津ちゃんも心配ですけど、彼女は本気でファッションのつもりらしくて、来年は高校生になるのにこのセンスと、こちらも姉として心配でたまりません。そして深海ちゃんは、

「姉さん。ライバルがふたり減りましたね」

ひとりだけR-18的な意味込みでふたりの関係を喜んでました。その上、

「姉さんも、さすが様から鳥乃さんに乗り換えては如何ですか？」

「深海ちゃん……」

この子だけは、本気がかすが様が絡むと親戚全員敵認定するんですよ。比較的平気なのは、自分がくつつこうとは思ってない冥弥ちゃん、実は親戚で唯一かすが様LIKE勢の水姫ちゃんくらいでしょうか。

私は微笑んでいました。

「ごめんなさい、私ノーマルですから」

とはいえ、実の所先輩に心は許してはいるんですけどね。先輩は私を黒山羊の実から助けて下さった恩人ですし、抱きしめてもらうと凄く安心するんです。まあ、抱きしめ方に女性をオトすテクニックが入ってるのは分かってるので防犯ブザーは常に手元に……。あ、でも最近はその防犯ブザーでからかうのも楽しかったりして。今度、脈ナシなのにちよつと先輩を誘惑して、襲われかけた所を防犯ブザー鳴らしてみようかな。なんて考えてたりします。

そんな感じで、最後に脱線はしましたが年長組の様子を見て現実逃避してた所、

「と、とりあえず風俗ってのは冗談だけど、ちよつと色々あって今日私とメールちゃんのふたりで見て回る約束しちゃって、じゃ行ってくるわ。メールちゃん、ほら行く」

って、鳥乃先輩はメールちゃんを連れて行ってしまいました。

(あ)

そうでした。先輩とメールちゃんは、今日は監査の仕事で高村司令とハイウインドの下に行く予定だったのです。その口実に風俗というのはあまりに酷いですけど。

「……………不安だわ」

つい、私は呟きます。先輩がメールちゃんに手を出さないのは間違いありません。けど、風俗に連れて行ったり、はたまたメールちゃんが鳥乃先輩から悪い影響を受けないって保証もないのですから。

そんな風に考えてたのは私だけじゃないみたいで、

「徳光さん、大丈夫なのか鳥乃さんは」

と、徳光先輩に訊ねるナーガちゃん。先輩は「うーん」と難しい顔で、

「基本的に沙樹ちゃんって大の子供嫌いだから大丈夫、と思いたいんだけど」

「だけど？」

「何だか沙樹ちゃん、ナーガちゃんとメールちゃんには心開いてるように見えるんだよね。だから、もしかしたらもしかするかも」

「ならアタシと一緒に監視しねーか」

なんて、話に割り込んだのは地津ちゃん。

「元々自由行動なんて面倒臭いから、適当に冷房効いたネット喫茶で時間潰そうと思ってたんだ。こいつでも飛ばしながら」

と、地津ちゃんが見せたのはプロペラのついた小型の機械が何個か。

「何だこれは」

ナーガちゃんが訊ねると、

「超小型のドローンだぜー。こいつのカメラをネット喫茶のパソコンに繋いでしまえば、一步も外に出る事なく観光旅行」

「お前なあ」

ため息を吐きながらナーガちゃんはデュエルディスクのタブレットを開き、

「それじゃあ観光旅行にならないだろ、何のために名小屋まで来たんだ」

そんな時、私のタブレットがメールを受信します。

送信者はまさよにそのナーガちゃんでした。

『そちらで地津の監視に回れる奴はいるか？ できればカメラの映像を盗み見れる奴』

私はすぐ返事しました。

『すぐ手配します』

そして、続けて事務所と、そして鳥乃先輩と入れ替わりで私のサポートに入った双庭さんに連絡。

地津さんが使うパソコンのハッキングは私が行うとして、双庭さんに地津ちゃんの監視にまわって貰うよう話をつけて貰いました。

これらをメールで伝えた途端、

「仕方ない、徳光さん地津の相手をして貰って構いませんか？」

と、途端にナーガちゃんは折れた様子を見せます。徳光先輩は笑顔で、

「うん、いいよー。その代わり地津ちゃん、ちゃんと沙樹ちゃんにもドローンを手配してね」

いえ、鳥乃先輩を監視する気満々の凄みのある笑顔で。

「まあ、それを条件に誘ったんだけどよ。鳥乃さんも信用されてねーな」

ぼさぼさの髪をぼりぼり掻き、地津ちゃんがうなずきます。どうやら地津ちゃんは徳光先輩とペアで動くのが確定した模様。

「で、木更姉さんひとつ相談なんだが」

ここでナーガちゃんが私に向かって話しかけてきました。

「今日の自由行動なんだが、小学生組は小学生組で纏まって動きたい。構わないだろうか」

「小学生だけで行動ですか？」

訊ねると、

「ああ。本当はそこにメールも加えて、彩土姫と仲直りしたのを皆で祝おうって流れになってたんだ。まあ、いまは主役のひとりがいない

から、祝い自体は宿に戻ってからで、その準備をつて流れになりそうだが」

「そういう事でしたら」

私が快諾しようとした所で、

「駄目、です……」

と、いったのは冥弥ちゃん。

「小学生だけで、街を歩くのは危険……です。誰かひとり、保護者について貰わないと」

「ああ、確かにそうか」

納得するナーガちゃん。ですけど、そんなナーガちゃんは私に視線で「その保護者側につくのは避けてくれ」と懇願。確かに、私たちが一緒に行動してしまうと残りの中学生組がフリーになってしまうので、できれば避けたい事態ではあります。

「保護者か？ 保護者が欲しいのか？」

代わりに食いついたのはゼウスちゃん。

「はっはっはー。この神の加護が必要だと言うなら、このゼウス喜んで保護者になってやるのだ」

『……』

高笑いするゼウスちゃん。それを、私、ナーガちゃん、冥弥ちゃんの3人は揃って信頼0の白い目で眺め、

「言いだしっぺだから……私が、入ります」

と、冥弥ちゃんはナーガちゃんの隣にいたのでした。

こうして、私は残ったゼウスちゃんと深海ちゃんの3人で行動する形になったわけで。

ただ、正直いって私的にはこのふたりが黒というのは無いんじゃないかなと思ってたり。深海ちゃんは親戚組で一番仲良くしている子だからという理由の願望ではないですけど、ゼウスちゃんは……あのキャラで実は黒だったら衝撃的という域を超えています。

だからといって、それなら誰が一番怪しいかなんて、該当者はいまませんし考えたくもない事なのですけど。

「ぐううう、何故だ。何故このゼウスより冥弥のほうが信頼されるのだー」

私と深海ちゃんの一步前を歩きながら、ゼウスちゃんが不満を洩らします。

他の親戚と別れた私たちは、現在3人でまず駅に向かつてる所。どこを観光するかは、まず駅についてから考えようって話になったからです。

「普段の積み重ねではないですか？」

深海ちゃんがサクツといきました。しかも冗談って様子も責めてる様子もなく、意見をそのまま言いましたって感じの素の笑顔で。

「なぬーっ」

ゼウスちゃんは、オーバーリアクションで仰け反り、

「それは聞き捨てならんぞミカア！ この神が徳以外の何を積み重ねてると言いたいつもりなのだ？」

「木更姉さん、ゼウス姉さんに徳ありましたっけ」

「がびーん」

あ、ゼウスちゃん固まった。

「木更あーっ！ 深海が虐めるのだー」

数秒停止した後、ゼウスちゃんは号泣し私の胸にしがみつきます。

私はゼウスちゃんの頭を「よしよし」と撫でてあげながら、

「駄目ですよ深海ちゃん、ゼウスちゃんに本当の事を言ったら」

「お主も敵かあああああああああああああああああ」

とどめをさしてあげました。

鼻水もだし、可愛らしい泣き顔を晒すゼウスちゃん。私は彼女の背をとんとんと叩いて、

「冗談よ。そういうゼウスちゃんの可愛らしい反応の一つ一つがあなたの一番の徳だもの」

するとゼウスちゃんは、すがみつくような瞳で、

「徳か？ 我は、ちゃんと神々しいか？ 威光に満ちておるか？」

「ええ、とても」

「そ、そうか、そうか」

ゼウスちゃんは泣きやむと、すぐふんぞり返った態度で、

「さすが神、冥弥と子供には神のありがたさが分からないだけだったのだ、はっはっはー」

「子守って大変ですね」

深海ちゃんが小声で呟く。ゼウスちゃん仮にもあなたより年上ですよ？ まあ幸いにも本人の耳には届いてなかったらしく、

「おーい、名小屋駅についたのだー」

と、小走りで一足先に進んで、私に両手を振ります。

「慌てなくても、すぐ行くから」

と、私は深海ちゃんの手を取って、

「行きましようか」

あまり待たせるとゼウスちゃんが不貞腐れますから。

「はい」

深海ちゃんは素直にうなずいてくれました。

こうして、昨日何度か往復した名小屋駅。こうして改めて来てみると地下鉄、新幹線など幾つものホームが存在し、地下街もあつて相当広く、3人で相談した結果、とりあえず駅そのものを観光することになりました。

ただゼウスちゃんのはしやぎ過ぎて喉が渴いてしまったそうなので、まずは地下街内のコンビニに足を運びます。

(あれ?)

そこで、私はひとりのお客さんの後ろ姿に目が行きました。

服装はコートと帽子で全身を隠すような格好。恐らく女性で一本の三つ編みに眼鏡をかけてるのが分かります。手に持つてるのはお茶とおにぎりでしょうか。

見間違いでなければ、彼女は確か。

「失礼、もしかしてフェンリルさんですか?」

私が訊ねると、

「えっ、ごめんなさい」

立ち止り、びくつとしながらその女性は謝り、恐る恐るところちらを向きます。その見た目文系な感じ、間違いありません。

「あ、やっぱりフェンリルさんですね。こんにちは」

「え、えっと君は確か」

「木更です」

「あ、うんそうだったね。久しぶりだね」

何故か挙動不審な態度でフェンリルさんはいい、そそくさと手に持ってたおにぎりを元の位置に戻します。買われないのでしょうか？

「お知り合いですか？」

「お、木更その子は誰なのだー？」

そこへ深海ちゃんとゼウスちゃんが訊ねてきたので、

「お友達でフェンリルさんです」

「は、初めました」

軽くお辞儀をするフェンリルさん。けど、視線が泳いでる等、やっぱりその様子は少しおかしく。何か急いでるのでしょうか、それなら早めに解放してあげないと。と、思ったんですけど、

「おおー。汝フェンリルと申すのか、日本人らしい名前ではないな。当て字は何と書く」

「いや、当て字はなくてカタカナでフェンリルなんだ」

「ほうほう」

と、ゼウスちゃんが人懐っこく食いついてしまい、

「ゼウスちゃん。どうやらフェンリルさん急いでるみたいですから」

私がそっと伝えるも、

「なぬ、そうか、それなら仕方ない」

と、解放するのかと思いきや、

「で、その用事とは何なのだー？」

さらに追及。

「い。いや、別に急いでないから大丈夫だよ」

そういつてフェンリルちゃんはお茶も元の位置に戻し、ついに手ぶらに。

「何だ。木更、彼女別に急いでないそうだぞー」

と、ゼウスちゃん。でしたら、さっきの挙動不審は一体。

「買われないのですか?」

つい、私は訊ねてしまいます。するとフェンリルは苦笑いして、

「お金がなくなつて」

するとゼウスちゃんが、

「まさか万引き現場だつたりしたのか?」

「ッ」

私は見てしまいました。

失礼な事を言ったゼウスちゃんに私が叱るより先に、フェンリルちゃんの顔がピクツと固まるのを。

「凶星、だつたみたいですね」

深海ちゃんがいうと、

「ごめん。できれば見なかったことに、かつ知らなかった事にしてくれると嬉しいんだけど」

フェンリルさんがいいいます。

「分かりました」

私はいいました。

「少なくとも警察には黙っておきます。幸いにもお店の方も接客に忙しくて私たちの会話にも気づいてない様子ですし」

「ありがとう」

「けど、できれば事情を聞いてもいいですか? どこか場所を変えて」

「それは……」

フェンリルさんの視線が沈みます。

「そうですね、仕方ありませんね」

私は追及を諦めます。とはいえ、

「けど、ただでは帰せません」

そういつて、私はたつたいまフェンリルさんが戻したおにぎりとお茶を取って買い物籠へ。

「また時間を改めたり別の場所で同じことされても困りますからね。お金は私が出しますから遠慮せず貰ってください」

するとフェンリルさんは目を丸くして、

「い、いいの?」

「友達の犯罪を防ぐ為ならお安いものです」

「友達……」

「違うのですか？」

「う、ううん。ありがとうございます」

やっと笑顔を向けてくれたフェンリルさん。続けて私はふたりにも、

「ゼウスちゃんも深海ちゃんも、何か欲しいドリンクがあつたら籠に入れちやつてください」

「え、買ってくれるのか？」

「買って頂けるのですか？」

訊ねるふたりに、

「はい」

私は笑顔で応えます。

結局、ゼウスちゃんのスプライト、深海ちゃんのグリーンスムージー、そして私のお水も一緒に買って、おにぎりとお茶をフェンリルさんに渡して一緒にコンビニを出ます。

「ありがとうございます。助かったよ」

早速、おにぎりをがつつきだすフェンリルさん。相当お腹がすいた様子が見て取れ、

「おにぎりじゃなくて、お弁当にすれば良かったですね」

私が言うと、

「元々これだけで食いつなぐ気だったし、そこまで迷惑はかけられないよ」

と、フェンリルさんはお茶を一口。ところで、お茶をおにぎりを買ってあげた辺りから、何だかフェンリルさんにチラチラ見られてる気がするのですけど、気のせいでしょうか？

「そ、それより。その……」

「どうしましたか？」

「な、何でもない」

と、わざと顔を背けるフェンリルさん。何でしょうか、チラチラもあつて捨て犬にご飯を与えたらまだ少し警戒されつつ懐かれたよう

な、そんな絶妙な距離感を感じます。

「フェンリルさん、顔赤いですよ？ どうしましたか」

深海ちゃんが訊ねると、フェンリルさんは慌てて、

「き、気のせいだよ。気のせい」

そこへ続けてゼウスちゃんが、

「まさか、おにぎりとお茶で木更に惚れたか？」

「ぶふおっ」

むせるフェンリルさん。

「まあ仕方ないのだ。木更はいつも笑顔で優しいから、同性でもトウ
ンクしてもおかしくないのである」

「い、いやおかしいでしょ。同性でトウンクとか」

顔を真っ赤に反論するフェンリルさん。

「そうですよ」

私も、それに同意して。

「ゼウスちゃんは素直に受け止めてくれるからいいですけど、私これ
でも笑顔の裏が読めないって同性に多く警戒されるのですから」

「あ、それは私もあります」

と、深海ちゃん。彼女も私と同じで普段は常に穏やかな笑みを絶や
さない子ですから。もつとも、口を開けば私と同じ丁寧語でこそあ
れ、私と比べて齒に衣着せない事をズカズカいうほうではありますけ
ど。

「そうなのかい。ふーむ」

腕を組んで考え込むゼウスちゃん。

「そ、それより。今日は木更ちゃんどうしてここに？」

なんて、露骨に話題を変えようとしたフェンリルさんに、私は乗っ
て、

「今日は私の親戚たちが名小屋に遊びにきたので、一緒に観光してる
所なんです」

「藤稔 深海です」

深海ちゃんがペコりと挨拶、そこに続けて。

「天の神と描いて藤稔 天神ゼウスである。畏敬を持って気軽にゼウスと

呼んでくれたまえ。はっはっはー」

と、腕を組んだまま、ふんぞり返ってゼウスちゃんも挨拶します。

「改めてフェンリルだよ」

すると深海ちゃんが、

「ファミリーネームは？」

「名字もないんだ。色々不自然だとは思うけど気にしないでくれると嬉しいな」

「だ、そうですからゼウスちゃんいいですか？」

と私がいうと、

「何で神名指しなのであるかー」

と、ゼウスちゃんがげんなりした顔でいきました。そこへ私のタブレットに通信が。相手は妹のほうの双庭さんから。

「あ。ごめんなさいちよつと失礼します」

私は一言断り、3人から少しだけ離れて通話に出ます。

「はい。藤稔です」

すると通話先から、

『あ、木更ちゃん？ ごつめーん。いま地津ちゃんつて子のパソコン監視してるんだけど、沙樹ちゃん先輩見失っちゃった』

「どういう事ですか？」

『それがねー、さっきまで小型のドローンが沙樹ちゃんを追尾してたんだけど、突然メイド服のNINJAが現れてビームクナイでスパッて』

メイド服のNINJA、ビームクナイ、どこかで情報にあつた気が。

「ドローンのカメラが破壊されたのですね。では、最後に先輩たちがどこにいたかは分かりますか？」

すると双庭さんは、

『名小屋駅だよん』

「え、名小屋駅？ いまちようど私もそちらにいる所です。すみませんけど詳しい場所を教えてくださいますか？」

すると通信先から、

『うーん。それがねー』

と、どこか言いづらそうに。

「何かあったのですか？」

『何かあったってどうか、関係者以外禁止区域に入っちゃってー。ほらほら、あそこあそこ。あそこって確かかつてアンちゃんって子とデュエルした調整池のある所』

なるほど。それでは皆を連れて追跡しようにも追跡できないですね。

と、通話していた所、遠くでゼウスちゃんが私をじっと見てるのが分かりました。それも、露骨に何か警戒しているような。少なくとも、間違いなく普段のゼウスちゃんは見せない顔です。これって。

「分かりました。では先輩の追跡は私たちも一旦諦めることにして、そちらは地津さんの監視と他のドローンで何を確認してるかを重点的にお願いします」

そういつて、一言二言交わし、私は通信を切ります。

そして3人の下に戻って。

「ごめんなさい、お待たせしました」

「気にしないでください」

「大丈夫なのだー」

と、いつてくれる深海ちゃんとゼウスちゃん。

ですけど、先ほどのゼウスちゃんの反応。これは、心が痛みますけどゼウスちゃんに重心を絞って警戒したほうが良さそうですね。

とまあ、それはそれとして。

「そういえばフェンリルさんって、今はオフですよね？」

「え、うん。そうだけど」

ぴくつと反応し、ちよつぷり慌てていうフェンリルさん。その頬はほんのり紅く染まってるように見え、先のやり取りのせいで彼女に対しても別の意味で疑ってしまいそうになりますけど、さすがにトウクは無いと心の中で否定し、

「でしたら、今日一日私たちと行動を共にしませんか？」

「え？ ボクは別にいいけど、木更ちゃんや、それにふたりはいいの？」

するとふたりは、

「私は別に構いませんけど」

「むしろ大歓迎なのだー」

と、揃って笑顔で受け入れてくれたので。

「ありがとう」

と、フェンリルさんは快諾。しかし続けて、

「でも、どうして？ せっかく親戚たちで楽しくしてるのにボクがいたら邪魔でしょ？」

なんていうから、私は。

「だって、また万引きされるわけにはいかないじゃないですか」

「そうですね。この様子だとお昼も万引き品で済ませそうですし」

と、深海ちゃんが同意。さらに続けてゼウスちゃんも、

「なるほど！ それなら確かに手元に置いたほうが罪悪感なくて気が楽であるな」

と、同意。こちらは、いまやつと意図に気付いたって感じですけど。

「は、はは……とりあえず今日は大丈夫なだけだね。さっきのおにぎりで食いつなげたから」

なんて苦笑いしつつ、自覚なく「今日はおにぎり1個だけ」という

悲しい事実を洩らしたので、私は財布を確認し、

「深海ちゃんゼウスちゃん、今日のお昼は食べ放題にしようと思うのですけど、財布の中身は大丈夫ですか？」

「食べ放題!?!」

驚きすぎて声のトーンが上がるフェンリルさん。けど、さすがにふたりは、

「二千円以内のお店でしたら」

「さすがに神でも学生の財布では」

と、なったので。相談した結果K a s u g a y aでひとり千円分くらいガッツリ食べようって話に決まりました。

それから私たちは4人で駅を観光しました。飲食店や土産選びに良さそうな店も多く、書店もあって、粘ろうと思えば半日くらい過ごせそう。途中スイーツに舌鼓を打ちながら、私たちはガールズトーク

……とは言い難い何かに花を咲かせます。

そんな時間に動きがあったのは、1時間か2時間か経った頃でした。

突然、私とゼウスちゃんにタブレットに通信が同時に入ったのです。

「はい。藤稔です」

『木更ちゃん?』

通信の先は鳥乃先輩でした。

『突然だけど、金玖ちゃんが失踪したわ。至急そっちの面子と一緒に捜索にまわってくれない?』

「金玖ちゃんが!? けど、どうして先輩が」

そこへゼウスちゃんのほうからも、

「何っ!? 金玖が失踪しただど!」

と、反応。

直後、互いに同じ内容の連絡を受けると気づき、私とゼウスちゃんは視線を合わせます。

先輩がいました。

『詳細は後で話すけど、途中小学生組と偶然合流したのよ。それと冥弥ちゃん、ゼウスちゃん、地津ちゃんも別口から例の『協力者』を捜索していると発覚、協力体制を取ることにしたわ』

「ゼウスちゃんが、ですか?」

あ、だからあの時彼女、私に向けて警戒した目を。どうやら、互いに互いを疑ってた模様。

『それと、こっちの仕事はほぼ終了、ハイウインドの上にはいたのは神簇家だったわ』

てことはアンさんが!?

『その流れでハイウインドも捜索に協力してくれることになったわ。フィーアも味方側と認識お願い』

「わかりました」

『じゃあ、何かあったら連絡お願い』

と、先輩から通信は切れました。と、ほぼ同時にゼウスちゃんも通

信が切れたようで、私たちは口を交わさずともうなずきあって、

「ミカ、それとフェンリル。頼みたいことができたのだ」

「金玖ちゃんが失踪したそうです。一緒に探してください」
すると、まず深海ちゃんが、

「金玖ちゃんがですか？」

と、何故かマイペースに首をかしげ、その隣でフェンリルさんが、
「その金玖って子も親戚のひとり？」

「はい」

私はうなずきます。

「外見はこんな子なのだ」

ゼウスちゃんがタブレットからフォトデータを見せ、フェンリルさんが「なるほど、分かったよ」とうなずきます。

そんな中、

「あの」

と、深海ちゃん。

「どうしたの？」

私が訊ねると、深海ちゃんは遠くを指さし、

「金玖ちゃん、そこにいるのですけど」
って。

「え？」

振り返ると、そこにはトイレの近くに女の子がひとり。金玖ちゃん
が、しょぼんとした顔でひとり立ってたのでした。

「金玖ちゃん」

私は駆け出します。続けてゼウスちゃんと深海ちゃんも。

「木更……姉さん……」

弱々しい声で、すまなそうに言う金玖ちゃん。

「良かった、無事だったんですね。皆いなくなっただって心配したんで
すよ」

「いや……」

けど、金玖ちゃんは小さく首を振り、

「この金玖、無事ではない」

「え？」

「不覚にも、捕まってしまった」

金玖ちゃんがいきました。直後、彼女の後ろの女子トイレから投げ網が飛んできて、私たちは捕獲されてしまいました。

「きやつ」

しかも直後、タブレットの電波が圏外になり、ファイルで強化した指で網を引き破ろうとしましたが何故か通じません。網は袋状になって、恐らく外からのみ開かれる仕様なのでしょう、出ることもできません。

そこへ、

「この網には我々が新開発した対ファイル機能と電波障害両方対応のファイルバリアが搭載されてある。これに捕らわれた者は闘う事も逃げる事も応援を呼ぶ事も不可能だ」

と、女子トイレからひとりの「男」が姿を表しました。迷彩の軍服を身に付け、ベレー帽を被った眼帯の男です。年齢は30代前半くらいでしょうか。

「俺はファイル・ハンターズの緒方おがた銃ライフル。悪いがお前たちの身柄は拘束させて貰った」

「ファイル・ハンターズ!?!」

もしかして例の協力者の仲間？

「藤稔 木更だな？」

緒方さんが訊ねます。

「でしたら、どうするのですか？」

私が訊ねると、

「お前には、俺の目的の為、レズの肌馬への交渉材料になって貰う」

「先輩への？」

どうして、ここで先輩の名前が出てくるんでしょうか？

そこへゼウスちゃんが。

「レズの肌馬とは誰か知らんが、木更を何の交渉に使うつもりなのだ？」

「知れた事だ」

と、緒方さんは懐から何か用紙を一枚取り出し、

「肌馬には、藤稔木更の解放を条件に、この用紙にサインをして貰う」
よく見るとそれは婚姻届でした。この人、先輩に？ あの前輩に？
「……うわ」

私は、ついドン引きしてしまいました。すると緒方は、

「うわとは何だ！ 俺も男だ、夢をみてもいいだろう。鳥乃さんと金
玖たんと俺で孕ませ○クスの3Pを」

「ろ、ロリコンだー！ー！ー！」

叫ぶゼウスちゃん。しかも先輩と男と子供の3Pって特に先輩が
萎えそうな組み合わせじゃないですか。正気ですかこの人。

「残念だけど、それはさせれないな」

直後でした。いつの間にかフェンリルさんが緒方さんの背後に密
着し、いったんです。

確かに、気づけば彼女は私と一緒に駆け出してはいないので投げ網
に捕まっただけはなかったのですが、一体どうやって彼の背後に。

「だ、誰だー！」

叫ぶ緒方さんに、フェンリルさんは。

「木更ちゃんの友達だよ」

と、いつて。

「悪いけど引いてくれないかな？ ボクもファイルが使える以上、も
し断ったら君がどうなるか、この時点で分からないとも思わないけ
ど」

恐らく背中にナイフか銃を突きつけてるのでしょうか。緒方さんか
ら冷や汗が出るのが映ります。

「ボク、この前木更ちゃんを助けるって言った矢先に返り討ちにあっ
たばかりなんだ。だから今回こそ彼女を助けたいって気持ちが強
くて、正直手段選べる精神してないよっ！」

凶器を更に押し付けたのでしょうか。緒方さんは腰をじりじり前に
倒し、

「だがこちららも、そう簡単に引き下がるわけにはいかない。あと少し
で幼女と鳥乃さんとハメハメが」

「そっか。酷くても生傷ひとつで解放してあげようと思っただけで仕方ないね」

そういつて、フエンリルさんは《ワーム・ホール》を発動。緒方さんの前方に時空の穴が出現しました。そして、穴の先から。

「おや、どちら様ですか？..」

直後、緒方さんが「こ、この声は」と顔を青くします。

フエンリルさんはいいました。

「久しぶりだねテストAMENT神父」

その名前は確か、黒山羊の実のメンバーながら鳥乃先輩とも親しくしている噂のゲイ牧師さん。私自身は、過去に私のフィール・カードを目当てに命を狙われた経緯があるから今でも少し怖いのですけど。

「悪いけど、フィール抜き前のフィール・ハンターズんだけど、そっちに送って構わないかな？」

「男ですか？..」

「男だよ。たぶん前にもハメた経験あるんじゃないかな、緒方^{おがた}銃^{ライフル}つて言うんだけど」

「頂きます」

「わかった」

言つて、フエンリルさんは《ワーム・ホール》の穴に緒方さんを突き飛ばし、

「や、やめろ。助けてくれ、嫌だ、もう掘られるのは、掘られるのだけ
はああああああああああああああああああああああああああ

と、断末魔じみみたい悲鳴を最後に、穴が閉じ緒方さんはその場から消えてしまいました。

「さてと、皆大丈夫？」

網の袋を開け、フエンリルさんは手を伸ばします。

「大丈夫です」

「助かったのだー」

「感謝.....」

深海ちゃん、ゼウスちゃん、金玖ちゃんがいい、その金玖ちゃんが
まずフエンリルさんの手を掴み外に出ます。

続けてゼウスちゃんが自力で出ようとしますが、網の袋はなかなか体に絡んで動き辛く、結局フェンリルさんの手を借りて外へ。深海ちゃんは先に出た金玖ちゃんの手を借りて脱出しました。

そして、最後に私。

一応自力脱出を試してみたけどやはり難しく、

「ほら、木更ちゃんも」

と、伸ばしてくれたフェンリルさんの手を掴みます。けど、

「っ」

途端、フェンリルさんがぴたっと停止して、

「あ、あの?」

引つ張って頂けないと、私出られないのですけど。なんて彼女と目を合わせたら、フェンリルさんは一度顔を真っ赤にしてから、明らかに正気とはいえない目つきに代わり、

「ごめん」

と、一言。突如、私の手を離すと網の袋を再び閉め、その袋ごと私を引きずってトイレの中に駆け込んでいったのです。

「ふえ、フェンリルさん!」

何が起こったのか分からず、混乱する私。

「き、木更あつ!」

一歩遅れて、ゼウスちゃんが叫びながら追いかけます。けど、フェンリルさんが直角の壁に飛びこむと、突如煙が巻き上がって、気づくと、私の視界は廃屋の一室に変わったのでした。

あれから数分。

私は、狂気を孕んだ目をしたフェンリルさんに、袋ごと宙吊りにされ、

「フフ……これからずっと一緒だよ木更ちゃん。……………つて、やつちやつたあああつ」

そこでハツとなったフェンリルさんが両手で頭を抱えます。

「事前に謝るくらいなら、どうしてこんなことを」

さすがにこの時点になってくると、私は彼女に誘拐・監禁されたのだと察しはします。そして、この網のせいで私は連絡を取ることも逃

げることでもできず、助かるには誰かがここを見つけてくれるか、もしくはフェンリルさんを説得するしかないことも。

「あれが最後の理性だったからね。あとはもう全部衝動だよ、ああもう」

適当な席に座り、はあつと嘆息するフェンリルさん。

どうやら私を誘拐したのを全力で後悔してるのが見て取れました。それでも。

正直、私はいま自分の置かれた状況を、そしていまのフェンリルさんに恐怖を抱きます。

「でしたら、すぐ戻りませんか？　いまならまだ、そこまで大事にはならないはずです」

私は、少し怯えながらいいました。だけど、

「駄目だよ。それも」

フェンリルさんは自虐的に笑って、

「だって、こんな事した時点で、ボクをこれからも友達って呼んでくれる？」

「え、それは……もちろん」

私は、恐怖で一瞬躊躇ってしまっていました。

「ほらね」

フェンリルさんは察した様子で、

「もう心から友達って思ってくれない。だったら、もう木更ちゃんがボクのモノになるまで、ずっとずっと閉じ込めるしかないじゃないか」

と、力なく。だけど、先ほどの狂気の瞳を再び向けます。

「そんな……こと……」

何か言うのは簡単でした。けど、いまの私では恐怖と焦りで、露骨に逃げ出す為の口から出まかせしか言えそうにありません。そうではなくても、いまのフェンリルさんは、現在の私の言葉を信じてくれないうでしょう。

フェンリルさんは、狂気で濁った瞳を向け、微笑みいました。

「だからね、木更ちゃんはどうも考えなくていいんだよ。死ぬまで

ずっと、ボクの事だけ考えてればいいんだ。その優しい瞳も、ずっとボクだけに向けてくれると嬉しいな。だって、それが木更ちゃんの一
番の幸せなんだから、ううん。ボクが責任持ってそう思わせてあげる
から、心配しないで」

フェンリルさんは、いまも正気のように狂気に身を任せている。下
手な言動を取ることはできない。

いまの彼女を相手にするには、焦らず、そして怯えを捨てて冷静に
ならないと。そして、考えを練って最適な解決方法を導き出さない
と。

「本当に、トウUNKだったんですね」

考えを貼りめぐらせ、冷静になろうと努めながら、自然に私の口か
ら出た言葉は、そんな問いでした。たぶん、なぜフェンリルさんがこ
んな凶行に出たのか確認したかったんでしょう。

「……うん」

フェンリルさんは肯定しました。

「優しい言葉に弱くて、すごく惚れっぽいなだボク。その上、愛も友情
も重いほうで。君のことは処分人の時からちよつとだけ意識してた
から、本気にならないよう気をつけてたんだけど」

「本気になっちゃったんですね」

「うん。あれだけされたらね」

私からしたら、「あれだけで？」だったのですけど、気づけば彼女は
万引きを辞さない程飢えてた所だったんです。そこを考慮すると全
く分からないわけではありません。性別の垣根に関しては脇におい
て。

「だから、木更ちゃんを助けようと手を取ったとき、君の手の温もり
に、手を放したくなくて、ずっと握ってたくなくて。それで、この網
に閉じ込めてればずっとボクのモノじゃないかって。……って、何で
話してるんだろうボク。許して欲しいんだらうなあ、そんなの無理
だって分かってるのに。それに……」

「解放する気もないから、ですか？」

「うん。嬉しいな、ボクの気持ち分かってくれるんだ」

余裕の無さで漏れてしまった皮肉でしたけど、フェンリルさんは素直に嬉しそうに返します。もしくは、皮肉に皮肉を返してこの顔なのかもしれないけど。

「でも、ちよつと違うかな」

フェンリルさんは言いました。

「正確には、解放する気があつても、だよな？」

「フェンリルさんは、私の気持ちを分かってくれないんですね」

こちらは、しつかり皮肉を皮肉で返します。

「え？」

きよとんとなるフェンリルさんに、私は会話しながらやつと浮かんだ改善策を実行に移すことにしました。

「フェンリルさん。デュエルをしませんか？」

「デュエルを？」

「はい」

私は、どうしてもまだ怯える体を抑え、精一杯気張っていいいます。

「フェンリルさんが勝つたら、誰かに救助されるまで、私はあなたの全てを受け入れます。私があなただの所有物である限り私もあなたの所有物であり続けます。ですけど、私が勝つたら、素直に私と一緒に駅に戻って、観光の続きに戻ってくれますか？」

「有り得ないよ。そんな条件」

フェンリルさんは言いました。

「ボクも許されない事しちやつたつて自覚できる程度の正気はあるからね、ボクが勝つた時の条件が信用ならない位は分かるよ。それならデメリットしかないじゃないか」

「メリットでしたらありますよ？」

私は返します。

「デュエルに負ければ少なくとも私のファイルは全損しますから、こんな網に閉じ込めなくてもいいですし、フェンリルさんのファイルは残ってるのですから、煮るなり焼くなり何されても私は受け入れるしかできません」

「そ、それはそうだけど……」

「それに、私が負けて二度とここから出られなくても、それが一番幸せだって思わせてくれるんですよね？」
「っ」

二三回、目をパチクリするフェンリルさん。

「ああもう、ずるいな君は。それがどういう意味か分かって言ったでしよ、それ」

「勿論です」

私は努めて微笑み、

「それを受け入れてしまったら確かに私の人生は終了でしょうけど、フェンリルさんなら約束は破らず責任持って幸せにはしてくれると思いますから」

「重いんだね、君の愛も」

「言われてみると、私って案外地雷ですね」

「それに、わざと誘うような事いつてボクを刺激したよね？」

「鳥乃先輩の相手で慣れてますから」

けど、誘いに乗るには私を網の外に出してデュエルするしかない。それをしてしまえば、私は幾らでも逃げれる状況になると分かっている。ながら。

それでも、フェンリルさんは誘い乗るしかないはず。

私に刺激された、彼女の「私を幸せに堕としたい」欲求は、たぶん私が網の中にいてはできない事が殆どでしょうから。具体的にはR
—18。

「分かったよ」

フェンリルさんは、デュエルディスクを起動していました。

「罨だと分かっても、一度期待しちゃったボクの心は抑えられそうにないからね。受けてあげるよ、そのデュエル」

そういつて、網の中にディスクを装着した腕を潜り込ませ、私のデュエルディスクを強制デュエルモードに移行させる。そして、私を網の外に引っ張り出して、

「けど、ボクが勝ったときには本気で覚悟して貰うから」

と、デュエルを開始するのです。

木更

LP4000

手札4

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

フェンリル

LP4000

手札4

「先攻は貰ったよ、ボクのターン」

デュエルは私の後攻で始まりました。デツキの性質上、先にあのカードを伏せたかったのですけど。

「ボクはモンスターとカードを1枚ずつセットしてターンを終了するよ」

フェンリルさんの初手は、カードが2枚裏側敷かれるだけで手早く終わります。

「では私のターンですね、ドローします」

私はカードを1枚引き、

「私は手札から永続魔法《クリフォート・セーフモード機殻の制限起動》を発動します」

すると、私の周りの空間が、解像度が落ちるように雑な色彩へと変わっていきます。

「このカードは私のPゾーンにPカードが存在する場合に発動できず、ゾーンにPカードが置かれた場合に墓地に送られます。ですが、今回のデュエルはスピードデュエルですから、一切問題がありません」

「なるほどね、実質スピードデュエル専用のカードか」

フェンリルさんは辺りを見渡しながら、

「そして、前情報通り木更ちゃんのデッキは「クリフオート」
「はい」

否定しても意味はないので、私はうなずき、

「《機殻の制限起動》の効果。1ターンに1度、私はクリフオートPモ
ンスターを1体だけP召喚扱いで特殊召喚します」

「スピードデュエルでP召喚、なるほど、だからそのカード名なのか」
はい。つまり、このカードはセーフモード仕様のP召喚を行う永続
魔法。

「ペンデュラム召喚！ 来てください、私のモンスター！ 手札から
《クリフオート・ゲノム》をP召喚します」

私のフィールドに出現したのはレベル6のクリフオート。共通効
果で攻撃力は1800に下がりますけど。

「そして《クリフオート・ゲノム》をリリース。プログラム実行、ク
リフオート・ドット・エグゼ。アドバンス召喚！ 起動せよ《クリフオー
ト・アーカイブ》！」

出現したのは同じくレベル6のクリフオート。アドバンス召喚の
為、今回は攻撃力が元々の2400を維持。さらに、

「リリースされた《クリフオート・ゲノム》の効果。このカードはリ
リースされた場合にフィールドの魔法・罫カード1枚を破壊します。
私はフェンリルさんの伏せカードを破壊します」

《クリフオート・ゲノム》のプログラムの残骸が出現し、アンイン
ストールされながらビームを放ち、フェンリルさんのカードを貫きま
す。

「伏せカードは《ティンダングル・ドロネー》だよ。防ぐ手段がないか
ら、このまま墓地に送られるよ」

「ティンダングル？」

何かの造語でしょうか？ とにかく、破壊したのですから問題ない
はず。私はあのカードを伏せて、

「カードをセット。バトルフェイズ！ 私はアーカイブでフェンリル
さんのセットモンスターに攻撃します」

アーカイブのビーム攻撃がセットモンスターに放たれます。

「セットモンスター《ティンダングル・エンジェル》のリバーブス効果発動。手札からリバーブス効果モンスター1体を裏側表示でセットする。ボクは手札の《ティンダングル・トリニティ》をセット」

カードが表向きになって出現したのは、名前のようなエンジェルとは程遠い、多数の鋭角で構成された化け物でした。その鋭角から煙が上がると、中からカードが出現し、裏側表示でセットされます。

「さらに、この効果が相手のバトルフェイズ中に発動した場合、バトルフェイズは強制終了されるよ」

「元々、もう攻撃できるモンスターはいません。私はこれでターンを終了します」

木更

LP4000

手札1

「《機殻の制限起動》」 「《伏せカード》」

「《クリフォート・アーカイブ》」

「――」

「《《セットモンスター（ティンダングル・トリニティ）》」

「《《《》》》」

フェンリル

LP4000

手札1

「ならボクのターンだね、ドロー」

再びフェンリルさんにターンが回りました。

「ボクは《ティンダングル・トリニティ》を反転召喚」

裏側表示のカードが反転し出現したのは、3体の化け物が合体したような形相のモンスター。その中には《ティンダングル・エンジェル》と思われる姿も。

「そして《ティンダングル・トリニティ》の効果を発動」

フェンリルさんがリバーブス効果を宣言します。しかし、その為にモンスターは表側攻撃表示となり、さらに攻撃力は0。この機を逃すわけにはいきません。

私は、あのカードを表向きにし、

「私もリバーズカードをオープン！ 永続罫カード《スキルドレイン》を1000ライフ払って発動します」

木更 LP4000↓3000

私のデッキの定番《スキルドレイン》を起動させます。

「このカードの効果で、フィールドの表側表示モンスターの効果は無効になり、結果《ティンダングル・トリニティ》のリバーズ効果も無効にさせていただきます」

しかし、フェンリルさんは。

「うん。そうくるよね」

と、たった今ドロウしたカードをディスクに挿しこんで、

「ボクもね。このカードだけは発動させちゃ駄目だって思ってたんだ。間に合ってよかったよ」

「え?」

「速攻魔法《サイクロン》！ その《スキルドレイン》を破壊させて貰うよ」

あつ!?

いまはフェンリルさんのターンなので、たったいま引き当てた速攻魔法も手札からチェーン発動できてしまうのです。

破壊されてしまう私の《スキルドレイン》。

「そして《スキルドレイン》が場から離れた事で、《ティンダングル・トリニティ》のリバーズ効果も問題なく発動。ボクはこの効果でデッキから《ティンダングル・ベース・ガードナー》を特殊召喚」

出現したのは、正三角形が組み合わさり形成された球体のようなモンスター。

「そして、ボクはこの2体をリリース」

反転召喚されたトリニティと、その効果で呼び出されたベース・ガードナーが光の粒子に姿を変える。これはアドバンス召喚!?

「いま、鋭角の世界に干渉がなされた。不浄の体現者よ、時間の角より現れ、時間距離全てを超越し獲物を捕らえよ。アドバンス召喚！ きて、《ティンダングル・ハウンド》！」

直後、光の粒子は三角形の模様へと姿を変え、その模様を基点に空間が歪み、鋭角を創り出す。

その角の先から煙が放たれ、悪臭と共に現れたのは鋭い針のような舌を持つ一匹の犬……とは似ても似つかわしくない化け物の姿。

《ティンダングル・ハウンド》……犬、ティンダ……あつ」

ここで、私はやっと、このデツキの性質に気づきました。

「もしかして、ティンダロスの猟犬」

それは、黒山羊の実にも関係しているクトゥルフ神話に登場する怪物の名前です。

「うん、正解。テーマのティンダングルもティンダロスに角度を指す言葉のアングルを組み合わせたものだよ」

「では先ほどフィール・ハンターズに襲われた時も全て」

「さすがにタイムトラベルはできないけどね。ボクはフィール・カードの力で90度以下の鋭角同士をゲートみたいに行き来できるんだ」
つまり私たちが捕まった時も、別の適当な鋭角とトイレの中の鋭角を繋いで緒方さんの後ろに回り込んで、私を拉致した時も、トイレの鋭角とこの廃屋の鋭角を繋げたのでしよう。

「さっきのおじさん、トイレの前に立っててくれて助かったよ。丁度あそこに逃げる予定だったんだ。コンビニで万引きした時」

という事は、認識してる場所限定だったり、事前に指定してた所に行かないのでしよう。そういう情報を教えてしまったのは彼女の失態なのか慢心なのか、それとも私との会話を求めているのか。「まあ、自分で台無しにしちゃったんだけどね。と、《ティンダングル・ハウンド》の攻撃力は2500、これなら本来の性能をもった《クリフォート・アーカイブ》も倒すことができるよ。バトル！ 《ティンダングル・ハウンド》で《クリフォート・アーカイブ》に攻撃」
《ティンダングル・ハウンド》は飛び掛かってアーカイブを押し倒し、針のような舌を突き刺しアーカイブの機能にエラーを発生させ、その間に前足で引き裂き、破壊する。

木更 LP3000↓2900

この戦闘によって私のライフがわずかに減る中、

「台無しだとかやってしまったとか、そう思うのであれば」

「解放しろって？ 嫌だよ、だってもう放したくないんだから」

「フェンリルさん……」

やっぱり、駄目です。会話が通じるようで本題に触れると途端一方通行。まだ怖いと思ってしまうてるのに、すぐ説得に出てしまう私も私なのですけど。

「ボクのターンはこれで終了だよ」

そして、フェンリルさんのターンが終わり、二度目の私の手番がやってきます。

木更

LP2900

手札1

「《機殻の制限起動》」

□□

□—□

□「《ティンダングル・ハウンド》」

□□

フェンリル

LP4000

手札0

「私のターン、ドローします」

私はカードを1枚引き抜きます。どちらにしても、まずはこのデュエルに勝たなくては。

「《機殻の制限起動》の効果、再びクリフオート1体をP召喚します。再び来てください、私のモンスター！ EXデッキから《クリフオート・アーカイブ》をP召喚します」

再び現れる《クリフオート・アーカイブ》。さらに、私はそれをリリースし、

「プログラム実行、クリフオート・ドット・エグゼ。アドバンス召喚！ 起動せよ《クリフオート・ゲノム》！」

と、手札から新たなゲノムをアドバンス召喚。

「そしてリリースされた《クリフォート・アーカイブ》の効果。このカードがリリースされた場合、フィールド上のモンスター1体を持ち主の手札に戻します」

「え、あつ」

残骸が放った転送装置で、瞬時に手札へ送還される猟犬。

これでフェンリルさんの場合はガラ空きに。

「バトル。《クリフォート・ゲノム》でフェンリルさんに直接攻撃」

攻撃を宣言すると、ゲノムはフェンリルさんに向けて巨大なビームを発射する。

フェンリル LP 4000 → 1600

フェンリルさんは、瞬時にフィールドを発生させて身を護ったのがみえました。けど、私の攻撃がフィールドを使つてないのに気づくと、

「っ、優しいんだね木更ちゃん。直接攻撃なんて、相手に生傷残すチャンスなのに」

「傷つける気はありませんし、そんな事にフィールドを使うくらいなら、ドロローや護りに使います」

だって、私のフィールド量はそこまで多いわけではないのですから。元々リアルダメージを与える気もないですけど。

「私はこれでターンを終了します」

私は宣言します。すると、

「ちよつと。……残念だったな」

少し言葉を溜めてから、フェンリルさんはいいました。

「せっかくだから、最後の機会に木更ちゃんの愛を、この身に生傷として残したかったな」

「ごめんなさい」

私は、いいいます。

「そんな自己満足だけの贖罪に付き合う気はありませんので」

「ッ、そんなんじゃないよー！」

フェンリルさんは、カッとなって反抗します。

「ボクはただ、最後の機会に木更ちゃんに傷をつけて欲しかっただけで」

「どうして傷なんですか？」

「一生残るじゃないか。死ぬまで痛むなら尚更いいよ」

「それで、痛む度に自分の幸せが友達の人生を終わらせて創った虚像なんだって罪悪感に浸る為ですか？」

「っ」

凶星だったのか、それとも今初めて気づいたのでしようか。フェンリルさんはハツと目を見開いた後、追い詰められたみたいに、

「悪いの？」

「はい。まだ薬を打たれて廃人にされたり、四肢切断されて達磨にされたり、漫画みたいな催眠術とか洗脳電波とかで頭の中弄られるほうが許せる位に許したくありません」

「なら、なら正にそれをしてあげるよ！」

フェンリルさんは気がふれたように叫び、

「もうバトルは終了だよね？ なら墓地から《ティンダングル・ドロネー》を除外して効果を発動するよ！」

え、墓地から罫カード!?

「このカードは墓地に存在する場合、除外することで墓地のティンダングルモンスターを3体裏側守備表示で蘇生する！」

「さ、3体も？」

「来い！ 《ティンダングル・トリニティ》！ 《ティンダングル・エンジェル》！ 《ティンダングル・ベース・ガードナー》！」

一気に、フェンリルさんの場に3枚の裏側守備表示カードが出現。

「そしてボクのターン！ ドロー！ そして3体を反転召喚し、開け！ 過去未来を摘み取るサーキット！」

3体のモンスターが姿を見せたと思うと、出現したのは八方のマーク。これってリンク召喚!?

「アローヘッド確認！ 召喚条件はティンダングルモンスター3体。ボクはトリニティ、エンジェル、ベース・ガードナーの3体をリンクマークにセット！ 来て、LINK-3！ 鋭角の王《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》！」

3体のモンスターが普通より鋭い形状の矢印になりマークアローと

取り込まれる。すると、マーカーはひとつの扉へと姿を変え、煙と共に中から飛び出たのは3つの炎。それは混ざり合い、三つ首の《ティンダングル・ハウンド》のような化け物へと姿を変えます。

その攻撃力は0。ですけど、

「《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》は、墓地に《ティンダングル・ベース・ガードナー》を含むティンダングルが3種類以上存在する場合、攻撃力を3000アップさせる」

《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》 攻撃力0↓3000

と。当然そのまま攻撃力0なわけではなく。さらに、

「そして《ティンダングル・トリニティ》の効果。このカードがティンダングルのリンク素材になって墓地に送られた場合、デツキから《ジェルゴンヌの終焉》を手札に加え、さらにデツキの魔法・罫カード1枚を墓地に送る。ボクは《ジェルゴンヌの終焉》を手札に加え、デツキから永続魔法《ナーゲルの守護天》を墓地に送るよ。そして、墓地の《ナーゲルの守護天》の効果！ このカードは墓地のこのカードを除外し、手札からティンダングルカードを1枚捨てることで、デツキから新たな《ナーゲルの守護天》を手札に加える。ボクは木更ちゃんの手札に戻してくれた《ティンダングル・ハウンド》を捨てて、《ナーゲルの守護天》を手札に加える！ そして発動！」

と、デツキを回してきました。

「《ナーゲルの守護天》が存在する限り、ボクのティンダングルは戦闘と相手の効果では破壊されない。さらに《ティンダングル・スパイク》を通常召喚」

続いて現れたのは、煙から《ティンダングル・ハウンド》の口らしきものと注射針のような舌だけ顔を出したモンスター。攻撃力は1700。

「アキュート・ケルベロスは自身のリンク先のティンダングル1体につき攻撃力を500上げる。《ティンダングル・スパイク》はリンク先に召喚したから、その効果を起動！」

《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》 攻撃力3000↓3500

そして、アキュート・ケルベロスはまさかの脳筋タイプのもンスターだったみたいで、どんどん攻撃力を上げていきます。

「いくよ。カードを1枚セツトしてバトル！ 《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》で《クリフォート・ゲノム》に攻撃。まずは木更ちゃんの両手足を使いものにならなくしてあげるよ。アキュート・マス・ブレイズ！」

モンスターが炎を放ち、《クリフォート・ゲノム》を焼き払います。「さらに《ナーゲルの守護天》は1ターンに1度、戦闘ダメージを倍にできる。ボクはこの効果をいま使う！ くらえっ！」

ゲノムを通過し更に襲い掛かる炎は、フェンリルさんの宣言の直後さらに火力を増し、私を飲み込みます。

木更 LP 2900 ↓ 700

「っ、きやあああああああ——ッ」

四肢だけをピンポイントに焼く痛みが襲い、私は悲鳴をあげます。このままだと一瞬で四肢が灰になり達磨にされそう。私は必死にフィールを張り、自分の身が焼き焦げないように努めます。

「はあ、はあっ」

結果、何とか炎が消え、耐えきったと思ったときには、もう随分とフィールを消費してしまい、フィール面でのアドバンテージが一気に劣勢に立たされてしまいます。

さらに、ライフも1000を切って絶体絶命。

「ところで木更ちゃん」

そんな私に向けて、フェンリルさんはいいました。

「ティンダロスの猟犬の舌ってね、文献によっては魂を吸るとか、精神にダメージを与えとか、そういう扱いをされることがあるんだよ」

そういつてフェンリルさんは《ティンダングル・スパイク》を撫で、《ティンダングル・スパイク》は《ティンダングル・ハウンド》かティンダングル・リンクモンスターが存在する場合に相手に戦闘ダメージを与えたら、相手の手札をランダムに1枚破壊する効果を持つ。木更ちゃん、薬を打たれて廃人にされても許してくれるんだよね？ なら、この攻撃で頭の中吸っても別に構わないよね？」

「許すとは一言も言っていないんですけど」

指摘はしますけど、フェンリルさんは聞こえてないように笑って、「あはは、楽しみだなあ。この舌を刺されたら、もう頭は二度と戻らないからね。ボクのモノになるしかないんだ」

「それは駄目です」

私は、ここだけは譲れないのでいいました。

「私はかすが様のモノですから」

「かすが様？」

「Kasugaya本店で店長をしてる方です。もう何年も想い続けて」

「なに、言ってるの？」

唇を震わせ、フェンリルさんはいいました。

「そんなの、いるわけ無いじゃないか！ 木更ちゃんに想い人？ 男？ そんなの、君の妄想だよ！ そんな幻想、木更ちゃんには必要ないよー！」

いえ、怒鳴るように叫びます。

「忘れさせてあげるよ。何もかも！ 《ティンダングル・スパイク》で木更ちゃんに直接攻撃！」

するとスパイクはその舌を適当な鋭角に伸ばすと、その角度のゲートを取って私のデュエルディスクの角から生えるように現れました。舌は触手みたいのように動きながら、私の耳の穴へと狙いを定めます。

「これで、終わりだアアッ！」

と、叫ぶフェンリルさん。

私は耳元でうのようによ動く舌に恐怖で一瞬固まるも、

「と、畏れ動い！」

私は叫びます。すると、耳に挿り込む寸前だったスパイクの舌が一瞬停止。

危なかった。あと一瞬遅ければ、恐らく舌は私の鼓膜を破り、その奥の脳へと到達してたでしょう。私は舌に触れないようおずおずと伏せカードを表向きにし、

「き、《機殻の凍結》を発動します。このカードは発動後、攻撃力1800の効果モンスターになつて、フィールドに特殊召喚されます。《ティンダングル・スパイク》の攻撃力ではこのカードを破壊することはできません」

「そんな……」

相当、気合と期待が入つてたんでしよう。フェンリルさんはしよんぼりとし、

「見たかったな。脳を犯される木更ちゃんの姿。……けど、まあ勝てばいつでもできるんだから、いいよね？ バトルフェイズ終了時、《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》の効果で、攻守0のティンダングルトークンを特殊召喚できる。守備表示で特殊召喚し、ボクはターン終了」

スパイクの舌がデュエルディスクから消え、ターンプレイヤーが私に切り替わります。

木更

LP700

手札0

「《機殻の制限起動》」□□

□□「《機殻の凍結》」□□

□□「《ティンダングル・アキュート・ケルベロス（フェンリル）》」

□□「《ティンダングル・スパイク》」□□「《ティンダングル」トークン（守備表示）》」

□□「《セットカード》」□□「《ナーゲルの守護天》」

フェンリル

LP1600

手札0

何とか、デュエルの敗北を待たずして廃人にされる危機は去り、私は心底ほつとすると同時に、改めてフェンリルさんが恐ろしい性癖の持ち主だと分かり、恐怖が落ち着くどころか、更に増して私の体は震えあがりません。

達磨とか、薬とか、催眠術とか全部例え話のつもりだったのに、ま

さか本当に実行しようとするなんて。いえ、当時は実行する気がなかったとしても「したい」って欲求を刺激してしまったのかも。

(もしかして)

かすが様も、こんな恐怖に耐えかねて、鳥乃先輩をボディガードに雇って？

(まさか、ですね)

ふふ、本当に恐怖にやられて、心が委縮してるみたいです。かすが様を疑うだなんて、そんなマイナス思考にまで陥ってしまうなんて。

(割り切りましょう)

どちらにしても、私がデュエルに負けたら何してもいいと言ったんです。思えば「私の人生が終わってフェンリルさんに愛玩されるだけのモノ」になるのは間違っていないのですから、薬を使われても四肢切断されても、結果的には大差ないじゃないですか。

(あ)

と、いうより。「殺されて死ぬ」のと「命以外のすべてを奪われる」のって殆ど変わらないのでは？

ここでやつと、私は恐怖に怯えておきながら事態を甘く見ていたのだと気づきました。同時に、私がハンドのような世界、デュエルに負けたら死ぬかもしれない世界に足を踏み込んだ自覚が薄かったことも。

それを教えてくれたのがフェンリルさんで良かった。

「私のターン。ここで私はスキルを発動します」

私はいいました。

場には、攻撃力3500のアキュート・ケルベロスに、攻撃を通したら私を廃人にする《ティンダングル・スパイク》。さらにトークンが1体と、それらのカードを戦闘・効果で破壊させなくする《ナーゲルの守護天》。攻守全てにおいて隙が無い布陣。さらに伏せてある《ジェルゴンヌの終焉》もどんな効果か気になる所。それを突破できるカード引き当てないといけません。私の記憶では、このデッキの中でそれを可能にできるのはモンスターだけ。ですから！

「スキル《ドローセンス・地》！ この効果で、私のこのドローで引け

るカードを地属性モンスターに限定させて頂きます」

「そのスキルで逆転の一手を引き当てる確率を上げたの？ 無駄だよ」

フエンリルさんがいい、直後強烈なフィールが私のデッキトップに襲い掛かります。

「ボクのフィールで、その逆転のドローを妨害する！ 無駄なんだよ！ ドローカードをモンスターだけにした所で、フィールで流れを奪える以上変なカードを引き当てるだけだ！」

「させません」

私も、ありつたけのフィールをドローする指に注ぎ込み、フエンリルさんのフィールを掻きわけながら、

「ドロー！」

と、カードを引きます。結果、私のフィールは殆ど空になるも。

「引けた……」

私は呟きました。そして、それは間違いなく《ドローセンス・地》の助けがあつてのこと。ドローするカードから魔法と罫を排除することで、フィール抜きに引きたいカードを引く確率は間違いなく上がっています。その上がった確率分、本来のドローより余裕持つて注がれたフィールが、フエンリルさんの妨害に勝つか負けるかを分けたのです。

「なら、その希望を更に打ち砕いてあげるよ」

フエンリルさんはいいました。なお、あちらのフィールは私よりも少しは残ってるみたい。

「罫カード《ジェルゴンヌの終焉》！ このカードを装備カードとして《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》に装備！ 装備モンスターは戦闘・効果では破壊されず、相手の効果の対象にならない！

つまり、《ナーゲルの守護天》を破壊した所でアキュート・ケルベロスの耐性は消えず、さらに《ジェルゴンヌの終焉》を破壊しない限り対象を取ることはいらない！ もう何をしてもボクのモンスターは倒せないよ、木更ちゃん」

「いえ」

私はいいます。

「もはや『倒す』必要はなくなりました」

私は、彼女の説明を聞いて逆に勝利を確信しつつ、

「どういうこと？」

「すぐ分かります。まずは《機殻の制限起動》の効果、再びクリフオート1体をP召喚します。再び来てください、私のモンスター！ EXデッキから《クリフオート・ゲノム》をP召喚」

出現する今回3度目の《クリフオート・ゲノム》。さらに私は《機殻の凍結》と共にゲノムをリリースして、

「プログラム実行、クリフオート・ドット・エグゼ。アドバンス召喚！ 起動せよ《クリフオート・ディスク》！」

と、最上級モンスターをアドバンス召喚。

「《クリフオート・ディスク》と《クリフオート・ゲノム》の効果それぞれ発動します。まずゲノムの効果で《ジェルゴンヌの終焉》を破壊します」

「う、早速」

フエンリルさんが発動したばかりのカードを墓地に送ったのを確認して、

「さらに《クリフオート・ディスク》の効果。このカードはクリフオートモンスターをリリースしてアドバンスした時、デッキから2体のクリフオートを特殊召喚します。来てください、《クリフオート・シエル》そして2枚目の《クリフオート・ディスク》！」

と、私は2体のモンスターを呼び出し、

「いきます」

私が手を掲げると、瞬間間に辺りは真っ白の世界に切り替わって、「かすが様に届け、私のサーキット！」

私の真上にリンクマーカーが出現。

「召喚条件は機械族モンスター2体。私はディスクの効果で呼び出した《クリフオート・ディスク》と《クリフオート・ゲノム》をリンクマーカーにセット。プログラム起動、クリフオート・ドット・エグゼ。リンク召喚、解放せよリンク2、《クリフオート・ゲニウス》！」

光の世界が終わると同時に出現したのは、クリフオートの中から一体の黒い精霊が半身抜け出たモンスターの姿。攻撃力は1800。

「クリフオートに、リンク召喚?」

驚くフェンリルさんに私は続けて、

「《クリフオート・ゲニウス》のモンスター効果。1ターンに1度、このカード以外の自分及び相手フィールドの表側表示のカードを1枚ずつ対象として発動し、それらの効果をターン終了時まで無効にします。私は《クリフオート・ディスク》と《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》の効果は無効にします」

ゲニウスの体から闇が放たれ、2体のモンスターはその効果を停止。

「でもアキュート・ケルベロスの効果自体を封じた所で」

と、フェンリルさんはいいますけど。

「ですが《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》は元々の攻撃力は

「え、あつ!?!」

私の指摘でハツとなる中、

《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》 攻撃力3500↓0

そのモンスターの攻撃力は元々の数値である0まで下がる。

私はいいました。

「確かに《ナーゲルの守護天》で破壊はされませんが、こうして攻撃すれば、フェンリルさんにダメージは入りますよね?」

「う、あつ、そんな……」

すでに自分の敗北を確信した様子の方フェンリルさん。

「嫌だよ、ボクはこのデュエルに勝って、君を……」

「バトル! 《クリフオート・ディスク》で《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》に攻撃します」

彼女の嘆きを全部聞く前に、私は攻撃を執行。

フェンリル LP1600↓0

デュエルは終わりました。

フェンリルさんは、消えていくソリッドビジョンと全損するフィールを呆然と受け入れてから、

「ははは、馬鹿だねボクって」

と、その場でへたり込みます。

「気持ちを抑えきれなくなつて木更ちゃんを誘拐して、提案を受けずじつくりと愛せばいいのに、提案に乗つてデュエルして、結果負けだよ。絶対愚かなことするつて分かつてるから、誰かを好きになることも、情で深入りするのでも避けたかったのに、もうイヤ」

フェンリルさんは、真つ白になつたみたいに俯いたまま、

「約束は護るよ。どうせ、いつそ包丁で君を刺したくてもフィールがない以上通じないのも分かかつてるし、ボクを始末するなり警察に突き出すなり《ワーム・ホール》で逃げ出すなり好きにしてよ」

「あの一」

そんなフェンリルさんに私はいいました。

「私が勝つたときの条件、忘れてませんか？」

「……………え？」

力なくゆつくりとした返事に、私は、

「私は、勝つたら一緒に駅に戻つて、観光の続きに戻つて欲しいって言つたんですけど」

「……………は、え？」

途端、フェンリルさんは目を丸くして。

「それ、嘘じゃなかったの？」

「嘘なんて言いませんよ。それなら最初から解放してつて言います」

「そもそも、本気でまだそんな事考えてたの？」

「それは…………。さすがに躊躇いたくなるような材料は幾つかありますけど」

「なら」

と、追及するフェンリルさんに私は、

「でも。せっかく友達つて言い合えたのですから、フェンリルさんの気持ちも受け入れる所は受け入れて、互いに折り合いつけて元の鞆の近くまで仲直りしたいつて考えちゃってますから」

それが、私が導き出した最善ですから。

「勿論、誘拐されて火達磨にされかけ脳姦までされそうになって、あなたを見て怖くないって言えるほど聖人じゃないですから。私も恐怖を乗り越える努力をするのと、そんな私をフェンリルさんが受け入れる前提の話になってしまいますけど」

「いや、十分聖人だと思うよ」

フェンリルさん真顔でした。

「どこにボクみたいな事したのを許す人がいるのさ、ボクとは別の意味でキチガイの域に入ってるよ既に」

「キチガイ、ですか。そうかもしれない」

私はいいます。

「私、希望とか理想を現実させようとして、最善を取り過ぎて人間味が無いって言われる人間ですから」

「希望や理想？」

「今回だと、監禁からどう脱出するかですね。一番いい形を取るなら、フェンリルさんと決別するより仲直りして一緒に脱出するほうがいいですし、あなたをよく知り仲を深めるチャンスでもあります。脱出後を考えると、拉致監禁なんて無かった事にしてゼウスちゃん深海ちゃんと観光の続きに戻るのが一番事が大きくなりたくないじゃないですか」

「そんな事、考えてたんだ」

ありえない事を聞いたみたいに呆然とするフェンリルさんに、

「はい。私が今回でどれだけトラウマになったかとか、フェンリルさんが怖くて仕方なくなる危険性とか、そういった問題は完全に計算の外において」

「そんなの自分が何とかして受け入れればいい、とかトラウマなんて乗り越えれば解決だから、とか？ さすがに言うよ、馬鹿じゃないの？」

「馬鹿ですよね、でも。これが私ですから」

言いながら私は《ワーム・ホール》を発動し、

「では、とりあえず戻りませんか？ 騒動はこちらでなんとかします

から。……あれ?」

と、ここで《ワーム・ホール》がゲートは開いたものの、駅と繋がらず入ることができないのに気づいたのです。

「もしかしてフィールが足りないんじゃないかな?　ここと駅だと結構距離あるから」

「そうみたいです」

もしくは、私がどの位置にいるのか分からないから起こったエラーなのかもしれませんけど。どちらにしても、これでは最善の形で戻ることはできません。

幸いにも電波は届くみたいですから、ここは鳥乃先輩に事情を話し回収に来て貰うしかなさそう。先輩なら幻獣機を使った飛行手段もありますし。

仕方なく私がタブレットで通信を取ろうとした、その直後。

「木更ちゃん!」

と、鳥乃先輩が拳銃を構えてやってきたのでした。

それから私たちは先輩の《ワーム・ホール》で廃屋を後にしました。どうやら私がデュエルの為に網から出た時点で、私のタブレットの位置がハングドに特定されてたとの事。つまりは私が提示したデュエルの条件に従うなら、デュエル前にすでに勝敗は決まってるようなものだったんです。

これは私も知ってた機能だったのでですけど、焦りや恐怖ですっかり忘れてました。フェンリルさんには悪い事をしてしまったかもしれない。

駅には、すでに全員が合流してて、遠くには双庭さん姉妹が隠れてる様子もみえます。

「姉ちゃん!」「お姉ちゃん!」「おねーちゃん!」

みんな凄く心配してくれ、特に彩土姫ちゃん、水姫ちゃん、メールちゃんの3人は私を見ると真っ先に飛び付いてくれます。さらに、後ろから徳光先輩が小走りで近づいて、

「藤稔さん。無事でほんとに良かったよー。大丈夫だった?」

つて。3人が飛びつかなくなったら、抱き着いてきたのは彼女だった
かもしれません。

「ごめんなさい、心配かけちゃったわね」

私は3人を抱きかかえ、

「徳光先輩、ご心配をおかけしました」

「ううん」

けど、その隣では、

「貴様がフェンリルだな」

と、明らかに立腹した様子で話しかけるナーガちゃん。

「う、うん」

視線を落とすフェンリルちゃん。

「何故木更姉さんを拉致した。無事だからいいようなものの、事と次第によっては」

「あー待って待って」

と、会話に割り込んだのは鳥乃先輩。

「事実はこちらと違ってたみたいだから。木更ちゃん伝えてくれる
？」

「は、はい」

言われて私は慌てて事情を説明した所、ナーガちゃんはため息を吐
いて、

「まったく。だからって連れ去るような真似はしないでくれ」

と、引いてくれました。

救助にきた先輩にも口を合わせて貰い、今回の件は拉致監禁なんか
じゃなく、二人きりでどうしても話したい事があった為、事を急ぎ過
ぎて誘拐に出してしまった、という事にさせて頂きました。

その経緯でデュエルで交渉に折り合いをつける流れになりお互い
ファイルを使いすぎて帰れなくなってたとも。

とはいえ、世界の裏側に生きてる側は殆ど察してるようで、ナーガ
ちゃんも口先では合わせてくれましたけど、目は「まったく木更姉さ
んは」と呆れてる様子。分かってないのはゼウスちゃんくらいでしよ
うか。

「何はともあれ、無事だったのなら良かったです」

そして深海ちゃんも。彼女は裏側には関わっていない子なはずですが、台詞の後、私の傍に立つと小声で、

「姉さんがその気なら私も従うだけです。けど、さすがに人が良すぎますよ」

って。

「なんかボクたちだけ除け者な感じ。なんでだろ？」

同じく裏側と関わっていない彩土姫ちゃんも、察してはいないみたいです。ですけど裏があることは感じてる様子。それを聞いて水姫ちゃんが、「フィーちゃん、なにか分かる？」

「いえ」

って答える、その子つてもしかしてフィーアさん？ どうして水姫ちゃんと仲が良い感じなのか分からず、「え？」てなつてると、

「あとで事情を伝えるわ」

と、鳥乃先輩。

なおフィーアさんは本気で察してない様子でした。

「ところで」

そこへ小声でフェンリルさんが、私と鳥乃先輩に話しかけてきました。

「交渉の条件って、ホントにアレだけでいいの？」

アレとは、今回鳥乃先輩がフェンリルさんを許し、私たちの口合わせに乗る為に提示した条件です。

「本当に吞んでくれるならね。もちろん、破った瞬間に真実は関係者全員にまわるから」

その条件とは、今ごろ緒方さんを美味しく頂いてるであろうゲイ牧師さんに、フェンリルさんのほうから「襲撃事件やその協力者に関する情報」および「緒方さんの犯行と例の襲撃事件の関係」等の尋問を依頼して欲しいという内容でした。

さらに、手に入れた内容を包み隠さずハングドに提示すること。本来黒山羊の実として外に漏れたら困る情報など、鳥乃先輩がゲイ牧師さんに依頼したら提供されなかったであろう情報を全て。

実をいうと普段の先輩なら「不必要に黒山羊の実を敵に回したくない」からって、二つ返事で口合わせに乗ってたと思うんです。けど、フェンリルさんが相当反省し落ち込んでるのを見抜いて、あえて足元を見て、組織を裏切りかねない危険な条件を吹っつけた様子でした。恐らく先輩は断られも痛くも痒くもない。むしろ、一度断られてから「機密情報は省いてもいい」と提示して、心理的に「それなら」と思わせて交渉成立させる算段だったのだと思います。

けど。

「しないよ、そんな事。ボク個人としては組織なんかより、こつちの皆のほうが好きだしね」

って、フェンリルさんは笑顔で、

「任せてよ。バツチリ情報を取ってくるから」

そう、彼女は最初の無理難題のほうの条件で引き受けてしまったんです。

私たちは、この時点では知りませんでした。

今日の夜。早速フェンリルさんが持ち込んできた情報で、私たちはとんでもない事実立ち会ってしまうことを。

ところで、これは気のせいでしょうか？

この中で少なくとも2人以上が、談笑したフリして私たちの会話に耳を傾けてるような気がしたのは。

MISSION 20—幸せのエピローグ

私の名前は鳥乃トリノ 沙樹サキ。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「木更ちゃん。処女頂戴」

開幕。梓が私で人間餅つきしました。

いつもの《ハンマーシユート》でクレーターという名の臼の上でペッタンペッタンと。

「徳光先輩、この辺にしたほうが」

そろそろ潰された数が2桁に入ろうかという辺りで、木更ちゃんが止めに入ると、梓は、

「駄目だよ藤稔さん。さすがにさっきのは容認できない」

と、更に振りかぶろうと。

「梓さん、だったよね？ 駄目だよ、気持ちは分かるけどそろそろ止めてくれないと」

そこへ制止に加勢してくれたのはフェンリル。

「だけど……」

と、愚図る梓にフェンリルは、

「分かるけど、ボクの方も残してくれないと」

「フェンリルさん！」

木更ちゃんが慌てていうも、

「だって、木更ちゃんの処女はボクのなんだから、勝手に取る子にはお仕置きしないと」

「それもちが……っ、違い、ます」

さすがの私も顔をあげて様子をうかがう余裕はないけど、木更ちゃんが怯えを抑えながら言ったのは分かる。よくこんな状態でフェンリルを受け入れようと思ったものだ。

「あ。……ごめん」

落ち込んだ声で、フェンリルは謝った。こっちもこっちで、まだ木更ちゃんといいたいと思うなんて大物だ。

二日目、夕方。

昨日と違い、今日は私も梓も泊まらず帰ることになっており、三日目は基本私たち抜きでのスケジュールになってる為、今日この時間をもって、私と梓は親戚組ときよならする事になる。なので、せめて旅館の前まで一緒にという形になったのだけど、その旅館の前で「ばいばい」する際に、今回の餅つきが発生した。

なお、すでに神簇家やハイウインドとは解散し、現在この場にいるのは、私、梓、藤稔の親戚たちに、フエンリルである。

「あー。アタシ殺すよりエグい制裁浮かんだんだけど、試したいから助けてやってくれない?」

と、いったのは恐らく地津ちゃん。

「え? いいけど、なにをするの?」

言いながら梓は一旦餅つきをストップ。

「断言する。絶対いい顔を拝めるぜ」

と、地津ちゃんはいって、

「メール。ちよつといいかー」

「え? なになにー?」

「ひとつ想い込めて言って欲しいことがあるんだけどさー」

そういつて地津ちゃんは恐らくメールちゃんに何やら耳打ちしたのだろう。

「ふえっ!」

直後、顔を真っ赤に（多分）するメールちゃん。

「ほら。言えば鳥乃さんの命は助かると思うぜ、それにもしかしたら、OK貰えるかもしれないだろー?」

「お、OK……貰えるの?」

「ああ、命の恩人になるだろうからなー」

「そ、そっかー。そ、分かったあ」

メールちゃんが私の傍に寄ってくる。それも、どこか期待してるよくな足取りで。なんだか嫌な予感がしてきた。

「あ、あのね沙樹おねーちゃん、メールお願いがあるの」

そういつて、メールちゃんは私の耳元で、恥ずかしそうに、しかし明らかに気持ちの籠った声でいつた。

「沙樹おねーちゃん、処女頂戴」

それは、先ほど自分が木更ちゃんに言った言葉そのものであり。という話とかどうでもいい。

「ひ、ひいいいいいいっ！」

犯される！

私はフィールを全力で使い、ガタガタで動かない体を強引に半身立たせ、手段も選ばずメールちゃんから距離を取る。そして、ごろごろ転がってナーガちゃんの下へ。

「助けて、ナーガちゃん」

「何故私に助けを求めるんだ全く」

呆れながらも、ちゃんと私の盾になってくれるナーガちゃん優しい。その際、スカートに隠れたベージュの下着が見えたけど、相手は子供なので興味はない。

「地津おねーちゃんの馬鹿あ！ やっぱり駄目だったよおっ」

なお、メールちゃんもメールちゃんだダメージ過多。泣き顔で地津ちゃんに飛びついて、

「それに、あんなにおねーちゃん怯えて、嫌われちゃったらどうするの、ばかばかばかあっ」

と、地津ちゃんをポカポカ殴る。

「いやーマジゴメン。まさかあそこまで怯えるなんて、想像以上だったぜー」

張本人の地津ちゃんは露骨に私やメールちゃんから顔を背ける。

……………そうだ。

「メールちゃん、地津ちゃんが体で償ってくれるってー」

私は少し声大きく言った。直後、

「なっ」

露骨にゲツと顔を歪める地津ちゃん。対しメールちゃんは目をぱつと輝かせ、

「ほんと？」

「ほんとほんと。気が済むまで好きにしていって」

「わーい」

両手を挙げばんざいするメールちゃん。

「ま、待ってくれ二人とも。アタシ今日危ない日でさー」

とか地津ちゃんはいうけど、

「断れるの？ いまのメールちゃんを見て」

私はいった。にやにやと。

「あ、うー」

「メールちゃんってこの手の問題で一回ダメージ受けてるんでしょ。そんなトラウマをほじくるような事したんだから、ちゃんと責任持って傷癒してあげないとね」

「ぐぐぐ……」

ああ、地津ちゃん追い詰められてる追い詰められてる。

なんて最後の記念に、まだ殆ど接点なかった地津ちゃんを弄ってた所、

「はい、そこまで。もう見てられないから間に入るよ」

と、フェンリルが物理的な意味で文字通りふたりの間に割って入り、両手を使ってふたりを離す。

「メールちゃん、だったね。鳥乃さんの言ってる事は全部地津ちゃんへのやり返して冗談だから、衝動突き抜けてしまいたいの解かるけど、ここは頑張って抑えてくれると嬉しいな」

そして、こんなマトモすぎる説得を。しかし、

「控えめについて『お前がいうな』って台詞よね。あれ」

「そうですね」

木更ちゃんが「ふふっ」と笑っていい、

「立てますか？」

「ありがと」

私は木更ちゃんの肩を借り立ち上がる。まだ少し支えが必要だけど、じきにフィールなしでも立ち上がれるまで回復するだろう。

「凄いな、木更姉さんは」

そんな私たちのやり取りを見て、何故かナーガちゃんが「はあ」と感心した様子でいった。

「何がですか？」

木更ちゃんが訊ねると、

「いや、鳥乃さんにあんな酷いセクハラ発言されて全く動じてなかったのもそうだけど、その上いまもナチュラルに接してたからな」

「ああ」

木更ちゃんは納得した様子でうなずき、

「今日中どこかで言われるって予想してましたから」

「え、そうなの？」

それには私も驚き、訊ねると、

「はい。だって」

と、木更ちゃんはフェンリルを見て、

「先輩なら、自分の獲物が横取りされそうになって平気なはずがありませんから」

「木更ちゃん……」

私は、何か言おうとしたけど言葉が続かなかった。

凶星だったのだ。

木更ちゃんがフェンリルを庇うものだから平静なフリしてたけど、死別も含めて今度こそ手の届かない所に行ってしまう気がして、焦りと不安に襲われた。そうなる前に手を出しておかないとって。

「自分を獲物と認識してるのも、どうかと思うのだが」

と、ナーガちゃん。呆れたふりをしてるけど、木更ちゃんに対し顔を青くしてるのが分かる。けど木更ちゃんは、

「大丈夫ですよ。獲物とはいっても、馬の鼻先にぶら下げた人参ですから」

「待って、それ一生啜えれないって話じゃ」

私が指摘すると。

「そうですよ？」

と、防犯ブザーをちらつかせる木更ちゃん。ひどい。

「ま、まあ何だ。心配したが、姉さんが楽しそうで何よりだ」

フツと乾いた笑みを浮かべるナーガちゃん。

あの木更ちゃんがここまでトラウマ負ってるのだ。フェンリル相手に相当酷い目にあつたのをナーガちゃんが気づかないわけがない。

そんな中で木更ちゃんは自分を「獲物」と称したのだから、恐らく姉のメンタルに危機を感じ取ってたのだと思われる。

けど、蓋を開けてみれば単に姉が素でアブノーマルな愉しみに目覚めてただけだった。なんだか相当複雑なのが凄い伝わる。

一方、メールちゃんサイドのほうを見ると、

「実はさ、ボク初めてあった時から、メールちゃんにボクと同じものを感じてたんだ。別に心が病んでるわけではなさそうなのに」

と、フェンリルはいい、対しメールちゃんも、

「奇遇だね。わたしもおねーちゃんが同類な気がしてたの。別に体が少し違うってわけでもなさそうなのにー」

「でも、いまはつきり分かったよ」

「うん。メールもさっきのおねーちゃん見て分かったよー」

そういつてふたりは握手を交わし、

「お互い、突き抜けそうな衝動を抱えてる同士だったんだね」

「うん。びっくりだねー」

なんか奇妙な友情が形成されてた。しかも。

「今更だけど、君のお姉さんに酷いことしちやってごめんね。優しくされて、好きになっちゃって、そしたら閉じ込めてボクだけの物にしなくなっちゃって」

「気にしないでー。木更おねーちゃんもフェンリルおねーちゃんのこと許してるみたいだから」

「でも」

「それにね、おねーちゃんの気持ち、わたし分かるもん。わたしも綺麗な女の子とかイケメンのおにーさんとかかすが様を見ると、そのお、えっちな事、したくなっちゃうから」

って、メールちゃんが笑顔で、

「衝動を抑えてると大変だよねー」

と、フェンリルを赦すと、

「トウソク」

フェンリルが何かヤバい反応しだした。

「メールちゃん。……今度、プチ監禁しちや、駄目かな？」

「ファツ、ちよつと待って!？」

「え……う？」

しかし、一回驚くも、メールちゃんもメールちゃん顔で顔を赤らめもじもじと、

「……えつとー。じゃあ、一日交代で交互に、駄目ー？」

「こつちもこつちで犯る気満々という。」

「お前ら……」

今度こそ真底呆れた様子でナーガちゃんが呟いた。そこへ冥弥ちゃんがやってきて、

「やはり。男の人は男同士……女の子は女の子同士、ですね」

すると木更ちゃんが「あれ？」となって、

「冥弥ちゃん、百合やレズは苦手なのでは？」

「目覚めました……」

冥弥ちゃんは表情筋をまるで動かさずままガッツポーズで、

「今回も、木更さんが女の子に誘拐されたと聞いて……実は内心、大興奮でした」

そして、すつごい輝いた目で、

「木更姉さん、キスはされましたか？　パイタッチは？　実はフェンリルさんを受け入れそうになったりは？　その所……詳しく」

「鳥乃先輩、私の親戚が変態ばかりで、さすがに少し困ってきました」と、助けて求めてきたので私とナーガちゃんはずい、

「木更ちゃんも大概だけだね」「木更姉さんも大概だけだね」

なんて突っ込みを入れ、

「……」「……」

互いの反応に、

「ポンッ」

と、互いの肩を叩きあう。

「ハッ……ここに新たなカップリングが」

「無いから」「無いから」

私たちは冥弥ちゃんの妄想に突っ込みを入れた。ステレオだった。「沙樹ちゃん。そろそろ帰らないと間に合わないよ？」

そこへ梓の呼ぶ声。慌ててタブレットで時間を確認すると、確かにそろそろお別れしないといけない時間帯だった。木更ちゃんたちもチェックインしないといけないしね。

「じゃあ、私たちはそろそろ帰るわ」

すると、まず彩土姫ちゃんが、

「えー？ もう帰っちゃうの？ もうちよつといよろよー」

って、私の腕を掴んで引き留めようとする。この子との接点は殆どなかったのだけど、思ったよりずっと受け入れて貰ってたらしい。

「もう、さよならなんだ」

続いて、水姫ちゃんががしよんぼり呟くのが聞こえた。この子は同じ地元だから会おうと思えば会える距離なんだけど、人の繋がりや距離がイコールじゃないのを彼女はファイアの一件で知っている。いくら近くにいても、私たちの縁が今日までだろうということとは誰より感じているのだろう。

「か、神が命ずる。もう一晩、もう一晩だけ一緒の旅館に泊まるのだ」
ゼウスちゃんは、私ではなく梓に向かって懇願していた。逆に冥弥ちゃんは私に向かって、

「もう少し……一緒にいたかった」

「ナーガ。お前にならあるはずだ。……すべての時空を捻じ曲げる、タイムの力を」

金玖ちゃんは、双子の姉に妙な設定を求め、間接的に私たちと離れたくない意思を見せる。しかし、

「悪いが無理だ」

「何故だ？ ナーガにはあるのだろうか？ 梓も使った、あの古の魔法が」

「その魔法に、昨日や今日の朝に戻るようなものが無いと言ってるんだ」

ナーガちゃんは言うも、「だが」と続き、

「お前たち、別にもう二度と会えないわけでもないだろう。このメンバーでグループLINEも登録したんだ。やろうと思えばいつでも会えるさ」

「ああ、そうだな」

同意したのは地津ちゃん。

「アタシらが書き込めば、ふたりともちゃんと返してくれんだろう？」

「それは勿論」「当然だよー」

私と梓は返すも、地津ちゃんの目には希望なんて映ってないのが一目でわかった。

地津ちゃんは分かったのだ。いま、この場で誰しも嘘はいつてない。LINEで誰かが発信すれば全員目に届くだろう。けど、このメンバーが一同に揃う日は、恐らく二度とない。

私や梓と、藤稔の親戚たちとの絆は今日限りの一時的な繋がりであり、速くて一週間、遅くて一か月にはグループLINE自体が風化する。お互いに互いの絆は想い出に代わり、次第に互いの名前だって忘れていく。この二日間で余程親しい関係を形成した個人同士でない限りは。

それは、恐らく水姫ちゃんが感じてるだろう予感を、もっと広い視野で見たものであり、しかも確信の域に達している。

「じゃあ、みんなで記念撮影しよー？」

ここで声をあげたのはメールちゃんだった。

「集合写真を撮れば、ずっとずっと想い出に残るから、きつとまた皆で会えるよ。もちろんフェンリルおねーちゃんも一緒に」

「私も賛成です」

と、深海ちゃんも同意したことで、

「じゃあ、旅館の人に写真撮って貰えないか聞いてくるね？」

メールちゃんは一足先に旅館へと入っていった。

こうして、みんなで撮った1枚の写真。

それは、確かにみんなの想い出として一生残り続け、しかし二度と全員が一同に揃い笑顔で写真を撮ることはなかった。この中で誰しも想像しようもない結果によって。

それから、みんなと別れ梓とふたりきりでの帰路。

「なんか、色々あったねー」

梓が、ちよつと疲れた様子の笑顔でいった。

「そうね。木更ちゃんが拉致されたり」

「本当、あれはびっくりしたよー。でも無事でよかったね」

梓には今回の事件は、未だ木更ちゃん発案の嘘で通してある。でなければ「よかった」で済むはずがない。思えば事態を穏便にすます為にも木更ちゃんの判断は大正解だったわけだ。最悪私もフェンリルを地縛神の生贄に取り込んでたかもしれないなかったわけだし。

「ほんと、何もなくて良かったわ」

なにもなかった。それでいいのだ。それを被害者も望んでる。

「あ、そういえば」

脈絡なく、梓は思い出したようにいった。

「久しぶりだったよね、一緒の部屋で寝たの」

「そうだったわね」

幼い頃は、放置されたり自分から転がり込んだりして、よく梓と一緒にの部屋で寝てたっけ。いつの間にかそういう事もなくなり、特に今なんかは仕事上梓を巻き込まない為、それとさすがに小母さんに会いたくないという理由で、梓の家に近づいてはいないけど。

「でも、沙樹ちゃん忙しそうだったよね？」

「……」

私は、何もいえず俯く。

「ねえ、この休日は何も予定入れないんじゃないかなかったの？」

「ごめん」

「私、昨日の機会に色々お話したかったのに」

梓は怒っていた。それも、普段のようにぶくつと頬を膨らませるんじゃないくて、何ていうのか悲しい瞳をこちらに向けている。

「そんなに、お仕事が大事なの？」

ああ。

いつか言われると覚悟はしてたけど、ついに言われてしまったか。私は今回、それだけのことを梓にしてみましたわけだ。

「否定は、できないわね」

言いながら、私は梓を抱き寄せた。

「でも、梓のほうはずっとずっと大事よ」

「今言われても信じられないよ」

「でしようね」

私は、胸にグサツとくるものを感じながら、幼馴染の頭を撫でる。

そして、そつと解放し、

「梓。せつかくだし、このまま夜デートに行かない？」

「え？」

と、驚く梓に続けて、

「費用は全額こちら持ち。時間無制限、どう？」

「ほんと？」

「当然。仕事の番号は許可取って留守電にするわ」

「それなら」

と、梓は笑みをみせていった。

「喜んでお付き合いしちやおうかな？」

時間的に、まずはディナーから。

「水菜さんこんばんは」

私は、梓を連れて普段は仕事で利用している『BARなばな』へと足を運んだ。

カウンターでグラスを拭いていた、狐目に市松人形のような風貌をした見た目子供のマスターは私に気付くと一礼し、

「こんばんはです、沙樹さん。ただごめんなさいです、今日はヴェーラさんは不在で」

「むしろそのほうがよかったわ。今日はオフで来たもの」

確かに、普段は一番隅のボックス席でウオツカを飲んでる電波系小学生の姿が見えない。どうしたのだろうか。

「沙樹ちゃん、いった傍から仕事関係？」

梓がジト目で訊ねてくる。

「まあまあ抑えて、約束通り仕事は絡ませないから。それに、この店だからできる悪い事があるのよ」

「悪い事？」

きよとんとする梓に私は適当なボックス席に座らせ、私もその対面の席に。

それでもって、私はマスターにいった。

「水菜さん、手ごろで飲みやすいスパークリングワイン一本開けれる？」

「えっ!？」

驚く梓。

「沙樹ちゃん、ワインってお酒だよ？ 20歳未満は飲んじやいけないって」

「だから悪い事って言ったでしょ。大丈夫、酔わせて襲うとかしないから」

「沙樹ちゃんだから信じられないよー」

「もともと。」

「まあ、確かに梓以外なら襲ってそうだけど」

「ほらー」

と、困った顔する梓に私はいった。

「梓だけは、大切過ぎてそんな反則行為は出られないって話」

「え?」

それって、と唇が動く梓。そこへふたり分のグラスがテーブルに置かれた。

「お待たせしました。ご注文のスパークリングワインです」

そういってマスターは、目の前でワインの栓を開け、グラスに液体を注ぐ。そのままワインはテーブルに置かれ、

「お二人様、ご夕食はまだですよ？ フードは何に致しますですか？」

と、訊ねるマスターに私は、

「じゃあ、今日のマスターのおまかせコース。予算はひとり1万以内で」

「でしたら、なんちゃってフレンチにしますですはい」

では「ゆっくり」とマスターは一礼しカウンターへと戻っていく。

「あ、勝手に決めただけどフレンチで大丈夫?」

「う、うん。私は大丈夫だよ？ でも。た、食べたことないから緊張しちゃうけど」

実際、フレンチの響きに萎縮しちゃってるのが見える。

「大丈夫よ、〴〵なんちゃって」フレンチらしいから。それより」

私はグラスを掲げ、

「せっかくだし、君の瞳にとか言っとく？」

「さすがに、それは気持ち悪いかなー？」

「よね」

まあ、分かかって冗談言ったんだけど。そんな台詞を素で吐くのはアインスひとりで十分だ。

「じゃあ、まあ」

「二日間お疲れ様、かな？」

「かな」

梓の提案に同意し、

「乾杯」「乾杯」

私は梓とグラスをカチンと当てあい、ゆっくり呷る。

味は渋みがなく、やや甘口だろうか。炭酸のシユワシユワもあつてお酒が初めての人も飲みやすそうなワインだった。加えて割と喉も乾いてたせいか、気づくとグラスは空になっていた。

「わ、一気に」

梓が私のグラスを見て小さく驚いた。そんな彼女のグラスも残り三分の一まで減っていたのだけだ。

「思った以上に飲みやすいワインだったからね。そういう梓だって、結構減ってるじゃない」

「実は喉が渴いてて。それに驚くほど飲みやすかったもん」

「どうやら、お互い同じ感想を抱いてたらしい。」

「お待たせしました。こちら本日の前菜オードブルになりますです」

そこへ、マスターが最初の料理を席に置いた。それは、ひとり1枚の皿の上に数種類の一口料理が並んでるもの。素人目だけど、なんちやつてとか言いながら凄く本格的に映る。

（ん？）

でもって、私は一口料理のうちのひとつ。クラッカーの上に生ハム、クリームチーズ、パセリ、そして何やら黒い粒々が少しずつ乗った一品に目がいく。

「沙樹ちゃん。これって、このクラッカーの上にあるのって」

梓も、私と同じものに目がいったらしい。

「水菜さん、これ何？ この黒いの、もしかして」

するとマスターはにやりと悪い顔。まさか、まさか。

「マスター？ 今日私がコースに出せる金額はひとり幾らだっけ？」

「ええと……1万ですね」

「今日のなんちゃってフレンチはひとり幾ら？」

「……5000円ですね」

半額!?

「もひとつ質問いいかな？ この料理のキャビア代、どこに行った？」

「……君のような勘のいいガキは嫌いです」

と、ネタ混じりの追及に乗ってくれるマスター。

「丁度、コースで思いつきり料理作りたかった所だったんです。試食役に巻き込まれたと思って、素直に頂いちゃってくださいですはい」

「はあ」

私は呆れながら、

「ひとり1万以上は出さないからね」

「では、ごゆっくりお楽しみくださいです」

最後にグラスのワインを注ぎ直し、カウンターに戻っていくマスター。私は「どうしようこれ」なんて思っていると、

「ねえ沙樹ちゃん。このキャビアのクラッカーだけでK a s u g a y a ラーメン大盛り肉増量味玉追加より高いよね？」

「たぶんね」

そういえば、ここのマスターは本当に狐みたいな人間なのだった。悪戯や驚かせるのが大好きっていう意味で。けど、だけど、こんな手段でやらかしてくるなんて。

「ねえ、沙樹ちゃん」

突然、梓が訊ねてきた。しかし、

「さっき言ってた、私だけは襲わないって、やっぱり私だけはそういう目で……」

とか言いかけ、

「ううん。何でもない。それより食べよ、沙樹ちゃん」

と、料理に手をつけ始めた。

私は残念ながら何を言いかけてたのか察することができず、

「そうね」

と、ワインとコース料理を愉しむのだった。

「美味しかったね、沙樹ちゃん」

夜風に当たりながら、梓が満面の笑みで前を歩く。コース料理というの是一片一品の量が少ないので梓に物足りないかなと思っただけど、実際は全部食べると結構なポリウムになる。結局追加でワインナーの盛り合わせを頼むことにはなったけど、その程度で終わった。「そうね。まさか三大珍味全部くるとは思わなかったけど」

まだ未成年だというのに結構飲んでしまった。2人で瓶1本は私たちには少し多かったかもしれない。けど、お互い変な酔い方はしていないみたいだし、ほてった体に夜風がとても気持ちいい。

とはいえ、あれでひとり5000円は絶対あり得ない。一体マスター今回でどれだけ赤字背負ったのだろうか。

「あ、沙樹ちゃん見て見て」

普段よりちよつとテンションの高い梓が、前方を指さしいった。

「お祭りやってる」

「ああ、確か今日だったわね」

ここから真つすぐ歩いた先にある通りでは、隣接する公園を巻き込んで孤児院主催のお祭りが年に数回開かれている。すでに孤児院を出た大学生や社会人も、この日は街に戻って屋台を出し今の孤児たちと交流していると聞く。そういえばヴェーラもそんな今の孤児のひとりだ。だから、今日はいなかったのかもしれない。

——そして、妙子が生きてたら、そんな今の孤児たちのひとりとして出店を手伝ってたかもしれないお祭りでもある。

「行ってみようよ」

「そうね、行ってみましょう」

私は梓にうなずき、ちよつとだけ速足で向かった。

会場に到着してみると、そこは前に来たときより薄暗いという印象を覚えた。ここ2、3年はほぼ直進の通りにびつしり提灯が並び孤児院主催とは思えない豪勢さがあつただけど、今回はその提灯の明かりが少ないのだ。とはいえ、今までが場違いに凄かっただけで、慣れば明るさは十分。何より変わらない屋台の数と熱気が、多少の薄暗さなんてものでもない盛り上がりを作り出している。

「あ、孤児院のお祭りだったんだ」

ここで梓は、やつと何のお祭りに気づいたらしい。しかも、気づいた途端にしよんぼりと、

「どうしよー。このお祭り、神簇家が一番の出資者だったからずっと避けてたのに」

「ああ……」

そういえばそうだった。しかも、気づけば神簇家が出資者に加わつてから提灯の数が増えて豪勢になった気がする。つてことは、今回提灯が少ないのは神簇家が半ば没落して殆ど出資できなかつたせいだろう。

何て考えてると、

「こらー！ その営業妨害！ そういうことは他所で言いなさいよ！」

と、女性の怒る声。しかも、その声には聞き覚えがあるわけで。

「まさか……」

嫌な予感しつつ声の先に振り返ると、やはりというか意外というか、神簇が浴衣にハチマキ姿でタコヤキを焼いてたわけで。

「神簇、何やってるの？」

げんなりしつつ訊ねると、神簇はピックをくるくるしながら、

「見れば分かるでしょ、出店してるのよ」

「ごきげんよう、先ほどごぶりですね」

隣にいたアンちゃん、車椅子に乗ったまま頭を下げる。

「前回までは祖父専属の使用人がされていたのですが、今年はゼロになってしまいましたので」

だから私たちが、とアンちゃんは笑みをつくっていった。その原因を作ったのが彼女だろうことは口が裂けても言わないでおく。これが神簇なら平気で傷を抉って遊んだけど。

「お姉ちゃんタコヤキひとつ」

そこへ彼女の屋台にお客さんがひとりやってきた。

「はい。ただいま」

「300円になります。……確かに、ありがとうございます」

「アン、タコヤキあがったわ」

「はい。ご注文のタコヤキです。ありがとうございます」

神簇が丁度焼きあがったタコヤキを船に詰め、アンちゃんがその間に会計を済ませつつ、受け取ったタコヤキをビニール袋に入れて手渡し。どうやら、ちゃんと阿吽の呼吸で仕事できてるらしかった。

「ふう」

そのまま神簇は残りのタコヤキも船に詰め終わると、油を引き直しノンストップですぐ次のタコヤキを焼き始める。

「繁盛してるみたいだね」

梓がアンちゃんに話しかける。

「ええ、おかげ様で休む暇がない程に」

「受付の子が可愛いんだから当然だよー。ね、沙樹ちゃん」

「全くよ」

私は梓に同意しながら、アンの胸元をガン見。浴衣姿なのにこれだけバストが強調してるのだ。目立たない筈がない。

「鳥乃、貴女どこを見て言ってるのよ」

そんな私に神簇は横槍を入れつつ、「はい」とタコヤキを一船こちらに突き出してきた。

「え?」

「心配しないで、私の奢りよ。アン、あとで私の財布から300円抜いてくれる?」

アンちゃんは「わかりました」と言いながらビニール袋を出して、

「袋にお入れ致しますね」

と、神簇からのタコヤキを持ち運びやすいようビニール袋に入れてくれる。

「ありがとうございます」

私はアンちゃんからタコヤキを受け取り、

「でも、いいの?」

と、神簇に訊ねると、

「いいのよ。貴女たちには酷い迷惑しかかけてないのだから、たまにはお姉さんらしいことさせて頂戴」

その「貴女たち」と口にした際、神簇は一瞬だけ梓に視線を向けたのが見えた。梓自身は神簇を視界に映さないレベルでスルーしてただけ。

だからだろうか。

「それより、他も見て回るんでしょ? こんな所で駄弁ってないで、早く行きなさい」

つて、神簇は私たちを追い返すのだった。

それから、私は歩きながら早速タコヤキの袋から出し、

「じゃあ、早速貰っちゃおうか」

と、梓にいったけど。

「ううん、私は別のにするね」

間違いなく、神簇が焼いたタコヤキだからだろう。それだけ、梓はまだ彼女を受け入れてないのだ。

私はますます矯正する気はない。神簇はそれだけのことを梓にしてるのだから。むしろ私が神簇を受け入れてる現実のほうがおかしいのだと思える程に。でも、反面梓は妹のアンちゃんとは心を開き親しい関係にある。

だから私は梓にこれを食べて欲しい。

「多分、だけど」

だから私は、タコヤキをひとつ頬張りながらいった。

「実際に焼いているのは神簇だったけど、材料の確保から下準備までは全部アンちゃんだと思うのよね。基本的に料理はアンちゃんのほう

が上手って聞いたことあるから」

「え？」

僅かに食いつく梓に、私はタコヤキの船を差し出し、

「美味しいよ？ アンちゃんの作ったタコヤキ」

「アンちゃんの？」

「そ、アンちゃんの」

そう言うと、初めて梓はタコヤキに手を伸ばし、一口。

「はふっ、はふっ」

と、しながらも梓はいった。

「本当、美味しい」

って。

タコヤキを食べ終え、適当に足を進めていた所、

「おや、鳥乃じゃないか」

と、私たちは再び呼び止められる。しかも、これまた見知った声で、私が振り返ると、

「奇遇だね。どうだい、これから人気のない外れで一緒に花火でも」

と、アインスがシュウの肩を借りてポーズを取り、私たちにひらひらと手を振っていた。

「悪いけど、私いま大本命とデート中だから」

「え？」

私の断り文句に梓が顔を赤くする。可愛い。

「どうしたのよ、私の一番が梓なのは幼い頃から当然って話でしょ」

たぶん、まだワインの酔いが残ってたのかもしれない。私は梓の頭を撫で、思いつきり惚気てアインスを追い返そうと企む。

「えへへへ」

梓は嬉しそうに、照れ照れゆるゆるな顔を見せる。やっぱり天使だ。

「これは失敬。となると、さすがに今回は彼女を口説くのも辞めたほうが良さそうかな？」

とか、アインスがほざくので、

「キボウノハナ、レッドフォール、目だ！耳だ！鼻!!、どれが希望？」
「どれも断らせて貰うよ」

アインスは両手をあげてオーバーに断る。
「ていうか、あなたたちもお祭りきてたのね」

私は、今度は梓の喉を撫でるなど愛でながら、げんなり顔で訊ねると、

「ああ。フィーアもいるよ」
「げ」

アインスの言った事実には私は仰け反る。するとここでシユウが、
「だよな。普通はそういう顔するよな」

と、ため息吐いて、

「だから言ったじゃないか。いくら監査官からの指示でも、今回はアタシかアインスのひとりだけ警備に入って残りは待機が正解だったんだ」

監査官つてことは、ああメールちゃんが指示したのね。思い返すと相当甘い子よね、あの子。ボイスも見た目も甘いけど。

「いいじゃないか。フィーアは警備には配置してないのだし、いまの彼女なら大丈夫だ」

と、ふたりが言いあつてた所、

「アインス。ここにいましたか」

フィーアが現れたのだった。しかし、その異様な姿にシユウと私は言葉を失う。

まず浴衣姿、これは別にいい。しかし、お面を頭の上にかけて、肘にカチワリをぶら下げ、片手にわたあめ、もう片手でチョコバナナにあんず飴と全力でお祭りを満喫してたのだ。しかも甘いものばっか。

「良かった。楽しんでるみたいだねフィーア」

対しアインスはそんなフィーアを見て嬉しそうに。

「はい」

フィーアはうなずいた。

「ラムネやかき氷、トルコアイスというのも頂きました。とても美味しかったです」

「それ食った後にカチワリかよ。お腹壊すぞ」

さすがにシユウが突っ込むも、

「問題ありません」

フィーアはいい、

「食というものがこんなに娯楽なるとは知りませんでした。その上甘味というものがここまで素晴らしいとは」

「甘党過ぎるだろおい」

呆れるシユウ。そして、さすがのアインスもさすがに苦笑いに変わって、

「楽しむ事を覚えたのは何よりだけど、今度は限度というものを教えないといけなそうですね」

「難しそうだな。コイツ処分人としても限度知らずだったし」
「？」

先の重そうなふたりの様子に、フィーアは首をかしげた。

「フィーちゃん、クレープとタピオカミルクティーできたって」

そこへ奥の屋台からフィーアを呼ぶ声。それはなんと水姫ちゃんだった。

「って、まだ買う気かよ。持ちきれねえぞ」

頭抱えるシユウにフィーアは、

「すみません。両手のものを持って頂けますかシユウ」

「おい」

言いながらも渋々シユウは受け取り、両手の空いたフィーアはそのまま水姫ちゃんの下へ。

「もしかして、皆も来てるのかなお祭り」

梓がいった。

「かもね」

私はうなづく。ここで水姫ちゃんは私たちに気付いて、

「あ、徳光さん鳥乃さん。来てたんだね」

「こんばんは水姫ちゃん」

駆け寄ってきた水姫ちゃんの頭を梓が撫でる。水姫ちゃんは「えへへ」と笑ってから、

「あ、そうだ皆も呼んだほうがいいかな？　いま全員別行動でばらばらだけど、LINEで流せばすぐ集めると思うよ」

「いや、いいわ」

私はいって、

「すぐ集まる距離ってことは、全員お祭りに来てるんでしょ？」

「うん」

「なら、適当にぶらぶらしてたら会えるだろうし」

「そっか。そうだね」

納得する水姫ちゃん。

「水姫、あれは何ですか？」

そこへフィーアが水姫ちゃんを呼んで、

「あ、フィーちゃん。それはたい焼きだよ。って、まだ買うの？　せめていまあるものを食べきってからにしようよ」

言いながら水姫ちゃんはフィーアの相手にまわる。ふたりとも、とても楽しそうだった。

私は、水姫ちゃんが少し離れた所を狙って訊ねた。

「皆に会うとデートどころじゃないし、どこかでお面と玩具のサンダラス買って変装しとく？」

「ううん、平気」

いうと梓は私の腕にしがみついて、

「今日は私が一番なんでしょ？」

「一番は毎日だけだね」

言いながら私はちよつと動揺。梓の胸がしつかり腕に当たって、柔らかすぎる。これはメールちゃんやフェンリルじゃないけど、理性飛ぶ。

てか、やっぱり可愛い。

天使。

「熱々だなおい」

と、茶化すというより、少しげんなりした顔のシユウに、

「今日はちよつとハイなテンションでねお互い」

私がいようと、アインスは笑いながら冗談のつもりで、

「もしかしてアルコールでも入れたかい？」

「それじゃあ、そろそろ行こうか梓」

「うん」

私たちが露骨にスルーして行こうとしたので、シユウが、

「おい、待った！ 未成年だろおまえら！」

指さして叫ぶも、私たちはわざとラブラブなポーズを取って逃げることにした。

続いて私の目にとまったのは射的。そこでは、ナーガちゃんと金玖ちゃんの末っ子双子コンビが、

「落ちろカトンボ！……くそっ、また駄目か」

「当らない。……あの景品には絶対回避の魔術が掛っているとでもいうのか」

と、いま正に泥沼に入りかけていた。

「何が欲しいの？」

私は、そんな二人の後ろから話しかけてみる。ふたりは一回びくつと驚いた後、

「ああ鳥乃さんに徳光さんか」

「水姫から……LINEで聞いている。そうか……本当に来ていたのか。……この、闇のサバトに」

どうやら金玖ちゃん語によると祭りは闇のサバトらしい。

「もう、みんなに私たちが来てるの伝わってたんだ」

驚く梓に私もうなずき、

「さすが団結力が高いわよねこの子たち」

「その上、全員白とはつきりした所だからな」

と、ナーガちゃんは射的の銃を肩で担ぎ、

「今回は鳥乃さんにも徳光さんにも大変世話になった。感謝する」

「え？」「え？」

私たちはきよとんとし、

「梓も？」「沙樹ちゃんも？」

「お互い知らなかったのか」

ナーガちゃんは小さく驚き、

「私たちの中に悪者の仲間がいるかもしれないという件なのだが、どうやら私が鳥乃さんに、地津が徳光さんにそれぞれ相談してたらしいんだ」

「そうなの？」

私が訊ねると、

「うん」

梓はうなずき、

「知ったのは今日だけだね。ふたりで漫画喫茶に入ったとき、地津ちゃんがドローンを使う本当の理由を教えてください」

「あの時ね」

とはいえ、ナーガちゃんの言い方を聞くに梓にはフィール・ハンターズとか先日的事件とか詳しい事は聞かされてないらしい。

「それで思い出したけど金玖ちゃん大丈夫？ 木更ちゃんが拉致された事で頭がいっぱいで全員忘れてたけど、金玖ちゃんも軍服のロリコンに誘拐されたじゃない」

「この金玖を……なるめな」

金玖ちゃんは顔に手を当てたジョナサンポーズのジョジョ立ちでいった。ていうか「なるめな」じゃなくて「なめるな」では？

「どんな波であろうと、より大きな波の前には無力。……すぐ、飲み込まれる」

「は、はあ……」

突然の哲学的な言葉、しかも意味が分からない。そのくせ金玖ちゃんには。

「フツ……またひとつ名言を創ってしまった」

と、ひとり台詞を決めた余韻に浸っている。そこへナーガちゃん

が、
「つまり、自分が受けた恐怖を忘れるくらい木更姉さんを心配していたらしい」

あー。なるほど。

「まあ、加えていまは姉さんが無事だった喜びに恐怖を忘れてるらし

い。数日すれば恐怖を思い出すかもしれないが、その時は私が支えるから大丈夫だ」

「ナーガちゃんなら安心ね」

ある意味木更ちゃんより精神年齢が大人くらいなもの。

「それで、結局親戚に黒はいないって事で解決したのね？」

訊ねると。

「地津と話し合った結果、該当者なしという結論に落ち着いた。彩土姫姉さん水姫姉さんそして金玖は完全に昼側と確定したわけだし、中学生組は、木更姉さんは鳥乃さん側、メールが私側、他の中学生組は地津側だからな。さすがに互いの味方の中に裏切り者がいるまで考慮するには精神的代償が大きすぎる。だから私たちは暫定的に全員白と結論付けた」

「つまり、私たちが引き続き調べる分には問題ないわけね」

「ああ、そうしてくれると助かる」

ナーガちゃんはすまなそうに言った。そこへ梓が、

「ねえ沙樹ちゃん。もしかして旅行中に行っていた仕事って」

「そ、まさにこの犯人捜し」

実際はもうふたつあったわけだけど。

「そっかー」

梓は「なーんだ」って顔をして。

「そういう事だったら、私にも相談してくれたらいいのに」

「梓には、あの子たちに疑う目を持たずに接して欲しかったのよ。木更ちゃんからの頼みだって大事な仕事なんだから」

「あ、そっかー」

とはいえ、梓が「でもなあ」って顔をするので、

「ごめんごめん。代わりに何かひとつ言うこと聞くから」

私という梓は、

「じゃあ、あのぬいぐるみ取ってくれる？」

梓が指したものは、射的の景品の中で明らかに取れなそうな大きな猫のぬいぐるみだった。

「……あー」

無理。私の頭の中でこの2文字が浮かんだけど、言ってしまった以上はどうすることもできない。

この状況でぬいぐるみを手に入れる手段とはいえば。

「ところでナーガちゃんと金玖ちゃんほどの景品を狙ってたの？」

訊ねると、ふたりは同じ方向を指して、

「あのガンプラの箱なんだが」

と、ナーガちゃん。

「あれね」

私はすぐ店番の若いお兄さんに料金を払って、良さそうな銃とコルクを選ぶ。それでもつて構えると、

「鳥乃?……まさか、私たちの仇を」

と、驚く金玖ちゃんと、

「沙樹ちゃん? ぬいぐるみもちやんと狙ってね」

と、念を押す梓。

「分かってる。ちよつと待ってて」

私はいつてから、ガンプラの箱を狙って引き金を引く。コルクは狙い通り箱の角に当たるも、箱は一度大きく揺れながらも結局落ちることなく態勢を取り戻す。それは明らかに不自然な動きだったわけで。

「ベーンゴ」

私がいようと、ナーガちゃんは驚き、

「鳥乃さん、まさか」

「あの箱、細工してあるわね。お兄さん、ちよつといい?」

数分後。

私は見事ガンプラをふたりにプレゼントし、ついでに口止め料として梓が欲しがってたぬいぐるみを頂戴するに至った。

「♪」

両腕にぬいぐるみを抱え、嬉しそうに歩く梓。

最初は、まるでズルみみたいな獲得の仕方に苦言を呈されたけど、ぬいぐるみが重さ的に射的ではどこを狙っても、何百発当てても恐らく落ちないことを伝え、これが唯一の獲得方法だと「言いくるめた」

所、納得してくれた。

途中、きゆうりの一本漬けを2本買ってふたりで頬張っていると、

「あれ?」

梓が不意に前方を指さし、

「あそこにいるの、冥弥ちゃんじゃない?」

「え、どい?」

「ほら。あのチョコバナナ屋さんの近く」

言われた所を、私は視線で探す。そこには、ピンクの浴衣を着た冥弥ちゃんがひとり水ヨーヨーをポンポンしながら、寂しそうに立ち尽くしている……ように見えた。表情筋があまり働かない子なので、実際は別のことを考えてたりする可能性もあるけど。

「冥弥ちゃん?」

私はせっかくだから接触してみることにした。

「あ、鳥乃さん……に、徳光さん……」

冥弥ちゃんは私たちに気づくと、歩いてこちらに向かってくる。

「もしかして、ひとり?」

訊ねると、冥弥ちゃんは首を振って、

「いえ。ゼウスと一緒にでした。けど、はぐれてしまって……。ということは、おふたりともLINEは確認されて、なかったん……ですね」
「え?」 「LINE?」

言われて、私はタブレットを開く。そこには早速私たちと藤稔のみんなを繋ぐグループLINEに書き込みがされてあって、ログの最後のほうに。

冥弥：ゼウスとはぐれた。誰か見かけたら反応お願い

といった書き込みが。

「ごめん、もうLINEが活用されてたなんて知らなくて」

「気にしないでください」

冥弥ちゃんはいい、

「それでゼウスは……」

「ごめん、見てないわ」「ごめんね」

私、そして梓はいった。

「そうですか」

しよんぼりする冥弥ちゃん。

「悪いわね。後で私たちも探してみるから。梓もいい？」

「勿論だよー」

にこりと笑みを作って梓はいう。

「ありがとうございます」

冥弥ちゃんは嬉しそうだった。

「ところで……おふたりはデートなのですか？」

そんな冥弥ちゃんが突然訊ねてきたので、

「え、どうして？」

「LINEで木更さんが」

ログを確認すると、確かに水姫ちゃんが私たちを見つけたと報告し、そこに木更ちゃんが「温かく見守るように」って。

「もし本当にそうなら、邪魔しては……いけないので。ゼウスの件とか」

「余計な心配しなくていいわよ」

私は冥弥ちゃんの頭を撫で、隣から梓が、

「そうだよー。デートとはいっても、幼馴染でそれも女の子同士のお出かけなんだから」

「でも……おふたりとも夕方別れる前より、綺麗で……幸せそう」

本当に邪魔だと思うのなら、確認もとらず見送ればいいのに、興味津々なんだろう。特にあの子はリアルにBLと百合を持ちこむ人間だし。

なんて思ったけど、私は冥弥ちゃんの微妙な表情に気付く。

ああ、なるほど。

「何言ってるのよ。冥弥ちゃんだって夕方より綺麗じゃない。似合ってるわよ、その浴衣」

恐らく、この浴衣は旅館のものではないはずだ。となるとレンタルか自前か。その上、よく見ると冥弥ちゃん軽くお化粧しているのが分かる。

「あ、ありがとうございます……」

「だから、ゼウスちゃんとはぐれたからって不貞腐れないで
「え？」

きよとん、とする冥弥ちゃん。

「どうして……分かったのですか？」

「え？ 冥弥ちゃん不貞腐れてたの？」

梓が訊ねると、冥弥ちゃんは「はい」とうなずいて、

「ゼウスとお祭りに行くの……楽しみだったんです。でも、一緒に見て回るはずだったのに。……すごいなくなっちゃって」

すると梓は驚いて、

「すごい沙樹ちゃん。どうして分かったの？ 私全然気づかなかったよー。冥弥ちゃん全然顔に出ないから」

「そう？ ちょっと観察すれば案外分かるって話だけ」

一見表情は変わってないように見えただけ、微妙な首の動きとか、僅かな視線の動きで分かるのだ。対応に慣れてしまうと、本当は彼女ってすごい感情豊かなのだと気付くほど。

なんだけど。

「……そんなに、分かるん、ですか？」

「変かな、梓」

と、幼馴染の意見も聞いてみると、

「正直。凄いと思うよ」

って。さらに冥弥ちゃんも、

「ゼウスなんて、一番私と付き合いが長いのに……いまだ分からないんです」

「え？」

「従姉妹であると同時に、幼馴染なんです。私たち」

いくらゼウスちゃんでも、ここまでくると相当だ。しかしなるほど、だから私たちを見て自分の現在と比べてしまったのだろう。

私は冥弥ちゃんの頭を撫でた。

「悪かったわね。人のデートを見せつけるなんて、ショックに逆撫でするような事しちゃって」

そして優しく慰めるように続けていう。

「そうよね。ゼウスちゃんの為に綺麗な浴衣にお化粧までしたのに、あんな態度取られたら傷つくわよね」

「いえ、これはゼウスの為じゃないですけど?」

即答だった。しかも普段より歯切れがいい。

「あれ?」

今度は私がきよとんする中、冥弥ちゃんは少し恥ずかしいのか視線を逸らし、

「相手がいなくても……さすがに、ずさんな恰好でお祭りに行くのは嫌で……木更さんに、着付けと化粧を頼んだんです。……もしかして、変、でしたか?」

「そんな事ないよー」

梓が、冥弥ちゃんの手を握っていった。

「女子力高くて、すっごく素敵。沙樹ちゃんもそう思うよね?」

「うんうん」

こうして至近距離で見ると、冥弥ちゃんはこれでもかという程綺麗な顔をしている。まだ中学生と思っただけ最終学年なので、素材としての色気は殆どハイティーンに近い。それでも、まだ雰囲気は垢抜けしてなさは残るので子供扱いしてみただけど、今回こうやっておめかしで化した姿を見てしまう。

「正直、1年早く冥弥ちゃんと出会ったのを今ほど後悔したことはないわ」

「どういうこと、です……か?」

訊ねてくる冥弥ちゃんに私は、

「ん、冥弥ちゃんが中学卒業したらベッドに誘いたかった」

「はいアウト」

「いぎっ!」

梓が私の背中にデュエルディスクを当てると、直後高圧電流が私を襲う。《雷鳴》のカードをスタンガンのように使って、直接電撃を流し込んできたのだ。

まさかの制裁新パターン。ていうか私フィール・カードの《雷鳴》なんて渡してないんだけど。

声も出ないほどの痺れに倒れる私。それを満面の笑みで見下ろす梓。冥弥ちゃんはおろそろしていたけど、

「あ。……あれが、あった」

そう呟いて出したのは《(ぎ)隠居の猛毒薬》。

「それでとどめを刺すんだね」

「はい。……いえ、違います」

当然のようにさらっと梓がいうものだから、冥弥ちゃん間違えて1回うなずいちゃったじゃない。

「カード名は猛毒薬ですから、最初は苦しいですけど……回復カード、だから、数秒で痺れも取れます。たぶん」

たぶんって何!?! しかし、ツツコミさえすることができず、私は冥弥ちゃんに口を開かせ猛毒薬を流し込まれる。

結果から言うと、本当に数秒で痺れも収まりむしろ疲れも取れた気がする。治るまでの数秒間は、毒の苦しみでのたうちまわったけど。

「でも。確かにいまの冥弥ちゃん、すっごく綺麗になったよね」

その間、梓は私の分まで冥弥ちゃんを愛でていた。彼女の目からも、そこは認める所らしい。

しかし当の冥弥ちゃんは、

「あ、ありがとうございます。…………。…………。……。」

受け答えはするものの、どこか上の空になっていた。瞳もほんのり熱っぽく、頬もうつすら紅い。

幾ら綺麗で色っぽくなくてもやっぱり中学生。いま襲う気はなくても、ベッド発言は刺激が強すぎたのだろう。

やっぱり中学以下の子供は苦手だ。改めて思う私だった。

冥弥ちゃんと別れ、再び散策にまわる私たち。

「でもゼウスちゃんどこ行っただらうー」

いつの間にか買ってたチョコバナナを食べながら、梓が訊ねる。

「案外、あっちはあっちで『冥弥がいなくなったのだー』とか言ってた
りして」

「あ、ありそう」

とかゼウスちゃんをダシに盛り上がった所、
「おじちゃん、もう一回！ もう一回だけ！」

と、これまた聞き覚えのある声が。

どこからだろう、と辺りを見渡してみた所、彩土姫ちゃんがスーパーボールすくいの前で店員さん相手に粘っていた。しかも、隣には現在みんなが搜索しているゼウスちゃんの姿が。

「とりあえずLINEに報告しておいたよ」

「ありがとう梓」

私はいつてから、ふたりの後ろに立って、

「どうしたの、ふたりとも」

「あっ！ 沙樹姉ちゃん！」

振り返り、元気に目を輝かせる彩土姫ちゃん。隣でゼウスちゃんも、

「おおっ！ 沙樹に梓、よく来てくれたのだ！」

でもって、彩土姫ちゃんは両手をあわせ、

「沙樹姉ちゃん、梓姉ちゃん！ ごめん、お金貸して」

まさか再会早々そんな事頼まれるなんて。

「駄目」

私は、はつきりと断る。

「えーっ！ 何で、何でっ！」

「何でって、いまは梓といちゃつく金しか用意してないから」

「ケチー！」

駄々をこねる彩土姫ちゃん。一方、ゼウスちゃんは彼女なりにドン引きした顔で、

「うおっ！ この人、堂々と惚気てきたのだ」

「当たり前でしょ。相手が子供だからって態度を変えるのは苦手って話なのよね実は」

とか言っていると梓から、

「でも。さっきのは少し恥ずかしいよー」

って反応。どうやら少し酔いも醒めてきたのかもしれない。

「それで、一体何があったのよ？」

私が訊ねてみると、

「そうそう。聞いてよ姉ちゃん」

と、彩土姫ちゃんが食いつき、

「このスパーボールすくい。もう3回もやってるのに1個も取れないんだよ。だから、これだけやってるんだから1回くらいサービスでやらせて貰ってもいいでしょ」

なんて言い出すので、私は笑顔で、

「うん。本気で言ってるなら人生ナメてるわねこのクソガキ」

「沙樹ちゃん。抑えて抑えて」

梓が間に入り、彩土姫ちゃんに「ごめんね」と。

「だから行っただろう、彩土姫では無理だ」と

ゼウスちゃんはいい、

「サービスを得たければ、この神に寄付するといい。さすれば1回どころか何回でも遊べるドン！なのだ」

「よし、こっちの人生ナメくさってる自称神は来年ブチ犯す」

と、中指立ててやったら、

「沙樹ちゃん」

梓が素敵な笑顔をみせてくださる。

「冗談よ。ゼウスちゃんほど子供だと来年高校生になっても性欲の対象に見れそうにないわ」

「良かったね、ゼウスちゃん」

私と梓の言葉に、当のゼウスちゃんはげんなりと、

「素直に喜べないのだ」

そりゃあ、喜ばれる要素皆無だもの。

彩土姫ちゃんは店のおじさんにしがみつき、

「ねえ、いいでしょおじさん！ サービスしてくれたらエッチなことしていいから。ねえお兄さん！」

「はっはっは、嬢さんはおませさんだな、あんまりそういう事は外でいうもんじゃないぞ」

と、店員さんは彩土姫ちゃんの頭を撫でる。

「もう彩土姫ちゃん、いまの時世危ないんだから、もし相手が本気に

なっちやったらとんでもない事になるんだよ」

梓のほうは、顔を赤くしながら優しく諭す。

店員さんも梓も、知ったら驚くんだろうなあ、この「エッチしていい」とか口にする瞬間さえ一切の色気を感じさせない元気娘が、まさか本当にサポの常習犯だなんて。

とりあえず、私はプールを確認。大小様々、形も色んな玉が浮かんでおり、中には光ってるものも。すくう道具はポイのようすで、見たところ特にボールを取らせない細工は見られない。

「梓せつかくだからやってみるスーパーボールすくい」

私は財布から料金分の小銭を出すと、梓は「わ」と嬉しそうに、

「うん。なら久しぶりにやってみようかな」

「じゃあ、お手本お願いね。たくさん取ったら、隣の屋台の焼きそば、大盛りで買ってあげる」

「ほんと？　じゃあ頑張らないと」
さして。

去年、私たちが高1の頃。学校の文化祭で某クラスが購買部とのコラボで「スーパーボールすくい」を出店した。勿論、わざわざ購買部に協力を求めて普通のスーパーボールすくいを行うはずもなく、スーパーボール5個で当日販売しているパンと、10個で期限1週間の無料チケットとそれぞれ交換して貰える仕組みになっていた。

しかし、プールに浮かぶスーパーボールは全て難易度の高い大玉。子供のゲームと舐めていた人や、ネットでコツを掴んだつもりになっていた愚か者から小銭をことごとく奪っていき、よもやそのクラスは文化祭の出し物とは思えない収益を得る……寸前までいった。

そこへ、梓という名の暴食の悪魔が現れた。

彼女はプールの中のスーパーボールを全てすくいあげ、たった1プレイ分の料金でその日のパンを全てかつさらった上、ありったけの無料チケットを持ち帰り、結果そのクラスの収益は赤字に転落した。

話を戻し、数分後。

大盛り焼きそばという餌をちらつかせた結果、梓はスーパーボールを根絶やしにする悪魔へと変貌。プールがただの水槽に変わるのも

時間の問題になった中、私はふたりに向かって。

「はい、これでスーパーボールすくいは終了って話。だから、もう1回も何も閉店だから彩土姫ちゃん諦めてくれる?」

「待って! 待ってよ、ずるいよそんなの」

動揺しきる彩土姫ちゃん。まあ、理不尽って言いたいののは凄く分かる。けど、

「ずるいって言っても、ルール違反は何一つしてないのよね。それに」
私は梓を見る。スーパーボールの悪魔は、自分がえげつない事をさせられてるのに気づかず、

「焼きそば♪ 大盛り♪」

なんて歌を唄うようにひよいひよいとボールをすくい続ける。

私は満足しながら、

「ほら見てよ。私の梓がこんなに可愛い。こんな素敵な笑顔を見れたんだから、お店のおじさんも撤収の準備してくれる?」

「勘弁してください。お代は要りませんので、ここでストップしてください」

両手をあげ、店員はいった。

店の人には悪いけど、この予想通りに出された白旗を利用して貰おう。

私は再び彩土姫ちゃんたちに振り返り、

「とまあ、こんな流れになったわけだけど、ふたりが条件を呑んでくれたら、私も梓にストップをかけることにするわ」

「条件?」

「とは、なんだ?」

訊ねるふたりに私は、

「ちゃんと自分のお金で再チャレンジするか、再チャレンジを諦めるか」

「げっ……。ここでその話がくるの?」

うわって顔を見せる彩土姫ちゃんに続けて、

「当たり前って話。大体、彩土姫ちゃんお金結構持つてるでしょ」
昨日だってサポしたばかりなんだし。

「そ、それは……」

「甘えないの。あんな無茶振りして店員さんも迷惑でしょ」

「いや貴方たちのほうが余程迷わ……」

後ろから店員さんが何か言ってるけど無視し、

「このお店は彩土姫ちゃんだけのものじゃないんだから。ちゃんとルールは守りなさい、いい?」

「う、うん」

うなづく彩土姫ちゃん。

「じゃあ、どうする? 自腹でチャレンジする?」

「うん……」

この言葉を聞いた所で、続けて私はゼウスちゃんにも。

「じゃあ、ゼウスちゃん? あなたも神なら皆のこと考えて、無料でやることも彩土姫ちゃんの再チャレンジに手も小銭も貸さない、いい?」

「分かったのだ」

ここで私は満足し、

「梓。お店の人が白旗だしたからストップできる?」

「え?」

梓は見上げ、

「でも大盛り焼きそば」

「買ってあげるから心配しないで」

「本当?」

「それと、要らないスーパーボールはお店の人に返してくれる? ちよつと取り過ぎだつて」

「うん」

満面の笑みで、梓は欲しいスーパーボールだけ何個か残し、あとはすべてプールに返した。

「ゼウス、彩土姫」

さらに丁度いいタイミングで冥弥ちゃんも登場。ゼウスちゃんが次の場所に行かない為の時間稼ぎも想定通りに済んだらしい。なお、やり方が胸糞悪いのは仕方ない。私は正義の味方じゃないし善人で

もない。将来間違はなく悪い大人になる人間なのだから。

「冥弥?! こんな所にいたのか、探したんだぞー」

ゼウスちゃんは驚きながらぶんすかするも、冥弥ちゃんは眉一つ動かさず、

「探したのはこっち。……LINE、見て」

あ、これ冥弥ちゃん怒ってるわ。けどゼウスちゃんは気付いてない様子でLINEを見て、

「なぬ!? みんな神を探してたのか?」

「皆、心配してた……。木更さんの件も、あつたから。……でも」

冥弥ちゃんはゼウスちゃんに抱き着いて、

「無事で……。良かった」

そして、冥弥ちゃんは私に顔を向けて、

「ありがとう。……見つけてくれて」

なんか、冥弥ちゃんが凄く私を見つめてる気がしたけど、私は気にせず、

「別にいいわ。おかげで何だかんだ楽しい時間過ごしたし。ね、梓」

私は梓に視線を向ける。が、梓はすでに隣の屋台の前で焼きそば片手に、

「沙樹ちゃん。早くお金払ってー」

と、感動的一幕を台無しにしてくれちゃった。

ここまで、楽しいことばかり(?)だったお祭り。

しかし、巨乳で可愛い梓と女ふたりで歩いてれば、当然変な男とエンカウトする可能性だってあるわけで。

「お。ねえ君たちふたり?」

と、突然声をかけてきたのは明らかに遊んでそうな男ふたり組。

「俺たちもふたりなんだよね。良かったら一緒に回らない」

と、男共はそれぞれ私たちの肩に腕をまわす。

私はすぐ男の手を払い、

「結構よ。間に合ってるから」

「ん? 何? もしかして男待ち? いいじゃん、来る気配のない彼

氏なんてさ。絶対え俺たちと一緒にのが楽しいよ」

「沙樹ちゃん……」

不安そうに、梓が私を見る。

「そうよね。梓はこういう男、駄目なものね。」

「だから結構って言うてるでしょ。他を当たって頂戴」

私は露骨に不機嫌を顔に出すも、男は引く様子なく。

「まあまあ、そう言わないで。こっちの子はOKだってよ。ねー？」

と、私の肩に腕回してた男が、梓の腕を引つ張る。

「きやつ」

梓の小さな悲鳴。この瞬間、私は軽くキレたわけで。

「てい」

とりあえず、腕引つ張つた男の股間に私は足蹴り一発。

「!!」

途端、蹲り悶える男。続けて梓を取り返そうと手を伸ばすも、

「ダメエー！ やりやがったな」

それより早く男は梓の首を抱え、懐からナイフを取り出し、梓の喉に当てる。

しまった。まさかこんな所で凶器を持ちだす馬鹿がいたなんて。

「梓！」

「沙樹ちゃん！」

互いに名を呼ぶ私たち。

「きゃあああああああああ」

周囲も、男の凶器を前に悲鳴をあげ、騒然となる中、

「動くなよ」

男はいった。

「ちよつとでも動いたら、大事な友達の顔に傷がつくぜ」

「この下種」

言いながら、しかし私は手段に困っていた。銃は懐と腕の中と計2丁あるが、ここで実弾を使うわけにはいかない。しかし、だからといって少しでも動けば、男は本当にナイフで傷をつけるだろう。ならば、相手の僅かな隙を見抜くしかないのだけど。

「まあ、最後には下のお口に傷がつくけどな。ギャハハハ」

テンプレなほど下種な笑い。しかもこいつは明らかに「梓を犯す」と宣言。

(あ、駄目)

私の中で何かがプチツとなり、内蔵銃を搭載した腕は男の眉間にそーっと狙いを定める。

(死ね)

と、私が撃とうとした直後。

それより先に、後ろから屋台の旗が投げ槍の要領で飛来し、ナイフを持った男の手に当たる。

(あ)

その瞬間に、私も頭より先に体が動き、接近して男の手からナイフを叩き落とし、

「梓!」

梓の身柄を奪還し、後ろに立たせる。

「大丈夫?」

「うん」

怯えながら、私の背にしがみつくと梓。

「てめっ」

男が殴りかかる。私は足を出し転ばそうとするも、それより先に、ひとりの少女が男の懐に入り、腹部に拳を打ち付ける。

「かはっ」

「……」

更に少女は、男がよろめいた瞬間を狙って、無言のまま追撃のストリート。しかも、拳は真っ直ぐ男の心臓部を一突き。

「つつっ」

男は声にならない声をあげ、その場に倒れた。

少女は数秒ほど男を見下ろし、男が悶えてしばらく反撃できないと悟ると私たちに振り返る。

それは、深海ちゃんだった。

「鳥乃さん、徳光さん、大丈夫でしたか?」

深海ちゃんは木更ちゃんに似た微笑みを浮かべながら、しかしその足は地面に転がるナイフを蹴り転がし、男の手に届かなくする。抜け目ない。

「ありがとう、助かったわ」

私は応えつつ、

「梓、大丈夫？ 怪我はない？」

「うん。大丈夫、ふたりともありがとう」

梓はいうも、しかし体が震えてるのがわかる。

深海ちゃんはいった。

「こういうお祭りですから、警備員もいるでしょうし、ヤのつく方も関わってるでしょう。あとは彼らに任せて私たちは適当な場所に逃げませんか？」

「そうね」

私は同意する。

「では、こちらに」

どうやら、すでに避難先は決めてたらしい。私は深海ちゃんの誘導に従い、その場を後にした。

しかし先ほどの動き。

深海ちゃんは明らかにファイルを行使していたのだ。

それも、ただ力に頼ったわけではない。投げ槍こそファイルで精度を上げてはいたものの、瞬時に相手の懐に踏み込む脚力、そして心臓狙いのストレート。これらは純粋な彼女の身体能力だったように見えたのだ。

深海ちゃんが誘導した先は公園エリアだった。

今までの一直線の通りとは違い横幅も広く、中央にはやぐらが設置され、いま現在はどこかの中学の吹奏楽部が演奏している。奥には小さな建物が設置されており、いま現在は警備員・スタッフ共同の待機所として使われている。

また、公園の外はすぐ住宅地や茂みへと続いている。いま祭りを楽しんでる人たちの中には自宅が目と鼻の先って人もいるだろう。

「なるほどね」

私は納得した。

ここなら、もし誰かに襲われても逃げる手段は豊富で、加えてスタッフに助けを求めるのも容易。実際、私たちもまずその待機所に向かうことにした。もちろん、今回の騒動を報告する為。しかし。

「あー。もう報告は済ませたぜ」

と、入ろうとした矢先、私たちは隣から声をかけられた。

振り返ると、浴衣……ではなく普段着姿の地津ちゃんが最近朝ドラで有名な五平餅を齧りながら、

「状況はグループLINEで知ってる。災難だったなー」

と、地津ちゃんは待機所の壁にもたれかかった。

「ありがとう、地津ちゃん」

私はいい、続けて深海ちゃんが、

「もしかして、ずっと公園エリアにいたのですか？」

「まーな」

地津ちゃんは肯定し、

「祭り会場ずっと歩くのも面倒だし、公園エリアだけでも十分楽しめるしなー」

「何より、LINEでトラブルが起きたら真っ先に動けるから？」

今日一日の彼女の行動から推測して、私は訊ねてみる。

「まーな」

地津ちゃんは一応肯定した。YesともNoとも取れない適当な返事だったけど、恐らくYesとみて間違いないだろう。

「もしかしてゼウスちゃんのときもっ？」

梓が訊ねると、地津ちゃんは「ああ」とうなずいて、

「心配しなくても、もう見つかった報告まで済ませてあるぜ」

「た、頼もしい」

私は素直に感心してしまった。同時に、私は今日までずっと大きな勘違いをしていたことに気づく。

彼女たちの中で、木更ちゃん以外で一番大人なのはナーガちゃんだと思ってた。次点では以外にもメールちゃん。そこに木更ちゃんを加えた3人が親戚同士を繋ぎ支える柱なのだと思ってた。

違ったのだ。

本当に一番大人で賢くて全体が見えてるのは、地津ちゃんだったのだ。

(ああ)

誰よりずぼらで、初対面の印象は一番私や梓に興味を示していない印象だったこの子。蓋を開けてみればメールちゃん以外の中学生組を影で纏める司令塔であり、自由行動という二日目、彼女だけはメンバー全体の動きを把握し、トラブルを真つ先に感知する位置に立っていた。そして今回も。

(やっちゃったわね)

今更、親戚組の中でパイプを持ちたい人間が出てくるなんて。

もう少し接触しておけば良かった。

信頼や友情を築いて、個人同士で連絡を取れる関係になっておけば、いざという時彼女の頭脳は頼りになる。こちらには木更ちゃんもいる以上、絶対に繋がっておかなければならない人間だったのだ。

「沙樹ちゃん、どうしたの?」

梓が顔を覗き込んで訊ねてきた。少し考え事に時間をかけすぎたらしい。

「なんでもないわ」

「そう」

私の返事に、梓は少し心配そうな顔になり、

「あ、そうだ。沙樹ちゃん喉乾いてない? あそこでラムネ売ってるから、一緒に買ってどこかで休もう?」

気を遣わせてしまったらしい。けど、いまの私にはベストなタイミングでの提案だった。

少し休んで頭を切り替えよう。今日は梓とのデートなのだから、彼女中心で物事を考えてたい。

「そうね」

私はうなずいて、

「じゃあ、茂みのほうにでも行ってみる? あそこなら人も少ないから静かに休めそうだし」

「うん、いいよー。賛成」

梓は笑顔をつくり、いった。

「ふう」

私は茂みに入ると、まず一息ついて、

「お疲れ、梓」

ラムネを片手に言いながら、無料で配られてたうちわで私と梓を交互に扇ぐ。

「うん。沙樹ちゃんもみんなの相手お疲れ様」

梓はうちわの風を涼しそうに受けながら、ラムネを一口。

「涼しいねー」

梓はいった。うちわで扇がれたからではない。それだけ、祭りの会場と茂みの中で気温が違って感じるのだ。

中に入ってみると、茂みは普段感じてた以上に奥行きのある人工森林みたいになっており、会場の熱気や騒然から一気に遠ざかり思った以上に静かに休めるエリアになっていたのだ。予想よりずっと暗いのを除けば。

「そうね。さすがに祭り会場はずっといるには暑苦しいわ」

返事しながら私もラムネを一口。よく冷えていて、かつ疲れた体に糖分が効く。

「うん、でも凄く楽しいね」

満面の笑みの梓。それが見ただけでも、デートに誘ったのは大正解だった。

「まあね」

私は、しみじみとうなずき、

「休んだ後はどうしようか、梓」

とは、まだ見て回るか祭りを後にするか、の相談だったのだけど。

「うーん、まずはかき氷とからあげかなー?」

さすがは梓。何を食べるかで返事してきた。しかも、「そういえば食べてなかった、食べたい」と思ってしまうようなラインナップ。

「そのあとはフライドポテトに、焼きとうもろこし。あつ、地津ちゃん

も食べてた五平餅も食べたいかも」

しかも、まだまだ食べる気満々のようで。こうなったら私も悪ノリで、

「ケバブとピロシキの屋台もあったわよね」

「本当？ そんなの絶対食べないと」

「他に食べてないのといったら、フランクフルト？」

「あ、忘れてた。あとアメリカンドッグも」

なんて盛り上がっていると。

「もしかして、沙樹おねーちゃんに梓おねーちゃん？」

と、奥から女の子の声が。

「あれ？ メールちゃん？」

私が訊ね返すと。

「うん」

と、嬉しそうにメールちゃんが合流してきた。

「全然みないと思ったら、こっちにいたんだねー」

梓が、メールちゃんの頭を撫でながら訊くと、

「ちよつと熱気にやられちゃって、クールダウンしてたの」

と、視線を梓の胸から外しつつ緩々な顔を見せる。

とところで。

「具体的には？」

にやりと笑い、私はからかう。

「ふえっ？」

予想通り、メールちゃんは顔を真っ赤に動揺するので、

「お祭りだものね、周りにはおめかしして綺麗なお姉さんばかりって話だものね。悶々としちゃったわけね」

「ち。違うよお」

「じゃあ何？」

と、からかって遊んでると、梓が。

「ねえ沙樹ちゃん。何の話？」

って。

ああ、そういえば梓はメールちゃん秘密知らないんだっけ。とは

いえ、事実をそのまま伝えるとびっくりするので、

「実はメールちゃん、バイなのよ」

と、間違っではない言葉で暴露しておいた。

「え」

でもって、ぴくつと固まる梓。私は続けて、

「あんまり虐めないであげてね、どうやらこの性癖でいままですつこい苦勞してるそうだから」

「いまの沙樹おねーちゃんが言えたことじゃないよお」

メールちゃんの言う通りである。

「じゃあ、あの書き込みって……」

突然、梓が考え込みながら呟いた。

「あの書き込み？」

「え？」

私の言葉に梓はハツとなり、

「う、ううん、気にしないで？ たぶん、気にしない方が幸せだよ。

ねー？」

と、あからさまに慌てながらメールちゃんに同意を求める。

メールちゃんも梓の意図は分かっているようで。

「う、うん。ねー」

と、動揺しつつ話を合わせる。

恐らく書き込みとはLINEのことだろう。私がまだ確認してない過去の書き込みに答えがあるのだろうか。うけど。

「分かったわ」

私は、言われた通り気にしないことにした。踏み込み過ぎないのも、裏世界で生きるには重要なスキルなのだ。いまここは表の世界だけ。

「……………」

あれ？ なんだか梓の無言の笑顔が怖い。しかも、私じゃなくてメールちゃんに向けてる？

「え、えっと、その、ふええ」

感受性の高いメールちゃんも、当然梓のオーラには気づいており、

おろおろと怯えながら、

「じゃ、じゃあわたしは彩土姫ちゃんたちの所に戻ります。梓おねーちゃん、ありがとうございました」

と、逃げる口実を見つけると、ペこりペこりと頭を下げ逃げてしまった。

「……梓」

再びふたりきりになった茂みの中。

私は、何が梓を怒らせたのか分からず、そつと訊ねてみる。……うん、私も気圧されちゃって、そつと。

「なに、沙樹ちゃん？」

梓は未だメールちゃんの逃げた先にオーラを向けながら、

「沙樹ちゃん？ メールちゃんには深入りしないほうがいいと思うよ」

なんて。

「え？ あ、うん。……そういうことね」

何となく「私に性的な目を向けてる」ことと関連があると分かり、私ほうなずくも。

「けど、大丈夫よ」

私はいった。

「メールちゃんは、私と違って性欲に身を任せるような子じゃないわ」
「でも……」

「じゃなければ、私より先に梓が襲われてるわよ」

「え？」

どうして私って目をして訴えかける梓。

「1日目にナーガちゃんが言ってたわ。私たちがメールちゃんの視線に対して全く同じ反応してたって」

「それって。……メールちゃん、私にも？」

梓は、ここで初めて自分もメールちゃんに性的な目を向けられてると気づいたらしい。

「私がそういう目で見られて、梓が見られないはずないって話でしょ」
間違いない、梓のほうが可愛いし優しいし性的な体してるんだも

の。

「けど、どうしたの。昨日の夕食のときはあれだけ仲良くしてたのに」
今日は一転してあれだけ威圧をぶつけるとか。

「そんなの、沙樹ちゃんに意識を向けさせない為だよー」

ちよつと照れくさそうに梓はいった。

「もちろんナーガちゃんに言われて信じてみようって思ったのもあるけど、どちらにしても仲良くなったほうがいいかなって」

「……」

私は、密かに絶句した。

梓ってこんな強かだったっけ？ それとも、私がずっと幼馴染フィルター越しに見てしまっただけで、梓はとっくの昔に成長し変わってしまったのかもしれない。

いや、そもそも出会い始めからお互い打算で近づいてたのだとしたら。中3の冬の再会も嘘だったら。私たちの友情も嘘だったら。

(いけない、いけない)

マイナス思考のどつばに嵌る所だった。私は頭の中でぐるぐるする負のサイクルを頑張つて振り切る。

元々人間不信な私だけど、増田の死からどうにもメンタルが豆腐気味で未だに治らない。早く復帰しないと本当の意味でハンドグドの戦力には戻れないというのに。

「……沙樹ちゃん？」

そんな私を、心配そうに覗き込む梓。その際、服の胸元から谷間が覗けそうになり、これだけは流されてはいけない情欲に襲われそうになる。

大丈夫。発情できるだけ私はまだ正常だ。

私は服の内側に顔を潜り込ませ谷間に挟まれたい欲求を何とか抑え、

「大丈夫よ。梓がまだメールちゃんをそこまで警戒してたの知って驚いただけ」

「え、当然だよー」

梓は緩々に笑みをみせ、

「だって、大好きな沙樹ちゃー」

と、言いかけた直後、梓の口が一回止まる。

「ん、どうしたの梓」

「……ねえ」

程なくして、梓がいった。

「なにか聞こえるね?」

言われて耳に意識を向けると、茂みの更に奥のほうからギターの音が聞こえる。

「誰かが演奏してるっぽいわね」

「ちよつと覗いてみよつか?」

と、梓。私も断る理由はないので、

「そうね。ちよつとだけなら大丈夫よね」

私たちは音のする方角へと向かってみることにした。

程なくすると、森林が僅かに開き、絶妙に月光の差し込んだ場所へと辿りつき、その中心部でフードを被ったパーカー姿の少女が、切り株を椅子にひとりギターを鳴らしていた。

髪はショートカット。口角が僅かにつり上がり、強気で挑発的な目つきをしているも、何かに疲れ切ってるかのように瞳は濁って映る。そんな彼女の目つきを反映してか、彼女の演奏はどこか蠱惑的な魅力があり、それでいて虚無を感じさせる寂しさをかもしだしていた。

背丈は少し小柄。胸元が膨らんでる様子はあまり見られない。

「誰なりぞ?」

突然、その演奏が終わり、少女がこちらに顔を向ける。どうやら、もう気付かれてしまったらしい。

「悪いわね邪魔しちゃって。あまりに綺麗な演奏が聞こえたものだから」

私はいって、梓の手を引きながら一緒に少女の前に出る。

「あ」

梓がつぶやいた。

「もしかして、知り合い?」

訊ねると、梓は複雑そうに笑って、

「う、うん。前にちよつとね」

「ほほう、狐か兎ではないとは思ってたにやけど、梓ちゃんではないですか」

少女はポロンともう一度ギターを鳴らしてから、

「善いぞ好いぞ、そういう出会いこそが野良演奏の醍醐味なり」

と、切り株から腰をあげ、私たちの下まで歩み寄る。

「余はムゲツ、夢の月と書いてムゲツというのです」

「鳥乃 沙樹よ」

お互いに自己紹介を済ませ、握手を交わす。その時私は直感で気付いた。この夢月ちゃんって子は私が欲情してもいい年齢だと。

「じゃあ、夢月ちゃんでもいい？」

「苦しゆうないぞ。では私も沙樹ちゃんと呼ぶぞよぞよよ」

「じゃあ夢月ちゃん、どうしてこんな所で演奏を？」

訊ねると、

「月がとても綺麗だったのです」

夢月ちゃんはいった。

「それに今日は祭りだったほん、遠くから聞こえる陽気な賑わいが絶好の演奏日和にしし」

確かに、祭りの声がほのかに聞こえ、月も満月に近い今日という日は、こんな場所での音楽がとても様になる。

「ところで」

夢月ちゃんにはたつと笑うと、

「お二人はただの友達にやりか？ 女の子同士にしては、どうにも雰

囲気が怪しいわん」

と、屈んで私たちを覗き込む。

「ただの幼馴染だよー」

梓は否定しながらも嬉しそうにいった。

「ま、そんな所」

もし梓が肯定しようものなら、私も「そういう関係になった」と受け取っても良かったのだけど、さすがに梓がそっちに走ることはないらしい。

しかし夢月ちゃん、パーカーの下は胸元広めのブラウス一枚だった為、梓と違い胸元からは谷間どころか内側がガッツリ覗ける。しかも、まさかのノーブラ！ まあ、ぶっちゃけ予想通り貧乳だったけど、おかげで乳首を拝めてしまえ、私はついガン見してしまった。無防備万歳、夢月ちゃん御馳走様です。

(あれ?)

ふと、夢月ちゃんの顔を至近距離で見るとき、私は妙な既視感を感じた。

彼女の顔立ちは、私の知る誰かとそっくりに見えたのだ。その誰かが誰だったのか思いだすことができなかつたけど。

「きひひ、そうにやりか」

夢月ちゃんが離れる。残念、もう少しさくらんぼを眺めてたかったのに。

しかし、不思議な子だった。

まず言葉遣いが安定しない。ゼウスちゃんばりに尊大な物言いかと思えば、いきなり動物語になり、さらに丁寧語に変わったりもする。ただし、立ち振る舞いは一貫してフランクかつ人懐っこい。——ようで人の心を見透かしてるような、それでいて自分の腹の底は読ませない気味悪さも感じる。

「そうです」

夢月ちゃんはいった。

「ここでお会いしたのも何かのご縁、よろしければお近づきの思い出に拙者とデュエルするでござる」

しかも、ここで新たな口調のオンパレード。まるで「口調が読めない」とか考えてたのを見抜き、わざと余計に振り回してきたような。

「デュエルね」

彼女の底知れない何かに私は一瞬躊躇ったけど、

「余に勝ったら、好きにだけ屈んであげるぞよ」

「犯ります」

性欲には逆らえなかつた。

梓はハンマーを持って、

「沙樹ちゃん？ さつき夢月ちゃんの何を見てたのかなー？」
「し、仕方ないって話でしょ。服の内側見えちゃったんだから、ふたつの可愛いさくらんぼ」

私はハンマーで潰された。

沙樹

LP4000

手札

□□□

□□□

□—□

□□□□〔闇〕

□□□

ムゲツ

LP4000

手札

梓からのリアルダメージから回復し、改めて私たちはデュエルを開始する。

デュエルディスクからは、夢月ちゃんが漢字ではなく片仮名でムゲツと表記されていた。そのほうが外国風とか何とか拘りがあるのだろう。

「さて」

さて手札を引こうという辺りで、夢月ちゃんはいった。

「デュエル開始時、余はスキル《闇の力》を使うぞよ。この効果によって、我がフィールドに《闇》が発動した状態でデュエルするぞよ」

直後、夢月ちゃんの前方に黒い霧が発生する。夜の闇もあり彼女の体が霧に隠れて見づらくなるも、月光が反射し、どこか幻想的に映る。「この効果により、フィールドの悪魔族・魔法使い族モンスターの攻守は2000アップにやり。ところで」

続けて夢月ちゃんはいった。

「余が勝てば沙樹ちゃんは何してくれるぞよ?」

「あ。そういえばどうしよ」

何も考えてなかった。

「警察に出頭すればいいんじゃないかな」

梓がにこにこ笑顔でいった。酷い。

「まあ言ってみただけにやり」

夢月ちゃんはにひひと笑い、

「その代わり、先攻は余が貫うぞよ」

「まあ、それでいいなら」

私が彼女の提案を許可した所、デュエルディスクも会話を反映し、夢月ちゃんの先攻が確定する。

私たちは最初の手札を4枚引き、

「では私のターンなのね」

夢月ちゃんがいった。さりげに一人称まで余だったり私だったりするわけか。

「にひひ、おいどんはモンスターをセット、さらにカードを2枚セット。こ、れ、で、ターンを終えるっぴー」

「待った!」

私はさすがに突っ込む。

「何その『おいどん』からの『終えるっぴー』って口調は」
「ケケケ」

しかし、夢月ちゃんは変な笑いを浮かべるだけ。やばい、接すれば接する程この道化師っぷりに振り回されそうになる。

「私のターン。ドロー」

さて。相手はどんなデッキなのだろう。

「まずは私もカードをセット。そして《幻獣機テザーウルフ》を通常召喚。このカードの召喚に成功したとき、場に幻獣機トークンを置くわ。守備表示で特殊召喚」

手札が初手からがつり動く引きをしてなかったのもあり、私はまず防御的な一手で様子見に入ることにした。

「バトル。《幻獣機テザーウルフ》でセットモンスターに攻撃」

さて、彼女はどんなデッキを使ってくるのだろうか。もう一度綺麗なさくらんぼを拝む為にも、まずは少しでも情報を頂くとしよう。

幻獣機からテザーが飛ばされると、腕に巻きつかれた形で1体の魔法使いが姿を現す。しかも、あのカードは確か。

「《マハー・ヴァイロ》!?!」

「正解にやりぞ」

夢月ちゃんがやりとする。けど、あのモンスターの守備力は1400。テザーウルフは攻撃力1700なので戦闘破壊が可能。

しかし、

「さらにダメージステップ時に罠カード《鎖付き尖盾》を発動なのです」

《マハー・ヴァイロ》のもう片方の腕に、更に先端に槍のついた鎖が巻きつかれた。

鎖は伏せカードの中まで続いており、ヴァイロが腕を引くともう片方の先端からスパイク・シールドが姿をみせる。

「《鎖付き尖盾》の効果で《マハー・ヴァイロ》の攻撃力は500アツプ、さらに《マハー・ヴァイロ》は自身が装備しているカード1枚につき更に攻撃力を500アツプする効果持ちでげす」

《マハー・ヴァイロ》 攻撃力1550↓1750↓2750

当然、フィールド魔法の効果も付与されるので《マハー・ヴァイロ》の攻撃力は2750に。

「さらにさらにイッー」

夢月ちゃんのはしやぐように言った。

「《鎖付き尖盾》を装備したモンスターが守備表示で戦闘を行う間、その守備力に攻撃力を加えるのねエツ!!」

テザーの拘束を盾の刃で破った《マハー・ヴァイロ》は、テザーウルフが機銃をばら撒くと、鎖付きの盾をヌンチャクのように振り回す魔法使いらしからぬフィジカルな方法で弾丸をすべて弾き、

「アチョー」『アチョー』

夢月ちゃんと《マハー・ヴァイロ》が同時に叫び、最後に《鎖付き尖盾》をモーニングスターのように使いテザーウルフをたたき落と

す。

《マハー・ヴァイロ》 守備力1400↓4150

沙樹 LP4000↓1550

テザールウルフこそ破壊されなかったものの、まさか攻撃して逆に2000ポイント以上のウォールバーンを受けてしまうなんて。

「ターン終了よ」

「なら、余のターンチエキ」

チエキって何？

夢月ちゃんはカードを引くと「ほうほう」とうなずき、

「運命の神様はさらに追い込んで遊べと言ってるみたいなのね。私は手札から《魔導戦士 ブレイカー》を通常召喚」

……うげっ。

「ブレイカーは召喚成功時に魔力カウンターをひとつ乗せる」

《魔導戦士 ブレイカー》の攻撃力は1600、魔法使い族なので《闇》の影響を受けて1800。そして、魔力カウンターが乗ってる時のブレイカーは攻撃力が300アップするので、攻撃力は2100に。

だけど、ブレイカーはすぐ魔力カウンターを取り除き、

「自身の魔力カウンターをひとつ取り除いて《魔導戦士 ブレイカー》の効果を発動ネ！ この効果によってフィールドの魔法・罫カードを1枚破壊するヨ！ 余は沙樹ちゃんのセットカードをデデデデストローイ」

もう突っ込みが追いつかない夢月ちゃんの喋りはともかく、ブレイカーが振るう剣の一閃が衝撃波となって、私の伏せカードは破壊される。

今日もミラフォは仕事をしない。

《魔導戦士 ブレイカー》 攻撃力1600↓1800↓2100↓1800

「カードを1枚セット。そしてバトルに入るドン！」

夢月ちゃんがいった。

「《魔導戦士 ブレイカー》で幻獣機トークンを攻撃ザウルス！ さらに

に、ここで罨カード《マジシャンズ・サークル》発動ウラー！」

「《マジシャンズ・サークル》？」

なんて地雷カードを投入してくるのよ。このカードは魔法使い族の攻撃宣言時に発動するカードで、お互いにデッキから攻撃力2000以下の魔法使い族を特殊召喚するカード。

しかも、この特殊召喚はデッキに魔法使い族が存在する限り強制で。攻撃力2000のアタッカーを出せるならまだしも、

「ここで私が《エフェクト・ヴェーラー》みたいな攻撃力1000以下のカードを入れてたら、死んでたわけね」

危ない危ない。私のデッキには魔法使い族は入ってないので、モンスターを呼び出すこと自体ができない。

しかし、問題は相手側。

《マジシャンズ・サークル》なんて使い所の難しいカードを投入している以上、それを最大限に活かすカードを投入してないわけなく。

「では、私はデッキから攻撃力2000、《幻想の見習い魔導師》を特殊召喚するのね」

出てきたのは、魔法使いの褐色の少女。恐らく原作遊戯王のmanaをモチーフとしたモンスターであり、そのせいか可愛らしいのだけど私は性的に反応できない。

だって、manaって13歳らしいしね。

「《幻想の見習い魔導師》の特殊召喚に成功した事で、余はデッキから《ブラック・マジシャン》をサーチするぞよよよ」

「《ブラック・マジシャン》!?!」

私は一瞬驚きかけた。そのカードはデュエルモンスターズ界で一番有名なカードのひとつなのだから。

そして、恐ろしくトリッキーなサポートを多く持つカードでもある。だから私は「厄介なデッキが来た」って意味で驚いた。

「さて、ブレイカーの攻撃は止まらないにやし。幻獣機トークンを両断にやし」

ブレイカーの魔力を帯びた斬撃を受け、ホログラムのデコイが消滅すると、

「続けて《マハー・ヴァイロ》で《幻獣機テザーウルフ》に攻撃ぴよん」
スパイクシールドを持った《マハー・ヴァイロ》がフィジカルに殴りかかる。一応魔法剣だったブレイカーと違い、もう戦士族に種族変更してもいい程、魔法要素を感じない。

私は、ここで手札を1枚墓地に送り、

「手札の《幻獣機ジョースピット》を捨てて効果発動。テザーウルフの攻撃力をターン中400上げて、幻獣機トークンを1体生成」

《マハー・ヴァイロ》の打撃がテザーウルフに当ろうとした瞬間、何処からか鮫型の幻獣機、ジョースピットが出現、《マハー・ヴァイロ》に奇襲を仕掛ける。咄嗟に《マハー・ヴァイロ》は攻撃対象をジョースピットを叩き壊すも、その間にテザーウルフは新たなデコイを生み出しながら距離をとる。

「フィールドにトークンが存在する限り、テザーウルフは破壊されないわ」

「だが、《マハー・ヴァイロ》の切れ味は受けて貰うぞよ」

《幻獣機テザーウルフ》 攻撃力1700↓2100

沙樹 LP1550↓900

さらに減少する私のライフ。しかし、これでテザーウルフは戦闘破壊されることも、《幻想の見習い魔導師》の攻撃で更にライフを削られることもない。

「仕方ないにやあ、それなら《幻想の見習い魔導師》でトークンを破壊するのです」

最後に《幻想の見習い魔導師》の（やっとな魔法使いらしい）魔法攻撃でトークンが破壊され、

「ターン終了ナノーネ。ここから、どう反撃してくるのか楽しみなのデアール」

夢月ちゃんはいった。

沙樹

LP900

手札2

□□□□

「《幻獣機テザールフ》」□□

□—□

「《魔導戦士 ブレイカー》」「《マハー・ヴァイロ》」「《幻想の見習い魔導師》」

□□「《鎖付き尖盾》」「《セットカード》」

ムゲツ

LP4000

手札1

「私のターン」

さて、相手のフィールドは効果破壊には耐性がなさそうだから、上手く全体破壊が決まればいいのだけど。

とか考えながら私は、

「ドロー」

と、カードを1枚引き抜く。

よし！ これなら。

「私は《幻獣機ライテン》を通常召喚。このカードは手札を1枚コストに幻獣機トークンを生成する。私は《RUM—アージェント・カオス・フォース》を捨てて、トークンを特殊召喚」

フィールドに新たな幻獣機と、再びホログラムのデコイが出現し、私のフィールドはモンスターが3体に。

同時に、幻獣機の「幻獣機トークンのレベルだけ自身のレベルを上げる」効果によって、2体のレベルはそれぞれ7に。

「楽しんでる夢月ちゃんには悪いけど、このターンで決めてあげるわ」と、私はKO宣言。夢月ちゃんは感心した様子で、

「ほう。ほうほう、そんなに余のおっぱいが見たいなりか？」

「当然！」

ガッツポーズでいうと、

「沙樹ちゃん？」

後ろで観戦してた梓から、すごいオーラを感じる。怖くて後ろ振り返れない。

「私は、レベル7《幻獣機テザールフ》と《幻獣機ライテン》でオー

バーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

夜空に銀河の渦が出現すると、2体のモンスターは靈魂となって取り込まれる。

「竜の名を持つ機械の鳥よ。いまこそ空を支配し、私に勝利を輸送せよ！ エクシーズ召喚！ 発進せよ、ランク7《幻獣機ドラゴサック》！」

銀河の渦から降臨したのは先端に竜の首を模した部位を持つ大型の航空機の姿。

「そしてランク5以上のモンスターが特殊召喚された事で、墓地の《RUM―アージェント・カオス・フォース》を手札に戻す」

「あ、沙樹ちゃん上手い」

梓が反応してくれた。天使の言葉に私は鼻を高くし、

「《幻獣機ドラゴサック》のモンスター効果。このカードのオーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、幻獣機トークンを2体生成」

「ほうほう。それからそれから？」

楽しそうに、私のプレイングを眺める夢月ちゃん。私は続けて、先ほど手札に戻したRUMをディスクに挿しこむ。

「魔法カード 《RUM―アージェント・カオス・フォース》を発動。このカードは、フィールド上のランク5以上のXモンスターをランクアップさせる。私はランク7の《幻獣機ドラゴサック》1体でオーバーレイ・ネットワークを再構築」

すると今度は私の前方が丸々渦巻きながら歪み、ドラゴサックが靈魂となって取り込まれる。

「冒険なる科学の力よ、いまこそ機械の鳥に魔竜を宿らせ、銀河の海を支配せよ！ ランクアップ・エクシーズ・チェンジ！ 機動せよランク8 《CX幻獣機レヴィムリーヤ》！」

渦は爆発を起こし、梓ごと私たちを巻きこむ。

爆発の中で生誕したのはドラゴサックの面影を残す禍々しい幻獣機。その攻撃力は3000！

「ほう、かの悪魔の名を持つ幻獣機ときたか」

夢月ちゃんは未だ余裕の顔。

しかし、このモンスターが暴れれば、その表情もきつと変わるはず。「バトルフェイズ。レヴィムリーヤで《幻想の見習い魔導師》を攻撃」私が攻撃宣言すると、レヴィムリーヤの背に1体の幻獣機が搭載、射出される。

出撃した幻獣機は《幻想の見習い魔導師》に体当たり、爆発して魔術師もろとも四散した。

夢月 LP4000↓3200

まずは1体。私は続けて場のトークンを1体排除し、

「レヴィムリーヤの効果を発動。このカードがドラゴサックをエクスீズ素材としている場合、このカード以外の幻獣機をリリースすることで、追加の攻撃が可能になる」

ルール上ではリリースだけど、ソリッドビジョン上では先ほど射出された幻獣機のかわりにホログラムのデコイが搭載される。

「ほう、にやるほど。もう1度だけ攻撃ができるのね」

夢月ちゃんの反応に、私は心の中で「にやつ」となりながら、「続けてレヴィムリーヤで、今度は《マハー・ヴァイロ》に攻撃」

再び射出。ホログラムのデコイは光学兵器化しながら《マハー・ヴァイロ》に体当たりし、風穴を開けて破壊する。

夢月 LP3200↓2950

「レヴィムリーヤの効果を再び使用。2体目のトークンも搭載！」
「にゃにい!」

予想通り、ここでやつと驚く夢月ちゃん。しかし、残念ながらこれ以上反応はされず。

「レヴィムリーヤで《魔導戦士 ブレイカー》戦闘破壊」

夢月 LP2950↓1750

夢月ちゃんのモンスターが全て排除された所で、私はさらにトークンをリリースし、

「これで終りね。最後のモンスターも搭載しレヴィムリーヤの第四打！ 夢月ちゃんに直接攻撃」

こうして最後のトークンも射出され夢月ちゃん本人に襲い掛かる。

が、衝突しかけた瞬間、彼女の周りをバリアが覆って、

「罨カード《ガード・ブロック》にやりぞ。この攻撃の戦闘ダメージを0にし、余はカードを1枚ドロ―！」

「えっ!？」

まさか《ガード・ブロック》とは。

「にひひ、その様子だここで私を倒すのは失敗したようですね」

「ううっ！ もう少しでさくらんぼだったのに、私はこれでターン終了了」

心底悔しさを滲ませながら、私はターン終了を宣言した。

沙樹

LP900

手札0

「《セットカード》」□□

□□

「《CX幻獣機レヴィムリーヤ（沙樹）》――□

□□□□

□□□□

ムゲツ

LP1750

手札2

「ムゲツのターン、ドロ―なりぞ」

夢月ちゃんはカードを1枚引くと、

「にひひ、まず余は《マジシャンズ・ロット》通常召か―」

言いかけた所へ。

「ストップ。夢月ちゃんのスタンバイフェイズ時に、レヴィムリーヤのオーバーレイ・ユニットをひとつ取り除き効果を発動するわ。私の場にトークンを2体生成」

こうして、私の場に新たなホログラムのデコイが出現。

「おお、これはすまなかったぽん。では改めて《マジシャンズ・ロット》通常召喚するなり」

夢月ちゃんの場に1本の杖が出現すると、それを半透明の《ブラッ

ク・マジシャン》が現れ、手に持つ。

「《マジシャンズ・ロッド》の召喚成功時、デッキからブラック・マジシャンのカード名が記された魔法・罠カード1枚をデッキからサーチできるのです。余はこの効果で《黒の魔導陣》手札に加え発動なのね。《黒の魔導陣》はカードの発動時の効果処理としてデッキの上からカードを3枚確認、その中からブラック・マジシャンのカード名が記された魔法・罠カードもしくは《ブラック・マジシャン》を手札に加えるのです」

うっ、《マジシャンズ・ロッド》1枚からどんどん場を整えてくる。「余は《永遠の魂》を手札に加え、残りを好きな順番でデッキの上に戻すのです。カードを2枚セット、そしてバトルフェイズ！ 《マジシャンズ・ロッド》で幻獣機トークンを戦闘破壊なのです」

夢月ちゃんの手札は先ほどまで3枚で、その内1枚は《ブラック・マジシャン》。なので2枚のうち1枚は間違いなく先ほど手札に加えた《永遠の魂》ということになる。

とはいえ、滅茶苦茶にカードをサーチはされたけど、このターンで一気に攻めてはこぼす、

「そしてターン終了でげす」

と、ターンがこちらに回ってきた。

沙樹

LP900

手札0

「《セットカード》」

「「《幻獣機トークン（守備）》」

「《CX幻獣機レヴィムリーヤ（沙樹）》」

「「《マジシャンズ・ロッド》」

「《黒の魔導陣》」「《セットカード》」「《セットカード》」

ムゲツ

LP1750

手札1

「私のターン。ドロ」

宣言し、私はカードを引く。直後、

「にしし、そのドローフェイズ終了時、ムゲツは永続罠《永遠の魂》を発動するのね」

と、前のターンに手札に加わってたカードが発動される。

「《永遠の魂》は1ターンに1度、2つの効果から1つを選択して発動するにや。今回選択する効果は、《ブラック・マジシャン》の特殊召喚」
夢月ちゃんは最後の手札をデュエルディスクに置く。直後現れたのは邪悪な顔と褐色の肌を持つ魔術師の姿。つまりパンドラタイプの《ブラック・マジシャン》。

「《ブラック・マジシャン》が召喚されたことで《黒の魔導陣》の効果が発動。《CX幻獣機レヴィムリーヤ》を除外」
「あっ!？」

と、驚く間に除外されて姿を消すレヴィムリーヤ。

レヴィムリーヤのトークン生成効果は自分・相手双方のスタンバイフェイズ時に使用できる。しかし、今回はスタンバイフェイズ前に除外されてしまった為、効果を使うことができない。

「にしし、今度はトークンのほうを残してしまっただにやりが、手札1枚で今度は何を見せてくれるのね? 楽しみなのです」

煽ってくる夢月ちゃん。

「そうね、なら」

私はいった。

「ファイナルターン」

どこか別のカードゲーム産の一言を。

「にやぬ? 手札1枚とトークン1体だけで、このターンの間に余の《ブラック・マジシャン》を倒しライフを0にすることができるといいうのかえ?」

訊ねる夢月ちゃんに私は、

「半分正解ね」

「半分?」

「そ、夢月ちゃんには悪いけど、ふたつのさくらんぼの為に一種の禁じ手に入らせて貰うわ」

私はいい、手札をディスクに読み込ませる。

「手札からレベル4チューナー《バルジザン》を通常召喚。そしてレベル3の幻獣機トークンに、レベル4《バルジザン》をチューニング」
《バルジザン》が4つの輪に変わり、ホログラムのデコイが内側を潜り、混ざり合う。

「大空より降臨せよ鉄の翼！ その黒き暴風にて全てを焼き掃え！

シンクロ召喚！ 発進せよ、レベル7《ダーク・ダイブ・ボンバー》！」

こうして出現したのは、人型の特徴と爆撃機の風貌を併せもったモンスター。私が死んだあの日、フィール・ハンターズのひとりが持っていたカードである。

「にやるほど」

夢月ちゃんがいった。

「確かに《ダーク・ダイブ・ボンバー》には、モンスターをリリースしてレベル×200ダメージを持つてるなりね。けど《ダーク・ダイブ・ボンバー》をリリースしても1400、このムゲツのライフ1750を削りきることは」

「夢月ちゃん、すっかり忘れてるでしょ」

私はいった。

「伏せカード」

「あ」

「永続罫《マーシャリング・フィールド》を発動。この効果で《ダーク・ダイブ・ボンバー》のレベルを9に」

《マーシャリング・フィールド》には1ターンに1度、5〜9のレベルを宣言し、ターン終了時までレベル5以上の機械族のレベルを統一できる効果を持つ。そして《ダーク・ダイブ・ボンバー》でレベルを変更させたモンスターをリリースした場合、変更後のレベルを使ってバーン効果が起動する。

夢月ちゃんが「なるほど」って顔で、

「《ダーク・ダイブ・ボンバー》のレベルを9にすれば、1800バーンになって余を倒せるというにやりね」

「正解」

私が肯定すると、

「しかし、容赦ないにやりね沙樹ちゃん。レヴィムリーヤで1キルを狙ったかと思ったら、今度は相手のエースを無視して焼き殺しにくるとは」

「容赦なさすぎるよー」

と、夢月ちゃんと梓。

「さくらんぼがかかっているもの、リスペクトなんてしてられないわ」

私はいいい、モンスターをリリースする。

「《ダーク・ダイブ・ボンバー》の効果発動。自身をリリースし、夢月ちゃんに1800点のダメージを与える」

ところで、私は梓の笑顔が怖く後ろを向いてなかった為、気づかなかった。

梓が、いつものハンマーに《巨大化》をかけ、殺る気満々で待機してたなんて。

デュエルが終了したとき、巨大なハンマーが私の脳天を直撃する未来が確定していたなんて。

夢月 LP1750↓0

私の名前は藤稔^{ふじみのり} 木更^{きさら}。陽光学園高等部一年の女子高生。

そして、かすが様愛です。

「なんで木更ちゃんが来るのさ。また監禁したくなつちやうじやないか」

開幕。

フエンリルさんの早速の言葉に、私は頭を真つ白に固まってしまいます。

「二度目は無いぞ。八つ裂きにされたくないなら黙ってくれないか？」

と、睨みつけていったのはナーガちゃん。

「八つ裂きしてくれるならむしろ欲しい程だよ。ボクだって理性

では凶行に出たくないんだから」

フェンリルさんはため息を吐いていった。明らかに本音でした。

ナーガちゃんもまた、ため息を吐いて。

「なら実行しなければいいだけだろう」

「だから、しない為に欲求を小出しにしてるんだよ。想いを聞いて貰うだけでも違うでしょ。また執行するかもって分かってくれたら警戒もしてくれるだろうし。それが面倒なら遠慮しないで殺ってよ。ボクの命はボクのものじゃないけど、君が木更ちゃんを護る為に殺してくれるなら頭下げて感謝したい程だ」

「それはそれでやめてくれ、胃が痛くなる」

ホットミルクを一口飲んで、ナーガちゃんは項垂れるようにいいました。

いま正に鳥乃先輩がハンマーで卒倒した頃。

私とナーガちゃん、フェンリルさんの三人は『BARRなばな』にいました。ボックス席に私とナーガちゃんが隣同士で座り、対面の席に危険人物のフェンリルさん。

私はホットコーヒーを一口飲んで、頭を切り替えてから、

「それで、何か分かったのですか？ フェンリルさん」

と、訊ねます。

フェンリルさんは、

「うん。お祭りを抜けて来ただけの価値はあったと約束してもいいよ」

確かLINE曰く先輩たちがヤンキーに絡まれた辺りでした。私のタブレットに高村司令から『BARRなばな』に向かうよう指令がきたのです。

どうやらフェンリルさんから鳥乃先輩宛てに連絡が入ったらしく、ですけど現在先輩の事務用の番号は事務所から許可を取った上での留守電状態。代わりにメッセージを受け取った事務所側が代行してフェンリルさんと連絡を取った所、

「尋問の結果が出た」

と言われたそうです。それで件の担当は私だった為、こうして赴いたという形です。依頼の関係上ナーガちゃんを連れて。

フェンリルさんはコーラフロートの上のアイスをぱくりしながら、「まあ、ボクの性癖は抜きにしても、できれば木更ちゃんに直接伝えるのは避けたかったんだけどね。ちよつとシヨッキングな内容もあるから」

「私にシヨッキングな内容、ですか？　もしかして、親戚の中に黒がいたのですか？」

「私たちの間では全員白と片付いた要件ではあったのですけど。」

「うん、いたよ」

フェンリルさんはいいました。

私は、もうそれだけでシヨックで心が冷えるのを感じながら、

「誰なんですか？　その黒だった子は」

「その前に、今回の首謀者を伝えたいと思う」

「首謀者……って、もしかして」

驚き、私が訊ねると、フェンリルさんは何から何まで肯定するよう
に、

「うん。木更ちゃんのお姉さんをさらって、鳥乃さんを一度殺害し、名
小屋近郊の某ビルを襲撃したオールバックの男のことだよ」

「あの緒方さんって方、そこまで喋られたのですか？」

「まあね。ケツ掘ったマグナムを上の方に押し込もうとしたらすぐ吐
いたって。あ、両方の意味で」

どうやって吐かせたかの話は、正直聞きたくなかったのですけど。

「木更ちゃん、それとナーガちゃんだったね。覚悟して聞いて欲しい」

フェンリルさんは重い顔をしていった。

「首謀者の名前はかすが。普段はK a s u g a y a本店で店長してい
る男だと判明したよ」

『え』

私、そしてナーガちゃんは一回頭を真っ白にしてから、

「つ……。そんなはずはない」

一足先に思考を取り戻したナーガちゃんがいいます。

「私たち親戚の長女をさらう現場は木更姉さんが見ている。顔を覚えて
ないと聞いてはいるが、さすがに犯人の顔を見れば違和感のひとつ

でも覚えるだろう」

しかしフェンリルさんは真っ直ぐ向き合ったまま、
「ボクは手に入れた情報をそのまま伝えてるだけだよ。違うと思うならそちらで調べてくれると嬉しいな。まあ、そういう反応はくると思ってたけど」

正直、私も信じたくはありません。でも、それを自分まで言ってしまったら鳥乃先輩が用意してくれたこの機会と、無茶に伝えてくれたフェンリルさんの行動を無駄にしてしまう。

それに……。

「話を続けてください」

私はいいました。

「いいの？」

訊ねるフェンリルさんに、

「伏線はありましたから」

「伏線？」

「内容は伏せますけど、以前かすが様はハングドに依頼を出したことがあります。それも、夕方に依頼を出す決意をし、当日の閉店後にはもう鳥乃先輩が仕事の交渉に入っていたそうです。ハングドは普通の人間が名前を知っている事自体が異例ですし、例えば知っても『ドラゴン・キャノン』なしに、その場ですぐ連絡を取れるほどガバガバなセキュリティをしてません。ましてや、かすが様は仕事の真っ最中だったんですよ？ その片手間に依頼書を届かせるなんて普通では無理です」

「つまり、その店長は普通ではないと」

「フィール・ハンターズそれも支部長クラスの人間だったなら、それを可能にするパイプの持ち主だったとしても納得です」

「なるほどね」

納得するフェンリルさん。対し、

「っ……」

ナーガちゃんは、私がオールバックかすが様を認めたことに驚愕している様子でした。仕方のないことですけど。

「分かった。話を続けるよ」

フエンリルさんはいいました。

「運かは分からないけど、ちょうど緒方は例のビル襲撃事件のメンバーだったらしい」

「え、そうだったのですか？」

「うん。元々緒方の支部とかすがの支部は別だったんだけど、あるハングドの任務で鳥乃さんが協力要請したテストメント神父によるパーティで事実上の壊滅。残ったメンバーは支部ごとかすがの支部に吸収されたらしい。だから、吸収前からかすがの支部に所属したメンバーに藤稔って苗字の人がいるって証言も貰ってきたよ。勿論、フルネームで」

「あ」

その言葉を前に、私はハツとなります。

あまりの衝撃に忘れてました。

「つまり、私たち親戚の中に、姉をさらった黒幕がかすが様だとすでに知ってて、その上で協力していた人がいた」

って事実。

「ナーガちゃん」

私は、嫌な予感を胸に視線を向けます。

「ああ」

ナーガちゃんはうなずいて、

「かすが様の為なら私たち親戚さえ敵に回す奴ならひとりいるな」
「ですね」

私がかうなずき返すと、ナーガちゃんはいいました。

「藤稔 深海だな？」

「うん」

フエンリルさんは肯定します。

「やっぱりか」

ナーガちゃんは複雑そうな顔を見せる。そこへ。

「それで、悪いんだけど」

フエンリルさんが続けて、

「黒だったのは、ひとりじゃないんだ」と、言っただけです。

「え?」

嘘。ひとりでも認めたくなかったのに、もうひとりいるなんて。それも、これ以上は該当できる人物なんて。

フェンリルさんは、ナーガちゃんに顔を向けます。そして、とても言い辛そうに。

「藤稔 金玖。それがもうひとりの黒だよ」

「っ」

ナーガちゃんが顔面蒼白になります。無理ありません。だって、金玖ちゃんはナーガちゃんの双子の妹。

「予め言っておくけど、金玖ちゃんは件の襲撃には参加していない。更にいうと深海ちゃんと違ってフィール・ハンターズに所属しているわけでもないよ」

ですけど、そんな言葉がどれだけ慰めになるでしょうか。

「金玖ちゃんはカオスとニュートラルの中間に位置する個人業者らしい。主な仕事は賞金稼バウンティ・ハンターぎと雇い兵。マーセナリー どうやら緒方に雇われる形でフィール・ハンターズのかすが支部に合流したらしい」

「緒方さんに? という事は緒方さんに捕まっていたのって」

私が訊ねるとフェンリルさんは「うん」とうなずいて、

「3人が裏で繋がってたんだ。金玖ちゃんが捕まったフリをして、深海ちゃんが木更ちゃんを彼女の下へと誘導、緒方さんが協力者ごと木更ちゃんたちを捕まえるシナリオだよ」

そういえば、最初に金玖ちゃんを発見したのは深海ちゃんでした。まさかふたりが緒方さんとグルだったなんて。

「何故だ」

全身を震わせ、ナーガちゃんはいいました。

「何故、金玖までもが悪事を働く側にまわったんだ。何か聞いてないか? あいつが、あいつが何故あんな行動を取ったのか」

しかしフェンリルは首を横に振って。

「緒方の様子から、恐らく金玖ちゃんなりに目的はあつての行動なの

だろうと神父から聞かされてる。でも、緒方はここだけは最後まで口を割らなかつたんだ。食糞までさせられて口を割らなかつたらしい」「うっぷ」

私の胃が逆流しそうになりました。目の前のコーヒーの黒色が気持ち悪さを増長させます。以前、鳥乃先輩がカレーで吐きそうになった気持ちが今はすごくよく分かりました。

この現状で、そつちに胃を悪くさせられる私の精神もおかしいとは思いますけど。

「とりあえず、ボクが掴んだ情報は以上だよ」

「そうか……」

このまま崖から身を投げ出しそうな、疲れ切った顔でナーガちゃんが立ちあがります。

「情報提供、感謝する。報酬はハングドの口座に振り込むから、そちらでフェンリルの取り分を交渉してくれ」

「ナーガちゃん」

心配して私が呼びかけると、

「悪いが今日は戻らせて貰う。せめて朝までそつとしておいてくれ」

ナーガちゃんはいいい、ドリンク代だけ置いてその場を後にします。

私は、追いかける事ができず、しばらくの間ナーガちゃんを見送った玄関を眺め、次第にタブレットを開き、LINEのログを確認します。

そこでは、いまでも親戚たちが、深海ちゃんと金玖ちゃんも交えて和気藹々と書き込みを続けてて。

でも、もう戻れない。

色あせていく。過去のものになっていく。私たちの絆が、信頼が、思い出が。

いまままでのように、あの子たちを見る事ができない。

「……助けて、夢月お姉ちゃん」

私は、静かに姉を呼びました。

オールバックの男にさらわれてから、まだ一度も再会できずにいる、双子の姉の名を。

メール：みんなー。点呼開始するよー。

梓：はーい

水姫：はーい

彩土姫：いえーい

金玖：b

ゼウス：神である

冥弥：水姫×フィーアが尊い

深海：はーい

沙樹：木更ちゃん p r p r

梓：ハンマーしました

ナーガ：報告しなくてもリアルで見えてる

地津：そんな事より、冥弥それは水姫のいない所で書け

木更：皆、ホテルのチェックイン終わりました

：フェンリルが参加しました

メール：あ、フェンリルおねーちゃん♪

地津：おせーぞー

フェンリル：ごめん、本当に入っても良かったのか不安で

フェンリル：木更ちゃんに別窓で確認取ってたんだ

ゼウス：神が許してるのだ いいに決まってるであろう

彩土姫：そうだ、ボクたち今からお祭り行くんだけど、フェンリルは？

フェンリル：ごめん。用事あるんだ。

彩土姫：えー

水姫：残念だけど用事なら仕方ないね

冥弥：鳥乃さんと徳光さんは来てくれるかな？

木更：ふたりも用事みたいですね。どちらも留守電になっています

金玖：(・ω・)

水姫：速報！お祭りで徳光さんと鳥乃さん発見

地津：やったぜ。

金玖：かいめんうもれこ

木更：みんな、二人は多分デートですから温かく見守ってあげてくださいね

水姫：え？ あれデートだったの？ でも女の子同士だよね？

冥弥：だからいいんです！

彩土姫：そういえば鳥乃さんレズだったっけ。今度会ったらサポ誘ってみよつと

ナーガ：同時に子供嫌いらしい

木更：中学生以下は手を出さないようにしてるらしいですよ？

彩土姫：ちえーっ

メール：彩土姫ちゃんが変な事言うからおつきしちやっただ。ちよつと茂みで処理してくるね

水姫：おつき？

ナーガ：報告するな。勝手にやれ

ナーガ：いや、いま外れの茂みで休んでるとだけ報告して欲しかった

冥弥：それはそれで、色んな妄想をかきたてられます

ナーガ：冥弥、現在位置を教えろ。いまから張り倒しに行く

冥弥：嫌です

彩土姫：メールちゃんに精〇勿体ない！って言いたかったけど、メールちゃんだとすると止まらなくてお祭り終わっちゃいそうだもんなあ

彩土姫：断腸の思いで性欲処理は断ったよ

地津：やめてくれ。生々しすぎる

水姫：あ……おつきってそういう言葉だったんだ（／／／▽／／／）

地津：しまった！ 藤稔一族最後の希望を汚してしまった

深海：この際、みんな親戚同士でカップルになったら如何ですか？

ナーガ：その心は？

深海：私がかすが様を独占できます。

金玖：ミカア！

ゼウス：ミカア！

ナーガ：何いってんだミカア……

地津：ミカア！

冥弥：ゼウスとはぐれた。誰か見かけたら反応お願い

深海：探してみます

金玖：足が疼いてきた。見つけたら制裁に踏んでいい？

冥弥：ヤっちゃってください

彩土姫：フリマでヒール売ってたよ？

金玖：買いに行ってくる……とナーガに伝えたらぶたれた

冥弥：ログ流れそうだからもう一度

木更：ちくわ大明神

冥弥：ゼウスとはぐれた。誰か見かけたら反応お願い

深海：誰だ今の

フエンリル：誰だ今の天使

梓：あ、ゼウスちゃん発見

金玖：おお

梓：彩土姫ちゃんと一緒にいたよー

ナーガ：おい彩土姫、なぜ報告しなかった

深海：何はともあれ良かったです

彩土姫：ごめん、スーパールすくいに夢中で

彩土姫：途中でゼウスちゃんがきたけど報告忘れてた

彩土姫：てへぺろ

ナーガ：お前なあ

彩土姫：ていうか梓姉ちゃんがやばい

彩土姫：屋台のスーパール全部取っちゃいそう。おじさんも顔

青くなってるアワワ

冥弥：おかげでゼウスと合流できた。みんなありがとう

沙樹：ゼウスちゃんが無事で良かったわ

ゼウス：あれだけ惚気ておいてよくぞそんな事を

沙樹：はいはい、おしゃぶりと粉ミルクあげるから落ち着いて

ゼウス：子供扱いするでない！

木更：むしろ赤ちゃん扱いですよね？

冥弥：いいですね

冥弥：今から赤ちゃんグッズ確保してきます

水姫：冥弥ちゃん、もしかして怒ってる？

冥弥：激おこぷんぷんアルティメットストリーム

冥弥：いまゼウスがLINE見て怯えてるけど許しません

木更：すみません、私とナーガは所用で少し会場を離れます

彩土姫：はーい

水姫：はーい

沙樹：はーい

ナーガ：すまない、誰か金玖の面倒を見てやってくれ

金玖：冥弥いまだどこにいる？ 合流したい

地津：その心は？

金玖：怯えてるゼウスが見たい

ナーガ：金玖、後でお前折檻な

深海：緊急！鳥乃さん徳光さんがヤンキーに絡まれました

彩土姫：え!?!

地津：状況は？

深海：場所は通りの奥。からあげ串、トルコアイスの店が見えます

冥弥：鳥乃さんが不良に絡まれたって本当？

水姫：深海ちゃん、いまだどうなってるの？ 状況教えて

彩土姫：反応がないね

金玖：深海の霊圧が……消えた？

ゼウス：ミカア！状況を報告するのだ

深海：すみません

深海：暴徒鎮圧に入っていました

彩土姫：ぼ、暴徒って

地津：ヤンキーがナイフを出して脅したんだとよ

水姫：ナイフ!?!

地津：安心しろ

地津：すでに警備員に報告した。鳥乃さんも徳光さんも深海も無事
だぜ

深海：ふたりは茂みのほうで休まれるそうです
ゼウス：よ、良かったのだー

メール：梓おねーちゃん、こわかったー

彩土姫：メールちゃん、ずっと反応しないで何してたの？

メール：ずっと性欲処理してたの

メール：って

メール：おねーちゃんたち、不良に絡まれてたの？

地津：リアルでも言ったが反応おせー

彩土姫：あれ、いまメールちゃんと合流してるの？

深海：はい。公園エリアです。

地津：たったいま金玖も合流した

水姫：じゃあ、ボクもそっち行くよ。フィーちゃんとアインスさん

も一緒だけいい？

彩土姫：ボクも行くよ！　ゼウスちゃんと冥弥ちゃんも一緒に

ゼウス：ところで皆の衆

ゼウス：落ち着いた今だから相談したいのだが

ゼウス：合流した辺りから冥弥の様子がおかしいのだ

メール：どうおかしいの？

彩土姫：なんか、心ここにあらずって感じ

ゼウス：誰かにトウUNKしてる疑惑ありなのだ

地津：めんどくせー

地津：とりあえず、拉致してでも公園に連れてこい

地津：総掛かりで誰に恋したか吐かせるぞ

地津：あーめんどくせー

水姫：そう言ってる地津ちゃんが一番乗り気だよね

金玖：なんか凄い音が聞こえた

梓：どうしよう

梓：ハンマーしたら沙樹ちゃんが本当に倒れちゃった

ゼウス：フアッ

地津：フアッ

彩土姫：えっ

水姫：えっ

金玖：フアツ

深海：えっ

メール：えっ

冥弥：鳥乃さんが？

冥弥：大丈夫なのですか？

冥弥：いま、どこにいますか？

彩土姫：冥弥ちゃんが、リアルでもLINEでも異常なほどパニックってる

水姫：もしかして、冥弥ちゃんが好きになっちゃった人って……

ナーガ：悪い。先に宿に戻ってる

MISSION 20. 5―されど変わらぬもの

私の名前は藤稔^{ふじみのり} 木更^{きさら}。 陽光学園高等部一年の女子高生。

そして、かすが様愛です。

「さて」

2日目。深夜23：45。

すでに彩土姫ちゃんと水姫ちゃんが就寝し、金玖ちゃんが眠いのを我慢し起きてる中、私は深海ちゃんを除く残りのメンバーに伝えま

す。「先ほど伝えた通り、夢月お姉ちゃんを誘拐した黒幕はかすが様。そして彼の部下には深海ちゃんがいて、金玖ちゃんも雇われてあちらサイドにいます。間違いはないですね、金玖ちゃん」

「その情報は、正しい」

目をこすりながら、金玖ちゃんはいいます。周りは完全にお通夜状態。地津ちゃんは私が拉致された辺りで勘づいてたらしく比較的冷静ですけど、冥弥ちゃんも、ゼウスちゃんも、メールちゃんも、完全にショックで目に光を失ってます。

「だが、尋問は無駄だ。まだ、情報は何も持ってない」

「大丈夫ですよ。少なくとも現状は尋問の予定はありませんから」

私は金玖ちゃんの頭を撫でます。

「なら寝かせてくれ」

ふああ、と欠伸する金玖ちゃんですけど、残念ですけど今回それはできません。なお、周囲は私と金玖ちゃんの会話さえ耳に届いてないように映ります。

そんな中、ナーガちゃんは不機嫌そうに、

「木更姉さん。朝までそつとしておいてくれと言わなかったか？」

「確かに言いましたね」

「なら」

完全に、心がポッキポキに折れた顔でした。屋上にでも連れて行ったらそのまま飛び降りてしまいそうなの

でも。

「駄目ですよ、ナーガちゃん。まだ旅行の本番が残ってるじゃないですか？」

「……は？」

力ない声で、何のことだと訊ねるナーガちゃん。一方、冥弥ちゃんとゼウスちゃんは。

「まさか……やるの？」

「正気か？ そんな事実を前にして、おぬしはあれをやるうというのか？」

と、勘づいた模様。

「当然です」

私は言いました。

「確かに、私たちの平穏を奪い去ったのはかすが様です。恐らく、その事実には誤りはないのでしよう。その上で、私はみんなに聞きます」

私は、親戚たちに順番に顔を向けてから、

「この中に、憎しみのあまりにかすが様への愛を忘れた方はいますか？ 失意のあまりにかすが様への情を忘れた方はいますか？ 胸に秘めたそれぞれの想いを捨てきれの方はいますか？ 私は捨てきれませんでした。私は、やっぱりかすが様が大好きです。例えばかすが様と敵対しデュエルで殺し合ったとしても、その日の晩に、私はいつものようにかすが様の家にこっそりお邪魔するでしょう。ご帰宅されてなかったらお風呂を沸かし、掃除とベッドメイクを終え、夫の帰りを待つ妻のように家主を待ちたいと今でも思っています。皆さんはどうですか？ 想いや形はそれぞれ違いますけど、かすが様の為なら、あらゆる正気をドブに捨てれるのが藤稔親戚一同だと私は思っています」

すると、妹たちはそれぞれハツとし、考え込みます。

「ぐぬぬ。たしかに」

「かすが様が、フィール・ハンターズなら……霞谷とのカップリングのいいスパイスになる。……問題ない、かも」

段々と私の意見に同調しはじめるゼウスちゃんと冥弥ちゃん。とここで地津ちゃん、「正気をドブに捨ててる自覚あったのか」とか驚か

ないでください。ドブに「捨てれる」とは言ったけど「捨ててる」のは深海ちゃんナーガちゃんの末期組だけで、私は正常なんですから。でも、そのドブに捨ててる組のナーガちゃんは。

「木更姉さん。悪いが、私は反対意見を出させて貰う」と、反論します。

「恐らく木更姉さんの言ってることは間違っではない。だが、私は憎むべき黒幕としての決闘を望む。たとえ、それがかすが様だとしてもだ。夢月姉さんを救い出し、私たちから全てを奪った奴を罰する。その為に私は世界の裏側に足を踏み込んだのだからな」

「ナーガちゃん」

「だが、いまは疲れている。深海だけでなく金玖までもがあちら側なんだぞ？ 限界なんだ！ 何もかも受け止めきれない！ 寝込みを暗殺されてもいいから休ませてくれ！」

恐らく、今回の件で一番ショックを受けたのはナーガちゃんでしょう。

でも、私はいいました。

「ナーガちゃん。いまは全てを忘れて予定を執行しましょう」

「は？」

目を丸くするナーガちゃん。私は続けて、

「この夜だけは、誰が黒幕だったとか、誰が黒幕の味方だったとか、そんなのは些細な問題なんです。私は全ての真実を知った上で、真実とかがすが様への愛は分けて考えるべきなんです。ナーガちゃんも、かすが様がどれだけ憎くても、あなたの中にまだかすがすが様への愛が残ってるなら、やりましょう！ ナーガちゃん！」

私は、らしくないほどエネルギーギツシユに勧誘します。でも、

「そんなの、無理に決まっている」

ナーガちゃんは金玖ちゃんを横目で見て、いいました。

「深海だけなら納得できる。奴は姉妹を大切にしながら、かすが様の為ならその大切な姉妹だって手をかけそうな奴だからな。——だがしかし、かすが様と妹までも敵なんだぞ！ このショックを、いままぐ忘れろというのか！ できるというのか！ そんな事ができるの

は、木更姉さんだけだ！」

ナーガちゃんの嘆き叫び。しかし、そこへ口を挟んだのはメールちゃん。

「ねえ木更おねーちゃん。ルールは何も変わってないよね？」

「メール？」

誰がといわず呟く中、私は。

「はい。予定通りのルールでいくつもりです」

「それなら、もし私が勝っちゃったら、尋問してもいい？ かすが様のお尻を貰いながら、夢月おねーちゃんの事とか、これまでの悪事とか、全部吐いて貰うまで、何時間も、何時間も、ずこぼこお」

はあはあと息を荒げるメールちゃんに、

「勿論です」

私は肯定しました。

「やったあ。じゃあ、わたし参加するねー」

メールちゃんは満面の笑みで万歳します。

「成る程な」

で、そんなメールちゃんの様子をみて、続いて動いたのは地津ちゃん。

「かすが様が黒幕だからって今日やりたかった事を辞める必要はねーし、何ならかすが様に愛も憎しみも狂気もショックも何もかもぶつければいいだけか」

「はい」

私はうなずき、

「なお深海ちゃんは、今日それを決行しますと伝えたら姿をくらませました。恐らくかすが様のボディガードとして私たちを全員撃墜してから、勝者となる算段なのでしょう」

「なら、アタシは参加するぜ。個人の欲求より家族の奪還を優先してー奴はアタシに協力しな」

「あ」

はつとなるナーガちゃんと私。かすが様への愛ではなく「そういう目的」での参加だって十分アリだということを、失念してたのです。

同様に、地津ちゃんの言葉に冥弥ちゃんとゼウスちゃんの目に炎が灯ったのが分かります。

「私は……協力しない」

一方、地津ちゃんの誘いを堂々と断ったのは、敵側に立ちながら今この会話に参加して金玖ちゃん。

「私は、個人の欲求を優先する。……私は、かすが様の無様な泣き顔が見たい」

「お前の立場なら地津の味方しないのは当然だろう。だが、逆にかすが様の味方はしないのか？」

訊ねるナーガちゃんに、

「この機会を捨ててまで……仕事を选ぶ義理はない」

と、金玖ちゃん。

「そうか」

妹の言葉を聞き、ナーガちゃんは少し嬉しそうに、

「金玖。お前は私や藤稔の皆を捨てたわけではないのだな」

「何をいう。……そんなの、愚問の極みだ」

「愚問の極みか、失礼なことを聞いたな」

ナーガちゃんはいうと、その場であぐらをかき、目を閉じます。

「妹は悪魔に魂を売ってない。それが分かっただけでも十分だ。——皆」

ナーガちゃんはいいました。

「仮に勝者が私だった場合、数日後かすが様の葬式が行なわれても文句は言わないで貰おうか」

彼女の宣言に、周囲が一斉に驚愕します。

「いま、やっと私自身を理解した。我が愛と憎悪は表裏一体！ ならば、かすが様を憎めば憎む程、私のかすが様への愛は溢れだし、いまや私の想いは宿命となった。愛を憎悪を呼ぶならば、憎悪が愛と読むならば、私はかすが様を討つことで、この乙女座の宿命に殉じよう」
そんな、ナーガちゃんの決意の語りに、

「これは、途中で阻止しないと……駄目」

「第一の敵はナーガか」

冥弥ちゃん、ゼウスちゃんがナーガちゃんに警戒を露にし、

「ああ。こいつは面白いことになってきたなあ、おい」

普段は無気力な地津ちゃんが、好戦的な笑みを浮かべます。

「さて、全員心が固まったのでしたら。彩土姫ちゃんと水姫ちゃんを起こしましょうか」

私は皆を代表し、続けていいました。

「これより、私たちは第23回かすが様争奪戦を開始します」

かすが様争奪戦とは、今回の旅行を行うにあたり元々予定していたイベントです。

第一回の発案者が誰だったかはすでに思い出せません。なにせ、私やかすが様がTokyoにいた頃は、親戚が3人以上集まれば息をするようにやってた行事でしたので。私もフィールを使えなかった頃から、この身ひとつの技術で色々かすが様愛の為に奮闘したものです。

それで、ルールなのですけど。

- 一、0時30分より行動開始とする。
- 二、他人の殺傷を禁止とし、それ以外のあらゆる手段を許可する。
- 三、かすが様のプライベート侵害は一切考慮しなくて善い
- 四、ストーキング、違法侵入、凶器の使用等は各自、自己責任とする。

五、以上を踏まえ、先にかすが様を獲得した人を勝者とする。

(どの状態を獲得したと判断するかは一回のノリで決める)

これが、今回かすが様争奪戦を行うにあたり、皆で決めた約束事になります。

実は集まったメンバーに併せて毎回少しずつルールを微調整してたのですが、今回はほぼ全員集まった為、かつてない程に無秩序に行おうという話になったんです。いま思えば、フィール能力を得た人たちがその力を行使する気満々だったのが分かりますね。私もそのつもりでしたから。

——現在時刻0:35

といったわけで、争奪戦は始まりました。

すでに深海ちゃんを除いた私たち9名は全員旅館を抜け出しています。そんな中、現在私は。

「はあっ、はあっ」

その内8名全員に追いかけられ、全力で逃げてる所です。

何故なら、この9名の中で、私だけがさすが様の現自宅を知っている、《ワーム・ホール》1発でさすが様の家に侵入できることを知っているから。

私は地の利を活かし複雑な路地裏を駆け回ります。街灯の光も遠く殆ど真つ暗闇の道、他の皆はデュエルディスクからライトを灯して移動するしかない中、構造を完璧に把握してる私は光を一切頼らず、逆に他のみんなのライトから避けるように移動します。

ですけど、

「逃がさないよー」

と、前方から声。

先回りして最初に私の前に立ったのは、意外にもフィール能力を持たない彩土姫ちゃんでした。

「彩土姫ちゃん、どうして」

私の逃走ルートを掴んでるのですか？ しかもライトの光もなしに。

「地の利があるのは木更姉ちゃんだけじゃないんだよ」

彩土姫ちゃんの言葉に、私はハツとします。

「もしかして」

後ろを振り向くと、直後ローラースケートを履いた水姫ちゃんがやってきたんです。

「や、やっと追い付いた。先回りありがと彩土姫ちゃん」

「いいっていいって、これでボクたちが仲良く一番乗りだっ」

私はここで初めてデュエルディスクのライトを灯し、気づきます。ふたりはライトではなく暗視機能付きの高価なDゲイザーを使っていたのです。もしかして彩土姫ちゃん、体売って稼いだ資金を使つて……!?

となると、もしかしたら誘導されていたのかもしれませんが。実際、いま私がいるのは逃げ場のない一本道。まさか、このふたりに追い詰められるなんて。思わぬダークホースでした。

しかも水姫ちゃんの首には、少なくとも朝にはかけられてなかったロケットペンダントが。それも、カードを1枚収納できそうなサイズのもの。もしかして、かつてフィーアちゃんから貰ったというフィール・カードを？

水姫ちゃんが持つてるカードは高い回復能力のフィールを持つていると聞きます。本来体が弱い水姫ちゃんは、その力で人並みの体力を維持している。ならば。

「水姫ちゃん、ごめんなさい。永続罨《スキルドレイン》！」

私はハングドの技術でフィールカードに加工して貰った《スキルドレイン》を使用。水姫ちゃんのフィール・カードはモンスターだったはずですから。これでフィール・カードの恩恵は無効になるはず。

「っ、けほっ、けほっ」

予想通り。私の周りを特殊な結界が覆うと、中にいた水姫ちゃんは突然苦しみます。

ローラースケートとはいえ、ここまで水姫ちゃんは全力で走ってきたのですから、本来ならとつくに体が悲鳴をあげる程に体力を消耗していたんです。

「ば、馬鹿！ 木更姉ちゃん、そんな事したら水姫ちゃんが」

と、慌てて水姫ちゃんの下に駆け寄る彩土姫ちゃん。

「大丈夫です。この結界の外に出ればすぐ元気になりますから。……もちろん、追いかけて結界に入り直したら、またすぐ今の水姫ちゃんに戻りますけど」

言い残しながら私は走り去ります。後ろで、

「見そこなつたよ姉ちゃん！ 鬼！ 悪魔！」

と、彩土姫ちゃんが叫びましたけど、かすが様への愛の為には無視するしかありません。

私はいまの道突き当りまで進み、左へ曲がります。

すると直後、私の眼前に「死」と描かれた模様が浮かび上がり、突

如卷きあがる煙に私は包まれました。

(え?)

と、思ったけどすでに遅く、私は煙を吸ってしまい、「っ!? あ、うっ——」

初めて経験する心臓の発作。息もできず、私は苦しみながら倒れます。

もがきながら見上げると、前方には冥弥ちゃんの姿。

冥弥ちゃんは私の腕を手にとると、デュエルディスクから《スキルドレイン》を引き抜きます。すると周囲の結界は消えて、

「助かったよ冥弥姉ちゃん」

「し、死ぬかと思ったー」

って、彩土姫ちゃんと水姫ちゃんが追いついてきました。

「少し……待ってて」

冥弥ちゃんはいいました。

「いま、木更さんを生かさず殺さず苦しめて……体力を抜いてる、から」

「うわ」

ドン引きする水姫ちゃん。その横から彩土姫ちゃんが、

「地津姉ちゃんの指示?」

「はい」

「使ったカードは?」

「《死のデツキ破壊ウイルス》……です」

「うわ、いまの木更姉ちゃんにピッタリ」

酷い会話です。

「……え、何?」

突然、冥弥ちゃんが眩きました。見ると彼女のデュエルディスクの角から煙が巻きあがった様子。

これって。

心当たりが頭に浮かんだ直後でした。

煙の中から、鋭い注射針のような舌が顔を出すと、うにようによ動きながら冥弥ちゃんの耳の穴へと侵入。

「え？……あ、あへ。。へ…あ…おおお……」

途端、冥弥ちゃんの目がぐるんと白目を向き、涙、鼻水、涎を垂らしながらその場でぺたんと尻餅をつき、失禁する様まで晒します。間違いありません。このカードって。

続けて、私の前方に《治療の神 ディアン・ケト》が浮かび上がり、優しい光で私を包みます。すると、ウイルスによる心臓の苦しみが段々消えていきました。

「大丈夫、木更ちゃん」

同時に道の奥の夜闇からひとりの少女が顔を出します。

「フェンリルさん」

私は、少女の名を呼びました。

「どうして」

「望遠鏡で眺めてたら、旅館を出るのが見えてね、こつそり付けてきたんだ」

え？

「あの、もう一度お願いします」

「望遠鏡で眺めてたら、旅館を出るのが見えてね、こつそり付けてきたんだ」

藤稔 木更、高校1年生。

まさか自分がストーキングされる日がくるとは思いませんでした。

「と、とりあえず。ありがとうございます」

動揺しながら、とりあえず私は頭を下げます。フェンリルさんは、やんわり微笑んで、

「ここからはボクも協力するよ、木更ちゃんの勝利に。見た所ルール無用だから、木更ちゃんの武装扱ってことでいいかな？」

「あの、フェンリルさん私たちの事情をどこまで」

「部屋の窓が開いたときにこつそり盗聴器を撃ち込んだんだ。だから直前の会話程度の内容は把握してるよ」

ストーリーカーって恐ろしいですね。

「気持ちがありますがどうございます。けど、さすがに第三者を雇うのはルール無用でもフェアさに欠けてますから」

私はフェンリルさんにいい、冥弥ちゃんの前に立つ。そして、ロ
プを取り出し全身を拘束してから、

「治して頂けますか？ 冥弥ちゃんを」

「ちやっかり動けなくしてから言うんだ。まあ、いいんだけどね」

フェンリルさんは苦笑いしてから、2枚目の《治療の神 デイアン・
ケト》を取り出した。ところで、

「昼間のデュエル。私もフェンリルさんの《ティンダングル・スパイ
ク》の攻撃を受けてたら、こうなっていたのでしょうか？」

「さすがに違うよ」

フェンリルさんはいった。ですよね。さすがにもう少し加減して
くれるはず。

「加えてボクを求めて自慰に耽り始めてたよ。あと、フィールをすつ
ごい込めてたから、ボクの《治療の神 デイアン・ケト》では治らな
かったかもしれないね」

私は聞かなかったことにしました。

その後、水姫ちゃんは冥弥ちゃんを連れて旅館へ。そのまま介抱に
回ったそうです。

——藤稔 冥弥：リタイア

——藤稔 水姫：リタイア

彩土姫ちゃんは、冥弥ちゃんの事態にびびったのか、いつの間にか
退却していました。それから何とか妹たちを振り切った私は《ワー
ム・ホール》を発動。さすが様の部屋へと繋がります。

カードの発動は無事成功。私はゲートを潜ろうとします。しかし、
何故でしょうか。フェンリルさんの時と違い確かにかすが様の部屋
と繋がりはしたのに、ゲートの入り口が壁みたいになっていて入るこ
とができないのです。

(どうして)

私が思った瞬間でした。

突如、ゲートの中から《幻獣機レイステイルス》《幻獣機テザーウル
フ》《幻獣機メガラプター》が飛びだしてきたのです。

「このモンスター、もしかして」

私が呟いた直後でした。

「その声、やっぱり木更ちゃんね」

ゲートの先から、鳥乃先輩の声が聞こえたんです。

「鳥乃先輩、どうして」

「どうしてって、当然って話でしょ」

先輩はいいました。

「過去の依頼のアフターフォローよ」

って。

「深海ちゃんの情報提供でね、木更ちゃんたちが今晚かすが店長の家を総出で襲撃するって」

「だからって、よく自分を一度殺した一味と知って協力できますね先輩」

「それが仕事って話。それに、私としてはほぼ同じ言葉を木更ちゃんに返したいって話だけど」

さすがに今回はごもつとも。

なんて話してる間に、3機の幻獣機は私の周囲を包囲し、

「それじゃあ仕事に入らせて貰うから。レイステイルス、テザーウルフ、メガラプター、攻撃開始」

3機は同時に私目がけて機銃をばら撒いてきました。

「《攻撃の無敵化》！」

私は咄嗟にリアルファイト用のカードで弾幕を防ぎ、続けて、

「《強制脱出装置》！」

包囲を切り抜けるのは困難と判断した私は、躊躇いなく引き返すことを選択。私の体は一瞬にして旅館前のスタート地点へ逆戻り。

しかし、直後私の体は地面に発生した穴に真つ逆さま。

「きゃっ」

まさか、ここにもハングドの包囲網が？　なんて思った所、

「よう」

と、地津ちゃんが穴の上から私を覗き込んだのでした。

「さすがの木更でも、アタシら全員に狙われたら、いつか引き返すと誑

んでたぜー」

と、発動中のカードとは別に《落とし穴》のカードを私に見せてひらひらする。

「地津ちゃん？」

「つつーワケだ姉貴、交渉に入ろうや。大人しくリタイアしてかすが様の部屋に《ワーム・ホール》を繋いで貰えねーか？」

「え？」

「もし断ったら、《地割れ》でも使って争奪戦終了まで行方不明になつて貰うけどな」

その様子から、どうやら地津ちゃんは何も知らない模様。

地津ちゃんは続けて、

「これで争奪戦はアタシのひとり勝ち。いやー楽な闘いだっただぜ」

「待ってください。地津ちゃんは夢月お姉ちゃんのを優先して、同志と組まれてたのでは？」

すると、地津ちゃんはニヒルに笑って、

「まーな。だが、アタシが個人の欲求を優先しないとは言つてねーぜ」
なんてのたまつたのです。

「ま、正確に言えば片方だけなんて面倒だから両方優先だけどな」
「なるほどねー」

そこへ聞こえたのは、メールちゃんの声。

地津ちゃんは振り返って、

「な、メール。どうして、いや、いつからここに」

「うーん。ずっとー？」

どうやら、穴の下からは見えないけど、すぐ傍にメールちゃんがいるようです。

しかも、メールちゃんだけじゃないみたいで。

「で、さ。いまの地津ねーちゃんの話、録音しちゃったんだけど。どうしよっかなー」

と、脅しにかかったのは、さつき交戦したばかりの彩土姫ちゃん。どうやら逃げた後に今度はメールちゃんと手を組んだ模様です。もしくは最初から三人一組だったのか。

「ぐぬぬ」

じりじりと後ろの下がる地津ちゃん。これはチャンスです。

「メールちゃん、地津ちゃんがほら、誘ってますよー」

私は穴の下から呼びかけます。すると、

「ほあっ!?!」

突然のことに動揺する地津ちゃん。そして、

「わーい♪」

瞬時に理性を手放し、飛び付くメールちゃん。でもって地津ちゃんの真後ろは、いま正に私が落ちてる穴。

結果。

ふたりは揃って穴に落下しちゃいました。

「道連れ2名ご案内ですね」

私は落下するふたりを避け、満面な笑みでいいいます。

「ちよっ、あんな露骨な罠に引っ掛からないでよメールちゃん!」

「ぐっ、ごめんなさーい」

穴の上から嘆く彩土姫ちゃんに、穴の下のメールちゃんが嘆き返します。なお、メールちゃんの男の人は当然おつきしてて、地津ちゃんのお尻のお肉に食い込んでるのが見えます。さらにメールちゃんの下に地津ちゃんが下敷きになる形で倒れてる為、地津ちゃんは振り払うことができません、

「や、やめろメール。まずその硬くなってるのを鎮めてくれ」

なんて言うのでつい、

「沈めてあげましょう、地津ちゃんのナカに」

私は追い打ちをかけてしまい、

「こらああああああああああああああああ」

地津ちゃんの絶叫が穴の中に響き渡ります。

——この時、穴の外が一瞬だけ不自然に真っ暗になりましたけど、会話がヒートアップしてたせいで「気のせい」と私は受け取り、
「いいじゃないですか。ずぼらな地津さんには勿体無い優良物件ですよっ」

「同性で妹にしか見れねえよ」

「地津ちゃんはメールちゃんが可愛くないのですか？」

「可愛いよ！ 目に入れても痛くないほど可愛いに決まってる」

想像以上に妹溺愛でした。

「ていうか姉貴黒いな。こっちに來て一気にダーク化したんじゃねえか？」

「この位強くないと鳥乃先輩の相手できませんよ」

私は冗談半分に言ったつもりだったので、

「あー。同じようにメールをアタシにけしかけたしな」

「あ」

そういえば、旅館の前でお別れの時、鳥乃先輩もメールちゃんを使つて地津ちゃんにやり返してましたね。それも全く同じ方法で。

案外、先輩に適應するだけじゃなく先輩に影響された所もあるのかも。

「といたしますか大事なことを忘れてました」

ここで、私は先ほど知った事実を思い出し、いいいます。

「彩土姫ちゃん地津ちゃんメールちゃん、提案したい事があるので聞いてくれますか？」

「メールをどけてくれたら聞いてやる」

地津ちゃんがいった所、

「あ、ごめんねー」

と、メールちゃんが自分からどうとするも、絶妙に狭い穴の中の為自力では離れられず、私が手を引っ張り、自分にしがみつかせて何とか解放。

「助かったぜ。で、なんだよ突然」

訊ねる地津ちゃんに私はいいました。

「突然ですけど、かすが様の前に辿り着くまで手を組みませんか？」

「え？」

と、反応したのはメールちゃん。続けて地津ちゃんが、

「何があった？」

「鳥乃先輩が、かすが様に雇われました」

「は？」「え？」

驚く地津ちゃんそしてメールちゃん。

「実は鳥乃先輩、一種の警備会社のような所で働いてるんですけど、どうやら深海ちゃんが、かすが様に私たちが今晚一斉に向かう事をばらしたらしくて、それで」

私は、反応がないとはいえ彩土姫ちゃんに伝えても問題ない範囲で詳細を明かします。しかし、やっぱり反応するのはふたりだけで、

「こういうことはー。ハ……その警備会社が敵に回っちゃったんだー」

と、メールちゃん。続けて地津ちゃんが、

「そいつはヤバいな。鳥乃さん以外にも警備に入った奴がいるかもしれねえ、アタシの監視に入ってた双子の姉ちゃん含めてな」

双庭さん姉妹。確かに彼女もあちら側に入ってる可能性はありま
すね。基本ハングズは単独で動くことはしませんから。

「ついでに、そんな事を頼むってことは《ワーム・ホール》での突入も
対策されてしまったわけだな」

「はい」

私は肯定します。

地津ちゃんは、頭を一回掻いてから、

「分かった。とりあえず《落とし穴》は解除する」

と、地津ちゃんはデュエルディスクから《落とし穴》のカードを引
き抜きます。直後、穴は盛り上がるように塞がり、押し出されるよう
に私たちは外へ。

——そこで見たものは。

高村司令の娘、董さんが意識のない彩土姫ちゃんをアイアンクロー
で掴み上げてる姿でした。

「え」「え」「え」

突然のことに茫然とする私たち。董さんはこちらを尻目に、すでに
戦闘不能に陥った彩土姫ちゃんと投げ飛ばし、

「緊急招集。今日は、姉妹水いらずの夜だったのに」

凍えるような冷たい声で、見下ろしいいました。

「ユルサナイ」

彼女の周りをドス黒いフィールド、いえオーラが包みます。その顔は

能面のように表情が無く、躊躇い無く人を殺しそうな精神状態を窺わせます。

「そういえば聞いたことがあります。」

董さんは自分の姉妹を、特にお姉さんを大切に想ってて、想いが強すぎてたまに危険な精神状態になるって。

「私たちは、恐怖と動揺に固まってましたけど、」

「あ、あれはやべえー！ 逃げろー！」

一足先に、地津ちゃんが硬直から抜け出し、敵に後ろをみせて駆け出します。直後、

「逃ガサナイ」

董ちゃんが構えると、その姿勢のまま地を滑るように地津ちゃんを追いかけます。しかも残像を残して。

これが鳥乃先輩が言ってた「阿○羅閃空みたいな動き」なのでしようか。

董ちゃんは瞬く間に地津ちゃんに追いつき、彼女の頭を掴もうとします。そこを、

「駄目えっ！」

横からメールちゃんが地津ちゃんを突き飛ばし、代わりに董ちゃんに頭を掴まれます。

「なら、まずはアナタカラ」

すると一瞬周囲がフィールドで暗闇に包まれ、直後にはメールちゃんが全身何十発も殴られたようにボロボロな姿で、董ちゃんに掴み上げられていました。

「え」「な」

私たちは、再び恐怖と動揺で硬直します。だって、私たちが見たのは、一瞬だけ辺りが真っ暗になっただけなんですから。

恐らく、これが先輩がいつてた「瞬○殺っぽいこと」なのでしょう。そういうえば私たちが穴に落ちてたとき、一瞬辺りが暗くなってました。ということは、あの時に彩土姫ちゃんは董さんの瞬○殺を。

「次ハ、ドツチ？」

彩土姫ちゃん同様、投げ捨てられるメールちゃん。

「も、もう駄目だ。おしまいだ」

どこかの野菜の星の王子みたいな台詞を吐く地津ちゃん。ですけど、無理ありません。私だって逃げられないって確信できてしまったのですから。

「眼鏡の子？ それとも木更ちゃん？」

能面のまま董ちゃんは私たちを交互に見ます。恐らく、先に動いたほうから狙われるのでしょう。しかも、私や地津ちゃんが強制デュエルの赤外線を飛ばそうにも、避けられるか、それより早く瞬○殺されるか。なので、私たちは固まるしかできず。

「どちらでもないよ」

そこへ一筋の赤外線が董さんのデュエルディスクに飛ばされました。

メールちゃんでした。彼女は瞬○殺されても気を失うことなく、隙をついて死角から董さんに強制デュエルを仕掛けたのです。

「あ」

一瞬だけ「しまった」って顔になる董さん。

「メールちゃん！」「メール、おまえ！」

呼びかける私と地津ちゃんにメールちゃんは、

「おねーちゃん、いまのうちに行って。このおねーちゃんはわたしが引き受けるから」

と、すでにボロボロな体でなんとか立ちあがります。

「木更、ここはメールに任せて行くぞ」

地津ちゃんがいいました。

「でも」

一方、私はメールちゃんを放っておけず言いますけど、

「あいつの覚悟を無駄にするんじゃないやねえよ」

という地津ちゃんの言葉に、

「そうですね」

私は考えを改めてうなずきます。

「メールちゃん、必ず戻ってきてくださいね」

「うん。まかせてー」

笑顔でいうメールちゃん。私たちは、彼女を信じかすが様のマンションへと向かいました。

——藤稔 彩土姫：リタイア

——藤稔 メール：リタイア（？）

駅前の住宅街に建てられた高級マンション。その一室にかすが様の部屋があります。

Kasugayaまで徒歩数分。辺りは程良く広い歩道に高級住宅が立ち並び、傍には祭り会場のとは一回り小さいものの児童公園も見当たります。いまは夜中なので、街灯をもつてしても景色の全貌を見渡すことはできませんけど。

「すげーな。こんな所に住んでるのかよ」

かすが様の家の近くまでは、妨害もなくスムーズに辿りつきました。

私が少し遠目に見える正面のマンションを指してというと、左側で歩く地津ちゃんはいいます。ですが、
「で、ところでさ」

地津ちゃんは声を低く小さくしていました。

「突然だが、アタシが『跳べ』といったら、すぐ右側に跳べるか？」

「？ ええ」

私がうなずくと、

「了解『跳べ』！」

「ええっ!？」

間髪入れず告げられた言葉に、私は驚きつつも右へ跳びます。同時に地津ちゃんは反対側に跳び、直後私が先ほどまでの位置に銃弾が飛来しました。

「これって」

「止まるな！ 公園に逃げるぞ」

言いながら一足先に逃げ込む地津ちゃん。私も「はい」と続き公園に逃げ、遊具の後ろに隠れます。

「地津ちゃん、どうして狙撃手が狙ってるのに気づいたのですか？」

追撃がないのを確認してから、私は訊ねます。

「感知はしてねえ。狙撃手がいるものとして読んだだけだ」

地津ちゃんはいいました。

「まず、マンシヨンに狙撃手が潜んでると仮定する。で、アタシらが通った経路、移動速度から狙撃手がいつからアタシらを標準定めてたか、何回標準を修正したか、一番狙いやすい場所は、タイミングは、その辺の所を予測しただけだっつーの。実際に居るか居ないかは関係ねーよ」

「……」

私は、地津ちゃんの並はずれた頭脳を目の当たりにして、知ってたはずなのに茫然とします。

「ふふっ」

そして、数秒の間の後に頬笑みをこぼしました。

「なんだよ」

「いえ、過去の争奪戦でも、いつも地津ちゃんには掌に転がされてたのを思い出しただけです」

「身体能力も無え、体力も無え、それを鍛える根気も無え、アタシが武器にできたのは頭だけなんだよ」

でも、その頭でいつも地津ちゃんは敵も味方もひっくるめて、時にはスタート地点から一步も出ないまま実質勝利したこともある程なのですよね。

「そういえば、争奪戦で共闘したのは初めてですね。とても心強いです」

いうと、地津ちゃんはやっと、

「謙遜はしねえ。冥弥とあのゼウスが、駒に利用されてると分かっても毎回アタシ側につきたがる気持ちが分かるだろ」

「はい、凄く」

そういえばオールバックの協力者探しも今回も、地津ちゃん冥弥ちゃんゼウスちゃんは大体一組で行動してました。何気に「利用されると知って地津ちゃんについてる」のは、たったいま初めて知ったことですけど、今はその気持ちが凄く分かります。

だって。

「地津ちゃん仲間いいですものね」

「そ、そんなじゃねーし」

地津ちゃんは顔を真つ赤にし、そっぽを向きながら照れ隠しに小石を拾い掌の上でポンポンと跳ねさせます。

けど、過去の争奪戦では地津ちゃんが組んだ仲間を勝者に導くこともあったりしましたし、仲間いいなのは確かなんです。もしかしたら私たち10人の中で一番って程に。

ですけど、ここは地津ちゃん謙遜してか、

「大体、仲間いいなのは全員だっつーの。深海や金玖も含めてな」

「そうですね」

間違っではないので否定はしません。私もまた、小石を拾い掌でポンポンと。

でもって。

私たちはフィールを使い、同時に小石を投擲しました。

結果、暗闇に隠れた何かに当たり、それは落下します。《幻獣機レイステイルス》でした。

私はすぐさま拳銃を取り出し、フィール込みで発砲。破壊に成功します。

すると地津ちゃんは、ちよつとびつくりして。

「おいおい木更が拳銃かよ。しかもそれ本物だろ？」

「いえ、ハングド製の改造エアガンです」

本物の拳銃を渡されたこともあるのですが、あちらは私には少々重くて。

「まあ、どちらにしても苦手な代物ではありますけどね。どうやら私は銃の才能はないみたいですから」

とはいえ、今回みたく動かないものを至近距離で撃ち抜く程度はできますけど。

「そういえば、地津ちゃんたちはどうしてこちら側に？」

「いや、アタシらはいまの所は普通に昼側だ」

地津ちゃんはいいます。

「けど、そっち側の世界の情報はプライベートで収集してた。もちろん、オールバックの男、そして夢月の下に辿りつく為にな」

「ということは、いま地津ちゃんたちはフリー。」

「なら。私たちの下に、ハングドに来ませんか？」

「気付くと、私は勧誘してました。」

「相手がフィール・ハンターズとあれば、いずれ特捜課なりNLTなりから討伐依頼が来ると思います。そのとき地津ちゃんの頭脳があると、とても頼りになるんです」

「しかし地津ちゃんは首を横に振ります。」

「悪い、その話は断らせてくれ」

「そうですか」

「残念ですけど、仕方ありませんね。」

地津ちゃんも続けて理由をいう様子はないので、私は勧誘は諦め、改めて、どうやってかすが様の部屋に入ろうか考えることにします。

まず、かすが様のマンシヨンに近づこうなら、先輩の幻獣機と、何者かの狙撃が私たちを襲うのでしょうか。何らかの方法で回避する必要があるようです。

一番適任なのは強行突破でしょうか。私が前に立ってフィールの防壁を張り、地津ちゃんの盾になりながら真正面を突き進む。背後への対処は臨機応変で。まあ、強行突破を適任というのも妙な話ではありますけど。

「なんて考えてると、」

「もしもし、ゼウスか？ ああ、終わったか」

地津ちゃんが、こっそりゼウスちゃんと通信を取ってるのがみえました。

「そうか。まあリタイアは仕方無え。悪いな一番過酷な役を押し付けてしまつて。……ああ、あとは任せろ」

と、地津ちゃんが通信を切った所を、

「あの。リタイアと聞こえたのですけど」

「なんて私は訊ねます。」

地津ちゃんは「ああ」と反応して、

「ゼウスが役目を果たした代償にフィールを使い切ったんだ」

「え、それってデュエルで負け」

「てはいねえらしい。全て使い切って勝利したんだとよ」

「そこまで言ってるから、地津ちゃんはにやりと笑い、

「凄えな、あいつ。アタシはさつきからどうやってゼウスに加勢しようか考えてたんだけどよ。ひとりで与えられた役目を果たしちまいやがった」

「何をしたのですか？」

「エレベーターを停止させ、1Fフロアにいる脅威を全滅させたんだ」「え？」

「な、なんて無茶を。」

「恐らく相手は少なく無え人員をそつちに配備してるだろうからな。そいつを分断させてやったわけだ。とはいえ、さすがにゼウスがひとりで全滅させるまでは想定してなかったから、嬉しい誤算だったぜ」と言う地津ちゃんの顔は嬉しそうで。何というのか「凄え凄え」って興奮してるようでした。

「これだから、冥弥ちゃんとゼウスちゃんも、年下の地津ちゃんについて行って、私も「誰より仲間想い」なんて思っちゃうのでしよう。「これで攻略が一気に楽になった」

「地津ちゃんが、珍しく握り拳を作っています。」

「加えてゼウスには、事前に金玖とナーガがやってきたら無傷で階段を登らせるようサポートしろとも伝えておいた。これでナーガや金玖は、1Fの脅威と応戦することも後ろから挟み撃ちに遭うこともなくスムーズに2Fへと上がれてるはずだ。上の階層にいる戦闘員の掃除に使われたとも知らずによ」

「うわ」

「今回の地津ちゃんの作戦、想像以上に汚い。」

「で、だ」

「ここで地津ちゃんがいきました。」

「木更にもひとつ指示を出したいんだが、いいか？」
「何ですか？」

私は、身を強張らせ、構えながらうなずくと。

「今すぐモンスタースターに乗って、かすが様の部屋まで空から向かえ」

「モンスタースターで？」

「ああ。同時にアタシは地上から正面突破でマンションに向かう。上手く木更の陽動になってくれればいいんだがな」

しかも、地津ちゃんが自ら陽動に？

「今なら地上はゼウスが対処し、他の階はナーガたちが対処してるだろうから、堂々と空から向かっても強制デュエルを仕掛ける赤外線はさほど飛んでこないはずだ。まあ、辿り着いても狙撃手や鳥乃さんと一戦交える可能性もあるが、仮に玄関前や室内に潜んでるなら、残念ながらどう足掻こうともアタシらに交戦を回避する術はない」

「あるとしたら、私やナーガちゃんたちが脅威を全て倒しつつ力尽きリタイヤ。その跡を悠々と階段上る地津ちゃんだけ、でしょうか？」

「チツ、バレてたか」

地津ちゃんは一回舌打ちし、

「で、どうするんだ？ 部屋の位置を把握してるのは木更だけだ。『空から襲撃はテメエがやれ』とか言われてもアタシには無理だぜ」

「お断りします」

私は、はつきりと言いました。

「クソツッ！ だらうな。ネタがバレちまったわけだし」

と、反応を見せる地津ちゃん。

「落ち着いてください。別に共闘をやめる気で言ったわけではありませんから」

私は続けていいいます。

「地津ちゃんの負担は増えますけど、もっと確実な方法があるんです」

「ほう、言ってみろ」

地津ちゃんがいうので、

「二人乗りでモンスタースターに乗りましょう」

「二人乗り？」

「加えて、狙撃手との交戦を避ける為に裏から向かいます。この際、入り口を破壊して突入するのに違いはないのですから」

私がいった所、

「ドア破壊する気だったのかよ」

と、地津ちゃんから今更な反応が飛んできました。

「まさか地津ちゃん。そこまで覚悟完了はしてなかったのですか？」

「してるわけねーだろ。アタシは昼側だつーの」

「でもエレベーターを」

「停止させただけだ。破壊はしてねー！」

「えっ？」

「えっ、て何だよオイ！ 姉貴アタシを外道を極めし者みたいに思つてねーか？」

「違うのですか？」

「ちげーよ！」

なんてやり取りしてから、

「それで、結局どうですか私の提案は」

私は改めて訊ねます。

「……いいぜ」

地津ちゃんはいいました。

「アタシとしたことが完全に盲点だったぜ、二人乗りも裏から突入もな。木更がそれをさせてくれるって言うのなら喜んで乗ってやる」

「窓ガラス破壊しますよ？」

「アタシ抜きでも破壊するんだろ？ なら同じことだ」

「分かりました」

私は、クリフオートのフィールを使い周囲に《幻獣機レイステイルス》みたいなステルスモニターや監視効果が発生してないのを確認してから、地津ちゃんの推測の下、狙撃手の死角を掻い潜るように場所を移動。マンシヨンの裏から《クリフオート・アクセス》に二人乗りし、かすが様の部屋のランダへ向けて空から全速前進しました。

しかし、窓ガラスを破壊しようとした所で、ランダから誰かが円形タイプの強制デュエル機能を発動。これは半径数mに広がるプログラムフィールドで、引つかかるとデュエルディスクが強制的にデュエルモードになってしまう仕様です。しかも《クリフオート・アクセ

ス》の急停止は間に合いません。

このままでは私のデュエルディスクは強制デュエルモードとなり、《クリフオート・アクセス》はモード移行によって消滅し、私たちの体は真つ逆さま。

「チツ、木更」

事態を察したのでしょうか。後ろにしがみついていた地津ちゃんは、即座に私を横に蹴飛ばし、円形状に広がるプログラムから私を救いつつ自分からプログラムに引っかけりにいき、アクセスからベランダに飛び乗ります。

「地津ちゃん！」

落下しながら私は叫び、同時に《クリフオート・アクセス》を自分の救出へと向かわせませす。

「アタシは大丈夫だ。今のうちに突入し直せ！」

「はい」

《クリフオート・アクセス》が私を拾い、再び空を駆けながら私は応えます。

そして、アクセスでもう一度ベランダに突っ込み、今度こそ防弾ガラスの窓を突き破って内部に突入。その際、

地津

LP4000

手札4

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

飛奈

LP4000

手札4

先ほど私たちに強制デュエルを仕掛けようとしたのが双庭さん姉妹の妹さん、飛奈さんである事が判明しました。

こうして、私は今度こそさすが様の部屋に足を踏み入れたわけですが、着地した時、足元に網が敷かれてるのに気づきました。

(これって)

嫌な予感がした直後でした。その袋状の網が天井に吊り上げられ、またしても私はあの網に閉じ込められてしまったのです。

「お疲れ様、木更ちゃん」

奥から鳥乃先輩がやってきていいました。

「そして、悪いけど木更ちゃんはここでリタイアって話だから」

——藤稔 ゼウス：リタイア

——藤稔 木更：リタイア

というわけで、地津ちゃんが繋いでくれたチャンスも空しく、私は捕まってしまいました。

この網に掴まってしまうと、ファイルも電子機器の回線も使えなくなってしまうので、誰かが外から助けて貰えない限り、私はもう何もできません。

「出して欲しい？ 木更ちゃん」

にやにやしなながら先輩が訊ねます。もうこの時点で何が言いたいのか丸分かりなので私は、

「脱ぎませんよ」

「じゃあオニーして」

「録音しましたので、あとで徳光先輩にご褒美貰ってくださいね」

「許してくださいお願いします」

「駄目です」

私はにっこり笑って返事します。電波回線は使えなくても、録画や録音は問題なく使えて安心しました。

(これで、出してもらえるよう交渉すれば)

しかし、私はここで大きな思い違いをしていたことに気づかされません。

先輩はいいました。

「この際、網越しても問題ないわね」

「え？」

「とうわけで木更ちゃん、今から無理矢理脱がすけど暴れないでね」
「は、え？」

思わず固まる私。そうでした、先輩がこの程度で諦めるような性欲の持ち主なわけなかったんです。今まで防犯ブザー慣らせば誰かしら制裁に駆けつけてくれる状況だったから未遂に済んでただけで。

手をわきわきさせながらにじり寄る先輩。私は、

「ひっ」

となるも、状況が状況だけに逃げ場がありません。

あの、私ほんとにノーマルですから、たまによく先輩からかってますけど、本気で行為する気一切ないですから。

そんな時でした。

「かすが様ああああアアアアッ！」

と、部屋のドアを蹴破り、ナーガちゃんがやってきたのは。

すると先輩は驚いた顔で、

「え？ 正面？ もしかして玄関から入ってきたの？」

その問いにナーガちゃんは、

「勿論。そうに決まってる」

「1Fの包囲網は？ 玄関前の双庭先輩は？」

「1Fの包囲網は全部ゼウス姉さんが引き受けてくれた。玄関前のは現在金玖がデュエルしている」

双庭先輩というのは双庭さん姉妹のお姉さん、弓美先輩のことでしよう。玄関前ということは、先ほどの狙撃手は彼女だったのかもしれません。

続けてナーガちゃんはいいました。

「とうわけだ。鳥乃さん、囚われの姫を解放して貰おう」

「駄目」

先輩はいつて、

「木更ちゃんを解放して欲しかったら、デュエルで私のフィールを空にしてみなさいって話。でしょ？」

「誰が木更姉さんを解放しろと言った」

「え？」

ナーガちゃんの返事に、先輩はきよとんととして、

「え、でも、さつき囚われの姫を解放しろって」

するとナーガちゃんはニヒルに笑い、流し目で。

「フツ、姉さんが囚われの姫とは、血迷ったか」

「いや私は状況的に極々普通の判断を」

「囚われの姫といえば、かすが様に決まってるだろう！」

「は？」

先輩は一度目を点にしてから、

「ちよ、待つ、何言ってるのナーガちゃん、それ明らかに血迷ったのそっちでしょ？」

と、困惑。

しかし、その言動がナーガちゃんの気に障ったみたいで、

「貴様、木更姉さん如きをかすが様と同類扱いたした挙句、私のほうが血迷ったと言うか！ 堪忍袋の緒が切れた！ 許さんぞ！ ガ○ダム
!!」

「それ完全に後半グ○ハム・エーカーの台詞！ それにガン○ムとか言っちゃってるじゃない」

先輩は絶叫で突っ込みを入れてから、がくつと項垂れ、

「そうだった。ナーガちゃんも他人のブレイキができるだけの立派な木更ちゃんの同類だった」

そんな先輩に私は横から、

「待つてください先輩」

「木更ちゃん？ そうよね、今回は木更ちゃんも如きとか言われて立腹してるって話だったわね」

「いえ、そんな事よりかすが様が眠り姫なんて素敵な発言も一緒に否定しないください！」

と、網の中で熱い想い込めていいいます。

「へ？」

「純白のドレスに身を包み、白雪姫のように眠るかすが様。なんて素敵♪」

「あ、あの」

「そんなかすが様を眠りから覚ますのは私たちの、キ……キ、せつぷ……きゃーっ♪」

言えない、かすが様とキスだなんて、唇と唇なんて♪ 考えただけで卒倒しちゃいます。

「待っていて下さいい囚われのかすが姫！ 私は、木更はいますぐ貴方の下へ向かいます」

「このナガハム・エーカーも続こう。ああ……抱きしめたいな、かすが様!!」

「はい、鳥乃先輩を倒し、皆で向かきましょう。ナーガちゃん、いえ……ナガハム・エーカー」

本来なら、今回の私とナーガちゃんは互いに目的が相反しすぎて手を組む余地のない相手。ですけど、ハングドという共通の敵が現れたせいか、または親戚とせずと姉妹のように接した仲だったせいでしょうか。気付けば、私たちは敵対意識を忘れ、目的を同じくとした強い絆と結束に結ばれてました。

そんな中。

「ナガハム・エーカーって何?」

ひとり先輩が空気に混じれずにいました。どうしてでしょう?

「というわけだ鳥乃さん」

ナーガちゃんは先輩に赤外線を飛ばし、強制デュエルを仕掛けます。

「この私、ナガハム・エーカーは君との果たし合いを所望する！ 私が勝ったら、大人しくかすが様がどこにいるのか吐いて貰おう」

裏のベランダから入った私、正面玄関から入ったナーガちゃん、どちらにもかかわらず様の姿を見ていないということは、恐らくかすが様はどこかに隠れているか、マンシヨンの外に逃亡している可能性があると思います。加えてまだ深海ちゃんの姿を見ていないということは、彼女がその場所で待機している可能性も。

「うん、分かったわ。私も疲れたからそろそろデュエルに逃げたかった所」

死んだ目をして、先輩はいいました。

ナーガ

LP4000

手札4

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

沙樹

LP4000

手札4

「先攻は貫った。私のターン」

デュエルはナーガちゃん先攻で決まったようです。

「ナーガちゃん、気を付けてください。鳥乃先輩は高いフィール量と対応力を備えています」

「ああ、元より油断する気はない。出せる力を出しきるつもりで行く！もし相打ちになったら、後は頼むぞ、姉さん！」

私の声援を受けながら、ナーガちゃんは最初の手札を確認すると、「いい手札だ。我慢弱いこのカードは私の場にモンスターがいない場合、かすが様を求めて出陣する。来い！ナガハム・フォワード！」
そういつて場に現れたのは《ジャンク・フォアード》。攻撃力900の戦士族モンスターです。

「続けて、初手にこいつを単体で引けようとは、乙女座の私には、センチメンタリズムな運命を感じずにはいられない。ライティ・ナガハム・ドライバー！」

さらに通常召喚されたのは、レベル1チューナー《ライティ・ドライバー》。

「ライティ・ナガハム・ドライバーの効果を発動！デツキからレフティ・ナガハム・ドライバーを特殊召喚する」

しかし、ここで小さなトラブルが発生しました。

本来なら、デュエルディスクは音声を読み取って行う自動サーチ機能で目当てのカードをデッキから軽く押し出してくれるのですが、今回はそれがありません。

(あれ?)

と、思ったのは私だけではないでしょう。ナーガちゃんも《レフティ・ドライバー》を引き抜けず、

「故障か? バグか?」

と、つぶやくのが聞こえました。

結局ナーガちゃんは諦めて手でサーチしようとデュエルディスクから一旦デッキを取り出し、

「レフティ・ナガハム・ドライバーを特殊召喚する」

今度こそ《レフティ・ドライバー》の特殊召喚に成功しました。

「無事、受理されたか。しかし何だったのだ一体」

軽く考え込むナーガちゃん、に対して先輩は、

「だってレフティ・ナガハム・ドライバーなんてデッキにないカードをサーチしたでしょ」

と、返します。

ナーガちゃんは「は?」と反応し、

「いやだが、いままでデュエルディスクがこんな動作を起こしたことなんて無いのだが」

「でしようね。だって、今回は私のデュエルディスクのオートジャッジ機能の問題だもの」

先輩はいいました。

「普段、仕事で敵対する相手が相手だからね、少々セキュリティは重くしてるのよ」

「クツ、身持ちが堅いな」

と、苦みの入った顔のままナーガちゃんは、

「なら、あえて言わせてもらおう。レベル2 《レフティ・ドライバー》に、レベル1 《ライティ・ドライバー》をチューニングである」と!

ここで初めてナーガちゃんは正規のカード名で宣言。《ライティ・ドライバー》が1つの輪に姿を変えると、内側を《レフティ・ドライ

バー』が潜り、混ざり合います。

「シンクロ召喚！ 我が愛の下、宿命をねじ回せ！ レベル3シンクロチューナー『ジャンク・ドライバー』！」

現れたのは全身に無数のドライバーを装備した小型の戦士。

「『ジャンク・ドライバー』は場と墓地に存在する限り『ジャンク・シンクロン』として扱う。更に、このカードのS召喚に成功した場合、デッキからジャンクモンスター1体を手札に加える。私は『ジャンク・デイフェンダー』を手札に加える。来い、ナガハム・デイフェンダー！」

「結局ナガハム呼びは変わらないのね」

はあつ、と一回嘆息する先輩。

「続けていくぞ。さらに私はレベル3『ジャンク・フォアード』にレベル3『ジャンク・ドライバー』をチューニング！ 乙女座の星を焦がす聖槍よ!!かすが様への愛を放ち世界を醒ませ!! シンクロ召喚！

レベル6『スターダスト・アサルト・ウォリアー』！」

続けて現れたのは、両腕にドライバーを模した武器を持った戦士族モンスター。

「『スターダスト・アサルト・ウォリアー』の効果発動！ スターダスト・アサルトナガハム・ウォリアーはS召喚成功時に、私の場に他のモンスターが存在しない場合に、墓地のジャンクモンスターを蘇生する。舞い戻れ『ジャンク・ドライバー』！ 守備表示だ」

さらにアサルト・ウォリアーが空間に武器を穿つと、空間の歪から『ジャンク・ドライバー』が舞い戻ります。

「私はこれでターン終了だ」

まさかの伏せカードなし。ですけど、場にシンクロモンスターを2体も展開しておいてナーガちゃんの手札は3枚。さらに『レフティ・ドライバー』には、墓地の自身を除外してデッキの『ライティ・ドライバー』をサーチする効果を持っています。その為、ナーガちゃんは実質このターン手札消費を全くしてないことに。

ナーガ

LP4000

手札3 (《ジャンク・デیفエンダー》)

□□□

□□《ジャンク・ドライバー(守備)》□

□□—《スターダスト・アサルト・ウォリアー(ナーガ)》

□□□□

□□□□

沙樹

LP4000

手札4

「なら、私のターンね。ドロ」

続いて先輩のターン。正直、先輩のデッキは幻獣機をメインにしてるのは分かりますけど、実際に動くまでデッキの傾向を把握するのは難しかったりします。何故なら先輩は頻繁にデッキを弄って「型」を変えてくるのですから。

恐らく私が最初にデュエルしたときのデッキは、マスターデュエルを活かしてエクシーズを主軸にしつつシンクロ・融合を織り交ぜた汎用型、ハングド入りする時の実技試験では増田さんのサイバースを何とかして使おうとしつつ純粋な打点を視野に入れた高火力型、メールちゃんとデュエルした際は聞いた話だと、ゲイ牧師さんとのデュエルやアンさんとのデュエル等、比較的多い傾向のある高ランクエクシーズとRUMをメインに添えた型でしょう。

なので昨日から今日までデッキを弄ってないなら、メールちゃんに使ったものと同じ型になるのですけど。

「じゃ、早速だけど。手札の《幻機獣アベンジャガー》の効果を使用」「あつ」

あのカードは私と初めてデュエルした時にダークドロウで創造したカード。実技試験のときはPスケールに置いてましたけど、確かモンスターとしてのアベンジャガーは。

「まず、このアベンジャガーは幻機獣モンスターとして扱うわ。その上で、アベンジャガーは手札・フィールド上から自身を含む幻獣機モンスターで融合召喚を行う」

「融合だと」

驚くナーガちゃん。間違いありません、先輩はデッキをすでに変えています。

旅行中の先輩のデッキは、親戚たちとデュエルしてもいいよう、幻機獣など先輩専用のカードは抜いていたはずですので。クリアウィング以外は。

「気を付けてくださいナーガちゃん。先輩のデッキはメールちゃんとデュエルした時のデッキとは別物です」

「何!?!」

と、私たちが会話する中で、

「私は《幻機獣アベンジャガー》と《幻獣機オライオン》を融合。火器の力を得し半機獣よ、獅子の力を得し宇宙船よ、科学の力にて混ざり合い、命の冒流の上に進化せよ！ 融合召喚！ 撃ち貫け、レベル6《起爆獣ヴァルカノン》！」

「ヴァルカノン!?!」

私は驚き、声をあげます。

だって、このカードは、私と先輩の最初のデュエルで先輩が最後に出したモンスターなのですから。確かあのときは私のモンスターがPモンスターだったおかげで命拾いしましたけど。

「《起爆獣ヴァルカノン》のモンスター効果。このカードと相手モンスター1体をそれぞれ破壊する。私が破壊するのは当然、《スターダスト・アサルト・ウォリアー》」

「なっ」

驚くナーガちゃん。けど、効果はこれで終わりではありません。

「さらに、破壊して墓地に送った相手モンスターの攻撃力分、相手ライフにダメージを与えるわ」

両肩に機関砲を積んだ機械の一角獣《起爆獣ヴァルカノン》は、出現するとすぐ両肩の機関砲アサルト・ウォリアーを撃ち抜き、自らもGに耐えきれず破砕します。それでも、ヴァルカノンの掃射は勢い余ってナーガちゃんへと届き、アサルト・ウォリアーの爆破も伴って、

ナーガ LP4000↓1900

一気にナーガちゃんのライフを削ります。

「さらに融合素材となつて墓地に送られた《幻獣機オライオン》の効果、私の場に幻獣機トークンを発生」

幻獣機トークン。これを利用するデッキなのは、先輩がどんなデッキであつても変わらない事実ではあるのですけど。

「で、速攻魔法《エネミーコントローラー》」

今回の先輩のトークンの使い方はよりえげつないものでした。

「コマンド入力、↑↓AB！ この効果で、私は幻獣機トークンをリリースし、ターン終了時まで《ジャンク・ドライバー》のコントロールを得るわ」

「くっ、私のモンスターが両方とも、いとも簡単に」

悔しげに呟くナーガちゃん。先輩は手に入れた《ジャンク・ドライバー》のテキストを確認すると、

「なるなる、《ジャンク・ドライバー》には相手によって破壊された場合に1枚ドロウする効果も持ってたわけね。で、このターンに破壊されるようなら壁の役目を果たしつつ手札アドに繋げて、生き残ったらシンクロ素材にする算段つて所？」

「その通りだ」

狙いを完全に読まれ、さらに顔が歪むナーガちゃん。

「じゃあ悪いわね。ちょうどレベル3チューナーが欲しかったのよ、有効活用させて貰うわ」

そんなナーガちゃんに、先輩は更に煽るようなことを言って、

「手札から《サイバース・ガジェット》を召喚。効果で墓地の《幻獣機オライオン》を蘇生」

「幻獣機に加えサイバースだど？」

これはナーガちゃんびっくりするのも仕方ありません。

「そしてレベル4 《サイバース・ガジェット》にレベル3 《ジャンク・ドライバー》をチューニング。この方法で墓地に送れば、ナーガちゃんのドロウもないって話」

《ジャンク・ドライバー》が3つの輪に変わると、内側を《サイバース・ガジェット》が潜って混ざり合う。

「未だ穢れに染まらぬ無垢なる翼よ。その透明さで敵を討て！ シンクロ召喚！ 飛翔せよ、レベル7！ 《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》！」

こうしてフィールドに出てきたのは、デュエルモンスターズ展最終日の日から先輩のエースになったドラゴンのモンスター。そして、メールちゃんを詰みに追い込んだカードでもあります。

「気を付けてくださいナーガちゃん。このモンスターは上級モンスターに極端なほどの耐性を持つ、先輩のエースモンスターです」

「分かった」

うなづくナーガちゃん。しかし、

「だが姉さん。悪いがこれ以上の助言は無用だ。奴が鳥乃さんのエースというなら、このナガハム・エーカー。あのモンスターは自らの力で攻略してみたい」

「わかりました」

ナーガちゃんには、相手のエースの情報を教えるのは無粋だったようです。

それにしても、先輩は現在のフィールドを作り出すため手札を4枚一気に使ってしまった、

「カードをセット」

さらに最後の1枚も伏せ、もうハンドレス。

ヴァルカノンの使用にしろ今回にしろ、もしかして今回の先輩は短時間でデュエルを終わらせる為の強襲型？

「バトル！ 《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》でナーガちゃんに直接攻撃。これを防がないとデュエルは私の勝ちって話だけど、どうする？」

「当然、防ぐに決まっている。手札から《ジャンク・ディフェンダー》を守備表示で特殊召喚だ」

ナーガちゃんが場に出したのは、《ジャンク・ドライバー》の効果でサーチしたジャンクモンスター。良かった、これで1ターンキルは防げます。

「なら《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》で《ジャンク・ディフェ

ンダー』を戦闘破壊してターン終了よ」

「私のターンだ、ドロー」

ナーガちゃんはカードを引き、

ナーガ

LP 1900

手札 3

□□□□

□□□□

「《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン（沙樹）》——□

□□《ガジェット・トークン（守備）》」「《幻獣機オライオン（守備）》

「《セットカード》□□

沙樹

LP 4000

手札 0

「墓地のレフティ・ナガハム・ドライバー……否、《レフティ・ドライバー》の効果を発動。このカードを除外し、デッキから《ライティ・ドライバー》を手札に加える。そして、召喚しデッキの《レフティ・ドライバー》も特殊召喚だ」

実質的に手札を消費せず2体のモンスターをナーガちゃんは並べて、

「先ほどは使わなかったが《レフティ・ドライバー》にはもう1つ効果を持っている。このカードは特殊召喚に成功した場合、ターン終了時までレベルを3にできる。これによりライティ・レフティの合計レベルは4！　いくぞ、2体でチューニング！」

再び、ナーガちゃんはこの2体でシンクロ召喚を行います。

「シンクロ召喚！　可変機構を持つ機装の戦士！　レベル4 《フラッグ・ウォリアー》！」

こうして現れたのは、攻撃力1800の戦士族モンスター。

「カードをセット。行くぞ、バトル！　《フラッグ・ウォリアー》で《幻獣機オライオン》を攻撃」

《フラッグ・ウォリアー》はオライオンに飛び掛かると、腕に持つ剣

で両断。

「けど《幻獣機オライオン》は1ターンに1度、墓地に送られたときに幻獣機トークンを呼び出すわ、守備表示で特殊召喚」

再び先輩の場に現れるトークン。ですけど、ここでナーガちゃんは勝気な笑みを浮かべ。

「その瞬間を待っていた!」

と、言い放ちます。

「《フラッグ・ウォリアー》のモンスター効果発動、ナガハムスペシャル! このカードをリリースし、墓地のジャンクもしくはウォリアーのSモンスター1体を特殊召喚する。私が呼び出すのはこのカードだ。《スターダスト・アサルト・ウォリアー》!」

ソリッドビジョン上では《フラッグ・ウォリアー》が変形し、《スターダスト・アサルト・ウォリアー》へと姿を変えます。

「追撃だ。《スターダスト・アサルト・ウォリアー》で幻獣機トークンに攻撃。そしてこのモンスターは守備表示モンスターを攻撃した際、相手に貫通ダメージを与える」

「げ」

と、先輩がいった所を、アサルト・ウォリアーが幻獣機トークンを穿ち、勢いをそのまま先輩の腹部に攻撃。それもフィールドありで。

「っ」

先輩は、咄嗟に腕からワイヤーを伸ばし、アサルト・ウォリアーのドライバーに巻き付かせ、引っ張って軌道を逸らすことで回避。

「リアルダメージは避けられたか。だが、切れ味は受けて貰うぞ!」

と、ナーガちゃんが言ったようにデュエルでのダメージは成立。先輩のライフが大きく削られます。

沙樹 LP4000↓1900

ナーガ

LP1900

手札2

□「《セットカード》」□

□□「《スターダスト・アサルト・ウォリアー》」

「《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン（沙樹）》——□

□「《ガジェット・トークン（守備）》□

□《セットカード》□□

沙樹

LP1900

手札0

これで、ふたりのライフは並んで、ボードアドバンテージは先輩が、ハンドアドバンテージはナーガちゃんがそれぞれ制した形になりました。

「私はこれでターン終了だ」

「なら、私のターンね。ドロロー！　そして、クリアウイングで《スターダスト・アサルト・ウォリアー》に攻撃」

ドロローからほぼ間を置かずの攻撃宣言。クリアウイングが空高く舞うと、ジャイロ回転しながらの急降下体当たりでアサルト・ウォリアーを破壊。

ナーガ LP1900↓1500

「ターン終了」

そして、再びナーガちゃんのターンに。先ほどのナーガちゃんのターン終了宣言から、まだ5秒も経ってません。ナーガちゃんからすれば呼吸を整える暇もなく瞬きひとつで自分のターンが戻ってきたわけですから、急激なテンポの変化に焦りが生じ、フィールの使い所を間違えたりプレイングミスを引き起こしかねません。

恐らく、先輩はわざとそういうプレッシャーをかけたのでしよう。敵対し、その上で第三者の目でデュエルに立ち会うことで、この人を敵にまわせば、どれだけ厄介なのかを私は改めて思い知りました。

「ま、まだだー！」

しかし、ナーガちゃんはいいました。

「鳥乃さんのターン終了時、永続罫《強化蘇生》を発動。このカードはレベル4以下のモンスターをレベルを1つ上げた状態で蘇生させる。私が墓地から戻すのはこいつだ、《フラッグ・ウォリアー》！」

《フラッグ・ウォリアー》 レベル4↓5

フェイズの巻き戻しが発生し、墓地からフィールドに舞い戻ったのは1体の戦士族のシンクロモンスター。

「そして、私のターンだな。ドロロー」

ナーガちゃんは、自分から先輩のターンに割り込むことで強引に呼吸を整え、焦りやテンポの狂いを解決したようでした。

しつかりと、この1枚のドロローにフィールドを注ぎ込んでいるのが分かります。

「よし」

ナーガちゃんはいいました。

「《フラッグ・ウォリアー》の効果発動！ このカードをリリースし、墓地の《スターダスト・アサルト・ウォリアー》を特殊召喚する。ナガハムスペシャル！」

再び《フラッグ・ウォリアー》は変形し、《スターダスト・アサルト・ウォリアー》へと姿を変えようとしています。ですけど、ここでクリアウイングの翼が光を放ち、

「《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》第一の効果。1ターンに1度、このカード以外のフィールドのレベル5以上のモンスター効果の発動を無効にし破壊する」

《フラッグ・ウォリアー》の変形は失敗し、空中分解を起こし破壊されます。

「なるほど」

ナーガちゃんはいいました。

「これが木更のいう上級モンスターへの過剰な耐性。しかし、1ターンに1度と知った以上、ここさら先はカウンターを気にする必要はない」

と、ナーガちゃんはクリアウイングを指さし、

「対処させて貰うぞ、クリアウイング！」

と、宣言。

ナーガちゃんはそのまま手札2枚をフィールドに置いて、

「私は《ジャンク・チェンジャー》を通常召喚。さらに場にジャンクモ

ンスターが存在することで《ジャンク・サーバント》を特殊召喚」
その2枚をすぐ墓地へと送ります。

「いくぞ、私はレベル4《ジャンク・サーバント》に、レベル3《ジャンク・チエンジャー》をチューニング！ 光を切り裂き、闘いの場に介入せよ！ ナガハムの願いは、誰にも撃ち落とせない！ シンクロ召喚！ レベル7《セブン・ソード・ウォリアー》！」

直後、ナーガちゃんの前方に7つの斬撃の残光が発せられ、内側から黄金の戦士が現れます。攻撃力は2300。

「そして、手札から《アサルト・アーマー》を《セブン・ソード・ウォリアー》に装備。攻撃力を300上げるが、ここで《セブン・ソード・ウォリアー》の効果が発動。1ターンに1度、このカードに装備カードが装備された時、相手ライフに800ポイントダメージを与える。この一撃、逃れられるか？ ガ○ダム！」

セブン・ソードの体が《アサルト・アーマー》によって赤紫色に輝くと、複数のビームを斬撃のように飛ばし、先輩のライフを削ります。

沙樹 LP1900↓1100

《セブン・ソード・ウォリアー》 攻撃力2300↓2600

効果の発動は成功。手札誘発も伏せカードの発動も無い模様です。
「クリアウイングも今回の効果は防げなかったようだな」

ナーガちゃんの読みは正しく、1度先ほどの効果を使ったクリアウイングに、いまのバーン効果を防ぐ術はありません。さらに、いまなら《セブン・ソード・ウォリアー》の攻撃力は先輩のクリアウイングを超えて2600です。このまま攻撃すれば、恐らく攻略は可能です。

「なら、このターンで抱きしめさせてもらおう、壊れるまでな！」

ナーガちゃんはいって、装備していた《アサルト・アーマー》を墓地に……。…って、え!?

「《セブン・ソード・ウォリアー》は1ターンに1度、自身の装備カードを墓地に送り、相手モンスター1体を破壊する。終わりだ、クリアウイング！」

その瞬間、赤紫色の光を纏った《セブン・ソード・ウォリアー》か

ら強烈なエンジン音が走ると、残像を残しながらの高速移動でクリアウイングに肉薄。それは、まるでト○ンザムのように。

「ナーガちゃん、駄目です！ その効果を使つては」
私は叫びましたけど、すでに遅く。

「斬り捨て御免！」

ナーガちゃんが叫びセブン・ソードは両腕に剣を1本ずつ握り、同時に振り下ろします。

先輩が「にやつ」てなったのが見えました。

「クリアウイング・シンクロ・ドラゴン」第二の効果。1ターンに1度、フィールドのレベル5以上のモンスター1体のみを対象とするモンスターの効果が発動した時に発動。その発動を無効にして破壊する」

直後、再びクリアウイングの翼が光ると、セブン・ソードを覆う赤紫色の光がかき消され、クリアウイングの全身から放たれた光に撃ち貫かれ破壊されます。

「……な、なにつ」

呆然とするナーガちゃん。対し先輩は涼しい顔で、

「で？ まだ何かある？」

「……。………ターン、エンドだ」

悔しそうに、ナーガちゃんが言った所を、

「了解。じゃあ私のターン、ドローして《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》で直接攻撃」

フィールドを使わず、先輩はサクッと、とどめを刺しました。

ナーガ LP1500↓0

ナーガちゃんのライフが0になり、彼女のリタイアが確定したとほぼ同時に、

「沙樹ちゃん先輩、沙樹ちゃん先輩、この子すごい強かったけど何とか迎撃に成功したよん」

と、飛奈さんが地津ちゃんを引っ張って現れ、

「私も終わったわ」

弓美先輩が金玖ちゃんを連れてやってきました。ふたりとも意識はありません。

「そんな」

ふたりまでもやられるなんて。となると、残すは董さんとデュエルしてるメールちゃんだけですけど。

ここで《ワーム・ホール》が開き、意識のないメールちゃんの髪を引っ張って董さんが現れました。

「三人ともお疲れ様。ちゃんと勝てたみたいね」

先輩がいうと、

「ううん。私は負けちゃった」

と、董さんはいって、

「だから、木更ちゃんたちと合流しようとしたこの子を後ろから」

「リアルファイトで殴り倒したと」

先輩の言葉に董さんはうなずきます。見ると、メールちゃんの顔や腕の痣が更に増えてます。これはよくある後頭部をトンではなくポッコボコに殴ったのでしょう。すでに「瞬〇殺っぽいこと」をされた後だというのに。

といいますか、これって大丈夫なのでしょう？ 命に別状ない程度に加減してあるようには見えないのですけど。

「あの、デュエルで勝ったのにリタイアさせられるのはどうかと」

自分もハングドとはいえ、さすがにどうかと思って訊ねてみるものの、

「ファイル失った相手に倒されるほうが悪いわ」

と、先輩。

「後は水姫、彩土姫、冥夜だけか」

ナーガちゃんが言います、けど。

「三人はすでに」

「そうか」

私の返事に、落胆します。

先輩はいいました。

「つまり、残念だけどあなたたちはナーガちゃんの敗北をもって全

滅って話」

「ッ……いや、まだまだ！」

少しの間した後、ナーガちゃんがいいました。

「デュエルはメールが勝ったのなら起こせばいい、それに木更姉さんも救出すれば」

「残念だけど」

先輩はいい、直後腕からワイヤーを放ち、ナーガちゃんを拘束。

「それはさせないって話だから」

続けて先輩は意識のないメールちゃんに強制デュエルをし、デュエルディスクを操作してサレンダーさせてファイル抜きも完了。さらに亀甲縛りまでされてしまいます。

「はい、改めて終了よ」

「くっ」

今度こそ、ナーガちゃんは諦めるしかありませんでした。

いつの間にか双庭さん姉妹の手によって地津ちゃんも金玖ちゃんも全身拘束されて、この場の5人が全員たとえ意識があろうとも動けない状態に。悪あがきする余地もなく万事休すです。

「あれ、そういえば沙樹ちゃん先輩？ 依頼人のかすが店長は？ どこにも見当たらないんだけど」

飛奈さんが訊ねます。どうやら彼女も知らない模様。

「ああ」

先輩はうなずき、

「押し入れに隠れて貰ってるわ。脅威は全部対処したから、報告兼ねて確認して貰ったほうがいいわね」

と、先輩は押し入れの戸をトントン。

「店長、お仕事終わったからそろそろ出て来てくれる？」

しかし、奥からの反応は全くありません。

「あれ、店長？」

首をかしげながら、先輩は戸を開けます。

そこで見たものは。

顔の腫れあがったかすが様。

意識はすでになく、下半身を脱がされ、その上に深海ちゃんが跨り。
……えっと、その、ズコバコ真っ最中。

逆レ○プの現場がそこにありました。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

この場の意識ある6人、全員絶句。そんな私たちに深海ちゃんは気付くと。

「あ、鳥乃さんお疲れ様です。申し訳ありません、厄介事に付き合わせてしまつて」

なんて、腰を打ちつけかすが様を求め続けたまま、いつもの微笑んだ顔で、いつも通りのテンションでいいます。

私たちは、全員叫びました。

「何やってんだミカア！」

「ミカア！」

「ミカア！」

「ミカア！」

「ミカア！」

「ミカア！」

私たちは藤稔親戚一同は、全員忘れていたのです。

深海が私たちを迎撃する側である以前に、彼女も立派な争奪戦の参加者だったことを。そして、彼女は過去の争奪戦においてもフライングや奇襲、ルール違反の常習犯だったことを。

——藤稔 ナーガ：リタイア

——藤稔 地津：リタイア

——藤稔 金玖：リタイア

勝者：藤稔 深海

こうして、私たちの長い長い旅行は終わりを迎えました。

この3日間の中に、私たちの関係は大きく変わって、かすが様を中心に様々な勢力図が入り乱れる形となり、恐らく私たち10人が無邪気な笑顔のまま一同に会することは、もう二度とないことでしょう。それでも。

私たち親戚の絆は、深海ちゃん金玖ちゃんを含め、変わらず、そこにあり続けることでしょう。

かすが様への愛がある限り。

MISSION 21―絶対正義（ジャスティス） VS
絶対正義（ジャスティス）

私の名前は鳥乃トリノ 沙樹サキ。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「なんか疲れたわ。突かれてはいないけど」

三連休が終わって平日。

私と梓は、旅行3日目には参加せず丸々一日休みを取らせて頂いた。特に私は件の争奪戦の後、双庭姉妹を自宅警備員（ニートではない）に雇って、この業界上常に警戒しなければならぬ就寝中の暗殺や襲撃から護って貰い、ぐっすりと休ませてもらった。

もちろん、疲れが取れたら、というか雇って自宅に招いた瞬間からレズ3Pに及ぶ気満々だったのだけど、残念ながら失敗。争奪戦の迎撃自体、直前まで梓のハンマーで昏倒してた体だったので、ガチで体力が限界迎え、靴を脱いだと同時に倒れてしまったのだ。

そんなわけで連休最終日を殆ど意識のない状態で過ごしての登校である。もちろん、現在の場所はいつものように教室だ。

「うん。疲れたよねー」

一方の梓は、まだ多少疲れを残してはいるのかもしれないけど、私の目からは体調良好に映る。ただ。

「突かれてはいないのにね」

「そうだねー」

「突かれて」

「ないのにねー」

梓は机に突っ伏し、べたーとだらける。

（反応してくれない）

私、いま思いつきり下ネタ言ってるのに、気づいてとばかりに何度も言ってるのに。

「梓。気づいて」

「気づいてるよ。ただ突っ込む気力がないだけー」

だそうだ。

「突っ込むナニかは無いけどね、お互い」

「沙樹ちゃん、子守唄歌って？」

やっぱり反応する素振りはない。ただ、どうやら梓はいつもより機嫌がとて面白いように映る。

(梓、どうしたの?)

って、私は一度訊ねようかと思ったけど、やめた。

障らぬ神には違うけど、下手に追及してせつかくの機嫌を台無しにするわけにはいかない。触れて欲しかったら、梓は自分から喋ってくれるだろうしね。

「〜♪」

私はGet Wild (シティーハンターのEDソング)をゆったりとしたバラード調に即席アレンジし、子守唄代わりに唄いながら梓の頭をやさしく撫でる。

「えへへ〜」

梓はとても幸せそうな顔をしていた。

「というわけで、欲求不満だからちよつと脱いでくれる？」

とところ変わって放課後。

私は現在、一昨日ぶりに神簇家の応接間へとお邪魔していた。といっても、用事があるのは神簇姉妹ではないのだけだ。

「テメエ仕事の依頼人を何だと思ってやがる」

今回の依頼人、絶対正義^{ジャスティス}シュトゥルム・ハイツヴァイテ (通称シユウ) は半眼で私を睨む。

私は、質問に対して腕を組み、わざとらしく考える素振りをみせてから、

「身内？」

「酷エ身内待遇だなおい」

シユウは呆れながら、

「依頼するとき、担当は鳥乃以外でとか付けとくべきだったぜ」

「そうね。付けない限り、今後予定が開いてる限り私が来るからその

つもりで」

「なんでだよー！」

「手を出したいから」

のたまいながら、私はシユウをガン見で視姦する。

癖毛の入ったワイルドなセミシヨートヘアに、勇ましい顔立ちのイケメン顔。胸も控え目、それでいて背丈は程々程度なのがかっこ可愛い。

前回視姦したときはライダースーツ姿だったけど、今回は私とは別の高校の制服姿。そのため、前より女の子らしく見えるのが二度おいしい。

「だから何で毎回会う度そんな事考えるんだよテーマは」

すでに疲れきった顔でいうシユウに私は、

「ん、レズだから」

「レズが全員煩惱だけで生きてると思うなよ」

と、こっぴど。

「失礼致します。お茶が入りましたので、こちらに置かせて頂きますね」

お茶を淹れてくれたアンちゃんが入ってきて、私たちの席にそれぞれ湯飲みとお茶菓子を置く。なお、乗ってるのは車椅子ではなく《ギミック・パペット―死の木馬》。最近知ったのだけど、リハビリの一环として動く乗馬マシン感覚で使ってるらしい。

「ありがとう、アンちゃん」

私はいいながら、おもむろに着物の襟に腕を突っ込み、アンちゃんビッグボインを驚掴み。

おおっ！ さすが和服、ノーブラって話じゃない。

「ひあっ」

アンちゃんから可愛い声が漏れる。私は躊躇い無く堂々と揉み揉みしながら、

「神簇と違ってアンちゃんは本当気が利くって話よね。シユウもそう思わない？」

もみもみ。

「んっ」

「否定はしねえが、何故堂々とセクハラしてんだよ」

もみもみ。

「あん」

「ん、レズだから」

もみもみ。

「んんっ」

「またその理屈かよ！ ていうかいつまでやる気だ！」

シユウは一回席に立つと、私をアンちゃんから引きはがそうとする。

「ちよ、いい所なのに何するのよ」

「いいから離れる、この変態！」

そのまま、おっぱい揉んでた手を掴みあげられた私は、もう片方の腕を今度はシユウのスカートの内側に。

「ななっ」

驚くシユウを尻目に私はさらにパンティの内側に手を突っ込み、美味しそうな尻を撫で撫で。

「な、何しやがんだテメー！」

てつきりポッコポッコに殴られると思ったのだけど。

シユウはまず、私を突き飛ばす。まあ、そこまでは予想通りの暴力。しかし、その後シユウは部屋の隅に逃げてガタガタ震えだしたのだ。なにこの生き物、可愛い。

「で、では私はこれで失礼致しますね」

一方、私から解放されたアンちゃん、顔を赤くしたまま一回ペコり。そそくさと出て行ってしまった。

「ごめんごめん、しばらく手は出さないから戻ってきて」

私は手招きするも、シユウは首をぶんぶん振って、

「そういつてやるんだろテメエ」

「しないってば。レズとしてもそういう性的抜きに可愛い怯え方は不本意なもの」

「なんだよその理由は」

「ほーらシユウ太郎、お茶菓子あげるからおいでおいで」

「アタシは犬じゃねえ！」

と、噛みつくように吠えるシユウ、マジわんこ。

「てか、ホントーに何もしないんだろうな」

震えながらギロツと睨みつけるシユウに、私は「当然よ」といった。

「安心して。エロい目で眺め続けるだけだから」

「やっぱやるんじゃないか!!」

そこへ。

「まあまあ落ち着いてくれないか」

と、誰か（というかアインス）が私の後ろに立ち、私の服の内側に腕を潜り込ませる。

「ひあつ」

変な声が出てしまった。その間にアインスはブラをめくりあげ、さらにパンティの内側にも腕を突っ込み遠慮なく胸と尻を同時に触ります。

「な、ちよつ、何するのよ！」

私は振り返りつつアインスを突き飛ばし、部屋の隅に逃げてガクガクブルブル。

「いや何、シユウたちがされたことを君にも経験して貰っただけさ。とおりののおく」

また *Infinite Force* とかいうネタの喋り。番組はもうとつづくに終わりブームも殆ど起きず終いだっただけなの。

下がスカートの執事服に身を包み、髪を縛りショートにみせたヘアスタイル。こちらも中性的でイケメン顔の女性だが、シユウが少年のようなボーイッシュシユウなら、彼女は宝塚寄りと属性が違う。背はシユウより高く、逆に胸はシユウより更に無い。

「で、何の用事よアインス」

私が警戒心丸出しで訊ねると、

「そうだね。まずは隅で震え噛みつくように吠える、まるつきりシユウと同じ反応している君に、可愛い子猫ちゃんと愛でつつ、やんわり突っ込みを入れたい所だけだ」

「しようがないでしょ。私、攻めるのは大好きだけど攻められるのは苦手なのよ」

「ふふっ、知っているさ」

言いながらアインスは怯える私の前に立つと、私の手を引き腰に腕をまわし、

「だからこそ君が愛おしい」

と、まさに王子スタイルの抱き寄せ方を。

私はアインスの顔面グーで殴り、

「悪いけど趣味じゃないし、そういうキザだったらしい所むしろキモいから」

「おやおや相変わらず手厳しい」

殴られた箇所を手で覆いながら、しかし「やれやれ」とポーズを忘れない王子様(♀)。

私は、いまのうちにもう一度距離を取りつつ、

「で、もう一度聞くけど何の用事よ。いまはシュウと依頼交渉の真っ最中よ」

「そのシュウの助け船に決まってるじゃないか。このままだと本題に入る前に破断になりそうだったからね」

「なるほどね」

だからと介入した結果、状況がさらにカオスになったことは突っ込まないでおく。

「というわけだ。シュウも鳥乃も一旦席に戻ってくれないか？」

アインスの言葉に、私は従い席につく。けど、シュウははまだ震えたままで、

「どうしたんだい、シュウ」

アインスが訊ねると、

「信用も安心もできねえ」

と、シュウは私だけでなくアインスまで警戒丸出しでいった。

「だってそうだよ。アインスが救済に入った所で現状危険人物がひとり増えただけじゃねえか」

確かにね。私はシュウの言葉に同意しうなずく。

「心外だね」

アインスは、これまたキザったらしく自分の髪をはらって、
「私が妹に手を出さないことは、もう既に理解してもらえたと思っ
ただけだ」

「昨日、フィーアの裸を褒めて口説いて一緒に風呂入った奴の言葉
を信用しろと」

うわ。

「アインス、あなたロリコン？」

「それこそ心外だよ、鳥乃もシユウも」

アインスは微笑んで、

「私は老若男女問わず愛せるだけだよ。それに妹に綺麗だと言って何
が悪い。やつとあの子と家族らしい事ができたんだ。舞い上がって
口説く位、おかしい事では」

「おかしい」「おかしい」

即答する私とシユウ。

「……。……………そうか」

アインスは反論に反論で返すことなく、むしろ反応されしよんぼり
しながら、

「分かった。ならせめてシユウはこの席から交渉に参加してくれ。安
心してくれ、私と鳥乃がたまに視姦に及ぶくらいだ。手出しはさせな
いよ」

「その視姦だけで十分アウトなんだよ！」

と、叫ぶシユウをアインスは無視し、

「さて。さすがにそろそろ本題に入ってもいいかい？」

真面目な顔で、私に訊ねるのだった。

「シルフィを迎え入れたい？」

というのが、今回シユウからの依頼だった。私が訊ね返すと、アイ
ンスは、

「ああ。元々ハイウィンドは私たち姉妹が家族として居られる場所と
して結成して貰った組織だからね。フィーアの問題が大体解決した

今、次のステップに入りたいんだ」

と、言うけど。正直私は思った。

「本気？・むしろ正気？」
って。

だけどアインスは、

「勿論、本気で正気さ」

「けど、あのシルフィよ？ 私も過去に仕事で関わったけど、あの子って病的なレベルで勸善懲悪な潔癖症じゃない」

「そうだね。だから断られたし、シユウとも一度絶縁した」
「なら」

「だけど、彼女だって大事な家族なんだ」

と、言いきる。

「現在のシユウとシルフィの関係は？」

私はふたりを交互に見て、訊ねる。

「だから、お前に依頼したんじゃないか」

シユウはいった。ああ、その言葉を聞くにまだ駄目なのね。私はそう受け取るも直後、

「結果的に鳥乃のおかげで仲直りできたからな。協力を頼むならお前しか無いと思ったワケだ」
って。

そんなシユウに続けて、アインスまでもが、

「加えて、鳥乃がいたからこそフィーアが改心してくれたのだからね」

「あれはメールちゃんのおかげよ。私は何もしてないわ」

「いや、鳥乃のおかげさ。君がそれまで動いてくれたから、ここまで最高の結果に辿りついたんだ」

「評価しすぎよ。ふたりとも」

照れくささに耐え切れず、私はアンちゃんが淹れてくれたお茶を一気に呷る。

「まあいいわ。で、具体的に私は何すればいい？」

「請けてくれるのかい？」

訊ねるアインスに、

「期限と報酬次第でね」

私はいった。

「特に後者。シユウを一晩好きにしていいいなら格安で受けるわ」

「うゝおい！」

即、反応して叫ぶシユウ。

「なら、これでどうかな？」

対しアインスは「待ってました」とばかりに用意してた写真ファイルを私に差し出す。

つまり、請けてくれたら報酬に加えようって代物らしい。

「確認するわ」

私は一言断って中を開く。

そこには、シユウ、アンちゃん、神簇の3名が、入浴や着替えをしている所を盗撮した写真がファイルいっぱい飾ってあった。

しかも、シユウと神簇は気付いてない模様だけど、アンちゃんはだけは何枚か明らかに気づいてると思われる写真があり、そのどれもがカメラ目線で誘う素振りを見せてたり、わざと際どいポーズを映されてたり、挙句の果てに最後のページに至っては、モザイクがかかってはいるも、これは明らかにアンちゃんのオ○ニー現場。

「アインス……！」

私が訊ねると、

「もちろん、報酬に出すものはモザイク無しさ。他にリクエストがあったら何でも言って欲しい」

「なら、ご本人と交渉するのは？」

もちろん夜の。

「口説くに最適な、いいBARを紹介するよ」

「交渉成立ね。依頼請けるわ」

私はアインスと熱い握手を交わす。いやあ、頼もしい戦友がいて私は幸せ者って話ね。

「ちよっと待て」

けど、そこで異をとなえたのはシユウ。

「アインス、お前いま何を渡した？」

「いや、特に気にするようなものではないさ」

笑っていうアインス。だけど、

「嘘つけ、モザイクとか交渉とか口説くとか聞こえたぞ？ 絶対ロクなものじゃないだろ」

「ロクなものじゃないって分かってるなら、あえて首を突っ込まないのもこっちの業界では必要なスキルさ」

「姉妹内でそんなスキル使いたくねえよ」

「ごもつともだ。とはいえ、せつかくの代物を台無しにはしたくないので、

「それよりもアインス、シユウ、仕事内容の確認に戻りたいのだけ」と、強引に本題に戻らせる。

「ああ、そうだったね」

でもって、当然アインスも乗っかるので、「おい待てよ」と吠えるシユウは無視され、

「期限はそうだね。もちろん早いほうがお互い助かるけど、現状は特に考えてない。次に具体的に何をするのか、だけ」

「そこまで言うと、アインスはいきなり乾いた笑いを浮かべて。

「すまない。ノープランなんだ」

「……」

私は絶句。とはいえ、まあ可能性としてはあったわけだけ。

アインスは続けて、

「だからこそ、機密情報に触れること聞くけど、鳥乃は以前、任務でネオトヨタシテイカップに出てただろう、シルフィ関係で。その依頼者と連絡をとって貰いたい」

「なるほどね」

この時点で私はうなずく。アインスが知りたいのは、依頼人は誰かとかどういったパイプでシルフィと接触したのか、あわよくば協力を要請できないか。そんな所だろう。

「分かったわ。その情報に関しては、今すぐ教えるわけには行かないけど、元依頼人に協力できないか聞いてみるわ」

「助かるよ」

アインスは、ほっとした顔でいった。その顔から、いきなり私に依頼するほど、ふたりはすでに手詰まりだったのだと確信した。

——同日、夜。

「沙樹ちゃん。こっちこっち」

と、手を振って呼ばれた私は、招かれるままに個室に足を運んで、対面の席に座る。

私はいった。

「島津先生、忙しい所悪いわね」

「いいのいいの、お互い様でしょ」

陽光学園中等部教師、島津しまづ 鳳火先生ほうかと連絡を取った私は、先生の要望で彼女行きつけの居酒屋で会うことになった。

提灯が照らす昔ながらの飲み屋の外観。のれんを潜ると、カウンター席に加えテーブル席が幾つか。さらに奥には戸を閉めることができる個室が二席用意しており、そのうちの二席にいま私たちはいる。

場所は名小屋駅とは別の地下鉄駅の傍。先生の自宅から徒歩で行ける距離なのとか。

「ていうか、今日の沙樹ちゃんすごい大人。どうしちゃったの？」

と、先生がいうように。いまの私は髪を下ろし、木更ちゃんに頼んで軽くメイクも施している。

待ち合わせを取りつけた後、私はわざわざ身嗜みを整え直してきたのだ。

「変装でもないけど、これならワンチャン年齢誤魔化せるでしょ」

なにせ居酒屋で飲兵衛と待ち合わせなのだ。教師が未成年の元教え子に酒を飲ませるなど無いと思うが、冤罪はありえる。たとえ事実無根だろうが避けなければいけない。

「さすが沙樹ちゃん、用意がいいね」

一方の先生は明らかに仕事帰りのスーツ姿。こちらは逆に用意がなさすぎる。この人もしかして学校から一歩出たらかなり駄目人間なのでは？

そこで戸がトントンと叩かれ、

「失礼します」

と、店員が戸を開ける。女性だったけど、恐らく50超えたおばちゃんだった。残念。

「こちら本日のお通しになります」

そういつて店員は、小鉢に入ったもつ煮とお冷を席に並べる。ふたり分出された所から、先生も私ができるまで待つてくれたのだろうか。

「ご注文は何しましょう」

店員が訊ねると、先生は、

「とりあえず生ふたつと、卵焼きに若鳥のからあげそれとサラダ、あと焼き鳥を適当に。沙樹ちゃんは苦手なものはありゆ……ある？」

あ、先生噛んだ。

「そういうのは平気だけど、甘えてもいいなら疲労回復にレバー貰っていい？」

なんて返事した所で私は気付き、

「あ、待つて生ふたつじゃなくて、ひとつはノンアルコールで」

「えー」

「えーじゃない。あ、注文は一旦以上で」

「では、ごゆっくりどうぞ」

店員が個室を離れ、戸が閉められた所で私は呆れ顔で、

「先生……」

まさか本当に酒飲ませようとしてくるなんて。

「せっかく教え子と飲めれると思ったのに」

お子様先生はお冷をちびちび飲む。私はさらにため息混じりに、

「そう見られるのを少しでも避けるために社会人っぽい格好してきたのよ。もし制服なんか着てたら、教師なのに未成年の教え子に酒勧めたって問題になってただけ」

「大丈夫よ。今日の沙樹ちゃんの格好なら」

「とはいっても、私を知る人が見て気づかないほど変装はしてないでしょ」

「ううっ」

「しつかりしてよ。責任のある社会人でしょ」

まったく、どうして教え子が元担任に注意しないといけないんだろう。それも慕ってる教師に。普通逆じゃない？

「だってえ。一度してみたかったんだもの」

先生はしよんぼりしながらいった。

「大きくなった教え子とね。こうやってお店で乾杯するの。それで仕事の話をしたり、悩み相談をしたりね。あれよ、あれ。親が子供と酒を交わすのを夢みるようなものなのよ」

「先生……」

そんな嬉しいこと言われたら叱りきれないじゃない。

結局、この人はとことん生徒想いで、教え子が可愛くて仕方がない人なのだ。今回はその想いが悪いほうに出ちやっただけ。

「悪いわね。私は、いまからが仕事なのよ」

だからもう、私はこうとしか言えない。

「そっか」

そして相手は私より立派な社会人。仕事を理由に出されると、それ以上文句をいえなくなる。

「大丈夫よ。先生が飲むのを止める気はないし、何なら飲み潰れたら送ってあげるわ」

「ありがとう。沙樹ちゃんのやさしさが身に染みりゆう」

寂しげに、だけど笑ってみせる先生。今度は、ちゃんと一緒に飲んであげよう。

程なくして、席には注文した品々が並べられた。私はグラスに瓶のノンアルコールビールを注ぎ、先生はジョッキを持って、

『乾杯』

と、カツンする。先生はそのままジョッキの中身を一気に飲み干し、

「ぶはあっ」

なんて、見た目に似合わぬ親父臭い声を出し、

「やっぱり、仕事終わりの一杯はこれに限るよねー」

とかいいながら早速ビールのおかわりを注文。

「飲みっぷり凄。ちゃんと舌が回る程度にはセーブしてくれると嬉しいんだけど」

私は言いながらサラダを小皿に取り分けて、先生に「はい」する。「いい歳の社会人は、飲まなくちゃやっていけないの。あ、ありがとうー」

小皿を受け取りながら先生はいった。

「それで沙樹ちゃん。用事って？」

「あ、うん。まあ事前に伝えた通り今回の依頼で先生の力を借りたくて」

私はノンアルビールを飲みながらサラダをぱくり。

「まあ、言っちゃえばシルフィ関連」

「あゝ」

だよねー。なんて顔しながら、先生は卵焼きをもぐもぐ、さらに焼き鳥を一串、手元に。

「とりあえず、シルフィちゃん自身はいまの問題は起きてないよ。シユウちゃんとも学校のお友達とも仲直りして、すっかりいつも通り」

「それは良かったわ」

ここで問題が起きてたら依頼以前の問題だものね。私は焼き鳥のレバー串に齧りついて、

「今回の依頼人は、まさにそのシユウよ。ファイアの凶行も落ち着いた所で、どうやら、そろそろ本格的にハイウインドにシルフィを迎え入れたらしいわ」

「あゝ」

と、再び先生はいった。けど今回は「ついにきたかー」という顔をして。

「それを私に協力して欲しいって？」

「まあ。先生へのパイプをあてに依頼がきたようなものだし」

「断っちゃ、だめ？」

しなを作ったように可愛い声で、先生はいった。

「ま、そういう反応がくるわよね」

分かってましたとも。私はグラスのノンアルビールを飲み干す。「やっぱりねえ、先生としては、あの子のことはそっとしておいて欲しいなあって。やっと落ち着いたばかりなもの」

「もし何かあればご家族に伝えないといけないだろうしね」

私がいうと、

「あ、ううん。ご家族は大丈夫だと思う」

「ああ、そういえば無関心な親だっけ、娘に」

「うん」

先生はうなずいた。

「実は、私もまだ会ったことがないのよシルフィちゃんのご両親。信じられる？ 1年の頃から担任なのに、未だによ？ 沙樹ちゃんのお母さんでさえ三者面談には来てくれたのに」

「もつとも、私の親は正規の面談の日には来れないって言って、勝手に時間を指定して先生振り回したけどね」

「それでも来るだけずつとマシよ。シルフィちゃんの所は来ないんだから」

ぶんぶん怒る先生。これは相当立腹してるのが分かる。ここで追加のビールがきたので、先生は憤懣の勢いでジョッキの中身を半分にし、

「シルフィちゃんね、結構な豪邸に住んでるのよ。だけど一人暮らし。お小遣いは沢山貰って、それで生活費をやりくりしてるみたい」

「それは私も同じだけど。豪邸には住んでないけど」

「甘い！」

据わった目で先生はいった。

「一応帰ってくる頻度は沙樹ちゃん所のお母さんよりは多いみたいよ？ でも、いつ帰ってくるの報告もなし、帰ってきてもただいまおはようの挨拶なし、食事は基本娘を家に残して外食、お土産もなければ話しかけても適当にあしらひ、自分たちが家にいる時にシルフィちゃんが友達を呼んだら追い出し、そのくせ両親は沢山友人を呼ぶみたい。どう思う？」

「それ、娘じゃなくて別荘の管理者じゃないの？」

「管理者相手でも、もう少しいい対応するわよ」

確かに。

「これで検査結果でも血縁関係がはっきりしてるっていうんだから、酷い話よ。あ、次はハイボールで」

まだ飲むらしい。

「あのー先生そのくらいにしておいたほうが」

私はいうも先生は、

「大丈夫よ。むしろいまからが本番でしょ？」

「いまからって。それじゃあ、いままでは？」

「食前酒？」

「……」

頭が痛い。先生のことは尊敬してるけど、ことお酒に関しては大人になってもこうはなりたくないものだ。

「あー。シルフィちゃんの家庭考えたら全然大丈夫じゃなさそうに感じてきちゃった」

膝をつき、半分突っ伏したような姿勢で店員から受け取ったハイボールを飲む先生。ここだけみると、すでに泥酔状態だ。

私は、「失礼しました」と戸を閉めようとする店員のおばちゃんに、

「あのー。この人いつもこう？」

と、先生を指して訊ねる。

「ええ」

おばちゃんはうなずいて、

「今日はいつもより少し早いですけど、大体こんな感じですね」

……うわあ。

改めておばちゃんが戸を閉めた所、

「言わせないよ」

さらにヤバイ目つきで先生はいった。

「え、なに？」

気押されながら私が訊ねると、

「そんなの決まってるでしょ。お酒はこのくらいにー、とか、もう少し

楽しい飲み方しろー、とか、セーブしろー、とか」
「う」

確かに、凄く言いたかった言葉ではある。

「今日は飲むのを止めないし、最後まで付きあってくれりゅんでしょ」
ああ、かつての自分の言葉が首を絞めてくりゅー。

「あのね沙樹ちゃん！ 教師って大変なのよ？ ただマニュアル通りに生徒に勉強を教えるだけじゃないの。受け持ったクラスだけじゃなくて、校内全員ひとりひとりの精神状態とか問題が起きてないか考えて、その上で自分のクラスの子たちを息子や娘のように大事にしてみんな臨機応変に接しないと駄目。いまの時代、親の愛を知らない子とか偏った親の教育で育った子本当に多いの。だから時に母親のように包みこんで、時に父親のように厳しく。でも体罰は駄目、トンと触っただけで毒親が押し掛けてくりゅーから！ それとね、実は部活の顧問って利益一切なしのボランティアなのよ。もちろん分かってやってるから給料目当てな筈はないんだけど、それでも休日出勤とか強いられるから、外に出れないのよ。出会いがないのよ。教え子たちはどんどんカップル作って、この前なんて放課後教室を覗いてたらクラスの子同士でやってたのよ。中学生よ、それも2年生！ 私なんて男の気配全く無いのに。ねえ聞いているの？ 私もう27なのよ。このまま彼氏ができなかつたら行き遅れ街道一直線じゃない！ ねえ沙樹ちゃん、いい男紹介してえ、ねえってばあ」
この日私は、ノンアルビールで悪酔いする程、先生の愚痴を聞かされた。

翌日、時刻19:50。

私は再びハイウインドと打ち合わせをすべく神簇家に足を運んでいた。
ただし。

「初めまして、シルフィードの担任で、先日彼女とハンドグドを仲介した島津 鳳火です」

と、このように先生も一緒である。昨日結局飲み過ぎて足がおぼつ

かなくなつた先生を家まで送り届けた際、先生のほうから要求してきたのだ。いまからハイウインドに会わせろと。

しかし、当時先生はろれつも回りきらない凄い状態。私は一旦断り、明日行こうと伝えたわけである。で、酒の勢いもあったら、冷静になつてキャンセルとか覚えてないってパターンもあると思ひ、今朝電話で確認を取つた所、案の定記憶を飛ばしていたが、改めて「行く」と返事をもらったのだ。

「初めまして、ハイウインド第一司令、神簇 琥珀です」

「同じく第二司令、神簇 アンです」

神簇とアンちゃんは、それぞれ先生に頭を下げ、

「ご無沙汰してます先生。改めてハイウインドのリーダー、プリンセス「王子」アインス・ハイです」

アインスが續くと、

「ジャスティス「絶対正義」 シュトウルム・ハイツヴァイテ、通称シユウです」

「スロター「処分人」 フィーア・ヴィルベルヴィントです」

と、ふたりも挨拶。

ところで、アインスだけはご無沙汰と口にしたように、彼女と先生は初対面ではない。

このアインス。実は陽光学園の生徒で、私と同じ中等部の卒業生で現在も同じ校舎の在校生なのだ。だから、全学年の家庭科を担当する先生とは当然面識があるのだ。

「久しぶりねアインスちゃん、まさかこんな所で再会するなんて」

「こちらですよ。まさか件の依頼者が島津先生だったとは思ひませんでした」

「元氣？」

「おかげ様で。先生もお変わりなく綺麗なままで、元氣そうだなによりです」

「もう、相変わらずなんだから」

と、先生は久々の卒業生との再会を喜ぶ。

「あ。そうそう神簇」

私は一回先生を尻目に見てから、悪友にいった。

「こんなちびっこ先生だけど、この人私の中学時代の担任で恩師だから、虐めたら二重の意味でFuckと覚悟しといて」

「虐めないわよ。徳光さんも貴女も、いつまで私をその認識でいるのよ」

げんなり顔でいう神簇に、

「仕方ありませんよ、姉上様」

アンちゃんがうふふと微笑んで、

「虐め被害者の傷は一生モノですから。加害者は絶えず暗い夜道を気をつける覚悟でいて下さらないと」

否、黒い笑みを浮かべていった。本当にこの子は、改心しても邪悪な所が全然変わらない。

「と、とりあえずさ本題に入らないか？」

そんなアンの黒々とした何かに耐え切れず、シユウがいうと、

「そ、そうね。アインズ本題に」

と、同じくいまのアンから逃げ出したいだろう神簇がアインズに指示。君、交渉決裂レベルの地雷抱えてるしね、梓を虐めた経験者っていう。

「分かりました。では、早速本題に移らせて頂きます。先生」

アインズはいった。

「すでに鳥乃さんからお聞きされてると思いますが、私たちアインズ・シュトウルム・フィーア、そしてシルフィの四人は同じ男と父とする異母姉妹です。当時我々は互いに認知していなかったのですが、自分に姉妹がいることを知った私とシュトウルムが家族の搜索の為に裏稼業へと進み、その結果いまに至ります」

そこまで言うと、アインズは続けてシユウを手で指し、

「シルフィの家庭状況は、こちらのシュトウルムを介して多少は認知しております。彼女が家族とうまくいってないことも。だからこそ、より私たちはシルフィを家族として迎え入れ、同じ屋根の下で支えあう関係になりたいと考えております」

「そういえばアインズちゃんのお家も」

先生が呟くと、

「はい。先生のお世話になっていた在学当時は母と義父、種違いの妹弟と暮らしておりましたが、厄介者と扱われておりました。高校入学の際に家を出まして、いまは神簇家でシュウ、フィーア同様にお世話になっております」

知らなかった。アインスがそんな過去を持つてたなんて。

続いてシュウが、

「アタシも大体アインスと同じだ。フィーアに至ってはドイツの孤児院で戦闘装置として育てられてた」

「戦闘装置？　こんな小さな子が」

私から一度聞いてはいたはずだけど、それでも改めて耳にした先生は、顔を悲痛に染める。

そしてシルフィ。

彼女の父が、実の父なのか母の再婚相手なのかはまだ知らされてない。ただ、どちらにしても現在置かれてる環境は、たったいまアインスとシュウが口にしたふたりの家庭とほぼ同じなのが分かる。その苦しみを知るふたりだからこそ、フィーアの問題が解決してすぐシルフィのために動きだしたのだろう。

アインスとシュウが頭を下げた。

「お願い致します先生。シルフィを私たちの家族として迎え入れる為に、どうか力を貸してください」

アインスの言葉に、先生は。

「言いたいことは分かりました」

と、いった。

「確かに私も、いまの家にいるよりアインスちゃんたちと暮らしたほうがシルフィちゃんも幸せだとは思わわ」

「なら」

と、期待の眼差しを向けるシュウに、

「でも、優先すべきはシルフィちゃんの気持ちよ。いくら私たちがシルフィちゃんの幸せを想っても、本人がいまの暮らしを望んで、みんなを受け入れる気がない以上、私は先生として教え子の気持ちを優先したいの」

「そうですか」

アインスの視線が下向く。半ば分かってたのか落胆という程でもなかったものの、多少のショックは見てとれた。

「構いません」

そんな空気の中、動いたのはなんとフィーアだった。

「その意向のまま構いませんので、何かひとつでも私たちの支援をして頂けませんか？」

「フィーア……」

驚いた様子でアインスが訊ねると。

「私も、家族を護り大切にしたい気持ちは変わりません。そんな私たちが八方塞がりなら、どんな形であれ貴女から出来る範疇の支援を頂くことが最適だと判断します」

変わったな、この子。私はらしくない感動を覚えつつ思った。

いや、むしろこれが本来、彼女のあるべき姿なのかもしれない。いままでだって、思えば全て家族のために殺処分に出たらしいしね。「わかった」

先生は、やさしい声でいいながら少しかがんでフィーアと視線をあわせる。

「なら、シルフィちゃんをお家に入れる手助けはできないけど、フィーアちゃんたちとお友達になるお手伝いならしてあげる」

「感謝します」

頭を下げるフィーア。先生はにっこり微笑んで「いい子いい子」し、「しつかりしてる子ね」

「ええ」

アインスは慈愛の目でフィーアを見て、

「私たちの自慢の妹です」

「限度を知らない所を除けばな」

と、シユウも同じ目で、

「……ホント、問題児だったのにたった1日でアタシより立派になりやがって」

と、呟くのだった。

ところで、私の家も1年に数回か母が帰ってくるものの、基本的にひとり暮らしではある。

最近では木更ちゃんや給湯等々するハングドで食べることが多いのだけど、どうしても仕事で寄る必要のないときは自宅で食べるしかない。

翌日、放課後。

私は近所のスーパーマーケットでシルフィとぼったり会った。

「あ」「あ」

誰が先とは言わず、意図せず目があつた私たちはそれぞれつぶやき、

「シルフィちゃん」

私が改めて呼んだ所、シルフィは視線をそらし、露骨に機嫌悪く横切ろうとする。

「ちよつと、待って」

更に呼ぶと、シルフィちゃんは足を速めようとするので、

「待ちなさいって」

と、私は彼女の肩を掴んだ。

「あなたとお話することはありません」

顔を向けずツンとした態度でシルフィはいう。

「そっちにはなくても、私にはあるんだけど」

「知りません」

「結局、人に物を頼んでおいてありがとうのひとつも無かったでしょ、君」

「請けてもらった時に言いました。それに、私だって嘘ついた謝罪を聞いてません」

そういえばそうだった。先生に謝罪の伝言を伝えなければいけなかったのに、私はつい忘れていた。

まあ、下手に伝言を伝えて先生との間に溝ができるのを避けてたつてのもあるけど。

「悪かったわ。嘘ついてごめんなさい」

私はしっかりと謝った。本人はこっち見てないけど、小さく頭も下げた。

「……」

シルフィから反応が止まった。さて、どう動くだろうか。

なんて考えていた所、私の手を振り払い、何一ついうことなく彼女は行ってしまった。速足で。

そのせいかな、

「わっ」

横から現れた杖で歩く老婆と衝突。老婆はそのまま尻餅をついて倒れてしまった。

「痛たた……ちよつと、前向いて歩きなさいよ」

老婆はシルフィに注意する。余程痛いようで声はかすれ、脂汗が滲んでいるのが映る。しかし、シルフィはそっぽを向いて歩きだしてしまっただけだ。

まるで注意されたことが不快で、拒絶するかのよう。

「大丈夫ですか？」

私は、シルフィのかわりに老人に駆け寄り、介抱に入る。

老婆は骨折で病院に運ばれた。

「そんな事が」

同日。現在時刻22:30。

私は報告と今後の相談がてら、先生の自宅にお邪魔していた。本当なら夕食時に行く予定だったのだが、先生が急遽残業で21時頃まで仕事をする事になってしまい、だからひとりで夕食をと思っていたら、私も老婆を救急車で運び何だかんだでこの時間になってしまったのだ。

「被害者は訴える気がないから良かったものの、一歩間違ってたたら大変なことになってたわ、実際大事には至ったし」

私というと、先生は、

「ごめんね。あの子のせいでごたごたに巻き込んだじゃって」

と、いいながらコンロをふたつ使い、卵焼きとウインナーと野菜の炒め物を同時に作る。先生も夕食はもう済んでるはずだけど。

「私はいいわ。謝るなら骨折れた老人に謝って、先生にはそんな責任なにひとつないけど」

私はいい、

「よね」

と、横に振る。

実は、この場にいるのは私と先生だけではない。

「その通りです先生。妹がすみませんでした」

「あいつ、何やってんだよ」

アインスが頭を下げ、シユウは頭を抱える。現在、先生のご自宅にはこの3名でお邪魔していた。

「なんだか、思い出しちゃうな」

卵焼きと炒め物を大皿に盛り付けながら、先生はいった。

「まさか、過去にもなにか？」

私が訊ねると、

「ううん。沙樹ちゃんのことよ」

と、先生。

「私？」

「覚えてないの？ 沙樹ちゃんもお年寄りとぶつかって大変な事になっちゃったでしょ」

「ああ」

そういえば、あったあった。

「確かあの時の沙樹ちゃんも中2だったよね？」

「あ、本当じゃない」

なので、確か3年ほど前の話になる。

私の場合はスーパーではなくコンビニだったけど、同じように男性の老人とぶつかって転ばせてしまった。しかも「どこ見てるんだ」と怒声をあげられ、イラつとした私は無言で立ち去った。その後、別の人が「大丈夫ですか」と老人を介抱しようとした所まで似通っている。

ただ、シルフィの件と大きく違うのは、その介抱した人が、こっそり老人の財布を盗んでた所だ。私は窃盗の現場を偶然見てしまい、防犯ブザーを鳴らして店員を呼び、窃盗を報告した。最初は逆に私が老

人に疑われたが、当然犯人のバッグに老人の財布が入ってた為に現行犯逮捕。確かそのときも結局、最後は私が動けない老人のために救急車を呼んだのだった。

「まあ、だからぶつちやけシルフィの気持ちは少し分かるつもりよ」

私はいった。するとシユウが、

「シルフィは、小さい頃から人より体の成長が早かったからな。おかげで相手からぶつかられて逆に相手が怪我して、シルフィがぶつかって怪我させたって間違われたこともあったな」

加えて、過去の依頼の際に先生から、デカ女って虐められたとも聞いたことがある。しかも見た目白人でモデル体型だから、女性からは嫉妬込みで。おまけに完全な日本育ちで英語もドイツ語も喋れないから偽物扱いさえ受けてたって。

「だから、あの子は段々人を許せれなくなり、みんな敵に見えるようになった。……私は前の依頼の際にそういう情報を手に入れてるけど」嫉妬に怨恨、馬鹿にもされ、そう思うとまるでアンちゃんレベルで酷い人生だ。でもって、アンちゃんとは別の方向に歪み切ってしまった子なのだろう。

シユウはうなずく。

「その通りだ。でもよ、自分からぶつかってにおいて、体の弱い老人まで無視する奴だとは思わなかったぜ。しかも骨折させたんだろ」

「攻撃されたのよ。シルフィの中では」

私はそう返す。

「そのお婆ちゃんに叱られたって言ったでしょ。その時点でシルフィにとつては虐めの加害者と同じカテゴリなのよ。自分を虐げる人、悪意を持った人って感じでね」

「ッ」

シユウにも心当たりがあるのだろう。顔が苦みで歪む。

「加えて、私はぶつかってない、ぶつかったのはこの老婆、勝手にぶつかって責任をなすりつけてきた。私は正しい、悪はあっち。ほら、これでシルフィの心の傷は少し楽になったでしょ？」

「おい、おい、なんだよそれ」

そして今度は憤りを抑える顔に。

「それは、やっぱり沙樹ちゃんの経験？」

先生がテーブルに料理の乗った大皿を置いた。そこには、作りたての卵焼きや炒め物に加え冷凍の唐揚げまで。

「まあね。けど、みんなには悪いけど大方合ってると思うわ。だって、こんなの私やシルフィだけの話じゃない。ありそうな『人のせい』のパターンのひとつでしょ？ 程度の差はあれシユウやアインス、先生にだって一度は経験してるって話」

「確かにそうだ」

納得するアインス。

「でもよ」

と、それでも納得しないシユウに、先生はいった。

「まあ人間の感情なんて、分析しちやえば見苦しいものばかりよ。でもね、人間には同じくらい綺麗な面も持ってるの」

先生は、続けて四人分の小皿と割り箸を並べて、

「今回のシルフィちゃんだってそう。あの子はそうやって心を護ったの。悪い事は大嫌いな子だからね。たぶんきつと目を逸らさず受け止めてたら、自分が大嫌いな悪い事をしたショックで心に深い傷がついちやう。ああいうときに自分を護れるのは大事なことよ？ もちろん、悪いのはシルフィちゃんに違いはないから誰かは叱らなくちゃいけないけど」

「先生……」

「善い面悪い面どっちを見るかは人次第、でも私は教師としてもひとりの人間としても、なるべく善い面を沢山見てあげたいって思ってるの」

と、素敵に先生らしいことを言いながら、両手に缶ビール缶チューハイ持って台無しにしてみました。

先生は、最っ高の笑顔で、

「さあ飲も飲も、今日は私の奢りだから。こういう話し合いには腹を割ってそこにアルコール流し込んで語り合うに限るのよ」

「……」

「……」
「……」

未成年の教え子ふたりとその妹に酒を勧める現職教師。

私やシユウ、そして普段から口説き文句に「一緒にBARでも」とか言ってるアインスでさえも、完全に言葉を失うのだった。

で、朝。

そこは缶の山だった。

「頭痛い、気持ち悪い」

お昼休み。吐き気で何も食べれそうにない私は、経口補水液を片手に、机に突っ伏してぐったりしていた。もちろん、場所は学校である。

「大丈夫？ 沙樹ちゃん」

マイエンジェル梓が、心配して背中をさすってくれる。この優しさに徐々に触れたのは役得だけど、正直。

「無理せず休めば良かった」

この苦しきは、そんな役得を打ち消して余りある代償だ。私はぐったりしながら呟く。

結局、昨日私たちは酒の席に付き合わされた。途中、アインスとシユウは缶ビール1本胃に入れた辺りで神簇邸の夜間警備というもつともらしい理由で逃げたが、その分矛先を向けられた私は逃げられず、先日居酒屋で酒パスした分飲まされたのだ。

結果。

現在、私は寝不足と二日酔いで死にそうである。というか何、二日酔いってこんなにキツイものなの？

「散々だったね」

と、同情を口にする梓。彼女には久々に島津先生とぼったり会ったら、すっかり行き遅れのやけ酒飲兵衛になって、自宅に拉致されて酒の相手をさせられた、と伝えておいた。実際、間違っではない。帰らせてくれなかったし、酒が入ってからの内容は大体教え子が多数リア充カップルしていることへの不満と、行き遅れに関しての愚痴ばかりだったのだから。

なので私はいった。

「梓、先生には注意したほうがいいわ。……ガクツ」

「沙樹ちゃん、ここで倒れたら駄目。せめて保健室で」

そんなときだった。

「失礼します」

教室の扉の先から声が。

「3年のアインス・ハイです。いま鳥乃さんはこちらにいらっしやいますか？」

「……あい、んす？」

私は何とか首だけ起こし、そこに立っていた制服姿のアインス・ハイを確認。

「やあ、鳥乃。少し話があつてきたのだけど、……大丈夫かい？」

心配気に訊ねるアインスに、

「大丈夫、よ……すぐに行く……うつぶ」

私は最後まで返事ができず、トイレへと駆け込んだ。

「今日は休んで帰ったほうがいいんじゃないのかい、鳥乃」

トイレで吐き戻した後、私はアインスに支えられながら保健室へと到着した。

私がベッドに横になると、アインスはパイプ椅子に座って、いったのだった。

私は「大丈夫」と返事し、

「逆に自宅まで帰る体力がないわ。しかも家はひとりだから、これワ
ンチャン孤独死しそう」

「なら、琥珀さんに連絡を入れよう。神簇邸で休むといい」

アインスはいうも、

「それも嫌。こんなことで、あいつに借りを作りたくない」

結局、神簇と私は悪友なのだ。そんな彼女にだけはいまの私を見せたくないしね。

「そんな事言ってる場合では」

「アインス、声のトーン大きい。頭ずきずきするって話」

「あ、ああ」

黙るアインスに私は、

「昨日、ふたりは逃げて正解だったわ。ワンチャン今ごろ、別のベッドにあなたが横になる事態になってたもの」

「ああ。本気でそう思うよ」

アインスは小さくうなずいた。私は一度半身起こし、

「ところで、話つてなに？　こんな状態でよければ聞くけど」

「今後の相談をしようと思ったけど。……やめたよ。いまは君の回復を待つことが先決だ」

「そうしてくれると助かるわ」

と、私は再び横になる。

「鳥乃、なにか欲しいものはあるかい？　購買になれば、コンビニくらいならひとつ走りしてくるよ」

「じゃあ、エチケット袋」

「分かった」

アインスが袋を作ってくれる間に、私はデュエルディスクのタブレットを開きメールチェック。すると、先生からメッセージを受け取ったので確認。

内容は、お昼休みにシルフィが校外の人間と会っていたとのこと。証拠にフォト画像付きだった。

私は、画像を開いて確認する。

そして。

「え？」

と、なった。

「どうしたんだい、鳥乃」

袋を作り終えたアインスが訊ねる。私は吐き気を我慢し、仕事の顔で、

「アインス。さつき先生からメールが来てて、お昼休みにシルフィが校外の人間と会ってたって」

「シルフィが？」

「で、これが証拠のフォトラしいけど。見て頂戴？」

私は画像を開いたままタブレットをアインスに渡す。

アインスは訊ねた。

「この人って、K a s u g a y a の店長？」

そう。校舎裏でシルフィと一緒に映ってたのは、あのかすが店長だったのだ。

「たぶん正解。で、これはつい最近知った情報だけど。かすが店長はフィール・ハンターズそれも支部長クラスの人間よ」

「何だって!？」

驚くアインス。私は続けて、

「しかも、先日のフィール・ハンターズによるビル襲撃事件の首謀者」「そんな奴が、なんでシルフィと」

「分からない。けど、先生には伝えておいて放課後落ち合う必要があるわね」

「ああ。そうだね」

アインスの目が険しくなっていく。しかし、すぐ穏やかな顔を努めてつくり、いった。

「烏乃、君は放課後までここで睡眠をとってくれ。その様子だと寝不足もあるだろう?」

「まあね」

「いまから私は君の護衛に入る。誰も寝込みを襲わせないから安心して疲れを取ってくれ。放課後になったら作戦開始だ」

私は知っている。

こういう時のアインスは本当に王子で紳士プリンス、ジェントルマンだということ。

「分かった、頼むわ。何かあったら私のタブレットから木更ちゃん応援に呼んで」

いまだけは、これほど安心できる人は他にいないだろう。

私は、友に全てを預けて目を閉じる。

吐き気と頭痛は相変わらずあったけど、程なくして私は寝息をたてはじめたそうだ。

放課後、私とアインスは陽光学園中等部に到着。現在ちょうどシルフィは再びかすが店長と会ってる模様で、先生の指示で校舎裏の指定

された場所へそつと向かい合流した所、

「おせえぞ。アインス、鳥乃」

「お疲れ様です。アインス、鳥乃さん」

と、小声でいうシユウとフィーア。どうやら先に合流してたらしい。

「大丈夫。じゅーぶん間に合ってるよ」

そういつて先生は、急いできたのを察してか私たちに1本ずつ250mサイズのスポーツドリンクを渡してくれた。

現在、私たちは校舎の外壁を死角に隠れ、人気のない校舎裏で会話しているシルフィとかすが店長の様子を覗く形になっている。

かすが店長はスーツを着ているが、K a s u g a y a にいる時と同様、頭にタオルを巻いている。どうやらふたりは、正にいま何か話している模様だった。しかし、シルフィたちと私たちとの間には多少距離があり、静かとはいえ、残念ながらふたりの声はこちらまで届かない。――のだけど。

「報告します」

フィーアがいった。

「どうやら、あの男は自分をN L Tと偽ってシルフィと接触した模様です。どうやら組織に所属しないと誘い、また任務への協力を要請している模様です」

「まさか、近づいて聞いたのかい?」

アインスが訊ねると、

「読唇術です」

と、フィーア。

「やっぱフィーアは凄えよ。ここから口の動きを読めるんだからよ」

シユウがいうように、当然ながら私たちはふたりの口の動きを正面から確認できていない。双方とも口元が殆ど隠れる角度に立ってる為、私も読唇術できず困ってた所だったのだ。

とはいえ、さすがに完全に読み切れたわけではないようで、

「任務内容は分かるかい?」

アインスが訊ねると、

「いえ。伝えてると思われる様子はありましたが、すみません。読み切れませんでした」

フィーアはすまなそうに首を振る。

「十分よ。だって、アインスちゃんの妹でもある、私の可愛い教え子を騙して悪い事させようとしているのは分かったんだもの」

先生はいまにも飛び出しそうな様子でいうので、

「落ち着いてください先生」

アインスが制止する中、

「シユウ、アインス、それと鳥乃さん。万一、ターゲットの殺処分が必要になったら指示をお願いします」

銃を構え、フィーアはいった。

「私ではまだ非殺処分から殺処分に切り替える判断ができません。ですの、私は今回指示があるまで殺さず制圧だけに集中します。よろしくお願いします」

この子……。

「私が指示してもいいの?」

と、私が訊ねると、

「構いません。それが私の役割ですから」

さすがテロリストや傭兵として、闘いの端末として育てられただけある。

さすがに、一度交戦した位で殆ど面識のない私に信頼や好意などの感情を持ち合わせてる様子はない。だけど、必要だから、それだけで私に指揮権を委ねてくれる。しかも、そんな大人の判断を小学生がやってるのだ。

「分かった」

私はうなずいた。

「見て」

そこへ先生が、

「かすがって人がシルフィちゃんに何か渡してる」

言われて私は気付く。いま正に、かすが店長がシルフィにカードの束を渡そうとしていたのだ。

「正義の力……光のフィール……とか、言ってます」

フィーアの言葉に、

「不味い！ 間違いなく特殊なフィールを内包した何かだ」

アインスはいい、

「皆、出よう！」

私はこの時点で腕の内蔵銃でかすが店長の腕に発砲。

「シルフィにあのカードを受け取らせるわけにはいかない」

言いながら、アインスは私の動きを察知してくれたのだろう。すでにアインスは発砲に併せてシルフィの下に駆け出して、

『了解』

続けて、シユウとフィーア、そして撃ち終えた私が続く。

かすが様は咄嗟に腕を振り上げ、弾丸を避けながら。

「何者だ！」

と、振り返る。

アインスは叫んだ。

「家族だ！」

と、パヨネットつまり銃剣のついたショットガンを二丁握ったままかすが店長に肉薄。そのうち一丁の剣先をかすが店長の喉下に突きつけようとした所、店長は年齢に見合わぬステップで後ろに跳ぶ。そこを、

「非殺処分」

フィーアのドラゴンブレス弾が放たれ、店長の体を爆炎が包み込む。その間に私は状況が読めず硬直するシルフィにワイヤーを伸ばし、体に巻き付けて引き寄せ、先生にキャッチさせる。

「もう大丈夫よ、シルフィちゃん」

「せ、先生？」

思考が硬直した様子のまま、つぶやくシルフィ。

「かアッ！」

かすが店長は、なんとフィーアの爆炎を腕の一振りでかき消し、

「そこにいるのはレズの肌馬!! お前らハングドか？」

「だけじゃ無ええええええええええええええええッ!!」

そこへシユウがフィール込みで高く跳躍、ライダーキックでかすが店長を見事蹴り飛ばす。

「ぐあつ」

さすがに一度地に倒れる店長。

「シユウ！ どうして?」

と、問いかけるシルフィに先生は、

「聞いて、シルフィちゃん。あの人はフィール・ハンターズ。NLTの人じゃないのよ」

「え」

驚愕するシルフィ。

「そんな、嘘」

「嘘じゃないのよ。信用できる情報よ」

しかし、

「騙されるな！ 真の絶対正義、シルフィよ！」

かすが店長がアインスとシユウの頭を掴み、校舎の壁に投げつけていった。

「うわっ」「うわあつ」

壁に叩きつけられ、ぐったりと倒れるふたり。まさか、アインスとシユウがこうも簡単に倒されるなんて。

かすが店長は続けていった。

「信用できる情報とはいっても、所詮は出所はハンドグドなのだろう?」
「っ」

ここで嘘をつけない先生。声に出ずとも顔が「うつ」と認めてしまっている。当然、シルフィの顔も不信へと変わっていき、

「一度裏切った奴を味方する人間の言葉か、正義の組織NLTの言葉、どちらのほうが信用に値するか分からないお前ではないだろう」

さらにかすが店長が言葉で誘導すれば、ついにシルフィは先生にまで拒絶の視線を向け、

「離して」

と、強引に先生の腕から抜け出す。

「いい子だ」

にやりと笑うかすが店長。明らかに悪い笑みなのに、シルフィは不審に感じることなく歩み寄ろうとする。

(させない)

とはいえ、まだシルフィの体は私のワイヤーに拘束されたまま。私は再びシルフィの体を引き寄せるも、シルフィは1枚のカードを取り出す。すると、カードから《馬頭鬼》が姿を現し、私のワイヤーはモンスターを持つ斧で両断された。

あのカードは確か、ネオトヨタシテイカップのときにファイアが狙撃に召喚した悪魔族の射手を叩き切ったモンスター。あのとき、私を助けてくれたのはシルフィだったのだ。そして今度は、私を拒絶するために、そのカードが。

しかも、私が妨害したせいで、シルフィは歩むなんて悠長なことせず駆け出してしまふ。おかげで銃を構え店長を狙っていたファイアがシルフィを巻き込んでしまふ為に発砲できず、店長の傍に辿り着いてしまった。

「クツクツク、さて絶対正義シルフィ。今度こそ、君にはNLT特製、光のフィール・カードを授けよう」

「はい」

私たちの妨害もむなしく、ついに店長より差し出されるカードをシルフィは受け取ってしまう。

「くっ」

両断され使いものにならなくなったワイヤーを回収しながら、私は悔しさに顔を歪める。

「お願い！ シルフィちゃん、信じてよおっ！」

嘆く、先生。

「本当に、その人はNLTなんかじゃないの！ シルフィちゃんが大好きな、悪い人なのよ！」

しかし当のシルフィは最早先生を視界に映すことさえ嫌とばかりに無視を貫く。

店長は、シルフィを抱き寄せ、自分の顔を視界に映させないようにしてから、K a s u g a y a 店内では決してみせない、ドス黒い笑み

をみせ、

「信じるわけがなからう、お前がシルフィの嫌うハンドと一緒にいる限りな。そもそも、この私がNLTではないなどと証拠はどこにある」

と、いった直後でした。

「証拠はあります。かすが様」

奥から一台の車が中等部の敷地へと入っていき、中から一組の男女が出てきたのだ。

そのうちの女性は、見間違えることなく木更ちゃん。男性のほうは、年齢にして30代くらいの柔和な顔をしたスーツ姿の男性。本物のNLTエージェント。それも幹部クラスの人間である霞谷さん。

そう、冥弥ちゃんがかすが店長の相手に日々妄想している、あの霞谷さんだった。

「ゲツ、霞谷」

仰け反るかすが店長。そこへ。

「かすが様、私もおります、かすが様くくく♪」

木更ちゃんが、まるで目をハートマークに全速力で店長に駆け寄る。

「ひっ!? な、何故お前もいる!」

何故か、もしくは当然か、NLT幹部よりずっと木更ちゃんに恐怖するかすが店長。

咄嗟に店長はシルフィを横に突き飛ばし、

「きゃっ」

と、倒れるシルフィをよそに、両手を突き立てフィールのバリアを壁のように創り出す。しかし、

「そんな! お仕事の途中なのに愛する木更が来てくれて嬉しいだなんて」

「言つとらん!」

「あら、その壁は危険だから来るなという優しさなのね。でも木更は大丈夫よ。このクリフォートの力で」

木更ちゃんはバリアに《アポクリフォート・キラ》のカードを突

き立てると、一瞬にしてファイルの壁を分解して。

「ほらこの通り、かすが様〜♪」

と、そのままダイビング。

しかも、明らかに店長は腕で薙ぎ払おうとしたのに、木更ちゃんもファイルを使い真正面から受け止め、一度痛みに呻きそうになりながらもしがみついたのだ。

このかすが店長、シユウとアインスを一瞬で戦闘不能にしたリアルファイトの実力者なのに。

「ええい！ 放せ、暑苦しい！」

「放さないわ。この暑さは、私とかすが様を包む情熱の愛の証だもの」
「HA☆NA☆SE」

「はい、話します。むしろ語ります、かすが様への愛を！ この胸から張り裂けそうな、ありつたけの想いを言葉にして」

「その『はなす』じゃない！」

「ああん、怒ったかすが様も素敵」

……とりあえず私は、突き飛ばされたシルフィの下に向かい、

「大丈夫？」

「……」

シルフィは肩を打って痛そうにしながらも、やはり私とは視線をあわせようとはしない。返事なし。

「まあいいわ」

とりあえず、私は彼女が『聞いては』いるものとして。

「よく聞いて。あそこにいる優しそうなおじさんの名前は霞谷。本当のNLTの幹部エージェントよ」

「え」

その言葉に反応し、シルフィはゆっくり半身を起こす。その際、霞谷さんと目があつたらしい。

霞谷さんはにこりと優しく微笑み、シルフィの下へ。

「初めまして、『絶対正義』シルフィードさん。私は霞谷。NLTで幹部をしております、同時に特捜課にも配属されてます」

そういつて霞谷さんは懐から警察手帳とNLT手帳の両方を出し、

シルフィに見せる。

シルフィは「え」となり、

「本物のNLT手帳。かすがさんと同じ」

「彼のは偽物ですよ。皆さんがいうように、NLTに彼は在籍してないのですから」

「そんなの、嘘……」

「残念ですが、これが真実です。どんな目的かは分かりませんが、彼はあなたを騙してー」

言いかけた所を、シルフィは霞谷さん突き飛ばす。

「っ」

フィール込みで、まるで殺すような一撃だったようで、不意を突かれた霞谷さんは一度低空を舞って地面に叩きつけられる。

シルフィは立ち上がって、

「嘘をつかないで！ 嘘つきの味方なんて、信じられない！」

と、かすが店長の下へ向かおうとする。

「シルフィイイイイツ!!」

そこへ怒声が響き渡った。

シュウの声だった。彼女はぼろぼろになりながら、膝をつくアインスの肩を借りて立ち上がり、

「さつきと目え覚ましやがれ！ テメエ、さつきそのかすがに突き飛ばされただろ。本物の正義の組織が、NLTの人間が、本当に女をあんな風に突き飛ばすかよ！」

「っ」

シルフィの足が止まり、ゆっくりと顔がシュウに向く。どうやら、シュウの言葉だけはちよっとだけ彼女の心に届くらしい。

「お前を抱き寄せたときのかすがの顔、クツソ悪い顔してやがった。シルフィ、お前だけは、あんな顔するやつの傍にいて欲しく無え！ もう一度いうぞ！ あいつが、本当にNLTかどうかはもう関係無え！ ただ、あんな顔をする奴の傍にいくな！ シルフィー！」

「シュウー！」

悲痛な顔で、シルフィはいい、そしてかすが店長とシュウを、交互

に眺め、様子をうかがう。

「シルフィ。ずっと皆に傷つけられたお前なら分かるはずだ。アタシとアイツ、どっちがお前のことを想った顔をしてる？」

「それは……」

下向き、震え、しかしシルフィの唇はたしかに、こう動いた。

——シユウ。

って。

「頃合いだな」

直後だった。かすが店長が呟いたのは。

店長は、木更ちゃんにひつつかれたまま片腕を伸ばし、指をパチンと慣らす。

するとシルフィの体、正確には彼が渡したカードから黒い瘴気が漏れ出し、彼女の体を包み込む。すると、シルフィは目を見開き、

「っ、きゃあああああああああああああああああ！」

と、弓なりになって悲鳴をあげた。

「シルフィー!」「シルフィちゃん!」

叫ぶシユウと先生。しかし、ふたりの言葉さえシルフィの悲鳴はかき消し、

「あ……あああつ」

声がかすれるまで叫ぶと、続いてシルフィは頭を抱え、蹲る。

「かすが店長、シルフィに何をしたの?」

私が叫ぶと店長はニヤリと笑い、

「なに簡単なこと。彼女のフィールを闇のフィールで浸食しただけだ」

「闇のフィールで?」

って、何?

「聞いた事はないか? 人間にデュエルで負けても空にならない、生れ持ったフィールがあることを」

確かそれは、以前陽井^{M I S S I O N 5}氏が言っていたものと同じ内容。その正体は、命や気などの生命エネルギーで、人はこのフィールが全損したときに死亡するという学説だ。

あのときは確か、美術館をファイルで包み込むことで、その生れ持ったファイルにダメージを受け病弱になった娘さんを治療する手段が取られて、結果的には濃厚なファイルの中では娘さんは比較的元気でいれるというのが分かった。

「先ほどシルフィに渡したカードは、普通のカードに闇のファイルを搭載し、闇のファイル・カードに調整したものだ。そんなものからファイルを引き出せば、当然心は闇に呑みこまれる」

「なんてことを！」

闇のファイルというのが何なのかは、まったく分からないけど。すると、店長はニヒルに笑っていった。

「喜べ。この闇のファイルのオリジナルはお前だ」

「え？」

「2年前だったか？ お前は一度私に殺された後、地縛神の眷属に選ばれ、生ける死者となったな？ その時のお前に攻撃された私の体から、抽出・解析したのがこの闇のファイルだ」

「な」

驚く私。さらに、

「沙樹ちゃんが一度」

「テメエに殺されたあ？」

事情を知らない先生とシユウも、驚愕といった反応。

私はとりあえず。

「情報としては確定してたけど。やっぱり、あの時のオールバックはあなただった話なわけね、店長」

「クククッ」

と、店長は笑い頭に巻いたタオルを外す。すると、そこに立っていたのは私の記憶とも完全に合致するオールバックの男。

「久しぶりだなあの時の少女よ。最初に依頼を出したときは気付かなかったぞ、お前の目の色が表情があまりに違っていたものだからな」

「私だって気付いたのは最近って話。まさか自分自身の仇がこんな近くにいたなんてね」

と、私はいった後。

「木更ちゃんのお姉さんも誘拐したそうね」

「知っていたか。その通りだ」

肯定するがすが店長。

「さて、本来の予定とは外れるが、お前がこの場に来てくれたことは好都合。お前の持つ《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》をフィール・ハンターズの下へ返して貰おう」

「え？」

クリアウイングがフィール・ハンターズのカード？

「何をとぼけている。元々あの日、お前からアンティデュエルで貰い受けたカードだろう」

そういえば。

私が死んだあの日を夢見るたび、私は当時持っていた自分のフィール・カードの情報を思い出せずにいた。その原因はいまでも分からないけど、あの時にフィール・ハンターズに奪われたカードが、このクリアウイングだっていうの？

「どうやら本当に覚えてないらしいな。地縛神の後遺症か」

「かもね」

私はいいながら、

「けど、返して貰うつてのは変な話じゃない？ その話を聞くんなら元々の持ち主こそ私なのだし」

「ぬかせ」

店長は口元だけで嘲笑い、

「どちらにしても、クリアウイングはすでに私のものだ。なぜなら、私には人質がいるのだからな」

なるほど、シルフィを交渉材料にしようって話か。彼女を闇のフィールから助けたければカードを渡せと。

「ところがそうはいきません、かすが様」

が、そこへ木更ちゃんが（店長にしがみついたまま）いった。

「何？ というか、そろそろ離れろ！ 貴様ずっとしがみついていたのか」

ということとは店長、ずっとストーカーにしがみつかれてたのを忘れ

てたらしい。体が完全に適応しちゃってる。案外、近いうちにしばらく木更ちゃんにひつつかれぬ日が続くと調子崩す体になるんじゃないかも。

「勿論です、かすが様。木更はいつもあなたと一緒にですもの」

「誰が一緒と認めた！ いいからさっさと離れろ」

「そんな、私と密着するのが、そんなに“いい”なんて」

「誰も言っていない！」

「もう、かすが様だったら。さすがの木更も少し恥ずかしいわ」

「話を聞けえっ！」

「残念ですけど、シルフィさんの人質としての利用は食い止めさせて頂きます」

「だからって話を戻すな！ いや、むしろ戻してくれ」

……かすが店長、苦勞してるなあ。さっきまでの下種い悪役オーラが一瞬でどっか行っちゃったよ。

「霞谷さん、先ほどまでの会話はすべて録音されてますね？」

木更ちゃんが訊ねると、霞谷さんは起き上がり、

「ええ、しつかりと」

「ありがとうございます。これで私たちの持つ情報の真偽やかすが様がNLTでない事など全て口質をとることができました」

「ま、まさか」

店長は驚き、

「私が全て喋るのを、わざと待ってたというのか？」

「はい」

木更ちゃんはにつこり微笑む。そして、私はいまになってやっと気付いた。

かすが店長に背後に、小さな黒い点が開いていたのを。

「では、続きは署でうかがうそうですよ。かすが様」

木更ちゃんはいうと、黒い点は大きく広がり、事前に発動していたらしい《ワーム・ホール》が姿を現す。そして、木更ちゃんは店長から離れると、トンと店長の体を後ろへ突き飛ばした。

「それでは要望通り離れますねかすが様♪ あとであなたの木更は面

会にうかがいます」

「や、やめろ木更！ わ、私はこんな所で、こんな所で捕まるわけにはいか——」

叫びながら、かすが店長は《ワーム・ホール》の先へと消えていくのだった。

「ご協力ありがとうございました、霞谷さん」

かすが店長の気配が完全に消えると、木更ちゃんは霞谷さんに一回ぺこりと頭を下げる。

「いえ、こちらこそ。まさか藤稔さんが彼の逮捕に協力してくれるとは思わなかったので、助かりましたよ」

霞谷さんも頭を下げて、

「さて」

と、続ける。

「皆さん。まだ事態は終わっておりません。彼女を闇のフィールから解放しなければ」

霞谷さんの言葉に、私たちは一斉にシルフィを見た。

シルフィは、黒い瘴気を纏わせながら、はあはあと息を切らせ、膝をつき、次第に私たちの視線に気づき顔をあげる。

その瞳は、怒りと憎悪そして失望に満ちた、明らかに正気とは思えないものだった。

「シルフィ……」

シュウがそっと近づく。するとシルフィは、その場から微動にしないまま、「睨む」という動作にフィールを乗せ、威圧だけでシュウを突き飛ばす。

「がっ」

地面に倒れるシュウ。シルフィはいった。

「もう、何も信じない」

シルフィは、もう一度シュウを睨みつけ、フィール付きの威圧で倒れたシュウを更に突き飛ばし、

「だってそうだよ。やっと私を理解してくれる味方ができたと思ったら、フィール・ハンターズで、私を利用してただけなんて。シュウも、

先生も、みんなそうなんですよ？ 本当は私のこと、大嫌いなんですよ？ 心の中で嘲笑ってたり、馬鹿にしていたり、うざがっていたり、死んでほしいとか、迷惑だとか、色々……色々、思ってるんですよ？」

「そんな……わけっ」

「あるー！」

三度目の威圧。

「シュウー！」

そこへファイアが間に入り、代わりに弾き飛ばされるも、まだダメージの少ない彼女は一度低空を舞いながらも倒れず着地し、再びシュウの前に立つ。

「いまのうちに立ちあがってください。姉の攻撃は全て私が受けます」

と、必死にシュウを護るファイアに、シルフィは、

「邪魔ー！」

と、再び威圧。しかし素でフィールの保有量が馬鹿げてるファイアは、同じように睨み、フィールの威圧で相殺する。

「この技は一度受けて覚えました。もう私にそれは通用しません」

いや待って、一度受けただけで技を会得するってどれだけ戦闘センスがあるの、この子。

「なら」

シルフィは拳にフィールを乗せて殴りかかるも、ファイアが足をひっかけると簡単に転んでしまう。

「皆さん。いまのうちに姉の救い方を探してください」

ファイアがいう中、シルフィは起き上がり、フィールを込めた拳圧を飛ばすもファイアは軽く弾く。ならばとシルフィは肉薄し両手で何度も何度も殴りかかるも、その全てをファイアは避け、時にカウンターの足ばらいで転がし、その繰り返し。

驚くことに、ファイアは一度もシルフィを攻撃し傷つけることはなかった。

見る限り、シルフィはリアルファイトに慣れてない模様で、有り余

る闇のフィールに物言わせて攻撃に出てる模様。しかし、そのフィール量でさえフィーアのそれには敵わず、リアルファイトの技術に至っては言うまでもない。

シルファイが勝ってるのは体格差くらいで、その気になればフィーアは一瞬でシルファイを気絶させることができそうなのに。本当に、フィーアは加減というものに慣れてないのだろう。

「沙樹ちゃん。アインスちゃんの下に行こう?」

先生がシユウを肩で担ぎながらいった。みると、アインスは意識は十分あるようだけど、壁に叩きつけられた際シユウを庇ったのだから、腰をやられたようで、膝をつくのが精一杯。立ち上がることができないようだった。

「分かった」

私はうなずく。こうして私たちは、木更ちゃん、霞谷さんと合流しながらアインスの下へ。

「かすがさんは、彼女のフィールを鳥乃さんのフィールを元に作ったと言っていました」

合流するとまず、霞谷さんが私を見て、

「鳥乃さん。あのフィールの特徴を教えてくださいますか?」

「分かったわ、とはいっても、全部そのままとは限らないけど」

私はうなずき、デッキから《地縛神 Chacu Chalhau a》のカードを見せる。

霞谷さんは驚きながら、

「これが、噂に聞く地縛神のカード!」

「もしかして、これが」

訊ねるアインスに私はうなずき、

「そ。恐らくこれが、かすが店長のいう闇のフィールのオリジナルだと思うわ。本来、批判の強い言い方するとカードは道具で私たちが所有者って関係だと思うけど。このカードは扱いが逆で、私がこのカードを手に入れた時点で、この地縛神が私の所有者って関係になっちゃってるのよ」

「は? ちょっと待てよ、カードが鳥乃を所有しているって、どうい

ことだよ」

シユウが「何いつてるんだ」って様子で訊ねるので、私は内蔵している武装の一部をみせる。

片腕から両断されたワイヤーと手首にナイフ。もう片方の腕から銃が一丁、膝からはミサイルが顔を出し、片耳からはプラグとコードが飛び出る。正直、我ながらグロテスクな光景だと思いつながら、

「この通り、私は噂で聞いたこともある半機人って呼ばれる存在よ。さすが店長が言ったように、私は一度死んでから地縛神の眷属として蘇った。本来、この時点で私の自我って曖昧になってるのよ。地縛神に精神操作されてるみたいない感じだね。そんな私をハングドは回収して、機械技術で私は人間として蘇生され直されたって話。だから、私の頭はあるコンピュータと繋がってるし、副頭脳のAIプログラムや、地縛神の支配を抑える制御プログラムも搭載されてる」

「沙樹ちゃん……」

ここで、誰よりショックを受けたのは先生。彼女は私が半機人になったことは知ってるものの、一度死亡して、地縛神の眷属になって、こんな形で生きてることは知らなかったのだ。——というより私も先生が知らなかったことを知らなかった。

でも今は、そんな事はどうでもいいのよ。重要なことじゃない。

「話を戻すわ」

私はいった。

「つまり、いまシルフィは闇のフィール・カードに所有されるとみて間違いないわ。そして、私たちがフィール・カードをフィールで操作するように、いまシルフィはカードにフィールで操作されている」

すると木更ちゃんが、

「加えて、こちらのクリフォートで分析した所、その闇のフィール自体もかすが様の言いなりになるよう調整されました。恐らく、カード越しに彼女を操る想定だったのでしょうか」

「だから奴の指示で闇のフィールが動きだしたわけか、クソツ」

シユウが言葉を吐き捨てる。しかし、いまはそこかすが店長がいないから、シルフィが店長の言いなりになることはない。

「鳥乃、その闇のファイル・カード。対抗策はないのかい？」
訊ねるアインス。私は、

「あるにはあるのだけど。ぶっちゃけデュエルの中で闇のファイル・カードを倒しちやえばいい。だけど、知つての通りシルフィは大量の闇のファイル・カードによつて操られてる。それらを全部デュエルで倒すのは不可能に近いって話だから、現実的ではないのよね」と、いった所。

『イヤ、カノウダ』

声が聞こえた。

それも、普段は私の奥底から聞こえるそれが、地縛神のカードから発せられたのだ。

「この声は」

霞谷さんが反応する。どうやら他の人も聞こえてるらしい。

「Chacu Chalhua、あなたなの？」

私が訊ねると、

『ソウダ』

と、カードは応える。

するとアインスはすぐ、カードに向かって膝をつき敬意をもった姿勢で、

「初にお目にかかります。私はアインス・ハイ。鳥乃の友人でございます。それで、先ほど申された可能というのは？」

『簡単ダ。彼女のノ所有スルカードノ拘束力ハ弱イ。全部倒サナクテモ、キツカケサエアレバ、少女ヲ救イ出スコトガデキル。数倒セバイノニ間違イハ無イガ』

まさか、地縛神がアインスと……私以外と会話する姿をみるなんて。

「きっかけとは？」

と、アインスが聞く所、

「そんなの、決まってるんだろ」

シユウが言った。

「声を届かせるんだよシルフィによ。アタシたちの想いをファイルに

乗せて。そうなんだろう？」

『ソウダ』

地縛神が肯定する。

『ソシテ、ソレガ出来ルノハ、コノ中デハ貴様ダケダ。剣闘獣使イヨ』
つまりシユウだけ。

「望む所だ」

自分の拳と拳をガツンし、シユウはいった。

「それでシルフィを助けられるってんなら、頼まれなくてもやってやる！」

すると、アインスは自分のカードを何枚かシユウに託し、

「頼みます、シユウ」

って。

それはフィール・カードだった。なるほど、これならシユウのフィールを補強できる。

「分かった」

シユウはアインスからカードを受け取る。しかしデッキに投入した様子は見られない。フィールを得るだけならデッキに入れず所持するだけで効果はあるし、下手にテーマ外のカードを入れても弱くなるだけなのだから当然なのだけど。

「鳥乃と先生はフィール・カードを残しておいてください。デュエル中に襲撃がくるとも限りませんから」

「了解」

私はうなづく。アインスはすでに動けないからカードを託した点もあるのだろうし。なら、その分私は先生とアインス両方を護衛しなくてはならない。

けど、先生は違った。

「じゃあ、行ってくるぜ」

と、シユウが私たちに背を向けた所を、

「待って」

先生は呼び止める。

「シユウちゃん、せめてこのカードを私の代わりに連れて行ってあげ

て」

差し出す先生に、シユウは首を振って、

「悪いが、フィール・カードは受け取れ無え、アインスが言っただろ」
「大丈夫。天然物じゃないから」

ということは、後からフィール・カード化した類のものだろうか。
しかも、横から確認するとモンスターでさえなく《コンタクト・オブ・
ファイア》という罨カードだった。

「分かった」

シユウはカードを受け取り、

「そういう事なら、先生の想い絶対に届かせてやる」

と、シルフィの下へ向かった。先生からのカードは、デッキのカー
ド1枚と入れ替えて投入しているのが見えた。

私は、そんな彼女の後ろ姿を見ながら。

(ところで、Chacu Chailhua)

私は、自分の地縛神に話しかける。

『どうした?』

今度は、私の脳裏にだけ、地縛神の声が響き渡る。しかも、普段よ
り流暢な発音で。

(初めてじゃない? 誰かとロクに口を交わすのも、誰かに手を差し
伸べるのも。どうしたって話)

実際。こうやって私と地縛神でまともに会話をするのも初めて
だったりするのだ。むしろ、こうやって会話できる存在だとすら、今
日いまこの瞬間まで思ってたなかった。

『簡単なことだ』

地縛神はいった。

『我が力を勝手ニ使われた。それが気に障っただけのこと』
(なるほどね)

私は納得した。

一方、シユウは未だリアルファイトを行ってるシルフィとファイア
の傍に立つと、

「ファイア、待たせたな」

「シユウ」

フィーアはシルフィの拳を受け止めながら、

「助け方は分かったのですか?」

「おう、任せとけ」

「了解しました」

と、シユウの言葉を聞くと、フィーアはシルフィを払いのけ距離を取り、入れ替わりにシユウが前に立つと、強制デュエルの赤外線飛ばす。

「シルフィ、デュエルだ!」

「シユウ?」

「アタシがデュエルで、テメエの闇を払い除けてやる!」

お互いのデュエルディスクが、デュエルモードに移行する中、

「立たないで……」

シルフィは呟く。

「シルフィ?」

囁き、訊ねるシユウに、シルフィは叫んだ。

「私の前に立たないでつて言ったの! 見たくない! あなたの顔なんて、シユウの顔なんて! 消えて! ここから消えて! 死んで消えて! 存在から消えて! 私の記憶からいなくなつて!」

存在そのものへの拒絶。同時に、闇のフィールが更に濃度を上げてシルフィの体を包み込んだと思うと、シルフィは死者のように青白い肌へと姿を変える。

「な、何だこれ……シルフィ、なのか?」

驚愕のあまり、シユウが軽い錯乱を起こす。

『闇ノ眷属。生ケル死者ノ姿タ』

そこへ返事したのは、再び私の地縛神。しかも続けて地縛神は私の口を借りて、

『我が闇のフィールは冥界のフィール。鳥乃とて我が身を使う際は生ける死者となりて白い肌と死者の瞳の我が眷属へと姿を変える』

「鳥乃? いや、地縛神か。それって大丈夫なのかよ、シルフィは無事なんだろうな」

訊ねるシユウに、私……の体を借りて地縛神はフツと笑い、『案ずるな。でなければ鳥乃も今ごろずっと眷属の姿のままだ』確かに。

『お前が成すことは変わらない。このデュエルで少女の心を解放しなければ、どちらにしても少女はお前の下には戻らないのだからな』
「そうかよ！ なら、問題ないな！」

再び、シユウはシルフィに向きあい、叫ぶ。

「消せるなら消してみろ！ だがな、アタシは絶対正義シユトルムだ！ 簡単に、お前を助けるっていう正義の炎は消えやしねえ！」
そして、ふたりは同時に叫んだ。

『デュエル！』

シユウ

LP4000

手札4

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

シルフィ

LP4000

手札4

先攻はシユウに決まったらしい。

「アタシのターンだ！」

シユウが勢いよく宣言するも、

「その前に」

シルフィはいった。

「デュエル開始時に、スキル《百鬼夜行》を発動」

「《百鬼夜行》？」

シユウも驚く所から、普段シルフィの使わないスキルらしい。

「《百鬼夜行》の効果で私はゲームから所有している魔妖カードを1種まやかし

類ごとに1枚までデッキ・EXデッキに加える。ただし、すでにデッキ・EXデッキに投入されているカードはデッキに加えることができない」

効果を宣言すると同時に、シルフィの周りに浮かび上がるのは、16枚の闇のフィール・カード。そういえばシルフィは闇のフィール・カードを入手はしても、デッキに投入している様子は見られなかった。それをこんな形で、デッキ枚数を増やしてまで投入するなんて。「私は、メインデッキに10枚、EXデッキに6枚、それぞれ魔妖カードを加えてデュエルを開始」

カードは禍々しく輝きながら、カードはデュエルディスクの中へと入っていく。

「なら、改めていくぜシルフィ！」

シユウは、再び勢い込めてというと、

「モンスターをセット、カードも2枚セットしてターンエンドだ！」

と、4枚の手札のうち3枚を場に伏せ、ターンプレイヤーが切り替わる。

「私のターン、ドロー」

カードを引くシルフィ。

「魔法カード発動、《隣の芝刈り》」
「げっ」

露骨に嫌そうな顔をするシユウ。まるで、梓が《アテナ》で回し始めたときの私みたいに。恐らく、互いに手の内を知ってるからこそ嫌な確信を覚えるのだろう。

「このカードは、私のデッキ枚数が相手のデッキ枚数より多い場合、同じ枚数になるようにデッキの上を削る効果」

シルフィがいうと同時に、ソリッドビジョンに互いのデッキ枚数が表示され、シルフィのデッキ枚数の数値が勢いよく下降する。

シユウ デッキ枚数16枚

シルフィ デッキ枚数35枚↓16枚

「40枚デッキ!?」

驚く私にシユウは、

「元々シルフィはデッキ枚数上限の30枚デッキなんだ。それが、さっきの《百鬼夜行》で40枚になりやがった」

40枚といえばマスターデュエルのデッキ枚数。まさかスピードデュエルで目にするなんて。

「続けて私は《翼の魔妖―波旬》を通常召喚」

フィールドに現れたのは、渋い風貌のおじさんの姿。それが、禍々しいフィールドを纏って現れる。

「《翼の魔妖―波旬》の効果、このカードの召喚に成功したことで、デッキからチューナーモンスター《麗の魔妖―姉姫》を特殊召喚」

続けて現れたのは女性の魔妖モンスター。

「何、チューナーだどっ!？」

驚くシユウ。つまり、普段のシルフィはシンクロを使わないということらしい。

「私はレベル1《翼の魔妖―波旬》にレベル2《麗の魔妖―姉姫》をチューニング」

《麗の魔妖―姉姫》がふたつの輪に変わると、《翼の魔妖―波旬》がその中を潜り、混ざり合う。

「シンクロ召喚。出てきて、レベル3《轍の魔妖―隴車》」

出てきたのは1体の人力車の妖怪。しかし直後、先ほど素材となつて墓地に贈られた《麗の魔妖―姉姫》がフィールドに舞い戻る。

「《麗の魔妖―姉姫》の効果。このカードが墓地に存在し、魔妖モンスターがEXデッキから特殊召喚された時に発動。このカードを場に戻す」

なるほど。私は一回、普通に納得しかけ。

「つて、ちょっと待って」「おい、それって」

私、そしてシユウが同時に反応する。そんな私たちの嫌な予感当たって、

「続けてレベル3《轍の魔妖―隴車》にレベル2《麗の魔妖―姉姫》をチューニング」

再び姉姫はふたつの輪にかわり、内側を隴車が潜ると、

「シンクロ召喚。出てきて、レベル5《毒の魔妖―土蜘蛛》」

手札消費1枚から2度目のシンクロ召喚。

「そして《麗の魔妖―姉姫》を自己蘇生」

――だけでは終わらない。

「レベル5《毒の魔妖―土蜘蛛》にレベル2《麗の魔妖―姉姫》をチュ―ニング。シンクロ召喚！ 出てきて、レベル7《翼の魔妖―天狗》！レベル7《翼の魔妖―天狗》にレベル2《麗の魔妖―姉姫》をチュ―ニング。シンクロ召喚！ 出てきて、レベル9《麗の魔妖―妖狐》！レベル9《麗の魔妖―妖狐》にレベル2《麗の魔妖―姉姫》をチュ―ニング。シンクロ召喚！ 出てきて、レベル11《骸の魔妖―餓者髑髏》！」

なんと、姉姫の効果を使いまわし、手札1枚から5回もの連続シンクロ。一気にレベル11、攻撃力3300の《骸の魔妖―餓者髑髏》を出してきたのだ。

「な、なんだよそれ」

さすがに驚愕通り越して思考停止に近い様子を見せるシユウ。店長め、とんでもないカードをシルフィに渡してきたわ。

「カードをセットし、バトル。餓者髑髏でセットモンスターに攻撃」

後攻1ターン目にして超大型による攻撃。直後、シユウは伏せカードの1枚を表向きにして、

「罨カード《和睦の使者》！ このターン、アタシのモンスターは戦闘破壊を受けず、アタシが受けるダメージも0になる！」

戦闘破壊されないことが確定した所で、シユウのモンスターが表向きになる。こうして姿をみせたのは《剣闘獣ムルミロ》。レベル3、攻撃力800守備力400、餓者髑髏との差がとにかく激しい。

しかし、結果的には無傷、ムルミロも生存、そして何より剣闘獣が戦闘を行った。これでシユウのデッキは起動する。

「いくぜシルフィ！ バトルフェイズ終了時、アタシは《剣闘獣ムルミロ》をデッキに戻し《剣闘獣ベストロウリイ》を特殊召喚。こいつの効果で、さつき伏せたシルフィのカードを破壊だ」

ムルミロと入れ替わりで鳥獣族の剣闘獣が現れると、その翼の羽ばたきでトルネードを作り、シルフィの伏せカードを破壊する。

破壊されたカードは《リビンググデッドの呼び声》だった。

「らしく無いシルフィ！ お前なら、いま1枚だけ伏せた所ですぐベストロウリイが破壊する位分かってただろ？」

「……」

シユウの問いかけ、しかしシルフィはまともな会話を拒絶したのか、反応はなし。

「ターン、終了」

で、返事の代わりにシルフィはいった。

シユウ

LP4000

手札1

《セットカード》□□

□□《剣闘獣ベストロウリイ》□□

□□《骸の魔妖―餓者髑髏》―□□

□□□□

□□□□

シルフィ

LP4000

手札2

「そして、アタシのターン、ドロ―」

シユウはカードを1枚引くと、そのカードをすぐ場に出し、

「手札から《剣闘獣ラクエル》召喚！ そしてアタシはベストロウリイとラクエルをデッキに戻す。いにしえに生きる猛禽の闘士よ！

戦友との絆ここに束ね、いまこそ歴戦の勇者となれ！ コンタクト融合！ いくぜレベル6、《剣闘獣ガイザレス》！」

2体の剣闘獣がビジョンごとシユウのデッキに戻ると、新たなバードマン型の剣闘獣が姿を現した。その攻撃力は2400。

「ガイザレスのモンスター効果！ こいつの特殊召喚成功時、フィールド上のカードを2枚まで破壊する。アタシが破壊するのは当然、

《骸の魔妖―餓者髑髏》テメエだアツ!!」

どうやら餓者髑髏に耐性はなかったらしい。ガイザレスが放った

双つのトルネードをまともに受けると、特に何かすることなく簡単に破壊されてしまう。

「よっしゃー！ 餓者髑髏攻略！」

シユウはガッツポーズを見せ、そのまま腕をシルフィに突きだす。「分かったかシルフィ。お前が貰った闇のフィール・カードなんてその程度だ。こんなのお前の本来のデュエルじゃない。目を覚ませシルフィ！」

しかし、

「《麗の魔妖―妖狐》の効果を発動」

シルフィはいった。シユウの暑い言葉なんて完全に無視して、

「《麗の魔妖―妖狐》は、元々のレベルが1の私のシンクロモンスターが相手によって破壊された場合、墓地から他のアンデットを除外して特殊召喚する。私は墓地の《赤鬼》を除外して蘇生」

一旦、場に姉姫らしき幻影が現れると、《赤鬼》の骸を取り込み背に9つの尾を生やす。そして、眼光だけを残したシルエットに切り替わると、それは《麗の魔妖―妖狐》へと姿を変えた。

「なっ」

せつかく餓者髑髏を攻略したのに。とても言いたげなシユウの顔。しかも、妖狐の効果は終わらない。

「続けて、《麗の魔妖―妖狐》は墓地から特殊召喚された場合、相手フィールドのモンスター1体を破壊する。私はガイザレスを破壊」

「ガイザレスを破壊。……まさか!？」

シユウが何かを察し、叫ぶ。

「シルフィ、まさかわざと出させたのか？ 自分の伏せカードを罠にベストロウリイを、そしてガイザレスを」

そういえば、ベストロウリイの効果は強制。前のターンの状況だと、シルフィがカードを伏せてなかったらシユウは自分のもう1枚のセットカードを破壊しなければいけない状況にあった。そしてガイザレスを召喚するためにはベストロウリイが絶対必要。シユウが手札に握っているとは限らない以上デッキから引っ張らせるのが一番効率がいい。

でもって、餓者髑髏をわざと破壊させて蘇生した妖狐でガイザレスを破壊してしまえば、シユウの召喚権を使わせた上、モンスターゾーンをがら空きできる。

「……」

相変わず、シルフィは返事しない。けど、恐らくシユウの推測は確定だろう。

「だがな」

が、ここでシユウはもう一枚のセットカードを表向きにし、

「この程度なら対策は間に合ってる。カウンター罠発動、《剣闘獣の戦車》！ その妖狐の効果を無効にして破壊だ！」

妖狐が掌からエネルギーボールを生み出し、ガイザレスに向けて投げつけようとする。が、そんな妖狐の横を突如現れた《剣闘獣の戦車》が体当たり。妖狐は引き倒されて潰れた。

「これで餓者髑髏に加え妖狐も倒した。戻ってこい、シルフィ！」

確かに、私や地縛神の推測通りなら、闇のフィール・カードを倒せば倒すほど、シルフィを包む闇のフィールは弱まるはず。

「ミスプレイされても、説得力なんてない」

シルフィは、ここでやつと口を交わした。闇のフィール・カードを破壊した影響だろうか？

「《剣闘獣の戦車》を使うなら、妖狐の蘇生時に使わないといけないのに。レベル9シンクロモンスターが相手によって破壊されたことで、墓地の《翼の魔妖―天狗》の効果を発動。墓地から《酒吞童子》を除外して自身を特殊召喚する」

今度は波旬と思われる幻影が現れると、《酒吞童子》を取り込んで翼を生やし、一度シルエツトを介して天狗へと姿を変える。

その攻撃力は2600とレベル7としては高く、攻撃力2400のガイザレスでは敵わない。

「こいつも、妖狐みたいな効果を持つてるのかよ」

と、反応するシユウに、

「接待のつもり？ それとも侮ってるの？」

シルフィは続けていった。

「どうせ、私が幾ら闇のファイルを持ってても楽に勝てると思ってるんでしょ？ 私が弱いからって、いつもシュウに負けてるからって、一回花を持たせても楽勝だって思ってるんじゃないの？ ううん、きつとそう！ シュウは、やっぱり私を見てなんかいない、虐められて、馬鹿にされて、無視されて、そんな私の支えになって優越感に浸ってるだけ。本当はシュウだって私のこと嫌いなよ！」

いや、嘆いた。

「シルファイ……違う！」

シュウは叫ぶも、

「違うない！ だから私は、もうシュウを見ない！ 耳も貸さない！」と、シルファイの返事。

恐らくは、闇のファイルのせいで、普段以上に心がネガティブになって言わされてるのだろう。だけど、それでもここで口に出すつてことは、間違いなく「心のどこかで本気で疑ってた」感情なのだ。

「それでも、私の前に立つなら。——私のカードの贄になつて？」
「まさか！」

その言葉に私は反応する。

「シルファイ、あなたもしかしてアレができるの？ 他人を光の粒子に変えてフィール・カードごと取り込む能力を」

それは、私が持つてる地縛神の眷属としての能力。増田や牡蠣根に使ったあの力。

「……」

シルファイからの返事はない。けど、もし「できる」としたら、これはやばい。

「シュウ！ やばいことになったわ」

私はシュウに呼びかける。

「もし、このデュエルでシュウが負けたら、その先は死じやないわ。あなたの体も、魂も、カードも全て、彼女の闇のフィール・カードの一部になるのよ」

「何!?! 嘘だろっ」

驚くシュウに、

「本当だ」

アインスはいった。

「私は、鳥乃がその力でターゲットを取り込むのを見たことがある」

さらにフィーアも、

「私も噂では聞いたことがあります。ハングドという組織には、殺処
分した相手を取り込んで証拠隠滅してしまう人がいると」

「う……………あ……………」

さすがに恐怖を覚えたのだろう。シユウが顔面蒼白、全身を震え上
がらせる。

しかし、荒くなった息を整えると、シユウはニツと笑う。

「い、いいぜ。……………望む所だ」

そして、シルフィに向かっていった。

「このデュエルでシルフィを救えないんじや、死んだほうがマシって
奴だよな。なら死より絶望与えられるのは当然だ。それに、どうせ全
てを賭けたデュエルなのに変わりは無えッ！」

シユウは強がりながら、最後の手札をディスクに読み込ませ、

「カードをセット。ターン終了だ！ 来い、シルフィ！ お前のター
ンだー！」

と、熱い言葉でいった。

シユウ

LP4000

手札0

□「《セットカード》」□

□□□

□—「《剣闘獣ガイザレス》」

□「《翼の魔妖—天狗》」□□

□□□

シルフィ

LP4000

手札2

「私のターン、ドロー」

対し、シルフィは淡々とカードを引いて、

「もうシユウなんて見たくない、だからここで終わらせる」

と、墓地からカードを1枚抜き取り、除外ゾーンへ送る。

「墓地の《馬頭鬼》の効果が発動。このカードをゲームから除外して、墓地のアンデット族モンスターを蘇生する。私が呼び出すのは《麗の魔妖―妖狐》」

「また妖狐か!？」

今度は姉姫が変身するエフェクトもなく、普通に特殊召喚される姉姫。そして、再び掌からエネルギーボールを生み出し、

「妖狐の効果。このカードの特殊召喚に成功した場合、相手モンスター1体を破壊する。この効果で、私はもう一度ガイザレスを選択」

今度こそ投げつけられるエネルギーボール。しかし、シユウは今回もセツトカードをオープンし、

「罫カード発動!」グラディアル・イントリユダー 《剣闘 乱入》! このカードはアタシの剣闘

獣をデッキに戻し、『自身が戦闘を行ったバトルフェイズ終了時にデッキに戻して発動する』効果を発動させる!」

妖狐のエネルギーボールが直撃する瞬間、ガイザレスはソリッドビジョンごとシユウのデッキへと戻され、

「ガイザレスの効果で、アタシはデッキから剣闘獣を2体特殊召喚する。来い! 《剣闘獣ムルミロ》! 《剣闘獣ベストロウリイ》! どちらも守備表示だ」

代わりにフィールドに現れたのは、このデュエル中すでに一度顔を出しているムルミロとベストロウリイ。

「《剣闘獣ムルミロ》のモンスター効果! こいつが剣闘獣の効果で場に出てきたとき、フィールドの表側表示モンスター1体を破壊する。消えてもらうぜ、《麗の魔妖―妖狐》!」

直後、ムルミロは大きく口を開けると、なんと妖狐の体を丸飲みにして破壊する。

「この時、本来ならこの破壊をトリガーに天狗が特殊召喚される。が、天狗はすでにフィールド上だから発動しようも無え!」

確かに。魔妖の効果を見る限り、倒しても倒しても2レベルずつ下

の魔妖が新たに舞い戻ってくるのがこのテーマの特徴の様子。しかし、すでにその蘇生される魔妖がフィールド上にいるなら、蘇生効果は当然使えなく場のモンスターをちゃんと1体減らすことができる。「……フィールドにいるなら、同じこと」

シルフィはいい、

「バトル。《翼の魔妖―天狗》で《剣闘獣ベストロウリイ》を戦闘破壊」
今度はガイザレスを出させようとはせず、天狗の一撃でベストロウリイは破壊される。

「が、守備表示につきダメージはない」

「ターン終了」

シルフィがいった所を、

「おう、シルフィ？ このターンで決めるんじゃないのか？」
と、シユウは煽る。

シルフィはキツと睨みつけ、

「ターン終了！」

と、ヒステリっぽくいった。

シユウ

LP 4000

手札 0

□ □ □

□ 《剣闘獣ムルミロ（守備）》 □ □

□ — □

□ 《翼の魔妖―天狗》 □ □

□ □ □

シルフィ

LP 4000

手札 3

「ナメんじや無えぞ、シルフィ！」

しかし、シユウはさらに食い掛る。むしろ、怒りを露にする。

「そんな簡単に俺を沈められると思ったのかよ、おい！」

さらに一人称がアタシから俺に変わった。

「っ」

直後、シルフィの体が怯えるようにビクツとなる。が、シユウは続けて、

「テメエ、俺のことを勝手に侮つてるとか、本人は何だとか、色々決めつけてくれやがって。——そのくせテメエは俺を侮りやがるのかよ！ 俺のターン、ドローだオラア！」

怒声と共に、シユウはカードを1枚引く。

「来たぜ。俺は手札から《スレイブタイガー》を特殊召喚！ こいつは場に剣闘獣がいる場合に手札から特殊召喚が可能だ」

シユウは場に一匹の虎を場に出すと、

「《スレイブタイガー》の効果！ こいつをリリースすることで、場のムルミロをデッキに戻して別の剣闘獣を特殊召喚する！ しかも剣闘獣の効果扱いだ。来い、《剣闘獣ダリウス》！」

ムルミロがビジョンごとデッキに戻り、新たに出現したのは馬型の剣闘獣。

「ダリウスの効果発動！ こいつは剣闘獣の効果で特殊召喚した場合、墓地の剣闘獣1体を効果を無効化して蘇生する。来い、《剣闘獣ベストロウリイ》！」

再び場に現れるベストロウリイ。そしてこのモンスターともう1体の剣闘獣が場に揃つてるといふことは。

「当然、俺はベストロウリイとダリウスをデッキに戻す。いにしえに生きる猛禽の闘士よ！ 戦友との絆ここに束ね、いまこそ歴戦の勇者となれ！ コンタクト融合！ いくぜレベル6、《剣闘獣ガイザレス》！」

再びフィールドに舞い戻る《剣闘獣ガイザレス》。

「ガイザレスのモンスター効果、フィールドのカードを2枚まで破壊する。《翼の魔妖―天狗》を破壊！」

再び、ガイザレスから双つのトルネードが放たれ、天狗を飲み込んで破壊する。

「っ」

さらに、この一撃にはフィールドを込めていたようで、シルフィはト

ルネードの余波に耐えきれず、一度よろめいて倒れる。

しかし、天狗を破壊したということは恐らく。

「毒の魔妖―土蜘蛛」の効果を発動！ 《翼の魔妖―波旬》を除外し土蜘蛛を特殊召喚」

シルフィは、まるで「来ないで」とでも言うように体を震わせながら効果を宣言。

「土蜘蛛の効果、お互いにデッキの上からカードを3枚墓地に送る」

互いのデュエルディスクは効果を受理し、デッキの上を自動的に3枚墓地ゾーンへと移し、内容をビジョンで公開。

シュウ 《コンタクト・オブ・ファイア》《剣闘獣アウグストル》《剣闘獣ラクエル》

シルフィ 《おろかな埋葬》《九尾の狐》《灰流うらら》
「あつ」

私は公開された結果をみて、つい声を出してしまう。

先生が託したカードが、哀れにも墓地に行ってしまったのだ。

しかし、シュウの勢いは止まらない。

「バトルだ。《剣闘獣ガイザレス》で《毒の魔妖―土蜘蛛》を攻撃！」

再びガイザレスからトルネードが放たれ、土蜘蛛を破壊しつつ余波でシルフィの体が転がる。

「《一反木綿》を除外し墓地《轍の魔妖―朧車》を特殊召喚！ このカー

ドは、墓地からの特殊召喚時に戦闘では破壊されない！」

ついにシルフィは露骨に悲鳴をあげるも、

「戦闘を行った《剣闘獣ガイザレス》をデッキに戻し効果を発動。来い！ 《剣闘獣ムルミロ》！ 《剣闘獣ダリウス》！」

デッキから2体のモンスターを展開し、

「そして、《剣闘獣ムルミロ》の効果で朧車を破壊だ！」

ムルミロが大口を開けて、自身より大きな体躯の朧車を丸飲み、破壊する。

直後、

「あ……」

と、シルフィは眩き、目を見開く様子がみえた。

「さあ、これでシンクロモンスターは全員ぶっ倒したわけだ。まだやる気が、闇のフィールさんよ？」

《轍の魔妖―隴車》のレベルは3、つまり最初にシルフィがシンクロ召喚した闇のフィール・カードだった。これよりレベルの低い闇のフィール・カードは存在しない以上、まさに百鬼夜行の如く続いた魔妖の連続蘇生はここで打ち止めになる。

それを確信したシュウはフツと笑い、直後。

「分かったら、これ以上シルフィの心を傷つけない！ さっさとシルフィを元の姿に戻しやがれ！」

怒声を浴びせる。

先生が、私の横についていった。

「シルフィちゃんはね、確かにすぐ自分を護って、他人を否定しちゃう子よ。だけど、後になって自分が言ったこと、やったことに自分が一番傷ついちゃう子なのよ」

「先生……」

「許せなかったのね、シュウちゃん。シルフィちゃんに、あれだけ人を決めつけて、攻撃し、拒絶する言葉を言わせた闇のフィール・カードが。だからキレちゃったのよ」

「なるほどね」

私には、素でシルフィにキレてたように見えてたけど。

「シルフィ」

シュウがいった。先ほどまでの怒りの形相ではなく、優しく諭すような声で。

「もう、あいつらは全員倒したぜ。戻ってこいよ」

しかし、シルフィの肌は元の色に戻ることなく、そっと立ち上がる
と、

「……」

再び無言。しかも、強い拒絶の視線をシュウに返す。

「シル……フィ。まだ、まだアタシの声は届かないのかよ」

シュウの心が、折れ始めたのが見えた。

『あの少女、相当に心の闇が深いな』

ここで再び地縛神が私に話しかける。

『闇のフィール・カードの影響は殆ど消えかかっているのに、未だに眷属の姿を保ち続ける。これはひよっとしたらお呼びがかかるかもしれないな』

(お呼び?)

口に出さず訊ねると、地縛神はいった。

『我とは別の地縛神にだ。……喜ベレズの肌馬、可愛い後輩が仲間入りだぞ?』

(冗談?)

私は心の中で鼻で笑う。

(さすがにシルフィは2年後でもお断りよ。さすがに面倒くさい子すぎるって話)

私は地縛神との会話を打ち切る。

「畜……生。《剣闘獣ダリウス》のモンスター効果、墓地の《剣闘獣ラクエル》を特殊召喚してターン終了だ」

苦みで顔を歪ませながら、シユウはいった。

シユウ

LP4000

手札0

□□□

「《剣闘獣ムルミロ(守備)》」「《剣闘獣ダリウス》」「《剣闘獣ラクエル》」

□□—□

□□□□

□□□□

シルフィ

LP4000

手札3

「私の……ターン」

シルフィはカードを引く。いままで一番、幽霊のように静かで、心がまったく読めない声色で。

「《生者の書―禁断の呪術―》を発動」

ここでシルファイが使ったのは、アンデット専用の蘇生カード。

「効果で、私の墓地から《麗の魔妖―妖狐》を特殊召喚し、シュウの《剣闘獣アウグストル》を除外」

今回何度目かの妖狐の蘇生。さらに、このモンスターが蘇生したという事は、

「《麗の魔妖―妖狐》のモンスター効果、《剣闘獣ダリウス》を破壊」

三度目のエネルギーボールが、今度はダリウスへと襲い掛かる。

「あ……」

ぼーっと、その効果を受け入れるシュウ。

「シュウちゃん！ いまよ、私のカード！」

そこへ先生が叫んだ。

「え？」

「宣言して、墓地の《コンタクト・オブ・ファイア》の効果が発動って！」

「あ、ああ」

シュウは、心の折れたまま、先生に言われるがままに、

「墓地の《コンタクト・オブ・ファイア》の効果が発動」

と、宣言した。

デュエルディスクの墓地ゾーンから《コンタクト・オブ・ファイア》が弾きだされると、自動的に除外ゾーンへと送られたのがみえる。

先生は続けていった。

「このカードは、墓地から除外することで、フィールドのモンスターを素材に炎属性の融合モンスターを融合召喚かコンタクト融合できるのよ」

「炎属性の融合モンスターを、融合召喚かコンタクト融合？……あ!?!」

聞かされるまま復唱した所で、シュウは何か気づいてハツとなる。そういえばシュウのフェイバリットモンスターって。

「気づいてくれた？」

強気な笑顔で先生がいうと、

「ああ」

シユウはうなずく。その顔は段々と生気が戻っていき、

「いくぜ！ アタシはフィールド上の《剣闘獣ムルミロ》《剣闘獣ダリウス》《剣闘獣ラクエル》の3体をデッキに戻す。いにしえに生きる猛虎の闘士よ！ 戦友との絆ここに束ね、いまこそ英雄の皇となれ！

コンタクト融合！ いくぜレベル8、《剣闘獣ヘラクレイノス》！」

場の3体がビジョンごとシユウのデッキに戻すと、そこから融合の渦が発生。デッキの中で混ざり合って出現したのはラクエルをベースに様々な剣闘獣の特徴が見られる大型モンスター。

その攻撃力は3000。

「シルフィ、お前がまだ闇の中に囚われてるってんなら。俺のフェイバリット《剣闘獣ヘラクレイノス》で、お前を光の下に引きずり出す！」

完全に調子が戻ったらしい。再びシユウの口から暑苦しい言葉が発せられる。

が、

「《牛頭鬼》を通常召喚」

シユウの言葉を見無視し、シルフィはここで普通のアンデット族、というより妖怪モンスターを展開。

「《牛頭鬼》の効果を発動。デッキから《馬頭鬼》を墓地に送り、さらに墓地に送った《馬頭鬼》を除外して効果を発動。墓地のアンデット族1体を特殊召喚」

シルフィは、墓地ゾーンからカードを1枚手で引き抜き、いった。

「《骸の魔妖―餓者髑髏》」

「あ」「あ」

シユウ、さらに先生まで口を漏らす中、禿げ頭の男がフィールドに現れると、それが骸に変わり、シルエツトを介して餓者髑髏の姿になる。

攻撃力は3300、残念ながら《剣闘獣ヘラクレイノス》の攻撃力を超えている。

「カードをセット。バトル、餓者髑髏でシユウのヘラクレイノスを攻撃」

感情のない淡々とした攻撃宣言によって、ヘラクレイノスは餓者鬪
體の攻撃を受けて破壊される。

シユウ LP4000↓3700

さらに、シルフィの場には《牛頭鬼》に《麗の魔妖―妖狐》の姿。こ
れを止める術は、すでにない。

「続けて、《牛頭鬼》と《麗の魔妖―妖狐》でシユウに直接攻撃」

2体のモンスターは、フィールを受けた様子もなく、ただ淡々と
シユウを攻撃し、ライフを奪っていつ―。

シユウ LP3700↓2000↓1(根性)

――た、はずだった。

「まだ終わっちゃいねえええっ―！」

叫ぶシユウ。そうだった、彼女のスキルは《根性》だったのである。

このスキルはターン毎に非公開情報として確率で判定が行われ、非
確定ながら「次の相手ターン終了時までライフが1未満にならなくな
る」効果を持っている。

「うん。……分かってたよ、シユウなら《根性》を成功させるって」

シルフィは小声いった。

「え?」

その言葉にシユウは反応する。そして私も。

だって、先ほどのシルフィの小声は、闇のフィールを感じさせない、
優しい口調のように感じたのだから。

しかし現実のシルフィは、いまだ青白い肌をした眷属のまま。表情
も、相手を拒絶する険しいもの。

「ターン終了」

勿論、そう宣言するシルフィの声色も、変わらない。
でも。

「アタシのターン、ドロー」

シユウがカードを引いた直後、

「罨カード発動。《停戦協定》」

と、シルフィが発動したカードは、まるで《根性》を読んで伏せた
ようなバーンカード。

シユウ LP1↓0

シユウのライフは0になった。

停戦協定

通常罠（制限カード）

（1）：フィールドに効果モンスターまたは裏側守備表示モンスターが存在する場合に発動できる。

フィールドの裏側守備表示モンスターを全て表側表示にする。

この時、リバースモンスターの効果は発動しない。

フィールドの効果モンスターの数×500ダメージを相手に与える。

デュエルが終わると、シルフィの体も一旦眷属モードが解かれ、白い肌には違いないが血色のある人間らしい肌を取り戻す。しかし、闇の瘴気ははまだシルフィを纏い、その瞳ははまだシユウに拒絶を向ける。

「これで分かった?」

シルフィはいった。

「私はもうシユウなんて要らない。もう二度と姿を現さないで」

そして、私たちに背を向け帰路に向けて歩き出す。

「シルフィ……」

ゆっくり、スローモーションのように膝から崩れるシユウ。それをフィーアが受け止め、

「大丈夫ですか、シユウ」

「フィーア」

弱弱しい顔を妹に向け、シユウは返事する。そこへアインスが、霞谷さんの肩を借りて近づき、

「大丈夫だよ、シユウ。また今度頑張ればいい」

と、シユウの頭をそつと撫でる。

「ああ……。そう、だな」

姉と妹に慰められ、ほつとしたのか、ゆっくりとシユウはいった。

「アイツは、アタシを贄に取り込まなかった。……なら、きつとまだ

チャンスはある。アタシが諦めない限り」

「ああ。今日は休もう、シユウ」

そういつて、アインスは片腕でシユウを抱き寄せる。

「あのね、みんな」

そんな時、先生はいつたのだった。

「ちよつと提案があるんだけど、乗ってくれりゅ……くれる？」

一回、噛みながら。

シルフィは校門へ向かうことなく、そのまま校舎裏を歩いていった。

真つ直ぐ歩けば、じきに車用の出入り口に辿り着く。普段の校門ではなくこちらを利用するのは、ここからだ校門が遠いのもあるだろうけど、恐らくはそれだけではない。

誰かに会いたくないのだろう。

「シルフィちゃん」

しかし、島津 鳳火先生はあえて彼女の名を呼び、踏み込んだ。

「先、生？」

シルフィは振り返る。すでに闇の瘴気は纏ってなく、代わりにとても疲れ切った顔をしていた。

「シルフィちゃん、さっきのデュエルだけど」

途端、先生の言葉にシルフィは全身を強張らせる。

「あ、大丈夫よ。怒ってないから」

先生はいつてから、

「シルフィちゃん、実はデュエル中とつくに闇のフィールから解放されてたでしょ？ 具体的にはシンクロモンスターを一通り攻略された辺りで」

「……どうして」

「分かるよ、先生だもの」

訊ねるシルフィに先生はいい、

「出してないモンスターは倒しようがないものね。闇から正気は取り戻しても、まだシルフィちゃんには闇のフィールが残ってた。だから眷属化のまままでいられた」

「はい」

シルフィはうなずく。

「あの時、私のEXデッキには6枚目の闇のフィール・カード《氷の魔妖―雪女》が眠ったままでしたから」

「ねえ」

先生はいった。

「聞かせてくれる？　ずっと、闇に囚われたフリをしてた理由」

ここまで対話して、シルフィにはすでに先生を拒絶する感情はないように映った。

「……シユウの言葉は、全部届いてました」

シルフィはゆっくりと胸の内を語り出す。

「だから分かるんです。私が闇のフィールに言わされた言葉に嘘がないように、シユウの怒りも、フィールだけじゃなくて、私にもしっかりと向けられてたことが」

「そう、だったの。私はてっきり」

「私の言葉を、正面から受け止め、真つすぐノーを返したんですシユウは。でも、だからこそ私、怒られたのが怖くて、逃げたくて、やめて、来ないでって、そんな本心を隠すために、闇のフィールを使いました。そして、必死に抵抗してたら、いつの間にかデュエルにも勝っちゃって」

そういえば、怒鳴られてから最後の魔妖が破壊されるまで、囚われてたシルフィは怯えてた。あの時の姿こそが、シルフィの本音だったのだ。

「だから、早くみんなから逃げたくて。あの時すぐシユウの下から去ったんです」

そこまで言ってから、シルフィは下を向き涙を流す。

「でも、シユウたちから離れてから、気づいちゃった。私、シユウと一緒に正義を掲げてるのに、悪い力を使っちゃったって、そんな力でシユウを倒して、逃げる為にもその力を使ったんだって。悪いのは私だったのに、悪い力で拒絶しきっちゃったんだって！　でも、捨てられないの。闇のフィールにまた頼りたいって思っちゃって。どうして

私、こんなに弱いのか？」

「シルフィちゃん」

そこを先生は、つま先立ちで伸びしてシルフィの頭を撫でていった。

「デビルマン、仮面ライダー、テツカマンブレード、それにドラゴンボールもそうね」

「え？」

「実は結構多いのよ。悪の力で闘う正義のヒーローって。ドラゴンボールも主人公、実は悪の宇宙人だったでしょ？」

「あ」

と、シルフィはなるも、

「でも」

「力なんて結局使い方次第よ。大事なのはここ」

先生は、シルフィの胸元をトントンし、

「こ、こ、ろ」

「先生」

涙でぐちゃぐちゃになった目で、シルフィは先生を見つめる。

先生は続けて、

「闇のフィールだって、無理に否定する必要はないのよ。よく言うでしょ、闇があるから同じだけ光があるって。捨てられないなら、使いこなして本当の光のフィールにしちゃおう？」

すると、シルフィは「え？」となって、

「光のフィール？ でも、それはフィール・ハンターズの人が嘘でいった」

「大丈夫。シルフィちゃんならできるよ」

「そういう問題じゃなくって。……ううん」

シルフィは言いかけた言葉を自ら否定し、

「そういうえば、私のデツキ自体元々は虐めで渡されたものだったっけ、ずっと忘れてたけど。デュエルを仕掛けられて、デツキを持ってないって言ったなら、あなたにはこれがお似合いだって、妖怪とかゾンビとか、そういうカードの束を渡されて」

「そうだったの」

「でも、馬鹿にするために渡されたのに手に馴染んで。そのデュエルは負けたけど、その後シユウに生者の書とか《馬頭鬼》《牛頭鬼》とか必要なカードをもらって。後日にまた馬鹿にするためにデュエル仕掛けられたときは、返り討ちにしちゃった」

つまり、元々彼女のデッキはネガティブな要素の入ったデッキだったのだ。それを、シルフィは自力で光にしていた。

恐らくシルフィは、先生のいう「光のフィール」の意味を、いまの自分のデッキのようについて意味で理解したのだろう。

「私、魔妖も闇のフィールも何だか馴染むの。先生、私この力を使いこなしたい！ このカードがあれば、きつとシユウの力にもなれる！ この力の使い方を知ってる人、探してください」

「分かったわ」

先生はというと、後ろを向いて、

「みんなー。そろそろ出てきてー」
って。

「え？」

と、目を丸くするシルフィの前に、私、木更ちゃん、霞谷さん、そしてシユウたちハイウインドが顔を出す。

私は続けて、

「どうも、そのフィールの使い手の二代目ダニエルです」

「え？ え？」

状況が読めないシルフィに、

「その闇のフィール、元は私が持つてる地縛神のフィールの残骸らしいのよ。だから、まさに私はこの分野のスペシャリストって話」

「ダニエル。……ううん、鳥乃さんが？」

何気に初めて、シルフィは私を本名で呼んだ。まあそれはともかくとして、

「地縛神、私の闇のフィール・カードにも確認を取ってみたわ。曰く、シルフィちゃんの持つてるカード程度なら、しっかり自分の心の闇と向き合って、受け入れて、それでいて自分を失わない強い心を保ち続

ける。それで闇のフィールもコントロールできるみたい」

「心の闇と向き合う」

呟くシルフィ。そう、それはシルフィにとっては無茶ともいえる所業。普通の人だって大変なのに、彼女にとっては倍大変のはず。

「ま、そう絶望視しないで。サポートチームも用意したから」

「サポートチーム？」

と、訊ねてきた所に、そのサポートチームは前に出て、

「サポートチームのアインスです」

「フィーアです」

「シュウだ」

そして、最後にそのシュウはニツと笑い、

「ひとりで頑張ろうとするなよ。アタシたちの正義はふたりでひとつだろ？」

「シュウ！」

「でもって、その正義に加わりたい奴がここにふたりもいる」

シルフィが残りのふたりを見る。恐らく、初めて拒絶や否定のない目で。

アインスは手を差し出した。

「よろしければ、君の心の闇と一緒に向き合いたい。構わないかな？」

「あ」

その手に、アインスの甘いマスクの利いた言葉に、シルフィはつい手を伸ばしかける。が、その手は途中で躊躇われ、

「でも、私こんな酷い人間だから」

「気にすんな」

と、シュウ。

「お前よりよっぽど酷い暴走機関車だったんだ。お前の面倒臭さなんて可愛いもんだって」

「誰ですか、その暴走機関車とは？」

「テメエだフィーア！」

本気で分かってないフィーアの頭を、シュウはゲンコツでグリグリする。

アインスはいった。

「もう、君を家族にしたいとか無茶はいわない。君には君の家庭があるからね。でも、君の辛いものを分けて欲しい。苦しいなら一緒に苦しんで、一緒に正しいことをしたい。それくらいは願っても構わないかな?」

「……」

数秒の無言の後、

「その手、とつてもいいの? 私」

「勿論だよ。君の返事を求めてうずうずしている手さ」

「なら」

シルフィはゆっくり前に出ると、躊躇いがちにアインスの手を受け入れ、

「チャンスは一回だけ。一回だけシユウが受け入れたあなたたちを信じてみる、ね」

「ああ」

アインスは笑みをみせ、

「王子プリンスの名に誓って、必ず護ろう」

一回跪くと、アインスは、手をうけたシルフィの甲に、一回くちづけした。

シルフィの顔は真っ赤になったけど、拒絶はしなかった。

「さて、じゃあ4人全員で謝りに行くか」

「え、誰に?」

訊ねるシルフィに、シユウは続けて。

「昨日、お前が転ばせたお婆ちゃんにだよ」

夕日の光が、ハイウインドの家族4人を紅く照らした。

MISSION 22—2年越しの遺言（残響）

私の名前は鳥乃とりの 沙樹さき。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「プロポーション抜群のお姉さんと赤ちゃんプレイしたい」

週末金曜。

私は1話ぶりにハンマーされた。

「沙樹ちゃん。そのネタ2回目だよね？」

「し、仕方ないじゃない。また同じ衝動に襲われたんだから」

その1回目同様、床にめりこむように倒れ、何とかピクピクしながら梓という。

なにせ前回は歳だけお姉さんの合法ロリ駄目教師に、ガワだけお姉さんな14歳のクソガキだったのだから。お姉さん分という熱い想いばかり刺激されて蛇の生殺し、いや欲求だけ募って股を濡らす要素がなかっただけ、ある意味もつとおぞましい。

「梓、先生以外で素敵なお姉さん紹介して？ 二十歳以上で、ちゃんと背丈あって、大人の色香があって、おっぱいあって、優しくて甘えさせてくれそうなの」

「そんなのいないよー」

梓、ゴミを見る目で言わないで。

「あーばぶばぶしたい。素敵な出会いがないかな」

とか私がいつてると、

「ねえ沙樹ちゃん」

梓が突然、影を落とした顔でいった。

「前に私が一番っていったよね？ あの言葉、嘘だったの？」

「え？」

私は目をぱちくり。

「ううん、何でもない」

一転、梓は努めた笑顔で指折り数え、

「えつと、二十歳以上で、長身で、バストが大きくて、優しい大人の人だったね。誰かいたかなー」

なんて、今度は私の要求を受け入れようとしてきたのだ。こんなこと今までなかったのに。

「あず、さ……」

お祭りデート以来、梓の私への態度はどこか軟化した気がする。加えて、その週明けに機嫌が良いようにみえた梓の様子は、いまでも続いていた。

ただ、その正体は何なのか、いまのやり取りでちよつとだけ分かった気がした。

私はやさしく笑い、

「ま、そんな素敵なお姉さんが100人言い寄ってきても、どっちを選べって言われたら悩む余地なく梓って話だけど」

すると梓は、

「もう。お祭りの日から沙樹ちゃん恥ずかしいこと言いすぎだよー」

とか言いながら、とつても嬉しそうに照れる。

まるで恋人の会話のようだ。確かに、私としては特定の誰かと付き合うなら梓しかいないわけだけど。梓のほうは、逆にノーマルだからありえないのよね。

「あ、そうだ沙樹ちゃん。本当に大事なら、明日少し付き合っって欲しい所があるんだけど」

「え？ 明日？」

「うん」

うなづく梓に私は、

「ごめん。今度の土日だけはどうしても予定があつて」

「え」

恐らく、笑顔で承諾してくれるものと思つてたのだろう。途端、梓は寂しそうな顔になり、

「それって、私より大事なこと、なの？」

本人は気付いてないのだろうけど、梓は、露骨に独占欲を口にしてた。「私より大事なのか」なんて、いままでの梓なら絶対口にしないような物言いだつた。

「梓が何より優先だから、土日は一緒にいけないのよ」

「言ってること分からないよ」

「よね。自分も言っただろうと思ったわ」

私は一回誤魔化し笑いし、

「いつものアレよ。大体月1頻度くらいで1泊2日の外出するやつ」と、私は、すまなさに顔を逸らしていった。

「うん。そうだとはいってたけど」

梓は言いながらも、

「でもそれって、本当にキャンセルできないこと、なの？」

「悪いわね。梓との今度の土日より、梓との来週や再来週、これからの毎日をずっと一緒にいれるのを優先したいから」

「キャンセルしたらできないの？」

「可能性はある」

と、私がいうと。

「……そっか」

梓は「寂しいけど仕方ないよね」って顔をして納得してくれた。

私はどこに外泊するのか、どうして外泊するのか等の詳細は一切知らない。だけど、梓はそういつて受け入れてくれた。

無理して納得する梓の姿に、私は「とんでもない選択をした」んじゃないかと思わずにいられない。たとえ選択肢は「断る」しかなかったとしても。

で、私はこうとしか言えないのだ。

「悪いわね。代わりに月曜の放課後どこかバイキング奢るわ、まだ入店禁止になってない所探して」

「うん」

うなづく梓。

この日、私と梓はいつもの半分くらいしか会話をしなかった。

——土曜日、早朝。

私は田村崎研究施設にいた。

予定の時間より早く来ていた私はロビーで待機していたところ、

「おはようですわ、沙樹」

と、声をかけられる。振り返ると、鈴音さんとその父親である森口博士が立っていた。

「おはよう、鈴音さん」

「早いですわね」

「まあ、昨日は完璧にオフだったし、暇だったのよ」

「それならいいのですけど」

と、いつてふたりは対面の席に座る。何を心配しているのかと思えば、

「先日、任務中に地縛神と対話したそうですわね」

鈴音さんはいった。

「まあね」

私はうなづく。

「あれから特に変化は」

「何も。あれ以降、私から地縛神に話しかけてもだんまりだし、眷属化も起きてないわ」

「よかったですわ」

ほっとする鈴音さん。その隣で博士はいった。

「ですが、自覚のない所で何かが起きてるかもしれません。今回はいつもより念入りに行わせて頂きますが、よろしいですか？」

「まあ当然そうなるって話よね。お願いします」

私は頭を下げた。

今日は定期メンテナンスの日である。

体の半分が機械である私は、普通の人間より生命自体が不完全にできている。いつ生身の血肉が機械に拒絶反応を起こすか分からないし、脳や精神だって同様だ。

その為、無線通信で繋がってるコンピューターが常に全身を制御・監視し、副頭脳としてAIプログラムも搭載してある。その上、私は地縛神の干渉も受けてる為、その制御プログラムも入れているので余計に依存が強い。

だからまあ、ぶっちゃけ言うと。

私は定期的に全身メンテナンスを行わないと生きれない体なので

ある。それが、昨日梓の誘いを断った理由だった。

「失礼致します」

ここで研究員らしき男性が私たちの前に立っていった。

「準備ができました。皆様、お部屋へどうぞ」

「行きましようか」

森口博士が席を立った。

「そうね」

言われて私、そして鈴音さんも席を立ち、博士に案内される形で、メンテナンス用の部屋へと移動する。

ロビーを出て一般人立ち入り禁止区域の廊下を歩く事数分、辿りついた部屋は、部屋全体が装置とコードで覆われた、まるでSF世界のような一室。

私が半機人になった時、一番最初に目を覚ました場所である。

「予定だと、検査が終わるのはいつ頃？」

私は訊ねながら、カプセルを開き中に入る。

「今回は少し遅く、日曜の25時以降になりそうですわ。破損したワイヤーも取り変えなければなりませんし」

と、鈴音さん。つまりギリギリ月曜だ。普段なら24時間前後で終わるので、本当に今回は過剰な程に点検するらしい。

「なら、いつそ朝起こして貰っていい？ どうせ深夜に起きても明日に支障でるだけだから」

というのは、基本的にメンテナンスはカプセルの中で行われ、その間私の人格は副頭脳のAIに切り替わる。それも応答はコンピューターを通して行う為、実質的に私自身は長い長い睡眠に入るのである。なので、普段はついでに職業病の睡眠不足を解消し疲労も一緒に取って貰ってるわけだ。それなのに特に意味なく深夜に起こされたらたまったものじゃない。

「分かりましたわ」

うなづく鈴音さん。

私が横になると、カプセルはゆっくりと閉じ、口元には酸素マスクが取りつけられる。

要は全身麻酔と同じ要領だ。程なくすると、自分でも気付かない間に、私の意識は闇へと閉じていった。

で、気づけば24時間以上過ぎているのだ。普段なら。

目を覚ましたとき、私はコンピューターだった。

「——え？」

私が困惑の声をあげた所。実際に発声はされず、代わりに傍のモニターからテキストファイルが表示され。

『え？』

と、だけ表示された。

どうやら、場所は先ほどのメンテナンスルームと同じ部屋のようだ。それでもって、いま私の視界はコンピューターと繋がってるカメラのものらしい。首をまわしていると、おおっ！ 回る回る。360度視界を移動できるって中々新鮮。しかし、調子に乗ってグルグル首をまわしていると、現在進行形でメンテナンスを受けている私が見えた。骨や筋肉などが繋がったまま四肢が切り外され、複数のマニピュレーターが悪の組織の改造手術みたいに全身を弄繰り回している。うっぷ。

「起きたみたいね」

言われて私は気づく。首を動かすと、ひとりの女性がパイプ椅子に座って私(?)を見ていた。人間の体じゃないから、気配で察することができなかつたのだ。

『高村司令？』

「ちつす」

その女性、高村司令はモニターに表示された私の反応をみて、一回挨拶。

「寝てた所悪いわね。今回ちよつと報告と相談があつて、いったん意識をそつちに移させてもらったわ」

『報告と相談？』

私が訊ねる（当然発声はしないけど）と、

「今回のメンテ代だけだし、ほら今回いつもより大掛かりで検査して

るじゃん」

『ああ』

その時点で私は察し、

『足りなかったわけね。今月の私の給料じゃ』

「そ」

司令は肯定する。

「で、ちようどさつきある大人の女性から護衛の依頼がきたんだけど
ヤ」

『請けます』

私は即答した。

「いや予想通りの反応だけど、話はもう少し聞いて頂戴」

『請けます』

呆れた顔で高村司令は腕を組み、

「依頼人はイリス・ルース・マリア・ダ・ソンブラ・カキネ。年齢は2
3歳」

『請けます』

「ちよつと黙つて。この名前というか聞き覚えはないの?」

『え?』

私は請けますbotをやめて考える。しかし、分からない。私には
そんな長つたらしい横文字の知り合いはいないはず。

「名前の最後に注目して名前を復唱してみて」

司令が言うので私は、

『イリス・ルース・マリア・ダ・ソンブラ・カキネ。イリス・ルース・
マリア・ダ・ソンブラ・カキネ。……カキネ?』

ここで、やっと私は違和感に気づく。

「気づいたみたいね」

と、司令がいうので、

『どういう事よ、これ』

「今回の依頼人はB共和国のソンブラグループの娘さんよ。そして、
牡蠣根 水一と愛人の間にできた娘でもあるわ」

牡蠣根 水一とは、かつて私が依頼の中で殺害し、地縛神に取り込

んだもののひとりである。表では製薬会社の社長をしてるけど、裏では「陵辱の暴王」という通り名を持ち追星組というヤのつく業界の組長。そして、麻薬や奴隷売買に手を出し、私の中学時代の数少ない友人を死に追い込んだ最悪の男だ。

『そんな奴の護衛をわざわざ私に?』

「そんな奴の護衛だから、わざわざアンタなのよ」

つまり恨みを晴らして良いということだろう。本来ならこの件、私は絶対に担当にはいけない人材だから。もしくは誰も請けたくない依頼という可能性もある。ハングドは正義の組織じゃないといえ、好き好んで悪の味方をする組織でもないから。

「今回の依頼はドラゴン・キャノン。つまり、牡蠣根の娘は後がない状態に追い込まれてるわ」

『なるほどね』

これは後者の可能性も濃厚だ。いや両方か。

ドラゴン・キャノンとは、シティーハンターという漫画におけるXYZに位置するハングドのキーワードである。しかし、情報化社会である現代でこれを発したということは、すでにこの一件は外部に漏れ、依頼者は『ドラゴン・キャノン』を発する前より危機的な状況に置かれてる可能性が高い。

それ故、私たちハングドも危険性の高い依頼になるので通常より高く金銭を要求せざるを得なく、それでも『もう後がない』と訴えられる者だけに許される依頼方法なのだ。

しかし、それならメンテナンス後に向かっても手遅れでは。そう思ったけど、時間を確認すると現在すでにメンテ開始から丸1日以上経過した日曜17時。

「アンタにはメンテナンス完了次第、準備を整え早朝、待ち合わせ場所に指定した『喫茶なばな』に赴き、依頼人と接触。詳しい経緯を聞き、悪意の有無を確認した上で、可能な限り金銭をばったくれ。それでも、依頼人が組織や牡蠣根の被害者に悪意に似た感情を持っていたら、はたまたアンタの要求する報酬額に『出せません』とかほざいたら」

司令は中指たてて、いった。

「許可するわ、遠慮せず犯れ。アンタの友人と同じ末路を牡蠣根の血に刻み込め」

私は発情した。昂った。

——現在時刻、午前06:20（月曜）

あれから、メンテナンスが終わった私は、司令から頂いたイリス以下略の資料を確認しつつ、デッキや武装の調整を終え、木更ちゃんと合流しての『なばな』へと赴いていた。

「お待たせしました。ご注文のモーニングになります」

店員さんが席にふたり分のプレートとホットコーヒーを置く。残念ながら今日は水菜さんのシフトではないらしい。とはいえ、若くて綺麗な女性だったので私はお尻を撫でまわし、

「きやつ」

と、素敵な反応を聞きながら、

「で、木更ちゃん的にはどう思う今回の依頼」

「とりあえず、いまのセクハラの様子はフォトに収めましたので」

ちよっ!?

「待って、やめて！　いまの梓にそれは地雷な気がするガチって話で」

「え、は、はい」

いつもに増して必死なのを察したのだろう。少し動揺しながら、

「あの、何があったのですか？」

心配そうに訊ねる木更ちゃん。その間に店員さんは逃げるように持ち場に戻ってしまった。残念。

「うん。この前のお祭りの日からかな、勢いで私の一番は梓ってアピールしまくっちゃって。嬉しく思ってくれてるのは嬉しいんだけど、それが逆に危ういメンタルに入ってるみたいで」

「納得しました。徳光先輩、嫉妬独占欲どちらも深そうですから」

ああ。

「やっぱ、木更ちゃんにもそう見えるのね」

まさに週末なんて「私より大事な用事なの？」って、驚くほど嫉妬や独占欲を目の当たりにしたわけだし。

「ま、そんなわけだから。木更ちゃんも刺されないように気を付けて」と、私は冗談のつもりで言ったのだけど。

「はい。勿論」

木更ちゃんはいった。

「言われなくても、もう前々から注意してることですので」
って。

「え、梓って刺しそうな子なの？ 冗談に冗談で返してるんじゃないの？」
って？

「それでは、そろそろ仕事の確認に入りましょうか」

誤魔化された!? まあ、確かにそろそろ仕事に入らなくちゃいけない状況にはあるのだけど。なにせ、すでに事態は動いてるのだから。

「そ、そうね。じゃあ木更ちゃん、とりあえず気づかれないようにそつと辺りを確認してみて」

私は小声でいった。

「え？ はい」

と、木更ちゃんはタブレットから鏡アプリを使い、首を動かさずに周囲を確認。私は続けて、

「いるでしょ。隅の席に怪しそうな黒コート」

「いますね」

姿からして、恐らく黒山羊の実の連中だろう。普段はヴェーラが定位置にしているボックス席に、男が3人と女性がひとり。特に女性は、コートと一体型のフードを深く被り、その上から襟付きのマフラーでフードを固定しつつ口元を覆うように巻いていて、殆ど顔が分からない。

「のんびり再確認してる余裕はなさそうね。顔だけ頭に入れておいて、辺りに気を配っておいて」

と、モーニングのトーストを齧りコーヒードリで流し込む。もちろん顔というのは依頼人のを指している。すでに、そのワードを発することすら危険だと思ったのだ。

「分かりました」

察しのいい木更ちゃんは、そのまま引き続きタブレットを弄り「今

時の女子高生です」って風貌をみせながらモーニングを食べ進める。程なくして依頼人がやってきた。

褐色でスレンダーな肢体をした長身でエキゾチックな風貌のお姉さんだった。露出が高めな服を着ている割に、胸の膨らみは残念ながら確認できなかつたが、長い髪に碧い瞳が美しい。

「ミ^{コーヒ}ー^杯ダ^くウン^だ カ^だフ^さエ^い」

依頼人のイリスはカウンター席に座ると、店員に何かを話しかける。しかし、その言葉は英語でさえなく。

「あ、えつと……。そ、ソーリー。あ、アイドントスピークイングリッシュ」

動揺した店員が発音のなっていない英語で「ごめんなさい。私英語話せません」と返す。とはいえ彼女には通じたようで、

「カラ^あンパ!? ごめんなさい。コーヒ^ーをお願いします」

と、イリスは日本語で言い直す。思ったより滑らかな発音だった。

「は、はい。少々お待ちください」

店員が慌てて厨房に進むと、入れ替わりで先ほどの男のひとりが立ち上がりイリスの下へと向かう。

私たちが様子をうかがう中、

「見つけたぞ」

と、男はにやりと笑った。

「一緒に来て貰おうか」

「……」

イリスは、しばらく無言で辺りをうかがってから、落ち着いた物腰で、

「分かりました。ですが、せめてコーヒ^ーを頂いてからで構いませんか? せっかく頼んだのに飲まずに出たくもありませんから」

ちやうどその時、厨房から店員が現れ、

「お待たせしました。ホットコーヒ^ーになります」

「ありがとうございます」

受け取るイリス。が、直後。

「そして、ごめんなさい」

と、淹れたて熱々のコーヒーを男に向けてぶちまけたのだ。

「うわっ」

咄嗟に腕で顔を護る男。その隙にイリスは席を立ち、店から逃げ去ってしまった。

「チツ、逃がすな！ 追え、ガルム！」

叫ぶ男。すると、ガルムというらしい顔を隠した女性は、

「了解。さあ、楽しいタノシイ追いかけてこの始まりよ」

人間のものとは思えない跳躍をもって、店内の障害物を足場にぴよんぴよん跳び進み、店の外へと出てしまう。そんな少女の後に続いて残りの3人も追いかけた。こちらは普通に。

「先輩」

木更ちゃんがいった。みると、すでにイリス含めた3人分の食事代がテーブルに置かれてあった。

「先回りするわ。ついてきて」

私が席を立つと、続けて木更ちゃんも席を立ち、

「はい」

任務開始。私たちも店の外へと出たのだった。

木更ちゃんのサポートもあって、私たちは無事先回りして先にイリスと接触する機会を得た。

数日前、お祭りの会場になった公園を走るイリス。彼女が茂みに隠れようとした所、

「そこへは行かないほうがいいわ、イリスさん」

私は、公園のベンチに腰かけていった。

「っ」

イリスは振り返り、

「誰？」

「あなたの味方よ。ちよつと忠告させて頂戴。その茂みの先にはさっきの男たちが先回りして張り込んでるわ。逃げるなら右折して——」
と、伝えてる途中だった。

イリスは懐から拳銃を出し、その場で私を発砲してきたのだ。しかも、フィール込み。

「ッ！」

完全に不意打ちだった為、私はまともに弾丸を受ける。胸に数発分の穴が開き、私は血を流しながら一度倒れる。

すでに目で追うことはできなかったけど、イリスの足が茂みの奥へ向かっていくのが聞こえた。

「先輩、大丈夫ですか？」

彼女の気配が消えた辺りで、木更ちゃんがベンチの後ろから顔をだし、《治療の神 デイアン・ケト》を発動した。

銃撃の狙いが甘かったのと、私の体が半分機械だったおかげで、なんとか一命を取り留めてた私は、木更ちゃんの回復魔法カードの効果で動ける程度には回復。

「助かったわ」

痛みに耐えながら、私はベンチを杖に何とか体を起こす。どうやら今すぐ自力で動くのは無理そうだった。これは早めに修理が必要ね、せっかく今朝メンテナンスが終わったばかりなのに。破産しそう。

しかし、黒山羊の実に狙われているというのなら、余計に悠長に構えているわけにもいかなかった。イリスと合流し、何が起きたのかを聞きださないと。

「木更ちゃん、肩貸して。すぐ依頼人を追いかけるわ」

「分かりました」

木更ちゃんの肩に腕をまわさせて貰い、何とか私は立ち上がる。

私は余った手で木更ちゃんの太腿を撫でながら、

「じゃあ、行こっか」

「はい」

木更ちゃんは、一応諦めムードの顔色を見せてはいた。

だから、私はここぞとばかりに下着の内側まで撫でまわした。とても柔らかかった。

茂みの奥に進むと、イリスと対峙する3人の男とガルムの姿がみえた。

男共はイリスに銃を向け、

「もう逃げられないぞ、イリス・カキネ」

「私はイリス・ダ・ソンプラよ」

「つい最近まで愛着持って牡蠣根姓を名乗ってた者がよくいう」

「真実を何も知らなかっただけよ」

彼女の言葉に嘘はない。どうやら本当に牡蠣根の姓を名乗りたくはないらしい。

「まあいい」

男のひとりが一歩前に出る。

「お前に残された道は、我々と共に歩むか、死だ」

「なら、殺しなさい。殺せるものなら！」

気丈に叫ぶイリス。

「そうか、残念だ」

男はいい。

「殺れ」

との指示に、残り2人の男が発砲。

その2発の弾丸を、私は手持ちの拳銃と内蔵銃の二丁の発砲で弾き返す。

『何っ』

驚く男共。イリスも横目でこちらを見て、

「貴方はさっきの」

で、3人を指揮しているらしい男は私たちを見て。

「レズの肌馬とK。ストーカーか」

どうやら、ついに木更ちゃんにもこの業界で呼ばれる名前がついたらしい。なお、Kとはかすが店長のことだろう。

さて、助けに入ったはいいいけど、この体でどこまで戦えるだろうか。とか考えてると、

「くそ、こいつだけは無断で攻撃できない。退却するぞ」

指揮している男がそう言い始めたのだ。

「え、どうしてー?」

ガラムが不満そうに返す。しかし、

「あいつを敵にまわすと、プライド様はともかくグラトニー様がなに言うか分からない」

「嫌よ、私アイツで遊びたい。あそびたい」

「我慢しろ。殺るのはプライド様から一筆書いて許可を貰ってからだ。総員、一時撤収！」

と、いった感じで黒山羊の実は《強制脱出装置》を使ってこの場を後にした。

しかし、これで一安心というわけにはいかず、今度はイリスが私に銃を向けてきた。

「やめてください。私たちはあなたを助ける為に来たんです」

木更ちゃんはいう。しかし、

「私は誰も信じない！ たとえ貴方が警察でも、悪意をもって私に接触したに違いないのよ」

相当な人間不信に陥ってる模様だった。喫茶にいたときの落ち着いた風貌とは打って変わり、余裕のない敵意をすっかり顔に出している。だけど、こちらも「はいそうですか」と帰るわけにはいかないし、背を向けたら撃たれるだろう。

「ドラゴン・キャノン」

私はいった。すると、イリスは、

「あ」

と、目を見開く。

「私たちは、あなたに呼ばれて来たんだけど。それでも私たちを撃つって話？」

「もしかして、貴方たちがハングド？」

「そ」

私はうなずく。——が、ここで私は意識が遠のいていくのを感じ、「しまっ……ごめん木更ちゃん。彼女を連れて研究施設……に……」
ここで私の意識は闇に沈んだ。

——現在時刻7:30。

気づいたら私は再びコンピューターだった。

しかも今回はカメラから映る視界がハングドの事務所。どうやら意識そのものは研究施設のコンピューターながら、事務室内のノート

パソコンと通信で繋がってるらしい。

『生身の体は修理中?』

再びモニターからテキストファイルが開いて表示される。

「あ、先輩。大丈夫ですか? はい、先輩の体は修理に入ってます」

木更ちゃんがモニターを覗き込んでいった。

『あ、木更ちゃんこっちこっち。視界はカメラを通してるから覗き込むならこっち見て。特に谷間を覗かせるように無防備晒してくれたらよりグッド』

「大丈夫のようですね」

ああ、木更ちゃん覗き込むのもやめて席に座っちゃった。

現在、事務所ではハングドの構成員たちがスタジオミストの仕事に追われている。司令は席を離れており、鈴音さんが主導となって、いまのうちに修羅場を回避しようと必死こいてる。

そんな表事業を邪魔しないためもあるだろう。私という名の仕事用ノートパソコンは事務所入り口の応接間に置かれ、対面のソファに木更ちゃんとイリスが座っていた。

「ごめんなさい。私が早まったせいで」

すまなそうにイリスさんがいった。

『気にしないで。攻撃されるのを想定しなかったこっちが悪いんだから』

私は返す。実際は想定してたはずなのに、とんだ大ポカをしでかしたものだ。

「ですけど」

『そんな事より、依頼の確認に入らない? まだなんでしょ?』

訊ねると、木更ちゃんほうなずき、

「そうですね」

と、数枚の資料を手にとって読み上げる。

「イリス・ルース・マリア・ダ・ソンブラ・カキネ。かのソンブラグループの娘にして現代表。年齢は23歳。家族構成は母を亡くしたいま妹と二人暮らし。母は中小企業にすぎなかったソンブラ社をB共和国有数企業に育て上げた立役者ですけど、今年某日に謎の死を遂げ

た。ここまでが一般的な認識と思われるけど、間違いはありませんか？」

「はい」

うなずくイリス。木更ちゃんは続けて、

「では、これは一般的には流通していない情報ですけど。父親は牡蠣根製薬会社の前社長にして追星组组长、“ 陵辱の暴王 ”牡蠣根 水一。あなたの母親は牡蠣根と愛人関係にあり、牡蠣根 水一の死から数日以内に亡くなっています。こちらに関しては」

「それも間違いありません。あえて言うのであれば、母は数日以内ではなく同日に亡くなりました」

実は、すでに牡蠣根の死は表の世界でも認知されている。

当初、牡蠣根は遺体が発見されなかったために指名手配されていたのだけど、先日、ある人間が牡蠣根の死を自白し、事実が日の下に晒されたのだ。その経緯の裏には、シャドウ・ブラザーフッド影の同胞団”と呼ばれる怪人たちの活躍があると噂されている。

……しかし、同日ね。

「実は、ソンプラググループは牡蠣根製薬の協力があつていまの大企業へと発展したんです。薬の原料をわが社で極秘に栽培し、密輸を通して牡蠣根製薬に送る。中には牡蠣根直々にこういう薬品を作りたいから原料を用意してくれという依頼もあつたそうです。それで得た莫大な利益で事業を展開し続けた結果がいまのソンプラググループで」
『その中には、当然ドラッグの原料も含まれてたって話？』

でなければ密輸で送るなんてリスクを負うはずがない。

イリスの表情は沈む。

「知りませんでした。我がグループが、いえ母がそんなものを作つて父に送っていたなんて。そのうえ、密輸という手段が形だけ違法なだけで、どこでもやってる当然の輸出手段だと思つて生きてきました。ずっと洗脳されていたんです。母に、いえ牡蠣根という悪魔によつて」

『という事は、いまは牡蠣根の悪事も色々知ってるってこと？』
すると、

「本当に突然だったんです。母が命を絶つたのは」

と、突然その話題に触れだした。

「確か、時刻は朝10時頃でした。当時、私と母は仕事が休みで、自宅と一緒にお茶を飲んでました。事件の凶兆なんて何もありません。なのに、何気ない会話の真つ最中、突然母は脈絡なく舌を噛み切ったんです。そのときの母の最期の顔は、いまでも鮮明に思い出せます。自分が舌を噛み切ったことに驚き、そして私を見て『あなた誰?』って、そんな顔をして逝きました」

間違いない。例の後催眠だ。

確かB共和国と日本の間には、ちょうど半日程度の時差がある。あの日レストラン追星に到着したのが21時過ぎだったのを踏まえると、牡蠣根の死とイリスの母の死の時間は確かに合致する。

「恐らく、私を生んだときには既に母は正気ではなかったのでしょうか。発掘した資料によると、牡蠣根と関係をもってからの母は、牡蠣根の望むままに事業を改革し違法に手を染め、実質的にあの男の為の会社へと変貌させていきました。そして、牡蠣根が亡くなった際に何かの力が働き、母は舌を噛み切らされたのでしよう。結果、死の間際に母は二十数年ぶりの自我を取り戻し、生んだ覚えもない見ず知らずの娘に看取られて亡くなったのだと思います」

「酷い」

木更ちゃんがり口元を抑えショックに耐える。

私は訊ねた。

『牡蠣根が奴隷売買に手を出してたことはご存知?』

「はい。その業者の登録と派遣を請け負う会社もソングラグループでしたから」

『そこで販売される奴隷には「牡蠣根が死んだら舌を噛み切って自殺する」後催眠がかけられてたわ』
「っ」

さすがに、そこまでは知らなかったようで、イリスは顔を真つ青にして言葉を失う。

つまり、あの瞬間、助けられなかった大勢の奴隷が舌を噛み切って

自殺し、その中に彼女の母も含まれてたのだ。これも被害者は大抵が行方不明者か戸籍上すでに亡くなってる子だったので、表の問題には至らなかつたのだけど、やはりこれも影の同胞団の活躍によって、ちよくちよく事実が公表されてるらしい。

「そんな。私が、せめて私をもっと早く色々知ってれば」

『その時はあなたも同じ催眠をかけられてたわ』

私はいった。割と感情込めて言いたい台詞なのに、文字でしか表現できないのが苦しい。

『そこまで会社が侵食されてたってことは、牡蠣根の中であなたも利用する予定だったのは間違いないわ。さしずめ母親の洗脳教育を幼少期から受けてもらい正気のまま牡蠣根の駒になって貰う、といった所でしょうね。洗脳やクスリで得た人材だと、どうしても欠陥がでるでしょうから』

でもって、私は続けて。

『そんなあなたが、もし牡蠣根の存命中に下手な手を打ったら、恐らくあなたの処女は牡蠣根のものよ』

「母のように、そして奴隷のようになってたという事ですか？」

『そ』

さりげに私、少しセクハラな発言をしたのだけど、イリスは真面目に受け取った模様だった。

常に気を張り、それでいて目力は強くなりすぎず、クールビューティーな気品を感じさせる。とてもシリアスの似合うお姉さんだ。同じお姉さんでも残念美人の神簇とは大違い。

『さて、近辺状況が分かった所で、どうしてあなたは日本に来たのか、なぜ狙われてるか、そして私たちは何すればいいのか確認したいのだから』

「はい」

イリスは姿勢を正しなおし、

「日本に来たのは、全てを知るため、そして避難の為です」

『避難？』

訊ねると、

「はい。ソンプラグループはすでに解散の準備に入っています。ドラッグの栽培プラントはすべて処分し、違法な事業を行っていた子会社も現時点で発覚した分は本社に先駆けて解散を進めております。ただ、その結果一部の社員や売買業者に命を狙われる目にあい、本社にいたくても解散が進められるだけの準備をしてからやむなく日本に避難しました」

『向き合わないの？ 親と会社の罪に』

「向き合うからこそその解散です」

イリスは真つすぐカメラを見ていった。

「すでに全グループには、近々今まで私たちがしてきた事を世間に向けて公表し、謝罪の後、新たに慈善事業の会社を建てる事を伝えてあります。そして希望者にはこれまで通り雇用を約束すると。つまり命を狙う社員は、違法事業からの撤退に反対してる人たちなのです」なるほど。責任から逃れるわけではないらしい。かつ、すべて世間に公表しようという姿勢も正しい判断だ。慈善事業に入るなら、余計に隠し通さないと運営に支障がでるように見えるかもしれないけど、実は悪手なのだ。第三者に指摘された際のリスクがあまりに多いうえ、現代の情報社会においてずっとやましい過去を隠し通すのは不可能に近い。

さすがにソンプラ社のレベルになると、ハングドが手をまわして揉み消せる範疇を超えてるしね。まあ頼まれれば可能な限りやってみせるけど、恐らく彼女はそれを求めはしないだろう。

「すでにグループ内の資料はすべて本社に纏めて保管し、全て目を通してあります。ですが、私たちが牡蠣根に流したドラッグや業者が、どのように使われたのかという情報はありませんでした。両親はソンプラを使って何をしていたのか、どれだけの人に被害を与えたのか。父はどうして死んだのか。すべてに向き合う以上、私は知らなくてはならないのです」

『それが、日本にきたもうひとつの理由？』

「はい」

うなづくイリス。真面目というのか正義感が強いというのか。と

ても半分が牡蠣根の血だなんて信じられない。

「ただ、私が日本に来たとき、新たな問題が発生しました」

イリスがいった。

「日本に到着し、空港を出たら、突然黒山羊の実という組織とフィール・ハンターズが互いに奪い合うように接触してきて」

「フィール・ハンターズも、ですか？」

驚く木更ちゃん。イリスは「はい」とうなずく。

「相手に奪われるか、もしくは自分の組織のものにならないければ殺害する。どちらも、そんな様子でした」

『大麻に奴隷売買、B共和国へのパイプ。欲する理由は腐るほどあるわね』

いま現在、ソンプラググループは犯罪組織にとって喉から手が出たいものが揃いすぎてる。例えドラッグの原料自体がなくなっても、現状その製法って情報は残ってるわけだから。

「ということは、かすが様やフェンリルさんから情報を聞き出すこともできないのですね」

木更ちゃんも当てにしていたコネが使えないのが分かり、どこことなく残念そう。って、かすが店長に協力求めようとか思ってたのこの子。

「ですのでハングドの方には、私がB共和国に戻るまでの護衛をして頂けると嬉しいのですけど」

イリスはいった。

私は、すぐ返事をするより先に、

『とりあえず、牡蠣根製薬に直接話を伺う予定なら当てにできないわ』
「え？ 何故ですか？」

訊ねるイリス。木更ちゃんは資料を1枚、イリスの前に出して、

「牡蠣根製薬は現在、新たな社長が就任したものの、取引先の情報や過去の業績など運営に必要な情報を損失した状況にあるそうなんです。恐らく自身が死んだときに、データが削除されるよう仕組んでいたのでしょう。そのうえ特捜課やNLT、怪人などの活躍などによって、削除された情報を知る企業の裏に関わってた方が会社の内外問わず

次々に逮捕されてまして、現在は現場や末端に支えられてはいるものの近いうちに倒産するのが現実視されてます」

「そんな」

イリスは資料を読むと落胆した顔をするも、すぐ力強い瞳で、

「なら、父の殺害に関わってる人を探せば」

と、いったので。

『あ。それ私』

「え？」

『私なのよ、牡蠣根を殺したの。過去、ある人間の不審死と一緒に調べてって依頼があつて、その正体がい潰した奴隷の廃棄だった。で、犯人の逮捕も依頼内容だったから牡蠣根と接触。色々あつてやむなく殺害に至ったわ』

そこまで言ってから私は、

『恨んでくれてもいいわ。あなたの実父を殺したことに変わりはないって話だし』

「後悔は」

『してない。してたらハングドやっつけてけないわ』

「そう」

イリスは酷く落ち込みながら、それでも崩れたりせず事実に向き合
い、

「なら、せめて詳しく教えて頂けますか。その依頼の経緯と、なぜ父を殺す必要があつたのか」

『あとで資料を送るわ。司令から許可が出たらだけど』

なにせ、その資料には僅かであれロコちゃんの個人情報載っている。彼女の名前をAさん（仮）と修正して出すとは思うけど、それでも契約面ではタブーに触れるのだ。

ここで、木更ちゃんのタブレットに通信が届いた。

「はい、藤稔です」

木更ちゃんは数秒ほど通話をした後、私に向けていった。

「先輩。研究施設からですけど、先輩の修理は夕方には終わるそうです」

『了解』

私は返事し、

『なら木更ちゃんはそろそろ学校に通学してて？ その間はこちらで別の人に護衛頼むから』

「わかりました」

うなずき、鞆を手に取る木更ちゃん。

「ということは、私の依頼は」

と、確認をとってくるイリス。そういえば返事してなかったっけ。

『もちろん受けるわ。父の仇でいいのなら、だけど』

「お願いします」

躊躇いを隠すように、意識して力強くイリスはいった。うん、やっぱり父を殺した人には頼みたくないわよね。

「イリスさん」

そんな様子を、木更ちゃんは心配そうに眺める。

『分かった。じゃあ私の体が戻ってくるまでは無償サービスってことで、本契約は保留にするわ』

「え？」

驚くイリスに、

「いいのですか、それで」

と、訊ねる木更ちゃん。

『むしろ、いまのイリスさん相手に依頼は無理って話』

「どうしてですか？」

今度はイリスが訊ねる。私はいった。

『依頼は信頼関係が重要よ。いくら私があなたを護りたくても、いざって時に依頼人が信用してくれないと護りきれないわ（イケボ）』

……うん。イケボで喋ったつもりでいたら、しっかり文字に反映されちゃった。

そこへ。

「安心してくださいませ。サービス中も安全は保障しますわ」

と、会話に入ってきたのは鈴音さんだった。

「鈴音さん、大丈夫なのですかお仕事は」

少し驚きながら木更ちゃんが訊ねると、

「表のお仕事にだって休憩時間は必要ですわ。それより」

と、鈴音さんはイリスの前に一束の資料を置いた。

「件の資料ですわ。覚悟をもって拝読くださいませ」

『え、鈴音さん許可取ったの?』

今度は私が驚くと、

「その位の権限は私にもありますわ。ただ、当時の依頼人に関わる個人情報情報は排除した修正版ですので、そこはご容赦を」

ということは、たったいま編集したばかりの資料なのだろう。鈴音さん、仕事が早すぎる上、痒い所に手が届きすぎる。

「ということですので、夕方までは私やここのメンバーが交代で入りますから、木更さんは遅刻する前に学校に向かってくださいませ」

「ありがとうございます。では、すみません。失礼致します」

木更ちゃんは一回ぺこりし、今度こそ事務所を後にした。

それから数十分。

「すみません、お見苦しい所を」

トイレから出てきたイリスは、やつれた顔で私の前に立った。

資料を目に通した結果、シヨックで吐いてしまったのだ。というのも、鈴音さんが提供したデータは、ただ単にロコちゃんの情報を抜いた事件のあらすじではなかったからだ。

牡蠣根の悪事を知ろうとしてる。そんなイリスの希望を汲んでか、これまでにハンドグドが掴んだ牡蠣根の関わる情報が纏められていたのだ。中には事件の被害者である妙子の表裏双方から見た情報もあり、まさにイリスは、そのあまりの悲惨な最期に気分を害したのだった。

『大丈夫、イリス?』

「なんとか」

『無理せず横になって』

「はい」

と、イリスはソファに横になる。その際、衣服の露出が高かったおかげで、カメラの位置から太股がしっかり映り、お尻のラインがはっ

きりと。これはエロい。ぐへへ、はあはあ。

なんて反応をしていると、

『ぐへへ。はあはあ』

モニターに文字でしっかりと表示されてしまった。そこへ毛布とスポーツドリンクをもってきた鈴音さんが、そんなテキストを一旦消しつつ彼女に毛布をかける。つて、ああつ！ 貴重な露出が、肌色が！

「お辛いですわよね、見せておいて言う台詞ではありませんけど、あんなものを全て受け入れろだなんて酷な話ですもの」

鈴音さんが、イリスの髪を撫でていう。

「いまはお休みなさい、夕方までは時間がありますもの。それに、もし受け入れきれなくても、貴方が動くための時間は幾らでも用意いたしますわ」

「ありがとうございます」

弱弱しい声でイリスはいった。それでも、完全に弱味を見せてないのは何となくわかる。いまでも気丈にならねばと気張ってるのが伝わるから。

「父が下種なのは知ってました。何人もの犠牲者を出していたことも」

そんなイリスが、鈴音さんに喋りだす。

「私も真実を知りにきたのですから、覚悟してきましたつもりです。……けど、所詮はつもりだったんですね」

「イリスさん」

「分かっていたはずなのに、現実というものにここまで打ちのめされるなんて。私は、私なんか償えるものなのでしょうか。妙子さんという方のケースも氷山の一角なのでしょうか？ 私が何かした所で慰めになるのでしょうか」

「分かりませんわ」

鈴音さんはいった。

「少なくとも、遺族は貴方を拒絶する方が大半でしょう。償うというなら死を望む方もいらっしやるはずですよ」

「ええ。分かっています」

イリスは毛布を掴んで身震いする。

「私も何度か自らの死をもって穢れた血の根絶をと思いましたがもの」
『!?』

この人、そこまで思い悩んで。

対して、鈴音さんはいった。

「それでも、生きて償えるのは貴方だけですわ。貴方ひとりが死を選んだ所で、他にも本妻や愛人の間に子供がいれば牡蠣根の血が絶えませんが。それでは、ただ被害者の慰めにしかない。そもそも慰めなら被害者同士でも無関係者でもできますわ」

「はい」

小さくうなづくイリス。

「何より貴方が死んだら、貴方の死を悲しむ者に誰が償うのですか？
いないとは言わせませんわ。すでに私、木更さん、沙樹。3人も悲しむ者ができてしまったんですもの。それに、グループにもイリスさんの選択に賛同された方もいるのでしょうか？」

はつとなり、イリスは私、正確にはモニターに視線を向ける。

『当然って話でしょ』

私がというと、

「どうして。私の両親はあなたのご友人を地獄に追い込んだのに」

ここは、本当なら「気にしないで」とか言うのが正解なのだろうか。
けど、私は未だ心のどこかで彼女の血を許しきれなかったみたいで、
『なら、ちゃんと生きて私たちに償って頂戴』

と、いつてしまった。

『そうね。とりあえず今晚イツパツ』

「一発？」

イリスが訊ねた所で、

「気にしないでくださいませ」

と、鈴音さんがモニタの電源を切る。ああっ！ ついでにカメラも停止しちゃった。これではイリスの肢体を視姦できない！ 言葉でセクハラもできない！

「話を戻しますわ」

鈴音さんがいった。よかった、いまの私も音声だけは認識できるらしい。

「全てを受け入れるも放棄するも貴方の自由ですわ。望むなら、それを選択するだけの時間も私たちは用意します。たとえソンプラ本社に連絡を取ってでも。焦らずゆっくりと、あなたのメンタルと相談しながら決めてくださいませ。ただし、死を選ぶことだけは許しませんわ」

「鈴音さん」

「……」

しばらくの無言、かと思ったら恐らくイリスのものとされるすすり泣く声が聞こえた。恐らくいま、鈴音さんが彼女をそつと抱き寄せ、慰めてるのだろう。

それから程なくして、イリスと鈴音さんの会話が聞こえた。

「お願いします。私を助けてください」

「という事は、貴方の依頼を請けてもいいのね」

「はい」

「分かりましたわ。だそうですわ、沙樹」

突如、再び私のカメラ超しの視界が復活する。カメラを動かすと、モニタの電源に触れる鈴音さんと、少し目を赤くしたイリスさんの姿がみえる。

『オツケー。契約成立ね』

色々言いたいことはあったけど、とりあえず私は返事を優先し、いった。

『それじゃあ、早速なんだけど私と木更ちゃんが揃ったら、イリスさんと3人で情報屋から牡蠣根とソンプラ社について追加情報買いに行ってくるわ。鈴音さん悪いけどポチ袋を用意してくれる？』

「分かりましたわ」

鈴音さんは快諾した。

「だが断る」

ヴェーラは、いま受け取ったばかりのウオツカを突き返していった。初めての対応だった。

「どうして」

私は訊ねるも、

「プローハ、悪いね。私だって、どうしても売りたいくない相手くらいはいるさ。例えば、憎らしい相手の親族だったりだよ」

——現在時刻19:00

いま私たちは、『喫茶なばな』の夜の顔である『BARなばな』へと足を運んでいた。

いつものように奥の席にいたヴェーラにウオツカを渡し、イリスを紹介し牡蠣根の情報を買おうとしたところ、こうなったわけだ。

「もしかして、貴方も」

イリスが訊ねた所、

「Yes. その通りだよ。詳しくはMISSION7を確認して欲しいんだ」

と、相変わらずメタな発言をして、

「いま、この話を読んでる君たちのPCを通して現時点まで内容は確認したよ。加えて作者に確認したけど、イリスは本当に無害な人間として書いてるらしい。だがその上で、私は牡蠣根の娘には協力したくないんだ」

ヴェーラは不機嫌そうに、元々飲んでたほうのウオツカをちびちびなめる。

「先輩、諦めましょう」

木更ちゃんがいった。

「彼女も被害者なのですから、これ以上過去を穿ることをしても」

しかし、ここでイリスは頭を下げ、

「お願いします」と。

「私はすべての真実を知りたい。真実を知らなければ、あなたに正しく謝罪をすることもできない。何も知らないけど悪いことをしましたごめんなさいなんて上っ面にも聞こえない謝罪はしたくないんで

す」

するとヴェーラは、先ほど突き返したウオツカを指して、

「ハラシヨー。改めて貰ってもいいかい？」

「元々あなたの為に注文したものよ。むしろ返されても困るって話」

「スパシーバ」

改めてウオツカを受け取ると、ヴェーラはそれを一気に喉へと流し、

「うらゝ」

と、喉をならす。そして、少し眠そうな目でイリスに向かって、

「ハラシヨー。それなら条件がひとつある」

「条件、ですか？」

「まあね又」

と、ヴェーラはいい突然立ち上がった。

「その前にひとつ質問しようか。イリス、この小説の題材は何だい？」

「え？」

発言のメタが読めず、困惑するイリス。

「ジャールカ、残念だ。答えは遊戯王だよ。それで遊戯王を題材とするなら、こういう時の条件は大抵ひとつと決まってるんだ」

ヴェーラは帽子を深く被り、いった。

「私は、いまから君にデュエルを申し込む。私に勝ったら、君たちに必要な情報を好きだけ無償で提示するよ」

イリス

LP4000

手札4

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

プリベエツト！ やあ、ヴェーラだよ。初登場から15話、やつと

初デュエルなんだ

LP4000

手札4

デュエルディスクのオプションによって卓上モードが選択され、テーブル上にビジョンによるデュエルフィールドが表示された。

「鳥乃さん、彼女のデュエルの腕前は」

後攻が決定し、カードを4枚引きながらイリスさんは訊ねる。も、私は首を横に振り、

「ごめん、未知数。実はヴェーラのデュエルは見た事ないのよ」

「そうですか」

私は改めてヴェーラを見る。

腰まで届く銀の長髪に帽子を深く被り、イリスとは反対にロシア系の白い肌。年齢は確か今年12になるので小6だったはず。つまり私の嫌いな女児だ。

牡蠣根に殺された妙子が住んでいた孤児院の子で、その幼さと経歴に反しハンドやNLTなどに向けられた依頼の仲介も請け負う情報屋。さらにはウォツカを愛飲し、第四の壁を突破してるかのような言動を取る不思議な子。

間違いなく精神構造が普通の人間と異なる。少なくとも、妙子の一件で明確な意思を目の当たりにするまで、私は「もしかしたら私たちとは異なる次元に住んでる子なのかも」とさえ思っていた程だ。

そんなヴェーラのデュエルなんて、予測がつくはずが。

「あ」

そういえば。

ひとつだけ情報があった。彼女は天然のフィール・カード版《氷結界の龍 ブリューナク》を持っていたのだ。

そこへ。

「勝手な情報漏洩はやめて貰えないかな」

私の心を読んだとばかりに、ヴェーラが釘を刺してきた。

「ウジャースナ、酷いな。残念ながら心は読んでないよ。読んだのは

この会話文の4行上なんだ」

会話文って何？　しかし、

「プローハ、悪いね。そろそろデュエル開始なんだ」

と、ヴェーラは勝手に会話を切ると、4枚の手札から1枚をソリツドビジョンのデュエルフィールドに置いて、

「私は手札から《氷結界の軍師》を召喚するよ」

デュエルフィールドが読み込むと、カードの上に1体の老人を表示させる。意外にも純粹に氷結界デツキらしい。

「《氷結界の軍師》のエフェクト発動。このモンスターは1ターンに1度、手札の氷結界モンスター1体を墓地へ送り、カードを1枚ドロースするんだ。私は《氷結界の水影》を捨てて1枚ドロしようか」

ヴェーラは手札を1枚、デュエルディスクの墓地ゾーンに送って、カードを1枚引き抜き、

「^残ジャールカ^念。作者曰く《早すぎた埋葬》を使いたかつたらしいけど禁止だからね。ここはオリカで永続魔法《氷結界の口寄術》を使おうか」
「オリカ？」

イリスがきよとんする。しかし、発動された《氷結界の口寄術》は少なくとも私たちにとつては市販されているカード。

「このカードは、簡単にいうと永続魔法になったかわりに、レベル4以下の氷結界モンスターのみに対応する《リビングゲッドの呼び声》だよ。しかも、1ターンの間に2度以降の発動をする場合は500ライフのコストがかかり、発動したターン、私は氷結界モンスターしか特殊召喚できなくなるんだ」

イリスに話しかけるようで、この場にはいない誰かに向かってヴェーラはいい、

「ズドラーヴァ。よく分かったね。読者の皆に効果説明したんだ。じゃあ、私は早速軍師で墓地に送ったチューナーモンスター《氷結界の水影》を特殊召喚しようか」

こうしてフィールドには早速ブリューナクの召喚条件が整い、

「ハラショー。私はレベル4《氷結界の軍師》にレベル2《氷結界の水影》をチューニング」

デュエルフィールドの上空で《氷結界の水影》が2つの輪にかわる
と、軍師が潜って混ざり合う。しかし、召喚されたのはブリューナク
ではなく、

「Бог дал Легендарный Лев、神々より与え
られし伝説の獅子！ シンクロ召喚！ ^現ダヴァイ、^ろレベル6 《氷結界
の虎王ドウローレン》！ 守備表示だよ」

現れたのは1匹の獅子のモンスター。これも、すでに市販されてい
るカードながらヴェーラが使うものは天然のフィール・カード。その
攻撃力は2000だけど、今回は守備表示のため、たった1400の
守備力を晒している。

「ドウローレンのエフェクトを使用しようか。このカードは1ターン
に1度、私の表側表示カードを任意の数だけ手札に戻し、ターン中攻
撃力を手札に戻した数×500アップさせる。又、^まあドウローレン
は守備表示な上、先攻1ターン目だから、ステータスのほうは現状意
味がないのだけだね。じゃあ私は、このエフェクトで《氷結界の口寄
術》を回収しよう」

ヴェーラは使い終わって場を圧迫するだけになった永続魔法を回
収すると、かわりにカードを1枚セットし、

「カードを1枚伏せて、私のターンは終了なんだ。さあ、君のターンだ
よ」

イリス

LP4000

手札4

□□□□

□□□□

□□《氷結界の虎王ドウローレン（守備／ヴェーラ）》——□

□□□□

□□□《セットカード》

プリベエツト！ やあ、ヴェーラだよ。フリーダム響って聞いたこ
とあるかい？ 数種類のフリーダム響を原型に私が生まれたいら
しいんだ。

LP4000

手札2

「私のターンですね。ドローします」

イリスはカードを1枚引く。ここで私は、隣に座ってたせいで、つい彼女の引いたカードと手札が目に残ってしまおう。

(あ)

と、私が思うと同時に、

「いきます。私は《ヴァンパイアの眷属》を通常召喚し、さらに《ヴァンパイアの領域》の発動と効果を使用します」

それは、牡蠣根と同じヴァンパイアだった。それも、すべて牡蠣根が所有していないカードの数々。

「永続魔法《ヴァンパイアの領域》は、1ターンに1度500ライフを払うことで、通常召喚とは別にヴァンパイアを召喚できます。私は《ヴァンパイアの眷属》をリリースし、《ヴァンパイア・グリムゾン》をアドバンス召喚します」

イリス LP4000↓3500

出現したのは、大鎌を持った死神のようなヴァンパイア。その攻撃力は2000。

「これは、攻撃表示で出すべきだったみたいだ、とても^残ジャール^念力だよ」

と、ヴェーラがいう中、

「申し訳ないですけど、手加減はしません。カードを1枚セットしてバトルフェイズ。《ヴァンパイア・グリムゾン》でドウローレンを攻撃します」

イリスのヴァンパイアはドウローレンに飛び掛かり、その大鎌で両断、破壊する。

さらに、殺したドウローレンの首元にヴァンパイアは噛みつき、《ヴァンパイア・グリムゾン》のモンスター効果を発動。このカードが戦闘で破壊したモンスターを私の場に特殊召喚します」

紅い瞳を光らせると、上半身だけのドウローレンが咆哮をあげ、その瞳も紅に染まっていく。

「プリベエツト！ やあ、ヴェーラだよ。酷いな作者。人生を奪った相手を言いなりの眷属にするなんて、まるで牡蠣根じゃないか。彼女は間違いなく牡蠣根の娘だとしても言わせたいのかい」

ヴェーラが誰もいない方角を向いて話しかける。

「なんだい、本当にそうやって責めてイリスを追い込むのが希望だったのかい？ ならジャールカ、残念だけどスルーさせて貰おうか。伏せカードオープン」

何だか色々分からない台詞を口走った後、ヴェーラはセットカードを表向きにし、いった。

「永続罨〈リビングデッドの呼び声〉。君の場に蘇生されてしまう前に、このエフェクトでドウローレンを私の場に蘇生しようか」

すると、ドウローレンの下半身が闇の瘴気をまとって動き出し、ヴァンパイアを蹴り飛ばして上半身を救出。そのまま瘴気をボンドに縫合され、ドウローレンは復活を果たした。

「……………どうしたんだい？」

少しの間を置いて、ヴェーラは訊ねた。気づくと、イリスはターンエンドの宣言さえせず、ショックで呆然としてたのだ。

「このカードデッキは、父がヴァンパイアデッキの使い手と聞いて、私がB共和国現地で組み上げたものなんです」

少しだけ声を震わせイリスはいった。

「特に含みなんてありませんでした。倒したモンスターを蘇生するのも、単にヴァンパイアらしい効果だと思って愛用していただけ」

「ハラショー。だろうね、君の地の文にもそう書いてあるよ」

と、ヴェーラ。よく分からないけど、イリスの心を文章のように読んだということだろうか。

「又…………。うん、まあそうなんだ。君の父、牡蠣根は血ではなくクスリと性行為で、いまのヴァンパイアみたいな行為を重ねていたよ。一応、私も情報屋だからね。幾つか悲惨な事例は情報として持つてるよ。妙子の牡蠣根宅での性生活も含めて」

言いながら、ヴェーラは元々深めに被った帽子を目が隠れるほど深く被り直す。

「失礼致しました。ターンを終了致します」

数秒の後、イリスはいった。そんな彼女の顔を見てヴェーラは、「ハラショー。分かったよ、じゃあそろそろ軽傷の内に終わらそうか」といって、

イリス

LP3500

手札1

「《セットカード》」「《ヴァンパイアの領域》」

□□「《ヴァンパイア・グリムゾン》」

□ー□

□□「《氷結界の虎王ドウローレン》」

□□「《リビングゲッドの呼び声》」

ヴェーラだよ。その自由ぶりからフリーダムヴェーラの通り名もあるよ。……うん、嘘なんだ。

LP4000

手札2

「私のターンだ。ドローだよ」

ヴェーラはカードを引いた。

「魔法カード《氷結界の紋章》を発動。デッキから《氷結界の伝道師》を手札に加える。そして永続魔法《氷結界の口寄術》を使おうか。墓地から《氷結界の軍師》を蘇生し、軍師のエフェクトを使って、たったいまサーチした《氷結界の伝道師》を捨て、1枚ドローだよハラショーだよ」

ヴェーラは、わざわざサーチカードと蘇生カードを行使してまで《氷結界の伝道師》を墓地に送ると、

「《氷結界の虎王ドウローレン》のエフェクトを発動。1ターンに1度、表側表示のカードを好きなだけ手札に戻す。ああ、いまはまだ攻撃力の上昇は無視して構わないんだ。とりあえず私は《氷結界の口寄術》と《氷結界の軍師》を手札に戻すよ。手札総数が増えたよ、ハラショーだね」

ヴェーラは使い終わった軍師ごと《氷結界の口寄術》を再び手札に

戻す。

「さて、先述の通り《氷結界の口寄術》を使ったターン私は氷結界モンスターしか特殊召喚できない。だけど、通常召喚に制限はかかってないんだ。私は《深海のディーヴァ》を召喚しよう」

ここで出てきたのは、氷結界ではなく海竜族をサポートするチューナーモンスター。

「ディーヴァのエフェクトを発動。デッキからレベル3以下の海竜族モンスター1体を特殊召喚するよ。私は《氷結界の助祭》を特殊召喚しようか」

《深海のディーヴァ》が唄いだすと、導かれるように氷結界の海竜族モンスターが出現。そのレベルはたったの1。

「《氷結界の助祭》のエフェクトもここで発動するよ。このカードが特殊召喚された場合、フィールド上のカードを1枚選択して、次の私のスタンバイフェイズ時まで効果を無効にし発動できなくするんだ。私は君のセットカードを選択しようか」

「えっ」

焦るイリス。拘束時間は短いとはいえ、相手はこのターンで決めるとかいつてるのだ。ここでカードを使えなくされるのは死活問題に違いない。

「あの、もしかして《心鎮壺のレプリカ》のようにチェーン発動もできないのでしょうか」

イリスが訊ねた所、

「大丈夫。ジャールカ^{ざんねん}だけどこのタイミングでの発動は通してしまうんだ。発動できるなら、使ってしまうのも選択肢だよ」

「でしたら」

イリスは選択されたカードを表向きにし、

「罨カード《ヴァンパイア・アウエイク》を発動。デッキからヴァンパイア1体を特殊召喚します。私は《ヴァンパイア・スカージレット》を守備表示で特殊召喚」

「ハラショー。OK、通すよ。無効にできるカードはないんだ」

「分かりました。では、特殊召喚します」

と、イリスはデッキから1体のヴァンパイアを呼び出す。

「《ヴァンパイア・アウエイク》で呼び出したモンスターはターン終了時に破壊されます。ですが、効果は問題なく使用できます。《ヴァンパイア・スカージレット》の効果発動」

呼び出されたヴァンパイアの瞳が紅く輝く。

「このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、1000LPを払い、スカージレット以外のヴァンパイア1体を墓地から特殊召喚します。私はこの効果で《ヴァンパイアの眷属》を墓地から特殊召喚」

イリス LP3500↓2500

イリスの場に、つい先ほどグリムゾンのアドバンス素材になったモンスターが姿を現すと、

「さらに《ヴァンパイアの眷属》のモンスター効果。このカードが特殊召喚に成功した場合、500LPを払って発動。デッキからヴァンパイアと名のついた魔法・罠カード1枚を手札に加えます。私は《ヴァンパイア・デザイン》を手札に加えました」

と、なんとイリスはライフを1500を払いはしたものの、たった1枚の罠カードから場にモンスターを2体呼び出し、さらにヴァンパイアのサポートカードを手札に加えるという、3枚分のアドバンテージを得たのだ。

イリス LP2500↓2000

「これで私の場にはモンスターが3体。失礼ですが、それでも、このターンに私を倒すと仰られますか？」

訊ねるイリス。しかしヴェーラはウオツカを一口喉に流すと、

「ヌ、ダー。まあ、そうだね。少々エグいものを見せれば突破ができるよ」

「エグいもの、ですか？」

「イズヴィニーチエ。さすがに、君には予め“ごめんなさい”と言っておこうか」

ヴェーラはいい、ゆつくりとした手つきで自分のモンスターをひとつに束ね、墓地へと送る。

「じゃあ行こうか。私はレベル6《氷結界の虎王ドウローレン》レベル

1 《氷結界の助祭》にレベル2 《深海のダイーヴァ》をチューニング」
「レベル9のシンクロ？」

心当たりのないイリスの横で、私は。
(あ)

と、思った。氷結界といえばあのカードが。直後、ヴェーラはいつた。

「Святое копье, Божество разрушения бросил проколоть демониचे ский город сейчас! 破壊神より放たれし聖なる槍よ。今こそ、魔の都を貫け! 現れろ ダヴァイ、レベル9 《氷結界の龍 トリシューラ》!」

現れたのは、3つの首を持った氷結界のドラゴン。これも、一般に出回ってるカードなのだけど、そのあまりに強大な力で、一時期最強のシンクロモンスター扱いされたこともあるカードだった。しかもヴェーラが使ってるのは、やはり加工されたものではない天然のフィール・カード。

「トリ……シューラ……。これが」

イリスも、その名前は知ってたのだろう。しかし、初めて実物を見た模様で、恐怖より純粋な驚きが先にきている模様だった。

「さて、《氷結界の龍 トリシューラ》のエフェクトと、《氷結界の助祭》第二のエフェクトを発動しよう。まず《氷結界の助祭》は自身が氷結界のシンクロ素材になった場合、デッキから《氷結界の助祭》を特殊召喚するんだ。そして肝心のトリシューラのエフェクトだよ」

ヴェーラは、その恐ろしい効果を口にした。

「このカードのシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド・墓地のカードをそれぞれ1枚まで選んで除外できる。ひどい／おそろしい ストラシューノ、とんでもない効果だね」

そう、このカードは召喚素材が少し重いかわりに、出した瞬間に最大3枚のカードを一気に除外してしまう。しかも、手札を除外する都合上対象をとる効果でさえないのだ。

「私はフィールドの《ヴァンパイア・グリムゾン》、墓地の《ヴァンパ

「イア・アウェイク」。さらに君の手札を1枚を除外しようか」

カードの上に浮かび上がる小さなトリシユウラは各首から冷気のブレスを吐き、イリスのフィールド、デュエルディスク、手札を同時に攻撃する。フィールドを込めない攻撃だったので、当然リアルに損傷は起こらなかつたけど、攻撃されたイリスの手札は、その内1枚が青色に輝く。どうやら、それがトリシユウラで除外するカードらしい。「本来なら、このエフェクトで《ヴァンパイアの眷属》を墓地から除外するはずだったんだ。だけど、場に出されてしまったから除外できなかったよ。やったね」

「そのかわり眷属でサーチしたカードを除外されてしまいましたけど」

「どうやら、青く光ったカードは《ヴァンパイア・デザイア》だったらしい。サーチしたカードは、他の2枚と一緒に除外ゾーンへと送られる。」

「じゃあデュエルを続けようか。魔法カード《氷結界の口寄術》を発動。このターン2回目の発動だから500ライフを払うよ」

ヴェーラ LP4000↓3500

トリシユウラなんてものを出して、まだ何かする気らしい。ヴェーラはライフを払うと。

「私は墓地から《氷結界の伝道師》を蘇生しようか」

出てきたのは、このターンの始めにサーチと手札コストを駆使してまで墓地に送られたモンスター。

「《氷結界の伝道師》のエフェクト発動。このカードをリリースして墓地の氷結界を特殊召喚するよ。私は再び《氷結界の虎王ドウローレン》を蘇生」

再び墓地から現れる一体の獅子。

「さらに魔法カード《浮上》で《氷結界の水影》を特殊召喚だよ」

さらに、ここで再びレベル2のチューナーが現れた。しかし、EXモンスターゾーンはトリシユウラで埋まっている。リンクモンスターでもない以上ここからどうやって。

「《氷結界の虎王ドウローレン》のエフェクトを発動。《氷結界の口寄

術』と《氷結界の龍 トリシューラ》を手札に戻すよ」

再び手札に戻る《氷結界の口寄術》。そしてトリシューラがEXデッキに戻り、再び空いたEXモンスターゾーン。(あれ?)

そういえば、トリシューラがエクストラデッキに戻ったということ。そしていまヴェーラの場のモンスターのレベル合計って。

「私はレベル6《氷結界の虎王ドウローレン》レベル1《氷結界の助祭》にレベル2 《氷結界の水影》をチューニングだよ」

ヴェーラが再び3体を墓地に送っていった。

「Святое копье, Божество разрушения бросил проколоть демоницеский город сейчас! 破壊神より放たれし聖なる槍よ。今こそ、魔の都を貫け! 現れろ ダヴァイ、レベル9 《氷結界の龍

トリシューラ》!」

「に……」「2回目?」

イリスと私は驚く。ちよつと待って、あのマジキチ効果をまた使う気?

「トリシューラのエフェクトパート2だよ。今回はフィールドの《ヴァンパイア・スカージレット》と君の最後の手札を除外しようか」「そんな……」

これで、ついにイリスは手札・墓地・フィールドあわせてカードが《ヴァンパイアの眷属》と《ヴァンパイアの領域》だけになってしまう。「じゃあ手札から3回目の《氷結界の口寄術》だよ。《氷結界の伝道師》を介して《氷結界の虎王ドウローレン》を蘇生」

さらに、遠慮なくドウローレンまでご登場。3枚目の助祭は登場しなかったけど、デッキに入っていないのか、もしくは最後の慈悲で追い込まずにいてあげたのか。なにせ、無茶すればもう1回トリシューラを出して、助祭の封印能力と併せてイリスのカードを何もかも無力化させた状態でフィニッシュとかできてしまうのだ。

ヴェーラ LP3500↓3000

「最後にドウローレンのエフェクトで《氷結界の口寄術》と《リビング

デッドの呼び声》を手札に戻し攻撃力を3000にするよ。バトル。トリシューラで眷属を攻撃し、ドウローレンでイリスに直接攻撃。ハラシューフィニッシュだよ」

《氷結界の虎王ドウローレン》 攻撃力2000↓3000

トリシューラのブレスが眷属を氷漬けにし、ドウローレンの爪の一掻きがイリスのライフを一気に奪う。

イリス LP2000↓0

こうして、デュエルは終わってしまった。完敗だった。

「イズヴィニーチェ、悪いね。私の勝ちだよ」

デュエルが終わり、テーブルの上のフィールドと一緒にソリッドビジョンが消滅する。

「鳥乃さん、すみませんでした」

デツキを片付け、イリスが謝るも、私は慰めに笑顔をつくり、「別に構わないわ」

「はい。こうなったらこうなったのでどうにかできますよ」

木更ちゃんもいって、

「ですよね先輩」

「そういう話」

とはいえ、ヴェーラの力を借りれないのは痛い。フィール・ハンターズはまだしも黒山羊の実が敵側にいる以上、協力者を確保できないのだ。

とか、考えてると。

「ハラショー。なら少しアドバイスだ」

ヴェーラがいった。

「鳥乃、君は視野が狭くなってないかい？」

「え？」

「実は今回、私なんか頼らなくても情報が腐るほど手に入るようになってるんだ」

「それってどういう」

私が訊ねた所、

「特捜課だよ」

ヴェーラはいった。

「君が牡蠣根を討伐した後、怪人たちが残党狩りを行ったらしい。その被害者たちが大勢逮捕され、供述した内容が保管されてるはずだ」
「けど、腐つても警察。私たちに内容を吐くとは」

私がいいかけた所、

「いつからハングドはロウの組織になったんだい？」

ヴェーラはいった。すると木更ちゃんが、

「ハッキングですか」

「マラジエツツ！ 素晴らしい。その通りだよ」

「確かに、それなら幾らでも手段がありますね」

乗り気な木更ちゃん。ああ、これは避けられないか。

「特捜課やNLTはなるべく敵にまわしたくなかったんだけどね。ま、やるしかないって話か」

「それともうひとつ」

と、ヴェーラはさらに、

「黒山羊の实の情報を持ってそうなのがひとりいることを、君たちは忘れてないかい？」

「え？」

「正確には、元黒山羊の实所属の人間が」

「あ」

言われて、私と木更ちゃんは顔を向き合って、

『アンちゃん！』

すると、

「え？ それって、神簇アンという方のことですか？」

と、まさかまさかのイリスからの反応。

「ご存じなのですか？」

木更ちゃんが訊ねた所、

「いえ、一度お会いしただけの関係です」

と、イリスさん。

「ただ、私が日本で最初に襲撃されたときに護ってくださいったのがア

ンさんだったのです。その時に最終手段として『ドラゴン・キャノン』を教えて頂きました」

それを聞いて私は。

「接触する必要があるそうね」

「そうですね」

木更ちゃんもうなずいた。

「アドバイスは以上だよ。私は元の席に戻っていいかな？」

手元のウオツカをすべて飲み干し、返事を待たずヴェーラが席を離れる。

私はタブレットを片手に、

「じゃあ、早速アンちゃんに連絡とってみるわ。今日は無理だと思うから、木更ちゃん明日学校で一足先に接触を」

と、言いかけた所だった。

「いらっしやいませ」

と、バーテンダーの声。どうやら新たにお客がやってきたらしい。私は咄嗟に入り口へ視線を向け、言葉を失った。

何故なら、いま正に連絡を取ろうとしていたアンちゃんが、松葉杖でやってきたのだから。

「ごきげんよう、鳥乃さん、藤稔さん」

しかも、アンちゃんは真っ先に私たちに向かって頭を下げる。

「アンさん。どうして」

席を立ち、木更ちゃんが訊ねたところ、

「情報屋さんから連絡を受けまして」

と、アンちゃん。

どうということ？ 私は声を出さずとも、ヴェーラに視線で訊ねると、

「イズヴィニーチエ、隠して悪かったよ。実はすでに頼まれてたんだ。君たちがきたら連絡してくれとね」

と、元の席で新たに注文したらしいウオツカを飲み、

「うらゝ」

と、喉を鳴らす。

アンちゃんは、先ほどまでヴェーラのいた席、つまり私たちと対面の席に座ると、

「ブランデーティーを一杯」

と、しっかりとアルコールを注文。

「いいの？ 未成年」

私が訊ねると、

「誰にもいい顔をする影の薄い優等生未満。そんなものは卒業致しましたから」

アンちゃんはいった。

私は、「そうなの？」と木更ちゃんに訊ねると、

「いえ。校内では特に態度が変わったようには」

と、首を横に。で、アンちゃん曰くは「目立つとそれはそれで面倒ですの」だそう。

「それはさておき」

アンちゃんは、イリスに向かって、

「ご無事のようになによりです。ソンプラ社長」

「偶然ではなかったのですね、私を助けてくださったのは」

イリスが社交笑みでいうと、アンは「はい」と返し、

「あの時点で、理由を探られると困った事態に発展しかねませんでしたので」

「どういうこと？」

私が訊ねると、

「実は、私にイリスさんとハンドを引き合わせるよう頼んだのは、黒山羊の实のグラトニーでして」

『黒山羊の实!?!』

私たちは驚く。それも3人同時のステレオで。

「元々黒山羊の实という組織には幹部が3人いるのはご存知と思いますが、今回はその中でもプライド側による行動だそうです。その中で、第三の幹部は中立、グラトニーは反対側というのが今回の組織内の勢力図になっております。ただ、グラトニーも露骨に外の組織を雇ってプライドを妨害することは立場的に難しいらしく、そこで元部

下だった私に協力をお願いされたのが今回になります」

「それ、内輪揉めにハンドグドが巻き込まれたってだけじゃない」

うわあ、と思いつながら私がいようと、

「いえ。そこにフィール・ハンターズも関わってきてますから」

心中察ししますといった顔でアンちゃんがいう。さらに続けて、

「しかも、その原因もまたプライドなわけで」

もはや心中察し程度では許されない。

「プライドというと、フェンリルさんの第二の生みの親、みたいなものですよね？」

木更ちゃんがいった。私はうなずき、

「加えて、ミストランの生みの親でもあるって話。実はプライド本人と面識はないけど、作品^{こと}たちは妙に関わってるのよね私たちって」
それでもって、私たちはフェンリルもミストランもプライドに懐いてないという情報まで入手している始末。

「教えて頂けますか。どうしてプライドという方とフィール・ハンターズがわが社を欲しがるのかを」

イリスさんが訊ねた所。

「プライドは牡蠣根の奴隷売買のお得意様だったそうです。主に利用用途は人体実験の材料だったそうですけど」

「じ、人体実験？」

「プライドは人造人間、改造人間、クローン人間などを作ろうとしている人間ですから。戸籍上死亡扱いの人間だったり、調教の失敗で反応がなくなつた廃棄品が重宝したそうです」

「ひ、ひどい」

悲痛な顔を浮かべるイリス。本当に牡蠣根の血筋とは思えないほどに綺麗な人間だ。一方で特に心苦しさを感ずる様子なく普段通りに喋るアンちゃん。こちらは逆に「あなたもそういう奴隷欲しそうですね」とか言ったら肯定されそうで怖い。

「ハラショー、大正解だよ」

奥の席からヴェーラがいった。また心、いやヴェーラ曰く地の文を読んだらしい。しかも大正解って、まさか私の推測に対して？

私は考えないようにした。

アンちゃんは続けていった。

「加えて、プライドはかつてフィール・ハンターズの下で同様の研究をしていたそうです。あの組織なら自分からテロや誘拐を行いますけど、やはり足がつかずに生きた人間を手に入れるのは魅力的だそうで、プライドが抜けた現在も利用されています」

「ということは、ふたつの組織の狙いは奴隷売買業者」

イリスがいった所、

「ところが、それだけではありません」

アンちゃんは否定する。

「ソンプラググループには、独自に開発し牡蠣根にのみ提供していたドラッグや製薬技術があるはずですよ。両組織はこれらも狙っております。そして、プライドには人間を改造人間に作り替える技術をすでに持ち、フィール・ハンターズも遅れながら闇のフィールで洗脳する技術を持ってしまいました。つまりは」

「牡蠣根がイリスの母を言いなりの人形にしたように、今度はイリスを言いなりにしてソンプラググループを手中に収めようって話ね」

私がいうと、アンちゃんは「はい」うなずく。

「ソンプラ社のドラッグは、プライドが生身の人間から人形を作る際に必要不可欠なんだそうです。また、フィール・ハンターズの闇のフィールもドラッグを併用して真価を発揮するそうです。事実、試験的にドラッグを使わずに導入したシルフィさんは解けてしまいました。ですので、ちょうど薬漬けになってる奴隷の需要が高まった所へ供給がストップしてしまったわけですよ。プライドに至っては実験材料に困って墓荒らし紛いのことさえしたようですよ」

「それらの情報はどこから」

「ふふ、秘密ですよ」

アンちゃんは意味深に笑った。

「とりあえず今回の件で黒山羊の実はグラトニー派に限ってはハングドに協力的であることをお伝え致します。もちろんハイウィンドも。何かありましたら私かテストAMENT兄弟を訪ねてください」

ということを、アンちゃんは言いたかったらしい。情報収集が必要な上、敵があまりに多い今回の任務でやつとパイプができたのは朗報である。

しっかし。

(アンちゃんホント頼りになるわね。姉と違って)

これだけ神簇に振り回され、逆にアンちゃんに度々助けられてると、かつて使用人たちがあれだけアンちゃん側についてたのも分かる気がする。

「ありがとう、助かったわ」

私はいった。

「いえ。では私はそろそろ失礼致します」

紅茶を飲み終えたアンちゃんは席を立ち、先に勘定を済ませて席を出た。

「さて、そろそろ情報整理に入りましょう」

この場に、私たちの他にヴェーラと店員しかいないのを確認してから、メモ帳を片手に私はいった。

「今回の依頼はイリスの護衛及びソンプラ社と牡蠣根関連の悪事のあぶり出し。期限は公表とソンプラ社の解散が完了するまで。ここまですで間違いはない？」

「はい」

うなづくイリス。

「じゃあ、情報収集はアンちゃんとかゲイ牧師を頼りにしつつ、基本はハッキング。木更ちゃん、悪いけど頼める？」

「はい。任せました」

木更ちゃんは微笑んでいった。実際、木更ちゃん自身にプログラム知識はないものの、彼女の持つクリフォートのファイル・カードがそれを補って余りあるほどハッキングの適正があるのだ。でもって、彼女から発生した天然のファイル・カードなだけあり、現状そのファイル能力を手足のように扱えるのは木更ちゃんだけ。一応、クリアウイングと違って特定の人間にしかファイルを引き出せないとかいう制限はないのだけだ。

「ついでに、そのハッキングだけど。ソンプラ社に都合の悪い情報があつたらこつそり改ざんしといてくれる?」

「え?」

どうして、と訊ねる木更ちゃんに、

「護衛の一環よ。この一件、イリスさん本人の口から公表するより先に特捜課やNLTが逮捕に踏み切る可能性があるって話なのよ。もう調査に動き出してはいると思うしね。だから、公的に裁くための材料は潰しておかないと」

いくら公表の準備に入っていたとしても、後手に出た時点で「事実を隠していた」ことになってしまうのだ。それだけは絶対に避けないといけない。

「今回、私たちはフィール・ハンターズ、黒山羊の実だけでなく、特捜課などの警察機関、そしてNLT。つまりはロウ組織とカオス組織を同時に相手取ることになるわ。木更ちゃんもイリスも、油断しないで頂戴」

『わかりました』

ふたりは、覚悟した顔でうなずいた。特に、木更ちゃん以上にイリスのほうが「私たちが右も左も敵だらけ」という危うさを感じ取っている模様。

確かに油断するなどは言ったけど、イリスに限りつてはそつちに気を取られ過ぎるのも問題だ。

「ま、大丈夫よ心配しないで」

私はいった。

「ちゃんと護るから。組織からも、あなたの命を狙う会社側からも、警察機関からも」

「鳥乃さん」

「それより、あなただって速やかに情報を纏め、世間に公表してグループをリセットする仕事があるんだから。身の危険は私たちに任せて、あなたはあなたの役目を果たして頂戴」

と、私はイリスの太股に手を伸ばす。

「ひあつ」

ビクツと反応するイリスを無視するフリして、

「だから心配しないで」

「あの、その手は」

「大丈夫よ。どんな危険な状況でも依頼人を護ってこそプロって話だから」

なんて真面目な事言いながら、太股を撫でまわし感触を堪能する。日々マッサージを欠かさず行ってるのだろう。触ってみると細さの中に無駄なくシエイプアップされた完璧な美脚なのがよくわかる。ぶつちやけたまらない。

「あ、気を付けてくださいね。こちらの鳥乃さんは業界では『レズの肌馬』と言われるシ〇イーハンターの主人公を女性にしたようなレベルの性欲魔人ですから」

木更ちゃんが、穏やかに微笑みをつくっていった。しかも、普段ならすぐ「通報しますね」と防犯ブザーなり録画中のタブレットを見せるのに、今回はそういった反応はせず。

イリスは顔を真っ赤におずおずと、

「あ、あの藤稔さん。こういうセクハラからは護っては頂けないでしょうか?」

と、木更ちゃんに助けを求める。この人、こんな小動物みたいな反応もするのね。正直、嗜虐心刺激してたまりません。

「すみません。そこは依頼の外ですので」

しかし、なんとここで木更ちゃんは穏やかな笑みで断りだした。本当、一体どうしちゃったのとか一瞬思った所、

「『レズの肌馬』からの護衛は追加の依頼にてお引き受け致します。1日30万からですけど、構いませんか?」

まさかまさか、相手が腐っても社長だからって足下を見て資金を搾り取りにきたわけで。確かに司令からはやれと指示はされてたけど。この手段はえげつない。

「あの、高くありませんか?」

「すみません、相手もプロですから設備や準備に費用がかかりまして」
しかも、ぼったくりの言い訳がそれっぽい上に嘘も言っていないとい

うね。まあとはいえ、木更ちゃんが止めない以上、こつちも行ける所まで行ってしまう。

私はスカートと呼べない布地の内側に腕を突っ込み、下着に触れ、

(おつ)

と、思った。そこへ、

「ただ、いま現在の先輩のセクハラをテーブルの下から撮影したムービーデータくらいでしたら無償提供致します」

つて、木更ちゃん。ああっ！ちゃんと撮影はしてたのね。

「下さい。訴える証拠になります」

要求するイリス。まあ、そうなるわよね。

で、木更ちゃんはこちらに向かって露骨に淑やかな笑顔で、

「ですので先輩、今回は止めませんがやりすぎにはご注意下さい。私も気まぐれで徳光先輩に」

「さ、さーてそろそろ事務所に戻ろうかって話ね」

私はセクハラをやめ席を立つ。ほんと、梓にしろ木更ちゃんにしろどうして私の親しい友人以上の存在は笑顔で脅迫するスキルを持つてるんだろう。

「わ、わかりました」

イリスも席を立つ。気丈で平常を装ってるが、顔はまだ赤い。

私は勘定を済ませ出入口に向かう。そこへ。

「先輩」

私のそばに立ってた木更ちゃんが小声でいった。

「先ほどのイリスさんですが、違和感や不審な点はありましたか？」

「え」

むしろ木更ちゃんが即脅迫しない所に違和感があったけど。私は戸を開け外へ出る。

「イリスさんなのですけど、私が調べた所、牡蠣根の娘だけあって学生時代は、とても好色家だったそうです」

「え、あの人が？」

「そこそ訊ねると、木更ちゃんはずなすぎ。」

「噂では校内の美形男子はあらかた食べつくし、それに飽き足らず女子生徒や教師にまで手を出したとも」

「ドラッグは？ 自社で販売してる」

「あります。当時、妹を襲う為に使った結果、後遺症を残してしまい、それ以後ドラッグを嫌忌している様子が見られます」

なるほどね。つまり依頼人は単に自社が悪事を働いていることを嫌がってるだけでなく、ドラッグに至ってはトラウマでもあると。まあ、妹にも手を出したというところでもない話も出たわけだけど。

しかし、ここで問題がひとつ。

「この報告だけだと、ドラッグを自社製品と知って使ったのか否かがはっきりしていないわね。木更ちゃんそこは？」

「あ」

ハツとする木更ちゃん。そこまで意識は向いてなかったらしく、

「すみません、そこまでは調べてませんでした」

と、素直に謝る。

「別にいいわ。後で本人に訊いてみるって話だし。それより、違和感や不審な点だけ」

私は、イリスに悪戯した指の匂いを嗅ぎ、

「これを不審と受け取るかは別として、濡れてたわ下着がべつとりと。いまも指に発情した牝のフェロモンがこびりついてる」

すると、木更ちゃんはぼつと赤くなり、

「その発言を至極真面目な意図で使われるとは思いませんでした」

言われて、私も「あ」と気づく。

ほんと、何言ってるんだろ私。エロ目的やセクハラ発言ならともかく、私まるで薬品の匂いを嗅ぎ分けたみたいにな超真面目に言ってるわ。

「私もよ」

何だか気恥ずかしくなったので、私はもう一度指を嗅ぐことにした。今度はちゃんとエロい目的で。

木更ちゃんも木更ちゃん、そんな私を見て逆に落ち着いたのか余裕のある濁いた笑み（としか形容できない微妙な表情）を浮かべてか

ら、

「ただ、先ほどの様子を見る限り現在は控えてるみたいですね。情報通りの方なら少しは食いつく反応をしそうですもの」

その言葉に、今度は私がハツとなり、

「木更ちゃん。もしかして、その反応を確認するために私を止めず悪ノリまでして」

「合意の上なら止める理由もありませんから。もちろん、相手に悪意や我慢で受け入れる節がありそうなら話は別ですけど」

「いいの、合意なら依頼人に手を出しても
すると、

「忘れましたか？」

と、木更ちゃんはとても優しい笑顔でいった。

「私は先輩を支えるためにハングド入りしたのですよ？ たまには適度に飴を選別して与えるのも私の役目ですから」

木更ちゃん。

「とかいいながら、自分を餌にはしないのね」

「ふふ、餌に差し出してるとじゃないですか。馬の鼻先にぶら下げた人参ですけど」

「やっぱり食べさせる気ゼロじゃない」

それどころか下着姿さえ見せてくれないし。

「まあ、今朝はパンティの内側まで撫でまわしたけど」

「そこまでしてたのですか」

木更ちゃんは呆れた顔でいった。って、あれその反応は。

「気づいてなかったの？ 自分がどこまで汚されたのか」

「セクハラされたのは気付いてましたけど、貞操を気にする余裕なんでありませんよ。先輩を抱えて、周囲に気を配って、それでいてイリスさんを探さなくてはいけなかったのですから」

そこまでいって、木更ちゃんは梓のような素敵な笑顔で、

「ですから、この件は頃合いを見て徳光先輩にご報告致しますね」
げっ!?

「ちよっ、だからいまの梓はヤバいって話なのよ」

「ですから頃合いを見ての報告です」

やばい、これ本気だ。

「えっと木更ちゃん、もしかしてガチで怒ってる?」

「怒ってませんよ?」

「いやどう見ても怒ってるって話よね」

「いえ、これは激おこぶんぶんアルティメットストリームですから」

「それ冥弥ちゃんのLINE!? 怒り通り越してヤバいレベルいつてるって話?」

なんて、いつの間にか談笑に変わりながら帰路を歩いていると。

「見いっつけた」

後ろから声が。

振り返ると、そこにはフード一体型の黒コートとマフラーで全身をほとんど隠した黒山羊の實の女性。

ガラムがひとり立っていた。

MISSION 23—2年越しの遺言（残光 Part 1）

私の名前は鳥乃トリノ 沙樹サキ。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「梓。私ついにゾンビに目覚めないといけない日がきたみたい」

一夜明け、再び学校。

私は気が動転しながら、口が動くままに梓に伝えると、

「……え？」

菓子パンを食べてた梓の口が止まった。なお、現在はまだ1時限目が始まる前である。

「い、一応聞くけど女性限定、だよな？」

「そこは勿論」

「死体に発情しちゃったってこと？」

わなわな震えながら梓。

「そんなような、違うような、広義的には間違っていないような」

私は、正直そうとしかいえない。

「そっかー」

割と食事中に不謹慎な話題だったのに関わらず、梓はパンを完食すると、

「沙樹ちゃんも、一応死体に発情しちゃ駄目って正常あったんだねー」

「ちよっ、梓酷い。さすがに当然って話でしょ」

まあ、だけどその正常が昨日崩れちゃったわけで。

「はあっ」

梓はパックの野菜ジュースをストローでちゅーしてから、一度ため息を吐いて、

「今日、本当はすっごく機嫌悪いよーって顔して昨日の追求するはずだったのに、びっくりして不満がどっかいつちちゃったよー」

「え？」

昨日の追求？

「沙樹ちゃん、先週土日の誘いを断ったときに、月曜にバイキング奢るって」

「あ」

そうだった。私も、通学するはずが早速修理に入るはめになって、そのうえBARなばなから帰る際に衝撃的な体験をして、色々ぶっ飛んでしまっていた。

そう。

いま話題に出したゾンビとは、ガルムのことなのである。

昨日の夜。

私、イリス、木更ちゃんの三人で事務所に戻る途中。

「見い〜つけた」

って、後ろから声をかけられ。

振り返ると、そこにはフード一体型の黒コートとマフラーで全身をほとんど隠した黒山羊の実の女性。ガルムがひとり立っていた。

「見つかった!?!」

私は咄嗟に前に出てふたりを庇いながら、

「木更ちゃん、イリスさんを連れてすぐ帰還して。時間稼ぎは私がするから」

「分かりました」

木更ちゃんはイリスの手を引き、

「こちらです」

と、引っ張って逃げる。

「は、はい」

従い、一緒に逃げるイリスをちらと見送ってから、

「悪いけど、ふたりを追いかけさせないわよ」

私は手首のナイフを展開し構える。しかし、

「別にいいわ」

ガルムはいうのだった。

「え、まさか囮?」

なら木更ちゃんが危ない。そう思ったけど。

「違う違う」

ガルムは首を振ってから、

「私の狙いは、最初からアナタよ」

チーターか何かのような瞬発力で飛び掛かり、拳を突き入れようとする。私は咄嗟にナイフで受け止めようとした所、カキンと金属のぶつかる音。

見ると、彼女の殴りかかった手首から砲身が二丁生え出ていた。間違いない、私と同じ内蔵銃だ。

「にっ」

と、ガルムが声に出して笑い、内蔵銃を発砲。私は寸前の所で避ける。——といっても頬をかすめて傷ができたものの、こちらも内蔵銃で反撃。しかしガルムもそれを飛び退いて回避。

「ガルムとか言ったわね。あなたたちのターゲットはさっきの褐色の子じゃなかったの？」

「その通りよ」

即答するガルム。

「じゃあ、どうしてあなたは私を狙うのよ」

訊ねると、

「任務なんて関係ないわ。アナタを一目見たとき、びびつとききたの「っ」

それって、もしかして。

「この体はアナタを知ってる。アナタと闘えば何かが分かるかもしれないって」

恋、じゃなかった。しかし、彼女は何をいつてるのだろうか。

ガルムは、再び私に飛び掛かり、

「さあ、教えてよ！ この体を！」

今度は宙を引つ掻き、ファイールでかまいたちにして攻撃。以前、ファイアがしてきたのと同じ技だ。

私はワイヤーを街灯に引つ掻け、上に飛び乗りながら拳銃を取り出し内蔵銃と共にダブルで発砲。普通の人間なら前方に跳んだ勢いで急には避けきれないタイミングを狙ったはずだが、やはり動物じみた

身体能力からのサイドステップで避けられる。

「あなた、一体何者？」

「それをアナタを教えてくれるんでしょ？」

ガルムはパルクールで街灯を昇り私に迫るので、膝からミサイルを発射。さすがに予想外だったのか、ガルムはミサイルと衝突、爆発に巻き込まれ地上に叩き落された。

その際、彼女のマフラーが焼け、爆風でフードがはがれ、彼女の素顔が露になった。

「——え？」

私は目を疑った。

だって、だって、そこに立っていた女の子の顔は、

「妙子？」

だったのだから。

いや、そんなはずはない。彼女は何か月も前に死んでいる。死体だって発見されてるはずだし、彼女が妙子のはずがない。

なのに、ガルムは妙子が絶対に出さないような好戦的な笑みで私を見上げ、

「やっぱり、知ってるじゃない。この体のこと」

とか言うのだ。

上着の下は素っ裸だったらしい。ミサイルで焼けたコートが剥がれ落ちると、彼女の肢体が露になる。

彼女は、長い髪をそのままに、記憶の中の妙子よりグラマラスな体つきをしていた。バストも記憶よりずっと豊満になり、肉付きとメリハリを程よく両立したスリーサイズ。妙子という素材をそのままに「男に抱かれるための体」へと調整されたのがよく分かる。実際、私の目には、猫僕さんや奴隷売買所にいた奴隷たちとも遜色ない、性的に完成された体に見えた。

それだけに、首や腕には幾つもの注射針の跡と青痣が痛々しく残り、すでに彼女の体は一度骨の髄までむしゃぶりつかれ、文字通り無残に使い潰された後なのが良く分かる。その上で、何かの力で全盛期の美貌を取り戻しているのだ。

「妙子、なの？　あなた、本当に妙子なの？」

彼女が妙子だからか、それとも目の前に滅茶苦茶にしたい体をした子が裸で立ってるからか、私は激しく動揺しながら訊ねる。

ガルムはいった。

「私はガルム。プライドの作品、最新作のガルムよ」

「プライドの？」

ってことは、

「まさか、妙子の死体から作られた人造人間？」

「正解」

うなづくガルム。

「そんな」

直後だった。

私はシヨックで足を踏み外し、

「あ」

と、なったときには地面に向けて真っ逆さまに落下してしまった。肝心のワイヤーもストッパーに手を伸ばす間がなく落下の重力で伸びる伸びる。

「わふっ、ちよっ、ちよっ」と

で、その落下する先にはガルムが立っていた。

ガルムは、そんな私に追撃を加えるどころか、慌てながらも咄嗟に私を両腕で受け止め、衝撃に耐えきれず尻餅をつく。

「痛たた、何？　いきなりどーしたの？」

と、困惑した声をあげるガルム。まさか、攻撃したり避けたりせず受け止めるなんて。正直私も困惑しそうだ。

そんな時、私の鼻を甘い匂いがくすぐる。若い女性特有の体臭だ。しかも、薬品の匂いこそあれど、彼女からは死臭のようなものを感じなかったのだ。

抱ける。問題なく。

そう、私の脳が判断したと同時に、私はガルムの唇を奪い、豊満な乳房を片手で鷺掴みにした。そこまで行為に及んでから、いま自分たちが密着していたのだと、やっと頭が理解した。

「っ」

ガルムが驚き、びくつと硬直するのが分かった。しかし、私にすでに理性なんてなく、彼女の仕草はただ情欲を誘う結果にしかならない。

「ん、やっ」

僅かな抵抗。私はガルムの口内に舌を差し込みながら、乳房を揉みしだく。彼女の鼻息や口臭が鼻孔を通るも、やはり腐った匂いはしない。乳房もハリがあり、手で押しつぶすと――。

「や、やめてっ!」

私はガルムに突き飛ばされた。それだけなら振り払って更に押し倒す所だったのだけど、続けて内蔵銃による至近射撃までしてきたので、私は慌ててフィールで防御しつつ距離を取る。

「あ、ああっ」

私から離れると、ガルムは両腕で自分を抱き、ガクガクと震えだす。「な。なに? この体が……タエコの体が怯えてる。タエコの恐怖、凄過ぎて押しつぶされそう」

そのまま蹲って、地面を転がった後、私と視線が合うと、ガルムは一回全身の毛を逆立たせるように怯え、動物みたいに四足歩行で逃げ去ってしまった。

私は、追いかけてもせず呆然と眺めていた。

そして、しばらくして自分が半ば動く死者にレ○プ未遂していたことに気づき、激しく動揺した後に冒頭へと繋がるのだった。

——現在時刻12:30。

そんなわけでお昼休み。私、木更ちゃん、そしてアンちゃんの3人は開放日ではなく立ち入り禁止になってる屋上へこっそり忍び込み、それぞれ弁当をつついていた。もちろん、お互いの情報共有と、これからどうするかの話しあいである。

「——とまあ、そんな事があったって話よ」

とりあえず。私はまず真っ先にガルムの件について情報共有を行った。彼女が最初から私をターゲットに襲撃してきたこと、そのく

せ私が足を滑らせて落下した時彼女は攻撃せず体を張って受け止めたこと、何よりガルムの正体は妙子であり、私は死体である彼女に欲情してしまったこと、全て洗いざらい伝えた。手を出したこと以外は。

「だから先輩、昨日は報告を後回しにゾンビ物のエロ画像を収集してたんですね」

と、木更ちゃん。

「う。仕方ないじゃない、動揺してたんだから。それに護衛はちゃんとしてたんだから任務上は問題ないって話でしょ」

ゾ○ビランドサガのエロ画像もつとアップされる！

心の中で叫びつつ、私がたじろぎながら言うのと、

「ふふ、そうですね」

木更ちゃんは微笑んでいった。あ、別に責めてたり呆れてたりってわけではなかったのね。

「なまじイリスさんを夜這いしに行かなかった分、むしろ普段以上に仕事をされてましたもの」

「え。うそ？」

昨日の私、自覚の上ではいつもより不真面目だった気がするのに。するとアンちゃんが、

「私としては、鳥乃さんがそこまで動揺されることではないように思うんですけど」

「いや、さすがにレズでもネクロフィリアじゃないんだから。まあ、血色あつたし死臭もなかったしぶつちやけ生きてる人間と見た目全く違いなかったから、そつちの性癖の人には物足りないとは思うけど、それでも私としては妙子が死んでることは知ってたわけだしね」

と、私がいった所、

「あのー鳥乃さん？ 誠に申し上げ辛いことなのですが」

アンちゃんは、「申し上げ辛い」とは裏腹に、明らかに溜息でも吐きながら、

「貴女も全く同じ条件のゾンビですよね？」

「……あ」

そうじゃない。死臭もなくて、血色良くて、本来止まってる心臓が強引に動いてて、本当は死んでる人間って私じゃない。

どうしよう、たらーっと冷や汗でも垂らしたい気分。

横目で木更ちゃんの様子を窺うと、こちらもしつかり「先輩、気づいてなかったのですか？」とでも言いたげな顔してるし。

私は苦し紛れに、

「アンちゃん妙子とガルムの件について何か知らない？」

「先輩逃げましたね」

サクツと、私は木更ちゃんと言葉の刃に切られる。

「すみません。私もお仲間様の情報までは」

アンちゃんも、ちゃっかりガルムを「私とお仲間」なんて表現しないで。

「ただ」

しかし、アンちゃんは続けて。

「昨日もお伝え致しましたけどプライドは例のドラッグ漬けになった素体を求めて墓荒らし紛いのことをしていたそうです。その結果、妙子という方の死体を手に入れたのでしょうか」

「ああ、そういえば言ってたわね」

私はうなずくも、

「とはいえ、それならどうして死体が残っていたのかという話になっ
てしまいますけど」

と、アンちゃん。そこへ木更ちゃんが、

「確かにそうですね。当時は牡蠣根が存命中でしたから、発見された妙子さんの遺体を保存させるような事はしないでしょうし。確かにあの事件は不可解なまま表舞台からフェードアウトしてはいますけど」

私はうんと頷き、

「ついでに、そっちにも手を広げたほうが良さそうね。警察関係のハッキング」

多少なりとも何かの圧力で情報が隠蔽されてるのは間違いないの

だ。するとアンちゃんが、

「もし素敵な情報がありましたら、私にも回して頂けますか?」

「それはよろしいですけど、どうして改めて」

木更ちゃんが訊ねると、

「今後、警察関係から弱味を握る材料になりますから」

……本当、この娘は。

私はいった。

「今回の任務から外れた情報は有料よ」

「でしたら、先ほどの情報提供とは別件扱いで、かつ情報の入手経路も伝えずにお願い致します」

と、アンちゃん。情報を買う上で「手に入れた経路を知らない」ことは、情報の所持が原因でトラブルに巻き込まれても、捜査機関の事情聴取に対し「情報は買っただけ。どうやって調べたかは知らない」とシラを切るというリスク回避に繋がるのだ。実際、私たちは情報屋から情報を買う際も、入手経路はあえて知らないままにしている。

「商談成立ね」

正直、いま私の財布は実質高額の借金を抱えてるので、こういった臨時収入はとても助かる。

そんなわけで、悩みがひとつ解決し、財布も少し温かくなりそうと
いうことで、私は晴れやかな顔で、

「よし、じゃあせっかくだからこのまま食後の3Pでも」

「ところで藤稔さん現状の調査結果の程は」

「はい、こちらに纏めてあります」

「ここぞと無視して仕事の話を進めるふたり。しかも、揃ってわざとらしく防犯ブザーを見せつけて。」

「先輩も確認ください」

「どうやら資料のプリントを3人分用意してきたらしい。その内のひとり分の用紙を私は受け取った。」

内容は、まあ概ね予想通りといった所か。牡蠣根側によるドラッグや業者の使用用途、誰々を拉致した、調教した、買った、廃棄したといった個々の供述内容が大半。ただ、牡蠣根関連で逮捕された人物の

リストまでも手に入れてくれたのはとてもありがたい。

また、ソンプラ社の奴隷売買の体制が整う以前は、フィール・ハンターズのかすが店長や鷹野たかの明光あけみつという人物らと共謀し、拉致目的のテロ活動を行っていたらしく、資料には10年前に起こした観光バスのハイジャック事件の情報が載っていた。

そして、単なる偶然だろうか、当時バスに乗ってた乗客には鱒川ますがわ羽玄はげん、その妻の真理奈まりな、当時中学2年生になる娘の時子ときこという一家の名前が見つかった。乗客はその後、何名かの女性被害者を牡蠣根かきねが買い取った後、残りでドラッグとフィールによる人体実験が行われ、大半が死亡したとされる。

と、ここで。

「鷹野たかの明光？」

アンちゃんが、その名前に反応。

「知ってるの？」

訊ねたところ、

「いえ」

アンちゃんは首を振りつつも、

「ただ、黒山羊の實のプライドの名前が鷹野たかのメイコと聞いたことがありまして」

「なるほど。しかも、ただ同じ鷹野姓というわけでもなさそうですね。明光あけみつも読み方を変えればメイコウになりますし」

と、木更ちゃん。私もうなずき、

「プライドが元フィール・ハンターズという事実もあるし、本人か関係者って可能性ありそうね」

ただし、明光あけみつは男性の名前、メイコは女性の名前ではあるけど。

「よろしければ、鷹野たかの明光あけみつに関してはこちらでお調べ致しますよ。ハイウインドにはヒロさんにアインスという優秀な人材もおりますし、私個人も黒山羊の實のグラトニーと繋がりが御座います」

アンちゃんが提言してくれたので、

「ありがとう。じゃあお願いするわ」

私はあるがたくお願いすることにした。

こちらは、先に妙子関係の裏側を優先的に調べて警察関係の弱みを握ってしまおうという話で決まった。

「さて」

深夜0時。私は意気込み心の中で、

「夜這いの時間だ、ですか？」

言おうとした所を先に木更ちゃんに言われてしまう。しかも、凄みもない普段の笑顔で訊ねられたので、なんだか私のほうが気恥ずかしくなり、

「ま、まあ。否定はしないけど」

とか照れを隠すような反応をしてしまう。

現在、ハングドの事務所には私、木更ちゃん、イリスの3人しかない。本日司令と鈴音さんがスタジオの仕事で編集と深夜まで打ち合わせに入ってるため、アシスタントにとっては貴重な休日になってるのだ。

それでもつて、イリスはハングド入りする前まで木更ちゃんが使ってた客室ですでに就寝中。木更ちゃんがパソコンのキーをたたく音すら目立つ程に静かな夜だった。

「でしたら、先に妹さんに手を出した件の聞き出しとメンタルサポートをお願いできますか？」

木更ちゃんが二人分のマグカップにホットコーヒーを注ぎ、はいと渡してくる。

「それはまあいいけど、なんだか不思議な気分ね。夜這いを容認されるのって」

マグカップを受け取り、私がいうと、

「勿論、強姦と判断したら即通報しますよ？」

木更ちゃんはくすりと笑いながら、

「ですけど、昨日も言った通り和姦でかつ仕事を疎かにしないなら止める必要はありませんから。加えて、もし行為がカウセリングに繋がるなら猶更」

とかいっているので、私は感心しながら、

「木更ちゃんって、案外使えるものはなんでも使うタイプよね？」

「そうでしょうか？」

「いや、そのほうがいいのよ。だからこそハンドはニュートラルって話だしね」

木更ちゃんに返ししながら、私は両手にマグカップを持って客室の扉をトントン叩く。

「イリスさん、起きてる？」

訊ねると数秒後、

「はい」

と、少々沈んだ声で反応があった。

「ちよつと話があるんだけど、構わない？」

「どうぞ」

許可をもらった所で、私は扉を開ける。

部屋はすでに消灯済で、イリスはベッドの上で半身起こしていた。それも、透け透けのランジェリー一枚という格好で。

これは、そういう意味なのだろう。私は最後の理性でマグカップを机に置いてから彼女の隣に座る。そして、肩を抱き、唇を奪おうと首を近づけた所で、

「やめてください」

と、イリスの両手で押し返される。

「え？ 抱いてほしいんじゃないの？」

「誰もそんなこと言ってます」

「でも誘ってるじゃない、そんな色気たつぷりの下着姿で」

「ただの寝間着です」

「嘘？」

「嘘じゃありません」

言いながら、イリスは枕元に置いた拳銃をとって私の眉間に突きつけ、

「撃ちますよ？」

「う」

私はたじろぐ。

心臓とか内臓を撃たただけなら何とか生きれる私。でも、頭部だけは普通にアウトなのだ。

「わ、和姦ってことでワンチャン」

「ありません」

「やばい、イリスさん目が本気だ。」

「じゃあせめてお尻か胸触らせいえ何でもありません」

私は咄嗟に身を屈める。直後、私の頭上で銃声が響く。フィールを込めてないせいで、逆に耳の鼓膜が破れそう。

「分かった、落ち着いて。本題に入ろう本題」

私は慌てて距離を取り、「ほらコーヒーも用意したから」と指さし、彼女の分のマグカップを渡す。

「変な薬を入れてませんよね？」

「大丈夫、淹れたのは木更ちゃんだから」

「あの方も、あまり信用できないのですけど」

一瞬、私は「ええ？」と思ったけど、BARなばなでのやり取りを思えば、確かに仕方ない。

とりあえず、私は大丈夫と証拠をみせるために自分の分のコーヒーを一口飲んでから、

「その木更ちゃんからの情報だけど。あなた、過去に妹にドラッグを使って性的暴行に及んだらしいわね」

「!？」

イリスの目が見開く。彼女は驚き、震えた声で、

「どうして、それを」

「あの子の情報戦は結構なものつてだけの話よ。曰く、イリスさんは学生時代父親譲りの好色家で、校内のイケメン、美女、教師を次々に食い散らかしたとも聞いたけど」

「ええ」

沈んだ声で、イリスはいった。私は続けて、

「ついでに、昨日セクハラで下着に触れてたとき、べっとり濡れてたって話だけど」

「だから股の緩い女と思ったわけですか？」

「とは限らないけど、何か事情があるとは思ったわ」

「初めに言いますけど」

イリスは私から首をそらすと、

「私は貴方には抱かれません。私を抱ける女だと思ったのであれば、諦めてください」

確かに。経歴と昨日の下着の濡らし方に反して、先ほどの拒絶っぷりは異常だ。

「分かったわ」

私は、とりあえず言った。

「木更ちゃん情報の続きだけど、妹を犯してから、貴方はドラッグを極端に嫌ってるようね。もしかしてだけど、同じように性行為も拒絶してる感じ?」

すると、

「私は、これまで一体何人の人生を身勝手な性欲処理で潰したんでしょうか?」

イリスは強い罪悪感を顔に出しいった。

「もちろん、体を重ねた後も何も変わらずフレンドリーに接してくれた方はいます。でも中には、快楽に溺れた方、閉じ籠った方、私に依存してしまった方など確かにいたのです。でも、ずっと自分の罪としては思っただけでなかったんです。妹を、一番身近な存在の変貌を目の当たりにするまでは」

「妹さん、ドラッグで後遺症を残したそうね。何があったのか聞いても?」

真面目な顔で訊ねると、イリスは「はい」とうなずき、

「妹はショックで数年間の記憶を損失しました。加えて、いまは殆ど収まりましたけど当時は重い禁断症状も。私は、そんな妹を二度と抱くことはできず、事実を教えることもできませんでした。だから、妹はいまも自分が姉に穢された事も知らず、無垢で純粋なままです」

「ってことは記憶は」

「消えたままです」

それはトラウマになる。いや、戻ったら戻ったでさらに厄介なこと

になるから不幸中の幸いでもあるけど。

「私も、以後自分の性欲を嫌忌するようになりました。一応、他人の性行為を否定するほど過剰ではありませんけど」

「それが自分となると、怖いし不安だし許されない気がする？」

訊ねると、

「はい。そして、これも生涯をかけて償わなくてはいけない物事のひとつです」

イリスはうなずく。

「そっか」

私は納得し、だからこそ言った。

「なら、余計に一度は手を出しておかないといけないって話ね」

「ええっ!?! どうして」

驚き、珍しく取り乱した感じでイリスがいうと、

「当然、あなたの呪縛を解き放ちたいから。セックスは相手を潰すばかりじゃない、相手を癒すこともできるって話よ。ちゃんと自分の性欲も満たしながらね」

私は言いながら、改めて彼女の隣に座り、肩を抱く。

「被害者を救いたいんでしょ。救い方、教えてあげる」

「鳥乃さん」

イリスが、どこかすがりつくような目でこちらを眺める。

これはイケる! そう、確信した瞬間。

事務所にインターホンが鳴り響いた。

「あ」

ハツとなつて距離をとるイリス。

「助かった。もう少しでムードに流されて」

この様子だと、次からはもう少し警戒されてしまいそうだ。全く、誰よいい所だったのに、せつかく最初で最後かもしれないチャンス。を。

とりあえず私は心の中で号泣しながら席を立ち、

「悪いわね。ちよつと行ってくるわ」

と、部屋の外へ。

玄関では、すでに木更ちゃんが来客の応対をしており、警視庁特捜課の永上^{ながみ} 門子^{かどこ}さんと、NLTの霞谷さんが立っていた。

木更ちゃんは私に気づくと振り返り、

「あ、先輩。こちらは特捜課の」

「永上さんでしょ？　うちのお得意様よ」

と、私は答えながらふたりの下へ向かい、

「とりあえず、立ち話もあれですし中へどうぞ」

玄関からすぐの所に設置された応接間のソファへとふたりを誘導する。

「ありがとうございます。このような深夜に」

霞谷さんは軽く頭を下げてから、先に永上さんを座らせて隣に座った。私はテーブルを挟んで対面の席に座り、木更ちゃんが四人分のコーヒーを用意し隣に座る。

「それで、今回はどのような要件で」

「早速だが、これを見てくれ」

永上さんは鞆から一枚のプリントを取り出すと私たちに差し出す。

拝読した所、警察が所有している機密情報のようなだった。それも牡蠣根関連の。

まず、そんな重要なものをさらっと見せてくるのはどうかと思いつつ、

「これは」

「ここ最近、保護および逮捕した牡蠣根と繋がってた者たちの証言を纏めたものだ。全員、怪人に襲われた結果自白した」

と、永上さん。しかし、

「しかし、この資料はすでに何者かに改ざんされている。昨日から何者かがハッキングを仕掛け、情報の一部を削除したんだ」

間違いない。私たちがソンプラ社の情報を改ざんしたものだ。しかも、永上さんはどうやら今回の件に相当立腹している模様。これはもしかして、気づかれた？

なんて思った所、

「頼む、犯人を捜してくれ。ドラゴン・キャノンだ！」

と、永上さんは私の肩をガシツと掴み、いいだしたのだ。

「鳥乃、お前なら牡蠣根の事件にも関わっただろう。この件はお前も無関係ではないはずだ！」

懇願する永上さん。しかし、私は首を横に振り、

「悪いけど今回は断らせてもらおうわ」

「な、なんでだ！」

きつと請けてもらえるものと思ってたのだろう。力強い声が静かな事務所に響き渡る。

「そりや、まああの事件は妙子やロコちゃんも関わってるし、できることなら私から頭を下げてでも関わらせて貰いたい話よ」

「なら、なんで」

「簡単な話。悪いけど、いま別の依頼を請けてる途中なのよ。そこへ永上さんのドラゴン・キャノンを請けたら二重依頼になるわ」

「ぐ。だが！　しかし！」

諦めきれない様子の永上さん。そこへ霞谷さんが、

「よしませう。永上さん」

「しかし、霞谷さん！　我々ではハッキングの痕跡を辿り切れなかったのだろう、ならば！」

「別に諦めたわけではありませんよ。いま依頼するのが無理なら、鳥乃さんがいまの依頼を終わらせた所を改めて伺いましょう」

まあ、普通に考えればそんな悠長に構えてたら手遅れになりそうなものなのだけど、

「そうか！　その手があったか」

脳筋の永上さんは簡単に霞谷さんに丸めこまれてしまう。

霞谷さんは微笑み、

「ですが、何もしないわけにもいきません。永上さんは先に署に戻り現状でできるだけの対策をお願いします。いつ頃依頼を請けて貰えそうか等の話し合いは、いまから私のほうでさせて頂きます」

「分かった」

永上さんは先に席を立ち、「では、その時になったらまた来る」と急いで事務所を後にした。どうやら相当熱が入ってるのが分かった。

軽く空回りしてそうな程に。

で、ひとり残った霞谷さんかというと、

「さて」

穏やかな顔、しかし、明らかに何かを見透かしてる様子で、彼は話を切り出した。

「早速ですがお聞かせ願えますか？　どうして、警察関係者から機密情報をハッキングし改ざんに出たのか」

「どうやら、こちらは気づいていたらしい。」

「依頼よ」

「私がいうと、」

「誰からの依頼ですか？」

「仮にNLTなら同じ質問をされて答えてくれる？」

私の返事に苦笑いを浮かべる霞谷さん。依頼人の情報を言えるわけがないのはNLTもハングドも同じなのだ。

しかし、彼は分かりましたと引き下がりはず、

「でしたら、せめてこちらが納得できる理由をお願いします。どういった依頼でハッキングと機密情報の改ざんを行ったのか。でなければ、私たちはあなたたちを裁かなければいけません」

「先輩」

不安そうに、木更ちゃんがこちらを窺う。

「なら、前提として理解して欲しいことがあるわ」

「私はいった。」

「ハングドはニュートラルの組織だけど、基本好き好んで悪人の味方をする組織じゃない。善悪どっち付かずだからこそ、請けたいと思っただけの依頼しか請けないし、法や秩序では護れないものを護るために、あなたたち正義を敵に回すことだっている。勿論、霞谷さんも分かっているからこそ今回の対応とは思うけど」

「ええ、勿論です」

微笑んでみせる霞谷さん。彼はとても穏健な人間で、それでいて正義感がとても強い人だ。もし彼が本気で私たちを敵と認識してるようなら、今ごろ私はどうなってるか分からない。

私は、彼を信用していった。

「加害者サイドの人間で、自分の口で事実を公表し罪を償いたい人がいるわ。その為、依頼人には事実の裏付けと更なる事実を知る為に警察が所有する機密情報が必要だった。加えて、依頼人は警察関係者にとっても準備が整い次第摘発を狙ってるだろう人物。警察の後手に回るわけにはいかない。だから時間稼ぎにも出る必要があったのよ」
「なるほど、理解しました」

霞谷さんは納得した様子で、

「自首や出頭とも違うようですね。恐らく依頼人は加害者サイドであつても加害者ではない。しかし、同様に裁かれるだけの立場にある人間というわけですか」

「まあね」

言いながら、私は「やばい」と思った。

この人、これだけの材料ですでに頭の中で該当者を何人かに絞っている。これ以上情報を与えてしまうと、間違いなくイリスの名に辿り着く。

「分かりました」

霞谷さんはいった。

「立場上、私は今回あなたたちの味方はできませんが、せめて出来る限りハングドの邪魔にならないよう気を付けることに致します」
「助かります」

と、木更ちゃん。だけど私は、

「でも、いいの？ 言い換えるなら、それって犯人を捜査する体だけ保つてピエロを演じるってことでしょ？ もしバレたら」
「大丈夫です。何とか致しますよ」

霞谷さんは突然事務所を見渡すように眺め見て、

「もし増田さんが生きていたら、恐らく今回警察の機密を荒らしたのが彼だったのでしょうか」
「そういえば増田って」

元特捜課。そして霞谷さんは特捜課でありNLT幹部でもある人間。

「彼は、元々私の部下でした。そして、本当なら彼が特捜課に身を置いたままNLT所属になるはずだったんです」

霞谷さんは席を立った。

「私の中では、いまも彼は私の誇るべき部下で仲間です。そんな彼は特捜課とNLTの道を蹴つてでも、私たちでは護れないものを護るためにハングドにつきました。なら、私も彼の遺志を汲み、私が出来る最大限の形で、彼のいたこの場所^{ハングド}を護らせて頂きます。では、失礼致しました」

そして、事務所を後にする。

私たちは、しばらく呆然とした後、

「増田さんって、凄い方だったのですね」

と、木更ちゃん。

「全くよ」

私はうなずく。実は、NLT幹部の霞谷という名小屋近辺の裏世界ではトップ級に名の売れた超大物のひとりだったりするのだ。彼の凄さはその手腕と立場に似合わぬフットワークの軽さにあり、味方につければ間違いなく頼りになり、逆に敵にまわせば恐ろしい相手になる。木更ちゃんは、そんな霞谷さんとkasugaya常連の仲として友人レベルのコネを持ってたけど、これって恐ろしいレベルの幸運だったりするのだ。先述の通りフットワークは軽い方だから、顔見知り程度のコネなら案外何とかなるんだけど。

「鳥乃さん、藤稔さん、いま少しよろしいでしょうか？」

イリスが客室の内側から戸を叩き、訊ねてきた。

「はい、お客様も帰られましたので出てきても構いませんよ」

木更ちゃんがいうと、

「ありがとう」

と、イリスが客室から出てきた。先ほどまでの下着姿と違い、上にガウンを一枚羽織っている。

「実は、ハングドに調べて欲しいことがひとつ出てきました」

私たちの下に歩み寄るイリス。——そこへ、勢いよく扉が開かれ、「すみません、用事がもうひとつあったのを忘れておりました」

と、慌てた形相で霞谷さんが事務所にUターンしてきた。
結果。

「あ」

「あ」

お互いを視界に映し、「やっちゃった」って顔で硬直するイリスと霞谷さん。

こうして私たちは、味方につければ最高の、しかし敵に回せば最悪の存在である霞谷さんに、あろうことか「依頼人バレ」という大失態をやらかしてしまったのだった。

それから数分。

「ど、どうぞ」

何とも形容し難い笑顔で木更ちゃんは淹れ直したコーヒーを霞谷さんの前に置く。

「ありがとうございます」

で、受け取った霞谷さんの笑顔もまた、何とも形容し難い。

「ま、まあ何？ さすがに霞谷さんなら彼女が誰かご存知よね？」

動揺を隠せないまま私が訊ねると、

「ええ、ソングラ社の若き新社長、イリス様でよろしかったでしょう？」

と、霞谷さん。

「はい」

もう否定しても無意味なので、イリスもうなずいて肯定する。

「なるほど。正体が判明してしまえば、彼女以外にいないレベルで全ての辻褄が合ってしまいますね。確かに、イリスさん本人は無実ではあるのですが、彼女が日本に来ていたと知れば、ここぞと接触しなければいけない相手です」

霞谷さんは、言うてからイリスに向けて微笑んで、

「牡蠣根の息がかかった事業を全て手放し、ソングラ社を慈善事業として再建するそうですね」

「どうしてそれを」

イリスが驚き訊ねた所、

「私たちも情報収集は行っていましたからね。特に昨晚から警察の機密が改ざんされてましたから」

まあ、遅かれ早かれ改ざん内容からソンプラ社が疑われるのは予想していた。まあ、昨日の今日でいきなり特定されたらアウトって気持ちではいたけど。

私は訊ねる。

「すでに、他の人にもこの件は」

「いえ。ハッキングの手口から犯人が藤稔さんなのは分かってましたから。まだ誰にも明かさず、今日皆さんの反応を見て行動を決めようと思ってました」

と、霞谷さん。これは増田の功績差し引いても、木更ちゃんが友人レベルのコネを持ってなかったらハンドは組織ごとアウトだったかもしれない。

「あの、この件は引き続き誰にも」

木更ちゃんの言葉に、霞谷さんは「ええ」とうなずき、

「ですが、私から言わなくてもレッドゾーンは時間の問題でしょう。希望的観測込みでも、恐らく一週間はもちません」

私は頭を抱え、

「むしろ最悪早朝ありえるって話よね」

「そうですね。とはいえ、イリスさんを護ろうものなら、これしか手が無かったのも確かでしょう」

と、霞谷さん。

「さて、どうしたものか」

考え込む霞谷さん。そこへ木更ちゃんが、

「霞谷さんが完全に私たちの側について頂けるのなら、ひとつ手はあります」

「内容を伺ってもよろしいですか？」

「はい。では今から必要な資料を印刷致しますので、少々お待ちを」

と、一旦席を立つ木更ちゃん。

数分後、私、イリス、霞谷さんの下にそれぞれ数枚の資料が配られる。それはまさしく妙子の遺体に関わるものだった。木更ちゃんは、

お昼休みから現在までの半日の間に見事、妙子の死体の行方と警察上層部の繋がりを掴んでくれたのだ。しかも、木更ちゃんのいう通り霞谷さんさえ味方につけば、一気に私たちの有利になる副産物を沢山つけて。

「これは!?!」

反応を見るにこの情報は霞谷さんも知らなかったものらしい。木更ちゃんはいった。

「今年3月。鱒川ますがわ 妙子たえこという女性の遺体がある山奥で発見された事件をご存じですか?」

「ええ、それが発端とする依頼でハンドは牡蠣根を粛正したとも」

「実は黒山羊の実の構成員の中に、その鱒川さんの遺体を元に作られた『プライドの作品』をこの度見つけまして」

「え!?!」

霞谷さんは驚き、

「本当なのですか? それは」

「はい。その為、イリスさんの依頼の一環として鱒川さんの遺体について調べていた所、警察上層部の悪事を多々発見しました」

内容はこうだ。

今年3月。鱒川ますがわ 妙子たえこの遺体がある山奥で発見された。

上層部は、即座に事件に関する一切の捜査と報道を禁じ、表沙汰の回避に務めるも、現場の初動を止められず一度だけテレビでの報道を許してしまう。上層部は報道陣に改めて圧力をかけた後、第一発見者を「処分人」フィアを雇い暗殺。

鱒川 妙子の遺体は、牡蠣根には指示通りコンクリートの下に埋めて処分したと説明したが、実際は黒山羊の実という宗教組織に売却した。

直接牡蠣根と繋がった上層部は怪人の手に堕ち自白するも、警察組織全体の信用に関わる内容のため、逮捕に至る事実と共に隠蔽することで決定する。

「どこでそんな情報を」

驚愕する霞谷さん。確かに、ハッキングでの情報収集を頼んだとは

いっても、こんな情報が警察のコンピューターに残ってるわけがない。

「実は、こちら全部一度機密情報に記載されたものなんです」「え?」

と、なる霞谷さんと私。

「資料にもあるように、上層部の中に怪人によって自白させられた方がおりまして、その供述内容が一度他の情報とともに記録されてたんです。勿論、すぐ他の上層部によって削除されたのですけど」

そこまで言うてから、嬉し気に笑い、

「幸運にも復元用のバックアップデータから拾えてしまいました」
とのことだった。

「なるほど」

資料を一通り読み終わると、霞谷さんは納得した様子で、

「今回の機密情報の改ざんも同様の理由による上層部の隠蔽という流れにすれば、あと数日は時間を稼げそうですね」

「恐らく今までソングラ社に摘発が無かったのも、上層部の闇が表に出るのを避けてのことでしょう。ドラッグの栽培や奴隷売買に関わってた人たちが証言できてしまいますから。ですけど今回、イリスさんはそんな目の上のたんこぶを処分し公表の準備に入った。その為、上層部は急遽ソングラ社の摘発や逮捕に軌道修正していた所、私たちに先手を取られた形になったのだと思います」

と、木更ちゃん推測をいうと、

「だから発見がここまで早かったと。可能性はありますね」

霞谷さんからもお墨付きをもらう。木更ちゃんは改めて。

「真実は後々全て晒します。どうか時間稼ぎをお願いしますか?」

「分かりました」

霞谷さんはうなずき、

「どうにかやってみましょう」

「ありがとうございます」

私たちは頭を下げた。でもって、

「それで霞谷さん。もうひとつの用事というのは」

私が訊ねると、

「はい」

霞谷さんは姿勢を正しなおし、

「実は、おふたりの協力で逮捕に至ったかすが氏が脱獄しました」

「え？」

驚く木更ちゃん。

「しかも、彼に関する情報も全て抹消されたようで、警察も今回は誤逮捕につき釈放したと処理するしかない状況とのことですよ」

「ま、当然あのまま終わるはずがないって話よね」

一方私は当然そうなるものと納得。

そもそもファイール・ハンターズは規模が違う。階級の低い構成員なら逮捕も十分通用するけど、彼レベルになつてくると下手に法的処置をとつても今回のようなケースに陥るのがオチなのだ。それでも逮捕というやり方しかできないのが、法に護られた世界の限界といった所か。

「ただ、今回の脱獄の裏には少し奇妙な話がありまして。目撃者によると藤稔さんが協力していたと」

「え？」

私は、咄嗟に木更ちゃんの様子をうかがう。

「やってません。確かに毎日面会にはうかがってますけど」

木更ちゃんはそう言って否定する。……ていうか、毎日行つてたの？

霞谷さんはうなずき、

「ですよ。私もそう思ってますし、何より救出の仕方が藤稔さんらしくなかったのです」

「どうやって救出したの？」

私が訊ねると、

「メイス一本で、真正面から警備の方々を撲殺していったそうです。恐らく過去に発生したビル襲撃事件に出てきた殺戮者と同一人物かと」

「あ」「あ」

霞谷さんの証言に私たちは同時につぶやく。それって、間違いなく。

「ミカア！」

「ミカア！」

「ご存じなのですか？ 犯人を」

訊ねる霞谷さんに私たちはうなずき、

「木更ちゃんの親戚で藤稔 深海っていうのよ。例の殺戮者の正体で年齢は14歳。外見は木更ちゃんをそのまま中学生くらいの幼さにした感じで」

「何イッ！」

突然、蹴飛ばされる事務所の扉。驚き玄関を見ると、永上さんが立ってたわけで。

「きさらちゃんじゆうよんさいだどっ！ 写真は、写真はあるか？」

もしかして、そのワードに反応して扉破壊したの、この脳筋。そういえば、この人ってロリコンでショタコンって話じゃない。

「永上さん、どうしてここに」

引き攣った顔で霞谷さんが訊ねると、

「霞谷が一向に戻らないから様子を見に戻ったんじゃないか。そしてらロリ木更ちゃんだと！ うらやまけしからん！ 私も密会に混ぜてくれ！」

霞谷さんは、脳筋を引っ張って帰っていった。

この時点で私たちは、イリスの「調べて欲しいこと」が完全に頭からすっぽ抜けていたが、後日先ほど木更ちゃんが提示した資料で解決していたと伝えられた。

それから数日。

霞谷さんという味方をつけた私たちは、機密情報の改ざんという手段に出る必要もなくなり、順調に公表の準備を進め、ついにソンプラグループ社長による記者会見を前日に控えることになった。

——現在時刻19：40。

この日、私は木更ちゃんにイリスの護衛を任せ、ひとり近所の河原

を散歩していた。勿論、仕事をさぼってるわけでも、無意味に活動しているわけでもない。

「見つけたっ!」

程なくして、先日同様に背後から声。

私は振り返りいった。

「来たわね」

そこには、前回同様の全身武装で正体を隠したガルムの姿。私は、まさに彼女をおびき出すために歩いてたのだ。とはいえ、完全な闇雲ではあるけど。

「この前は体がおかしくなって逃がしたけど、今度は逃がさないから」
びしっと指差し、天真爛漫かつ好戦的に宣言するガルム。けど、私は早速両手をあげて、

「あーちよつと待つて。今日私は戦いにきたわけじゃないから」

「アナタに無くて私にあるの!」

「妙子のことを知りたいから?」

「そう! そうよ! 貴方と闘えばきつと分かるの! 体がアナタを知ってるから!」

「闘わなくても教えられるけど?」

私がというと、

「え?」

となるガルム。

「どっかの熱血バトルアニメみたいに、拳と拳で殴り合わないといけないって話じゃないでしょ。話し合いのほうがよっぽどスマートじゃない?」

「ううっ」

ガルムはたじろぎ、

「闘いたかった」

小声でのたまうガルム。あ、この子ただのリアルファイトジャンキーだ。

「でも、話し合いつて。私は何すればいいの?」

「ナニすればいいのよ」

私は努めてさらつといった。

「ナ、ニ？」

首をかしげるガルム。あ、この子分かってない。私はならと近づき、彼女の肩を優しくつかむ。

「とりあえず全裸になつてくれない？　最近、欲求不満でそろそろ限界なのよ」

イリスが性行為を拒否していることが確定した為、一転して木更ちゃんは制止側にまわってしまったのだ。木更ちゃんも今回は基本帰宅せず任務に入つてくれるため、私は襲うタイミングが見つからない。何度か強硬手段には出たものの、イリスは銃を撃つし、木更ちゃんは非暴力ながら手段を問わず制裁してくる。この前なんておがた緒方銃とかいう人と連絡を取ろうとしてたし、その内イリスも簧巻きの作り方を覚えちゃったし。

そんなわけで、いま現在私は四六時中イリスや木更ちゃんっていう美女美少女と一緒にいるのに、性欲を満たす手段が存在しない。

ガルムと接触するしか無かったのである。

「裸になればいいの？」

きよとんとした様子ながら、容認しそうなガルム。無知万歳。

「そう！　この前みたいに素顔とおっぱいとまんまん晒して」

「分かった」

と、コートに手をかけるガルム。しかし、その手はすぐ止まって、駄目、体が、タエコの体が拒否してるみたい。全身が、またガクガクブルブル震えてきた」

「そこを何とか」

と、無情にも言ってしまった所で、私はハツとなる。

ガルムは、体が私を知ってるといった。そして、震えてる時は自分ではなく妙子が震えてると。しかも大抵私がセクハラに及ぼうとしたときに。

もしかして。

「ねえ、もしかして妙子は、妙子はいまも生きてるの？　ガルムの中に妙子がいるの？」

しかしガルムは首を振って、

「ううん。タエコは死んでる。それは間違いない。私はフェンリルと違って、あくまでタエコの体に入れられた別人」

そう。

「でも、この体はタエコのもの。だから体はいまもタエコとして動いてる。私はタエコじゃないけど、タエコの一部は確かにここにいる」
自らの全身を愛おしそうに抱きしめるガルム。

「残留思念」

私はつぶやいた。

「ざんりゅーしねん？」

訊ねるガルムに、

「妙子本人はもういないけど、生前の妙子の思考や感情があなたの体にこびりついて残ってるって話？」

「そう！ それ、それっ！」

ガルムは私の手を取って嬉しそうにぴよんぴよん跳ねる。

「そっ、か……」

残留思念、って話なのね。

「わ、わふっ、どうして泣いてるの？」

慌てて訊ねるガルム。言われて、私は頬に一筋の水滴が垂れていたのに気づく。

「え、いや、気にしないで」

つい、私は恥ずかしくなり誤魔化しながら、

「いや、その、ね。妙子、あんなになっても最期まで私のこと覚えてくれてたのねって」

「あんなこと？」

首をかしげるガルム。この子、もしかして。

「アナタ知ってるの？ タエコがどうやって死んじゃったのか」

「知らなかったの？ ガルム」

訊ね返すと、ガルムは大きくうなずく。

そっか。

「なら、教えてあげる条件に、ふたつ聞きたいことがあるわ」

「なに？」

食いつくガルム。

「どうして黒山羊の実は、妙子の遺体を欲しがったの？ どうして、あなたの体として妙子が選ばれたのか、どうやってあなたが生まれたのか、教えて欲しい」

「うっ」

固まるガルム。そのまま「うーうー」と数秒程うなった後、

「分からない」

「分からない？」

「知らないし、聞いたこともないし、気にしてなかったのよ。私がタエコの死体から生まれた理由も、どうしてタエコだったのかも。気になって、聞いてみたいのは、どうやって私が生まれたのかくらい」

「その結果は？」

「さらに訊くと、

「知らないって。それでも訊いたら、殴られて、蹴られて、鞭で打たれて。後でフェンリルに訊いたら、二度と訊かないほうがいいって。フェンリルも同じように酷い目にあつたからって」

「そっか」

一応、ガルムからこの辺を聞き出すつても今日接触した目的だったんだけど。無理そうね。

「なら二つ目」

私は続けていった。

「あなたは、どうして妙子のこと知りたがってるの？」

するとガルムは、

「本当は会いたいのよ」

と、いった。

「だって、生まれたときからずっと一緒なんだから。タエコは私の一番の友達でパートナーよ！ だったら、本物のタエコに会って、お話しして、本当の友達になりたいって思うの、当然でしょ？」

なんて、顔は見えないけどガルムはにかつと笑うようにいい、

「それとね」

と、どこか懐かしむように続ける。

「私。ガルムになる前からタエコのことはよく知ってた気がするのよ。私は、自分がガルムになる前のことを知らない。ゼロからガルムとして創られたのか、他の作品みんなのように元々は他の人間だったのかも知らない。でも、タエコのことはこんなに大好き。すつごく大好き」

好きの大きさを表現するように、ガルムは両手をいっぱいに広げる。

「だから知りたいのね、自分のこと」

自分自身が妙子を知る手がかりだから。

「それもあるわ。純粋に私の出生を知りたいのも本当だし、そこからタエコを知りたいのも本当。けど、タエコは私が分からない。だって、体の中のタエコが私を全く知らないから。だから、私はただただ会いたい、友達になりたいの、お話したいの。でも、それはできないから、だからせめて、タエコのこと知りたいのよ」

そこまで聞いて私は。

「分かったわ」

と、うなずく。

「ホント？ 教えてくれるの？」

「私の知ってる限りならね。ちよつと歩きながら話しましょ」

私は、ガルムを連れてある場所へ向かって歩き始める。

「妙子は、この地で生まれ育った孤児なのよ」

「孤児？」

「両親がいない子供のこと。妙子は親に捨てられてるのよ」
「っ」

ガルムは、強いショックを受けてる様子だった。これだけでショックを受けてたら、最期を聞いたらどう思うんだろうか。

「で、ここからちよつと歩いた所にある孤児院に引き取られ、死ぬ一年前くらいまでそこで生活してたわ。私が出会ったのもその頃。学校ではテニスっていうスポーツをしてね、優しくて穏やかなお嬢様みたいな子だったわ。孤児にそんな表現するのもおかしい話だけ」

「あ、何となくわかるわ。この体にいるタエコも、優しくて温かくて、タエコを感じるとすつごくほつとするの」

ぴよんぴよん跳んではしゃぎながら、ガルムは食いつく。何ていうのか、こうして接してみると動物みたいな子だ。あ、動物といええば。

「それと、そうね。確か友達に小型の野良犬がいたわ」

「野良犬？」

「確かころちゃんって呼んでたっけ。妙子の幼馴染に川泥かわで 炬子ろこちゃんって子がいるんだけど、その子の名前と、ころうどんって料理から付けたって言ってたわ。そういえば、妙子が孤児院を去ってから見かけなくなったわね、あのワンちゃん」

とか喋った所で、

「うっ」

ガルムが突然頭を抱えた。

「ちよつ、大丈夫？」

私が駆け寄ると、

「ちよつと、いきなり頭がズキンってしただけ。大丈夫、もう収まってきたわ」

「そう」

それでも、まだ少し苦しそうにしてたので、私は頭を撫でてみる。そういえば私も、たまに妙子と一緒にあのワンちゃんの頭を撫でてたっけとか思い出しながら。

「何だかほつとする」

ガルムがつぶやいた。

「それに何だろう、すごく懐かしいキモチ。もしかしたら私、こうやってタエコに撫でてもらったことがあるのかも」

なんてガルムが言うのだから、私はもうしばらく頭を撫でてあげた。しばらくして「もう大丈夫」とガルムが2・3回跳ねてみせたので、私は「分かった」と再び足を進める。

今度は、ガルムのほうから訊ねてきた。

「ねえ。タエコはデュエルモンスターズはやってたの？」
って。

「二応やってたわね。近くのカードショップの売れ残りとか、引退した決闘者の寄付で集まったカードを孤児院のみんなで共有してるよな感じだったから、ほとんど紙束みたいなデッキだったけど」

「それでもいいわ。どんなデッキを使ってたの？ タエコは」
食いつくガルム。そうだったわね。

「タエコには似合わないカードだけど、デーモンを使ってたわね」
「デーモン？」

「初期のチェスデーモンとか孤児院の中でも人気がなくてね。おかげでサポートカードが丸々余ってたから、その分他の子よりテーマデッキみたいにして上げてたわ。おかげで一枚くらいなら《デーモンの召喚》も他の子より優先して使わせて貰ってたみたいだし、事実《デーモンの召喚》が妙子のエースって印象だったわ」

話しながら、何だか懐かしくなってきた。加えて思えば妙子って案外デッキ構築力高かったのだと実感する。さつきは紙束とか言ったけど、孤児院のカードで組んだにしては結構デッキらしいデッキになつてたのだ。

「でも、そんな生活は中3の夏辺りに終わったわ」

私は、妙子が牡蠣根に捕まって奴隷にされ、ドラッグと性暴力で使い潰された後、山奥に廃棄されて死亡といった一連の内容をガルムに伝えた。

ガルムは、最後には私にしがみつき、肩に噛みついてた。そうでもしないと発狂しそうな程、強いショックがガルムを襲ったのだと分かった。いや、ガルムだけではない。恐らく彼女の中の妙子も……。

そして、泣きじやくり、その場で痲癩してみせ、激しく息を切らせて数分、疲労もあってかやっと落ち着いていくと、

「カキネは、そのカキネはいまどこにいるの？」

と、ガルムはこの場にいない牡蠣根に憎悪の目を向ける。推測ではない。深く被ったパーカーの奥から、見えたのだ。

「タエコも、とてもカキネを恨んでる。分かるのよ、体の中のタエコが、さつきから憎くて、悔しくて、悲しくて、その口コちゃんって子に会いたくて寂しかったって、すっごい言ってる！ 教えて！ いま

から私、タエコの仇を」

「それは出来ないわ」

私はいった。

「なんで！」

と、掴みかかるガルスに私は、

「私がもう殺した」

「え？」

「もう、私が仇討ちしちゃったのよ。そのロコちゃんと一緒に」

「そっか」

ガルスは納得してない様子だったけど、これ以上は何も訊かなかった。

私も、休憩が必要と思えばしばらく足を進めるだけで。

「ついたわ」

私は足を止める。目の前には、一軒のコンビニ。

「ここは？」

訊ねるガルスに、

「すぐにわかるわ。悪いけど、中にいる間は何も喋らず、普段より気を付けて顔を見せないようお願いできる」

「いいけど」

ガルスから許可を取った所で、私たちは中へ。すると、

「いらつしやいませ。あつ、沙樹ちゃん」

と、レジの位置から、ぱっと目を輝かせるひとりの女の子。

「久しぶり、ロコちゃん」

私がいった所、後ろのガルスが小さく驚いたのがわかる。

「後ろの子は、もしかして新入りさん？」

「ま、そんなトコ」

私は適当に返してから、辺りに他の客がいないのを確認してから、
「肉まんふたつ先に用意できる？ 他の買い物はすぐ持ってくるから」

私はいつて、ペットボトルのお茶とおにぎり、総菜パン等を適当に籠に入れ、再びレジへ。

「そういえば沙樹ちゃんがくるちよつと前なんだけど。妙子の声が聞こえた気がしたの」

ロコちゃんは籠の中身をレジ打ちしながらいった。

「妙子の？」

「うん。たぶん幻聴だから、どんな会話をしてたのかは分からないけど。妙子はいま、天国で幸せに過ごせてたらいいなあ」

「大丈夫よ。きつと笑顔で見守ってるわ」

言ってあげると、ロコちゃんは笑顔で。

「うん、そうだよね。さすがに生前あれだけ酷い目にあって死体蹴りみたいなのは。……あ、ポイントカードはある？」

「ん」

私は相槌を打ちながらカードを渡し、現金で商品を買う。

一言二言ほど会話してから、「また来るわ」と私はガラムと一緒にコンビニを出た。

「はい、ガラム。付き合ってくれたお礼」

私は袋からさつき買った肉まんとホットの缶コーヒーをだし、はいとガラムに渡す。

「いいの？」

「遠慮されたら逆に困るって話よ」

と、私は自分で自分の分の肉まんに齧り付く。それを見て、ガラムも肉まんを一口食べ。

「美味しい」

って。私はくすりと微笑んでから、

「もう気づいてると思うけど、あの子が川泥かわで 炬子ちゃんよ。妙子の幼馴染の」

「あの子が」

感慨深そうにガラムはいい、

「分かるわ。だってタエコが」

「喜んでた？」

「あと、元気で生きててほっとしたのと、すっごく寂しかったみたい。私は会いに行けても、もうタエコは会いに行けないから」
「そっか」

けど、喜んでた気がしたのなら、こちらもロコちゃんに会わせて正解だったわけだ。私は缶コーヒーを飲みながら思った。

どうやら、ガルムの中の残留思念は半ば人格レベルの残骸がこびりついてるらしい。残留思念になってからの経験がどこまで残り続けるかは分からないけど、死の寸前の、ドラッグと性暴力で壊された精神ではなく、奥底に残ってた正気の心がそのまま体に受け継がれるようにみえた。

「で、さ。ガルムひとつ頼みを聞いて欲しいことがあるんだけど」

「はふはふ、頼み？」

肉まんを頬張りながら、ガルムは耳を傾ける。

「ガルムには悪いとは思うけど、なるべくロコちゃんと事故でも接触しないよう気を付けて欲しいのよ」

「え、どうして？」

「厳密には、妙子の体が動いてる所を見せないで欲しいって話。もちろん声も」

私はいつてから、

「ロコちゃんの中では、妙子の問題は全て終わって天国で見守ってる。そういう事にして欲しいのよ。例え中身が天に昇ってるとしても、妙子の遺体が残留思念を残して動いてるなんて知られたくない」

「……うん」

数秒程の間の後、ガルムはうなずいた。

「タエコも、そう思ってるみたい」

そして悲しそうな声で、続けて、

「私、ガルムに生まれてから、ずっと一緒のタエコを知りたい、タエコに会いたって思ってた。けど、もしかして私のせいでタエコはいまも苦しんでるのかな？ そんなの、嫌なのに」

「それは違うって話じゃない？」

私はいつた。

「え？」

と、振り返るガルムに、私は肉まんを完食、コーヒーで胃に流しながら、

「妙子は、未だ成仏しきれなくて残留思念を残したのよ。だったら、ガルムがもし妙子のことが大事なら、何をすればいいと思う？」

「わかんない」

と、ガルムがいったので私は、

「あなたの中の妙子を成仏させるの。あなたのせいで妙子が苦しんでるんじゃないの。あなただけが苦しんでる妙子を助けてあげられるのよ」

「私が、タエコを？」

「そうよ。死人に口なし、もう誰にも訴えれないあの子の思いを感じられるのは、あの子の体で動いてるガルムだけって話でしょ。あなたしかないのよ、本当の意味で妙子の気持ちを代弁できるのは」

「私だけが」

彼女の手が、ぎゅつと握り拳に変わったのが見えた。

「お願い、できる？」

「もちろんよ」

ガルムは元気よくいった。

「だって、タエコは私の一番の友達だもん！絶対に助けてあげるわって。」

「助かるわ」

私は微笑みいって、ここで「あ」と思い出す。

「そうだった。妙子のは別件だけど、ひとつ配達頼みたいことがあるんだけど」

「なに？ 何でもいって？」

いつの間にか懐かれてたのだろうか、前よりずっと信頼しきった様子でガルムはいった。なので、私はお茶やおにぎり、総菜パンが沢山入った買い物袋に、こっそりメモ用紙を1枚差し込んでから、彼女にはいと押し付ける。

「あなたたち『作品』組にお裾分け。プライドにはれないようにね」

「えっ、こ、こんなに?」

受け取った袋が思ったよりずっと重かったのか、一回「おつと」とバランスを崩しそうになるガルム。かわいい。

「フェンリルから聞いたんだけど、あなたたちって普段食事与えられてないでしょ? 物乞いするか万引きするかしてその日のごはんを確保してるって聞いたから」

「そ、それは」

直後、ガルムのお腹から蛙の合唱が響く。さつき肉まんを食べたせいで逆に空腹を刺激しちゃったらしい。

私は笑って、

「ほら、もう買っちゃったんだから持って帰っちゃって。押し返されても処分に困るだけだから」

実際には、スタジオの徹夜組とかの夜食として平気で消えそうだけど、それは言わないでおく。

「じゃ、じゃあ」

袋の中を覗き込み、(実際に顔は見えないけど)目を輝かせるガルム。その声色からうつきうきなのが丸分かり。

「ありがとう、頂くわ。……えっと」

突然、なんだか言葉に困った様子のガルム。最初一瞬分からなかったけど、すぐ私は「あ」となり、

「鳥乃よ。鳥乃 沙樹」

そういえば、私はまだガルムに名乗ってなかったのだ。

私の名前が判明すると、再びうきうきした様子で、

「ありがとう。サキ」

って、いったのだった。

それから、私たちはここで解散。「ご飯ご飯♪」とスキップしながら帰路へ向かうガルムを背に、私は。

(餌付け成功。これなら近いうちに妙子の残留思念ごといいい夜を過ごせそうって話ね)

なんて、悪いことを考えながら事務所へと向かった。仕方ないじゃない、拒絶反応に苦しむガルムを強引に犯すのも面白そうだけど、残

留思念と一緒にらぶらぶちゅっちゅな3Pしたかったんだから。手
を出せずに終わった妙子を抱くチャンスって話だから。
そして、記者会見当日を迎えた。

MISSION 23―2年越しの遺言（残光 Part 2）

記者会見当日。

会見は市内の某ホテルでホールを一室借りて行うことになり、現在、私、木更ちゃん、イリス、高村司令の4名は控え室に借りた客室で最終調整を行っていた。

なお、本番の2時間前である。

「失礼致します」

と、戸を開けて入ってきたのは、NLT霞谷さんと、特捜課の永上さん。

「ちっす」

高村司令が横目で対応する中、木更ちゃんはひとり彼らの前に立って、頭を下げた。

「ありがとうございます。当日の警備にまで人員を割いてくださって」

「お気になさらず。元々こういうのも我々の仕事ですから」

やんわり微笑み、霞谷さんという。

「しかし、驚いたな」

永上さんが、まるで「おおっ、本物だ」と言いたげにイリスを眺めながら、

「まさかハンドグドが彼女のような超大物から依頼を請けていたとは」

どうやら、深海ちゃんの件で突入したときは彼女が目に入ってきたかっつらしい。もしくはイリスと分からなかったか。

「ま、まあね」

加えて、例の改ざんの真実を知ったら永上さんはどう反応するのだろうか。そう思うと、こちらは下手な反応できず苦笑いするしかない。

永上さんは続けて、

「とりあえず、先に会場を覗いたが準備は万全だっぞ」

「そ」

高村司令は軽く返事し、

「なら、後は本番を成功させるだけね。ホテルの内外に不審な人物は？」

「その件ですけど」

霞谷さんがいった。

「すでに、こちらで黒山羊の実、フィール・ハンターズ双方の構成員を何人が発見し捕えております。それでも、本番直前もしくは本番中に何かアクションを起こされる可能性は高いかと」

「やっぱりきたわね」

私は机に座り、手鏡でイリスか木更ちゃんの下着を覗けないかしつこくチャレンジしながら、

「捕まえた人たちだけど、こちらで尋問って許可取れる？ 特に高校生以上の女性とか」

「申し訳ありません。そちらの役割はすでにハイウインドの方々に任せてしまいました」

と、断る霞谷さん。畜生！

そこへ木更ちゃんが訊ねる。

「ハイウインドとなると、アンさんですか？」

「それとフィーアさんですね」

と、霞谷さん。なるほど。アンちゃんは言わずもがな危険人物だし、フィーアは私たちみたいな独学じゃなくて、ちゃんと本家本元のプロから仕込まれた技術があるのだろう。さすがに、ふたりを相手に尋問の役目を勝ち取るのは難しい。

「とはいえ、現在捕えた構成員たちから有力な情報を得ることは難しいでしょう。恐らく、彼らは囷を兼ねた偵察部隊。私たちに簡単に掴まる程度の方が作戦の全貌を知ってるとは」

「寧ろ、わざと掴まって手間取らせるのが目的って可能性もあるわね」

私が返すと、霞谷さんも同意見なのか「ええ」となり、

「我々は引き続きホテル内の警戒に入りますので、何かありましたら連絡をお願いします」

「分かりました」

木更ちゃんに見送られる形で、ふたりは部屋を後にする。

「ごめんなさい。ここまで大事にさせてしまって」

イリスが不安と疲労を顔に出し、いった。私は努めて微笑み、
「気にしないで、それぞれ仕事で関わり合ってるだけだから。それに、
大きければ大きいほどイリスさんには嬉しい流れって話でしょ？」

「それは……」

イリスは否定できないようだった。彼女がやろうとしてる公表は、
大々的にできればできるほど効果があるはずだから。

「私としては、むしろあなたの体が保つか心配って所ね」

恐らく、彼女は母親を失った瞬間からひと時も気を休める事無く今日を迎えたに違いない。私の目には、いつ倒れてもおかしくないように映っていた。

勿論、それはイリス自身が一番よく分かっていることだろう。

「大丈夫です。必ず、役目は果たします」

イリスはいった。が、すでに自分の限界を否定するだけの余裕さえ無いのが分かる。仮に気晴らしとか理由をつけてセクハラに及ぼうものなら過剰反応のあまり銃で眉間を撃たれそうだ。

「先輩、イリスさん。一度本番前のリハーサルを行いませんか？」

木更ちゃんがいった。ちなみに、このリハーサルはすでに昨日から通算2桁は行っている。

「そうね。イリスさん行ける？」

しかし、私たちは恐らく回数が3桁に突入しようとも、このリハーサルを続けることだろう。すでに、イリスは休ませることのほうが危険な精神状態に入っている。こうやってイリスを動かし続けること
しか、彼女の体を保ち続ける手段が浮かばないのだ。

「ええ、お願いします」

イリスはカフェイン剤を飲んだ。

事態が動いたのは、本番の15分前だった。

「イリスさん、伏せて！」

あれから更に回数を重ねたりハーサルの最中、私は咄嗟にイリスに

覆いかぶさり、その場に倒れ込む。直後、1発の弾丸が窓ガラスを割り床に突き刺さったのだ。

「皆、無事?」

私が訊ねると、

「はい。ありがとうございます」

と、イリス。

続けて、木更ちゃんが望遠鏡片手にそつと外を確認し、

「ビルの屋上に緒方さんを確認しました。さらに10名を超える黒コートとフィール・ハンターズがハンググライダーで空から接近中」
「もしかして、フィール・ハンターズと黒山羊プライド派が手を組んだ?」

可能性としてはありえると思っただけど、しかしまさか空から襲撃とか目立つこととしてくるなんて。

「藤稔、ちよつとどいてくれる?」

高村司令が壊れた窓の前に立ってというと、両の掌から白く光るフィールの圧縮を溜め込み、

「波○拳!」

マ○カプ版だろうか、その名を呼ぶにはあまりに巨大なビーム砲撃を飛ばし、ハンググライダーを数体ほど撃ち落とす。さらに、窓から外へジャンプするとフィールで武空術か何かを再現したのか生身で空を飛び、デュエルを仕掛ける赤外線を避けながら拳と蹴りでどんな敵を倒していく。

しかし、私たちの見える方角以外にも空の襲撃はあったのだろう。ホテル内のあちらこちらから窓ガラスを割る音が聞こえた。

そして当然、私たちのいる部屋の扉も蹴破られ、数名の男が入ってくる。

しかし、

「た、助けてくれ!」

何故か男たちは私たちに向かってそう叫び、直後、背後から攻撃を受け男たちはカチンコチンの氷漬けに。

そんな男たちの間を割って入ってきたのはひとりの女兒。

「プリベエット！ やあ、ヴェーラだよ。みんな無事かい？」

まさかのヴェーラだった。

「あなたは……」

と、驚くイリスに、ヴェーラは。

「ハラショー。別に君を助けにきたわけじゃないんだ。ただ、君がついに行動を起こすらしいからね、情報を仕入れに来たら予想通りこの様だよ」

言いながら、ヴェーラは親指でクイツと部屋の外を指し、

「それより、ここは危険だから移動するのをお勧めするよ。ハラショーな事に、君が会見を開こうとしていたホールが現在NLTや警察の誘導で緊急避難場所になっているんだ。いまは下手に動いたり、ここに留まるより余程安全だよ」

「分かったわ。木更ちゃん、移動中索敵をお願い。イリスさん立てる？」

私はイリスに手を差し出す。

「はい、大丈夫で……あつ」

イリスは手を受け立ち上がるも、直後くらつと立ち眩み。私はすぐさま肩を貸して支えてあげ、

「悪いわね。もうちよつと踏ん張って」

と、声をかけながら、片腕はイリスのお尻に。

「先輩、いまなら扉を出て左に進むのが安全です」

木更ちゃんがいった。イリスへのセクハラはスルーする模様らしい。本人も気づいてない様子だしね。

そんなわけで、私たちは部屋を出てお尻さわしながらホールへと向かう。途中、氷漬けになった黒山羊の実やフィール・ハンターズの姿を何人も見かけ、ヴェーラがリアルファイトとしても非凡な強さを持つていたことを再認識する。

実際、移動中も何度か敵構成員とエンカウトしてしまったものの、

「ここは私に任せて貰えないか？」

と、ヴェーラは前に出ると、フィールによる冷気を纏って鳥が羽ば

たくような不思議な舞を踊り、

「はあああつー！ ホー○ドニースメルチ！」

どこかの白鳥座の聖闘士が使いそうな技をフィールで完全再現。腕の一振りから冷気の竜巻を放ち、相手を壁に叩きつけながら瞬時に氷漬けにし、

「イズヴィニーチエ^ね。命は奪わないから安心して欲しい。さて、行くか」

なんて涼しい顔して私たちに言うのだった。

というか、フィールで漫画やゲームの技をパロディするのが最近の流行りなのかな？ 高村母娘もそういう事やってたし。

加えて、NLTの構成員たちも何度か「ここは俺に任せて先へ行け」してくれたのもあって、私たちは無事ホールへと到着。

中に入ると、沢山の警察や警備員、NLTの方々が警備に入中、現在進行形でひとりまたひとりと宿泊客が避難する様子が見られた。部屋には無数の《安全地帯》や《フィールドバリア》がNLTの手によって発動され、この一帯が巨大なバリアに覆われた一種の異空間になっているのが分かる。

「皆、無事か？」

永上さんが駆け寄ってきた。私は「まあ何とか」と答えつつ。

「さすがNLTね。襲撃は止められなかったけど、その中で万全の対策を行ってるわ」

加えて、私がネオスズカカップでやって貰ったように、NLTには記憶処理、つまり「記憶を消してなかった事にする」技術がある。実際、いまま警察に扮したNLTが宿泊客の瞳孔に光を当てる姿が見られた。宿泊客は眠るように倒れる。そして次に目を覚ましたとき、この恐怖の体験は全て忘れている事だろう。

これだけ世間ではフィール事件があふれてるのには、表舞台では未だフィール・カードが都市伝説として扱われてるのには、世間を混乱に陥れる事件をもみ消す組織が幾つも存在してるからに他ならない。もちろん、これはフィール問題のみならず、未確認動物^Mや妖怪^A、魔術に宇宙人といったものも記憶処理によって表舞台から隠蔽されてる

可能性も十分ある。

「鳥乃さん、藤稔さん。待つてました」

霞谷さんがやってきた。私たちが振り返ると、

「実は、あなたがたに会いたいという方がおりまして。襲撃直前に捉えた黒山羊の实の捕虜なのですけども」

「黒山羊の实の？ 分かったわ。会わせてくれる？」

私がいうと、

「分かりました。彼女を連れてきてください」

と、霞谷さんは別のエージェントに指示する。こうして呼び出されたのは一本の三つ編みに眼鏡姿の見た目文系の女の子。

「フェンリルさん」

木更ちゃんが反応する中、霞谷さんは、

「知り合いだったのですか。実は彼女、わざと私たちに捕ったと供述しておりまして、おふたりに伝えたいことがあると」

フェンリルは私たちに気づくと、小走りで駆け寄り、ほっと一安心した顔で、

「良かった。ギリギリだったけど何とかふたりに接触できたよ。ありがとう、無理を吞んでくれて」

と、霞谷さんに一言謝礼を述べてから、私に向かっていった。

「紙は確かに受け取ったよ。たぶんプライドにも見つかつてない」

「紙ですか？」

訊ねる木更ちゃんに私は、

「ん。昨日作品組にちよつとね」

とは、昨日ガラムに渡したコンビ二袋にこっそり入れた紙のことである。実はあの時、真にガラムと接触する用事が別にあって、それがガラム・フェンリル・ミストランの3人にメッセージを送るという任務だったのだ。

紙には、こう書き記していた。

『ハングド及び研究施設は、君たちの生命維持を受け入れる準備がある』

つまりは作品組3人に宛てたヘッドハンティングである。

「鳥乃さん、その上でひとつ頼んじやってもいいかな？」

と、フェンリル。

「何？」

私が訊ね返すと、

「もうすぐこのフロアに向かって襲撃の主力部隊がやってくるはずだ。その中にはガルムもいる。君には彼女と合流して一緒に主力部隊をやっつけて欲しい」

「それって」

「うん」

フェンリルはうなずき、

「ボクとガルムは、君の誘いに乗ることにしたよ」

「すみません、どういうことですか？」

訊ねる木更ちゃんに、フェンリルは続けて、

「ボクとガルムはふたりの味方についたんだ」

「って話」

言いながら私は懐から拳銃を取り出し、ここに来るまでに消費した弾丸を詰め直す。

「その様子だと、早速向かわれるのですね？」

訊ねる霞谷さんに私は、

「ん。その間、木更ちゃんと一緒にイリスさんをお願いしちゃってもいい？」

「勿論です。任せました」

私はみんなを残し正面出入口に向かって歩き始める。そこへイリスが駆け寄ってきて、

「鳥乃さん」

と、私に自分のデッキを差し出してきた。

「フィール・カード目当てだけでも持って行ってください。いまの私では、フィールがあっても自己防衛さえできそうにありませんから」
「分かったわ」

私はデッキを受け取り、改めてホールの外に出た。
すると、

「事情は通信機で聞かせて貰ったよ」

と、そこには王子様ポーズで壁にもたれかかるアインス・ハイの姿が。さらに、

「さっさと片付けてしまいましょ」

私の悪友にしてハイウインド司令の神簇 琥珀までもが待ち構え、私を待っていたのだ。

一回、私は予想外の増援に驚くも、ふっと笑い、

「できればフィーアとアンちゃん辺りが良かったわね」

「生憎フィーアは別作戦中だよ」

アインスが笑い、

「それに、アンは直接戦闘は苦手分野よ」

と、呆れる神簇。

「だからって、戦闘中にナンパしそうなアインスと、土壇場で致命的なミスしそうな神簇が一緒だとね」

「我慢なさい、全く」

神簇は私の耳を引っ張りながら、

「そのフィーアとアンからの報告よ。黒山羊の実のグラトニー派が私たちに増援を送ったって」

「グラトニー派が？」

確かに、アンちゃんはグラトニー派は味方だって言ってたけど。

続けてアインスが、

「加えて、シユウからの報告でボブとバイブルを名乗る双子の牧師が助太刀してくれたらしい」

「え、ゲイ牧師がきてるの？」

私は感嘆しながら、

「どうやら、本当にグラトニー派は味方みたいね」

正直、私個人はあまりグラトニーを信用してなかった分、まさかここまで協力してくれるなんて思ってなかったのだ。

で、最後に神簇が私の耳を放し、いった。

「私たちが主力部隊を落とすことができれば、この闘いはこちらの勝利でほぼ確定するわ。アインス・ハイ、鳥乃 沙樹、行きましよう」

間もなくして、非常口で主力部隊との交戦が始まったと伝えられた私たちは、急いで戦場に向かう。

途中、同じく非常口に向かっていたNLT構成員と何名か合流し、十数人体制で非常口に続く廊下を走っていた所、

「避けてっ！」

奥からガルムの声、そして銃弾の音が響き渡り、

「うわあああああああああつ!!」

直後、ガルムが悲鳴をあげる。

「鳥乃！」

異常事態に、アインスが私に視線を向ける。

「ガルムの声よ」

私がいうと、アインスは私たちを庇うように先頭に入り、程なくして声のした場所へとたどり着く。

そこで見えたのは、

NLTの構成員を相手に、ガルムが泣きながら殺戮の限りを尽くす様だった。

床には、すでにNLTの死体が数名分。さらに、今まさに私たちの目の前でガルムはグラトニー派と思われる黒コートの腹に拳を突き入れ、臍物を引き抜き、ぐしゃっと握りつぶす。

「サキ！」

ガルムは私に気づくと、泣きすぎる声でいった。その間にも彼女の足は倒れたNLTの頭を踏み抜き、頭蓋骨を割って脳みそを破裂させながら、

「助けて！ カラダがいう事を聞かないの！ こんな望んでないのに、こんな惨いことしたくないのに！」

と、言ってる間にも内臓銃を発砲。紫色のフィールを纏った銃弾は、私の横をかすめ、

「ぐわっ」

後ろに立っていたNLT構成員に命中。フィールの防壁は張ってただろうけど、その防壁ごと構成員の心臓を貫通。刹那、ガルムは肉薄し、たった一撃の拳で構成員の顔を破裂に至らせた。

「ガル——」

僅かな間の思考停止。私の声がガルムを呼ぶ間に、彼女の別の拳が私の腹目掛けて振りかぶる。

「止まって、止まってよおおおー！」

嘆きと裏腹に私に一撃が入る寸前、神簇が間に入り、ガルムに向けてライトセーバーで一突き。

ガルムは咄嗟に避け、アインスが追い打ちにショットガンを発砲するも、ガルムはフィールの防壁を張りながら後ろに跳んで避けた。

「あれは、間違いなく闇のフィールだね」

アインスが、二丁のショットガンを構えながらいった。

「闇のフィールって、あの」

訊ねる神簇に、アインスは「ええ」と続けて、

「先日、シルフィを蝕んだあの力です。どうやら、彼女の場合は意識だけ無事のようにすけど」

しかし、その技術はフィール・ハンターズのものはず。今回共闘した際に、こつそりフィール・ハンターズはガルムに手を加えたのか。それとも、もしやそれ以前から。

が、これ以上考える暇は与えてくれず、ガルム以外の敵構成員が機関銃でフィール込みの弾幕を撒く。見ると、彼らの銃弾にも闇のフィールを纏っており、加えて目が正気ではない。

「くっ」

私たちはフィールの防壁を張って防ぐ。しかし銃弾の威力は思ったよりずつと重く、防壁に込めたフィールが足りなかったNLT構成員が何人か蜂の巣になって倒れた。が、やはり想定より火力があれど弾幕は牽制。後ろには、

「駄目ー！ 避けてー！」

嘆きながらも跳びかかるガルムが控えていて。

「鳥乃、神簇さん。少し離れて貰って構わないかな？」

と、ここでアインスがいった。私と神簇はうなずき、生き残った他のNLTと共に後ろに下がると、アインスは舞うようなステップでガルムの突き出した腕を避け、カウンターで彼女に向け至近距離からの

シヨットガン二丁同時掃射。

「——っ！」

直後、ガルムの顔が苦痛に歪んだ。アインスの銃撃が命中したのである。

シヨットガンとは、漢字で散弾銃と書くように多数の小さな弾丸を散開発射する銃だ。それをアインスはフィールを用いて広範囲に拡散させるように発射していた。それも二丁とも。結果、動物みたいな動きをするガルムでさえ避けきれず、フィールの防壁がなければ全身が蜂の巣になるような銃弾の雨を浴びてしまったのだ。

しかし、シヨットガンをこんな使い方をしてしまうと、当然近くの味方にも少なくない被害が及ぶ。だからアインスは離れるといったのだ。とはいえ、僅かな時間で距離をとった程度。さすがに散弾の雨はこちらにも飛び火したものの、そこはアインス。至近距離を過ぎると威力が落ちる仕様のようでNLT含め全員フィールの防壁で防ぐことができた。

即座にアインスは回り込み、正面から先ほどの射撃をガルムに再度放ち、後ろに飛び退かせる。

アインスはいった。

「さて、君たちの相手は私が請け負おう。その間に鳥乃たちはガルムに強制デュエルを仕掛けるタイミングを探って欲しい」

なるほど。確かにガルムを相手に赤外線をぶつけることは困難。だからといって放射線タイプを使おうなら他の敵を、最悪味方を巻き込んでしまう危険性がある。

「わかったわ」

神簇がうなずき、私と並んでデュエルディスクを構える。他のNL Tたちも同様に。

「テメエひとりですべての相手にするだア？ ヒヒヒッ、ナメるな！」

アインスの言葉に敵構成員が数名反応し、ヤクでもキメたようなニタニタ笑いでアインスに向かってくる。

「ふっ」

が、アインスは小さく笑うと、軽やかなステップでダンスを踊るよ

うに敵を避け、同時に先ほど同様のショットガンによる拡散射撃で纏めて撃ち抜く。

「Shall We Dance? でしたら、あなたがたを素敵なダンスにご招待致しますよう」

アインスによる無双が始まった。

現在、戦場となつてゐる廊下は人が数名通り抜ける程度の横幅しかない縦長の空間になつてゐる。そしてアインスは近距離限定とはいへ、先ほど敵が数人態勢で行つた弾幕を遥かに超える銃弾を雨をたつたひとりで振らせてしまふ。それこそ、真正面に撃つだけで後ろにしか逃げ場のない散弾の壁を作つてしまふ程に。

しかも、なら防壁を張つて肉薄すればと思うだろうが、アインスのショットガンは先端に刃物をつけたパヨネット仕様。彼女の軽やかなステップもあつて簡単な白兵戦ならこなせてしまい、最悪ショットガンの零距离射撃なんてものを披露してくる。実際、ガラムでさえ接近はできてもアインスを突破することができず先ほどのように前後の反復運動を繰り返させられる。

アインスは1対複数の近接銃撃戦を最も得意としていた。

特に、四方から襲い掛かる有象無象を相手に、まるで踊るようにオールレンジ射撃をまき散らす様は、いつしか業界で「バレット・ワルツ」と名付けられる程。そんな形容に負けないほど、今日も彼女は優雅で美しくキザつたらしく、倒れる敵も舞台演出に映すように殲滅する。伊達ではないのだ。女性にして、そして裏業界を呼ばれるプリンセス「王子」の名は。

「凄、い……」

初めて見たのだろう。神簇は、自分の部下の魅せる戦闘を前に息を呑んで佇んでいた。

「どう? 自分がとんでもない逸材を部下にしたと知つた気分は」

「百聞は一見に如かずね。まさかここまでなんて」

私は「でしょ」とうなずくも、続けていった。

「だけど、いまのアインスではガラムを仕留められない」

それどころか、他の敵構成員も普通ならとつくに全滅してそうな程

の弾丸を浴びてるといのに、流血しながらも殆どが倒れず、それどころかガルム以外苦痛を訴える様子も見られない。先ほどヤクでもキメたような、とはいったけど本当にモルヒネやエンジェルダストでも投与したかのような狂人を相手にしてる感じだ。

ともかく、彼女の銃撃では、奴らに明確なダメージを与えられてないのだ。1対1の闘いにシフトすれば勝敗は分からないが、それをしてたらガルムがこちらに向かってきてしまう。さらにガルムはデュエルよりリアルファイトを得意としてるようで、彼女の意思なら痺れをきらせて赤外線を飛ばしてくることもありそうだけど、闇のフィールに支配されてる影響でそれもない。

恐らく、アインスの手持ちの弾丸が全て尽きたとき、彼女の敗北という形でガルムを先頭に敵構成員はこちらに向かってくるだろう。しかし、私たちは未だガルムに赤外線を当てるタイミングを掴めずだった。

そんなときだった。私のデュエルディスクに木更ちゃんから通信が入ったのは。

私が通信に出ると木更ちゃんは、

「先輩！ 良かった」

と、まず私が生存していたことにほっとし、

「現状の報告をお願いします。ガルムさんは大丈夫ですか？」

と、名指しで確認してきた。

「つてことは、もしかしてそっちでフェンリルも？」

私が訊ねると、

「ということとは、やはりガルムさんも同じだったのですね」

と、木更ちゃん。

「はい。先輩が非常口に向かわれてすぐ、フェンリルさんが闇のフィールに支配されて攻撃を開始しまして」

「意識は？」

「え？ いまフェンリルさんは鼻血を出し過ぎて失神してますけど」

鼻血で!? 私はつい本来の目的を忘れて、

「待って、木更ちゃん何したの？ むしろナニかされたの？」

「せ、先輩落ち着いてください」

通信先から慌てる木更ちゃん。そこへ。

「貸して」

と、神簇がデュエルディスクを装備した私の腕を引っ張り、

「こちら神簇 琥珀。現在ガルムは体の自由を闇のフィールに支配され、意識が無事なまま攻撃を開始しています」

「は、はい。フェンリルさんは意識も闇のフィールに支配されました」
答える木更ちゃん。

「そう」

神簇はうなずき、

「現在、私たちはガルムの身体能力の高さ故にデュエルを仕掛けることもリアルファイトで仕留めることも困難な状況にあるわ。そちらではどうやってフェンリルを対処したのか、教えてくれると嬉しいのだけど」

「は、はい。あの、えっと……」

言葉を詰まらせる木更ちゃん。で、そんな様子に神簇はすぐ余裕をなくし、

「お願い！ 早く教えて。こちらではNLTに死人も出てるのよ」

「え!? は、はい。ごめんなさい」

木更ちゃんは、怒声に一回怯えてから、

「こちらでは、フェンリルさん本人の強い衝動を刺激すれば本能が闇のフィールに勝ってくれるのではないかと思ひ、彼女に私の生乳を揉ませました。そしたら鼻血を噴き出して」

「な、生乳？」

今度は神簇が顔真つ赤に硬直してしまったので、私は神簇からデュエルディスクを奪い返し、

「ありがとう木更ちゃん。生乳は後で私も揉むから、何かあつたら報告するわ」

と、私は通信を切る。

「ちよつと鳥乃！ 貴女なに言ってるのよ」

顔真つ赤にぎやーぎやー騒ぐ神簇。――の胸を、服の上から一回鷲

掴みにし、

「神簇、一回生乳揉ませて？ うらやまけしからんが強すぎて、いま頭の中がそれ一色って話で」

「夢の中でやりなさい！」

私はライトサーバーで居合抜き逆袈裟斬りにされた。

「かふっ」

と、私は一回倒れるも、おかげで生乳への欲求から半歩抜け出すことができ、

「助かったわ神簇。おかげでガルムを倒して生乳揉めばいいと気づけたわ」

「そもそも生乳から離れなさいっ！」

ヒステリックな返事を聞きながら私は立ち上がり、私はデュエルディスクから自分のデッキを抜き取ってホルダーに戻す。

神簇は驚き、

「ちよつと、鳥乃。貴女いったい何を」

「名案が浮かんだのよ。ガルムから強い衝動を刺激する、っていうね」
言いながら私は、掌から光の粒子を出し一束のデッキに姿を変化させ、そこに別のカードの束を混ぜてデュエルディスクにセット。

「ガルム！ ちよつとこれを見て頂戴」

私はいい、モンスターをデュエルディスクに差し込んで召喚する。

出てきたのは牡蠣根のエースモンスター、《エーデルリッター紅貴士ーヴァンパイア・ブラム》。ガルムは、そのモンスターを見て足が止まった。

「あ」

眩き、ガタガタと全身を震わせるガルム。今だ！ 私は赤外線を飛ばし、ガルムに強制デュエルを仕掛けることに成功する。

「鳥乃？ いまのって」

訊ねる神簇をいまは無視し、私は続けてガルムにいった。

「ガルム、ううん妙子、見たでしょ？ いま私の手には牡蠣根のカードが入ったデッキがここにあるわ。倒したくない？ あなたの全てを奪った男のデッキを」

私はガルム本人ではなく、その体にこびりついた妙子の残留思念を

刺激することにしたのだ。そして、私の策は成功した。

ガルムは、半ば妙子の衝動に支配されたみたいに意識のトリップした目で私を見て、

「タオス……タエコの仇、やっつけるー！」

吠えるように叫んでデュエルディスクを構えた。ここで、

「あ」

ガルムはハッと正気に戻り、

「サキ。ありがとう……私を止めてくれて」

「まだ止めれたわけじゃないわ。デュエルであなたに勝って、闇のフィールドを全て抜き取らないとって話だもの」

「うん。…… فقط」

ガルムは、うなずきながらちよつと辛そうに、

「今度は、私の中のタエコも暴れてる。サキ、ごめん、私手加減できそうにない」

「大丈夫よ。心配しないで頂戴」

私はいった。

「それでも、必ず勝って全て救い出すから」

言って、私はデュエルを開始した。

ガルムの生乳のために！

沙樹

LP 4000

手札 5

□ □ □ □ □ □
□ □ □ □ □ □
| □ | □ |
□ □ □ □ □ □
□ □ □ □ □ □
□ □ □ □ □ □

ガルム

LP 4000

手札 5

現在、私のデュエルディスクに搭載されてるデッキは60枚構築になってる。そのため、デュエルは久々のマスターデュエルで開始された。

「私のターン」

ガルムは辛そうに、しかし首から下はやる気満々に構えている、「まずはカードをセット！　そして永続魔法《インフェルニティガン》を発動！」

「インフェルニティか」

他の敵構成員を倒し終えたアインスが私の傍まで下がっていう。つて、ガルムを相手にしなくなった途端あのヤバそうな敵構成員を圧倒しちゃったよ。しかも殺さず。

「鳥乃、あのデッキの爆発力は中々侮れないよ」

「分かってるわ」

私はうなづく。その間にガルムは、

「《インフェルニティガン》の効果。手札から《インフェルニティ・リベンジャー》を墓地に送り、さらに《インフェルニティ・ネクロマンサー》召喚、効果で自動的に守備表示になるわ。さらに手札がこのカード1枚のみの場合、このカードは手札から特殊召喚できる。《インフェルニティ・ビショップ》！　これでハンドレスよ。どうして成功させちゃうのよ」

と、ガルムは自分のデッキの回転を嘆きながら、

「《インフェルニティ・ネクロマンサー》のモンスター効果。1ターンに1度、手札が0枚の場合に墓地のインフェルニティを特殊召喚できるわ。私は墓地の《インフェルニティ・リベンジャー》を蘇生。そしてレベル4《インフェルニティ・ビショップ》レベル3《インフェルニティ・ネクロマンサー》に、レベル1《インフェルニティ・リベンジャー》をチューニング」

1体の髑髏の顔をしたガンマンが1つの光の輪にかわると、2体のモンスターが潜り、混ざり合う。

「地獄と天国の間、煉獄よりその姿を現して！　シンクロ召喚！　来

て、レベル8《煉獄龍 オーガ・ドラグーン》」

こうして出現したのは、大きな鉤爪を持った一匹のドラゴン。その攻撃力は3000。

「私はこれでターン終了よ」

ガルムはいった。

沙樹

LP4000

手札5

□□□□□□

□□□□□□

—□□—《煉獄龍 オーガ・ドラグーン（ガルム）》—

□□□□□□

《セットカード》「《インフェルニティガン》□□□□

ガルム

LP4000

手札0

「気をつけて。オーガ・ドラグーンは私がハンドレスのとき、1ターンに1度だけ魔法・罠の効果が無効にする効果を持つてるのよ」

なるほどね、インフェルニティ同様ハンドレス時に。

「了解。私のターン、ドロー」

なんとも奇妙な話ながら、相手からアドバイスを貰いつつ私はカードをドロー。

(となる)

私は、ただ手札を3枚ディスクに読み込ませ、

「モンスターをセット。さらにカードを2枚伏せてターン終了」

「私のターン。カードをドローしてスタンバイフェイズよ。サキ！」

呼びかけるガルム。わざわざスタンバイフェイズを宣言した所から分かってたらしい。私は伏せカードを1枚オープンし、

「罠カード《ヴァンパイア・アウエイク》を発動」

「ヴァンパイア？」

ここでアインスが反応する。そういえば彼女は私がデッキを替え

たのも、ヴァンパイア・ブラムを出したのも見てなかったのだ。

「鳥乃、このデッキは一体何なのよ」

と、続けて神簇がしつこく訊ね続ける。私は小声で、

「いま使ってるデッキは、以前私が地縛神の生贄に取り込んだ牡蠣根の使ってたマスターデュエル用の40枚デッキに、イリスから借りたスピードデュエル用の20枚デッキをひとつにした60枚デッキよ」
実際、いま発動した《ヴァンパイア・アウエイク》は牡蠣根ではなくイリスのカード。そして、

「《ヴァンパイア・アウエイク》はデッキからヴァンパイアを1体特殊召喚するカード。私は《ヴァンパイアの眷属》を特殊召喚。守備表示。この効果で特殊召喚したカードはターン終了時に破壊されるわ」

と、呼び出した一匹の白狼もイリスのカード。

「待ちなさいよ、そんな調整もしてないデッキで勝てるつもりなの？」

神簇がいい、続けてアインスも、

「そもそも、同名カードの枚数制限は大丈夫だったのかい？」

「枚数に関しては問題なかったわ。ふたりのデッキ、同じヴァンパイアデッキなのに投入カードが1枚も被ってなかったんだもの。勝てるかどうかは、フィールドで何とかするわ」

つまりこのデュエルでフィールドを使い切るつもりでいくって話だ。

「仕方ないわね。アインス、デュエルが終わったらふたりをホールまで護衛するわよ」

「仕方ないね」

諦めた様子でふたりはいった。

「と、待たせて悪いわねガラム。私の行動はまだ終わってないわ。500ライフ払い《ヴァンパイアの眷属》の効果を発動。このカードは特殊召喚に成功した場合にライフを払うことで、デッキのヴァンパイア魔法・罫カードを1枚サーチする。私はデッキから《ヴァンパイア帝国》を手札に」

「《ヴァンパイア帝国》!? あ、あああつ、うあああつ」

沙樹 LP3500↓3000

ガラム、というより彼女の中の妙子が反応したらしい。このカード

は牡蠣根のカードだからだ。

「はあつ、はあつ、ヴァン……パイ、ア、ああつ……か、カードをセット。そして、オーガ・ドラグリーンで……セットモンスターに、こう……げ……き……かはっ」

息を切らせ、ガタガタと全身を震わせ、しかし闇のフィールドにデュエルを続行させられるという、二重の支配に翻弄されるガラム。

大丈夫よ。これが終わったら全て私色の快楽で上書きしてあげるから。

私はセットモンスターを墓地に送りつつ、

「戦闘破壊された《ヴァンパイア・ソーサラー》の効果。デッキから闇属性のヴァンパイアか、ヴァンパイア魔法・罠カード1枚を手札に加える。私は《シャドウ・ヴァンパイア》を手札に加えるわ」

「ソーサラー……シャドウ……ううっ」

そういえば、これはどちらも牡蠣根のカードだった。呻くガラムに私は訊ねる。

「大丈夫？ いけそう？」

「があっ！」

と、直後ガラムは吠え、

「大丈夫。ターンエンドよ」

衝動を振り払ったのだろう。言いながら、少しずつ息を整えていくガラム。けど悪いわね、次のターン再び激しいトラウマを刺激することになりそうって話なのよ。

沙樹

LP3500

手札5

□ □ □ □ 《セットカード》 □ □

□ □ □ 《ヴァンパイアの眷属》 □ □ □

— □ □ — 《煉獄龍 オーガ・ドラグリーン（ガラム）》 —

□ □ □ □ □ □ □ □

□ 《セットカード》 □ 《インフェルニティガン》 □ 《セットカード》 □ □

□

ガラム

LP4000

手札0

「ターン終了時、《ヴァンパイアの眷属》は破壊されるわ。そして私のターン」

私はカードを引いて。

「墓地の《ヴァンパイアの眷属》の効果を発動。このカードは手札またはフィールドからヴァンパイアカードを墓地に送って特殊召喚できる。私は手札から《ヴァンパイア・ロード》を捨てて特殊召喚。守備表示」

私は再び白狼を場に出し、

「さらにライフを500払ってデッキから《ヴァンパイアの支配》をサーチ。セット」

沙樹 LP3500↓3000

色々サーチを駆使してるせいか、現時点で私の手札ははまだ5枚。物凄い回転力と安定性だ。もしかしてこのヴァンパイアデッキ、60枚の時点で本来の私のデッキより強かったりするんじゃないだろうか。

「手札からフィールド魔法《ヴァンパイア帝国》を発動」

ここで私は、先ほどサーチした魔法カードを使用。

「駄目！ いまは《煉獄龍 オーガ・ドラグリーン》の効果が発動しちゃう。私の手札は0枚だから無効よ」

しかし、この《ヴァンパイア帝国》は防がれてしまう。まあ、このカードは罠だったのだけど。

「大丈夫よ。なら続けてリバースカードオープン。《ヴァンパイア・シフト》を発動。このカードは私のフィールドカードゾーンにカードが存在せず、表側表示の私のモンスターがアンデット族の場合のみ発動可能。私の場には《ヴァンパイアの眷属》がいるから条件は満たしてるわ」

オーガ・ドラグーンの効果は1ターンに1度。だから一度使わせてしまえばこのターンに無効にされる危険はなくなるのだ。

「あ、サキ！ 上手い！」

驚き、感嘆にガルムは目を輝かせる。その様子から、いまは衝動を完全に抑え込んでいるようだ。

「《ヴァンパイア・シフト》の効果で、私はデツキから《ヴァンパイア帝国》を発動し、その後墓地から《ヴァンパイア・ロード》を守備表示で蘇生」

そして、ガルムが上手いといったのは、恐らく結局このフィールド魔法の発動を許してしまったことにあるだろう。しかも蘇生のおまけ付きで。最初の《ヴァンパイア帝国》を無効にしてなければ、ここまでの状況には至らなかったのである。

「続けて墓地の《ヴァンパイア・ソーサラー》をゲームから除外。このターン、私は1度だけリリースなしでレベル5以上のヴァンパイアを通常召喚できる。《シャドウ・ヴァンパイア》を通常召喚。このモンスターは召喚成功時にデツキのヴァンパイアを特殊召喚できる。《ヴァンパイア・デューク》を特殊召喚」

《ヴァンパイア帝国》によって辺りは紅い月の照らす夜の街のビジョンに切り替わり、私の場には、巨大な吸血鬼の影と吸血鬼の公爵が一気に並び立つ。2体のモンスターのレベルはいずれも5。さらに、

「《ヴァンパイア・デューク》は特殊召喚した時にモンスター・魔法・罫のいずれかを宣言し、相手はデツキから宣言した種類のカードを墓地に送る。私は罫カードを宣言するわ」

「《インフェルニティ・ロスト》を墓地に送るわ」

「了解。続けて相手のカードがデツキから墓地に送られたことで《ヴァンパイア帝国》の効果が発動。手札・デツキからヴァンパイアを墓地に送って、フィールド上のカードを破壊する。私は《ヴァンパイア・グレイス》を墓地に送って、《煉獄龍 オーガ・ドラグーン》を破壊」

直後、巨大な《ヴァンパイア・グレイス》の幻影が姿を現すと、オーガ・ドラグーンの喉に噛みつき、破壊する。

すると、ガルムの体から紫色のフィールドが弾け飛ぶのが見えた。ど

うやら闇のフィール・カードだったらしい。

「ガラム！」

私は彼女の名を呼ぶ。しかし、ガラムは膝をついて、

「まだ駄目！」

と叫んだ。

「ちよつとだけ体は自由になったけど、まだ支配されたままみたい。むしろ、タエコの暴走がさつきよりダイレクトにきて、キツイ」

「残りの闇のフィール・カードの数は？」

私が訊ねると、ガラムはいった。

「ゼロ。与えられたのはオーガ・ドラグーン1枚だけよ」

「そういえば」

ここでアインスがいった。

「フィール・ハンターズの闇のフィールはソンプラ社のドラッグを併用して真価を発揮するって情報があつたね。もしかしてだけど、生前の鱒川さんの体に残ったドラッグの跡のせいではないでしょうか」

「ありえるわね。そもそもプライドの作品自体ドラッグが必要なんですよ？　そこからすでに遺体に残ったドラッグが流用されてる可能性は十分あるわ」

と、続けて神簇も。

「なるほどね」

とりあえず、いまのガラムはフィール・ハンターズの闇のフィールの真価を発揮している状態で、フィール・カードを倒しただけでは助けられないらしい。

もつとも遺体を買収された時期を考えると当時はまだ供給がストップしてなかった為、ドラッグが遺体の残りなのか後から投与されたものなのかは分からないけど。

「つてことでもいいの？　Chacu Challenge？」

一応、私は訊ねてみるも、残念ながら地縛神からの返事はない。まあ仕方ないって話ね。

私はデュエルを続ける。

「なら、続けていくわ。私はレベル5《シャドウ・ヴァンパイア》と

《ヴァンパイア・デューク》でオーバーレイ。2体のアンデット族モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

紅い月が渦を描いて歪み、2体のヴァンパイアを靈魂にして取り込む。刹那、月は膨張をはじめ私たちの視界を紅一色に染め上げる。せつかくだから、口上も。

「仮初のシャドウを捨て、いまここに高貴なる騎士皇が目覚める。吸血鬼を続べ紅き夜に繁栄をもたらせ。エクシーズ召喚！ 出でようク5 《紅貴士―ヴァンパイア・ブラム》！」

紅い視界に1体の《シャドウ・ヴァンパイア》が浮かび上がり、周りの紅を取り込みはじめる。

視界から完全に紅が消えた時、先ほどの《シャドウ・ヴァンパイア》は、肉体を取り戻し、攻撃力2500の吸血鬼の騎士になった。

「ヴァンパイア・ブラム！」

ガルムの目が見開く。

「ヴァンパイア・ブラム……カキネのエース……私たちノ仇……はっ」意識がトリップした様子で呟いていたガルムは、我にかえると、「サキ、どうしよう。私ついに私じゃなくなってた」

と、ショックを受ける。

「心配しないで。さっきのは闇のフィールというより、妙子の残留思念に引つ張られてっって感じでしょう？」

「うん。でもあんな凶暴なタエコは見たことが」

「そうね」

私はうなずき、

「もしかしたら、それだけ牡蠣根に強い怨念を抱いてたのかも」

地味に、ガルムがずっと待ち望んでたはずの残留思念が表に出てきて喋った事例だったわけだけど、残念ながらお互い余裕のなさ故に、たったいま起きた奇跡はスルーしてしまう。

「ならガルム、悪いけどもう少し妙子を追い詰めるわ」

そういつて私は、

「オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、ヴァンパイア・ブラムの効果を発動。オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、相手の墓地から

モンスターを私のフィールドに特殊召喚する。私は《煉獄龍 オー
ガ・ドラグーン》を私のフィールドに特殊召喚」

とりあえず私は、エース級モンスターを奪うというトラウマ刺激も
込みで闇のフィールド・カードを私の場に出してみる。事実上、一時的
に闇のフィールド・カードをガルムから完全に引き剥がしたわけだけ
ど、依然としてガルムは解放されない。ということは、やはり原因は
別にある。

「ガルム、妙子。これであなたたちのエース級モンスターはヴァンパ
イア・ブラムの支配下よ。これ以上大切なものを奪われたくなければ
倒してみなさい、このカードを」

「あ、ああっ」

私の言葉に呻くガルム。効果はあるようだ。これで次のターン、彼
女に敵討ちをさせて解放できればいいのだけど。

「シャドウ・ヴァンパイア」の特殊召喚効果を使ったターン、私は攻
撃を行えないわ。カードを1枚セットしてターン終了」

沙樹

LP3000

手札2

「《ヴァンパイア帝国》」

□□「《セットカード》」□□

「《ヴァンパイアの眷属(守備)》」「《ヴァンパイア・ロード(守備)》」

「《煉獄龍 オーガ・ドラグーン》」□□

— □□ — 「《エーデルリッター紅貴士—ヴァンパイア・ブラム(沙樹)》」 —

□□□□□□

「《セットカード》」「《インフェルニティガン》」「《セットカード》」□□

□□

ガルム

LP4000

手札0

私はターン終了を宣言してから、ふうつと一回息をついた。

いまのところ、そこまでフィールドを消費せずともデッキは回ってい

る。現在、相手の場には《インフェルニティガン》1つとセットカード2枚。対してこちらはフィールド魔法の《ヴァンパイア帝国》に、カウンスター罠の《ヴァンパイアの支配》を含めた2枚のセットカード。さらに4体のモンスターがいる現状、ヴァンパイア・ブラムは倒して欲しいとはいえ、いくらインフェルニティ相手であっても簡単に突破はされなれないと思いたい。

「鳥乃」

そこへ神簇がいった。

「貴女、大丈夫だとは思うけどさつき息を整えたとき、変な説明フラグ立ててないでしょうね？」

「……えっと」

言われて私は「あ」となる。

しまった、私がさつきやってたの、半ば遊戯王恒例の駄目なやつじゃない。どうやらイリス分で緩和してるとはいえ牡蠣根のデッキを使った影響で悪影響を及ぼしてるらしい。——と、私は牡蠣根のせいにしておく。

「くるよ」

アインスがいった。直後、

「私のターン。ドロー」

ガラムはカードを引く。直後、「げっ」て顔になり、

「サキ、ごめん。私が引いたカードは《インフェルニティ・デーモン》よ」

『あっ』

今度は私たち三人がステレオで「げっ」て反応をしてしまう。

「手札が0枚の場合にこのカードをドローした時、相手に見せてこのカードは特殊召喚が可能。さらに特殊召喚した《インフェルニティ・デーモン》のモンスター効果。手札が0の場合、デッキからインフェルニティを1枚手札に加えるわ。私はチューナーモンスター《インフェルニティ・ビートル》を手札に加えて通常召喚、さらにビートルをリリースして効果発動よ。デッキから《インフェルニティ・ビートル》を2体特殊召喚」

ついに、インフェルニティが完全に回りだしてしまった。

「私はレベル4《インフェルニティ・デーモン》に、レベル2《インフェルニティ・ビートル》をチューニング！」

一匹の昆虫が2つの輪にかわり、内側を《インフェルニティ・デーモン》が潜り、混ざり合う。

「現世と冥界の狭間開くとき、死者の嘆きが奈落の王を招き寄せる。シンクロ召喚！ きて、レベル6《デーモンの招来》！」

こうして出てきたモンスターは、当時の妙子の切り札だった《デーモンの召喚》そっくりのモンスター。いや、正にそのリメイクモンスターなのだろう。実際、ガルムの口上もそれを意識したものと思われる。奈落の王とは《デーモンの召喚》の元ネタとされる別のカードゲームのモンスター、いやクリチャーの名前であり、死者の嘆きとというのはそのまま妙子の嘆きを指してるのだろう。

「妙子……」

つい、私が呟く中。

「さらに私は奈落の王に煉獄の力を重ねるみたい。レベル6《デーモンの招来》にレベル2《インフェルニティ・ビートル》をチューニング！」

すると今度は、いつものシンクロ演出とは違い、2体のモンスターが光の粒子となって消えると、彼女の前方に8つの扉が並んで出現する。

「死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫の檻より魔の竜は放たれる！ シンクロ召喚！ きて、レベル8《インフェルニティ・デス・ドラゴン》！」

扉は放射線を放ちながら、奥から順に開かれ、最前部の扉が開かれたとき、中から不細工な竜が飛び出してきた。その攻撃力は3000。

「サキ！ 気を付けて、嫌な予感がするの。もしかしたら、このターンに決めにかかるかも」

と、ガルムは叫んだ。しかもその言い方は本人にとっても不明確な要素が入り込んでくるとでもいいたげな。

「わかった」

私は言うしかなかった。

「お願いよ。《インフェルニティ・デス・ドラゴン》のモンスター効果！ このカードは1ターンに1度、相手モンスターを破壊して、攻撃力の半分だけダメージを与えるわ。私はこの効果でオーガ・ドラグーンを破壊！ インフェルニティ・デス・ブレス！」

《インフェルニティ・デス・ドラゴン》が、オーガ・ドラグーン向けに火球を放つ。なら、私は伏せカードを1枚オープンし、

「罨カード《デストラクト・ポーション》！ その前にオーガ・ドラグーンを破壊し私のライフに加算するわ」

すると、ガルムも伏せカードをオープンし、

「駄目、サキ！ カウンター罨《インフェルニティ・バリア》よ。その発動を無効にするわ」

「っ」

このターンで決めるつもりなら、《デストラクト・ポーション》は通さないといけない気がする。

「カウンター罨《ヴァンパイアの支配》！ 無効を無効に」

ガルムからもう1枚の伏せカードはオープンされなかった。結果、《インフェルニティ・バリア》の無効に成功し、《デストラクト・ポーション》が発動。

沙樹 LP3000↓6000

オーガ・ドラグーンは破壊され、その攻撃力分、私のライフが回復された。同時に、対象を失ったことでサクリファイス・エスケープが成立。《インフェルニティ・デス・ドラゴン》の効果は不発に終わる。「《インフェルニティ・デス・ドラゴン》は効果を使ったターン、自身は攻撃できないわ」

ガルムはいった。

「けど、まだ動けてしまうのよ。永続魔法《インフェルニティガン》を墓地に送って効果発動。墓地から《インフェルニティ・デーモン》と《インフェルニティ・ネクロマンサー》を特殊召喚。さらに手札0枚で《インフェルニティ・デーモン》が特殊召喚したことで効果発動。デッ

キから《インフェルニティ・リゾネーター》を手札に加えるわ」

リゾネーター。ということは恐らくそれはチューナー。

「私の手札がこのカードのみで、場にインフェルニティSモンスターが存在する場合、《インフェルニティ・リゾネーター》は特殊召喚できる。さらに特殊召喚した《インフェルニティ・リゾネーター》のモンスター効果！ 手札が0枚の場合、墓地のインフェルニティ・チューナー1体を特殊召喚するわ。私は墓地から《インフェルニティ・リベンジャー》を特殊召喚」

場に出現する2体のチューナー。この時点でガルムのメインモンスターゾーンは4体のモンスターが。スピードデュエルでは不可能な布陣である。

「やっほ」

刹那、床から突如8つの炎が噴き出し、それは1つのリンクマーカーへと姿を変える。

「リンク召喚か！」

アインスがいった。直後、

「アローヘッド確認。召喚条件はモンスター2体。私は《インフェルニティ・リゾネーター》と《インフェルニティ・デス・ドラゴン》をリンクマーカーにセットよ。リンク召喚！ きて、リンク2《魔界の警邏課デスポリス》」

「え、いくら攻撃できなくても、毎ターン破壊とバーンができる《インフェルニティ・デス・ドラゴン》を？」

驚く神簇。しかし、いま現在において更に展開しようと思うとEXモンスターゾーンに突っ立ってるインフェルニティ不細工ドラゴンは邪魔でしかない。だったらリンク素材にしてしまうのは十分アリといえる。特にインフェルニティみたいなデッキだと。

「《インフェルニティ・ネクロマンサー》の効果で《インフェルニティ・デス・ドラゴン》を蘇生。効果で今度は《紅貴士―ヴァンパイア・ブラム》を破壊よ」

「あ」

なんてレベルじゃなかった。ネクロマンサーで蘇生してしまえば

メインモンスターゾーンに置かれる上に、再び効果を使うことができる。

《インフェルニティ・デス・ドラゴン》が今度はヴァンパイア・ブラムに向けて火球を放つ。今度は防ぐことはできず、牡蠣根のヴァンパイアは破壊され、

沙樹 LP6000↓4750

といった具合に、私のライフは削られる。

「ヴァンパイア・ブラム……牡蠣根のカードを、破壊！」

思わず握り拳をつくるガルム。が、すぐハツとなって、

「ごめんサキ。私」

「別にいいわ」

私はいった。

「むしろ覚えておいて。ガルムと妙子、あなたは確かに牡蠣根の切り札を倒した。牡蠣根に一矢報いたんだって」

「サキ……」

ガルムの頬に一粒の涙が伝うのが見えた。しかし、闇のフィールは止まらない。

「けどまだカキネは倒してないわ！ まだいくよ。っていけるの!? それにサキはカキネじゃっ」

自分の、闇のフィールに言わされた台詞にガルム自身が慌てながら、彼女はエクストラデッキからカードを出し、提示する。それは2枚目の《インフェルニティ・デス・ドラゴン》だった。

「まさか2体目?」

実際、ガルムの場にはネクロマンサー、デーモン、リベンジャーとレベル8シンクロする素材は揃ってる。しかし、ガルムがやろうとしてることは違ったらしい。

2枚目の不細工ドラゴンのカードは、デュエルディスクに置かれるまでなく彼女の指の中で発光。別のカードへと変わっていく。

ガルムはいった。

「嘆きの遺志を闇が歪めるとき、世界を絶望の悪夢に再構築する。リ・コントラクト・ユニバース!!」

「それって」

ミストランが使う能力と同じもの。しかも、いまガルムがいった台詞が意味することって。

「なるほど。そういう話だったのね」

私は、血の気が引く思いをしながら呟いた。

「どういふことかい、鳥乃」

訊ねるアインス。私はいった。

「分かったのよ。闇のフィールの中でガルムの自我が無事なわけが。肩代わりしてたのよ、彼女の中にある妙子の残留思念が。ガルムの魂は闇のフィールに侵蝕されてない、彼女の中の妙子だけが闇のフィールに支配されてたって話だったのよ」

だから、残留思念の妙子はあれだけ凶暴化していた。

「そう、みたい」

うなずいたのはガルムだった。

「やっと分かった。タエコは、いまも私を助けてくれてたんだって」

ガルムはその場で涙を流し全身を震わせながら、

「嫌だ。もう動かしたくない。タエコにこれ以上酷いことをさせたくない。止まって、止まってよ！」

今まで以上に踏ん張り、床を踏み抜き、必死に闇のフィールに抵抗するも、

「うわあああああああつ」

抑えきれず、絶叫をあげながらガルムはフィールドからカードを3枚墓地に送り、2枚目の《インフェルニティ・デス・ドラゴン》だったカードをディスクに叩きつけた。

「レベル3《インフェルニティ・ネクロマンサー》、レベル4《インフェルニティ・デーモン》に、……れ、レベル1《インフェルニティ・リベンジャー》をチューニング！ 漆黒の帳下りし時、め……冥府の瞳は開かれる。舞い降りろ……闇よ！ シンクロ召喚！ で、出な……出て！ レベル8《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》！」

禍々しい口上、そして痛々しい苦し気なガルムの声で出現したのは、全身に目を持った禍々しいドラゴンの姿。攻撃力はやはり300

0。

「はあつ、はあつ……デスポリスのモンスター効果。《インフェルニティ・デス・ドラゴン》をリリースし、効果はつ……どうっ」

ここでガルムは再び不細工ドラゴンを墓地に送り、

「1ターンに1度、このカード……は、モンスター1体をリリースし、別のカード1枚に警邏カウンターを1つ置くわ。そのカードが破壊される場合、かわりにこの警邏カウンターを取り除く。私は、《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》にカウンターを」

これで、《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》は1度きりの破壊耐性を得たことになる。

「さらに《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》のモンスター効果。このカードは墓地のレベル6以下の闇属性モンスターを除外して、ターン終了時までそのカード名と効果を得る。私は《インフェルニティ・ネクロマンサー》を除外。そして《インフェルニティ・ネクロマンサー》となった《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》の効果！」

ネクロマンサーって、もしかして。

「《インフェルニティ・デス・ドラゴン》を蘇生！」

今回3度目の特殊召喚、過労死レベルの登場を果たす不細工ドラゴン。なるほど、そこまで考えてガルム、いや闇のフィールはデスポリスをリンク召喚してたらしい。

「《インフェルニティ・デス・ドラゴン》のモンスター効果！ 《ヴァンパイア・ロード》を破壊するわ」

そして同じく3度目の火球が今度は《ヴァンパイア・ロード》を灰にする。

沙樹 LP 4750 ↓ 3750

さらに私がダメージを受けたところで、

「バトルよ！ 《魔界の警邏課デスポリス》で《ヴァンパイアの眷属》を戦闘破壊。さらに《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》でサキに直接攻撃。インフェルニティ・サイト・ストリーム！」

口ではなく胸の辺りから禍々しいビームを放つ《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》。フィールで実体化してるのが分かったため、こ

ちらもフィールの防壁を張って防衛。なんとか肉体的には事なきを得るも、

沙樹 LP3750↓750

私のライフは回復して尚3桁に。本当にこのターンを悠長に構えてたら一気に決められてる所だったのだ。

「私はこれでターン終了よ」

宣言するガルム。彼女のほうも、すでに抵抗が全然利かなくなり、再び嘆くしかできなくなってる様子だった。加えて、

「サキ、ごめん。段々と闇が強くなってきた。このままじゃ私も」
って。

恐らくなまじ自覚して抵抗したせいで闇のフィールを刺激してしまったのかもしれない。早くしないと、ガルムの意思も完全に乗っ取られてしまう。

しかし、私は現在の場を確認する。

沙樹

LP750

手札2

「《ヴァンパイア帝国》」

□□□□□□

□□□□□□

—「《魔界の警邏課デスポリス（ガルム）》」—□□—

□「《インフェルニティ・デス・ドラゴン》」□「《ワンハンドレッド・

アイ・ドラゴン（警護C1）》□□□

「《セットカード》」□□□□□□

ガルム

LP4000

手札0

正直、絶体絶命のピンチだった。

手札こそ2枚あるものの、私の場には《ヴァンパイア帝国》が1枚だけでライフもたった750。対してガルムはデスポリスに加えて攻撃力3000のドラゴンが2体、それも《ワンハンドレッド・アイ・

ドラゴン』には警護カウンターで1度だけ破壊を無効にし、《インフェルニティ・デス・ドラゴン》も1度だけ墓地の《インフェルニティ・ビショップ》が破壊を肩代わりする。さらにそれでもこの不細工ドラゴンを倒した所で、墓地の《インフェルニティ・リベンジャー》が自己蘇生して壁になる。しかも伏せカードが1枚敷かれてるときだ。

「私のターン」

と、私はカードを引きかけ思った。このターンで勝負をしかけるしかない。例え更に次のターンがきたとしても、ガラムと妙子を救える機会はなくなってるのではないかって。

「神簇、アインス」

私は傍の戦友に呼びかける。

「なに?」「どうした?」

反応するふたりに、私はいった。

「このターンに決めれなかったら、後はお願い」

すると、神簇は諦めた顔で。

「仕方ないわね。いいわ、任されたから安心して頂戴」

続けてアインスも、

「だから、もしもなんて考えず最善と思うことをすればいい」

「ありがとう」

私は、この先の全てをふたりに預け、ドロウする手に私の持つ闇のフィールを纏わせる。

「サキから、闇のフィールが」

驚くガラム。私はいった。

「暗き力はドロウカードをも闇に染める!——ダークドロウ!」

そして、カードを引き抜く。直後、私は間違いなく確認した。ある嫌な想い出のある魔法カードが、現状を打破する最高のカードに書き換わるのを。

その効果を見て。

「なるほどね」

私は、カードから強いインスピレーションを貰い、気づけばガラムに聞こえるほどはつきりした声で呟く。

「妙子、悪夢は終わったわ。牡蠣根が遺した闇は今日この日をもって終焉を迎え、全ては光に変わっていくのよ」

「え?」

と反応するガルムを前に、私は引いたカードを手札に加え、牡蠣根が持っていた2枚のカードを場に戻す。

「スタンバイフェイズ時に《ヴァンパイア・ロード》と《紅貴士―ヴァンパイア・ブラム》の効果を発動。このカードを墓地から自己蘇生させるわ」

「ヴァンパイア・ブラムが。……っ」

途端、ガルムは強い敵意をモンスターに向けるも、

「そして」

私はダークドロローで引いたカードをディスクに差し込んだ。

「魔法カード発動! 《RUM―ヴァンパイア・ノーブル・フォース》

「ヴァンパイアのRUM!?!」

ガルムが驚く中、

「この効果で、私はアンデット族モンスター1体をランクが1つ高いヴァンパイアにランクアップさせる。私はランク5《紅貴士―ヴァンパイア・ブラム》1体でオーバーレイ・ネットワークを再構築」

私が宣言すると、ヴァンパイア・ブラムは光の靈魂となつて《ヴァンパイア帝国》の紅い月に吸い込まれる。

「牡蠣根の遺志、いまここにイリスの手により転換する。血の呪いよ、新たな指導者の下、光の時代へと切り開け! ランクアップ・エクシーズチェンジ! 出陣せよ、ランク6 《アルダンピール交血鬼―ヴァンパイア・シエリダン》!」

紅の月より舞い降り出現したのは、金の髪と紅い瞳を持つ、新たな吸血鬼の貴族。これはイリスのエクストラデッキに入っていたカードである。

「《RUM―ヴァンパイア・ノーブル・フォース》の効果はまだ続いてるわ。この効果でX召喚した後、相手の墓地からモンスター1体を、このヴァンパイア・シエリダンのオーバーレイ・ユニットにする。私は墓地の《インフェルニティ・リベンジャー》をオーバーレイ・ユニット

トに」

これで、私はイリスのエースを出しながらガルムの墓地から脅威をひとつ排除することに成功した。

あのRUMは、元のカードは《洗脳―ブレインコントロール》だった。

《洗脳―ブレインコントロール》はライフを800払って、相手の場から通常召喚可能なモンスターを1体のコントロールをターン中得るカード。現在このカードでコントロールを奪えるカードはないし、そもそも私のライフも750だから使うことさえできない。そんな八方塞がりなカードから、こんな逆転のカードに変わったのだ。……でも、それだけじゃない。これは、そんなレベルの話なんかじゃない。

《洗脳―ブレインコントロール》は、あの日ロコちゃんを洗脳して手を血に汚させたカードだ。私は、真の意味でロコちゃんを護りきれず、これからずっと背負わなくちゃいけない私とロコちゃんの暗い過去を増やした1枚。そんなカードが、牡蠣根の切り札をイリスの切り札に進化させるカードに変わったのだ。

「ガルム、妙子、聞いて？」

私は静かに呼びかけた。

「今日、この先のホールで、大きな一歩を踏み出そうとしてる人がいる。彼女の名前はイリス・ルース・マリア・ダ・ソンプラ・カキネ。牡蠣根の被害者を母に持つ、牡蠣根の実の娘よ」

「カキネの娘！」

ガルムが強く反応する。元々彼女の任務自体イリスの誘拐だったのだけど、今日までその事実を知らずにいたのか、それとも闇に侵蝕されかけた中でワードに反応したのか。

私は廊下を塞ぐように両手を広げ、

「彼女は、父の罪を償い、そしてロコちゃんたち被害者を救うために、いまある会社を畳んで慈善事業に乗り出そうとしているわ。私はいま、そんな彼女を護るためにここにいる。イリスさんの命を狙うプライド派やフィール・ハンターズを彼女のいるホールに向かわせないために。ねえ、ガルム、妙子。ふたりも彼女を信じてみない？ 彼女も

あなたたちも同じ牡蠣根の被害を受けた仲間よ」

「イリスを、信じる……？ カキネを、カキネの娘を信じる？」

「このデュエルだってそう。あなたたちは、このデュエルで牡蠣根の切り札を倒した。牡蠣根に一矢報いたのよ。でも結果、私では覆せない盤面をあなたたちは創り出してしまった。負けるはずだったのよ、私ではあなたたちを助けられなかったのよ。このデュエル」

「サキ……」

「だけど、いまそんな私のダークドロウを借りて、イリスさんは牡蠣根のカードを、彼女の切り札ヴァンパイア・シエリダンに進化させ、私が負けるはずだったデュエルからあなたたちを助けようとしている。ガラム、妙子、一度だけでいい！ あなたたちに差し伸べられた手に応えてあげて頂戴」

「そんな、の……」

言いながら、ガラムは葛藤しながら俯く。全身を小刻みに震わせ、何度か首を横に振り、小さく唸り声をあげる。

「妙子、信じてるから」

最後に私はガラムではなく妙子のみに向けて伝え、私はデュエルを続行。

「私は《ヴァンパイア・ロード》を除外して、手札から《ヴァンパイアジェネシス》を特殊召喚。さらに《ヴァンパイアジェネシス》の効果！ 手札からヴァンパイアを1枚捨て、それよりレベルの低いヴァンパイアを特殊召喚するわ。私は手札の《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》捨てて墓地から《ヴァンパイア・グレイス》を特殊召喚」

これだってそうだ。《ヴァンパイアジェネシス》こそ牡蠣根のフィールカードだけど、牡蠣根の女ヴァンパイアを捨ててイリスが所有する女ヴァンパイアを特殊召喚する流れ。まるで世代交代をみているかのようだ。

「そして、《交血鬼―ヴァンパイア・シエリダン》の効果。このカードのオーバーレイ・ユニットをひとつ取り除き、相手フィールド上のカードを1枚墓地に送る。私は」

と、《インフェルニティ・デス・ドラゴン》を指す。が、直後。

「《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》をお願い！」

俯いたままガルムが叫んだ。それも、叫びの中にも品と優しさを感じる、どこか彼女らしくない喋りで、

「このカードは破壊させちゃ駄目。破壊以外の方法で墓地に行かせないといけないの」

「分かったわ」

「私はうなずき、

「ヴァンパイア・シエリダンの効果で、私は《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》を墓地に送る」

直後、シエリダンの紅い瞳が輝くと、《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》の無数の目が紅く染まり、ボタンと倒れて消滅する。

「続けて《ヴァンパイア・グレイス》のモンスター効果。1ターンに1度、モンスター・魔法・罫のいずれかを宣言し、相手はデッキから宣言した種類のカードを墓地に送る。私は罫カードを宣言するわ」

「《インフェルニティ・バリア》を、墓地に」

ガルムがカードを墓地に送った所で、

「これにより《ヴァンパイア帝国》の効果を発動。《ヴァンパイアの使い魔》墓地に送りつつ《インフェルニティ・デス・ドラゴン》破壊」

「墓地の《インフェルニティ・ビショップ》の効果。インフェルニティが破壊される場合、このカードをかわりに除外するよ」

「これも想定内。」

「ならバトル！」

「私はいった。」

「《ヴァンパイアジェネシス》で《インフェルニティ・デス・ドラゴン》に攻撃。お互いの攻撃力は3000だけど、《ヴァンパイアジェネシス》は《ヴァンパイア帝国》の効果でダメージ計算時のみ攻撃力が500アップ」

「っ」

ガルムは腕を盾に身を護りながら、モンスターの破壊を受け入れる。

ガルム LP4000↓3500

「《ヴァンパイア・グレイス》で《魔界の警邏課デスポリス》に攻撃」
ガラム LP3500↓2000

これで、ガラムのモンスターはいなくなった。後は！

「《交血鬼―ヴァンパイア・シエリダン》でガラムに直接攻撃」

ヴァンパイア・シエリダンがマントをなびかせ飛び上がる。彼の身が紅の月で逆光を放つと、牙をキランと光らせガラムに向けて急降下。

「墓地の《インフェルニティ・ロスト》を発動！」

ここでガラムは宣言した。ここは、私の知るガラムの声で、

「私の手札が0枚の場合、墓地のこのカードを除外し、墓地からカードを3枚対象にして発動。同じ数だけデツキからインフェルニティカードもしくは煉獄と名のついた魔法・罠カードを墓地に送り、対象のカードをデツキ・エクストラデツキに戻す。私は、《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》《煉獄龍 オーガ・ドラグーン》《インフェルニティガン》を対象に発動。デツキから《インフェルニティ・ポーン》《インフェルニティ・クイーン》《インフェルニティ・ルーク》を墓地に送って、最初に選択した3枚をデツキに戻すわ」

と、デツキと墓地からカードを3枚ずつ入れ替える。そのまま巻き戻しは発生せず、ヴァンパイア・シエリダンはガラムを攻撃し、

ガラム LP2000↓0

ガラムのライフは0に。直後、

「ここで罠カード発動——」

言いかけた所で、

「さ……。させない！」

ガラムは叫んだ。先ほどみせた少し違う喋りで、

「私の最後の伏せカードは《煉獄の零門》^{ゼロ・ゲート}。このカードは私のライフが0になったときに発動し、私の敗北を無効にして《煉獄龍 オーガ・ドラグーン》を呼びだすの。そして、《煉獄龍 オーガ・ドラグーン》がフィールドを離れるまで私はデュエルに負けない。さらにポーンは墓地にある限り私のドロウを封じ、クイーンは私のモンスター1体に直接攻撃を与え、ルークは除外しているビショップを墓地に戻す。

……はあ、はあ、ギリギリ、間に合った……みたい」

と、ガルムは膝をつく。彼女のいう通り、《煉獄の零門》^{ゼロ・ゲート}は発動されずデュエルは終わりを告げた。

彼女は、肩で息をしながら、苦しそうにいう。

「ありがとう。このデュエル沙樹ちゃんの勝ちよ」

「っ」

私は、ここでやっと気づいた。ガルムは私のことをサキと呼び捨てる。ってことは、いまの彼女は。

「妙子？ 妙子なの？」

「うん。といつても残留思念のほうだけど」

ガルム、ううん妙子は顔をあげて、懐かしい微笑みを私に向けいった。

息は段々落ち着いて行ったのか、立ち上がりながら穏やかな声で、

「久しぶりね、沙樹ちゃん」

「1年ぶり、いや中3の後半はお互い視界に映す余裕もなかったし、殆ど丸々2年ぶりね」

「うん」

って、妙子はうなずいて、

「でもごめんね。せつかくまた会えたのに、もう時間がないみたい」
って。

「え？」

「《煉獄の零門》^{ゼロ・ゲート}を通すわけにはいかなかったから、全力を振り絞っちゃって。もうすぐ私、消えるみたい」

「消滅って、待って、それって」

「でも最後に沙樹ちゃんと話せて良かったと思ってるよ」

「妙子！」

私は駆け寄り、彼女の肩にしがみつくも、

「ごめんね。段々『私』が消えてきちゃった。ガルムには聞こえてると思うけど、私はもう沙樹ちゃんの声聞こえなくなってる」
「っ」

彼女の言葉に、私は固まる。そんな様子も、すでに妙子には伝わってるのか伝わってないのか、

「沙樹ちゃん。イリスさんって人にも言っておいてあげて、ありがとう、応援してるって」

「分かったわ」

私は、妙子を強く抱きしめる。すると、

「ありがとう。沙樹ちゃん、私はお空ですっと見守ってるから、ロコちゃんところちゃんのこと、お願い」

耳元で、かすれるような声で妙子はいいい、すつと目を閉じた。

「危ない！」

彼女が意識を失った所で、早速服の内側に腕を潜り込ませようとしたその時、アインスが私の上方にショットガンを放った。同時に、天井から一筋の火花が飛来し、アインスの散弾と衝突し爆発してみせる。

「あれって、ファイアのドラゴンブレス弾」

私が驚くと、アインスは私とガラムを庇うように前に立って、

「いや、ファイアと同じ技だけどファイアじゃない」

と返事し、

「誰だい？」

と、天井に向けてショットガンを構える。すると、

「へえ。最近、処分人と王子がつるんでるって噂は聞いたけど本当だったんだね」

言いながらひとり男が降り立った。歳は私と同じくらいか。ヴィジュアル系の髪型で、顔もまあ恐らくイケメンに分類されると思われる。

「君は……？」

アインスが訊ねかけた所、

「うわあああつ！」

直後、外から突き飛ばされたらしいシュウが非常口のドアを突き破り廊下へと倒れ込んだ。

「シュウ！」

叫ぶアインス。神簇は駆け寄り、

「大丈夫？ しつかりして」

「悪い、デュエルでフィールが滅つた所を狙われた」

と、神簇に支えられて半身起こすシユウのフィールは、確かに殆ど残っていないようにみえる。で、破壊された非常口の先にはふたりの少女が倒れたゲイ牧師を引きずりながら立っていた。

「ボブ！ バイブル！」

私が叫ぶ中、少女は歩いてこちらに接近し、

「えー？ もう終わり、絶対正義っていうからもう少し期待してたのに」

「しようがないよ。……あの人、もうあれだけフィール……消耗してたから」

「だけどきー」

恐らく双子だろう。ふたりは瓜二つな容姿をしていた。私の性欲が反応しないことから間違いなく中学生以下だろう。どちらもボディースーツを着用しており、幼児体型から大人の体に変ろうとする時期特有のボディラインが露になっている。髪形はショートヘアだけど、細かな特徴がふたりの間で左右逆になっているのが見られた。加えて性格も片方は活発でもう片方は大人しいと正反対に映る。

で、今度はイケメンのいた場所から少し離れた辺りから天井がガタガタ音を出すと、壁が破壊され上からフィーアがシルフィを抱えて落ちてきた。姉を護るのに全力だったようで背中から床に叩きつけられると、

「あつ」

と、フィーアは呻き声を出す。

「フィーア！ シルフィ！」

よろけながら駆け寄るシユウ。フィーアは彼女に気づくと、

「シユウ。問題ありません、シルフィは無事です」

「馬鹿野郎！ お前が問題有々だろうが」

叱咤するシユウに、シルフィが。

「ごめんなさい。襲われた所を処分人に助けられて、でも相手は私を

殺されたくなくなったら退いてくれない?」

私は残りの3人に要求する。

「へえ? じゃあ殺しなよ。俺はこいつが死んでも痛くも痒くもないしね」

と、イケメンは逆に深海ちゃんに銃を向けるも、

「待って! ストップストップ!」

「ここで彼女を失うのは……痛手、だと思う」

双子はそんなイケメンを制止。

活発なほうの双子がいった。

「分かった。どっちにしてもガルムがやられた時点で作戦は失敗したようなものだし、要求を呑むよ」

続けて大人しい双子が、

「だから、この子は……助けてあげて」

「なら条件があるわ」

ここで話に入ったのは神簇。

「いますぐ貴方たちにはフィールを全損して貰って、名前と所属を吐いて貰うわ。そしたら《ワーム・ホール》でこの子と一緒に安全圏に逃がしてあげる」

「へえ、そんな話に俺が乗るとでも?」

イケメンはいい、数秒の間の後、

「イーグルだ。俺の名はイーグル・フレイムショット。所属はフィール・ハンターズだ。じゃ、俺はこいつがどうなってもいいからこのまま撤退させて貰うよ。君たちがフィール全損された俺を生かす理由も《ワーム・ホール》で本当に安全圏に送ってくれる保証もないしね」と、いってイーグルは回れ右し非常口から外へと出て行った。

「確かにイーグルの言う通りだよね」

活発な双子はいった。直後、大人しいほうの双子が爆弾を投擲。

「きやつ」

と、神簇が反応。皆がそれぞれフィールで身を護る中、

「がはっ」

永上さんの呻き声。その間に深海ちゃんが彼女の拘束から抜け出

すのを気配で感じた。

「しまっ」

爆風で視界を塞がれる中、私は気配だけを頼りに銃を構えるも、「さっきも言ったけど、今回は私たちの負けにしてあげるよ」

と、活発なほうの双子。続けて大人しいほうが、

「私たちは……黒山羊の実、正義エネミー・オブ・ジャスティスの敵。私は姉の伊藤いと美代子みよこ」

で、活発なほうが、

「妹の詠華よみか」

と、それぞれ名乗る。

爆風が消え視界がクリアになったとき、すでに敵の姿は見られなかった。アインスが倒した敵構成員も全員回収されてしまったらしい。むしろ、もしかしたらそちらが真の目的だったのかもしれない。「大丈夫、このふたりはまだ息があるわ」

神簇がゲイ牧師の脈を確認し、ほっと息をつく。見たところ永上さんも気を失ってるものの大きな外傷は見当たらない。

私は銃を内ポケットに戻し、

「良かった。みんなは大丈夫？ 他に被害は出てない？」

「大丈夫です。見たところシュウが肩を、私が腰と背中をやられた程度です」

フィーアがいった。そんな彼女をアインスはさらっとお姫様抱っこし。

「ありがとうフィーア。おかげでシルフィが助かった」

「いえ」

フィーアはいうも、僅かな溜めの後、

「……アインス」

「何だい？」

「誰かを護りながら戦うというのは、難しいことなのですね」

「ああ」

アインスはうなずき、

「確かに、とても難しい。でも、いま私たちはそれをしなくてはいけない場所にいるんだ。そして、フィーアは見事にやり遂げてくれた」

「いえ、これでは足りません」

フィーアは首を振り、

「それで倒れてしまつては護りきることはできません。確かに相手は強敵でしたが、必ず勝てない相手でもなかった。護りながらも、普段と同等に近い戦いをしなくては」

「全く。相変わらずストイックだなおい」

ここでシュウがシルフィの肩を借りながらふたりに近寄り、

「そうだ。おまえもうすぐ学校行き始めるだろ。あつちでは試しに正反対のキャラを作つていけ」

「正反対のキャラですか？」

「ああ。例えばそうだな、テメエは白か黒かはつきりしねえと駄目な奴だから、逆に白か黒かを決めるな、無理なら白か黒と思つた選択を両方避けヘンテコな選択を常にしろ。ついでに真面目でビシツとするのをやめてけ、先生に怒られるくらいふざけたキャラでいけ。ただし、スイーツ好きだけは隠さなくていいむしろ全開いや全壊にしろ。目指すはシルフィが抱きしめたくなるよううざ可愛いガキンチョだ」

「え、私？」

ここで話に巻き込まれたシルフィが変な声をだして驚くも、

「ああ、おまえも白黒はつきりしないと駄目な糞真面目キャラだからな。つつうか、シルフィもフィーアも根がそっくりなんだよ。ここらでふたりとも常識ぶつ壊して少し柔軟覚えやがれ」

「でも、どうして私が抱きしめたくなるような、なの？」

「そりゃあ、あのシルフィが元殺人鬼を可愛い可愛いって抱きしめたら天変地異物の大事件だろ。しかもお前の大嫌いな不真面目キャラなら余計だ」

シュウは笑いながらいった。

一方、アインスは私や神簇に向けて。

「ところで、先ほどの4人。ふたりはどう見るかい？」

「実力？ それとも、なんであの4人が主力部隊にいなかったのか、とか？」

私が訊ね返すと、アインスは、

「両方さ」

と、いったので、私はいった。

「とりあえず、ガルムの所が一応の主力部隊であることは間違いないと思うわ。でなければ正義の敵はともかくイーグルも撤退するのはおかしい。ただ、4人がそれぞれ別行動してた所から主力の人員自体は各部隊に分散させてみたいね。多分、名目上の主力部隊含め全部隊が私たちサイドの主力をホールの外への対処に回らせる為の陽動部隊だったんだと思う」

「なら敵は何を狙ってたのよ」

訊ねる神簇に私は、

「たぶん、作戦の要はフェンリルね。どこまで私の作戦を把握してたかは知らないけど、恐らく相手はわざとフェンリルに裏切らせて私たちに接触させ、主力部隊の討伐に私たちを向かわせた所で闇のフィールで操り、イリスを殺す。実際、フェンリルはイリスさんを殺せる距離まで接近してたわけだし、彼女は鋭角と別の鋭角をゲートのように繋いで行き来できる。しかも本人が行き来できるだけじゃなくて、攻撃自体を鋭角を通して別の鋭角に飛ばすこともできるって話だし」

「つまり藤稔さんが機転を利かせなかつたら見事にやられてたわけか」

「そうなるわね」

私はアインスに同意しうなずく。

「で、敵側の実力もまだ未知数もいい所とはいえ、間違いなくかなりのものだと思うわ。さすがにどちらが一方的に負けるって話はないと思うけど、あのまま総力戦になれば双方に犠牲が出ていたのは間違いないわね。フィーアが動けるならって条件付きだけど」

「フィーアが万全でないところらの不利か。原因は深海さんかい？」

アインスがいった。私は「ええ」と返し、

「本人はああ言ってるけど、誰かを庇いながらもフィーアを倒すなんて相当なレベルよ。いまの私たちでそこまで出来る程の凄腕はこの場にいないわ。あえていうなら」

私は自分の胸の中で眠る少女に視線を向け、

「白兵戦勝負ならガルムにも目があるくらいね」

実は、同じく白兵戦勝負なら神簇も可能性はあるとは思った。しかし、彼女はハイウインドの大將。いま正に前線に出てしまっただけで、本来はそう頻繁に最前線に出てもらっては困る立場だ。加えて彼女に「あなたなら勝てるかもしれない」とか言っちゃったら、最悪猪みたいに突っ込みかねない。

だから私は伝えないし、意識して視線ひとつ向けないようにした。

「鳥乃様、ハイウインドの皆様、ご報告があります」

同行していたNLTのひとりが私たちの前に立った。

「先ほど霞谷から報告がありました。敵組織のメンバーが撤退を開始したそうです」

「そう」

私はガルムを抱っこしながら立ち上がり、いった。

「じゃ作戦成功ね。お疲れ様」

ガルムの生乳を揉みながら。それをみた神簇にライトセーバーで斬られながら。

結局、この日は記憶処理や施設の修繕が優先され、記者会見は翌日行なわれた。

イリスは大勢のマスコミの前で嘘偽りない事実を告白し、ソンプラ社を慈善事業として再スタートしたことを発表。そう、会見が翌日に延びてしまったせいで、彼女の新たな事業はすでに現地で始動してしまっただけである。

その為、イリスは会見を終えてすぐ空港へ向かわなくてはいけなくなった。

—— 現在時刻17:00。

私たちはいま、母国に帰るイリスを見送るため空港のターミナルにいた。この場には私とイリスの他に、木更ちゃんに鈴音さん、そして丁度次の任務で別の便に乗るらしい霞谷さんがいる。

「皆さん。この度は本当にありがとうございました」

頭を下げるイリスに、私は「いいっていいって」と返し、

「こちらはやるべき仕事を果たしたただけなもの」

「でも、あれだけ危険なことを幾つも」

イリスが言いかけた所を、木更ちゃんが彼女の唇に指を添え、

「私たちは、ただ安全な宿泊先を提供し、当日何事もなく終わった会見を護衛した、ですよね？」

「あ」

そうなのだ。今回、私たちが情報収集と情報隠蔽の為に行ったネット犯罪は霞谷さん協力の下、警察上層部に手をまわしておいたし、当日の交戦はNLTの記憶処理で事実が闇に葬られている。公式上では私たちは「何事もなく護衛任務を終えた」ことになってるのである。「ですから、あれだけ平和に終わったのに相場の何倍も報酬を頂いてしまつて私たちのほうが頭が上がりません」

いつもの笑顔で木更ちゃんという。

「そう、でしたね」

イリスも木更ちゃんが言いたいことは理解したので口を合わせる。

続いて鈴音さんが、

「何かありましたら、また連絡を下さいませ。ハンドは可能な限りアフターフォローもさせて頂きますわ」

「はい。その時はまたよろしくお願いいたします」

その時、空港内でアナウンスが鳴り響き、

「お別れの時がきてしまったようですね」

と、霞谷さん。鈴音さんも「ええ」とうなずき、

「お行きなさい、遅れてしまわれる前に」
なんて促す。

「はい」

イリスはいい、背を向けて歩き出す。と、そこで私は「あ」と思いだし、

「ごめんイリスさん、忘れ物」

と、私は追いかけて、借りたままだったデツキを彼女に差し出す。

「あ。そういえば渡したままでしたね」

イリスは振り返り、デツキを受け取ると、

「？ 私、これだけ多くのカードを渡してはおりませんけど」

「牡蠣根のデツキも一緒にしといたわ。2枚だけど天然のフィールカードも混ぜてる」

「えっ」

驚くイリス。私は続けて、

「私が持つてるより、イリスさんが持つてたほうがいいでしょ。カードだって罪はないから、今度は正しい持ち主に使われたいだろうし」

「そう、ですね。ありがとうございます」

イリスはデツキを外していたデュエルディスクにセットし、

「ところで、そろそろ、その手はやめてくれませんか？」

「ん、なに？」

「カードを渡すついでに私のお尻を触りまくってるあなたの手です」

なんて掴み上げられる私の手。

「仕方ないじゃない、結局最後までベッドインできなかつたんだから。その素敵なお尻とか美脚とか堪能したかったのに」

「鳥乃さん、後ろ」

「え？」

言われて振り返ると、そこには素敵な笑顔で録音に興じる木更ちゃん姿。

「あ、木更ちゃんそれ待って！ 梓にだけは送信しないで」

「そうですね、どうしましょうか？」

なんて楽しそうにいう木更ちゃん。しかも私がそっちに気を取られてる間に、イリスは改札口の奥に。

「あ、ちよつと待ってイリスさん行かないで」

慌てて今度は改札口越しにイリスを呼び止めようとするど、

「鳥乃さん、また会いましょう。私が全ての罪とトラウマを克服したときにでも」

そういつて、イリスは行ってしまった。

「全ての罪とトラウマを……」

償うではなく克服。

彼女は、父の問題以外にも、過去に妹をキメセクで潰してしまった

ことに対して、強いトラウマと罪悪感を負っている。それらが解決したときにまた会おうってことは、イリスさんは――。

(わかったわ)

すでに声の届かない距離にいる彼女の後ろ姿に、私は心の中で返事する。

本当なら私の手で克服させてあげたかったけど。それが彼女の決めた選択で、私の誘いに対する返事なら仕方ない。きつと、その時を素直に待ってからのほうが、より素敵な一夜を過ごせるはずだから。

私の任務はここまでだけど、彼女の闘いはここからののだ。

「では、私はいまから娘への土産を買っていきますわ。おふたりはどうされますか？」

見送りが済み、今回の依頼が完遂した所で鈴音さんがいった。

「あ、同行します」

と、木更ちゃん。

「沙樹は？」

「私は、ちよつと用事がひとつあつて。後で時間残ってたら合流するわ」

「わかりましたわ」

鈴音さんが木更ちゃんを連れて歩き出す。

「では、私もここで」

続けて霞谷さんも改札口を通過して自分の便へと足を進める。こうして、この場に私はひとりになった所で、

「で、隠れてないでそろそろ出てきたらどう？」

私は近くの柱に向けて声をかける。すると、

「気づいてたんだ、サキ」

と、顔を出したのはガラム。今回はマフラーをネックウオーマーみたいに口元で巻き、サングラスと帽子で変装してるも、例の黒コートを着てないのでまだ素顔を晒している。

「まあね。ていうか、どうやってこんな所にいるのよ。私たちは鈴音さんの車だけど」

「フェンリルについてきたのよ、ほら」

なんてガルムが指さす先には、鈴音さんと一緒に歩く木更ちゃんの後ろをストーキングするフェンリルの姿が。

ということは、彼女の鋭角と鋭角を繋ぐ能力できたということだろう。

私は呆れながら、

「相変わらずね、あの子も」

ガルムとフェンリルは昨日をもって黒山羊の実を抜けた。ふたりが今後ハンド入りするのか別の道を進むのかは分からないけど、しばらくは検査やメンテナンスを兼ねて研究施設が預かることに決まっている。

「ねえ、サキ。私お願いがあるんだけど」

ガルムがいった。

「なに？」

私が訊ね返すと、

「タエコのこと、もつと教えて」
って。

「サキとデュエルさせられたあの日から、私の中にタエコはいなくなっちゃったのよ。本当は、それってとても嬉しいこと。やっとタエコが本当に救われたってことなんだもの。でも、私はずっとずっとタエコと一緒にいたから寂しくて」

「だから、せめて妙子との想い出を忘れないように、もつと沢山のこと知りたいって話？」

「そう」

うなづくガルム。

「分かったわ。じゃあ、とりあえずどこか人気のない、ゆっくり休める所にも移動しない？」

私はいった。もちろん、暗に手を出す気満々で。しかしガルムは、「人気のない所？　じゃあサキ、バトル！　リアルファイトしましょ！　初めてサキと会った日の夜の続き！　今度こそ教えてもらおうから、闘いの中で、タエコのこと！」

なんて別方向で興奮しだす。というかそれ、殴り合いしたいのが第

一で妙子はついでなんじゃ。私は思ったけど、

「ま、いいか」

「ホント？ 闘ってくれるの？」

「その代わり、私が勝ったらちよつと一晩付き合っつて貰うつて話だけど」

「わふ？ いいよ、私負けないから！」

数回ほどびよんぴよんと跳ねてから、天真爛漫かつ好戦的な瞳を向けて笑うガルム。

そういえば、最後に妙子はいつていた。

——ロコちゃんところちゃんのこと、お願い。
つて。

もしかしてガルムの正体というのは。

「サキ、何してるの？ 早く早く」

ちよつと衝撃的な推測を頭が過ぎるも、直後私はガルムに手を引かれハツと現実に戻る。

「分かった、分かったから引つ張らないで」

ガルムの足に合わせる為、小走りでターミナルの外に向かいながら、私の頭はすでに「ガルムにどんなスケベしようか」と欲望いっぱいになっていた。

あ、リアルファイトは負けました。

MISSION 24—イーグル・フレイムシヨット

私の名前は鳥乃とりの 沙樹さき。 陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「大事件が発生した」

「え？」

お昼休みの教室。

私は、机いっぱいにお昼を並べ、あんぱんを食べる梓の前に、本気で世界の終わりでも見たような気持ちで私はいうのだった。

「大事件？」

きよとんとする梓に、私は「そう、大事件よ」と首を乗り出す。

現在、梓の机にはクリームパン、カツサンド、ツナマヨおにぎり、6個入りプチシュークリーム、牛乳、そしていま食べてるあんぱん。

私は訊ねた。

「今日のお昼、他には？」

「これで全部だよ？」

「1000年に1度の大事件！ 地球が崩壊する！」

「ええっ？」

何がなんだか分からず梓は困惑してるけど、仕方ないじゃない。

だって、(梓にしては) 食べる量が少なすぎるんだもの。

そこへクラスメイトの男子がやってきて、

「おっ、徳光。今日も凄い量食うんだな」

といいながら、先ほど購買で買ったと思われるナポリタンロールをばくつく。

「何いってるのよ花寺」

私はいった。

「明らかに少ないじゃない。普段ならここにウインナーパン、カップ麺、カップサラダを食べたうえで重箱弁当食べてるって話でしょ」

「そーいやそーうだな」

納得するクラスメイトの男子こと花寺。

「今日はちよつと食欲がなくて」

ここで梓の地雷投下。すると、花寺は無言のまま回れ右。

「どこに行くの?」

梓が訊ねると、

「カレーライス食いに行ってくる。俺、地球が消滅する日には最後の晚餐にカレーって決めてるんだ」

さらに、梓の「食欲がない」発言は瞬く間にクラス中に広がり、
「俺、今日を生き延びたら後輩の神簇さんに告白するんだ」「親友、パイン・サラダ作って待ってるぜ」「止まるんじゃねえぞ」

パニックのあまり、みんな自他を問わず死亡フラグを乱立させまくるカオス。さらにガチで人類滅亡を実感しちゃったらしい女子生徒が3人私の下に詰め寄り、

「鳥乃さん抱いて!」「恐怖に怯えたまま死にたくないの!」「レズで変態の沙樹ちゃん相手ならキモすぎて正気飛べると思うの」

「任せて!」

と、私が勢いよく立ち上がった所、梓のハンマーフルスイングが炸裂。

私は教室の窓ガラスを割り、紐なしバンジー（強制）を体験した。

放課後。私はハングドの仕事で神簇邸に足を運んでいた。

いつものように、アンちゃんに応接間へと案内されると、そこにはひとりの女性が席に座っていた。

初対面の女性だった。

制服から私たちと同じ学校に通う高校生だろう。眼鏡をかけ、内気でのおどとした、いかにも虐められてそうな子に映る。

「彼女が例の?」

私が訊ねると、

「はい。彼女が安達あだち 由美子ゆみこさんです。とりあえず、話だけでも聞いて頂けますか?」

と、アンちゃん。

彼女が今回の依頼人である。それも驚くなかれ、この安達さんは黒山羊の實のグラトニー派なのである。

曰くグラトニーがアンちゃんに仲介を頼み、今回ハングドの下にこの依頼が舞い込んできたのだ。一応、担当を指名した依頼ではないものの、相手が黒山羊の実で、しかも非正規ながら仲介業者がアンちゃんとあつては半ば私指名のようなもの。

「お待たせ」

私は彼女に挨拶し、対面の席に座る。

「え!？」

すると、私をみて安達さんは驚き、

「もしかして、鳥乃先輩ですか？」

先輩呼びということは、アンちゃんと同級生。つまり後輩だろうか。

「ん、そうだけど」

「ごめんなさい。私ノーマルですから」

誘う前から、いきなり断られたんだけど。

「大丈夫よ。気にしないで」

私は笑って、

「ノーマルをそつちの道に目覚めさせるのも趣味だから」

「神簇さあん」

と、安達さんは困った顔でアンちゃんを見る。神簇といったので一瞬、姉のほうかと思っただけど、そういえばアンちゃんも当然ながら神簇姓なのだ。

「鳥乃さん、初めにお伝えしておかなくてはいけないことが御座います」

アンちゃんは私の隣に立つと、懐から何やら書類を一枚取り出していった。

「今回の依頼は、鳥乃さんを指名した依頼ではありません。その為、当然ながら安達さんの担当は貴方でなくても全く構わないことをお忘れなく」

書類を広げて見せるアンちゃん。そこには、後はすでに送るだけになつてゐる契約違反・賠償の請求書が。しかも違反内容には「依頼人を相手に性的な悪戯を行い、精神的に重い障害を与えた」といった、起

こつてもいないのに事細かくリアルなクレームが表記されていたわけ。

「……」

啞然とする私。アンちゃんは懐に戻し、

「なお、こちらの書類はすでにデータをハングドの事務所に送信してあり、私の一言ですぐさま受理して頂けるように申請を通して御座います」

「ちよっ」

さすがアンちゃん。彼女ほど性格の悪い味方を私は他に知らない。

「……待てよう？」

「依頼人以外なら問題ないのよね？」

「そうですね。違約金や賠償は発生しません」

「なら」

ぐへへ。

「ところで鳥乃さん、先日私の裸などを収めた盗撮写真を受け取られましたよね？」

「え？」

「確か、シユウM I S S I O Nさん2から依頼を請けた際参照にアインスさんから」

「……………」

え、待って？　そこ今更関わってくるの？　というか、なんでアンちゃんが知ってるの？

「そこに尾ひれをつけて梓さんに報告致します。盗撮写真を脅しの材料に色々汚されたと」

「諦めてセクハラは神簇だけにするわ」

「はい。愚姉上様へのセクハラなら私は止めません。むしろ最近のストレスの種ですので遠慮なくお願い致します」

アンちゃん相変わらず苦労してるのね。

「ということで交渉（？）成立。神簇、悪いけど犠牲になって頂戴。あの」

「ここで、安達さんが恐る恐る訊ねてきた。

「本当に鳥乃先輩がハングドなのですか？」

私は正面向きなおして、

「信じられない?」

「いえ。そういうことではないのですけど」

とかいいつつ、安達さんは怯えながら、

「まさか校内の有名な先輩が出てこられるとは思わなくて」

「なに、女の子が抱いて欲しい女性先輩N〇. 1とか?」

「あ、えっと、その……」

うわっ、凄く言いづらそう寧ろ泣き出してしまいそう。けど、なんだろう。

(凄く泣かせてでも首を縦に振らせたい!)

とか考えてると、

「ヤ〇チンクズ男より性的に危険な女性先輩N〇. 1だそうですねよー」

と、いったのは神簇家のメイド長にして男の娘N I N J Aという属性の宝庫、ヒロちゃん。

「きやつ」

と、驚く安達さん。そりゃそうよね、いま瞬きひとつしたら傍に立ってたって感じだったもの。

「ところで鳥乃様、このままだと安達さんがキャンセルするまでエンドレスに脱線しそうですから、本題に入っても構いませんか?」

「えー?」

私は体だけ言いつつも、

「でもまあ仕方ないか。で、依頼内容を確認したいんだけど。話してくれる?」

と、言われた通り本題に踏み込む。確かに、先に依頼を請ける方向で話を固めて任務の中で口説いたほうが良さそうではあるしね。

「はい」

安達さんはうなずき、

「その。一見ハングドに依頼するほどでもないように聞こえるかもしれませんが、私の幼馴染を悪い友達から取り返して欲しいんです」

「幼馴染を?」

それは確かに、こちらで請け負う内容にはみえないけど。

「はい。私、昔から気が弱くて、おどおどしていて、だからよく他の子に虐められてて。そんなときにいつも助けてくれたのが、家が近所で同じ歳の大依おおい愛ちゃんでした」

「その子が更生させて欲しいっていう」

私の確認に、安達さんはうなずき、

「事の発端は去年、私が中学3年のときでした」

と、話を続ける。

「当時私は、炎崎えんざき 鷲矢しゅうやという男子生徒にやつぱり虐められてました。その男子生徒はその年に転校してきた同級生なんですけど瞬間に学校の頂点に立ってしまった人です。見た目は明らかに外国の人で、女性に人気があつて、更にいつの間にか当時いた校内の不良も従え、先生もいいなりになっていて。そんな生徒のターゲットにされたのだから、教師も含め味方は殆どいなくて。それでも愛ちゃんだけは私を庇ってくれました」

「大依さんだけが味方だったのね」

「先生もひとり、島津先生だけは味方だったのですけど、他の教え子の人質に取られてからはそつちを護るので精一杯で」

「っ」

島津先生つてことは、彼女は陽光学園中等部出身だったのね。しかし、あの先生でさえ助けきれないなんて。一步学校の外に出れば駄目人間だけど、教師としては平気で自分の命より生徒を大事にしそうな人なの。

「けど、程なくして炎崎さんは私を虐めることはなくなりました。だけど、その頃から愛ちゃんは炎崎さんと交際するようになって」

「あれね。自分と付き合うのを条件にあなたに干渉しないって交渉持ちかけられたとか」

「その通りです」

安達さんは辛そうに肯定した。

「けど、当時はそんな事も把握できずにいました。炎崎さんと交際するようになってから愛ちゃんはどんどん素行が悪くなって、3学期の

頃には殆ど学校にも行かなくなって、高校も分かれちゃって。そんな矢先、つい先日愛ちやんと再会したんです」

ここで、私はより警戒を強める。間違いなく、この先にハングドへの依頼に至る確信があるはずなので。

「愛ちやんは、底辺の高校に入学するもすぐ退学したそうで、いまは中卒で就職した炎崎さんの誘いで一緒に働いてるのだそうです。ただ」
「ただ？」

訊ねると、安達さんは重々しい口で、

「就職先はフィール・ハンターズだったんです」

「えっ!？」

その言葉に、私だけでなく一緒に聞いていたアンちゃんも驚く。

「それだけではありません。愛ちやんは遊ぶ金が足りないって、私から財布を強奪したんです。いつも私を護ってくれた愛ちやんが、炎崎さんとつるむようになったばかりに!」

泣き崩れる安達さん。

もし、もしも。

仮に梓が悪い人とつるむようになって、フィール・ハンターズになって、悪事を働いていたとしたら、きっと私はドン底の絶望を味わってたのだろう。

なんて考えてしまうと、現在の彼女の境遇はとても他人事には思えなかった。

「分かったわ」

私はうなずいた。

「初めて挑戦するタイプの依頼だから少し手間取るかもしれないけど、出来る限りはやってみるわ」

「本当ですか？」

顔をあげ、すがりつくような目で見ると安達さん。

「でも、経験上言わせて頂戴」

私はいった。

「出来る限り安達さんの願いをくみ取って、やってみるわ。でも依頼内容以上のことは保証できないから」

「それって、どういう」

安達さんは私が言いたい意図が分かってない様子。私は立ち上がり、いった。

「大依さんを炎崎やその仲間から引き剥がした所で、必ずしもあなたの望む結果にはならない可能性があるって話よ」

応接間を出て、玄関に移動中。

「——ってわけで、会話内容はたったいま送信したから」

『ありがとうございます。通信機から内容は聞いてましたけど、改めて確認させて頂きます』

私は早速、デュエルディスクのタブレットから木更ちゃんと通信をとっていた。すでに先ほどの会話を録音したデータは木更ちゃんのみならず事務所のパソコンにも送信済。

「で、私はいまから島津先生に接触しようと思うけど、木更ちゃんは？」

『私も、今回の件で接触したい方がいるので、そちらに』

「まさか、かすが店長とか言わないわよね？」

幾らファイル・ハンターズ相手とはいえ、木更ちゃんなら下手すれぱと思ひ訊ねてみるも、

『いえ、クラスメイトです。加えて恐らくファイル・ハンターズには所属しておりません』

と、木更ちゃん。

「一応聞いわ。誰？」

訊ねると、

『先輩にも以前お話したと思いますけど、リアルPKKって覚えてますか？』

「えっと」

確か、増田を失って崩れてたときに聞いた覚えがあつたけど。

MISSION13 参照

『虐めっ子やDQNみたいなリアルPKを社会的にPKする専門家です。聞いている限り、大依さんという方の素行はいまでもDQNと想つたので、かのじよ……いえ、あの人なら何か知ってるかもしれない』

「え、女性なの？ そのリアルPKK」

私が食いつくくと、

『いえ、その、男性です』

「ちっ」

なんだ彼女って言いかけてたものだから期待したのに。

『ふふ、舌打ちだなんて通信越しでも素行が悪いですよ先輩』

「溜まってるのよ、依頼人を即墮ち2コマできなかったから。だから木更ちゃん、後で生乳を」

『それでは失礼します』

セクハラ発言に及びかけた所で通信が切れてしまった。どうすればいいの、この気持ち。

なんてムラムラしながら歩いてると、

「もう一度行こうか、はい。ワン！ トウ！ スリー！」

近くの部屋から、アインスの掛け声が聞こえた。

何をしているのかと思い、部屋を覗いてみると、そこではあのフィアがバレエの練習をしており、アインスがコーチ役を買って出ている姿だった。

「あ、鳥乃さん」

しかも隙間程度に扉を開いただけなのに、さすがフィアはすぐさま私を見つけてしまう。

気づいたアインスが扉を開け、

「やあ、鳥乃。どうしたんだい？」

「あなたたちのほうが、どうしたって話なんだけど」

私が訊ねると、

「見ての通り、フィアにバレエを教えてるんだ」

「いや、そこは分かるんだけど」

何があってフィアに？ するとアインスは、

「先日シユウがフィアに言ったらしいんだ。今度入る学校では
MISSION23 Part2参照
思いつきふざけろってね」

「ああ、そういえば言ってた気がするわ」

「そしたら、帰りにフィアに頼まれてね。その学校で演じるキャラにダンスの動きを取り入れたいって。だからこうして、色んなダンス

の基礎を教えていまは丁度バレエに差し掛かってた所だ」

「……」

私は言えなかった。それってつまり、フィーアの目にはアインスの立ち振る舞いが「ふざけてる」ように映ってたって事じゃないかって。

「そ、そう」

数秒の間の後に、なんとか言えた反応も、そんな苦し紛れな相槌。

これ以上ふたりの時間に付き合うと何だかキツそうなので、私はボロが出る前に部屋を後にしようとするも、

「ところで鳥乃、いま依頼人と面会した帰りかい？」

「ん、まあね」

「事情は私も少しは聞いている。これからどう動くつもりだい？」

「あー」

まあ、アインスならいいか。

「依頼人が中等部の卒業生でね、ちよつと当時のことを知ってそうなる島津先生とコンタクトを取ろうと思ってるわ」

「そうか」

アインスが途端心配そうに微笑むと、天井に向かって、

「ヒロちゃん、近くにいますかい？」

「はい。いますよー」

天井ではなく、光学迷彩を解くような形でアインスの隣に出現するヒロちゃん。

「上ではなく横でしたね、アインス」

フィーア、そこは素直に言っちゃ駄目！ これ当事者には絶対恥ずかしい失敗だから。

「あ、ああ。やあヒロちゃん」

事実、アインスは凄く反応に困る苦笑いをみせてから、

「私の部屋の冷蔵庫にウコンの力4本と、それと机の上のウイスキーを1本、鳥乃の帰りに取ってきてくれないかい？」

「承知しましたー」

ドロロンと消えるヒロちゃん。

「先生と会うなら、二日酔い対策はしておいたほうがいいだろう」

と、アインスは微笑みをつくっていった。

「私も同行しよう。鳥乃は先に先生と連絡をとってくれないかい？」

——現在時刻18:30。

「こんばんは。さあ入って入って」

インターホンを鳴らして数秒、玄関から顔をだしたのは鳥津しまづ 鳳火ほうか先生。すでに風呂も済ませた後だろうか、今日は仕事帰りのスーツ姿ではなく、緩めのシャツにショートパンツとラフ過ぎてそのまま寝着になりそうな格好だった。可愛い服を選んではいらるだろうけど、そういうズボラさも彼氏ができない要因ではないだろうか。加えて締まりのない格好が、彼女の幼児体型を更に助長させている。

「お邪魔します」

満面の笑みで自宅へと迎え入れられ、私とアインスは招かれるままリビングに進む。テーブルにはすでに酒の肴になりそうな手料理が並び、すでに飲む気満々なのが伺えた。もしかして先生、このまま一夜飲み明かす気じゃないだろうか。

アインスが一歩前に出ていった。

「先日は殆どお酒の相手ができなくすみませんでした。こちらはお詫びも兼ねて持参してきました」

そういつて差し出したのは、出発前にヒロちゃんに取ってこさせたウイスキーのボトル1本。

先生は受け取ると嬉しそうに、

「ありがとう、じゃあ早速開けよつか。ふたりはロックとハイボールどっちがいい？」

相変わらず教え子に未成年飲酒を勧めるとんでもない教師だ。まあ、今日は事前にウコンの力も飲んだし覚悟してきた話だけど。

「でしたら、ロックを頂きます」

と、アインス。ウイスキーの度数を考えるとロックなんて未成年が飲むものじゃないのに、それがアインスと思うと不自然どころか似合
いすぎる。

「鳥乃はハイボールかい？」

確認をとるアインスに、

「の、薄めで」

と、オーダー。

「オツケー、すぐに準備するから」

先生はグラスをふたつ用意すると、冷凍庫からロックアイスと炭酸水を。

「つて、なんで炭酸水を冷凍庫に入れてるの？」

目をまん丸にしているのと、

「凍りはじめる寸前を使うのが美味しいのよ」

なんて先生はそれぞれアルコールドリンクを作り「はい」とテーブルに置いた。なお先生は私のより濃いめのハイボール。

「じゃあ座って座って。お仕事でお話もあるんでしょ？」

先生はいった。

それから、三人で夕食を開始しながら、私は今回先生に連絡を取った経緯を説明。先生は悲痛な顔をみせ、

「そつか。愛ちゃんそこまで堕ちちゃってたのね」

と、いった。

「現在、私たちは安達さんの証言でしか当時の状況を知りません。どうか力添えをお願いできますか」

アインスがいった。私は続けて、

「安達さんは、大依さんを除けば先生だけが味方だと言ってたわ。でも、炎崎という男に部員が人質にとられて何もできなくなったって」「うん」

先生はうなずいた。

「炎崎くんもね、最初は悪い生徒じゃなかったのよ。そりやあ口も素行も良くはなかったし、確かに由美子ちゃんを虐めてたから私も何度も叱ったり論したりもしたけど、基本的には学校の秩序のために動いてたわ」

「彼が不良を従えたり、安達さんを虐めた理由については」

「由美子ちゃんに關しては、身も蓋もないけどおどおどした態度が生理的に受け付けられなかったみたい。でも、悪事は本当それだけだった

のよ。不良に関しては自分が兄貴分になることで抑制してたように見えたわ。後は炎崎くん、校内で何かを調査してるみたいだったわね。それも私みたいな平教師は何も知らないけど、校長や教頭は何か知ってる容認してるみたいだった」

「何かって?」

訊ねるも、先生は首を横に振って、

「ごめんね。ただ、何か危険なことに首を突っ込んでるのは分かったって程度。そして、多分だけど、実際何かに首を突っ込んで炎崎くんと愛ちゃんが凶変したのよ」

「凶変?」

「由美子ちゃんを巡って炎崎くんと愛ちゃんが衝突した数日後辺りね。突如として愛ちゃんが怒りっぽくなって、炎崎くんが横暴になつたわ。校内で悪さする生徒を止めてた彼が、不良を引き連れ自分から率先して悪さをするようになって、止めようとした教師の弱みを突いて脅しだして。私も注意した翌日、部員の子がひとり不良に囲まれて服を脱がされそうになつたって」

「それが、安達さんのいう人質」

アインスの言葉に、先生はうなづく。

「その時は未遂だったけど、もう一度あの子に逆らったら、今度は本当に何かされてたと思う。でも私が受けた脅しなんて可愛いほうよ、実際に二度逆らった先生の中には息子さんを轢き逃げ事故で失った人もいるんだもの」

「警察に通報は?」

「勿論したわよお。でも、犯人は逮捕されず炎崎くんとの間接も確認されなくて。だけど、最後には別の生徒が証拠を見つけてきて、卒業を控えた2月に逮捕、推薦で決まった高校入学も取り消されて、卒業式も参加できなかつた」

そう話す先生からは強い後悔が漏れ出ていた。あんな生徒でも、助けられなかった、相談に乗れなかつた、卒業式に出してあげられなかつたとか、色々思うものがあるのだろう。

「その証拠を見つけた生徒というのは」

アインスはいうも、先生は少し困った顔で、

「教えてあげたいのは山々だけど、さすがに個人情報だから」

「本名じゃなくても構いません。何かあだ名だったり、エピソードだったり、それなら私たちで調査しますし、先生に責任は取らせません」

「その子にも迷惑かけないでね」

「勿論です」

すると、先生はなんとかうなずき、

「うーんじゃあ。本名は言えないけど、確か前にその子、リアルPK Kって呼ばれてたような」

「リアルPK Kね」

私は、わざと知らないフリしてメモしながら心の中でガツツポーズ。確か木更ちゃんクラスメイトと行ってたし、今日まさに本人に会いに行ったのでこの件の情報は持ち帰ってくれると思っただろう。

「愛ちゃんからは、今まで許せたものが許せなくなって、色んなものが憎たらしく見えて気が変になりそうって助けを求められたわ。でも、私も気分転換を勧めたりとかリラックスできるハーブティをこっそり買い与えたり、休日に何回か一緒にお出かけしたけど、効果はなかった。いつか安達さんに手をあげてしまうんじゃないかって怯えて、そのうち不登校になっちゃって、私も手を差し伸べてあげられなくなっちゃって、そのまま今日まできちゃった」

「おかしくなる前の大依さんってどんな子だったの？」

私が聞いてみると、

「ちよつと口が悪くてひねくれた所はあるけど、面倒見がよくて、正義感が強くて。強すぎてひとりで突っ走っちゃう危うさはあったけど、すごく頼りになる子。委員長タイプっていうの？」

「そんな子がフィール・ハンターズね」

「おかしくなる前の炎崎くんもそうだけど、正直信じられないよね」

相当シヨックなのだろう。いまにも先生は涙を流しそうな顔でハイボールを飲み干す。

「そうだ先生、ふたりの写真って持ってなかったりする？」

私はいった。先生はまだ泣きそうな顔のまま、

「写真？」

「実は私たち、まだふたりの顔を知らなくって。せめて顔が分かれば、大依さんがファイル・ハンターズに入った経緯とかも調べやすくなるんだけど」

「分かったわ。ちょっと待って」

先生は席を立ち、一旦奥へと引っ込んでいった。そして数分後、

「あったわ」

と、見せてくれた写真を確認し、その中の炎崎を前に、私とアインスは、

『あ』

と、ステレオで呟くのがあった。

——現在時刻20:00。

「お待たせしました」

木更ちゃんが、しじみの味噌汁をちやぶ台に運んでいった。

現在、私は木更ちゃんが暮らしているアパートの一室にいる。お互い目当ての相手とコンタクトを取った帰り、情報共有の為に寄らせて貰ったのだ。

ちなみにアインスはまだ先生宅にいる。まだ仕事の残ってる私の代わりに、今度は彼女が先生の酒の相手という生贄を自ら請け負ってくれたのだった。

「ありがとう木更ちゃん」

私はお椀を受け取り、味噌汁を一口。

「美味しい、体が休まるわ」

1時間で解放されたとはいえ、すでに結構な量の酒を飲まされてしまった。ウコンの力は食前後に1本ずつ飲んだものの、明日の朝にはまた二日酔いになる気がする。そんな私の恐怖を、木更ちゃんの味噌汁は胃を温めつつ、やさしく洗い流してくれた。

恐らく木更ちゃんの真心が出ているのだろうと思ったら、

「実はこのしじみ、高村司令からの差し入れなんです。しじみはアルコールの分解にいいからと」

「なるほどね」

まさか司令のやさしさも入ってたなんて。

私は流すように言っただけど、恐らく酒で感傷的になってるのだろう、正直すぐく胸にしみた。

「ところで、早速本題ですけど、先輩のほうでは首尾はどうでしたか？」

「核心に迫る内容ではないけど、強い情報はひとつあったって話」

私は味噌汁を飲みながら、

「まず、炎崎 えんざき 鷺矢 しゅげや だけど、その名前が偽造か本物かはともかく在学中の戸籍は偽物だつて分かったわ。加えて大依さんと炎崎の映ってる写真を借りただけど」

と、私は鞆から写真を一枚取り出し木更ちゃんに見せる。修学旅行のものだろうか、一組の男女がツーショットで映ってるのが見えた。

女性のほうは長い黒髪に、中肉中背にして豊満なバストと安産型、中学生にしてすでに母体になる準備が整ってるように見えてしまう。

そして、男性のほうは、

「イーグル・フレイムショット。そっくりさんじゃなければ、間違いなく奴よ」

「例のフィーアさんと同じ技を使った方ですか」

木更ちゃんの返事に私はうなずく。

炎崎とイーグルどちらの名前が本名なのか、もしくは他に本名があるのかは分からない。ただ、炎崎がイーグルと知ったことで、私たちは三人掛かりで経歴を調べ上げ、彼が転入してきた際の個人情報が発造されたものであることが分かったのだ。

「ふたりの勤務先はクレイン公園周辺に本社を構える緒方ミリタリーと分かったわ。迷彩服やモデルガンなど名小屋近辺の軍オタ御用達の専門店や射撃場、射的の出店にサバゲーのサークルとかを運営してる会社よ」

ついでに、偶然だけど先日のお祭りで景品に細工してた悪徳射的屋

も緒方ミリタリーの出店だったと判明。

「緒方つてまさか」

さすが気づいた様子の木更ちゃん。「そう」と私はうなずき、

「緒方ミリタリーは、あのフィール・ハンターズの緒方おがた銃ライフルがトップを務めてた支部の表の顔よ」

「務めて……た？」

「以前、木更ちゃんが持ってきてくれた情報じゃない。ゲイ牧師がパーティした結果、事実上壊滅してかすが店長の支部に吸収されたつて。だから、いま緒方ミリタリーはK a s u g a y aの傘下つて話」

「そういう事ですか。……あ」

ここで木更ちゃん、ひとつ気づかなかつたほうがいい事実気づいたようで、

「つてことは、炎崎さんもしかして。……お尻」

「ゲイ牧師に連絡取つた所、ちゃんとパーティの犠牲者の中にいたつて」

つまり、すでに一度掘られてる。

木更ちゃんは無言で合掌した。いや、小さく「南無阿弥陀仏」とか言つてる。ご愁傷様ですらない所が相当だ。

「あとは」

私は、残りの情報つまり写真を渡されるまでの内容を伝え、

「つて位ね。それ以外だと先生の目から見ても安達さんと大依さんは仲が良かったことと、安達さんの証言に嘘はないと裏が取れた程度」

炎崎が恐怖で学校を支配しだした時期に先生の証言と安達さんの証言で違いはあつたけど、お互い認識が違つただけで、どちらも嘘はいつてないだろう。

「そうですか」

と、メモに走り書きで記録する木更ちゃん。が、直後、

「まさか、ここでリアルPKKが出てくるなんて」

と、呟いたので、

「え？ そこについては知つてたんじやないの？ 今日まさに本人と会つたんだから、むしろ私より詳しく」

「そこなのですけど」

木更ちゃんはすまなそうにいった。

「ごめんなさい。この件は先輩も交えて交渉したいそうで、明日学校でと今日は断られてしまいました」

「なるほどね」

私もいい噂はあまり聞かない人間だから、無条件で情報提供せず見極めようという魂胆なのだろう。

「ただ、リアルPKKも現在炎崎さんと大依さんには易々手出しはできないうです。理由は諸事情の通り聞けてなかったのですけど、恐らくふたりがフィール・ハンターズ所属ということをすでに気づいてるものと」

「分かったわ」

私は味噌汁を飲み干し、

「とりあえず、明日学校って話ね。時間や場所の交渉は木更ちゃんお願いできる？」

「分かりました」

「じゃあ、今日はそろそろ帰ることにするわ。御馳走様」

私は立ち上がり、ちゃぶ台の下でバッチリ盗撮したデュエルディスクのタブレットを片手に部屋を後にしようとした所、

「あ、先輩。さつきからずっと私の下着を盗撮されてたデータはハッキングして削除しましたので」

と、木更ちゃんに言われてしまった。畜生！

翌日、登校中。

通学に使ってるバスを降り、学校に向かって徒歩数分ほどの道を歩いてると、後ろから自転車に跳ねられそうになり、

「わっ」

と、咄嗟に避けた。

自転車側は、私に気づく様子なく真っすぐ通り過ぎて行った。制服から恐らく陽光とは別の男子中学生だろうか。二人組だったが、明らかにどちらかスマホ片手にイヤホンをつけた余所見運転だった。

(あれって実は滅茶苦茶危険なのよね)

なんて思ったその直後、今度はその二人組、前方を歩く中年くらいのサラリーマンに衝突したのだ。

「うわっ」

と、中年は転倒しぶつけられた腰を痛そうにさするも、中坊は安否の確認をするどころか、

「おい、気を付けろオッサン」「危ねえだろうが」

なんて吐き捨てて走り去る。ちなみに衝突した場所は歩道、自転車は軽車両のため本来は車道を走らなければならない。さらにながらスマホinイヤホン。明らかに非があるのは中坊側なのだが、当の中坊は慌てた様子もなく、スマホ弄りをやめる様子も見当たらなかった。轢き逃げという重罪を余罪増々で犯したという自覚が全くないのだ。

(しまった)

私は思った。事故の瞬間と自転車のナンバーを撮影しておけばよかつたって。自動車の人身事故と違って、自転車の人身事故は今回のようにすぐ逃げられてしまうと犯人の特定が難しくなってしまうのだ。

そこへ、

「大丈夫ですか?」

と、中年に駆け寄ったのはひとりの陽光学園高等部の女子生徒だった。背丈は私の見立てで150を少し過ぎた程度。とはいえ小柄というよりは細身で華奢な体躯が目立ち、長い髪に着崩しの全くない身なりから優等生なのが察せれる。

「ああ、すまないね。あいたたた」

女子生徒の肩を借り中年は立ち上がろうとするも、腰をやられてしまったご様子。

「君、すまないが道路の隅に連れて行ってくれないかい。このままだと通行人の邪魔になる」

「分かりましたですよ」

女子生徒は中年を適当に安全な場所に避難させると、懐からタブ

レットを出し、

「とはいえ、骨折でもされていたら大変です。病院には僕のほうからお呼びしても大丈夫ですか？」

……僕？ その優等生然とした様子で僕っ娘とはポイント高い。

「い、いえ。そこまでされなくても、会社に向かわなくてはなりませんし、十分です」

「うーん、わかりましたですよ。では、僕はここで失礼しますですね」
女子生徒は中年を置いて歩き始める。

この時勢、同年代にも善良で親切な人っているのね、なんて感心しながら私は口説き目的で近づこうとした所、

「もしもし、警察の方ですか？」

中年に声が届かなくなった辺りで、その女子生徒はタブレットでこう喋ってるのが聞こえた。

「先ほど、女子生徒を自転車で撥ねかけ、直後に中年男性と接触事故を起こした、ながらスマホの中学生を2名発見しました。事故当時の映像は先ほど電子メールに添付致しましたので確認をお願いしますですよ」

って。

お昼休み。私は木更ちゃんからの指示で校舎裏にきていた。もちろんリアルPKKと接触する為である。

で、なぜ今日に限って校舎裏なのかというと、屋上が一般開放の日だった為にリアルPKKが「ここ」と指示したそうだ。

実際、昼時なのに関わらずそこには誰ひとりとして人影が見当たらない。校舎の影で薄暗くじめじめした空間だからだろうか。

「先輩、お待たせしました」

適当な壁に背を預け購買のおにぎりをお茶で流し込んだ所、木更ちゃんが近付いてきたのが分かった。

「お疲れ、木更ちゃ、え……？」

私は振り返り声をかけ、——かけた直後、木更ちゃんの隣を歩く生徒に絶句した。

長い髪に華奢な体躯、着崩しのない身なり。そこにいたのは、先ほ

どの女子生徒だったのだから。

「どうしましたか、先輩？」

「え、いや」

きよとんと訊ねる木更ちゃんに私は動揺したまま相槌。

「鳥乃先輩ですね？」

やんわりと微笑み、女子生徒はいった。とても品行良く清涼感に満ちた、しかし何故だろう彼女の笑顔からはどこか私の驚きや心情を見透かしてるように感じる。

「初めまして、1年の菊菜といます。巷ではリアルPKKと呼ばれていきますよ」

「は、初めまして」

私は返事しながら、木更ちゃんに小さく手招きし、近づいてきた所を耳元で、

「ちよつと、どういう話よ木更ちゃん。リアルPKKって男じゃなかったの？ どうみてもただの美少女じゃない」

「え、えつと」

反応に困った様子の木更ちゃん。その後ろでは菊菜ちゃんがにこにこ微笑む。……いや、よく見るとこれは「にこにこ」ではなく「にやにや」？

「ま、まさか!？」

「くす、どうしましたか？」

菊菜ちゃんは私の顔を覗き込み、その仕草はまた萌えをくすぐる可愛らしさなのだけど、

「うーん。僕がリアルPKKだと信用されてないのでしょいか？ でしたら、こちらで信用して頂けますか？」

と、懐から何かを取り出し、はいと私に差し出す。

「え？」

私だけでなく木更ちゃんも同様に驚く。それはNLT手帳だったからだ。

かつ、中身を開けてみると、そこには菊菜ちゃんのフルネーム、コードネーム「リアルPKK」の文字、さらに「性別：男」と記載されて

たわけで。

「男!? 菊菜ちゃん女の子じゃなくて、これで男?」

「そうですけど?」

「しかもNLTのメンバー?」

「そうですね」

.....。

私は、優に十数秒は思考停止していた。

待って、待ってって話なんだけど。ヒロちゃんでさえ違和感を覚え見抜いた私のレズセンサーでさえ、彼女の性別を捉えきれなかったんだけど。むしろ登校中思いつき反応してたわけ。

しかもリアルPKKの評判って言っちゃえば表のルールを悪用しDQNとかを社会的に潰して楽しむやべえやつじゃない。そんな人がNLTってやばくない?

「うーん、どうしましたか?」

うわあ、菊菜ちゃんすっごい楽しそうな顔してらっしゃる。この人絶対愉悦部だ。

「そういえば今朝も、僕を見ましたですよね?」

げっ、しかも気づいてる今朝の私のこと。

「あれ、お知り合いだったのですか?」

訊ねる木更ちゃん。

「いやお互いちよつとした現場に居合わせてただけで、目を合わせたのも今が初めて。よね?」

と、訊ねると菊菜ちゃんは、

「そうですね。今朝話したあの事件ですよ。その轢かれそうになった女子生徒が鳥乃先輩でした」

「あ、そうだったのですか」

納得する木更ちゃん。そういえば。

「思い出したけど、菊菜ちゃんあの時警察に通報してたけど、あれから何か進展は?」

私はつい興味本位で訊ねる。すると菊菜ちゃんくすりと一見お茶目な笑みをみせてから、

「そうですね。被害者のおじ様大事に至らなくて良かったですよ、自分の部下の息子だったそうですから」

「どうやら、P K Kは成功したらしい。」

「もつとも学校と会社には連絡が届きましたから、いまごろ被害者家族はお顔真つ青だと思えますよ。仮に被害者のおじ様は許しても、さすがにながら運転、スマホ、イヤホン、人身事故とくれば警察も処罰に動——」

「言いかけた所、」

「先輩、早く本題に入りませんか？ 菊菜さんのP K Kは聞いててゾツとしますので」

木更ちゃんが割と必死に懇願する。最近この子も相当遅しくなつたというのに、そんな彼女でさえ避けたい世界らしい。

「そうね」

まあ私も、そろそろスッキリ超えてゾツとしはじめた所なので話題は変えるに限る。

「うーん、残念です。もう少しおふたりのげんなりした顔を堪能したかったんですけど」

しかも当の菊菜ちゃんは、そんな恐ろしいことを、わざと女の子の子した可愛い立ち振る舞いを見せながら仰るわけで。

やばい、何だかんだ美少女にしか見えないので、またレズセンサーが誤作動起こしそうになってきた。

「という話で、本題に入るけど。木更ちゃんとふたりの時じゃなく、わざわざ私と一緒に指定した理由は？」

「だから反応していると二重の意味でこつち精神が保たなそうなので私は訊ねる。すると菊菜ちゃんは指を2本たて、」

「ひとつは、N L Tの情報を提供するために許可を取る時間が必要だったからです」

と、順番に指を折っていき、

「もうひとつは、ここからそろそろ僕も先輩とコネを持ちたかったからですね」

「成る程ね」

私は納得しつつ、

「てつきり、この手の定番として情報が欲しければデュエルで信用させてみるとか言われると思ったわ」

「その交渉はお互いリスクが高いですからね」

「リスクですか？」

訊ねる木更ちゃんに菊菜ちゃんは、

「お互いフィールを消耗した直後を狙われたくはないでしょう。それよりは金銭で解決したほうが得だと思いますか？」

なんていって、0が沢山書かれた紙を1枚私に渡してくる。情報料として請求する気らしい。

けど、まあ私は提示された金額を前に、

「良心的ね。プロの情報屋から買うと倍は掛かるわ」

「アマですから、この料金ですよ」

「了解。いまは手持ちがないから、後で口座に振り込むわ」

と、私は用意していた専用の書類にその場でサインし、菊菜ちゃんにはいと渡す。

「確かに」

菊菜ちゃんは受け取ると、

「実は炎崎さん。いえ、イーグルは中学時代NLTだったんです」

「え？」

フィール・ハンターズの間人が元NLTだって？

「当時、校内でドラッグが密かに流通してる情報が入ってまして、その潜入捜査のために転校してきたんです。勿論、校長など職員上層部からも許可を取った上で。彼はまず、真っ先に狙われるだろう不良たちを手元に置いて護り、大依さんは外部協力者として雇ったそうです。学校に悪者が潜んでるとなれば安達さんの危機だといって、フィールも持たず単独で関わろうとしたので傍において護ることにしたと聞いてます」

「けど、私が得た情報だと、ある日を境に色々悪さしだしたって聞いたけど」

私は話すと菊菜ちゃんは、

「ミイラ取りがミイラになってしまったのですよ」と、いった。

「いま思えば、恐らく彼は、捜査の末にフィール・ハンターズと接触したのだと思います。そして、結果寝返ってしまったのでしよう。いつの間にか彼は捜査を理由に好き勝手し始め、僕が同じNLTとして裁いたときには、すでに大依さんも不良も悪に染まった彼の味方になってました」

そこまで言うってから菊菜ちゃんは罰が悪そうに、

「お恥ずかしい話ですけど、NLTも僕も、先日のイリスさんの件で初めて炎崎さんがイーグルと名乗ってフィール・ハンターズ側についてたのを知った次第ですよ」

「ってことは、そのドラッグを流通させたのも」

「フィール・ハンターズですね」

「ドラッグの種類は？ 大麻？ 覚せい剤？」

訊ねた所、菊菜ちゃんは首を横に振って、

「組織が開発したオリジナルです。それもフェンサイクリジンと一部共通した特徴を持つ幻覚剤です」

「げっ」

私は思わず声に出した。

シティーハンターという漫画には、作中エンジェル・ダストというドラッグが登場するのだけど、漫画の中では膨張した表現こそされてるものの、実はあのドラッグは実在する。

エンジェル・ダストとは、まさにフェンサイクリジンの別名なのだ。

菊菜ちゃんはいった。

「そのドラッグは、服用するとすぐ自分が誰で何をしてるのかなどの見当識に異常をきたし、せん妄を伴ったトランス状態に陥るようです。加えて脳のリミッターが外れ人間離れた怪力を得て、鎮痛作用により致命傷でも笑って活動し続ける化け物が出来上がります。それも、客観的にはシティーハンター版のエンジェル・ダストに酷似したレベルで」

「それって」

心当たりがあり、訊ねようとするど、

「はい。件の作戦でガラムさんと一緒にいたフィール・ハンターズ、黒山羊プライド派連合にも同じものが使われてました」
やっぱり。

「このドラッグは習慣性、中毒性が非常に高い上、一度でも使えば後遺症で人格や記憶に異常をきたします。しかも服用を続けると自我そのものが崩壊していき、最悪廃人化までありえます。そこからついた名前は、ロスト」

「ロスト、ですか」

オウム返しで呟く木更ちゃん。一方私は、

「聞いたことがあるわ。フィール・ハンターズはそのドラッグを使つて組織に忠実なデュエル兵士を作り上げる計画があつたとか」

私がいようと菊菜ちゃんは、

「それが、いよいよ完成に近づいたのかもしれないですよ」

と、いったのだ。

「どういうこと？」

訊ねると、

「闇のフィールですよ」

菊菜ちゃんはいった。

「先輩も一度交戦してるから知ってるとは思いますが、今回の構成員にはロストの他に闇のフィールが併用されてました。元々併用の話はソンプラ社のドラッグと闇のフィールの組み合わせで完成秒読みだったそうですから。それが、ロストで代用可能になった事で彼らはソンプラ社のドラッグを求める必要がなくなり、実戦投入のテストを兼ねて先日の襲撃があつたのではないかと、僕は読んでます」

「あの、ひとつ最悪な推測が浮かんだのですけど」

ここで木更ちゃんが間に入っていった。

「先日私たちが交戦したプライド派とフィール・ハンターズの連合部隊ですけど、もしかして本来どちらの所属でもない一般の方が含まれてたりしませんか？」

「え？」

「フィール・ハンターズが闇のフィールを更に支配下に置く技術を持つてるのはご存知のはず。なら、闇のフィールを介し無関係者をフィール・ハンターズや黒山羊プライド派に仕立て上げてしまうことも可能なのでは。特にロストは見当識を奪いトランス状態にするのですよね？」 深層心理、弄り放題なのは」

ゾツとする推測だった。しかも菊菜ちゃんほうなずき、「残念ながら全員とはいかなくても大正解ですよ。正規の構成員を薬物で潰すわけにはいかないでしょうからね」

正直、私でさえ下種さに腸煮えくり返る話だった。そんな私の心情を見抜いたのだろうか、菊菜ちゃんは「くすっ」と微笑み、

「実はそのロストなのですけど、例の襲撃の頃から闇ルートで外部に流通している情報がNLTに届いています。特にプライド派以外の黒山羊の実をメインターゲットに売買されてるそう、残りの幹部2名から状況の解決を依頼されました」

菊菜ちゃんはこんな魅力的な提案をするのだった。

「僕は近いうちに、炎崎さんの職場をNLTの権限で捜査しようと思うのですけど、よろしければ豚箱を胃袋がわりに犯罪者の踊り食いと一緒にしてみませんか？」

「ええっ!?! そ、それで断ってしまったのですか?」

と、驚く安達さん。私は当然とばかりに、

「だって大依さん逮捕したら依頼に反しちゃうじゃない」

放課後の帰り道。

私は安達さん、木更ちゃんの三人で制服姿のまま街中を歩いていた。

「それは。ごめんなさい」

自分のせいでと謝る安達さんに、私は「気にしないで」とソフトに肩を抱く。

「えっと」

身の危険を覚えやんわり拒絶されたのが分かったが、強く言わないので気にしない。

むしろ安達さんの胸元に腕を伸ばそうとした所、木更ちゃんが安達さんから私を引き剥がしながら、

「でも、さすがに即答するとは思いませんでした。先輩もあの件には怒ってたように見えたのに」

と、訊ねるので、

「私たちはあくまで依頼人の味方であって正義の味方じゃないのよ。そこはレズの次にはブレないようにしないと」

「そういう所はさすが先輩ですね」

と、木更ちゃんは納得する一方、安達さんは、

「レズの次なのですか？」

と、ぼそり。しかし私が返事するより先に木更ちゃんが、

「レズじゃなくなったら先輩じゃありませんから」

「あ、聞こえてたのですか」

萎縮する安達さん。木更ちゃんはふふっと笑って、

「事実、一度だけ女体に反応しなくなった先輩を見たことがありますよ」
「あつたっけ、そんな時」

私が訊ねると木更ちゃんは、

「増田さんが亡くなったときです」

「……あー」

納得。

木更ちゃんは笑顔のまま、

「一度あれを見てしまうと、もう先輩からレズを取ろうなんて発想できなくなりますよ。本当困った生き物ですよね」

なんか地味に酷い言われ方した気がする。

「そんな事になるなら、依頼しないでおくべきでした」

突然、安達さんが後悔を口にしたので、

「え、どうして？」

「だって、ドラッグの件で捜査だなんて、私なんかの依頼よりずっと優先しておくべき事ですから。私のせいでグラトニー様に迷惑をかけてしまうなんて」

「そういえば、あなた黒山羊だっけ」

で、最近のロス流出の主な被害者は黒山羊の実。

安達さんは嘆きたいのを抑え、いった。

「ごめんなさい、NLTからの誘いがまだ有効でしたら、いまずぐ私の依頼を断ってそちらを優先してください。報酬は依頼達成分しつかり出しますから」

「ふふっ」

そこへ木更ちゃんは微笑み、

「ところが、全く問題なかったりするんです。私たちとしても、安達さんとしても、そしてNLTとしても」

「え？」

あと一步で泣き出してただろう顔で、安達さんはきよとんと木更ちゃんと私を交互に。

私はいった。

「こういうことよ。あ、きたきた」

ちょうど、見知った車が前方で停まったのを見て、私はふたりを車の下へと誘導。

ドアが開く。

すると中からは3人の女性(?)。運転席から島津先生、助手席からアインス、後部席から菊菜ちゃんがそれぞれ出てきたのだ。

「あ……」

安達さんが目を見開く。

恐らく視線の先に映ってたのだろう島津先生は、一回きよろきよろと目で誰か……いや安達さんを探し、

「由美子ちゃん」

と、駆け寄り安達さんを抱き寄せる、はずが体格差の違いで先生が安達さんの胸にしがみつく形になりながら、

「久しぶり。ごめんね、何もしてあげられなくて」

「ううん。お久しぶりです、先生」

お互いの瞼に涙がにじむ。

「悪いわねアインス、色々お使い頼んじゃって」

「別の構わないさ。友の頼みだからね、それに実際に車を運転したのは先生だ」

言いながら前髪をかきあげる仕草をとるアインス。

「あの、一体これは」

涙を流したまま、安達さんが訊ねる。

木更ちゃんが、

「確かにNLTの捜査は断りましたがけど、逆にプライベートなり事前の下見なりって名目で同行しないかと誘ってしまっただんです先輩は」
続けて菊菜ちゃんも、

「プライベートでしたらその日に行動できますからね。喜んで誘いに乗らせて貰いましたですよ」

「じゃ、じゃあ島津先生は」

「私はアインスちゃんからのお誘い」

先生がいったので、間に入ってアインスが、

「初めまして、アインスといいます。どうでしょう、今晚一緒にBARにでも」

って、説明を引き継ぐのかと思いきやこいつ口説き始めた。

「アインス、なに早速私のモノに手を出してるのよ」

懐から拳銃を出し、私はアインスの頭をトントン。

「先輩のモノでもありませんけどね」

更に木更ちゃんが防犯ブザーで私の肩をトントン。

「あの、この方は一体」

そんな木更ちゃんの背中を、安達さんがトントンした。

このままトントンの伝染するのかという所で、菊菜ちゃんが、
「彼女、アインスさんは私たちの学校の最上級生で先輩。そしてハイウインド所属だそうです」

「ハイウインドって、確か先日の襲撃でハングド、NLTと共闘された」

と、安達さんが訊ね返すと、アインスはうなずき、

「ハイウインドは基本鳥乃個人の味方なんだ。トップが鳥乃に借りがあつてね」

「ここで私はふと思い出し、

「あれ？　そもそも昨日神簇邸にいたんだから、ハイウインドのこともよく知ってるんじゃないの？」

「え？」

「だって、アンちゃんハイウインドの第二司令って話だし、今回だって実質ハイウインドが仲介者だけだ」

「え」

安達さんはピタツと停止。数秒後、

「え、ええええええっ!？」

と驚くのだった。

菊菜ちゃんと組むことが決まった直後。私はアインスに連絡を取った。

その時、アインスは二日酔いで保健室にいたが、報告を聞くとすぐ、「ならメンバーにひとり加えてもいいかな？　島津先生なんだけど」

と、アインスはいった。いわく酒の席で私が帰った後、泥酔しながら情報提供だけでなく現場で協力したいと言ったらしい。

結果、私が放課後木更ちゃんと安達さんを連れて街に出る中、アインスは放課後すぐ中等部に赴き事前に連絡を済ませた島津先生と共に車で菊菜ちゃんの家へ。シャワーを済ませ私服に着替えた菊菜ちゃんを車に乗せてこちらにきて貰ったのだ。

なお、言うまでもない話だけど、菊菜ちゃんは私服も当然女物だった。透けが少ない黒タイトの上にプリーツスカートを穿き、露出が少ないのに女子高生の健康的なエロ可愛さを存分に出している。男だけど。

で、なぜ街に出たのかという点。

「ところでアインス、本当にここで間違いないのね」

傍のビルを見上げ私が訊ねると、

「ああ、これで間違ってたら相当丁寧に偽装されてたと褒めていい程だ」

と、アインス。

「あの、どういうことなのですか？」

突然人数が増え、先生の傍できよどりながら安達さんがいうと、

「このビルが炎崎くんと愛ちゃんの職場なのよ」

傍の建物を指し先生がいった。つまり、いま私たちが立ってる場所はクレイン公園周辺、緒方ミリタリー本社前である。

「愛ちゃんがここに？」

目をぱちくりする安達さん。

「で、さ」

私はいった。

「菊菜ちゃんにNLTではなくプライベート扱いで誘ったのにもうひとつ理由があつてね、敵サイドにひとり連絡取った人がいるのよ」

「え？」「え？」「え？」

私の言葉に、木更ちゃん、菊菜ちゃん、アインスがそれぞれ驚く。

「初耳ですよ先輩」

と、木更ちゃん。続けてアインスが、

「フィール・ハンターズにも知り合いがいるのかい、鳥乃」

「知り合いつていうのか、まあ」

何て言うのか、私が言葉を探そうとすると、ビルから一組の男女が出てきて、

「へえ。懐かしいメンバーがいっぱいいるじゃないか」

と、男はいった。

「炎崎くん！ 愛ちゃん！」

男女の顔を見て、先生が叫ぶ。

おがた ライフル
緒方 銃の趣味だろうか、ふたりは迷彩柄のスーツ姿だった。それでも変わらずヴィジュアル系の髪型をした炎崎は私を見ると、

「レズの肌馬つて言ったっけ、君だろ？ 深海を買収したのは」

「深海ちゃんを？」

さらに驚く木更ちゃん。炎崎は続けて、

「ああ、君は確か深海の従姉だっけ。あいつ、突然現れて緒方をボッコボコにしてくれたんだ。で、ちょうど今ごろの時間を指定して『鳥乃との交渉に出なかつたら心臓を潰す』って」

その内容を聞いて、私は意識してニヒルに笑い、

「つてことは、ちゃんと仕事してくれたのね。後でちゃんとK a s u g a y a のトツピング無料券を郵送してあげないと」

という事なのだ。さすがに前歴ある殺人鬼を1名買収しながらN L T と組むのは少々難しい。彼女のことだからフィール・ハンターズ側に死者を出すとも限らなかったしね。

「社長の命、安いわね」

呆れた顔で大依さんがいった。写真では綺麗な黒だったセミロングの髪は、いまや茶色に染髪されており、また、中学時代ですでに完成してみえた性的な体つきも、更に発育してるのが分かる。胸とか炎崎が揉んで大きくしたのだろうか、それは私の仕事って話なのに。けしからん。

「まあいいや」

炎崎は悪い笑みを浮かべいった。

「久しぶりですね島津先生。レ○プ未遂にしてあげたあの子は元気で
すか?」

「津^{つむぎ}紬ちゃんは引越したよ」

ぐさつと言葉の刃に抉られた顔で先生は返す。

「ふうん」

炎崎は口角を上げ、

「結局、また護れなかったんだね。せ、ん、せ、い?」

「っ」

悔しそうに、しかし何も言えない先生。が、そこへアインスが前に出て、

「誤解はやめて頂けないかな? 津紬さんという子は別に君がした事が原因で転校したわけではない。単純に親の転勤が原因さ、島津先生は在学中最後まで彼女を護りきったよ」

「けど、当の本人はそう思っていないみたいだけど?」

「私は事実を言ったままでさ。在学中の妹に頼んで確認も済ませている。友人曰く津紬さんは最後まで島津先生を恩師と慕ってたってね」
「どうだろうね」

と、炎崎は笑い飛ばして、

「大依はどう思う?」

なんて大依さんに同意を求める。

彼女は、先生と目があい一瞬辛そうな顔を見せるも、

「お久しぶりです先生。その節は見捨ててくれてありがとうございます。ごましました」

と、皮肉たつぷりに。

「否定はしないよ。不登校になってから何もできなかったのは確かだもの」

しかし先生、今度は気圧されず真つすぐ大依さんを見据えいう。

「だから、私はもうあなたに教師面する資格なんて無いと思う。でもね」

先生は珍しく「怖い」と思わせる気配を放ち、いった。

「由美子ちゃんから、財布を奪ったそうね」

「ええ。それが何か?」

言いながらも、大依さんから表情が消える。

先生は、らしくない怒声混じりの声色で、

「愛ちゃん、それ、あなたが一番嫌がったことじゃない。そんな人間にはなりたくないって、自分がどこまで腐っても由美子ちゃんにだけは危害を加えたくないって一番言ってたじゃない。それが嫌で、自分から由美子ちゃんを離すために学校に来なくなつたんじゃないの? そんな自分を見せたくないから、私が何度も何度もお見舞いに行つても会わなかったんじゃないの?」

すると、

「私の前に、のこのこ現れたからいけないんじゃないですか」

大依さんは、口元だけ笑っていった。

「おかげでスッキリしました。こんなトロくて邪魔な寄生虫のために、私いままで苦勞してたのねってやつと気づけたんだもの。先生も大変ですね、豚に真珠を強いられるなんて。由美子みたいに言つても無駄な出来損ない相手でも、仕事だから邪険にできないんだもの」

「あ……」

安達さんから悲痛な声が漏れる。

先生も大依さんの言葉にショックを受けてる様子が見られたけど、安達さんに至っては大好きな大依さんに言われ一気に心が折れたのが見てとれる。

試しに安達さんのお尻を撫でてみたけど、木更ちゃんが防犯ブザーに手を伸ばしただけで、本人から反応はなかった。

「愛ちゃん！」

悲痛に喚く先生。いまにも飛び掛かりそうな彼女を、菊菜ちゃんが前に出て制止。

「大依さん、何があったのですか？ 炎崎さんやあなたが下種に墮ちたのは知ってましたけど、優等生だったあなたがこうにまで陥る理由が僕には分からないのですよ」

「へえ」

菊菜ちゃんの問いに反応したのは、炎崎だった。

「NLTもずさんだね。まだ何も辿り着いてなかったなんてさ」

「どういう事ですか？」

「どうもこうも言葉通りの意味だよ。ところで」

ここで炎崎は再び私に向いて、

「そろそろ、俺たちを呼んだ理由を聞かせて欲しいんだけど」

あ、そうだったそうだった。

「まあ、直球で言うとう。あなた大依さんと別れてくれない？」

私はいいながら、視線を動かさず気配で安達さんを確認。本題に入ったというのに、彼女は依然として棒立ちのまま、心の奥に閉じこもっている。

「なるほどね。そういう依頼？」

「目的の半分はね」

「半分？」

訊ねる炎崎に私は、

「生の大依さん見て気が変わったわ。ふたりを引き離したら、その間に大依さん寝取らせて？ 喘がせ鳴かせて快樂の世界に墮としこんで更生させるから」

「は？」

口をあんどぐり開けて唾然とする炎崎。

「えっ?」

彼の横では大依さんがドン引きしてる。ので、私は続け、

「大体こんな美少女、男のモノにしておくのは勿体ないって話でしょ。大依さんノンケ? 大丈夫、そういうのをレズの道に落とすの大好物だから、こっちおいで」

とかいって手招きしてると、

「だ、駄目えっ!!」

ここで安達さんは絶叫。

「お願い、これ以上、ぐすつ、愛ちゃんを変な道に誘い込まないで」

そして泣きながら懇願。

「いいよ。別れてあげても」

炎崎はいった。

「もちろん無条件じゃないけど。ここは俺たちらしくデュエルで決着をつけるのはどうかかな?」

「私が勝ったら大依さんと別れてくれるって話?」

訊ね返すと、

「まあね。その代わりなんだけどさ。俺が勝ったら、安達さんを一日貸してよ。二度とこんな依頼できない体にしてあげるから」

「っ」

びくつとなる安達さん。先生が彼女の肩を抱いて支えたのを見てから、

「分かったわ」

私はいった。

「ちよつと、勝手に決めないでよ」

が、大依さんは不満な様子。炎崎は彼女の頭を撫で、

「心配しないでよ。勝てばいいんだから」

「相つ変わらず勝手な男ね。負けたら本当に別れるから」

「へーい」

とかいって、いちやいちや。畜生!

「待って」

が、ここで私たちサイドからも声が。先生だった。

「沙樹ちゃん。このデュエル私が引き受けちゃ駄目？」

「先生が？」

「お願い。この子たちにはぶつかってでも聞き出したい事とか色々あるのよ」

先生は前に出て、

「愛ちゃんばかり変わっちゃったみたいって言われてるけど、炎崎くんだって転入してきた頃は凄く善良でいい子だったのよ。それが、ある日を境に愛ちゃん共々」

「先生、でも」

悪いけど、いくら先生の頼みでもこの先は危険だ。協力者にそこまですさせるわけにはいかない。

しかし直後、

「そういえば、邪魔な人間は他にも先生がいたね」

と、炎崎はデュエルディスクから赤外線を飛ばし、先生のデュエルディスクを強制デュエルモードにしてしまう。

「あ」

しまった！ これでは先生と炎崎でデュエルするしかない。

「すまない。私も先生の熱い想いに圧されてた」

と、アインスも何もできなかったことを悔やみ、私に謝る。

しかし当然だけど炎崎も先生もやる気満々の様子で、

「いいよ、闘ろうか。その代わり俺が勝ったら先生も一緒にきて貰うよ」

「なら、私が勝ったら、在学中何があったのか教えてくれる？」

「負けても教えてあげるよ。その場合は先生も来年にはフィール・ハントーズかもしれないけどね」

ククツと笑って炎崎はいった。

鳳火

LP4000

手札4

□□□□
□□□□
□□□□
□□□□
□□□□
□□□□

炎崎（イーグル）

LP4000

手札4

「私の先攻ね」

デュエルは先生のターンから始まった。

「まずは速攻魔法《転生炎獣の炎陣》を発動よ。デッキから《転生炎獣
フアルコ》を手札に」

「サラマングレイト転生炎獣ですか」

呟く菊菜ちゃんに、

「サラマングレイト？」

訊ねる木更ちゃん。菊菜ちゃんはデュエルするふたりに視線を向
けたまま、

「炎属性のサイバース族テーマですよ」

「サイバースといたら、増田さんが使ってる種族の」

「そうなるって話ね」

ここで私はうなずくも、

「でも、先生がサイバース族は想像できなかったわ。正直イメージと
違って」

「同じですよ」

私の感想に菊菜ちゃんも同意。ついでに、

「へえ。転生炎獣とは意外なカードを使うんだね」

と、炎崎までもが同じ感想を口にする。

つまり、ここにいる殆どが決闘者としての島津 鳳火先生を知らな
かったことになる。私も先生には何度か任務に手を貸しては貰って
たし、デュエルできる人間という事も知ってた。だけど実際にデュエ

ルする所を見るのは、実は初めてだった。

「何でかなあ、みんな私とデュエルすると言うのよね。私は結構このデッキが馴染むのに」

先生は言いながらデッキから《転生炎獣ファルコ》を手札に加え、すぐ墓地に送った。

「続けて手札の《転生炎獣ファルコ》を墓地に送って、手札の《転生炎獣ミリア》を特殊召喚。このカードは手札の転生炎獣1枚をコストに手札から特殊召喚できるのよ」

先生の場合に背に炎を出す後足と尾で直立する小動物が出現すると、「さらに《転生炎獣ファルコ》は墓地に送られた場合に、墓地のサラマングレイト魔法・罫を1枚セットできるの。私は《転生炎獣の炎陣》をセット」

速攻魔法だから、このターン発動はできないとはいえ、これで先生は次のターン以後再びサラマングレイトをデッキからサーチする準備が整ったことになる。さらに、

「きて、未来に導くサーキット!」

先生が掌を掲げると、上空から人間ひとり包み込む程度の大きさの火の玉が降り、炎の消滅と共に中からいつものリンクマーカーが出現。

「アローヘッド確認! 召喚条件はレベル4以下のサイバース族モンスター1体! 私は《転生炎獣ミリア》をリンクマーカーにセットよ」

「リンク1のモンスターを?」

大依さんが炎崎の隣で反応する中、

「リンク召喚! 立ち上がって、リンク1《転生炎獣ベイルリンクス》!」

先生の場に、尾に炎を出す山猫モチーフのサラマングレイトが出現。
「ベイルリンクスの効果。このカードのリンク召喚に成功した場合、デッキからフィールド魔法《転生炎獣の聖域》を手札に加えるよ」

「リンク1がしていい効果じゃないわよね、それ」
うわあ、って大依さんが何ともいえない目で先生を見るも、

「うう、いいじゃない。カードは完全に指定されてるんだから」

先生はむーって顔をしかけたけど。これ見る限り天然のフィールカードって話なのよね。一応市販もされてるみたいだけど。

「さらに私は《転生炎獣Jジャガー》を通常召喚。続けてベイルリンクスとJジャガーでサーキットコンバイン！ リンク召喚、リンク2《転生炎獣サンライトウルフ》！ サンライトウルフのリンク召喚に成功した場合、墓地のサラマングレイトモンスター1体を手札に加える。私は《転生炎獣ファルコ》を手札に加えるわ。そして墓地の《転生炎獣Jジャガー》は墓地のサラマングレイトモンスター1体をデッキに戻し、自身をサラマングレイトリンクモンスターのリンク先に特殊召喚できるの。私は《転生炎獣ミリア》をデッキに戻し、《転生炎獣Jジャガー》を特殊召喚。もう3度目だけど来て、きて、未来に導くサーキット！」

スピードデュエル、しかも先攻1ターン目なのに先生はもう3回目のリンク召喚を宣言。しかもサンライトウルフを出した際に《転生炎獣ファルコ》が手札に戻ったり、地味にJジャガーが2度場に出てるなど中々酷いブン回しをみせながら。

「アローヘッド確認。召喚条件は炎属性の効果モンスター2体以上。私はサンライトウルフとJジャガーをリンクマーカーにセット。リンク召喚！ 立ち上がって、リンク3 《転生炎獣ヒートライオ》」

こうして出現したのは、攻撃力2300のサラマングレイト。見た目は翼を持った紅蓮の獣だが、名前から恐らくライオンモチーフだろうか。

なお、ベイルリンクスに限らず現在出したリンクモンスターはさらっと全部天然のフィール・カードだった。

「カードを1枚セット。私はこれでターン終了よ」

先生の先攻1ターン目がやっと終了した。見ると、非公開情報はセットカード1枚だけで、残りは手札も全て何を握ってるか分かる状態にはなってるものの、手札2枚、伏せカード2枚、リンク3のモンスター1体と初期手札よりカードの総数が1枚増えている。しかし。

「色々やったにしては、結構地味なフィールドですね、先生」

炎崎はいった。確かに現状の情報だけを見れば攻撃力が2300程度のモンスター1体に伏せカード2枚、その内1枚は速攻魔法のサーチカード。決して盤石な布陣を敷いたようには見えないのだ。

鳳火

LP4000

手札2

「《セットカード》」「《セットカード（転生炎獣の炎陣）》」

□□□

「《転生炎獣ヒートライオ（鳳火）》」

□□□

□□□

炎崎（イーグル）

LP4000

手札4

「じゃあ、このターンでさっさと決めさせて貰うよ。俺のターン、ドロ」

炎崎はカードを引くと、

「相手の場にモンスターがいて、俺の場と墓地に炎属性以外のモンスターが存在しない場合にこのカードは特殊召喚できる。《陽炎獣 グリップス》！」

炎崎という苗字、イーグル・フレイムショットというフィール・ハントーズでの名前から想像はしたものの、こちらも出してきたのは炎属性のテーマ。しかし、鷲の翼を持つてはいるものの鷲^{イーグル}ではない。「さらに俺はグリップスをリリースするよ。アドバンス召喚！ 来い、

《陽炎獣 ペリュトン》！」

続けて出てきたのは鳥の胴体と翼、牡鹿の頭と脚を持ったモンスター。

「《陽炎獣 ペリュトン》の効果！ こいつは手札から炎属性モンスターを墓地に送り、自身をリリースすることでデッキから陽炎獣を2体特殊召喚できるんだ。俺は手札から《陽炎獣 ヒュドラー》を墓地に送り、自身をリリースして効果発動。デッキから《陽炎獣 スピン

クス』と《陽炎獣 サーベラス》を特殊召喚するよ」

今度はスフィックスをモチーフとした陽炎獣と、ケルベロスと思われる陽炎獣が姿を現した。現状、場に現れたモンスターは全てレベル6である。

「《陽炎獣 スピックス》のモンスター効果。1ターンに1度、カードの種類を宣言して発動し、デッキの一番上を墓地へ送って宣言した種類のカードだった場合、手札・墓地から炎属性モンスター1体を選んで特殊召喚できるんだ。俺はモンスターを選択。まあ、フィールドなしで当たるんだけどね」

そういつて、炎崎は完全にフィールドを抜いてカードをめくる。出現したのは、

「墓地に送ったのは《陽炎獣 スピックス》。知つての通りモンスターだよ。俺は墓地から《陽炎獣 ヒュドラー》を特殊召喚しようか」

「もしかしてフルモンデッキ?」

訊ねる先生に炎崎は、

「マスターデュエルでは魔法・罫も入れるけどね」

とか言いつつも今回のデュエルでは「ご名答」と返事。

こうして、先生とは逆にガンガン手札を消費しつつも炎崎は場にレベル6モンスターを3体展開。しかし、攻撃力2000、1900、2300とレベル6にしては低攻撃力な為、このままでは事前に宣言していたワンショットにはわずかに。

「わずかに届かない。って考えてたでしょ、先生」

炎崎がいった。

「う」

となる先生の反応から、私と同じく考えてたのだろう。

「残念だけど、これで終わりさ。スキル発動《粉碎》! ターン終了時まで俺のモンスターの攻撃力はレベル5以上のモンスター1体につき300ポイントアップするよ」

「えっ」

驚く先生。直後、3体の陽炎獣から炎が強く巻き上がり、

《陽炎獣 スピックス》 攻撃力1900↓2800

《陽炎獣 サーベラス》 攻撃力2000↓2900

《陽炎獣 ヒュドラー》 攻撃力2300↓3200

モンスターたちの攻撃力を一気に引き上げる。

「バトルだ！ 《陽炎獣 スピックス》で《転生炎獣ヒートライオ》に攻撃。消えちまいな」

四肢でヒートライオ向けて駆け出すスピックス。その爪がヒートライオを捉えた瞬間、突如現れた《転生炎獣ベイルリンクス》が盾になり、代わりにその身を裂かれる。

「墓地のベイルリンクスの効果。私のサラマングレイトが戦闘・効果で破壊される場合、代わりにベイルリンクスを除外できるの」

「チツ、だけど切れ味は受けて貰うよ。先生」

「うっ」

フィールが入っていたのだろう。ベイルリンクスを裂いて余りある衝撃が先生に届くと、彼女の衣服に裂き傷をつける。

鳳火 LP4000↓3500

「続けて《陽炎獣 サーベラス》で攻撃。今度は耐えきれぬ？ 先生？」

サーベラスの牙がヒートライオの胸に食い込み、今度こそ破壊される先生のモンスター。破壊された際に炎が舞い上がり、続けて先生の衣服がわずかに焼ける。

鳳火 LP3500↓2900

「そして《陽炎獣 ヒュドラー》で攻撃。フィニッシュだよ、先生」

ヒュドラーの無数の首が先生に伸びた所で、

「速攻魔法《転生炎獣の炎陣》を発動よ。デッキから《転生炎獣ミリア》を手札に加えるわ」

と、ここでサーチカードの発動。

「今更そんなカードを手札に加えたところで」

「《転生炎獣ミリア》が通常のドロー以外で手札に加わった場合、このカードを相手に見せることで特殊召喚できる」

ミリアが先生の前に出現すると、再び後足と尾で直立し、小さな手を広げ先生を庇おうとする。表示形式は当然、守備表示。

「チツ、ならミアを戦闘破壊」

苛々した様子で炎崎はいい、無数の首に噛みつかれミアは破壊される。

「本当にベイルリンクスがリンクーで出てきていいカードじゃないね。俺はこれでターン終了だよ」

鳳火

LP 2900

手札 2

「《セットカード》」□□

□□□□

□□—□□

「《陽炎獣 スピックス》」「《陽炎獣 サーベラス》」「《陽炎獣 ヒュ
ドラー》」

□□□□

炎崎（イーグル）

LP 4000

手札 2

心の中でこっさり炎崎に同意しつつ、しかしワンショットを免れた
ことでほっとする私。

「ふー。危なかったわ、さすが炎崎くんデュエルが強いのね」

一方、先生もほっと一息つきながら、元教え子に称賛の言葉を贈る
ことを忘れない。

「陽炎獣の恐ろしさはこれからですよ。先生」

炎崎が返した所、大依さんが炎崎の頬を引っ張り、

「こんなデュエルでなに本気になってるのよ」

「痛っ、別に本気になんかなってないってば」

「どうだか、先生のリップサービスにも本気になっておいて」

「だから本気になってないだろ」

と、いちゃいちゃ。

「炎崎くん、愛ちゃん」

安達さんには悪いけど、本来なら先生にとって微笑ましく祝福した

い光景だろう。途端、表情に激しい躊躇いを見せはじめも、

「先生。相手は迷いの中でデュエルして勝てる相手ではありません」

アインスがいった。

「いまの先生の正直な気持ちを否定する気はありません。でも、いまは勝ちましょう。でなくては、聞けるものも聞けなくなってしまうすからね」

「アインスちゃん」

先生は、助言するアインスを数秒ほど眺めてから、

「そうね。いまはデュエルに勝たないと」

と、につこり笑い、

「ありがとうアインスちゃん。私のターン、ドロー」

カードを引きデュエルを再開。

さらに先生は現在唯一の未公開情報になつてた伏せカードを表向きにして、

「永續罨発動！ 《リビングゲツドの呼び声》！ この効果で私は墓地の《転生炎獣ヒートライオ》を攻撃表示で蘇生させるわ」

と、先ほど倒されたリンクモンスターを場に戻す。

「そしてフィールド魔法《転生炎獣の聖域》を発動。このカードは1ターンに1度、サラマングレイトをリンク召喚する場合に、素材を場の同名モンスター1体のみにできるの」

「同名モンスターってことは」

誰かといわずギャラリーが反応する中、

「きて、未来に導くサーキット！」

再び上空から火の玉が出現し、中からリンクマークーカードが出現する。

「私はヒートライオをリンクマークーカードにセット！ 目覚めて、その魂に刻まれし真の炎を！ 己の殻を破り、本当の自分を解き放て！ 転生リンク召喚！ 甦って、気高き炎を宿す百獣の王《転生炎獣ヒートライオ》！」

ヒートライオを素材に、新たな《転生炎獣ヒートライオ》が降臨する。その姿は、先ほどの紅蓮の獣と同じようで、翼から、そして首か

ら髪のように、それぞれ炎をなびかせ、転生前より明らかに見た目として強者の風格を見せつける。

「転生した《転生炎獣ヒートライオ》の効果。このカードがヒートライオを素材にリンク召喚した場合、1ターンに1度、フィールド上のモンスターと墓地のモンスターを1体ずつ対象に発動。ターン終了時まで、そのフィールドのモンスターの攻撃力を、墓地の選択したモンスターとの攻撃力と同じにする」

なんて、先生は転生して得た新たなヒートライオの効果を発動するも、

「悪いけど、陽炎獣には共通効果があつてね。こいつらは皆、相手の効果の対象にはならないんだ」

「えっ」

「言つただらう？ 陽炎獣の恐ろしさはこれからだつて」

炎崎はニヒルに笑い、

「で、対象はどれにする？ やっぱ無しはナシだよ」

「うう。場と墓地それぞれのヒートライオを対象よ」

結果的にどの攻撃力も変わらず終わってしまうヒートライオの転生効果。が、すぐ先生は別のカードを1枚ディスクに置いて、

「でも、致命的なミスにならないタイミングで知れたのは幸いね。私は装備魔法《転生炎獣の烈爪》を転生ヒートライオに装備」

ヒートライオの両の爪が炎に包まれる。が、装備魔法とはいえ攻撃力を変化させるものではないらしく、

「続けて墓地のヒートライオをデッキに戻して、墓地の《転生炎獣Jジャガー》をヒートライオのリンク先に特殊召喚！ バトルよ。ヒートライオで《陽炎獣 スピックス》に攻撃」

先生は更にモンスターを展開しつつ攻撃宣言。ヒートライオの炎の爪がスピックスを両断、破壊する。

炎崎 LP4000↓3600

僅かに減少した炎崎のライフ。が、先生は続けていった。

「まだよ。《転生炎獣の烈爪》を装備した転生リンクモンスターは、そのリンクマーカーの数まで相手モンスターに攻撃できるの」

「ヒートライオのメーカーは3つ？　ということは、3回攻撃？」

反応する安達さん。炎崎は顔をしかめ、

「まさか、俺のモンスター3体と相打ちになる気？」

と、いうのはヒートライオの攻撃力は変化していない以上、攻撃力は《陽炎獣 ヒュドラー》と同じ2300。このまま3体とも攻撃するならば、このヒュドラーと戦闘した際に双方が破壊されてしまうのだ。

が、先生はいった。

「それはどうかな？」

「何？」

「続けて、ヒートライオで《陽炎獣 サーベラス》に攻撃」

続けてヒートライオの一撃によってサーベラスも破壊し、

炎崎 LP3600↓3300

炎崎のライフをさらにもうちよつとだけ削る。

「《陽炎獣 サーベラス》のモンスター効果、このカードが破壊され墓地に送られたから、デッキの《陽炎獣 ペリユトン》を手札に加えるよ」

途中、炎崎の行動が挟まるも、

「そして」

対峙するヒートライオとヒュドラー。問題の対戦カードが始まった。

「ヒートライオでヒュドラーに攻撃」

先生の攻撃宣言。ヒートライオはヒュドラーに飛び掛かり、同じように爪を振り被る。が、攻撃力は同じ。ヒートライオの爪がヒュドラーにめりこむと同時に、ヒュドラーの牙もヒートライオの首にかぶりつく。

「ほら言ったじゃないか。相打ちだよ、先生」

炎崎が言った所へ先生は、

「《転生炎獣の烈爪》を装備したモンスターは、戦闘・効果では破壊されず、守備表示モンスターに攻撃した場合に貫通効果も得るわ」

「何!?!」

「戦闘破壊されるのはヒュドラーだけよ。《転生炎獣ヒートライオ》の攻撃、ヒートソウル！」

ヒートライオが一旦抉りつけた爪を引き抜くと、両腕の炎が更に激しく燃え上がり全身を包み込む。

そのままヒートライオは竜巻のように回転しながら一度上空へあがってヒュドラーから距離を取り、改めて急降下ダイブしながらの突撃でヒュドラーの胸に風穴を開け、破壊する。

「ちよつ、たった1体のモンスターで炎崎のモンスターが全滅？」

驚く大依さん。

「……ははっ」

炎崎は数秒ほど呆然とした後、乾いた笑いを浮かべ。

「装備中限定とはいっても、戦闘でも効果でも破壊されず、貫通持ちでモンスターを3体まで攻撃できる。本当効果盛り盛りとんでもないモンスターを出したものだね」

確かに。加えて今回は陽炎獣のモンスター効果を知らなかったせいもあるけど、本当ならこれから攻撃を行うだろうJジャガーも攻撃力変動効果で2300打点で攻撃してたかもしれないのだ。

「だけど、俺はひとつ弱点を見つけたんだよね」

「弱点？」

「次のターンに分かるよ。まずは先生がターンを終了するのが先かな」

「そう」

先生はうなずき、

「なら、いま深読みしても無駄かな？ 素直にターンエ」

言いかけたので、

「先生！ JジャガーJジャガー」

慌てて私は指さし言う。

「あ」

先生は言い切る寸前で気づき、

「ありがとう沙樹ちゃん。《転生炎獣Jジャガー》で直接攻撃。ターン終了よ」

最後にJジャガーがフィールなしで炎崎を攻撃し、今度こそターンが終了される。

炎崎 LP3300↓1500

鳳火

LP2900

手札1

「《転生炎獣の聖域》」

「《リビンググデッドの呼び声》」「《転生炎獣の烈爪》」□

□「《転生炎獣Jジャガー》」□

「《転生炎獣ヒートライオ(鳳火)(《転生炎獣の烈爪》装備)》」□

□□□□

□□□□

炎崎(イーグル)

LP1500

手札3

「外野は黙ってくれると嬉しいんだけどね。俺のターン、ドロー」

炎崎はカードを1枚引き、

「……ちっ」

そのドローカードを見て、炎崎は1回舌打ち。

「こいつはデッキに眠ってて欲しかったんだけど、これでも十分って事かな？ まずは前回同様《陽炎獣 グリップス》そしてリリースして

《陽炎獣 ペリユトン》をアドバンス召喚。《陽炎獣 スピックス》を墓地に送って効果を発動。自身をリリースして今回は《陽炎獣 ヒュドラー》を2体デッキから特殊召喚だ」

先ほど倒したばかりのヒュドラーが、今度は2体同時に場に現れる。

「見せてあげるよ、俺の切り札を。俺はヒュドラー2体でオーバーレイ！ 2体の炎属性レベル6モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

炎崎がいうと同時に、上空に銀河の渦が現れヒュドラーが靈魂の姿になって取り込まれる。

「変異せよ伝承！ 存在理由も焼き尽くせ！ 見せてくれよ、全てが陽炎となった究極の合成獣、その先を！ エクシーズ召喚！ 来い、ランク6《陽炎獣 バジリコック》！」

こうして出現したのは、バジリスクのような名前にコカトリスみたいな外見の陽炎獣。

「バジリコック。バジリスクの伝承と存在がコカトリスに変貌している間に出てきた名前ね」

先生はいった。だから名前はバジリスク寄りなのに外見はコカトリス寄りだったって話なのね。

「《陽炎獣 ヒュドラー》の効果。このカードを素材としたエクシーズモンスターは墓地の陽炎獣を1体素材にする効果を持つ。ヒュドラーを2体素材とした《陽炎獣 バジリコック》はこの効果を2回分発動する。俺は《陽炎獣 スピックス》2体をオーバーレイ・ユニットにするよ」

こうして、バジリコックはX素材を4つも持つモンスターへと変貌。

「さらに《陽炎獣 バジリコック》は持っている素材の数で効果が決まる。まず3つ以上でバジリコックの攻守は自身のオーバーレイ・ユニットの数×200アップ。そして4つ以上で陽炎獣の共通効果を得る。ペリユトンで今回もスピックスを出したら、墓地のヒュドラーを呼んで素材3体で出して、5つ以上の効果で効果破壊されなくなるんだけど、まあいいよね」

という事は、先ほどドロローして舌打ちの原因になったモンスターは先ほどコストで墓地に送った《陽炎獣 スピックス》だったのだろう。
《陽炎獣 バジリコック》 攻撃力2500 / 守備力1800 ↓ 攻撃力3300 / 守備力2600

効果で3000ラインを超えた攻撃力を得たバジリコック。

「じゃあ先生。教えてあげるよ、先生のモンスターの弱点を」

炎崎はいった。

「まずヒートライオの攻撃力は2300と低い。そしてリンクモンスター故に守備表示もできない。つまり、それ以上の攻撃力のモンス

ターを出せばいつでもサンドバックでできてしまっただよ」

実際、炎崎のモンスターは攻撃力がヒートライオより1000高い。

「でも今はもっと倒したい雑魚がいるけどね、バトルフェイズ。バジリコックでJジャガーを攻撃」

炎崎が攻撃を宣言。すると、

「え？ ヒートライオを除外しないの？」

と、大依さん。

「バジリコックはオーバーレイユニットを1つ取り除いて、場か墓地のモンスターを1体除外できるのに」

「それをしたら、陽炎獣の共通効果を失ってしまうだろ」

炎崎はいった。

「共通効果を失ったら、次にヒートライオが転生召喚した時に攻撃力が下げられちゃうからね。ここは防御中心に行くべきなんだよ」

「あんた、馬っ」

大依さんが言いかける中、バジリコックがJジャガーに攻撃を仕掛ける。

「ライフポイントを1000払って、《転生炎獣の聖域》の効果。私のモンスターが戦闘を行うダメージ計算時に発動よ。ヒートライオの攻撃力を0にして、元々の攻撃力分、私のライフを回復」

ここで先生は《転生炎獣の聖域》の別の効果を使用。

鳳火 LP2900↓1900↓4200↓2700

効果によって、Jジャガーの戦闘で受けるダメージを最小限にするも、私の目には先生もプレイングミスを行ったように見える。

「へえ。気前いいんだね、自分からヒートライオの攻撃力を0にしてくれるなんて」

自分のミスに気付かない炎崎は、そんなことをのたまい、

「じゃあ俺はこれでターンを終了するよ」

と、そのままターンを渡す。

鳳火

LP2700

手札1

「《転生炎獣の聖域》」

「《リビンググデッドの呼び声》」「《転生炎獣の烈爪》」□

□□□□

「《転生炎獣ヒートライオ(鳳火)》《転生炎獣の烈爪》《装備》」——「《陽

炎獣 バジリコック(炎崎)(素材：4)》」

□□□□

□□□□

炎崎(イーグル)

LP1500

手札3

彼の言葉を聞く限り、炎崎はひとつミスを犯している。

それは、前のターンでヒートライオを除外すれば、彼が警戒している転生ヒートライオの効果が発動される可能性は低いということである。

まず、転生前のヒートライオは《転生炎獣Jジャガー》が特殊召喚する為にデッキに戻っている。場のヒートライオを除外してしまえば、先生は次のターンに転生リンク召喚するには、まず次のドロイーで引くカードと手札に握り続ける《転生炎獣ファルコ》を駆使してリンク3のリンク召喚をしなくてはならない。

が、それだけなら案外やっつてしまうと炎崎は読んでののかもしれない。私だってここまでなら可能性として考える。

問題は、今回のデュエルがスピードデュエルであること。

15枚投入できるマスターデュエルと違い、スピードデュエルでは、EXデッキにカードは5枚しか投入できない。そして現在、先生はすでに内4枚が判明している。残りの枠は1枚だけだ。

果たして先生は、ヒートライオを3積みしているのだろうか？ スキルという不安要素はあるだろうけど、私や大依さんはJジャガーで転生前をデッキに戻せる以上「2積しかしてない」と読んだのだ。

ただ、先生のプレイングも不可解だ。

ここで先生は、なぜ装備カード持ちのヒートライオの攻撃力をライ

フに変換したのだろうか。それをしなければ負けるようなダメージではなかったはずなのに。

ヒートライオの攻撃力はターン終了後も0のままなので、恐らく先生は次のターン再び転生リンク召喚を行うのだろうか。あのプレイングは一体。

「私のターンね、ドロー」

先生はカードを引く。そして2枚の手札を確認し、

「やっぱり、ここが覚悟の決め時ね」

と、いった。

直後、先生の掌が炎に包まれる。

「私はここで、スキル《バーニング・ドロー》を使用。このスキルは、私のライフが100になるようにライフを払って、払ったライフ1000につき1枚カードをドローする効果よ」

「あ」

再び誰とはいわず声を漏らし、

「その為に、ヒートライオの攻撃力をライフに」

と、炎崎が最後に反応。

「私のライフは2700、つまりカードを2枚ドローね」

先生はいい、

「閉ざされた未来なんてない！ ここでこじ開ける！ バーニング・ドロー！」

と、口上と共に2枚のカードを引く。

鳳火 LP2700↓100

そして、一気に減少する先生のライフ。

「なんてスキルだよ」

炎崎はいった。

「ライフは十分余裕があつたじゃないか。そんな事したら、掠り傷ひとつでやられるのに、どうして」

彼の問いに対して先生は、

「覚悟が違うのよ、覚悟が」

なんて、一見あっけらかんとした顔でいつてのける。だけど、

「生半可な覚悟で保身丸出し、そんな教師が本気で生徒とぶつかれるわけないじゃない。私もまだ20代だから教師としてはまだまだ若輩者よ、炎崎くんや愛ちゃんみたいに救えなかった生徒は数知れず。でも人を導く職業だもの、幼い未来を直接導く仕事だもの。失敗に絶望する時間なんてないし、少しでも教え子の力になれるなら自分の命くらい幾らでも賭ける気でいないとね」

「……うざいね」

先生の心の内を前に、炎崎はいった。

「やっぱり島津先生、アンタすっげえウザいよ。そんな言葉だけ熱いもの吐露すれば皆心打たれると思ったの？ そんな偽善、俺たちには必要ないんだよ。ああ、早くぶっ殺してえ」

けど、先生は一步も引かず、

「殺しにすればいいじゃない。言葉だけじゃないってことを見せてあげる」

「熱いね」

アインスが、私にぼそつと話しかける。

「改めて感じたよ。島津先生は間違いなく炎属性だ」

「金○先生並みの熱血教師ね」

私も改めて実感しながら返事。しかも、モンスターの真の才能を引き出して戦うサラマングレイトも、種族はともかく今なら先生にピッタリのテーマとはつきり言える。

「だから、まずは話してもらおうよ。あなたたちが変わった理由を！ まずは《転生炎獣の聖域》の効果を発動。《転生炎獣ヒートライオ》を再び転生リンク召喚。さらに転生前のヒートライオをデツキに戻して墓地の《転生炎獣Jジャガー》をリンク先に特殊召喚！」

ここまでは、恐らく誰もが予想していたプレイング。

さらに先生はカードを1枚ディスクに挿し込んで、

「そして、これが私の希望の1枚よ。儀式魔法《転生炎獣の降臨》を発動！」

まさかの儀式魔法だった。

「私は手札の《転生炎獣ファルコ》とフィールドの《転生炎獣Jジャ

ガー≫リリース。儀式召喚！ 来て、レベル8《転生炎獣エメラルド・イーグル》！」

先生の場に1体の儀式モンスターが降臨すると、
「ふうん」

大依さんがいった。

「イーグルだって、イーグル・フレイムショットさん」

「本当だよ。ここでそういう事してくるなんて、先生も性格悪いね」と、炎崎も。

「慌てないで」

先生はいった。

「これから、さらにこのエメラルド・イーグルくんを輝かせるんだから」

「輝かせる？」

「まずは墓地に送られた《転生炎獣ファルコ》の効果ね。墓地の《転生炎獣の降臨》をフィールド上にセット。さらに手札から速攻魔法《転生炎獣の炎陣》を発動。デッキから2枚目の《転生炎獣エメラルド・イーグル》をサーチ」

これで先生は、再び儀式魔法と儀式モンスターの1セットが揃ったことになる。そして、先生がいままでヒートライオにしてきたことを考えると。

「輝かせるというのは、もしかして」

菊菜ちゃんが呟く。先生はいった。

「私は再び儀式魔法《転生炎獣の降臨》を発動よ。私は場の《転生炎獣エメラルド・イーグル》をリリース」

やっぱり！

「ここはあえて口上不要ね。転生儀式召喚！ 輝け、レベル8《転生炎獣エメラルド・イーグル》！」

エメラルド・イーグルを素材に、新たなエメラルド・イーグルを儀式召喚。先生はヒートライオのリンク召喚と同じことを、まさかの儀式召喚でもやってのけたのだ。

そして、ヒートライオを考えれば当然、無駄に儀式召喚したわけで

はなく。

「転生《転生炎獣エメラルド・イーグル》のモンスター効果。このカードがフィールド上の《転生炎獣エメラルド・イーグル》を素材に儀式召喚した場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスターを全て破壊する」

「全てだつて!？」

驚く炎崎。彼の使う陽炎獣は効果の対象にならない共通効果を持つけど、対象を問わない全体破壊みたいな効果だと。

「いくね。《陽炎獣 バジリコック》焼却!」

エメラルド・イーグルの羽ばたきから炎が舞い上がると、炎崎のフィールドは一面炎の海に包まれる。

その際、私は見えた気がした。

エメラルド・イーグルが作り上げた炎の海の中から、うつすらと森らしき幻影を。

しかし、私以外の誰も森を見たらしい反応はなく、ついにはそのまま効果処理が終了。

「なんだよ、これ」

炎崎は一度歯ぎしりをたてて呟き、そして叫んだ。

「何なんだよ! 何で俺が負けるのさ、おかしいよね? あの時、前のターンで俺がドローでスピックスを引いてなかったら完全なバジリコックが出せて、先生の糞モンスターにだって破壊されなかったじゃないか。こんなの運だ! なあ、実力なら俺が勝って当然だっただろ?」

が、そこへ菊菜ちゃんが。

「いいえ、炎崎さんあなたの完敗ですよ。運も実力もフィールド戦においてでもです」

「勝手な事を」

「なら、大依さんに聞いてみればどうですか?」

言われて炎崎は期待の眼差しで大依さんを見る。しかし、大依さんの目は冷ややかで。

「嘘、だよな?」

炎崎は呟くのだった。

「バトル！ 《転生炎獣エメラルド・イーグル》で『イーグル』炎崎くんに攻撃！」

エメラルド・イーグルの一撃が、炎崎のライフも焼き払う。

炎崎 LP 1500 ↓ 0

炎崎がバジリコックの効果でヒートライオを除外してたら、先生が負けてた可能性は十分にあったのは間違いない。

しかし、実は他にも状況が変わってたかもしれない場面が、もうひとつだけあったのだ。

それは後攻1ターン目。

彼が《陽炎獣 スピックス》の効果でデッキトップを墓地に送った際、彼は必ずモンスターが引けるからとフィールを一切使わず効果を行使し、結果2枚目のスピックスを墓地に落とす。

デュエルにおいて、フィールはドローの運命も左右する。

つまり、ここでしたっけフィールをケチらず消費してればスピックスは落ちず、彼が問題視していた3枚目のスピックスの素引きを行っても、炎崎はオーバーレイ・ユニット5つのバジリコックが出せて、デュエルの結果さえも変わってたのかもしれない。

もつとも、気付けば先生が今回使ったリンクモンスターと儀式モンスターは全て天然のフィール・カードだった。

フィールはデュエルの流れも左右するものだから、先生と炎崎のフィール量に差があった以上、この結果はもしかしたら必然だったのかもしれないけど。

というより、先生があれだけ天然のフィール・カードを持ってるなんて予想できるはずがない。

さっきの炎の中で見た森も妙に気になるし、先生って一体何者なのだろうか。

デュエルが終了した。

互いのソリッドビジョンが終了し、炎崎のフィールが一度全損したのを確認してから、

「じゃ、約束は守って貰うって話だけど。要件ふたつとも覚えてるよね？」

私は炎崎にいった。

「ちっ」

また舌打ちする炎崎。

「愛ちゃん」

安達さんが、一步前に出ていった。

「お願い。炎崎さんとするむのを辞めて、前のやさしい愛ちゃんに戻って」

強い懇願が大依さんに向けてぶつけられる。

大依さんは、

「由美子」

実際に声に出したかは分からない。でも大依さんは確かに一度、彼女に向けてそう唇を動かす。

しかし、すぐ安達さんから視線を離すと、

「まさか本当に負けるなんてね、だらしないったら無いわ」

大依さんは、炎崎に向け冷たい目で言い放った。

「大依……」

「百年の恋も冷める気分よ。いいわ、こんな雑魚私のほうからお断りよ。煮るなり焼くなり好きにしちやっつて」

そして、安達さんに返事ひとつしないまま大依さんはビルの中へと戻ろうとしていく。

「待って！」

安達さんは叫んだ。

「どうして、そっちに戻るの？ 恋も冷めたなら、こんな……ファイール・ハンターズに戻る必要なんて」

「ウザッ」

大依さんは背を向けたままいう。

「いい加減目障りなのよ。いつまでもウジウジしながら何も変わらな
いで私の後ろに立って、昔から嫌いだったのよ。あなたのそういう
所」

「愛、ちゃん」

再び折れそうになる安達さん。大依さんは続けて、

「明日から北海道に出張で良かったわ。しばらく弱虫由美子にストーカーされなくて済むものね。……だから、さっさと帰って！ 私はいまから一緒に出張する相棒を変更する申請しないとイケないのよ。あなたたちが余計なことするから、連れを炎崎から変えないといけないじゃない全く」

と、愚痴りながら室内へと入り、この場を後にする大依さん。

「北海道、ね」

私は呟いた。

さすがに北海道まで追いかけてベッドを誘うことは難しそうって話。残念。

「そんな、愛ちゃん」

シヨックで腰が抜け、倒れだす安達さん。

私は咄嗟に支えるも既に彼女は卒倒し、意識を保ってなかった。

正直、こうなる事は予想していた。

大依さんから炎崎を引き剥がした所で、安達さんが思い浮かべてたように彼女が即更生するなんて、絶対にありえない話だと。

（任務達成ね。一応は）

私は分かりきっていた後味の悪さに嘆息する。意識のない安達さんを抱き寄せ、服の内側に腕を突っ込み、胸を揉もうとして、木更ちゃんの笑顔を前にそーっとセクハラを中断しながら。

（だけど）

思い返せば、大依さんは安達さんが絡む度に一瞬表情を消したりと何かしら別の一面を見せていた気がする。

私の直感が間違っただけならば、大依さんの心にはいまも大切な人として安達さんがいる。幾ら道を踏み外しても幼馴染への良心はいまも残ってる気がするのだ。なら何で彼女の財布を奪ったり、酷い言葉を彼女に浴びせるのか。

なんて私が考えてた中、

「さて、教えてくれますですか？ あなたたちが凶変した理由をです

よ」

菊菜ちゃんが、炎崎の前に立ちいった。

「炎崎くん」

すまなそうに眺める先生も含め、ふたりを前にして炎崎は、

「あの日、俺たちはドラッグの流通現場をついに見つけたんだ」

素直に隠されてた事実を語り始めた。

「時間は深夜2時。場所は中等部校舎の廃教室の一室だった。俺はすぐ通信機でNLTに連絡しようと思ったんだけどさ、どうやら奴らにも俺たちの存在を気づかれてたみたいで後ろからガツンとやられてしまった」

「ドラッグの売人の正体はやっぱり」

訊ねる菊菜ちゃんに、

「ああ。大方の予想通りファイル・ハンターズだったよ。気づいた時には俺と大依は椅子に張り付けられてて、それで生かして帰すかわりに打たちまっただ。ロストを」

「あつ」

はつとなる菊菜ちゃん。

そういえば言っていたっけ、一度でも服用すると後遺症で人格に異常をきたすって。

菊菜ちゃんは訊ねた。

「炎崎さん、もしかしてふたりが凶変した理由というのは」

「たぶん、ロストのせいだろうね。しかも俺自身は当時性格が変わっちゃった自覚が無くてね、NLTを追い出されたときは理不尽と怒りしか湧かなかったよ。さらに言うと、今も頭では自分がおかしくなっただって理解しても心ではって感じなんだ。そんな俺と大依は、すでに一般社会だと生き辛過ぎてね。そんな俺たちを拾ってくれたのがファイル・ハンターズだよ。いま思えば、そこまで見越してロストを打たれたんだと思うけどね」

そこまでいって、炎崎は立ち上がり、

「話は以上だよ。逮捕するならしいいよ？ その場合、いつでも一般人を殺せる位置で待機してる深海や他のファイル・ハンターズが虐

殺を開始するけどね」

「えっ」

と、辺りを見渡す先生。同様に私やアインスも周囲を確認すると、気づけば屋上だったり建物同士の隙間とかにフィール・ハンターズらしき人影が幾つもある。

「うーん、この数を相手にするときすがに見逃すしかできないですね」

菊菜ちゃんが残念そうにいった。

「じゃあ、俺もそろそろ失礼するよ。大依同様、予定変更の手続きがあるからね」

と、炎崎は私たちに背を向ける。

ここで私はハッと気づいた。

「炎崎！」

私は彼を呼び止め、訊ねる。

「あなた、ロストで人生狂う前から安達さんを虐めてたの覚えてる？」

もしかして、あなたが虐めてた本当の理由って」

「忘れちゃったよ。そんなこと」

炎崎は私の言葉を遮るようにいい、ビルの中へと戻っていった。

だけど、彼の後ろ姿を見て、私は何もかもが確信に変わった。

「先生、炎崎は不登校になって欲しくて安達さんをあえて虐めたのよ。不良たちもドラッグのターゲットにされそうで危険だったけど、安達さんみたいな誘いを断りきれない子も被害者になりかねないと思ってるね。だから、形は最悪だったけど自ら悪者になって安達さんを学校から避難させようとしてたのよ」

「え!?!」

驚く先生。

「で、そんな炎崎の当時の行動を思い出して、現在の大依さんも安達さんを攻撃し、わざと自分や他のフィール・ハンターズから引き離そうとしてたのよ。ロスト流通のメインターゲットは黒山羊の実だって話だしね。本当に安達さんを嫌うなら今ごろ彼女もロストの被害者よ。ふたりが再会したっていうあの日にね」

「そんな、私。こんなふたりの自己犠牲にも気づかないで」

ぺたんと膝をつき、泣き崩れる先生。

「うーん、その考えは僕も盲点でした」

菊菜ちゃんが会話に加わり、いった。

「ですけど推測は推測の域に留めておくのを僕はお勧めしますですよ。どうやら、いまもふたりはロストの後遺症で正気と狂気の狭間に苦しんでるみたいですから」

「特に大依さんは、安達さん相手に最後の一线を越えない為に相当狂気を抑えてたはずだ。恐らく、その分どこかで爆発するだろうね」

と、アインスがいう。

「という事は、時期的に北海道で何かやらかしそうという事ですか？」

訊ねる木更ちゃんに、

「恐らくね」

アインスが肯定する。

「そうですか」

視線を落とす木更ちゃん。

「北海道に何かあるの？」

訊ねてみると、

「いえ。実は北海道民なんです、ゼウスちゃんが」

「あの子が？」

確かゼウスといえは、15歳の中3で、自称神で、すごくガキっぽい、そんな藤稔親戚のひとりだったはず。

「北海道、かあ……」

ここで先生もこの地名に反応する。

「先生もお知り合いがいるのですか？ 北海道に」

菊菜ちゃんが訊ねた所、先生はいった。

「さつきちよつと話に出てた、私のせいで襲われかけた津^{つむぎ}細ちゃんね、あの子も引つ越し先が北海道なのよ」

『……』

恐らく、私を含め何人ががゾツとしたのだろう。妙な無音が、途端辺りを包み込む。

一気に雲行きが怪しくなってきた。

いや、普通にゼウスちゃんと津細ちゃんって子が現地で知り合つても限らないし、二人の下にフィール・ハンターズがやってくるとも限らない。

そもそも北海道は広いのだから、普通に考えればわざわざ三者が何か所に集まる偶然なんてないだろう。

ないはずなのだけど。

「何だか嫌な予感がします。何もなければいいのですけど」

普段は理想的に物事を考えるはずの木更ちゃんが、不安な顔をしていったのだった。

MISSION 25 | 天神（ゼウス）の寿司 / 卯の花（後半閲覧注意）

◆天神の寿司◆

私の名前は藤稔 天神。北海道某市に住む中学三年生。

そして、神（自称）である。

「おじさん、今日のお魚なのだー」

父から発砲スチロールを受け取った私は、今日も寿司屋の戸を開け、いったのだ。

店内はカウンター席が中心で、ボックス席は2〜3席程度。なのだが、まだ開店前だからお客さんはひとりもいなく、店主のおじさんが厨房を、娘の巳津紬が客席の準備をそれぞれしてたのだ。

津紬は今年14歳になる中学二年で、学校も同じ。私たる神の大事な後輩なのだ。

店主のおじさんは私を見て、

「おはようゼウスちゃん。今日もありがとうな」

「はっはっは、神の施しに感謝するのだー」

言いながら私は厨房の前に。そこで津紬が荷物を受け取ると、

「わあ、今日もすつごく重いよ。お父さん」

嬉しそうに言って、よいしょよいしょと厨房の奥にそれを置いたのだ。

私の父は漁師である。

特に、この巳寿司は父が昔からお世話になってる店で、獲ってきた魚を市場に卸す際に、いいものを優先して買い取って貰ってるのだ。

それは、年度代わりの頃に先代が病気で引退し、名小屋で修業を積んでいた息子が店を継いだ今でも変わらない。

「いやしかし、ゼウスちゃんの所は本当に神の施しだよ。君たちの船がなかったら今頃店を閉めなくちゃならねえ」

おじさんが言ったのを聞いて、

「篠壽司か」

「ああ。先代からの話だが、数年前にフィール・ハンターズの支部つてやつになってから、奴らはやりたい放題だ」

篠壽司というのは、本店のある北海道を中心に全国展開している巨大チェーン店なのだ。奴らは組織絡みの権力と財力にモノをいわせ、この辺りの市場や漁船と専属契約し常に良い品を独占し続けている。そのうえ自分たちが破格の安値で買い漁った分、残り物には篠壽司ブランドとして馬鹿みたいな高値で販売させるのだ。おかげで近頃、辺りの壽司屋や食堂は、篠壽司に劣る食材を高級店並みの値段で出すか、げんなりするほど質の悪い海の幸を手ごろな値段で出すしかない、どこも悲鳴をあげる事態なのだ。

「先代がやってた頃は、コネで他にも何件かこつそり横流してくれる業者もいたけど、今ではゼウスちゃんの船だけだよ」

そこまで言うてから、おじさんは難しい顔をして、

「聞けばゼウスちゃんの船は篠壽司と契約してないそうじゃないか。今この辺りは契約してない船はどの市場に卸しても冷遇されるといふのに」

なんて今更なことを聞くので、私は笑って返す。

「フィール・ハンターズなんかに負けたくないだけなのだ」

そう、私たちから夢月を奪ったフィール・ハンターズなんかには、なのだ！

「お父さん、お父さん」

ここで、津紬が興奮気味に戻ってきて、

「ゼウスちゃんのお魚だけど、美味しそうな秋刀魚が沢山入ってたよ」

「秋刀魚だって！」

するとおじさんも興奮気味に、

「獲れたのか、噂の秋刀魚を」

「バッチリなのだ」

私は満面の笑みでピースサインをしたのだ。

本来、いまの季節はまだ秋刀魚が獲れるような時期ではない。

しかし近年、毎年のように起こる異常気象のせいで、いま北海道で

は時期外れの秋刀魚豊作という珍事に見舞われている。

だが当然、市場では篠寿司が秋刀魚を独占しているため一帯の店では産地だというのにも手に入らない。まさに親交のある船に横流ししてもらえない状況なのだ。

「よし、津紬。早速一匹捌いて握ってみるか」

「ほんと？」

「ああ。ゼウスちゃんもどうだ？ お礼に食べて行ってくれ」

おじさんの誘いに私は、

「いいの？」

目を輝かせる。

「勿論だとも」

「なら、遠慮なく一貫頂くとするのだ」

何故なら秋刀魚は、一番の好物だからなのだ。

おじさんの作る秋刀魚寿司はとても美味だったのだ。わっはっはー！

実は私がこの巳寿司に通いはじめたのは、店主がいまのおじさんに代わってからである。

先代が店主をしていた頃は、私には特に父の仕事を手伝おうという発想がなく、父が直接卸していたのだ。

転機は、名小屋から引越してきた津紬との出会いだったのだ。

確か、それは3月終旬。ある春休みの日だったのだ。

その日私は、家から自転車で20分ほどの所にある岬に来ていたのだ。辺りは一面芝生が広がり、そこに灯台、かつて管理者が住んでいたのだろう廃家、屋根付きのベンチがぼつんぼつんと置かれている。先は切り立った崖になっており、遠くまで見渡せる一面の海は真下まで続いている。

私は、父が漁から帰ってくる日には決まってここから海を眺めるのが日課なのだ。

大人からは「危険だから行くな」と口すっぱく言われて続けてきた。確かに、この場所には仕切りのようなものが設置されてなく誤って

足を滑らせれば海に真っ逆さま。間違いなく命はないだろう。けど、水平線をじつと眺めてると、いずれ父の乗る船が見えてくる。その瞬間が昔から好きだったのだ。

この日の空は晴天だった。普段より一面の海が綺麗に見渡せ、程よい潮風が芝生をなびかせ、人気の無い静寂の中にさあさあとBGMを流す。

そんな時だった。

突如、ベンチの辺りから人の気配がしたのだ。

(誰なの？)

気のせいかもとは思ったのだが、私は気になって屋根の外から覗いてみる。そこには、ひとりの少女が眠そうに目をこすり、欠伸をしている所だった。恐らくさつきまでお昼寝をしていたのだろう。

恐らく年齢は私よりひとつかふたつ下くらい。髪の毛の長さはセミショート。ボリウムのある横髪をツーサイドアップに束ねており、それが垂れた犬耳のような可愛らしさをつくりあげている。そうではなくても、寝ぼけた眼差しもあつて無邪気で小動物じみた子に見えるた。

「そんな所で寝てたら、風邪をひくのだ」

私が話しかけると、少女はやつとこちらに気づき、

「わっ」

と、声をあげつつベンチから転げ落ちそうになる。

「危ないのだ！ 大丈夫なのか？」

私は慌てて中に。幸い、少女は大事には至らなかったのだけど、

「あ痛ー。危なかったー」

背もたれで肩を打ったようで、少女は軽くさすりながら、

「あれ、もしかして、ここ入っちゃ駄目な場所だった？」

「いや、問題ないのだ」

と、私は返しながらふと思う。地元の人なら、そんな事聞くまでもないはず。となると、

「もしかして、旅行先で家出してきたのか？」

「うん。旅行じゃないけど」

なんて言いながら、少女は「あーあ」と座り直す。

私は隣に座って、

「何があつたのだ？」

すると、少女は足をぶらぶらさせつつ、ため息交じりに、

「この前引越してきたばかりなのに、私のお家、明後日には夜逃げしなくちゃいけないんだって。ぶー」

「夜逃げ!？」

私は驚き、

「どうしてなのだ!？」

「分からないよ。お父さん、地元みんなに虐められてお仕事できなくなっちゃったんだって」

「え?？」

「私のお父さん、名小屋で寿司職人の修行を積んでただけど。この前、お爺ちゃんが急に死んじゃって、それでお父さんがお店継ぐために家族みんな引越してきたんだー」

「あ」

私も漁師の娘なのだ。この先の事は大体分かってしまった。

「でも、お父さんがお店の店主になったら途端にどこも良いお魚を売ってくれなくなつたんだって。だから、お寿司屋さん続けられなくて、借金抱えて閉店だって。歴史ある古いお店らしいのに」

「よくあることなのだ」

私は、怒りを吐き捨てるようにいった。そして、続けていったのだ。いま、この近辺の市場の現状を。フィール・ハンターズと篠寿司に支配されたこの街の事情を。勿論、私の家は無関係だなんて言うつもりはない。私は素直に「自分は漁師の娘だ」と告白したのだ。だから当然、

「なら、君のお家も私の家族を、私のお店をぶつ壊したようなものじゃん」

なんて批判は出る。

「否定する気はないのだ。父の船はフィール・ハンターズに魂を売ってないけど、おかげで良い漁場も奪われ船の維持費や燃料費までぼつ

たくられてるのだ。だから、収獲した魚を篠寿司に持ってかれはしないものの結局相場の値段では卸せないのだ。いまの我が家では篠寿司に魂を売ってない高級店を支援するのが精一杯なのだ」

「そんなの関係ないよ！ このままじゃ私たち死んじゃう！ 人殺し！ 鬼畜！ 悪魔！」

「ぐ、うううう」

彼女の言葉は、すごく胸に突き刺さったのだ。

そうなのだ。私と父は、夢月を奪ったフィール・ハンターズに魂を売りたいなくて、奴らの思う壺になりたくなくて、損しかないと分かって契約を結ばなかったのだ。だけど、目の前で奴らの犠牲者が心中を辞さない事態になって何もできないのであれば、結局奴らの思う壺に変わりないではないか。

だから、

「分かったのだ」

私は立ち上がったのだ。

「もうすぐ父の船が帰ってくる。そしたら頼んでみるのだ。君のお店に魚を卸せないかって。本来の相場は無理かもしれないけど、何とかギリギリの線で売れないか頭を下げてみせるのだ」

そこまで言って、私は少女の対面に歩み寄る。

「もし駄目だったら、一緒に夜逃げしてやるのだ。神のコネでも何でも使って、せめて心中しない程度にはサポートするのだ」

「それでも無理だったら？」

「無理だったら」

私は考えてから、わざと能天気になんて笑って、

「一緒に心中してやるのだ。大丈夫、死ぬ気でやればなんとかなるものなのだ。わっはっは」

結果、私は父に頼み込み、私が魚を運ぶことを条件に再び巳寿司に魚を卸すことを承諾。父曰く、ただでさえ余所者を支援する余裕がない上、新しい店主が本島の金銭感覚で卸値に文句を言ったためブチ切れて卸すのを辞めてしまったのだとか。

こうして、私の活躍によりひとつの家族を救うことができたわけな

のである。

で、その少女こそがともえ津つむぎ紬ぢゆうだったのだ。

——現在時刻10:30

時系列は現在に戻り、店主の秋刀魚寿司を堪能し、そのままカウンターでガラナ（北海道ではコーラ以上にポピュラーな飲み物なのだ）を飲んでくつろいでると、

「ゼウスちゃん。ありがとうな」

まな板を洗いながら店主がいうので、

「む、何がなのだ？」

「いつも娘の我俣に付き合ってくれて。あいつが無理言って頼んだのだろう、ウチに魚を卸してくれって」

「奴らの手先になりたくないだけなのだ」

私はからつと笑い、

「それに津紬は、何だか放っておけないのだ」

「アイツはいつまで経っても子供だからなあ」

店主が苦笑いする。

あの日以来、私は津紬にすっかり懐かれてしまった。

加えて新年度が始まり、学年は違えど同じ学校と分かってからは、何かと一緒に行動している。いままでは、背丈こそ学年で一番下というわけではない（150cmはちょっとだけ超えてるのだ）のだが、なぜか下級生からも年下に間違われるほど幼く映るようで、だから、やっと私に後輩ができたみたいで、何だか凄く凄く嬉しいのだ。

その中で分かったことだけど、津紬はとにかく純真で疑うことを知らない子だと分かったのだ。だから、誰か信頼できる大人（つまり私）が見張ってないと気が気でないのである。

「だが、あんな事があつては一人で外に出すなんて恐ろしくて気が気でならない」

「名小屋でのことか」

「ああ」

店主はうなずく。

聞くところによると、去年、津紬は前の学校で強姦未遂に遭ったらしい。不良の集団に囲まれ服を脱がされそうになったのだとか。結局、原因は不明ながら綺麗な体のまま解放されたし、津紬自身は無知が幸いして自分が何されたのかも分からず終ったらしいからいいものの。

「だから、いつもゼウスちゃんが一緒にいてくれるのは本当に助かるんだ。おかげで娘をのびのびと育てられる」

「私だって、そんな大事件を聞いたとあっては気が気でならないのだ。大丈夫、神に任せてくれればいいのである」

ちなみに当の津紬は、現在自室に戻ってTVゲームをしている。もちろん、後で私も合流予定なのだ。

「ところでおじさん、来週の握りコンテストの調整はどうなのだ？」とは、この地区で毎年開かれていた寿司の祭典である。

この辺りの寿司職人が自慢の一皿を披露し、競い合うこのイベント。全国的美食家や寿司協会の方々も審査員として顔を出すので、過去にも何度か入賞した店がミシユランに掲載される等、この地域の活性化に無くてはならない祭典なのである。未だギリギリの経営をしている巳寿司にとって、不況を脱出する最大のチャンスのひとつなのだ。

しかし、近年は篠寿司の独擅場が続いており、ここ数年ミシユランに一軒も掲載されない事態が続いている。どうにかして奴らを出し抜かねば地域としても巳寿司としても未来はない。

「やっぱり、勝負の鍵は秋刀魚だろうね」

当主はいった。

「恐らく今年はみんな噂の秋刀魚を目当てに来るはずだから、まず秋刀魚を出せないと話にならないだろう」

「なら良かったのだ。今日卸した秋刀魚を使えば」

「いや」

店主は首を振り、

「秋刀魚というのは、鮮度が落ちるのが凄く早くてね。今でこそ秋刀魚の生食が一般流通しているが、昔は船の上の漁師しか食べられな

かった程なんだよ」

「あ」

そうだったのだ。

「恐らく今日卸した秋刀魚では、コンテスト当日まではもたないだろうね」

「そうなのか」

店主のことだから、私が訊ねるまでもなく可能な限り日持ちさせる手段はとったのだろう。その上で店主は当日にあの秋刀魚は使えないといったのだ。

「大丈夫なのだ。当日にはまた新鮮な秋刀魚を用意するのだ」

私は努めて笑っていった。

「だからおじさんは、安心して秋刀魚がある事を前提に当日のメニューを考えて欲しいのだ」

「ありがとう、ゼウスちゃん」

店主も努めて笑みで返し、

「つと、そうだ。悪いけど今から用事を頼んでも構わないかな？」

「何なのだ？」

「実はマグロを切らしちゃってね。カジキマグロで構わないから、2時頃になったら津紬と一緒に市場で仕入れて欲しいんだ」

いまの時間に市場に行っても、低品質の割に高値の魚しか手に入らない。巳寿司のような店だと、スーパーでいう閉店直前のタイムサービスを狙うしかないのだ。

「分かったのだ」

私は快諾したのである。

—— 現在時刻 14:25

事件は起こったのだ。

「あれ？ ねえゼウスちゃん、おじさんの船に誰かいるよ？」

それは、津紬と一緒に市場に向かう道中のこと。停めてある父の船の近くを通りかかった時だった。

明らかに船員には見えない姿の男が3名ほど父の船の前に立って

いたのだ。間違いない、あれは。

「フィール・ハンターズなのだ」

同一個体ではないと思うが、名小屋でかすが様争奪戦をした際、マンション1Fのエレベーター前で無双した奴らと全く同じ格好をしている。

しかし奴らは一体何を。

その直後だった。

「ククク、やれ。《ボーガニアン》」

3人は同時に目玉にボウガンを付けたモンスターを召喚すると、船にボウを放ち始めたのだ。しかも、モンスターの攻撃は実体化し、見事に父の船に突き刺さる。

「あつ」

驚く津紬。

「お前たち、一体をしてるのだ！」

私は気付けば奴らの下に駆け出していた。

「チツ、何だお前は」

反応する男共。私は走りながらデュエルディスクを装着。

「何だか分からないが、死ね！」

とかいって、躊躇いもなく《ボーガニアン》のボウを私に向けて放つも、私はフィールで動体視力を上げ、ひよひよいと避けながら奴らの懐へ。そのまま放射線タイプの赤外線を飛ばし、纏めて強制デュエルに巻き込ませる。

「なつ、避けるお前ら！」

結果、男のひとりが後ろへ飛びの退くも、残りのふたりは赤外線を浴び強制デュエルモードに。

赤外線を浴びたうちのひとりが、

「俺たちに構うな！ お前は引き続き任務に当たれ」
「分かった」

逃した男は再び《ボーガニアン》を船に向け、破壊活動を再開させる。

「ゼウスちゃん、いまのつて」

津紬が私の後ろにやってきて、私の服をぎゅっと握る。

私はいったのだ。

「フィールなのだ、噂で聞いたことがあるはずなのだ」

「え？ でもそれって都市伝説でしょ？」

「実在するのだ。それよりも」

と、津紬の手を取り、私の背にぎゅっと抱きしめさせる。

「津紬、この神から離れないでくれなのだ」

「う、うん」

うなずく津紬。

男がいった。

「デュエルは2対1の変則スピードデュエル。お互いに第一ターンは

ドローフエイズとバトルフェイズを行なえないルールでいいな」

「分かったのだ。なら、人数が1人少ない私は先攻を貰うのだ」

私がいうと、

「良かろう。だが俺たちはそれぞれ4000のライフを持ち、マス

ターデュエルのフィールドを共有で使わせて貰う」

「分かったのだ」

お互い、さっさとデュエルを終わらせたいからだろう。どちらも相

手の要求にノー言わず、手早く今回の専用ルールを決定し、

『デュエル！』

と、叫んだのだった。

ゼウス

LP4000

手札4

□ □ □ □

□ □ □ □

□ — □ □

□ □ □ □ □ □

□ □ □ □ □ □

フィール・ハンターズA／フィール・ハンターズB

LP 4000 / 4000

手札 4 / 4

「ゼウス、だど？」

ここで、デュエルを免れた男が呟きいったのだ。

「どこかで聞き覚えがあった気がする。お前たち、万一の為に警戒はしておけ」

しかし、当のふたりは、

「大丈夫だろ。こんなガキ相手に負ける気はない」

「昼食にパインサラダもステーキも食べる予定はない」

と、明らかに耳を貸さない態度。

「神のターンなのだ」

先攻の私は、最初の4枚の手札を確認し、

「モンスターをセット。さらにカードを2枚セットしてターン終了なのだ」

「俺のターン、ドロー……はできないんだったな」

で、フィール・ハンターズ側のターン。

男は早速、

「《ボーガニアン》を通常召喚」

と、先ほど父の船を破壊していたモンスターを呼び出し、

「カードをセット！ ターンエンドだ」

早々とターン終了を宣言。そこへ私は伏せカードの1枚を表向きにし、

「ターン終了時、速攻魔法《コズミック・サイクロン》を発動なのだ！」

「《コズミック・サイクロン》だど？」

困惑する男に向かって私は、

「ライフを1000払い、その伏せカードをゲームから除外するのだ」
ゼウス LP 4000 ↓ 3000

このカードは1000ライフをコストに、魔法・罠カードを1枚除外する速攻魔法なのである。《サイクロン》と違って効果破壊をトリガーとする相手カードの影響を受けないかわりにコストがついて考

えなしに乱用すると痛い目を見るカードなのである。

だが、この神は崇高なる考えの下、このカードを遠慮なく使用。

「ちつ、ミラーフォースがやられたか」

「自分からライフを削ってくれたんだ。問題ない、いくぞ！ 俺のターンだ！」

続けて、もうひとりのフィール・ハンターズの男のターン。

「ここでパートナーの《ボーガニアン》の効果。俺たちのターンのスタンバイフェイズ毎に相手ライフに600ポイントダメージを与える。喰らえ！」

《ボーガニアン》は露骨に私ではなく津紬を狙ってきたが、私は彼女を抱えながら体を逸らす。ボウは私たちの横を通過し、適当に蒸発したのだ。

「津紬、大丈夫なのか？」

「うん」

「良かったのだ」

今更ながら、デュエルを仕掛けに行く前に津紬を避難させるべきだったのだ。いまとなつてはデュエルに巻き込めなかった3人目が狙ってくるとも限らないので、こうして護るしかできないのであるが。

ゼウス LP3000↓2400

とはいえ、ルール上では私はしつかり被弾した扱い。600ポイント分私のライフは削られる。

「で、俺も《ボーガニアン》を召喚だ」

フィールドに現れる2体目の目玉。

「そしてカードを1枚セット。ターン終了だ」

「速攻魔法《コズミック・サイクロン》なのだ！」

「2枚目だ」とつ

ここで私は再び《コズミック・サイクロン》を発動し、男が伏せたばかりのカードを今回も除外する。カードは《神の宣告》だった。

ゼウス LP2400↓1400

当然、神のライフはさらに1000減少し、結果。

「クク、ハハハハハ！」

男のひとりがたまらず笑いあげる。

「こいつ、俺たちが《ボーガニアン》を出してるというのに自分からもライフを2000も削ってきやがったぞ」

「全く。ちんちくりんの小坊ですでに自殺願望とは先が思いやられるな」

同意して笑うもうひとりの男に、

「待つのだ！ 神は来年高考生なのだ！ 小学生ではないのだ！」

「嘘っ」

驚く男共。

「嘘ではないのだーっ！」

私は叫んで否定するも、

「もういいのだ。私のターン、ドロローである。このターンからドロフエイズとバトルフエイズが解禁されるのだ」

私はカードを1枚引き、

「ふっふっふっ、なのだ」

今度は私が不敵に笑ってみせる。

「一応反応してやろう。何がおかしい？」

「私が伊達や酔狂、ましてや自殺願望で《コズミック・サイクロン》を連発したと思ってるとは片腹なんとか痛いなのだ」

「ゼウスちゃん、片腹痛いだよ。なんとか要らないよ」

こっそり津袖が補足してくれたが、そこは問題ではないのだ。

「見て驚くのだ。このゼウスの、神のデュエルスフィックスを！ スキル発動、《サイバー流奥義》！」

「そ、そのスキルは!？」

驚く男共。

「思い出した！」

と、ここでデュエルをしてない男が叫ぶ。

「どこかで聞いた名前だと思ったら、奴は名小屋で俺たち精鋭を相手に百人斬りをやってのけた女だ」

「なんだって！」

更にデュエルしてるほうの男共は驚く。

私はいった。

「はっはっは、恐れいったかフィール・ハンターズ共！ この神を侮つて相手した不運を悔いるがいいのだ！」

そういつて私は、ソリッドビジョンで2枚のカードを手元に発生。フィールは込めていないので、実際に触れたりできないのだが、

「《サイバー流奥義》は、私のライフが3000以下の場合に発動可能。4000を下回っているライフ1000につき1体、ゲーム外から《プロト・サイバー・ドラゴン》をフィールドに出すのだ」

「まさか、その為に《サイクロン》でいい場面をわざわざ《コズミック・サイクロン》を使って」

「ご名答なのだ」

私はうなずく。その上、2回も使ったおかげで相手の伏せカードはゼロ。手札誘発さえなければ相手の妨害を気にせず動き回れるのだ。

「我がライフと4000の差分は2600、私は2体の《プロト・サイバー・ドラゴン》を出すのだ」

スキルが無事発動されると、ソリッドビジョンでできた2枚のカードは私のデスクに転送され、場に2体の機械竜が姿を現す。攻撃力は1100と低いのであるが、

「《プロト・サイバー・ドラゴン》はフィールド上で《サイバー・ドラゴン》として扱うのだ。そして魔法カード《パワー・ボンド》なのだ！ 私は場の《プロト・サイバー・ドラゴン》2体を融合。プログラム起動、神アップデート。機械竜の試作品たちよ！ いまこそ交わり、更なる高みに進化するのだ！ 融合召喚！ 神に従うのだ、《サイバー・ツイン・ドラゴン》！」

2体の機械竜が混ざり合い、出現したのは双頭の機械竜。その攻撃力は2800なのだが、

「《パワー・ボンド》で融合召喚したモンスターは、その元々の攻撃力分だけ攻撃力が更にアップするのだ」

こうして出現した《サイバー・ツイン・ドラゴン》の攻撃力は、

《サイバー・ツイン・ドラゴン》 攻撃力2800↓5600

「ぐ、5600だどっ」

驚愕する男共。私は続けて、

「だが、強力な効果には当然コストが付きまとうものである。《パワー・ボンド》を発動したターンのエンドフェイズ時、私はこの効果でアップした攻撃力分のダメージを受けるのだ」

「ならこのターンを耐えければ」

と、希望を口にする男に向かって、

「だから、神はこうするのである。《サイバー・ジラフ》を反転召喚、リリースして効果発動。ターン終了時まで、私が受ける効果ダメージは0になるのだ」

「なっ」

途端、顔を青くする男。

「だがしかし、こんなのは保険でしかないのだ。このターンで神は決着をつけるのだ！ バトル！ 《サイバー・ツイン・ドラゴン》で《ボーガニアン》に攻撃！ エヴオリユーション・ツイン・バーストなのだっ！」

サイバー・ツインの口から放たれる、ブレスの体を成したビーム砲撃が《ボーガニアン》を直撃。

「《ボーガニアン》の攻撃力は1300、つまり4300の超過ダメージを受けるのだっ！」

「うわあああああああ！」

フィール・ハンターズA LP4000→0

なんだか凄くテンプレな断末魔の叫びをあげながら、ひとり目のライフは0に。

「くそっ、ならば次のターンで、次のターンで何とか」

とか言ってるが、

「そんなもの無いのだ。《サイバー・ツイン・ドラゴン》は1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できるのだ」

「なっ！」

「《サイバー・ツイン・ドラゴン》でもう1体の《ボーガニアン》に攻撃！ エヴオリユーション・ツイン・バースト！」

二度目の砲撃が最後の《ボーガニアン》を破壊し、
「こんなふざけた奴に俺たちがあああああああああ！」

フィール・ハンターズB LP4000↓0
もうひとりの男のライフもゼロに。

「はっはっは、粉碎！玉砕！大喝采！ 強靱！神！最強！ ワハハハ
ハハ、わははははなのだー」

私はその場で高笑いしたのだ。

「げほっげほっ」

で、笑いすぎてむせたのだ。

「ちっ、《強制脱出装置》発動。お前たち、一時退散するぞ」

私が咳込んでる間に、デュエルしてなかった男がカードを発動。
ファイルの全損した他の男共を連れてその場から退散してしまった。

「げほげほ、ま、待つのだー」

私は手を伸ばすもすでに遅い。しまったのだ、調子に乗り過ぎて逃
がしてしまったのだ。

「ゼウスちゃん、大丈夫？」

津紬が私の背中をさすって訊ねる。

「だ、大丈夫なのだ」

おかげで私は少し楽になりつつ、

「津紬、それより我が父の船は」

「それが」

津紬が船に視線を向ける。

幸いにもエンジン部の損傷はないせいと現状の爆発は免れたが、至
る所に穴が開き抉られた傷が残り、間違いなく修理が必要な状態だっ
た。

私は、軽い絶望と共に、

「これでは、しばらく海に出るのは不可能なのだ」

「そんなー」

津紬が嘆く。

「じゃあ、コンテストの秋刀魚は」

「届けられないのだ」

まさか、自分の傘下に入らない者をここまで徹底的に潰してこようとは。

「畜生！ 許さないのだ篠寿司」

「ゼウスちゃん、船の修理代は」

訊ねる津紬に私は首を横に振る。

このままでは巳寿司のコンテストを支援する以前に、父の仕事さえも廃業なのだ。今度は私たちが夜逃げしないといけない事態なのだ。そんな状態を津紬も察したのだろう。

「どうしよう。コンテストの賞金があれば船を修理させれるけど、このままだとコンテストも出れないよー」

と、本来なら巳寿司を維持する資金源だったはずの賞金を、船の修繕にあてようとする発言。気持ちは嬉しいものの、津紬の言う通りこのままでは。

「あ」

「ゼウスちゃん？」

「いや、待つのだ。もしかしたら」

私は窮地の中で浮かんだ「それ」が可能かどうか頭を張り巡らせ、
「津紬、神にひとつ考えがあるのだ」

私はいった。

「もしかしたら、最高の秋刀魚を手にコンテストに参加できるかもしれないのだ！」

コンテスト当日。

会場となった市内の公民館。そのホールの一室には、設置された長テーブルを囲むように地区中の寿司職人が待機していた。しかし、神は知っているのだ。その過半数が篠寿司もしくは、そのチェーン店に成り下がった寿司屋の職人であることが。

私は、手伝いとして津紬と共に店主のおじさんの隣に立っていた。

「それでは、これより寿司コンテストを始めます」

司会と思われる男がいった。もちろん、彼も篠寿司によってすでに買収済だ。

「寿司屋の技術口上と、国内に向けた地域活性化の為に始まったこのコンテストも今回で——回目となり——であり——」

そんな男が、半ば定型化した挨拶を述べる。が、すでに地域ではなく篠寿司のアピールの為に動いてる男が何を言っても耳に入るはずがない。実に滑稽なのである。

「では、ルールを説明します。材料は自由、皆様には己の最も自身のあたる三貫盛りを十皿作って頂きます。それを、審査員の手により技術・味・ネタの総合で評価させて頂きます」

との事なのだ。

「では、始めてください」

司会の言葉と共に、職人たちは一斉に調理を開始する。もちろん巳寿司の店主もなのだ。

私は他所の職人のネタを確認する。中には季節のネタ三貫で勝負する職人もいたが、殆どはマグロ・季節のネタ・秋刀魚の組み合わせだったのだ。しかも、見る限り秋刀魚を保存している容器は全く同じクーラーボックス。間違いなく篠寿司が提供したものである。

一方、店主が用意した魚は、全て同一のネタであった。

「時間です」

司会の言葉と共に調理は終了。周囲を確認すると、殆どが規定の量の三貫盛りを完成させていたが、中には肝心の秋刀魚が痛んでしまい何とか応急処置もしくは辞退に陥ってしまう者も。一瞬、神たる私は「はっはっは、ざまあなのだ」と思ったが、すぐ失敗した職人が全員篠寿司に魂を売らず頑張ってきた者たちだったと気づき、私は心の中でも不幸を喜んだことに深く反省したのだ。

結果的に、コンテストに参加した職人の中で、トラブルなく三貫盛りを十皿握り終えた職人は、篠寿司以外では5人にも満たず、1名を除いて秋刀魚を使わなかった者たちのようだった。

「それでは実食を始めます」

司会がというと、審査員として招待された美食家や寿司協会の方々動き出す。とはいえ、その半数は篠寿司に買収されてるらしく露骨に奴らを褒め称えるコメントが飛び交い、他所の三貫盛りを見ては、

「これは駄目だ」「とても食べられたものではない」「言うならアイドルグループの中にしれっと混ざるスベスベの実を食べる前のア○ビダを見てるようだ」

とか酷いコメントが飛び交う。

でもって、奴らの誘導のまま審査員は篠寿司の寿司を実食し、

「うむ。美味しい」

「さすがは篠寿司。噂とはいえ季節外れの秋刀魚をここまで美味しく調理するとは」

「しかし、こちらの秋刀魚は少し生臭みが」

それも奴らの手の内だったのだらう。審査員の感想を聞き観客席からひとりの男が前に出ると、

「生臭みですか？」

「ええ。まあ秋刀魚にはどうしても付きまとう特有のものですが」

「失礼、私は彼を育てた親方です。失礼ながら該当の1貫を頂いてもよろしいですか？」

と、許可を貰い、親方を名乗る男は秋刀魚寿司をひとつ食べ、

「大変失礼致しました。貴方の舌にこのような出来損ないを与えた彼には、篠寿司の看板を名乗る資格など御座いません。金輪際、破門とし寿司を握らせないように致します」

と、のたまい、

「他の方々も篠寿司の名を背負う職人に御不満があれば遠慮なく申し出てください。我々篠寿司は常に手抜きなし全身全霊の意識で、他の寿司職人の一歩先を行かなくてはなりません」

などと言い、篠寿司の目標の高さをアピール。実際は元々契約を打ち切る予定だった職人をコンテストの場で晒し者にし、職人生命に深い汚点を残させ再起不能にしつつ、篠寿司に適当な職人は必要ないという設定で好感度アップを狙ったという所だろうか。

恐らく支給されたクーラーボックスか秋刀魚に「生臭みが残る」よう細工がされていたのであろう。もしくは、調理工程に指示があったのかもしれない。

「待ってくれ！俺は篠寿司に支給されたものをその通りにやっただ

「けだ！」

「己の技術不足を上への責任にするか愚か者が！ 貴様に寿司職人を名乗る資格などない！」

どちらにせよ、会場はこのわざとらしいマッチポンプによって篠寿司劇場の壇上に早変わり。

「お恥ずかしい所を申し訳ありません。1号店の彼の握った寿司でしたら生臭みも無いでしょう。どうかご賞味下さい」

でもって、篠寿司の中で優勝を勝ち取るシナリオになってるだろう1号店の寿司を審査員が食べては、

「これは凄い、見事な腕前です」

「3号店の寿司はワインで漬けて込んでるのか」

「いやあ見事です。篠寿司の秋刀魚はどれも生臭みがなく脂が乗り、ネタの質だけに甘えずそれぞれが創意工夫を凝らしてる」

と、(買収してるのだから当然だが)篠寿司の寿司を絶賛する審査員たち。

「おや、こちらは篠寿司ではないですね。巳寿司ですか」

審査員のひとりが、ようやく巳寿司の三貫盛りに注目する。

「これは、全部秋刀魚！ 秋刀魚尽くしですか」

すると、すかさず他の審査員が、

「秋刀魚だけを並べれば優勝できると思ったんでしょう。このような輩は後回しにしても構いませんな」

と、露骨に点数下げにかかる。どうやら他の寿司同様、篠寿司以外の寿司は一口も食わずに審査を終えるつもりらしい。もしくは、わざと後回しにして質が落ちるのを待ってから残りの寿司を食べる気だろうか。

しかし、最初に巳寿司の三貫盛りに反応した審査員はいった。

「いや見てくれ。どの秋刀魚の握りも工夫を凝らしてある。それに部位に違うのでしょう。面白い、僕は食べさせて頂きます」

そして、左端の寿司を手に取り口へ放り込む。直後、

「美味しい！」

「バァン！」

と、審査員の手を叩く音が会場内に響き渡る。

直後、会場内がざわざわと騒ぎ出し、

「出た！　『柏手のヤツ』だ」

「何なのだ？」

私がこっそり訊ねると、店主は、

「寿司協会の名物審査員のひとりだよ。本当にうまいと思ったときには思わず柏手をうってしまふ癖があるんだ。まさか今日のコンテストに呼ばれていたとは」

「なるほどなのだ」

しかも、その『柏手のヤツ』が我々巳寿司の秋刀魚で柏手を打ったのだ。これは流れが完全に巳寿司に傾いてきたのだ。

「何だこの秋刀魚は、創意工夫をさることながら、ネタからして篠寿司のものとは全然違う！」

『柏手のヤツ』の感想を前に、

「なにつ」

「なんだとっ」

先ほどまで篠寿司を絶賛していた審査員もこぞって寿司をつまみ始め、

「うっ！」

全員硬直。直後、

「物凄い脂だ。それでいて一点の曇りもない鮮やかな旨み」

「まるで生きた秋刀魚が口の中で跳ねるようだ」

「これに比べると篠寿司の秋刀魚は、スカスカの雑巾を泥水で絞ったようなえぐみの塊だ」

言った直後、ハツとなり顔を青くする審査員。その舌その魂は嘘をつけず、つい買収された身であるに関わらず決定的に「巳寿司のほうが美味しい」と言ってしまったのである。

「なんだとっ！」

で、さっきの自称親方が再び前に出ると、

「そのような筈はない、この近海で篠寿司の秋刀魚より美味しい秋刀魚など」

と、今度は許可を取らずに巳寿司の秋刀魚の握りを一口。
「な」

自称親方は驚愕とばかりの顔をみせ、

「何だこれは、今年の秋刀魚でこれほど脂の乗った秋刀魚を食べたことはない。巳寿司！ これは一体何なのだ！」

こちらを睨みつける。

「ふっふっふ」

「ここをやつと、私は神々しく高笑いし言ったのだ。

「篠寿司の馬鹿舌でも気づいたか！ その通り。実はこの秋刀魚は、去年獲れた季節の秋刀魚なのだ」

「な、去年の秋刀魚だつて」

驚く自称親方を前に私は続けて、

「確かに、いまこの地では異常気象のせいもあつて時期外れの秋刀魚が大量に獲れ話題になっている。しかし、いま獲れる秋刀魚は所詮季節外れの魚、本来の時期に獲れる秋刀魚と比べて味という点では一歩も二歩も劣るのだ。対し、去年の秋刀魚は同じく異常気象の影響で素晴らしく脂の乗った最高の秋刀魚だったのを皆覚えているだろう。これが、その去年獲れた最高の秋刀魚なのだ！」

「馬鹿な！ ただでさえ傷みやすい秋刀魚だ。それを、どうすれば去年のものを今日までこのレベルの鮮度で保存できる」

「いいえ、去年どころではありません」

柏手のヤツが横から訊ねる。

「僕の舌が覚えている限り、この秋刀魚は去年市場に並んだ秋刀魚より更に鮮度が良い。一体どうすれば、こんな秋刀魚を」

「その正体は、これが船の上で釣り上げた直後の秋刀魚を処置したものだからなのである」

私がいうと、柏手のヤツは「えっ」となりながら、

「つまり、俄には信じがたいことですが、貴方は僕たちが食べたこの秋刀魚の握りが、まさに釣りたてをその場で捌いて食べたものと変わらない鮮度だと言いたいのですか？」

「大方その通りなのだ。そして、篠寿司でも実現不可能なこの鮮度維

持技術を、我々巳寿司は持っているということなのである」

元々、娘の秋刀魚好きを知ってた父は、毎年季節の秋刀魚を釣り上げると、市場に卸す分とは別に少量ずつ私用の秋刀魚を保存してくれていたのだ。そんな中、私は去年、従妹の藤稔 地津よりファイルという技術を教えて貰い、結果ファイル・カードの《タイムカプセル》を用いた画期的な保存方法を手に入れたのである。

「これは決まりですね」

柏手のヤツがいった。

「今回の寿司コンテスト、優勝者は巳寿司になります！」

直後、会場が湧いた。

津紬は父親の胸にしがみつぎ、泣いた。

私は、

「これにて一件落着。わっはっはなのだー」

水○黄門みたいな高笑いをあげたのだった。

そんなコンテストの帰り。

「ゼウスちゃん、早く早くー」

まだ片付けが残ってるという店主を会場に残し、津紬の強い希望で私たちは一足先に我が父の下に向かっていたのだ。

会場のホールを出て、公民館の廊下を進む私たち。

前方で津紬が手を振って急かすので、私は小走りで追いつきながら、

「急がなくても平気なのだ」

なんて乾いた笑いで応じる。まったく、津紬はいつまで経っても子供なのだー。

ちなみに、いまの津紬は、普段私がやってると全く同じ行動をMISSION 19参照してるのだが、残念ながら私がそれに気づくことはない。

だから、

「ぶー。いつもはゼウスちゃんが私を急かすのに」

なんて言われても、

「神は大人で神だからそんな子供らしいことはしないのだ」

とか返事しちゃうのだ。実際はお互い同じくらいやってるのだが、

当然双方気づくことはなかった。——最期まで。

「もう、先行っちゃうよ」

待ちきれず、私と対面したまま後ろ向きに走る津紬。すると、前方に一組の男女が立っているのに私は気づき、

「あ！ 津紬、後ろ！」

「ふえ？」

言われて振り返るもすでに遅く、津紬は前方の男に衝突してしま
う。

「きやつ」

「うわっ」

かなりの勢いが入ってたのだろう。お互い身構えてなかったのもあり、双方とも床に転がってしまふ。

「津紬、大丈夫なのか？」

駆け寄る私。同様に相手側も女が男の様子を覗き込み、

「社長、大丈夫ですか？」

「俺は大佐だ」

「……。大佐、大丈夫ですか？」

と、やりとりしたのが聞こえる。なお、二度目の「大丈夫ですか」は呆れも入った冷やややかな声だ。

一方、

「私は平気ー」

言いながら津紬は打った尻を「いたた」とさすりながら立ち上がる。

女がいった。

「ちよつと、どこ見て歩いてるのよ」

「ごめんなさいなのだ」

今回は明らかに私たちの不注意。謝る私。しかし、

「あれ？」

「なによ？」

「いや、何でもないのだ」

津紬にぶつけられた男を見て、私はどこか見覚えがあるような気がしたのだ。ベレー帽を被り眼帯をつけ、迷彩柄のスーツを着た30代

くらいの男だった。この年でコスプレは痛いのだ。

「俺は大丈夫だ」

で、その男は立ち上がると、

「優勝した巳寿司の子たちだな。あれだけアウエーの中で一番になれたのだから浮かれても仕方ない」

「だからってぶつかるのは」

「いいんだ。大依二等兵」

「はい」

女は押し黙る。かと思いきや、

「……って、私二等兵ですか?! この前は軍曹でしたよね?」

「気分だ」

「気分で変えないでください。あなたは課長や部長を平社員呼びするんですか! 私は、平ですけど」

と、別の所で言い合いが。

「津紬、行こうなのだ」

私は小声でいった。

「うん」

と、津紬もうなずく。そして、もう一度ふたりでごめんなさいしてから、この場をそそくさと立ち去った。

女は私たちを許してないらしく、何となく威圧を感じて後ろを振り返ったら、私たちの後ろを冷え切った視線で見下ろしていたのだ。た。

「ねえ、ゼウスちゃん」

ホールを出てから、津紬はいった。

「私、さっきの人どっかで見えた気がする」

「津紬もか。実は神もさっきのおじさんに見覚えがある気がするのだ」

「ううん」

津紬は首を横に振り、

「私は女の人のほう。どこで会ったかは思い出せないけど」

「ううむ。神はそっちに見覚えはないのだ」

茶色に染髪されたセミロングヘアに、中肉中背のおっぱいぼいん美人さん。間違いなく私の知り合いにそういう人はいないのだ。

「そっかー。じゃあ本当誰なんだろう」

「わからぬ」

私は返事しながら、

「だが、何だか嫌な予感がするのだ」

神の予想は当たった。それも最悪な形で。

その日の深夜、巳寿司は放火の被害に遭った。

店は全焼、店主は無事救助され現在入院中。しかし、煙を吸って手
に後遺症を残してしまったのだ。

もう二度と寿司は握れない。

そして、津紬は行方不明になった。

◆卯の花◆

「おじさん、ゼウスなのだ」

数日後。私は病室の戸を叩き、内側から反応を確認した所で中に入る。

「やあ。ゼウスちゃん、元気かい？」

ベッドで横になっていた店主は、私と目があうとゆつくり半身を起こした。火傷も幾つか負ったらしく体中に包帯を巻き、それ以上に娘の安否が分からない心労で頬の肉が削げ落ちたように映る。

「私は大丈夫なのだ」

もちろん、本当は大丈夫なはずがない。寿司コンテストの賞金は店主の入院費と津紬の捜索費にまわり、船の修理は不可能になった。父はハローワークに通い働き先を探してるが、復帰の目途は立っていない。そのうえ篠寿司が手をまわし、近いうちに「父が船を不法投棄した」ことにさせられると噂もあるほどだ。

「それは、それはなによりだ」

が、店主は私の言葉をそのまま受け取り、つくり笑いを浮かべて返す。もちろん、店主もこちらの現状は耳に挟んでるだろうが、他所の

家の心配を本気でする余裕なんてないのだ。

「ゼウスちゃん。津紬は見つかったかい？」

「いや」

私は首を横に振る。

「私なりに街中を走り回って聞き込みもしてるのだが、一切情報なしなのだ」

だからといって、私たちが動かないと恐らく津紬は一生見つからないだろう。

一応、事件として処理された以上捜索には警察も関わってるのだが、明らかにこの事件に対し消極的なのだ。原因は容易に推測できる。事件の犯人は篠寿司かフィール・ハンターズの誰かであり、奴らが警察機関に圧力をかけているのだ。

「悪いねゼウスちゃん。君のおうちも大変なのに、毎日毎日津紬を探してくれて」

「友達を助けるのは当然なのだ」

言いながら私は、見舞い品をベッドのそばに置いて、

「それじゃあ、また行ってくるのだ。休憩は終了なのだ」

と、病室を後にした。

もし情報提供があれば店主の下に届いてると思ったが、やはり今日も成果はなしだったのだ。

病室は3階だったので、私はエレベーターが設置されたフロアへと進む。すると、

「失礼。藤稔 天神ゼウスだな」

エレベーターのボタンを押そうとした所、私は突然ひとりの男に話しかけられたのだ。

「そうなのだ。あ」

振り返り、私は気づく。

男は、寿司コンテストのときに津紬と衝突した軍人コスのおじさんだったのだ。

「津紬さんのことで手短かに話したいことがある。中で話そう」

男はそう言ってエレベーターを開けた。一瞬、私は密室に連れられ

ることに警戒を覚えたが、津紬の名を出された以上、罨と思っても断るわけにはいかない。

「わかったのだ」

私はうなずき、男と一緒に中に入った。

男が「1階」のボタンを押すと、程なくしてエレベーターのドアは閉まり、動き出す。

「俺はフィール・ハンターズの緒方おがた銃ライフル。普段は名小屋で活動している」

「フィール・ハンターズ!? それに名小屋、あっ!?!」

ここで、やっと私は気づいたのだ。この男は、名小屋駅で金玖を使って私たちを拘束しようとした畜生なのだ。しかもロリコンなのだ。

エレベーターが1階に着く前に話を終わりたいのだろう。男は続けて早口でいった。

「君の連れ、津紬は岬の廃家に拘束されている。もちろん罨だ。恐らく助けに向かった所で被害者が増えるだけだろう。自分の命が惜しければ、あの少女のことは諦めろ。いいな」

ここで、エレベーターは1階に到着しドアが開く。

「以上だ。手間をかけたな」

男はいつて、一足先にエレベーターの外に出る。

「待つのだ」

私は、男を追いかけいった。

「どうして忠告するような事を言うのだ。お前たちが用意した罨なら、わざわざ罨とまで伝えずこの神を向かわせればいいではないか!」

すると男は背を向けたまま、

「俺はこの作戦に反対だった。故に、お前に伝えるという俺の仕事を果たしたついでに、ほんの少しだけ反抗に出ただけだ」

と、言い残して今度こそこの場を去ったのだった。

私は一度病室に引き返し、先ほどの内容を報告してから、岬の廃家に向かうことにしたのだ。

——現在時刻 11:30

この辺りで廃家のある岬かというと、思い当たる場所はひとつしかない。

津紬と初めて会った、灯台のある崖上である。

私の推測は当たったようで、普段は鍵がかかって入れないのだが、この日は解錠されており、中に進むとかび臭い匂いが鼻を刺激する。

内装は思ったより立派な一昔前の一般家屋だった。

まず、玄関をあがってすぐ左側に畳の和室が見える。どうやらふすまを挟んだ二部屋分の間取りになってるらしい。それなりの広さもあり、廊下を出入りする引き戸も手前と奥の二か所。デュエル・リアルファイト問わず戦闘行動を行う場合はなるべくこの和室で行いたいのである。逆に廊下は危険なのだ。ほぼ一直線上横幅が狭いため、挟み撃ちに遭ったらひとたまりもない。さらに、この廊下は突き当たりで左右に広がったT字の構造をしており、玄関からの情報以上に他の部屋と繋がってる可能性が高い。その場合は更に廊下で挟み撃ちに遭う可能性が大幅に上がるのだ。

また、右側にはトイレ、脱衣所、そして消去法で恐らくリビングがキッチンと思われる部屋が戸の閉じた状態で順番に伺えた。左側の和室と廊下の中の壁に不自然なスペースはあったが、階段らしきものは見当たらなかった。

(さて、なのだ)

こういう時、以前地津や冥弥との3人で遊んだTRPGというゲームではまず目星と聞き耳を行うのが常識だったのだ。今回は現実ではあるが、私はまず目と耳で不審な点がないかを確認してみる。

結果。まず埃のかぶった床からは人の足跡らしきものが幾つも見つけた。足跡の様子から素足ではなく靴で直接行き来しているらしい。さらに、よく耳を凝らすと和室の死角から人の気配を発見した。恐らく部屋に踏み込んだ直後、または素通りした背後を狙う算段なのだろう。さらに気配は他にも幾つかある模様。

(うむ)

私は、無警戒のフリをして、和室の中に足を踏み込む。直後、フィール・ハンターズの男が1名、私に肉薄しながらスタンガンを押し当てようとする。私は彼の後ろに光線銃を構えた男が2名いるのを捉えた上で男の攻撃を回避。腰から秋刀魚の形をしたビームサーベルを抜き、斬り払う。さらに、残りの男が撃った光線銃の攻撃をフィールで耐え、代わりに秋刀魚の形をしたビームサーベルから光線を放って撃ち抜いた。

いま私が装備している秋刀魚の形をした武器は、私と地津の合同で開発した武器である。秋刀魚に挿した串を模した剣の握り手と、尻尾を模した引き金を持ち、ビームサーベルであると同時に光線銃として口から刀身を発射することもできる。なお、秋刀魚の形状は神ならではの伊達や酔狂なのだ。

私は、倒した3人に外傷がなくショックで気絶してるだけなのを確認してから、神経を張り巡らせながら和室を進む。思った通り、ふすまの先の和室は突き当りで戸を挟んで廊下と繋がっていた。更に2名ほど倒した所でこのフロアには他に敵がいなかったことを確認。もちろん、敵の気配は消えていないので玄関からは確認できなかった廊下の奥や戸の閉まってた他の部屋の先にいるのだろう。

その後、私は挟み撃ちを避ける為、定期的に和室に逃げながら、玄関から見て手前から右側のフロアを順番に攻略することにした。まず、トイレには誰もいなかった。次に脱衣所と奥の浴室には1名ずつ敵はいたが問題なく撃墜。先に廊下側の敵を和室から光線銃の射撃で全滅させてから、最後に右側の奥の部屋へと足を進める。予想通りリビングとキッチンがひとつになった内装で、最後に残った敵は気絶させず拘束。

「津紬はどこにいるのだ」

私は訊ねたのだ。ここまで全部のフロアを確認したのだが、結局津紬の姿は見えなかったのだ。

「ち、地下だ」

敵はいった。

「地下だど？」

「ああ。和室と廊下の間の壁に隠し扉がある。その先に誘拐した少女をひとり拘束しているはずだ」

「分かったのだ」

言ってから、私は冥弥が調査した催眠スプレーを吹きかけ、敵を眠らせる。情報提供の礼なのだ、お前は痛みを与えず気絶させてやるのだ。

捕虜から反応がなくなったのを確認してから、私は隠し扉があるという場所に向かった。

一見、なんの変哲もない壁に見えたが、よく目を凝らすと巧妙に迷彩を施された引き戸のノブが見えた。私は横にひくと、奥から地下の階段が。

私は一回目と耳で様子を確認してから階段を下りた。

階段のフロアはとても暗く、五感を総動員して細心の注意を払い進んでいると、恐らく半分に差し掛かった所でようやく光源が見えてきた。

(もうすぐなのだ)

私はより一層注意を凝らしながら階段を降り切ると、幾つかの白熱電球で薄暗く灯された廊下に差し掛かった。

道は、途中右側にドアがあつたが基本一直線。最奥にはドアのないフロアが一室広がっており、その突き当り真正面に、津紬は椅子に座った形で後ろ手に拘束され、機械的な首輪に腕輪をつけられた状態で俯いていたのだ。

(津紬！)

私は、今すぐ駆け寄りたい気持ちを抑え、忍び足で歩み進んで右側のドアに手をかける。津紬を救出した所で、退路を塞ぐように部屋から敵がゾロゾロやってきたらひとたまりもないからだ。しかし、部屋はドアそのものが壊れていて入れない。

どうやら杞憂だったらしい。

改めて私は津紬のいる最奥のフロアに足を踏み入れた。やはり、この部屋も複数の白熱電球で灯されており、元々は倉庫だったのだろう、辺りを確認すると、用途の分からない昭和の器物や、まだ中身の

入ったワイン瓶などが見つかった。敵が隠れている様子はなかったのだ。

「津紬、もう大丈夫なのだ」

私はあるかもしれないトラップに引つかからないよう足元に気を付けながら、津紬の下へ。

津紬からは返事がない。

それもそのはず。私が津紬と思って近づいたそれは、等身大の人形だったのだ。

(なぬっ)

手を伸ばし、初めて気づく私。直後、

「はい。ストップしなさい」

後ろから声。

「だっ」

誰なのだ！ 私は振り返ると、フロアの入り口には、ひとりの女が本物の津紬を抱えて立っていたのだ。

茶髪のセミロングに中肉中背のボイン。緒方と一緒にいた、確か大依といったはず。

津紬は人形と同じく首輪や腕輪を装着され、鎖のリードを大依が握っている。

一体、ふたりは何処から現れたのだ。と、辺りを目で確認した所、壊れたドアからすぐ横の壁が開いているのが分かったのだ。恐らく階段のドアと同じ迷彩を施した引き戸。

「ゼウスちゃん」

津紬が泣きそうな顔でいった。私は叫ぶ。

「無事か、津紬！ 大丈夫なのだ。すぐに助けるのだ！」

が、津紬は首を横に振り、

「駄目っ、逃げて、私はいいいから。いますぐ逃げてよっ」

「って、言ってるけど」

大依はわざとらしく津紬のリードを引っ張り、「痛っ」と苦しむ津紬を見せてから、

「この子を見捨てるなら、逃がしてあげてもいいわ。ただし、この子の

死に顔を見てからになるけど」

「ふざけるな、なのだ！ 津紬を置いて逃げたりはしないのだ」

「結構」

大依は嬉しそうにくすりと微笑み、

「なら、その意思を見せて下さらない？ 具体的には、武器を全て捨てて、その人形がつけている首輪と腕輪を装着しなさい」

「分かったのだ」

言われるまま私は武器を床に置いて、人形から首輪と二対四個の腕輪を剥ぎ自らに装着。すると、五本の輪はがつちりとロックされ、神がフィールをもつてしても外れなくなってしまう。

「これは……」

私はつぶやく。直後、

「痛っ」

と、津紬が声をあげたのだ。

彼女は、大依に暴力を振るわれた様子は見られなかったが、目を見開きシヨックを顔に出している。何かあったのは間違いない。

「津紬！ 何があったのだ」

私は駆け寄ろうとするも、首輪が何かに引っ張られた。私の首輪や腕輪は鎖のリードで椅子に繋がれてたらしく、その椅子も完全に固定されて動かないのだ。

これでは、津紬の下に向かうことも、床に置いた武器を拾うこともできない。

「そうそう、言い忘れてたけど」

大依がいった。

「津紬ちゃんの首輪には、あなたの首輪にロックがかかった時にロストってドラッグを注射する仕様になってたのよ」

「ロスト？」

「すぐにわかるわ」

大依がいう中、津紬は怯えた顔で、

「ゼウスちゃん、たす……け、えええええ」

言いかけたその表情が、たちまちだらしなく歪む。

瞳は焦点と光を失い、開いた口から涎を流しながら狂った笑いを浮かべた。

「つ、つぐ……み……」

後輩の変貌に、サツと全身の血の気が引いた気がした。だけど、すぐ私は怒りで頭に血がのぼり、

「津紬に、津紬に何をしたのだあああああああああああああああ
あっ!!」

怒鳴る。

「さて、あなたたちにはここでデュエルをして貰うわ」

私の反応を無視し、大依はいった。

「デュエルだど？」

「こんなときに、何を馬鹿なことを。」

「首輪のリードの先を見て頂戴」

「リードの先だど？」

言われて私は確認をしてみる。鎖のリードは椅子の足で南京錠がかけられていたが、よく見ると先端が鍵になつてるのが見えた。

「あなたたちの首輪には、お互いに相手の鍵が先端についてるのよ。あなたたちが首輪と腕輪を外す手段はふたつ。ひとつは相手の鍵で開錠すること。もうひとつは首輪をつけたもの同士でデュエルして勝利することよ」

「つまり、私が津紬に勝利すれば、この神の首輪は外れて、その鍵で津紬の首輪を外すこともできる。という事なのか」

「……神って何？」

大依は、人を蔑んだ冷たい目で、一回ぼそつと反応するも、

「まあいいわ。その通りよ」

と、大依は津紬のリードを電球の燭台に括り付け、南京錠で固定する。

「仕方ない。分かったのだ」

いまは大依に従うしかないのだ。幸い、津紬はそこまで強いデツキを持っていない筈だから、すぐに勝って助けられるのである。

私はデュエルディスクを起動する。それを見て大依もデュエル

ディスクを津紬の腕に装着させ、デュエルモードへと起動させた。

「津紬、安心するのだ。すぐ神が助けてやるのだ」

私は津紬に言葉をかけるが、当の津紬は、

「デュエル？ でゆえるう？……ええ、えへ、えへへへ」

体を揺ら揺らさせながら薄ら笑いを浮かべるのだった。

そこに、私の大好きだった後輩の面影などありはしない。

ゼウス

LP4000

手札4

□□□

□□□

□—□

□□□

□□□

津紬

LP4000

手札4

先攻は津紬に決まった。しかし、

「えへ、えへ、えへ」

津紬は笑みを口にしながらその場で失禁を漏らす。とてもじゃないけどデュエルなんてできそうな状態には見えない。

「っ、臭いわね」

充滿するアンモニア臭。大依はその場で鼻をつまみながら、

「津紬ちゃん、あなたはスーパーデュエリストよ」

「すーぱーでゆえりすとお？」

「そう。あなたはスーパーデュエリスト。そしてあなたはデュエルで目の前の子を殺す」

大依は私を指さし、津紬に私を認識させる。

「スーパーデュエリストのあなたなら簡単にできる。そうでしょう

？」

「えへ、えへ、えへ。……………」

津紬の笑い声が一旦止まる。そして、

「そう。殺れる……私は、スーパードュエルリストだあつ」

津紬はいい、最初の4枚の手札をデッキから引き抜く。この状態でデュエルする気なのか？

「私のたああん！ 手札からあ、《ダーク・ハウンド》召喚んツ」

津紬が召喚したのは、一匹の黒い猟犬の姿。普段、津紬が使ってるカードとは全く別物だったのだ。さらに攻撃力も1900と下級としてはトップ級。

「ひ、ひ、開けえー、私のサーキット」

しかも、いきなりリンク召喚ときたのだ。

「召喚条件は、け、獣族モンスター1体イッ！ えへ、えへ、リンク、りんく、リンク召喚。リンク1《ヘルブラック・ハウンド》」

現れたのは全身に黒い瘴気を身に纏いまるで幽霊のような猟犬。その攻撃力は1200だけど、わざわざ低い攻撃力をとると思うはずがない。

「私はア、これでターン終了お」

津紬はいった。

「私のターンなのだ。ドロー」

と、私はカードを引く。

「津紬、すぐにデュエルを終わらせてあげるのである。相手フィールド上のみモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できるのだ。《サイバー・ドラゴン》！」

私は1体の機械竜を出し、

「続けていくのだ。手札から《融合呪印生物―光》を召喚なのだ。そして融合呪印生物の効果を発動。自身と《サイバー・ドラゴン》をリリースして、この2体を素材とする融合モンスターを特殊召喚するのだ。かつ、融合呪印生物は融合素材の代用になるのだ」

融合呪印生物に刻まれた術式が解放され、融合呪印生物から漏れた光が《サイバー・ドラゴン》の姿を形取る。

「プログラム起動。シリアルコード強制回避！ 神に創られし機巧の竜よ、更なる高みに単身で進化せよ！ 呪印融合！ 神に従うのだ、《サイバー・ツイン・ドラゴン》！」

こうして出現したのは、攻撃力2800の、双頭の《サイバー・ドラゴン》の姿。

しかしここで、

「手札の《ロックスキン・ハウンド》の効果あ、相手がモンスターを召喚した場合に手札から特殊召喚するう」

津紬の場に、名前の通り岩のような皮膚を持った狼が出現。《ヘルブラック・ハウンド》のリンクマーカー先に守備表示で特殊召喚され、その守備力は2000と高い。

「さらに《ヘルブラック・ハウンド》の効果ー。このカードのリンク先に獣族モンスターが召喚・特殊召喚される度にいつ、私は墓地のハウンドモンスターを回収う」

なるほど、そういう効果なのか。私は津紬の手札にヘルブラックの素材となった《ダーク・ハウンド》が舞い戻るのを確認してから、

「カードをセット。バトルなのだ！ 《サイバー・ツイン・ドラゴン》で

《ヘルブラック・ハウンド》に攻撃。破壊なのだ！」

直後、

「ふふっ」

大依が嫌な笑みを浮かべたのが見えた。しかし、私の攻撃は止まらず、サイバー・ツインがビーム砲撃のブレスを吐く。

《ヘルブラック・ハウンド》はビームを浴び呆気なく破壊。……は何故かされず。

津紬 LP4000↓2400

それでも、攻撃力の差分だけ、津紬のライフが正常通り削られる。すると、

(えっ?)

私たちの首輪と腕輪が突如光りだし、私のフィールが強制的に抽出されるのを感じた。そして、津紬側の拘束具からバチバチと音を出し電流が流れだしたのだ。

「あ、あぎやぎやぎやぎやぎやぎやぎやぎや」

笑ってるのか悲鳴をあげてるのか、どちらともつかない声をあげる津紬。

「っ、津紬ーっ！」

私は叫ぶ。しかし彼女に神の声は届かない。

「そういえば、これも言い忘れたわ」

大依がいった。

「この装置には、ダメージを与えたときに強制的にフィールを吸って相手にフィール製の電流を流す構造になってるのよ。刺激的でしよう?」

「刺激的だど? 何を馬鹿なことを言ってるのだ」

私は叫んだ。いまこの一帯には、津紬の失禁のアンモニア臭に加え、その電流で何やら焦げ臭い匂いが混ざっているのだ。フィール製だからか焦げた匂いはすぐ消えるも、

「津紬がまともに電流を浴びてるではないか! 津紬はフィールを持ってないのだぞ、そんな人間に電流を与え続ければ、いくら本物の電流でなくても死んでしまうのだ」

「でしようね」

大依は同意する。

「それどころか、さっきの時点で彼女は正気だったらショック死してたかもしれないわね」

「ならっ」

「こんな人殺しデュエルはやめるのだ! 私は言いかけたが、

「正気ならね」

大依はいった。

「ここがロストの素敵な所で、いま津紬ちゃんは脳のリミッターが外れ痛覚もガバガバになっちゃってるのよ。仮に銃弾を浴びても、薬が切れるか失血死するまで平気で動き続ける」

「……は?」

「もちろん、実際にはダメージはちゃあんと届いてるから安心して頂戴。ツケは薬が切れた後に払って貰うだけだもの」

「貴様アアアッ！」

私は喉を潰さんばかりに怒鳴り叫んだ。こんな叫び方をしたのは初めてかもしれないのだ。

「あ、そうそう」

だけど、大依はそんな私の反応を心底愉しみながら、

「《ロックスキン・ハウンド》は自身がリンクモンスターのリンク先にいる限り、ロックスキン以外の自分のモンスターは戦闘・効果で破壊されない性質を持つてるのよ」

なんてデュエルの流れに戻してくる。

「くっ」

私は沸騰する怒りをなんとか抑え、

「なら、そのロックスキンだけでも対処するのだ。サイバー・ツインで《ロックスキン・ハウンド》に攻撃！ サイバー・ツインは1ターンに2回攻撃が可能なのだ」

サイバー・ツインから二度目のビームブレスが放たれ、岩の皮膚の猟犬は破壊される。

ただ勝利すればいい問題ではなくなったが、このロックスキンに至ってはいま破壊しなければ、対処できるときに対処できなくなってしまう。特に次のターンで攻撃表示にされてしまったら絶望的なのだ。

「神はこれでターン終了なのだ」

ゼウス

LP 4000

手札 2

「《セットカード》」

「」

「《ヘルブラック・ハウンド（津紬）》——「《サイバー・ツイン・ドラゴン（ゼウス）》」

「」

「」

津紬

LP2400

手札3

さて、ここからが問題なのだ。

神がダメージを与えたら津紬に電流が入ってしまう。この時点で、こちらが勝利するには「ダメージ以外でライフを0にする」「デッキアウトを狙う」「エクゾディアなどで特殊勝利を狙う」の三つに絞られたのだが、残念ながらこのデッキではどちらも狙える構造はしていない。

となると、残す手段は唯一どのデッキでも可能性のあるデッキアウトのみ。しかし、こちらがサーチやドロースーツを避けつつ耐えるだけのデュエルをしても、津紬が自爆特攻をしてきたら駄目なのだ。

「スパーデュエリストのターン、ドロロー」

津紬がカードを引く。

「私、はア……《スラッシュ・ハウンド》を召喚」

新たに出てきたのは鋭い爪を持った猟犬のモンスター。攻撃力は1700。

「えへっ、へっ、《ヘルブラック・ハウンド》のリンク先にモンスターが召喚されたから、《ロックスキン・ハウンド》を回収」
「くっ」

これでは、きりがないのだ。

「さらに《スラッシュ・ハウンド》の効果あつ！ このカードがリンクマーカーの先に存在する場合……手札から更にハウンドを召喚できる。続けて《ピックシー・ハウンド》召喚」

続けて現れたのは、妖精のような羽根を生やした小型サイズの猟犬の群れ。攻撃力は800と低め。

「開けえ……私のサーキット」

ここで津紬は更にリンク召喚をする気らしい。地下室の床にリンクマーカーが出現すると、《ヘルブラック・ハウンド》と《スラッシュ・ハウンド》の2体を取り込まれる。

「召喚条件は獣族モンスター2体。リンク召喚、リンク2《アーマードスタッグ・ハウンド》」

こうして現れたのは、四肢の代わりに四輪を生やし、背に砲を抱えた半機械の見た目をした猟犬。もちろん種族的には獣族のまま、見た目に反し攻撃力1900とリンク2としては高めという程度。

「リンクマークが《ピクシー・ハウンド》に向いたことで、《ピクシー・ハウンド》の効果を発動。1ターンに1度、デツキのハウンドカードを手札に加えるう」
「ぐっ」

サルベージに加えサーチまで持っておったか。

「スーパーデュエリストはデツキから2枚目の《ダーク・ハウンド》を手札にいつ、手札にー」

確か《ダーク・ハウンド》は攻撃力1900と下級最高級の打点を持ったモンスターである。

「そ、し、てえ、再び開けえ私のサーキット」

「更にいくのか!？」

私が驚く中、効果が一切明かされないまま《アーマードスタッグ・ハウンド》が退場し、さらに役目を終えた《ピクシー・ハウンド》も同様にリンクマークへ取り込まれる。

「リンク召喚、リンク3 《カペルフオックス・ハウンド》」

こうして、更なるリンク召喚で出現したのは、一隻の軍艦とその上に佇む一匹の猟犬。その軍艦が目の前で分解されると、プロテクターとして猟犬の各部に装備されフルアーマーの猟犬に姿を変えた。

しかし攻撃力は2300。神のサイバー・ツインには500ほど届かない。しかし3つのリンクマークは全て下側に向いているのが厄介である。

が、ここで津紬は驚きのカードを発動する。

「魔法カード 《火炎地獄》 ううっ」
「なっ」

そのカードは、相手に直接1000ダメージを与える魔法カード。しかも、自分に500ダメージのおまけつきで。

私は慌てて、

「大依、質問なのだ!」

「何？」

「このカードの場合、津紬自身が受けるダメージはどちらのフィールを使って電流が流れるのだ？」

私の問いに大依は、

「それは勿論、津紬ちゃんでしょ」

「なら問題ないのだ」

私はほっとし、

「元々津紬はフィールなんて持ってないのだ。なら、その装置の効果では電流を流すことはできないのだ」

しかし。

「それはどうかしら？」

大依はいったのだ。直後、

「あげえっ」

津紬が、本来なら「ぎゃあ」と叫んだのだろう悲鳴をあげたのだ。しかも、私の目には、ただでさえ光を失った津紬の瞳から生気が失せ、彼女の父である店主の現在みたいに、頬の肉が削げ落ちた顔に変わったような気がしたのだ。

そして、更に一歩変わってしまった津紬ごと、私たちの拘束具から電流が流れる。

「ぐっ、あああつ」

「ぎゃあああああああつはははははははははははは」

私は痛みに呻きながら、何とかフィールで肉体への負担を軽減。しかし、このダメージをまともに浴びた津紬からは、悲鳴と狂笑両方の叫び声が発せられる。

「っ、津紬いつ！ 何故だ、何故電流が流れるのだ」

「最近、こんな事実が判明してるのよ」

大依がいった。

「精神力、気力、命、そういった生命エネルギーもフィールで構成されてるのよ。それも、デュエルに負けても全損せず、常に一定量は保ち続ける特殊なフィールとしてね」

「え……っ？」

の香りだーっ!!」に酷似した笑顔(?)を見せ。……いや、いま匂つてるのはおしつこの香りなのだが。

「永続魔法カード《悪夢の拷問部屋》と《ハウンド・ヴァンガード》を発動だよー。さらにカードをセットおおっ」

と、2枚の永続魔法に加え伏せカードが1枚、津紬の場に敷かれる。しかも《悪夢の拷問部屋》は私が効果ダメージを受ける度に300ダメージを与える永続魔法なのだ。こんなカードを投入してる所から、彼女のハウンドデッキはバーンデッキの要素も重ね備えてることになる。これは不味いのだ。例えば神が津紬の戦闘をこの先封じ続けたとしても、攻撃手段をバーンダメージに方向転換してしまえば、首輪は止まらず津紬の命を吸い上げるのだ。

そして、もう1枚の永続魔法は恐らくハウンドデッキ専用のサポートカードと思われるのだが。

「《カペルフオックス・ハウンド》の効果ー」

が、先にリンクモンスターのほうが第二の効果を開始させたのだ。「カペルフオックスはねえ、このカードとこのカードのリンク先イ……リンク先のモンスターは攻撃力を、このカードのリンク先のモンスターの数×300アップさせるんだよお」

しかも、ここで攻撃力の全体強化ときたのだ。見ると、いつの間にかカペルフオックスと《ダーク・ハウンド》の攻撃力は、

《カペルフオックス・ハウンド》 攻撃力2300↓2900

《ダーク・ハウンド》 攻撃力1900↓2500

《ダーク・ハウンド》 攻撃力1900↓2500

といった具合に上昇していたのだ。しかもカペルフオックスに至っては私のサイバー・ツインの攻撃力を超えてしまったのである。

「ばとー、ばとばと? ばとるううっ! 《カペルフオックス・ハウンド》でえ、《サイバー・ツイン・ドラゴン》を攻撃いっ」

カペルフオックスが装甲として装備された軍艦の火器を掃射し、サイバー・ツインを爆破処分する。

ゼウス LP3000↓2900

僅か100ながら減少する神のライフ。さらに当然、

「あつはあ♪」

「いぎっ」

命をまた削られたというのに何だか色っぽい吐息を漏らす津紬に反し、私は静電気でバチツとくるような痛みに襲われる。たかが100ダメージとはいえ、仮にこれを40回連続で受け続けたら心が折れそうな痛みなのだ。

だが、ここで私は伏せカードをオープンし、いったのだ。

「罠カード《ダメージ・コンデンサー》を発動なのだ。このカードは神が戦闘ダメージを受けたとき、手札を1枚捨てる事で受けたダメージ以下の攻撃力を持つモンスター1体をデッキから特殊召喚するカードなのだ」

「へえ」

ここで反応したのは大依である。

「でも、受けたダメージはたかが100ポイントだけど、いいの？ そんなモンスターを攻撃表示で出しても」

「問題ないのだ」

私はいいい、デッキから目当てのカードを抜き取って、

「神が特殊召喚するのは攻撃力0、《サイバー・ヴァリー》なのだー！」
と、モンスターを特殊召喚する。

「さらに《ダメージ・コンデンサー》のコストで捨てたカードは《サイバー・ドラゴン・ヘルツ》なのだ。このカードは墓地に送られた場合にデッキか墓地の《サイバー・ドラゴン》を1枚手札に加えるのだ。神はこの効果でデッキの《サイバー・ドラゴン》を手札に加えるぞ、はっはっはーっ！」

気圧されては駄目だ。私は意識して空元気に笑い飛ばす。

「じゃあ私もー」

今度は津紬がいった。

「相手がモンスターを召喚した場合、手札の《ロックスキン・ハウンド》を特殊召喚」

出てきたのは、ヘルブラックの効果で回収された岩の皮膚を持つ獵犬。

「このカード、特殊召喚にも対応なのか!？」

モンスターが召喚した場合としか言っていないから、通常召喚だけに対応する効果だと思ったのだ。

「さらに《ハウンド・ヴァンガード》の効果」

しかも、ここでさっきの永続魔法が動き出したのだ。

「まず、《ハウンド・ヴァンガード》と同じ縦列の私の獣族モンスターは、リンクモンスターのリンク先に存在するものとして扱う」

《ロックスキン・ハウンド》は確かに《カペルフオックス・ハウンド》のリンク先には特殊召喚されていたなかった。しかし、《ハウンド・ヴァンガード》の縦列には存在する以上、これである厄介な耐性効果が起動してしまうらしいのだ。

「そしてえ、1ターンに1度、同じ縦列でハウンドが出された場合にハウンドモンスターをデッキから手札に加えるよ」

しかも、またサーチか。サーチなのか。

「私はデッキから《スラッシュ・ハウンド》をサーチ」

そのモンスターは確か、1ターンに1度、手札のハウンドを追加で召喚するカード。《ハウンド・ヴァンガード》と効果がかみ合って相性抜群なのだ。

「そしてー。《ダーク・ハウンド》で《サイバー・ヴァリー》に攻撃、続けて2体目の《ダーク・ハウンド》でとどめとどめー」

飛び掛かる二匹の猟犬。

「残念ながらヴァリーの効果を発動なのだ。このカードが攻撃対象に選択された場合に自身を除外して発動なのだ。我はカードを1枚ドロし、そのバトルフェイズを終了させる。見るのだ、この神の防衛を!」

《サイバー・ヴァリー》が時空の歪に消えると、お互いのデュエルディスクからバトルフェイズ終了のお知らせが表示される。

「ぶー。ターン終了」

ここで、私はやっと津紬の口癖を聞くことができたのだ。大丈夫、頭が薬に侵されても津紬は確かにここにいる。ここにいるのだ。

津紬、待っててくれなのだ。勝利のピースはすでに手札にある。必

ず、必ずお前を助け出してやるのだ！

ゼウス

LP2900

手札3

□□□□

□□□□

「《カペルフォックス・ハウンド（津紬）》——□

「《ダーク・ハウンド》」「《ダーク・ハウンド》」「《ロックスキン・ハウンド》」

「《悪夢の拷問部屋》」「《セットカード》」「《ハウンド・ヴァンガード》」
津紬

LP1900

手札1

「神のターンなのだ。ドローである」

私は、勢いよくカードを引き抜く。

（やったのだ）

引いたカードは《エヴォリユーション・バースト》。手札に揃ってる
一手をより盤石にするカードなのだ。

私は、デュエルを終わらせに行くことにした。

「いくのだ。スキル発動《サイバー流奥義》！ このスキルは神のライフが3000以下の場合に4000を下回る1000ライフにつき1体、デッキ外の《プロト・サイバー・ドラゴン》を特殊召喚するのだ。私のライフは2900、《プロト・サイバー・ドラゴン》を1体特殊召喚なのだ」

こうして、まず《プロト・サイバー・ドラゴン》を1体場に呼んで、
いまドローしたカードを発動。

「続けて魔法カード《エヴォリユーション・バースト》！ 津紬の場に
伏せてあるセットカードを破壊するのだ」

《プロト・サイバー・ドラゴン》からビームブレスが放たれ、津紬の
伏せカードを破壊する。

伏せカードは《聖なるバリア——ミラーフォース》だったのだ。

「あー。底知れぬ絶望の淵へー」

「それは無効なのだ。続けて手札から《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》を通常召喚し効果を発動。サイバー・ツヴァイは1ターンに1度、手札の魔法カードを見せることでターン中、このカードを《サイバー・ドラゴン》扱いにするのだ。神が見せるのは《パワー・ボンド》！そして、そのまま魔法カード《パワー・ボンド》を発動なのだーっ!!」
私は機械族専用の融合カードを発動。場の《プロト・サイバー・ドラゴン》と《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》、そして手札の《サイバー・ドラゴン》を墓地に送る。

「プログラム起動、神アップグレード。3体の機械竜よ、いまこそ統合し、永遠にして終焉を担う神なる竜にシンカするのだ！ 融合召喚！

天神に従え、《サイバー・エンド・ドラゴン》！ なのだー！」

フィールドに出現したのは三つ首の機械竜。その攻撃力は4000と直接攻撃なら一撃でスピードデュエルを終わらせられる数値。しかも、神はこれを《パワー・ボンド》で出したのだ。
従って。

「《パワー・ボンド》で特殊召喚したモンスターの攻撃力は、その元々の攻撃力分アップするのだ。実質、2倍！ なのだ！」

《サイバー・エンド・ドラゴン》 攻撃力4000↓8000

こうして、サイバー・エンドの攻撃力はLP8000のデュエルでさえ一撃で終わらせられる数値に変化。

「ぶっ、うふふふふ」

大依が突如噴き出した。それも、口元を拳で隠しお嬢様笑いの嘲笑い。

「ついに津紬ちゃんを殺すことに決めちゃったのね。そんな攻撃力で攻撃したら葉の鎮痛効果が切れた瞬間にあの世逝きだものね。まあ、それも友情かしら？ この先の地獄を見せずここでサクツと楽にしてあげるのも」

「何を勘違いしているのだ」

私はいった。

「本番はここからなのだ。《パワー・ボンド》でモンスターを出した

ターンの終了時、私はこの効果でアップした数値分のダメージを受けるのだ」

「えっ」

大依の目の色が変わった。

「まさか、あなた自爆する気?」

「その通りなのだ」

「ちよつと、正気? あなた4000ポイント分の電流なんて受けたらただでは済まないわよ?」

そんな状況をお前が作っておいて。

「だから何なのだ。津紬のデッキがバーン要素もあると分かった以上、持久戦でデッキアウトを狙うこともできないのだ。津紬が効果ダメージで命を削りきる前にデュエルを終わらせる必要があるのだ。……幸いにも、自分が発動した効果ダメージなら、例えば神が受けるダメージでも、私のフィールを使って電流が流れるのだ。この手段なら津紬への被害は……」

あ、《悪夢の拷問部屋》。

「……殆どゼロなのだ」

私は誤魔化した。しまったのだ、これならサイバー・ツインを出しておくべきだったのだ。とはいえ、やってしまったものは仕方ない。

「嘘、たかが友達の為に、そこまで出来る子がいるなんて」

大依がなんか呟いてる中、

「見るのだ! これが友を救う神の覚悟である! ターンエンドなのだーっ」

と、私は宣言。

すると、津紬はいった。

「《ダーク・ハウンド》のモンスター効果。このカードがリンクモンスターのリンク先にいる場合、相手が受ける効果ダメージは倍になる」
って。

「……え?」

いま、なんと言ったのだ。

「カペルフオックスのリンク先の《ダーク・ハウンド》は2体。つまり、

さらに気づけば、私は服を着ていなかった。いや、目の前で私の腕に乗っていた炭がはらりと落ちたのを見て、服がすべて焼け焦げて消えたのだと分かった。

けど、そんな事はいまはどうでもいいのだ。

「津紬……」

私は荒く息しながら、後輩の名を呼ぶ。

「逃げるのだ」

「逃げ、るう？」

「そうなのだ。いまならお前を縛るものは何もないのだ。だから」

声がかすれ上手く大声を出せない。しかし、何としてでも津紬を脱出させなければ。

「ねえ、スーパーデュエリスト津紬ちゃん」

そこへ、大依が津紬の肩を抱き、いったのだ。

「その敗北者。あなたの友達のゼウスちゃんを助けたくない？」
すると、

「ゼウスう？ ぜうー……。……………」

津紬は、一度反応を失った後、

「たすけ………たい。ゼウスちゃん、タスケル」

と、いったのだ。

「津紬！ 私はいいのだ。神のことはいいから、津紬お前が」

私は必死に投げかけるも、津紬は大依に耳元で何かを囁かれ、そちらの声を聞き入れてしまう。

「それじゃあお願いね」

大依はいい、津紬を解放する。すると、

「ゼウスちゃん、助けるー」

と、津紬はうわごとではしやぎながら、首輪の鎖を引きちぎり先端の鍵を手にとった。もちろん本来の津紬にここまでの腕力はない。恐らく脳のリミッターが外れてるせいで怪力を得たのだろう。そして、津紬は鍵を持って私の下に向かい。

「ゼウスちゃん、助けるー」

言いながら、なんと私の拘束具を外してくれたのだ。

「津紬……」

まさか、大依は本当に私を解放させる気なのだろうか。なんて思った矢先、津紬は私を押し倒したのである。

「津紬!？」

一体どうしたというのだ。私は大依に視線を向ける。

「驚いたわ。命を引き抜かれるような経験をして、しかもフィールもなしに電流を浴びたのに、あなただったらまだ心が折れてないんだもの」

大依は、ハンカチか何かで白熱電球に触れ、燭台から取り外そうとしてる所だった。

「ねえ、知ってるかしら？ 長時間点けてる白熱電球って、近くのを燃やして事故を起こすくらい熱いのよ」

「な、何を言ってるのだ？」

途端、私は戦慄を覚える。これから、予想もつかないような恐怖と絶望がこの神を襲う気がしたのだ。

「あら、まだ分からない？」

白熱電球をひとつ外し終え、僅かに暗くなった部屋の中、うきうきした声で大依はいった。

「今から、電球こゝれをあなたの赤ちゃん生む所に入れて、踏んづけて中で割ろうと思ってるの」

「なっ」

いま、大依は何といったのだ？ 何を、どこに入れて、何しようよと。

「死ぬほど痛いらしいわよ。それに二度と子供生めなくなっちゃうかも。ゼウスちゃんは何本まで心を折らずにいられるかしら？」

はっと私は地下室の照明をひとつひとつ目で追う。

照明はすべて白熱電球で、廊下の分を含めるとあと4〜5個は間違いないなく灯っている。

「津紬ちゃん。ちゃんとお友達をpushしてね」

「ゼウスちゃん、助けるー」

津紬が全身を使って私を拘束しながら、両腕で私の股を割り開く。「や、やや止めるのだ！ それだけは止めてくれなのだ。津紬、津紬も

「ん？ 今何でもするって。そうね、なら」

大依が興奮した声でいった。

「いい声で鳴きなさい？」

白熱電球が踏みつぶされた。

それから数日後。

私は、車椅子の津紬を連れて、あの岬に来ていた。

「ほんとに、どーして私こんな体になったんだろう。お父さんもお見舞いに来ないし。ぶー」

車椅子を押されながら、津紬は普段より低いテンションで不満を漏らす。

あの後。

気づいたら、私たちはファイル・ハンターズ傘下の病院のベッドの上だった。

体内のガラス片はすべて取り除かれており、電流デュエルの後遺症もなく、すでに私は日常生活に戻れる程度には回復している。しかし、津紬のほうはロストの後遺症で心身共にズタズタになっていた。脳のリミッターを解除したツケで全身の骨や筋肉が深いダメージを負って車椅子生活を余儀なくされ、いまでも禁断症状で激しい不安や不眠に悩まされてる。とはいえ、これらの症状はいずれ治ると思われる。問題は脳にダメージを負った結果、性格が以前よりナイーブかつ怒りっぽくになった気がするのだ。不幸中の幸いは、シヨックでコンテストの後、つまりは丁度悲劇に見舞われた期間の記憶が飛んでることだろう。

だから、津紬は何も知らない。父親が別の病室（同じ病院だったのだ）で入院していることも、二度と寿司を握れないことも。自分も、たった一度のドラッグで人生を狂わされてることも。

「ねえ、ゼウスちゃん何か知ってる？」

寂しそうに訊ねる津紬。私は首を横に振って、

「分からないのだ」

言いながら私は津紬と共に崖の前に立つ。

「ひゃっ」

すぐ下が海なんて所に立たされ、津紬は車椅子に必死にしがみつきのながら、しかし、

「綺麗」

と、一面の青色と水平線をみていった。

「ゼウスちゃん。おじさんの船はもう直った？」

「え？」

「コンテストの賞金で、おじさんの船修理したんでしょ？」

ああ。

そういえば、津紬は自分の搜索費でそれも消えてしまったことも知らなかったのだ。

「勿論なのだ」

私は相槌を打って嘘をつく。でも、

「ゼウスちゃん。声が暗いよ？」

彼女にはお見通しらしい。残念ながら、テンションまでも嘘をつくことはできなかつたのだ。

「大丈夫。津紬の性格変貌ほどではないのだ」

「またそれッ?」

途端、津紬はキツとなって、

「私はいつもと同じだつて言ってるだろっ！ 暗くなんかなくてないってば、これが前からの私だよ！ ぶーぶーぶー」

と、本人は言うものの、以前の津紬は間違いなくこんな乱暴な口調でキレイはしなかつたのだ。

「……津紬」

私は、唸り声をあげる津紬に、沈み切ったテンションでいった。

「お別れ、なのだ」

と。

「え？」

「許してくれとは言わないのだ。お星さまになったら、私を好きなかげ恨み、呪ってくれていいのだ」

「ゼウスちゃん、一体何を言つて」

一転、きよとんとした顔で訊ねる津紬。一旦車椅子から手を離し、
「ごめん、なのだ」

私は。

津紬ごと、車椅子を突き飛ばしたのだ。

「え？」

何が起きたのか分かってない顔をしたまま、宙に放り出され落下していく津紬の体。

私は、この様子を冷たい瞳で見下ろす。

脳裏に浮かぶのは、これまでの日々、津紬と笑い合った想い出の走馬燈。

「ゼウスちゃんの馬鹿！　なんで、ゼウスちゃんどうし——」

海に向かって落ちながら、津紬が私に向けて叫ぶ。しかし、海面と衝突するより先に、高くあがった波が津紬の体を飲み込み、彼女の言葉が最後まで発せられることはなかった。

「これで、また電球を入れるのはやめてくれるのだな？」

言いながら私は振り返る。そこには、大依がひとり立っていた。彼女を殺したことに後悔はなかった。

すでに私の心はポツキリ折れ、この人に対する恐怖によって何もかも塗りつぶされていたのだ。

この人に逆らったら駄目だ。また電球を押し込まれる。もう嫌だ。もう嫌だ。もう嫌だ。思い出しただけで、足が震え、視界が焦点を失い発狂しそうになる。

この先私は、ずっと電球という恐怖から逃れる為に生き、電球から逃れる為なら何だってするのだろう。

たったいま津紬を殺したように。

「ええ」

大依は、私に向けていったのだった。

「フィール・ハンターズにようこそ。藤稔　ゼウスちゃん、歓迎するわ」

今日の空も晴天だった。普段より一面の海が綺麗に見渡せ、程よい潮風が芝生をなびかせ、人気の無い静寂の中にさあさあとBGMを流

す。

この場所に、津紬と出会った思い出はもうない。

MISSION 26 — 決闘！レズVSハイウィンド
(前編)

◆幕前◆

——ある日の屋上。

「あなたに彼女は殺せませんよ」

と、アインスはいった。

天気予報は晴れだったのに、一雨きそうな曇り空だった。お昼休みの時間だが、一般開放日ではないのでこの場には彼女と別に女子生徒がひとりの二人だけ。グラウンドにも人がいないので、とても静かである。

女子生徒はいう。

「だからあなたに頼んでるの。どうして依頼を請けて頂けないの？」

「だから言ったはずですよ。いまの私はハイウィンド。長期契約を結んで組織の犬に成り下がった業界の恥晒しだと」

「どうしても請けて頂けないのですか？」

「どうしても請けません」

アインスの言葉に、

「分かりました」

女子生徒はアインスに背を向ける。

「ハイウィンドが組織絡みで彼女の味方だという噂は本当みたいですね。だからこそ、そのハイウィンドで特に彼女と親しいあなたに殺して貰おうと思ったけど、わたくしが馬鹿でした。こうなったら」

「ですから、あなたでは例え不意打ちでも狙撃でも彼女を殺すことはできないと」

「分かっております。でも」

憎しみを吐き出すように、女子生徒は続けていった。

「彼女にわたくしと同じ経験をさせることはできる。愛する者を奪われる苦しみを」

「君はまさか!!」

「確か彼女には命より大事な幼馴染がいたはずでしょう?」

アインスから返事はない。女子生徒は無言のまま返事を待ったが、次第に、

「ごきげんよう、犬になった “王子”^{プリンス}さん」

と、この場を後にしようとする。そこへ、

「お待ちください」

アインスは呼び止めた。

「あくまで、あなたからの依頼は受けません。ですが、組織の上層部からちようどいい任務が舞い込んでましてね。現在私たちの司令を中絶とした反対派で必死に取り下げの申請をしてるのですが」

「アインス」

振り返り、呟く女子生徒にアインスはいった。

「あなたが誰にも手を下ささない。勿論、私以外のあなたの手の者も含めて。その条件でよろしければ、“レズの肌馬”を殺してみせましよう」

雨より先に、雷が鳴りだした。

◆本編◆

私の名前は鳥乃^{とりの} 沙樹^{さき}。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「梓、セクハラし疲れた……」

お昼休みの教室。

この日。私が机に項垂れ、そんな台詞を吐いた瞬間、

『大事件が発生した!!』

梓を含むクラスメイト全員が一斉に慌てふためきだしたのだ。つて、それ前々回^{このまえ}の私の冒頭。

「先日の徳光さんに加え今度は鳥乃か」「これ、マジで世界滅びるんじゃないね? あードロップス旨え」「お前それドロップスじゃない。ビー玉だ」

このまえ
前々回同様、男子は盛大にフラグをかまし、さらに女子も残念ながら今回は「抱いて」は通用しないと思ってしまったらしく、

「こんなところにいられないわ！ 私には家に帰らせてもらおう！」「早くこのことをみんなに知らせないと！」「どうせみんな死ぬのよ！」

男子同様に死亡フラグ要因に成り下がってしまう。

でもって、梓はというと、

「やっぱりこの前転入してきた、あの子？」

「まあね」

「そっかー。そんなに疲れちゃう程エンジョイしてたんだね」

と、いつも通りハンマースタンバイ。

「ちよつと、待って梓。ある意味誤解じゃないけど誤解だから」

「じゃあ、やりたくもないのにあれだけセクハラしたってこと？」

「イエスアイドゥー」

「みんな、判決は？」

梓がクラスに訊ねた所、

『ガチでも嘘でも死刑!!』

「はい有罪」

クラス総意の下、今日も私はハンマーに沈、

「え？」

む、直前だった。突如教室の扉は開かれ、立っていたのは気持ち小柄な女子生徒。カールの掛かったふわふわな髪を後ろでポニーテールにし、流行りのメイクで程よくギャル風の顔立ちを作っている。が、反して物腰はアンちゃんの外面を思わせる慎まやかなもので、胸部もそれなりに大きい。梓レベルの巨乳爆乳には及びようがないものの、その体躯と相まって、とても目立つ。

「皆さん。一体なにを……」

女子生徒はこの場の異様な盛り上がりにも動揺。私は必死に手を伸ばし、

「鷹女ちゃん助けて！ いまハンマーフェイズ中」

「鳥乃さん！」

鷹女ちゃんという女子生徒は駆け寄り、私の頭を抱きかかえると、

「駄目ですよ徳光さん、鳥乃さんを虐めたら。鳥乃さん大丈夫ですか？」

「ありがとう。助かったわ」

言いながら私は自分から制服越しに鷹女ちゃんの胸部に顔を埋め、しがみつきながら彼女のお尻をスカートの上からさわさわ。

しかし、鷹女ちゃんはというと拒絶するどころか「よしよし」と私の頭をやさしく撫で、

「徳光さん？」

「は、はい」

「ごめんなさいは？」

「ごめんなさい」

「クラスの皆さんも」

『ごめんなさい』

と、この場の全員を謝らせるのだった。

彼女の名前は、せいさい たかめ 誓裁 鷹女。

数日前、突然私たちのクラスの一員になった転校生である。そして、私に「セクハラし疲れた」とふざけた事を言わせる原因でもあった。

放課後。

天気予報は晴れだったのに、昼休みには何度も雷が鳴り、いまに至っては土砂降りの大雨である。

「梓、傘は？」

教室の窓から外を眺め、私が訊ねると、梓は少し沈んだ声で、

「ううん。沙樹ちゃんは？」

「折り畳みなら。だから、はい」

私は鞆から傘を出し、梓に手渡す。

「え？」

「生憎ふたりで入れる程の大きさはないし、私はもう少し時間を潰してそれでも止まなかったら走って帰るわ」

「だけど、それだと沙樹ちゃんが」

梓は受け取るのを躊躇うが、私は続けて、

「私が濡れて帰るのは別に構わないけど、梓がそれで風邪ひくのは我慢ならないしね」

「ここまで言うと、やっと梓は、

「もお」

と、照れたような困ったような顔を見せながら、やっと傘を受け取って、

「なら、コンビニで傘を買ってくるね」

「だからいいってば」

実際の所、私自身も雨の中を走って帰る気は毛頭ない。人気がないだろう場所で適当にタイミングを見計らい《ワーム・ホール》で直接家の中に入ろうと思うのだ。

しかし、

「だったら、わたくしの傘に入りませんか?」

突然、横から鷹女ちゃんが食いつくように会話に混ざりだした。

「わたくし、常に1本学校に置き傘をしているんです。お友達も一緒に入れられる様にそれなりに大きめのものを」

「誓裁さん」

梓がどこか警戒した様子でいう。まあ、無理もない。私はおもむろに正面から鷹女ちゃんのスカートに潜り、

「え、ほんと? 鷹女ちゃん」

なんて訊ねながら、彼女の下着に鼻をすりすり。

「あん」

鷹女ちゃんは甘い声をあげるも、

「もう。鳥乃さんったら甘えん坊さんなんですから」

と、スカート越しに私の頭をよしよしする始末。

彼女は、私がどんなセクハラをしても決して怒らない。だからといって無反応に徹してやり過ぎそうというわけではなく、それどころか両手を広げて「おいで」と受け入れるのだ。

「沙樹ちゃん?」

後ろの梓から感じる、闇のフィールよりおぞましいオーラ。

「もう。徳光さん」

対して鷹女ちゃんは、いまの粹をやさしく窘めるように、

「そんな顔で起こつたら鳥乃さんがびっくりして怖がっちゃいますよ。鳥乃さんはとてもデリケートですもの」

「ぶひい」

私は鳴いた。

粹のおぞましい何かが更にヒートアップし、

「ねえ誓裁さん。どうしてデリケートな子があんな煩惱丸出しの豚みたいな鳴き声するのかなーって思うんだけど」

「あら、可愛いではありませんか」

「そもそも沙樹ちゃんのこと甘やかしすぎだと思っただけ」

「徳光さんが厳し過ぎるんですもの。誰かが優しくして差し上げないと」

「さじ加減つてもものがあるよね?」

「同じ言葉を徳光さんにもお伝えしますね。親しき仲にも礼儀ありというお言葉も添えて」

鷹女ちゃんも引かないから、私は人生で初めて自分を巡って女の子同士が火花をバチバチ散らしている瞬間に立ち会ってしまう。

私はスカートから抜け出して、

「ま、まあとりあえず相合傘の話だけ。悪いけど断るわ」

私はいった。鷹女ちゃんのおっぱいを服の上から揉みながら。

「きゃっ、あん……んんっ、ど、どうしてですか?」

悶えながら訊ねる鷹女ちゃん。

「んー。まあ、ちよつと体育館に寄ろうと思って」

私はいった。まあ、当然ながら、

「でしたら、わたくしも同行させてください、いあん」

と、鷹女ちゃんは引き下がらない。乳首は私が押したけど。一方、粹は何かに察したようで、

「沙樹ちゃん。その心は?」

「雨のじめじめの中で汗に蒸れた運動部女子を視姦しに行く」

はつきり、私は目的をいった。すると鷹女ちゃんは寂しそうに、

「そんな鳥乃さん、わたくしという者がおりながら。鳥乃さんでしたらわたくし、一夜だつて共に致しますのに」

と、儂くとも艶めかしい仕草で。

「だからよ」

私は彼女の前に立ち、その頬にそつと触れ、あごをくいっとあげ、目と目で見つめ合う。

「私、女の子を一番魅力的な状態で抱くのが好きって話なのよ。悪いけど鷹女ちゃん、今日は大人しく放置プレイされて、股を濡らしながら次回まで焦らされてくれる？」

「……はい」

僅かな無言の後、ぽつとした顔で鷹女ちゃんは無言でうなずく。

「ありがとう」

私は鷹女ちゃんを解放し、

「つて話だから。梓、途中まで一緒に行かない？」

と、振り返ると、梓はじとつとした半眼でこちらを見つめてて、

「梓？」

「私には、したことないのに」

「え？」

「ううん、何でもない」

先に梓は廊下に向けて足を進め、

「うん。いいよー、行く。沙樹ちゃん」

と、作った笑顔でいったのだった。

ところで、さつき私が鷹女ちゃんにしたこと。後になって思ったらすつごくキザだった気がする。最近、任務の中でアインスと絡みつばなしだったから移ったのかもしれない。

「ねえ、梓」

私は隣で一緒に廊下を歩きながら訊ねる。

「もしかして、梓もして欲しかったの？ さつきの冷静になったら自分でドン引くようなキザなやり取り」

「え!?!」

と、梓はビクツてなった。うわ、梓、目が泳いでる。これって確定

な話？

「聞こえてたの？ 沙樹ちゃん」

「うん、バツチリ。私はライトノベルにありがちな相手に都合の良い難聴スキルは持ってないしね」

あえて難聴ネタのフリをすることは多くあるけど。

「まあ正直、私としては二度としたくないってノリだけどね。やっぱりキザな王子様スタイルは性に合わないわ」

「うん。沙樹ちゃんキモかった」

笑顔でのたまう梓。

「酷っ」

「でも……」

梓は歩きながら2〜3秒ほど間を置いて、

「人にしてるのを見るのはキモくても、案外自分がされたらきゅんってしちゃうそう、かなー」

「そう。ありがと、梓」

私は、まず言ってから、

「でも梓はノーマルなんだし、きゅんとするは無いでしょ」

「そうかなー？ そうかも」

ここで、いまの話題はとりとめなく終わった。

しばらく私たちは無言で歩いていたのだけど、階段を降り1階の廊下を歩いてたとき、

「あ、アンちゃん」

梓が正面からこちらの方角に向かって歩くアンちゃんを見つけ、

「いま帰り？ よかったら私と一緒に」

と、言いかけるも、アンちゃんは私たちに一切反応することなく私たちを横切って歩き去ったのだ。なお、今日の彼女は杖は持つてるも二本の足でしっかり立って歩いている。

梓は振り返り、彼女の後姿を眺めながら、

「どうしてかなー。最近、アンちゃんって私が話しかけても全然反応してくれなくなってる」

「いつ頃から？」

「正確には覚えてないけど、誓裁さんが転校してきた辺りだと思う」
ああ。

「奇遇ね、実は私も」

それだけじゃない。アンちゃんだけじゃなく、神簇やアインスも、鷹女ちゃんが転校してきた辺りから私と接触を避けるようになったのだ。共通点から考えるに、恐らくハイウインドに何かあったのは間違いない。だけど、まさか梓にまでとは。

これは、何とかしてハイウインドの誰かから話を聞いてみる必要があるだろう。幸いにもメンバーは学園内にもうひとりいる。それもとびつきり潔癖性な子が。

「ごめん、梓。予定変更」

私はいった。梓はきよとした顔で、

「え？」

「ちよつと用事ができたって話。悪いけどちよつと行ってくるわ」

「沙樹ちゃん。行ってくてどこに？」

と、訊ねるので私は、

「中等部」

なんて答えたのだった。

突然だけど、木更ちゃんみたいに二桁みたいな人数ではないものの、実は私にも従姉妹が2人いる。ひとりは別のクラスに在籍する同級生だけど、その妹である『もうひとり』は、中等部で、剣道部所属で、しかもNLTに所属しているのだ。

私はハンカチで濡れになった衣服を拭いながら、中等部の武道場で適当な剣道部部員に島津先生を呼んで欲しいと頼む。

過去の悪評で最初は警戒されてた私だけど、いまでは私を見て距離を取ろうとする人間は殆どいない。三年生も慣れたのか危害を加える意思がないと気づいたのだろう。

「先生でしたら、先ほど職員室に行かれましたよ」

入口で先生を待っていた所、不意に私は話しかけられた。

背丈は小学生と大差ない。ショートトの髪に、凹凸のない華奢な体

軀、それでいて武道に携わる者らしい落ち着いた雰囲気を纏っており、体操服姿はともかく竹刀を握った様子がとても似合う。

私はいった。

「いたんだ。みいね」

彼女こそが、私の従妹のひとりである。名前は虎狩こかり みいね。小学生と大差ない背丈とあったが、それもそのはず彼女はまだ今年入学したばかりの中学一年生なのだ。

入学後のみいねとまともに話したのは今日が初めてだけだね。

というのみいねは私の母の妹の娘のだけど、現在は家同士の交流が完全に途絶えている。原因は完全に私たち母娘。元々叔母さんは昔から母に苦勞してたらしいのだけど、その母が私を放置子とした事で、ついに自分の家を護るために距離を置き、私が小学校中学校と問題を起こしてばかりだった事で絶縁宣言に発展。

みいねが生真面目で律儀な性格だったおかげで、叔母さん抜きで偶然顔を合わせれば挨拶する程度の面識はあるけど、その程度。お互い裏業界に関わりたいまでも、コネやパイプが大事な世界にいて過去一度も仕事で連絡を取った事がないのが証拠だ。意識して避けてるわけでもないけどね。単に私のみいねに興味ないだけだ。

「お久しぶりです。今日は任務もありませんでしたし、極力部活の時間と被らないようにはしてますから」

可愛げの無い、大人びた口調でみいねはいい、

「それよりも、最近多いですね。こちらに顔を出されるの。島津先生は沙樹さんの趣味ではないと思っていたのですが」

「大体任務って話。今回は違うけど」

言いながら、「そうだ」と思い、私は駄目元で、

「そうそう。突然だけど二年生のシルフィード・フォスって子を放課後に見なかった？ まだ校内にいる事は分かっているんだけど」

というのも、今日私が島津先生と接触した理由が、仮に校内放送をさせてでも彼女を呼んで貰おうと思ったからである。本来、今回は仕事でない以上先生にそこまでさせる材料は脅し以外何もないのだけど、梓が被害に遭っているのだから、そんな事関係ない。昔から私は、梓

の為なら手段を選ばないスタンスだ。

すでに昇降口の下駄箱を確認し、シルフィがまだ校内に残ってるのは分かっている。あとは何とかして呼び出せればいいのだけど。

「シルフィード先輩ですか？ 申し訳ありません。私は見ておりません」

みいねはいった。

「そう」

まあ駄目元で聞いたのだから、そう返事がきて当然だ。

「じゃあ、職員室のほう行ってみるわ」

私はいい、武道場を後にしよう。が、そこへ。

「ハイウインドのことですね？」

と、みいねは訊ねてきたのだ。

「まあね」

否定する必要はないので、私が肯定すると、

「これは又聞きの情報なのですが、どうやら現在、上層部の決定で大変なことになってるそうですよ」

「大変な事？ 具体的には？」

「そこまでは」

みいねはいうも、

「ただ、もしかすると沙樹さんと決別しなければならぬ、とはお聞きしました」

「そう」

ということとは、何かの力が働いて私の討伐指令でも出たのかもしれない。梓まで無視しているのは、一般人を巻き込まない為だろうか。

「ありがとう、そっちも視野に入れて調べてみるわ」

私はみいねと別れ、今度こそ職員室に向かった。

結局、この日私はシルフィにも島津先生にも逢うことはなかった。

しかし、事態は当日の夜に動き出した。

日が沈むと同時に雨も止んだ為、私はKasugayaで夕食でもとりつつ、常連の木更ちゃんか霞谷さん辺りに接触しよう。夜の住

宅地を歩いていたときだった。

突如、私は背後から何かが飛来してきたのを感じ、咄嗟に回避行動。それは、一筋の火花。ショットガンを用いる焼夷弾のひとつ、ドラゴンブレズ弾を用いたファイアお得意のファイール攻撃だった。

数時間前にみいねから聞いた情報は真実で、そのハイウィンドが私に対し戦闘行為を仕掛けてきたのだ。

(ファイアはどこにいる?)

私はその場で五感を総動員し、周囲に気を張り巡らせる。程なくして、家の屋根から誰かが動く気配を察知し、

「そーっ！」

私は懐に隠し持ってた銃で抜き撃ち。が、気配の正体はこちらの予想とは違い、

「どらああああああっ!!」

発砲した先には、飛び降りの勢いを利用したライダーキックで私に襲い掛かるシュウの姿が。しかも、弾丸は彼女の足に込められたファイールで弾かれてしまい、

「っ」

私はバックステップでシュウの攻撃を回避。が、地面は雨で滑りやすくなっており、私は転ばないまでも僅かに姿勢を崩し、このタイミングを狙ってたかのように二発目のドラゴンブレズ弾の火花が私に襲い掛かる。避けられない。

「サキッー！」

直後だった。私の後ろからガルムが飛び出し、私を庇って火花を浴びたのは。

「ガルム!?!」

「大丈夫、サキ?」

ファイールの防壁で真正面から耐えきったガルムは、八重歯の見えそうな笑顔を私に向ける。

私は姿勢を整えつつ、

「私は平気。それより、どうしてここに」

「その話は後。くるよー！」

ガルムは言いながら、真正面から殴りかかるシユウの拳を受け流し、逆に拳をシユウの腹にぶち込みつつ手首に内蔵した二丁の砲身を杭打ち機として展開。

「がっ」

貫通はせずとも、間違いなく、シユウの腹にめり込んだのだろうか。ガルムの砲身。

「終わりよー… って、わふっ」

ガルムがとどめの零距离射撃に入ろうとした瞬間、遠くから飛来してきた銃弾にガルムは回避行動を取らされ、その隙にシユウは後退。どうやらフィーアは得物を狙撃銃に切り替えたらしい。

「痛ってえ」

シユウが回復用のフィール・カードを腹部に当てながら、口から血を吐き捨てる。

私は周囲に気を張りいった。

「悪いガルム。もう少し庇いながら戦える？ 狙撃手の位置を特定するから」

「別に目の前のは倒しちやってもいいのよね」

「いいけど」

それフラグ。ガルムのことだから分からず言ってるのだろうけど。

しかし、いざ任せてみると、リアルファイトでは肉弾戦特化なはずのシユウを相手に、その肉弾戦でガルムは圧倒しはじめた。

体を弄られ身体能力が底上げされた肉体に、人間離れした瞬発力を当たり前に掲げる獣の魂。本来なら黒山羊の実が創りし人の姿をした怪物として脅威になるはずだったのだろうけど、味方になってしまふとヤケクソに強すぎて頼りになるなんてレベルじゃない。ゲームでいうなら敵のボス級エネミーがそのステータスのまま味方参入するようなものである。

先日アインスがガルム相手に足止めできてたのも、ガルムの意思じゃなかったこと、ガルムとの相性、それを最大限に活かす戦場と、幾つも好条件が重なったの奇跡でしかなかったのだ。

あれ以後、フィーアからの射撃は確認できていない。

正直、彼女もボス級エネミー並の性能をしているが、ガルムを捉え、決定的な一撃を与えるのは一苦労らしい。しかも、ここから先一度でも攻撃を行った瞬間、私が彼女を捉える。牽制射撃さえ仕掛けてこない所から察して、私の射程圏内にいる可能性が高い。

しかし、このままだと間違いなくシユウは倒される。焦って強行に出たのだろう、私はついにファイアを発見した。しかも、銃口がガラムではなく私に向いてる事まで確認。

(捉えた)

私は内蔵銃でファイアが射撃するより先に――。

「シユウ、避けるんだ!」

発砲、する瞬間だった。上から散弾の雨が私とガラムを襲ったのは。

(アインス!?)

ここで、私は大きな間違いに気づいた。

ファイアは私に気づかれぬ為に射撃を避けてたのではない。逆に私の意識を彼女に集中させ本命を悟らせぬ為に、あえて私の作戦に付き合っていたのだ。そして、私とガラムの距離がちやうど近づき、かつ互いに回避行動も庇うこともできない瞬間を、三人の連携で作りに上げたのである。

「ぎゃあっ!」 「がっ……!」

アインスによる完全な奇襲に、ガラムも私も防壁を張り切れず、急所こそ何とか守りきるも私たちは揃って全身から血を噴き出す。

「悪いね鳥乃、これでジ・エンドだよ」

弾丸を補充し終え、再び構えるアインス。そこへ近くの壁から突如煙が上がり、

「ふたりとも、ボクに掴まって」

と、フェンリルの声。煙のあがった箇所は鋭角だった。

了解。と言葉を発する余裕もなく、私とガラムは彼女の手を掴む。そして、掴んだ手に引っ張られると、私たちは田村崎研究施設のメンテナンスルームにいたのだった。

「まさか、ガラムも一緒にここまでやられるなんて。大丈夫?」

フェンリルが心配そうにいった。

私はいまにも倒れそうな体を、壁を支えに姿勢を維持し、

「微妙ね。少なくともフェンリルが助けてくれなかったらふたりともお陀仏って話だし、仮に切り抜けても出血で倒れるのは時間の問題」
「うん。うー負けたー。悔しい」

一方、ガラムは自分から床に倒れ、悔しげに唸る。

「とりあえずふたりとも、すぐ治療に入るからカプセルに入ってくれないかな？」

と、フェンリルはガラムを肩で担ぐ。見るとメンテナンス用のカプセルは開いており、いつでも治療できる状態になっていた。

ここで、やっと私はガラムが駆けつけてくれた経緯に気づく。

この研究施設には私の副頭脳AIと繋がってるコンピュータも存在してる為、私がダメージを受けたり戦闘行為を行った際の異常事態はすぐこの施設で判明する。

そして、ガラムとフェンリルは現在も検査やメンテナンスを兼ねて研究施設で暮らしている。たぶん、幸運にもふたりはコンピュータの報告をいち早く察知することに成功し、フェンリルの鋭角を介したワープでガラムを加勢に向かわせてから研究員を呼び、二人分の緊急メンテナンスの準備に入ったのだろう。

なんて頼もしい後輩だろうか。おかげで私は命を拾うことができたのだから。

「助かるわ」

私はこの場をフェンリルに任せてカプセルに入り、すぐ意識を手放したのだった。

幸運にもアインスに与えられた傷はさほど深くなく、私たちは翌朝には損傷をすべて全快することができた。

目を覚まし、改めて状況を確認した私は、自分の推測が「半分正解」でこそあれ「真実には一步足りない」ものであることが分かった。

曰く、襲撃の少し前に今回の事態を情報提供してくれたお客様がいたらしいのだ。

「こちらの部屋を使って貰ってます」

目を覚ましてまだ30分未満。傷は塞がったもののダメージによる疲労を残したまま、私は森口博士に来客用の宿泊スペースへと案内される。曰く、お客様は私を指名の『ドラゴンキャノン』を口にしたものの、私が呼び出される寸前に襲撃を受けた為に面会できなく、そのまま施設で一晩を過ごしたらしい。

私が眠ってる間に、鈴音さんを介してすでに依頼は受諾扱いになってるそうで、今から私は引き受ける事が確定させられた依頼内容を聞きに行く、という流れである。

「おはよう御座います。鳥乃をお連れ致しました」

森口博士が、客室のドアを叩き伝える。

「ありがとうございますー」

すると、部屋の奥から声。しかもこの声は、私のよく知る人物の声であり。

「失礼します」

森口博士がドアを開けると、少々狭いながら設備が一通り揃った部屋に、ふたりの少女がベッドに腰かけ私を待っていた。いや、片方は少女と呼ぶには実年齢が厳しいのだけど。

「おはよう、沙樹ちゃん。無事みたいで良かったー」

「おはようございます、鳥乃さん」

それは、昨日まさに接触到失敗した島津先生とシルフィのふたりだったのだ。

「えっと、おはよう。先生、シルフィ」

何とか挨拶しながらも、この事態に面食らう私。え、なに？ どうしてふたりがここにいて話？ しかもシルフィなんて件のハイウインドの一員だし。

島津先生は、まず少しだけばつの悪そうに、

「ごめんね。昨日沙樹ちゃんのほうから会いに来てくれたんだって？」

それも雨の中武道場まで」

「え？ そこも把握済みって話？ どうして」

すると、今度はシルフィが、

「えっと。鳥乃さん、みいねちゃんって子に私の所在を聞かれましたよね？ その子から剣道部にいる私の友達に連絡がいつて、そのお友達から私に」

続けて再び先生が、

「それで昨日は放課後からずっと一緒に動いてたから、私の耳にまで届いちやったのよ」

「ああ」

だから昨日、ふたり揃って逢えなかったわけね。

「別に大丈夫よ。こうしてふたりがここにいて話だもの」
すると、シルフィは悲痛な表情を見せ、

「ハイウインドのことですよね？」

「うん」

私はうなずく。

「昨日の時点では、梓までアンちゃんに無視されてると知ったから事情を聞きに来た程度だったけど、みいねからハイウインドが私と決別しようとしてるって情報を貰って、実際にその晩」

「襲撃にあつたんですね」

「うん」

私は肯定し、

「何があつたの？」

「組織の上層部から、鳥乃さんの地縛神を回収しろと命令が出たんです」

シルフィはいった。

「勿論、私たちは拒否しました。あのカードが命と繋がったファイル・カードで、それを奪ったら鳥乃さんが死んでしまうことをアインスが知ってたから。でも、上層部の決断は覆らなくて、それどころかはっきりと地縛神は危険なカードだから『殺してでも回収しろ』って」

「その組織って」

私は訊ねたが、やはり機密事項なのだろう。シルフィは首を横に振る。

「その日から、琥珀さんとアンさん、そしてメールさんという方の3人

を中心に、なんとか作戦を中止または延期できないか頑張ってきた。その頃から、私たちは鳥乃さんと接触を避けるようになったと思います。ターゲットと親しくしてたら、今度こそハイウインドが解体されかねないって話になって」

「でしょうね。立場が逆なら私でも同じ行動をとるわ」

ハイウインドは前科付きだから、下手な行動は裏切りや離反と受け取られかねないのだ。

「ただ、梓さんという方まで無視するようにと指示は出されてません。たぶんアンさんは、友達の友達を殺さなくてはいけない罪悪感に耐えきれなかったんじゃないかなって」

「だろうね」

言いながら、私は心の中で「それはない」と断言する。だって、あの子性格悪いから。たぶん、私情を抜きにした組織としての判断か、いま梓と接触するのは個人的に都合が悪いのだろう。もしくは、あの子狡猾いから上層部にばれないよう私に気づかせる目的があったのかもかもしれない。

「しかし、メールちゃんか」

当時の推測通り、すでに皆で登録したグループLINEは風化してしまってる。だからだろう、まだ懐かしいというほど時間は経ってないはずなのに、あの子たちとの出会いが遠い昔のように感じてしまうのだ。

「以前、監査官としてT o k y oから来られた方らしいんですけど、お知り合いですか？」

あ、そういえばシルフィは当時の出来事を何も知らないのだった。

「まあね」

私は肯定し、

「というか、その監査官の護衛として一緒に神簇邸にお邪魔したって話」

「えっ」

シルフィは驚き、

「そうだったのですか。本当にハイウインドって鳥乃さんのお世話に

なりっぱなしなんです。私も含めて」

と、少しだけ自虐的に笑う。しかし、再び悲痛な顔で、

「でも、問題はそれだけではなかったんです」

シルフィはいった。

「上層部からの命令とほぼ同時期に、王子としてのアインスに依頼が持ちかけられてたんです。それを、本人以外の皆は昨日初めて知りました」

「ここで私は、

「誓裁 鷹女ね」

「!? はい」

驚きながらも肯定するシルフィ。私は続けて、

「で、依頼内容は大方、”レズの肌馬”を殺害しろとか?」

「何で分かったのですか?」

「そりゃあね。突然転校してきた上に、股の軽そうなギャルメイクまでして私にハニートラップ仕掛けてくるのよ。しかも本来ギャルとは正反対な人間なのが全く隠しきれてない。警戒するなあってほうが無理な話でしょ」

と、私は乾いた笑いを浮かべた。

「アインスは」

うつむき、シルフィは続ける。

「すぐに断ったそうです。でも、彼女は何度も何度も食いついて。断れば自分で殺す言い、君では無理だとアインスが言えば、なら依頼を請けてと、そんな堂々巡りが続いたそうです」

余程私は殺意を持たれてるらしい。恐らく私が過去の任務で殺した人間の関係者なのだろうけど、一体どこの繋がりだろうか。

「そんな折、ついに誓裁さんはアインスの首を縦に振らせました。昨日のことです」

「どうやって?」

私が訊ねると、シルフィは体を震わせいった。

「鳥乃さんを殺せないなら、せめて梓さんって方を殺して、仇に同じ苦しみを与えるといったそうです」

「っ!？」

そこまでは予想してなかった。私はゾツとする思いに顔が青くなる。

「アインスは、鳥乃さんの大事な人を護るために、地縛神のカードを回収すること」

「決めちゃったのね」

「はい」

シルフィはうなずいた。

話を聞く限り、ハイウインド側の問題と鷹女ちゃんの転校自体は関係ないらしい。思えば、私や梓が避けられだしたのも鷹女ちゃんが転校した「辺り」であって厳密には若干のタイムラグがある。鷹女ちゃんにハイウインド上層部とパイプがある可能性もあるにはあるけど、それならメールちゃんから何かあるはず。恐らく今回は必然ではなく偶然。運命が鷹女ちゃんの味方をしてるように思えた。

「アインスの選択に、シユウとフィーアは地獄まで付き合う覚悟みたいです。でも、私はそんな選択できません。できるわけないよ」

小さく嘆くシルフィの背中を、島津先生が優しく抱く。

シルフィは島津先生の温もりに支えられながら、言葉が続ける。

「だから、琥珀さんとアンさんが、私に任務を与えてくれました。私にスパイとして鳥乃さんの側につくと、事情を話して、鳥乃さんに都合の良い依頼をするようになって」

「私に都合の良い依頼、ね」

「お願いします」

シルフィは頭を下げた。

「私たちを助けて！ 誰の血も流さず、地縛神が安全なカードだって証明して、アインスも、フィーアも、シユウも、みんな助けて！」

「それが私に都合の良い依頼？」

あえて、私は冷たく訊ね返した。これでは私ではなくシルフィの都合に良い依頼だからである。

「じゃあ、どうすれば」

訊ねるシルフィに私はいった。

「期間無制限のセフレ契約」

「え？」

「神簇とアンちゃんに伝えて頂戴。一生私のセフレになってくれるなら依頼を請けてあげるって」

否、私はブレずに性欲のまま要求を伝えた。

「あ、あのね沙樹ちゃん」

しかし、ここで島津先生は申し訳なきように、

「もう、依頼は受諾されちゃってるのよ」

「え？」

「だから、さっきのシルフィちゃんの内容で、もう依頼は成立しちゃってるの」

そういえば、今回の依頼って鈴音さんの権限ですでに引き受ける事が確定してるって聞かされてたような。ということは、てことは。

「チクショーーーーッ!!!」

私は、血の涙を流さんばかりに叫んだのだった。

その日の放課後。

私は、学校からバス亭までの帰路を梓と一緒に歩きながら、

「そうだ。悪いけど梓、この後ちよつと時間ない？ むしろ作ってくれると嬉しいんだけど」

早速、梓を保護するための行動に出ていた。

「え、別にいいけど。どうして？」

「ちよつと連れて行きたい所があるのよ。場所は着いてからの楽しみ、というには全然楽しくない所だけど」

「うん。いいよ」

事情を知らない梓は嬉しそうに微笑むので、

「いや、お出掛けしようとかいう話でもないんだけどね」

と、良心が抉られる。悪い事してるわけではないのに。

依頼を請けてから私は、いつも通りを装いつつ梓と一緒に学校に行き、気づいてるのがバレないよう迫ってくる鷹女ちゃんに変わらずセクハラをし、だけど四六時中梓の傍につき続けた。

梓には言いたくはないが、今回は互いが互いの命を守る盾になつて
るのだ。

まず、ハイウィンドは作戦内容上、梓には特に気を使って巻き込ま
ないようにしてるだろう。だから、私が梓の傍にいる限り、奴らは見
張りはしても攻撃してこない。

逆に鷹女ちゃんはいつ梓を殺しに来るか分からないので、私が傍に
いる事で護ってあげられる。しかも強行に出れば私を見張ってるハ
イウィンドの目に止まり、言い逃れできない契約違反を晒してしま
う。

結局、私たちは一度も狙われることなく放課後まできたわけだけ
ど、このまま家で別れたら本末転倒。

家の傍で待機できたらいのだけど、立地的に小母さんに見つかる
可能性が高く、通報または追い出される危険性があつた。

その為、私はついに自分の「仕事」を明かすのを覚悟で、梓を研究
所に呼ぶことにしたのである。本当はハングド事務所がいいのだけ
ど、シルファイが偽のスパイを演じるためには一緒に行動しなくてはな
らない。となると、ハングドの事務所では客室が足りないのだ。

(やごと)

周りに人がいなくなったタイミングを見計らい、私は後ろを振り向
き、いう。

「いるんでしょ、ファイア。こちらに攻撃の意思はないから、ちよつと
顔出してくれる?」

「え?」

きよとんとする梓。直後、ファイアは死角から顔を出し、

「何か御用ですか? 鳥乃さん」

よかつた。つい使い古されたノリでやっちゃったけど、実はちよう
どハイウィンドの気配を見失つたのである。これでファイアがい
なかつたら、とんだ赤っ恥を晒すところだったのだ。

「あれ、この子って」

梓が呟く。そういえば旅行のときにシルファイ以外のハイウィンド
組とは一応顔を合わせたんだっけ。

「ん、まあ言っちゃえばハイウインドに伝言を頼みたくなってね」

「私はいった。」

「伝言ですか？」

「そう。たぶん、そっちにとっても利になる内容を考えたんだけど、お願いできる？」

「とりあえず聞かせて頂きます」

「ありがとう」

フィーアが聞く耳をもってくれたので、

「本日の0時、私はアインスに正々堂々と決闘を申し込むことにするわ。場所は、目撃者を避けたいから神簇邸の庭の中央。勝者は敗者の命を与奪する権利あり。どう？」

「さ、沙樹ちゃん」

驚き、「何をいつてるの」とすがりつく梓。

「事情は後で」

私は小声で梓にいい、

「で、どう？ 伝えてくれる？ たぶん、返事もお願いされると思うけど」

「分かりました」

フィーアはうなずいた。

「すぐにアインス及び第一第二司令にお伝えします」

「助かるわ」

「では」

と、すぐに帰ろうとするフィーアに、

「あ、待って」

私は呼び止める。

「何か？」

「悪いけど、研究所に着くまでは引き続き銃口をこっちに向けて見張つてくれる？ 実はハイウインド側の行動を逆に梓の護衛に利用させて貰っててね」

「え、私？」

やっぱり事情が読めない梓。もちろん、これも後で伝える予定。

「他に見張ってる子がいるなら構わないけど」

「いまは私だけです。分かりました。ただ、徳光さんと離れてひとりになったら遠慮なく攻撃に入りますので、そのおつもりで」

「フィーアはいい、さらに続けて。」

「デュエルでもリアルファイトでも、ハイウィンドは個人のあなたに劣るつもりはありませんから」

と、強気な発言。これは勿論、警告なのだろう。殺せるときには、昨日のように殺しにかかるという。

「別にいいわ。梓に生傷を残す事態にさえならなければ。……でも、さ」

私はつい話を脱線させ、

「変わったわね、スローター処分人」

「それが今の私の立場ですから」

「一時期ハイウィンドを潰しかけた人がいってもね」

私は軽めに笑い、

「昔の処分人なら任務遂行を優先して梓ごとでも私を殺処分してた。事実今日もそのタイミングは幾つもあったのに、あなたはそれをしなかった。でしょ?」

「いえ、少し違います」

「フィーアはいい、

「以前の私なら学校を爆破して殺処分しました」

「うわあ。もっと過激だった。」

「でも」

「が、続けてフィーアは、

「鳥乃さんを殺処分するという任務は、学校を爆破してまで成し遂げる価値はありません。今回は最小限の被害でいかせて頂きます」

「やっぱり変わったわね」

彼女は、この短期間に命の重さというものを、人の繋がりというものをこれ程かというほど学んだのだ。これならば大丈夫。何があっても、今回の件で彼女は間違いを犯さない。

「呼び止めて悪かったわ。私からは以上よ」

「分かりました、では」

ヒロちゃんから何か学んだのだろう。フィードは、まるで忍者みたいにこの場から消えたのだ。当然、気配も全く感じない。

で、入れ替わりに車道側から私たちの傍に一台の車が停まった。

「沙樹ちゃん、梓ちゃん」

車の窓が開くと、運転席から顔を出したのは島津先生。

「研究所に行くのよね？ 乗せてってあげりゅ」

いつも通り噛み噛みだったのは、指摘してあげないことにした。

梓はきよとんとして、

「え、沙樹ちゃん？ どうして島津先生が」

「んーまあ最近、仕事の関係で先生と接触する機会増えちゃってね。今回もそれ」

「お仕事？」

梓が、私の「仕事」をあまりよく思っていないのは知っている。ただ、詳細をどこまで知ってるのかは定かではない。

「とりあえず、詳しいことは車の中で話すわ。じゃあ先生、お言葉に甘えさせてもらうって話で」

私は、後部席のドアを開け、梓に乗るよう促す。

なお先生が迎えにきてくれるという流れは、元々の予定には無かったものである。本来ならこのままバスに乗り、普段と違う駅で降りて研究所まで徒歩で向かう算段。そもそも先生は今回の問題にこれ以上首を突っ込むのかどうか不確かなまま、私は学校に向かってしまったのだ。

「うん」

梓が乗った所で、私は反対側の後部席に乗った。

車が研究所に向かって動き出した。

「ごめんね。お節介だと思っただけど、今日は早めに帰れそうだったから。迷惑じゃなかった？」

発進してすぐ、車が赤信号に掴まった所で、先生は首をこちらに向けて訊ねる。

「むしろ助かったわ。バスだと鷹女ちゃんと同乗する危険もあったし

ね」

対して、先生の車で向かうルートなら、鷹女ちゃんに私たちが寄り道してる情報が伝わり辛い。何より、車の中でなら、研究所に着くより先に、梓も信頼する第三者がいる中、いま起きてることを伝えることができる。

先生が迎えに来てくれた事は、どう考えても私にとって嬉しい悲鳴なのだった。

「誓裁さん？」

あ、梓が警戒しだした。

「うん、そうだよねー？ 危険だよねー？ バスの中でいちやいちやされたら色々たまらないもんね」

また危険なオーラを発しながら梓はいう。が、私はあえてスルーし、

「ねえ。梓、前にロコちゃんが入ってたハングドつての覚えてる？」

「え？ うん」

こちらが途端、ガチのシリアスモードで訊ねたものだから、梓は少々動揺した様子。

「ごめん。あの時、ひとつだけ嘘ついたわ。……そこが、私の仕事先なのよ」

「あ、やっぱりそうなんだ」

「気づいてたのね」

「確定ではないんだけど。沙樹ちゃんの行動を見ると、そういう節は多かったから」

当然だけど、梓は私の事をよく見てる。

「仕事内容は、あの時言った内容とほぼ変わらないわ。シティーハンターみたいな、護衛に探偵、殺しまで請け負う裏稼業専門の何でも屋。それを小規模の組織レベルに発展させたやつよ」

「殺……そっか」

梓は俯いて、

「沙樹ちゃんも、あるの？ 誰かを殺したこと」

「少なくとも、衰弱した妙子を山に投棄した奴を殺した」

「っ」

驚く梓。

「ごめん。いきなり殺しの話は怖いわよね」

梓から返事はなかった。が、程なくして代わりに、

「ねえ沙樹ちゃん。どうして、いまになってそれを私に明かしたの？」
と、踏み込んできた。

車は真っ直ぐ研究所に向かっていている。あれから赤信号にも渋滞にも掴まってないので、順調に行けばあと数分で到着するだろう。

「梓。私を責めることも視野に入れて、心して聞いて」

私は、はつきりと口にした。

「いま梓は、ある子に命を狙われている。それも私のせいで」

「え？」

顔をあげ、驚く梓。

「どうということなの、沙樹ちゃん」

「先日、私と親交のある同業者の下に依頼が舞い込んだらしいわ。鳥乃 沙樹を殺せてね」

私は淡々と伝える。同業者は一度は断ったこと。だけど、依頼人は梓を殺すと言い出した為、無関係者を護るため依頼を請けたこと。でもって、

「その依頼人の名前は、誓裁せいさい 鷹女たかめ」

「誓裁さん!?!」

驚く梓。それも、私が人を殺していることを知った時より激しく。

「恐らく転校してきたのも私に接触する為ね。で、ハニートランプで私を隙だらけにしようとした」

「実際メモメモだったもんね」

梓はいうけど、

「仕方ないでしょ。いつも通りの私を演じないと、梓もクラスのみんなも不審に思うし、私が何か察していることに鷹女ちゃん気づいちゃうじゃない」

「っていう名目で、やりたい放題セクハラしてたんだー」

完全に梓は、私を信じてないけど。まあ、悪いけどいまは誤解を晴

らす時間はない。

「話を戻すけど。だから、事件が解決するまで梓には四六時中、私の護衛の目が届く範囲にいて貰いたいだよ。相手は殺したい相手に近づいたため好き放題セクハラさせる人間よ。間違いなく手段は選んでこない。加えて人質で無理矢理依頼を請けさせた殺し屋を信用するとは思えないから、梓を殺すのも諦めてないはず」

「沙樹ちゃん」

梓は不安そうに私の手をぎゅつと握る。

「悪いわね。私のせいで巻き込んだじゃって」

「ううん。むしろ、沙樹ちゃんも私のせいでその同業者さんに命を狙われてるんだよね？ ごめんね」

「私はいいわ。対立は初めてじゃないって話だし」

ただ、残りのハイウインドに加えて神簇にアンちゃんもあちら側。今回ほどこちらが不利なのは初めてだけど。

「それよりも梓って話。梓だけは絶対に危険に晒したくなかったし、だから極力関わらせなかったのに」

「私は大丈夫」

梓は、努めて笑顔を向けいった。

「だって沙樹ちゃんが護ってくれるんだもん。これ以上の安心は絶対ないよー」

「梓」

私は、そう言ってくれる目の前の天使あずさをそっと抱きしめる。

「ありがとう。必ず護るから。梓のことは」

「うん」

梓も、そっと抱き返す。

ミラー越しに、鳳火先生が少し羨ましそうに眺めていた。

研究所に到着した。

20時頃にまた合流するといって学校に戻る島津先生を見送ってから、私と梓は一緒に中に入る。

ロビーでは、鈴音さんとシルフィ、そして見知らぬ男の3人が話を

しており、その内の鈴音さんは私たちに気づくと、男に一言断つてから立ち上がり、

「お疲れ様ですわ、沙樹。それと、お久しぶりですわね」

と、後ろめたさを顔に出しながら梓に視線を向ける。

梓はすぐ「あつ」となり、

「確か、沙樹ちゃんが行方不明MISSION6参照から戻ってきた日の」

「立花たちばな鈴音すずねといいます。その節は申し訳ありませんでしたわ」

「本当だよ」

普段温厚な梓が、珍しく怒りを露にした。

「行方不明の間、私がどんな気持ちでいたのか分かる？ その上、せっかく再会したのにまた連れ去られて」

「ごめんなさい、ですわ」

「ごめんじゃ済まないよ。もう、私から沙樹ちゃんを取らないで」

今にも泣きだしそうな梓の肩に、私はそつと手を添え、

「悪い、梓。それは筋違いつて話なのよ。むしろこの人がいなかったら、私はもう一生梓と会えなかったんだから」

「……うん」

僅かな間の後、梓はついに涙を流し、

「わかってた。一応そんな気はしてたよ。……でも、それでも気は収まらないよ。この人が違うなら、私は誰に文句をいえないの？」

彼女の問いに、私たちは答えることができなかった。

説明できるわけがない。私が一度死んでること。この研究所のおかげで生きながらえてること。逆にいえば、この研究所なしでは生きられない体ということ。いまの彼女に伝えるにはどれもこれもショツキングな内容過ぎる。加えて、フィール・ハンターズが黒幕だなんて正直に言ってしまったら、知り過ぎた梓が今後命を狙われる危険すらあるのだから。

「ごめんね。この人は別に悪くないのに」

沈黙を前にして、梓が折れるようにいった。

「ごめん、梓」

そんな彼女に、私はもう一度謝るしかできない。

鈴音さんがいった。

「沙樹。私はここでもう少し用事がありますので」

「先に梓を部屋に案内しろ、ね。了解」

応えながら、助け船のように告げられた指示に私は内心感謝する。

あのままでと、罪悪感に押し潰されそうだったから。

「って話だから梓、客室に案内するからついてきてくれる？」

「う、うん」

うなづく梓を連れて、私は研究所の奥へと進んだ。

結局、私は最後まであの場にいた男と口を交わすことも、紹介されることもなかった。

梓を連れて移動していた所、扉の開かれたメンテナンスルームから、モニターを眺めるフェンリルの姿を見つけた。

「お疲れ様」

とりあえず挨拶した所、フェンリルはこちらに気づき、

「あ。帰ってきてたんだ。おかえり」

と、その場から挨拶を返す。梓は、また見覚えのある顔を前に驚き、

「この子って、旅行のときに」

「うん。徳光さんだっけ、久しぶりだね」

フェンリルはうなづく。

梓は「もしかして」って顔で、

「フェンリルちゃんもハングドだったの？」

「前に会ったときは無関係だったけど。あの後色々あってね」

「ところで」

私は会話の横から、

「いま、ガルムは？」

「ガルムなら事務所のほうに用事があるって」

「そっ」

よかった。妙子を知ってる梓にガルムと接触させるわけにはいかなかったしね。しかも、フェンリルの言い方から察するに、ガルムは自発的にここを離れたらしい。

もしかしたら、ガルム自身それを分かって行動してくれたのかもし

れない。前に私が「ロコちゃんと接触しないで」って言ったのを思い出して。

「あれ?」

梓がモニターを見ていった。

「あそこに映ってるのって、藤稔さん?」

その言葉に、私もモニターを確認し「あ」となる。

現在、モニターには3×3の9画面が同時に表示されており、その内の8画面は施設内を映し監視に使われてたんだけど、左上の画面だけ木更ちゃんのアパートの一室が表示され、たったいま木更ちゃんの帰宅した様子が映ってるのだ。

「うん」

嬉しそうにうなづくフェンリル。これは間違いなく私用だ。

「フェンリル?」

私は冷めた目で睨むと、

「ちゃんと施設からは許可を取ってるよ。監視警備を手伝うかわりに1チャンネルだけ自由に使っていていいって。それに、チャンネルも木更ちゃんが持ち込んだカメラの流用だしね」

「は?」

え、どういうこと?

「木更ちゃんも、監視警備を手伝ってるとき、こうやってかすが店長の監視とついでに自宅の監視もやってたんだって。ほら」

と、フェンリルが左上のチャンネルを弄ると、Kasugayaの厨房に映像が切り替わる。さらに、客席、かすが店長のマンション前、かすが店長の寝室、浴室と次々に映し出されてから、画面は木更ちゃんの部屋に戻る。

木更ちゃんは、ちょうど制服の上着を脱ぎ、ブラウスのボタンを外しはじめた所だった。

「おおっ」

私は思わず画面を食い入るように見て、

「フェンリル、いやマイフレンド。当然私も監視の手伝いに入る権利はあるって話よね?」

「仕方ないなあ。本当はボクひとりで愉しむ所だったんだけど、特別だよ」

と、フェンリルから許可を得て、ふたり並んで木更ちゃんの着替えを覗いてた所、

「はいふたりともアウト」

梓のハンマーが振り降ろされた。

しかも、今回はついに私以外にも制裁対象が発生したわけで。

それから十数分後。

梓をシルフィとは別の客室に案内し、二人分のドリンクを用意しようとして一旦持ち場を離れた所、

「君が鳥乃 沙樹かな？」

廊下に設置された自販機の前で、私はひとりの男に声をかけられた。

研究所の人間ではない、しかし先ほど鈴音さんと話してた人とも別の男だった。ウェーブのかかった金髪で、無駄に白い歯を輝かせたその笑みは、アインスト同類のキザでウザい王子様を感じさせる。

だから私は無視して自販機に小銭を投入。

「突然、親友に命を狙われ不安なもの分かる。加えて、自身のカードが危険物だからといって殺してでも回収しようという、その理不尽さも」

ペットボトルの緑茶をふたつ購入した所で、私はすぐ梓の下へ。

「だが安心してくれー！」

が、男は涼しい顔と暑苦しい態度で私の前に回り込み、

「この私が来たからには、君の命はきつと保障されるだろう」

と、自分の髪をくるくる弄る仕草。

「誰？」

早く梓の下に戻りたいので、私は露骨に嫌悪を顔に出し訊ねたのだけど、

「よくぞ聞いてくれた！ 我が名はナルキサス・フォン・スタルダー。

栄光あるネビュラ財団の騎士だ」

「ネビュラ財団!?!」

「我らが上層部の決定により、同胞アインスは友のフィール・カードを回収しなくてはならなくなった。しかし！聞けば君の持つ地縛神は君の命と繋がっているというではないか。たとえ君がハングドという悪魔の一派であろうとも、殺してカードを回収するなど騎士の道理に反する！何より、任務の為とはいえ親友同士で命を奪いあわなければならぬ悲劇に、私は強く嘆いている！」

ひとりで語りだすナルキサス。人の話を聞く様子がない。

しかし、ネビュラ財団とはまたとんでもない組織の名前が出てきたものだ。噂によると、その組織は危険なフィール・カードや異能のような現代社会に逸脱した類を回収し、世間の平和を守る正義の集団とのことだ。世界中に支部が存在し、もし存在するなら世界で最も大規模なロウ組織のひとつに数えられるだろう。

というのも、このネビュラ財団の存在は私たち裏の人間でさえ存在が確認されていない都市伝説のような組織だったのだ。まさか実在するなんて。

(ん?)

で、私はここで彼の言葉にひっかかるものを感じる。

「ねえ、いまアインスが同胞っていったけど、もしかしてハイウインドと神簇家って」

「その通り!! ハイウインドとは本来、神簇の本家当主の妻、瑠璃子様が支部長を務める京都支部の下位組織。そして同時に我が支部の傘下でもある」

「ええ……」

神簇ってそんなヤバイ組織と繋がりにある人だったって話？しかも高村司令と神簇も親戚同士って事は。そういうことって話よね。

「して、レディよ。君に確認を取りたい」

ナルキサスは一転、シリアスな顔をしていった。

「実の所、地縛神というのは本当に危険なものなのだろうか」

その問いに私は、

「正直、危険物ね。ネビュラ財団が噂通りの組織なら、反対意見が出るほうがおかしいって思う位には」

偽ることなく正直に言ったのだけだ。

「なるほど。親友の立場を案じて自ら悪者を演じようというのか。分かるよ、自分のせいで無実の友が名誉を傷つけられるとあっては私も君の立場なら黙ってはいられないだろう」

おもつくそ曲解してきたんですけど、こいつ。

まあ、確かにアインスの為に悪者になったっていうのも間違っただけじゃないんだらうけど、そんなものは「ついで」だ。

「いや、私は真実を言っただけ」

「意地を張らなくてもいい。君とアインスの熱い友情は痛いほど伝わった」

ナルキサスは妄言をのたまい、さらには、

「そうか。君は過去に牡蠣根を始め人の命を何人が殺めていると聞いている。実をいうとこの私は、この点に関しては心の底で侮蔑していた。——しかし！いま相対してはつきり分かった。君は己の手を汚し心がどれほど傷つこうとも、護るべき命のため友のため、自ら悪になって正義を成す。そう、君はまさに闇の騎士、ダークナイト！」
勝手に変な称号をつけられた。さらにナルキサスは私の手を掴み、顔を至近距離まで近づけドアップで。

「やはり、君を擁護すべしという私の勘は間違っただけじゃなかった。レディ、君は今宵アインスに決闘を申し込んだそうだが、安心してくれたまえ。この私ナルキサス・フォン・スタルダーが、騎士の名に誓って無益な血を流させぬように提言をしようではないか！」

言いたいだけ言った挙句、ナルキサスは私を解放すると後ろを振り返り、「こうしちやいられない」とばかりにこの場を後にしようと歩き出す。

「待ちなさい！」

私は彼の後ろ姿に声を張り上げてでも呼び止める。

「ナルキサスだっけ？ その様子だと私たちの決闘の話を知ってるみたいだけど。つまり私がフィーアに頼んだ伝言はアインスに届いたのね？」

「ああ。……そうだった。私はそれを伝えにきたのだった」

ナルキサスは振り返り。

「フィーアの代わりに、ハイウインドからの伝言を承っている。233: 50より君のために神簇邸の門を開けてくれるそうだ。観戦したい人はご自由にとの事だから、私や我が支部の支部長も事の行く末を見守りに向かうつもりだ」

「分かったわ。じゃあついでに、あなたを騎士と見込んでひとつ頼んでもいい?」

「この私にできることなら」

と、いつてくれたナルキサスに、

「恐らく誓裁 鷹女つて子が何らかの形で敷地内に侵入するわ。その子が梓の暗殺に出ないよう監視して頂戴」

「了解した。騎士の名に誓って、神聖な決闘に無益な血は流させないと約束しよう」

ナルキサスは今度こそこの場を後にした。

部屋に戻ると、そこに梓の姿はなく代わりにフェンリルが丸椅子に座っていた。

「あ、おかえり」

フェンリルはいい、続けて、

「梓さんなら、いまシャワーを浴びてるよ」

「シャワーを?」

まさか、こいつ梓の風呂まで覗こうと。私が警戒していると、表情にしっかりと出てたのか。

「大丈夫だよ。いまの所ボクは梓さんをそういう目で見ずに済んでるから」

って。少し困った顔で弁解。

「そう」

ならいいけど。いや、「いまの所」とか言ってる以上よくはないけど。

「木更ちゃんウオッチングはもういいの?」

私が訊ねると、

「うん。さすがに、Kasugayaの店長を前にして目がハート状

態の木更ちゃんを見るのは。ちよつとキツいから」

という事は、いま木更ちゃんは日課の真つ最中なのだろう。

「鳥乃さんってさ」

突然、フェンリルは独り言でも呟くように訊ねてきた。

「どうして、梓さんには何もしないの？」

「え？」

「木更ちゃんたちの旅行のときも、鳥乃さんが他の子にちよつかい出して制裁はされてたけど、そういえば梓さんに直接何かはしてなかったなつて」

フェンリルの言葉に、私は「ああ、ちゃんと見てたんだ」と素直に感心し同時に驚いた。

増田の死を皮切りに近頃何かと縁がある彼女だけど、実のところ私と彼女の間には直接の面識は殆どなかった気がするのだ。

たぶん、お互い相手のことはそれなりに知っている。けど、それは他人から聞いたり資料として見たりといった情報でしかない。少なくとも私はそう思っていた。だから、まさか彼女からそんな質問をされるとは思ってもみなかったのだ。

「ボクがいうまでもないとは思うけど、梓さん凄く綺麗で可愛いよね？ バストだって羨ましいくらい大きいし、梓さんを大事にしてるのは何となく分かるけど、君が手を出さない理由なさそうなのに」

「その答えなら、フェンリルが一番知ってると思うけど？」

「ボクが？」

どうして？ 目で訊ねるフェンリルに、

「あなたが、旅行の日以来木更ちゃんに手を出さない理由はなに？」

「そんなの決まってるじゃないか、大事だからだよ。今度こそボクだけの木更ちゃんにしたいって気持ちが無いといえは嘘になるけど、二度目はないのは分かっているからね。そんな馬鹿なことをして今の関係を壊したくないし、今度こそ全てを台無しにする位なら死んだほうがマシだよ」

強い想いの込められた言葉を聞き、

「私も同じって話」

と、私は返す。

「え？」

「大事過ぎるから手が出せないのよ。梓はノーマルだから、私相手に恋愛することは無いって分かってるからね。そりやあベツドの上で滅茶苦茶に愛したいのが正直な欲求だけど、いまの関係を壊してまで強行に出る気もないし、例え胸を触るだけのセクハラでも、それが梓を傷つける結果になるなら絶対しない。ヘタレと思われてもいいわ。たとえ私のレズの本能を裏切っても、梓の涙だけは見たくないって話よ」

「そっか……」

フェンリルは神妙な顔でうなずいた。そして、

「なら、梓さんは絶対に護りぬかないといけないね。血も涙も一滴たりとも流させないようボクも出来る限り協力するよ」

「ありがとう。こちらは、フェンリルと木更ちゃんの進展は応援できないけどね。私も木更ちゃんとのレズセ○クスは狙ってるし」

「うん。色々台無しだね」

フェンリルは満面の笑顔でいった。

「あれ？」

と、ここでフェンリルは何かに気づいたって様子で、

「そういえば、ボクも鳥乃さんに襲われた事ないけど。こっちはどうして？ ガルムには手を出そうとしたんでしょ？」

「手を出されたいの？」

「まさか。まあ、プライドや清潔感ゼロのブ男に手を出される位なら、まだ君の慰め者になるほうがマシだけど」

大人しそうに見えて、案外ズカズカ言うよね。この子って。

「んーまあ、どっちにしても。あと1・2年は抱こうって気は起きないわね」

「数年後ならありえるんだ」

「ん、だって」

私はフェンリルの体を軽く舐め見てから、

「フェンリルってさ。あなた、たぶん15歳以下よ。木更ちゃんより

ひとつかふたつほど年下」

「え？」

資料によると、フェンリルは自分の年齢を知らない。あえて言うなら、フェンリルとして生まれて1歳未満なのは間違いないらしいけど、その前の記憶や経歴が殆ど無いらしい。僅かな情報は、ガルムと違って彼女は間違いなく体と中身が同一の人間だったこと。家族旅行中に観光バスがフィール・ハンターズに襲われたこと。

そういえば、「観光バスがフィール・ハンターズに」って過去に別件を調べてたときに似たような情報を入力していたような。

「あくまで個人的な直観だから確証はないけどね。でも、じゃなかったらこの私が全く発情を覚えないってのも変な話だし」

実際、多分この子は脱げばそれなりに化けるだろうとレズの勘が告げている。だけど、顔立ちだったり、衣服越しに映る現状の体つきだったり、残念ながらもまだ少々幼いのだ。

「そっか……」

どこか嬉しそうにフェンリルはいった。ガルムもそうだったけど、彼女も自分の正体を知りたくないわけがないのだ。

「あ、沙樹ちゃん戻ってたんだ」

ここでシャワーを終え、着替えた梓が戻ってきた。学校指定のジヤージ姿だった。

「お茶。冷蔵庫に入れておいたから」

「ほんとう？ ありがとう」

梓は早速冷蔵庫を開け、中からペットボトルのお茶を取り早速一口。

「そういえば、今晚の夕食はどういう予定になってる？」

三人が揃った所で、私はフェンリルに訊ねてみる。

鈴音さんやシルフィを連れて外食なのか、誰かが代表してコンビニに買い出しするのか。一応、共用の炊事場はあったはずだけど。

「何も予定してなかったから、ボクが何か作るよ」

フェンリルはいった。私は驚き、

「え？ 作れるの、料理」

「うん。ボクにそんなスキルがあつたなんて、こっちに来て初めて知つただけだね。たぶん、ボクがフェンリルになる前に持ってた技術なんだと思う」

「得意料理は？」

「ナポリタン」

即答だった。たぶん嘘はいつてない。

「じゃあ、梓が良かったらフェンリルに任せようと思うんだけど、どう？」

梓に確認をとって貰った所、

「うん。いいよー」

と、快諾。

「了解。じゃあ悪いけどナポリタン12人前作ってくれる？」

「うん、分かったよ」

フェンリルはそういつて立ち上がるも、直後。

「え、12人前？」

「あ。ごめん、鈴音さんとシルフィも食べるなら14人前だったわ」

「待って、残り9人分は誰の分なの？」

と、フェンリルが訊ねるので、私は無言で梓に指をさした。

結局。

シルフィが少食だった為に半分残し、梓は10・5人分のナポリタンを平らげたのだった。

現在時刻22:00。

私は梓の客室で、机にカードを並べてうんうんと唸っていた。

梓は私の行動を見て、

「いまごろデッキを組み直しても回らないよ」

って、使い慣れたデッキで行く事を勧めるも、

「分かつてる。でも、いまのデッキだとか見落としがある気がして」
勿論、私は週1回は5枚以上カードを入れ替えるようにしてるので、デッキ内容を完全に把握はさせてないつもりでいる。だけど、今回はいまのまま向かうと大変な落とし穴に引っかかる気がしてなら

ないのだ。

そんなわけで、もう1時間近く私はデッキと睨めっこしてる。

最初は「私に構ってくれない」って不満がってた梓だけど、この時間になって再び気になりだしたのか後ろから机を覗き込んで、

「あれ？ 私の知らないカードが沢山ある。沙樹ちゃん、こんなの持ってたの？」

と、幾つかを指さしいった。

「ああ」

それは、私が基本ダークドロウで生み出してる幻機獣だったので、「そういえば梓には見せてなかったっけ。全部、仕事の時だけ使ってプライベートでは使っていないカードよ」

「どうして？」

「非売品っていうより、基本存在が認知されてないカードだから」

「そんなの持ってたの？ もしかして、ファイル・カード？」

「正解」

せっかくだから、私は幻機獣を梓が見やすい位置に置き直す。ところで、なんかこういう話していると正當にホビーアニメっぽい事してる気がするわ。実際は、その手の主人公が「カードは友達だ」って批判するような、カードを武器や道具として使ってる側なのに。

「幻機獣って、全部ペンデュラムモンスターなんだー。それに、融合だったり幻機獣の領分で出来ない事をさせてる感じ」

「大体そんな感じね。その分、ピンポイントでピーキーなカードも多いけど」

実際、そもそもがダークドロウの能力で現状を打破する為だけに誕生した代物なのだから、いま私たちが言った特徴は持ってる当然なのだけ。

「あとは、最近手に入れたものだとこれ？」

私は《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》を梓に見せる。すると、

「あ、懐かしい。沙樹ちゃんこれ前持ってたよね？」
って。

「うん。覚えてはいないけど」

「覚えてないの？」

「例の行方不明だったときに、私の記憶からすっぽ抜けたカードが1枚あってね。けど、巡り巡って私の手元に戻ってきたって話」

「うん」

梓はうなずき、

「クリアウイングは沙樹ちゃんのカードだよ。昔、私を虐めた子を沙樹ちゃんがやつつけようとした時に、沙樹ちゃんの手元が突然光ったと思っただらって覚えてるもん」

たぶん、それは神簇とは別のエピソードだろう。あの悪友とは別に、梓を虐めようとして私が喧嘩でやり返した経験は割と何度もあるのだ。その全てが梓の小母さんの目に悪く映ったみたいだけど。お前のせいで梓が虐められたーとか。実は虐めっ子とグルなんだろうか。

「そっか」

私は改めてクリアウイングを手取る。さすが店長が言ってたから自覚はしてたけど、やっぱりこれは私のカードだったのだ。

「最近見ないなーって思ったら、無くしてたんだ」

梓はいい、「あ、そうだ」と自分のデツキホルダーからカードを1枚抜き取る。

「もしかして、これも覚えてない？」

「見ていい？」

と、私は許可を取り、カードを確認する。案の定、見たこともないカードだったけど、これもフィール・カードなのがすぐに分かった。

「覚えてないわ」

「そっかー」

梓はやつぱりって顔で、

「沙樹ちゃん、クリアウイングを使い始めてから、いつの間にかこのカードも持ってたんだよ？ 出所は教えてくれなかったんだけど、前に卓上でデュエルしたときに、コントロールを奪うカードで私のフィールドに置きちゃったせいで、片付けるときに間違えて一緒に持

ち帰っちゃって」

ああ、卓上デュエルあるあるね。

「それで返そうと思ったときに沙樹ちゃん行方不明になっちゃって。おかげで、私もあの時のショックと会えない時間が長すぎて、ちよつと前までこのカードのことも頭からすっぽ抜けちゃってたの」

「そっか」

「だから、このカードも沙樹ちゃんにお返しするね。ハングドを始める前のカードだから、今日のデュエルでも奇策になるかも」

「ありがとう」

私は受け取るも、ふと疑問に思ったことがひとつ。

フィール・カードはデュエルによるアンテイカ、双方の同意による譲り渡しでしか所有者が移らない。言い方はあれだけど今回のような窃盗で手に入れても、気づけば元々の持ち主の下に戻ってるものなのだ。

だとしたら、なぜ私のフィール・カードが梓の下に行ったままなのだろうか。

梓を疑う気はない。ただ、わざと梓の手元に置かせたとか、当時の私側になにかあったのだと思われる。地縛神の眷属になって消えた記憶の全貌は、クリアウイング以外にもまだ何かあるようだ。

ところで。

「奇策、ね」

私はふと脳裏にデツキレシピが思い浮かび、組んでみる。

「できたの？」

「梓から貰ったカードを出す為の戦術に加えて、あえて幻機獣を多用する構成にしてみたわ。ちよつと試運転付き合ってくれない？」

「いいよー」

快諾して貰った所でデュエル、したのだけど。

「私の先攻。アテナバーン7回」

「防ぐ手はない。負けたー」

梓では正直、テストにならなかった。

とはいえ、その後他の人たちも呼んで試運転をこなした結果、何と

か形になったのではないだろうか。

それから程なくして、

「沙樹ちゃん、梓ちゃん、そろそろ出発しよっか」

と、島津先生が部屋の外から私たちを呼んだ。

現在時刻 23:20。

準備は全て整った。

MISSION 26 — 決闘！レズVSハイウインド (後編)

現在時刻 23:55。

私と梓、助手席にシルフィを乗せた島津先生の車は、決闘時刻の5分前に神簇邸に到着した。

車のまま門を潜り、相変わらず自然公園のような庭を進んで中央に。

指定した場所はすでに見知った顔でいっぱいになっていた。前方には、アインスがシユウを隣につけ、右側にはフェンリル、鈴音さん、木更ちゃん、全身防備姿のガラム、さらにはゲイ牧師に深海ちゃん、炎崎の姿まで。左側はNLT・ネビユラ側らしく霞谷さん、菊菜ちゃん、みいね、ナルキサスの姿。その内、みいねとフェンリルは車に歩み寄ると、双方から後部席のドアを開けた。

「各組織大集合って話ね」

私は左側のドアから外に出る。

「これだけ集まれば、あなたを討とうにも討てないでしょう。今回に關してはフィール・ハンターズも沙樹さんの味方らしいですし」

と、みいねはいった。

梓とシルフィも車を降り、最後に島津先生も邪魔にならない所に駐車してから、梓と共に右側サイドに。

「そのフィール・ハンターズはどうしてここに？」

私は、深海ちゃんと炎崎に向けて訊ねると、

「かすが様の指示です」

深海ちゃんはいい、続けて炎崎が、

「地縛神やクリアウイングがネビユラに回収されるのは避けたいらしいよ。この人数だと横取りに出ることもできないしね」

いつの間にか他所にもネビユラってバレてる件。あそこが存在を秘匿して活動してるのは間違いなさそうなのに。

ナルキサスが名乗り上げたのだろうか。

「大依は？」

「知つての通り北海道だよ。まあ、丁度今日帰ってきてそのまま報酬を家に持ち込んで休暇に入っちゃったけど」

「報酬？」

「明日のニュースをお楽しみに」

どこか不機嫌そうに、炎崎はいった。

この意味がどういう事か分からないけど、ゼウスちゃんは無事なのだろうか。グループLINEには久々に発言を投下しておいたけど、誰からも反応がない以上分からないのだ。

「NLTは何かこの件については？」

訊ねるも、NLT組三人は揃って首を横に振る。当然だ。NLTの活動範囲は県ひとつ。霞谷さんこそ警察機関なものの、北海道なんて、さすがに管轄外もいい所なのだ。

「こんな時に他人の心配かい？ 鳥乃」

アインスがいった。見ると、いつの間にかシルフィもあちら側について立っている。まあ、仕方ないことではあるけど。

私は答える代わりに、

「フィアがいないわね」

「彼女なら室内で狙撃の準備に入ってる。必要ないと思ってるが、一応君に不審な行動があったら殺処分するように指示してある」

「優遇されてるって話ね私」

とはいうものの、実際は私ではない誰かを警戒しての配置なのだろう。

「時間だ」

デュエルディスクのタブレット画面を見て、シユウがいった。

「そうか」

アインスは言い、デュエルディスクの赤外線で私のディスクを強制デュエルモードにさせていう。

「決闘の勝者は敗者の命を自由にできる。それで構わないかい？」

「OKよ。せっかくだし、デュエルは盛大にマスターデュエルでどう？」

「元々そのつもりでデツキを準備してきた。私はそれで構わないよ」
お互いの言葉を聞き取ったデュエルディスクは、自動で今回のデュエルをマスターデュエルに設定する。他に決めることはなさそうだ。といった所で、

「ならば、デュエルの前に改めて名乗らせて貰おう」と、アインスがいった。

「ネビュラ財団名小屋支部管轄、ハイウィンド隊隊長。王子^{プリンス}アインス・ハイ」

そういえば、一応決闘なのだから名乗るのが筋だったわね。

「ハングド所属、〃レズの肌馬〃鳥乃 沙樹」

「沙樹ちゃん。なにそれ」

梓が何かドン引きした声を発する中、

『デュエル!』

私たちが叫んだと同時に、ソリッドビジョンが互いのライフを表示した。

沙樹

LP4000

手札5

□ □ □ □ □ □
□ □ □ □ □ □

— □ — □ —

□ □ □ □ □ □

□ □ □ □ □ □

アインス

LP4000

手札5

「先攻は頂いた。私のターン」

アインスがターンの開始を宣言すると、

「まず、私は手札から《ゲートウェイ・ドラゴン》を通常召喚しよう。

ゲートウェイの効果、1ターンに1度、手札からレベル4以下のドラゴンを呼び出す。来て頂こう、《スニツフイング・ドラゴン》！ そしてスニツフイングの効果で、デッキの《スニツフイング・ドラゴン》を回収」

MISSION14参照

この前にも見た戦術を、アインスは今回も披露し、

「開け、私のステージよ」

彼女の足下に、リンクマーカーが出現した。同時に、突然流れ始める舞踏曲。

「え、なに？」

「突然BGMが」

この演出を初めて見た梓とフェンリルが驚き、それ以外にも異様なリンク召喚演出に周囲がざわめきだす。

「早速晒す気ね。こんな大勢の前であの濃いリンク召喚演出を」

「ああ。召喚条件はドラゴン族・閥属性モンスター2体。私は《ゲートウェイ・ドラゴン》と《スニツフイング・ドラゴン》をリンクマーカーにセット！」

アインスが二丁のショットガンを抜くと、《ゲートウェイ・ドラゴン》と《スニツフイング・ドラゴン》は光の弾丸となってアインスの銃に装填。続けてアインスは、リンクマーカーの上でひとりワルフを踊りながら、上下のリンクマーカーに弾丸となったモンスターで撃ち抜き、

「リンク召喚！ Shall We Dance? 《テリンジャラス・ドラゴン》」

やはり、この王子様はリンクマーカーから出現したモンスターとポーズを決めるのだった。

「やっぱり長い」

BGMがフェードアウトする中、私はいった。

「やっぱりウザい」

続けてシュウがいった。

「ウザい」

「キモい」

「悔しいが美しい」

「かすが様にさせてみたいですね」

「同感です」

「ミカア!!」

「木更ちゃん!?!」

さらにギャラリイからも様々な声飛び交う。まあ藤稔一族のキチ反応は無視するとして。

「カードを2枚セット。私はこれでターン終了しよう」

それでもつて、ひとり満足した顔で手番を終えるアインス。全く、この王子様は。

沙樹

LP 4000

手札 5

□ □ □ □ □ □

□ □ □ □ □ □

— □ — 「《デリンジャラス・ドラゴン（アインス）》」 —

□ □ □ □ □ □

□ □ 《伏せカード》 □ □ 《伏せカード》

アインス

LP 4000

手札 2

「私のターン、ドロー」

カードを引き、私はフィールドを確認。

リンク2なだけあって《デリンジャラス・ドラゴン》の攻撃力は1600ときほど高くない。そして伏せが2枚。

まだデュエルは始まったばかりなので、私は最小限の動きで様子を見てみることにする。

「私は手札から《幻獣機テザールフ》を召喚。効果で幻獣機トークンを守備表示で生成」

「召喚したのは、いつものトップバッターであるテザールフ。
「早速きたか、テザールフ」

アインスはうなずき、

「テザーウルフの攻撃力は1700と私の《テリンジャラス・ドラゴン》より攻撃力は高い。加えて、このカードなら召喚するだけで簡単にトークンを生み出せ、幻獣機の共通効果を起動させられる。仮に、私が《テリンジャラス・ドラゴン》の攻撃力を上げて返り討ちを狙おうにも鳥乃のライフをちょっと削るだけの結果にしかないわけだ」

「そういう話」

幻獣機の共通効果は、場にトークンがいる限り相手によって破壊されなくなるもの。

いつもの手ではあるけど、これなら安全に相手の動きを確認することが出来る。

と、思ったのだけど。

「バトル！ 《幻獣機テザーウルフ》で《テリンジャラス・ドラゴン》に攻撃」

私の幻獣機からテザーが伸び、アインスのモンスターの拘束しにかかるも、この瞬間、アインスは伏せカードの片方を表向きにし、

「甘いですよ、鳥乃。罠カード《ドゥーブルパッセ》を発動！」

「あっ」

このカードは駄目。初手でもう伏せられてたなんて。

「《ドゥーブルパッセ》の効果。《テリンジャラス・ドラゴン》の攻撃力分の効果ダメージを鳥乃に与え、テザーウルフの攻撃を私への直接攻撃にする」

《テリンジャラス・ドラゴン》はテザーを避けながら私に向けて両腕の砲身から銃弾を放つ。

沙樹 LP4000↓2400

私はすんでの所で銃弾から顔をそらし、一方の避けられたテザーはそのままアイン스에巻き付き、アイン스에機銃の雨を降らせる。

アインス LP4000↓2300

「ぐああっ!!」

直後、アインスは自身を襲う激痛に悲鳴をあげた。

「あつ」

「え、先輩が攻撃にフィールを？」

驚く梓と木更ちゃん。

「決闘デュエルじゃなくて決闘けつとうだからね。攻撃を受けたら致命的な損傷を負うものでしょ」

「でも、先輩って普段攻撃にフィールはあまり使わないのに」

「まあドロートかにフィール使ったほうがデュエルって面では確実にしね」

言いながら私はアインスの拘束を解く。するとアインスはすぐ膝をつき、片目を手で押さえる。

「やってくれたね。鳥乃」

と、いうアインスにシユウが、

「おい、大丈夫か？」

アインスは首を横に振り、

「少し不味いことになった。片目をやられた」

「片目だと？」

「ああ。人は8割く9割の情報を目から得ると言われてる。もちろん、視覚から得る情報はデュエルにだって大事な要素だ。鳥乃はそれを奪ってきたんだ」

直後。

「なっ、なんて卑怯な！ 見損なつたぞ！」

と、ナルキサスが叫ぶも、

「いや、違うんだナルキサス」

彼に言ったのは、誰でもないアインス。

「先ほどの攻撃、実は私も《テリンジャラス・ドラゴン》の弾丸で鳥乃の眉間を狙つたんだ。鳥乃は優しいからね、だから私は本気だぞって伝えたつもりだったんだ。だから、これはあくまで鳥乃からの返事で、防ぎきれなかった私の不注意さ」

「待てよ」

反論したのはシユウ。

「なら、何でアインスがここまで傷ついてんだよ。あいつは返事のた

めに莫大なフィールを使ったっていうのか？」

しかし、アインスは再び首を振り。

「いや……。彼女の攻撃にはそこまでフィールを込められてなかったよ」

「ならどうして」

「幾ら弱いフィールで攻撃しようとも、機銃の雨が1mmの狂いもなく眼球の一点ばかりを狙い続けられようなるさ」

アインスはいった。シユウは「は？」となり、

「いや、眼球の一点ばかりって、モンスターへの攻撃だぞ？　しかも機銃で？　ありえないだろ」

「いや、鳥乃の得意技は早撃ちと近距離でのワンホールショットだ。私もここまでとは思わなかったが、単純に至近距離なら遠隔射撃でも自動射撃でも通用するだけの馬鹿げた精度を持っていたただけだろう。無論、フィールあつての賜物だろうけど」

さらに霞谷さんも、

「その上、彼女の射撃はアインスの脳まで貫通していません。推測ですが、決闘後に回復させられる程度」のフィールダメージに抑えたのでしょう」

「正解」

私は肯定した。

「ついでに言うと、攻撃したのが事前に敵を拘束できるテザールフだったから出来たって話。運が悪かったわね、アインス」

「全くだ」

アインスはフツと笑った。

「ところで」

ここで木更ちゃんが、梓に向かって、

「徳光先輩は平気なのですか？　先輩があれだけ残酷なことをされたのに」

「え？　あつ」

ここで梓は、自分がショックを受けてない不自然さに気づいたみたいで、

「うん。沙樹ちゃんのラフプレイは見慣れてるから」

「見慣れてる？」

「うん。高校に入ってからにはなりを潜めてたんだけど、昔の沙樹ちゃん、私を虐めた人と喧嘩するとき、あの位過激な事はしてたから」
「そういえば、小学生の頃すでに男子の股間を集中的に狙うくらいしてたっけ。」

「だから、驚きはしたけど、怖いよりも『あ、ついにやらかした』って感じかなー。むしろ今回は加減してるみたいだから、これでも昔よりずっとましだよー」

「なんて困った顔で梓はいう。で、木更ちゃんは逆に「これでもましなんでしょうか」と困惑してる様子。」

霞谷さんが行く末を見守るように、

「王子も元々は裏世界で善悪どっちつかずの立場でやってきた人間ですからね。恐らく彼女たちにとっては、この位ダーティであってこそ真に正々堂々な決闘なのでしょう」

と、ナルキサスにいていた。

対し、その言葉を聞かされたナルキサスがどう反応したのかは気になるが、これ以上ギャラリーに意識を向ける時間はなく、

「だが。ただダメージを受けただけでは終わらないさ」

「ここでアインスはもう1枚の伏せカードを表向きにしていた。」

「罨カード《ダメージ・ゲート》を発動。私が戦闘ダメージを受けた時、そのダメージ以下の攻撃力を持つモンスターを墓地から特殊召喚する」

元々テザールはアインスの罨カードで直接攻撃になったもの。あの《ドゥーブルパッセ》はここまで狙って発動されたものだったのだ。

「私は墓地から《ゲートウェイ・ドラゴン》を蘇生しよう」

再び現れるアインスのモンスター。

「カードをセット。私のターンは終了よ」

私は手番を終える。

しかし、これは困ったことになった。今回、私のデッキは幻機獣を

使用している以上奇襲策として《起爆獣ヴァルカノン》を投入しているのだけど、早速大幅にライフを削られてしまった以上、気軽に使用できなくなってしまうのだ。うまくアインスのライフだけ削つてとどめのバーンに使えばいいのだけど。

アインスの目を潰したとはいえ、今回の《ドゥーブルパッセ》は私にとって痛み分けどころでは済まない事態だった。

沙樹

LP2400

手札4

□□□□「伏せカード」

「《幻獣機テザールフ》□□□□《幻獣機トークン》」

—□□—「《デリンジャラス・ドラゴン（アインス）》—

「《ゲートウェイ・ドラゴン》□□□□□□

□□□□□□

アインス

LP2300

手札2

「なら、私のターンだね。ドロ—」

アインスはカードを引くと、

「まずは《ゲートウェイ・ドラゴン》の効果を使おう。手札から2体目の《スニツフィング・ドラゴン》を特殊召喚し、3枚目の《スニツフィング・ドラゴン》を手札に加えようか」

と、手札を一切消費せず《ダメージ・ゲート》に見合った展開を行うと、

「鳥乃の伏せカード。恐らく《空中補給》と思うが気になるね」

アインスはいい、

「となれば、攻める前にこうしてみようか。開け、私のステージよ」

再び、彼女の足下に出現するリンクマーカー。舞踏曲に併せてアインスは踊りながら、

「召喚条件は効果モンスター2体。私は《ゲートウェイ・ドラゴン》と《スニツフィング・ドラゴン》をリンクマーカーにセット」

と、マーカードの上と右にモンスターだった弾丸を放ち、

「リンク召喚！ Shalil We Dance？ 《ダズル・ドラゴン》」

アインスは白と黒のダズル迷彩を施されたドラゴンを呼び出す。

「《ダズル・ドラゴン》のモンスター効果。このカードが相互リンク状態で特殊召喚された場合、相手フィールド上の魔法・罨カードを1枚破壊する」

白黒の竜は腕の砲身から放つ銃撃で、私の伏せカードを撃ち抜く。寸前、私はそのカードを表向きにし、

「ご名答。罨カード《空中補給》を発動。その効果で幻獣機トークンを1体生成」

私の場に2体目のトークンが出現する。とはいえ、フリーチエーンでトークンを出せるカードを、こういう形で使わされたのは正直嬉しい話ではない。

「なら、安心してこの手で行かせて頂こう。手札から《アネスヴァレット・ドラゴン》を通常召喚、さらに速攻魔法《スクイブ・ドロ》。アネスヴァレットを破壊して2枚ドロ」

アインスはカードを引き、

「再度開け、私のステージよ」

BGMその他ウザいリンク召喚モーションをしつかり見せられた後、

「リンク召喚！ Shalil We Dance？ 《トポロジック・ボマー・ドラゴン》！」

過去のデュエルで、ストームアクセスで入手していたアインスのサイバースが出現した。攻撃力は3000。やっぱり、今回もデッキに入れていたわね。

「《トポロジック・ボマー・ドラゴン》で《幻獣機テザーウルフ》に攻撃。終極のマリシャス・コード！」

トポロジックのブレス攻撃がテザーウルフを飲み込む。私は手札を1枚抜き取り、

「トークンがいる事で、テザーウルフは戦闘では破壊されない。さら

に手札の《幻獣機ピーバー》今回よりエラッタを墓地に送る」

なんとかテザールーフはトークンとの連携で攻撃を回避するも、

「しかし余波は受けて貰おう」

沙樹 LP2400↓1100

双方の攻撃力の差分がダメージとなつて私のライフを削る。ああ、更にヴァルカノンが使用できなく。

「そして、トポロジックは相手モンスターを攻撃したダメージ計算後に、相手モンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。エイミング・ブラスト！」

続けて放たれる、トポロジックの無数のかまいたち。しかし、直後私を庇うように出現したのはホログラムで出来た観測機。つまり幻獣機トークン。

「これは」

呟くアイン스에私はいった。

「もう気づいてるでしょうけど、私は手札の《幻獣機ピーバー》の効果を発動していた」

アニメでよくある「していた」演出だけど、今回はちゃんと宣言していたしセーフって話よね？

「《幻獣機ピーバー》は手札から墓地に送る事で、このターン私が効果ダメージを受ける場合、代わりに幻獣機トークンを場に出す」

すると、アインスはフツと微笑み、

「読んでいたよ」

って言い、

「カードを2枚セット。エンドフェイズ時にアネスヴァレットの効果。デッキから《メタルヴァレット・ドラゴン》をトポロジックのリンク先に特殊召喚しよう」

共通効果によつてフィールドに出現する新たなヴァレットモンスター。しかも、

「トポロジックのリンク先つてことは」

「ご名答。《トポロジック・ボマー・ドラゴン》のモンスター効果。リンクモンスターのリンク先にこのカード以外のモンスターが特殊召

喚された場合、互いのメインモンスターゾーンのモンスターを全て破壊する。フルオーバーラップ！」

私の場のモンスターは、テザールーフが1体と幻獣機トークンが3体。だけど、

「トークンがいることでテザールーフは幻獣機の共通効果で破壊を免れる」

「知っているさ。《メタルヴァレット・ドラゴン》のモンスター効果。エンドフェイズ時にデッキから別のヴァレットを呼び出す。私は《オートヴァレット・ドラゴン》をトポジックのリンク先に特殊召喚」

いまはまだ同じエンドフェイズ時。従って、トポジックの効果で破壊されてもすぐ次のヴァレットモンスターが場に装填される。しかも、

「《トポジック・ボマー・ドラゴン》のモンスター効果。リンクモンスターの場合、このカード以外のモンスターが特殊召喚された場合、互いのメインモンスターゾーンのモンスターを全て破壊する。今度は防げるかい？ フルオーバーラップ！」

「っ、テザールーフを破壊するわ」

さすがに二連続を防げるはずがない。仮にトークンを出して防げたとしても、アインスは防げなくなるまで一連のループを繰り返すのだろう。

「《オートヴァレット・ドラゴン》の効果で、今度は《シエルヴァレット・ドラゴン》を準備表示で、かつ《トポジック・ボマー・ドラゴン》のリンク外に出すでしょうか。今度こそ、ターンを終了させて頂こう」

アインスはいった。

沙樹

LP1100

手札3

□□□□□□
□□□□□□
□□□□□□

—□□—「トポロジック・ボマー・ドラゴン（アインス）」

□□「《シェルヴァレット・ドラゴン（守備）》□□□□

「《伏せカード》□□□□「《伏せカード》」

アインス

LP2300

手札1

正直、手札の消費を最小限にしている助かった。もし前のターンに一気に展開しても、結局トポロジックの効果を執拗に使われて焼野原になっていた事だろうから。

（しかし）

私は改めてトポロジックを見る。

やはり、アインスは普段の私の戦術を知り尽くしている。幻獣機を使ってる限りどのタイプのデッキだろうと関係ない位に。やはり、使い慣れてたデッキで向かってたら大変なことになっていた。

「私のターン、ドロー」

私はカードを1枚引く。

「手札から《幻獣機サーチライオネット》を通常召喚」

ここで召喚したのは、デュエルモンスターズ展の最終MISSTION5参照日にダークドローした探照灯のモンスター。

「サーチライオネット!?!」

小声ながら、確かに驚きをみせるアインス。よし、多分だけど相手はこのカードに関する情報は殆ど持っていない。

「《幻獣機サーチライオネット》の召喚・特殊召喚に成功した事で効果発動。デッキから幻獣機1枚を手札に加え、手札を1枚墓地に送る。私はデッキから《幻獣機オライオン》をサーチし、そのまま墓地に。続けて《幻獣機オライオン》の効果によって、墓地に送られた事で、場に幻獣機トークンを1体呼び出す。攻撃表示」

私はトークン呼びつつ、デッキのオライオンを手札に墓地にと次々に移動させ、

「攻撃表示?」

と、私は目をやられ不調なアインスに思考させる時間を与えず、続

けてオライオンを墓地からも取り除く。

「《幻獣機オライオン》のもうひとつの効果。墓地のこのカードをゲームから除外して、私は手札の幻獣機を召喚する。《幻獣機ブルーインパラス》を召喚！」

出てきたのは幻獣機のチューナーモンスター。ここでアインスは2枚ある伏せカードの片方を表向きにして、

「ならここで一手を打とう。速攻魔法《クイック・リボルブ》。デッキからヴァレットモンスターを特殊召喚する。私は《アネスヴァレット・ドラゴン》をトポロジックのリンク先に特殊召喚しよう。そして《トポロジック・ボマー・ドラゴン》の効果でメインモンスターゾーンのモンスターを全滅させる。フルオーバーラップ！」

やはり伏せてたって話ね。

アインスは私のターンに関わらず、トポロジックの全体破壊の効果を使用してきた。この相手ターンでも全体除去を発動する使い方は前回も相当苦勞させられたのを覚えている。

「確か幻獣機には幻獣機の共通効果は無かったはずだね。なら、召喚権を使い切った所でブルーインパラス以外のモンスターには消えて頂く」

アインスはいうも、効果破壊によって生じた爆風と舞い上がる煙のビジョンが収まったとき、フィールドで退場していたのはサーチライトネットだけだった。ブルーインパラスとトークンは無事フィールドに残っており。

「なっ」

驚くアインス。私はついにやっと、

「確かに幻獣機にはトークンがいると破壊されない共通効果は持っていない。けど、いまの所逆にトークンを破壊させなくする共通効果は持ってるみたいって話なのよ」

「失念していたよ」

アインスはいい、

「となると、レベル6のシンクロは許してしまうわけか」

「ん？」

アインスの言葉に、私は一瞬あれっと思った後、

「どうやら、片目を失って相当判断力が鈍ってるみたいね」

「え?」

「《幻獣機ブルーインパラス》は機械族以外のシンクロモンスターに素材にできず、素材モンスターは全て幻獣機に限定される代わりに、手札のモンスターも素材にできるって話」

「あつ」

ここで、自分の勘違いに気づくアインス。

「まあ、その前に《幻機獣サーチライオネット》の効果。このカードが破壊された場合、手札・デッキ・墓地から幻獣機Pモンスター1体をPゾーンに置く事ができる。私はデッキから《幻機獣アベンジャガー》をPゾーンに。《幻機獣アベンジャガー》はルール上幻獣機として扱う」

「あつ」

と、木更ちゃんが反応したのが分かった。ナーガちゃんとのデュエルでも反応してたように、自分とのデュエルで生み出されたこのカードの事が余程印象に残ってるらしい。

そして、私は場のブルーインパラスと、手札の幻獣機1体を墓地に送って、

「私は、手札のレベル4《幻獣機アルマジロ》にレベル3《幻獣機ブルーインパラス》をチューニング。大空を駆ける機械の怪鳥よ。その巨体にて勝利の旅路へ私を導け」

ブルーインパラスが3つの円に変わると、アルマジロの特徴を持った航空機が潜り、4つの光に変わって混ざり合う。

「シンクロ召喚! 発進せよ、レベル7《幻獣機コンコルダ》!」

こうして出現したのは、先端が怪鳥の頭部の形状をした旅客機。

「コンコルダだっ!?」

更に驚くアインス。それもそのはず、このカードって幻獣機デッキであっても控え目について使い勝手の悪いカードなのだ。

「バトルフェイズ。私は幻獣機トークンで《トポロジック・ボマー・ドラゴン》に攻撃」

「なっ」

もう驚きっぱなしのアインスは、

「鳥乃、君は一体何を」

言ってる間に、バトルはダメージステップに。

「《幻機獣アベンジャガー》のP効果。幻機獣トークンが戦闘を行って受ける私へのダメージは0になり、幻機獣と戦闘を行ったモンスターはダメージ計算後に破壊される」

「くっ！ ですが、幻機獣トークンに退場はして貰いま——」

言いかけた所へ私は、

「また失念してる？ 《幻機獣コンコルダ》がフィールド上に表側表示で存在する限り、私のトークンは戦闘・効果では破壊されない。さっきのサーチライオネットと同じって話」

「あっ」

つまり、一方的に《トポロジック・ボマー・ドラゴン》だけが破壊されるのだ。

たかがホログラムで生まれたデコイの一撃。そこに気を取られたトポロジックは直後、Pゾーンのアベンジャガーが放ったガトリング砲の掃射を浴び、爆破四散する。

相変わらず半端なく厄介なモンスターだったけど、《トポロジック・ボマー・ドラゴン》何とか攻略！

「フィニッシュ。《幻機獣コンコルダ》でアインスにダイレクトアタック」

アインスのライフは2300、対してコンコルダの攻撃力は2400。これが通れば、デュエルは私の勝ち。

とはいえ、勿論そう簡単にいくはずがない。アインスは伏せカードを表向きにして、

「でしたら底知れぬ絶望の淵へ沈んで貰う。《聖なるバリア——ミラーフォース——》！」

アインスの体を光のバリアが包み、そのまま突っ込んだコンコルダはひしゃげて破壊される。その際の爆発のエネルギーは全て攻撃となって幻機獣トークンに襲い掛かるも、

「うん、まあアインス」

私はいった。

「確かに絶望の淵へ沈んでたって話よ。このミラフォが幻獣機トークンの攻撃で発動されてたって話だけど」

それでも、ミラフォを喰らった時点ではトークンこそ生き残るのでトポジックを破壊はできる。しかし、コンコルダを失ってる為に相打ちでフィールドを離れ、私の場がガラ空きになってたのだ。

「コンコルダの効果で幻獣機トークンは破壊されない。そして、コンコルダが破壊された事で効果を発動。私はトークンを全てリリースし、墓地からレベル4以下の幻獣機を特殊召喚する」

ミラフォオースから放たれたエネルギーの奔流がトークンを飲み込む寸前、トークンが光の球体に変化し攻撃をかき消す。

球体は次第に機械の体に変化しながら変形し、アルマジロの特徴を持った航空機に姿を変えた。

「私は墓地から《幻獣機アルマジル》を特殊召喚。アインスに直接攻撃」

アルマジルの攻撃力は1200。その分のダメージが今度こそアインスに直撃し、

アインス LP2300↓1100

私とアインスのライフは同じ1100に並ぶ。

「バトルはこれで終了。メインフェイズに戻って、手札から魔法カード《ブリーフィング作戦通達》を発動。その効果でデッキからフィールド魔法《フルフラット空母甲板》を手札に加えてそのまま発動」

直後、デュエルディスクのソリッドビジョンは周囲一帯を包み、ギヤラリーを含む私たちは空の上を飛行する《幻子力空母エンタープライズニル》の甲板の上へと降り立った。とはいえ、フィールド魔法のビジョンは半透明な為、本来の神簇邸の庭も確認できるのだけど。

「《フルフラット空母甲板》の効果、私は幻獣機トークン1体を特殊召喚する。本来この効果は800ライフをコストに払う必要があるけど、《ブリーフィング作戦通達》のもうひとつの効果により、このカードをゲームから除外してコストの代わりにする」

私は幻獣機トークンを今度こそ守備表示で特殊召喚し、

「私はこれでターン終了」

「ターン終了時、破壊されたヴァレット2体の効果」

アインスはいった。

「私はデッキから《オートヴァレット・ドラゴン》《マグナヴァレット・ドラゴン》を特殊召喚。さらに今回はここで《デリンジャラス・ドラゴン》も特殊召喚しよう。このカードはヴァレットモンスターが特殊召喚された場合に、墓地のこのカードを特殊召喚できる」

せっかく一度フィールドを焼け野原にしたというのに、もうアインスのフィールドにはモンスターが3体。この制圧力と戦線維持力は本当嫌になる。

「なら私も《幻獣機アルマジル》のモンスター効果。相手がモンスターを特殊召喚した場合に幻獣機モンスター1体を特殊召喚する」

もつとも、私もアルマジルを使い場のモンスターを3体にするのだけど。

「改めてターン終了」

今度こそ私はターンをアインスに明け渡す。

沙樹

LP1100

手札0

「空母甲板」
フル・フラット

「《幻獣機アベンジャガー》」□□□□

「《幻獣機トークン》」□□「《幻獣機トークン》」□□「《幻獣機アルマジル》」

—□□—□□—

「《オートヴァレット・ドラゴン》」□□「《デリンジャラス・ドラゴン》」

□□「《マグナヴァレット・ドラゴン》」

□□□□□□

アインス

LP1100

手札1

「私のターン。ドロロー」

アインスがカードを引いた所で、

「言うまでもないと思うけど、《幻機獣アベンジャガー》のP効果は当然相手ターンでも持続してるから」

「つまり、全ての幻獣機が半ば《ボマー・ドラゴン》状態ということですね」

「そういう話」

なので、無策で突っ込めばどんなに強力なモンスターでも破壊耐性を持ってない限り、幻獣機トークンと1:1交換を強いられる。もし自分が相手側だったらゲツソリする程嫌な布陣になってるはずなのだ。

「なら。私は最後の《スニツフィング・ドラゴン》を通常召喚しよう。

当然、これが3枚目だからサーチ効果は発動しない」

と、アインスは4体目のモンスターを出し、

「開け、私のステージよ」

私たちはまたアインスの踊りを見せつけられる。

「召喚条件は効果モンスター3体以上。私は《マグナヴァレット・ドラゴン》《テリンジャラス・ドラゴン》《スニツフィング・ドラゴン》の3体をリンクマーカーにセット。リンク召喚！ Shall We Dance? 《ヴァレルロード・ドラゴン》！」

こうして出現した、その新たなリンクモンスターを前に、

「やばっ」

と、呟いてしまった。

何せ、このモンスターはアインスの真のエースモンスターだからである。

他のアインスのリンクモンスター同様に機械族かと思う程メカメカしい外見をしたドラゴンでその攻撃力は3000。さらに、滅茶苦茶厄介な効果を2つも備えてる上に「このカードはモンスターの効果の対象にならない」なんて効果テキストまで持ってらっしゃるのだ。

正直、過去にアインスと敵対したときにはこのカード1枚で押し切られた事が何度かある。一応、対象を取らない全体破壊には無力なの

で、今回も私のデッキにはヴァレルロードを倒す為のカードも何枚か投入しているが、やはりというかアインスのフィールのせいで、私はそういったカードをドロークさせて貰えない。

「とりあえず、相手がモンスターを特殊召喚したことで《幻獣機アルマジル》の効果を発動。1ターンに1度、場に幻獣機トークンを置く」

これで、一応私の場の幻獣機トークンは3体。しかし、

「《ヴァレルロード・ドラゴン》のモンスター効果。1ターンに1度、フィールド上の表側表示モンスター1体を対象とし、その攻守を500下げる」

きた！ ヴァレルロードの滅茶苦茶厄介な効果その1が。この効果は、一見ただの汎用的に使える効果に見えるも、実はそんな生易しいものではない。

「私は自分の《オートヴァレット・ドラゴン》にこの効果を使用。そして《オートヴァレット・ドラゴン》は自身を対象にリンクモンスターの効果が発動した時、オートヴァレット自身を破壊できる。その後、フィールド上の魔法・罠カード1枚を墓地に送る」

これである。

いままではトポロジックの全体破壊を連発するスイッチに過ぎなかったヴァレットモンスターだけど、真の力は、このヴァレルロードの弾丸として、アインスのエースに汎用性と制圧力を抜群に与える共通効果なのだ。

「墓地に送って貰うのは当然 《幻獣機アベンジャガー》。悪いけど、ヴァレルロードの前では幻獣機のボマー・ドラゴン化は無意味だよ、鳥乃」

「そのようね」

言いながら、私はデュエルディスクからアベンジャガーを剥がし、墓地に送る。

実は一応。

これでもアベンジャガーはヴァレルロード対策も兼ねてはいたのだ。

ヴァレルロードはリンク4な上に効果モンスターを3体以上素材

にしないといけない。その為、出した時点では場がヴァレルロード1体だけになる可能性だつてある。そんな場面のなら、対象を取る効果ではない以上、さすがのヴァレルロードでさえ攻撃はできないし、返しの私のターンで幻獣機トークンを用いてサクツとヴァレルロードを破壊できてしまう。

しかし、今回は上手く《オートヴァレット・ドラゴン》を残しながらリンク召喚されてしまった為、狙い通りにはいかなかった。

伏せカードはない。手札はゼロ。エンドフェイズ時に敵は新たなヴァレットを補充する。正直、いままでの私なら負けルートだ。

「バトルフェイズに入ろう。《ヴァレルロード・ドラゴン》で《幻獣機アルマジル》に攻撃」

言いながら、アインスはおもむろに懐からサングラスを取り出して着用。そして、

遊戯王VRAINS話参照
「対閃光防衛！」

なんか言い切った。

「ええ……」

シルフィが、なんかすつごく白い目でアインスを見る。

私はトークンを1体フィールドからはがし、

「《幻獣機アルマジル》のモンスター効果。トークン1体をリリースして自分のモンスター1体を表側守備表示にする。私はこれでアルマジル自身を守備表示に」

ヴァレルロードとアルマジルの攻撃力の差分は1800。攻撃表示のままヴァレルロードの攻撃を受けていたら、例えばアルマジルが共通効果で破壊されなくても、私のライフが0になる所だったのである。

「攻撃は撤回しない。改めて《ヴァレルロード・ドラゴン》で《幻獣機アルマジル》に攻撃」

でしようね。

「そしてダメージステップ開始時にヴァレルロードの効果を発動する。攻撃対象モンスターをこのカードのリンク先に置いてコントロールを得る」

ヴァレルロードの口から砲身が顔を出すと、アルマジルに向けて弾丸が放たれる。

弾丸を受けたアルマジルの体からノイズが走ったと思うと、データを書き換えられその場から姿を消し、ヴァレルロードのリンク先に装填される。

(これよ、これこれ)

この効果があるから、ヴァレルロードは簡単に私の幻獣機を排除してくれちゃう。トークンを置いてようがお構いなしに。

「とはいえ、守備表示以上アルマジルで追撃ができないのだけどね。私はカードを1枚セットしてエンドフェイズ。ヴァレルロードの効果でコントロールを得たモンスターはこの瞬間に墓地に送られる。そして《オートヴァレット・ドラゴン》の効果で《マグナヴァレット・ドラゴン》を特殊召喚しようか。ターンを終了しよう」

なんとかトークンを2体残して自分のターンに持ち込むことができました。

私は心の中でほっと安心した。

沙樹

LP1100

手札0

《空母甲板》
フル・フラット

□□□□□□

《幻獣機トークン》□□《幻獣機トークン》□□□

—□□—《ヴァレルロード・ドラゴン(アインス)》—

□□□□《マグナヴァレット・ドラゴン》□□

□□《伏せカード》□□□□

アインス

LP1100

手札0

(やい)

私は盤上を見て思った。

場には幻獣機トークンが2体、さらにフィールド魔法の《空母甲板》
フル・フラット

が発動済。効果もあと1回分くらい発動コストにライフを回せる。

ここは何としてでも《緊急発進》を引くしかない。それこそダークドローを使用してでも。

私はその場で手を掲げた。直後、私の手にフィールのエネルギーが集まり、闇色の輝きを帯びる。

「鳥乃、ここで勝負に出る気か」

察したアインスがいう中、

「暗き力はドローカードをも闇に染める——ダークド」

私は、闇色に輝くその手で、私はカードを1枚引き抜きかけ、

「っ!」

書き換えられたデッキトップから感じるフィールに、私は「やらかした」事に気づいた。

「鳥乃?」

「先輩?」

「沙樹ちゃん?」

アインス、木更ちゃん、梓が私の様子に訊ねる中、私は露骨に不機嫌な態度で、

「ちよつと。こんな時に出しゃばらないでっつて話なんだけど」

と、デッキトップに文句をいう。

「鳥乃、まさかデッキトップのカードは」

アインスが察し訊ねる。私は諦め、

「その通りっつて話。悪いわねアインス、ちよつと邪魔が入っちゃったわ。ダークドロー」

私はカードを引き抜く。直後、私の中にダークドローで消費した以上の濃度を持つ闇のフィール、いや冥界のフィールが流れ込んでくる。

さらに、私の体は闇の傀儡と化し、勝手にデュエルを進めだした。

「冥界より描け、我がサーキット」

ここで私はリンク召喚を宣言。甲板の上に闇色の光が這い進み、リンクマーカーの模様を描く。

「沙樹ちゃん?……じゃない」

すぐさま、私の様子の変化を察知した梓が呟く。

「沙樹ちゃん、どうしちゃったの？」

梓の言葉を聞いて、今度はこの状態の経験者であるシルフィが顔を青くして、

「もしかして。闇のフィールに支配されて」

「何ですって！」

霞谷さんが反応。

「しつかりしろ、鳥乃！ 闇に負けんじゃねえ！」

シユウが熱い言葉を投げかける中、

「大丈夫よ。意識はちゃんとあるから」

私は返事した。

「あーでも、体の自由は駄目ね。この前のガルムと同じ状態。意識はあるんだけど、体がいう事聞かない感じ」

直後、フィール・ハンターズ組を含む当時の事件の関係者たちが一斉にガルムへと視線を向ける。

ガルムは梓がいる手前喋ることもできず、あたふたしていた。可愛い。

「問題ない。続けてください」

アインスがいった。

「元とはいえば、その地縛神のせいで決闘になったんです。せつかくですから私も地縛神と話がしたい」

「後悔しないで頂戴」

私は返し、

「召喚条件はリンクモンスター以外の幻獣機モンスター1体。私は幻獣機トーカー1体をリンクマーカーにセット！」

ホログラムのデコイが1機、闇色の光に代わりリンクマーカーの下側に取り込まれる。直後、私の前方に光り輝くカードが浮かび上がったので、私はそれを掴まされ、

「リンク召喚！ リンク1 《幻獣機 プテラウラー》」

そのまま、私はたったいま手に入れたカードをデュエルディスクに。現れたのは翼と機首部分がプテラノドンになった航空機のモン

スター。

「レベル4以下のモンスターを素材にプテラウラーを召喚した事で、このターン私はこれ以上リンク召喚できない。そして《幻獣機プテラウラー》のモンスター効果。このカードのリンク召喚に成功した場合、リンク先に幻獣機トークンを1体生成。そして私はプテラウラーとこのトークンを生贄に捧げる」

私は、ダークドロワーで引いてしまったカードをデュエルディスクに叩きつけた。

デュエルディスクがカードを読み込む。すると、辺りは黒い雲に覆われ暗闇に支配される。そんな上空に紫色の光で描かれたのは鯨模様のナスカの地上絵。

私はいった。

「アドバンス召喚。現れよ《地縛神 Chacu Chailhua》！」

ここで、2体のモンスターは光の粒子へと変わり、フィールドに出現したのは、一匹のシャチだった。

同時に私自身にも変化が起こる。

全身の血の気が一気に引き、心が吹きざらしにあうような感覚を覚えた。肌は死者のように青白く変わり、瞳孔が常に開いて白目が黒く染まる。

「沙樹、ちゃん……?」

幼馴染の変貌に梓が唇を震わせる。

「梓にだけは、こんな姿見せたくなくなっただって話だけどね」

私は、地縛神にせめてもの不満をぶつけるように、思いつきり溜息を吐く。

周囲はみんな言葉を失っていた。

当然だ。

いまの私は、当時のシルフィよりずっと化け物に近い姿になっている。そんなものを、これだけ大勢の人の前で晒しているのだ。特に梓はどんな顔をしているのだろうか。私は、怖くて幼馴染の顔をうかがう事ができなかつた。

「《空母甲板》^{フル・フラット}の効果。1ターンに1度、ライフを800払い幻獣機トークンを特殊召喚。さらに、トークンの特殊召喚に成功した事で、《幻獣機ブテラウラー》をゲームから除外して効果発動。手札・デッキ・墓地からレベル4以下の幻獣機を特殊召喚する。私は墓地の《幻獣機アルマジル》を特殊召喚」

沙樹 LP1100↓300

効果を宣言しながら、私は「幻獣機らしくないな」とか思った。恐らくはダークドロローに近い要領で地縛神がいまの盤面で必要だと思ってるカードをピンポイントで生成したのだろうけど。

「くっ」

アルマジルを出した瞬間、アインスが苦い顔を出してみせる。

『サテ、追イ詰めたゾ』

ここで《地縛神 Chacu Chalhua》が喋った。私の口ではなく、ソリッドビジョンで映りだされてる鯨の口からである。

しかも喋り方がまた変わってるし。

『今カラ我ハ通常攻撃で貴様ニ攻撃スル。止めなければ貴様ノ負けダ。ダガ、止めレバ《幻獣機アルマジル》ガ再び貴様ノ攻撃ヲ阻むダロウ』

「そして、このターンに撃つより盤石なフィールドで次のターンに《緊急発進》かい？」

アインスが訊ねた所、

『その通りダ。バトルフェイズ！ 我で貴様ニ直接攻撃』

「え」

反応したのは、みいねだった。

「地縛神の攻撃力は2900、その数値で相手モンスターを無視して直接攻撃ができるというのですか？」

「どうやら彼女は地縛神の効果を知らなかつたらしい。」

「《地縛神 Chacu Chalhua》は相手に直接攻撃でき、代わりに相手モンスターの攻撃対象にされない効果を持つてるわ」

私はいい、

「で、どうするのアインス」

訊ねた所、

「なら私は《ヴァレルロード・ドラゴン》の効果をも《マグナヴァレット・ドラゴン》を対象に使用しよう。これにより《マグナヴァレット・ドラゴン》を自壊させ、《幻獣機アルマジル》を墓地に送る」

アインスは宣言し、

「さて、どう致しますか？ 貴方は自身が守備表示の場合、私にバトルフェイズに入らせない効果をお持ちのはず。今なら《幻獣機アルマジル》を使い守備表示にはできません。しかし、守備表示にした場合はトークンが残り1体になり、次のターン確実に貴方を排除し私のドローカード次第では2体以上の攻撃で鳥乃のライフを0にしますが」
「Chacuc Chailhua？」

私が視線を向けて確認を取った所、

『守備表示ニはスルな』

と、返事。

「了解」

私は大人しく《幻獣機アルマジル》を墓地に。

「なら引き続き永続罠《銀幕の鏡壁》を発動します」

アインスが伏せカードを表向きにし、自分を護る銀色の壁を発生させる。この効果は攻撃モンスターの攻撃力を半分にする効果。

『足りヌー！ それダケでは我が一撃は防げぬゾ』

地縛神は《銀幕の鏡壁》を突き抜け、

《地縛神 Chacuc Chailhua》 攻撃力2900↓14

50

と、攻撃力を半減させながらも、問題なくアインスに向かって攻撃を仕掛ける。

「まだですー！」

アインスは続けて墓地からカードを1枚抜き取り、
「墓地の《ダブル・ドラゴン》のモンスター効果を発動。このカードを墓地から除外することで、1度だけ私が受ける戦闘ダメージを半分にします」

アインスは二重の防壁越しに地縛神の一撃を受け、

アインス 1100↓375

ギリギリ、そのライフを繋ぎ止める。

しかし地縛神の半透明の体がアインスの肉体を通り抜けた際、

「ぐううっ」

アインスは膝をつき、呻きだす。

「ちよ、Chacu Chalhuaまさかアインスにリアルダ
メージを？」

私が訊ねた所、

『当然ダ』

と、言い切った。

『さア、心ノ闇ニ押し潰サレ自滅シロ』

直後、アインスが闇色の瘴気に包まれる。

「あああっ」

自らを抱き、身を震わせるアインス。この前のシルフィ同様、闇の
フィールがアインスの精神に入り込み、彼女の中にある醜い感情、ト
ラウマその他諸々の心の闇を湧きあがらせてるのだ。

だが、アインスが心の闇に負けた場合、シルフィのように闇の
フィールの支配下に堕ちるのではなく、恐らく精神崩壊に陥るのだろ
う。

「Chacu Chalhua、そこまでする事ないでしょ」

彼女の目を狙った自分の行ないは棚に上げ、私は反論するも、

『我は貴様らノ仲間ではナイ』

地縛神はいい、

『貴様こそ思い出せ、シルフィの一件以来、貴様ハ我ニ馴れ馴れしスギ
ル。何故貴様ニ憑いてるノカ思い出せ』

「っ」

その言葉を聞いて、私は気づいた。

まさか地縛神の狙いは。

直後。

「アインス！」

「っ」

叫ぶシユウの言葉に、アインスははつとし、

「シユウ！ 頼みがある」

地縛神の攻撃で、彼女自身の心の闇に襲われながら、アインスはいった。

「手を、つないで欲しい。君のぬくもりが必要だ」

多分だけど、いまこの瞬間、初めてアインスは家族に甘えたのだから。そんな気がする。

彼女の言葉に、何か気づいたシユウは、

「アタシだけじゃ足りねえだろ」

シユウは空高く吠える。

「シルファイ、フィーア、力を貸してくれ！ 一緒にアタシらの長女を支えるぞー！」

直後、シユウの傍に《ワーム・ホール》のゲートが開き、

「了解しました」

と、フィーア。

「うん」

続けてシルファイもうなづく。

そして、3人はアインスを包む瘴気の中に飛び込み、その内側で長女の体を3人掛かりで抱きしめる。私たちの目にはそれだけしか見えなかったけど、多分彼女たち姉妹はアインスの精神世界に入り込み、言葉をかけ、手を伸ばし、心の闇から救い出そうとしてるのだから。

アニメや漫画でよくある流れだ。もつとも私は当事者ではないから根拠のない推測でしかないけど。

程なくして、闇色の瘴気がパアンとはじけ飛ぶのが見えた。

『耐えろ。……ダト』

驚く地縛神。

『何故だ！ 人ノ身で耐えられる程ノやわなフィールはぶつけてイナイゾ』

「でも、所詮は人の身で抱える心の闇を増大したに過ぎません」
アインスが立ち上がり、いった。

「どうやら、私の心の闇は家族愛というものへの渴望だったようです。それなら、妹たちからの愛と信頼で満たされれば、耐えることができます」

アインズはいい、

「けど、よく分かりましたねシユウ。私の心の闇が」

「アタシも同じだったからな」

シユウはヘツと鼻をかき、

「元々、アタシも姉妹おまえらに会うためにこの世界に入った身だからな。心のどっかで病むほど、肉親の温もりに飢える経験くらいしてんだよ」

「私も」

シルフィもうなずき、

「私も、両親から愛情を受けた経験がなかったから、だから気持ちは分かるよ」

最後にフィーアも、

「家族は無条件の味方です。それを教えてくれたのはアインズです」
って。

「みんな、ありがとう」

アインズはいい、三人を順番に抱きかかえる。

「シルフィちゃん。……ぐすっ」

どこからか泣きじやくる声が聞こえたと思ったら、島津先生が感涙していた。苦労してたもんね、シルフィには。

さらに、木更ちゃんもぼそりと呟く。

「少し羨ましいですね。私も深海ちゃんや金玖ちゃんとは、あの4人と同じくらいの絆を感じていたつもりだったのに」
すると深海ちゃんが、

「過去形、ですか？」

「え？」

「私は感じてるつもりですよ、今でも」
「でも」

「それ以上に、かすが様の為なら何だって殺るだけですから」
さらっと言つてのけた深海ちゃんは続けて、

「姉さんは違ったのですか？」

「……違いますね」

僅かな間の後、木更ちゃんは微笑んだ。「程度は違いますが」と付け加えて。

この辺りで、

「アインス！ 聞いて頂戴」

私は、感動的な空気を台無しにするのを覚悟でいった。

「地縛神の目的は恐らく」

「分かっている。私も丁度気づいた所だよ」

アインスはいった。そして地縛神に向かって、

「地縛神。確かに貴方は邪悪な存在のようだ。財団上層部の判断は間違つてなかつたらしい。しかし、貴方はあえて財団のシナリオ通りに事が進むのを望んでいる。違いますか？」

「どういう事ですか？」

霞谷さんが訊ねた所、

「我々に鳥乃を殺害させたがつてるということです」

アインスがいった。

「馬鹿な！」

ナルキサスが驚き、続けてみいねが、

「どうして。曲がりなりにも地縛神は沙樹さんのカードのはず。まさか地縛神は沙樹さんの下よりネビュラ財団の手に渡るのを望んでいるのですか？」

と、微妙に私と地縛神の関係を正しく認識していない発言をする。

「いえ、我々の手に渡す気もないでしょう」

アインスはいった。

「以前、アンより聞いた事があります。鳥乃から意識を奪った上でのアンティデュエルでカードを回収した際、他のカードは全て奪い尽くしたはずなのに、地縛神だけは奪う事ができなかつたと。……つまり、貴方はデュエルで勝とうとも鳥乃の命を奪おうとも、それだけでは回収できない。違いますか？ 逆に、鳥乃が死ぬ事で貴方は初めて完全なる復活を果たす。是か非か答えて頂きましょう、地縛神」

数秒後、

『正解ダ』

地縛神はいった。

「やはり、そうですか」

と、アインス。直後、ナルキサスが。

「馬鹿な！ 崇高なる我らが騎士道を、この地縛神は利用していたというのか」

「いや、それは違うさ」

アインスは否定し、

「それが本当に本音なら、地縛神は馬鹿正直に肯定しなかったでしょう。つまり、更なる本当の正解は、あえてこの真実を晒す事で、この場の全員に地縛神という脅威を警告したのでしょう。もちろん、自分の力を元に作った闇のフィールを扱う、フィール・ハンターズの皆さんにも」

「え!?!」「な!?!」

驚くフィール・ハンターズのお二方。

『ククツ、ハハハハ！ 流星は鳥乃ノ友人ダ』

笑い声をあげる地縛神。私には分かる。どうやら正解らしい。それが善意からの行動か否かはともかく。

「さて、質問はもう少しあります」

アインスはいった。

「地縛神は全部で何体存在しますか？ かつ、その内何体が目覚めている？」

『目覚メてる数ハ知ラン。ダガ、我ラガ創造神の手によつて生まれタ数は7体ダ』

「創造神？」

『今日ノ我ハ気分がイイ。特別に教えてヤロウ』

地縛神はいった。

『我ラは、現世で“無貌の神”や“這い寄る混沌”ナド呼ばれる邪神ガ、こことハ異なる世界ノ“遊戯王5D'sダークシングナー”参照と呼バレル概念を参考ニ創られタ存在だ』

「げ」

私を含まない、その名前を知ってるらしい人が何人か、露骨にゾツとした反応を見せる。

直後、

「それってナイアルラトホテップじゃないのよ！」

反応した内のひとり、島津先生が悲鳴でもあげるような声でいった。

「知ってるの、先生？」

私が訊ねると、

「クトゥルフ神話に登場する邪神よ。それが関わると大抵ロクな事にならないのよお」

はあつとため息混じりでいう島津先生。

数日後、私は自分で調べてみてその正体に同じくげんなりするのだが、それはまた別の話。

『ハッハッハ、我ヲ目覚めさせテくれるナよ。モウ暫くの間、使命ヲ忘れて現世ヲ満喫したいノデな』

地縛神が愉快そうに笑う中、

「とりあえずターンエンド。で、いいのよね？」

『アア』

許可を取った所で、私はターン終了を宣言する。

「なら、《マグナヴァレット・ドラゴン》の効果で《シエルヴァレット・ドラゴン》を特殊召喚します。場所は《地縛神 Chacu Chacallhua》と同じライン上に」

アインスはいった。

沙樹

LP300

手札0

「《空母甲板》
フル・フラット

□□□□□□

「《地縛神 Chacu Chacallhua》□□「《幻獣機トークン》□□「《幻獣機トークン》□□

—「ヴァレルロード・ドラゴン（アインス）」—

「《シエルヴァレット・ドラゴン》」

「《銀幕の鏡壁》」

アインス

LP375

手札0

「そして、私のターン、ドロー」

アインスはカードを引き、

「《銀幕の鏡壁》のコストは払えませんが、破壊します。そして、《ヴァレルロード・ドラゴン》の効果によって《シエルヴァレット・ドラゴン》の効果を発動。シエルヴァレット自身を破壊し、《地縛神 Chacu Chahu》を破壊します」

《シエルヴァレット・ドラゴン》だった弾丸が放たれ、地縛神の体に撃ち込まれる。

「今日は色々な話を聞かせて頂き感謝します。ですが、このデュエルは私と鳥乃の決闘。ここから先は悪いですがお引き取り願います」

アインスの言葉に、地縛神は何も喋ることなく満足そうな様子で爆破された。直後、私の体から冥界のフィールドが弾け飛び、肌の色や目が普段のものに戻る。

「助かったわ。これで体が自由になった」

私はその場で一回伸びして、

「で、どうするの？ 財団のやり方じゃBADENDにしかならないうって発覚したわけだけど」

と、私はいうも、

「悪いけど。まだ財団から答えはきてないからね。現状は分かっても執行するしかない」

アインスはいい、

「それに、任務とか抜きで君はそれを許せるのかい？ このまま決闘を中断させる事を、デュエリストのプライドが」

「ま、ないって話ね」

だからこそ、分かかって確認半分で訊いたんだけど。

デュエルは続行される。

「そしてこのターン、私はこんなカードを引かせて貰ったよ」

言いながら、ドロートしたカードをアインスはデュエルディスクに読み込ませる。

「魔法カード 《貪欲な壺》を発動」

「げっ」

「ここでもさかの。」

「私は墓地から 《マグナヴァレット・ドラゴン》 《ゲートウェイ・ドラゴン》そして3体の 《スニツフィンク・ドラゴン》をデッキに戻し、カードを2枚ドロートする」

アインスがこれで2体以上のモンスターの展開に成功した場合、私はトークンで護りきることができなくなりデュエルで敗北する。

「ドロート」

アインスがカードを引いた。

一度、地縛神の支配下に陥った副産物でフィールも少しは回復している。だから、フィールによるドロート運への妨害は行ってるけど。さて、どうなるか。

「そうきたか」

引いたカードをみてアインスは呟いた。

「私は、手札を1枚捨て 《リストア・ドラゴン》を自身の効果によって表側守備表示で特殊召喚」

フィールドに出てきたのはレベル5の闇属性モンスター。

「《リストア・ドラゴン》のモンスター効果。このカードの召喚・特殊召喚に成功した場合、ゲームから除外されているドラゴン族・闇属性モンスター1体を効果を無効にした状態で特殊召喚する。私は《デリンジャラス・ドラゴン》を特殊召喚。この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できない」

2体のモンスターを出されてしまったが、これでは私のトークンを倒すには至らない。

となると。

「開け、私のステージよ」

やはりリンク召喚。

「召喚条件はドラゴン族モンスター2体以上。私は《リストア・ドラゴン》とリンク2《デリンジャラス・ドラゴン》をリンクマーカーにセツト。サーキットコンバイン。リンク召喚！ S h a l l W e D a n c e ? 《マズルフラッシュ・ドラゴン》」

こんな時でもBGMと踊りを欠かさないアインス。こうして出現したのは四脚の龍。そのリンクマーカーは、左上・上・右上と全部上側に向いており、そんなモンスターがアインスのメインモンスターゾーンの真ん中。つまり、両のEXモンスターゾーンにリンクマーカーを向けた状態で特殊召喚されたのだ。

《マズルフラッシュ・ドラゴン》の効果によって、私はこのカードのリンク先にモンスターを呼べません。従って、ここからエクストラリンクを行うことはできませんのでご安心を」

そんな事は分かっていた。私はアインスの説明に対して、

「加えて、1ターンの1度、このカードのリンク先にモンスターが召喚・特殊召喚された場合に、リンク先のモンスター1体を破壊し500のダメージを与える、でしょ？」

と、返した所。

「ええ、その通りです。従って、次のターン鳥乃はヴァレルロードの包囲網を潜り抜けてEXモンスターゾーンにモンスターを呼んだ所で、マズルフラッシュのリンク先故に排除されるという状況に陥ったわけです。もちろん、このカードはリンクモンスターですので《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》をもつてしても突破はできません」

アインスはそう言うてから、
「ではバトル。マズルフラッシュとヴァレルロードで鳥乃のモンスターを全滅。エンドフェイズ時に《シエルヴァレット・ドラゴン》の効果で《マグナヴァレット・ドラゴン》を特殊召喚。ターンを終了しましょう」

と、ここで決着にはならないものの、更に私を追い込んだ盤面にしてターンを明け渡してきた。

「私のターン」

言いながら、私は自分の盤面を見る。

沙樹

LP300

手札0

「《空母甲板》フル・フラット」

□□□□□□

□□□□□□

—□□—「《ヴァレルロード・ドラゴン（アインス）》」—

□□□「《マズルフラッシュ・ドラゴン》」□□「《マグナヴァレット・

ドラゴン》」

□□□□□□

アインス

LP375

手札0

場には、すでに効果を使う事さえできない《空母甲板》フル・フラットが1枚だけ。一応墓地に《幻獣機ブルーインパラス》がいるも、正直この盤面をどう崩せばいいか分からない。

(さて、何をドローすればいいんだろ)

私は辺りを見渡す。阿呆かもしれないけど、何かをドローするにしても引き寄せる為のインスピレーションが欲しかったのだ。

そして、私は不意に梓に目がいった。

梓は祈っていた。

私が地縛神を引いてから、梓はずっとショッキングな思いばかりしていたのだろう。化け物になった目で梓を見たくなくて、ずっと意識を逸らしてたから推測でしかないけど。それでも、いま梓は私の為に祈ってくれている。

(あ)

あのカードをもし出す事ができたら。

そう思った瞬間、

「梓」

私は、気づけば彼女を呼んでいた。

「梓、ちよつとごつちに来てくれない？」

「え？」

と、梓は祈りを中断しこちらに顔を向ける。

「願掛けみたいなものだけど、梓の力を借りたいなって」

「私の？」

「そ」

私は微笑み、

「梓からもらったアレ出したいから、一緒にダークドロウ協力してくれない？」

「あつ」

梓は目を見開いて、

「そっか、あのカードなら。でも」

「話すの忘れてたけど、ダークドロウってデッキトップのカードをファイルで別のカードに書き換える奥義って話でね。それで絶対アレを出すためのカードを、実在しないカードだろうとドロウしてみせるって話」

「うん」

少し困惑しながらだけど、梓は私の前に来てくれた。

「怖かったでしょ。地縛神を引いたときの私」

私は梓をそつと片手で抱き寄せ、あえてこの話をする。

「今だから言うしかないけど、私一回死んでるのよ。その時に地縛神の眷属とかそういうのに選ばれて、化け物に変えられちゃって。……そんな私を回収して、半年かけて人間に戻してくれたのが鈴音さん」

「……ごめんね、実は知ってる」

梓は、ぼそつと呟くようにいった。

「え？」

「全部知ったのは最近だけど。だから、本当は鈴音さんが悪くないのも知ってるの」

と、いったので。

「私の体が、半分機械になつてることとは？」

「うん。その機械で生命維持してることも、地縛神ってカードに支配

されないようにしてることも」

「そのメンテナンスのために、月1回は外泊してることも？」

「うん。本当は全部知ってたのに我俣でごねてた」

梓は言ってからぎゅっとしがみついで、

「でも、だから許したんだよ？ この前の土日より、これからの私と一緒にいたいって言ってくれたから」

M I S S I O N 2 2 参 照

「そっか」

私がうなずくと、

「どうしてって聞かないんだね。私が全部知ってる理由」

と、梓。私は優しく微笑んで、

「そりや気になるけど、いまはデュエルに勝って、明日も梓と一緒にいれることのほうが大事。聞くのは終わってから」

言ってから、私は梓を両腕で抱き直し頭を撫でる。

梓は、私の胸の中で猫のように丸くなって、

「えへへー」

と、だらしない笑みを浮かべる。

「あの抱きしめ方」

遠くで木更ちゃんの声が聞こえた。

「間違いないわ。先輩が私を堕とそうとしたときの、あの優しい抱き方」

大正解、M I S S I O N 3 & a m p ; 1 2 参 照木更ちゃんを落ち着かせたときにした、彼女曰く「女の子が気を許しやすい抱きしめ方」ってやつだったりする。

あと、何気に敬語を使わない木更ちゃんの喋りって初めて耳にした気がする。あの子従妹相手でもよく丁寧な言葉遣いするから。

「その抱きしめ方のメカニズムはご存知ですか？」

鈴音さんが訊ねる。木更ちゃんは（たぶん）軽く驚いた顔で、

「いえ、ご存知なのですか？」

「ご存知も何も、あれは赤子をよしよしと抱きしめる母親の抱擁がベースですわ」

と、鈴音さん。大正解。

更にいうと、私が荒れてた頃に鈴音さんが全身で受け止めてくれた

時の温もりなのである。それを、少しでも再現したくてね。そう。

家族愛に飢えた経験があるのは、アインスたちだけではない。

私だって、とんでもない親の下に生まれて、親の愛を知らずに育ってきたのだ。幼少期には放置子の経験をして、梓の小母さんに嫌われ、親戚であるみいねの叔母さんも保護者代わりになる事を放棄した。私の本当の性格は人間不信だ。長い間私に味方はいないと思いつつ続けていた。その結果、いまでも人を信用してないとMISSTION¹⁶参照双庭姉妹に言われてしまった。

それでも私は、私を家族といってくれた鈴音さんや高村司令率いるハングド、増田が死んだあの日から私を支えてくれる木更ちゃん、そして私の善いも悪いも昔から見えてきて未だ幼馴染を続けてくれる梓のおかげで今を生きている。

「じゃあ、梓。お願い」

私は再び手を掲げた。直後、私の手にフィールのエネルギーが集まり、闇色の輝きを帯びる。ここで。

「梓」

「うん」

梓が闇色の輝きに手を伸ばす。

「これでいいの?」

「ありがとう。後は一緒にアレを出すカードを引きたいって呼びこんで」

「うん」

片手を私の腕に添えたまま、今度は梓が私を支えるように抱き寄せる。

温かい。全身に力が湧いてくるようだった。

私は、

「暗き力はドローカードをも闇に染める!——ダークドロ」

今回二度目のダークドロでカードを引き抜く。直後、私のフィールは空になるも、

「あ」

と、先にドロークードを見た梓が、

「見たことのない幻獣機」

って。

見たら、それは確かに私の知らない幻獣機だった。

幻獣機ではなく、幻獣機。

「ありがとう梓」

私はいつて、

「墓地の《幻獣機ブルーインパラス》のモンスター効果。相手フィールド上のみモンスターが存在する場合、このカードをゲームから除外する事で、場に幻獣機トークンを発生させる」

とりあえず私はトークンを1体生成し、

「そして、私は手札からチューナーモンスター《幻獣機エンジェル・シンクロン》を通常召喚」

私の場に梓と協力してのダークドロークで誕生したモンスターを場に出す。それは一見天使の翼さえ無い普通の航空機。

「幻獣機でシンクロンだって?」

驚くアインス。その横でシュウが、

「しかもエンジェルって何だよ。名前には幻獣機の要素が何も無えし、見た目にシンクロン要素もゼロじゃないか。インチキカード名もいい加減にしるよ」

とか突っ込む中、

「何言ってるのって話だけど」

私は言い切った。

「確かにシンクロンはどうか思うけど、梓と一緒にダークドロークしたんだから、エンジェル付いて当然じゃない」

「惚気んなー」

シュウは叫び、かと思ったら頭を抱え、

「ブラックコーヒー飲んでえ」

私、そんな糖度高いこと言ったっけ?……言ったわね。

自分で自覚した所で、そつと梓に視線を向ける。

「……」

梓は顔を真っ赤にしていた。しかも、周囲も何だかすっごい空気。これどうしよう。

「いいなあ、青春っていいなあ。私にも春来ないかなあ」

そんな中間こえる、島津先生の切実な悩み。

「と、とりあえずエンジェル・シンクロンのモンスター効果。このカードの召喚に成功した場合に、墓地の風属性・Sモンスター1体を特殊召喚する。浮上せよ《幻獣機コンコルダ》！ 守備表示」

再び場に出現する幻獣機のSモンスター。

「この効果で特殊召喚されたモンスターの攻守は0になり、相手はエンドフェイズ時に1度、このモンスターを破壊する権利を得る」

「なるほど、しかし権利を行使してモンスターを破壊すればコンコルダの効果が発動してしまうわけか」

アインスはうなずき、

「コンコルダの効果なら問題なさそうに思えるが、一応ここで対処させて貰う。《ヴァレルロード・ドラゴン》の効果からの《マグナヴァレット・ドラゴン》の効果を発動。マグナヴァレットを破壊し、コンコルダを墓地に送ろうか」

《マグナヴァレット・ドラゴン》だった弾丸がヴァレルロードに装填される。ここで私は、場のトークンを取り除き、

「《幻獣機エンジェル・シンクロン》のモンスター効果。トークンを全てリリースして効果発動。私のモンスターはその効果を受けない」

宣言した瞬間、エンジェル・シンクロンから超小型の幻獣機トークンが無数に散布される。

ばら撒かれたトークンは光り輝き、その軌跡によって、エンジェル・シンクロンの背後に天使の翼を創り出した。そんな中、ヴァレルロードはこのトークンの翼に向けてマグナヴァレットの弾丸を発射してしまい、私のモンスターは効果を一切受けずに終わる。

「エンジェルフレアじゃないか」

炎崎がいった。

「何ですか？」

深海ちゃんが訊ねた所、

「輸送機が誘導ミサイルとかから護るためにデコイ目的の火工品をばら撒く時の様子がそう呼ばれてるんだよ」

との事らしい。実際、エンジェル・シンクロンが見せるこの光景は、そう呼ばれるのが納得なほどに神々しい。

「綺麗」

梓が呟く。

「そうね」

私はうなずき、

「じゃあ、今度実物見に行かない？」

「え？」

「エンジェルフレアって呼称がある位だし、たぶん現実に見ることが出来る光景なんですよ。ハンドの給料は結構いいから、海外旅行くらい何とかなるわ」

「うん」

梓はうなずく。

実際は海外旅行したからって簡単に見える物じゃないのは分かってる。だけど、いまの私はそれを忘れてしまう程度には、梓への想いで頭がスイーツになっていった。

「じゃあアインス。終わらせてもいいのよね？」

「できるものなら」

と、相手がいったので、私は。

「なら遠慮なく。私はレベル7《幻獣機コンコルーダ》に、レベル1《幻獣機エンジェル・シンクロン》をチューニング！」

エンジェル・シンクロンが1つの円に変わると、コンコルーダが潜って7つの光になって混ざり合う。

私は、出発前に梓から受け取ったカードをデュエルディスクに置き、いった。

「穢れさえ光を透す聖なる翼よ。その神々しきで敵を祓え！ シンクロ召喚！ 飛翔せよ、レベル8！ 《クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン》！」

フィールドに出現したのは、水晶を思わせる翼や外装をしたクリア

ウイングによく似たドラゴン。その攻守は3000/2500。

「クリスタルウイング？ クリアウイングじゃないのか。いや、そもそもレベルが違う。デザイン的には進化形といった所か」

アインスは呟いた後、

「だが、EXモンスターゾーンに出された事で《マズルフラッシュ・ドラゴン》の効果を発動。クリスタルウイングを破壊し、500ポイントのダメージを与える」

きた！

「沙樹ちゃん」

梓の合図に、

「ええ」

私はうなずき、

「クリスタルウイングのモンスター効果。1ターンに1度、このカード以外のモンスターの効果を無効にして破壊する」

「なっ」

アインスは驚き、

「その効果はまさにクリアウイングの!? まさに正統進化した効果を持つてるといふのかい?」

「そ。そして、ターン終了までこの効果で破壊したモンスターの元々の攻撃力分、このカードの攻撃力をアップする」

私の説明の直後、《マズルフラッシュ・ドラゴン》は破壊され、

《クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン》 攻撃力3000↓5300

クリスタルウイングの攻撃力が上昇。

「バトル。《クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン》で《ヴァレルロード・ドラゴン》に攻撃！」

私の攻撃宣言を受け、クリスタルウイングはアインスのエースに攻撃を仕掛け、破壊する。

「くっ」

攻撃にフィールは乗せなかったものの、ヴァレルロードが破壊されて生じる爆風を浴び、アインスは膝をついた。

ところで。

気づけば私とアインスは互いに命より大事な存在に物理的に支えられた形でデュエルを続行していた。

アインス LP375↓0

そして、最後に立っていたのは、梓に支えられた私だった。

デュエルが終わった。

全てのソリッドビジョンが終了し、辺りも甲板の上から神籬邸の庭へと景色が戻る。

「負けたよ、鳥乃」

膝をつき俯いたまま、アインスがいった。

「君とは過去何度も共闘と敵対を重ねたが、実力は五分と5分のつもりだった。しかし、こんな決闘の場で負けたとあれば、ついに君は完全に私の上に入ったといっている」

何を言うのかと思いきや、

「鳥乃、君は強いな」

アインスは泣いていた。決闘に負けた悔しさか、涙声で喋ってるのだ。

「アインス」

私はいった。

「引き分けよ。これが戦場ならね」

「え？」

「戦場なら幾らデュエルで勝ってもフィールを使い切ったら、あとは死ぬだけみたいな話じゃない」

「まあ。いや、だがしかし」

反論するアインスに、

「デュエルの内容だっけそう。奇襲で目を潰し、事実上2回のダークドロート明らかに私が持つて以上のフィールを使う反則技。デュエルには勝ったけど、これじゃあジャツジ付きなら反則負けよ。でしよ？」

と、私はナルキサスやNLTにも視線を向ける。

突然意見を求められ、反応に困った様子の彼らを尻目に、私は、「フィーアー！」

と、懐から一枚カードを投げる。フィール・カード化させた《治療の神 デイアン・ケト》である。

私は彼女がカードを受け取ったのを確認してから、

「これでアインスの目を治してあげて。さっきも言ったけど、もうフィールが空だから治したくてもね。それに持つてるフィール量はあなたが一番多いし適任でしょ」

「分かりました」

フィーアはカードを発動。アインスの背に老婆の女神が出現すると、アインスに手をかざし光を注ぎ込む。多分これで彼女の目は大丈夫だろう。

私は彼女の下に歩み寄る。そして、前に立ち手を伸ばした。

「アインス」

「鳥乃」

アインスは顔をあげ、涙でくしゃくしゃになった顔を晒すと、一回フツと微笑み、

「ありがとう」

と、私の手をうけ立ち上がる。

直後だった。

「キエエエエ!!」

物陰から鷹女ちゃんが飛び出し、そのまま短刀の刃を梓に向けて突っ込んできたのだ。

「!？」

突然のことに、誰もが反応を遅らせる。

「危ないー！」

その中で、ナルキサスだけが硬直することなく梓を庇いに走るが、不運にも位置が悪く間に合わない。

「ぎゃっ」

梓の小さな悲鳴を聞き、やっと硬直から抜け出した私。手早く片腕を鷹女ちゃんに向け、私は内蔵銃で足を撃ち抜いた。

「——ッ」

鷹女ちゃんの声にならない叫び。そのまま彼女は地面を転がり、短刀を手から離す。それを私は手早くワイヤーで拾い、絡ませたまま彼女の眼前で地面に突き刺した。

「鳥乃……沙樹……！」

憎しみのあまり般若そのものな顔で私を見上げる鷹女ちゃん。

私は、冷たい目で彼女を見下ろし、

「次は何処が希望？」

と、手首から昇る煙を払いながら、懐から拳銃を抜き、彼女の眉間に銃口を向ける。

「あなたに興味はないし目障りだから、希望なら一瞬の痛みだけで全て終わらせてあげてもいいって話だけど？ 嫌ならこの街、じやないわね。この国から出てって頂戴。慰謝料代わりにその程度の工面ならしてあげるから」

「沙樹ちゃん」

梓が心配そうに私を見る。そして、他の皆はゾツとした顔で私を見ていた。

アインスの目を潰した時とはまるで違う。大切な梓を傷つける者が現れたとき、私がどんな存在に成り果てるのかを目の当たりにしたからだ。正直、いまの私は下手に鷹女ちゃんを擁護する者がいれば、銃口を躊躇いなくそいつに向ける可能性が高い。

小中学校時代のクラスメイトなど半分機械になる前の私を知っている者なら、いまの私を何度か見たことがあるだろう。しかし、残念ながらこの場のギャラリーでそれを知るのは梓と島津先生のふたりだけ。

で、そのふたりが恐怖を振り払い、

「沙樹ちゃん、落ち着いて」「沙樹ちゃん、落ち着いて」

ふたりはタイミングこそ違えど、同じことを言っただけの下に駆け寄る。

「私は大丈夫だから。沙樹ちゃんのおかげで怪我してないから」

と、私を掴む梓。それでも私は鷹女ちゃんに対して殺意が収まらない

い。

「全く貴女は」

突如、奥から声が聞こえた。

「昔っからこうよね。徳光さんに危害加わると」

その方角に視線を向けると、屋敷側から歩いてくる神簇姉妹の姿が。

なお先ほど喋ったのは神簇で、アンちゃんは手元に何か書類を持っている。

「神簇？」

どうしてここに？ なんて一瞬考えちゃったけど、そういえばここは彼女たちの敷地なのだから。本来いないほうが不自然なのだった。

「邪魔しないで」

私はいった。もちろん、先述の通り今度は銃口を神簇に向けるも、「もう少し冷静になりなさいよ。昔と違って、いまの貴女は簡単に人を殺せるんだから」

こちらの殺意なんて何のその。神簇は堂々と私に近づいては、流れるような手刀で私から拳銃を叩き落とし、

「っ!」

「しばらく没収よ」

私が驚く間に、銃を拾ってはすぐアンちゃんに渡す。

手元から武器が奪われたことで、私はやっと少し正気に戻り、

「この。普段はうっかりと不器用の塊のくせに」

と、愚痴を呟いた。

本当、何でもこういう事は滅茶苦茶上手にできるのだろう、この人は。しかも、銃口を向けられたのに、このクソ度胸。

「凄い。怖くなかったのですか？」

呆然としながら訊ねる島津先生に、

「慣れてますから。この人生の宿敵に殺意を向けられるのは」

と、神簇。そういえばこいつ、小学校の頃にさっきの状態の私相手にしよっちゅう歯向かってきたんだっけ。

島津先生はハッと驚き、

「それって。じゃあ、あなたがもしかして神簇 琥珀さん？」
「そ」

と、私が横から答え、

「この人が、この屋敷の主で、恐らく世界で一番たくさん梓を虐め、さつき状態の私と幾度も喧嘩した私の人生の宿敵」

なんて、ついでに紹介。すると横からアンが、

「ふふ、よく五体満足で小学校を卒業できましたね。姉上様」
「本当よ」

神簇は返す。たぶんアンちゃんは皮肉や煽りで言ったのだろうけど、神簇には通じてない模様。もしくは事実過ぎて煽りになってないか。

「あ」

直後だった。

鷹女ちゃんがパツと顔をあげ、足から血を流したまま這うようにしてアンちゃんの下に向かったのだ。このふたりは知り合いなのだろうか。

「鷹女さん」

アンちゃんが、憐憫の眼差しで鷹女ちゃんを見る。

鷹女ちゃんはいった。

「アンお姉さま」

「アンおねえさまあつ?」

彼女の言葉に、私は口をあんぐり開け、啞然となる。

「よして下さいませ。もう私に寄り添う必要もないでしょうに」

アンは軽く項垂れるようにいうも、

「そのような事は御座いません。わたくしにとってアンお嬢様はアンお姉さまですもの」

なんて聞く耳を持たず。というか鷹女ちゃん、目がハートつてレベルでキラキラした眼差しを向けてるんだけど。それも、よりもよつてアンちゃんに。

「よしてくださいー!」

怒声を利かせ、吐き捨てるようにいうアンちゃん。

「お姉さま」

鷹女ちゃんが、寂しさに耳が垂れた仔犬みたいになるも、

「どうせ鳥乃さんの次は私を狙うつもりなのでしょう？ 今更近づこうとしても分かっておりますから、無駄だと言いたいのです」

「そんな、わたくしはただ……」

拒絶するアンちゃんに、鷹女ちゃんは泣き出しそう。

「アンちゃん？ もしかして誓裁さんとお知り合いなの？」

梓が訊ねた所、

「彼女の苗字は誓裁ではありません。恐らく身元がバレない為と『制裁』を『誓う』願掛けを兼ねていたのでしょう」

アンちゃんはいった。

「彼女の本当の名前は首藤すどう鷹女たかめ。といいましても、おふたりには面識のない名前とは思いますが」

「というと？」

私が神簇に訊くと、

「貴女に依頼を頼んだとき、MISSION110参照屋敷に襲撃があつた時のことを覚えてる？」

「そりやまあ」

「その時、敵側に私に剣術を教えてくださいました先生がいたことは？」

「いたわね。私がうなずいた所、

「首藤すどう史剛ふみたか。その先生の名前よ。そして、この子の父親でもあつたのよ」

「ああ」

ようやく合点がいった。何故鷹女ちゃんが私を殺そうとするのか、そして私の次はアンちゃんなのか。その経緯が。

「その剣の先生の娘さんが、どうして沙樹ちゃんを？」

梓が訊ねた所で、

「殺したのよ。私が首藤先生を」

私は正直にいった。

「えっ？」

驚く梓に、私は続けて、

「でも、撃たなければ、あの時死んでたのは私だったのよ。何より、あの局面で殺さず止められるような甘い相手じゃなかった」

と、一応の言い訳。

「まあ確かに、大切な親を殺されて復讐を企てる。恋人の仇の次にありがちな動機ではあるわね」

「そんな、生易しい話じゃありません」

鷹女ちゃんがいった。

「貴女のおかげで私の信愛するアンお姉さまは、憎き琥珀様に勢力争いで負けて屈しなくてはならなくなりましたじゃないですか！ これはお姉さまに対する魂の殺人です！」

「うっ」

あ、アンちゃんが居た堪れなさに顔を逸らした。しかも、その意味を履き違えた神簇が、

「アン！ まさか、貴女まだ反逆を企てる」

「いえ。姉上様ごときを相手に嫉妬や劣等感を抱いていた過去の自分が、もう恥ずかしくて惨めで」

「どういう意味よー」

強い口調で返す神簇。だけど、私はこっそり。

「はい。ハイウインドの皆さん、この中でアンちゃんの気持ちが正直すつごく分かる方は挙手」

とか訊いてみた所、アインスとシユウが即座に挙手し、新参のシルフィさえ申し訳なさそうに手を挙げる。最後まで手を挙げなかったのはフィーアだけだった。

が、それを別の意味で解釈した鷹女ちゃんは、

「お姉さま、ここに私を含め貴女の味方が四人もいらっしやいます。亡き私の父の為にも、今度こそ琥珀様を血祭にあげましょう」

というも、

「鷹女さん」

再びアンちゃんは、憐憫の眼差し。

「お姉さまっ」

「残念ですけど、姉上様は血祭にあげる価値もない方です。ポンコツ

すぎてる」

「ポンコツって何よー!」

神簇がギャースな反応するも、

「貴女が昔から私の事が嫌い嫌い、上げて落として死体蹴りしたのは凄く伝わってますけど、今更姉上様の上に立った所で上がった気が」

と、アンちゃん。しかし鷹女ちゃんは、

「そうやってお姉さまがわたくしを想って、あえて危険な神簇家襲撃のメンバーに加えなかったのは知っております。ですけど、わたくしは貴女の為なら命だって惜しくは」

ここでふと、私はふたりが完全に食い違ったまま互いの認識の中で会話を繰り返して行く気がして、

「神簇、神簇?」

「なに?」

「あのふたり、何だかお互い勘違いしてない?」

訊ねると、

「ええ。見ての通り、鷹女はアンを強く慕ってるわ。それこそ同性愛に近いレベルで。……でも、アンが基本強烈にマイナス思考なのは知ってるでしょう?」

「まあね」

「だから、鷹女がアンを慕えば慕うほど、アンは自分を慕う子がいるはずがないって警戒しだしたのよ。それがこじれにこじれて、今ではアンの中では自分を慕ってるふりして近づいて、信頼を勝ち取ってから蹴落とそうとしてる人って事になってるのよ」

「ああ」

アンちゃんらしい。激しくアンちゃんらしい発想だ。

「しかも、今回あの子が貴女に近づいたやり方が、まさにアンの被害妄想を忠実に再現した形だったもの。これはもう確信の域になってるわね」

ああ……。けどそれって万一あるんじゃない。

「その被害者から質問。アンの妄想が正解だって可能性は?」

「あの子は、事故でアンの裸を見たときに幸せそうな顔をして卒倒したわ」

うん、それでアンの妄想が正解って話はさすがにないわ。別の意味でアンちゃんの身が危険だけど。

「あ、鳥乃さん、アインスさん。少しお時間よろしいでしょうか？」

アンちゃんが私たちに向けていった。鷹女ちゃんは現在アンちゃんのおみ足に顔をすりすりしてる。

「たった今、地縛神回収の任務が延期になりましたのでご報告とさせて頂きます」

そういつて、アンちゃんは指令書のコピーを私とアインスに渡す。確認すると、そこには「鳥乃沙樹を殺害する任を撤回、及び地縛神の回収手段が確認されるまで当任務を延期する」といった旨の内容が書かれていた。もちろん、神簇と違って私に見せてはいけない部分は全て編集で削除済。

ただ、差出人の名前がメールちゃんだったのは確認できた。

「アインスさんが地縛神の言質を獲得して下さったことが今回の決定に繋がりました」

と、アンちゃんがいうので私は、

「やっぱ、デュエル中の会話内容は全部送信してたのね」

「地縛神を誘いだせるかは半ば賭けだったけどね」

さすがに疲れた顔をして、アインスはいった。

分かっていたけど、どうやら私たちがデュエルしてる最中も、この場にいなかった神簇姉妹はずっとメールちゃんと共に上層部に訴え続けてたらしい。でなければ、こんな早く任務の撤回が降りるはずがない。

さて、残りの問題は鷹女ちゃんだけど。

「鳥乃、悪いけど報酬は出すからふたりの誤解を解いてくれる？ 私では無理だもの」

と、お願いする神簇に、私は即答した。

「私も無理」
って。

結局。

私たちは、鷹女ちゃんが実は「アンちゃんを完璧超人と違って崇拜してる困ったヤンデレ」って事にして、アンちゃんのほうに何とか理解（別の誤解にすり替え）してもらい、これ以上私や梓を恨まないよう誘導して貰うことに成功。

最後まで鷹女ちゃんが梓に謝罪することはなかったけど、契約書に血印して貰うことには成功した為、ネビュラ・ハンド・NLTの三組織に提出され、鷹女ちゃんの件は解決となった。

こうして、島津先生の車で研究施設に帰還する最中。

「ねえ、沙樹ちゃん？」

車内で、ふと梓に訊ねられ、

「ん、なに？」

「ふと思ったんだけど、沙樹ちゃん、よく誓裁さん、じゃなかった首藤さんを撃てたね。沙樹ちゃんの大好きな女の子なのに」

「私としては、私が銃を持って人を撃つたのに動揺してない梓が気になるんだけど」

気づけば、前にも銃声M I S S I O N 9 参照が聞こえたのに平然としてることがあったけど。

「あ、えっと」

俯く梓。

「まあ、そこはいいけど」

言いたくなさそうだったので、私は言う。だって、自分はずっと梓に隠し事してたのに、梓の隠し事は全力で追及するとかどうかと思うしね。

「で」

私は今回に隠れてた事実を言うことにした。

「梓、突然だけど私が嫌いなものが何だか言ってみて？」

「え？」

梓はきよとんととして、

「男の人と、子供？」

と、梓は一度言ってから、

「え？ 首藤さんってもしかして」

「私よりひとつ下のアンちゃんを『姉』と慕ってるのよ。中学生以下に決まってるじゃない」

「でも、銃を向けたときはまだそんな事実は」

「だから、昨日言ったでしょ」

ここで。今回は MISSION 26 前編参照 最 初 に繋がるのである。

『梓、セクハラし疲れた……』って」

私が女の子にセクハラして疲れるなんて、したくもない中学生以下にする以外ないのだから。

翌日、朝。

私たちは各自宅でこんなニュースを目にすることになる。

『次のニュースです。北海道某市にて、昨晚より藤稔 ぜうす 天神ちゃんと

ともえ 津細ちゃんつむぎの2名が行方不明になってる事が判明しました。津

細ちゃんは、以前にも行方不明になっており、数日前に発見されたばかりである事が家族の証言で判明しており、恐らく2人は何らかの事件に巻き込まれたものと――』

ファイア外伝

VIER1―転校生は処分人（スローター）!?

ボクの名前は藤稔^{ふじみのり} 水姫^{みずぎ}。陽光学園小学部の六年生。

そして、藤稔唯一のかすが様ライク勢らしいよ。

「今日は転校生を紹介します」

朝のホームルーム。

この日、担任の先生は、いつものように教卓に立つと、挨拶もそこそこに言っただ。

途端、クラスはざわめきだし、

「どんな子だろ?」「変人が増えなければいいけど」「ドーブラエ ウー
トラ。おはよう、ヴェーラだよ。どんなファイアがくるか楽しみだ
ね」

って、色んな反応が飛び交います。

そんな中、ボクだけ（3人目はいつもの事だからスルーするよ）は
知ってるんだ。今日、ファイア・ヴィルベルヴィントこそファイア
んがボクの学校に転入するって。

どのクラスに入るかは分からなかったけど、この様子だとボクのク
ラスに転入するみたい。よかったー。

ボクは昔から体が弱かったんだ。

髪も短めだし、一人称ボクだし、木更ちゃんや深海ちゃんみたいな
淑やかさもないから、自分でいうのもあれだけど見た目は割とボー
イッシュなほうだと思う。男子とつるんでたら、性別を間違われたこ
とも数回あるよ。でも、体育の授業はほぼ全部見学だし、体力もない
し、季節の変わり目には大抵体を壊して数日入院しちゃう。髪が短い
のだから長いと病院でケアできないし手術の邪魔だろうからって理
由だし、髪型が左右非対称^{アシンメトリ}なのはボクの精一杯のお洒落。酷いときは
は一か月の中で通学した日より病院に通院・入院して休んだ日のほう
が多いときもある位だった。つい、この前までは。

そんなボクに健康をプレゼントしてくれたのがファイアちゃんだし

た。

フィール・カードっていうんだっけ？ 彼女から貰ったカードを口ケットペンダントに入れて首にかけてから、あまり体調を崩さなくなっただよ。カードの効果で常にちよつとずつ回復が掛かっているだけだから、カードを手放すとすぐ前の体に戻っちゃうんだけど、それでも体育の授業に参加できるようになったおかげで、少しずつ体力も付き始めてるのが分かるんだ。

フィーちゃんとは前にちよつと色々あったけど、危ない所を二度も助けてくれて、いまではボクの救世主で大親友！

そんな彼女が今日から同じ学校の同級生になるのだから、嬉しくて嬉しくて、ふわあ、興奮しすぎてちよつぴり寝不足かも。

「それでは、新しいお友達を呼びますね。入ってきてどうぞー」

と、先生は教室の扉を開け、外で待ってた転校生を中に招きます。すると、入ってきたのは。

まるで氷上みたいにくるくる回転しながら教卓の傍まで移動し、サタデーナイトフィーバーのポーズを決めるひとりの女の子。

「オウ、イエー！ 私の名前はクワトロ・ベルです！ みんな、よろしくーっ♪」

「誰ー！ーっ！！！！」

この日ボクは、人生で初めて喉が潰れそうってほどの大絶叫をあげました。

まあ、クワトロ・ベルがフィーちゃんの偽名なのは知ってるんだけどね。

1時限目の授業は、フィーちゃんとの自己紹介や交流を兼ねて名目上自習に変わりました。

「クワトロさんってドイツ人だったの？」

「そーだよー。ジャパンには何年も住んでるけど、うーニホンゴムズカスイー」

「好きな食べ物って何？」

「甘いお菓子！ ジャパンにはショートケーキにマンジュウに美味し

「いスイーツが多くて理想郷だよー」

「好きな芸能人は？」

「ゲイ、ノージン？ うー私ドイツ人だから分からないネー」

次々に出されるクラスメイトからの質問に、ハイテンションのまま答え続けるフィーちゃん。正直、最近まで休みがちだったボクよりずっとずっとクラスに溶け込んでる。

髪留めこそ変えてるけど、いつも通りのポニーテールに、日本人とは違う顔立ち、そしてボクたちよりちよつと白めの肌。間違いなく見た目はボクの知ってるフィーちゃんなんだけど、性格が正反対。一瞬、双子か何かだと疑いそうになっちゃったけど、

（甘いお菓子が好きって、やっぱりフィーちゃんだよな？）

一体、どうしちゃったんだろう。ボクがうーんうーんと考えこんでると、

「どうしたのよ、さつきから」

と、眼鏡をかけた女子生徒、はたかせ旗枷 しすい紫水ちゃんが声をかけてきました。

ボクたちのクラスの委員長で、同時に生徒会長。おまけに、さつき変人が増えなければいいけど」って呟いたのも、この子。

紫水ちゃんは続けて、

「さつきもあの子を見るなり大声出して。知り合い？」

「うん」

ボクはうなずき、

「フィー……じゃなかったクーちゃんが転校してくるのも知ってたんだけど。ボクの知ってるクーちゃんと全然違うんだよ」

「私も気になってるのよ」

紫水ちゃんは難しい顔で、

「どっかで見たことある気がするのよね、あの子。ところで水姫、さつきフィーとか言いかけてたのは？」

「あ、うんえつと」

ボクがつい、本名をばらしそうになった直後、

「ああー。マイフレンド水姫ちゃん。ちよつと暗いぞー？」

って、フィーちゃんがボクの前までひとつ飛びできました。言葉通り、座ったままジャンプでぴよんつと。

直後、

「おーっ」「なにこれ」

って、周囲から動揺と歓声。フィーちゃんはピースサインを掲げて、

「椅子に座ってどこでも移動。これぞゲルマン忍術。ぶいつ」

クラスメイトが拍手する中、

「で、マイベストフレンド水姫ちゃん、どしたのー?」

って、無邪気な笑みでフィーちゃんはいいます。

ボクはよく分からないネガティブな感情に胸がチクリとなりながら、

「ううん。ファイ、クーちゃんすごいなあって」

「なにが?」

きよとん、とするフィーちゃん。そこに、

「ねえ、さっきのゲルマン忍術どうやったの?」

「教えて教えてー」

って、質問責めしてたクラスメイトたちが、ボクの席ごとフィーちゃんを再び取り囲んじゃって。

「いいよー。じゃあまずはガ○ダムファイターになろー?」

「おーっ」

普段のフィーちゃんとは正反対の陽気な話術も相まって、ボクを輪の中心に巻き込みながらも、ボク存在を全く無視した質問フェイズに、ボクのテンションはどんどん沈んでいったのだった。

みんなにフィーちゃんを取られたみたいで。でも、同じくらいフィーちゃんにみんなを取られたみたいでもあって。

何よりボクの知ってるフィーちゃんがいなくなっちゃったみたいで。

(っていうか)

努力してもガン○ムファイターになるって無理だよな? 何で誰もツッコまないの? そもそも、どうしてフィーちゃんG○ンダム

知ってるの？

ボクは、余計にフィーちゃんが分からなくなっただんだ。

フィーちゃんへの質問フェイズは、二時限目の授業開始ギリギリまで続いた。

ボクは、それを否応なしにずっと聞かされ続けてたんだけど、おかげで少し気づいたことがあるんだ。

元々フィーちゃんは、無知で世間ズレしてる所がある。

いまの彼女も、本質的には変わらないみたいで、よくよく観察すると、ちよくちよく「ドイツ人だから分からない」って返事したり、頓珍漢なことを言ったのに気づけば「ゲルマンジョーク」と誤魔化しているのが分かった。それも、双方とも頻繁に。

フィーちゃんは最後まで笑顔とハイテンションを保ってた。嫌な顔ひとつせず、愚痴や拒否の言葉も漏らさずに。

けど、ボクの目はしっかりと捉えてたんだ。彼女が段々疲れていくのを。

(もしかして)

フィーちゃんは、わざといまのキャラを演じてるの？

そんなボクの疑問は、次の休み時間に明らかになったんだ。

三時限目・四時限目は体育の授業。ボクたちのクラスは、まず女子が一旦廊下で待機して、男子が先に着替える。その後、男子が全員教室を出てってから女子が着替えるルールになっていた。

他の女子が着替える中、ボクは普段着のまま、閉めたカーテンの間から窓の外を眺める。運動場では先に着替え終えた男子がドッジボールをして遊んでいた。

「どーしたのー?」

フィーちゃんが声をかけてきた。ボクは首を横に振って、「ううん、何でもないよ」

実際、本当に何の意味もなかった。ただただ、フィーちゃんが別人になってる原因が分からなくて、不満なのか不安なのか色んな感情で滅茶苦茶になって、何となく外を眺めてただけなんだ。

本当はいますぐにでも理由を聞きたい。でも、いまファイーちゃんが接触してきても。

「クワトロさん、一緒に行こ」「運動場まで案内してあげる」
ほら、やっぱり。

ふたりで話したくても、すかさずクラスメイトが数人やってきたわけ。これじゃあ、聞きたいことも訊けないよ。はあつ。

それに、今日ずっとボクひとりだけが蚊帳の外みたいで。もうほんと気分が駄々下がりだよ。

ホントは今日、すっごい楽しみにしてたのに。なんでこうなっちゃったんだろ。とか、口には出さないで考えてたら、

「ごつめーん。実は水姫と先に約束しちゃってー」
って、ファイーちゃんはいったんだ。ボクそんな約束ひとつもしてなかったのに。

しかも、ファイーちゃんがボクの名前を出して断った途端、

「ああ、そういえば水姫ちゃんと前から友達だっけ」「なら仕方ないっか」「水姫ちゃんのほうが適任だものね」

とかいって、驚くほど簡単に引き下がっちゃったんだ。嘘おっ!?!
「だから水姫。早く着替えよー?」

ファイーちゃんは笑顔でいった。しかも見ると、ファイーちゃんもまだ普段着のままだったんだ。質問責めに遭いながらも、着替えようと思えば着替えれるのに。そういえば外国の人って他人とお風呂も入りたがらないんだっけ? 裸見せるの抵抗あるのかな?

「う、うん」
とりあえずボクはうなづく。気づくと、まだ着替えてないのはボクたちふたりだけだった。そして、
「じゃあ私たち先に行ってるねー」

女子のひとりがいうと、残ってた数人を連れて教室を出ちやっただ。まるで、ボクに気を遣ってくれたみたいだ。

途端に、しーんと静まる教室。
「行っみたいですね」

ファイーちゃんが小声でいった。さっきまでのハイテンションじゃ

なく、ボクがよく知るフィーちゃんの顔と声で。

「すみませんでした。水姫の様子がおかしいのは気づいてたのですが、まさかここまでゆっくり話をする時間が取れないとは思わなくて」

「……。……ううん」

ボクは、急にキャラが戻ったフィーちゃんに啞然し、数秒ほど返事に遅れてから、

「やっぱり演技だったんだ。さっきまでのフィーちゃん」

「はい。シユウから普段の私と正反対のふざけたキャラで学校にM I S S I O N 2 3 P a r t 2 参 照と言われまして。アインスを参考M I S S I O N 2 4 参 照にやってみたのですが」

「そうだったんだ」

詳しくは分からないけど。でもボクはようやく事情を聞けて、ちゃんと理由があつてフィーちゃんがあんなキャラをしてたんだって分かつて、ほつとなった。

「じゃあ、フィーちゃんは間違いなくボクの知ってるフィーちゃん間違いなんだよね？」

ボクが訊ねると、

「はい」

つて、フィーちゃんはうなずいて、

「間違いなく、私は“処分人”フィーア・ヴィルベルヴィントでイエエエエエイ！ 水姫のベストフレンド。クワトロ・ベルだよー」

「つて、突然戻った!？」

驚くボク。その数秒後、廊下を横切る誰かの足音が聞こえて。

「え?」

もしかして。

ボクは、足音が遠ざかるのを耳で確認してから、

「いま、誰かが近づいてきたからハイテンションのクーちゃんに戻ったの?」

「ほ?」

うなずくフィーちゃん。テンションはボクの知ってるフィーちゃ

んに戻ってた。

「実際にやってみると、身元を偽るのにも便利だと分かりましたので」
「そっか」

そういえば、前にフィーちゃんが自分の仕事を明かしたときに、殺し屋とか何か物騒なことを言ってた気がする。詳しくは分からないけど、確かにクーちゃんの正体がフィーちゃんってバレたら不味いよね、たぶん。

ところで、フィーちゃんは、さっきアインスを参考にしたって言うてたけど、確かお祭りのときに会ったフィーちゃんのお姉さんだよね？ 何だか宝塚みたいな見た目とコテコテの王子様っぽい言動取る人だったのを覚えてるけど。……ってことはフィーちゃんの目にはアインスさんがあんな風に映ってたんだ。

えっと、どうしよう。気づいちやいけない地雷に気づいちやった気分だよ。

「ところで」

ここでフィーちゃんはいった。

「水姫に一体何があったのですか？ 水姫の様子が普段と違うのは分かったのですが、原因が分かりません」

「え？」

ボクは、今更そんなことを改めて聞かれ、

「ぶっ、あはは」

って、笑っちゃった。何だろ、本当はまだ半分しか解決してなかったはずなのに、すべて終わった後みたいに感じちゃって。

「水姫？」

「ごめんごめん」

きよとんとするフィーちゃんにボクはいい、

「多分、もう大丈夫だから。ありがとうフィーちゃん」

嘘はいつてない。フィーちゃんはちゃんとボクのことを気にしてくれたし、クラスメイトもボクに気を遣ってくれた。だから、たぶん残り半分の「フィーちゃんにクラスメイトを取られて、クラスメイトにフィーちゃんを取られた気がした」ってのも、気づいたら些細な問

題に終わってそんな気がする。

だけど。

我儘いうなら、あともうひとつだけボクだけの特典が欲しいなーとも思うんだ。皆になくて、ボクだけに許される特別な何か。

なんて思ってたら、窓から見える運動場では、もう体育の先生がいてボクたち以外のクラスメイトが全員集まってるのが見えた。そして、デュエルを始めてるんだ。

これはたぶん、今日の体育はレクリエーションでデュエルになりそう。

そうだ。

「ねえ、フィーちゃん。ボクとデュエルしようよ」

ボクは、そつと窓を締め直していった。

「デュエルですか？」

引き続ききよんとするフィーちゃんに、

「身元を偽ってるんだから、学校では1軍デッキじゃなくて2軍デッキを使うんでしょ？ みんながいないうちに、1軍のフィーちゃんとデュエルしたいなって」

「1軍？・2軍？」

「あ、えっと」

しまった、通じてない。ボクたちの間ではデッキを複数持つてると1軍と2軍以下で呼称してたから。こういうのって言いかえるって何ていったっけ、えっと。

「め、メインデッキとサブデッキのこと」

「そういう事ですか」

やっと、フィーちゃんは納得して、

「はい。水姫のいう通り、本来のデッキを使うわけにはいきませんか、フィール・カードを0枚にした古代の機械デッキを支給されてます」

「そのデッキじゃなくて、処分人フィーちゃんのデッキとデュエルしたいんだ」

ボクだけが、フィーちゃんの本気デッキとデュエルしたことがある

んだって密かな自慢にしたいから。

「分かりました」

「フィーちゃんはいった。

「いいの？」

「水姫の頼みですから」

そういつて、フィーちゃんは髪留めの中から隠し持ってた指輪を1つ出してはめる。すると、突然指輪が光り始めたと思ったら、フィーちゃんはデュエルディスクを装備してたんだ。

「これも、フィーール？」

ボクが訊ねると、

「はい。MISSION14参照この指輪にはフィーールが内蔵がされてて、予めデュエルディスクごと仕事用のデッキを《封印の黄金櫃》で異空間に隠してました」

「フィーールって何でもできるんだ」

なんか凄いなあ。うまく説明はできないんだけど。

ボクは思いながら、普通に机からデュエルディスクを取り出した。ボクとフィーちゃんで行う初めてのデュエルが始まった。

水姫

LP5000

手札4

□ □ □

□ □ □

□ | □

□ □ □

□ □ □

クワトロ

LP4000

手札4

先攻はボクに決まった。

ボクは、最初の手札を4枚引く前に、

「早速だけど、スキル発動！ 《LP増強α》！」

「デュエル開始時に発動するスキルですか」

確認するフィーちゃんに、

「うん。このスキルの効果によって、ボクの初期ライフは通常より1000高いLP5000でデュエルするよ」

水姫 初期LP4000↓5000

宣言すると同時に、ボクの前方に表示されたソリッドビジョンのライフポイントの数値が変化する。デュエルデイスクには最初から適後のライフポイントで表示されてるんだけどね。

ただ、フィーちゃんの名前はデュエルデイスクでもビジョン上でもクワトロ名義。ここは、まあ仕方ないのかな。

「じゃあ、改めてボクの先攻でいくね」

ボクは今度こそ手札を4枚引いて、

「あ。いい手札」

って、ちよつと喜ぶ。まあフィールを使ったんだから当然なんだけど。

「いくよ。ボクは手札から《アロマージュージャスミン》を召喚、さらに続けて《アロマージューローズマリー》も召喚。ジャスミンはボクのライフが相手より多いときに、通常召喚とは別に1度だけジャスミン以外の植物族を召喚できるんだよ。さらにフィールド魔法《アロマガーデン》を発動」

ボクがカードを発動すると、ソリッドビジョンによって辺りはお花がいっぱい飾られた庭園に姿を変える。

《アロマガーデン》の効果。ボクの場合にアロマモンスターが存在する場合、1ターンに1度、ボクのライフを500回復させる」

庭園いっぱいのお花から優しい色合いの花粉が舞い上がると、

水姫 LP5000↓5500

ボクのライフはさらに上昇。

「この効果の発動後、次のフィーちゃんのターン終了時まで、ボクのものスタアの攻撃力・守備力は500アップする。さらに、ライフが

回復したことでジャスミンとローズマリーの効果も発動するよ。ジャスミンは1ターンに1度、ボクのライフが回復したときにカードを1枚ドロし、ローズマリーは1ターンに1度、ボクのライフが回復したときにモンスター1体の表示形式を変更する。ボクはデッキからカードを1枚ドロして、ジャスミンの表示形式を守備表示に変更」

《アロマージージャスミン》 攻撃力1000↓600 / 守備力1900↓2400

《アロマージューローズマリー》 攻撃力1800↓2300 / 守備力700↓1200

これで、攻撃力の低いジャスミンを守備表示にしながら、ローズマリーの攻撃力を2300まで上昇。さらにドロ。

ボクは2枚になった手札をさらに全部セットして、

「カードを2枚セット。ターン終了」

と、ボクのデッキ最高の初手で先攻1ターン目を終えた。

水姫

LP5500

手札0

「《アロマガーデン》」

「《セットカード》」「《セットカード》」□

□「《アロマージューローズマリー》」□「《アロマージージャスミン(守備)》」

□—□

□□□

□□□

クワトロ

LP4000

手札4

「私のターン、ドロします」

フィーちゃんのターンになった。

「永続魔法《地獄門の契約書》を発動。デッキから《DDスワラル・ス

ライム』をサーチします」

やっぱり。

「フィーちゃんは当然のように《地獄門の契約書》を引き当て、《DDスワラル・スライム》を手札に加えた。

前に一度だけフィーちゃんのデュエルをみたときも、フィーちゃんはず《地獄門の契約書》から入ってたんだ。その時は、すでに手札にスライムがあったみたいで別のカードをサーチしてたけど。

「そして、手札の《DDスワラル・スライム》の効果。このカードは手札のDDと融合魔法カードなしで融合します。私は《DDスワラル・スライム》と《DDRリス》を融合」

「やっぱりきた、《DDD烈火王テムジン》！　ボクはそう思ったんだけど、

「夜の名を持つ女悪魔よ、神秘の渦とひとつになって、新たな救世の触媒となれ。融合召喚！　目覚めろレベル7《DDD神託王ダルク》！」「テムジンじゃないの!?!」

代わりに出てきたのは、1体の女戦士型のDDD。相手がテムジンだったらジャスミンもローズマリーも倒せないよって算段だったのに、ダルクの攻撃力は2800。こっちだとボクのモンスターどっちも倒されちゃうよ。

「続けていきます。ステージ解放。開け、時空の扉。召喚条件はDDモンスター1体。私は《DDD神託王ダルク》をリンクマーカーにセット。リンク召喚、目覚めろリンク1《DD魔導賢者ゲイツ》！」

そして、EXモンスターゾーンからメインモンスターゾーンにカードを移すためのゲイツ。こっちはちゃんと前と同じ。

「手札から《DDナイト・ハウリング》を通常召喚。効果によって墓地の《DDRリス》を蘇生。《DDRリス》には1ターンの1度、自身が召喚・特殊召喚した場合に、墓地のDD1体のサルベージか、EXデッキからDDのPモンスター1体を回収する効果を持ちますが、いまは使いません。そして、レベル4《DDRリス》にレベル3《DDナイト・ハウリング》をチューニング」

うわっ！　ナイト・ハウリングは読んでたけど今度はレベル7のシ

ンクロ？ サイフリートじゃないの？

「次元の扉よ、疾風の速さを触媒に新たな王を生み出せ。シンクロ召喚！ 目覚めろレベル7《DDD疾風王アレクサンダー》！」

出てきたのは風属性のDDDモンスター。攻撃力は2500とサイフリートやダルクより低いけど、それでもちようどジャスミンを戦闘破壊できちやう数値。

「《DD魔導賢者ゲイツ》のモンスター効果。このカードは自身をリリースして墓地のDDモンスターを手札に加える。かつ、それがエクストラデッキに戻る場合、かわりに特殊召喚が可能。私はゲイツをリリースし、墓地の《DDD神託王ダルク》を特殊召喚」

ここでフィールドに舞い戻ってきたダルク。

「そしてアレクサンダーのモンスター効果。このカードが場において、DDが召喚・特殊召喚された場合に発動。墓地からレベル4以下のDDを特殊召喚できる。墓地の《DDRリス》を特殊召喚」
「うわっ」

テムジンが来ないと思つたら、こつちも蘇生効果持ちだった。効果の範囲はアレクサンダーのほうがずっと弱いけど、《DDRリス》つていえば、さつきフリーちゃん嫌なモンスター効果の使用を後回しにしてたような。

「《DDRリス》のモンスター効果を今度は行使。私は墓地の《DDナイト・ハウリング》を手札に加えます」

だよね。うわあ、ボクの知ってる展開とは別の手順でガンガンまわしてるよフリーちゃん。

(でも)

他に効果が隠れてないなら、実はテムジン&サイフリートの盤面より助かってるんだよ。フリーちゃん、それ。

「カードを1枚セットしてバトル。《DDD疾風王アレクサンダー》で《アロマージュジャスミン》に攻撃」

結局、フリーちゃんはボクのセットカードに無警戒なまま攻撃してきた。

ボクはちよつと得意げに、

「甘いよフィーちゃん。罨カード《ドレインシールド》！」

と、カードの発動を宣言した。

「この効果でアレクサンダーの攻撃を無効にして、攻撃力分のライフを回復」

「ならダルクで」

「それだけじゃないよ」

ボクは続けていった。

「ボクのライフが回復したことで、ジャスミンとローズマリーの効果も発動。デッキからカードを1枚ドロ―し、ダルクには守備表示になってもらうね」

「2体とも止めるための《ドレインシールド》でしたか」

フィーちゃんは納得しながら、《DDD神託王ダルク》を守備表示にする。ボクはさらにカードを1枚引き、

「さらに永続罨《潤いの風》を発動。1ターンに1度、1000LPを払ってデッキのアロマモンスターをサーチするよ。ボクは《アロマ―ジーマジヨラム》を1枚デッキから手札に」

結果、さつき手札を全部消費したのに、ボクの手札はもう2枚。しかも1000ライフを払ったはずなのに、

水姫 LP5500↓8000↓7000

ボクのライフは、ほとんどフィーちゃんのライフの倍。

フィーちゃんやフィールを使うみんなが強いのは、ドロ―運を強化して毎回「完璧な手札だ」ができるのが多いと思うんだ。だからボクも同じ土俵で闘えば、もしかすればフィーちゃんにだって勝てるはず。

いまのところ、ボクの推測は正解に向かって動いている。フィーちゃんにも勝てたら、いままで体のせいで不利だったかすがMISSTION20.5参照様争奪戦だつて勝てる。だよな？

「私はこれでターン終了です」

フィーちゃんがいった。やった！ フィーちゃんを相手にこのターンを耐えきつたよ。

水姫

LP7000

手札2

「《アロマガーデン》」

□「《潤いの風》」□

□「《アロマーゼーローズマリー》」□「《アロマーゼージャスミン（守備）》」

□ー□

「《DDリリース（守備）》」「《DDD神託王ダルク（守備）》」「《DDD疾風王アレクサンダー》」

□「《地獄門の契約書》」「《セットカード》」

クワトロ

LP4000

手札2

「ボクのターン、ドロー」

調子を良くしながら、ボクはカードを1枚引く。

「そして、1000ライフ払ってもう一度《潤いの風》の効果を使用。今度は」

って、デツキの中を確認しようとしたら、

「永続罫《誤封の契約書》を発動。この効果によって、ターン終了時点でフィールドの罫カードの効果は無効になります」

「あっ」

サイフリートがないから安心してたら、そんなカードを伏せてたなんて。

（まあ、仕方ないかあ）

なんて思ってたら、

水姫 LP7000↓6000

ボクのライフが減少してたんだ。あれ？

「どうしてボクのライフ」

「《潤いの風》のコストは発動するために払われたものです。発動直後に効果が無効にされても払い戻しはされません」
「うそっ」

そうなんだ。ボクは一瞬思ったけど、そういえば木更ちゃんの《スキルドレイン》も直後に対処されても払ったライフは払いつばなしだったつけ。

でも、まあいつか。ライフはまだいっぱいあるもん。それに、

「こっちは大丈夫だよな? 《アロマガーデン》の効果を再び発動。ボクのライフを500回復して、ボクのアロマモンスターの攻守を再び500アップ。さらにジャスミンとローズマリーの効果も発動。カードを1枚ドロワーして、アレクサンダーも守備表示になっちゃえ」

水姫 LP6000↓6500

ボクのライフは再び回復し、これでフィーちゃんのモンスターが2体とも守備表示に。

「いくよ。ジャスミンの効果で手札の《アロマージーカナンガ》を召喚。そして、照らして! ボクのサーキット」

天井から一筋の光が降り注ぎ、床にリンクマーカーが描き出される。

「リンク召喚ですか」

フィーちゃんの言葉に、ボクはうんとうなずき、

「召喚条件は植物族モンスター2体。ボクはジャスミンとカナンガをリンクマーカーにセット。リンク召喚! 咲いて! リンク2《アロマーファイージャスミン》!」

こうして、ボクの場合に現れたのは《アロマージージャスミン》に翹が生えたモンスター。攻撃力は1800。

「《アロマーファイージャスミン》のモンスター効果。リンク先のボクのモンスター1体をリリースして発動。デッキから植物族モンスター1体を守備表示で特殊召喚するよ。ボクは《アロマージーローズマリー》をリリースしてデッキから《ローンファイア・ブロッサム》を特殊召喚。さらにローンファイアの効果で自身をリリース。《アロマージーベルガモット》を特殊召喚!」

基本的に《アロマーファイージャスミン》の効果で特殊召喚しようとするモンスターは守備表示になっちゃうんだけど、実はこの効果には《ローンファイア・ブロッサム》を経由することで攻撃表示で出

せるっていう裏技があるんだ。

「上手いですね、水姫」

フィーちゃんがいつてくれた。ボクは嬉しくって「えへへ」って笑いながら、

「でも、まだボクのターンは終わってないよ。ボクは手札から《クレインクレイン》を通常召喚」

ここでボクはアロマでも植物族でもないモンスターを場に出す。

《クレインクレイン》は召喚成功時、墓地からレベル3のモンスターを蘇生できるんだよ。ボクは《アロマージーカナンガ》を蘇生」

「レベル3のモンスターが2体ですか」

「うん」

ボクはうなずいて。

「ボクはレベル3の《クレインクレイン》と《アロマージーカナンガ》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

場に銀河の渦が出現し、2体のモンスターが靈魂となって取り込まれる。

直後、銀河ではなくボクの胸元で49の数字が描き出され、服の内側に入れてたロケットペンダントが浮かび上がった。

フィーちゃんが「え!?!」て顔で驚く。

「水姫？。もしかして、いまから召喚するモンスターは」

訊ねられる中、返事の代わりにボクはペンダントを開き、中で光り輝いてる1枚のカードをデュエルディスクの上に置く。

「ボクの命を護り続ける幸せの青い鳥、いまこそ羽ばたけ！ エクシーズ召喚。開け、No. 49！ ボクとフィーちゃんの絆、秘鳥フォーチュンチュン！」

ボクの場合に守備表示で出現したのは、まさに1羽の青い小鳥。そして、ボクとフィーちゃんの友情を語るにかかせない、フィーちゃんから貰ったボクのフィール・カード。MISSION18参照 その攻守は400/900と凄く低いけど、いまは《アロマーガーデン》の効果で900/1400とちよつとだけ強くなってる。

「まさか、デュエルで出されるとは思いませんでした」

フィーちゃんはいった。

「私にはデュエル中での使い道が浮かばないカードでしたから」

それはちよつと聞きたくなかった事実かも。

「でも、水姫のデッキなら確かに相性の良いカードですね。《No. 4

9 秘鳥フォーチュンチュン》」

「うん」

このカードは自身が破壊される際にオーバーレイ・ユニット1つを身代わりでき、ボクのスタンバイフェイズ毎に500ライフを回復する効果を持っている。今回はカナンガを使ったけど、《ローンファイア・ブロッサム》を使って出すこともできて、ボクにとってはデュエルでも大活躍なんだよ。

あ、このフォーチュンチュンはデュエルディスクにはちゃんとEXデッキの1枚として登録させてあるから、ルール違反はしてないよ？ そんなプログラムを作る技術もないしね。

「カードをセット。バトル！ 《アロマセラフィージャスミン》で《DD神託王ダルク》に攻撃」

ジャスミンが羽ばたくと、辺りに優しい色合いの風が吹きなびき、神託王ダルクはその風を浴びる。すると、モンスターは浄化されたように穏やかな顔を見せながら消滅。その際、風はフィーちゃんにまで届いて、

クワトロ LP4000↓3700

守備表示モンスターと戦闘したのに、彼女のライフがちよつと減る。

「貫通ですか」

「うん。でも、ただの貫通じゃないよ。《アロマーゼーベルガモット》で《DD疾風王アレクサンダー》に攻撃！」

続けてベルガモットもフィーちゃんの守備表示モンスターを戦闘破壊すると、

クワトロ LP3700↓2800

フィーちゃんのライフがさらに減少する。

「どちらにも貫通効果を？　これは」

不思議がるフィーちゃん。ボクが見たかった通りの驚きをしてくれるフィーちゃんに、ボクはすっごく嬉しくなりながら、

「ベルガモットの効果だよ。ボクのライフがフィーちゃんのライフより高いと、このモンスターはボクの植物族モンスターすべてに貫通効果を持たせてくれるんだ」

「そういう事ですか」

「そして」

ボクはビシッと指さして、いうんだ。

「フィーちゃんの契約書カードは、フィーちゃんのターンの初めに1000ダメージを与えるはず。これでボクがターン終了すれば、フィーちゃんのライフはもうたったの800！」

「その通りです」

肯定するフィーちゃんに、

「やった。ボクはこれでターンエンド」と、ターンを明け渡したんだ。

水姫

LP6500

手札1

「《アロマガードン》」

□「《神の恵み》」□「《セットカード》」

「《アロマージュ―ベルガモット》」□「No. 49 秘鳥フォーチュン

チュン（守備）」□

□―「《アロマセラフィ―ジャスミン（水姫）》」

「《DDリリス（守備）》」□□

□□「《地獄門の契約書》」□「《誤封の契約書》」

クワトロ

LP2800

手札2

「私のターン、ドロー」

フィーちゃんはカードを1枚引き、

「スタンバイフェイズ。私は契約書1枚につき1000ダメージを受けます」

クワトロ LP2800↓800

ボクがいった通り、クーちゃんのライフが一気にフォーチュンチュンでも倒せる圏内に入る。《DDリリース》がいなかったら、フォーチュンチュンも攻撃してボクの勝ちだったのに。

「強いですね、水姫」

フィーちゃんが褒めてくれた。

「ほんと？ フィーちゃん？」

「はい。驚きました」

フィーちゃんの言葉に、ボクは素直に「やった」って喜んでると、
「ですが、おかげでこのスキルを使うことができます」

って、なんかフィーちゃんの口から不穏な言葉が。

どういうこと？ ボクは言おうとしたけど、その前に。

「スキル発動。《新規雇用の契約書》！」

フィーちゃんがいい、直後辺りの光景が急にブレだしたんだ。

ボク自身やフィーちゃんは変わらないのに、《アロマガーデン》のビジョンとか、机とか窓とか黒板とか、どれもこれも二重三重に見えだして。これって一体。

「このスキルは私のライフが1000以下の場合に使用可能。相手のフィールドまたは墓地からモンスターを1体選び、元々の攻撃力が同じDDモンスターをランダムに1枚エクストラデッキに加えます」

直後、フィーちゃんの前に1枚の契約書が出現すると、ジャスミンのブレた中の1体が他のブレから離れ契約書の中に入っていく。直後、契約書は光を帯びながら小さくなっていき、辺りが元の光景に戻ると同時に1枚のカードになってフィーちゃんの手元に渡ったんだ。

「契約完了。私の力に、アロマの力を持つ新たな王が加わりました」

フィーちゃんはいった。その意味は、ボクにはまだ分からなかったけど、

「お待たせしました。デュエルを再開します」

って、デュエルを再開するフィーちゃんから、たぶんフィールドだと

思う何かがごっそり消耗してるのだけは分かったんだ。

「手札から永続魔法《戦神との不正契約書》を発動します」

ここでフィーちゃんは3枚目の契約書をフィールドに出して、

「手札から《DDナイト・ハウリング》を通常召喚。墓地から《DDD疾風王アレクサンダー》を特殊召喚します」

うわ、せっかく倒したアレクサンダーがまたフィーちゃんの場合に、そんなボクの気持ち顔に出てたみたいで、

「安心してください。《DDナイト・ハウリング》の効果で特殊召喚したモンスターの攻守は0となり、破壊された場合に私は1000ダメージを受けます」

と、フィーちゃんは解説。

「ほんとう？ 良かったー」

ボクはほっと喜ぶ。

「ですが、効果は無効にされません。ステージ解放。開け、時空の扉あ。

「召喚条件はDDモンスター2体。私は《DDRリス》と《DDナイト・ハウリング》をリンクマーカーにセット。リンク召喚、目覚めろリンク2 《DDD深淵王ビルガメス》！」

フィーちゃんの場合に新たなDDDが降臨。しかもアレクサンダーの効果が無効になってないってことは。

「《DDD疾風王アレクサンダー》の効果を発動、墓地から《DDRリス》を蘇生し、効果で墓地の《DDナイト・ハウリング》を再び手札に戻します」

「げっ、また!? 強いよナイト・ハウリング！ 何でそれを毎回使いまわしちゃうの」

ボクの嘆きに返事がくることはなく、

「いきます、水姫」

フィーちゃんは改めていってから、

「ステージ解放。再び開け、時空の扉」

このターン2度目のリンク召喚。しかも、改めていったってことはもしかして。

「召喚条件は効果モンスター2体以上。私は《D D リリス》とリンク2《D D D 深淵王ビルガメス》をセット！ 契約を請けし我が友水姫の僕よ。光の癒しを触媒に、新たな王に覚醒せよ。リンク召喚、目覚めよりリンク3《D D D 救護王フローレンス》！」

フィールドに現れたのは、ボクの《アロマセラファイージャスミン》の特徴を強く残しつつも似て異なる女性型の悪魔。ジャスミンと見比べてみると仮面ライダージ○ウって番組のアナザーライダーに近い感じで、その攻撃力もスキルでいった通りジャスミンと同じ1800。

そして、ファイちゃんのスキルの意味が何となくわかった。

ファイちゃんは、ボクとのデュエルを利用して自分のフィールドで新しいフィールド・カードを生み出しちゃったんだ。アニメでよくあるカードの創造そのものの形で。

しかも、アロマの力を持つ王ってことは、絶対ライフ回復に関係する効果を持つてるはず。

「フローレンスの効果はまだ使いません。《地獄門の契約書》の効果を使用。デッキから《D D D 壊薙王アビス・ラグナロク》を手札に加えます。さらに墓地の《D D スワラル・スライム》の効果。このカードを墓地から除外する事で、手札のD D を特殊召喚できます。私は《D D D 壊薙王アビス・ラグナロク》を特殊召喚」

このモンスターも確か、前にみたファイちゃんのデュエルでも使ってたモンスター。攻撃力2200でレベルは8。実際に出されるとこれ恐ろしいよ。

「アビス・ラグナロクのモンスター効果。このカードの召喚・特殊召喚に成功した場合、墓地のD D D を1体蘇生します。私は《D D D 神託王ダルク》を呼び戻します」

うわ、これでさつき倒したアレクサンダーとダルクが両方とも場に戻ってきちゃった事になるんだ。きつついよ。

「続けてアビス・ラグナロクの2つ目のモンスター効果。自身以外のフィールドのD D モンスター1体をリリースして相手モンスター1体を除外します。私は《D D D 疾風王アレクサンダー》をリリースし

《アロマージュ―ベルガモット》を除外します」

「あつ」

ベルガモットを狙われた。ボクのデツキの攻めの要なのに。

しかも、アレクサンダーをリリースしちやつたから、これであいつを狙つて1000ダメージを与えることもできないじゃないか。

まあ、だけど。

アレクサンダーがいなくなったってことは、今度こそ次からファイちゃんはアレクサンダーを使つて展開はしてこな、……あ、ナイト・ハウリング。

この時点でボクはガクツてなつただけど。

「《DDD救護王フローレンス》のモンスター効果。1ターンに1度、私の場に契約書カードが2枚以上存在する場合に発動可能。私は2000ライフ回復します。さらに、私のライフが回復したことで第二の効果も発動。その回復したライフの数値以下の攻撃力を持つ墓地のDDモンスター1体をリンク先に特殊召喚します。私は《DD魔導賢者ゲイツ》を特殊召喚」

クワトロ LP800↓2800

ここでファイちゃん。やっぱり持ってたフローレンスの回復効果を使用。契約書で減つた分のライフが丸々回復されちやつた。

しかも、DDつて蘇生能力が凄く高いんだね。攻撃力の上限が2000以下だからアレクサンダーは来なかつたけど、また墓地からゲイツが。……あれ、ゲイツ？

「さらにフローレンスは、私のライフが回復する度に、次の相手ターン終了時まで自身の攻撃力を500アップさせ、DDモンスター1体に貫通効果を与えます。私はフローレンス自身に貫通効果を付与」

そのうえ、気づくとフローレンスの攻撃力はいまのジャスミンと同じ2300。さらに貫通効果持ちとボクのターンのときのジャスミンとほぼ同じ状態に。

《DDD救護王フローレンス》 攻撃力1800↓2300

「そして《戦神との不正契約書》の効果を使用。この効果は自分と相手のメインフェイズ毎に使用でき、そのターンのバトルフェイズ終了時

まで、私のDDモンスター1体の攻撃力を1000上げ、代わりに相手モンスター1体の攻撃力を1000ダウンさせます」

《DDD救護王フローレンス》 攻撃力2300↓3300

《アロマセラファイージャスミン》 攻撃力2300↓1300

しかも追い打ちに攻撃力吸収まで。えっと、この2体の攻撃力は同じだから、うわ。ちょうど2000も開いちゃった。

「最後に《DD魔導賢者ゲイツ》をリリースして《DDD疾風王アレクサンダー》を再び蘇生。総攻撃の準備は整いました」

「……」

なにこれ、ひどい。

現在ファイーちゃんはEXモンスターゾーンに《DDD救護王フローレンス》、メインモンスターゾーンにはダルク、アレクサンダー、アビス・ラグナロクの計4体。魔法・罠ゾーンには《戦神との不正契約書》《地獄門の契約書》《誤封の契約書》の3枚。つまり、フィールド魔法を除けば完全にフィールドにカードを隙間なく埋めちゃったのだ。しかもモンスターはみんな攻撃力2000以上。

加えて、

「ファイーちゃん。ナイト・ハウリングのとき、アレクサンダーは攻守が0になって破壊されたら1000ダメージだから大丈夫って言ったよね?」

「言いましたけど?」

「いま、アレクサンダー完全蘇生されてない?」

「バトル。《DDD疾風王アレクサンダー》で《アロマセラファイージャスミン》に攻撃します」

うわ、スルーされた。

しかも、口調はファイーちゃんでも、このひょうきんなノリ、これクーちゃんのキャラだね? やっぱりファイーちゃん、ちよつと見ない間に性格変わってない?

そんなボクのツツコミは声に出す間もなく、アレクサンダーが手に持った剣でジャスミンを斬りつける。

ただでさえアレクサンダーより攻撃力が低いのに、弱体化した状態

でもともに勝てるはずもなく、ジャスミンはアレクサンダーの剣撃を
まともに受けてしまった。

「だけど、破壊されることはなく、

「ボクのLPが相手より多い場合、このカードとリンク先の植物族は
戦闘では破壊されない」

「フォーチュンチュンだけでなくそちらも破壊耐性を持ってました
か。アビス・ラグナロクでこちらを除外するべきでした」

と、少し「失敗した」って顔に出すフィーちゃん。だけど、

水姫 LP 6500 ↓ 5300

と、ボクのライフが戦闘ダメージで減少したのを見て、

「確認ですが、水姫のライフが私より低ければ戦闘耐性はなくなる。
そういう効果と思って構いませんか？」

「う、うん」

ボクがうなずくと、

「分かりました。では破壊できるまで攻撃してみます」

直後、ダルクの目がキラッと光った気がした。

「《DDD神託王ダルク》で《アロマセラフィージャスミン》に攻撃」

そのダルクがジャスミンに攻撃を仕掛け、

水姫 LP 5300 ↓ 3800

ボクのライフが削れる。

「《DDD救護王フローレンス》で《アロマセラフィージャスミン》に
攻撃」

水姫 LP 3800 ↓ 1800

さらに削れる。

「《DDD壊薙王アビス・ラグナロク》で《アロマセラフィージャスマ
イン》に攻撃」

水姫 LP 1800 ↓ 900

そして、フィーちゃんのライフは2800。

アビス・ラグナロクの攻撃がジャスミンに届いたとき、ついにジャ
スミンは戦闘破壊されて墓地に送られちゃったんだ。

「だけど、ボクはすぐ場と手札から1枚ずつカードの効果を開始。」

「ジャスミンが破壊されたことで、《アロマガーデン》のもうひとつの効果を発動。アロマモンスターが破壊された場合に1000ライフ回復。さらに手札の《アロマージーマジヨラム》の効果も使用。ボクの植物族モンスターが戦闘破壊された時に、このカードを特殊召喚して500ライフ回復」

水姫 LP900↓1900↓2400

場にひとりのお姉さんが出現し、加えてボクのライフが再びガンガン回復していくのを確認してから、

「さらにマジヨラムのモンスター効果。ボクのライフが回復したとき、マジヨラムは場のアロマの数だけ相手の墓地からカードを除外する。いま、アロマはマジヨラム1体。ボクは《DD魔導賢者ゲイツ》を除外」

「わかりました」

言われるまま、フィーちゃんは墓地からゲイツを抜き取り、デュエルディスクから取り除く。

これで、ゲイツを介してDDDを完全蘇生するっていうボクの《ローンファイア・ブロッサム》みたいなコンボを封じることができた。

「私はこれでターンを終了します」

フィーちゃんはいった。なんとかこのターンも耐えることができた。

水姫

LP2400

手札1

《アロマガーデン》

□「《神の恵み》」「《セットカード》」

□「《No.49 秘鳥フォーチュンチュン（守備）》」「《アロマージーマジヨラム》」

「《DDD救護王フロレンス（クワトロ）》——□

「《DDD神託王ダルク》」「《DDD疾風王アレクサンダー》」「《DDD壊薙王アビス・ラグナロク》」

「《戦神との不正契約書》」「《地獄門の契約書》」「《誤封の契約書》」

クワトロ

LP2800

手札2

「ボクのターン、ドロー」

言いながら、ボクはカードを1枚引き、

「《No.49 秘鳥フォーチュンチュン》の効果。自分のスタンバイフェイズ毎にボクは500ライフ回復する。さらに、ボクのライフが回復したことで、マジヨラムの効果も発動。今度は《DDリリス》を除外して貰うよ」

「分かりました」

やった！ これで《DDリリス》も除外できた。

ゲイツも怖かったけど、この《DDリリス》も墓地にあると《DDナイト・ハウリング》を何度も何度も回収されちゃって辛かったんだよね。

それにしても。

蘇生とサルベージを駆使して、同じモンスターを何度も何度も酷使しながら展開していく。いま思ってたけど、DDって社会人を主人公にした漫画でよく出てくる社畜みたい。あと、ブラック企業？

それはともかく、いまボクの手札は《アロマポット》と2枚目の《アロマージーローズマリー》。そして伏せカードは《誤封の契約書》でも防がない必殺の1枚、《ご隠居の猛毒葉》！

《DDD救護王フロレンス》の回復効果は1ターンに1度だから、次のターンにフィーちゃんに契約書の効果で3000ダメージを受けてボクの勝ちだけど。

(まだ何かあるよね?)

となると、次のターンもフィーちゃんが動いてくるものと思ってデュエルを進めない。

「ボクは手札から《アロマージーローズマリー》を召喚。さらに《アロマガーデン》の効果で500ライフ回復。さらにボクのモンスターの攻守を500上げて、ローズマリーのモンスター効果。《DDD神託

王ダルク』を守備表示に」

一応、ダルクを守備表示にはしたけど。ボクが狙うのはフローレンスとアビス・ラグナロク。いくよ！

「バトル！」

「の前に、『戦神との不正契約書』の効果を使用。フローレンスの攻撃力を1000アップし、マジヨラムの攻撃力を1000下げます」

《DDD救護王フローレンス》 攻撃力2300↓3300

《アロマージーマジヨラム》 攻撃力2500↓1500

あ、忘れてた。そういえばあのカードは相手のメインフェイズにも使えるって言ってたっけ。

ローズマリーでフローレンスを攻撃しても今じゃ返り討ちにあうだけ。となるとこのターン破壊しておくのは、

「《アロマージーローズマリー》で、『DDD壊薙王アビス・ラグナロク』を攻撃」

ローズマリーの攻撃力は、『アロマガーデン』の効果を受けて2300。対してアビス・ラグナロクは攻撃力2200、ギリギリだけど戦闘破壊可能。

「手札から『DDプラウド・パラディン』の効果を使用。私のモンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを墓地に送ります」

と、フィーちゃんは手札を1枚墓地に送ろうとしたけど、

「悪いけど、『アロマージーローズマリー』のモンスター効果。ボクのライフが相手より多い場合、ローズマリーが場にいる限りボクの植物族モンスターが攻撃するとき、フィーちゃんはモンスター効果を使用できないよ」

「ッ」

ピクツとフィーちゃんの手が止まる。その際に、アビス・ラグナロクは破壊されて、

フィーア LP2800↓2700

フィーちゃんのライフが僅かに削られる。

「『DDD壊薙王アビス・ラグナロク』はPモンスターですので、墓地には行かずEXデッキに送られます」

うん。それも知ってた。だから狙ったんだよ、蘇生と違ってこっちだと再利用は難しそうだもんね。

「ボクはこれでターン終了」

そういつてボクはターンを明け渡した。

水姫

LP3400

手札2

「《アロマガーデン》」

□「《神の恵み》」「《セットカード》」

「《アロマージュローズマリー》」「《No. 49 秘鳥フォーチュン

チュン（守備）》」「《アロマージュマジヨラム》」

「《DDD救護王フロレンス（クワトロ）》」――□

「《DDD神託王ダルク》」「《DDD疾風王アレクサンダー》」□

「《戦神との不正契約書》」「《地獄門の契約書》」「《誤封の契約書》」

クワトロ

LP2700

手札2

「私のターンですね」

フィーちゃんはいった。だけど、ドロローする前に、

「水姫」

「なに？」

訊ね返すと、

「あなたは大きなミスをしました。先ほどの戦闘、ローズマリーで狙ったモンスターがもしダルクだったら、私はデュエルに負けていました」

「え？」

「ドロロー。そしてスタンバイフェイズ時に契約書カード3枚の効果。私は合計3000のダメージを受けます」

このままいくと、フィーちゃんは3000ダメージを受けてライフは0に、

「しかし《DDD神託王ダルク》は、自身が場に存在する限り、私にダ

メージを与える効果は私のライフを回復させる効果となります」
「あつ」

そういうことだったんだ。

クワトロ LP2700↓3700↓4700↓5700

一気に回復していくフィーちゃんのライフ。しかも、

「この回復は、1000ポイント回復する効果が3回発動したものですので、《DDD救護王フローレンス》の効果が3回、さらにメインフェイズ時にフローレンス自身の効果も使い2000回復し、さらにもう1回。計4回フローレンスの効果を使用します。フローレンスのモンスター効果。このカードは自分のライフが回復する度に、次の相手ターン終了時まで攻撃力を500アップし、さらにDDモンスター1体に貫通能力を付与」

クワトロ LP5700↓7700

この一連の流れで、最終的にフィーちゃんのライフは7700まで回復し、さらに、

「《戦神との不正契約書》の効果。フローレンスの攻撃力をさらに1000上げ、逆にローズマリーの攻撃力を1000下げます」

《DDD救護王フローレンス》 攻撃力1800↓2300↓2800
0↓3300↓3800↓4800

《アロマージュローズマリー》 攻撃力2300↓1300

フローレンスの攻撃力は最終的に4800。さらにローズマリーの攻撃力は1300にまで減少。

「もちろん、フローレンスの貫通付与の効果は、現在フィールドにいるすべてのモンスターにかかけました。さらに《地獄門の契約書》の効果で、デッキから《DDユニコーン》を手札に加えます」

この《DDユニコーン》の効果はボクは知らないけど、わざわざサーチしたんだからロクなカードのはずがないよね。

「バトル! 《DDD救護王フローレンス》で《No.49 秘鳥フォーチュンチュン》に攻撃。貫通ダメージは3400です」

それボクのライフがちょうど0になる数字だよ。でも、ボクは伏せカードを発動し、

「速攻魔法《ご隠居の猛毒薬》。ボクのライフを1200回復して《アロマジューローズマリー》のモンスター効果！ フローレンスを守備表示にするよ」

これで大ダメージは免れるはず。けど、フィーちゃんはいったんだ。

「リンクモンスターに守備表示は存在しません」

「そうだった！」

じゃあ、どうしよう。どのモンスターを守備表示にすればいいんだろう。

「ろ、ローズマリーを守備表示にしてフォーチュンチュンと一緒に耐えれば」

「いま私のモンスターはすべて貫通持ちです」

「そうだった！」

どうしよう。どうしよう。どうしよう。どのモンスターを守備表示にすればいいんだろう。

「だったら、《DDD神託王ダルク》を守備表示に」

「構いません。ですが、この攻撃の後《DDD疾風王アレクサンダー》で攻撃力1300となったローズマリーに攻撃を仕掛けます」

「え？」

えっと、アレクサンダーの攻撃力は2500だから、差分ダメージは1200で。

「あれ？ ボク積んでる？」

《ご隠居の猛毒薬》で回復した分がまた丸々ジャストキルされちゃうんだけど。

「少なくとも、水姫が手札誘発を握ってないのであれば恐らく」

さつきも言ったけど、ボクの最後の手札は《アロマポット》。ただのリバースモンスターなんだ。

水姫 LP3400→4600→1200→0

結局。

色々と模索したけど正解は見つからなくて、フローレンスとアレクサンダーの攻撃でボクのライフは0に。

(ちえー。負けちゃったよー)

なんて思ったのも束の間、ソリッドビジョンが消えると同時に突如心臓が発作を起こして、

「うっ」

って、胸を掴みながらボクの意識は闇に閉じちゃったんだ。

そして。

気づいたとき、ボクの視界に映ったのは見慣れた白い天井。

ボクは病室のベッドで寝ていたんだ。

「あれ、ボク」

そっか。また、倒れちゃったんだ。ボクがそれに気づくのに、さほど時間はかからなかった。

だって、いつものことだから。

それでも最近はカードのおかげで、いきなり倒れるってことは無くなったはずなのに。なんてちよっぴり憂鬱な気分に浸っていると、

「水姫？」

って、ボクは呼びかけられます。

(えっ?)

と思い横をみると、病室にはフィーちゃんがひとり、とても心痛な顔でボクを見てたんだ。で、ボクと目があうと、ちよっただけ嬉しそうに、

「気が付きましたか、水姫」

「フィーちゃん」

どうしてここに。

「すみませんでした」

と、フィーちゃんは頭を下げた。

「水姫がフィールで体調を保つてたことを忘れたつもりはなかったのですが、水姫のフィールが全損したらフォーチュンチュンの回復も一旦ストップすることを忘れてました」

「えっ？ あ」

言われて、やっとボクは直前の状況を思い出した。

ボクはデュエルで負けたんだ。そして、デュエルにフィールを使っちゃったせいで、フィーちゃんに負けてボクのフィールは一旦全損。はしやぎ過ぎた分が一気に心臓にきて、そのまま気絶しちゃったみたい。

「ううん」

ボクは首を横に振って、

「フィールを全く使わずデュエルすれば、こんな事はなかったんだもん。ボクの自業自得だよ。それよりごめんね、せつかくの転校初日なのに」

「私のことはいいんです」

フィーちゃんはいって、

「それより、体調はどうですか？ 一応、水姫のフィールも少しは回復してるようですので、フォーチュンチュンの回復効果は起動してると思うのですが」

「うん。思ったより平気」

言いながらボクは起き上がろうとして、やめた。

ボクの腕に点滴が刺さってるのに気づいたから、大丈夫だとは思いますが看護師さんが来るのを待ってからの方がいいかなって。けど、いつもより目覚めた直後の体調がいいのは本当。ちよつとだけ気分は悪いけど、吐き戻すほどじゃない。

「フィーちゃん、いまの時間は？」

ボクが訊ねると、フィーちゃんのかわりに病室の外から、

「いまは午後3時を過ぎた頃だよっ」

って、聞いてて元気を貰えるような快活な声と共にひとりの看護師が入ってきた。ボクはその顔を見てすぐ、ぱつと笑顔で、

「あ、優希さん」

「水姫ちゃん。気が付いたんだね、良かった良かった」

その看護師はボクのおでこを触ると、「ん、よし」と小さく呟くも、「もう大丈夫だと思うけど、一回お熱測ろっか？」

なんていって、体温計をボクの腋に挟んだ。

この看護師の名前は神谷 USUALLY 2でも登場 優希さん。ボクがよく入院する病院

に昔から勤務してる看護師さんで、ボクが物心つく前からお世話になってる人。

年齢はもう40近いんじゃないかな？ ボクのお母さんよりちよつと年上って聞いた気がする。だけど、昔から笑顔が可愛くて元気で、お母さんよりずっと見た目若々しいんだ。実は既婚者で、ボクが生まれる前から本当の苗字は別にあるらしいけど、病院ではいまま旧姓の神谷で通してるって聞いたことがある。

「良かったね。これなら明後日には退院できるよ」

測り終えた体温計の結果を見せて、優希さんはいった。倒れた直後は体温にも影響があるんだけど、今回は殆ど平熱に戻っていた。だけど、

「明日の朝じゃ駄目？ セっかくファイ……クーちゃんが転校してきたんだから、早く学校行きたいんだけど」

ボクは我儘いうけど、

「駄目。一応大事をとって明日はいくつか検査するから」

「えー」

「うん、気持ち分かる。すつごく分かるけど、早く退院しすぎたら逆にお友達が心配するでしょ、ね？」

って、優希さんはファイちゃんに一回ウイソク。

「水姫。早く良くなってください。私たちは待ってますから」

ファイちゃんはいった。

「うん」

ボクはうなづく。ズルいよ、優希さん。ファイちゃんを使われたらこれ以上抵抗できないじゃん。

「それと」

ファイちゃんは続けて、

「お昼に、水姫のデュエルディスクに旗枷さんという方から連絡がきまして」

「紫水ちゃんから？」

「授業が終わったら、クラスの方全員でお見舞いに来るそうです」

「そっか。って、全員!？」

思えば、ボクが倒れたり入院したとき、毎回じゃないけど紫水ちゃんがあみんなを連れてお見舞いに来てくれたっけ。でも、全員つていうのは滅多にない。

ここ数日は調子が良い日が続いてたから、もしかしてみんなびつくりしちやったのかも。

「それで水姫。ひとつお願いがあるんですけど」「なに?」

ボクが訊ねると、フィーちゃんはこういったんだ。

「電話に出たとき、私もショックで気が動転してて、素の態度で電話に出てしまいました。なので、クワトロ・ベルが演技だったってバレないように協力してくれませんか?」

普段、無骨で天然なフィーちゃんが鬼気迫った様子でいうものだから。

ボクはつい、病室で大笑いしちやったんだ。

V I E R 2ーファイアー外伝：友達

ボクの名前は藤稔^{ふじみのり} 水姫^{みずき}。陽光学園小学部の六年生。

そして、藤稔唯一のかすが様ライク勢らしいよ。

「マイベストベストフレンド水姫ちゃん、学校の給食ってベリーデリースャスだねー」

そういつてなぜか白一色の給食を食べるファイーちゃんをみて、ボクはいったんだ。

「先生。クーちゃんが学校に練乳を持ち込んでます」

この日、ボクは初めて知ったんだ。

世の中には給食のプレートに練乳をたっぷりかけて食べる子がいるんだって。

「やっぱり、転校生は変人だったわ」

あ、紫水ちゃんが頭を抱えてる。

ファイーちゃんの転入に、ひとり「変人が増えなければいいけど」って警戒してた、クラス委員長で生徒会長の旗^{はたかせ} 紫水^{しずい}ちゃん。残念ながら彼女の淡い希望は最悪な形で裏切られちゃったんだ。びつくりだね、ボクもあんなキャラでやってくるとは思わなかったもん。

「……」

先生は、死んだ目でファイーちゃんを見てから、

「はい。先生は何も見ません。みんなも何も見てません。イイネ？」

「アツハイ」

って、責任放棄。……って責任放棄!! しかも、みんなも見て見ぬ振りを決めちやっみたい。

これは。せめてボクだけは友達としてファイーちゃんに常識を教えないと。ボクは小声で、

「クーちゃん。学校に調味料持ってきたら駄目だよ」

「どーして? でも美味しいよー」

ファイーちゃんはフォークでおかずを刺し、フォンデュばりにしっかりと練乳を絡めてから、

「はい」

って、ボクの口に押し込

「やめなさいー!」

まれる寸前で、紫水ちゃんが介入。

「水姫は体が弱いんだから、お腹を壊したらどうするの?」

「大丈夫だよ。スターゲイザーパイと比べたら」

「あれを比較対象にしないで」

紫水ちゃんが疲れ切った顔で溜息一回。その瞬間、

「えい♪」

その開いた口にフィーちゃん、練乳フォンデュを押し込んでしまった。

「むぐ!?!」

驚く紫水ちゃんにフィーちゃんは、

「どう? 美味しいでしょ」

笑顔でいうも、紫水ちゃんは顔を青くして、

「~~~~~」

声なき声を。あ、やっぱり不味いんだ。一方フィーちゃんはきよとんととして、

「マイベストベストベストフレンド水姫ちゃん、紫水ちゃんどうしちゃったの?」

なんて訊ねる始末。しかもベストの数が1個増えてない?

「ねえ。マイベストベストベストフレンド水姫ちゃん?」

やっぱり増えてるーっ!

直後、

「クワートロー!」

紫水ちゃんの怒声がクラス中に響き渡ったんだ。

ボクたちの学校では、給食の時間のあとに掃除の時間があるんだ。残念だけどフィーちゃんとは担当の区域が別になっちゃったけど、この日廊下を掃き掃除してた所、同じ担当区域の紫水ちゃんが、

「ねえ水姫。あの子、本当に何なの?」

「ボクも分からない」

今日だって、甘い物好きがぶっ飛んだレベルなのは知ってたけど、そんなボクでも驚いたレベルだったもん。

あ、そうそう。フィーちゃんが持ち込んだ練乳は、あの後紫水ちゃんが没収して先生の下に預けられたよ。うん、さすがにそうなるよね？

「分からないって、水姫だけが頼りなのよ？ あの子の手綱を握れるの」

「ボクには紫水ちゃんみたいに怒れないよ」

あんな怒声で、各家庭のお母さんみたいなガミガミ声とか特に。でも、

「そうじゃなくて」

って、紫水ちゃんはいったんだ。

「あの子の本性を知ってるのが水姫だけなのよ」

「本性って」

まるで……。ボクは言いかけた口を閉じるけど、

「あの子、意識してぶっ飛んでひょうきんな子を演じてるんですよ」

紫水ちゃん言葉にゲツてなる。これはやばい！

「素だよ、あの子のは」

「顔に出てるわよ」

「えっ、嘘!？」

ボクが驚くと、

「嘘よ」

紫水ちゃんはいったんだ。

「えっ?..」

「でも、誘導尋問には成功したわ。今度は本当に顔に出たわよ」

あ、あちゃあ。

「あの時のクワトロが本当の彼女なんですよ？ 転校初日の、水姫が倒れた日の」

「うん」

どうしようもないので、ボクはうなずく。

紫水ちゃんのいう通り、フィーちゃんの転校初日。ボクはフィール込みでデュエルVERI参照をして、一時的なフィール全損が原因で徐々に倒れたんだ。

その時、フィーちゃんと一緒に病院までついて来てくれたんだけど、そんなフィーちゃんと連絡を取る為、紫水ちゃんがボクのデュエルディスクに電話をかけたらしいんだけど、フィーちゃん曰く「ショックで気が動転してたせいで、素の態度で電話に出た」らしいんだ。

その時は何とかボクも協力して、みんなを相手になんとか誤魔化したんだけど、やっぱり紫水ちゃんには違和感を持たれちゃってたみたい。

「その転校初日にも言ったけど、私どっかで見たことがある気がするのよ」

紫水ちゃんはいって、

「もう一度聞いわよ。水姫、あの子は何者？」

「そんな」

ボクは一回口ごもってから、

「フィーちゃんは普通の女の子だよ」

「フィーちゃん？」

「あ」

しまった。

「そういえば、前にも水姫、あの子をフィーとか呼んでたわよね？」

「うう……」

ボクは、もう何も言わないようにする。これ以上口を動かせば、紫水ちゃんの誘導に酷いほど引っかけちゃうもん。

「もしかして」

すると紫水ちゃんはいったんだ。

「あの子の本名、フィーアだったりする？」

「!？」

なんでその名前を。ボクが口を開かずとも驚いちやった所、

「えっ、嘘、本当なの？」

って今度は紫水ちゃんまで驚いて、むしろ驚きすぎてかけてた眼鏡が半分ずれ落ちながら、

「まさかフルネーム、ファイア・ヴィルベルヴィントとか言わないでしようね」

「……」

ボクは無言のまま、目を激しく泳がせちゃった。すると、

「半分冗談。いえ、先に最悪のケースを潰したつもりだったのに」

紫水ちゃんは、すっごく顔を青くしちやっただ。

「なんで、どうしてこんな所に処分人スローターがいるのよ。水姫、あなた、どこであれと知り合ったの？」

「どこって」

フィール・カードのこと、言っちゃってもいいのかな？ でも、
M I S S I O N I 8 参照
ファイちゃんに止められてるし。

紫水ちゃんは、私の前に立つと、ボクの手をとって真剣な眼差しでいった。

「水姫！ 教えて、もしかしたらあなたの命狙われてるかもしれないのよ？」

「それだけはないよ」

ボクは、ここだけは真剣な目を返し、言い返す。

「むしろフィーちゃんには、二度も命を救って貰ってるんだ。ううん、転校初日も考えたら三度だよ」

「水姫は、あの子がどれだけ危険か知らないから」

「知ってるよ」

ボクは、自分の恩人で親友をそこまで言われたのが悔しくて、つい言っちゃったんだ。

「ボクもフィーちゃんがお仕事する現場を見ちゃって、火達磨になったことあるから」

「えっ」

ボクが、何かの事件に巻き込まれて火傷で倒れた過去があるのは紫水ちゃんも知ってるはず。その時の裏側を知ってさらに驚く彼女にボクは続けて、

「でも、一度目助けて貰ったときにくれたフィール・カードのおかげで傷跡残さず助かったし、そのカードのおかげで、いまボク健康なんだ。それに、あの時のことはもうとつくに謝って貰ってるよ」
「っ」

紫水ちゃんから、葛藤が顔に漏れ吐息に漏れ、そつとボクから離れる。そして、ボクに背を向け、

「水姫。今日の放課後、クワトロをフィーアとして屋上に呼んでくれる？ 私はそれまでに先生から利用許可を取ってくるから」

つて言い残してから、凄く近寄りがたい雰囲気を残して紫水ちゃんは掃除を再開する。

ボクは、

(やっちゃったー)

と、フィーちゃんバレした事に一回後悔してから、

(あ、本当にやっちゃった!?)

ボクがフィール・カードを持つてる事もばらしちゃった事に気づいて、二つ分あわわと顔を青くしたんだ。

掃除の後のお昼休み。

「つてことで、ごめんクーちゃん」

ボクは人気のない校舎裏で、フィーちゃんに両手をあわせて謝った。

あれから掃除が終わり、ボクはすぐフィーちゃんを探して校舎中を走りまわった。そして、いまにもクラスの男女混合でドッジボールをしに校庭に出かけたメンバーの中にフィーちゃんを見つけ、用事があることを伝え、彼女を連れだしていまに至る。

「いずれ起こる事です。謝らないでください、水姫」

フィーちゃんは、クーちゃんではなく本来の顔でボクにいった。

「それより、放課後に屋上。旗枷さんはそう言ったのですね」

フィーちゃんは、紫水ちゃんに対してクーちゃん時には紫水ちゃん、本来の顔では旗枷さんと呼び方を変えている。

「うん」

ボクはうなずき、

「どうしよう、フィーちゃん。フィール・カードのこともばれちゃったし」

すると、

「大丈夫です。彼女は悪人ではありません。少なくとも今後、水姫に悪意をもつて接することは無いと思います」

「それは、そうだと思うけど」

「むしろクラスの中で、一番安心して水姫を任せられる相手です」

フィーちゃんは断言した。確かにボクの中でもクラスで2番目に親しい（フィーちゃんの転校前は1番）人なのは間違いないけど、まさかフィーちゃんが彼女をそこまで信頼してたなんて知らなくて、「え?」

ってボクは驚く。

「とりあえず、放課後ひとつ用事を済ませたらすぐ向かうと旗柳さんに伝えてください」

「うん、わかったよ」

「それと」

フィーちゃんは続けて、

「今日、水姫は放課後まで旗柳さんの傍についてください」

「え? どうして?」

「そのほうが旗柳さんも安心すると思うからです。同時に、水姫や学校生活を巡って彼女と敵対する気はないという意思表示も兼ねました」

そういつて、最後にフィーちゃんはいったのだった。

「今日ここで話した内容は全て伝えても構いません」

それから数分後。

「で、その用事というものは何も聞いてないの?」

紫水ちゃんに追及され、ボクは、

「あ。えっと、ごめん」

って、謝った。

あれからすぐ、フィーちゃんはドッジボールに混ざりに校庭に戻っ

てしまったので、言いつけ通り今度は紫水ちゃんを探しに再び校舎内を走り回った。そして、ちょうど職員室から一礼して出ていく紫水ちゃんを見つけ、フィーちゃんからの返事を伝えようとした所、紫水ちゃんの要望で人目を避けるために校舎裏にUターン。

改めて紫水ちゃんに伝えた所、真つ先に聞き忘れてしまった所を指摘されてしまったんだ。

「何かあるわね」

紫水ちゃんは、腕を組んでいった。

「え?」

「その用事というもので、何か仕掛けてくるって言ったの。もし水姫が聞いてたら、真実を話すとは思わないけど、それでも水姫の顔色や傾向で何か判断できると思ったのだけど」

ちなみに屋上の使用許可はちゃんと取れたみたい。まさに、さつき職員室にいたのがその要件で、紫水ちゃんは掃除が終わってすぐ行動に移ってくれてたんだ。

でも、

「本当に、フィーちゃんをまるで信じてないんだね」

ボクにはそれが辛かった。どうしても、ボクやフィーちゃんの気持ち伝わってくれないから。

ボクが紫水ちゃんを裏切るとは端から思っていない様子なのは、信頼を感じて嬉しいんだけどね。

「あのね」

紫水ちゃんは、困った顔でいった。

「水姫も一度被害に遭ったなら分かるでしょ。この辺りで最も危険な元殺し屋のひとりなのよ。あれは」

「元なのも知ってるんだ」

「ま、まあ」

まるで「あ、いけない」って言いたげな顔を見せる紫水ちゃん。もしかして、

(紫水ちゃんも、そっち側?)

ボクはフィーちゃんたちの世界をまるで知らないから、よくは分か

らないし知りすぎないようにしてるけど。

でも、もしそうなら。そこまでフィーちゃんを知ってるから。紫水ちゃんだって、もうフィーちゃんがそんな悪い子じゃないってのも知ってるはずなんだ。

「だったら分かるでしょー！」

ボクは、ちよつとだけ強い口調でいった。だって、いつまでも親友を信じてくれなくて仏の顔でいれるほど器大きくないもん。

「間違いなくボクは命を狙われてないし、紫水ちゃんと喧嘩したくないっていうのも本当だって。じゃなかったら今ごろボクたち纏めて火の中だよ」

すると、

「私だって、そう思いたいわよ」

紫水ちゃんはいったんだ。

「でも、私まで信じたせいで水姫に何かあったら後悔してもしきれないわ」

「あ」

ボクはもう怒れなかった。

だって、ボクのために石橋を叩いて渡るように警戒してるんだって気づいちゃったから。

放課後。

「やつほー。紫水ちゃん、マイベストベストベストベストフレンド水姫ちゃん。待ったー？」

一足先にふたり屋上で待って数分。思ったより早くフィーちゃんは姿を現した。クーちゃんモードだった。そして、またベストが1回増えてたんだ。

「用事は済んだの、フィーちゃん」

訊ねると、フィーちゃんは懐から練乳のチューブを出して、
「うん、ほら」

って。まるでゼリーか何かのように直飲み。そういえば、フィーちゃんの練乳、先生が預かってたんだっけ。ってことはもしかして。

「用事って、まさか」

何ともいえない顔で紫水ちゃんが訊ねると、フィーちゃんはピースサインして、

「うん。ちゃんと返して貰えたよ、ぶい」

って、満面の笑みを見せるんだ。もちろん、ボクたちは反対にこれだけで疲れてぐったりしそうだよ。

紫水ちゃんは、一転して覇気がない声で、

「本題に入るわ」

「どしたのー？ 元気ないぞー」

「誰のせいよー！」

元気を絞り出して紫水ちゃんが怒鳴る。でも、おかげである程度気力を取り戻したみたいで、

「フィーア・ヴィルベルヴィント。あなたはどうして、この学校に転校してきたの。ターゲットは誰？」

「どうしてって、ジャパンでは学校に行くのは義務教育じゃないのー？」

本名で呼ばれても動揺しないで、どこまでもひょうきんにクーちゃんモードを続けるフィーちゃん。

「答えなさい、処分人」

「だから答えてるってばー。ジャパンのルールだから学校に来たんだってばー」

「ならターゲットは」

「いないよー。お仕事がないから学校来てるんだもん」

間違いなく会話が成立してないよね、これ？

「分かったわ」

紫水ちゃんは対話を諦めると、懐から何やら小さなケースを取り出したんだ。そして、中から縦長の小さな紙を一枚出すと、ダーツのようにフィーちゃんに投げる。

もしかして、これ名刺？

「なに？」

フィーちゃんは投げられた紙をキャッチして書かれてる文字を確

認。するとすぐ、

「あーなるほど。これなら警戒して当然だよー」

って、フィーちゃんはいったんだ。

一体何が書かれてたんだろってボクが思っていると、紫水ちゃんがデュエルディスクを構え、いったんだ。

「改めて自己紹介するわね。私はNLT所属、はたかせ旗枷 しすい紫水です」

「NLT?」

ボクが小声で訊ねると、

「警察機関と密接に連携している名小屋近辺の治安維持組織よ」

「け、警察!」

ボクは心臓が止まりそうなくらい驚いちゃった。警察と繋がってるって聞くと、それだけでとつても偉い人に聞こえるよね?」

紫水ちゃんは続けて、

「クワトロ・ベル。いいえ、フィーア。いまから、あなたにデュエルで取り調べを行います」

「えー? 嫌だ」

まさかの拒否?!

「拒否の場合、校内で処分人として活動していたと見なします」

「だからー。それはさっき否定したよねー? それに、デュエルで取り調べする必要ないよね? 普通でいいよねー?」

「言い直すわ。デュエルであなたのフィールを全損してから、私の圧倒的優位な状況で取り調べを行います」

すると、

「じゃあ。勝ったら逆に私が交渉するけどいいーい?」

って、フィーちゃん。

「分かりました」

紫水ちゃんはどうなずいた。

直後、フィーちゃんの髪留めに隠した指輪が光ると、上空にデュエルディスクが出現。

フィーちゃんはそれを装着すると、

「デュエル!」 「デュエル!」

ふたりは、ほぼ同時に叫んだんだ。

クワトロ

LP 4000

手札 4

□ □ □ □

□ □ □ □

□ □ □ □

□ □ □ □

□ □ □ □

紫水

LP 4000

手札 4

まさか、こんな形でふたりのデュエルを見る羽目になるなんて。

ボクとしては、どっちも恩人で親友だから、ちよつと複雑な気分。

「先攻は貰ったよ。私のターン」

先攻はフィーちゃん。クーちゃんモードのままオーバー気味に最初の手札4枚を引くと、

「手札の《DDスワラル・スライム》の効果。このカードは手札のDDと融合カードなしで融合できるよ。私は《DDスワラル・スライム》と《DDウィッチ》を融合ー」

あれ？ いつもの《地獄門の契約書》が来ない。あのカードを初手から引いてると、手札アドバンテージが安定するんだけど。

フィーちゃんでも最初に手札にあれを引いてないときがあるんだ。

「未来を操る魔女よ。神秘の渦とひとつになって、新たな王の触媒になつちやえ。融合召喚！ 目覚めよレベル6 《DDD烈火王テムジン》！」

今回召喚されたのはダルクじゃなくてテムジン。こっちは打点はそこまでじゃないんだけど、展開力が跳ね上がるんだね。

「ちゃんと、こっちのデッキできたのね」

DDモンスターをみて、紫水ちゃんがいった。そういえば、フィーちゃんは基本校内でデュエルするときには古代の機械デツキなんだっけ。あっちもあっちで《歯車街》から《古代の機械熱核竜》がぽんと出てきて強いんだけどね。

フィーちゃんはえへんと笑って、

「だってアンティークで行ったら絶対怒るでしょ？ その辺はちゃんと分かってるよー。ぶいっ」

と、ピースサイン。

「つとと、まだ私のトウワアターンだったね」

「いちいちふざけないで」

「そうはいうけど、ふざけるのって結構大変なんだぞー」

「ならしないで」

「上からの指示だから無理ー。ステージ解放。Shall We Dance? 召喚条件はDDモンスター1体。私は《DDD烈火王テムジン》をリンクマーカーにセット」

なんか、突然変なBGMアインスのデュエル参照が流れだした!?

さらにフィーちゃんは、床下に出現したリンクマーカーの上で踊りだし、そのうち真後ろのリンクマーカーにテムジンのカードをダーツみたいに投げて搭載。

「リイリンクSHO-KAN! 目覚めよ《DD魔導賢者ゲイツ》!」

すっごいノリノリで、いつものゲイツをフィーちゃんは召喚。

「なにあれ」

紫水ちゃんが呆れる中。

「続けて、手札から《DDナイト・ハウリング》を召喚」

「うわっ」

今度はボクが反応。この前のデュエル参照で、ナイト・ハウリングには結構嫌な思いをしてるんだよね。

「このカードの召喚成功時、墓地のDDモンスター1体を特殊召喚。蘇れ《DDウィッチ》!」

さらに、墓地から悪魔の魔女が出現すると、

「いっくよー。私はレベル4《DDウィッチ》にレベル3《DDナイト・

ハウリング』をチューニング。次元の扉よ、疾風の速さを触媒に新たな王を生み出しちゃえ。シンクロ召喚！ 目覚めよレベル7《DDD疾風王アレクサンダー》！」

「げっ」

再びボクが反応。テムジンにアレクサンダー。蘇生効果持ちのDDがダブルできちゃった。といっても、いまテムジンは墓地だけだ。

「《DD魔導賢者ゲイツ》をリリースして効果発動。《DDD烈火王テムジン》を特殊召喚」

だよな。

「さらにアレクサンダーの効果。フィールドにDDが召喚・特殊召喚された場合に、墓地からレベル4以下のDDを特殊召喚。私はこれで丁度レベル4の《DDウィッチ》を蘇生するよー」

再び墓地から舞い戻る悪魔の魔女。

「《DDウィッチ》モンスター効果。このカードの特殊召喚に成功した場合、手札のDDを1枚墓地に送って、デッキからカードを1枚ドロ。私は《DDRリス》を墓地に送ってカードをドロするよー。さらにウィッチのもうひとつの効果。私の場からウィッチ以外のDDをリリースして、墓地からレベル4以下のDDを特殊召喚。私はアレクサンダーを墓地に送って《DDRリス》を特殊召喚。リスの効果でナイト・ハウリングを回収」

「え？ どうしてアレクサンダーをリリースしたの？」

ボクが疑問を口にする、紫水ちゃんがゾツとした顔で。

「《DDウィッチ》と《DDRリス》のレベルは共に4。あとは分かるわよね？」

「え？ あ!?!」

嘘、もしかして。

「ファイアの奴。先攻で融合・シンクロ・エクシーズを1回ずつ顔出しさせる気よ。場に揃えるまではいかないようだけど」

紫水ちゃんがいうと、ファイちゃんは。

「ノンノン」

って、わざわざ指を振って、いったんだ。

「先にいうとねー。いまフィールドにいる《DDD烈火王テムジン》は、場にDDが特殊召喚された場合に、さらに墓地のDDを特殊召喚するんだよ」

「え」

一瞬、紫水ちゃんが硬直する中、

「いっくよー。私はレベル4の《DDウィッチ》と《DDRリス》でオーバーレイ！ 2体の悪魔族モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

フィーちゃんの足元に銀河の渦が出現し、2体のモンスターが靈魂となつて取り込まれ、

「次元の渦よ、押し寄せる波を触媒に、この世を統べる王を生み出しちやえ。エクシーズ召喚！ ランク4 《DDD怒濤王シーザー》！」

ボクも初めて見る、フィーちゃんのXモンスターが姿を現して、

「そして、さっき言ったテムジンの効果。墓地のアレクサンダーを特殊召喚。これで私は、融合・シンクロ・エクシーズを全部場に揃えたよ。イエーイ、イツツ、ア、エンターなんか！」

って、フィーちゃんはクーちゃんモードでハイテンションにいうけど、

「嘘でしょ。ただ使うだけじゃなくて、全部フィールドに揃えてくるなんて」

「凄い」

しかも、モンスターゾーンが2つ少ないスピードデュエルのルールなのに。

紫水ちゃんとボクは、フィーちゃんの初手に愕然としていた。

「さらに魔法カード《DD連結システム》を発動。このカードは私の場に融合・シンクロ・エクシーズのDDDモンスターが全て存在する場合に、デッキからカードを2枚ドローできるよ」

本当にさらに、フィーちゃんはこの盤面を使って手札を増やし、

「カードを2枚セットしてターン終了」

やっつと、その初手を終えた。

クワトロ

LP4000

手札1

「《セットカード》」「《セットカード》」□

「《DDD疾風王アレクサンダー》」「《DDD烈火王テムジン》」□

「《DDD怒濤王シーザー（クワトロ）》」―□

□□□□

□□□□

紫水

LP4000

手札4

「私のターンね。ドロー」

カードを引く紫水ちゃんに、ボクは、

「大丈夫なの？」

って聞いちゃった。どちらかに負けて欲しいって思ったわけじゃないけど、紫水ちゃんが何もできず一方的に終わるのもやっぱり辛いから。

「やるしかないわよ」

紫水ちゃんはいった。

「幸い、アレクサンダーとテムジンの効果は一度見てるわ。他に効果がなければ警戒は2枚の伏せカードとシーザーに絞れるから、希望的観測込みならまだ何とかなる。幸い、ファイアの手札はすでに《DDナイト・ハウリング》1枚しか握ってない。ここを突破さえすれば十分勝利可能よ」

確かに。ボクの知ってる限りアレクサンダーとテムジンにこれ以上の効果はなかったはず。少なくとも相手を妨害する効果があったら、ボクとのデュエルでも使ってたはずなんだから。

「私は魔法カード《ジェムナイト・フュージョン》を発動」

まず紫水ちゃんは、彼女が使うテーマ専用の融合カードを使用。

「私は手札から《ジェムナイト・ラピス》と《ジェムナイト・ラズリー》を融合するわ。神秘の力秘めし碧き石よ。いまこそ、その瑠璃色の輝

きを解放せよ。融合召喚！ レベル5 《ジェムナイトレディ・ラピスラズリ》！」

出現したのは、民族衣装を着た少女のようなジェムナイトモンスター。

「墓地に送られたラズリーの効果。墓地の通常モンスターを手札に戻す。私はこれでラピスを手札に加えるわ」

さらに紫水ちゃんは融合で一気に消費した手札を少しだけ回収し、「ラピスラズリのモンスター効果。1ターンに1度、デッキ・エクストラデッキからジェムナイトを1体墓地に送り、フィールドの特殊召喚されたモンスターの×500ダメージを相手に与える。いま、フィールドに存在する特殊召喚されたモンスターは全部で4体」

「ええっ？ もしかして両方のフィールドからカウント？」

驚くファイーちゃんに、

「そうよ。つまり私は《ジェムナイトレディ・オパール》を墓地に送り、2000ポイントのダメージを、ファイーアあなたに与えるわ」

確か、オパールは自身を融合素材としたモンスターに、自分のカードの効果では破壊されなくなる効果を付与するモンスターだったはず。

ラピスラズリの周りに4つの碧い光が浮かび上がると、それがレーザーみたいファイーちゃんに襲い掛かる。

ここで、ファイーちゃんは伏せカードを1枚オープンして。

「待ってー。待って待って待ってー。永続罫《和睦の契約書》を発動。この効果で、このターンにお互いが受ける契約書の効果以外の戦闘・効果のダメージを0にするよー」

すると突如、ファイーちゃん紫水ちゃん双方を包むように円形のバリアが出現。4つのレーザーはファイーちゃんに届く前に消滅しちやった。

「この効果は私の場にDDモンスターが存在する場合に発動可能。それと契約書の共通効果でスタンバイフェイズ毎に私に1000ダメージもあって、さらに私の場にDDモンスターがない場合に私がダメージを受けたら破壊されるよ」

そういえば、ファイーちゃんの使うデッキの契約書カードって、スタ

ンバイフェイズ毎に自分にダメージを与えるんだっけ。つまり、このターンにDDモンスターが全滅しちゃったら、次のスタンバイフェイズに自壊する。って解釈でいいんだよね？

「つまり、少なくともこのターン私たちは一切のダメージを受けないわけね。契約書のダメージ以外では」

訊ねる紫水ちゃんに、

「そういうことだよー」

フィーちゃんはいった。すると、紫水ちゃんは眼鏡を一本指でクイツと上げて、

「そういう事なら、むしろ好都合よ」

直後、不自然に眼鏡が逆光したんだ。もしかしてフィールかな？

だとすると、紫水ちゃんわざと眼鏡クイツからの眼鏡キランをやったことになるんだけど。

「私はカードを1枚セット。そして、《ファイヤー・ハンド》を通常召喚」

紫水ちゃんがフィールドに出したのは、ジエムナイトではなく炎に包まれた巨大な手。

「あっ」

直後、フィーちゃんが仰け反った。どうやら、このモンスターの効果を知ってるみたい。

「いくわ。私は《ファイヤー・ハンド》で《DDD烈火王テムジン》に攻撃」

そして、炎の手がテムジンに飛び掛かる。フィーちゃんは一転余裕なさそうに、

「《DDD怒濤王シーザー》の効果。オーバーレイ・ユニットを1つ取り除いて効果を発動」

一応シーザーの効果は無事に発動されたみたい。だけど、何かが変わった様子もなく、戦闘の巻き戻しも発生しないまま炎の手はテムジンの手によって両断されちゃった。

《ファイヤー・ハンド》の攻撃力は1600だから、攻撃力2000のテムジンと戦闘して400ダメージが紫水ちゃんに入るはずだけ

ど、今回は《和睦の契約書》の効果で0に。

「倒したわね？　なら、無事に《ファイヤー・ハンド》の効果が発動されるわ」

紫水ちゃんは、少し得意げにいった。

「このカードが相手によつて破壊され墓地へ送られた時、相手モンスターを1体破壊するわ。私は《DDD怒濤王シーザー》を破壊」

直後、一本の火柱がシーザーを包み込んで消し炭にする。

「シーザーがフィールドから墓地に送られた事で効果を発動。デッキから契約書カードを手札に加えるよ。《地獄門の契約書》を手札に」

「こちらも効果はまだ続いているわ。その後、デッキから《アイス・ハンド》を特殊召喚。攻撃表示」

続けてフィールドに出てきたのはさっきの手と似た外見の、氷の手。

「出た。紫水ちゃんの自爆特攻コンボ」

ボクは、若干のトラウマ込みで口を震わせいった。

この二種類のハンドモンスターは、相手によつて破壊された場合に、前者はモンスター後者は魔法・罫を破壊しながら互いに特殊召喚しあう効果を持っているんだ。つまり、手札消費1枚で最大6枚も相手のカードを破壊できちゃうんだよ。

さすがのフィーちゃんも、このカードを通しちゃったことを悔やんで、ぐぬぬって苦い顔を見せる中、

「続けて《アイス・ハンド》で《DDD烈火王テムジン》に攻撃」

氷の手も同じくテムジンに突っ込み、その剣で両断され、

「《アイス・ハンド》の効果発動。フィールドの魔法・罫を1枚破壊する。フィーアのまだ発動していない伏せカードを破壊」

今度是一本の氷の柱が伏せカードを飲み込み破壊。2枚目の《和睦の契約書》だった。

「わざわざ両方伏せるなんて。ブラフを兼ねてたのか、もしくは片方が破壊されても、もう片方が残るようにしてたのか。そこまでするカードには見えないけど」

紫水ちゃんは分析しながら、

「まあいいわ。その後、デツキから2枚目の《ファイヤー・ハンド》を特殊召喚。テムジンに自爆特攻し、アレクサンダーを破壊しつつ《アイス・ハンド》を召喚。同じくテムジンに自爆特攻しもう1枚の《和睦の契約書》を破壊。さらに3枚目の《ファイヤー・ハンド》で自爆特攻してテムジンを破壊。《アイス・ハンド》を守備表示で特殊召喚」
こうして。

最初は絶望的な布陣にみえたフィーちゃんのフィールドは、たった1枚のハンドモンスターから始まった猛攻によって全滅しちやった。炎の柱と氷の柱が立て続けに伸びた事で激しい蒸気が舞い上がり、フィーちゃんとフィールドを包み込む。

「私はこれでターン終了よ」

紫水ちゃんの宣言から程なくして蒸気が消えていき、フィーちゃんが再び姿を見せる。だけど。

「えっ」

「ええっ」

紫水ちゃんとボクは揃って驚いたんだ。だって、そこにいたのはフィーちゃんだけじゃなくて、さつき倒した3体のDDDも一緒だったんだもん。

「まず、《DDD烈火王テムジン》が相手によって破壊された事で効果を発動」

え、テムジン他にも効果があったの？

「墓地の契約書カード 《和睦の契約書》を手札に戻します」

僅かに残った蒸気で表情をうつすら隠しながら、フィーちゃんはいった。

しかも、クーちゃんモードじゃなくて、本来の口調で。

「さらに破壊前に発動した《DDD怒濤王シーザー》の効果。このカードは、バトルフェイズ終了時にこのターン破壊されたモンスターを墓地から可能な限り特殊召喚できます。しかも、この効果は事前に発動しておけばシーザー自身が破壊されても蘇生が可能になります」

「そんな。せつかく破壊したのに3体とも蘇生されるなんて」

紫水ちゃんは言うけど、ボクはフィーちゃんの手札を見て、

「それだけじゃない」

ボクは気づいて呟いた。

「手札が3枚に増えてる」

「あっ」

言われて、紫水ちゃんも気づいたみたいで、

「実質1枚もアド減らせてないじゃない」

むしろ増えてるまであるんだよね。シーザーの効果でサーチした《地獄門の契約書》って、永続魔法なのに1ターンに1度デッキのDDを手札に加えるサーチカードだから。

「けど」

悪い事ばかりじゃないと、紫水ちゃんはフィーちゃんを見据えいつた。

「いつものふざけたクワトロの顔じゃなくなっただわ。ようやく、本当のあなたを引っ張り出せたようね」

いうと、フィーちゃんは。

「はい。手加減するつもりは元々ありませんでしたけど、気を引き締めないと負けると判断しました」

「なら見せて貰うわ。処分人の本当のデュエルを。改めて私はターン終了よ」

紫水ちゃんはいった。

クワトロ

LP4000

手札3

□□□

「《DDD疾風王アレクサンダー》」「《DDD怒濤王シーザー》」「《DD烈火王テムジン》」

□□ — 「《ジェムナイトレディ・ラピスラズリ（紫水）》」

「《アイス・ハンド（守備）》」□□□

□□□「《セットカード》」

紫水

LP4000

手札1

「私のターン。ドローします」

フィーちゃんはカードを1枚引くと、

クワトロ LP4000↓1000

いきなり、フィーちゃんのライフが一気に削れちゃったんだ。何が起きたの？ ボクが思っていると、

「《DDD怒濤王シーザー》の効果はまだ続きがあります。先ほどの効果で蘇生した後、次のスタンバイフェイズ時に私は特殊召喚したモンスターの数×1000ダメージを受けます。契約書のダメージではないので、何としてでも《和睦の契約書》で0にしておきたかったのですが」

「ああ、なるほど。だから2枚ともセットしてたの？」

紫水ちゃんはいい、続けて、

「1枚が手札に戻ったとはいえ、ハンドでフィールドを1度一掃したのは無駄ではなかったのね」

「そうですね。本来は“ここ”で使うつもりだったから。手札に戻ってもすでに遅いですし、あのハンドはとても痛い一手でした」

フィーちゃんはいった。

「ですので、こちらの劣勢と思ってデュエルさせて頂きます」

直後、シーザーが瞬時に靈魂へと姿を変えたんだ。

「まず、このカードは自分フィールドのランク4のDDDの上に重ねて召喚できます。私は《DDD怒濤王シーザー》でオーバーレイ・ネットワークを再構築」

上空で銀河の渦が巻きあがると、靈魂が中に取り込まれる。

「次元の渦よ、王の魂を触媒に、全てを射抜く英雄の座を与えん。ランクアップ・エクシーズチェンジ！ エクシーズ召喚！ 目覚めよランク5！ 《DDD狙撃王テル》！」

フィーちゃんの口上が終わると同時に、銀河の中からクロスボウを握った悪魔族モンスターが降り立つ。

「RUMを使わずに？」

驚く紫水ちゃん。でもフィーちゃんのプレイングは一時停止さえなく、

「私の場にモンスターが特殊召喚されたことでテムジンの効果。墓地から《DD魔導賢者ゲイツ》を特殊召喚」

これで、フィーちゃんの場合は一応融合・S・Xに加えてリンクまで場に揃えたことに。

「《DD狙撃王テル》の効果。私が効果ダメージを受けたターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、相手モンスター1体の攻守を1000下げ、相手に1000ダメージを与えます」

するとまず、対象になった《ジエムナイトレイ・ラピスラズリ》に1本のボウの矢が突き刺さる。

ダメージによるめくラピスラズリ。直後、その僅かな姿勢のブレの間を2本目の矢が射抜き、紫水ちゃんの肩に突き刺さった。

「紫水ちゃんー！」

痛そうな光景にボクはつい全身を震わせる。

《ジエムナイトレイ・ラピスラズリ》 攻撃力2400↓1400

紫水 LP4000↓3000

ラピスラズリの攻撃力が減り、紫水ちゃんのライフにダメージが入る。

けど、あくまで矢はビジョンだから痛みはないみたい。紫水ちゃん は動揺ひとつ見せなかったんだ。

「すごいね、紫水ちゃん」

ボクなら身構えちゃう所なのに。

「二応、フィールで防壁は張ったわよ。全くフィールを込めてなかったみたいだから無駄だったけど。それに、デュエルでいちいち反応してたら体力が保たないわ」

紫水ちゃんがいった。すると、

「なるほど」

意味深にフィーちゃんが呟くのが聞こえた。でも、誰かが追及するより先に、

「《DD魔導賢者ゲイツ》の効果を発動。このカードをリリースして墓

地の《DDD怒濤王シーザー》を特殊召喚します」

テルのX素材が消費された事で、墓地に送られてたシーザーが、再び蘇生される。さらに、

「いきます」

フィーちゃんが静かに身構えたのをみて、ボクは直感で「あ」ってなった。

(あれがくる)

ボクの予想は当たった。

「ステージ解放。開け、時空の扉」

今回は変なBGMが流れたりせず、極々普通にリンクマーカーが出現。

「アローヘッド確認。召喚条件は効果モンスター2体以上。私は《DDD狙撃王テル》《DDD怒濤王シーザー》《DDD烈火王テムジン》をリンクマーカーにセット!」

「わざわざエクシーズ2体と融合1体で?」

驚く紫水ちゃん。

「サーキットコンバイン!」

フィーちゃんはEXデッキからカードを1枚引き抜き、EXモンスターゾーンに読み込ませる。

「次元の海よ。光の癒しを触媒に、新たな英雄と契約せん。リンク召喚! 目覚めよリンク3 《DDD救護王フローレンス》!」

出現したのは、ボクの《アロマセラフィージャスミン》の輪郭を残した女性型の悪魔。

「これ、水姫のモンスター」

紫水ちゃんがすぐ気づいていった。シルエット以外は似ても似つかない姿をしているのに。

「フィーア! あなた水姫に何をしたの? まさか水姫のカードを勝手に奪ってDDD化してたり」

「してない、してないから落ち着いて紫水ちゃん」

ボクは紫水ちゃんの腕を掴んで呼びかける。

「あれは平行世界の《アロマセラフィージャスミン》みたいなものだ

よ。多分」

実際、ボクの中で仮面ライダー○ウのアナザーライダーって印象だから言っただけで、実際はどうか分からないけど。

で、ここで対峙してるのがクーちゃんだったら「どーしたのー？」って自分から地雷を踏み抜きに行きそうなものだったけど、

「《DDD狙撃王テル》と《DDD怒濤王シーザー》の効果。テルが墓地に送られた場合、デツキからDDか契約書カードを墓地に送ります。私はデツキの《DDD極智王カオス・アポカリプス》を墓地に。シーザーが墓地に送られた場合、デツキの契約書を1枚手札に加えます。私は《戦神との不正契約書》を手札に加えます」

本来のファイーちゃんモードだと素でスルーっていう第二の地雷を踏み抜く始末。配慮のない発言もあれだけど、スルーされるのも結構きついやね？

「そして、手札から《地獄門の契約書》と《戦神との不正契約書》発動。さらにカードを1枚セット」

「ここで。」

「えっ？」

紫水ちゃんが突然妙な反応。

「どうしたの紫水ちゃん」

ボクが訊ねると、

「ちよっと待って？ 待ちなさいよ、嘘でしょ？」

紫水ちゃんはひとり驚愕しだしたんだ。何が起きたんだろう、ボクが目で見え続けると、

「ねえ水姫？ あの子もしかして、このターンいま初めて手札を使っただ？」

「えっ？ そういえば」

「そう、だけど？」

「分からない？ フィーアはこのターン、まずテルを出して私のライフを削って、ゲイツを経由してシーザーを再び出して、リンク3のモンスターを出して、テルとシーザーの効果で墓地と手札を1枚ずつ肥やした。ここまでのプレイングを一切手札を使わず行いむしろ手札

を増やすまでしたのよ?」

「あ」

「そういえば、そうだよ! フィーちゃん、結構デッキと場をぐるぐるソリティアしてたけど、手札を一切使ってない。」

「それだけじゃないわよ。《地獄門の契約書》も《戦神との不正契約書》もデッキからサーチして手札に加えたカードよ。もし、あのセットカードも《和睦の契約書》だったら、フィーアはこのターン、不確定要素のドロローを一切頼らず、サーチとサルベージだけで必要なカードを確保してる」

「しかも《地獄門の契約書》ってことは」

ボクが言いかけた所、

「《地獄門の契約書》の効果。1ターンに1度、デッキからDDモンスターを手札に加えます。私は《DDD壊薙王アビス・ラグナロク》を手札に加えます」

「さらにサーチ!?!」

ついに紫水ちゃんが少々顔を青くしちゃう。

「墓地の《DDスワラル・スライム》を除外して効果を発動。手札からDDを特殊召喚します。《DDD壊薙王アビス・ラグナロク》を特殊召喚」

「しかもレベル8最上級モンスターをぽんと」

分かるよ紫水ちゃん。これ怖いよね? なんで下手なSモンスターやXモンスターより出し辛いはずのカードを簡単に呼ばれちゃうんだらうって。

「《DDD壊薙王アビス・ラグナロク》の効果。このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、墓地のDDDを特殊召喚します。シーザーを蘇生します」

「……………」

あ、もう反応する気力すらなくなっちゃったよ紫水ちゃん。

と思ったら、

「大丈夫。まだ大丈夫、まだ逆転不可能な布陣にはなっていないはず」
ってぶつぶつ呟くのが聞こえた。たぶんフィーちゃんの耳には届

いてないと思うけど。……もしかして、紫水ちゃんの伏せカードに何か秘密が？ それに、紫水ちゃんの場合には守備表示の《アイス・ハンド》も残ってる。相手の魔法・罠カードも1枚なら破壊できる算段があるんだ、紫水ちゃんは。

「《DDD壊薙王アビス・ラグナロク》のもうひとつの効果を使用します。1ターンに1度、このカード以外のDDを1体リリースすることで相手モンスター1体を除外します」

「あっ」

そうだった。アビス・ラグナロクには相手モンスターを除外できる能力があるんだった。ボクもトラウマの《アイス・ハンド》だって、除外には対応してない。

「っ」

身構える紫水ちゃん。やっぱり《アイス・ハンド》を対処されるのは相当痛手なんだ。ボクはそう受け取ったけど、

「私はシーザーをリリースして、《ジェムナイトレディ・ラピスラズリ》を除外します」

「えっ」「そっち?」

紫水ちゃん、そしてボクはそれぞれ驚く。

「嘘、どうしてそっちを? わざわざテルで攻撃力を下げたのに」

訊ねる紫水ちゃんにフィーちゃんは、

「勘です」

「っ」

「先ほどテルの効果を使った際、ラピスラズリの攻撃力が下がったのに、さほど痛手を受けたようには感じませんでした。なので、《アイス・ハンド》が囷になっているものと」

「正解よ。ラピスラズリは除外されるわ」

悔しそうに、紫水ちゃんはジェムナイトをデュエルディスクから取り除く。すると、

「え? 通るのですか?」

「っ、フィーちゃん。ボクはきよとんとして、

「狙いの逆をついたんだから、通るんじゃないの?」

「いえ。私はリリースエスケープなりフリーチェーンの融合カードを伏せてるものと読んでたんです。だから攻撃力を減らしても無駄だと」

フィーちゃんはいって、

「それなら、素直にラピスラズリに戦闘を狙ったほうが良かったですね。とりあえず、《DDD救護王フローレンス》の効果を発動。私の場に契約書が2枚あるので20000ライフ回復」

クワトロ LP10000↓30000

シーザーで削られたフィーちゃんのライフが全快じゃないけど回復し、

「そして、その数値以下のDDを墓地から特殊召喚します。私は《DDRリス》をリンク先に守備表示で特殊召喚。さらに私のライフが回復する度にフローレンスの攻撃力をこのターン500アップし、私のモンスター1体に貫通を付与。フローレンス自身に貫通効果を与えます」

「貫通!?!」

驚く紫水ちゃん。

「さらに《DDRリス》の効果で墓地の《DDD狙撃王テル》をエクストラデツキに戻します」

フィーちゃんはいって墓地のテルを回収。

「そして、《戦神との不正契約書》の効果を発動。1ターンに1度、自分・相手のメインフェイズに、私のDD1体の攻撃力を1000上げ、相手モンスターの攻撃力を1000下げます。この効果は不正契約書がフィールドに存在する限り、かつバトルフェイズ終了時まで有効になります」

直後、ボクは気づいて、

「あ、もしかしてこの効果をアレクサンダーとラピスラズリに使ったらワンパンで終わってた?」

「攻撃が通れば」

フィーちゃんは肯定する。ボクはちらつと紫水ちゃんを見たけど、言葉に困った顔を見せてたので、たぶん通ってたんだと思う。

《DDD救護王フローレンス》 攻撃力2300↓3300

《アイス・ハンド（守備表示）》 攻撃力1400↓400

効果はフローレンスと《アイス・ハンド》に付与され、それぞれの攻撃力が変動する。

「バトル。《DDD救護王フローレンス》で《アイス・ハンド》に攻撃します」

フローレンスの攻撃を受け、破壊される紫水ちゃんのハンドモンスター。さらに貫通能力付きなので、紫水ちゃんのライフがさらに削られる。

紫水 LP3000↓1300

「《アイス・ハンド》のモンスター効果。もう《ファイヤー・ハンド》は打ち止めだけど、魔法・罠カードを破壊する効果は有効よ。私は《戦神との不正契約書》を破壊」

こつちを破壊するんだ。

「分かりました」

言われるままファイーちゃんは《戦神との不正契約書》を墓地に送る。

《DDD救護王フローレンス》 攻撃力3300↓2300

これによって、不正契約書の効果も終了し、フローレンスの攻撃力も2300に戻って、

「《DDD壊薙王アビス・ラグナロク》で直接攻撃します」

続けてフィーちゃんの攻撃宣言。直後、

「仕方ないわね。罠カード《廃石融合》を発動。この効果で、墓地のジェムナイトを除外して融合召喚するわ。私は墓地からジェムナイト3体を除が」

紫水ちゃんは言いかけるも、その言葉が途中で停止。

「しまったわ。墓地にジェムナイトが2体しかいなかった」

苦い顔をして呟く紫水ちゃん。

これは後から聞いた話なんだけど、紫水ちゃんはフィーちゃんの初手で相当気圧されてたみたいで、本来《ジェムナイト・ラズリー》の効果を使わずラピスを墓地に置いたままにしなくちゃいけなかった所を、「それをしたら怪しまれる」って心理フェイズを重視しすぎて墓

地の計算を間違えちゃったんだとか。

そして、フィーちゃんが言ってた《アイス・ハンド》を罠にしてたって件だけど、ラピスラズリを墓地に送りたかったからなんだって。ハンドモンスターは破壊ではなく、バウンスや除外じゃないと対処できないから、あえて罠にしてラピスラズリからバウンスや除外を守ってたんだ。で、攻撃力を減らされたなら戦闘で破壊してくるだろうからダメージは痛いけど目的は達成できる筈って魂胆だったらしいよ。

だから、この《廃石融合》で本来出すモンスターは、《ジェムナイト・オパール》を素材にした《ジェムナイトマスター・ダイヤ》。《廃石融合》で出したモンスターはエンドフェイズ時に破壊されるんだけど、オパールを素材にすれば自分のカードで破壊されない効果が付与されて生き残る。そして、マスター・ダイヤには墓地のジェムナイトを除外して効果をコピーする効果があるから、返しのターンでラピスラズリの効果をコピーしてバーンダメージ。たとえ伏せカードが《和睦の契約書》だったとしても、契約書の効果でフィーちゃんが勝手に自滅するだろうって計算してたんだって。

でも、今回は墓地のジェムナイトが足りないから、
「仕方ないわ。私は《ジェムナイト・ラズリー》と《アイス・ハンド》を除外して融合。神秘の力よ、氷の巨腕と一つとなりて、高貴なる紫の閃光を解放せよ。融合召喚！ レベル7《ジェムナイト・アメジス》！ 守備表示よ」

代わりに出てきたのは守備力2450のジェムナイトモンスター。
「《DD壊薙王アビス・ラグナロク》の攻撃力は2200、その攻撃ではアメジスを倒すことは不可能よ」

「アレクサンダーから攻撃するべきでしたか」
フィーちゃんは言いながらアビス・ラグナロクの攻撃を終了し、
「《DD疾風王アレクサンダー》で《ジェムナイト・アメジス》に攻撃します」

アレクサンダーの攻撃力は2500。僅か50の差だけどアレクサンダーはアメジスの破壊に成功。

「《ジェムナイト・アメジス》のモンスター効果。このカードがフィー

ルドから墓地に送られた場合、フィールドのセット状態の魔法・罫カードを全てバウンスするわ」

直後、フィーちゃんの伏せカードを紫色の光が包み込み、フィールドから消滅。

「分かりました」

フィーちゃんはデュエルディスクから伏せカードを抜いて手札に戻す。これで、フィーちゃんは次のターンを伏せカードなしで耐えなといけなくなっちゃった。

「ターン終了します」

フィーちゃんのターンが終わった。

クワトロ

LP3000

手札3

「《地獄門の契約書》」□□

「《DDD疾風王アレクサンダー》」「《DDRリス（守備）》」「《DDD壊薙王アビス・ラグナロク》」

「《DDD救護王フローレンス（クワトロ）》」——□

□□□□

□□□□

紫水

LP1300

手札1

盤上以外で色々ありながら、何とか紫水ちゃんのターンは回ってきたけど。正直いってボクには紫水ちゃんが詰んでるようにしか見えなかった。

一応、フィーちゃんの伏せカードこそ対処はしたけど、紫水ちゃんのフィールドには何も存在してなくて、握ってる手札も《ジェムナイト・ラピス》だって判明しちゃってるんだもん。

対してフィーちゃんはモンスターゾーンに出せるだけモンスターを出してあって、仮に全滅させられても、間違いなく次のターンさえ回ればすぐ立て直せちゃう。

「私のターン、ドロロー」

紫水ちゃんはカードを1枚引く。直後、彼女のフィールがガツツリ消耗したのが分かった。どうやら、このドロローに大分フィールを注ぎ込んだみたい。そして、

「魔法カード《貪欲な壺》を発動」

ここで紫水ちゃんは手札増強の魔法カードを使用。

「私は墓地の《ファイヤー・ハンド》3枚と《アイス・ハンド》2枚をデッキに戻すわ。デッキからカードを2枚ドロロー」

紫水ちゃんは更にフィールを消費してドロロー。こんなにフィールを消費しちゃったら、

「《ジェムナイト・アメジス》を除外。墓地の《ジェムナイト・フュージョン》を手札に。さらに魔法カード《打ち出の小槌》！ 手札3枚を全部デッキに戻して3枚ドロロー」

「し、紫水ちゃん」

これ以上したら、本当に紫水ちゃんのフィールが全損しちゃう！
「仕方ないでしょ。どれ引けば勝てるのかビジョンが全く浮かばないのよ」

紫水ちゃんは、どうやら手札を全部デッキに戻したことを指摘されたと思ったみたい。確かに、間違っではないけど。そうじゃなくって、ボクにはフィールを使い切ってヤケクソにドロローしてるようにはか見えないんだよ。

紫水ちゃんはカードを3枚引く。あ、たったいま紫水ちゃんのフィールが0になった。

でも。

紫水ちゃんは引いた3枚を確認すると「ハッ」て顔になって、

「この手があったわ。私は《レスキューラビット》を通常召喚」

フィールドに出現したのは一羽の兎。

《レスキューラビット》を除外して効果を発動。デッキからレベル4以下の同名通常モンスターを特殊召喚。私はデッキから《ジェムナイト・ガネット》を2体特殊召喚。そして、この2体でオーバーレイ・ネットワークを構築！」

「えっ」

ボクは驚いた。だって、紫水ちゃんがXモンスターを使うなんて今日の今日まで知らなかったんだもん。

しかも、2体のガネットが霊魂になって銀河に取り込まれると、中から膨大なフィールが噴出しながら1067って数字が出たんだ。うわ、このモーションってナンバーズ。しかも、ボクの持つてる《No.49 秘鳥フォーチュンチュン》よりずっと凄いやつだよ。だって、紫水ちゃんのフィールつてもう0なのに、召喚の演出で勝手にフィールが発生したんだもん。

「解放せよ、全てを掴む巨大なる力。エクシーズ召喚！ ランク4《No.106 巨岩掌ジャイアント・ハンド》！ 守備表示」

こうして出現したのは、巨大な掌のモンスター。守備力は2000。

「えっ」

フィーちゃんが目をパチクリする。ボクは、いま起きてる事態がどれだけ異質か知らなかったから、単純にフィーちゃんがなんか凄いフィール・カードの登場に驚いたのかなどしか思わなかったけど。

「さらに私はここでスキル《ナンバーズはナンバーズでしか倒せない》を発動！ このデュエル中、全てのNo.モンスターはNo.モンスター以外との戦闘で破壊されない共通効果を得る」

これで、紫水ちゃんのジャイアント・ハンドは効果を無効にされるかフィーちゃんもナンバーズを出さない限り戦闘破壊できなくなっちゃった。

「さらにカードを2枚セット。ターン終了するわ」

さらに残りのカードも全て伏せて、紫水ちゃんのターンは終了になった。

クワトロ

LP3000

手札3

「《地獄門の契約書》」

「《DDD疾風王アレクサンダー》」「《DDRリス(守備)》」「《DDD

壊薙王アビス・ラグナロク」

「《DDD救護王フローレンス(クワトロ)》―「No. 106 巨

岩掌ジャイアント・ハンド(紫水/守備)」

□□□

□「《セットカード》」「《セットカード》」

紫水

LP1300

手札0

「私のターン。ドローします」

フィーちゃんはカードを引いてから、

「旗枷さん。どうしてそのカードをわざわざ私に見せたのですか？」

なんて訊ねる。紫水ちゃんは腕を組んで、

「言う必要がないでしょう。このカードの意味を知ってるなら」

って。そんなに貴重なカードなのかな？

「そうですね。わかりました」

フィーちゃんは返事してから、

「スタンバイフェイズ。私は《地獄門の契約書》の効果で10000ポイ

ントのダメージを受けます」

ここまではボクも紫水ちゃんも分かってたこと。だけど、

「さらに墓地の《DD連結システム》の効果。このカードをデッキに戻

し、私はさらに10000ポイントのダメージを受けます」

「自分から更にライフを？」

驚く紫水ちゃん。だけどボクは、

クワトロ LP3000↓2000↓1000

効果によって、フィーちゃんのライフが丁度1000になったのを

見て、

(あ)

と、気づいたんだ。

「いきます。スキル発動。《新規雇用の契約書》！」

直後、フィーちゃんと紫水ちゃんを残して辺りの光景が急にブレだした。

「なに、これ」

辺りを見渡す紫水ちゃん。

前回は外野がいなかったから分らなかったけど、どうやら人間もブレて映るみたいで、今回はデュエルしてないボクもしっかりブレてるのが分かった。でも、あくまで演出。自分の手を触ってみた所、あくまで視界がブレてるだけだったみたい。

「このスキルは私のライフが1000以下の場合に使用可能。相手のフィールドまたは墓地からモンスターを1体選び、元々の攻撃力が同じDDモンスターをランダムに1枚エクストラデッキに加えます」

思った通り、フィーちゃんはここで紫水ちゃんのカードから新しいフィールド・カードを作り出す気だったみたい。

フィーちゃんの前に1枚の契約書が出現。すると、ジャイアント・ハンドのブレた中のひとつが本体から離れ、契約書の中に入っていく。直後、契約書は光を帯びながら小さくなっていき、辺りが元の光景に戻ると同時にフィールド・カードになってフィーちゃんの手元に渡ったんだ。

しかも、今回は2枚。スキルの効果は1枚って言ってたのに。

「契約完了。私の力に、オーバーハンドレッド・ナンバーズの力を持つ新たな王が加わりました」

「何を、したの?」

驚愕。ううん、何故か絶望さえ顔に出して紫水ちゃんが訊ねる。

「安心してください。旗枷さん自身やジャイアント・ハンドのフィールドに影響はありません。ですので、これで旗枷さんの寿命が縮むことも生死に関わることも一切ないはずですよ」

え? なんでここで寿命とか生死って言葉が出てくるの?

「処分人に変な事されたのに、はいそうですか?」って言えるわけがないでしょう」

「そう、ですね」

フィーちゃんは、ここで一度「うーん」と悩んでから、

「水姫? ここで彼女に信じて貰うにはどうすればいいのでしょうか?」

「え？」

突然話を振られ、ボクは驚くけど。

「どうすれば、って言われても。分からないよ、最初からふたりは対立してるんだもん。まず、そっちを解決しないと」

苦し紛れにいった所、

「分かりました」

何故か、それで納得しちゃうフィーちゃん。

「でしたら、まずはデュエルの勝敗をつけたほうがいいですね。《DD D壊薙王アビス・ラグナロク》のモンスター効果を発動。《DDリリス》をリリースして、ジャイアント・ハンドをゲームから除外します」
フィーちゃんの宣言の直後、《DDリリス》が光の粒子に消え、アビス・ラグナロクの力が膨大。

「それはこちらの台詞よ。罨カード《ブレイクスルー・スキル》を発動。ターン終了時までアビス・ラグナロクの効果は無効にするわ」

だけど、そこへ紫水ちゃんが伏せカードを使い、アビス・ラグナロクの力がかき消される。

「構いません。《DDナイト・ハウリング》を通常召喚。ステージ解放。開け、時空の扉」

続けてフィーちゃんはリンク召喚を宣言。

「召喚条件は種族または属性が同じモンスター2体。私は《DDナイト・ハウリング》と《DD D壊薙王アビス・ラグナロク》をリンクマーカーにセット！」

2体のモンスターがリンクマーカーに取り込まれると、そのマーカーから106の数字が逆向きで浮かび上がる。

(あ)

さっきのスキルで手に入れたカードを使うつもりだ。

「まさか」

紫水ちゃんも察した中、

「契約を請けし我が友紫水の僕よ。大地の抱擁を触媒に、新たな王に覚醒せよ。リンク召喚、目覚めよりリンク2《DD D掌刻王ロダン》！」

出現したのは、ジャイアント・ハンドより一回り小さな悪魔の掌。

その攻撃力は2000。

「姿も私のジャイアント・ハンドに似てる。って、まさか」

紫水ちゃんはいつて、フローレンスに視線を向ける。

「はい。フローレンスも水姫とのデュエルの中で《新規雇用の契約書》の力で手に入れたカードです」

フィーちゃんは、あつさり肯定。

「言いたいことがあるとは思いますが、まずはデュエルを続けさせてください。《DDD掌刻王ロダン》と《DDD疾風王アレクサンダー》の効果それぞれ発動。まずロダンのリンク召喚に成功した場合、エクストラデッキのペンデュラムモンスターおよびデッキのモンスターの中から素材2体と同じ種族または属性のモンスター1体を墓地に送ることができます。この効果は1ターンに1度しか使用できません。私はデッキから《DDスワラル・スライム》を墓地に送ります」

この効果は、間違いなく《ジェムナイトレディ・ラピスラズリ》の効果。やっぱり、フローレンスと同じで《DDD掌刻王ロダン》には紫水ちゃんの使う色んなカードの効果が混ざってる。

「さらにアレクサンダーの効果。私の場にロダンが特殊召喚されたことで、墓地から《DDRリス》を蘇生。効果で《DDD壊薙王アビス・ラグナロク》を手札に加えます」

これで、エクストラデッキから再びアビス・ラグナロクがフィーちゃんの手札に戻って、そのアビス・ラグナロクを特殊召喚するスワラル・スライムが墓地に行っちゃった。

「さらにステージ解放。再び開け、時空の扉」

「えっ」

さらにリンク召喚!?

「召喚条件は種族または属性が同じモンスター2体。《DDRリス》と《DDD掌刻王ロダン》をリンクマーカーにセット。転生リンク召喚!」

その突然出てきた用語に、

「てっ」

「転生リンク召喚ですって!?!」

ボクと紫水ちゃんは驚く。デュエルモンスターズのカードの中には、自身と同じモンスターを素材に召喚する事で追加効果を得るモンスターが存在するんだ。そういったモンスターの召喚方法を非公式遊戯王VRAINS参照に転生○○召喚っていうんだけど。

ってことは、今回は逆向きの106の数字は出なかったけど、いまから召喚するのって。

「次元の海よ。大地の抱擁を触媒に、これより王と再契約を結ぶ。掌刻王よ、全てを掴む真なる力を解放せよ。生まれ変われリンク2《DDD掌刻王ロダン》!」

こうして再びリンク召喚されたロダンだけど、何故か悪魔の手がふたつになってたんだ。

「そういえば、転生召喚をしたモンスターはソリッドビジョン上の映像が変わるモンスターもいるって聞いたことがあるわ」

紫水ちゃんがいった。

「ロダンを素材にリンク召喚した《DDD掌刻王ロダン》には新たな効果が付与されました。続けて墓地の《DDスワラル・スライム》を外して効果を発動。手札の《DDD壊薙王アビス・ラグナロク》を特殊召喚します」

こうして、フィーちゃんの場合に再び出現したアビス・ラグナロク。

「アビス・ラグナロクのモンスター効果。《DDD疾風王アレクサンダー》をリリースして効果を発動。もう1度、《No.106 巨岩掌ジャイアント・ハンド》の除外を狙います」

再び力が膨れ上がるアビス・ラグナロク。

「あ、くっ」

すると紫水ちゃんは悔しそうに、

「ここで使わせられるなんて。ジャイアント・ハンドのモンスター効果。相手の場でモンスター効果が発動した時、相手モンスター1体を対象に、オーバーレイ・ユニットを2つ消費して効果を発動。このカードが場に存在する限り、対象のモンスターは効果を無効にされ表示形式も変更できなくなるわ」

紫水ちゃんの様子から、本当は別のモンスターに使いたかったんだと思う。たぶん、貫通を付与してくるフローレンスに。

だけど、

「転生ロダンのモンスター効果。このカードがフィールドに存在する限り1度だけ、相手フィールドの効果モンスター1体を対象として発動。ターン終了時まで、対象のモンスターの効果は無効化され、表示形式の変更もできません」

フィーちゃんが、まさにそのジャイアント・ハンドの効果をモチーフにしたロダンの転生効果を発動。オリジナルジャイアント・ハンドの効果が無効にされてしまった。

「あ」

と、紫水ちゃんがいつてる間に、今度はアビス・ラグナロクの効果が発動し、ジャイアント・ハンドがゲームから除外されちゃう。

「バトルフェイズ。《DDD掌刻王ロダン》で直接攻撃を行います。最後の伏せカードがミラーフォースのような逆転のカードでなければ私の勝ちになります」

フィーちゃんの言葉に、紫水ちゃんは首を横に振って。

「伏せカードは《五死眼光》。このカードはNo.106の効果を受けたモンスターが戦闘を行うダメージ計算前に発動する罠よ。発動したら、その相手モンスターを破壊し、相手はそのモンスター攻撃力分のダメージを受ける。確かに逆転のカードではあったけど、すでに使えないわ」

「では、旗枷さんの負けで」

「問題ないわ」

ロダンの掌が紫水ちゃんに届く前に、紫水ちゃんはデッキの上の手を置いた。

サレンダーは認められ、そのままデュエルはフィーちゃんの勝利に終わった。

デュエルが終わり、ソリッドビジョンが消えるとすぐ、

「旗枷さん。受け取ってください」

って、フィーちゃんが紫水ちゃんに向けてカードを2枚投げたんだ。紫水ちゃんは咄嗟に受け取ると、

「これって、ロダン？」

「はい。このカードはジャイアント・ハンドのファイルの一部が切り取りではなく、コピー」で搭載されています。もしかしたら万一ジャイアント・ハンドが奪われたときに命を繋ぐ事ができるかもしれません」

「え」

愕然とする紫水ちゃん。

「え、どういうことフィーちゃん、紫水ちゃん。ジャイアント・ハンドが出てきてから寿命とか何とか言ってるけど」

ボクが訊ねると、

「いいですか話しても？」

フィーちゃんが紫水ちゃんに確認を取る。

「私からいうわ」

紫水ちゃんは軽く首を横に振って、

「ファイル・カードの中にはね、他のカードとは比べ物にならないファイルを持つてる代わりに、それ自体が生み出した人の命と繋がってるカードがあるのよ。オーバーハンドレッド・ナンバーズ。つまり、101以上のナンバーズがそのひとつと言われてて、私のジャイアント・ハンドがそれよ」

「え？」

ちよつと、言ってることが信じられなくてボクは困惑しながら、

「じゃあ、もし誰かにジャイアント・ハンドが奪われたら紫水ちゃんは？」

「死ぬ可能性が高いわ」

紫水ちゃんはいった。

「仮に死ななくても、いつ死んでもおかしくない位に命が安定を失うわね。一方、後から入手した人は命を脅かされる心配もないし膨大なファイルの恩恵だけ受けられる。だから、殺してでもカードを奪いたい人が狙ってくるのよ」

「ですから、保険になるかは分かりませんが、一刻も早くロダンを渡すことにしたんです」

フィーちゃんがいった。ボクは、

「つまり、あのロダンは紫水ちゃんがジャイアント・ハンドを奪われたときに命の代わりになるかもしれないってこと？」

「絶対とはいえませんが可能性はあります」

うなずくフィーちゃん。だから、ジャイアント・ハンドが出て来てから、フィーちゃんちよつとデュエルを急いでたんだ。

「どうして」

ここで、紫水ちゃんが訊いた。

「あなた処分人でしょ？ どうして、私を殺して奪おうとしないのよ」

「その可能性が低いから出した。と、私は受け取ったのですけど」

そういえば、ジャイアント・ハンドを出したとき、フィーちゃんは紫水ちゃんに理由を聞いてた。

紫水ちゃんは何ともいえない顔をしてから、

「その場で殺すか、あとで殺すか、殺そうとしないかを見極めようとしたのよ。殺意があるならNLTで対処する必要があるし、殺意がないならそこを含めて事情聴取する必要があるでしょ。処分人が人を殺さないんだから」

「ひとつ誤解があるようですけど」

フィーちゃんがいった。

「処分人時代であっても、私はフィール・カードを自分のものにする目的で殺処分したことはありません。私が行うのは、あくまで殺しの依頼の完遂と、私の正体を知った者の口封じだけです。そして、現在余計な口封じはやめてますので、あなたを殺処分する理由がありません」

「なら、私のカードを狙って入学したわけでも」

「ありません」

「なら、あなたが入学してきた理由は何なのよ」

紫水ちゃんが訊ねると、

「だから最初からずっと言ってます。所属先の契約で、義務教育とい

うものを受けなくてはいけなくなったからです」

って、フィーちゃん。

ところで、改めてボクたちはいま放課後の屋上にいる。ちょうどその時、雲に隠れてた夕日が顔を出し、ボクたちを優しく温かく照らしてくれた。

まるで、ふたりの関係に光が射したみたいだ。

「我が友紫水”ね」

紫水ちゃんが呟いた。フィーちゃんは、

「え？」

「あなたが、ロダンを出すときに言った言葉よ。全く、処分人と友達になるなんて、とんでもない日が来たものだわ」

紫水ちゃんがため息を吐くようにいって、

「デュエルはあなたの勝ちよ。約束通りあなたの交渉を受けてあげてあげてわ」

「いえ、その必要はたったいま無くなりました」

フィーちゃんはいったんだ。クーちゃんモードともフィーちゃんモードともいえる、中間みたいな顔をして、

「だって、紫水さんのほうから私のことを『友達』って言ってくれたんですから」

第3章（フィール・ハンターズ編） USUALLY2―からかい上手の藤稔さん

私の名前は藤稔^{ふじみのり} 木更^{きさら}。陽光学園高等部一年の女子高生。

そして、かすが様愛です。

――現在時刻10:10

「シャツガイからの昆虫になって、木更ちゃんの脳に寄生したい」
開幕。

フェンリルさんが何やら恐ろしいことを言っていました。

「あの、フェンリルさん？」

「何、木更ちゃん」

きよとんとした顔でフェンリルさんは振り返るも、数秒後。

「あ。もしかして声に出てた？」

「はい。何の脈絡もなく、突然私の脳に寄生したいって」

「うわ、しかも一番危険な所を」

どうやら、心の中ではもっと沢山やばい事を考えてたみたいです。

イリスさんが日本を発って数日。

この日、私は休日を利用して、ガルムさんより先に研究施設の検査を終えたフェンリルさんを誘ってショッピングに出かけていました。というより、彼女の日用品やこれから着る服を探しに来たのが正しいかもしれません。

その身ひとつでプライドの下を逃げてきたふたりは、当然ですけど一文無しどころか当日身に着けていたもの以外、一切の持ち物がありません。後日、ミストランさんがふたりの衣類をこっそり届けてくれたのはそのですけど、やっぱりふたりは人形扱いだったんですね。殆どがドールに着せるようなゴスロリ甘ロリを人間サイズにしたような服ばかりで、普段着と呼べる服があまりに不足してたんです。

それで、ガルムさんは鳥乃先輩に懐いてるので任せることにして、私はフェンリルさんを連れて街に出たというのが今回の経緯です。

「ところで、シャツガイからの昆虫って何ですか？ 確かクトウルフ

神話なのは分かるのですけど」

私が訊ねた所、

「被害者の脳に入り込んで、洗脳カッコ物理する生物だよ」

「……」

私はその場で絶句、数秒経ってから身震いを起こしました。するとフェンリルさんはどこか心に影を落とした顔で、

「し、仕方ないじゃないか。ボクはその、木更ちゃんのことを」

「フェンリルさん……」

「催眠術、洗脳、薬物、監禁、奴隷調教、憑依、寄生、暗示、機械化に傀儡化、チキチキ、いつそ石化や時間停止もいいよね、それとストックホルム症候群かな？ あらゆる手段で木更ちゃんをボクのモノにしたいんだ」

「ひっ」

耐えきれず私は仰け反り、数歩ほど後ろに下がります。分かつてはいましたけど、彼女の愛は闇が深すぎます。むしろ私が受け入れる努力をみせたせいで逆に悪化してないでしょうか。

「あの、そういうことは思っても口にしないほうが」

「ううん。言わないと駄目なんだよ」

フェンリルさんは、先ほどよりはつきり憂いの入った顔でいいます。

「そうやって大好きな木更ちゃんに拒絶して貰えればボクの心は深く傷つくからね。その抉れた心の傷がボクの異常さをボク自身が再認識できるし、その都度木更ちゃんへの意思確認と警告にもなる。だから、ちよくちよく口にしないと駄目なんだ」

「っ」

そうでした。彼女は誰より自分の危険さを認識してて、だからこそ聞いてて耳を塞ぎたくなる程に悲しい思考をしている。幾ら戒めでも心に自傷を重ね続けるなんて、きっと私には耐えきれません。しかも、そこまでして私と一緒にいたいのかと思うと、友情という形でしか受け入れてあげれない自分自身に罪悪感が湧きあがって、

「やめましょう、この話は」

耐えきれず私はいいました。

「それより、そろそろ着きますよ」

指さした先には一軒の衣料品店。

「徳光先輩から教えて貰ったお店なんですけど、安くて品揃えもよくて、私もよく利用しているお店なんです」

「そうなんだ。安いのには特に嬉しいよ」

フェンリルは困った笑顔で、

「いまはまだ、金銭面は何から何まで木更ちゃんから借りるしかできないからね」

ああ、そういうことですか。

「お気にならず。ちょうど今は懐が温かいですから」

「え？」

「非合法なだけあって、結構お給金がいんですよハングドって」

特に前回は訳ありな相手の要人警護だったので、色々大ごとにはなったものの、結果的には普段より多めに報酬が入ってますし。

「それに今回の任務はフェンリルさんにも手伝って頂いたのですから、協力料くらい貰って頂かないと」

「ボクの中では、もう十分貰ってるつもりなんだけどね」

「欲がないですね」

私はくすりと笑って、

「とりあえず入りましょう。金銭の話はまたあとで」

と、フェンリルさんを連れて店内に入ろうとした所、彼女はなぜか立ち止まったので、

「どうしましたか？」

訊ねると、

「ねえ、これ」

と、指す先には店の入り口に張られた一枚の紙。確認すると、

『以下のお客様を出入り禁止とします。店内で見かけた場合はスタッフにご連絡を』

なんて書かれた事項の下に、鳥乃先輩の顔写真が貼られてました。

「先輩……」

あなたは何をやらかしたのですか？

改めて私たちは店内に。

そこは、白が基調の広々とした内装に高い天井。皮の匂いみたいなものもなく、程々のインテリアが逆に清潔感と居心地の良い落ち着いた空間を演出してくれます。

「わ、おっきい」

フェンリルさんは、まるで田舎から上京してきた人みたいに辺りをきよろきよろと見渡しています。

「何か気になるものはありましたか？ 時間はありますから、先にそちらから見て回ってもいいけど」

「ううん、木更ちゃんに合いそうな首輪はあったけど大丈夫。でも、せっかくだから店内一通り見てまわりたいかな」

なお、現在位置から肉眼で見える範囲には、おしやれな「犬用の首輪」が見えます。私は見なかったことにして、

「そうですね。私も気になるものが入荷してるかもしれないですし」といった流れで、まず店内を一通り歩いてみる。

改めて傾向を窺ってみると、ターゲットは完全に女性に絞ってるのがよく分かります。一応メンズ物も揃えてはいるものの、よく見ると女性も着れそうなデザインばかり。客層も殆どが女性で、稀にみる男性も女性客の彼氏や父親のご様子。

男子禁制ではないものの、それに近い空間なわけで。なるほど、鳥乃先輩が問題を起こすわけです。

「あ、この下着可愛い」

フェンリルさんが立ち止まり、いいました。

「どれですか？」

「これこれ」

彼女が指さす先に見えたのは、黒を基調に紫で模様を足した紐のTバック。どう見ても可愛いよりセクシーが似合う下着だったわけで。それをフェンリルさんは、

「木更ちゃんに似合いそう。ねえ試しに着てみない？」

「私ですか？」

「うん」

「つつこにこの笑顔で煩惱丸出し。私は一瞬、改めて身の危険を感じたものの、直後ひとつアイデアが頭に浮かび、

「そうですね」

「着てくれるの?」

目を輝かせるフェンリルさんにいます。

「こちらの要求を呑んでくださったら、着てあげてもいいですけど」

「ほんと? 何でもするよ、ボク」

「本当ですか? でしたら」

言いながら私は同じ下着からサイズ違いの上下セットを探し、

「はい。フェンリルさんの分です」

「え?」

「試着してください」

と、フェンリルさんに逆に突き出す。

「え、ちよつと待って。サイズ、サイズほら合わないかもしれないし」

フェンリルさんは逃れようとしませんが、

「データは拾いました」

「拾った?」

「研究所のデータベースから拾いました」

「ハッキングじゃないか。何やってるの木更ちゃん!」

驚くフェンリルさん。何とはいいますけど、

「研究所のパソコンから直接。クリフォートのフィール・カードを使

えば案外何とかなりますよ?」

「やり方を聞いてるんじゃないよ」

「これでも増田さんの後任を引き継いだサイバー担当ですから」

結果、フェンリルさんが私よりバストもヒップも大きいことが発覚

して、少し羨ましくも思いましたけど。

「木更ちゃんって、案外危険人物だよね?」

「そうですね?」

「これでもかすが様とは健全で清純な関係を保ってるつもりですけど。

「そんな事より、着てくれるのですか？」

「もし断ったら？」

フェンリルさんが訊くので、

「勿論、私も下着を見せません」

「だよね」

フェンリルさんは一回しよんぼりしてから、

「背に腹は代えられないか、分かったよ」

と、観念してくれました。って、

(あれ?)

私、てっきり断るものと思って要求したんですけど。

当然ブラもセクシーだったので、さすがに恥ずかしくて無理ってなる所ですよね？

「じゃあ、ちよつと待っててね」

下着を持って試着室に入っていくフェンリルさん。私は、

(どうしよう)

と、こつそり顔を青くしていました。

策士策に溺れるとも違いますけど、普通に断ればいいのに、本人の口から諦めさせようと思った結果、とんでもない失策を辿ってしまったようです。

私は、自称機械のような頭で最善策を探しますけど答えはできません。いえ、浮かぶことは浮かぶのですが、どれも「私も試着する」ルート前提のプランに行き着いてしまつて。

そんな折、

「木更ちゃん」

フェンリルさんが試着室のカーテンから顔を出します。

「試着終わりましたか？」

「う、うん」

顔を真っ赤にフェンリルさんはいいいます。私は「分かりました」と試着室の中に入ろうかと思った所、あろうことかフェンリルさんは試着室のカーテンを開いて、

「ど、どう……かな？」

なんて、もじもじしながらセクシーな下着姿を晒したんです。

「フェンリルさん」

私は思いました。さすがに試着だからって下着姿で出てくるのは破廉恥だとか、私から入るので開ける必要のないのとか、一応男性もいるお店だから気を付けてとか、色々。

でも、私が思わず口から漏れた言葉は、そのどれとも違って、

「可愛い」

でした。

「はえ？」

変な声を出すフェンリルさん。鳥乃先輩が「見た目文系少女」と形容するように普段は少し地味めな印象をみせるフェンリルさんですけど、脱いだら控え目ながら肉感のある肢体をしていて、セクシーな下着姿も手伝ってデータ以上に色気があるんです。

それに、もじもじと体を隠そうとする仕草がとてもいじらしくて。これが萌えという感情なのでしょう。彼女の光る原石を無下にするわけにはいかない。そう思い至った私は、「次は私」という約束さえ頭から消え、

「では、次はカントリーファッションを着てみましょう」

「え？」

「フェンリルさんは、素朴で洋風な物やレトロな服装が似合うと思いますから」

「あの、ちよつと木更ちゃん？」

動揺するフェンリルさんに、私は急いで服を選んで、

「はい。試着してみてください」

と、渡す。

「だから、えつと、次は木更ちゃんが。……もう、分かったよ」

何か言いたそうだったけど、フェンリルさんは観念して試着に応じます。

その後もフェンリルさんは私が満足するまでファッションショーに付き合ってくれ、私が特に気に入った数着は当初の目的だった私服として実際に購入しました。最初の下着も含めて。

その上で分かったことは。
プライドという方の、フェンリルさんに対する服選びは間違っ
てはなかったという事ですね。

——現在時刻12:45。

「結構な時間になっちゃったね」

移動中、両手に買い物袋を下げながらフェンリルさんは疲れた顔
をしています。

「そうですね。大丈夫ですか？ 元気がないですけど」

「当たり前だよ、1時間以上着せ替え人形にされたんだから。プ
ライドだってここまでではしなかったよ」

「そう言われても、フェンリルさん素材がいいからどんな服着ても
愛らしくて」

「ああもう」

フェンリルさんは一回照れ、だけどすぐ後悔を顔にだし、

「忙しすぎて木更ちゃんとの約束も頭から抜けちゃったし。大損だ
よ全く」

結局、私は試着せずに済みました。理由はフェンリルさんがいま
言った通り。

「お詫びに美味しい所に連れて行ってあげますから」

「Kasugayaとか言わないでしょ？」

「バレちゃいましたか」

残念。お昼はかすが様に会うつもりだったのですけど。

「下着のかわりに好きな子が他所の人間にハートマークになつて
る姿を見せようとか、木更ちゃん案外DSだね」

「そういう意味ではなかったのですけど」

むしろ、かすが様が絡んだ途端、フェンリルさんがどんな思
いをするかさえ頭から抜けてただけで。

そうですね。私だって従姉妹以外の誰かがかすが様といちや
いちやしてたら傷つきますもの。従姉妹でも、深海ちゃんが本番行為
をされてた時はがつつり傷つきましたけど。

すると、フェンリルさんがぼそつと、

「喫茶なばなは駄目かな？」

「なばなですか？」

確かにあそこのご飯は美味しいですけど。

「うん。MISSTION20参照前に一度入ったとき、あの時間はBARだったけど、何だかほっとするような感じがして」

「確かに、居心地の良い場所ですね」

私はうなずき、

「じゃあ、行きましようか」

「いいの？」

上目遣いでフェンリルさんがおずおずと訊き返す。まるで子犬が儂げに見つめながら尻尾をパタパタ振ってるようで、何だかいじらしい。

私はフェンリルさんの頭を撫で、喉を撫で、

「勿論構いませんよ。私もあそここの料理は大好きですから」

返事しながらつい小動物を相手するように愛でてると、

「き、木更ちゃん。ちょっと恥ずかしいんだけど」

と、今度はもじもじと。

私はくすりと微笑み、

「ごめんなさい、さっきのフェンリルさんの仕草が子犬みたいに可愛らしくて」

「へ？」

今度は顔を真っ赤に硬直。こういうのを百面相っていうんでしよ
うか。可愛い。

フェンリルさんは俯いて、

「え、えっと。ありがとう……で、いいのかな？」

と、明らかに動揺しきった反応。

そんな彼女の反応を愉しみながら、私はデュエルディスクのタブ
レット画面から時間を確認し、

「今からだとバスを経由したほうが良さそうですね。10分ほど歩
きますけど、いいですか？」

「う、うんっ」

まだ照れが抜けてないようで、フェンリルさんは俯いたまま返事。そのまま私たちはバス停に向けて足を進めます。

人混みに併せて、小動物のように私の隣と後ろを行き来するフェンリルさんを見て、何となく私は、

(首輪、私じゃなくて、フェンリルさんのほうが似合うんじゃないかしら?)

なんて思ってしまった。

——現在時刻13:15

私たちは喫茶なばなに辿り着きました。

休日の昼時だからか、店内はほぼ満席に近い状態です。

本来なら和と昭和レトロの混ざった落ち着いた空間なのですが、今日は10代後半から50代くらいの幅広い層の声飛び交いとても賑やか。その内の半数はすでに食事を終えた後に見えますけど、食後のコーヒートークで談笑してる所から近々席を立つ様子は見られません。

一番奥に位置する隅のボックス席には、今日もヴェーラちゃんという方がひとりで座り、水のように水ではないもの、ではなく今日はアイステイーのようなものを飲んでます。たぶんウイスキーでしょう。

「いらっしやいませですよ」

入り口で様子を眺めてると、店員から声をかけられます。ですけど、この声どこかで聞いたような。

と、思ってた所、

「2名様でよろしいですか? 木更さん」

って。言いながら近づいてきたのは、なんと。

「え、菊菜さん!?!」

「木更ちゃん、知り合い?」

訊ねるフェンリルさんに、

「クラスメイトです」

と、答えてから菊菜さんにも、

「はい、ふたりです」

「カウンター席でもよろしいですか？」

見ると、テーブル席はすでに他のお客さんで埋まっているようでした。

「ボクは構わないけど」

と、フェンリルさんが呟くので、

「大丈夫です」

「ではこちらの席にどうぞ」

私たちは菊菜さんに案内され、奥のカウンター席にフェンリルさんと隣同士で座ります。

「意外でした。菊菜さんが喫茶店でアルバイトしてたなんて」

「娘なんですよ。お昼の店長の」

このお店、昼は喫茶、夜はBARとふたつの顔を持ちますけど、昼と夜で別の人が店長をしてるんです。といっても、店長と副店長が入れ替わってるだけですけど。

加えて、鳥乃先輩から聞いた話なのですが、このお店は姉妹で経営しているのだそう。

「この時間の店長って、確か水菜さんの」

「はい。水菜さんの妹が僕の母ですよ」

と、菊菜さんはくすりと笑いながら席に水を置き、「ごゆっくりどうぞ」と持ち場に戻ります。

ちなみに水菜さんとは『BARなばな』の店長で姉妹のお姉さんのほう。なお、今日は妹さんが不在らしく、代わりに水菜さんが店を仕切っていました。

「綺麗な人だったね。木更ちゃんもそうだし、木更ちゃんのクラスって美人ばかりなの？」

喉が渴いてたのでしよう。水の入ったコップを早速空にして、フェンリルさんはいいいます。

えっと、まあ菊菜さんが美人なのは確かなんですけど、

「菊菜さん、男ですよ？」

「え？」

驚くフェンリルさん。

「嘘」

「本当ですよ。学校も女子制服で来てるほどですし、初見で見抜けるほうが稀ですけど」

だから、本当は店長の娘ではなく息子という表現が正しかったりします。

「それよりご飯にしましょう。何にしましょうか？」

私は傍のおしながきを二つ取り、片方を「はい」とフェンリルさんに渡してから、メニューを確認。県外の人間としては、みそカツサンドやあんかけパスタといった食べなれないメニューが気になりましたけど、それ以上に日替わりメニューが「ランチ」に「和膳」と二種類ある事に気づきました。

「ねえ、木更ちゃん。今日の日替わりって何だろ？」

どうやらフェンリルさんも同じメニューに目が向いた様子。確かに店の前の看板に「今日の日替わり」が書かれてた気がしましたけど、ほとんど目を通さずに入っちゃったんですね。値段だけは700円だったのを覚えてるのですけど。

「何でしょうか。どこかに書いてたらいんですけど」

私は店内を見渡します。すると、カウンターの内側から、

「今日のランチはきのこの和風パスタにハンバーグのセット、和膳は秋刀魚を炊き込みと煮付けにしましたです。それと、どちらにも味噌汁と食後のドリンクが付きますですはい」

と、水菜さんがいました。又聞き情報では鈴音さんと同期らしいのですけど、見た目は小学生と間違うほどに幼くて、少し長めのおっぱ髪に狐目の細い眼差しが、人間に化けた市松人形を思わせます。こう言っつては失礼ですけど、じつと見つめると憑りつかれそうな雰囲気。なのに口を開けば喋り方がどことなく陽気な印象なのが、彼女に奥深さを感じさせます。

ちなみに、この水菜さんは昼夜問わずマスターとも呼ばれてるので、名義上ここは水菜さんのお店なのかもしれません。

「秋刀魚ですか」

そういえば、今年は北海道で秋刀魚が季節外れの大漁だと聞いてことがあります。水菜さんの説明を聞いて、私は和膳に興味が向きましたが、きのこのこの和風パスタも棄て難くて。これはどうしましょうか。

「和風パスタとハンバーグか」

一方、フェンリルさんはランチのほうに食指が向いた様子。でも、彼女も彼女で何かお悩みの様子。

「和膳も気になる感じですか？」

私が訊ねてみた所、

「うん。煮付けの秋刀魚も食べてみたくて」

と、フェンリルさん。ちようど利害が一致しそうでしたから、私は笑顔で、

「でしたら、私が和膳を頼みますから、お互いの日替わりをシェアしませんか？」

「え、いいの？」

「私も和膳を頼みたいけどパスタも少し気になってた所でしたから。駄目ですか？」

「ううん。木更ちゃんがそれでいいなら」

ぱつと目を輝かせ、フェンリルさんはいいいます。

「では、日替わりのランチと和膳をひとつずつ」

私は水菜さんにいいました。

よほど両方気になってたのでしよう。フェンリルさんは嬉しそうに小さくガッツポーズし、

「やった。木更ちゃんと間接キス」

私は提案したことを少し後悔しました。

数分後。

「お待たせしましたですよ」

と、菊菜さんが二食分の食事を私たちの前に運んでくれました。

私が頼んだ和膳は、メインの二品に加えおひたし、煮物、お新香など数種類の小鉢に味噌汁付きと予想を裏切る品数の多さ。対し、フェンリルさんのランチは、メイン二品の他にはサラダに味噌汁と品数こ

そ平凡だけど、よく見るとパスタに入ってるきのこが種類も量も盛り沢山。原価こそおそらく和膳のほうが高価なのでしょうけど、どちらがお得感あるか決めるのは困難に見えます。

「いただきます」

私は、一度手を合わせてから、まず煮魚に箸を伸ばします。秋刀魚は今の時期にしてはとても脂がのってて、煮付けた影響で口の中で殆ど噛まずにとろけました。生姜が少し利いた甘めの醤油だれも、今日の魚に併せて配分を調整されてるのでしょうか。素人の舌とはいえ700円の味を超えてる気がします。

「あれ？」

と、ここでフェンリルさんが呟くのが聞こえました。

「どうしました？」

訊ねると、

「ううん。シエアするって聞いたから、先に取り分けるものと思ってただけ」

そういうフェンリルさんは、すでに店員から小皿を貰って、パスタとハンバーグを取り分けてる所でした。

「ふふ、一度口をつけたものがご希望じゃなかったのですか？」

さつき間接キスを期待して握り拳作ってたくらいですし。

すると、フェンリルさんはばつが悪そうに、

「つい声に出しちゃった時点で諦めてたよ。だから警戒して先に取り分けると思ってたのに」

「わざわざ二度も期待を裏切ることはいけませんよ」

言いながら、私は煮魚を一口大ほど箸で掴んで、

「はい、あーん」

と、フェンリルさんにやってみます。

「え!？」

予想通り、顔を真っ赤にするフェンリルさん。そんな様子が可愛くて、私はつい追い打ちで愉しみたくなってしまい、

「要らないのですか？」

「い、要ります」

「でしたら、はい、あーん」

「ん、あ、あーん」

口を開け、唇をふるふる震わせるフェンリルさんに、私は悪戯せず、いえ逆に「悪戯しないという悪戯」って気分で、本当に「あーん」で食べさせました。

「どうですか？」

味の感想を聞いた所、フェンリルさんは、

「恥ずかしさと緊張で味分からない」

と、正直に初心な一面を吐露してくれました。

—— 現在時刻 13:50

「ごちそうさまでした」

終始「からかい上手な藤稔さん」とばかりにフェンリルさんで遊びながら、私たちは出された料理を空にしました。

「美味しかったですね、フェンリルさん」

どの料理もとても美味しく、私が舌と胃で満足してる反面、

「う、うん」

遊ばれすぎたフェンリルさんは、赤面のレベルさえ通り過ぎ放心の域に入りながら、

「ボク、幸せすぎてもうゴールしてもいいかも」

なんて言う始末。

「これで数日間は襲わないで済みそうですか？」

「たぶん」

恍惚な顔をして、フェンリルさんはいいいます。

程なくして水菜さんが、

「食後のドリンク、ご用意してもよろしいですか？」

と、タイミングを見計らい確認をとってきたので、私は、

「お願いします」

「プラス200円でケーキかアイスクリームをお付けできますけど」

「なら私はケーキを。フェンリルさんは？」

訊ねると、

「ボクもケーキを」

と、返事。

「かしこまりましたです」

水菜さんはいいました。ちなみに、事前に注文したドリンクは私もフエンリルさんもホットコーヒーです。

「ありがとうございますでしたよ」

菊菜さんが、店を出る他のお客さんを見送りしていいました。

気づくと、先ほど出て行った方を最後に、店内の客は私とフエンリルさんだけになって、お店は一転して寂しささえ感じるほど静寂に包まれてました。いつの間にかヴェーラちゃんもおりません。

「一氣にいなくなりましたですね」

水菜さんが、菊菜さんにいいました。

菊菜さんはくすりと微笑み、

「近くで何かイベントがあるのかもしれないですね。今日は普段より混んでましたから」

と、いつてから。

「時間までは少し早いですけど、ちょうど良さそうですから今日は僕もこれで失礼します」

「そういえば菊菜さんのシフトは2時まででしたですね」

水菜さんは時計を確認してから、

「では賄いを用意しますです」

「うーん、今日は」

「食べないですか？」

「気になるじゃないですか。さっきのお客様たち」

と、店の玄関に視線を向け菊菜さんはいいました。すると、水菜さんは悪い笑みを向け、

「確かに、ですはい」

「面白いことがあったら報告しますですよ」

「毎度ありがとうございますです」

なんか、ふたりの間に「お主も悪よの」とか言いそうな空気が流れています。

そのまま菊菜さんは奥に入っていく、戻ってくることはありませんでした。従業員用に裏口があるのでしよう。

「お待たせしましたです」

水菜さんが二人分のケーキセットを席に置きました。ここでフェンリルさんが、

「この店自体が情報屋だったんだ」

って。

(え?)

私はきよとんとフェンリルさんを見ます。私は、先輩からそういう事は一言も聞いてなかったのですけど。

「くすつ、ヴェーラさんにスペースを貸し出してる以上、そっちの世界に全くノータッチってわけではないですはい」

水菜さんからの返事は、微妙に肯定とも否定とも取れないもの。とはいえ、完全な昼の人間でもないのは確かのように、フェンリルさんはコーヒーを飲みながら、

「そつか。じゃあ不用意に口は漏らさないほうが良さそうだね」

「逆に私やヴェーラさんの耳に入ってもいいと割り切るなら、下手に外で話すよりは安全ですよ？ 防音や盗聴対策はバッチリしてしまわずから」

「そうやって、情報交換の場を提供することで情報屋として商品が集まる仕組みになってるわけだ。上手いなあ」

と、傍から聞くには完全に水菜さんを情報屋扱い。まあ、さすがに私もグルだろうなどは思いますけど。

「……ところで」

不意に、水菜さんは神妙な顔でいいました。

「フェンリルさん、といいましたですね。突然ですけど、鱒川ますがわ時子ときこという名前に聞き覚えはないですか？」

「時子？ 初めて聞く名前だけど」

フェンリルさんはいいます。けど、この話題に私は横で、

「確か、10年前のバスジャック事件MISSTION23-Part1の被害者ですか？」

「はいです」

「知り合いなのですか？」

「そんな所です」

水菜さんはうなずきます。

「というか、そのヴェーラって情報屋から聞けばいいんじゃないの？」
フェンリルさんはいうも、

「それが、ヴェーラさんも知らないそうです。曰く『空気を読んで現時点で想定されてるMISSION29以後のログは読まないでおいた』そうで」

と、水菜さん。

「MISSION29って？」

「それを知ってたらちやんと補足しますです」

つまり、いつものヴェーラちゃんですね。私も初めて彼女と会ったときは内心困惑しました。意味が不明すぎて。

聞いている限り未来を読んできるとかチャネラーとも違うようですしね。どちらかというと第四の壁を突破してるような。

「それって、言い換えれば手に入れようと思えばいつでも手に入る情報をわざと獲得してないって事だよな？　なんだよそれ」

不快そうにフェンリルさんがいいます。

「ほんとです」

水菜さんは同意して、

「私にとっても分からない子ですはい。むしろヴェーラさんは本当にこの世界の人間なのでしょうか？」

間違いなく私や鳥乃先輩より付き合いが深いだろう水菜さんが言うのですから、これは相当ですね。

「その『MISSION29』というのが何か分かればいいのですけど」

私がつぶやいた所、

「たぶん、未来を番号付けたものじゃないかな？」

フェンリルさんがいいました。

「未来を？」

訊ねた所、

「そう読み替えれば一番しっくりするってただけだね。それが直列か並列どちらの29番かは分からないけど」

「どういう事ですか?」

「人の未来は幾つも枝分かれしてるっていう考え方だよ」

フェンリルさんはさらにコーヒーを一口、

「例えば今日ボクは食後にホットコーヒーを頼んだけど、もし紅茶を頼んでたら別の未来に進んでるよね。そういうのを繰り返して並列に分かれた未来の29番目か、織り込み済みになってる一直線の未来を段階分けにした中の29番目か」

と、喋ってるフェンリルさんを見て、

「もしかして、そういうジャンルの話好きだったりしますか?」

と、つい続けて訊いてしまいます。

たぶん、いまフェンリルさんの言った話はパラレルワールドが関係する話なのでしょうけど、少し生き生きして解説してるように見えたので。

「好き、っていうか希望かな?」

「希望?」

「うん。もしもボクがフェンリルって存在にならなくて、元になった子がいまも幸せに暮らしてる。そんな並行世界があつたらいいなっと思うから」

私は彼女の言葉を聞いて悲しい気分になりました。

だって、その言葉は自分で自分を否定してなければ出ないはずの言葉ですから。

私は、なんて声をかければいいか迷い、

「フェンリルさん……」

「それに、タイムトラベルとかタイムリープが可能になれば、別の時系列の木更ちゃんを拉致したり、壊れるまで犯しては無かった事にしたリ、それこそ木更ちゃんがボクのモノになる未来に進むまで何度もコンティニューできるからね」

相変わらず、不意打ちで危険な発想をぶっこんでくる子です。さつき抱いた私の悲しい気持ちはどうすればいいのでしょうか。

「あ」

と、ここでフェンリルさん。話しながらケーキに手をつけずコーヒーばかり飲んでたせいか、先にコーヒーだけが空になってしまった模様。

「えっと、さすがにコーヒーのおかわり無料とかは」

「無いですね」

残念ながら水菜さんはいいいます。

「だよね」

がつくりするフェンリルさん。それなら私のをと飲みかけのコーヒーを差し出そうとした所、水菜さんは私をそっと手で静止します。そして、

「ですから」

と、首を乗り出し、水菜さんはいいいます。

「少し暇つぶしに付き合ってくださいませんか？」

「暇つぶし？」

「デュエルです。フェンリルさんが勝ったら今日はおふたりともコーヒーのおかわり無料ですはい」

と、おもむろに水菜さんはデッキがセット済のデュエルディスクを取り出しました。

フェンリルさんは疑う目で、

「それはおいしい話だけど、ボクが負けた場合は？」

「おかわり有料なだけです。それとも自分から罰ゲームが欲しいマゾさんだったりですか？」

あれ？ その言葉お客に言っていない言葉じゃないような気が。

「まさか。木更ちゃんのスパンキングとかなら悦んで受けるけど。うまい話には裏があるのが普通じゃないか」

「そもそも悦ばないでください」

私は直前の違和感も忘れ突っ込みを入れるも、フェンリルさんから返事はなく、逆に水菜さんが、

「なるほどです。どうやら彼女によほどご執心の様子。でしたらす」

と、意味深に棚の奥からジャムでも入ってそうな瓶をひとつ引っぱり出し、

「フェンリルさんが勝ったら、これも贈呈しましょうです」

「なに、これ？」

「水菜副店長特性、合法媚薬ですはい」

「デュエルスタンバイ！」

フェンリルさん興奮しすぎです！

途端、席を立ち、やる気満々でデュエルディスクを構えるフェンリルさんの変わり様に私は啞然としてしまいました。

ところで、合法媚薬といったその瓶ですけど。

よく見たら、スタジオミストの事務所で、修羅場中の深夜に精力剤とってコーヒーに溶かしてたのを見たことがあります。見たことのない商品だと思ったら、ここのオリジナルだったのでですね。

フェンリル

LP4000

手札4

□□□

□□□

□□□

□□□

□□□

水菜

LP4000

手札4

という流れで、私としては絶妙に微妙という形容しがたい形で始まったデュエル。

先攻はフェンリルさんに決まったようで、

「ボクのターン。モンスターとカードを1枚ずつセットしてターンを終了するよ」

と、最低限の布陣を敷いてターンを明け渡します。

「では私のターンですね。ドロローです」

続けて水菜さんのターン。ハングドの資料にはなかった為、私は決闘者としての水菜さんの実力は知りません。鈴音さんと同期らしいですから、それなりの実力者とは思うのですけど。

「くすっ、私は手札から《ブラッド・ドール》を通常召喚しますです」
フィールドに出現したのは、呪いの西洋人形を思わせるモンスター。その体は血塗られており、ホラーな印象を感じさせますが、攻撃力はたったの500。

「そして、カードを2枚セットし、《ブラッド・ドール》でセットモンスターに攻撃です」

そんなカードを、まさかそのまま攻撃宣言してきたのです。おそらく戦闘に関する効果を持つてるのでしよう、と思ったらそういうこともなく、

「セットモンスターは《ティンダングル・エンジェル》。守備力1800だよ」

正体を現したモンスターに人形は突っ込んで、

水菜 LP4000↓2700

普通に水菜さんはダメージを受けました。が、水菜さんは「くすくす」薄ら笑いを浮かべ、

「高守備力のモンスターをセットしてくれてありがとうございます。手札から速攻魔法《血の継承》を発動」

「あっ」

フェンリルさんは驚き、

「まさか、《ブラッド・ドール》で攻撃した目的は能動的に戦闘ダメージを受ける為？」

「正解です。《血の継承》は私が戦闘か効果でダメージを受けた際に、手札・デッキ・墓地から受けたダメージ以下の攻撃力を持つブラッドモンスターを特殊召喚するですはい」

今更ですけど、水菜さんって絶妙に語尾が独特ですよ？ 菊菜さんも語尾に「です」をよく付ける方ですけど、水菜さんはむしろ異常

につけてます。

「私はデツキから《ブラッド・コックマン》を特殊召喚です」

フィールドに現れたのは、血塗られたフライパンとフライ返しを握ったひとりの料理人。攻撃力は1200。けど、このタイミングで展開するのは水菜さんだけではありません。

「ボクも《ティンダングル・エンジェル》のリバース効果を発動するよ。このカードがリバースした場合、手札・墓地からティンダングルを1体裏側守備表示で特殊召喚する。ボクは手札の《ティンダングル・イントルーダー》をセット」

「ですが、そのモンスターの守備力は0です。続けて《ブラッド・コックマン》で守備表示のイントルーダーに攻撃です」

水菜さんの攻撃宣言。しかし、指示を受けても《ブラッド・コックマン》は攻撃を開始しません。

「悪いけど」

フェンリルさんはいいました。

「《ティンダングル・エンジェル》のリバース効果が相手のバトルフェイズに発動した場合、そのバトルフェイズは終了になるよ」
「くっ、そういう効果ですかです」

水菜さんは少しだけ悔しそうに「ターン終了」と宣言しました。

「あ、待って」

ここでフェンリルさんはいいました。

「ここで永続罫《バミューダトライアングル》を発動するよ。この効果はボクか相手のエンドフェイズ毎に1回まで使用可能。デツキからカードを3枚墓地に送るよ」

そういつてフェンリルさんはデツキからカードを3枚墓地に送ります。

墓地に送られたカードは、《ティンダングル・スパイク》《ティンダングル・ベース・ガードナー》そして2枚目の《バミューダトライアングル》でしょうか。

「良かった。このカードは同名カードの効果でティンダングルを墓地に送ってないと、ターン終了時に自壊するんだけど、《ティンダング

ル・スパイク』がいたから自壊はしないよ」

加えて、さりげにフェンリルさんの墓地に《ティンダングル・ベース・ガードナー》が落ちました。彼女のデツキは、墓地にこのカードがいることで真価を発揮するカードが幾つか存在するので、上手く準備が整った形になります。

「なら、改めてターンエンドです」

水菜さんはいいました。

フェンリル

LP4000

手札1

□□「《セットカード》」

□□「《ティンダングル・エンジェル(守備表示)》」「《セットモンスター(ティンダングル・イントルーダー)》」

□ー□

□「《ブラッド・コックマン》」「《ブラッド・ドール》」□

□「《セットカード》」□「《セットカード》」

水菜

LP2700

手札1

「ならボクのターンだね。ドロー」

フェンリルさんはカードを引いて、

「ボクは《ティンダングル・イントルーダー》を反転召喚するよ。そして、リバース効果によって《ティンダングル・トリニティ》を手札に加える」

イントルーダーには、「ティンダングル」カードを1枚サーチすると、いうリバース効果を持っています。

「続けて、たったいまサーチした《ティンダングル・トリニティ》を通常召喚。そして」

場の3体でリンク召喚、と繋げる気だったのでしよう。

ですが、トリニティの召喚成功時に、水菜さんは早速セットカードを発動。直後、発動の確定を待たずしてフェンリルさんの《ティンダ

ングル・イントルーダー』がフィールドから消えたのです。

水菜さんはいいました。

「くすっ、ここで私は、あなたの場の《ティンダングル・トリニティ》をリリースして《神秘の中華なべ》を発動です」

「え」

と、私たちは反応。続けてフェンリルさんが、

「あのさ。待ってよ、確か《神秘の中華なべ》って自分のモンスターをリリースするカードだよな？」

すると水菜さんにはやけの入った黒い笑みで、

「《ブラッド・コックマン》のモンスター効果。このカードが場にいる限り、私は相手モンスターをリリースして《神秘の中華なべ》を発動できるです」

「嘘っ」

「くすくすくつすす、ちなみにリリースは発動コストですから、今更無効にしてもイントルーダーは帰ってきませんです」

「うわっ！ でも、これだけならまだ」

フェンリルさんが言ってしまうと、水菜さんは更に、

「なるほど、これだけならまだ足りないと言いますですか」

と、フィールドから《ブラッド・ドール》を剥がし、

「それでは要望にお応えして、《ブラッド・ドール》をリリースして効果をチェーン発動です。このモンスターは自身をリリースする事で、相手にレベル4以下のモンスターのリリースを強制させるです」

「げっ」

「どうしたのですか？ あなたの要望ですよ？ もっと盤上を荒らしてほしいと」

「そんな要望してないよ」

「これでも足りないですか、フェンリルさんはとんだドMです」

「違うよー！」

水菜さん、話術と煽りで完全にフェンリルさんのペースを掴んじやっています。さすが菊菜さんの親戚。

「と、まあフェンリルさんの性癖暴露はあとにして」

「まだ言うか」

「どちらをリリースするのですか？ いえ、どちらが消えるほうがよい盤面苦しくてキモチイイ選択ですか？」

「結局後回しにしてないじゃないか」

ふざけすぎて、そろそろフェンリルさんの怒りを完全に買いそうです。

しかも、《ティンダングル・トリニティ》は、「ティンダングル」モンスターのリンク素材になった場合に様々なアドバンテージを与えるカード。そんなカードをリリースしたら、現時点のフェンリルさんに「ティンダングル」リンクモンスターを出す手段がないか、少なくともリンク1は持ってないという情報を与えてしまう形になります。

そのうえ攻撃力0で攻撃表示だったので、ブラフで残すわけにもいきません。

「トリニティをリリースするよ。ああもう」

フィールドを離れる《ティンダングル・トリニティ》。続けて《神秘の中華なべ》の効果も受理され、

水菜 LP2700↓4900

《ティンダングル・イントルーダー》の攻撃力分、水菜さんのライフが回復。

「そして、《ティンダングル・エンジェル》の攻撃力では《ブラッド・コックマン》は倒せないです。料理人様々ですねごちそうさまです」「ああもう、その口黙らせたいのに何もできないのすっごいストレス溜まるよ」

いまにも地団駄を踏みそうな様子のフェンリルさん。

「仕方ない、カードをセットしてターン終了」

と、フェンリルさんは宣言。直後、バンと音を立てて自壊する《バミューダトライアングル》。

「えっ？」

一瞬、私もフェンリルさんも何が起こったのか分からず呆然となるも、すぐ、

「あっ」

と、気づきました。

効果を発動し忘れてたのです。

「くすっ」

水菜さんは、ここぞと嘲笑で追い打ちをかけ、

「なるほど。確かにこのターン『同名カードの効果でデインダングルを墓地に送って』ないですからね。これは儲けものでしたすはい」「何だよこれ。何だよこれっ!」

店内だということも忘れ、怒声をまき散らすフェンリルさん。

さすがハングドのトップ陣とほぼ同期。相手の動きを読むに必要な情報を手堅く入手しつつ、話術で相手を翻弄し自滅に誘う。このまま進めばフェンリルさんは実力の半分も出せずに負けるといいう展開だっであり得ます。

「合法媚薬なんて、絶対入手しなくちゃいけないのに」

いえ、むしろ入手しないでくれますか？

フェンリル

LP4000

手札1

「《セットカード》」□□

□□「《ティンダングル・エンジェル（守備表示）》」□□

□□「—」□□

□□「《ブラッド・コックマン》」□□

□□「《セットカード》」

水菜

LP4900

手札1

「私のターンですね。ドローです」

水菜さんはカードを引き、

「くすくす、こうきましたですか。魔法カード《渇きの主》を発動です。このカードはデッキからブラッドモンスターもしくは通常召喚可能なレベル6以上の閻属性モンスター1体を手札に加え、そのレベル×200ダメージを受けるですはい。私は《ブラッド・ヴォルス》をサー

チして800ダメージを受けるです」

水菜 LP4900↓4100

ここで水菜さんは、ライフを削ってでも《ティンダングル・エンジェル》を戦闘破壊できる攻撃力1900の下級モンスターを手札に加え、

「そして召喚。ここで《渇きの主》の効果の続きが入りますです。このターン、《渇きの主》の効果でサーチしたカードと同名モンスターを召喚した際、このカードを装備魔法扱いとして召喚したモンスターに装備。装備した《ブラッド・ヴォルス》は2つの効果を得ますです」

「2つの効果？」

フェンリルさんが訊ねると、

「貫通効果と、自身が戦闘で破壊したモンスターのレベルがランク×200だけライフを回復する効果です」

「うっ」

「つまり《渇きの主》で失ったライフは《ティンダングル・エンジェル》を倒して補うですはい」

《ティンダングル・エンジェル》はレベル4なので、《ブラッド・ヴォルス》で戦闘破壊すれば丸々800ライフ分を取り戻せる形になります。

「くすっ、カードを1枚セット。バトルです！ 《ブラッド・ヴォルス》！ 《ティンダングル・エンジェル》も料理してあげます」

《ブラッド・ヴォルス》が飛び掛かり、その斧を振り下ろしてモンスターを両断。その衝撃が100ポイント分とはいえフェンリルさんを襲い、さらに《ティンダングル・エンジェル》の断面から血を吹き出すと、水菜さんの体にかかって血塗られた姿にしながら、

フェンリル LP4000↓3900

水菜 LP4100↓4900

と、ふたりのライフが変動します。

「くす、くちそうさまです」

水菜さんはさらに煽るようなことを言います。これはフェンリルさん、さらに苛々が募るのでは。

そう思った矢先、フェンリルさんの眼前で空間に裂け目が生まれ、中からひとつの大きな扉が出現しました。しかも、この扉って確か。「やっつと、その口を黙らせることができそうだよ」

フェンリルさんがいいました。煽られすぎたせいかな、虚無的に人を見下ろす顔で、

「ボクは罫カード《ティンダングル・ドロネー》を発動するよ。このカードは、墓地にティンダングルが3体以上存在する状態で、相手モンスターの攻撃で戦闘ダメージを受けた時に発動可能。その相手モンスターを破壊し、EXデッキから《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》1体を特殊召喚する」

効果を言い終えると同時に、扉はゆっくりと開く。同時に《ブラッド・ヴォルス》の斧の先から棘のような舌が伸び、心臓を一突き。

舌の付け根から瘴気があがると、《ブラッド・ヴォルス》を消滅させながら、中から《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》が姿を現しました。

「鋭角の世界の天使様よりたつた1000高い攻撃力で殴ってくれてあげりかどう、かな？ 悪いけど、その攻撃力だけの斧持ちには消えてもらうよ」

散々煽られた分を少しでも煽り返すように、フェンリルさんはいいました。さらに、

「そして《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》の攻撃力は0だけど、ボクの墓地に《ティンダングル・ベース・ガードナー》を含むティンダングルが3種類以上いる場合、攻撃力は3000アツプする」

《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》 攻撃力0↓3000

その、フェンリルさんのモンスターを見て、

「はえ!?!」

水菜さんは変な声を出しました。

「私のモンスターを破壊した上、攻撃力3000のモンスターをポンと召喚ですか。まさか、そんなカードがあるとは迂闊でしたです」
対し、今度は水菜さんのほうがこの状況に何もできないらしく、

「仕方ないです。私はこれでターン終了です」

フェンリル

LP3900

手札1

□□□□

□□□□

「《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》——□

「《ブラッド・コックマン》」□□

「《セットカード》」「《セットカード》」□

水菜

LP4900

手札0

「じゃあ、ボクのターンだね。ドロー」

先ほどの虚無的な顔のまま、トーンの落ちた声で静かにカードを引いて、

「手札から永続魔法《ナーゲルの守護天》を発動。このカードが魔法・罨ゾーンに存在する限り、メインモンスターゾーンに存在するボクのティンダングルモンスターは戦闘・効果では破壊されない。さらに、《ティンダングル・アポストル》をケルベロスのリンク先に通常召喚。この時点で、アポストルは《ナーゲルの守護天》によつて戦闘破壊と相手の効果破壊を受け付けない」

ここで、いまドローしたカードを含め手札を使い切るフェンリルさん。なお、アポストルの攻撃力は800。

「そして《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》は自身のリンク先にいるティンダングルモンスター1体につき、攻撃力をさらに上げる」

この効果により、アキュート・ケルベロスの攻撃力はさらに変化し、《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》 攻撃力3000↓3500

なんて数値に。

「バトル！ このターンで決めてやる！ 《ティンダングル・アキュ

ト・ケルベロス』で《ブラッド・コックマン》に攻撃！」

アキュート・ケルベロスの口から強力な炎のブレスが放たれる。料理人は一瞬で炭になり、超過ダメージが水菜さんにまで届くその瞬間、

「《ナーゲルの守護天》更なる効果！　ボクのティンダングルが相手に与える戦闘ダメージを、1ターンに1度だけ倍にする」

「そういう事ですか」

水菜さんがつぶやきました。たぶん「このターンで決める」を指してのことでしょう。

水菜さんのライフは4900。ここでアキュート・ケルベロスで攻撃しても水菜さんには2300ダメージしか与えられず、アポストルの800ダメージを加えても、ライフは1800も残ってしまいました。

ですが、この効果を介してなら、アキュート・ケルベロスが与えるダメージが4600まで跳ね上がるので、

水菜　LP4900↓300

と、一気に虫の息な数値に。

「終わりだよ。《ティンダングル・アポストル》で直接攻撃」

フェンリルさんは勢いそのまま言いますけど、

「ところがどっこい」

水菜さんは言いました。そして、2枚あるセットカードのうち1枚を表向きにして、

「アポストルが攻撃する前に、私が戦闘ダメージを受けたタイミングで2枚目の《血の継承》を発動です」

「えっ」

ピタッと動画みたいに一時停止するフェンリルさん。あのカードは確か、

「この効果で私は、受けたダメージ4600以下の攻撃力を持つブラッドモンスターを手札・デッキ・墓地から特殊召喚するですはい」「げっ」

さーっと顔が青ざめるフェンリルさん。仮にブラッドモンスター

の中に攻撃力4000級のモンスターがいた場合、それさえも簡単に呼び出してしまえるのである。

「くすつ、心配しなくても大丈夫です。私が出すのは攻撃力1400の《ブラッド・アームガンナー》ですから」

予想に反して出現したのは、右腕がアームガンになった、バイザー付きのメットを被ったワイルドな褐色の男。確かに攻撃力は宣言通り1400ではありませんけど、さりげにレベルは8と表示されています。

「で、す、が。……くく、くすつ」

水菜さんは、わざらしく笑みを噛み殺し、堪えきれない声をしつかり漏らしながら、

「《ブラッド・アームガンナー》のモンスター効果。このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上のモンスター1体を選んで破壊するです。私は当然アキュート・ケルベロス破壊」

直後、アームガンナーはジョジョ立ちにありそうな独特なポーズを取りながらアームガンでアキュート・ケルベロスを撃ち抜きます。

おまけに、

「なお、《ブラッド・アームガンナー》のこの効果は無効化される効果を受け付けませんです」

と、元々フェンリルさんに無効する手段なんてなさそうなのに、わざと言い放つ水菜さん。

フェンリルさんは、再び光景を呆然と見てるも、程なくして「あつ」となり、

「そっか。《ナーゲルの守護天》はメインモンスターゾーンへの耐性、EXゾーンのアキュート・ケルベロスには耐性付かないのか」

と、驚きます。

そういえば、前にフェンリルさんと対戦したときも、普通に勘違いしたまま説明してた気がします。今回はメインモンスターゾーンと言ってましたけど、頭の中では完全に混同したままだったのでしよう。

「ターン終了だよ」

フェンリルさんはいいました。先ほどまでの表情も剥がれ、意気消沈に近い様子がみ取れます。

フェンリル

LP3900

手札0

□□「《ナーゲルの守護天》」

□□「《ティンダングル・アポストル》」□

□—□

□□「《ブラッド・アームガンナー》」

□□「《リビングデッドの呼び声》」□□

水菜

LP300

手札0

「私のターンですね、ドローです」

そんな中、カードをドローする水菜さん。そして、引いたカードを確認して、

「なるほどです。そうくるですか」

と、つぶやきました。

「まずは《リビングデッドの呼び声》を発動。墓地から《ブラッド・ドール》を特殊召喚です」

「うわ、またか！ って、え？」

フェンリルさんが相反するふたつの反応を見せた中、

「《ブラッド・ドール》の効果です。《ティンダングル・アポストル》をリリースしてくださいです」

水菜さんは宣言。これが通れば、一応、手札とフィールドにフェンリルさんのカードが一切なくなります。でも……。

「あ、うん」

言われるままリリースするフェンリルさん。その様子は、虚無とも意気消沈とも違った困惑を見せており、私はその理由に気づいてるので苦笑を抑えるしかできません。

「続けて《ブラッド・アームガンナー》をリリース。《ブラッド・コツ

クマン』をアドバンス召喚です」

あ、このモンスターって上級モンスターだったのですか。攻撃力1200で攻撃力を補う効果も持ってないみたいですけど。

「《ブラッド・コックマン》の効果です。このカードのアドバンス召喚に成功した時、デッキから《ハンバーガーのレシピ》と《ハングリーバーガー》を手札に加えますです」

いえ、一応攻撃力を補う効果は持ってみたいですね。これを本当に補うとっていいのかは疑問ですけど。

「そして《ハンバーガーのレシピ》を発動です。フィールドか手札から、レベルが6以上になるようにモンスターをリリースして儀式召喚を行うです。私はレベル6 《ブラッド・コックマン》をリリースして《ハングリーバーガー》を儀式召喚です」

こうして出現したのは、特に効果も持たず攻撃力2000丁度の儀式モンスター。

「そしてスキル発動、《リバースペイン》！」

あ……。終わった。

「このスキルは、私が戦闘ダメージを受けた次の自分のターンのメイソフェイズに発動可能。直前に受けた戦闘ダメージの半分の数値分、ターン終了時まで私のモンスターの攻撃力に加算させるです。直前に受けた攻撃は、《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》から受けた4600ダメージ。その半分の2300分を《ハングリーバーガー》の攻撃力に加算です」

《ハングリーバーガー》 攻撃力2000↓4300

モンスターの攻撃力は一気に膨れ上がり、一撃でワンショットキルできる数値に。

「そしてフェンリルさん、あなたの場合にはモンスターも魔法も手札でさえも一切ありませんです。リバース効果デッキという仕様上、もしかしたらモンスターをセット状態に戻す墓地効果があるのかもしれないですけど、今ならそんな効果も無意味ですはい」

「あー、そっちを読んじゃったのか」

どこことなく、すまなそうにフェンリルさんはいいますけど、水菜さ

んの耳には届かず、

「くすくす、ぐすすす、ぐつつすす、この攻撃が通れば勝負は私の勝ち
ですはい。粉碎！玉砕！大かっげほげほっ」

見た目は逆に問題ないのですけど、まるで子供みたい調子乗って
はしゃぐアラフォーのマスターさん。しかも興奮しすぎてゼウス
ちゃんみたくむせてますし。

「それはともかく、《ハングリバーガー》でフェンリルさんに攻撃！

破滅のバーストもぐもぐタイム！」

酷い攻撃名を宣言してきました。

……さて、フェンリルさんの酷いカードが起動しますよ。

「墓地の《ティンダングル・ドロネー》を除外して効果を発動」

「へ？」

「このカードは墓地に存在する場合、除外することで墓地のティンダ
ングルモンスターを3体裏側守備表示で蘇生するよ」

フェンリルさんはいって、

「ボクは《ティンダングル・エンジェル》《ティンダングル・スパイク》
《ティンダングル・イントルーダー》の3枚をそれぞれ裏側守備表示で
蘇生」

「何ですかそのカードは!?!」

水菜さんはオーバーリアクションに仰け反り、

「で、でしたらせめて《ティンダングル・エンジェル》だけでも攻撃し
て落としますです。テンペストもぐもぐアタック！」

また攻撃名が。

ですけど、《ティンダングル・エンジェル》は攻撃を受けてリバース
はしたものの、肝心の戦闘破壊はされません。

「これは」

眩く水菜さんに、

「《ナーゲルの守護天》の効果で、ボクのティンダングルは戦闘破壊さ
れないよ」

「そうでしたです」

ガツクリする水菜さん。そこへ追い打ちをかけるように、

「ねえ、ひとつ聞いていいかな？ 前のターン、どうして《リビングゲットの呼び声》を使わなかったの？」

「え？」

「そうすれば、いくら《リバースペイン》があるからって、アキュート・ケルベロスの攻撃前にアポストルを除去してればダメージは1000は抑えれたはず」

そこまでフェンリルさんはいつてから、

「これはボクの推測だけど、水菜さん《ブラッド・コックマン》を引いて急に戦略変えたよね？ 本当は《リビングゲットの呼び声》で呼び出すのは《ブラッド・ヴォルス》で、《リバースペイン》をどちらかにかけてアームガンナーと2体で《ティンダングル・アポストル》をサンドバッグにする気だったんじゃない」

「その通りです、はい」

今度は水菜さんのほうが意気消沈した様子でいいいます。そこをフェンリルさんは、いままで煽られた分が込められた満面の笑顔で、「ごめんね。そっちルートだとボク負けてたんだ♪」

「ですよねです」

膝についてORZなポーズを取る水菜さん。

フェンリルさんって、結構どろどろした性格してますよね？

フェンリル

LP3900

手札0

□□《ナーゲルの守護天》

□《ティンダングル・エンジェル》□《セットモンスター（ティンダングル・スパイク）》□《セットモンスター（ティンダングル・イントルーダー）》

□ー□

□□《ハングリーバーガー》□

□《リビングゲットの呼び声》□□

水菜

LP300

手札0

「じゃあ、ボクのターンだね。ドロロー」

フェンリルさんはカードをドロロー。しかし、水菜さんはターン終了を口にしてません。

「くっ」

直後、水菜さんは悔しそうに、

「私のターン終了に気づかなければ、フェンリルさんのタイムアップで勝てたものを」

どうやら、ORZのポーズで誤魔化しながら、こっさりターン終了をデュエルディスクに伝えてた模様。

この人も結構酷い性格してますよね？

「はあっ」

フェンリルさんは一回嘆息し、

「その様子なら遠慮はいらないよね？ 《ティンダングル・スパイク》を反転召喚。リバーズ効果で《ハングリバーガー》を破壊」

瘴気からティンダロスの猟犬の口と舌だけ突き出たようなモンスターが出現すると、まずその舌を伸ばして《ハングリバーガー》を突き刺し、

「次に《ティンダングル・イントルーダー》を反転召喚。2枚目の《ティンダングル・ドロネー》を手札に加える。そして」

イントルーダーの効果で、再びあの危険な罠カードがフェンリルさんの手に。加えて、フェンリルさんが腕を高く伸ばすと、辺りは急に闇色の世界に切り替わります。

フェンリルさんはいいました。

「木更ちゃんに届け、ボクのサーキット！」

「それ私の口上!?!」

私の「かすが様に届け、私のサーキット！」がパクられました。

「アローヘッド確認！ 召喚条件はティンダングルモンスター3体。

ボクは《ティンダングル・エンジェル》《ティンダングル・スパイク》

《ティンダングル・イントルーダー》の3体をリンクマーカーにセット

！ 来て、LINK-3！ 鋭角の王《ティンダングル・アキュート

ケルベロス』！」

フェンリルさんの上空にリンクマークーが出現すると、3体のモンスターは鋭い鋭角に変わりながらマークーへと取り込まれます。すると、リンクマークーは先ほども出現した扉へと姿を変え、煙と共に中から飛び出たのは3つの炎。それは混ざり合い、三つ首のモンスター《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》に変わりました。もちろん、攻撃力はすぐ0から3000に。

「じゃあ、いくよ。《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》で攻撃。《ナーゲルの守護天》の効果で戦闘ダメージを倍に」

しっかりと、フェンリルさんは6000ダメージに変えてフィニッシュしてました。

水菜 LP300↓0(—5700)

まあ、えつと。

水菜さんって言動は終始相手を煽っておちやらけて引つ掻き回すスタイルでしたけど、デツキ自体は派手な動きもせず1:1交換の除去を中心に、地道に盤上をコントロールする動きでした。

そんな水菜さんのデツキでは、悪いですけど《ティンダングル・ドロネー》を使われるだけで負けますよね。

——現在時刻14:10

「お待たせしましたです」

デュエル前後とはうって変わり、水菜さんは穏やかな顔でコーヒーを淹れなおし、2人分のカップを私たちの席に置きます。

それも、私たちが選ばなかったほうのデザートであるアイスクリームも一緒に。

「いいの？」

と、アイスを指してフェンリルさんが訊ねると、水菜さんはくすりと優しい微笑みで、

「気にしないでくださいです。こちらは別件で私からの奢りですから」

「別件？」

「久々にデュエルで煽り全開のDQNプレイさせて頂きましたですから」

「ああ。あれはすつごく苛々したよ」

フエンリルさんはいいながら、まだ残ってたケーキと一緒に2杯目のコーヒーを愉しみます。

「昔から、ああいうプレイスタイルだったのですか？」

私が訊ねると、

「そうですね。当時からデュエルセンスがぶっ飛んでた霧子さんや、すべてを10点満点中5点のセンスでデュエルする鈴音さんと違って、私は盤上だけで勝てる人間ではなかったですから」

「だからって、それをここでやるかな」

フエンリルさんはいうも、

「真剣勝負ですから。手を抜いたらそれこそ失礼でしょうです」

というのが水菜さんの言い分です。けど、彼女はデュエルに誘う段階から煽り始めてたわけで、さらに調子に乗りすぎてむせてたり、正直、見た目だけじゃなく中身まで悪戯好きな子供の精神年齢で止まってるのではないかと疑いたくなります。

「あの頃は、3人でふざけあって楽しかったですね」

水菜さんは懐かしそうに言ってから、水を洗い終えた皿を棚に戻し始めました。

タイマーでセットしてあったのでしよう、店内のスピーカーからジャズが流れだしました。ランチタイムを過ぎた静かな店内にとてもよく合います。

私はコーヒーを一口飲み、ここでふと気づいて、

「水菜さん、このコーヒー。1杯目に頂いたものとは少し香りが違うような気がするんですけど」

「あ、本当だ。このコーヒー少し芳ばしい」

フエンリルさんがいった所で、

「気づきましたですか？」

水菜さんがいいました。

「実はこれ、時子が考えたブレンドなんです」

「行方不明の？」

小さく驚くフェンリルさんに、水菜さんは「はい」といい、「当然、商業利用の許可は得ていないですから、このブレンドは非売品なんです。それでも、いつでも作れる状態にはしておいて、たまにプライベートで愉しんでいるんです」

「このコーヒーも、時子さんって方が戻ってくるのを待ち望んでるんですね」

私はもう一口コーヒーを飲みます。

この芳ばしき、どこか馴染みがある気がするのですが、一体何だったのでしょうか。

「帰ってくるといいね。その時子さんって子」

フェンリルさんがいった所、水菜さんはほんの数秒のタイムラグの後、

「……ええ、そうですね」

と、返してから、小さくぼそつと。

「やっぱり、他人なのでしょうか」

眩くのが聞こえました。

何が他人なのでしょうか。私は気になりましたけど、確認しようかどうか考える間もなく、

「水菜〜。ちく〜く〜く〜つす」

突然、ハングド司令の高村さんが、完全に泥酔しきった状態でやってきたのです。その隣には見慣れない女性が高村さんと肩を組みあつて、

「えへへ。みなつちくやつほ〜」

と、同じようなノリで水菜さんに挨拶します。

その様子から、彼女も高村さんや水菜さんの同期でしょうか。少し長めの髪に、暖色で動きやすさ重視のボーイッシュな服装。おそらく30歳は超えてると思いますけど、無邪気な笑顔が可愛らしく、まるで大学生〜新卒社会人のようなエネルギーシユさがあり相応の若々しきを感じる方です。

水菜さんは困った顔で、

「霧子さん優希さん、なに昼の2時から出来上がってるですか」

「アンタにだけは」

「言われたくないよ」

ふたりはおぼつかない足取りでフラフラと進んではボックス席に倒れこみます。直後、少し遅れて鈴音さんが追いかけるよう到来店して、

「水菜さん、申し訳ありませんけど温かいお茶を三人分お願い致しますわ」

するとふたりは横から、

「あ、私は例の麦茶とほうじ茶をミックスしたオリジナルブレンドで」「ぼく……じゃなかった私も」

優希さんといったはず。すぐ訂正したとはいえ、その年で自分をぼくという方は初めて見ました。

「それはまかない専用の非売品です」

と、水菜さんは言いながらもすぐコンロでやかんを温めだし、私たちに向かつて小さく、

「友人という名の馬鹿共が煩くしてごめんなさいです」

って、こっそり豆菓子をプレゼントしてくれました。

「やっぱり、いい店だね。ここ」

アイスも完食し、豆菓子を口に放り込みながらフェンリルさんはいいます。

私は、

「そうですね」

と、いいながら。私はむしろ『喫茶なばな』にそれとない寂しさを感じてました。

ジャズの流れるゆったりとした空間で、昼は皆の憩いの場として、夜は情報を求める業界の人たちが集う場として、お店はすべてを受け入れる。

だけど、このお店が本当に待ってる人間は、未だ顔を見せてくれない。

時子さんという方。

彼女の手掛かりを記した『MISSION29』という謎のワードの中に、今日私たちがお店にきたことは関係しているのでしょうか。

全ての真実は、まだ闇の中。

おそらく、ヴェーラさんという方にとっても。

MISSION 27 — 暴食

私の名前は鳥乃トリノ 沙樹サキ。 陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「だから梓、至急島津先生以外のお姉さんに癒されたいって話なのよ私は！」

週明け。

私はいつもの教室で、いつも以上に熱の籠った言葉を梓にぶつけていた。頭に巨大なたんこぶをつけたまま。

梓は、血糊のビジョンがべったりついた使用済のハンマーを枕代わりに抱え、机に突っ伏しながら、

「これ以上いったら、今度は窓の外に叩き落して静かにするよー」

って、目をこする。

「でも梓」

「どうして今日に限ってしつこいの？ 私、今日はきゃんきゃんされると頭に響くのにな」

曰く、梓は寝不足らしく、今朝も重いものが胃に入らず、うどん5玉だけ釜揚げうどんにして食べたらしい。私からすれば十分すぎる量だけど、重要なのは量より肉や揚げ物などを一切摂ってない点だろう。

だからって、私も今回は退くわけにはいかない。だって、

「仕方ないでしょ。今日は性欲を凌駕して純粹に梓に癒されたかったのに、当の梓がこれなんだから第二案でお姉さんから母性を求めるしかないじゃない」

という話である。

ゼウスちゃんが行方不明から数日。木更ちゃんはすでに一度双子の姉を失ってる手前、今回の事件は彼女のメンタルを即死に追い込んだ。司令陣の計らいでヴェーラから情報を買う話になったのだけど、ちようど取材で遠出してらしく不在。

仕方なく私と木更ちゃんまで自腹切って調査してるけど結果は乏しくて。結果、こっちまで参ってしまったわけだ。

「もう。その言い方ずるいよー」

ハンマーのソリッドビジョンが消滅し、改めて机にべたつと突っ伏す梓。この状態で私に向いた視線が上目遣いみたいで可愛い。

それに、自分を一番に求められたせいかちよつと嬉しそう。

「ずるい理由だから強気に出たわけだしね。つてことで、年上のお姉さんが駄目なら梓が癒して」

「今日は駄目。死ぬ程眠いから」

それでも、梓は私の提案を拒否る。自覚してる以上に参ってたらしい私は、本当に話しかけるだけで負担に映る梓を気遣うつて発想を忘れてたのだけど、ここは私の天使。

「だから、沙樹ちゃんが私を癒してー」

反対に、あちらから癒しを求めてきたのだ。普段の数割増しに緩々な顔でいう梓に私は、

「仕方ないわね」

つて、梓の頭を撫で、ねんねんころりなんて歌ってあやすことで、梓は快眠。私もそんな幼馴染に癒されるWinWinな結果に落ち着くのだった。

クラスメイトたちが砂吐きそうな目をこちらを眺めてた。

放課後、私は一直線で事務所に向かい、

「ただいま」

と、入ってすぐのソファに半ば投げるように鞆を置くと、

「お疲れ様です、先輩」

すでにパソコンで作業をしていた木更ちゃんが、冷蔵庫から作り置きアイスコーヒーを出し、コップに注いで渡してくれた。

「ありがとう」

私は素直に受け取り、喉が渴いてたので一気に飲み干してから、

「学校は今日も休み？」

「はい。手遅れになる前に情報が欲しくて」

木更ちゃんはいった。瞼の下にはくまで出来ており、たまに足元がふたつく様子が伺える。恐らく原因は睡眠不足と心労だけじゃない。

推測するに。

「お昼は？」

「カロリーメイトとゼリーを頂きました」

「やっぱり。ろくな食事を摂ってない。」

さつきもいったけど、現在木更ちゃんはゼウスちゃん関係でメンタルをやられている。よく見るまでなく、彼女の笑顔は一層機械的に映り、社交や応対は完全にルーチン。まるで架空のメイドロボと応対してるようで言動に人間味を全く感じない。頂いたコーヒーも、人の手で淹れたはずなのにまるでドリンクバーのアイスコーヒーみたいだった。

私は、いまの木更ちゃんを前に余計心が沈みかけるのを何とか抑え、

「木更ちゃん。仕事代わるから少し休んで頂戴」

「いえ、大丈夫です」

「一回脳を休めたほうが効率いいから」

「いいえ、木更は大丈夫です」

絶対大丈夫じゃない。

「そう見えないから言ってるんだけど」

「って、私がいった所、

「あなたもですわ。沙樹」

鈴音さんがタブレット片手に歩み寄ってきた。

「梓さんが心配されてましたわよ。性欲を二の次にするという危険信号をキャッチしたと」

言いながら、鈴音さんは画面に表示された梓とLINEでのやり取りを私に見せる。

M I S S I O N 2 6 参 照

アインスの一件以後、梓がどこまで信用してるかはともかく、ふたりは連絡先を交換したらしい。事件に巻き込んでしまった手前、有事の際に梓の安全を護る為だったり、私の上司兼保護者代理として互いの情報を共有する為だったり、まあ理由は色々だろうけど。まさか学校のやり取りが早速報告されるとは。

しかし、性欲より梓に癒されたいと言っただけで危険信号だなん

て。だなんて。ごめん、レッドゾーンって話だったわ。

「霧子さんが呼んでますわ。資料室のパソコン前で待つておりますから、その用事を片付け次第、今日はあなたこそ休んでくださいませ」
「司令の件は了解。でも休む気はないわ」

私はいつたけど、

「梓さんの前ではいつもの沙樹でいてくれないと雇用するこちらも困りますもの」

って。痛い所を。

「分かった」

仕方なくうなずき、私は司令の待つ資料室の、元々増田の定位置だった場所に向かった。

高村司令は、パソコンで何か作業をしてる様子だったけど、私に気づくと体をこちらに向けて、

「ちっす」

「話があるって話だけど」

つい、こちらは挨拶も忘れ本題に切り出すと、

「藤稔は思ったより仕事をしてたみたいね」

「え?」

「鳥乃を立ち直らせるっていう、ハングドに所属するための条件よ」

そういえば、木更ちゃんは元々私のためもあつてハングドに所属したんだっけ。

「あの子は普段のやり取りの中で、さりげなくアンタの手綱を引いて、メンタルをちゃんと管理してたみたいね。あの子が潰れた途端、アンタのメンタルもガタガタと崩れてったのをみて、ここまで支えてくれたのかと気づいたわ」

そんな、司令の言葉を聞いて、

「まさか契約を切るとか? 私か木更ちゃんの」

元々私は、メンタルがやられてる状態では使い物にならないって評価だったし、木更ちゃんは、そんな私を立ち直らせる条件をいま守れていない。

「まさか」

司令は呆れた様子でいい、

「今じや藤稔は立派な増田の後釜。組織の重要度はアンタより上よ」
ぐっ。

「鳥乃も鳥乃で、最近アンタ指名の依頼も増えてるしね。何だかんだウチの稼ぎ頭を切ると思う？」

その殆どが神簇家だったり黒山羊の実からだったりするけど。

「けど、いまの鳥乃は増田が死んだ直後と殆ど変わらない」

「よね」

正直、自覚は薄いものの、鈴音さんや高村司令の様子から客観的に「そう判断されるだろうな」と感じずにはいられない。

だからといって、私は生命維持のために療養に入るわけにはいかない。まさしく鈴音さんがいった「いつもの私」でいるために。

なんだけど、

「鳥乃。アンタしばらく休め」

高村司令は、そんな私の事情を知っておきながら、さらっと言ってのけたのだ。

「悪いけど、無理なの知ってるでしょ。ここの報酬がないと私、死ぬって話だし」

「その位、こっちで立て替えるわ」

司令はいった。私が内心「は？」と驚く中、

「いま、神簇家に駄目元で金銭面の相談をしたんだけど、次回だけなら一部工面してくれるって返事がきたわ」

「神簇から？」

「なんでも、お家騒動の報酬が半分以上未払いだそうで、押し付けるいい機会らしいわ」

Mission 1 参照
あ の 話か。

Mission 9 参照
これは、最初に神簇と再会した際に請けた依頼のことだ。

当時、私は増田をサポートにつけ任務にあたったのだけど、その中で妹のアンちゃんとも口約束ながら依頼を請ける形になった。名目上、依頼は完遂したのだけど、神簇は私と増田でふたり分、アンちゃんから依頼を請けた分で更にふたり分、つまり合わせて相場の4倍も

報酬を出すとか抜かしたのだ。

実際、その依頼では増田にサポートの範疇を超えて動いて貰ったため、1. 5倍だけ報酬を貰い、残りの2. 5を神簇家が復興したら取り立てると約束して納得して貰ったのだ。勿論、本当に取り立てる気はゼロで。

だから、神簇がいった未払いというのはその残り2. 5のことだろう。

「あの馬神簇ばかむら」

私は、軽く頭がくらつとなりながら、

「こっちでアンちゃんに確認とって貰うわ。馬鹿が独断でいつてる可能性ありそうだから」

「それもこっちでするから」

が、司令はいつて、

「とりあえず、アンタは金銭面の心配とかしないで、ボーナス貰って有給消化すると思って休め。これは命令よ」

「了解」

命令扱いになってしまうと、こっちは拒否もクソもない。

結果、私の立場がどうなるかと従う他はない。恐らく司令は残り2. 5を回収するだろうけど、私はもう何もできない。

司令は煙草に火をつけ、

「頃合いになったら、こちらから復帰を要請しに行くわ。個人の範疇で藤稔を手伝うのは止める権利はないけど、間違ってもハングドとして活動はしないこと。以上、身支度を済ませたら速やかに帰宅して頂戴」

司令がいった、刹那だった。

「わふーっ！」

移動棚を勢いよく開け、ガルムが入ってきたのだ。

司令は半眼で、

「ガルム。いま大事な話の途中だけど」

「あう、ごめん。だけど」

ガルムは慌てた様子で、

「いまナガミっていう警察の人がやってきて、サキを指名に依頼した
いって」

「永上^{ながみ}さんが？」

「訊ねると、ガラムはコクンとうなずく。」

「断つといて」

司令はいった。

「いや、話を聞くだけでも」

私はいったけど、司令は、

「内容は分かっているわ。黒山羊の実への同行よ」

「それって、増田が死んだ依頼と同じ」

「いうと、司令は難しい顔して、

「今朝、霞谷から特捜課として連絡があったわ。護衛に鳥乃を連れて
行きたいと」

「私を？」

「もう断ったけどね」

司令は煙を吐いて、

「黒山羊の実から警察機関と一時的に協力関係を結びたいと連絡が
あったらしいわ。でもって、黒山羊の実と色々関わってきたアンタに
白羽の矢が立って、一度は断られたけどアンタがいる時間帯を見計
らってもう一度誘いにきた。そんな所よたぶん」

と、いった。

「なるほどね」

事情は何となくわかった。

「やっぱり、話を聞いてみるわ」

「そういって、私は資料室の外に足を向ける。」

「ちよつと、聞いているの？ アンタはしばらく休みだって」

司令はいうけど、

「その大本の原因を解決するチャンスって話じゃない」

私はいった。

「増田を殺したトラウマは、増田を殺した依頼にリベンジして解決す
るっていうね」

警視庁特捜課の永上^{ながみ} 門子^{かどこ}さんは、さつき私が荷物を置いてたソファに座り、ホットコーヒーを飲んで待っていた。

「お待たせしました」

私は彼女の前に立ち、対面の席に座る。

「久しぶりだな。鳥乃」

永上さんは、重い顔をしていった。いつもの脳筋が嘘のようなシリアスさだ。

「もう、私がきた理由も知ってるのだろう？ 正直、断られるかと思っただぞ」

「実際、何度誘われようと断る流れだったわ。私以外は」

「やはりか」

永上さんはうなずくと、バッグから一枚の文書を取り出し、机に置いた。

「ファイル・ハンターズ側についたプライド派が正式に脱退したらしい。そこで、黒山羊の実は警察機関と一時的な共闘と協力関係を結びたいそうだ」

「その用紙、こちらでコピーを取っても？」

「元々コピーだ。好きに使って構わない」

永上さんから了解を得た所で、私は文書を受け取りコピーをとる。まだ詳しく読み込んではいないが、どうやら今日18時よりMISSION12^{参照}前回と同じ集会が行われ、そこで警察機関と話し合いの席を設けたいという内容だった。

「加えて、鳥乃を懐柔して味方につけたいって魂胆もありそうよ」

私が席を立ってる間に、入れ替わりで高村司令が席に座っていた。

「は？」

私は驚き、コピーを終えた文書をもって慌ててふたりの下に。

「今日昼頃だけど、鳥乃の下に不正な手段でファイルが送信されてきたわ。鳥乃が受け取る前に受信先を操作しこっちで受け取った所、こんな文書が添付されてたわ」

司令は懐から開けたままの封筒を一枚出し、中身を広げてみせる。そこに書かれていたのは、まさしく組織への勧誘を前提とした件の集会への招待状だった。しかも、永上さんが持ち込んだ文書は送り主が組織名義なのに対し、私宛ての文書は「黒山羊の実幹部グラトニー」まで明記されている。これって。

「もしかして、ハングド宛の文書は組織じゃなくてグラトニーが私的に送ってきた？」

「黒山羊代表としてじゃなくて、か？」

訊ねる永上さんに私はうなずき、

「でも。だとしたらお笑いものって話よね。確かにグラトニーには増田の件でも事態の沈静に動いてくれたし、イリスの件でも明確に私たちの味方についてくれたわ。けど、過去木更ちゃんを殺そうとしたのもグラトニーの指示よ」

私は自分宛ての文書に手を添える。このままぐしゃつと握りつぶしたくなったけど、何とか抑え、

「正直、私はグラトニーのことを信用できない。だからこそ逆に私は敵陣に踏み込んでもいいと思ってる」

と、私は請ける満々で言ったが、

「って感じで、いまのこいつはメンタルが使い物にならなくなってるわ。それが、ハングドが今回の依頼に鳥乃を動員できない理由よ。オツケー？」

と、司令はいう。しかし、私はなぜここで補足を入れられたのか全く分からない。

正解は、私たちはまだ永上さんから正確な依頼内容を熟聞していない。にも拘わらず、私は段階を幾つも飛び越え「敵陣に踏み込む」とか言ってしまったのだ。一を聞いて十を知るとはいうも、今回のケーヌはむしろ一さえ理解してるか怪しい。

当然、依頼人からすれば人の話を聞かず先走るような人間を護衛につけようとは思わないだろう。普通なら。

しかし、今回は相手が悪かった。

「ん？ 何か鳥乃おかしな事あったか？」

そう。永上さんは平常運転でさっきの私レベルの事をしかねない、真症の脳筋なのだ。

「鈴音、ピッチャー交代」

「たまらず司令はいうも、

「先ほど裏口から帰られました」

「ちょうど近くにいた双庭ふたば 弓美ゆみ先輩が対応。鈴音さんも一児の母だ。家庭を顧みず仕事に打ち込み過ぎるわけにはいかない。毎日は無理でも、出来る限り夕食から娘が就寝するまでは一緒にいたいというのは親心だろう。」

「何だかんだ、17時から22時くらいまでは鈴音さんも司令も事務所にいない時が多いのだ。」

「チツ、逃げたか」

「舌打ちする司令。」

「精神故障者と脳筋を同時に相手とかどうすればいいのよ」

「どう、と言われましても。……ひ、飛奈、飛奈」

「あ、妹に助けを求めた。しかし残念。いまこの場に双庭ふたば 飛奈ひなちゃんはいない。」

「もういいから。話がややこしくなる前に自分の仕事に戻って」

「司令は双庭先輩を追い返し、

「とりあえず。依頼内容を一から説明し直してくれる?」

「実は私たち、まだ依頼内容を触りまでしか聞いてなかったのである。」

「分かった」

「永上さんはいった。」

「フィール・ハンターズ側についたプライド派が正式に脱退したらしい。そこで、黒山羊の実は警察機関と一時的な共闘と協力関係を結びたいそうだ」

「先ほどは、ここで説明が途切れていた。」

「そして、ここから先は私たちが聞いてない内容だ。」

「だから、鳥乃を護衛につけ、正面から話を聞きに伺いたい」

「司令はふむふむと頷いて、

「具体的には？」

「いや。以上だ」

あ、依頼内容終わった。早い。

「了解」

しかし司令は突っ込みを入れずにいう。まあ確かに、単刀直入かつ分かりやすい内容ではある。資料の内容を一通り熟読してるなら、ではあるけど。

「でも、こういう交渉の場なら、ちゃんと頭が働く子を配属させたほうが良さそうね。いま鳥乃は頭まわってないし、現在動員できる子だと双庭姉妹を推奨するわ」

司令がいった。

「さっき口を挟んだ子が姉の弓美。ヤバいくらいに口下手だけど、ウチの常識人トップだから粗相がないのは保証するわ。逆に妹の飛奈はお調子者だけど、姉の口下手をサポートするには必要不可欠。今回みたいな依頼に手放しで任せられる貴重な人材よ」

「彼女たちの事なら知ってる。別件でお世話になったからな」

永上さんはいった。しかし、

「だが、やはり今回は鳥乃を連れて行きたい」

「理由は？」

「勘だ!!」

永上さんはいいきった。

「増田よく胃壊さなかったわね」

司令は一回頭を掻きむしってから、

「そこは、鳥乃が招待されてるからとか、霞谷の推薦だとか、この任務の経験者だからとかあるでしょうに」

「全部ひっくるめて勘だ!!!」

「もういいわ」

司令は脳筋の相手を諦め、

「けど、さっきもいった通り、いま鳥乃は本調子じゃないわ。ちょうど今日から療養に休ませようと思ってた所だし」

「それに関しては木更ちゃんがいるだろう。鳥乃の手綱を握れる上、

増田の後任と聞いている。加えて霞谷も彼女のことを高く評価して
るらしいからな。増田の無念を晴らすには鳥乃と木更ちゃんがやは
り適任じゃないか？」

「そうね。ふたりが本調子なら全く同意よ。でもね」

司令は親指でクイツと木更ちゃんを指し、

「残念なことに、いま鳥乃が調子悪い原因つてのが、その藤稔がメンタ
ルやられたせいよ」

「何があつたんだ？」

永上さんが訊ねる。司令は、タブレットを出し検索しながら、

「先日、北海道某市で藤稔 天神せうすつて子が行方不明になったのは知っ
てる？」

「ああ」

それつて幼女だから？ 一瞬疑つたけど、ややこしくなりそうなの
で私は言わないでおく。

「そのゼウスつて子は藤稔の従妹よ」

司令はタブレットから事件の概要を纏めたニュース記事を開き、永
上さんに見せ、

「藤稔は過去にも親類をフィール・ハンターズに拉致されてるわ。で、
今回の事件も奴らが関わつてる可能性が高い。そんなわけで、トラウ
マを刺激されメンタルに即死技食らつたわけ」

「そんな事があつたのか」

永上さんは驚きながら、

「だが、それでどうして鳥乃が」

「鳥乃は、まだ目の前で増田を失つたダメージが癒えてなかった。今
まではそれを藤稔が手綱を握ることで何とかなつてたけど、その藤稔
を失つたことで当時ほどじゃなくてもダメージがぶり返してるのよ」
「そうか」

珍しく、真面目な内容で意気消沈する永上さん。司令は続けて、

「その件に関してアンタはどうなのよ」
と、いった。

「私か？」

「確か増田との付き合いは私や鳥乃なんかよりアンタが一番長かつたはずでしょ。一見、問題なさそうには見えるけど、増田を失って 안타だつて何も感じてないはずはない。で、いまここで増田を失った原因が再び目の前に現れた。そんな現状における永上の精神状態を私は知りたい」

「それは」

「その返答次第では鳥乃を護衛にやってもいいし、逆に双庭姉妹でさえ力不足な場合もある。その場合は私が自ら任務に入つてもいいと思つてるわ」

すると、永上さんは、

「恐らく万全ではない。しかし、だからこそこの捜査は私の手でやり遂げたいと思う。今度は自ら前線に出て」

「その心は？」

「無論、リベンジを果たし増田の死を乗り越える為だ。そして、お前が流した血がこれだけ実を結んだと、墓前の前で報告したい」

「分かったわ」

司令は静かにうなづく。そして、いったのだ。

「鳥乃、向かつてくれる？」

「え？」

「いい機会よ。ふたりで増田のトラウマを乗り越えなさい」

そこまですうと、司令は立ち上がり、双庭先輩に向かって、

「ガラムとフェンリルを呼んで頂戴。あいつらにも増田の償いに働かせるわ」

こうして、私・永上さんペアと、ガラム・フェンリルペアによる共同作戦が開始されたのだった。

現在時刻18:15。

私たちは前回と同じ市内M地区の集会所に到着し、堂々と駐車場に車を停めた。なお、ガラムとフェンリルは潜入捜査の為、近くのコンビニで先に降りて貰っている。

『鳥乃、永上』『聞こえますね?』

耳につけた無線から、高村司令と霞谷さんの通信が入ってきた。

依頼を請けた後、永上さんを前線で動かすことになった為、司令は霞谷さんと改めて連絡を取り、あちらの通信指令室と双方からバックアップの下、作戦を行うことになったのだ。

「こちら肌馬。聞こえてます」

「ナガカド仮面。同じくだ」

なお、現在永上さんはマスクを被ってなんかいない。

通信先から、霞谷さんが渴いた笑い声で、

『永上さん。本名で大丈夫ですよ』

「どうしてだ。私もコードネームでやってみたいぞ」

永上さんが駄々こねだしたので、

『鳥乃、アンタも本名で応答して頂戴』

「了解。私は本名のほうが嬉しいんだけどね」

司令からの指示で、私も肌馬の名は使わない方向に。

ところで、私はふと気づく。

今日、梓に向かつて「島津先生以外のお姉さんに癒されたい」っていったけど、永上さんも除外しないといけない人じゃないかと。

こっちは、ちゃんと性欲を抱くに見合う外見はしてるけど、とてもじゃないけど彼女で癒されようなんて発想には至れない。

『ふたりとも、準備はいい?』

司令が確認する。私たちは、

「OK」

と伝える。

『了解。これより作戦行動を開始。ふたりはそれぞれ書類を活用し、速やかに突入を開始せよ』

司令の宣言と同時に、私たちは集会所の前に立った。

宗教組織の建物ただけあって、そこは民家を改装したような町の集会所とは違う小規模の会館施設といった外観だった。

大きなドアを開け中に入ると、まず私たちはエントランスに出た。

左側には、長机とパイプ椅子による簡単な受付が用意されており、ワシヨルダーのドレスを身に纏った20代後半くらいの綺麗な受付

嬢が私たちに会釈する。それが、まさしく私が癒しを求める理想のお姉さんそのものだった為、

「抱いてください——」

言い切る前に、私は永上さんに頭をガツンと殴られた。

頭を抱え悶える私。そこへ受付嬢が、

「大丈夫ですか？」

と、駆け寄ってくれた。だから私は、

「大丈夫じゃないです。だからお姉さん慰めて」

受付嬢が手を伸ばしてきた所を見計らって、私はしがみつき、露出した脇に顔を埋めながら両手でお尻を撫でまくる。

「え？ きゃあああああああ！」

悲鳴をあげる受付嬢。

「どうしましたか？」

そこへやってきたのは、お馴染みゲイ牧師のボブとバイブル。

「こ、こっちの女性が、突然」

青ざめた顔でいう受付嬢。ゲイ牧師は「なに!？」とこちらを見るも、私と知るとすぐ納得し、

「ああ、彼女ですか」

「異教の同志よ。ここは抑えて頂けませんか？」

「ええ、お気持ちはすぐ分かります」

「私たちも受付が美青年だったら股間を擦りつけてたかもしれませんがからね」

「はっはっは」「はっはっは」

普段に増して機嫌の良いふたり。もしかしたら、すでに今日何人か食べた後なのかもしれぬ。

「つまり、牧師の女性版みたいな方なのですね。この方は」

ファイルを使ってまでして、自力で引きはがしながら受付嬢がいうと、

「左様」「左様」

ゲイ牧師は口を揃えていった。

「それで、おふたりはどのようなご用件で、あれ？」

受付嬢は辺りをきよろきよろし、

「婦警の方はどこに」

「え？」

私も気づき、辺りを見渡す。すでに奥に行ってしまったのか、永上さんの姿は見当たらない。

「ちよ、あの脳筋」

私は呟いてから、

「悪かったわ。私たちは黒山羊の実からこういうものを貰ってきた身なんだけど」

私は内ポケットから文書を2枚だしていう。もしもの為に警察側のコピーも所持していて助かった。

「上に確認してくれる？ ゲイ牧師は悪いけど永上さんを探して頂戴。いまは婦警の服を着てるけど、こんな人」

私はタブレットからフォトファイルを探し、開いてゲイに見せる。

「了解しました」「了解しました」

ゲイ牧師はうなずいて、奥へと戻っていった。……のを、確認した所。

「よし。これで二人つきりね」

「え？」

素直にタブレットから上司に確認しようとした受付嬢は、私の言葉にはっと気づく。周りには助けてくれる人なんていやしない。

「大丈夫大丈夫。今日の私は寂しい兎さんって話だから。慰みが欲しいだけなのよ」

なんて受付嬢の胸にしがみつこうとした直後、

『鳥乃、警察の監視下つてのを忘れてない？』

無線から高村司令の通信。さらに続けて、

『これ以上、彼女に危害を加えるなら、こちららも警察として動かすにはいられません』

と、霞谷さんまで。

「うっ」

ぴたっと硬直。普段の自分ならそれでも性欲に動くんだろうけど。

この日は、逮捕と聞いて梓の笑顔が脳裏に浮かび、天使としばらく会えなくなる恐怖が私の全身を支配した。

「引き続き、連絡をとってください」

その場で膝をつき、真っ白になりながら私はいうのだった。

程なくして、ゲイ牧師が永上さんを連れて戻ってきて、

「同志よ。グラトニー様がお待ちです。ついてきてください」

「りょーかい」

意気消沈しながら私はうなずく。

「どうかされましたか?」

「いや何でも」

私はゲイ牧師に答えてから立ち上がり、

「どうした、早くいくぞ」

と、急かす永上さんを先頭にエントランスを後にした。

ガラス製の自動ドアを潜ると、次に広がったのは広々としたホワイエ（ロビー）だった。エントランスからも見えてたので、ある程度は把握していたものの、1階の殆どのスペースを割いてるだろう空間になっており、そこで黒山羊のメンバーは立食パーティを行っていた。最奥には扉ひとつと2階に続く階段がみられ、また右側にもひとつ扉を確認。そのうちの右側の扉が今まさに開き、料理が運ばれてきた所から、たぶんそちらはキッチンに繋がってるのだろう。

「こちらです」

と、ゲイ牧師が指したのは階段。促されるまま2階にあがると、以前モニター越しに見た白い壁の廊下にたどり着く。

さらにゲイ牧師は足を進め、ある扉の前で、

「この奥にグラトニー様がおります」

そこは、以前黒山羊の幹部たちが演説をしてたホールだった。

ゲイ牧師がドアを開ける。中は、ステージにシユブニグラスの絵こそ飾られてるが、祈りを捧げる信者の姿はなく、とてもがらんとしていた。

静寂に包まれた空間の中、パイプ椅子が3つずつ対面に、計6席ほど設置され、奥の列の真ん中にグラトニーらしき人物が座っていた。

フードのついた黒いローブを深く被り、さらに仮面を被って徹底的に
体格や素顔といった情報を隠している。

「お待ちしておりました」

と、グラトニー（仮）が立ち上がり一礼した。途端、並の体型なら
性別ごと覆い隠せそうなローブの胸元が、グラトニーの膨らみによつ
て持ち上げられる。この時点で、彼女がよほどの爆乳をお持ちの女性
であることが伺えた。

「初めまして、グラトニーといいます」

加えて、相変わらずボイスチェンジャーを使ってるが、言葉遣いに
女性ならではの柔らかさを感じる。しかし、彼女から感じるフィール
は、地縛神のような黒い闇。母性と狂気が冒瀆的に入り乱れ、長い間一
緒にいると正気が削れてしまいそうだ。

恐らく、このフィールは彼女だけのものではないのだろう。背後の
シユブニニグラスの絵から不気味な後光を放たれており、グラトニー
の周りがゆがんで映ったからだ。

「警視庁特捜課の永上 門子だ」

「ハングドの鳥乃 沙樹です。今回は永上の護衛として来ました」

私たちはそれぞれ名乗り、

「お掛けになってください」

と、促される形で対面の席につく。

「先日はプライド派の元同志たちがご迷惑をおかけして申し訳ありま
せんでした」

グラトニーは一度席についてから、改めてその場で頭を下げた。

「特捜課はともかく、ハングドとしては別にいいわ。グラトニー派は
私たちの側に回ってくれたし、あの件に限ってはそれでチャラって
話」

私はいいい、続けて。

「それよりグラトニーさん、会談の前にちよつと場所を変えて親睦を
深めてかない？ ベッドの上で」

直後、永上さんにグーで殴られた。むしろ殴り飛ばされた。

私は床を転がった拳句、思いつきり壁に衝突してから、「痛たた」と

立ち上がり、

「何するのよ永上さん」

「高村さんから、お前が何かしたら暴力で制裁しろと言われてる」「ちよっ」

そういえば、さっきの受付嬢のときもグーで殴られたっけ。

「仕方ないじゃない。レズの勘だけど、グラトニーの仮面の下は絶対美少女って話よ。それもボインボインの」

私はいうも、

『だから何よ。元々駄目といったのを許可して行かせたんだから、しっかり仕事しなさい』

司令から通信で言われてしまったので、

「分かったわ」

と、仕方なく席につく。

どうやら、誰も気づいてないらしい。今回私にとって重要だったのは、場所を変えることだったのだ。

この部屋に飾られてるシュブニグラスの絵。あれは間違いなく普通の絵じゃない。たぶん、絵自体が天然のフィールを持っており、美術展で部屋中にフィール・カードで満たしたときのように、いまこの部屋はあの絵が持つフィールに満たされているのだろう。

「とりあえず、特捜課も霞谷が先日感謝の言葉を送った通り、件については気にしていない。それよりも」

永上さんは険しい顔でいった。

「早速本題に入るが、プライド派が正式に黒山羊の実を抜けたそうだな？ 特捜課としては、黒山羊からの要件を判断する材料としても、その件について詳しく伺いたい」

「あの方は、謎の人でした」

グラトニーはいった。

「プライドは黒山羊の実の幹部であると同時に、技術部の責任者でもありました。登録上では本名鷹野メイコ。元々フィール・ハンターズで研究をしていた科学者だったそうで、方向性の違いで離反し、持ち出した技術を黒山羊の実に提供する代わりに匿らせて貰ったのが

入信までの経緯だと聞いてます。でも、真実は分かりません」
「その技術部の研究でガラムの素体となった鱒川ますがわ 妙子たえこの遺体を手
したり、ロストの成分を求めて墓荒らしをした事については？」

私の問いに、

「知ってます」

と、グラトニーはうなずく。

「なら、知ってて何故止めなかった！ 鬼畜の所業ではないか」

永上さんはいつも、

「私も当時から良くは思ってますんですけど仕方ないんです。愛と
願いと幸せの為に、生贄さえも許されるのが黒山羊の実ですから」
「なっ」

驚く永上さんの横で、

「ま、そうって話ね」

知ってた私はうなずく。

「倫理観の話はこの際置いてくわ。それよりプライドの目的は何？
そいつは何の願いを叶える為に黒山羊に入信し、どうして裏切ったの
か分かる？」

「私の知る限りですけど」

と、前置きしてグラトニーはいった。

「プライドは人形性愛者だそうで、クローン、アンドロイド、サイボー
グ、人造人間に改造人間、リビングデッド、あらゆる観点から自分の
理想のパートナーを作り出そうとしていました。同時に、フィール・
ハンターズから持ち出した技術によって、黒山羊の実は急速に規模を
発展させました。いま黒山羊の実が繁栄してるのは、プライドによる
貢献の賜物といって過言ではありません」

「そういえばフィールで動く機械MISSTION人形もいたわね。美術展の話だけ
ど、犯人のデッキから見るに多分あなたの管轄だと思うけど」

「はい。それもプライドが開発し私に提供下された戦力です」

なるほどね。あれ以後全然姿を見せないと思ったら、元々プライド
のものだったわけだ。

「だけど、今度は我々の技術とそれを扱う人員を持ち出して、プライド

はフィール・ハンターズに戻っていききました」
「まさか」

私が訊ねると、

「はい。プライドは技術部のメンバーを全員引きつれ離反した為、黒山羊の実は一度技術の大半を失いました」

「これは朗報だ。一斉逮捕のチャンスじゃないか」

興奮し、立ち上がる永上さんを私は、

「待つて待つて」

と、抑え、

「全て失ったわけじゃないんでしょ？ それに、一度失ったってことはいまは？」

「はい。それなりの復旧は完了しています。それでも、プライドがいた域には達してはいないですけど」

それが虚勢なのか真実なのかは分からないが。もし本当なら組織が弱体化したからと甘くみるわけにはいかない。

「ですから、いまの黒山羊の実でフィール・ハンターズとプライドを同時に相手をする力は残っていません。その為、警察機関と連携を取ろうという話になりました。ただ、今日を逃すところから話し合いの場を設ける事が困難になってしまい、このような突然の連絡になりました」

「なるほどね」

私はうなずき、

「じゃあ、プライドが裏切った原因は？」

「はい」

グラトニーはいった。

「恐らく、今度は黒山羊の実で願いを叶えることができなくなったからだと思います」

「牡蠣根ドラッグが手に入らなくなり、逆にフィール・ハンターズの口ストが完成しただしたから？」

私が訊ねると、

「多分」

グラトニーはうなづく。

「プライドの嗜好や事細かな活動履歴はともかく、掻い摘んだ情報に
関しては、残念ながら私も皆さんと大差ない程の情報しか持っていま
せん。もし持っていたら、すでにアンを通じて情報が皆さんの下に届
いてるはずですので」

「そういえば、以前アンちゃんにプライドと同じ苗字をもつ
鷹野^{たかの}明光^{あけみつ}というフィール・ハンターズの人間について
調べて貰っていたはず。M I S S I O N 2 6 参 照まだ報告を貰えてないけど、調査を依頼した
直接の原因が解決してるから調査を打ち切ったのか、それともまだ有
力な情報を獲得していないのか。」

私は続けて、

「その事細かな活動履歴を確認しても？」

「ごめんなさい。そこはプライド以外の機密にも関わりますから」
と、グラトニーは断る。

「ここで永上さんが威圧的な目で、

「強制捜査でもか？」

「いえ。我々は今回、警察機関その他への協力は惜しまないスタンス
でいくことになっています。もちろん」

「共闘・協力につくならか」

「はい」

うなづくグラトニー。通信機から霞谷さんが、

『多分ですが、黒山羊の実が真に味方につけたいのはNLTだと思
います。警察機関の後ろ盾があれば自然とNLTとのパイプも繋がっ
たようなものですし、NLT名義で活動すれば、利害が一致する限り
法的な便宜も図いやすくなる。そうやって活動してる節のある組織
ですから。そして、黒山羊の実には「鱒川さんの件」という警察上層
部の首を縦に振らせるだけの交渉のカードがあります』

なるほど。かつて警察機関の腐った上層部は、妙子の遺体を黒山羊
の実に売却した。当時の主導はプライドだったとはいえ、記録自体は
当然黒山羊の実が所有している。

正直、なぜNLTではなく特捜課に話を入れたのかと思っただけど、

確かにそう考えると先に警察機関を飼ったほうがやりやすい。

「分かった」

永上さんがいった。でもって、まさに棒読みで、

「この件に関しては一度こちらで会議を行い、共闘するかを話し合おうと思う。しかし、間違いなく協力関係を結ぶことに反対する者は少なからずいる事は理解を頂きたい」

たぶん、霞谷さんが永上さんだけに通信し、彼の言葉をそのまま代弁させてるのだろう。

「分かりました。今日お会いした価値に見合う十分な言葉です」

グラトニーはいった。

『なら、ここから先は私たちのターンね』

今度は通信先から高村司令がいった。

『鳥乃。奴らがわざわざアンタをヘッドハンティングしようとした理由を聞き出さない』

(了解)

私は心の中で伝え、

「特捜課と手を組みたい理由は納得したわ。でも、黒山羊の実が信用できる組織だと判断するには、材料が殆どないって話なのよね」

私はいった。

「黒山羊の實の教義については、下層程度の情報なら手に入れてるわ。なにせ、元プライド派が2名ハングドについたからね。表向き、あなたたちの目的はシユブニグラスの加護の下、各々が幸せになること。神は信者に目的を叶えたり幸せになる為の力を授け、信者は神の落し子である黒い子^{ダーク・ヤング}山羊となり、培った愛と幸福を神に捧げる。その為にあらゆる手段が許されている。訂正点や他に補足すべき所はある?」

「いいえ、それが我々の教義の全てです」

グラトニーはいった。

「なら続けて。そんな黒山羊の實が、どうして私をスカウトしたの?」

私は懐から封筒を出し、中の文書を開いて提示。

「せっかくだから、この場で聞かせて頂戴。やましい考えが無いなら、

警察の前でも堂々といえるはずでしょ?」

さて、黒山羊の実はどう来るのか。

「勿論です」

グラトニーはいった。

「鳥乃 沙樹さん。我が神シュブニグラスは、あなたを私たちの新しい幹部「ラスト」^{ラスト}として受け入れたいと申しています」

「色欲……」

私は呟く。通信先から司令が、

『まさにアンタにピツタリの大罪を出してきたわね』

正直いって、全くだ。でも、

「いきなり幹部クラスね。反感持つ人もいるんじゃないの? なのに、そこまでして私をハングドから引き抜きたい理由は?」

「あなたの願いをサポートしたい、ではいけませんか?」

「問題外ね」

私はいった。

「シュブニグラスが私の願いを何と想定したかは知らないけど、私は自分の願いを黒山羊の加護を借りて行おうとは思わないし、黒山羊の加護で叶うとも思わない。仮に叶ったとしても、それで得た愛も幸せも黒山羊に捧げる気はないわ。だって、そういうのは全部一晩のベッドを共にした相手って決めてるもの。だから、もし還元するとしたら、それはシュブニグラス本人とベッドインするときだけ。でも、調べた所シュブニグラスは女神だけど男神の側面がある以上、その時は絶対にありえないって話でしょ?……それに」

と、続けていいかけた所、

「黒山羊の実には、あなたを地縛神から解放する準備があります」

グラトニーはいった。

「あなたは体が地縛神の眷属になってるせいで、それを抑える為にハングドの手で半機人であるのを強いられているのではないですか?」

地縛神さえ取り除く事ができれば、生命を維持するためにハングドに所属する必要もなく、もつと自由になるはずですよ。黒山羊の実はずその時点からあなたをサポートしようと」

「地縛神抜いたら死ぬから」

話を途中で遮り私はいった。

「そもそも、一度死んでるから眷属化してるって話なのよ。一応、取り除いた上でかつてガラムやフェンリルにしたような生命維持技術があれば生きるかもしれないけど、いまの黒山羊にそんな力ないでしょ？」

「それは……」

グラトニーの口が止まった。つまり、肯定の意味。

私は続けて、

「それに、黒山羊の実は増田を殺し、アンを意識不明の重体にし、その前に私の友達をひとり殺そうとしている。その友達を殺そうとした実行犯とは和解してるけど、殺せと命じたグラトニーと和解した覚えはないって話。つまり私の中であなたは敵。交渉したいならそれを胸に刻んで頂戴」

「でしたら、こちらも考えがあります」

と、グラトニーは立ち上がった。

「沙樹さん。私とデュエルをして頂けませんか？」

「……」

私は、微妙な間の後、

「え？」

と、いった。

だって、まさかこの流れでいきなりデュエル脳が発動するとは思わなかったのだから。

「今すぐ入信しとは言いませんけど、私が勝ったら、せめて地縛神の摘出を受け入れてください。その上で一旦ハンドの方々に引き渡します。そちらの技術ならば、地縛神を抜いた後も生命維持する技術はあるのでしょうか？」

「それを、あなたの神や組織は容認するの？」

私は疑ってかかったが、

「はい」

グラトニーは断言。

正直いって、摘出できるなら以後の生命維持費は減って生活は楽になる。入信を条件にされてるわけではないので、私としてはメリツトしかない。黒山羊の実とグラトニーを信じ切るならという話ではあるけど。

もちろん、私は信用してない以上、摘出を受け入れるわけにはいかない。

が、

「分かったわ」

私はいった。

「本当ですか？ では」

「けど、私が勝ったら、他の信者の機密に抵触しようともプライドの情報細部まで全て提供して貰う。この条件でならデュエルしてあげるって話」

『意外ね』

ここで、通信先から司令がいった。

『アンタの事だから、ここで仕事より性欲を優先すると思ったけど。グラトニーの素顔を晒してもらい、美人の女性と判明次第ラブホテルに強制連行だとか』

「あ」

すっかり忘れてた。

そんな反応を見てか、通信先で双庭先輩が司令に、

『相当、精神状態が不調みたいですね』

『まだマシなほうよ。残念なことに、鳥乃のメンタルと性欲は正比例してるもの。残念なことに』

そんなに大事なことなのだろうか。

「分かりました」

グラトニーはいった。

「その条件までなら大丈夫です」

「MATTER！」

私はいうが、その前にグラトニーは私のデュエルディスクに干渉し強制デュエルモードに。これはもう、諦めてこの条件でデュエルする

しか選択肢はない。

……。

その豊満そうなおっぱいに、顔埋めてみたかった。

沙樹

LP4000

手札4

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

グラトニー

LP4000

手札4

こうして、かなりショックを引きずりながら始まったデュエル。

デュエルディスクの自動裁定の結果、先攻は私に決まった。

「先攻は貰ったわ」

私は言いながら、最初の手札となる4枚を引き、

「まず私は、手札から《幻獣機オスゴリラ》を通常召喚」

直後、フィールドに現れたのは機首がゴリラの濃ゆい顔を模り、機翼の傍にゴリラの両腕が伸びた異様な幻獣機。しかも攻撃力2000のゴリラで、航空機の元ネタがオスプレイとくれば、

「《幻獣機オスゴリラ》のモンスター効果。このカードの召喚成功時、このカードを破壊する」

オスゴリラはフィールドに出現してはいきなり墜落し、床に落ちて爆発。しかし、煙の中から光が二つ真上に伸び、中から2機のホログラムが出現。

「そして、《幻獣機オスゴリラ》はフィールドから墓地に送られた場合に幻獣機トークンを2体発生させる。そして、座標確認、私のサーキット。ロックオン！」

2機のホログラムは一旦床に着陸すると、

「召喚条件は機械族モンスター2体。私は幻獣機トークン2体をリンクマーカーにセット！ リンク召喚！ 起動せよ、リンク2 《プラチナ・ガジェット》！」

私の前方にリンクマーカーが出現し、ホログラムはカタパルトから射出されるようにマーカーに搭載され、出現したのは白金色のガジェットモンスター。

「《プラチナ・ガジェット》のモンスター効果。メインフェイズに1度、手札からレベル4以下の機械族モンスターをリンク先に特殊召喚する。私は手札の《幻獣機オライオン》を特殊召喚」

続けて召喚されたのはライオンの顔を模った宇宙船の幻獣機チューナー。

「さらに、私の場のモンスターは機械族の効果モンスター2体。魔法カード《アイアンドロー》を発動。カードを2枚ドロウ」

ここで私は魔法カードで手札を補充し、

「カードをセット。ターン終了」
と、最初の手番を終えた。

沙樹

LP4000

手札2

□ □ 「伏せカード」

□ □ 《幻獣機オライオン》 □

「《プラチナ・ガジェット》」 □

□ □ □

□ □ □

グラトニー

LP4000

手札4

「私のターンですね。ドロウ」

ターンはグラトニーに移り、カードを1枚引き抜かれる。

さて、墮天使デッキを部下に支給しているグラトニー様は、一体どんなデッキを使ってくるのだろうか。

「私は」

グラトニーは、手札を2枚墓地に捨てていった。

「《墮天使イシユタム》の効果を発動。自身と手札の《墮天使スペルビア》を捨てて、デッキからカードを2枚ドロー」

「幹部も墮天使デッキ!」

私は驚いた。しかも、効果処理の際に一瞬出現した2体の墮天使のビジョンを見て、私はさらに「え」となる。

(あれって、天然のフィール・カード?)

私がいままで見た墮天使使いは計4名。美術展を襲った黒コート、水姫ちゃんを襲った変質者、そしてゲイ牧師である。

4人が使ってたのは、どれも複製コピーされたフィール・カードだった。つまり、考えられることはグラトニー派の信者たちが使ってたデッキの正体は、まさにグラトニーのデッキを複製し支給されたものという可能性。そして、グラトニーが使う墮天使カードは全て天然のフィール・カードである可能性が極めて高いということ。

だとしたら、間違いなくフィール量は私より高い。

「続けて手札から《墮天使の戒壇》を発動。墓地の《墮天使スペルビア》を守備表示で蘇生し、スペルビアが蘇生された事で《墮天使イシユタム》を攻撃表示で蘇生しますね」

でもって、やっぱりきた。墮天使特融のインチキ蘇生コンボ。《死者蘇生》じゃなかったただけまだマシだろうか。

「カードをセット」

グラトニーの場に魔法・罠カードが1枚敷かれ、

「バトルに入ります。《墮天使イシユタム》で《プラチナ・ガジェット》に攻撃」

イシユタムが放つ暗黒のエネルギーボールをまともに喰らい、《プラチナ・ガジェット》はその場で四散。しかし、

「《プラチナ・ガジェット》のモンスター効果。このカードが破壊された場合、デッキからレベル4のガジェットを特殊召喚する」

私はタブレット画面からカードを指定、直後デッキから目当てのカードが1枚押し出され、

「私は《サイバース・ガジェット》を特殊召喚」

「このカードは増田の」

驚く永上さん。その通り、この《サイバース・ガジェット》は元々増田が持ってたカードである。というより、私が所有してるサイバース族はほぼ全部増田の借り物だったりするしね。

とはいえ、

沙樹 LP4000↓3100

《プラチナ・ガジェット》は攻撃表示だった為、超過ダメージ分が私のライフを削る。フィールは込められてなかった。

「私はこれでターンを終了します」

グラトニーはいった。

沙樹

LP3100

手札2

□ □ 《伏せカード》

□ 《サイバース・ガジェット》 □ 《幻獣機オライオン》 □

□ — □

□ 《墮天使スペルビア（守備）》 □ □ 《墮天使イシユタム》

□ □ 《伏せカード》

グラトニー

LP4000

手札3

「私のターン、ドロ」

言いながら私はカードを1枚引く。よし、これで初手の時に思い浮かべてた盤面を現実に行ける。

「私の場に幻獣機が存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる。《メデイクレイン》！」

ディスクに読み込ませ、フィールドに出現したのは鶴の仮面を被ったバードマンタイプの機械人形の衛生兵。

「座標確認！ 私のサーキット、再度ロックオン！」

私は再びリンクマーカーを発生。

「アローヘッド確認。召喚条件は効果モンスター2体以上。私は《サイバース・ガジェット》《メデイクレイン》《幻獣機オライオン》の3体をリンクマーカーにセット、サーキットコンバイン！」

私は場のモンスター3体すべてをリンクマーカーに搭載。出現したのは1本のソードを握る増田のフェイバリットモンスター。

「リンク召喚！ 起動せよ、リンク3 《デコード・トーカー》！」

直後、私の場にはさらに2体のモンスターが出現する。

「墓地に送られた3体の効果を発動。このカードが墓地に送られた場合、《サイバース・ガジェット》はレベル2のガジェット・トークンを、《幻獣機オライオン》はレベル3の幻獣機トークンをそれぞれ特殊召喚し、《メデイクレイン》は墓地の幻獣機1体を手札に加える。私は《幻獣機オライオン》を手札に加え通常召喚」

こうして《デコード・トーカー》を出したに関わらず、私のメインモンスターゾーンには引き続き3体のモンスター。私はこの3体を場から取り除き、

「続けて私はレベル2ガジェット・トークンとレベル3幻獣機トークンに、レベル2《幻獣機オライオン》をチューニング」

オライオンが2つの光の輪に変わると、2体のモンスターは内側を潜り計5つの星になり、輪と混ざり合う。

「未だ穢れに染まらぬ無垢なる翼よ。その透明さで敵を討て！ シンクロ召喚！ 飛翔せよ、レベル7！ 《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》！」

といった流れで、私の場に2体のモンスターが並び立つと、

「おお！ 増田のエースと」

『鳥乃さんのエースが並び立ちましたね』

永上さんと霞谷さんがそれぞれ反応。

「増田、力を貸して頂戴。《デコード・トーカー》のモンスター効果。このカードは自身のリンク先に存在するモンスターの数×500アツプ。リンク先にはクリアウイングがいる以上攻撃力は2300から2800に」

《デコード・トーカー》 攻撃力2300↓2800

これで《デコード・トーカー》の攻撃力はイシュタムの攻撃力2500を上回った。

「バトル。《デコード・トーカー》で《墮天使イシュタム》に攻撃。デコード・エンド！」

つい、らしくなく攻撃名まで叫んでしまったのはともかく、《デコード・トーカー》はイシュタムの体を両断して破壊。

グラトニー LP4000↓3700

「続けて《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》で《墮天使スペルビア》を攻撃。旋風のヘルダイブスラッシュャー！」

クリアウイングは一度天井近くまで飛翔すると、ジャイロ回転しながらの急降下突撃でスペルビアに風穴を開けて破壊。

私はいった。

「悪いけどこのデュエル、勝って情報を持ち帰って、増田のリベンジにさせて貰うわ。私はこれでターン終了」

するとグラトニーは、

「ひとつ、訊ねてもいいですか？」

と、訊ねてきた。

「沙樹さん。あなたは同性愛者のはずですよ。そんなあなたが、どうして異性である増田の想いを背負おうとするのでしょうか。まるで私たちが恋人の仇みたいに」

「ああ、それ」

私はいった。

「それなら、あなたたちにとって一番分かりやすい言葉があるわ。同志だから」

「何っ！」

反応する永上さん。いや、脳筋と増田の繋がりとは全然違うから、むしろ。

「増田が死んだ日、M I S S I O N 1 2 参 照 あいつは言ったのよ。お互い恋愛対象の外だから私とは気楽に接されるって。言われてみればそうだった。増田がいうように、私たちはお互い恋愛感情を抱きようがなく、ストライクゾーンが被ることさえない。だからこそ安心感や信頼感を築きあつ

てたのよ。増田は最高のビジネスパートナーで相棒で頼れる先輩だった。それを、私は失って初めて気づいた」

私は当時を思い返しながら、

「増田が死んだあの日、実は私があいつの後方支援に入ってたのよ。いつもと前線と後方を逆にしてね。……で、増田は死んだ。そういえば、あいつはMISSION12参照こんな事も言ってたっけ。大切な人は手放すな。人生を通して本当に大切だと思える人間は思ったより多くないって。言われた当初、私は梓と木更ちゃんを思い浮かべたわ。でも、増田もすでにその位置にいたってことに、あいつを失って気づいたのよ」

そこまで言ってから、私は改めてグラトニーをまっすぐ見据える。

「だから、せめてあいつの死が無駄にならないように頑張りたい。これで十分？」

「……はい」

微妙にはつきりしない物言いで、グラトニーはうなずく。しかし、続く言葉は。

「沙樹さん。あなたが不必要な絆に囚われてるとはつきり分かりました」

「何でー」

私は思わずギャグっぽいリアクションで返した。質の悪い冗談と受け取らないと私のメンタルがどうにかなる。予想外の反応を前に、私の脳が一瞬で判断したのだ。

沙樹

LP3100

手札2

□□「伏せカード」

□□「クリアウイング・シンクロ・ドラゴン」□

□□「デコード・トーカー」□

□□

□□「伏せカード」

グラトニー

LP3700

手札3

「私のターン！ ドローします」

グラトニーはカードを引き抜き、

「手札から《ヘカテリス》を捨てて効果を発動。デッキから《神の居城―ヴァルハラ》をサーチして発動します」

「このカードって」

梓も《アテナ》を召喚する為に使ってる永続魔法カード。そういえば堕天使も天使族だからサポートは共有できるのだ。

「ヴァルハラの効果、1ターンに1度、私の場にモンスターが存在しない場合に手札の天使族モンスター1体を特殊召喚します。色欲を司りし魔の王よ、居城の導きによりこの地に降臨せよ。特殊召喚！ レベル8 《堕天使アスモディウス》！」

フィールドに出現したのは攻撃力3000の堕天使モンスター。このまま戦闘に入られると、正直私は痛手を負う。しかし、

「《堕天使アスモディウス》のモンスター効果。1ターンに1度、デッキから天使族モンスターを墓地に送ります」

と、グラトニーはアスモディウスの効果の使用を宣言。だけど私の場には、

「《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》の効果。1ターンに1度、フィールドのレベル5以上のモンスターの効果を無効にして破壊する」

アスモディウスが魔力を開放するも、クリアウイングがそのエネルギーを吸収し翼に取り込む事で、アスモディウスは魔力を失い破壊される。

「あなたたちがラストとまで言う私の前で並の色欲が通じるわけないって話よ。《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》は自身の効果で相手を破壊した場合、ターン終了時までその数値分攻撃力をアップする」

《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》 攻撃力2500↓5500

一気に攻撃力を跳ね上げるクリアウイング。が、グラトニーは動じることなく。

「でもアスモデイウスも破壊され破壊され墓地へ送られた場合に、アスモトークンとデイウストークンをそれぞれ特殊召喚します」

フィールドに出現する2体のトークン。

「そして、この瞬間。クリアウイングを相手にするに相応しい、私の切り札をお見せする準備が整いました」

「切り札？」

「私は魔法カード《置換融合》を発動」

グラトニーは、ここでまさかの融合召喚に出たのだ。

「色欲より分裂せし二柱。いまこそ再び混ざり合い、暴食の名の下、^{グラトニー}飢えし牙の触媒となれ」

いつものように、上空に出現した渦によって2体は混ざり合う。が、中から出現したのはどこかで見たシルエット。

毒性を感じさせる瘴気を放ち、長い尾跳ねさせ、次第にそれは一体の紫の竜の正体を現す。

「融合召喚。降臨せよレベル8 《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》！」

「このモンスターは」

私は驚いた。だって、このカードは美術展で《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》と共に展示されていたフィール・カードの1体。普通の人ではフィールを引き出しきれないとされるモンスターだったのだから。

「どうして、グラトニーがそのカードを」

「元々クリアウイングを除く3枚は黒山羊の実が回収しています。その中の1枚に私が選ばれたのなら、そのまま私が使っても変ではないですよ？！」

「うっ」

そうだった。最近色々あってこの事実から離れてたけど。

「ってことは、まさか私の勧誘はクリアウイングを手にするために「違います」

グラトニーはいいきった。

「あの襲撃は、元々クリアウイングをあなたの手に届けるために行っ

たものです」

私に届ける？

どうして私に？ いや、その前に、

「ならどうして、残りの3枚も」

「プライドの取り分として狙いました」

つまり、あくまでグラトニーの目的はクリアウイング。それを4枚全て略奪する話にすることで、自分以外の信者の協力を得たって話か。しかも結果、要らない残りの3枚のうち1枚にグラトニーは選ばれ、いまに至ると。

「じゃあ、次！ どうして信者でもない私のために勝手なことしようとしたのよ」

「黒山羊の実は沙樹さんの味方。それだけです」

グラトニーは言い切り、

「《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》のモンスター効果。このカードが融合召喚に成功した場合に、相手モンスター1体を選んでその攻撃力分だけ、ターン中スターヴ・ヴェノムの攻撃力に加算します。この効果は対象を取る効果ではありません」

「だがクリアウイングはレベル5以上のモンスターに圧倒的な性能を持っているはずだ、この程度」

永上さんはいうも、

「駄目よ」

私はいった。

「クリアウイングの効果は『レベル5以上のモンスターの効果』と『レベル5以上のモンスター1体のみを対象とする効果』をそれぞれ1ターンに1度無効にする。でも、対象を取らないなら後者の効果は使えない」

「なら最初に言ったほうの効果で」

「悪いけど、もうアスモディウスに使った」

「何いつ!? あれがその効果だったのか」

驚く永上さん。私はしてやられたと一回頭を抱え、

「使われたわけね。クリアウイングの効果を。その上、破壊される事

も利用して融合素材を残したと」

それだけでも、正直私は「うわっ」と思ったのだけど。

「まだあります」

グラトニーはいった。

直後、スターヴ・ヴェノムが粘液を垂らしながら口を開くと、エネルギーをむしやむしやと取り込み、

《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》 攻撃力2800↓
8300

「まさか、クリアウイングの攻撃力がアップすることまで利用して!？」

アスモディウスの攻撃力を取り込んだクリアウイングの攻撃力を、さらにスターヴ・ヴェノムが更に取り込むことで、眼前のモンスターの攻撃力はさらつと8000を超えてきたのだ。

やばい。

この人、クリアウイングの対策を心得ている。

加えて私の場にはクリアウイングの他に攻撃力2800の《デコード・トーカー》が。

「私はカードを1枚セット」

グラトニーの場に、さらに伏せカードが1枚敷かれ、

「私は《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》で、増田という方のエースモンスターを攻撃します」

攻撃力の差分は5500。これをそのまま通したら一瞬でライフが尽きてしまう。

私は伏せカードをオープンし、

「罨カード《シフトチェンジ》！ 効果によって攻撃対象を《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》に移し替える」

罨カードが発動すると、ビジョン上私のモンスター2体の位置が一瞬にして入れ替わり、クリアウイングがスターヴ・ヴェノムの攻撃を受け破壊される。

私のライフは一気に減少し、

沙樹 LP3100↓300

《雷鳴》でさえ終わるような数値になるも、何とか敗北は免れる。

「これで勝てるとは思ってませんでした。私はターンを終了します」
グラトニーはいった。強がりには見えなかった。

《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》 攻撃力8300↓
2800

沙樹

LP300

手札2

□□□□

□□□□

「《デコード・トーカー》——《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》

□□□□

「《神の居城―ヴァルハラ》」「《伏せカード》」「《伏せカード》

グラトニー

LP3700

手札0

「私のターン」

と、私はいうも。現在の手札は《クリ瑞雲》と《ビットロン》。この2枚では例え普通にドロウしたとして逆転できる気がしない。

やるしかない。私はドロウする手を掲げ、指先を闇色に輝かせる。

「来ますね」「来るのか」

グラトニーさんと永上さんがいう中、

「暗き力はドロウカードをも闇に染める！——ダークドロウ」

私は残りのフィールの殆どを込め、カードを1枚引き抜く。

「私は《幻機獣エンジニー》を通常召喚」

フィールドに現れたのは、ランプの精のようなホログラムが航空機のエンジンから浮かび上がった形状のモンスター。たったいまダークドロウで引いた新たな幻機獣だ。

「《幻機獣エンジニー》のモンスター効果。このモンスターの召喚に成功した場合、デッキから風属性・機械族チューナー1体を手札に加える。梓、力を貸して。私は《幻機獣エンジエル・シンクロン》を手札

に加える」

MISSION 26 参照

私は以前、梓と一緒にダークドロワーして手に入れたモンスターを手札に引き寄せ、

「座標確認、私のサーキット。ロックオン！」

私は本日三度目のリンクマーカーを前方に発生。

「アローヘッド確認。召喚条件はモンスター2体以上。私は《幻機獣エンジン》とリンク3 《デコード・トーカー》の2体をリンクマーカーにセット！ リンク召喚！ 増田の魂、無垢なる翼に宿れ！ 起動せよリンク4 《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》！」

フィールドに出現したのは、増田が最期に遺した3Dモデリング風のクリアウイング。

「クリアウイング・ラピッドはリンク召喚時に、リンク先にトークンを出せるけど今回は使わない。代わりに私は墓地の《幻機獣オライオン》を除外し効果発動。私は手札から幻機獣モンスター1体を召喚できる。来て、《幻機獣エンジェル・シンクロン》！」

こうして私の場に先ほどサーチした私の天使が出現。

「《幻機獣エンジェル・シンクロン》のモンスター効果。このカードの召喚成功時に墓地の風属性・Sモンスター1体を特殊召喚する。再び飛翔せよ《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》！」

私は再び自らのエースを展開。さらに、

「エンジェル・シンクロンの効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力・守備力は0になる。だけど今回は関係ない！ 私はレベル7《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》に、レベル1《幻機獣エンジェル・シンクロン》をチューニング！」

エンジェル・シンクロンが1つの円に変わると、クリアウイングが潜って7つの光になって混ざり合う。

「穢れさえ光を透す聖なる翼よ。その神々しきで敵を祓え！ シンクロ召喚！ 飛翔せよ、レベル8！ 《クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン》！」

フィールドに出現したのは、水晶を思わせる翼や外装をしたクリアウイングによく似たドラゴン。

「増田と私のダブルエースで駄目なら、次は増田から授かった新たなクリアウイングと、私の天使から想いを継いだクリスタルウイングで行くって話よ」

並び立つクリアウイング・ラピッドとクリスタルウイング。思い補正で考えるなら、間違いなくいま私が出せる最大の布陣。

「《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》のモンスター効果。スターヴ・ヴェノムの効果を無効にし、クリアウイング・ラピッドの攻撃力を500アップ」

《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン》 攻撃力2500↓3000
効果の発動は成功。これで、万が一スターヴ・ヴェノムが変な効果を持っていても無意味になった。

「バトル！ 《クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン》で《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》を攻撃。そしてクリスタルウイングは、レベル5以上の相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時のみ自身の攻撃力をその相手モンスターの攻撃力分加算する」

この攻撃が通れば、クリスタルウイングの攻撃力は瞬間的に5800になり、グラトニーのライフを一気に700まで減らすことができる。

が、

「そのバトルフェイズ開始時に、スターヴ・ヴェノムを破壊して罠カード《墮天使の浸食》を発動します」

先ほど伏せられたばかりのほうの、グラトニーの伏せカードが表向きになる。

「このカードは、手札またはフィールドに存在する私の闇属性モンスター1体を破壊する事で発動できます。この効果によってフィールドに存在する全てのモンスターの属性を闇属性に浸食させます」

「闇属性に？ だけど、例えば属性を変えても」

私は引き続き攻撃宣言しようとするも、

「そして、このターン沙樹さんは闇属性モンスターで攻撃宣言できません」

「えっ」

攻撃を封じられた!?

「さらにスターヴ・ヴェノムが破壊された事で、《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》の効果を発動。相手フィールドの特殊召喚されたモンスターを全て破壊します」

「げっ」

そんな効果まで持ってたなんて。だけど。

「《クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン》のモンスター効果。その効果を無効にして破壊」

そっちの効果には何とか対応。

まさか、フリーチェーンでいつでも仕掛けれる二重の罠を用意してたなんて。任意のタイミングでスターヴ・ヴェノムを自壊させ、対処されなければそのままフィールドを焼け野原にし、仮に対処されても攻撃は封じられる。しかも、今回の破壊はコストによるものだから、例えカウンター罠でも破壊自体は許してしまうと。(待って)

私はふと思った。グラトニーの狙いは本当にそこなのだろうか。仮に相手がクリスタルウィングの効果を知っていたら、そうでなくても名前と見た目でクリアウィングに類似する効果だと読んだ上で使っていたとしたら。

もしかしたら、私はまたクリスタルウィングの効果を使わされていたことになる。

「私はこれでターン終了」

とはいえ、私はこれ以上何もできない。色々考えた所で、次のターンに何も起こらない事を願うばかりだった。

ダークドローを行使した以上、相手のドローをフィールドで妨害することは難しいのだけど、

沙樹

LP300

手札2

□□□□

「《クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン (闇属性)》」□□□

「《クリアウイング・ラピッド・ドラゴン（闇属性）》——□
□□□□

「《神の居城―ヴァルハラ》□□《伏せカード》」

グラトニー

LP3700

手札0

と、このようにグラトニーの手札は0枚。まだ希望は残されてるはずなのだ。

「私のターン」

グラトニーはいった。

「ここで私はスキルを使用します」

「え」

ここでスキル!? まさかステイニードロロー? しかしあのスキルはライフが2000減らないと使用不可能。加えてドロローセンス系も1500ライフ減っていないと使用不可能だ。

グラトニーのライフは300しか減っていない。私は、この状況でドロロー時に使用できるスキルに心当たりはなかった。たったひとつを除いて。

おもむろにグラトニーはドロローする手を掲げた。

すると、奥のシユブニニグラスの絵から禍々しい色彩の光線が放たれ、それを浴びたグラトニーの指が闇色の輝きを放つ。

「まっ」

まさか、いまから使用するスキルっていうのは。

グラトニーはいった。

「暗き力はドロローカードをも闇に染める!——ダークドロロー」

ドロロー。直後、有り余ったグラトニーのフィールドがガッツリ減少するのが伝わった。

『なっ』『まさか、そんな』

通信先から、司令や霞谷さんからも驚きの声が漏れる。

「どうして。なんでグラトニーがこのスキルを」

私は眩きながら、ハッと私はシユブニニグラスの絵を見る。まさか

邪神の力つてものは絵越しでさえ信者に冥界の力を与えられるものなのだろうか。もしくは私のダークドロワーとは別原理のスキルを生まみ出したのか。

それとも。

「墓地の《置換融合》をゲームから除外して効果を使用します」

グラトニーが動き出した。

「この効果によって墓地の《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》をEXデッキに戻し、私はカードを1枚ドロワー」

言いながら、グラトニーはカードを1枚引く。そして、引いたカードをすぐさま墓地に送って、

「そして、手札を1枚捨て、速攻魔法を発動。《超融合》！」

「ちよ……!?!」

《超融合》だつて?! これがグラトニーがダークドロワーで引き当てたカード。

「このカードの効果で、私は自分・相手フィールドから、融合素材となるモンスターを墓地に送り、融合モンスター1体を特殊召喚します」
「私の場合から!?!」

ダークドロワーを挟む以上確実とはいえないものの、やっぱり私の予感は当たっていた。

前のターン、私はクリスタルウィングの効果を使わされていたのだ。私自身の手でこの結果を招き寄せるために。

でも、一手甘いつて話よ。

「なら、その発動にチェーンして《クリアウィング・ラピッド・ドラゴン》の効果で自身の効果を無効にする。さらに、その効果を《クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン》の効果で無効にし、クリアウィング・ラピッドを破壊する」

これで私の場にモンスターは1体。素材モンスターの数が足りなくななり《超融合》は不発になる。

「無駄だよ」

グラトニーがいった。

「《超融合》の発動に対してプレイヤーは魔法・罠・モンスターの効果

は発動できない。この絶対的な力の前には、あらゆるものは無力！
性欲ラストに従われる透明な翼を持ちし二柱の竜よ。いまこそ再び混ざり
合い、暴食グラトニーの供物となれ。再び顕現せよ、飢えし牙！ 融合召喚！
降臨せよレベル8《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》！」
こうして、一度デッキに還ったことで再び降臨するスターヴ・ヴェ
ノム。それも、私のクリアウイング・ラピッドとクリスタルウイング
を喰らう形で。

あと、とところで。

さつき一瞬、グラトニーの口調が変わってた気がするのはい気のせい
だろうか。

「バトル！ 《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》で沙樹
さんに攻撃。そのライフを喰らいつくして」

指示を受け、その身で襲い掛かるスターヴ・ヴェノム。

私は手札を捨て、

「相手が直接攻撃を宣言したこの瞬間、手札の《クリ瑞雲》を墓地に送
り効果発動。私の場に幻獣機トークンを特殊召喚し、スターヴ・ヴェ
ノムの攻撃対象をこのトークンに移し替えてダメージ計算を行う。
さらにこの戦闘によって幻獣機トークンは戦闘では破壊されな、っ
!?!」

言いかけた私の言葉は、グラトニーがチェーン発動した《メテオ・
レイン》によって止められた。

《メテオ・レイン》。あのカードは、発動ターンの間自身のモンス
ターに貫通能力を与えるカード。そんな私の幻獣機に相性抜群な
カードを、グラトニーは初手からずつと伏せてたのだ。

発生した幻獣機のアログラムは、スターヴ・ヴェノムの口から漏れ
る瘴気だけで消滅し、モンスターの牙のビジョンが私に届いた瞬間。

沙樹 LP300↓0

私のライフは尽きた。

沙樹

LP0

手札1

□□□□
□□□□

□□―「スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン」
□□□□

「『神の居城―ヴァルハラ』□□

グラトニー

LP500

手札0

結局、グラトニーは一度もダメージのリアル化をしてこなかった為、私の肉体は傷ひとつ付かずに済んだ。

しかし、デュエルに負け私のフィールが全損した瞬間。

「うっ」

私は胸を押さえ膝をついた。

突然、思考がぐにやりと歪みながら胸が激しい動悸を訴えたからだった。

「鳥乃！」

永上さんの声が遠くで聞こえる。直後、今度は心に穴が空く感覚に襲われた。全身の血の気が一気に引く代わりに動悸が消え、思考の歪みが吹きさらしに流され頭が冷静を取り戻す。

気づくと私は地縛神に守られるようにビジョンの内側にいた。肌を見ると死者のように青白くなっており、自分が地縛神の眷属としての姿に変わってる事を自覚する。

『大丈夫か？』

地縛神がいった。

「モウ少シでシユブニグラスにSAN値ヲ直葬され、正気ヲ失ってタ所だったゾ」

「え？」

言われ、私は絵を見る。警戒は忘れてないつもりだったけど、この一室はいわばシユブニグラスの腹の中も同然なのだ。

「なるほどね」

私はいった。

「元々デュエルでフィールを全損された瞬間を狙って洗脳する算段だったわけね。グラトニー」

「え？」

グラトニーは、なぜか茫然としていた。白を切るつもりか、それとも。

『どちらにしてもこれ以上の作戦は無理です。撤退しましょう』

通信先から霞谷さんの声。続けて、

『そうね。ガルム、フェンリル！ 直ちに馬鹿と脳筋を回収して撤退して』

と、司令からの命令。直後、部屋の壁がミシミシと音を立て、亀裂が入ったと思うと、

「りよーかい！」

外側から拳一本で壁を破壊したガルムが乱入。さらに後ろからフェンリルが続いて、

「みんな。あそこの壁から逃げるよ」

と、部屋の角を指さしいった。直後、指定された箇所からは彼女のフィールで発生した瘴気が昇り、

『懸命な判断だ』

地縛神はいうと、永上さんまで内側に取り込み、ふたりを連れたまま空中を泳いで向かいます。こいつ、こんな便利な能力まで持つてたって話なの？

「おおおっ」

そして永上さんは子供みたいに興奮しないで。

「待ってください！ 待って」

グラトニーが数歩ほど駆け寄り、声をかける。

私は振り返りいった。

「グラトニー。あなたにとつての神様はシユブニグラスなんですよけど、私の傍には、すでに天使がいるのよ。会う度に私をハンマーで制裁して、ちよつと私が他の女の子を追いかければ嫉妬し、仕事を優先すると不機嫌になる。そんな私の天使様。そのくせ、あの子はノーマルだから、絶対に私に抱かれてくれないっていうおまけ付き」

「沙……」

「さっきのが、どこまであなたの意志かは聞かないでおくわ。でも、さっきの洗脳みたいな、私の天使を悲しませる事をしたら、あなたの性別関係なく容赦しないから」

地縛神がフェンリルのゲートを潜った。

気づくと、私たちは研究所前の駐車場に転がっていた。集会所に停車したはずの車もそこにあり、フェンリルに限らず任務中に誰かが移動させたものと思われる。

逆に、地縛神の姿はすでになかった。私の肌も血色を取り戻している。

『とりあえず任務は終了ですね。お疲れ様です』

通信先から霞谷さんがいった。

「成果はゼロだけどね」

私が半身起こし伸びしながらいうと、

『とんでもありません。誰も犠牲にならず事が済んだ。それだけでも上々の成果ですよ』

と、霞谷さんはいってくれる。

『それに何も情報を得れなかったわけでもないわ。奴らが洗脳を辞さない危険な集団であることと、多少戦力も技術力が減つてること。逆にフィール・ハンターズはいよいよプライド派を吸収して最大の脅威になってることと、あとはまあグラトニーのデツキ内容？』

司令も言ってくれるけど、

「けど、一步情報が足りない以上潜入捜査としては失敗でしょ」

私というと、

『依頼者が私ならそう判断するわ』

と、遠慮なく返された。

「判断はまだ早いかもしれないよ」

ここで会話に割り込んだのはフェンリル。

「鳥乃さん。車の扉を開けずに慎重に中を確認してくれる？」

「え？」

どうしてと思いながら、私は言われるまま窓越しに中を覗いてみる。すると、パソコン、ハードディスク、書物の類など情報の宝庫が車内いっぱいにごった返してたのだ。

「これって」

驚き訊ねた所、

「これでも黒山羊の実それもプライド派の元メンバーだからね。資料室とか倉庫とかそういう場所に潜入して片っ端から車内に放り込んでみたよ。って、言いたいんだけど」

「ってことは違うの？」

「あんまり上手くいきすぎてたから、もしかしてわざと押し付けられたのかも」

「誰に？」

「グラトニーに」

フェンリルはいった。

「ボクの知ってるグラトニー像でみるに、多分グラトニーも本当は提供したいけど立場上提供できない情報とか色々あったと思うんだよ。だから情報を盗まれたって体にして渡したい情報を押し付けられるだけ押し付けてきた。そう考えると一番しつくりくるんだ」

「いや、だから車内いっぱい情報媒体を渡すのはありえないでしょ」
むしろここまでくると、一周回って致命的に組織の管理がずさんだったって説のほうが信憑性が出てくる。

私はそう思ったんだけど。

「だからこそだよ。暴食なだけに、たまに限度を知らないんだ。あの幹部」

だそうだ。

『ならフェンリル？ ひとつ聞いてもいい？』

「ここで司令はいった。」

「なにかな？」

『グラトニーは今回、デュエルでフィールを全損した鳥乃を邪神の力で洗脳しようとしたわ。けど、それを責めた時のグラトニーはまるで「違う、クリボーが勝手に」とか言いそうな態度だった』

その例えに、内心私は嘔きそうになったけど、

「ここからは私が。どう？ フェンリルとしては本当にグラトニーが私を洗脳しようとしたと思う？ それとも、シユブニグラスもしくは別の誰かがやった線が高そう？」

「ボクとしては」

フェンリルは少し考える。が、そこへガルムが。

「やってないわ。だって、あの人まだ私たちを逃がさない位にはファイルがまだ残ってたもの。壁を破壊して、グラトニーの気配を視た瞬間、私バッチリ分かったわ。『この人、逃がしてくれるつもりだ』って」

「ガルムほど確信はないけど、そこはボクも同意かな」

と、フェンリルもいった。

「正直、ボク的にグラトニーはそこまで悪い人ではないと思うけど洗脳も含めて何やらかしてもおかしくない人だと思う。でも、さっきのグラトニーに限っていえば、洗脳しようと考えてたとは思えない」

「そっか」

第六感が鋭そうなガルムも同意したのだ。たぶん、あの洗脳行為は本当にグラトニーが関与してない出来事だったのだろう。

「まあ、それはあとで考えるところ」

私は車を指さし、

「これどうしよう」

と、話を戻す。

「一応正式な捜査を通さず押収したものだから、警察的には盗品になるのよね。一旦ハングドで預かるにしても、いま木更ちゃんがあればから、そこからNLTに届くようにしたほうがいいんだろうけど」

『ハングド預かりで問題ないでしょ』

司令がいった。

「どうして？」

『鈴音の首を縦に振らせて研究所に調べさせるわ。ちょうど、いまいる場所も研究所だし移動の手間も省けるでしょ』

『確かに、車内がこうなっていると移動の手間もありますね』

霞谷さんも同意し、

『皆さまさえ宜しければ、ハングドのほうで調べて頂いてもよろしい
でしょうか?』

『了解』

と、ふたりの間で合意されたことで、私たちは車内のものを慎重に
施設に運び出し、今回の依頼はひとまず完了になった。

MISSION 28—輝きと陰り（前編）

私の名前は鳥乃とりの 沙樹さき。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「アンちゃん、おっぱい揉ませて」

梓のハンマー。沈む私。

「沙樹ちゃん、次いったらホームランだからね」

ちなみに現在は学校の屋上。当然、ここからのホームランは教室とはわけが違う。

「死ぬ！ 梓それ死ぬって話」

「でもファイルで守れるんでしょ？」

「待つて待つて待つてこの高さだとそれでも死ぬって話」

だから、すでにハンマー持つて素振りするのやめて。

今日は屋上の開放日。私と梓はアンちゃんを誘って空の下で昼食を食べてる所である。

木更ちゃんは今日も休み。なので、彼女の友達であるふたりに現状報告をする為、定期的にこうして集まってるのだ。

「そういえば、鳥乃さんも今日から休みとお聞きしたのですけど」

アンちゃんが訊ねてきた。ハンドグドのことである。

「うん」

私はうなずいた。今日は警察からの依頼MISSION 27 参照から二日後。昨日は事後処理やら何だかで仕事が残つてたため、今日から改めて司令より言い渡された強制休暇の開始である。

「だからですか。今日の梓さん、とてもご機嫌がよさそうですもの」

アンちゃんがぐすり微笑みいった。他の生徒が見てるせいかな、普段に増して外面がよく映る。

実際、今日の梓は凄く機嫌がいい。さっきの素振りだって、テンションの高さがさせてしまったことだろうしね。ただ、ここはクラスの外だから、私たちの恒例行事を知らない何人かが梓を見て怯えてるって話だけだ。

ただ、その理由は単に私の強制休暇なだけではない。

「実はそれでね、今週末に沙樹ちゃんと久しぶりに出かけることになって」

梓は満面の笑みでいった。

元々、ここ数日徹夜で作業しなくちゃいけない事があつたらしく、週明けも寝 MISSION27参照 不足を晒してた梓だったけど、曰くその結果がとても

良い形で実を結んだらしい。おかげで、昨日の時点から梓の機嫌はよかつたのだけど、そこに加えて私もしばらくハングドを休む事になり、せつかく久々にフリーの休暇ができたからと、梓に週末のお誘いをしたわけだ。

結果、いま梓は二重のハッピーの中にいる。

ただその一方で、

「それで、藤稔さんのご様子は」

アンちゃんが訊ねてきた。梓の様子に気を配ってたか、こそこそと小声で。

「昨日、最終手段でコーヒーに睡眠薬仕込んで強引に寝かせたらしいわ」

私はいった。

「だから私もフェンリルと共謀して寝室に忍び込もうとしたんだけど、さすがにガルム相手じゃ相手が悪いわ。なんか狙撃銃でロックされてる感じもあつたし」

「そういえば、昨晚フィーアがハングドに一晩雇われて向かわれてましたね」

「え」

それ、よく私たち生きてたって話よね。前衛にガルム、後衛にフィーアとか想像しただけで失禁しそうなのに。

と、まあそんな形で、梓とは反対に木更ちゃんは現在もメンタル崩壊の最中にいる。

「そういえば、さっきのフィーアで思い出したけど、ハイウィンドはいまどうなってる？ あと鷹女ちゃん」

今度は私が訊ねる。気づけば MISSION26参照 アインスとデュエルした日を最後に、

アンちゃんを除く神簇邸のメンバーと接触する機会が途絶えてるのだ。といつても、まだ一か月どころか先週の話なただけだね。だから、本気で気になったというよりは適当に選んだ話の種に近い。

「鷹女さんは正式に家の使用人として雇うことになりました」

「よく素直に聞いたって話ね、あの子」

アンちゃんが手綱を引いてるとはいえ、あの子は神簇にも殺意を持つてるはずなのに。

「ええ」

アンちゃんは死んだ目で虚空を見上げ、乾いた声でうふふと笑い、「彼女が家にきた翌日、洗濯に出した私の下着がすべて新品になってまして」

「あ」

「ですから、元は取つてると思われます。まさか私如きがそういう方面の被害者側に立つとは思いませんでしたけど。ふふ、うふふふふ。あはははは」

あ、やばい。好意や崇拜に慣れてないせいで、アンちゃんの自我がゲシユタルト崩壊起こしてる。

「ちよつとアンちゃん。大丈夫？ おっぱい揉んでいい？」

「せーの！」

後ろから響く掛け声の直後、私は空を飛んでいた。

—— 現在時刻、午後17:35。

水曜日。

梓たちと屋上で昼食を食べた日の夕方、私はすこぶる機嫌の悪い顔をしながら、開店直後の『BARなばな』にいた。

ハングドの仕事である。

「まったく、あの司令は」

ひとり愚痴を吐きながら、私は閉店前の『喫茶なばな』時に注文したホットコーヒーを飲む。

事の発端は、放課後、梓と週末どこに行こうかと話し合っている途中だった。突然、司令から連絡がきて、強制休暇の一時中断と依頼の

要請を言い渡してきたのだ。

もちろん、梓も聞いてる前で堂々と断ったのだけど、金銭面の問題上、私の命は司令が握ってるようなもの。かくして17:45待ち合わせで『BARなばな』に足を運ばされたわけだ。

で、私の休暇を中断してまで会うことになった、今回の依頼人というのは。

「お待たせ」

気づくと、私が座るボックス席の前でひとりの女兒が立っていた。ケアの行き届いた長い髪に、幼さを武器にしつつシエイプアップされたスレンダーな肢体。帽子とサングラスで顔を隠し、普段の彼女のイメージと正反対な露出の少なく年相応な服装を選びながら、なお隠しきれない美的センスを振りまく存在。

「『レスの肌馬』鳥乃 沙樹MISSION4参照さんね。この前はお世話になったわ」

「久しぶり、高村たかむら いちご 苺ちゃん」

司令の娘である彼女が、今回の依頼人である。年齢11歳、小学生にして職業ジュニアアイドル。

DSロリお嬢様路線で売り出しており、ライブや一部のバラエティ番組では、鞭を片手に服の下に着用したボンテージ姿でロリコンと一部のマゾ豚をぶひぶひ言わせる「芸」を持つ。反面、番組に合わせてキャラを加減してるらしく、意外にもスタツフ受けがよく地元の情報番組を中心に幅広い活躍をみせている子だ。最近ではパンク系のファッションモデルとして少女雑誌にも掲載されたらしい。

と、前回とうって変わり相当踏み込んだレベルで彼女の情報を知ってる私だけだ。うん、まあ、実際に会ったあの日から、好きな芸能人のひとりとしてカウントしてるのだ。だからといって梓との日々を邪魔されて上機嫌なはずはないけど。

「いらっしやいます。こちらメニニューになりますです」

苺ちゃんが席に座ったのを見計らい、マスターの水菜さんがメニニュー表を席においた。

「オレンジジュースをお願いします」

苺ちゃんはメニニュー表を開くと、カクテルの覧だけを見ていう。そ

の仕草は、完全にお嬢様のそれだ。別に司令の家は（親戚はともかく）普通に中流家庭のはずなのに。

でもって、水菜さんは、

「スクリユードライバーですね。少々お待ちくださいです」

「の、ウオツカ抜きよ」

という顔見知りじゃないと実現しないやり取り。加えて、苺ちゃんがアルコールカクテルのレシピを知ってるという事実。もしかしたら、スクリユードライバー（ウオツカとオレンジジュースで作るカクテル）をみて、苺ちゃんはオレンジジュースがあるとみて注文し、水菜さんも見抜いてやり取りしたのかも。

「それで、沙樹さんはブラック・ルシアンなんていかがですか？」

引き続き、こちらにも訊ねる水菜さんに、

「私、未成年だけど」

「ヴェーラがいないと、ウオツカが減らないので調子が狂うんですはい」

確かに。みると今日もBARにヴェーラの姿は見当たらない。取材先で行方不明という話もないので、近く帰ってくるとは思うけど、いつも見る顔がないっていうのは不思議な気分だ。なお、ブラックルシアンとはウオツカとコーヒー・リキュールで作るカクテルだ。

「それに、相手は小学生ですからあなたも酔った勢いではないでしょう？」

「悪いけど仕事中。依頼人以外からお酒は受け取らない主義だから」

私がいようと、その依頼人である苺ちゃんは、

「シラフで話がしたいから、アルコールは1%未満でお願い」
って。

「分かりましたです」

渋々と引き下がる水菜さん。その後ろ姿に、私はなんとなく島津先生を思い浮かべた。奇しくも、どちらも合法ロリのアダルト勢って点で共通している。

そして、オレンジジュースが席に置かれた辺りで、

「遅いわね」

と、腕時計をみる苺ちゃんに、

「他に誰かくるの？」

「社長も一緒なのよ。私を先におろして、いま車を停めてる途中なんだけど」

苺ちゃんがいった刹那、

「お待たせ、苺ちゃん」

と、60代ほどのスーツの女性がやってきた。怪我をしてるのだからか左腕には一部包帯が巻かれている。

女性は苺ちゃんの隣に座ると、

「『レズの肌馬』さんですね」

「うん、まあ」

「初めまして。古都プロダクション社長の古都 果枝です」

私は社長から名刺を受け取りながら、

「20年前に会いたかったわね」

「え？」

「いや、何でもないって話」

肩まで伸びた髪に整った顔立ち。背筋も伸びすらつとした体軀もあり、本来はさぞや美人であったものと思われる。

しかし、長年の苦勞と無茶のツケだろう、手の甲や喉元、頬など至る所に老いが見られ化粧でさえ隠しきれない。残念ながら今では綺麗なお婆ちゃんといった印象だった。

「早速ですが依頼の話をお願いしても」

失礼なことを考えてた自覚はあったので、私は誤魔化すようにいった。

「はい」

うなづく古都社長。続けて苺ちゃんが、

「鳥乃さんは、古都プロ所属の宇佐美 柑奈って子は知ってる？」

「ん、知ってるけど」

私は生返事しながらコーヒーを一口。でもって、「あ」と気づき、

「ていうより、小中高と同じの元同級生よ。そっかサミサミ、古都プロって話？」

うさみ かな
宇佐美 柑奈。

面識はそこまで無いんだけど小学校から現在通ってる高校までずっと同じという貴重な「元」同級生のひとりである。

性格は明るく健気。だけど、間が悪くドジな傾向があり、小学校低学年の頃は友達も普通にいたが、高学年辺りから彼女をわざとらしいと思う女子が現れだし、中学に入る頃には完全に虐めや無視に発展した。

高校入学後も虐めは続き、彼女に居場所はなかった。そんな折、彼女は芸能界からスカウトされて宇佐美だからサミサミの愛称でアイドルデビュー。以後、宇佐美さんは学校に通ってはいない。一応、親の独断かまだ高等部に在籍はしてるらしいけど、出席日数の問題で留年しており、退学は時間の問題と思われる。

「知り合いなら話は早いわ。実はそのサミサミが近頃クスリに手を出してるって噂されてるのよ」

苺ちゃんはいった。私は驚き、

「サミサミが?」

「あの子、気が弱く騙されやすいのは知ってるでしょ?」

「うん」

ただし、騙されやすいのは元からだけど、気が弱いのは後天だ。

以前より健気さから自分の短所を気にしてはいたけど、虐められたことで自尊心つてもものを完全に失ってるのである。

「想像つくと思うけど、宇佐美は同性受けが悪いのよ。無垢で庇護欲を刺激する子だから年配や男の受けはいいんだけど、それが余計にね。学校でも虐められてたんでしょ? 居場所を芸能界に移しても彼女を取り巻く環境は全く変わってないのよ」

「でしようね」

調べるまでなく想像通り。

「まあ、同性受けが悪いのは私も同じだけど」

と、口にする苺ちゃんに私は、

「プロ意識が高すぎて、生意気に見られている。だっけ?」

「よく調べてるじゃない。まあ私のことはいいのよ。そういうキャラ

でやってきたし自分の意志で決めた道だもの。でも、宇佐美はそうじゃない。アイドルの世界に甘い夢と居場所を求め、前の世界から逃げてきたのよ」

なんて、相変わらず小学生離れしたことをのたまう苺ちゃん。が、直後社長はプツと吹き出し、

「そういう苺ちゃんだって、最初はお金貰ってもはやされる素敵な職場♪ みたいに甘い夢求めてたじゃない」

「ちよつと、社長」

途端、赤面しながら「げっ」て顔にだす苺ちゃん。

「へえ。最初はちゃんと見た目通り人生勘違いしちゃった子供だったのね」

「寧ろスカウトされる前からね」

つまり、高村司令に相当甘やかされたわけか。納得。

「って、だから私のことはいいでしょ」

どうやら、昔の話は相当黒歴史らしい。慌てる姿は幾分か年相応に映った。

「それよりも宇佐美よ。あの子は現在、今時珍しい位拘れてない感じが評判を呼んでちよくちよく知名度が上がってきてるわ。だけどその分、敵意を持った共演者や、悪意をもって接触する人間も異常に増えてきてるのよ。先輩アイドルからは私以上に虐めの矛先に遭い、男性アイドルがやり捨て目的で接触し、60過ぎの大御所が愛人って名の性奴隷にしようと家に招待し、事務所を通さず彼女に仕事の話が舞い込んだと思ったら不当なギャラで枕営業させられそうになってたり」

なお、こんなお下劣な業界の闇を吐露してるのは現役の小学生である。

横目でちらつと伺うと、社長が「もう少し言葉を選んで苺ちゃん」と項垂れてたので、私は助け船を出すつもりで、

「そこへ今回のクスリね」

「そうよ」

苺ちゃんは頷いた。

「実をいうと、宇佐美はこのままだと芸能界から干されるわ。理由は先日、番組の収録中にあの子某男性アイドルや大御所に襲われかけたエピソードをつい口を滑らせたのよ。勿論、その内容は放送されなかったけど、天然でやらかした分、危機感を覚えた人が大勢いたんでしようね。多くの芸能人があの子との出演を暗にNG指定し、過去に枕営業を求めた監督の関わる番組からも降ろされ始めてるわ」

「文〇砲のひとつも出てないってことは、マスコミは口止めされされてるって話?」

「そ。と言いたい所だけど、そこで変な噂があるのよ」

苺ちゃんがいった。で、ここでやつと社長が、

「口止め。いえ、口封じにドラッグの密売組織が一枚噛んでるらしいと」

「ドラッグの密売組織?」

訊ねると、再び苺ちゃんが。

「私たちが最初はヤリチン共が各々、もしくは一致団結してマスコミ各社に口止め料を払ったものと思っただけ、いまの時代いくら口止めしても野次馬がネットに拡散するものでしょ。それさえもなかったのよ。そこで探偵をひとり雇って調べてもらったんだけど、どうなったと思う?」

「どうなったって」

まさか、死――。

「数日後、探偵は警察署に侵入し、銃を盗んだうえで乱射。数人の警察官の命を奪った後、射殺されました」

社長がいった。想像以上だった。

「司法解剖の結果、探偵からはロストというドラッグが検出されました。聞いたことのない名前でしたので調べてみた所」

「ファイル・ハンターズが占有するシ〇イハンター版のエンジェル・ダストに類似した幻覚剤。ただの人間を死さえ恐れぬ狂戦士に変え、一度でも使えば脳が破壊され人格に異常をきたす」

「っ」「っ」

驚くふたり。どうやら、そこまで詳細は知らなかったらしい。

私はいった。

「使ったの？ そのロストをサミサミが」

「そこまでは分かりません」

社長はいった。

「ですが、近頃人が変わったように躁鬱が激しくなったのは確かです。それで、先日薬物検査をお願いした所」

そういつて、社長は包帯の巻かれた腕を私の前に出す。

「刺された？」

「はい」

社長は頷いた。

苺ちゃんが憤慨して、

「鳥乃さんも知ってるでしょ？ あの子が人に危害を加える子でなければ、そんな度胸もない子だって」

そういえば、この苺ちゃんは意外と熱く面倒見の良過ぎる一面があるのだった。たぶん、苺ちゃんにとって宇佐美さんは手を焼かすにはいられない子だったに違いない。

「そうね」

私は頷いた。

「話を戻すけど、みた所ロストの詳細はそこまで知らなかったように見えるけど、ふたりはどこまで把握できてるか教えて頂戴」

「フィール・ハンターズという名前の組織が扱ってるという所までです」

社長は視線を落とし、

「その、調べてくださったスタッフも口封じに殺されましたので」

「ドラッグで？」

「いえ、パソコンのモニターから機械族かサイバー族と思われる黒くシャープな見た目のモンスターが貞子のように現れて、私たちの目の前でグサツと」

フィール・カードか。

「ただ、亡くなったスタッフは調査の中偶然ハンドの情報を見つけていたらしく、書き残されたメモを元に今回『BARなばな』を介し

て連絡を取りました」

「え？」

私は、聞かされた経緯を前に苺ちゃんの顔を見る。

「そしたら、この前私を助けてくれた変な人がハングドで『レズの肌馬』の通り名で活動してるっていうじゃない。驚いたわ」

苺ちゃんは、察した顔でいうけど。そこじゃない。

もしかして苺ちゃん、自分の母と姉がそのハングドで働いてること知らない？

「改めて、詳細と経緯は以上になります」

社長がいった。

「あなた方への依頼は、宇佐美 柑奈とドラッグの関係についての調査。および、事務所の力では対処不可能な問題に足を踏み込んでる可能性が高く、宇佐美の安全が確認される程度に問題の解決をお願いします。報酬は事前に提示された金額で構いません」

「了解。一応、依頼の期限日は？」

「できれば今月末までに解決をお願いします。こういう問題は長引くほど深みに嵌ってしまいますから」

「証拠もどんどん減るものね。了解」

私は、それでもまだ気が乗らないながら依頼を請けることを決める。

「あ、ついでに横からいい？」

そこへ苺ちゃんが口を挟んできた。

「どうしたの？」

と、社長が訊ねる中、

「本来ここは私が口出す所じゃないけど、何となく今月末どころか来週まで延びたら手遅れになりそうな気がするのよね」

「可能性はあるわね」

主に、私と梓の週末が。

「だからさ、子供から玩具のお札でも受け取った気持ちで、これ前金に受け取ってくれない？」

そういつて苺ちゃんがバッグから取り出したのは2枚のチケット。

まさかライブチケットじゃないだろうなと思って確認してみると、
んでもない。渡りに船か不幸中の幸いか、なんとそれは温泉宿へのペ
ア2名様無料招待券だったのだ。

「これって」

「貰ったはいいいけど、ちょうど収録と重なって行けなくなった代物よ。
ペアが不満なら2〜3名くらいの宿泊費なら負担するわ。交通費も
請求書で送って頂戴」

「いいの？」

訊ねると、

「良いも何も貰い手を探してる位よ。でもまあ、多分間に合わないよ
うな日付だから、気休めにもならないわよね」

見ると招待券は今週の土日になっている。つまり金曜、明後日まで
に事件を解決できれば梓と温泉旅行に行けるわけだ。

「すみません、この子が勝手なことを」

社長が頭を下げるも、

「十分よ。むしろモチベーション爆上がりって話？」

私はいった。

交渉が終わると、私たちはなばなを出て、苺ちゃんと共に社長の運
転する車に乗り込んだ。

曰く、今日これから宇佐美さんのライブイベントに苺ちゃんがゲス
ト出演するらしい。

場所は、なばなから車で30分ほどにある市内の公民館。昼と夜の
二回公演が行われ、今回向かうのは夜の部。

「スカウトし、売り出しておいて言える言葉ではありませんけど、あの
子をデビューさせるべきではありませんでした」

道中。運転しながら社長はいった。

「あの子の心は綺麗すぎて、芸能界の闇に適応できるはずがなかった
んです。苺ちゃんだけは真っ先に危険性に気づき何度も警告してく
れたのに、どうして我々は耳を傾けなかったのか」

「なら今でも遅くないわ。どうして契約を打ち切らなかったの？」

私が訊ねると、苺ちゃんが、

「もう遅いのよ。その契約を打ち切るタイミングを狙って、あの子をAV女優にしようかと企む輩が目を光らせてるわ」

「ああ」

そういう事か。社長は続けて、

「それに、古都プロは彼女をデビューさせてしまった責任があります。彼女が引退を望んでない以上、私たちは彼女のアイドル人生をサポートする必要が、きやつ！」

突然の急ブレーキ。

何事かと前方を窺うと、飛び出してきたと思われる一台のバイクが衝突寸前の所で停止していた。

辺りを確認すると、ちようと現在地は橋の下で薄暗く、加えて植栽が立ち並び見通しが悪い中を幾つもの歩道と車道が交錯しあう、いかにも事故を起こしやすそうな坂道だった。

運転手がバイクから降り、こちらに歩み寄ってきた。

運転席の窓に立つと、相手は被ってたヘルメットを外す。

その顔を見て私は、

「アインス!?!」

衝突しかけたバイクの運転手は、なんとハイウインドの長女。 ”

^{プリンセス}王子” アインス・ハイだったのだ。

「知り合い?」

訊ねる苺ちゃんに私は、

「友人、兼組織の違う同業者」

ここで社長は車の窓を開ける。アインスはすまなそうにのぞき込み、

「すみません、大丈夫でしたか」

「ええ」

「良かった。とはいえ、危険に晒してしまったのも事実。お詫びを兼ねて、どうでしょう。よろしければこの後、BARでワインでも一杯奢ります」

と、相変わらず王子様は流れるように社長を口説きだしたので、

「はい悪いけど仕事中」

私は懐から銃、は危険なのでシャーペンを出し、アインスの喉元でカチカチする。

「おや、鳥乃?」

ここで初めてアインスは私に気づいた模様。私は社長と苺ちゃんに一言断つてから一度車から降り、

「危ないじゃない。もう少しで大切な依頼人を事故に遭わせる所だったんだけど」

「申し訳なかった」

謝るアインスに私は、

「言葉じゃなく行動で示してほしいって話なのよね。アインス、いまそっちは仕事中?」

「いや、フリーだよ。いまから、あるアイドルのライブイベントに顔を出す所さ」

とのアインスの言葉に、

「まさか、サミサミ?」

「よく分かったね、その通りだよ。まさか鳥乃の仕事っていうのは」

「正解。サミサミ絡み」

私はいい、続けて、

「丁度良かった。私たちも、いまからその会場に向かう所。でもものは相談だけど」

「事故未遂のお詫びで手伝ってくれ、かい? 分かった」

すぐに承諾してくれるアインス。

「話が早くて助かるわ。現時点で言えるのは、さっきアインスと話した貴婦人が今回の依頼人で、サミサミの事務所の社長。残りの詳細は現地で隙をみつけて話すわ」

その後、二言三言話してから私は車に戻り、

「アインス。事故未遂のお詫びに協力してくれるって」

「そういつて強引に交渉してたの聞こえてたけど?」

呆れた顔で苺ちゃんがいった。

「いいの社長。勝手にあんな事させて」

「本当は第三者を巻き込ませたくないのだけど」

困った顔をする社長に、

「私にスピード解決を求めたのはあなたたちって話よ」

「だからっってお客様信用ってものがあるでしょ」

苺ちゃんはさらに反論するが、

「だからこそ人手が欲しいのよ」

私はいった。

「ただの麻薬密売人が相手なら、いくらアインス相手でも依頼人の許可なしに交渉までしないわ。でも、フィール・ハンターズが関わってるなら話は別。監視の目は多いほうがいいわ」

言ってから、私は一拍置いて、

「苺ちゃん。先日クレイン公園で遭遇したロリコン覚えてる？」

「それは勿論」

「あいつもフィール・ハンターズよ。あの日、奴は公園に数十人規模の部下を配置し、あなたを含む3人をメインディッシュに強姦目的の襲撃を計画していたわ。今回も規模はともかくライブ会場に人員を紛れ込ませて監視してる可能性は十分にあるって話」

すると、苺ちゃんは一度ゾツとした顔を見せ、

「そいつらがロストっていうのを隠し持って、観客やスタッフに打ったりしたら」

さすが苺ちゃん。私の想定する最悪のケースをすぐ把握してくれた。

「大丈夫よ」

だから、私はいった。

「その心配をするのは私の仕事だから取らないで頂戴。例え奴らが最悪なシナリオを用意してても回避できるよう手は打つから」

車は動き出した。

件の坂道を登りきると、程なくして私たちは目的地の公民館に辿り着いた。

驚いたことに、建物は想定よりずっと大きかった。茶色を基調と

し、横も奥行きも広い会館が窓から推測して3階ほど。さらに数階、面積を減らしタワー状に伸びている。

当然、駐車場も大手ショッピングモール並に広々としているのだが、なんと見た限り満席。

「もしかして、駐車場の全部サミサミが?」

「それはないわ」

言い切る苺ちゃん。

「今日は確か、1階の大小両方のホールで夕方から別のイベントが行われるから、きつとそっちね」

曰く、苺ちゃんは昼の部でもゲストで顔を出してたそうだけど、そのときはここまで駐車場が混んではなかったそうさ。

しかも1階のホールが別で使われてるってことは、

「サミサミのライブってホールじゃないの?」

「確か5階の会議室よ」

「会議室?」

「ステージはあるけど、宴会なり講習会に呼ばれたような場所だから、期待はしないほうがいいわ」

苺ちゃんはいった。

自動ドアを潜りエントランスに入ると、すぐ見つかる場所に公民館の利用予定を記した掲示板が貼られてあった。

確認した所、1階大ホールは演歌歌手のコンサート。そして小ホールはKasugaya勉強会。

「いるわね、フィール・ハンターズが」

「え?」

反応する社長に私は、

「Kasugaya本店の店長はフィール・ハンターズよ」

「それ、本当?」

苺ちゃんが反応。私はうなずく。

「とりあえず詳しい話はエレベーターで話すわ。アインスもそれでいい?」

「分かった」

と、ちゃんとその時点まで付いてきていたアインスが返事。だけ
ど、

「悪いけどエレベーターは使わないのよ」

苺ちゃんがいった。続けて社長が、

「私たちは職員用通路の階段で5階に向かいます」

そっか。エレベーターだと他の人たちと一緒に密室に入ってしまう
ことになる。そこで変質者に襲われたり、ファンの襲撃に遭う可能
性だつてなくはないのだ。

「了解」

私はうなずき、4人で関係者以外立ち入り禁止と書かれたドアの奥
へと進んだ。

そこは廊下と階段のみならず、ホールイベント等の控室も何部屋か
併設されていた。この様子だと、この通路から各ホールのステージ裏
にも行けるものと思われる。

「——のだ」

ふと、私は聞き覚えのある声を聴いた気がした。声の方角を横目で
確認すると、Kasugayaの控室が見えた。

「どうしたんだい、鳥乃」

訊ねるアインス。私は「何でもないわ」といい、

「Kasugayaの控室から声が聞こえたわ。どうやら私の知つて
る誰かが配置されてるみたい」

「そうか」

「ま、これ以上気にはしないけど。いまはこっちの任務中つて話だし
ね」

ここで踏み込むのがまさかの正解だったなんて思いもしなかった
私は、そのままアインスたちと一緒に階段を登るのだった。

2階からは控室とは併設されておらず、踊り場毎に窓ガラスが大き
めに貼られた階段だけが5階まで続いていた。

一応、建物は6階以後もある様子だったが、恐らく職員用通路は
同じ構造になってるのだろう。私たちは特に何事もなく会場の隣の
部屋である宇佐美さんの控室に到着した。

軽く会場を覗いた所、本当に広めの会議室を急ごしらえのステージに改装した感じだった。少々扱いが雑じゃないかと思っただが、ベテランでもなく、裏で落ち目が約束されたアイドルならこんなものかもしれない。

「じゃあ、私はここで一旦失礼しようか」

控室の前に立つ寸前で、アインスがいった。

苺ちゃんが、

「ありがとう。助かったわ」

と、いつも、

「いや、手伝いをここで打ち切るわけじゃないさ。あくまで私は部外者だからね。ライブが終わるまでは客席から監視させて貰うだけだよ。詳細は聞けず終いだったけど、私の役目は大体察したつもりだからね」

「ありがとう、助かるわ」

今度は私がいった。アインスは、

「そうだ鳥乃。あとで共闘を祝して素敵なBARでも」

「島津先生の家にごち詰めばいいのね？」

「それは勘弁願いたいな」

そういつて、今度こそ客として会場の部屋に入っていった。

改めて控室の前に立つと、社長が部屋の戸を数回叩いた。すると、

「はい」

と、中から宇佐美さんの声。

「宇佐美？ 入るわよ」

社長は戸を開けた。

控室は、テレビで見るとような楽屋ではなく、狭い会議室の形をしていた。スペースの殆どを一台のテーブルが占拠し、囲んでる椅子のひとつに宇佐美さんは座っていた。鏡も備え付けられておらず、彼女の前には外から持ち込んだと思われる卓上ミラーと化粧品セットが置かれていた。

室内でひとり不安そうに俯いてた宇佐美さんは、私たちに虚ろな眼差しを向け、

「あ、社長、苺ちゃん、それに。……え？」

私に気づいた所で目を見開き驚く、

「え、えと、たしか、鳥乃さん？」

良かった。名前くらいは覚えてくれてたみたいだ。私は一歩前に出て、

「宇佐美さん久しぶり。今日はボディガードのバイトで同行してきたわ」

「ボディガード？」

久々に見た生の宇佐美さんは、在学中よりずいぶん綺麗になったと改めて感じた。

清纯派らしく中学時代より伸びた髪は手入れが行き届いてさらさらしており、顔つきこそ素朴で未だ初々しさを十二分に残してるが、白を基調とし腋の開いたノースリーブの衣装が、そこに清潔感のあるエロスを際立たせる。その上で更に胸元を薄くみせる造りになっているように、服の上から膨らみはほとんど伺えない。

「あなたが心配だったから雇ったのよ」

包帯を隠しながら、社長がいった。

「あ、あの、ごめんなさい」

いきなり謝りだす宇佐美さんに、

「どうして謝るのよ。あなたが悪いわけではないんだから」

と、苺ちゃん。

「それより、まだお化粧済ませてないじゃない。ほら、さっさと済ませるわよ」

そのまま宇佐美さんの下に歩み寄り、化粧セットに手を伸ばす。これでは、どっちが年上か分かったものじゃない。まあ、特別トロい宇佐美さんと、特別しつかり者の苺ちゃんコンビだから当然ではあるのだけど。

「あ、ちよつと待って頂戴」

化粧直しが始まってしまったら、ライブまでに済ませておきたかったことが実行できなくなる。

「？ どうしたの？」

ちよつぴり年相応にきよとん、とする苺ちゃん。私は子供には目もくれず宇佐美さんに近づき、

「いや、久々に生のサミサミに会ったら、小中高同じのよしみでちよつとやっておきたかった事があるのよ。ちよつと立って貰える?」

「え? はい」

言われるまま立ち上がる宇佐美さんに、私は続けて、

「で、万歳して頂戴」

「はい」

宇佐美さんは不思議そうな顔で両腕をあげた。

私は、すぐに抱き着いた。

「へ? きやっ」

なんて反応されてる間に、彼女の腋に顔を押し付けてくんくんぺろぺろ。さらに彼女を抱えたままもう片方の腋から衣装の内側に腕を差し込んだ。実はこの子、巷では知る人ぞ知る腋のエロいアイドルって評判を呼んでるのよ。そのくせ、袖口が肌に密着する素材のせいで中々隙間ができないから胸チラが見れそうで見れず紋々とするファンが続出。

「だけど! 私は今日ついに! 未開の奥地に踏み込むことに成功したのよッ!」

ぐへへ。直に触診した所、おそらくバストはAとBカップ。衣装に隠された神秘の内側は、イメージ通りながら慎ましくも膨らみをもっていたらしい。なお、中学時代はAAだった。

そして、サミサミ最大のセックスアピールである腋はというと。

「...これは! 剃ってない。天然のつるつるだ!」

「きゃああああああああ!」

直後、悲鳴をあげる宇佐美さん。どうして? ファンが当然の欲求を実行しただけなのに。

「ちよつと、鳥乃さん何してるのよ?」

「ナニしてるのよ」

私が苺ちゃんに返事すると、社長が。

「鳥乃さん、これ以上すると契約破棄して追い出しますよ」

「嫌」

即答すると、社長は静かに、しかし間違いなくブチ切れた様子で私の襟を掴んで部屋の外へと連れだした。

そして、近くの壁に投げ捨てると、

「鳥乃さん。あなた一体何のおつもりですか？」

「何って」

私は壁を背に転がりながら、見下ろす社長の視線に割と本気で恐怖を覚えつつ、

「あんな美人がセックスアピール強い服着てたら、普通セクハラするって話じゃない。レズとしては」

「普通しません」

はあつ、と社長は一回ため息を吐いて、

「とりあえず、悪いけど“レズの肌馬”との契約は打ち切らせて頂きます。その後、先ほどのアインスという方と契約を結び直しますので、そのおつもりで」

と、背を向ける社長。

「サミサミはまだクスリは使ってないわ」

私はいった。

「え？」

社長は驚き振り返る。

「彼女の汗や体臭からはクスリの気配は感じなかったわ。人間の腋は汗もかきやすいし体臭も籠りやすいから、そこで何の気配も感じないってことは間違いないって話」

「あなた、まさかその為に」

「ついでに、セクハラされて正常に怯えてたのも証拠になるわ。ロストなら尚更ね」

私は起き上がり、

「私への依頼はサミサミの無実の証明と、巻き込まれた問題の解決よね。護衛も勿論するけど優先事項を考えて早速動かせて貰ったわ」

「鳥乃さん、あなた」

「レズとしてセクハラしたかったのも事実だけど」

「感心して損したわ」

なぜか社長は頭を抱えてしまう。

「それで、結局依頼は取り消すの？ 私はそれでも構わないけど」

元々司令の指示で嫌々受けさせられた話だしね。あくまで優先は梓だ。

「契約は継続します」

社長は渋々といった様子でいった。

「ただし、今後サミサミに触れることを禁止します。破った場合は、契約を打ち切った上そちらの事務所に違約金を請求しますので、そのつもりで」

「う。了解」

これは困った。幾ら大人よりしつかりしてても苺ちゃんに手を出す気にはなれないし、どうやって宇佐美さんにレズするべきか。

「それと、私がいいと言うまで部屋の立ち入りを禁止します。これ以上ライブ前にケアを妨害されても困りますので」

しかも「しばらく外で待て」ときた。ガーン。

私は、ついショックで硬直してしまい、その間に社長は部屋に戻ってしまう。おかげでお情けを頼めなかった、畜生。

——現在時刻、午後18:55。

ライブ開始時刻とされる19時から5分前になって、やっと私は控室に戻ることを許可された。

「ただいまー。社長さん酷いって話じゃないギリギリまで戻さないなんて」

私はいいながら部屋に入り、

「お」

と、アイドルふたりを見て声を漏らす。

まず何より宇佐美さんは化粧直しで一段と綺麗な顔立ちに変わっていた。そして、彼女の背中には、追い出される前には無かった天使の羽の装飾が施されていた。着ぐるみに付けるようなキュートなもので、それがまた宇佐美さんにマスコットのような可愛らしさを増長させる。

ただ。その表情はまだちよつと気分が落ち込んでるように見えるが。

でもって、苺ちゃんは、局部こそ隠しつつ肌の露出高めめのボンテージ姿。こちらは羽の装飾がないはずなのに、ふたり並んで立つと対比で悪魔の翼が生えてるように見えてしまう。しかも、ワイヤレスマイクと一体化した鞭がまた。

なんでこんな過激に色っぽい姿が似合うの、この小学生。

苺ちゃんは「ふふん」と笑い、

「どうよ。このステージ衣装。ふたりで並んで立つと凄い様になるでしょ」

と、得意気。

私はうなずき、

「うん。凄く似合ってるわ」

「でしょ」

「苺ちゃんが穢れ役を全部引き受けてるから、相対的にサミサミの純白なオーラが際立つって話ね」

暗に私はガキには興味ないよアピールしたつもりだったんだけど、苺ちゃんは余計調子を良くし、

「でしょでしょ。ほら、この場の全員が言ってるんだから、もつと自信持ちなさいってば」

と、宇佐美さんを立てる。口先だけじゃない。いまこの場で誰が一番輝くべきかを弁え、それを全力で支援するように映った。

「う。うん」

宇佐美さんはいうも、まだ自信が持ててない模様。

「どうしたものかしら」

社長がいった。

「昼の部は悩む間もなく本番だから上手くいったのだけど、時間が経つほど苺ちゃんと見比べて自信を無くしちゃったようで」

「あー」

私からしたら、断然宇佐美さんののが可愛いし綺麗なんだけど、苺ちゃんの場合は実年齢疑いたくなるほど地に足がついてて、それが言

動や顔つきに表れてるのよね。格が違いすぎて自信無くすのも分かる。

「今日のライブを乗り切れればいいなら手はあるけど」
私というと、

「本当ですか？　お願いします」

社長がいったので、

「了解。サミサミ？　ちよつといい？」

私はいった。

「いまからホテルに予約入れるから、ライブに失敗したらベッドの上で反省会ね」

「え？　ほ、ホテ……？」

効果は抜群。いや、抜群すぎてワードだけで顔真っ赤に硬直しちゃった。

「ちよつと、あなた一体何を」

社長は顔を青くしていったけど、

「あー成程。そういうこと」

逆に苺ちゃんは、私の意図に気づいてにやりと笑い、

「いいじゃない。その時は私も一枚噛ませてよ、調教師必要でしょ？」

「い、いい苺ちゃん？」

まさか友人までもそんな事言いだすとは思わず、泣きそうな顔で3人を交互に見る宇佐美さん。

私と苺ちゃんは揃って悪い顔で、

「昼の部は成功できたんだし、失敗しなければいいって話でしょ？

それより失敗して忘れられない夜を過ごすのが望み？」

「自信ないとか魅力ないとかマイナスの自己評価はいいから、練習でしてきた事を無我夢中でこなしなさいよ。同性3人に乱暴されるよりいいでしょ？」

さりげなく苺ちゃん、社長を巻き込んで。いや、もしかしたらアインスが3人目かもしれないけど。

「うん……」

宇佐美さんは怯えながら、いった。

「鳥乃さんと関係持ったりなんてしたら、梓ちゃんに殺されちゃうよ」
まさか、ここで梓の名前が出てくるなんて。

私の天使って、他の子たちに一体どう思われてるんだろう。
「最悪よね。好きでもない男の食い物にされるのも死ぬほど辛いけど、女の子同士なんて吐き気がするでしょ。その上女の嫉妬に巻き込まれるなんて」

事情は知らないはずなのに、苺ちゃんはしっかりと梓の件を話に加える。内容に無理も感じもないし、ちよつと舌回りすぎじゃないだろうか。

この子に弱点ってあるのだろうか。そう思ってたら。

「うん。苺ちゃんなら別にいいんだけど」

宇佐美さんは口を漏らしてから、ハツとなつて、

「あ、えつと、ち、違うの。そうじゃなくって、大好きな苺ちゃんなら耐えられるだけだから」

「だ、大好きって」

「あ」

一歩二歩と後ずさる苺ちゃんに、余計やらかしたと気づいた宇佐美さん。

顔文字でいうと、まさに (◇) (◇) な顔で、手をぶんぶん振り、

「ち、違うよ。LIKEだから！ LOVEじゃないから！ 私ノーマルだもん。いつも苺ちゃんに助けられっぱなしでも、それで女の子に恋なんてしないから、お願い信じて」

「しかも苺ちゃんに恋したらロリコンの称号も付与よね」

つい、私は言ってしまう、

「え？ ああああああああああああああああああああああ」

パニックを起こす宇佐美さん。

「分かった。分かったから」

宇佐美さんの肩を掴み、苺ちゃんがいった。

「サミサミがノーマルなのは分かったから落ち着きなさいよ」

「い、苺ちゃん」

「大丈夫よ。もし道を踏み外しても責任持って正気の道に戻ってあげ

るから。天と地が避けても宇佐美を嫌いになんかならないから、この
毒を信用しなさい」

「やっぱり誤解されてるううううううう」

ついに宇佐美さんが泣きだした。

そして、苺ちゃんを意識が高すぎる長所は、一周回って致命的な弱
点にもなつてると認識した瞬間だった。

残念ながら、ライブは無事成功した。

途中サミサミが機材のコードに足を引っ掛け盛大に転んだけど、そ
こは不問にしておく。

MISSION 28 ―輝きと陰り（後編）

――現在時刻、午後20:30。

1時間のライブが終わり、着替えのため再び控室から追い出され名目上の室外警備を就いて20分。

「やあ鳥乃。他の観客はもう皆帰ったみたいだよ。あとは私だけだ」

と、一般用の階段を登って現れたアインスに、

「サンキュ。……らしいよ」

私は感謝を告げつつ控室にも報告。

「分かりました。入ってください」

控室から社長の言葉。私とアインスは揃って控室に入った。

「お疲れ様。鳥乃さん、アインスさん」

スポーツドリンクを飲みながら苺ちゃんはいった。BARなばなで再会したときの服装だった。

「見事でしたよお二方。名小屋にこれだけの実力派アイドルがふたりもいるなら、地元の未来は明るいね」

アインスはいうと、続けてきよんとする宇佐美さんに気づき、

「ああ。失礼、私は陽光学園高等部3年のアインス・ハイといいます。今日はサミサミのライブを見に来た所、友人で同業者の鳥乃に協力を頼まれて、客席から警備してたんだ」

「そうだったのですか。ごめんなさい」

宇佐美さんがぺこりと謝ると、

「よしてください。こうして生の君と会話する機会を貰えたんだ。むしろ幸運に恵まれたと私は思ってるよ」

「そんな、私なんて」

と、謙遜する宇佐美さん。すると直後苺ちゃんが、

「あれだけ大成功収めておいて、私なんてはないでしょ」

「でも、あれは苺ちゃんかゲストに来てくれたから」

「私だけであれだけ盛り上がらないわよ」

なんて、宇佐美さんを立てる。さらに「あ、そうだった」と苺ちゃ

んは机のスポーツドリンクふたつを指し、

「お二人も疲れたでしょ。そのドリンクあなたたちの分だから」

「え、いいの?」

私が訊ね返すと、

「ここにはドリンクひとつも支給しない傲慢はひとりもないわ」
って、苺ちゃん。

「どうぞお受け取りください」

と、社長がいうので。

「なら」

私たちは素直にドリンクを受け取る。

「今日は、色々とありがとうございました」

宇佐美さんがいった。改めてみると、彼女の普段着はラフながらキュートなデザインの服を着ており、これぞプライベートのサミサミといった感じだった。

続けて社長がいった。

「今日は、サミサミはこのまま控室で一晩過ごしますので、私たちはこれから場所を移して反省会を行います。アインスさんは如何なさいますか?」

「悪いですが。今日は外までお見送りしてから失礼させて頂きます。
家にもライブが終わったら帰ると伝えてありますので」

「分かりました」

と、いった所で、

「ん? ちょっと待って?」

私はいった。

「サミサミの護衛はしなくていいの? 私なら朝まで就けるけど」
すると社長は、

「あなたを一人で彼女の下につけるほうが危険です」

「え、そんなわけ」

「ある」

苺ちゃんが断言。

何故だろうか、苺ちゃんが言い切ると逆らえない空気がこの場には

あり、

「残念」

と、私は言わされてしまった。

なので、こっさり部屋に盗聴器を設置してから私は、

「なら諦めて、今日は退散とするわ」

「ごめんなさい」

と、宇佐美さんは苦みの入った社交笑みでいった。口裏に「もう来ないで」と拒絶されたように見えたが、たぶん気のせいだろう。

「問題ないわ。じゃ、おやすみなさい」

私たちは挨拶をして、控室を出た。

すでに館内の一部は消灯時間に入ったらしく、職員用通路に至っては寢室の豆電球くらいの明るさしかない。

いまなら一般用のエレベーターを使っても良いんじゃないかと思っただが、一部階層ではまだ部屋が使われてるらしいので、素直に薄暗い職員用の階段で降りることにした。

「苺ちゃん、足元暗いから気を付けて」

社長が苺ちゃんの隣についていった。それを見たアインスが、

「鳥乃も、大丈夫かい?」

と、手を差し出してきたので、

「私は夜目が利くから平気」

って、出された手を払った。アインスがウザかったのも勿論だけど、実際半機人である私の目は多少なら暗視が利く。暗視ゴーグルがあるなら、それに越したことはないけど。

「つれないな」

アインスはいって、今度は苺ちゃんに手を差し出すも、

「私もいいわ」

「そうかい? なら社長さん」

「いえ、私も」

「ははは、みんな恥ずかしがりやですね」

ちよっと残念そうに、アインスはやれやれとポーズを取った。

直後、私は不意に、

「あ」

と、声を漏らす。

「え、なに？」

「いや何でもないわ」

私は苺ちゃんに誤魔化してから、

「アインス？」

「何だい？」

「サミサミが部屋を出た」

小声で私はいった。

お手洗いだろうか？ それならいいのだけど、もしこの後控室以外で誰かと接触するしたら危険だ。極力真面目に、アインスにふたりを任せ、いまずぐ宇佐美さんの無事を確認しに行きたい所。

私は、一般フロアに戻れる4階の職員用通路出入り口に辿り着いた所で、

「ごめん、ちよつとお花を摘みに」

と、一言断ろうとした所、

「待ちなさい」

社長がいった。

「そういつて、サミサミの下に行くつもりでしょう？」

「ま、まさかそんな事は」

「ダウト」

そして苺ちゃんの宣告。

「ちよつと待って、騙して行こうとしたのは正解だけど今回は真面目に」

「どう真面目なのよ。行くわよ皆さん」

と、社長が階段を降りようとする。その時だった。

「きやつ」

社長が、足を踏み外したのだ。

いや、ただ転んだわけではない。何かに足を掬い上げられたように、不自然に宙を舞ったのだ。

しかも階段の上から一段目で跳ばされたせいで、このままだと社長

は踊り場の床に落ちるのではなく、その上の窓ガラスを突き破り4階から転落する可能性があった。

私は即座に、片腕をもう片方の手で隠しながらワイヤーを射出。社長の腰に巻き付かせて引き寄せる。

「大丈夫、社長？」

私は社長を抱きかかえる形でキャッチし、いった。

「え、ええ」

社長は茫然としながら何とかうなずき、

「私も歳かしら？　ありがとう、助かったわ」

いや、違う。

社長の転び方は明らかに普通じゃなかった。あんな高く弧を描いた軌道は、スポーツ選手でもなければトランポリン辺りを使わないと不可能。何より階段の一番上から、踊り場の窓に向かってジャンプするような行為は転倒とはいわない。これは、社長を狙った明確な殺人未遂。

「そうね。気を付けて頂戴」

とはいえ、これを社長に伝え余計な心配をかけるわけにもいかない。

「みんなも薄暗いから、足元気を付けて歩きましょう」

と、私がいった所、苺ちゃんが5階側の踊り場を見上げてるのが分かった。つまり、社長が落下したのとは逆の方角。

「苺ちゃん？」

訊ねた所、

「付いてきて！　鳥乃」

突然、苺ちゃんは元来た道を駆けだしたのだ。しかも、さりげに呼び捨て。

(え?)

と、私は一瞬なるもすぐ、

「アインス。社長をお願い」

言われるまま、苺ちゃんを追いかけた。

「何があったの？」

苺ちゃんに追いつき、横について並走しながら改めて訊ねると、

「宇佐美がいた」

「え？」

「宇佐美がいたのよ、さつき上の踊り場に。そのうえデュエルディスクを装備して何かカードを発動してるように見えたわ」

「それって」

まさかファイル・カード？

つまり、社長を殺そうとしたのは宇佐美さん？ 嘘？

「話は後よ、それよりも宇佐美を捕まえないと」

しかし、苺ちゃんに言われてしまい、これ以上情報を聞き出すことはできなかった。

職員用通路を抜け、苺ちゃんは控室の前に立ち、戸を数回叩く。

「宇佐美！ 苺よ、ちよつと開けて！」

その間、私は手掛かりを求め辺りに視線を張り巡らせながら、

「宇佐美さんはいないわ。護衛のため部屋に盗聴器を設置したんだけど、私たちが部屋を出て程なくしてあの子も部屋を出たのよ。で、まだあの子は戻ってないって話」

「盗聴器って」

そこへ、

「ひあつ」

と、宇佐美さんの声が聞こえた。

「いまの声。あっちのほうから聞こえたわ」

方角を指さし、苺ちゃんに伝えると、

「エレベーターのほうよ」

と、苺ちゃんの案内で向かった先に、宇佐美さんはいた。

尻もちをつき、痛そうに額を撫で、その間にエレベーターが閉じると、

「ああつ」

涙目でドアにすがりつくも、エレベーターは下の階へと動きだす。

これはつまり。

「私たちから逃げようとエレベーターに乗ろうとしたけど、開き切る

前に駆け込んだせいでドアと衝突。尻もちをついて痛がってる間にエレベーターは他の階に行っちゃった。って所ね」

と、苺ちゃんがいった。

「うわ」

まさしく宇佐美さんだ。

「宇佐美！」

苺ちゃん呼んだ。宇佐美さんは一度びくくと驚きながら、恐る恐るこちらを向いて、

「苺ちゃん。鳥乃さん」

「宇佐美さん、社長を殺そうとしたのはあなた？」

私は、まっすぐ彼女に向かって訊ねる。

「だって、だって」

宇佐美さんは、涙声になりながらいった。

「私が悪いのは分かってるよ。私が口を滑らせたから、皆が私を引退させようとしてるって。でも、だからって、社長まで私を干そうとしなくてもいいでしょ！」

「社長がサミサミを？」

初めて聞いた話に、私はちらつと横目で苺ちゃんに伺う。

苺ちゃんは、首を小さく振って応え、

「そんなの初耳なんだけど。社長が宇佐美に何をしたのよ」

「だって、突然薬物検査をしなさいって。風邪薬を飲んだ翌日に」

確かにドーピング検査なら風邪薬だって引っかかる。しかし、普通の薬物検査なら風邪薬が違法ドラッグとして検出させる可能性はほぼないはず。混同したのだろうか。

「いま噂になってるから。だから、風邪薬を利用して薬物反応が出たって言おうとしたんでしょ？ 違うの？」

「風邪のことは、社長知ってたの？」

「分からない。でも、狙ってああいう事をしたんだから絶対」

必死に嘆きを伝える宇佐美さん。相当疑心暗鬼に陥ってる様子だ。

「なら知るわけじゃないじゃない。私だって宇佐美が風邪ひいてたなんて知らなかった位だもの。社長が知るはずないでしょ、偶然よ」

「でも、でも」

「むしろ社長は宇佐美の潔白を証明したいから検査を勧めたのよ。宇佐美、その時あなた社長を刺したでしょ。幾ら社長でも、あなたが大事じゃなかったらその場で解雇よ。傷をマスコミに公表すれば薬物反応を待たずに逮捕にだって持ち込めるわ」

「でも、でも」

「でも」はもう十分よー」

苺ちゃんは、強めの口調でいった。

そして、一転優しい声で、

「宇佐美。私も社長もあなたの味方よ。悪いようにはしないから、私たちが信じて」

「苺ちゃん」

宇佐美さんは、一回すがりつくように苺ちゃんを見るも、すぐ首を振って、

「だけど、社長は干されそうな私を助けてくれないじゃない」と、いつて、

「あのね。この前、緒方ミリタリーって会社の人が今度芸能プロダクションを開くって私を誘ってくれたの。社長を事故に見せかけて殺せば、緒方プロに移籍できて、いまの干されそうな流れも全部何とかしてくれるって」

「は？ アンタそれで社長を？」

苺ちゃん。いまの「アンタ」って呼び方すっごく高村司令っぽい。

宇佐美さんは目を輝かせて、

「苺ちゃん。私たち友達だよね？ 一緒に移籍しよ？」

そんな言葉を聞かされた苺ちゃんは、

「そうね。私たちは友達よ、宇佐美」

「うん、だから」

「だからこそ断るに決まってるじゃない！」

激昂した様子で言った。

「え？」

まるでこの世の終わりみたいな顔をする宇佐美さんに、苺ちゃん

は、

「アンタね、自分が何言ってるのか自覚ある？ 人殺そうと言ってるのよ？ 殺人よ？ アンタ自分の手を血に染めながらフアンの前に立つつもり？ ほら、その甘ったれた根性修正してあげるからいらっしやい」

「苺ちゃん、どうして」

「道踏み外してる子を叱らないで何が友達よ。私はあなたのイエスマンになる気はないわ」

すると、

「もう、いい」

宇佐美さんはいった。直後、彼女の体を黒い瘴気が包み込む。これって!?

「分かってくれないなら、苺ちゃんも友達じゃない。社長と同じ、私に酷いことする敵です」

見る見る内に、死者のように青白い肌へと姿を変える宇佐美さん。つて、そつちでできたつて話!?

「な、なによ。これ」

普通ありえない変貌に驚く苺ちゃん。

「闇のフィール・カードの力よ」

私はいった。

「フィール・ハンターズが作った特別なカードでね、所有者の心の闇を増大させて支配しちゃうつて話」

「心の闇つて、デュエルモンスターズのアニメで定番の?」

訊ねる苺ちゃんに、私はうなずき、

「そ。最近クスリ使ってるんじゃないよほど躁鬱が激しかったのも、あのカードが原因だったみたいね。いま宇佐美さんは正常な判断ができなくなるほどのネガティブやマイナスな感情に囚われてるわ」

ただ、先ほどセクハラしたとき、私はこれの線も疑ってチェックしたつもりだった。

しかし、あの時点では闇のフィール・カードの反応がひとつもなかったのだ。恐らくカードを護身具やフィール発生装置と認識して

ない関係で身に着けてなかったのだろう。

カードからの反応なら、それだけで十分隠蔽できる。迂闊だった。

「助ける手段はないの?」

「一応、デュエルで闇のフィール・カードを少しでも倒しながら、被害者に想いを届かせればいいわ」

だけど、莓ちゃんにそのデュエルをさせるのは危険だ。

「莓ちゃんは下がって。デュエルは私がするから」

「分かったわ。って言いたいんだけど」

莓ちゃんが一步前が出る。

(何してるの?)

私は言いそうになったけど、みるとすでに莓ちゃんの

ZEXALタイプのデュエルディスク

D・パッドが勝手に起動してしまっている。

「何の原理か知らないけど、強引にデュエル仕掛けられたみたい」

莓ちゃんはいった。

って、え? 何の原理か知らないって、もしかして強制デュエルを知らない?

「どつちにしても、あの子に声を届かせなくちゃいけないなら友達役目よね。いくわ、デュエルディスクセット!」

莓ちゃんが、D・パッドごと着ていた上着を脱ぎ払う。すると、ステージの時より少し布面積の多いボンテージ衣装が顔を出し、D・パッドが宙を舞いつつ展開され、莓ちゃんの腕に装着されデュエルディスクとなる。

さらに、かけていたサングラスを胸元のベルトにかけてから、

ZEXALのモノクル型ゴーグル

「D・ゲイザー、セット」

と、D・パッドとセットになってるゴーグルを左目に装着。

『デュエル!』

そしてふたりは同時に叫んだ。

莓

LP4000

手札4

□ □ □ □ □ □
□ □ □ □ □ □
□ □ □ □ □ □
□ □ □ □ □ □

宇佐美

LP 4000

手札 4

「私の先攻」

先攻は宇佐美さんに決まった。彼女の性格からして元々決闘者だったとは到底思えないけど。

「私は手札から永続魔法《ナイト・ゲート》を発動。このカードは、私が悪魔族のナイトモンスターを召喚した時、さらにデツキからレベルが＋1以下の悪魔族のナイトモンスターを特殊召喚できるの」

彼女の傍の床に、不気味な暗闇の渦が出現。

「私は手札から《ヒドウン・ナイトーフック》を召喚。さらに《ナイト・ゲート》の効果でデツキの《ヒドウン・ナイトーダーク》を守備表示で特殊召喚」

宇佐美さんの場に、両手足に鉤をつけたモンスターが出現し、床の暗闇から別のヒドウン・ナイトが出現。

「さらにカードを1枚セットしてターン終了」

罇

LP 4000

手札 4

□ □ □ □ □ □
□ □ □ □ □ □
□ □ □ □ □ □

□ □ 《ヒドウン・ナイトーダーク》（守備）
□ □ 《ヒドウン・ナイトーフック》

□ □ 《ナイト・ゲート》 □ □ 《伏せカード》

宇佐美

LP4000

手札1

「なら私のターンよ。ドロー」

間髪入れず、苺ちゃんはターン開始を宣言し、カードを1枚引き抜く。直後、辺りは急に暗転した。

「喜びなさい。スーパーアイドル高村苺様が、あなたの為だけに最高のデュエルライブを見せてあげるわ」

苺ちゃんがいうと、まずはその序幕とばかりに、光が辺りを細切れに切り裂き、暗闇を破りながら1体のモンスターが出現。

「私の場にモンスターがいない場合、このカードは特殊召喚できる。来なさい《フォトン・スラッシュャー》！」

それは、かつてミストランも使ったカードだった。

「続けて魔法カード《フォトン・サンクチュアリ》を発動。私の場に攻撃力2000守備力0のフォントークン2体を守備表示で特殊召喚。続けて、開け！ 私のステージ！」

さらに、無数の光の粒が出現すると、苺ちゃんの周りで8つの銀河の渦に変わり、リンクマーカアの配列で並んでいく。

辺りが薄暗いのも演出にマッチし、まるでプラネタリウムの中にいるようだ。

「召喚条件は光属性モンスター2体。私はフォントークン2体をクリックマーカアにセット！ リンク召喚。苺の御前よ、跪きなさい！」

リンク2 《輝光子ガラティオス》

出てきたのは一本のSFチックな西洋剣。さらに、苺ちゃんが鞭で床を打つと、鞭が分解されて各部位のプロテクターに姿を変え、その内側で発生した光の粒子が肉体となり、西洋剣を握る人型のモンスターとして場に降臨した。

「《輝光子ガラティオス》はリンク召喚したターンに続けてリンク素材にできない。ガラティオスのモンスター効果！ 1ターンに1度、このカードのリンク先に《フォトン・サンクチュアリ》のものと同じフォントークンを1体守備表示で特殊召喚する」

苺ちゃんの場に光の球体が出現し、

「まだまだいくわ。このカードは通常召喚できず、私の場にフォトンかギョラクシーモンスターがいる場合のみ、1ターンに1度手札から特殊召喚が可能。《フォトン・バニツシャー》」

苺ちゃんはさらにモンスターを展開し、

「《フォトン・バニツシャー》の特殊召喚に成功した場合、私は《銀河眼の光子竜》を手札に加える」

《銀河眼の光子竜》といったら、これもまたミストランが使っていたカード。やはり、苺ちゃんのデッキは一部ミストランとテーマを共有している。ミストランはギョラクシーとタキオン軸、苺ちゃんはフォトン軸か。

「そして、私のフェイバリットは攻撃力2000以上のモンスターを2体リリースすることで特殊召喚できる。私は《フォトン・バニツシャー》とフォントークンをリリース」

2体のモンスターが光の粒子に変わり、上空で混ざり合いひとつの巨大な紋章に姿を変える。

「闇に輝く銀河よ、希望の光になりて我がステージを彩りなさい！

特殊召喚！ 輝け、レベル8 《銀河眼の光子竜》！」

苺ちゃんの口上に併せて、紋章は渦巻き銀河を生み出しながら分解され、中から1体の竜が出現した。その攻撃力は3000。

すると宇佐美さんは軽く怯え、

「あ、苺ちゃんのエースモンスターがこんなに早く」

って言ったのだ。さつき苺ちゃん自身もフェイバリットと言ってたし、ミストランは《銀河眼の光子竜》をX素材兼サブアタッカーという形で運用してたけど、苺ちゃんはこのモンスターを主軸にしたデッキ構成のようだ。

「カードを2枚セット、そしてバトルよ。《銀河眼の光子竜》で《ヒドウン・ナイトフック》に攻撃！ 破滅のフォトン・ストリーム！」

苺ちゃんが宣言すると、銀河眼はその口に光の粒子をため込む。

「で、でも。ヒドウン・ナイトは負けな、ひゃっ！」

攻撃の余波を避けるため後ろに退こうとして転びながら、宇佐美さ

んはいった。

「ひ、ヒドウン・ナイトは負けない。フックのモンスター効果。攻撃表示のこのカードが表側守備表示になったとき、お互いを表側守備表示に変更」

銀河眼がブレスを吐こうとした瞬間、ヒドウン・ナイトの腕が伸び、鉤を首に引つ掛けることで攻撃が中断。

「そして、《ヒドウン・ナイト―フック―》の表示形式が攻撃表示から守備表示になったとき、相手に800ダメージを与える。これで終わり！」

「終わり？」

不思議がる苺ちゃん。直後、彼女の足元に立体化した影の鉤が床から伸びる。

「苺ちゃん、足元！ 避けて！」

「えっ？」

言われるまま足元を見て気づいた苺ちゃんは、咄嗟に足をあげて避けようとする。その際、鉤が靴に引つかかり、脱げて舞い上がった。

苺 LP4000↓3200

「ソリッドビジョンが実体化してる？」

驚く苺ちゃん。え？ その反応って、まさか。

「苺ちゃん、もしかしてフィールって知らない？」

「都市伝説のことでしょ？ その位小学校でも」

苺ちゃんは言いかけ、

「あ、闇のフィール・カードってそういう。ってことは」

やつぱり。強制デュエルを知らない時点でその線も考えておくべきだった。苺ちゃんは、フィールを持たない完全な一般人だったのだ。

「フィールは都市伝説じゃないのよ。実際に私たちの業界では、カードが武器として使われるし、持ち主は漫画やアニメの魔法使いみたいになってる。ごめん、今まで私たちに依頼する人って大体フィールには携わってるから苺ちゃんが知らないって可能性を忘れてたわ」

そこまで聞くと苺ちゃんは、

「なら、相手が宇佐美で助かったわ。噂だとフィールって相手を手札事故にさせるって言うじゃない」

「え?」

反応する宇佐美さん。もしかして、彼女もドロ―運を操作できることを知らなかった? いや、彼女の場合は単に忘れてたって可能性が高いか。

まあ、とはいえ。

「気を付けて苺ちゃん。本来フィールを持つ者同士のデュエルは、互いにフィールでバリアを張ってリアルダメージを防ぐことを前提に行われてるわ。でも、あなたはそれができない。私もサポートはするけど、万一モンスターや魔法・罫の攻撃を受けたら、最悪死ぬって話よ」

「大丈夫よ。もう覚悟してるわ」

言いながら苺ちゃんは結構足がすくんでるように見えた。それでも、まるで銃を向けられるような事態を前に、取り乱さずにいられる一般人がどれほどいるだろうか。しかも、苺ちゃんはまだ小学生、子供もいとこなのに。

「バトルフェイズ続行。フックの効果を聞くに、すでに守備表示ならさっきの効果は使えないんでしょ? 続けて《輝光子ガラティオス》でフックに攻撃。ガウエイオンズ・スラッシュ!」

ガラティオスが飛び掛かり、フックにモンスターの本体である剣を振り下ろす。しかし、

「《ヒドウン・ナイト―ダーク―》のモンスター効果。このカードをリリースして発動。フックを攻撃表示にして戦闘を続行。さらにフックの効果でお互いに守備表示に」

再び発動するフックの効果。そして、今回も苺ちゃんの足元に影の鉤が出現。

「っ」

すると苺ちゃん。なんと自ら影の鉤を踏み、足場にしてジャンプしたのだ。

しかし、相手もこれでは終わらず、彼女の足を追いかけ、床下から

影の正体である巨大な《ヒドウン・ナイト―フック―》が姿を現し、執拗に腕の鉤を伸ばす。

「苺ちゃんー！」

そこを私は懐から銃を抜き、しつかりフィールを込めて鉤に数発撃つ。結果、鉤の軌道はわずかに逸れ、苺ちゃんは足を負傷せずに済んだ。

苺 LP3200↓2400

加えて、私はひとつの推測が頭をよぎる。

「もしかして宇佐美さん、この《ヒドウン・ナイト―フック―》で社長を床下から弾き飛ばした？」

訊ねた所、

「それだけじゃない」

と、ここでアインスが駆けつけてきて、

「会場に向かう道中、彼女は私のバイクの車輪にその鉤を引っ掛け、社長の車にぶつけて事故死に見せかけようとしたんだ」

「え？」

私と苺ちゃんが驚く中、

「実はあの時、その鉤を避けようとしてスピンしたんだ。もし避けられなかったら、今頃スピンどころかクラッシュしながら車に衝突。社長と苺ちゃんに命はなかったかもしれないね」

と、アインスはいったのだ。

「なんて恐ろしいことを」

私はつい呟く。

「アインスさん、社長は？」

訊ねる苺ちゃん。

「心配ないよ」

アインスは微笑み、

「すでに1階で私の仲間が保護している。それよりも、ここで闇のフィール・カードか」

アインスは、過去に自分の妹が被害にあつた経験M I S S I O N 2 1 参照をしている。闇のフィール・カードの恐ろしさは誰より一番分かっているはずだ。

「苺ちゃん、一応聞いて頂戴？」

私はせめてもの情報を渡す。

「最近、私たちの業界ではある学説が広まりつつあるのよ。それは、命はフィールって話。つまり、合気や気合、超能力や直感もすべてフィールに通じる。理論上、苺ちゃんはサミサミのフィールに対抗できるわ」

「でもそれ、熊や武装した兵士に生身で勝てるかって言ってるようなものよね？」

さすがは苺ちゃん。たったいま私たちの世界に踏み込んだばかりなのに、口裏に隠された絶望をすっかり読んでくれる。だからこそ、私はあえて伝えたのだ。

「でも十分よ。その位には窮鼠猫を噛む余地があると分かったんだもの」

って、苺ちゃんは真の意図まで分かってくれと信じてたから。

彼女は確実に高村司令の血が濃い。つまり潜在的にスペックがチート級。じゃなければ、敵の凶器を自分から踏んづけてジャンプするなんて回避行動、普通じゃ辿りつかないはずだ。しかも直前まで足がすくんでたのに、一瞬で恐怖を振り切って。そんな彼女が窮鼠になったら、一体どんな形で猫を噛むのだろう。

「罨カード《エナジー・ナイト》を発動」

が、ここで宇佐美さんは1枚の伏せカードを起動してきた。

「このカードは私の場の悪魔族のナイトモンスターが表示形式を変更した場合に発動。デッキからカードを1枚ドロウします」

なんだ、ドローカードか。とりあえず、いきなり窮地に立たされるわけではないと私はほっとするも、

「そして、このカードがフィールドから墓地に送られた時、私はデッキの《エナジー・ナイト》を1枚セット」

「うわ、そういう事ね」

確かに、使われてすぐ窮地に立たされるわけではない。しかし、上手く《エナジー・ナイト》を素引きすることなくデュエルが進めば、デッキを圧縮しながら最大3枚のドロウを許してしまう。しかも彼

女のデッキは主に表示形式を変更して戦うデッキのようだから、発動条件は容易に満たしてくるだろう。

彼女のデッキは、一種のロックバーンデッキなのだと理解した。

苺

LP2400

手札0

「《伏せカード》」 「《伏せカード》」

「《フォトン・スラッシュャー》」 「《銀河眼の光子竜》」

□ — 「《輝光子ガラティオス(苺)》」

□ □ 「《ヒドウン・ナイトーフック》」

□ □ 「《ナイト・ゲート》」 「《伏せカード(《エナジー・ナイト》)》」

宇佐美

LP4000

手札2

まだ、苺ちゃんの《フォトン・スラッシュャー》の行動が終わってなかったが、

「そして私のターン。ドロー」

宇佐美さんはいい、カードを引く。

《フォトン・スラッシュャー》は自分の場に他のモンスターが存在すると攻撃できないモンスター。その為、このままターンが宇佐美さんに移ったのだ。

ここで、苺ちゃんは早速伏せカードの1枚を表向きにし、

「メインフェイズに入る前に、私は永続罫カード《フォトン・チェンジ》を発動。このカードは1ターンに1度、フォトンかギョラクシーのモンスターを墓地に送って、別のカード名のフォトンを特殊召喚するか、《フォトン・チェンジ》以外のフォトンを手札に加える。私が選択するのは前者！ この効果で場の《フォトン・スラッシュャー》を墓地に送り、デッキに眠る別のフォトンモンスターにチェンジするわ」

「別のフォトンモンスターって」

「決まってるじゃない」

苺ちゃんはやりと笑い、《フォトン・スラッシュャー》が紋章へと姿

を変える。

「闇に輝く銀河よ、希望の光になりて我がステージを彩りなさい！
特殊召喚！ 輝け、レベル8 《銀河眼の光子竜》！」

上空に浮かび上がった紋章は2体目の《銀河眼の光子竜》へと姿を変えた。これで苺ちゃんの場に攻撃力3000のモンスターは2体。
「また、ギャラクシーアイス?!」

1体だけでも怯えてた宇佐美さんだ。それがもう1体現れ、足がすくみ目が逃げ場所を探して泳いでいる。

「サレンダーは許すわよ。その場で闇のカードを全部破り捨ててくれるなら」

なんて苺ちゃんの勝気な言葉に、

「そんな事しない。えっと、まず《ヒドウン・ナイト―フック―》を攻撃表示に変更。そして《エナジー・ナイト》を発動して1枚ドロ―。デッキから《エナジー・ナイト》をセット」

おどおどしたプレイングながら、これで宇佐美さんの手札は4枚。すでに手札を使い切った苺ちゃんと違い、手札アドがどんどん広がっていく。

「魔法カード《ナイト・シヨット》！ 効果で苺ちゃんのもう1枚の伏せカードを破壊。そして、《ナイト・シヨット》の発動に対して相手は対象のカードを発動できない」

「別にいいわ。だって」

カードが破壊される中、苺ちゃんはまさに予定通りとばかりに、「ブラフなもの」

それは《ギャラクシー・サイクロン》だった。このカードは相手ターンでは発動できない通常魔法。加えて墓地から除外する事で表側表示の魔法・罠カードを破壊する効果を持っている。

しかし、このカードは普通に発動することでも裏側表示の魔法・罠カードを破壊できる。結果的には《エナジー・ナイト》に使わずに済んだとはいえ、さっきの場面では普通発動しそうなものなのに。

「嘘、どうして」

宇佐美さんも同様の反応する中、苺ちゃんをあえて、

「演出よ」

と、言い切った。

「言ったでしょ、あなただけに向けたライブデュエルだって。アイドル高村苺のデュエルはエンターテイメントよ。宇佐美のグッズ的に《ナイト・シヨット》が入ってる予感はあるもの、せっかくだから使わせてあつと驚く流れに持ち込んだほうが愉快じゃない」

「そんな為に、使っても損がなさそうな場面で《ギャラクシー・サイクロン》を伏せたのかい？」

訊ねるアイン스에苺ちゃんは、

「それがプロよ。アイドルの伊達^{ブラ}や酔狂^{イド}よ」

言って、宇佐美さんをビシツ指さす。

「嘗めてかかっていると憤るなら憤ればいいわ。悔しかったら、マイナスな考えなんか閉じ籠らないで、正面向いてぶつかってきなさいよ」

「う」

宇佐美さんはたじろぎ、足が一步後ろに向く。しかし、

「それができるなら、とつくにやってるよ」

嘆くように、宇佐美さんはいった。

「みんな苺ちゃんみたいに、ひたむきにまっすぐ動き続けられるわけじゃないの。想いだけあつても行動できなくて、無理して頑張ったら頑張った分だけ失敗して体調も崩して心が折れて、そんな気持ち苺ちゃん分らないでしょー！」

「あつ」

途端、苺ちゃんから自信に溢れた顔が一気に失せる。凶星だったらしい。

そして、理解しようとする姿勢があるだけに、致命的な所で「分かっ
てなかった」ことに気づかさされ、一気に余裕のない顔に変わっていく。
しかし、今更苺ちゃんも黙ってられない。

「なら、初めからちゃんと言いなさいよ。人を殺そうと思う位なら、胸
の内を全部ぶちまけなさいよー！」

「出来るわけがないよ。そんな怖いこと」

「人殺しのほうが余程怖いわよ。手を血に染めて警察の前で平然とできるの？ 殺した人が夢に出てきて正気でいれるの？」

「それは」

お互い精神的に追い詰められあい、たじろぎあう中、宇佐美さんが嘆く。

「考えられるわけないよ、人殺してその先の私なんて。私はただ、助けてほしかっただけだもん」

互いの主張は平行線。しかし双方の言葉がしつかり相手に伝わり、それが余計複雑なものを生んでいる。そんな気がした。宇佐美さんの心の闇に言わされた言い訳も、一見クズに聞こえるが、その実誰しも経験しうる要素が詰まってる。

苺ちゃんに至っては、程度は違えど似たような言い訳した直後だしね。

「デュエル続行。2体目の《ヒドウン・ナイトーフック》を召喚。《ナイト・ゲート》の効果で《ヒドウン・ナイトーダーク》を攻撃表示で特殊召喚」

これで、宇佐美さんの場にはフックが2体とダークが1体。これを正面からの戦闘で突破するのは相当困難に思える。

「カードを1枚セット。そしてバトル。《ヒドウン・ナイトーダーク》で苺ちゃんに直接攻撃。このモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃できる」

ダークの攻撃力は800。しかし、それ以上に宇佐美さんはダークの攻撃をリアル化し苺ちゃんを直接傷つけにいくだろう。

「苺ちゃん！ 避けて！」

私は指示しつつ、苺ちゃんを庇おうと前に立つ。しかしダークは私を確認すると、苺ちゃんの背後へと瞬間移動し闇のエネルギーボールを飛ばしてきた。

アインスが庇いに向かうも一步届かない。私は自分のデュエルディスクにカードを差し込み、

「《空中補給》を発動」

と、トークンを呼び出し、苺ちゃんの盾にする。ホログラムのデコ

イが消滅する中、

「助かったわ」

と、苺ちゃん。しかしデュエル上ではしっかりダメージを受けている扱いのため、

苺 LP 2400 ↓ 1600

残念ながらライフは減少した。

「私はこれでターン終了」

宇佐美さんはいった。

苺

LP 1600

手札 0

□ □ 「《フォトン・チェンジ》」

「《銀河眼の光子竜》」 「《銀河眼の光子竜》」 □

□ — 「《輝光子ガラティオス（苺）》」

「《ヒドウン・ナイトーフックー》」 「《ヒドウン・ナイトーダークー》」

「《ヒドウン・ナイトーフックー》」

「《伏せカード》」 「《ナイト・ゲート》」 「《伏せカード（《エナジー・ナ

イト》）》」

宇佐美

LP 4000

手札 1

「えげつない構図だね、鳥乃」

アインスがいった。私はうなずき、

「全くよ」

しかし、私たちの誰かが状況を口にする前に、宇佐美さんが自分から説明^{フラグ}し^した。

「私の場には、攻撃対象になったとき互いを守備表示にして、攻撃表示から守備表示になったときに800ダメージを与える《ヒドウン・ナイトーフックー》が2体。そして直接攻撃能力を持ち守備表示になったフックを攻撃表示に戻す《ヒドウン・ナイトーダークー》が1体いる。対して苺ちゃんの手札は0枚ライフは1600。フックの効果

かダークの攻撃が2回発動した時点で私の勝ちが確定する。もちろん、フックのバーン効果は次のターンに普通に表示形式を変更しても発動できるよ。さらに教えてあげるね。《ナイト・ゲート》にはもうひとつ効果があつて、私の場に悪魔族のナイトが2体以上いると、相手が攻撃する攻撃対象を私が選ぶことができる。そして私にはフィールがあるから、苺ちゃんは逆転のドローもできないよ」

つまり、先にダークから攻撃することはできず、戦闘で全滅させようとするればフックの効果が最大3度発動する。だからといって、次の宇佐美さんのターンに回せば確実に苺ちゃんのライフを削りきる布陣になつてると。

しかも魔法などでモンスターを効果破壊できても2体以上除去しないと結果は変わらない。

「苺ちゃん、これが私の見えてる世界。私の恐怖だよ」

宇佐美さんがいった。

「右の左も足元さえも暗闇ばかりで、どうすれば正解か分からない。苺ちゃんみたいに勇敢に踏み込んでも、いまの苺ちゃんのライフみたいに耐えられない。私はそんな恐怖からサレンダーしたいの！ 全てから護つてくれる新しい事務所の中で、安全に輝きたいの！」

これが彼女の深層なら、希望のない世界もいい所である。しかも、(何か分かるわ)

私だつて根つこの性格は人間不信だ。幼少期からして見える世界に希望はなかったし、自分が半機人になつた直後は尚更だ。

「サレンダーするなら、苺ちゃんだけは許してあげる。そして、私は社長を殺して緒方プロに行く」

勿論、それは私とハイウインドが絶対にさせない。正直いうと苺ちゃんにはサレンダーして貰つて、改めて私がデュエルでフィール抜きしたほうが安全で楽だ。苺ちゃんはフィールがない以上フィールを全損させれない。もし彼女の心の闇を解けれないなら、残念ながら勝利してもメリットが薄いのだ。

しかし、

「デュエルは続行よ。そして、私に手がないうんて勝手に決めないで」

苺ちゃんはいったのだ。

「私のターン。ドローフェイズにスキル《未来の選択―トライロード・ドロー―》を使用」

「スキル!？」

驚く宇佐美さん。しかし、

「でも、奇跡のドロー率を上げるスキルなら例え3分の1でも2分の1でも外させる」

「ところが、そうはいかないのよ」

苺ちゃんは強気な笑みで虚勢を張った。

「私はこの効果で、ドローする代わりにデッキからカード名が違う3枚のカードを選び、相手に見せる。そして、宇佐美？ あなたは3枚のうち1枚を選んで私にドローさせるのよ。勿論、ランダムじゃなくね」

「相手にドローカードを選ばせるスキル?」

なるほど。多少でもランダム性があれば、相手はフィールをもつて自分に有利な結果を導いてくる。だけど、相手にカードを見て選ばせる以上そこにフィールの絡む要素は皆無。

これなら奇跡の1枚を引くチャンスがあるって話。

「私が選ぶのは《融合》《銀河眼の光子竜》《破滅のフォトン・ストーリー》の3枚。この内、私の読みが当たつてれば、逆転の1枚はたったひとつよ」

ここにきて、再び演出重視のリスクーな選択。それとも、本当に苺ちゃんのデッキで逆転のカードがその1枚しかないのか。

果たして正解は、彼女の切り札《銀河眼の光子竜》か、カードを1枚除外させる《破滅のフォトン・ストーリー》か、それとも。

「だったら、私は《融合》を選択。手札が1枚なのに《融合》なんて絶対ありえないもん」

「いいのね?」

苺ちゃんはい、

「なら私は《融合》をドロー。そして、残りの2枚をデッキに戻すわ」
こうして苺ちゃんの手札にやってくる《融合》。そして、苺ちゃんは

いった。

「宇佐美、ひとつ教えてあげるわ。明けない夜なんてない。幾ら何もかもが暗闇でも、いつかは光が差すのよ。……引かせて貰ったわ、逆転の1枚」

「えっ」

宇佐美さんが驚く中、続けて苺ちゃんは墓地からカードを1枚取り除き、

「幕を下ろす準備は整ったわ。まずは墓地から《ギヤラクシー・サイクロン》を除外して効果発動。宇佐美のフィールドから《ナイト・ゲート》を破壊」

先ほど《ナイト・ショット》で破壊させられた魔法カードだ。これにより攻撃表示のダークを守りフックへの攻撃を誘発するカードが消えるも、

「馬鹿にしないで！ その位読んでた。ここで永続罠《安全地帯》をフックを対象に発動。これにより《ヒドウン・ナイト―フック―》1体は効果の対象にならず、戦闘・効果では破壊されない！」

まさか、こんなカードまで仕込んでたなんて。

「《ギヤラクシー・サイクロン》を使ったから、もう苺ちゃんはこのカードは破壊できないよ？ これも普段の私が通ってる道。やる事成す事が全て裏目に出るの。お願い、サレンダーして？ じゃないと私」

「する位なら、アンタに殺されるほうを選ぶわ」
苺ちゃんはいいい、

「続けるわよ」

「どうして？ この時点で《融合》を使っても勝てるはずがないのに」
「だから勝手に舞台を降ろさないで。永続罠《フォトン・チェンジ》の効果。1ターンに1度、フォトンかギヤラクシーのモンスターを墓地に送って、2つの効果から1つを宣言して発動。そして、《銀河眼の光子竜》を選択した場合、私は両方を選択できる。私は《銀河眼の光子竜》を墓地に送り、1つ目の効果で《クリフォトン》にフォトン・チェンジ！ さらにもうひとつの効果でデッキから3枚目の《銀河眼の光子竜》を手札に加えるわ」

苺ちゃんの銀河眼が別のモンスターに変わり、最後の銀河眼が手札に行ったことで苺ちゃんの手札が増える。

「さらに、開け！ 私のステージ！ 召喚条件は攻撃力2000以上のモンスターを含む光属性モンスター2体。私は《クリフォトン》と《輝光子ガラテイオス》をリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン！」

再び、苺ちゃんの周りで8つの銀河の渦がリンクマーカーの並びで現れる。

「逆巻く銀河よ、今こそ、夜闇に終わりを告げる曙となれ！ リンク召喚、輝きなさい、リンク2 《銀河眼の煌星竜》！」

2体のモンスターがリンクマーカーに取り込まれ、現れたのはフォトン・ギャラクシー・サイファーともどこか違う紅い輝きをした銀河眼。

「《銀河眼の煌星竜》のモンスター効果。このカードがリンク召喚に成功した場合、墓地のフォトンかギャラクシーのモンスター1枚を手札に加える。私を手札に加えるのは《銀河眼の光子竜》！ これで、私の手札には《銀河眼の光子竜》が2体。魔法カード《融合》を発動。私を手札の《銀河眼の光子竜》2体を融合」

まさか、手札を使わずにここまでぶん回して手札融合まで持っていないなんて。正直私も驚いた。

「輝く銀河よ。いまこそ混ざり合い、二つ首を持つ我が愚民に宿れ。融合召喚！ 膝きなさい、レベル6《ツイン・フォトン・リザード》！」
ここまでやって場に出現したのは、一見攻撃力2400とむしろ銀河眼より打点が低い融合モンスター。

「そして、《ツイン・フォトン・リザード》は自身をリリースすることで、疑似的な《融合解除》能力を持つわ」

「《融合解除》ってことは、え？ あれ？ 確か素材モンスターって」
宇佐美さんが、ちよつと信じたくない状況に動転する中、

「私は《ツイン・フォトン・リザード》をリリースし、《銀河眼の光子竜》2体を特殊召喚」

こうして、苺ちゃんの場合には、1体だけで宇佐美さんが怯える《銀

河眼の光子竜》が合計3体も。しかも、聞くにこのモンスターは莓ちゃんのフェイバリット。なるほど、これはエンターテイメントだ。「そして、私の可愛い銀河眼3体の効果を使ってフィニッシュ！」

「って、行きたかったんだけど。予想通り伏せカードが《安全地帯》だったから、このままだと突破できないのよねえ」

何気に莓ちゃんは《安全地帯》を読んだとか言ってきた。

「だから、こうするわ。喜びなさい、私の奥の手の登場よ。私は《銀河眼の光子竜》3体でオーバーレイ！ 3体のレベル8モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

莓ちゃんが言った途端、上空にエクシーズ召喚の演出特融の銀河の渦が出現。しかも渦は辺りの光景を一気に飲み込み、まるでフィールド魔法のように周囲を宇宙空間のビジョンに書き換える。その中を、3体の銀河眼が靈魂へと姿を変え、銀河の中に取り込まれていく。

莓ちゃんは、例の紋章に似た投げ槍を一本握っていた。

「逆巻く銀河よ、今こそ、怒涛の光となりて舞台の終幕を彩りなさい」
莓ちゃんは手に持つ槍を銀河の中へと投げ込む。

「これが莓の、魂の輝きよ！ 《超銀河眼の光子龍》！」

銀河がビッグバンを起こし誕生したのは、両の翼にも首を持つ変則的な三つ首の銀河眼。その攻撃力はあの《青眼の究極竜》と同じ4500。

宇佐美さんが、その超銀河眼を眺めながら、静かに闘志の炎がポキーンと折れたのが、私の目に映った。

「綺麗」

宇佐美さんは呟く。

「やっぱり、私じゃ敵わない。こんな輝きを持つてる莓ちゃんには、デュエルでも舞台でもどこでも」

「そんな事ないわよ」

莓ちゃんがいった。

「私がアイドルになろうと思ったのは、自分の可愛さに自惚れてアイドルになれば沢山ちやほやされると思ったからだし、今も根底は変わ

らないわ。ただ、ふんぞり返った元同類を見て自分の性格ブスさに恥ずかしさを覚えて、あいつらとは違うんだって言いたくて努力しただけ。気づいたら元同類がみんな干され代わりに顔と声と名前の違うそっくりさんがそこにいたわ。私はそれを見て、アイドルは消耗品で、私の代わりなんて後から幾らでも生えてくるって知ったわ」

それを小学生で悟るってどんな気持ちなのだろうか。

幼くして闇に触れすぎると人格が歪む。それは私自身が身をもって知ってる。だけど苺ちゃんは、

「だから私は、私が考える理想の高村苺を目指して日々自分を磨くことにしたのよ。煽てられたいなら煽てられるだけの価値を、我儘言いたいなら我儘が許される位の格を、アイドル続けるなら起用したいって思われるだけの人間になるってね。ファンを大事にしない人にファンはついて来ないし、いくらドSお嬢様路線でも独り善がりであるう鞭はただの暴力。その中で崇拜されたいなら？　って具合に、結局私は可愛い自分が輝きたいだけなのよ」

と、熱い言葉をもって言い切る。

そして、こんな自己満足で腐りきった理由でアイドルしたいなら、どこまでも高潔に意識高くストイックに、だろうか。

「だから私は、みんなに笑顔を届ける宇佐美には敵わない。私がどこまで輝いたとしても、人と人の繋がりの中で、本当に愛されるのは私じゃない。宇佐美のほうよ。《超銀河眼の光子龍》のモンスター効果。このカードが《銀河眼の光子竜》を素材にX召喚した時、このカード以外のフィールド上に表側表示で存在するカードの効果、いえ違うわね。あなたを蝕む暗闇を無効にするわ」

《超銀河眼の光子龍》の輝きが辺りを包み、宇佐美さんのモンスターや《安全地帯》がその闇を霞ませる。

「宇佐美、私はあなたの見えてた世界を知らずに、あなたを止めようとしてしまったわ。だから、さっきの私の理屈でいえば、だから宇佐美を救いだせないんでしょ？」

「苺ちゃん」

「だけど、どうしても言いたい文句がもうひとつだけあるのよ。この

言葉が届かなかつたら、もう諦めてあげるから。あとひとつだけ言わせなさい」

苺ちゃんは断りを入れると、鞭を床に打ち付け、いい音を鳴らす。そして、叱りつけるようにいった。

「私だって、宇佐美が羨ましいのよ。何でも受け止めてあげるから、いい加減自分の魅力自覚しなさい！ 《超銀河眼の光子龍》で《安全地帯》のついた《ヒドウン・ナイト―フック―》に！ 《銀河眼の煌星竜》で《ヒドウン・ナイト―ダーク―》にそれぞれ攻撃！」

「苺、ちゃん」

2体のモンスターがブレスを吐いたとき、辺りは一面光に包まれる。

眩い光に私もさすがに目を閉じそうになる中、

宇佐美 LP4000↓1100↓0

彼女のライフが一瞬で尽きるのを目撃した。

デュエルが終わり、ビジョンの光が消えていく。

周囲の光景が現実に戻ったとき、宇佐美さんから青白い肌は消えていた。

「苺ちゃん」

大粒の涙を頬に垂らし、宇佐美さんはいった。闇のファイルの浸食が完全に祓われたかは分からないけど、苺ちゃんの想いは確かに彼女の心に届いたのだ。

「ごめんなさい。苺ちゃん、私」

「謝る相手が違うわよ」

苺ちゃんは近づき、宇佐美さんに手を伸ばす。

「ほら、社長に謝りに行くわよ。私もついて行ってあげるから」
「うん」

宇佐美さんがうなずいた。その時だった。

私の後ろから、光線が3発ほどふたりに向かって放たれたのだ。

「危ない！」

咄嗟に宇佐美さんは苺ちゃんを抱えるように庇い、ファイルのバリ

アで弾こうとする。が、光線のフィールのほうが数段強く宇佐美さんは苺ちゃんごと床に転がった。

「宇佐美さん、苺ちゃん」

私は呼んでから、後ろを振り返る。

そこには、軍服を着て、某赤い彗星を思わせる仮面で顔を隠した子供がひとり、走ってこちらに向かってきていた。

服装から察して緒方ミリタリー、つまり緒方おがた銃ライフルの下で活動するフィール・ハンターズと思われる。

その子供は、握っていた「串に刺した魚」の形をした機械をこちらに向けて、光線を発射する。

私はふたりを庇うように前に立ち、手首から出したナイフを盾にフィールのバリアを展開。しかし、恐らく相手は闇のフィールを使っており、思った以上に威力があつて相殺しきれない。

やっと防ぎ切ったときには、すでに子供は私を横切ろうとしていた。

「鳥乃、伏せて！」

アインスがショットガンを向けていった。私が伏せると同時に散弾が子供を襲う。

相手は攻撃を防ぎきるより、移動を優先したらしい。多少フィールのバリアは張つただろうが、服が何か所か裂け、かすり傷で血を滲ませる。そして、私たちの目の前で仮面が割れ、素顔を私たちに晒す。「え」

私たちは言葉を失った。

だって、そこにいたフィール・ハンターズの子供は、あのゼウスちゃんだったのだから。

そこに馬鹿面を晒した笑顔はなく、感情のない顔と冷たく濁った瞳が印象的に映る。

ゼウスちゃんは、そのまま私の前を横切ると、倒れた宇佐美さんの体を抱え、窓に向かってさらに走る。

その片手間に、ゼウスちゃんは何やら光を宇佐美さんの目に当て、直後宇佐美さんは意識を失った。

「宇佐美！」

母ちゃんが手を伸ばすも当然届かない。そうだった。いまの私の仕事は宇佐美さんを護る事。

私は腕からワイヤーを伸ばし、なんとか宇佐美さんの体に巻き付け、引き寄せる形で奪還。しかしゼウスちゃんはそのまま窓を突き破って外へ脱出。

宇佐美の身柄をアイン스에預け、ゼウスちゃんを追いかけ窓から外を見ると、モンスターに乗って飛び去るゼウスちゃんの姿があった。古都プロのスタッフを口封じに殺したという、機械族かサイバース族と思われる黒くシャープな見た目のモンスターという特徴に合致している。

「宇佐美！ 宇佐美！」

一方、室内では、母ちゃんが宇佐美さんの体を抱え何度も呼びかける。程なくして、宇佐美さんは目を覚ますも、いうのだった。

「母ちゃん？ ハハ、どこ？」
「って。」

翌日。

—— 現在時刻、午後19:00。

私は、社長から呼び出され再び『BARなばな』にいた。

「サミサミが記憶喪失？」

ボックス席で対面に座り、私はアイスコーヒーを飲みながら、先ほど社長から聞かされた事実に戻す。

社長はいった。

「はい。彼女に薬の噂が流れた辺りから昨晚までの記憶が一切消えてました」

「そう」

つまり、記憶処理。殺さない形で口封じされたのだ。

事実すでに宇佐美さんは闇のファイル・カードを持っていない。推測するに、ゼウスちゃんが彼女を誘拐しようとしたとき、一緒にデツキを回収したのだろう。

なお、そのゼウスちゃんに関しては、すでに司令に報告済だ。恐らく、当時北海道に向かっていた大依さんの手によって、同時に行方不明になった津紬という子共々誘拐され、闇のフィール・カードによる被支配を受けたのだろうというのがハングドの推測だ。ロストを使われた可能性もある。

そういえば、アインズとの決闘のとき、炎崎曰く大依^{M I S S I O N}さんが報酬を家に持ち込んだ²⁸と言った気がする。ゼウスちゃん^参の行方について、私たちは最初から大ヒントを貰っていたのだ。

まあ、それよりいまは宇佐美さんだ。

「つまり、サミサミは社長の腕の傷のことも、薬物の疑いをかけられたことも、緒方プロに移籍させられそうになってたことも全部覚えてない」と

「その通りです。緒方プロに至っては存在しない架空のプロダクションですから、いまの宇佐美には調べようもないでしょう」

ああ。まずプロダクションを開くって話から詐欺だったわけね。あのロリコンの事だから、フィール・ハンターズによるアイドルグループ誕生をガチで狙ってるのかと思っただけだ。

「けど、本当に記憶がないのなら私はそれでいいと思っています」

との社長の言葉に、

「同感ね」

私はうなづく。

彼女は闇のフィールに心を蝕まれ、最終的には社長を何度も殺害しようとしたのだ。人道的に、そして法的にはどうか知らないけど、その全てが無かったことになるのなら、きつと宇佐美さんにとってはハッピーエンドだろう。

「それと緒方プロを名乗る差出人からメッセージを頂いております。曰く宇佐美の勧誘は中止したと」

「なら、多分もう宇佐美さんは狙われないわ。それを含めての記憶処理だろうし」

「ええ。私や母も同じ意見です。最後にひとつお願いを聞き入れて頂ければ、私たちからの依頼はこれで終了にしたいと思います」

「お願いって?」

私が訊ねると、

「母の記憶も同じように消して頂けませんか?」

社長はいった。

「これは母本人からの要望です。自分が事件を覚えてると宇佐美が記憶を取り戻すトリガーになってしまわないか」と

確かに、ありえない話ではない。しかし、その為に自分の記憶も消そうとは本当に意識の高い子だ。思えば、ここまでストイックになれる事こそ子供故なのかもしれない。

「分かったわ。警察と連携してるNLTって組織に連絡を取ってみるわ。そこはファイルが都市伝説の域を出ないよう隠蔽にも力を入れてる所だから、高性能な記憶処理ができると思う。一応、脳検査のために宇佐美さんも連れて行ったほうがいいわ」

「ありがとうございます」

社長は頭を下げた。

こうして、今回の依頼は一応無事に終わりを迎えた。

さらに翌日。金曜日

——現在時刻、午前8:00。

ゼウスちゃんの悲報で手放しに喜べない状況ではあるけど、とりあえず明日、梓と外出するためのミッションは達成できた。

手元には、苺ちゃんから前金代わりに貰った温泉宿の無料招待券。すでに梓には伝えてあるので、明日は無事ふたりで遠出をするつもりである。

木更ちゃんへの説明とフォローは司令たちがしてくれるらしい。むしろ、私は今後に備えてしっかり骨を休めると司令より改めて（信用できない）強制休暇を与えられた。

まあ、今回は妨害が起きることはないだろう。勝手に私を動かしたことで、鈴音さんの堪忍袋の緒が切れ、司令を正座させ何時間も延々と説教する姿が見えたからだ。それでも何かあれば、梓からでも私からでも鈴音さんにLINEでチクればいい。さすがに今回はその位

の下克上が許されるはずだ。

数日ぶりに仕事から解放された私は、いつものように登校し、校門前までたどり着く。

そこへ。

「おはようございます」

私は突如、後ろから挨拶をかけられた。振り返ると、そこには制服を着た宇佐美さんがいた。

「あれ、サミサミじゃない。おはよう」

「サミサミはやめてください。今日は普通に生徒なんですから」

と、宇佐美さんは言いながら校門を潜ろうとし、レールに足を引っ掛け、思いつきり転ぶ。

私は無防備なスカートをめくりながら、

「宇佐美さん大丈夫？」

「どこ見ながら言ってるんですかー」

宇佐美さんは、一回その場でバタバタしてから起き上がり、

「もう。せっかく復学初日なのに」

「そういえば、ずっと休学してたっけ」

「はい。ちよつと芸能界が上手くいかなくて、色んな番組を降板されて暇になつちやっただんです。だから、いつそ復学したんですけど。

私、休み過ぎて留年してたみたいで」

宇佐美さんは恥ずかしそうにはにかんだ。

上手くいかない、ねえ。

それが生易しい問題じゃないことを知ってる私は、内心複雑な気持ちでいっぱいだ。しかし、下手に関わると記憶を呼び戻してしまう。いまの私は知らないふりするしかない。

「鳥乃さん。先日はありがとうございます」

突然、改まっていう宇佐美さんに私は、

「あれ？ 私なにかしたっけ？」

「しましたよ、ほら」

宇佐美さんは言いかけるも、

「ん？ えつと、あれ？」

と、混乱をみせる。当然だ。だって、その「先日」はすでに彼女の記憶にないのだから。

「ごめんなさい。私勘違いしてたみたい」

「気にしてないって話。それより『ほんつ見てくれてありがとう』ならいつでも受け付けるけど」

「い、い、い、言いませんそんな事」

顔を真っ赤にしながら、宇佐美さんは一歩後ろに後退。そして、同じレールにまた足を引っかけ、今度は仰向けに倒れそうになる。

「あ、ちよっ」

さすがに後頭部はやばい。咄嗟に私は彼女の腕を掴み、腰を支えてあげることで何とか回避。構図としては抱き寄せてしまうより王子様アインスみたいな構図になっちゃったわけだけど、相手は腐ってもアイドル。公然の前で抱き寄せたら文〇砲の餌食になりかねない。

「全く、相変わらず超が付くほどドジね」

「ごめんなさい」

「いいから。それより立てる?」

私は彼女の体を支え、今度は転ばないようにレールから大股3歩分は離れた所で彼女を立たせる。

すると、宇佐美さんは突然言い出した。

「鳥乃さん、しばらく見ない間に優しくなりましたね」

「そう?」

まあ、元々宇佐美さんとは接点が殆どなかったから、中学時代の私で認識止まってもおかしくないけど。先日はそれを正確に思い出せる精神状態じゃなかったとして。

「うん。前はもつと荒れて刺々しかったから、虐めから何度も助けて貰ったのに、怖くてお礼も言えなくて」

「あれ? そんなに虐めから助けたっけ?」

「やっぱり覚えてなかったんですね」

宇佐美さんはくすりと笑い、

「虐められてた私にも、無視せず普通に接してくれましたし」

別に虐めたいとも思わなかったし、保身で虐めに加担する必要もな

かったしね。

「それどころか中学の頃、不良に絡まれたときに助けてくれたり」
たぶん、それ個人的な憂さ晴らしか梓を護るついで。

「お弁当をゴミ箱に入れられてお昼無くなっちゃったときも、こっそりパンを渡してくれたり」

あ、それガチで忘れてた。うん、言われるとやった覚えあるわ。最低でも中高共に1回以上やってる。

「だから、たったいまも含めて全部ありがとうございました。今度は勘違いじゃないはずです」

「今回は素直に受け取っておくわ」

私はくすりと微笑み返す。が、すると宇佐美さん今度はいきなり視線を露骨にそらし、

「ただ、同時にしばらく会わない間に凄くセクハラ魔になってますけど」

「？」

私は気づかないフリをして、彼女の転倒を防いだときからずっと彼女の胸をさわさわし続けてた手を、今度は太股向けて滑らせていく。

「だからセクハラはやめてください。そろそろ訴えます」

慌てて私から離れる宇佐美さんに、私はとぼけた顔で、

「いや、ずっと拒絶しないから触り放題だ」と

「そんなわけありません！ 本当に訴えますよ？」

「警察に？」

「梓ちゃんに」

「ごめんなさい許してくださいこの通り」

私は土下座した。程なくして、

「もう、いいですよ。それよりも」

宇佐美さんは、透き通るように朗らかな顔で、こういうのだった。
「今日からまた普通の生徒の宇佐美^{うさみ} 柑奈^{かな}をよろしくお願いします、鳥乃さん。あ、もう鳥乃先輩でしたね」

アイドル業で身に着けた可愛らしいてへぺろが、とても印象的に映った。

MISSION 29 ―愛は果てしなきバイオレンス
(前編)

夜も明るい繁華街の道を、ひとりの少女が駆けていた。

二回りほどサイズの大きいシャツをワンピースにし、下着は穿いておらず、セミロングほどの髪もボサボサに痛んでいる。

よほど余裕のない状況なのだろう。何度も街歩く人と肩がぶつかり、時には、

「おい、どこ見て歩いてるんだ!」

と、怒鳴りつけられたが少女は無視。そのうち腕を掴む若者が現れたが、少女は遠慮なくフィールの入った拳を相手の心臓に打ち付け、地面に転がした所を逃げる。

少女が去った後、倒れた若者がそのまま死亡して騒ぎとなるが少女は知る由もなかった。

「見つけたぞ」

繁華街を抜ける寸前で、背後から男がいった。

「どうやら、通りの出口で待ち伏せしていた様子。瞬く間に少女は囲まれてしまった。」

「もう逃げられないぞ。早く戻ってこい」

「嫌。私は帰らない」

少女の言葉を聞き、男はいった。

「仕方ない。なら半死でも構わん。やれ!」

その時だった。

辺りが急に吹雪に襲われ、少女を囲む追っ手たちが次々と倒れては、そのまま氷の棺に閉じ込められる。

「ニエット。悪いけど、その子を渡すわけにはいかないんだ」

吹雪の中から、白い肌を持つロシア系の少女が姿を現した。背には、氷の翼をもったドラゴンを引き連れている。

(き、貴様は)

男の最期の言葉が声になることはなかった。

最後のひとりが倒れ、この場に立っているのがふたりの少女だけになると、そのうちの白い肌の子は空を見上げ、こういった。

「プリベエツト！ やあ、ヴェーラだよ。USUALLY2で伝えた通り、行方不明の謎の少女、時子が話に大きく関係するMISSION29を始めようか」

——現在時刻、午後19:00。

木曜日。

「皆、次回のCOOティアでは緒方おがた銃ライフル×かすが店長のR-18BL本を出すことにしたわ」

この日、鳥乃 沙樹が依頼人と会つてM I S S I O N 2 8 参照裏側で、ハングド事務所では今日も高村 霧子司令が無茶振りを提言していた。

彼女の発言に、実の娘である董は挙手して訊ねる。

「お母さん。それ需要あるの?」

「あるか無いかじゃない。作るのよ。私たちの力で、かすが店長のHOLEを緒方が股間の《ヴォルカニック・デビル》で激しく《ブレイズ・キャノン》する。そんな風潮を」

「そんな風潮要りませんわ」

組織のNO.2である立花 鈴音はいうも、

「あ、悪いけど《ブレイズ・キャノン》トライデント》は無理よ。男の穴は2つしかないし」

「聞いてませんわそんな事!」

「ん、何? 穴がひとつ足りないならヘソの穴を貫けばいい? マニアックな事をいうじゃない鈴音」

「誰も言ってますせんわ!」

鈴音は声を荒げて否定するも、

「うわ、鈴音さんがヘソ姦趣味だったなんて」

と、誰かがいつては次々に蔓延。

「勝手に人の趣味を捏造しないでくださいませ!」

鈴音はいつものように嘆くのだった。

そこへ、会議には混ざらず、ひとり別件でパソコンに向き合ってた

藤稔 木更が、

「かすが様……？」

と、小さく反応した。これを聞いて高村司令は、

「これが理由よ」

「どういうこと？ お母さん」

董が訊ねると、

「いま藤稔はゼウス関連で正常を失ってるのは知ってるの通り。だけど唯一かすが店長が絡む物事には反応を示すわ」

「それなら、いつも通り霞谷×かすが本でいいと思う。どうしてここで新規開拓を？」

「どっちもフィール・ハンターズだからよ」

高村司令はいった。そして、机に座ってゲンドウポーズを取り、

「新規開拓するなら当然、双方に取材しなくちゃいけないわ。となると必然的に緒方ミリタリーに足を運ぶことになる」

「ああ。なるほどですわ」

鈴音はここで意図に気づき、

「沙樹の報告によると、藤稔 ゼウスは昨日、赤い彗星のマスクと軍服を着た姿で現れたそうですわ。となると、現在は緒方の下で動いている可能性が高いですわね。つまり真の目的はかすが店長を餌に木更さんを焚きつけつつ、スタジオミストの活動を使つての潜入捜査」

緒方 銃が社長を務める緒方ミリタリーは、表向き迷彩服やモデルガンなどを扱う近辺の軍オタ御用達の専門店や射撃場、さらにお祭りの射的やサバゲーのサークル管理などにも手をまわす会社とされている。しかし、その実態は緒方 銃が支部長を務めるフィール・ハンターズ名小屋支部のひとつであった。

現在のはかすが店長の支部に吸収され傘下に入っているが。

「とはいえ、勿論スタジオミストの活動に手を抜く気もないわ。いまハングドとフィール・ハンターズの関係は以前より険悪。この状況で取材に応じて貰うなら、緒方ミリタリー側にも利益あるプロジェクトを作る必要がある。ぶっちゃけると、ガチで売りに行くつもりで薄い本を描く。そして私たちの本で緒方ミリタリーの知名度と人気に貢

献するわ」

「元々、私たちの財政に爆死する作品を世に出す余裕はありませんわ」
鈴音は溜息を吐いた。彼女にとって、今回のプロジェクトは爆死するはずの作品をヒット作にしろという無茶振りに他ならないからだ。

そこへキツチンからフェンリルがやってきた。

「ボクはあまり賛同したくないな。やれと言われたらやるけど」

言いながら、フェンリルは各々の机にランチプレートを置く。煮込みハンバーグにペペロンチーノ、サラダがひとつの皿に盛りつけてあった。すべてフェンリル手製の、今晚の夕食だ。

「二応、ワンプレートで炭水化物・タンパク質・野菜は摂れるようにしたけど、丸パンとコーンポタージュもあるから、足りない人はセルフサービスで各自好きなだけ持ってって」

木更には及ばないが、フェンリルも比較的料理は得意なほうだった。特に喫茶店が出るような洋食が得意で、フェンリル自身の好物でもあるナポリタンはすでにハングド内でも一定の好評を得ている。昨日作ったばかりなので、今日は昼夜共に出されることはなかったが。

「セルフサービスね。ビールはある？」

高村司令が訊ねると、フェンリルは苦笑いし、

「冷蔵庫にあれば自己責任で。他人のビールを飲んでも飲まれてもボクは一切関与しないから。買いにいけっていうなら行くけど、足代と請求書は申請するよ」

「チツ」

高村司令は舌打ちし、冷蔵庫からビールの代わりにストロングゼロを出して自らの机に置いた。

「では、かすが様の取材は私にお任せください」

少し時間差ながら木更がいった。高村司令は小さく拳を作って、

「よし。第一目的達成」

「第一目的、ですか？ はっ!? もしかして私とかすが様をゴールインさせて、披露宴にゼウスちゃんを出席させて保護する作戦？ そんな、私まだ早いわ。こういうのはまず、花嫁修業と同棲を各数年……

あ、同棲ってことは、夜もふたりひとつのベッドで。きやーきやーっ
顔を真つ赤にしながら、嬉しそうに身もだえる木更。高村司令は缶
を一気に呷り、

「どっかのレズと違ってメンタルのライフが0でも特定ワードで暴走
してくれるのは助かるわ」

なんていって、空にした缶を煙草の灰皿にする。

「そのレズさんが不在で良かったよ。この複雑な気持ちで曇るのはボ
クだけでいいからね」

木更に恋と劣情を抱きながら、今日まで彼女を一度も立ち直らせる
ことができなかったフェンリル。自分より積み上げた関係の長いレ
ズこと鳥乃 沙樹でも不可能だっただけに、さすが様が絡むだけでス
イツチが入った木更を前に、彼女の心のライフポイントは鉄壁ライン
に突入する。

「愚痴くらいならいつでも聞きますわ。フェンリルさん」

鈴音は慰めるように言いながら、力の無い瞳を高村司令に向ける。
ストロングゼロは鈴音の私物だったからだ。

事務所の扉が開いた。

中から入ってきたのは、20代後半くらいの白人と黒人の男性コン
ビ。

「よう司令、無事に見つかったぜ」

白人がいうと、続けて黒人が、

「自宅で寝てただけなんだけだよ」

このふたり。どちらもハングドの構成員のひとりで、白人はパイ
ン・サラダ。黒人はマイケル・ベックマンという。ふたりは両方前線
のペアで行動しているのだが、数日前からマイケルの連絡が取れなく
なり、パインが捜索してた所だった。

高村司令はいった。

「おかえり、ふたりとも。早速アンタらには選択肢が二つあるわ。い
ますぐスタジオのアシスタントをするか、依頼に駆り出されるか。二
つに一つよ」

「おいおい待ってくれよ高村さん」

「パインはいった。」

「普通、ここは精密検査だろ。マイケルは何日も行方不明で急に戻ってきたんだぜ？俺はマイケルの自宅だって捜索したんだ」

しかし、当のマイケルは、

「依頼だ。できれば殲滅任務みたいなのがいいな。酒飲んで寝て飯食つての自堕落を過ごして体が鈍ってるんだ。早くターゲットをブチのめしたくてウズウズしてるぜ」

「だろ？ 見ろよ、今日のマイケルはなんか違和感があるんだ。俺は数日の間にマイケルの身に何かあったと思って不安で仕方ないよ」

肩をすくめるパイン。実際、マイケルは獰猛な性格ではあったが戦闘狂いではなかった。ハングドに所属する理由はギャンブルで多額の借金を抱えたためで、日ごろから金さえあれば、ステーキを喰らいながら酒を飲み、グラマーな女性を一晩買ってアンアンいわせたいと言っていた。まさに今回、ささやかな夢を実行するため数日休暇を取った所、パインがフライドチキンを差し入れにマイケル宅に向かった際に行方不明が発覚したのだった。

「了解、依頼ね」

高村司令はいった。

「パイン・サラダ。アンタに任務を申し付けるわ。ただちにマイケルの身柄を田村崎研究施設まで護送し精密検査を受けさせる。依頼人は私よ」

「おい、待てよ」

今度はマイケルが反論する。

「俺は問題ないって言ってるじゃないか。しかも、なぜ俺が田村崎研究施設で検査を受けなくちゃいけないんだ。俺は機械じゃねえ、人間だ！」

「それを証明するために検査をしろと言ってるのよ。フエンリルやガラムを作った黒山羊の実の技術がフィール・ハンターズに渡ったのよ。突然の行方不明から戻ってきて、しかも数日のアリバイが食い違ってるやつを心配するのは当然でしょ」

「悪いがお断りだ」

憤慨するマイケル。パインが頭を抱える中、不意にノックもなく事務所の扉が開いた。

外には小学生くらいの少女がふたり。ヴェーラと、先ほど繁華街を逃げてた少女だった。

ヴェーラはいった。

「プリベエツト！ やあ、ヴェーラだよ。依頼があるんだけど、直接持ち込んでもいいかい？」

「ヴェーラ!?!」

高村司令は立ち上がり、

「アンタ、取材とは聞いてたけど音信不通でどこほつつき歩いてたのよ。BARのマスターが心配してたわよ」

「シト^えー? どうしてだい?」

ヴェーラは一度きよんとしてから、

「イズヴィ^すニ^まーチ^なエ、私にとっては一瞬でも、みんなにとっては数日だったね」

「時間移動でもしたのアンタ」

呆れた顔で高村司令はいったが、ヴェーラを理解することは不可能と知ってるため、これ以上は追及しない。

「で、依頼って?」

「アガ^{うん}、この子を私が大丈夫と判断するまで、こつちで保護して欲しいんだ」

ヴェーラはいつて、少女を事務所の中に入れる。

高村司令は訊いた。

「この子は?」

「フィール・ハンターズに拉致されてた被検体で脱走者だよ。年齢は今年10歳、名前は」

ヴェーラが説明する途中で少女は、

「時子!」

と、フェンリルの前まで駆けだす。

「え?」

フェンリルがきよんとする中、少女はまくし立てるように言っ

た。

「良かった、時子。無事だったのよね。私よ、満智子よ。ひとりだけ先に目覚めたっていうから心配だったけど、組織を抜けたってことは時子だけは正気なのよね？」

「え、ちよつ、待ってよ」

フェンリルは目でみんなに助けを求めてから、満智子という少女の肩を掴んで制止。いった。

「人違いだよ。ボクの名前はフェンリル。時子じゃない」

「だから、時子がフェンリルなの」

満智子は断言する。

「フェンリルっていうのは、時子がデュエル兵士として与えられた名前で、冷凍保存されてたあなたをプライドつて人が勝手に持ち出して。覚えてないの？」

「ごめん」

フェンリルはすまなそうに言った。

「記憶がないんだ。フェンリルとして生まれてくる前の。だからボクは、プライドの作品として生まれたことしか分からない」

「そんな」

一転し、満智子は悲痛な顔で、

「嘘よ。じゃあわたしは何のために洗脳処置を逃れて、時子の危機を伝えるためにここまで」

一歩、二歩と後退してから、

「この馬鹿あああああつ」

と、フェンリルに罵声を浴びせ、事務所を逃げ去る。

「あ、ちよつと」

フェンリルはすぐ手を伸ばすも、もう手の届く所に満智子はいない。

代わりに、フェンリルの手元に一筋の光が浮かび上がり、

(なに、これ?)

と、フェンリルが思った直後、それは一枚のカードとなってフェンリルの下に宿った。何もない所から天然のフィール・カードが生まれ

る。フィールに携わってる者なら、たまに聞く話であった。

一方。

「お、おい待てよ」

マイケルは咄嗟に満智子を追いかけ、

「悪い高村さん、行ってくるわ。依頼人の大事な保護対象らしいからね」

と、パインが続けてマイケルの後を追う。

「事情を教えてくださいませんか？」

一度玄関の扉を閉め、鈴音はいった。

ヴェーラは傍のソファに腰かけ、携帯ボトルのウオツカを一口飲む。

「彼女の名前は纏まと満智子みちこ。10年前に起きたM I S S I O N 2 3バスジャック事件参照つまりフィール・ハンターズによる拉致被害者のひとりだよ」

「10年前？　ですが、ヴェーラさんは彼女を10歳と申されましたけど、こちらの情報では被害者に妊婦もしくは1歳未満のお子様はいなかったはずですよ」

「ここ最近までコールドスリープで寝かされてたんだ」

「コールドスリープ？」

「当時は現在でいうロストも未完成で闇のフィールもなかったからね。意識を奪い仮死状態にして実験を行うという意味も込めて、不幸にも適応性の高かった被検体は冷凍保存されたんだ。ウジャースナ、酷い話だよ。適応力が低かった人ほど幸せに逝けたんだ」

「彼女は、フェンリルを時子と呼んでましたが」

との鈴音の問いにヴェーラは、

「ヴェールナ。その通りだよ。フェンリルの正体は鱒川 時子。ガルの素体となった妙子とは遠い親戚で、水菜が長年捜索していた行方不明者その人なんだ」

「えっ」

フェンリルが食いつく。ヴェーラは続けて、

「イズヴィニーチェ。水菜にも君たちにも隠して悪かったと思ってる。MISSION29までにこの事実が伝わってしまうと満智子

も助からないルートが確定してしまうんだ」

「つて事は、いまがMISSION29とかいうやつなの？」

フェンリルが訊ねた。ヴェーラの言葉でいうなら、彼女は「USU ALLY2」からかい上手の藤稔さん」です。すでにMISSION29というワードを聞いていたからである。

「ハラショー。その通りだよ」

ヴェーラは肯定した。

「続きは満智子の言葉に併せて解説しよう。さっきの白黒コンビと通信を繋いでくれるかい？」

「もう繋いで、いまの内容も聞いてるわ」

高村司令はいった。

パインとマイケルは、人気のない児童公園で満智子を確保していた。

「買ってきたぜパイン。ホットドリンクひとつと、ビールは高いからドライ味のチューハイだ」

レジ袋をふたつ持って、コンビニから戻ってきたマイケルは、ホットドリンクの入った袋を満智子に渡し、もう片方から缶チューハイを1本出して残りを袋ごとパインに渡す。

「サンキュ、マイケル」

パインは袋を受け取ってから、

「お前の分だ。もう買ってしまったから突き返されても困るぞ」

と、すでに満智子の手へ渡った袋を指している。

「ふんっ」

満智子はそっぽを向くも、中身がジュースだと分かると警戒しながらも次第に飲みだす。

マイケルはベンチに座った。すでにふたりも同じベンチに座っていたので、満智子の両隣を挟むように。

本当はもっと早く捕まえられる手筈だった。

しかし、満智子はフィールによって身体能力が向上しており、子供の小さな体躯もあって難航した。結局、公園に逃げたのが幸いし挟み

撃ちや誘い込みを駆使し、何とかパインが彼女の腕を掴むことに成功したのだった。

「どうして放っておいてくれないのよ。依頼だから？」

「そうだ」

身も蓋も無い台詞で返すマイケルに、パインは一回苦笑いしてから、

「いまの時世は、知らない子に声をかけたら誘拐と間違われて逮捕されちゃうんだ」

「なら、私も放っておけばいいじゃない」

「ところが、依頼という後ろ盾があれば保護していい理由になるだろ」

「なら勝手にすれば」

突っぱねたように言う満智子。

「ああ、勝手にさせてもらう」

パインより先に、マイケルがいった。

静かな時間が流れた。

誰かが喋ることもなく、3人の他に誰かがやってくる気配もない。音といえばたまに夜風で樹木の葉がなびく程度。

3人が、それぞれドリンクを飲み終えた頃、パインがそつと口を開いた。

「静かな夜だな。このまま何もなければいいが」

「ああ。小鳥の囀りもない、不気味な夜だ。こういう日は安全な場所で早めに布団に潜るに限る」

マイケルはいつてから、

「ミチコだったな。お前は今晚を過ごすベッドはあるのか？」

「あなたには関係ないでしょ」

満智子はいうも、

「いいや、関係あるね。朝、てめえの遺体でも発見されたら目覚めが悪い」

「それは無いわ」

「そうか？」

「ただ、フィール・ハンターズに回収されて次に遭うときはただの殺人

マシーンになつてただけよ」

「それはもつとお断りだ」

マイケルは懐から煙草を一本だし、口に啣える。

「そもそも、なんで私の名前を知ってるのよ」

満智子の問いに、

「事務所で名乗つてただらう？ フェンリルに向かつて」

パインはいった。実際はその時点では頭に入っておらず、追跡する途中ハングドからの通信で情報を貰ったのだけど、言う必要がなかったのでパインは言わない。

「知らないわ。フェンリルなんて」

「なら、どうして彼女に声をかけたんだ？」

「人違いよ。ただの」

「それならそれでいい。でもな、そこに至るまでに何があったのか、俺たちに教えてくれないか？」

と、話を誘導するパイン。続けてマイケルも、

「内容次第で解放して貰えるかもしれないぜ」

「約束できる？」

「ああ、約束する」

マイケルがうなずいた所、

「時子と私は、同じ実験の被検体だったのよ」

満智子は語りだした。

「家族でバスに乗つてた所、突然フィール・ハンターズって集団が現れて、乗つてた人はみんな変な建物に監禁されたわ。私の両親も、時子の両親も」

「10年前、フィール・ハンターズが観光バスを丸々ハイジャックした事件があつたな」

パインがいうと、

「そう。もう10年も経つてたの」

満智子は、自分がコールドスリープの結果幾らか時間を飛び越えてるだろうとは思っていたが、まだ正確な時系列を知らなかったのだ。「建物の中では、何人かの女の人だけを牡蠣根つて人が連れて行つた

後、毎日いろんな実験に付き合わされたわ。まず全員頭の中に小豆より小さな機械を埋め込まれた後、椅子に座って電流を流されたり、頭に機械をかぶってデュエルさせられたり、お薬を飲まされたり注射されたり。自分が何をされてるのか分からなかったけど、みんな日に日に気が変になっていって、早い人は2日目か3日目には意思疎通もできなくなって、目の前で廃棄処分だって殺されたわ。その中には私のパパもママもいたわ。それで、建物の人はいうの。こうなりたくないかったら、気が狂わないように実験に耐えろって」

まだ本来ランドセルを背負ってるはずの子供が語る内容に、ふたりは「うっ」と顔をしかめる。

「拉致されてすぐ両親を失ったのか」

マイケルが、満智子の頭を不器用になでる。

「最後、パパは呻き声を漏らすだけになって、ママは私のことも分からなくなっずと喚き散らしてたわ」

「そいつは酷え。君に同情するほど何もいえなくなる」

パインは表情を失った。

「そんな私に手を差し伸べてくれたのが、鱒川さん。時子の家族だったのよ」

満智子は言いながら夜空を見上げる。

「時子がお姉ちゃんになってくれて、その両親の羽玄さんはげんと真理奈さんまりなが私の新しいパパとママになってくれたおかげで私は耐えられたの。3人がいなくなったら、きつと私は廃棄処分されてた。でも」

「何があつたんだ？」

マイケルが訊ねると、

「ある時、一日の実験が終わって部屋に戻ったら、私だけになってたの。聞いたら、羽玄さんも、真理奈さんも、時子も、みんな今日の実験に耐えられなかったんだって」

「まさか廃棄処分か？ いや、しかし時子はまだ生きてるわけだが」

「ええ。でも、そのとき私は時子たちが生きてるって知らなかったから。みんな死んで、私だけが生き残っちゃったんだって思ったら、一気に薬とか実験の副作用に襲われて、発狂する寸前の所でスタッフに

連れられて、機械でできた棺の中に入れられたわ」

「満智子だけって事は、お前たち以外はもうなつたんだ？」

マイケルの疑問に満智子は、

「私たちが最後の4人よ。他の人は遅かれ早かれ廃棄処分されたわ」

と、言うも、

「って、人間としての私が終わる最期の数分前まで思ってた」

満智子はいった。

「あの人たちが考えてた以上に、被検体がどんどん壊れていくから、あの程度の結果を出した被検体は適応者として、壊れる前にコールドスリープで冷凍保存されてたのよ。時子たちもその要領で眠っているから安心しろって、私もコールドスリープで寝かされる前に言われたわ。まあ、私は適応者というほど結果は出してなくて、時子たちのおかげで狂わずにいれたケースだから、後半からはみんなよりずっと実験の内容も易しかったみたいだけど」

「何人コールドスリープまで耐えれたんだ？」

「10人と少し。実際は、コールドスリープ中そのまま実験に使われて死んだ人もいるから。いまも生きてるのは私や時子を含めて1桁。もしかしたら私たちだけかも」

「そうか」

マイケルは悔しげにうなづく。

「そろそろ核心に踏み込んだことを聞こう」

今度はパインがいった。

「君は次にファイル・ハンターズに捕まったら自分が殺人マシンになるって言った。なら、どうして時子が何も覚えてないからといって、保護を拒んだ？ 洗脳されるんだろう？」

「そんなの、決まってるわ」

悔しさを滲ませ、絞り出した声で満智子はいった。

「時子が私を覚えてないなら、もう私のお姉ちゃんじゃないなら、もう私が満智子でいる意味なんてない。だから、本来あるべき羽玄さんと真理奈さんの側につくのよ」

その言葉に、マイケルが驚く。

「フェンリルの両親も目覚めてるのか!？」

「それどころか、私たちデュエル兵士の隊長格よ」

「そういえば事務所で君はフェンリルをデュエル兵士って言ったな」

パインは反応し、

「ファイール・ハンターズのデュエル兵士といえば、奴らが
MISSION 24^{参照}ロスト^{参照}って薬物を使って組織に忠実な戦闘員を作り上げる計画って噂がある。もしかして、君たちはその計画の被検体で、成功例なのか？」

「そうよ」

満智子はうなずく。

「私たち被検体は、あなたたちの言葉を信じるなら10年の刻を経て、デュエル兵士として目覚めたわ。ただひとり時子を除いてね」

そこで、常時開いた通信先でヴェーラがいうには、

「例えるなら腹筋崩壊太郎よりはシャドウムーン仮面ライダーBLACK参照のような洗脳を、デュエル兵士はかけられるんだ。被検体たちは冷凍保存の仮死状態の間に認識や価値観を意識の中枢までしっかり書き換えられる。結果、被害者は元の記憶や人格を残したままデュエル兵士として生まれ変わった認識をもって目を覚ますんだ」

事務所サイドでその場全員が「なぜそこまで知ってる」と目を向ける中、公園サイドでは続けて満智子が、

「私も自分をデュエル兵士って思ってるから例外じゃないわ。与えられた私の役目も認識してるし、それ自体に歯向かうつもりはないの。だけど、私は適正が低かったから人間の心を消される前に装置が誤作動を起こして、自我そのものが消える所だった。そこを、誰かに救出されたの」

「その誰かというのは?」

「分からないから『誰か』って言ったに決まってるじゃない。男か女かさえも認識できてないわ。ただ、目覚める寸前、フェンリルを護れって言われたのは覚えてる。だから私は、『私の役目』に従って、時子の下にきたのよ。デュエル兵士として私に与えられた役目は、」

出来損ないは出来損ないらしく他の兵士の道具に徹しろ」だもの」

最後だけ自らを嘲るように満智子はいった。どこか乾いた笑いの混じった喋りに、パインとマイケルのみならず事務所サイドさえ痛々しさに眉間が歪む。特に、

「しかも、いざ再会したら時子は私のことを覚えてないっていうじゃない。私にはもう時子しかいないのに、その時子もお姉ちゃんदैいてくれない。それならもう、満智子でいるのも諦めて羽玄さんと真理奈さんの道具になりたいって思うのは、おかしい？」

なんて言葉を聞かされてしまつては、事務所サイドでフェンリルがシヨックで膝から崩れ落ちるのは無理なかつた。

そんな満智子の下に突如、

「馬鹿かお前は！」

と、叱咤の音が響いた。

パインでもマイケルでもない。夜の公園の暗闇から、後ろに数人のフィール・ハンターズを連れ、ひとりの男がやってきた。背は180を超え、美形とはいかないが人並に端正な顔立ちに茶色に染めたセミショートの髪、三百眼の鋭い眼差しが印象的に映る。

直後、

「うっ」

と、マイケルが頭を抱えだした。

「おい。どうしたマイケル？」

パインが心配して訊ねた。マイケルはそのまま数秒震えた後、

「ああ。大丈夫だ、何でもない」

と、ぜえぜえと肩で息しながら返す。

男はいった。

「分かりきつた事実シヨックを受けるな。迎えにきたぞ、ドエル。早く帰るぞ」

「ドエル？」

パインが訊ねると、

「デュエル兵士としての私の名よ。クトゥルフ神話に出てくる、ティンダロスの獵犬の協力者ドールの別読みらしいわ」

満智子はいいい、続けて男に向かって、

「なにしに来たのよ、羽玄！」

「いまの名は『デュエル兵士』ハーゲン。理由はたつたいま言ったはずだ。ハングドにお前の居場所はない。早く帰るぞ、飯の準備はできている」

事務所サイドで誰かがいった。「ご飯、用意してるの？」と。

さらにフェンリルも、待遇がプライドの下より良さそうで内心軽い嫉妬を覚える。何せ黒山羊の実時代は人形扱いが過ぎて食事も排泄も許されなかったのだ。

「おい、待てよ」

パインがベンチから腰をあげた。続いてマイケルも立ち上がる。

パインは満智子を護るように立つと、

「悪いが、まだ満智子を解放するとは言ってないぜ。何より、フェンリルがこいつのお姉ちゃんをしないって誰が決めたんだ？」

「ドエルが求めた姉は時子の記憶と人格をもったフェンリルだ。いまのあいつにドエルを預けられるか」

「だが、満智子がそっちに行ったら、今度こそ自我が消えてしまうんだろ？」

「それを決めるのは上だ。俺ではない。それに、俺はドエルがどうなろうと父親として義娘を愛し続ける」

彼が本気でいってるのはパインの目にも明らかだった。血の繋がりはないとこの事だが、羽玄、いやハーゲンは、家出娘を迎えに来た父親そのものの眼差しで満智子を見ていたのだ。

しかし、娘が心を失うのを許容する父親がいていいはずがない。パインはハーゲンを睨みつけ、

「なら俺とマイケルが満智子の三人目の父親になってやる。法では救われない人たちを、人並の幸せに導いてやるのが俺たちハングドの仕事だ」

怒りを露にデュエルディスクを構える。

パインはかつてアメリカ海軍のパイロットだった。父親も海軍で家にいることは少なく、パインは父親の愛を知らずに育った。父親と

の時間を求めたパインは努力の末父親の部隊に入隊したが、その日から父親はパインを兵として扱ひ息子と呼ぶことはなくなった。

パインはいまも、ありふれた父親の愛に憧れを抱いており、だからこそ娘を愛してるようで逸脱しているハーゲンが許せなかったのだ。

そして。

満智子もまた、真摯に自分に向き合ってくれるパインとマイケルに心を開きつつあった。

「パイン」

弱弱しくすがるように、満智子が助けを求める中、

「いくぜマイケル。仕事開始だ」

威勢のいいパインの言葉を前に、マイケルは彼の横に立ち、

「ああ、仕事開始だ」

懐から拳銃を一本取り出す。

そして、パインの頭を撃ち抜いた。

MISSION 29 ―愛は果てしなきバイオレンス (後編)

「……………」

事務所サイドは、しーんと静寂に包まれていた。

原因はもちろんマイケルの裏切りだ。

現在、高村司令たちはモニターから公園の様子を見ている。そこには、ヴェーラに加え木更の姿もあった。

満智子の独白でフェンリルが若干使い物にならなくなっていたが、いま事務所にいる総員がそれぞれ手分けしてパインをサポートする手筈になっていた。しかし、マイケルがあのだタイミングでパインを撃ち殺すのは予想外だったのだ。

というのも、満智子とマイケルの会話をみて、高村司令を除くほぼ全員がマイケルへの心配は杞憂、もしくは直ちに影響は出ないものと警戒を忘れてしまい、その高村司令でさえ、マイケルがあまりに流れる手つきでパインを撃ったものだから対応が間に合わなかったのである。

「ボク、行ってくる」

静寂を破ったのはフェンリルだった。

デュエルディスクを装着し、近くの椅子の角から瘴気を出し始めた彼女に、

「待ちなさい。どうやって行くつもり？」

高村司令がいった。

「アンタの角と角を繋げる能力がクソチートとはいっても、まだモニター先のどこも繋がってないでしょ」

フェンリルの能力は、事前にフィールを仕込んだ鋭角同士でのみ発生する。さほど離れていない視界内であれば、その場ですぐ遠隔で仕込むこともできるのだが、モニター越しであっても距離が離れすぎると話は別だ。加えて、フィールも一度仕込めば一生有効というわけでもない。残念ながら、高村司令のいう通り現在公園内でフィールが

仕込まれてる鋭角はひとつも存在しなかった。

「木更ちゃん、協力して」

フエンリルはいった。

「いますぐ、パインさんか満智子のデュエルディスクにハッキングして、ボクのフィールを届けて欲しいんだ。それで、デュエルディスクの角をゲートに繋げる」

「でも、いまの私は」

自信がない。そして、できない。木更は口裏に自らの不能をフエンリルに伝えた。

木更のハッキングはプログラミング知識を完全に無視したクリフォートによるフィール能力である。そして、木更は現在ゼウスの一件で気が動転して以後うまく行使できずにいたのだ。

フィールの扱いはメンタルの状態に左右される場合がある。これはフィールの特色でもなんでもなく、スポーツでも勉強でも心が弱つてると100%の力を出し辛いのが同じ。そして、一度失敗がクセになると中々抜け出せないのも同じだ。

しかし、フエンリルは。

「早くして！…このままだと満智子は、ボクの妹は！」

フエンリルが焦る中、モニターの先ではマイケルに怯えた満智子がデュエルディスクを構えるも、マイケルが撃った銃弾でディスクが破壊される様子が映し出された。

これで、満智子のディスクへのハッキングは不可能になった。

「ああ、そうだったな。これが俺様の本当の任務だった」

モニター先でマイケルがいった。満智子は怯えながら、

「だ、騙したの？ 私やパインを」

「ああ。悪いな。てめえのパパ、ハーゲンの指示だ」

いまやマイケルは完全にハーゲン側として動いている。フィール・ハンターズたちは満智子が座ってたベンチを取り囲み、その中をマイケルがじりじりと歩み寄る。

そんなモニター先の状況を見て、鈴音はいった。

「木更さん、パインのデュエルディスクをプログラミングでハッキン

グしてくださいませ」

「え？」

木更は驚き、

「だけど私、正規の手段でハッキングはできませんけど」

「あなたが仕事の合間に増田の遺したデータを元に訓練していたのは知ってますわ。他所の組織のネットワークならともかく、同じ仲間のデュエルディスクになら何度か潜入に成功してるはずでしょう？」

「それは」

「大丈夫、私も協力しますし、あなたにならできますわ」

鈴音がやさしく諭し、木更の頭を撫でる。

「分かりました」

木更はいった。

「パイン・サラダのデュエルディスクにハッキングして、最後までファイルを使ってフェンリルのファイルを送ればいいのですね？ やってみます」

失礼しますと一言断り、木更はモニターの正面に座ってキーを打ち込む。

近頃の機械じみた顔とも、普段の絶やさぬ笑顔とも違う真剣そのものな顔で、フェンリルからすれば目にも止まらぬ速さでタイピングする姿に、高村司令も、

「やるじゃない」

の一言。

最後にエンターキーを押して、木更はいった。

「潜入成功。フェンリルさん、モニターにファイルを流してください」
「うん」

言われるまま、フェンリルは手をかざす。すると、モニター先の画面で、パインのデュエルディスクから一筋の瘴気が伸びる様子が映る。

「フェンリルさん、どうですか？」

木更が訊ねる。フェンリルはいった。

「成功したよ。ありがとう木更ちゃん」

「任務を伝えるわ」

高村司令がいった。

「救出任務よ。フェンリルと鈴音は直ちに現場に直行、満智子は無事救出して帰還。敵対勢力の生死は問わない、むしろ殺せ。後方サポートは私と藤稔で行うわ」

「鈴音さんと？」

驚くフェンリルに、高村司令は、

「不満？」

「ううん。責任重大すぎて肝が冷えたけど」

「なら1秒以内に慣れて仕事を果たせ」

一見無茶ぶりにいう高村司令。その隣で鈴音はいった。

「自分の身は自分で護れますわ。ですから、あなたは自分の為すべきことをしてくださいませ」

「う、うん……」

「では、私はゲートの防衛を中心に立ち回りますわ。フェンリルは満智子さんを救出しながら敵を殲滅ください」

そんなハングドの様子をみて、ヴェーラはいった。

「ハラショー。そろそろ三人称の描写をやめていつもの冒頭に入って貰っていいかい？」

わかりました。地の文はいった。

ボクの名前はフェンリル。プライドこと鷹野たかのメイコの作品のひ

とりで、現在ハングドの構成員。

そして、間違いなく病んでる人だよ。

「満智子を脳姦するのはこのボクだあッ!!!!」

『こいつ、いきなりシリアス壊しやがった!』

通信先で高村さんが驚く中、鋭角を通って公園に飛び出したボクは、いままさに満智子に手が伸びかけたマイケルに、腕の毛穴からフィールで作った触手を伸ばして刺貫きにかかる。

「なっ」

咄嗟に避けるマイケル。そのままボクは触手を満智子に絡ませ、ワ

イヤーのように引き寄せてキャッチする。

「満智子、大丈夫だった？」

「時子？ どうして」

恐怖で泣きそうになった顔で、だけどボクがここに来たのを信じられなそうに茫然とする満智子。

「当たり前じゃないか」

ボクはいった。

「洗脳されるならボクにやらせてよ（ボクは満智子の姉だもん）」

しまった、逆!?

「……………」

鈴音さんが無言でゴム弾を撃ってきた。狙いはボクの頭。咄嗟にフィールで防御したけど、痛い。

通信先から高村さんが、

『鈴音。この場で仲間割れはやめなさい。ガチでアンタも裏切り者つてありえる流れだから』

「同じ年ごろの娘を持つ母として、満智子さんに性欲丸出しで近づくと輩を放っておけませんわ」

言いながら、鈴音さんは非殺傷用のゴム弾の銃を懐に仕舞う。つていうか、「妹から離れろっ!」とかいって登場するつもりだったのに。なんで早速性癖爆発させちゃったんだろ、ボク。

これじゃあ、まるで鳥乃さんだ。

ボクは満智子を胸元に寄せ、

「改めて、怪我はない？ 満智子」

「ひっ」

どうしよう。満智子、ボクをみて怯えてる。

「鈴音さん、どうしよう」

ボクは本気で困り、助けを求めると、

「仕方ないですわ。彼女をこっちに渡しなさい」

と、鈴音さんはいった。しかし、そこへ。

『フェンリルさん、後ろ!』

通信先から木更ちゃんの声。気づくとフィール・ハンターズが数人

ほどボクに向かつて飛び掛かっていた。けど、ボクが何かする前に鈴音さんが腕から内蔵銃を出し、ひとり残らず撃ち落としていく。

そういえば、鈴音さんは鳥乃さんと同じく半機人だったっけ。

「ありがとう鈴音さん」

言いながら、ボクは辺りのフィール・ハンターズたちをひとりずつ目で追う。

「1、2、3、4、5、……喰らえー!」

ボクはその内の5人ほどにターゲットを絞り、デュエルディスクなりナイフなり奴らの鋭角と、わざと鋭角にしたボクの服の襟を繋げる。そして、今度はさっきの触手を襟の鋭角を通して奴らの鋭角に出現させ、それぞれ耳穴なり眼球なりを貫いて脳ミソを物理的にシェイクしてやった。

直後、

「いやああああああっ!」

全身を震わせ、満智子が悲鳴をあげる。

『フェンリルさん、脳狙いの攻撃は控えてください。満智子ちゃん、先ほどあなたに脳姦して洗脳したいって聞かされた直後なんですよ?』

「あ」

しまった。そりやそうだよ、目の前で実例見せたら、次は自分がされると思つて怯えるに決まつてるよ。

ボクは居た堪れなさに目を泳がせて、

「大丈夫。満智子にそういうことしないから」

「ひぐつ、ひぐつ」

どうしよう。完全に泣いてる。今更ボクが何か言つたところで、満智子は余計に怖がるだけだ。

多分、もう二度とボクを頼つてはくれないんだろうなあ。こうなつたら、いつそ本当に満智子の脳をくちゆくちゆして「お姉ちゃんだしゆき」って言わせちゃっても。

通信先で高村さんがいった。

『藤稔アンタよくアイツを受け入れたわね。監禁されたうえアレされそうになつたんでしょ?』

『逆に受け入れないと、本当にされる所でしたから』

と、通信先で木更ちゃんの返事。当時のエピソードを思い出しボクの心が勢いよく抉れる。でも、そんな抉れた心が魔が差しそうになったボクの心を正常に戻してくれた。

『でもまあ良かったじゃん。これで危険人物のターゲットが他所に移ったわ』

『いいえ』

木更ちゃんは否定し、

『フェンリルさんは惚れっぽいうえに衝動的なんです。たぶん、鳥乃先輩のパターンと同じでターゲットが増えただけだと思いますよ』

うん、ごめんね木更ちゃん。その通りなんだ。

『あー。ドンマイ』

音声だけなのに、高村さんが木更ちゃんの肩を叩いて同情する様子が映像付きで想像できた。

ところで。

辺りを確認した所、もうフィール・ハンターズはボクたちを包囲できるほど数を残していなかった。それどころか、触手を怖がってデュエルディスクを手放す人もいる始末。

だから、ボクは堂々と鈴音さんに歩み寄り、満智子の身柄を引き渡す。

「満智子をお願い」

「分かりましたわ」

鈴音さんが満智子を優しく抱きしめた。

「離して」

満智子はいうも、

「大丈夫ですわ。怖くないから、よく頑張ったわね」

と、鈴音さんが頭を撫でてあやすと、ボクより安全と思っただのか満智子はすぐ鈴音さんにしがみついた。

なのでボクは鈴音さんに満智子を任せ、続けて実父疑惑のあるハーゲンに向かって、ボクはいった。

「ハーゲン！ 満智子は渡さない。ボクたちハングドの下で保護させ

てもらおうよ」

「あれだけ危険人物晒してよく言えたな」

半眼の呆れた顔でハーゲンはいった。うん、我ながらごもつとも。

「そのうえ、ドエルとの想い出も忘れておいて」

「でも、ボクは時子なんですよ？」

「ふんっ」

ハーゲンは鼻をならし、

「ああ、そうだ。お前はかつて時子だったデュエル兵士、フェンリルだ。そして、俺のもうひとりの娘でもある。たったいま、それを激しく後悔したが」

「だったら記憶がなくても妹を護るのは、姉として当然じゃないか」

「妹に欲情する姉がいるか！」

「義理でも娘から自我奪おうとしたやつに言われたくない！」

ボクは、そこだけには全力で言い返す。

そしてボクは、満智子に向かって本気で真面目に全力でいった。

「ごめんね満智子。でも、ボク全部本気だから！ 満智子を助けたいのも、護りたいのも、時子として姉でいたいのも！」

「私の脳みそ、穿りたいのも？」

「それは……」

満智子は一度ボクに目を向けるも、すぐにそっぽを向いて、

「何も覚えてないくせに」

「ごめん」

「さつき、人違いって言い切ったくせに」

「それもごめん」

「本当は厄介事に巻き込まれたって思ってるくせに」

「それは無いよ！」

ボクは、そこだけはしつかり否定した。

「ボクだって、ずっと思い出したかったし、取り戻したかったんだ。ボクが、プライドの作品、フェンリルになる前のことを。やっと舞い込んできた手掛かりなのに、厄介事だなんて思うもんか！」

「時子？」

「だから、チャンスが欲しい。絶対、思い出すから。満智子の知ってる時子を取り戻してみせるから。だから、もう一度だけ、ボクを信じて！」

実をいうと、いまも全然実感がわかないんだ。

ボクが本当は時子だったってことも、満智子って義理の妹がいることも、両親の名前も、ボクの一度目の末路を聞いても、全部自分のことのように感じないんだ。

それでも、やっと掴んだ手掛かりで、やっと巡り合えた家族だもん。手放したくないに、決まってるじゃないか！

「分かった」

満智子はいった。

「あと一回だけ、信じてみる。一回だけよ？ 次は絶対ないから」「うん」

ボクはうなずき、再びハーゲンに向き合った。

「この通りだよ。満智子はボクたちが連れて行く。妹を自我のない道具になんかさせるもんか！」

「そうか」

ハーゲンは、一度冷静な声でいった。だけど、すぐに激昂して、

「ならば力づくでも連れて帰る！ ドエルはお前の性欲を満たす玩具じゃない！」

う、あ、当たり前じゃないか。

「しないよ、そんな事。絶対我慢してみせる！」

「制御が必要な時点で問題外だ馬鹿娘が！ マイケル、やつらをデュエルで倒せ、いいな！」

ハーゲンは怒鳴り声で命令を下し、その体が光ったと思うと公園から姿を消した。

だけど、ボクにはそれが、まるでマイケルを倒せば見逃してやるって言ってるように聞こえたんだ。だって、本当に連れ帰るならここで立ち去る必要なんてない。

もしかしたら、本当はハーゲンも満智子を再改造なんてしたくないのかもしれない。立場上そんなこと口が裂けてもいえないだけで。

「げっへっへ」

ハーゲンにかわり、にたにた笑ってボクの前に立つマイケル。その姿は、もうボクたちの知ってる彼じゃない。

「俺様の長い長い下準備をファイにしてくれた後始末。キチンと払って貰うぜ！ フェンリル」

「最初からフィール・ハンターズだったっていうの？」

「ああ。愉しかったぜ、パインやお前たちとの友情ごっこは」

マイケルはデュエルディスクを構える。

「やるしかないみたいだね」

ボクも諦め、デュエルディスクを構える。すると、ディスクは自動的にデュエルモードに移行し、ボクたちの足元で紫色の光が模様を描く。しかもこれって、地縛神の？

さらに、ボクたちごと模様を囲むように蒼い炎が上がり、すでに暗い空が瘴気に包まれる。

「レスデュエルだ。負けたほうは地縛神の生贄になるぜ」

マイケルはいった。ボクは驚き、

「地縛神?! まさか、マイケルが地縛神の眷属に選ばれたっていうの？」

「いいや、俺じゃない。だが、フィール・ハンターズには1名いる。もちろん、そちのクソレスとは別にな」

クソレスって、鳥乃さんだよな？ 酷い言われだけど擁護できない。

「だったら。デュエルに勝って吐いて貰うよ。その正体が誰なのか！」

「できるものならな！」

マイケルが攻撃的に笑う。ボクたちはいった。

「デュエル！」

フェンリル

LP4000

手札4

□□□□

□ □ □ □
□ □ □ □
□ □ □ □
□ □ □ □
□ □ □ □

マイケル

LP4000

手札4

先攻はマイケルに決まった。ボクのデッキ、リバースを多用する以上後攻は苦手なのに。

「俺のターン。まずはこいつだ。俺は手札からフィールド魔法《スクラップ・ファクトリー》を発動だ。効果によりフィールドのスクラップモンスターの攻守は200アップする」

事前情報通り、マイケルのデッキは「スクラップ」。

フィールド魔法のソリッドビジョンによって、辺りの光景は溶解工場の中に切り替わる。

「さらに《スクラップ・リサイクラー》を通常召喚。効果発動だ。デッキから《スクラップ・グライダー》を墓地に送る」

確か、この《スクラップ・リサイクラー》は、召喚時にデッキの機械族を墓地に送るモンスター。だけど、実はこのモンスターはスクラップとは全く関係ないカードだったりするんだ。

このカードは、元々スクラップっていうテーマが出る前に登場した汎用機械族サポートモンスター。だから、一応スクラップのサポートを共有できるものの、機械族テーマでさえないスクラップとはさほど相性が良いわけでもない。デッキをテーマ内で統一したり、一般的に流通しているカードで組む範囲内ならば。

テーマ外のカードも取り込んだ構成なら、鳥乃さんの使う《幻獣機オライオン》と組み合わせる事でデッキの展開力が跳ね上がるらしいし、《スクラップ・グライダー》は流通しているカードの記録にはない。たぶん、マイケルが過去にフィールドで誕生させたモンスターだろう。「いくぜ。俺の場にスクラップモンスターがいる場合、手札から《スクラップ・オルトロス》を特殊召喚。そして《スクラップ・オルトロス》

はこの方法で特殊召喚された場合、フィールドのスクラップモンスター1体を破壊する。俺はオルトロス自身を破壊。そしてオルトロスの第2の効果だ。このカードがスクラップカードの効果で破壊された場合、墓地のスクラップモンスターを手札に戻す。自身を除く制限がない以上、オルトロス自身の効果だろうとスクラップカードによる破壊に違いはない。俺は《スクラップ・グライダー》を手札に戻すぜ」

そういつて、マイケルは《スクラップ・リサイクラー》で墓地に送った《スクラップ・グライダー》を手札に。

「それだけじゃない。俺は《スクラップ・オルトロス》が破壊された時、《スクラップ・ファクトリー》の第2の効果も発動していた。この効果は、1ターンに1度、フィールドのスクラップモンスターが効果で破壊された時、デッキからスクラップモンスター1体を特殊召喚できる。俺はデッキから《スクラップ・ゴーレム》を特殊召喚だ。さらに《スクラップ・ゴーレム》の効果を使用。1ターンに1度、俺の墓地からレベル4以下のスクラップモンスターを特殊召喚する。俺は墓地の《スクラップ・オルトロス》を特殊召喚だ」

どんどん展開されていくスクラップモンスター。

このスクラップデッキというのは能動的に破壊とサルベージ、破壊と蘇生などを繰り返しながら盤面を制圧していくテーマらしいんだけど、情報だけ見ると実際に目の当たりにするのは全然違う。

「来い！ 俺様のサーキットよ」

しかもリンク召喚まで。

「召喚条件はスクラップモンスターを含むモンスター2体。俺は《スクラップ・リサイクラー》と《スクラップ・オルトロス》をリンクマーカーにセット。リンク召喚！ 暴れる、リンク2 《スクラップ・ワイバーン》！」

出てきたのは飛龍タイプのスクラップモンスター。その攻撃力は1700だったけど、フィールド魔法の効果で攻撃力は200上がる。

《スクラップ・ワイバーン》 攻撃力1700↓1900

「《スクラップ・ワイバーン》のモンスター効果だ。1ターンに1度、墓地のスクラップモンスターを蘇生し、その後俺のカードを1枚破壊する。俺は《スクラップ・オルトロス》を蘇生し、オルトロスを再び破壊する。そして《スクラップ・ワイバーン》第2効果と《スクラップ・オルトロス》の効果を同時に発動だ。《スクラップ・オルトロス》がスクラップモンスターの効果で破壊されて墓地に置かれたことで、墓地の《スクラップ・リサイクラー》を手札に加える。そして《スクラップ・ワイバーン》がすでにモンスターゾーンに存在する状態で、フィールドのスクラップモンスターが効果で破壊された場合、デッキからスクラップモンスター1体を特殊召喚。その後、フィールドのカードを1枚破壊する。俺はデッキから《スクラップ・ゴブリン》を特殊召喚し、《スクラップ・ゴブリン》を破壊する。《スクラップ・ゴブリン》の効果。このカードがスクラップカードの効果で破壊された事で、墓地のスクラップモンスター1体を回収する。俺は《スクラップ・オルトロス》を手札に加える」

何だよこれ。本当に破壊と再生を繰り返しながらアドバンテージを取りすぎてワケわからない。

「さらに、《スクラップ・ゴブリン》が破壊されたタイミングで手札のチューナーモンスター《スクラップ・グライダー》を特殊召喚する。このカードは、俺のスクラップモンスターがスクラップカードの効果で破壊された場合、手札から特殊召喚できる。その後、《スクラップ・グライダー》のレベルを破壊されたスクラップモンスターのレベルと同じにできる。俺は《スクラップ・グライダー》のレベルを《スクラップ・ゴブリン》と同じレベル3にする」

下手な決闘者より丁寧に効果内容を説明してくれてるのに、言ってることが全く分からない。

とりあえず、《スクラップ・ワイバーン》の効果ふたつと他のモンスターとのコンボで、最終的に墓地に《スクラップ・ゴブリン》が送られ、墓地の《スクラップ・オルトロス》と《スクラップ・リサイクラー》が手札に戻り、チューナーモンスター《スクラップ・グライダー》がレベル3として特殊召喚された、でいいのかな？

そして場には、《スクラップ・ワイバーン》と《スクラップ・グライダー》の他にレベル5の《スクラップ・ゴーレム》がいる。この流れだときつと次は。

「俺はレベル5 《スクラップ・ゴーレム》にレベル3 《スクラップ・グライダー》をチューニング。捨てられしガラクタ共よ、いまこそ竜の擬態へと組み上げ、命の息吹を模造しろ！ シンクロ召喚！ 暴れろ、レベル8 《スクラップ・ドラゴン》！」

現れたのは口上通りスクラップで組み上げられた一匹の竜の姿。その攻撃力は2800だったけど、フィールド魔法で200アップした結果。

《スクラップ・ドラゴン》 攻撃力2800↓3000

攻撃力3000に突入。

「カードを1枚セット。ターン終了だ」

さらに場に伏せカードが1枚敷かれ、やっとボクの1ターン目がまわってきた。

フェンリル

LP4000

手札4

□□□□

□□□□

□□―「スクラップ・ワイバーン（マイケル）」

□□「スクラップ・ドラゴン」

□□「伏せカード」□

「スクラップ・ファクトリー」

マイケル

LP4000

手札2

「ボクのターン、ドロー」

言いながらボクはカードを引き、

「早速だけど、あのカードは真っ先に対処しないと。速攻魔法《サイクロン》！ 《スクラップ・ファクトリー》を破壊するよ」

ボクはまず今後も展開の要になりそうなフィールド魔法を対処し、「永続魔法《ナーゲルの守護天》を発動」

代わりに今度はボクが永続魔法を場に展開。

「《ナーゲルの守護天》がフィールドに存在する限り、ボクのメインモンスターゾーンのティンダングルモンスターは戦闘・相手の効果では破壊されない。さらに、ボクのティンダングルモンスターが相手に戦闘ダメージを与える場合、1ターンに1度だけそのダメージは倍になる」

だけど、EXモンスターゾーンのモンスターは護れない。このデッキはボクがフェンリルとして生まれてからずっと使ってるけど、何度も何度も忘れてしまうこのカードの抜け穴だ。忘れないようにしないと。

「そして、ボクは手札から《ティンダングル・イントルーダー》を捨てて、手札の《ティンダングル・ジレルス》の効果発動。デッキから《ティンダングル・ドロネー》を墓地に送って、自身を裏側守備表示で特殊召喚」

このカードは、いうなら手札とデッキのティンダングルカードを1枚ずつ墓地に送ることで特殊召喚できるモンスター。

「さらに、モンスターが裏側守備表示で特殊召喚された事で、墓地から《ティンダングル・イントルーダー》を裏側守備表示で特殊召喚。さらに手札から《ティンダングル・ベース・ガードナー》を特殊召喚」

これで手札は0になっちゃったけど、ボクの場にセットモンスターが2体とベースガードナー。

そのうちセットモンスターの1枚をボクは場から取り除き、腕を高く伸ばす。辺りが急に闇色に染まる、はずんだけど元々夜かつ瘴気に覆われてるから殆ど変わりない。

ボクはいった。

「木更ちゃんにー」

ボクが本当に催眠術、洗脳、薬物、監禁、憑依、寄生、暗示、傀儡化、チキチキ、耳姦、書き換え、マインドブラスト、SAN値直葬、あらゆる手段で脳姦したいのは君なんだって想い。

「――届け、ボクのサーキット!」

直後、

『あのー。フェンリルさん、そこは気を遣って満智子ちゃんに届けて言っただけだよ。』

通信先から木更ちゃんの反応がくるけど、

「駄目なんだよ、木更ちゃん。この想いだけは満智子にぶつけたら駄目なんだ」

『フェンリルさん?』

「だって、満智子に届けたら、妹に脳姦も洗脳も監禁もしたいって意味になっちゃうじゃないか」

『何を私に届けようとしてたんですか!』

普段大人しい木更ちゃんから凄いい声。だけど、

「木更ちゃん。ボクは、ボクは、Yes ロリータ脳タッチは絶対しない!」

『誰が上手いこといってと』

「召喚条件は裏側守備表示モンスターもしくはティンダングルモンスター1体。ボクはセット状態の《ティンダングル・イントルーダー》をリンクマーカーにセット。リンク召喚! 来て、鋭角に住まう猟犬の友、リンク1 《ティンダングル・ドール》!」

出現したのは、《ティンダングル・イントルーダー》によく似たミミズのモンスター。そして、このモンスターをみて満智子は、

「ティンダングル……ドール?」

と、反応。そういえば満智子のデュエル戦士の名はドエル。スペルが違うから別の種族って説もあるけど、少なくとも、この《ティンダングル・ドール》とドエルは同じなのだ。

「満智子がボクの前から逃げたとき、気づいたらボクの手元でこのカードが生まれてたんだ」

ボクがいった所、マイケルが、

「見ないカードと思ったら、創造されたばかりの天然モノか」

『それを出すなら、やっぱり満智子に届けのほうがいいから』

さらに木更ちゃんがいった。うん、言われてみるとボクもすつごく

そう思う。

「《ティンダングル・ドール》のモンスター効果。1ターンに1度、リンク先のモンスターの表示形式を変更する。ボクはこの効果で《ティンダングル・ジレルス》をリバース。そしてリバース効果を発動。デッキから《ティンダングル・エンジェル》を手札に加える」

ボクは手札を1枚補充してから、

「続けていく。満智子に届け、ボクのサーキット！」

今度はちゃんと妹の名を呼び、リンク召喚に入る。

「召喚条件はティンダングルモンスター3体。ボクは《ティンダングル・ドール》《ティンダングル・ジレルス》《ティンダングル・ベース・ガードナー》の3体をリンクマーカーにセット。リンク召喚！来て、リンク3 《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》！」

こうして出現したのは、三つ首のティンダロスの猟犬。ボクのエースカードだ。

「ちっ、1ターン目から出してきやがったか」

マイケルが舌打ちする中、

「バトル。《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》で《スクラップ・ワイバーン》に攻撃。さらに《ナーゲルの守護天》の効果によって戦闘ダメージは倍になる」

攻撃力2800の《スクラップ・ドラゴン》も怖いけど、《スクラップ・ワイバーン》がほぼノーリスクで展開と除去を両立する以上野放しにするわけにはいかない。それに、《スクラップ・ファクトリー》を破壊したんだから《スクラップ・ドラゴン》の攻撃力がまた3000に突入することはないはず。

アキュート・ケルベロスの三つ首から放たれる炎のブレスを浴び、《スクラップ・ワイバーン》は破壊される。さらにスクラップの爆発を伴ってか、ブレスはより強い炎となってマイケルに襲い掛かる。ファイルはかけてないからダメージはないけど、

マイケル LP4000→1400

一撃でマイケルのライフは半分以下に。

「くっ、このターンで《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》は

無いと思つてたのが不味かったか」

「さらにバトルフェイズ終了時アキュート・ケルベロスの効果発動。このカードが攻撃したことで、ボクの場合にティンダングルトークンを1体特殊召喚。さらにリンク先に特殊召喚したことで、さらなるアキュート・ケルベロスの効果。このカードの攻撃力は、リンク先のティンダングルモンスターの数×500アップする」

《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》 攻撃力3000↓3500

こうして、ボクのエースがさらに火力を上げたところで、

「ボクはこれでターン終了」

フェンリル

LP4000

手札1

□「《ナーゲルの守護天》」□

□「《ティンダングルトークン（守備）》」□

□「《ティンダングル・アキュート・ケルベロス（フェンリル）》」□

□「《スクラップ・ドラゴン》」□

□「《伏せカード》」□

マイケル

LP1400

手札2

と、ここで。

「フェンリル、マイケル。鈴音さんまで」

仕事終わりの鳥乃さんが公園にやってきた。私服の上にトレンチコートを着て、さらにバッグをひとつ肩に下げている。元々普通にすれば男女問わず受けのよさそうな容姿をしている人だけど、今日は加えて多少大人びたハイティーンって印象を覚える。

その驚いた顔から、誰かが呼んだわけじゃなく、本当に偶然現場を通りかかった様子だった。

「げ、クソレズ」

マイケルが嫌そうな顔していった。鳥乃さんはさらに鈴音さんの

傍にある惨状に気づき、

「パイン？ まさか死んでるの？ ちょっと、何が起きてるって話だけど」

「裏切り者だよ！ 鳥乃さん」

ボクはいった。

「マイケルが撃ったんだ。あいつはフィール・ハンターズだったんだよ」

途端、鳥乃さんの表情が険しくなり、

「この蒼い炎、地縛神ね。マイケルが眷属とは思えないけど」

言いながら鳥乃さんはボクたちを囲む炎に足を踏み入れた。直後、鳥乃さんの足元にも紫の光で別の模様が浮かび上がり、その模様で炎を一時的にかき消しながら進んでいく。

「そんな事できたんだ、鳥乃さん」

ボクが訊ねた所、鳥乃さんは自分の頭を指でつつんし、

「私のほうの地縛神が話しかけてきたのよ、”できる”って」

そして、鳥乃さんは数秒ほど目を閉じ、

「こちら”レズの肌馬”。応答をお願い」

って、いった。すると事務所のほうから、

『こちら木更。現在、フィール・ハンターズから脱走した少女の救出作戦を行ってる所です』

どうやら、鳥乃さんは半機人だけあって頭の中に直接通信機を仕込んであるらしい。しかも、

「木更ちゃん!? 大丈夫なの、いま」

『少なくとも現在は』

「なら了解。現在状況の詳細をテキストファイルで送って頂戴」

『分かりました』

って。脳がコンピューターと繋がってるから可能なんだろうけど、改めてハングドの半機人が人間と機械のいいとこ取りなんだって思い知らされる。

「状況把握。で、その救出対象の子っていうのが」

言いながら鳥乃さんは満智子に視線を向け、

「ガキか。残念」

と、言い切った。

「なにこいつ」

しかも満智子も満智子で反発しちゃって、

「しかもクソガキときたって話ね」

鳥乃さんもすっごい嫌そう。

ボクはいった。

「悪いけど鳥乃さん。この子、ボクの記憶に関わる重要な手がかりで、妹だから丁重にお願い」

「了解。フェンリルってロリコンから彼女の脳ミソ護ればいいって話ね」

「待つて！ 木更ちゃんからどんな詳細貰ったの？ ねえ？」

すると木更ちゃんから、

『ごめんなさい。高村さんがそこもしっかり伝えろと言いました』

「ああ」

高村さんのキャラなら仕方ない。

鳥乃さんがいった。

「まあ後輩弄りはそこまでにして、いまから私と地縛神でデスデュエルに対する解析と干渉を行うわ」

『分かりました。では、現段階の解析データを送信次第、フェンリルさんのデュエルのサポートに入ります』

木更ちゃんの言葉に、

「お願い。ぶっちゃけマイケルは私よりずっと強いつて話だから、二人掛かりでデュエルする意気込みでお願い」

鳥乃さんはいい、直後、彼女の肌が死者のように青白くなり、瞳孔が開き白目が黒く染まる。同時に彼女から霊園の空気にも似た異質なフィールが迸った。

「相談はもう十分か？」

マイケルがいった。見ると、まだドローフエイズのままメインフェイズに移っておらず、わざわざ待つてくれたのが分かる。今じゃ敵なのに、どうして気を遣ってくれたのか。

「うん、大丈夫」

ボクはどう返事すればいいのか困りながらいうと、

「了解だ。俺のターン、ドロー」

ここで、やっとマイケルはカードを引いた。

「《スクラップ・ドラゴン》の効果を発動だ。このカードは1ターンに1度、自分と相手のカードをそれぞれ1枚ずつ対象にとって、破壊する。俺は《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》と俺の伏せカードを破壊する」

「うわっ」

もうアキュート・ケルベロスが破壊されるなんて。でも《ナーゲルの守護天》があるのに、なんで。

「確か《ナーゲルの守護天》はメインモンスターゾーンのティンダングルモンスターは破壊を防ぐが、EXモンスターゾーンのティンダングルは防げないはずだな」

「うっ」

その通りだよ。また忘れてたよ、ボク。今回はしつかり気を付けてたのに。

「なら破壊させて貰うぜ。が、ここで俺はさらに破壊対象になったりバースカードをオープンだ。罨カード《メタバース》を発動。このカードはデッキからフィールド魔法を1枚選び、手札に加えるか発動するかを選ぶカードだ。俺は2枚目の《スクラップ・ファクトリー》をこの場で発動」

「そんなんっ」

さっき《サイクロン》で破壊したばかりだったのに。

再び辺りは溶解工場の中に切り替わり、さらに《ティンダングル・アキュート・ケルベロス》が破壊される。だけどボクの場合には《ナーゲルの守護天》とティンダングルトークンがいる。アキュート・ケルベロスは護れなかったけど、このティンダングルトークンは《ナーゲルの守護天》が存在する限り、どんな方法だって破壊されない。今回は間違っていないはず！

そう、思ってたんだけど。

「さて、動かさせて貰うぜ」

マイケルはいった。

「永続魔法《補給部隊》を発動。このカードは1ターンに1度、俺のモンスターが戦闘・効果で破壊された場合に1枚ドロウするカードだ。さらに手札から《スクラップ・オルトロス》を特殊召喚。自身の効果で《スクラップ・オルトロス》自身を破壊する。《スクラップ・フアクトリー》《スクラップ・オルトロス》《補給部隊》それぞれの効果を発動だ。《補給部隊》の効果で1枚ドロウ。《スクラップ・オルトロス》の効果で墓地の《スクラップ・グライダー》を手札に加える。《スクラップ・フアクトリー》の効果でデッキから2枚目の《スクラップ・ゴレム》を特殊召喚する。《スクラップ・ゴレム》の効果で発動。墓地の《スクラップ・ゴブリン》を特殊召喚。さらに《スクラップ・ゴレム》と《スクラップ・ゴブリン》の2体をリンクマーカーにセット。暴れる！ リンク2 《スクラップ・ワイバーン》！ 今回はアキュート・ケルベロスがいたEXゾーンに召喚だ。《スクラップ・ワイバーン》の効果で発動。墓地の《スクラップ・ゴレム》を蘇生して破壊。《スクラップ・ワイバーン》と手札の《スクラップ・グライダー》の効果で発動。まず、手札の《スクラップ・グライダー》を特殊召喚し、レベルを5に。続けて《スクラップ・ワイバーン》の効果で《スクラップ・キマイラ》を特殊召喚。その後、《ナーゲルの守護天》を破壊する」

またマイケルのソリティアが始まり、再び《スクラップ・ワイバーン》を出されたうえ、その効果で早速《ナーゲルの守護天》を破壊されてしまった。これでティンダングルトークンは戦闘でも効果でも破壊されてしまう。

「そして、レベル4 《スクラップ・キマイラ》にレベル5となった《スクラップ・グライダー》をチューニング。シンクロ召喚！ 暴れる、レベル9 《スクラップ・ツイン・ドラゴン》！」

さらにSモンスターが1体増えて。って、

《スクラップ・ツイン・ドラゴン》 攻撃力3000↓3200

そのモンスターの攻撃力は元から攻撃力3000もあって、フィールド魔法の効果でさらに上昇。こうなってしまうと、ボクの《ティン

ダングル・アキュート・ケルベロス』で即座に対処するのは無理に近い。もう墓地に行ってるけど。

「手札から《スクラップ・リサイクラー》を通常召喚。デッキから《スクラップ・ハルバード》墓地に送る」

ここでやつと、マイケルはこのターンの通常召喚権を行使。

「そして俺はこのままバトルと行きたい所だが、《ナーゲルの守護天》には確か墓地から発動できる第3の効果があったはずだ」

マイケルに指摘されたので、ボクは。

「《ナーゲルの守護天》は自身を墓地から除外し、さらに手札を1枚捨てることでデッキから新たな《ナーゲルの守護天》を手札に加えることができる」

「そうだ。次のターン、お前は再び《ナーゲルの守護天》を発動する可能性が極めて高い。その上で再び俺の《スクラップ・ワイバーン》を攻撃されたら今度こそお陀仏だ」

「くっ」

実際、それを狙ってたんだけどね。

「対する俺の答えがこれだ。来い！俺様のサーキットよ」

再びリンク召喚!?

「召喚条件はS・リンクモンスター^のいずれかをを含むモンスター2体以上。俺は《スクラップ・リサイクラー》とリンク2《スクラップ・ワイバーン》をリンクマーカーにセット」

ってことは、出してくるモンスターはリンク3。

「闇に沈みし機巧の怨霊よ。その無念残したまま鹵獲され、俺様の道具へと生まれ変われ！リンク召喚！暴れろ、リンク3《ガイストロイヤル幽霊戦機スクラップ・スチュワート》！」

出現したのは、全身に錆びた艦装を身に纏った人型の機械戦士。手には日本刀と西洋刀がそれぞれ握られている。そして、

「この反応。闇のフィール・カード!？」

ボクは驚く。どうしてマイケルがって一瞬思ったけど、そういえば彼の正体はフィール・ハンターズだったんだ。持っただけでもおかしくない。

ただ、スクラップ・スチュワート自体の攻撃力は2000。フィード魔法の効果併せても2200。これなら《ナーゲルの守護天》とアキユート・ケルベロスでライフを0にできちゃう。ってことは、たぶんまだ何かあるはず。

「かつて存在した駆逐艦スチュワートを知っているか？」

マイケルはいった。

「スチュワートはかつてアメリカの艦だった。太平洋戦争の中で日本軍に倒され、鹵獲を避ける為に自沈処分で轟沈したはずの艦だ。しかし、後に米軍の航空機が日本の勢力圏内を偵察していた所、奴は未だ航行してた。沈んだ駆逐艦が幽霊船となって今も作戦を続けている。一時期アメリカではそう噂になったそうさ。何故そんな事が起きたか分かるか？」

ボクは無言で対峙し続ける。程なくしてマイケルは続きを語った。「結果的に自沈処分は失敗し、スチュワートは日本軍に鹵獲されたんだ。その後、奴は第102号哨戒艇と名を改め日本の軍艦にされちゃったわけだ。つまりスチュワートは無念の中、敵国の艦として故郷アメリカと闘わされた。そんなエピソードがある艦だ」

「何がいいいの？」

「ここでボクが訊ねると、マイケルは攻撃的な笑みを向け、

「ミチコの未来を教えてやってるんだ！」

高笑いするように言ったんだ。

「こいつは近い未来、『デュエル兵士』ドエルとして無念の中ミチコの心を失う。そして、操られるままかつて護りたかったものに銃を向けるんだ。俺とお前どちらが死んで、ミチコがどちらの道に進んだとしてもな」

「そんな事ない！ 満智子をフィール・ハンターズから救出すれば」

「お前が性欲のまま脳ミソ弄るんだろ？」

「しない！」

ボクは断言したけど、

「それでも未来は変わらない」

マイケルはいった。ボクが満智子を欲望のまま操るって確信して

るみたいだ。すつごく、いらつとする。だって、本当は制御しきれない自信がないから。

「《幽霊戦機―スクラップ・スチュワート》のモンスター効果。このカードのリンク召喚に成功した場合、俺の墓地もしくはゲームから除外されている中からレベル3以下の機械族を守備表示で特殊召喚する。俺は《スクラップ・リサイクラー》を蘇生する。そして《スクラップ・リサイクラー》の効果で《マシンナーズ・フォートレス》を墓地に送るぜ」

「マシンナーズ？　なんでマイケルがそんなカードを」

ボクは言いかけ、ハツとなった。元々マイケルはパイんとタッグを組んでる人だ。タッグデュエル用にパートナーのカードをデッキに入れてもおかしくはない。

そう、マシンナーズはパインが使ってるカードだったんだ。

「そして、《幽霊戦機―スクラップ・スチュワート》の攻撃力はリンク先のモンスターの数×300アップする。《スクラップ・リサイクラー》はリンク先に特殊召喚した。これで効果は適用だ」

やっぱり。何か攻撃力を補強する効果を持つてるとは思っていたよ。これでアキュート・ケルベロスが《ナーゲルの守護天》込みで攻撃してもギリギリ届かない。

ガイストロイヤル
《幽霊戦機―スクラップ・スチュワート》 攻撃力2000↓2200
↓2500

「さらに、俺はスキル《粉碎》を使う」

「えっ」

《粉碎》だって!?

「ここが使い時だ。《粉碎》の効果により、俺のレベル5以上のモンスターの攻撃力は、ターン終了時まで俺の場のレベル5以上のモンスター1体につき300アップする」

いま、マイケルのレベル5以上のモンスターはSモンスター2体。

《スクラップ・ドラゴン》 攻撃力2800↓3000↓3600

《スクラップ・ツイン・ドラゴン》 攻撃力3000↓3200↓3800

モンスターの攻撃力が一気に跳ね上がった所で、

「カードをセット、バトルだ。《スクラップ・ドラゴン》でティンダングルトークンを戦闘破壊」

使い捨ての壁を倒すには豪華すぎる攻撃力で、ボクのトークンは粉碎される。

「続けて《幽霊戦機―スクラップ・スチュワート》で直接攻撃だ」

二本の刀のうち、西洋刀でボクを狙うスクラップ・スチュワート。ここでボクは、

「墓地の《ティンダングル・ドロネー》を除外して効果を発動。墓地から3種類のティンダングルモンスターを1体ずつ裏側守備表示で特殊召喚する。ボクが特殊召喚するのは《ティンダングル・イントル―ダー》《ティンダングル・ジレルス》《ティンダングル・ベース・ガードナー》の3体」

この効果によって、ボクの場合は一気に裏側表示のティンダングルモンスターで埋まる。だけど、ここで。

「だと思っただけ。だが《幽霊戦機―スクラップ・スチュワート》のリンク先にモンスターが増えたことで、スクラップ・スチュワートの攻撃力はさらに300アップだ」

「あつ」

そうじゃないか。《幽霊戦機―スクラップ・スチュワート》のリンクマーカーは上・左下・右下に向いている。だから、上に向いたリンクマーカーはボクのフィールド。いま《ティンダングル・ベース・ガードナー》が特殊召喚された場所に向いていたのだ。

ガイストロイヤル
《幽霊戦機―スクラップ・スチュワート》 攻撃力2500↓2800
「改めて《幽霊戦機―スクラップ・スチュワート》でセット状態の《ティンダングル・イントル―ダー》に攻撃だ！」

スクラップ・スチュワートは同じく西洋刀を用いて、裏側表示のカードのビジョンを串刺し。剣を引き抜くと中から貫かれた状態のイントル―ダーが姿を現す。

「《ティンダングル・イントル―ダー》がリバースしたことで効果発動。デッキからティンダングルカードを1枚手札に加える。ボクは」

カードを宣言しようとした所で、

『フェンリルさん』

通信先から木更ちゃんが話しかけてきた。

『たぶん、このターンの間にフェンリルさんのライフが0になることはありません。ここは次のターンに備えたカードを補充しましょう』
そういえば、さっきボクのデュエルをサポートしてくれるって言うてたっけ。

分かったよ。心の中でボクはうなづく。

『サーチするカードはジレルスです。ジレルス自身の効果でサーチすることができない以上、あのカードをサーチするチャンスはここだけです』

分かった。

『ボクはデッキから2枚目の《ティンダングル・ジレルス》を手札に「ならここで《幽霊戦機―スクラップ・スチュワート》の効果を発動だ」
マイケルがいった。その言葉にボクが身構えてると、

『大丈夫です。たとえスクラップ・スチュワートが貫通の2回攻撃だったとしても、いまのフェンリルさんの場ならライフが残るはずですから』

と、木更ちゃん。

マイケルがいった。

『《幽霊戦機―スクラップ・スチュワート》はダメージステップ終了時に、自身のリンク先のモンスター1体を破壊することで、もう1度だけ攻撃することができる』

良かった。木更ちゃんの推測より易しい。ただの“2回攻撃だ。貫通効果は持っていない。

そう、ボクそして木更ちゃんもたぶん安心してた所、

「俺が破壊するのは裏側守備表示の《ティンダングル・ベース・ガードナー》だ」

と、マイケルはいったんだ。

「待って。ベースガードナーはボクのモンスターだよ。どうして破壊できるの?」

「スクラップ・スチュワートが2度目の攻撃をするに必要な破壊は、このカードのリンク先のモンスター1体だ。リンク先の自分のモンスターとは一言も言っていない」

『そんなー!』

通信先から木更ちゃんも驚く声がある。これは間違いなく木更ちゃんの想定外の事態が起こった。

「リンク先のボクのモンスターをここまで利用するなんて」

『ごめんなさい。すぐに再計算を行います』

と、木更ちゃんはいうも、そんな暇も与えられず、

「悪いな。続けてスクラップ・スチュワートで《ティンダングル・ジレルス》を攻撃だ」

《ティンダングル・ベース・ガードナー》が破壊され、その爆炎の中からスクラップ・スチュワートが飛び出し、今度は日本刀でカードのビジョンを袈裟斬りにする。

カードが2つに割れると、中から《ティンダングル・ジレルス》が現れ、破壊される。

「《ティンダングル・ジレルス》の効果。このカードがリバーズした事で、デッキからジレルス以外のリバーズモンスターを手札に加えるか墓地に送る。ボクはアポストー」

言いかけたところで、

『ハウンドです!』

木更ちゃんがいった。

『フェンリルさん。《ティンダングル・ハウンド》を手札に加えてください』

え? でも、ハウンドだとこのターンを凌ぐ手段には。

『問題ありません。フェンリルさんのライフは問題なく200残りです。代わりに、次に来ると思われる《スクラップ・ツイン・ドラゴン》の攻撃を、フィールの防壁を全開にして防いでください。代わりに次のドローにフィールを使う必要はありません』

木更ちゃんは大胆な作戦をいつてきたのだ。それってつまり、ハウンドを手札に加えてしまえば、次のドローは何を引いてもいいってこ

と。

信じていいんだね、木更ちゃん。

「ボクは《ティンダングル・ハウンド》を手札に加える」

言って、ボクは《ティンダングル・アポストル》をやめて代わりに《ティンダングル・ハウンド》をサーチ。これで一応、手札は3枚。

「だが、これで直接攻撃が可能になった。《スクラップ・ツイン・ドラゴン》でフェンリルに直接攻撃！」

マイケルが攻撃を宣言すると、スクラップ・ツインの片方の口からビームブレスが放たれる。それも木更ちゃんが読んだ通りフィールでリアル化した状態で。

だけど、ボクは前もって防壁を準備していたおかげで余裕をもって攻撃を防ぐ。しかし、直後もう片方の口から同じくビームブレスが放たれたのだ。

満智子に向かって。

『あ』

これも、木更ちゃんの想定外の事態だったみたい。だけど、

「満智子ッ!!」

ボクはすぐに腕の毛穴から触手を出し、襟の鋭角を通して満智子の壊れたデュエルディスクに出現させる。

「え」

満智子が驚く中、ボクは満智子を護るバリエードとして、触手を満智子の前方に全力で展開。

結果、ボクの防御が手薄になったけど、なんとか防壁を突破される寸前で攻撃は終了。同時に触手を出していたほうのボクの腕は限界を超え、だらんと垂れさがった。

フェンリル LP4000↓200

そして、《スクラップ・ツイン・ドラゴン》の攻撃によりボクのライフは、木更ちゃんの想定通り200まで低下する。

「防がれた、だど」

驚くマイケル。

「嘘だろ、おい。俺はこいつの攻撃にかなりフィールを注いでやった

んだ。必ずぶつ殺してやる為にライフを削りきれないと分かっているながら《粉砕》まで使ったんだぞ？ お前のフィール量じゃ事前に分かっているも」

「事前に分かってたんだよ」

ボクはいつたけど、

「いや。事前に分かかっていても防ぎきれないフィール量をぶち込んだんだ。俺は」

と、いったのだ。直後、ボクは思い出す。

「《ティンダングル・ドール》」

「あっ」

ボクの眩きに、マイケルも目を見開き驚く。

《ティンダングル・ドール》を手に入れたおかげで、ボクのフィール量はマイケルの想定より高くなってたんだ。しかも、このカードは間違いない満智子のおかげで手に入ったもの。

ボクは妹に助けられたんだ。

「畜生、ターンエンドだ」

マイケルはいった。

フェンリル

LP200

手札3

□□□

□「《セットモンスター（《ティンダングル・ミスト》）」「《セットモンスター（《ティンダングル・イントルーダー》）」

「《幽霊戦機ガイストロイヤ―スクラップ・スチュワート（マイケル）―」□

「《スクラップ・ツイン・ドラゴン》」「《スクラップ・グライダー（守備）》」「《スクラップ・ドラゴン》」

「《補給部隊》」「《伏せカード》」□

「《スクラップ・ファクトリー》」

マイケル

LP1400

手札0

『フェンリルさん、大丈夫ですか？ いえ、返事はしなくて大丈夫です』

木更ちゃんがいった。

『勝利の方程式は解析済です。これから私のいうようにデュエルを行ってください』

わかった。ボクは心の中でうなづく。

『まずは通常のドローを行ってください。引いたカードは確認しなくても構いません』

「ボクのターン、ドロー」

使い物にならなくなった腕の代わりに、もう片方の腕から出した触手を伸ばしてデッキトップのカードを引き抜く。

「ハンド、

「墓地の《スクラップ・ハルバード》のモンスター効果。相手ターンの間俺のスクラップモンスターの攻守は400ポイントアップする」

マイケルはいい、

《スクラップ・ドラゴン》 攻撃力3000↓3400

《スクラップ・ツイン・ドラゴン》 攻撃力3200↓3600

《ガイストロイヤル幽霊戦機—スクラップ・スチュワート》 攻撃力2500↓2900

相手のスクラップモンスターの攻撃力が底上げされる。だけど、

『大丈夫です。このカードの効果も把握した上で策はできています』

木更ちゃんはいった。

『まず、手札の《ティンダングル・エンジェル》を捨てて《ナーゲルの守護天》をサーチ。そのまま発動してください』

《ティンダングル・エンジェル》はボクの最初のターンに手札に加えたカード。実質必要ないといわれたのがちよつと寂しいけど、

「墓地の《ナーゲルの守護天》を除外し、手札の《ティンダングル・エンジェル》を捨てる。デッキから新たな《ナーゲルの守護天》を手札に加えそのまま発動するよ」

ボクがカードを発動すると、木更ちゃんは続けて、

『先ほどドローしたカードと、適当なカードを墓地に送って手札の《ティンダングル・ジレルス》を特殊召喚してください』

「ボクは、『ジェルゴンヌの終焉』とデツキの『ティンダングル・アポストル』を墓地に送り、手札の『ティンダングル・ジレルス』を手札から裏側守備表示で特殊召喚」

『さらに墓地の『ティンダングル・イントルuder』を特殊召喚してください』

「墓地の『ティンダングル・イントルuder』を裏側守備表示で特殊召喚」

片手の代わりに触手を駆使してプレイングを続け、ボクの場合にはこれで裏側守備表示のモンスターが2体。

『ここからが重要です』

木更ちゃんがいった。

『セット状態の2体をリリースして『ティンダングル・ハウンド』をアドバンス召喚してください。ただし、召喚する先は『幽霊戦機—スクラップ・スチュワート』のリンク先です』

えっ？ ボクはどうして、わざわざスクラップ・スチュワートを強化するようなことをするのか分からなかったけど、

「ボクは2体のセットモンスターをリリース。スクラップ・スチュワートのリンク先に『ティンダングル・ハウンド』をアドバンス召喚！」

直後、

「なっ」

マイケルは途端驚き、

「だからハウンドに変えたのか。やりやがったな、フェンリル！」

と、憤慨したんだ。その意味が、実際にプレイしたボクだけが分からずにいると、

『『ティンダングル・ハウンド』第2のモンスター効果です。確認してみてください、フェンリルさん』

と、木更ちゃんに言われてボクは改めて自分のモンスターのカードテキストを確認。

ティンダングル・ハウンド

リバース・効果モンスター

星7／闇属性／悪魔族／攻2500／守 0

(1)：このカードがリバーズした場合、このカード以外のフィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。このカードの攻撃力は対象のモンスターの元々の攻撃力分アップする。その後、対象モンスターを裏側守備表示にする。

(2)：相手フィールドのモンスターの攻撃力は、そのモンスターとリンク状態になっているモンスターの数×1000ダウンする。

(3)：このカードが戦闘・効果で破壊され墓地へ送られた場合、フィールドの裏側表示モンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターを表側守備表示にする。

結果、やっとその意味をボクは理解した。

ボクの場合に《ティンダングル・ハウンド》がいる事で、《幽霊戦機―スクラップ・スチュワート》はリンク先のモンスターの数×1000攻撃力が下がる。という事は《ティンダングル・ハウンド》自身がりリンク先に召喚されたことで、スクラップ・スチュワートの攻撃力が下がるのだ。

例えば、スクラップ・スチュワートが効果で攻撃力を上げたとしても、ガイストロイヤ《幽霊戦機―スクラップ・スチュワート》 攻撃力2900↓3200
↓1200

こうなってしまうのである。

「高村司令だな？ リンクモンスターの特性を利用したプレイングを咄嗟に考えやがったのは。そうか、途中プレイングが誰かに指示されてたみたいになつたのは、バックにトップがいやがったからか」

マイケルはいうけど、
「ううん」

ボクは否定し、

「通信でボクに指示してた人がいるのは正解だよ。だけど、ボクの打開策を考えてくれたのは木更ちゃんだ！」

「何……だと……」

マイケルは驚き、

「あいつがこんなプレイングを考えやがったのか」

『皮肉にもマイケルさんがリンク先の相手のモンスターを利用したのがヒントになりました』

通信先で木更ちゃんはいった。

『彼のプレイングが、私にも敵のリンクマークーを利用するという発想を教えてくださいました。逆にそれがなければ、このターンでフェンリルさんに決めさせる手段は浮かばなかったかもしれない』

「木更ちゃんは、マイケルがボクのモンスターを利用する戦術をしたから、いまの戦術を思いついたって言ってるよ」

「くっ」

マイケルは、悔しそうに睨みつける。

さらにここで、地面に広がる紫の模様がぐにやりと歪み、シャチを描いた模様が変わる。

「この模様はChacu Chailhua!? 貴様なにをした」

マイケルが怒りながら訊ねると、

「たったいま、生贄先の地縛神を私の地縛神に変えたって話。デスデュエルの解除は別の問題が発生して止められなかったけど」

と鳥乃さんはいったんだ。

『鳥乃先輩の地縛神なら、いまは無理でも後に復活の目があります。研究所では現在も生贄になった被害者を復元する研究が行われてますから』

木更ちゃんはいって、

『終わらせましょうフェンリルさん。ハウンドでスクラップ・スチュワートに攻撃です』

「うん！ 《ティンダングル・ハウンド》で《幽霊戦機―スクラップ・スチュワート》に攻撃」

ボクは、今回はしっかり木更ちゃんにうなずき、攻撃宣言を行う。ここでマイケルは伏せカードを表向きにし、

「まだ終わらない。罨カード《炸裂装甲》を発動だ！」

だけど、ボクのモンスターは破壊されない。

「《ナーゲルの守護天》の効果。ボクのメインモンスターゾーンのモンスターは、相手の戦闘・効果では破壊されない。EXゾーンにいたア

キユート・ケルベロスと違って、今回は有効だよっ」

ボクがいうと、

「しまっ」

最後の言葉が発せられる前に、《ティンダングル・ハウンド》はスクラップ・スチユワートを噛み砕き、

マイケル LP1400↓0

マイケルのライフポイントが0になった。

スクラップ・スチユワートは爆発し、自らリアル化してしまつたらしい衝撃にマイケルは吹っ飛ばされる。

「うわあああっ!」

叫びながらマイケルは地面に倒れ、彼の体が光の粒子へと分解されていく。

直後、ボクたちの下で光る紫の模様がマイケルの足元に集まつていき、彼の体が消滅する寸前、

「俺は、一体何を」

マイケルは言いながら地縛神に取り込まれて消えたのだった。

「ねえ、さつきマイケル」

我に返つたみたいな反応してなかった? ボクはその場で立ちすくみながら、言おうとした所、

「緊急事態発生って話ね」

彼を取り込んだ結果何か分かつたらしい。鳥乃さんは歯ぎしりでも立てそうな険しい顔で、

「総員報告するわ。事務所も現場もみんな聞いて頂戴。結論から言うとマイケルはハングドを裏切つてなんかなかったわ」

『どういう事ですか、先輩』

木更ちゃんが訊ねる中、

「マイケルはロストと闇のフィール・カードの併用で即席のデュエル兵士にされていたのよ。たぶん、ロストによる人格の変貌と、フィール・ハンターズが接触した瞬間スイッチが入るように洗脳されたと思うんだけど、心当たりは?」

『あるわ。メツチャクチャあるわ』

通信先で高村司令が返事した。

思えば、パイン曰く今日のマイケルは様子がおかしいといっていた。そして、ハーゲンが接触した際、一度マイケルは頭を抱えて苦しんでいた。あの瞬間、マイケルは自分をフィール・ハンターズと思いつくように変えられたんだ。

行方不明の原因はフィール・ハンターズに誘拐された為で、ずっと自宅にいたと思いつくように記憶処理を施され、自覚のないスパイとして解放されたんだろう。

ボクやガルトが闇のファイルに支配されたときと同じように。

「沙樹」

鈴音さんがいった。

「本日23:00までに、中途までのデスデュエル解析結果をハングドと研究施設に送ってくださいませ。以後、次にあなたがこの件に関わっているのは来週月曜17:00からになりますわ」

「いや、それはいいけど。さすがに状況的にどうなの？ 明らかにヤバイ事起きてるって話だけ」

鳥乃さんがいった所、

「だからこそですわ。恐らくこの先、地縛神を持つあなたの力が必要不可欠になりますわ。ですので、沙樹は予定通り梓さんと週末の温泉旅行で羽を伸ばし英気を養って貰います。そして、何がなんでも来週月曜17:00に万全の状態で戦線復帰を要求しますわ」

なんて、鈴音さんはいった。

元々いま鳥乃さんはダメージが蓄積しすぎている。木更ちゃんダウンしてたのも勿論だけど、本を正せばボクも原因に一枚噛んじやった増田さんの死から、鳥乃さんの不安定は始まったらしい。

「了解」

鳥乃さんはいった。

気づくと、残りのフィール・ハンターズも全員撤退していた。敵の増援や奇襲の気配も見当たらない。どうやら、今回はこれで一息ついたらしい。

「満智子」

ボクは、改めて妹に近づいて、

「大丈夫？ もう怖くないから。怪我はない？」

しかし、満智子はボクが接近するとじっとこちらを睨んできて、

「また、私の脳に触手入れたいって言った」

「え？」

「怖いよ、いまの時子！ 絶対しない絶対しない言っつて、本当は酷い事したいの丸分かりなのよ！」

「それは……」

否定できない。嘘でも否定しないといけないはずなのに。……ボク、やっぱりやりたいよ。

だけど、ボクが押し黙つてると、

「でも、時子さつき助けてくれた」

ぶつきらぼうに満智子はいったんだ。

「だから今回はノーカンにしてあげる。感謝しなさいよ」

「満智子！」

ボクは嬉しさにぶわつと泣きそうになった。

「時子、聞いて！」

だけど涙が本当に出る前に、満智子は叫ぶ。

「いま、フィール・ハンターズは時子を『デュエル兵士』フェンリルとして危険視してるのよ。今回は私の回収を最優先にしてたみたいけど、あいつらは組織に引き戻すか、できないなら殺して処分まで考えてるわ」

「デュエル兵士として？」

ボクが呟いた所、

「フェンリルがハングドにいる。それだけでデュエル兵士の最新技術が全部解析できてしまうからよ」

満智子はいった。

「私たちデュエル兵士と時子に使われてる技術は基本的には全く変わらないわ。デスデュエルっていったアレの技術だつて時子には搭載されてるし、何ならさつきのシャチの地縛神から作った闇のフィール・カードがあれば、今すぐにも仕掛けられる。私はそれをハング

ドと時子に伝え、時子を護る道具になるために来たのよ」

「ボクを護るための、道具？」

すると満智子はふんつて突き放すような態度で、

「別に、他に希望があるなら、どんな道具でも構わないけど」

「すみません、それアウトです」

突然、木更ちゃんが鋭角のゲートを通ってやってきた。

「誰？」

驚く満智子に、

「初めまして、木更といいます。先ほどからフェンリルさんが脳姦したがつてるもうひとりターゲットです。それよりも」

木更ちゃんがいともたやすく身も蓋も無い自己紹介を済ませ、

「幾つか訊ねますけど、まず満智子ちゃんは自分のことを道具と認識してるのですよね？」

「そうよ」

肯定する満智子。木更ちゃんは続けて、

「そして、フィール・ハンターズはあなたを自我のない道具として使うとしてるのですよね？」

「そうだけど？」

「そこが原因なんですよ。フェンリルさんが、あなたに脳姦や洗脳をしたいと思ってしまったのは」

「えっ？」

驚く満智子。

「どういうこと？」

「失礼ですけど、記憶を失う前の自分を慕ってた子が私を道具にしてって接触してきて、断ったら他所に洗脳されに行くって。いまのフェンリルさんからすれば、まるでロリコンの下に小さな女の子が誘ってきて、断ったら別のロリコンの女になるっていわれたのと大差ない気がするんです。フェンリルさんの性癖、その位拗らせてますから」

「……」

ボクは衝撃に表情を失った。

ボク自身気づいてない満智子への劣情の正体を看破され、その上可能な限りの確かつ酷い例えで自覚させられたんだから。

ああ、そっか。

ボクは、道具と聞いて木更ちゃんの代わりに性癖の捌け口になってくれる子が舞い込んだと思って、自らファイル・ハンターズに洗脳されに行く満智子を、逃した魚に見てたんだ。

なんだよこれ。こんな目で満智子を見ておいて、ボクはお姉ちゃんだなんて言う資格ないよね？

「鬱だ。死のう」

ボクは自ら触手を自分の耳に突き刺そうとしたけど、自害の寸前で満智子が触手を掴み全力で制止。

「ちよつと、何やってるのよ時子！」

「離して満智子。せめて妹を護るために姉の務めを果たさせて、満智子の害はいまここにいるんだ！」

「訳わからないわよ。私なんて、たかが道具でしょ！」

「やめて！ たかが道具とか言ったら本当に満智子の脳弄りたくなるから！」

で、ボクは勢いのまま言っちゃったんだ。

「まず満智子の脳に触手で洗脳カッコ物理して、『フェンリルお姉ちゃんだいしゆき』ってハートマークたつぷりに言わせるんだ。それから二度とボクを嫌いにならないよう深層の奥までボクを慕う心を植え付けて、ついでに脳くちゆくちゆしてアへ顔を見せて貰うよ。監禁も素敵だよね？ 満智子に首輪をつけてボクのベッドに鎖で繋げるんだ。そして任務で疲れてただいまーって部屋に戻ったボクに、ひとり放置されて寂しかった満智子が目を輝かせて抱き着いてくるんだ。最高だね！ これが木更ちゃんだったら、性的にも恋愛的にも大好きだから再び脳を弄ってボクだけの娼婦になって貰ったり、新婚甘々の夫婦ならぬ夫婦になって貰ったりするけど、満智子に求めるのは妹と癒しだ！ 満智子は満智子のまま、一緒にお風呂に入って、ご飯食べて、一緒のベッドで抱き合って健全に眠るんだ。拒否はさせないよ？ だって、その時の満智子はボクを慕いすぎて、ボクしか見えてない

「考えられないはずだもん」

「……」

「……」

「……」

「……」

今度は、ボク以外のみんなが言葉を失い、表情を失った。程なくして、満智子以外の全員が寒気を覚え全身ガタガタと震えだす。鳥乃さ
んでさえも。

「あれ？」

どうして、みんな怯えてるんだろう？　ボクはいま、なにを口走っ
たんだっけ。

「……………」

あ、人生詰んだ。

気づくと、満智子の手はショックからか触手から離れてるし、ボク
は今度こそ自分の脳みそをシェイクして自害しようと思った。

そこへ。

「と、時子お姉ちゃん？　大好き」

満智子がいったんだ。さらに、すごく恥ずかしそうに、照れてそっ
ぽを向きながら、

「これでいいの？」
って。

「……………」

ボクの意識は天に昇った。そこから先は覚えていない。

USUALLY 3 | t r i c k o r t r e a t
(だったもの)

私の名前は藤稔^{ふじみのり} 木更^{きさら}。陽光学園高等部一年の女子高生。

そして、かすが様愛です。

「木更ちゃん、トリックオアトリート。甘い一夜^{おかし}くれないと一夜^{いたずら}するから」

「トリックオアトリートだよ木更ちゃん。脳姦^{おかし}か監禁^{いたずら}か選んで欲しいな」

——現在日時10月31日。ハロウィン。

この日、私は鳥乃先輩とフェンリルさんから、酷いトリックオアトリートをされました。

私は苦笑いしつつ、やんわりと。

「あの一。思ったのですけど徳光先輩と満智子さんにすればいいのでは?」

訊ねると、ふたりは口を揃えて、

「さすがに天使を汚す度胸はないって話」

「さすがに義妹に手を出すのは我慢するよ」

どうして私の傍には似た方ばかりがよってくるのでしょうか?

「ごめんなさい。今日は私も用事があるので、通して頂けませんか?」

現在、ふたりは私のアパートの玄関前にいます。

しつかりおめかしして、いざ外出しようとした手前でインターホンが鳴って、ドアを開けた所ふたりに詰め寄せられたのがいまの流れです。

「え? どこに行くの木更ちゃん」

訊ねるフェンリルさんに私は笑顔で、

「もちろん、かすが様の所です」

「用事は?」

「ハロウィンですもの、トリックオアトリートに決まってるじゃないですか」

「その内容は？」

最後は先輩に訊ねられ、

「普通に婚姻届か朝まで尾行ですけど？」

私はいつてから、

「ハッ!? もしかしたら、逆にかすが様からトリックオアトリートされる可能性もあるのかも。いけない、今すぐお菓子を作らないと。でも、ここであえて悪戯を選んだら、私なにをされるのかしら？」

「いや、そんな地雷踏む人じゃないって話だから」

先輩がなにか言ってますけど、私の耳は何かの羅列としか認識できず、

「もしかして素敵なディナーを？　そして酔った私を部屋に連れ込んで気づいたらふたりベッドの中で、は……はだ……きやあああああああああああ」

その場で身悶えする私。駄目、いけないわデキ婚だなんて。こういうのは清らかな交際から、ちゃんと手順を踏んでいかないと。

「伝えないと、かすが様に。気持ちは嬉しいけど、まだキスは早いって」

私はその場で《ワーム・ホール》を発動。中に入ろうとした所、そのゲートの奥から、

「ぎやあああああああああああああああああああああ」

という、かすが様の声。

「えっ」

私は驚き、

「かすが様！　何があつたのですか？」

私はゲートに向かって訊ねてから、

「不審者かもしれません。先輩、フェンリルさん、行きましょう」

「木更ちゃんも十分不審者だよね？」

フェンリルさんが何か言ってた気がしましたが、ともかく私たちが3人は《ワーム・ホール》を潜って中へ。

その先で見えたのは。

すでに右肩を怪我したかすが様。尻餅をついて後ずさる彼にじり

じり詰め寄るのは、メイスを握った私の従妹、深海ちゃんでした。

「ミカア！」

「ミカア！」

「ミカア！」

私たちは順番に叫びます。すると、深海ちゃんは振り返り、

「あ、木更姉さん。こんにちは」

なんて、いつものように挨拶されます。

「何をしているんですか、深海ちゃん」

私が訊ねると、深海ちゃんは。

「何ってハロウィンですから。子種^{おかし}が頂けなかったので既成事実^{いたざつち}して

いる所ですけど」

「なら、どうしてかすが様は怪我してるんですか？」

「抵抗されたので、面倒だから四肢を潰しておこうと」

「ミカア！」

「ミカア！」

「ミカア！」

「ミカア！」

再び私たちは叫びます。しかも、今度はかすが様までも。

「深海ちゃん。さすがにそれは、姉として許せません」

私はデュエルデスクを構えていました。

「かすが様は今日、私をダイナーに誘って、酔い潰してベッドに連れ込む予定なんですから」

「してない！ そんな計画1ミリも考えてない！」

かすが様は照れ隠しで反論しますけど、

「そして、キズモノになった私に責任は取るって言って婚姻届けを、きやあああああああああああああああ」

「誰か助けてくれえええええええええええ」

かすが様の悲鳴に、私は。

「ほら、深海ちゃん。かすが様、あなたに怯えているじゃないですか。そこを離れてください」

「怯えてるのはお前にだああああ」

と、かすが様。もう、素直じゃないんですから。

「かすが様、そう言ってるみたいですけど?」

訊ねる深海ちゃん。

「素直じゃないんです。かすが様は」

「そうですか」

深海ちゃんは一回納得してくれるも、

「なら、木更姉さんは殺していい人ですね?」

「は、え、ちよつと何でそういう流れ?」

なんて驚く外野（フェンリルさん）は無視して、

「かすが様を未亡人にはさせません」

私はいいました。

「いや、男側には未亡人って言葉は使わないから」

突っ込み入れる先輩、さらにフェンリルさんが、

「そもそも、木更ちゃん婚約もしてないよね?」

とか言ってますけど、些細な話です。

深海ちゃんは無言でデュエルディスクを構え、赤外線を飛ばして私のディスクを強制的にデュエルモードに移行させます。

これで、私はもう逃げられません。同時にそれは深海ちゃんもですけど。

私はいいました。

「これより、私たちは第24回かすが様争奪戦を開始します」

続けて深海ちゃんが、

「ルール1、勝利条件はデュエルの勝者。ルール2、かすが様のプライベート侵害は一切考慮しなくて善い。ルール3、参加者および妨害者への殺傷を許可とする。ルール4、敗者は勝者に協力する。これでいいですか?」

「構いません!」

私がいとうと直後、

「いいわけあるかあああああつ!」

かすが様が絶叫し、

「うわあ」「うっわあ」

さらに先輩とフェンリルさんがドン引きするも私たちは無視し、

「デュエル！」「デュエル！」

口を揃えていいました。

その横で聞こえた、

「あ、フェンリル？ ちょっとハンドグドとして過去の依頼のアフターケアに付き合っつて貰っつていい？」

「分かった。相手が相手だから気は進まないけど」

という会話の意味を、私の頭は理解しないまま。

木更

LP4000

手札4

□□□□

□□□□

□□—□□

□□□□

□□□□

深海

LP4000

手札4

「先攻は頂きました」

私は宣言してから、最初の手札の4枚を引いて、
「いきます。私は手札から《クリフォート・シエル》を通常召喚。カードを2枚セットしてターンを終了します」

私の場に1体のクリフォートモンスターが出現。

本来ならレベル8攻撃力2800だったモンスターなのですが、自身の効果でリリースなしで召喚した為、現在はレベルは4、攻撃力は1800まで下がります。

「では、私のターンですね。ドロウします」

続いて深海ちゃんのターン。彼女はカードを1枚引くと、

「相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できます。《神草王バエル》！」

直後、部屋から無数の雑草が伸び、絡み合うと1体の巨大な人型モンスターへと姿を変えます。

「このモンスターの攻守は2500と2000ですが、この方法で特殊召喚した場合攻守が2000下がり、500と0になります。《神草王バエル》のモンスター効果。手札を1枚墓地に送り、私の場に攻守が500と0の神草王バエルトークンを2体呼び出します。私は手札の《神騎王キマリス》を墓地に送り効果を発動」

さらにバエルの両隣から同じように雑草が生え、小型の人型モンスターがそれぞれ出現。ところで、バエルにキマリスって凄く某ロボツトアニメですよ？ 使用者も深海ちゃんだからミカですし。

「墓地に送られた《神騎王キマリス》のモンスター効果。デッキから神・王両方の名前を持つモンスターを手札に加えます。私は《神獣王バルバロス》を手札に加えます」

あ。

「深海ちゃん、もしかして早速あのカードを」

「私は3体のバエルをリリース。アドバンス召喚！ 従属神の蛮王《神獣王バルバロス》！」

フィールドに出現したのは四脚の猛獣の下半身と槍を握った人型の上半身を持つ、獅子を思わせる金の髪と髭を生やした蛮族。その攻撃力は3000で、深海ちゃんのエースモンスター。

そして、

「《神獣王バルバロス》はモンスター3体をリリースしてアドバンス召喚でき、この方法で特殊召喚した場合、相手フィールドのカードを全て破壊します」

バルバロスが槍を掲げると、天井を雲のビジョンが覆います。いけない！

「永續罨《スキルドレイン》！ 1000ライフ払って発動します。このカードが発動している限り、互いにフィールドのモンスターの効果は無効になります」

「きた、木更ちゃんの十八番《スキルドレイン》だ」

フエンリルさんが少し興奮したようにいいいます。

「やっぱり強いよね木更ちゃんの《スキルドレイン》って。モンスター効果なら、あれだけ手間かけて発動させた効果も無効になるんだもん」

そこへ鳥乃先輩が、

「フエンリル。木更ちゃんの顔見て？　今回、あまり発動しなくなかったって顔してない？」

「え？　あ、本当だ。木更ちゃんのデツキは《スキルドレイン》が発動してフルパワーを出すようなデツキなのに」

と、フエンリルさん。ふたりの言う通り、たぶん私はいま、あまりいい顔をしていないのだと思います。

「当たり前だ」

かすが様がいいいました。

「自分よりスキドレに依存したデツキを相手に、自分から積極的にライフコストを払って使いたくないだろう」

「え？」

と、訊ね返すフエンリルさん。私はいいます。

「深海ちゃんのデツキは「スキドレバルバロス」。私と同じく《スキルドレイン》を軸にしたデツキなんです」

しかも、《スキルドレイン》下での火力は基本的に深海ちゃんのほうが上。正規の手段でP召喚を行えないスピードデュエルでは展開力も大差ない以上、できれば《スキルドレイン》を使わず他のカードでクリフォートだけの効果を無効にしたかったのですけど。

つまり、私はバルバロスによって《スキルドレイン》を使わされたのです。

木更　LP4000↓3000

「バルバロスの効果は無効になりましたけど、アドバンス召喚によってリリースされたバエルの効果で1枚ドロ。この効果は墓地で発動している為問題なく発動できます」

深海ちゃんはカードを1枚引いて、

「カードをセット。バトルに入ります。《神獣王バルバロス》で《クリフォート・シエル》に攻撃」

槍を前に突撃してくるバルバロス。先ほどスキドレ下の火力は深海ちゃんのほうが上とはいったものの、それでも、このバルバロスを倒せば多分そのまま押し切ることができるはず。彼女がさつき伏せたカードは、きつとブラフと予備で伏せた《スキルドレイン》でしようから。

「リバースカードオープン」

私はもう1枚の伏せカードを表向きにしています。

「速攻魔法《禁じられた聖杯》！」「速攻魔法《禁じられた聖杯》！」

それは同時でした。私が伏せカードを表向きにした瞬間、深海ちゃんは手札からカードをチェーン発動し、互いの声が室内にステレオで響きます。

「もしかして、深海ちゃん読んで」

「たのですか？ 私が訊ねると、

「一応、私先読みや頭脳プレイは苦手なほうですけど」

「といいつつも、深海ちゃんはいいました。」

「今回は頭で考えるより先に、自然と姉さんの伏せカードがスキドレと聖杯なのを前提にプレイしてた感じですよ」

「なんて相手にして恐ろしすぎる発言を。」

（そうだったわ）

忘れてました。深海ちゃんは、たまに無意識下で確信に至るほど第六感が働くことがあるんです。

ところで、後にフェンリルさん曰く、

「ガラムと同じリアルスキルだね。あの子もたまにやるんだ」

「だそうで。ガラムさんが動物並みの直感を持つてるのは私も知ってますけど、最悪同等の能力を深海ちゃんも持つてることになるのでしょうか。」

《神獣王バルバロス》 攻撃力3000↓3400

《クリフォート・シエル》 攻撃力2800↓3200

互いのモンスターの攻撃力が400ずつアップし、私のモンスター

は返り討ちすることなくバルバロスの一撃に粉碎されます。

木更 LP3000↓2800

私のライフも、この戦闘で僅かに削られ、

「これで私はターン終了します」

深海ちゃんはいいました。

木更

LP2800

手札1

「《スキルドレイン》」□□

□□□□

□—□□

□□「《神獣王バルバロス》」□□

□□□「《伏せカード》」

深海

LP4000

手札2

「私のターン」

言いながら私は心の中で、

(困ったことになったわ)

と、思いました。

私のデッキでスキドレ下のバルバトスを安定して倒す手段はあまり存在しないからです。特殊召喚ではない以上《アポクリフオート・キラー》でも対処できませんし、何よりスキドレ下では《機殻の凍結》が3体分のリリースにならずアポクリフオートを出すことが困難になります。さらに言うと、手札には《機殻の凍結》もアポクリフオートも引いてないですし。

現状、デッキの中身を思い返しても《禁じられた聖杯》や《機殻の生贄》のような別用途で投入しているカードの僅かな攻撃力上昇に期待するしかありません。

「ドローします」

私は、それらのカードを思い浮かべながらカードを引きます。

(あ)

引いたカードは、そういったカードではなかったのですが。

「魔法カード《マジック・プランター》を発動します」

代わりに、スキドレを排除しつつドローできるカードを引きました。

「私は《スキルドレイン》を墓地に送ってカードを2枚ドローします」
恐らく、深海ちゃんも《スキルドレイン》を伏せてる以上、スキドレの脅威を消したことはありませんけど、今度は深海ちゃんに1000ライフを払って貰うことはできるはず。なんて考えてたら、

(あ)

私はカードをドローし、引いてしまいました。2枚目の《スキルドレイン》を。

「魔法カード《クリフオート・セーフモード機殻の制限起動》を発動します。このカードは1ターン

に1度、Pスケールを問わずクリフオートモンスター1体だけをP召喚するカードです。かすが様に届け、運命の振り子！ペンデュラム召喚！私はEXデッキから《クリフオート・シエル》を守備表示でP召喚。さらにモンスターとカードをセットしてターン終了します」

結局、私は2体のモンスターを壁にするしかできませんでした。ですが、いまセットしたモンスターは《クリフオート・アーカイブ》。このカードはリリースした際にモンスターをバウンスする効果を持っています。これはフィールド外で発動する効果な以上、今後P召喚で使いまわせばスキドレ下で私が動くに有効なモンスターになるはず。

そして、深海ちゃんのデッキはアタッカーの大量展開に長けてないはずですから、たかが守備力1000の壁2体でも、このターンを乗り切ることは、

木更

LP2800

手札0

「《伏せカード》」「《機殻の制限起動》」

「《《セットモンスター》》」

「《クリフオート・シエル（木更／守備表示）》」

□「《神獣王バルバロス》」□
□「《伏せカード》」

深海

LP4000

手札2

「私のターン。ドローして《神機王ウル》を召喚します」

「あ、駄目！ 《スキルドレイン》！」

盲点でした。このモンスターは相手に戦闘ダメージを与えられないデメリット効果を持つてるのですけど、同時に攻撃力1600で相手モンスター全てに1回ずつ攻撃できる効果を持つてるのです。

木更 LP2800↓1800

さらに減少する私のライフ。デッキの相性としては発動してるほうが私の不利になるのに、2度も発動コストを払わされるなんて。

「でしたら、《メテオ・ストライク》を《神獣王バルバロス》に装備します」

「あ」

《メテオ・ストライク》はモンスターに貫通能力を与える装備カード。そして、私のモンスターとバルバロスの攻撃力の差は2000、私のライフは1800。《スキルドレイン》で1000ライフを削ったことで、貫通ダメージによる即死ラインに突入していたのです。

スキドレを発動しなければウルで壁を排除してからバルバロスによる直接攻撃。スキドレを発動したら貫通攻撃。まさか二段構えで私を倒す算段が整ってたなんて。

「《神獣王バルバロス》で《クリフオート・シエル》に攻撃します」

再びシエルに襲い掛かるバルバロス。今度は返り討ちにするような対策もなく、私のモンスターは槍に貫かれ、バルバロスは続けて私を貫こうとってきます。

フィールを込めてきているのは分かったので、私は残りのフィールを全てバルバロスに対する防御に注ぎ込みます。こうして、私の体は傷ひとつ付かないまま、

木更 LP1800↓0

ライフがゼロに。

私のフィールは全損し、かすが様争奪戦は深海ちゃんの2連勝が確定するのでした。

デュエルが終わると、深海ちゃんはすぐメイスを再び握りだしたので、

「白旗です。私に抵抗の意志はありません」

と、両手をあげて命乞い。

「分かりました」

深海ちゃんは、なんとか私への殺意を緩めてくれ、

「では、代わりにひとつ教えて頂けませんか？」

と、いいいます。

「はい。答えられるものでしたら」

私というと、

「かすが様をどこに連れ去りましたか？」

「え？」

言われて辺りを見渡すと、すでにかすが様どころか、烏乃先輩やフェンリルさんの姿さえ見えません。

「これは一体」

「先ほどお連れの方ですが、かすが様を連れて紫の瘴気の中に逃げ込んだのですけど」

「フェンリルさんですね」

つまり、私たちがデュエルしてる間に逃げられたようです。

「行き先を教えてくださいませんか？ 黙秘するなら殺します」

「私も分からない場合は」

「え？ うーん」

どうやら私が知ってるものと思っただけらしい深海ちゃんは、一回きよとんとした後考えだします。

「でしたら、一時休戦と共闘に入りませんか？」

私はいいました。

「いま現在は私がかすが様の居所を掴めてませんが、たぶん烏乃先輩やフェンリルさんと一緒だとは思いますが、ふたりのデュエル

ディスクにハッキングして居所をお伝えします」

「え、いいの？ 姉さん」

深海ちゃんは一瞬、目をぱつと輝かせ、珍しいタメ口で私に訊ねます。私はくすりと笑い、

「ルール4、敗者は勝者に協力する。私はこれでも、従姉妹同士でならかすが様を夫に一夫多妻容認派ですから」

「私は否定派筆頭ですよ？」

「争つてる間に逃げられる位でしたら、そんな深海ちゃんにも協力します」

ちなみに、一夫多妻容認派の筆頭は地津ちゃんだったりします。

「分かりました。ありがとうございます」

深海ちゃんは言います。

こうして私たちは、ハンドとフィール・ハンターズの壁を越え、かすが様を手に入れるという目的の為に手を取り合い、追跡を開始するのでした。

続きません。

MISSION 29. 5ーレズの過去2

これは、確か私がまだ中学に通ってた頃だったと思う。レズだったけど、まだいまほど性欲に生きてなくて、視野が狭くて、少しだけ厨二病な思想を患った、そんな幼く青臭い思春期の最中。そう。いま私がみてる夢は、そんな頃に起きた実体験である。



「嬢ちゃん嬢ちゃん、その嬢ちゃんだよ君い」

それは、中3の3月に起きた、ある事件の前日だった。

小母さんの門前払いを喰らったため、梓の家でご飯にありつけられなかった私は、仕方なく街で食費稼ぎという名のカツアゲやスリに及ぼうと夜の街に出ていた。そんな時だった。

「ん？」

振り返ると、建物と建物の小汚い隙間に、これまた小汚い男が私を手招きしてた。痩せ細った体にボロボロのシャツ。帽子とサンングラスで顔を隠してるが、見るに多分40〜50代だ。

「嬢ちゃん人生つまらないって顔してるね。幸せになれるいいクスリあるよ」

ああ、そういう類ね。私はすぐ、この男は私にドラッグを売りつけようとしているのだと分かった。

「悪いけど手持ちないから」

私は立ち去ろうとしたけど、男は私の腕を掴んで、

「サービスだよ、さ、あ、び、す」

とか言いながら、私の手に注射器と白い粉の入った袋を握らせてきたので、

「っ」

何するのよ！

って、口には出さずとも私は、振り向き様に男を蹴り飛ばした。

「きゃーっ」

男は地面に転がりながら、

「へへ。足りなくなったらまたここに来いよ。俺はいつもこの時間にいるからさ」

なんて言つて、しかし私に怯えるように逃げ去っていった。

そんなわけで私の手元には警察に見つかつたら即アウトなブーツが渡つてしまう。男の目論見は分かっている。私に興味本位で一回使わせ、中毒にしてから金をとる気なのだ。全く、こんな物に興味を示す人間に映つたと思うと凄く不快だ。そもそも自分が人間かどうか怪しいわけだけど。

そんな所に。

「君、ちよつといいかい？ 警察だけど」

つて言葉が耳に届き、私は咄嗟にブーツをポケットに隠しながら周囲を確認。見ると、私のすぐ傍でギャル風の女が警察の補導を受けていた。

「君だよな？ いま、この場所で喧嘩をしてたのは」

「ハッ？ してねーし、勝手に決めんなクス」

どうやら、さつき私が男を蹴つた問題が、警察の耳に届いて駆けつけてきたらしい。

私はちやらちやらした服装も濃いメイクもしてなかつた為、白と判断したのである。警察は完全に無実のギャルを疑っていた。

数年後の私ならギャルを体目的で助けたはずだけど、この頃の私は、まあ自分がレズつて自覚はあつたけど、そこまで性欲一本で生きてなかつた。だから、残念ながら目の前のギャルには何一つ魅力を感じなかつたし、助けるメリツトもなかつた。

なので、

(ぐ)愁傷様

私は助け船を出さず、その場を後にする。

その際、誰かが私を見ていた気がするが、そこまで神経質に気にする必要もないので無視することにした。

ただ、途中クスリを捨て忘れてしまい、結局ブーツは家にお持ち帰りする形になってしまった。

翌日、事件当日。

私はクスリを制服のポケットに隠し持って学校に顔を出した。

一晩経って、ただ捨てるのは勿体ないと気づいたのだ。勿論、自分で消費する気は毛頭ない。しかし、例えばこのブーツが誰かの机や鞆から発見されれば、きっと大問題に発展するだろう。特にいまは受験シーズン。この時期に前科がつく事が何を意味するかは想像に難しくない。それを、いけ好かない優等生、特に過去に梓を虐めたり陰口叩いた前科持ちをターゲットに仕込んでやろうと思ったのだ。

「おはよう、沙樹ちゃん」

教室に入り、とりあえず鞆を机に置いた所、先に登校してた梓が私の席の前まで歩み寄ってきた。

「ん、おはよ」

ぶつきらぼうに私は挨拶を返す。梓は前の席の椅子を借りて座り、

「昨日はごめんね。ご飯食べれた？」

「抜いた」

私は正直にいった。勿論、夕食の話で、昨日の晩から胃袋に食べ物を入れてないという意味だ。

「あ」

途端、視線を落とす梓。

「ごめんね」

「別に。でもまあ、あの様子だともう二度と家に行くの無理っぽいね」

元々私は幼い頃よく梓の家に放置子M I S S I O N 6 参照に出され、私自身も梓と仲良くなったのを利用して徳光家に寄生してきた。だから梓の小母さんは私をひどく嫌っている。

梓曰く小母さんは、今まで虐められる梓を私が助けた一連が全て、私が裏で虐めっ子と手を組んで起こしたマッチポンプと思ってるらしい。勿論、私はそんな事してないけど、小母さんからすれば正否は関係ないのだ。私が梓の平和を保つヒーローになる事自体が、もはや私が梓を人質にとってる事とイコールで繋がってるみたいだから。

じゃあ、何故今回、飯をたかろうとした私を小母さんが追い出したのか。

私は、9月から年始頃まで行方不明になっていた。

その内容は、ある日ファイル・ハンターズによるバス爆破事件に巻き込まれ、ファイルを使って脱出した所を、ファイル・カードの回収のために殺され、何の因果か地縛神の眷属に選ばれて動く死者リビングデッドになりかけた。そこを、田村崎研究施設に回収され数ヶ月掛けて半機人の体で蘇生され、日常に戻されていまに至る。

だから私は、自分が本当に鳥乃 沙樹である自信もないし、少なくとも人間ではない。自分が消えれば梓が悲しんでくれるのを知っているから、泣かせない為に生きている。それ以外に自分の存在に意味を見出せないから、梓に手をあげない以外は完全に自暴自棄になっていた。

結果、元々問題生徒だった所ここにきて余計に喧嘩に粗暴な態度、万引きやスリ等素行が悪化したので、ついに小母さんも危険を承知で私と梓を引き剥がそうとしたのだろう。または私が数か月間いなくても梓が無事だったのも影響してるのかもしれない。

「おはようございます。あずちゃん、沙樹さん」

ここで、私と梓は横から生徒に声をかけられた。

見ると、立っていたのは、間違いない過去一度も染めた事ないだろう黒髪をヘアゴムでふたつ結びにした、真面目で明るい雰囲気の子生徒。

梓は笑顔で、

「おはよう、りんちゃん」

対し私は席を立ち、

「じゃ、面倒なのがきた所で私は退散するわ」

と、梓にいった。直後、女子生徒は私の足が向く先に回り込んで、「待ってください。私、沙樹さんに用事があるのですけど」

「私は用事ないから。じゃ」

私は、半ば遠慮なく女子生徒を突き放して道を開け、教室を後にした。

この当時、校内で私に積極的に話しかけてくる物好きは三人だけだった。

ひとりはず、続けて担任の島津 鳳火先生、そして最後の三人目が、先ほど私に話しかけてきた赤司^{あかし} りんである。

りんは、俗にいう私たちの学年で委員長に類する生徒で、小学部の頃からクラスと一緒にいる度、何かと私に世話を焼いてくる存在だった。それは素行が悪くなりすぎて梓と先生以外ともに接触してこなくなつた中でも変わらず、さっきのように粗暴に扱われ一度か二度肩や腰を打つたこともあるのに未だ避けようとしなない。私が人間だった頃は、煩い煩い思いながらも学年が上がってクラスが別になると、どこか物足りなさを覚えるような、一周回って悪友のひとりみために捉えていたが、いまは梓以外が敵にしか見えなくなっていたため、りんの存在は目障り以外の何物でもなかった。

いや、本当はもつと別の感情を彼女に覚えていたのだが、この時は自覚してなかったのだ。

(登校早々りに絡まれるなんてついてないわ)

何かで憂さ晴らしできないか考えながら廊下を歩いていると、ふと私は空き教室に人の気配がするのに気づいた。

こつそり覗いてみると、男女混合の不良が誰かを囲んで虐めてる現場だった為、

「あ、憂さ晴らし発見」

言いながら現場に乱入。数分後、教室には股間を蹴られ蹲る男子生徒と、私に殴られた拳身ぐるみ全て窓の外に投棄された女子生徒が各1〜2名ずつ転がっていた。虐められていた生徒は宇佐美^{うさみ} 柑奈^{かんな}で、途中不良をボコリながら私が「さっさと逃げろ」と指示した為、すでにこの場にはいない。

教室を出ると、ちょうど当時イケメン先生で話題の吉月^{よしづき} 広樹先生^{ひろき}が、鱒川^{ますがわ} 妙子^{たえこ}と一緒に歩いていた。全てを知った後だと、正にこの時早朝の奴隷調教を終えた後だったのかもしれないが、この頃の私は何も知らなかったので、

「あ、吉月先生。この空き教室に宇佐美さん虐めてた不良を転がした

から、後処理お願いします」

なんて言つてこの場を後にした。その際、妙子が私に助けを求める目で見てた気がしたけど、残念ながら私はスルーしてしまった。勿論、数年後の私は思い出す度これを後悔している。

それから、他のクラスを幾つか見て回りクラスを忍ばせるターゲットを探したが、めぼしい相手がいなかった。私は諦めて屋上で授業をフケることにした。

人気の無い屋上。

私は、影になつてる場所を適当に探し、壁にもたれて休んでた所数分。昨日の晩から水以外を口にしてないのを思い出し、

「お腹、すいた」

「菓子パンでしたらありますけど?」

「頂戴」

横から差し出されたあんパンを奪うように取り、袋から出して数口頬張つた辺りで、

「ん?」

何故、隣に人がいるのだろう。違和感に襲われた私は隣に視線を向けると、

「実は私も朝ごはんがまだで、教室でこっそり食べる不良行為を働かなくてはいけない所でしたので、助かりました」

なんて私と同じあんパンをぱくつくりんの姿が見えた。

「ところで、いつから居たのよ」

私が訊ねると、

「沙樹さんが来る前ですよ? 遅かれ早かれ屋上に来ると思ってたから、沙樹さんが喧嘩されてる間に先回りしました」

「ここ、立ち入り禁止区域なんだけど。いいの優等生の委員長さん?」

「別に構いませんよ」

りんは当然のようにさらっといった。

「あのさ」

私は白い目でいった。

「いまの時期に不良行為を働けば、りんなら入学取り消しはないでしょうけど、それでも高校の地位に支障出るでしょ？」

基本的に学園の生徒は優先して高等部に在籍できるとはいえ、極端に成績や素行が悪かったりすると、若干ながらエスカレーター式から外される危険性はある。この時期に不良行為を働くことは自殺行為にも等しいのだ。

なのに、この優等生は、

「お節介は趣味ですから。趣味を優先しただけです」

って。悪びれる様子なくのたまったのだ。

趣味はお節介。

それは、彼女の口癖だった。

先ほど彼女は、私がどれだけ素行悪くしても世話を焼いてくることだったが、それは別に私が特別なわけじゃない。りんは彼女の目に留まる全員に対して、相談に乗ったり、揉め事の仲裁を買って出るなど世話を焼き続ける。その結果、自然と私と接する機会が多かっただけのことなのだ。

でもって、感謝されたり理由を求められると毎度「これは趣味だから」というのである。

そのうえ、

「自分の立場顧みず趣味でお節介とか、どこの聖人君子よ」

と、称すれば、

「やめてください、聖人扱いは嫌いなんです」

なんて返事がくるまでがデフォルトだった。

「なら、いつそ大馬鹿者？」

「そう言ってくれたほうが、私には褒め言葉ですわ」

冗談で言ったのに、何故かりんは嬉しそう。

「相変わらず、わけ分からないわ」

「何がですか？」

きよとんとした顔で訊ねるりん。

私は呆れて、

「謙遜はいつて意味ある相手と意味ない相手で分けたほうがいいって

話

「別に謙遜で言ってるわけじゃないんですけどね」

「なんて言いながら慎ましく善人アピールして、そんなに良い人って見られたいの？」

「いえ、別に全然です」

「だからそういう所よ。誰これ構わず人の顔色伺って八方美人に聖人君子目指して」

「あ、また聖人扱いした」

りんはそこには強く反応し、

「さつきも嫌いだって言いましたよね？ それに本当に八方美人な聖人目指してたら、今頃真面目に授業してますよ。趣味に生きてるだけなんです、私は。たまたまそれがお節介とか世話焼きだっただけで、好きに生きてるだけなのに、優等生だとか聖人だとか真面目に見られてるだけなんです」

「まず、世話を焼くのが趣味って時点で理解不能よ」

言い捨てながら、私は立ち上がった。

「沙樹さん？ どこに行くのですか？」

訊ねるりに、

「早退。今日はもうフケるわ」

どっかの優等生様の相手をして疲れたしね。クスリを忍ばせる件も、もういいや。

「待ってください。用事があるって言いましたよね？」

そういえば、教室でそんな事あった気がする。

「だから私にはないって」

私はそのまま背を向けて屋上を去ろうとすると、

「昨日、沙樹さんドラッグを買ってましたよね？」

りんは言ったのだった。

「っ」

驚き、私は振り返る。

「見ましたよ。昨日、街で売人から袋を受け取るのを」

「見間違いじゃないの？」

「残念ですけど、私が沙樹さんを見間違えるはずがありません」

妙な自信をもって言い切るりん。直後、私はチクリと胸が痛んだ。彼女にさえ私がクスリをやってる人間だと思われたことが、そして正解とはいえ昨日クスリを受け取った人間を疑いなく私と認識してる事がショックだったのだ。

「沙樹さん、ドラッグだけはやめてください。あれだけは駄目ですよ。ドラッグがどれだけ危険か知ってるのですか？」

「嫌い」

忌々しさのあまり私は眩く。だけど、りんは更にボルテージを上げ、

「嫌いとは思いますが。でも、あのクスリだけは、たとえ一回でも使ったら駄目なものなんです。お願いします」

「だから嫌いって」

振り返り様に、私はフィールで拳圧を飛ばし、直接触れずに殴りつけた。

「っ」

突き飛ばされ、宙を舞うりん。

しかし直後、彼女は衝撃を殺すように自ら床を転がり、私から距離を取りながら素早く起き上がったのだ。

一応、りんは人並の運動神経は持っているが、それを超える能力は持っていないはず。なのに、先ほどの彼女は私の知る身体能力を遥かに超える身のこなしをしていた。

りんは驚きながらいった。

「その力、フィール!？」

その言葉に、私も驚き、

「知ってるの? なんでりんが、それを」
すると、

「それは私の台詞でもありませんけど。ともあれ、フィールが使えるのなら、デュエルしかなさそうですね」

りんの言葉に私は、

(は? なんでここでデュエル脳?)

と思った。

当時、私はすでに鈴音さん等から一応のファイルの概要を聞いていたが、ファイルを持つ者同士が相対したときの定石やあるあるをまだ体感してなかったのだ。

だから、

「知ってると思いますけど、デュエルで負けたほうはファイルを一時全損します。お互い折れる気がないようですから、下手に交渉を長引かせるよりはスマートだと思いませんか？」

という、りんの提案も、当時の私にはただ「リアルファイトはしたくない」という意志表示にしか感じなかった。

だけど、私はあえて交渉に乗った。

「なるほどね。いいわ」

片方のファイルがなくなってしまうえば、勝者は割とやりたい放題になってしまう。ここで、積年言われ続けた小言の分、叩きのめしてやるのもいいかもしれない。

何故だか私は、先ほどから無性に腹が立っていたのだ。

「交渉成立ですね」

私とりんは、それぞれポケットからデュエルディスクを装着し、展開。

『デュエル！』

私たちは叫んだ。

沙樹

LP4000

手札4

□ □ □ □

□ □ □ □

□ □ □ □

□ □ □ □

□ □ □ □

りん

LP4000

手札4

「じゃ、先攻は貰うわ」

私はデュエルディスクの結果に従って宣言しながら最初の手札を引き、

「手札から《幻獣機メガラプター》を召喚。さらにカードを1枚セットしてターン終了」

と、手早く最初のターンを終える。

沙樹

LP4000

手札2

□「《セットカード》」□

□《幻獣機メガラプター》□□

□—□

□□□

□□□

りん

LP4000

手札4

「私のターンですね。ドローします」

りんはカードを引く。

「こちらにも、まずは様子見から入ります。手札から《ブンボーグ003》を通常召喚。このカードの召喚に成功した時、デッキから003以外のブンボーグを特殊召喚します。私はデッキから《ブンボーグ001》を特殊召喚」

出現したのは、まさしく彼女らしい文房具を模した小型の機械族モンスター。

「そして、レベル3《ブンボーグ003》に、レベル1《ブンボーグ001》をチューニング。フラット展開完了。エネルギー重点完了。飛行甲板、発進！シンクロ召喚。いきます、レベル4、シンクロチュー

ナー《リアクターズ・フラット》！」

出現したのは小型の空母だった。守備表示で召喚されたが、その守備力も2000とまざまざ程度。

りんは、そんなモンスターを出しただけで、

「ターン終了」

と、宣言したのだ。

「なら」

私は伏せカードを表向きにする。

「永続罫《空中補給》を発動。このカードは」

言いかけた所、

「《リアクターズ・フラット》のモンスター効果」

さすがにシンクロモンスターを出して、攻撃もせずただ終了ではないと思ったが、りんはここで動いてきた。

「このカードは1ターンに1度、手札・デッキ・墓地から通常召喚可能なりアクターモンスターを1体選んで、フィールドに表側表示で存在するものとして効果を適用できます。私は《トラップ・リアクター・RR》の効果を活用。この効果は、発動した罫カードを破壊し、800ダメージを与えます」

りんの空母から機械族モンスターが射出され、上空からの爆撃で《空中補給》が破壊される。けど、私は無視して、

「《空中補給》は1ターンに1度、幻獣機トークンを1体特殊召喚するわ。守備表示で特殊召喚」

と、いつて特殊召喚の宣言。しかし、起動しない。

「え？」

何がどうなってるの？ 私は困惑し、すぐりんの不正を疑って視線を向けると、

「ルール上、基本的に永続罫カードはフィールドに存在している場合にのみ効果を適用します。ですから、通常罫と違って効果が処理される時にフィールドに存在しなければいけないので、俗にいう最強サイクロン戦術が通用するんですよ？」

「ちっ」

私は舌打ちした。そういえば、確かにそんなルールがあつた気がする。

沙樹 LP4000↓3200

で、おまけに爆撃によるダメージが私のライフを削る。すると、

「さらに、《リアクターズ・フラット》の効果は続いています。適用したリアクターモンスターの効果で相手にダメージを与えた場合、その選んだモンスターを特殊召喚します。私は《トラップ・リアクター・RR》を守備表示で特殊召喚します」

そのままトラップ・リアクターは一時的にフィールドに存在する扱いから、実際に特殊召喚されて、りんの場に留まる。

「改めてターンを終了します」

りんは言った。

沙樹

LP3200

手札2

□□□

「《幻獣機メガラプター》」「《幻獣機トークン》」「《幻獣機トークン》」

「《リアクターズ・フラット(りん)》——□

□「《トラップ・リアクター・RR》」□

□□□

りん

LP4000

手札4

「私のターン、ドロー」

私はカードを1枚引き、

「まさか、りんのガチデッキがとんだ害悪デッキとは思わなかったわ」
お節介が趣味を自称するだけあって、りんのデッキはどうせ接待デッキって印象が強かったのだ。しかし、蓋を開けてみればリアクターというモンスターを使って私のカードをカウンターで破壊しながらじわじわバーン効果で追い詰めるデッキ。恐らく、さつき出されたカードが“トラップ”・リアクターな所から、十中八九マジックと

かモンスターのリアクターもあるに違いない。まさか、こんな性質悪い事してくるなんて。

しかも、私の幻獣機とりのリアクターはどちらも航空機モンスターを扱ったテーマって点で共通点がある。そんな事実が余計に私を苛つかせた。

さて、ドローしたカードは何だろうか。私は確認し、

(よし)

って、なった。

「手札から《強欲な解体》を発動。このカードは手札のレベル2以下モンスターを捨ててカードを2枚ドロウする。私は《幻獣機オライオン》を墓地に送って2枚ドロウ」

私は早速引いた手札交換の魔法カードを使用。りの反応を確認したが、《リアクターズ・フラット》を使ってくる気配はない。私はそのままカードを2枚引き、

「さらに《幻獣機オライオン》の効果。このカードが墓地に送られたことで私の場に幻獣機トークンを発生。さらに《幻獣機メガラプター》は、私の場にトークンが特殊召喚された時、さらに幻獣機トークンを1体特殊召喚するわ」

と、計2体の幻獣機を模ったホログラムのデコイを場に展開。それでも、りんは《リアクターズ・フラット》を使ってこない。

《空中補給》を破壊されたせいでトークンを展開する予定が狂いかけたが、結果的には手札のオライオンを墓地に送ることが出来たことで予定通りの流れに進んだ。

「《幻獣機メガラプター》と幻獣機トークン2体をリンクマーカーにセット。召喚条件は機械族モンスター2体以上。リンク召喚。リンク3 《幻獣機アウローラドン》」

私は場の3体を使ってリンクモンスターを召喚。

「リンク召喚に成功した《幻獣機アウローラドン》のモンスター効果。私の場に幻獣機トークンを3体特殊召喚」

「《リアクターズ・フラット》の効果発動」

ここで、りんは動いた。

「私はデツキの《サモン・リアクター・A I》の効果を適用。モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、800ダメージを与えます」

沙樹 LP3200↓2400

私のライフが再び削れ、

「そして、ダメージを与えたことで《サモン・リアクター・A I》を特殊召喚」

新たなリアクターが射出される。ただし、このモンスターにはカードを破壊する効果はついてないらしい。

「《幻獣機アウローラドン》のモンスター効果。トークンを2体リリースしてデツキの幻獣機を特殊召喚。私は《幻獣機デスヴァルチャー》を特殊召喚」

「《サモン・リアクター・A I》の効果。1ターンに1度、モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、800ダメージを与えます」
「っ」

沙樹 LP2400↓1600

さらに削られる私のライフ。

しかも、ライフ1600ってことは、あと2回800バーンを受けたら私の負けになってしまう。気づくと、私はもうそこまで追い詰められていた。

一応、私の手札には効果ダメージを幻獣機の特異召喚に変換する《幻獣機ピーバー》が潜んではいる。加えて、このカードで《リアクターズ・フラット》の効果ダメージを止めれば、そのままサモン・リアクターの展開も封じることができた。しかし、このカードは性質上フィールドに空気がないと効力を発揮できず、使うとフィールドを幻獣機トークンで埋めてしまう。

私は見事アウローラドンでフィールドを埋めた所を《リアクターズ・フラット》に狙われ、この後予定していたモンスターの通常召喚に必要なスペースを確保しないといけない所を、サモン・リアクターの更なるバーンで狙われたのだ。全く、狙ってたのか偶然なのかは分からないけど苛々する。

「私は手札からチューナーモンスター《幻獣機ウォーブラン》を通常召

喚。そして現在、《幻獣機デスヴァルチャー》は自身の効果でレベルが3から6になつてゐる。私はレベル6デスヴァルチャーに、レベル1ウォーブランをチューニング」

ウォーブランがひとつの光の円に変わると、中を潜ったデスヴァルチャーが6つの光に変わり、混ざり合う。そっちが地味バーン戦術でくるなら、こっちはそんな生易しいレベルじゃないバーンダメージで焼いてやるわ。

「シンクロ召喚。レベル7《ダーク・ダイブ・ボンバー》」

私は、ここで自分を一度殺した男のひとり参照が持ってたカードをフィールドに出した。

直後。

「えっ」

突然、りんの目の色が変わり、

「そのカード、どこで」

「ん？」

「沙樹さん。どうして、あなたがこのカードを持ってるんですか？」

元々の持ち主は、いまどこに？」

「……あ？」

私の口から、人生で一回しかどうにか程ドスの利いた声が漏れる。

「知らないわよ。あんな金髪ヤンキーのことなんて」

「やっぱり知ってるんじゃないですか。行方不明なんです。教えてください」

必死に懇願する彼女に私は、

「さてね。今頃お星さまにでもなつてるんじゃないの？ 無事昇れたらだけど」

私は口裏に強い憎悪を込めていった。

彼らは私の人生を狂わせた張本人なのだから。彼らさえいなければ、今頃私は死を経験なんてしてないし、半機人にもなつてないのだ。ヤンキーとワカメは死の際、肉体ごと私の地縛神の生贄に取り込まれた。だから、もし死後の世界というものがあり、彼の魂が未だその何処にも行けず苦しんでるのだとしたら、私にとっては正に「ざまあみ

ろ」だったのだ。

しかし。

「殺したん、ですか？」

顔を青ざめ、りんはいった。

「殺したんですか？ 沙樹さん、あなたが殺したっていうんですか？」

「だから？」

すると、

「ッ」

りんは私を睨みつけたのだ。まるで大切な人の仇をみるような強い憎悪を露にして、次第にその瞼から涙を滲ませて、

「許さない」

とまで言い出したのだ。

「なによ」

私は虚勢を張って睨み返す。

「結局、お節介が趣味とか何だ言いながら、人が本当に助けを求める所はきつちり足蹴にするんじゃない」

気づくと、私は彼女の眼差しに強いショックを受けていた。

りに、ここまで強い敵意や憎悪を向けられたのは初めてだった。それだけでも意味不明にショックを受けてるのに、原因が金髪ヤンキーである事実が心の激痛を加速させる。

私はいった。

「この、人殺しが」

「人殺しはあなたでしよう」

「あいつの味方ならりんも人殺しも同然よ」

叫びながら、私はやっと、りに向けていた真の感情に気づいた。私は、りんの事を数少ない味方だと思っていたのだ。

勿論りんのお節介は私だけに向けるものではない。目に見える全てに対し世話を焼き手を差し伸べる。到底、私の理解できる行動ではない。でも、誰かではなく全てにお節介焼く機械みたいな存在だからこそ、私のひねくれた感情でさえ一周回って信頼できたのだ。

もし、周り全てが私の敵でも、彼女なら助けを求めれば応えてくれ

るはずだ。伸ばした手を振り払わず、いつでも力になってくれる馬鹿はきつと彼女の他にいない。

私にとって彼女は、私が本当にどうしようもない時に切る最後のジョーカーだったのだ。

しかし、現実のジョーカーは私より私を殺そうとした敵を選んだ。私は裏切られたのである。

「くっ」

私は、一度歯を食いしばってから、

「《幻獣機ウォーブラン》がシンクロ素材になったことで、私の場に幻獣機トークンを特殊召喚。さらに幻獣機トークンをリリースして墓地の《幻獣機デスヴァルチャー》のモンスター効果。このカードを墓地から特殊召喚。さらにデスヴァルチャーはこの方法で特殊召喚する場合にレベルを1つ上げることができる。私はデスヴァルチャーのレベルを幻獣機共通効果もあってレベル3から7に変更」

実は。

現在私とりんは、互いに自分が金髪ヤンキーとの間に何があったかを伝えあつてはいなかった。だから、多分にお互い、自分の背景を相手が知らない事に気づかず、相手が知ってるつもりで言葉をぶつけあい、誤解しあい、失望しあい、憎しみあっていた。

そんな状態でデュエルを続けた結末を、2年後の私は深く深く後悔することになる。

「《ダーク・ダイブ・ボンバー》のモンスター効果。メインフェイズ1に1度、私のモンスターを1体をリリースし、そのレベル×200ダメージを相手に与える。私がリリースするのは《幻獣機デスヴァルチャー》。レベル7×200ポイントのダメージを喰らえ」

直後、デスヴァルチャーはその姿を7つの爆弾に変え《ダーク・ダイブ・ボンバー》に搭載される。

《ダーク・ダイブ・ボンバー》は一度大きく上空へと舞い上がると、一気に急降下しながらりんに向けて爆弾を投下。

「きゃっ」

怒りと一緒に込めたフィールドの攻撃は、彼女のいた場所に大きな爆

炎を巻き上げる。あまりの火力に攻撃した私も腕で顔を隠し、目を細めて爆風と炎熱に耐えた。

りん LP4000↓2600

程なくして煙が消える。中から顔を出したりんは、制服が焼け焦げて半裸になり、膝をつき、煙に喉をやられ激しく咳き込んでいた。

が、その体は記憶よりずっと細く華奢な肉付きをしており、火傷こそ防いだ肌は綺麗なままだったが、私はふと違和感を覚える。

彼女はこんなガリガリな体型だったのだろうか。

「う、あ」

唇を涎で濡らし、苦しそうに顔をあげるりん。汗と涙で化粧が剥がれ落ち、隠していた目の隈が顔を出す。

「りんも、案外平気で校則違反するのね」

とは勿論化粧を指していった言葉だ。

りんは、

「あつ」

と反応し、すぐに顔を隠す。

「あなたが、ーを、殺すから」

りんが呟いたが、一部声がかすれて聞こえなかった。ただ、りんが金髪ヤンキーのために目に隈を作り、痩せ細るに至ったのだと気づくには十分な内容で、

「このっ」

私は、怒りのままに手札を握ってないほうの手で握り拳を作る。

「そんなに、あいつに会いたいならすぐ会わせてやるわ。カードをセツトしてバトルフェイズ！ 《ダーク・ダイブ・ボンバー》で《サモン・リアクター・AI》に攻撃」

私は攻撃を宣言するも、

「バトルフェイズ開始時。手札から速攻魔法 《リアクトライ・サモン》を発動。このカードは私の場にリアクターが3種類以上もしくは《ジャイアント・ボマー・エアレイド》が存在する場合に相手ターンでも手札から発動可能です」

りんはいった。

「このカードは、私の場にサモン・トラップ・マジックのリアクターがそれぞれ1体以上存在するように、手札・デッキ・墓地からリアクターを1体特殊召喚します。私はデッキから《マジック・リアクター・AID》を特殊召喚」

これで、カードの効果通り、りんの場合にサモン・トラップ・マジックの3体のリアクターが揃う。

「さらに、《リアクターズ・フラット》の効果。私は相手ターンにこのカードを素材としたシンクロ召喚を行います」

「相手ターンでシンクロ？」

「私はレベル3 《マジック・リアクター・AID》にレベル4 《リアクターズ・フラット》をチューニング！」

《リアクターズ・フラット》が4つの円に変わると、マジック・リアクターが中を潜り3つの光となって混ざり合う。

「夜間襲撃、準備完了。爆撃機発進準備3、2、1、——作戦開始！」

シンクロ召喚！ 舞い上がれ、レベル7 《ダーク・ダイブ・ボンバー》！

口上と共にりんの場に出現したのは、いま私も場に出している《ダーク・ダイブ・ボンバー》だった。しかも、私は直感で察する。あのカードは、いま私が召喚している《ダーク・ダイブ・ボンバー》を複製コピーしたカードだって。

「進行がフェイズ開始時まで巻き戻ったことで攻撃の順番を変更。《幻獣機アウローラドン》でサモン・リアクターに攻撃」

「その《サモン・リアクター・AI》の効果が発動。サモン・リアクターが効果を使用したターンのバトルフェイズ時、相手モンスターへの攻撃を1度だけ無効にします」

「ちっ」

サモン・リアクターを破壊したあと、《ダーク・ダイブ・ボンバー》同士をぶつけて破壊しようと思ったのだけど。

「なら、改めて《ダーク・ダイブ・ボンバー》でサモン・リアクターを攻撃」

私は執拗にサモン・リアクターに攻撃宣言。

確かに《ダーク・ダイブ・ボンバー》も凶悪なバーン効果を持つてるものの、現状先に破壊しなければいけないのは、サモン・リアクターだと思ったからだ。

私の爆撃機の攻撃を浴び、サモン・リアクターは今度こそ爆破四散。

「ターン終了」

私はいった。

沙樹

LP1600

手札1

□□「《セットカード》」

□□「《幻獣機トークン》」□□「《ダーク・ダイブ・ボンバー》」

「《ダーク・ダイブ・ボンバー（りん）》——「《幻獣機アウローラドン

（沙樹）」

□□「《トラップ・リアクター・RR》」□□

□□□□

りん

LP2600

手札3

「私のターン、ドローします」

りんはカードを1枚引き、

「これで終わりにします。《ブンボーグ003》を召喚！ 効果でレベル9《ブンボーグ009》をデッキから特殊召喚して、《ダーク・ダイブ・ボンバー》で射出！」

「なっ」

再び、りんの場に小さな文房具を模した機械族モンスターが現れるも、デッキから何さらつとレベル9なんて出してバーンダメージに変換してるのよ、こいつ。

あのバーン効果はレベル×200の数値なので、ダメージは1800。こんなもの喰らったら一溜まりもない。

「手札から《幻獣機ピーバー》を墓地に送って効果発動。このターン、私が効果ダメージを受ける場合、代わりに幻獣機トークンを特殊召喚

できる」

りんの《ダーク・ダイブ・ボンバー》が落した爆弾が途中で光に包まれ、9体で1組の小型のデコイに姿を変える。

「それなら。座標確認、私のサーキット。展開！」

りんの前方にリンクマーカールが出現すると、

「召喚条件は機械族モンスター3体。私は《ブンボグ003》《ダーク・ダイブ・ボンバー》《トラップ・リアクター・RR》の3体をリンクマーカールにセット。サーキットコンバイン！ リンク召喚！ いきます、リンク3 リアクター・フォートレス《反応空母ハーミーズ》！」

あの《ダーク・ダイブ・ボンバー》をリリースまでして現れたのは、一隻のヘリ空母の姿。

「そしてハーミーズのモンスター効果！ 自身をリリースして、墓地から《サモン・リアクター・AI》《トラップ・リアクター・RR》《マジック・リアクター・AID》を1体ずつ特殊召喚します。さらに、この3体を墓地に送り《サモン・リアクター・AI》の効果。手札・デッキ・墓地から《ジャイアント・ボマー・エアレイド》1体を特殊召喚します」

確か、そのカードは《リアクトライ・サモン》の効果の中で名前だけ出てきたカード。

3体のリアクターが合体するようにして出現したのは、1機の半人型爆撃機。その攻守は3000/2500で、

「このモンスターは通常召喚できず、《サモン・リアクター・AI》の効果でのみ特殊召喚できます」

と、りんが言った所から、間違いなくりんの切り札。むしろ、今まで使ってきたりんのモンスターを考えると、デッキ自体がこのカードを出す事を中心に組まれてる可能性まである。

「《ジャイアント・ボマー・エアレイド》のモンスター効果。1ターンに1度、手札を1枚捨てて相手モンスターを1体破壊します。私は手札の《ブラック・ボンバー》を捨てて《ダーク・ダイブ・ボンバー》を破壊」

直後、りんのモンスターから機銃が乱射され、蜂の巣にされた《ダー

ク・ダイブ・ボンバー』が破壊される。

「カードをセット。《ジャイアント・ボマー・エアレイド》でアウロラドンを戦闘破壊します」

さらにミサイルが3発発射され、幻獣機の共通効果を持たない《幻獣機アウロラドン》は破壊され、

沙樹 LP1600→700

ついに、リアクターの効果が1発でも発動すれば終わってしまうラIFに陥ってしまう。

「ターンを終了します」

りんはいった。

沙樹

LP700

手札0

□□「《セットカード》」

□「《幻獣機トークン》」「《幻獣機トークン》」□

□ー□

□□「《ジャイアント・ボマー・エアレイド》」

□□「《セットカード》」□

りん

LP2600

手札1

私のターンが回ってきたわけだけど。

(まさか、りんにもここまで追い詰められるなんて)

私の中には幻獣機トークンが2体と、伏せカード。しかし、このカードは単体で何か別のカードを対処するような効果は持ってない。

りんの場合には伏せカードが1枚と、攻撃力3000の《ジャイアント・ボマー・エアレイド》。いままでのりんの傾向から、こいつも何かしらバーン効果を持つてるはず。加えてこのターンを乗り切ったとしても、バーン主体のデッキ相手に残りLP700で次があると考えるのはさすがに甘い期待もいい所だろう。

正直いって現状は絶体絶命だった。

(負ける?)

そんな言葉が、私の脳裏を過った。

(嫌だ)

また、奴らに殺されるなんて。しかも相手は、人間不信の私に近づき、心を開きかけるまで待つてから正体を現した相手だ。そんな奴に負けたくないし殺されたくない。

(読み込め。何を引けば突破できる?)

このドロローに残りのファイルをほぼ全部ぶち込む覚悟はある。ただ、どのカードを引き当てるともりでドロローすればいいのかが分からなかった。

そんな時だった。

『暗キ力』

突如、私の奥深くから声が聞こえた気がしたのだ。当然、それが幻聴でなければ地縛神によるものだって確信はしてたけど。

「暗キ力」

私は呟く。すると、私のファイルが指先一か所に集まり、闇色に輝きだしたのだ。

直後、デュエルディスクに登録していたスキルが別の名称に書き換わり、頭の中にその使い方が刻み込まれる。

私は刻まれた情報に引き寄せられるように、叫んだ。

「暗キ力はドロローカードをも闇に染める! ダークドロロー!」

闇色に輝く指先でカードを引き抜く。すると、私の目の前でドロローカードが闇に染まり、別のカードに書き換わった。

それ自体は丁度デツキから外してただけの市販されてるカードだったのだけど、同じくして私のEXデツキが光り輝き、EXデツキの枚数制限を超え、かつデュエルディスクがエラーを起こすことなく、たったいま誕生した天然のファイル・カードが1枚そこに加えられていた。

ドロローした指先の闇が消えると同時に。私のファイル残量は一度ゼロになる。しかし、同時に入手したファイル・カードによって即座に私のファイルは回復。

「沙樹さん、いまのドロローは？ それに、嘘。新しいフィール・カードがこんな時に」

激しく動揺するりんを、私は一度冷たい目で見てから。

「《幻獣機レイステイルス》を召喚。さらに、フィールドのトークンをリリースし墓地の《幻獣機デスヴァルチャー》を特殊召喚」

私の場に1体のトークンと2体の幻獣機が揃う。ここで私は伏せカードを表向きにし、

「リバースカードオープン！ 永続罨《マーシャリング・フィールド》の効果を発動。2体のレベルを9に変更」

「まさか、ランク9を？」

反応するりんは、

「まだよ」

私はいった。

「《幻獣機レイステイルス》のモンスター効果。フィールドのトークン1体をリリースし、魔法・罨カード1枚を破壊」

私は宣言し、りんの伏せカードを破壊。その直前、

「罨カード《深すぎた墓穴》を発動。次の私のスタンバイフェイズ時、沙樹さんの墓地に眠る《ダーク・ダイブ・ボンバー》を私の場に蘇生します」

と、その伏せカードを発動したものの、もう遅い。次のターンなんて来ないんだから。

「フィールドにトークンは消えたものの、《マーシャリング・フィールド》の効果は継続中。2体のレベルは9のまま。私はレベル9の《幻獣機レイステイルス》と《幻獣機デスヴァルチャー》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

私たちの上空に銀河の渦が出現すると、2体の幻獣機は霊魂となつて中に取り込まれる。

私は、この時はじめて手に入れた天然のフィール・カードを場に出す。

「エクシーズ召喚！ ランク9 《幻子力空母エンタープラスニル》！
それは、巨大な空母のモンスターだった。

しかし、ここでりんは動く。

「でも、このモンスターは幻獣機ではありません。《ジャイアント・ボマー・エアレイド》のモンスター効果。1ターンに1度、この効果は、相手がモンスターの召喚・特殊召喚またはカードのセットを行った際に発動でき、そのカードを破壊し相手に800ダメージを与えます。これで今度こそ」

力強く宣言するりん。なるほど。いままでその効果を使わなかったのは、私がいくらモンスターを召喚しても、場にトークンが立っている以上破壊する機会がなかったのだ。対し、いまはトークンもいなければ、出したXモンスターは幻獣機でさえない。でも、

「《マーシャリング・フィールド》の効果発動」

私はいった。

「自分フィールドの機械族Xモンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを墓地に送る」

「あっ」

りんの動きが止まり、一瞬激しい動揺を見せる。しかし、彼女はまだ折れずに、

「ですけど、《ジャイアント・ボマー・エアレイド》の攻撃力は3000です。エンタープラズニルの攻撃力2900には」

と、吠えるりんを横目に、私はすぐさまX素材を1つ取り除く。

「オーバーレイ・ユニットを1つ使い《幻子力空母エンタープラズニル》の効果が発動。相手フィールドのカード1枚を選んで除外する！」

「除外!？」

驚くりん。

「私が除外するのは《ジャイアント・ボマー・エアレイド》」

直後、空母から何故か主砲のビームが放たれ、りんのモンスターが跡形もなく消滅。

「あ、あ」

絶望に染まるりんの顔。私は、吐き捨てるようにいった。

「《幻子力空母エンタープラズニル》で直接攻撃。死ねッ!!」

エンタープラズニルからフィールの籠った虹色の光が放たれ、りんの体はその光に飲み込まれた。

りん LP2600↓0

デュエルが終わり、ソリッドビジョンが消える中、モンスターの攻撃を直接浴びたりんは、直立し目を開けたまま意識を飛ばしていた。

《幻子力空母エンタープラズニル》は、1ターンに1度、手札・場・墓地・デッキの1番上からどれか1枚カードを除外させるとんでもない効果を持っている。そんなモンスターの攻撃をうけ、りんは一時的に意識を除外されてしまったのだろう。

やった私でも「多分」としか言えないけど。

「あ、いいこと思いついた」

私は、りんを意識があれば聞こえるようわざと声に出している、ポケットからあるものを取り出し、彼女の傍に歩み寄った。

それはドラッグだった。

私は気絶中のりんの腕をとり、注射器を使って薬物を注入。さらに使い終わったブツをりんの手に握らせた。

(これで、りん。あなたの人生も終わりね)

そうだ。せっかくだから教師を呼んでこよう。屋上に人がいるって。

これでりんは、気絶してればドラッグを握った状態で、起きていてもドラッグのキマった状態で教師に発見され、どちらにせよ大問題に発展するはずだ。

私は、心のどこかで泣きながら、だけど上機嫌を取り繕って屋上を後にしたのだった。



私の名前は鳥乃 沙樹（とりの さき）。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レスである。

——現在時刻、午後6：30。

土曜日。旅行当日。

夢の中で屋上の扉を潜ると同時に、私は自室のベッドで目を覚ました。

(夢、か)

トラウマ物の、嫌な夢を見てしまった。私はベッドから半身起こすと、

「わふ、サキ起きた?」

って声が。

「え?」

まだ寝ぼけてるせいで状況が分からず、何事かと声の方角を向くと、そこにはドアの傍で毛布に包まってるガルムの姿があり、

「サキ、おはよう」

と、屈託ない笑顔でいった。

そうだった。

昨晚、私は安眠を確保するために就寝中の警護をガルムに頼んだのだった。

「おはようガルム」

言いながら私は顔をそらす。夢の中に、助けられなかったあの子がいたからだ。

「どうしたの、サキ?」

ガルムが訊ねる。私はいった。

「夢を見たのよ。中学の頃の、実際にあつた夢」

「中学?」

「で、そこに妙子がいた」

「タエコが!」

反応し、食いつくガルム。

「サキ、どんな夢だったの? タエコは何かいってた?」

「ごめん。直接会話はしなかったわ」

私は言いながらガルムの頭を撫でる。

「わふふふ」

と、笑顔を向けるガルム。中身は違うのだけど、その体は妙子。笑顔からして妙子と全然違うのに、私はガルム越しに生前の妙子を見てしまう。

そして、失った繋がりで元クラスメイトの顔までも。

夢の舞台だったあの日を最後に、りんは学校に通わなくなった。

先生は家庭の事情と言ってたけど、間違いなく原因は私がりんに使ったドラッグである。あの日、学校に数台のパトカーが停まっていたから。

りんが自主的に登校を避けたのか学校が彼女を拒否したのかは知らない。ただ、りんは中等部こそ陽光学園で卒業した扱いにはなったけど、高等部に彼女の席はなく、家庭の事情で引越したと在校生には説明されている。実際、彼女は住所を変更してしまい、いま同級生でりんの連絡先を知る者は誰もいない。

いま思えば、金髪ヤンキーが私を殺そうとしてたことを、りんは知らなかった可能性が高い。そもそも、ヤンキーの悪事自体をりんが認知してなかったまでであったのだ。しかし、全ては推測でしかない。いま私に彼女と逢う手段はないし、仮にあっても、最早彼女のこれからの人生に、私が関わっていい権利は、きつとないのだ。

妙子、そしてりん。

謝って済むなら、たとえ肉焦がし骨焼く鉄板の上でも喜んで土下座するのに。ひとりはずでにこの世にいないく、ひとりはきつと私が自害しようとも解決はしないはず。

私はあの日、友人を二人も失ったのだ。

「ッ」

さらに、私は連鎖的に苦い思い出が脳裏を過る。

それはロコちゃんの依頼の末、牡蠣根^{MISSION。参照}を討伐したときの話だ。

あの時、牡蠣根は私に「過去に女を潰したことがあるな？」と訊き、「女をクスリと凌辱で使い潰す味を知った同類」と称してロコちゃんを追い込んだ。あの時、「違う」って言い返せなかった原因こそ、まさにりんとの一幕だったのである。

あの日、妙子のヘルプに手を伸ばしてれば、あの日、りんの人生を

ドラッグで潰そうとしなければ。いずれか片方でも誤ってなければ、ロコちゃんの手を血に染めることもなかったのだ。

「ガラム」

私は、訊いた。

「突然だけど、キスしていい？ 裸にひん剥いてOPA I揉んで抱きしめてレズックスしていい？」

無性に人肌が寂しかった。せめて目の前にある妙子の遺品だけは護りたくて、命の鼓動と温もりに感じたくて。

「わふ、いいよ」

ガラムは満面の笑みでいつてくれた。

「私にリアルファイトに勝ったらいいよ♪ キサラが、サキがキスしたいとか胸揉みたいとか、レズックスしたいと言ったらリアルファイトしてもいいって」

「ごめんやっぱなし」

すでに馬乗りになって、眼光ギラギラ両の拳でボコボコに殴ろうとするガラムに私は両腕をあげて降参したのだった。

MISSION 30―最後のジョーカー（前編）

私の名前は鳥乃とりの 沙樹さき。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「こんなのって、こんなのってないよ梓」

海岸の堤防に梓とふたりで座り、水平線を眺めながら私はいった。まだ昼間なのに黄昏てる私とは逆に、梓はにこにこ嬉しそうに、

「そうだね。これで安心して私も休めるよー」

土曜日。

私と梓は、予定通り無料招待券を利用して1泊2日の温泉旅行MISSION 28 参照に來ていた。

場所は県内の海沿いにあるミハマという所。これが夏なら水着姿の若い女性が海辺できゃつきゃうふふと賑わってそうなものだが、残念ながら今はシーズンオフ。都会にはない閑静な雰囲気か辺りを支配する。

そう。

いまは、シーズンオフなのである（私的に大事なことなので2回）。「まさか宿泊客が私たちだけなんて、こんな話ないわ」

電車に乗って目的地に到着した私たちは、まず最初に確認を兼ねて今日泊まる旅館に足を運び、観光に邪魔な荷物を預かって貰った。

その際、旅館の女将さん（残念ながらお婆ちゃん）がいったのだ。

「今日はおふたりの貸し切りだからゆっくりしていつてね」
って。

確認した所、招待券が貸し切りチケットだったとかそういう訳ではなく、シーズンオフ時には宿泊客が0〜1組のときは比較的あるそう
で、ちょうど今日がその「他に宿泊客がない日」だったららしい。なお、外観やエントランスを見る限り、旅館はドが付くほどの純和風
だった。

「なんで貸し切りって話なのよ。せっかく温泉に來たのに、温泉と
いったら他の宿泊客との裸の付き合いでしょ。長旅で疲れて温泉に
癒しを求める女性の裸を拝み放題。おひとり様だったら部屋にお邪

魔してつまみ食いだって出来るって話よ！」

「でも沙樹ちゃん。温泉だったらこの前みんなと一緒に入ったじゃない」

と、梓はいうけど、

「深夜帯まで温泉入らせて貰えず、メールちゃんの裸しか見れなかったんだけど。子供の裸なんか見てなにが楽しいのよ」

「その割にはメールちゃんが一番打ち解けてたよね、沙樹ちゃん」

「あれね。ナーガちゃん同様あの子とも仕事繋がりよ」

「え？」

って、梓。そういえば伝えてなかったっけ。

「メールちゃんは神簇やアンちゃんの上司みたいなものよ。あれでも、神簇家に対して本家様と同等くらいの権力持つって話」

「嘘!？」

「神簇家の庭でアインスと決闘したの覚えてる？ あの時の問題を裏で解決に動いてくれた影のMVPもメールちゃんよ」

「そんな凄い子だったんだ」

啞然となる梓。

「まあ、あの子のことはいいわ。いまは関係ないって話だし」

改めて私は水平線を眺める。辺りには私と梓しかおらず、とても静かだった。穏やかな潮風と波の音が心地よく、たまに車や自転車が通り過ぎる音も含め、あまりの穏やかさに時間がゆっくりと流れてるかのよう。

だけど、私はいう。

「楽しみにしてたのに。他の女性客の裸、浴衣姿、ベッドイン」

「私は沙樹ちゃんと旅行する一番の問題が解決してほっとしてるよー」

梓はだらしなく顔を緩ませる。正直、梓のそんな天使の笑顔を拝めたことが不幸中の幸いだろうか。内容はともかく。

私は。

本当に、たった2日で完全復帰できるのだろうか。

私はハングドより、この旅行でM I S S I O N 2 9 参照すっかり休むよう命令されている。

今後のファイル・ハンターズとの闘いにおいて、私の持つ地縛神の能力が重要な役割を担うことがほぼ確定してしまい、私の精神状態を万全な状態に戻すことが最優先事項と判断されたからだ。

実際、パインとマイケルがすでに犠牲になっている。ふたりの実力は私より上だった。そんなふたりでさえ命を落とす問題に、精神状態が不安定な私が最前線に出れば、いずれ死ぬのは時間の問題だろう。しかも、私を失った場合ハングドのみならず地元の組織は全員ファイル・ハンターズに対する対抗手段を失う危険性まであるのだ。

(そんなプレッシャーを与えられながら「治せ」なんて無理があるでしょ)

だからなのだろう。今朝、妙子のヘルプに手を伸ばさず、りんの人を破壊した昔の夢を見たのは。

それだけ、私はいま不安で情緒が狂っているのだ。

しかし、梓に仕事の相談をするわけにもいかず、顔に出さないような気を付けながら、ひとり悩んでいた所、

「あ、こんな所にいた」

不意に私たちは後ろから声をかけられた。

「え?」

私は後ろを振り返り、声を失った。

それは自転車に乗ったひとりの女性だった。きっと過去一度も染めた事ないだろう黒髪をヘアゴムでふたつ結びにし、ラフでシンプルな服装に身を包んだ真面目で明るい雰囲気の子。歳は誕生日の早い遅いを除けば同じ年。というのも、彼女は私や梓の知人だったのである。

「りんちゃん?」

驚き、梓がいった。私はあえて口を開かなかった為、女性は自転車を降りて、

「お久しぶりですね。あずちゃん、沙樹さん」

って、笑顔で自転車を押して近づいてくる。

そう。

信じられない事に、そこに立っていたのは今朝夢に出てきたあの

MISSION 29.5 参照

赤司^{あかし} りん本人だったのである。

私は、彼女をエロい目で見ると余裕さえなく、口を閉じ、表情を消し、内心で裏の意図を探ろうと横目を凝らす。

だけど、警戒する私とは裏腹に、りんは以前と変わらぬ様子で、

「こつちに来たのなら連絡くれても良かったのに、おかげで街中走り回っちゃいました」

「りんちゃん、いまこつちに住んでたの？」

梓の言葉にりんは「え？」となって、

「もしかして、私の引越先」

「たぶん誰も知らないよ？ 突然引越して、先生も行き先だんまりだもん」

「そうだったんだ。だから誰からも連絡が」

りんは納得するように呟いてから、

「なら偶然だったんですね。はい、いまはこちらの学校に通いながらお婆ちゃんの旅館の手伝いをしています」

ここで梓は「あ」と思い至り、

「もしかして、その旅館って」

「はい。おふたりが泊まる所です。あの旅館の女将は私のお婆ちゃんです」

なるほど。さらにりんが言うには、

「びっくりしました。今日の宿泊客のリストを見たらふたりの名前が記載されてて、その上もうお荷物を預けてるんですから」

だそうだ。

「他のみんなは元気ですか？ 特に、ロコちゃん」

名指しで訊ねるということは、一応妙子の死を知ってるらしい。梓は努めて笑顔をつくり、

「うん。ロコちゃんも色々あったけど元気だよ。それと、コンビニでアルバイトも始めたみたい」

「そうですか。良かった」

ほっとした様子で、りんはいった。

「良かったら観光案内しましょうか？ 引越する前もよく遊びに

きてた所ですから、穴場とかも色々知ってますよ?」

「本当? じゃあお願いし」

梓が言いかけた所で、

「悪いけど」

私は、ここで初めてりんの前で口を開いた。

「今日は梓とのんびりしたい気分だから、断らせて頂戴」

さて。私が喋ったことで彼女はどんな顔をするだろうか。警戒か、軽蔑か、虚無か、恐怖か。

「なら仕方ないですね」

しかし私の予想は全て外れ、完全にナチュラルな反応をりんは見せた。もしかして覚えてないのだろうか。

「だったらせめて。ここからだと言宿は右から曲がって……それと、ここから見える白い屋根の建物に」

それからりんは、お節介にも宿に戻る際の最寄りのルート、徒歩で向かえる観光名所から地元の人にも利用する売店の場所まで色々教えてくれた後、一足先に自転車で宿に戻っていった。

彼女の姿が見えなくなると、一転して梓は心配した顔で、

「どうしたの沙樹ちゃん。さっきから様子が変だったけど」

と、訊ねてくる。

「沙樹ちゃんって、りんちゃんとそんなに仲悪かったっけ?」

「不良と委員長ならこんなものでしょ」

「今じゃ風紀委員だろうと婦警さんだろうと平気でセクハラする沙樹ちゃんなの?」

「う」

言い訳できない。どうしよう。

私は、りんとのエピソードについて伝えようかどうか迷いつつ、

「ちよつとショッキングな話していいなら、言うけど」

「そんな風に言ったら余計気になるよー」

「ワンチャン、私を軽蔑することになるって話よ」

「しないよー。そこに花○院の魂も賭けてもいいよ?」

逆に不安だ。でも、梓がそこまでいうので、私はいうことにした。

「突然だけど、りんが学校に来なくなった日の前日、パトカーが来てたの知ってる?」

「え」

梓は一回きよとんとしてから、

「噂程度には、だけど」

「それから、りんが来なくなった事を不自然に思ったことは?」

「りんちゃんがおクスリしてたって噂なら」

「どうやら、最悪にも当時の私の狙い通りに情報は蔓延してたらしい。」

「でも、そんなの殆どみんな信じてなかったよ? だって、りんちゃんだもん」

と、擁護する梓に。

「私が原因なのよ」

「え?」

「私がりに無理矢理ドラッグを打って、さも彼女が自分でクスリに手を出したように仕立て上げたって話」

青い空をみあげ、私はいった。

「りんが引越したのは、私のせいなのよ」

私に気を遣ってか、梓は努めて笑顔で観光を楽しんでくれた。

たっぷり歩いて夕方。改めて旅館にチェックインした私たちは、仲居さん（女将さんより少し若いお婆ちゃん）に案内された客室で一息ついてた。対応を見る限り、りんは女将や仲居さんに私の正体を伝えてないようだ。

「んーたっぷり遊んだねー」

梓は広縁の椅子に座りながら、りに紹介された売店で買ったタピオカミルクティー（XLサイズ）をストローで飲んでる。

部屋は特に変わりばえのない純和室だ。玄関・和室・広縁が一直線に続いた部屋で、畳の和室には卓袱台と座布団、広縁には簡単な机を挟んで椅子がふたつ。トイレは玄関の隣に設置されてある。

私は急須で二人分のお茶を煎れながら、

「交通は少し不便そうだけど、のどかで過ごしやすそうな場所よね。たぶん夏の海水浴シーズン以外は」

と、返事しつつ私もSサイズの同じタピオカを飲む。ミーハーに聞こえるかもしれないが、実は私もこの飲み物は結構好きだったりするのだ。喉越しの良さとグミのような触感が独特で面白いし、水分を摂れて腹持ちも良い。ブームだった時は、よくこれを持って、周囲のタピオカ女子に紛れながら街で張り込みや追跡をする際の携帯食にしていたものだ。

「はい、梓」

私はお茶を注いだ湯呑を広縁の机において、

「それで温泉だけど。どっちから入る？」

と、訊ねた。

「え？」

よほどリラックスしてたのか、きよとんとした顔で訊ね返す梓に、「私が先入ってもいいけど。私がいると浴衣に着替えもできないだろうし」

本来なら「梓、先いく？」と訊ねる所だけど、いま梓はタピオカミルクティーを愉しんでる所だから、急かしちゃうかなと思ったのだ。加えて、りと再会して冷や汗かいたし私自身早く温泉に入りたい。

しかし、梓はまだ頭が動いてないようで、

「え、どうして？」

「どうしてって、学校でもそうだし、私だからって話だし」

うん。学校でも体育の時間だと名誉男子扱いで女子の着替え中締め出されてるのよ、私。

「あ、そっか」

梓はやっと気づいたららしい反応をして、

「もう。どうしてこういう時だけモラルがある事言えるの？」

「普段は性欲優先でモラル投げ捨ててるだけって話よ」

私はいいながら、自分の湯呑に口つけて、

「で、梓の希望は？」

「うーん」

梓は一回考えて、

「じゃあ沙樹ちゃん先入っちゃって。私まだタピオカ残ってるからー」

「わかったわ」

私は湯呑の中身を飲み干してから、タピオカのカップと着替え諸々を持って一旦部屋を出た。

だから、残念ながらひとりになった後呟いた梓の言葉を私は知らない。

「沙樹ちゃんの馬鹿。あんな風に聞かれたら一緒に入りたくないなんて言えないよー」

貸し切り状態だけあって、脱衣所のかごはすべて空席。人の使った形跡は見られなかった。

私は適当なかごに衣類とデュエルディスクを入れ盗難対策に攻撃反応型の罠カードを仕込んでから浴室に。そして、露天風呂に数分ほど浸かってた時だった。

「っ」

露天風呂フロアの外から突如感じた人の気配に、私は一度びくつと反応。

(誰?)

一瞬、私を狙った敵を疑ったが、足音はゆっくりとこちらに向かってくるものの、攻撃の意志も無ければ気配を消して接近してる様子もない。だとしたら宿泊客だろうか。梓がわざわざレズの私に裸体を晒すとは思えないし、あの後予約なしでチェックインした人がいたのかもしれない。

30代もいいけど、今日は気分的に高校生以上く20代の若い子だったらいいな、と内心ぐへへと考えてたら、室内から戸が開き、

「あ、沙樹さん」

最悪のジョーカーがバスタオル1枚で姿を現したのだった。

「湯加減は如何ですか?」

りんは一見屈託ない笑顔でいいながら、私の隣で湯に浸かりだす。

私は彼女の裸体が視界に入る前に背を向け、

「別に」

と、素っ気なく返す。いまの私を知る者からすれば、若い女性を前にこんな態度を取れば絶対「明日は嵐だ」とか「地球が滅びる」とか言いそうなものだけど、

「素っ気ないですね、相変わらず」

なんて、昔の私しか知らないりんは、苦笑いでもしたかの声でいった。

「高校生活はどうですか？ 沙樹さんって、いつも不機嫌で、人付き合
い悪くて、不良さんだから、ちゃんと高校デビューできてるか心配で」
「問題ないわ」

「なら良かったです」

りんは一拍置いて、

「さつき逢った所だとあずちゃんも元気そうでしたけど、実際はどう
ですか？ まだ、たまに虐められそうになったりするのですか？ ご
めんなさい、私も同じ学校なら目を配れたんですけど」

「大丈夫よ。あれでも毎年遅しくなってるから」

いまじゃ私を毎日1回はハンマーで制裁する位だしね。それを見
て未だに虐めようとする猛者はうちの学園にはいない。

「……。それより、よく未だ私に話しかけようって気になれるわね」

私は切り出すことにした。

「私のせいなんですよ？ りんが陽光学園に進学できなかったの」

「分かってるじゃないですか」

何故、それを嬉しそうにいう？

「ですけど。沙樹さんこそ忘れましたか？ 私の趣味を」

「お節介焼く事ですよ」

私はいった。

「覚えてるんじゃないですか。だからですよ」

言いながら、りんは湯を泳いで私の正面に向かい合おうとしてき
た。わざわざ私が視界に映さないようにしてあげてるというのに。

私はぷいっと反対方向に体をそらす。すると、私が向いてる方角へ

とさらに移動してきたので、私はすぐ再び反対方向に体を向けた。すると、

「どうして避けるんですか」

なんて言って追いかけてくるので、同じやり取りを数回繰り返した後、

「あーもう分かったわ。でも見られた責任は取らないって話よ」

と、私は折れて彼女を受け入れる。

正面に立った彼女は、少し動き疲れて頬に汗が滲んでいた。胸は若干控えめ。最後に会ったときはガリガリだったのを覚えてるが、いまは華奢ながら不自然な細さは見当たらない。

学生時代こうして彼女をまじまじ見た事はなかったが、こうしてみると本当に人畜無害を絵に描いたような顔をしておりとても可愛らしい。けど、その瞳からは腹の底に深い闇を抱えたような濁りを感じるの、私が罪悪感のフィルター越しに見てるせいだろうか。

「あの、そんなにまじまじと見られたら恥ずかしいんですけど」
なんて照れるりんに、

「正面に裸の女体があれば普通見るでしょ？ レズなら」

「レズ？」

「りんなら知ってるでしょ」

と、いって。私は裸体を目に焼き付けてから、今度は首だけをそらす。

「だから、どうして逸らすんですか」

りんは、それでも視線を外すことを許さないらしい。私は鼻と肩で嘆息してから、改めて向き合う。

「ずっと後悔してたんです。あのまま、仲直りもしないでお別れしたことに」

と、りんはいった。真つすぐ、私の顔をみて。

「仲直りって」

間違いなく私がした事はそんなレベルじゃないのに。

「りん。一応聞くけど、あなた、あの日のことをちゃんと覚えてる？」
じゃなければ、そんな発想に辿り着くはずは……。

「覚えてますよ？ デュエルして、フィール攻撃で意識を飛ばされて、気づいたら沙樹さんにクスリを打たれてて、キマってる所を先生が目撃、高校を入学前に退学に追い込まれました」

あつた。

「それに少なくとも、あの街を離れるまでは沙樹さんを恨んでましたよ？ 殺意だつて覚えました。自殺だつて考えましたし、醜い感情でいっぱいでした」

「なら」

「この街、いい所ですよね」

突如、りんは露天風呂から見える街や海に体を向けていった。

「自然が豊かで、のどかで、温かくて。この街のおかげで、私は私を取り戻しました。そしたら、いつもの癖で世話焼きとお世話の目線である日の思い返して。私、あの日の沙樹さんを何も知らないで拒絶してたって思い出したんです」

直後、夕日の寂しげな光が彼女を照らす。私はそれを見て、

「この聖人君子が」

つい、私はぼやく。

仕方ないじゃない。私の目にはいよいよ彼女がガチでそういう人種に至ったようにみえたんだから。

「あ、いま聖人君子って言いましたね！」

でもって、りんはやっぱり反応し、

「ずっと言ってるじゃないですか、聖人君子扱いは嫌いだつて。お節介も世話焼きも全部私がしたいからしてるだけの趣味なんですつてば」

前なら、こう言われて更に反論することはなかった。でも、いまは。

「いや、やっぱりんは聖人よ」

私はいうのだ。

「趣味でも独り善がりでも、ここまで突き抜ければ立派に善人よ。何より、自分をここまで陥れて謝りもしない下衆を赦すようなキチガイが聖人じゃないわけないでしょ」

「沙樹さん」

「実際の所、りんの住所を調べて頭を下げに行くのは簡単だったわ」
私は、改めてりんから体の向きをそらし、少しでも距離も開けながらいった。

「それをしなかったのは、二度とりんの人生に関わらないほうがいいと思っただから。謝って更に責められるならまだいいほう。私の名前や顔をみて恐怖やトラウマが蘇ると思っただら、とてもじゃないけど連絡なんて取れなかった。だから正直、いまは夢にも見ないどころか、見たら失礼な現場に立ち会った気分よ。りんのほうから仲直りしたいとか言い出すなんて」

おかげで、謝罪のタイミングを掴めない内に、ただの謝らない加害者になってしまったって話だ。

すると、

「私にとって、沙樹さんは最後のジョーカーのような存在でした」

りんはいった。

「気づいてましたか？ いままでこそ私、あくまで趣味でお節介をしますけど。昔は本当に分不相応な正義感でやってたんです」

知ってた。いや、むしろ途中からお節介への向き合い方を変えてた事に気づかなかったというべきか。

「でも、真面目ちゃんでも人助けをしても解決できない事って結構あって、そういうものに限って沙樹さんが全部解決しちやっってたんですよ。それで、対抗心が芽生えて、ある日踏み込み過ぎちゃったんですよ」

一拍置いて、りんは、

「ある先輩に、無謀にも向かってみたんです。その先輩は、当時お家の権力で教師も他の大人も味方につけて、校内で好き勝手にやってる方でした」

あつ。

「結果は散々でした。突き付けた正論は何も通じなくて、逆にその場で先生を呼んで、ありもしない悪事をでっちあげて、私に押し付けてきたんです。立ち会った先生は私の事もいい子だってよく褒めてくれて、信頼してる先生だったんですけどね」

先生は先輩の言葉だけに耳を傾け、自分を叱り、激しく非難した。口にはしなかったが、りんの少し寂しげな目は間違いなくそれを物語っていた。

「当時のこと、覚えてますか？」

「まあ、ね」

私はうなずき、

「その先輩がでっちあげた悪事を、私が丁寧に全部実行して、先生の早とちりとして処分させたんだっけ」

なお、その先輩とは神簇のことである。つまり、いま彼女が語った失敗談は小学生の頃の話。

「はい」

りんは嬉しそうな笑顔で、

「だから、確かに沙樹さんには中3の卒業前に人生を壊されましたけど、それ以前に私は一度、あなたに人生を救って貰ってたんですよね」
最近、疎遠になってた元同級生と逢う度に「昔助けられた事がある」と告白されてる気がする。

「だけど、実はその時に心が折れちゃってたんです。私の中の正義感とか、そういうのがポツキリと」

りんは一度苦笑いして、

「なんだか馬鹿らしくなっちゃったんですよ、優等生でいる事に。だから、いっそのこと自分勝手に振舞う事にしたんです。そしたら、結局私ってお節介人助け大好き人間で、それを趣味として楽しんでたら、前よりずっと優等生扱いされちゃって。皮肉ですよね」

ああ。だからりんは聖人扱いとか嫌うのか。すでに彼女にとってそれらはトラウマワードでこそあれ褒め言葉ではないのだ。当時、「いっそ大馬鹿者」呼ばわりしたら逆に喜ばれたのも、事情を知ってしまふと何となく納得できてしまう。

りんは続けていった。

「いつの間にか、私の中で沙樹さんは秩序とかルールとか抜きに本当に正しい人になって、そして憧れに変わってました」
「私が？」

正しい人？

「だから、この先私が本当にどうしようもない事態に出会ったとき、最後の最後に頼れるのは沙樹さんしかいないって思ったんです。先生に裏切られたあの日のように、信じていたもの全てが私を裏切っても、沙樹さんだけは私の声に応えてくれる。そう思っていました」

そして、りんの笑顔が渴いたものに変わり、

「丁度、あの日がそれに近かったのですけど。見事に裏切られました。私のジョーカーに」

ここにきて、蟠りが溶けてないからこそその棘がある言い方。しかし、彼女の「ジョーカーに裏切られた」はまるで合わせ鏡のように映った。

だって、

「奇遇ね。私にとっても、りんは最後のジョーカーだったのよ」

「え？」

目を丸くするりんに、

「気づいてるかは分からないけど、私って基本人間不信な所あって。でもりんって、まるで人助け専用の機械じゃない。私にはそう見えたわ」

「人助け専用の機械。言い得て妙ですね」

「だからさ、一周回ってりんだけはどこか信頼できてたのよ。全てが私の敵になっても、りんだけは手を伸ばせば応えてくれるって。それこそ一番大切な梓以上にね。そのジョーカーを切る寸前で本人に裏切られるまで、自分の気持ちに自覚なんてなかったけど」

私も、まるで同じような事をりんに伝える。すると、

「ごめんなさい。たとえばあの日が無かったとしても、私では沙樹さんのジョーカーにはなれなかったかもしれない」

りんはいった。

「実は私、これでも趣味の範疇では抱えきれない問題には極力踏み込まないで、見て見ぬフリ、よくしてきたんです」

え？ りんが？

「私たちが屋上で大喧嘩した日、沙樹さん屋上に来る前に虐めの現場

をひとつ解決して来ましたよね？ 私はそれを知っていたのに、スルーして屋上であなたを待ちました。それが証拠です」

「あ」

確かに、私の印象にあるりんなら、あんな虐めの現場を見たなら人助けやお節介が趣味とかいって教師を呼んだはず。

「ズルい女なんです、私。あずちゃんを虐められてたときも、私は殆どなにもできませんでしたし、鱒川さんに至っては吉月先生から性暴力を受けてたことも知ってたのに、裏に恐ろしいものを感じて我が身可愛さに見捨てたら、最悪の結果になっちゃいました。これが、沙樹さんが聖人扱いまでしてくれた私の正体です。軽蔑しましたか？」

「……」

私は、首を横に振った。妙子に至っては私だって何もしなかったわけだし、何より私は最終的にりんを追い込んだ当事者だ。軽蔑なんてできないし、そんな資格はない。

「だからこそ、沙樹さんがジョーカーでした」

そう伝えるりんには、私は返す。

「なら伝えるけど。ごめん、私も仮にあの日がなくても、りんのジョーカーにはなれなかったわ」

私はいった。

「実は私、中学の頃まで誰かを助けようとして助けた事って一度もなかったのよ、梓以外」

すると、

「そんな気はしてました。沙樹さんや学園から離れてから、ふと気づいた程度でしたけど」

「だから、大体が梓を助けるついでだったり、梓を虐める奴だから懲らしめたかったり、被害者の泣き顔が梓と被って映ったり、梓が関係ないなら気紛れだったり、憂さ晴らしに虐めつ子をボコるほうが目的だったりね。当時からいまに至るまで、結局私って梓が全てって人間なのよ」

「くす」

りんは突然笑った。

「相性抜群のカップルじゃないですか。当時、私もあずちゃんから言われましたよ？」
「私は沙樹ちゃんが全てだ」
「って。もしかして、もう恋人関係ですか？」

「ちよ、いきなりそこに話持つてく？」

「いや、それは未来永劫ないって話」

「どうしてですか？」

「単純に、私はレズだけど梓はノーマルって話」

でもって、梓が大好きすぎて、レズの道に引き込まうとして傷つけるのが怖い。嫌われでもしたら余裕で死ぬ。ここまでは、さすがに恥ずかしいのでりんには伝えないけど、

「何なら、いまジョーカー切ったらキューピッド役、買って出てくれる？」

「お断りします。下手に出てあずちゃんの怒りを買いたくないですから」

「本当。昔からの同級生・元同級生から梓ってどう見られてるのだろうか。」

気づけば、りんの顔は霧が晴れたように変わって映った。先ほど感じた瞳の濁りも、随分と綺麗になったように思える。

「お互い、時間が経ってみれば金髪ヤンキーの問題そのものよりも、裏切られたショックのほうが強かったのだ。加えて、お互い「ジョーカー」だったものの本当の顔」を知らないと、本題に触れても新たな誤解を生む。りんはそう判断したのかもしれない。

「実は、喧嘩の火種になった金髪の人なんですけど」

「ここで、りんが触れだした。」

「そんな直後だった。」

「きやああああああああああ」

「脱衣所の辺りで悲鳴が聞こえた。梓の声だった。」

「いまのは!？」

「あずちゃん!？」

「私たちは、すぐ湯からあがり、体を拭くこともなく脱衣所へ。」

「梓はかごを収納した棚の傍で倒れていた。私は梓の傍に駆け寄り、」

「大丈夫、梓！」

と、呼びかける。意識はない。だけど、怪我は見られず、脈を確認した所、命に別状もなさそうだった。

しかし、

「かはっ」

直後、今度はりんが攻撃されたのか声をあげる。後ろを振り返ると、りんが犯人に髪を引っ張られる形で、だらんと垂れさがる様子がみえた。

「さ、沙樹さん。あずちゃんを連れて、逃げて」

りんは、ゆっくり顔をあげ、消え入りそうな声で私にいう。

しかし、私は動けなかった。

犯人の顔を見た結果、ぞつと背筋が凍り、足がすくんでしまったのだ。

私は震えた声でいった。

「ミストラン。……なんで、ここに」

そこにいたのは、高村司令のクローンであり、黒山羊プライド派つまりフィール・ハンターズ所属の女だった。そして、過去に増田を殺し、たつた一撃のフィール攻撃でアンを重体に追い込み、あのフィアを相手にデュエルで完勝した事もある最悪な相手。私自身も、一度相対した際、地縛神の力を使っても全く敵わず殺されかけた過去を持つ。

肌・髪・瞳などの色彩以外は完全に一回り若くした高村司令。わぎわぎライダースーツを着ておりスレンダーな肢体はともかく膨らみゼロの胸板が更に強調されている。それでいて、セミロングの髪は銀色で、真紅の瞳と青白い肌が作られた美じみた異質感を思わせた。

「何って、任務」

ミストランは淡々といった。

「いま、闇のフィールに適正のある奴を県内各地からかき集めて拉致回収してるのよ。で、こいつもそのひとり」

言いながらミストランはりんの首根っこを掴み直し、持ち上げる。

「っ、あ」

呻きを漏らすりん。

「りんに適正？　じゃあ、なんで梓まで倒れてるって話よ！」

「あの巨乳？」

ミストランは梓を一瞥し、

「私が誰か忘れた？　巨乳死すべし慈悲はない」

「ッ」

瞬時にブチ切れた私は、手首から内蔵ナイフを展開し斬りかかるも、刃物がミストランに届くより先に、相手のヤクザキックが腹を直撃。私は背中から壁に激突し、膝について倒れる。

ミストランは続けていう。

「で、そこへアンタがターゲットを連れてやってきたから、その巨乳に意識が向いてる間にターゲットの確保に成功。ラッキー。で、いまに至るわ」

私は何度も咳き込みながら、倒れた姿勢で見上げると、ミストランはいま正に懐から闇のフィールを纏ったカードを出し、りんに渡そうとしていた。

「まさか適正って」

私の脳裏で最悪な推測が過ぎり、それだけは避けようと今度は腕の内蔵銃でカードに向けて発砲。しかしミストランは、カードの角で銃弾を弾き、逆に弾が私の頬をかすめる。

「ドラッグよ」

と、ミストラン。

「闇のフィールはロストや旧ソンプラ社製の牡蠣根ドラッグと併用する事で真価を発揮する。すでにアンタたちの耳にも渡ってるだろう情報よ」

「ッ」

私の最悪な推測は当たってしまった。

「りん！　死んでもあのカードを拒否して！　あのカードを手にしたら最後、死ぬほうがマシな目に遭うわ」

私は叫ぶ。しかし、

「ごめんなさい。無理なんです」

りんはいった。

「すでに脅されてるんです。私がこれを拒否したらあずちゃんを殺すって」

「あ」

ミストランのやつ。そんな卑怯な手まで。

「梓は私が死んでも護るわ！ だから、りんは！」

早く逃げて！ 私は必死に呼びかけるも、

「大丈夫です。死ぬほうがマシな目はすでに経験済ですから」

「アレは一種の洗脳装置よ。心の闇とかいって、トラウマや腹の底のドロドロを思いつきり刺激しながら利用して自我や記憶を操ってくるのよ」

すると、

「あ。それは無理ですね。ちよつと耐えられそうにありません」

なんて、りんはさらつとのたまい、

「もし心の傷跡を全部開かれでもしたら、たとえ生きて助けられてもSAN値直葬してそうですね。ですので沙樹さん、私のことは一思いに殺っちゃってください」

「馬鹿言わないでー」

私はいうも、その間に闇のカードがりんの頭の上に置かれた。

直後、黒い瘴気がりんを包み込み、

「ひっ」

りんの目が見開き、瞳が絶望に染まる。瞼から涙を滲ませ、

「あ……あ……。こ、これ……本当に駄目なやつです。沙樹さん、あとはお願いしま」

言い切る前に、りんは再びだらんとなり、ミストランに掴まれたまま垂れ下がる。

「う……あ、あ……」

意識はまだ保ってるようだった。しかし、

「りんー」

私が叫んでも、彼女は反応しない。何やらぶつぶつ喋ってる様子もあり、完全に妄想や幻覚の世界に取り込まれてるのが分かる。

しかしそれも次第に無くなり、目を半開きにしたまま一切の反応がなくなった。

「頃合いね」

ここで、ミストランが一度指を鳴らす。すると、りんの体が一度ビクツとなり、

「起きて」

ミストランの声に、

「はい」

と、りんは反応。ミストランが手を離すと同時に、りんは自らの足で立ち上がった。

「りん?」

私は訊ねる。すると、りんは顔半分を影で覆ったような凍える視線で、

「なに?」

と、返す。その様子は、明らかに私の知るりんとは違い、その変貌は今までの闇のフィール・カードのレベルを超えていた。

「確か、りんだっけ? アンタにちよつと質問」

ミストランがいった。

「アンタの所属とフルネームを言ってみて?」

「分かりました」

りんはうなずき、

「私は、フィール・ハンターズ所属、赤司 りんです」

「え」

りんの言葉に私は驚き、

「りん? 一体何が」

私は訊ねる。するとミストランが代わりに、

「マイケルとかいうのに聞けば?」

「っ」

私は察した。たったいま、りんは洗脳されてた時のマイケルと同じ状態に陥ったのだと。

一部ドラッグは被害者をトランス状態にする。それを利用し、

M I S S I O N 2 3 . 2
闇のファイルで深層心理を弄る技術参照をファイル・ハンターズが持つて
る事を、私たちはすでに知っていた。そして、マイケルはこの方法で
M I S S I O N 2 9 参照
即席のデュエル兵士に洗脳され、自分をファイル・ハンターズのスパ
イと思い込まされ、信頼していたパートナーを殺し、ハングドを裏切
り、その末死亡した過去を持つ。

私はいま、第二のマイケル誕生の瞬間を目撃したのだ。
「そんな」

絶望に打ちのめされる私を他所に、

「行くわよ」

「はい」

ふたりはこの場を離れようとする。しかし途中、りんが気絶し倒れ
る梓の横を通りかかった際、不意に彼女の足が止まった。

「りん？」

ミストランが訊ねる中、りんは、

「この子が。この子さえいなければ」

そういつて、りんは突然、梓を力強く踏みつけたのだ。

「ぎゃっ」

痛みに目を覚ます梓。

「ちよ、アンタなにやってるのよ」

直後、驚き制止しようとするミストラン。しかし、それより早く私
はりんに踏み込み、

「何するよー」

と、その頬を思いっきり殴りつけていた。

「ぶっ」

現在、お互いデュエルディスクは付けてない。

おかげでりんはファイルでガードする事ができず、一撃を貰ってそ
の場で倒れる。私は梓の前で跪き、

「大丈夫、梓？」

「う、うん」

少しだけ、顔を青くし気持ち悪そうにしてたけど、軽く触診など
チェックしたところ、大事には至ってないと私は判断。

梓がいった。

「それより、いまのって、りんちゃん？」

「ごめん。いま、りんは悪い奴に洗脳されてる。正気じゃないから、許してあげて頂戴」

私は梓を庇いながら、りんの前に対峙。

りんは起き上がり、

「沙樹さん、どいてください。そいつ殺せません」

「させるわけないでしょ」

私はいい、

「何より、どうして梓なのよ。私に殺意を向けるならともかく、梓は関係ないでしょ」

たとえ洗脳されようとも、むしろ洗脳済なら余計、梓を殺そうとする道理はないはずだ。

「あずちゃんがいたから。その子がいるから、沙樹さんは私たちのヒーローにはなってくれなかった」

彼女の口から出た理由は、恐らく洗脳とは無関係。闇のファイルで歪められたものだろうけど、りん自身の心の闇を感じた。

「沙樹さんには幻滅しました。あんな理由で私のジョーカーになってくれなかったなんて」

「っ」

……………。……………全く。

「その言葉、そっくり返すわ。所詮趣味だから、その範疇を超える問題は無視したいから私のジョーカーにはなれないって話でしょ」

「それは」

痛い所を突くな。そんな顔をりんは見せる。

私は続けていった。

「デュエルよ、りん？」

「デュエル？」

「あなたにどんな理由があろうとも、梓に手をあげた時点で私の敵よ。今度こそ念入りに潰してやるから覚悟して頂戴」

すると、後ろで梓が、

「沙樹ちゃん待つて。りんちゃん、いま洗脳されてああなっちゃって
るんでしょ？ 許してあげてよ」

「梓」

私は、顔だけりんへの憎しみを取り繕いながら小声で、

「大丈夫よ」

と、伝える。直後、

「ふうん」

ミストランがいった。

「そういつて、体よくデュエルに持ち込んで洗脳を解こうって魂胆？」

「……」

私は無言を貫く。凶星だった。

しかし、すぐにミストランは、

「まあいいわ。付き合ってやりなさい」

と、いったのだ。

「即席デュエル兵士の試運転にはなりそうだしね。洗脳した結果、早
速トラブルを起こしたこいつが戦力になるかどうか、アンタとのデュ
エルで確かめてみるわ」

「まるで、私程度に勝てないと戦力外みたいな言い方ね」

「いや、実際そうだけど？」

「当たり前でしょ？ と言いたげにミストランはいい、

「罨カード《アームズ・コール》を発動」

と、カードを発動する。直後、脱衣所のかごがひとつ光ったと思っ
と、りんは湯で濡れたまま浴衣を纏い、デュエルディスクを装備した
姿に変わっていた。

多分、先ほどのかごにりんは着ていた服やデュエルディスクを入れ
てたのだろう。そして、ミストランの発動したカードのフィールに
よって転送。その場で装備されたのだ。

「沙樹ちゃん」

一方、私の浴衣とデュエルディスクは梓の手渡し。ミストランとの
会話の間に、梓は私の荷物の入ったかごを探し、持ってきてくれたの
だ。

「サンキュ、梓」

私はバスタオルで軽く体を拭いてから浴衣を羽織り、デュエルディスクを装着。

直後だった。

りんの手によって強制デュエルを仕掛けられる。そこまではいつも通りの展開。しかし、同時に床に広がるのは紫色の光で描かれた模様。辺りは瘴気に包まれ薄暗さを見せ、蒼い炎がリングを形成するようになりんを囲ったのだ。

これは、まさか!?

「ああ。言い忘れてたけど」

ミストランがいった。

「デュエルに負けたほうは、ガチで死んで貰うから」

「え?……さ、沙樹ちゃん!」

梓が悲痛な声をあげる。が、私は返事ができずにいた。

私は、その場でショックに放心し、立ち尽くしていた。まさか、りんとデスデュエルをさせられるなんて思ってもみなかったからだ。

しかし、思えば元々最初にデスデュエルを私たちに見せたのは、洗脳で即席のデュエル兵士となったマイケルだ。そう考えると、いまのりんにこのデュエルを仕掛ける技術があってもおかしくない。それを想定し忘れていたのだ。

「構えてください、沙樹さん。不戦敗になって貰いますよ?」

りんの言葉にハツとなる。彼女はすでにデュエルディスクを構え、手札を4枚引き抜いていた。

つまり、もうデュエルは開始されていたのだ。先攻は、不正なくランダム決定の機能でりんとなっている。

「やるしかないか」

私は手札を4枚引いて、

「梓は私から離れないで。いまのりんの様子だと、梓に攻撃を仕掛けてくる可能性もあるわ」

「う、うん」

梓は不安そうにうなずき、いった。

「沙樹ちゃん。死なないでね？ それと」

「分かってるわ」

私はうなずき、

「私もりんも死なないし、必ずりんの洗脳も解いて助けるわ」

この時、私は気づかなかった。どうして、梓は知りもしないはずのデスデュエルにここまで順応してるのかと。

「デュエル！」

私たちは、すでに第一ターンのメインフェイズに入った状態で叫んだ。

沙樹

LP 4000

手札 4

□ □ □

□ □ □

□ | □

□ □ □

□ □ □

りん

LP 4000

手札 4

MISSION 30―最後のジョーカー（後編）

「デュエル！」

私たちは、すでに第一ターンのメインフェイズに入った状態で叫んだ。

沙樹

LP 4000

手札 4

□ □ □

□ □ □

□ | □

□ □ □

□ □ □

りん

LP 4000

手札 4

「私の先攻。私は手札から《ブンボーク003》を通常召喚。効果でデッキからチューナーモンスター《ブンボーク001》を特殊召喚。私はレベル3《ブンボーク003》に、レベル1《ブンボーク001》をチューニング。フラット展開完了。エネルギー充填完了。飛行甲板、発進！ シンクロ召喚。いきます、レベル4、シンクロチューナー《リアクターズ・フラット》！」

中3のあの日とも違う、憎悪と失望に人の心を塗りつぶされたような顔で、りんはデュエルを進める。

《ブンボーク001》が1つの円になり、中を《ブンボーク003》が潜る。2体が混ざり合って出現したのは、一隻の小型の空母。それは、完全に当時のりんの初動と同じものだった。

「カードをセット。ターンを終了します」

さらに、りんは伏せカードを1枚敷いて最初のターンを終える。

沙樹

LP4000

手札4

□□□□

□□□□

□□ — 「リアクターズ・フラット（りん）」

□□□□

□□□ 「セットカード」

りん

LP4000

手札2

「私のターン、ドロー」

言いながら私はデッキからカードを1枚引き抜く。ドローしたカードは《スクラップ・リサイクラー》。元々はマイケルのカードで、彼を地縛神の生贄に取り込んだ事で私の下に渡ったカードであった。

「私は《スクラップ・リサイクラー》を召喚すると、

「え？」「スクラップ？」「幻獣機じゃない？」

私が出したモンスターが余程意外だったのか、りん、ミストラン、梓がそれぞれ反応。

「私のデッキは日々進化してるって話よ。《スクラップ・リサイクラー》の効果。このカードの召喚・特殊召喚成功時に、デッキから機械族モンスター1体を墓地に送る事ができる。私はデッキから《幻獣機オライオン》を墓地に。オライオンのモンスター効果。このカードが墓地に送られた事で、私の場に幻獣機トークンを1体生成」

これで、私の場に2体のモンスターが揃い、

「座標確認、私のサーキット。ロックオン！」

私はリンク召喚を宣言する。

「座標確認って、私の口上じゃないですか」

りんがいった。

「え？ あ」

そういえば、りんもリンク召喚を行うとき最初に「座標確認」と発

言してた気がする。意識した気はなかったのだけど、思ったより彼女の影響を受けていたらしい。

「虫睡が走ります。勝手に人の口上を使わないでください」

「ずっと無自覚だったって話よ。召喚条件はスクラップモンスターを含むモンスター2体。私は《スクラップ・リサイクラー》と幻獣機トーカーをリンクマーカーにセット」

2体のモンスターは一旦床に着地すると、カタパルトから射出されるように再発進。自らマーカーに搭載されていく。

「リンク召喚！ 起動せよ、リンク2 《スクラップ・ワイバーン》！」
出現したのは飛龍タイプのスクラップモンスター。

「《スクラップ・ワイバーン》のモンスター効果！ 墓地のスクラップを特殊召喚し、その後私のフィールドからカードを1枚破壊する。そして、予め宣言しておくわ。ワイバーンの第二の効果。私のスクラップが効果破壊された場合、デッキからスクラップを1体特殊召喚し、フィールドのカードを1枚破壊する」

「どういうこと、沙樹ちゃん？」

梓が訊ねてきたので、

「つまり、ワイバーンの効果でリサイクラーを蘇生し即座に破壊。すると、第二の効果も起動し、デッキのスクラップを1体特殊召喚しながら、さらに場のカードを1枚破壊するわ」

結果。

私のフィールドにはデッキから《スクラップ・ゴレム》が特殊召喚され、

「《リアクターズ・フラット》を破壊」

ワイバーンの口からビーム・ブレスが放たれ、りんの空母を襲う。「罠カード《リアクターシールド》を発動します。発動後、このカードは守備力300アップの装備カードとしてリアクターに装備。そして、装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを墓地に送ります」

しかし、ここでりんは伏せていたカードを発動。いわゆる装備罠を発動し、身代わり効果を使って《リアクターズ・フラット》を護る。

「そして装備されている《リアクターシールド》は墓地に送られた場合にデッキからレベル3〜5のリアクターを1体特殊召喚します。私は《トラップ・リアクター・RR》を特殊召喚」

そして、早速リアクターモンスターが1体、りんの場合に展開されてしまう。できれば、りんが《リアクターズ・フラット》の効果を温存してるうちに、かつ場のモンスターがそれ1体のうちにワイバーンでわからん殺しに入りたかったのだけど、仕方ない。

「《スクラップ・ゴーレム》のモンスター効果。私は墓地からリサイクラーを蘇生。さらに特殊召喚されたリサイクラーの効果で、デッキから《幻獣機デスヴァルチャー》を墓地に送る」

これで、私の場合にはリンク2《スクラップ・ワイバーン》に加えゴーレムとリサイクラーの合計3体のモンスターが並んだ。この時点で、やろうと思えばリンク4さえ出す事もできるもの、ここはあえて。

「私のサーキット。再度ロックオン！」

私は再びリンク召喚を宣言。ただし、

「召喚条件はリンク1以外の融合・S・X・リンクモンスター1体。私はリンク2の《スクラップ・ワイバーン》をリンクマーカーにセット。リンク召喚。起動せよ、リンク1《エラー・チェクター》！」

私は、あえてリンク1の医者姿をしたサイバースモンスターを呼び出し、

「《エラー・チェクター》のモンスター効果。自分フィールド上のモンスターを全てを指定した属性・種族に変更する。私は自分フィールドのモンスターを風属性・機械族に変更。この効果の発動後、ターン終了時まで私はこのカードのリンク先以外に指定した属性・種族以外のモンスターを召喚・特殊召喚できない。私のサーキット。さらにロックオン！」

と、《エラー・チェクター》の効果を抑え込んでから、りんへの刺激を避けるためにも、今度は座標確認を避けてリンク召喚の宣言。

「召喚条件は機械族モンスター2体以上。私は機械族となった《エラー・チェクター》・ゴーレム・リサイクラーの計3体をリンクマーカーにセット。大空を駆ける機械の翼竜よ。太古に封印されし力、禁

断の技術にて扉を開き、新時代の勝利を照らし出せ。リンク召喚。発進せよ、リンク3《幻獣機アウローラドン》！」

私はリンク3のモンスターを場に展開。

「読んでました」

その瞬間、りんが動く。

「《リアクターズ・フラット》のモンスター効果。デッキから《サモン・リアクター・AI》の効果をも場に存在する扱いで適用し、800ダメージを沙樹さんに与えて特殊召喚します」

やっぱり、アウローラドンの召喚にその効果を使ってきたか。

「ダメージは受けるわ。けど、同時に《幻獣機アウローラドン》のモンスター効果。このカードのリンク召喚に成功した場合に発動。私の場に幻獣機トークンを3体展開」

「《サモン・リアクター・AI》の効果。もう1度沙樹さんに800ダメージを与えます」

アウローラドンと、その効果によるトークンで私の場が一気に埋まるも、同時に《リアクターズ・フラット》の甲板から一機のリアクターが発進し、両肩のプロペラからトルネードが発射される。その振動から、私はすぐリアル化されると気づき、フィールドの防壁を張って攻撃を防ぐ。直後、サモン・リアクターは一度巡回し今度は梓にも当たるように二度目のトルネード。これも、私は自ら盾になって防ぐ。

「大丈夫、梓？」

「う、うん」

ちよつと不安そうに梓はうなずく。

「待ってて。すぐ、あいつを優しいりんに戻すから」

私は梓にいつてから、再びりんに対峙。

沙樹 LP4000↓3200↓2400

とはいえ、デュエルのルール上では私はしつかりサモン・リアクターからダメージを受けた扱い。相変わらず、りんのデッキは私のライフをガリガリと削ってくる。

「トークンを2体リリースし《幻獣機アウローラドン》のモンスター効果。デッキから《幻獣機ハリアード》を特殊召喚。さらに残りのト

クンをリリースし、墓地の《幻獣機デスヴァルチャー》の効果を発動。自身を特殊召喚し、レベルを1つ上げて3から4に。さらにハリアドは、自身以外がトークンをコストにリリースした時、私の場にトークンを1体生成。これでハリアドとデスヴァルチャーのレベルは4から7に上昇」

さらに私は、ディスクから一度ハリアドとデスヴァルチャーを外し、アウローラドンのリンク先に重ねて置き直す。

「私はレベル7ハリアドとデスヴァルチャーでオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

上空に銀河の渦が出現すると、2体のモンスターは浮上しながら靈魂へと姿を変え、銀河に取り込まれていく。

「竜の名を持つ機械の鳥よ。いまこそ空を支配し、私に勝利を輸送せよ！ エクシーズ召喚！ 発進せよ、ランク7《幻獣機ドラゴサック》！」

出現したのは、機首から機械でできた竜の首を生やしたランク7のXモンスター。

「そして、フィールドの幻獣機トークンをリリースし、《幻獣機ドラゴサック》のモンスター効果を発動。フィールドのカードを1枚破壊する。私は《リアクターズ・フラット》を破壊」

ドラゴサックの背中に、本来ホログラムのデコイであるはずの幻獣機トークンが搭載され、《リアクターズ・フラット》に向けて射出される。

「でしたら、私はここで《リアクターズ・フラット》のモンスター効果を発動。このカードは相手のメインフェイズ及びバトルフェイズ時に、このカードを含めたモンスターを素材にシンクロ召喚を行います」

りんはいった。

「私は、レベル4 《トラップ・リアクター・RR》にレベル4 《リアクターズ・フラット》をチューニング」

ドラゴサックに射出されたトークンが《リアクターズ・フラット》に衝突する寸前、モンスターは4つの闇色の光に分離し攻撃を回避。そ

のまま光はトラップ・リアクターに寄生し闇に染め上げ、内側から引き裂きながら8つに数を増やす。

私は、この光の本質が闇のフィールである事にすぐ気が付く。となると、いまから召喚されるモンスターは。

「ゲート開放完了。ダーク・フィール・エネルギー充填完了。底知れぬ暗闇より、私の憎悪の海を進み浮上せよ！ シンクロ召喚。レベル8《ダーク・フラット・トップ》発進！」

私の予想通り、出現した新たな空母からは強烈な闇のフィールが漏れ出ていた。間違いなく、闇のフィール・カードである。守備表示でS召喚され、その守備力は3000。

「来たわね、闇のフィール・カード」

私は、ここで本心からの敵意をモンスターに向ける。ドラッグと闇のフィールを併用してる以上、このモンスターを倒したとしても完全に救えるわけではないが、ガラムとデュエルしたときのパターンを考えるに、洗脳が弱まる可能性は十分にある。

「とりあえず《幻獣機ドラゴサック》のオーバーレイ・ユニットを1つ取り除き効果を発動。私の場に幻獣機トークンを2体発生」

私は、射出した幻獣機トークンの代わりに、新たに2体同じトークンを補充。すると、

「凄い。何だか別のカードゲームを見てるみたい」

梓が呟いた。

「梓？」

私が訊ねると、

「だって沙樹ちゃん、手札1枚だけでこれだけ沢山の事してるんだよ？ どう見ても、ついこの前アインスさんって先輩とデュエルした頃より段違いに強くなってる。こんな時に不謹慎だけど、魅入っちゃうよ」

「え？」

言われて、私は初めて気づいた。

その通りだったのだ。このターン、私はリンク3とリンク7のモンスターを展開しておきながら、手札は《スクラップ・リサイクラー》の

召喚にしか使ってなかったのだ。しかし、これは私の実力ではない。取り込んだマイケルの能力を使ったからこそ、ここまで頭おかしいプレイができたのだ。きつと。

「でも正直、りんはもつと凄いつて話よ。ちよつと見てて」

私はいって、

「バトル。私は《幻獣機アウローラドン》で《サモン・リアクター・A I》に攻撃」

と、攻撃宣言。アウローラドンはその場で飛翔し、サモン・リアクターに向けて機銃の雨を降らせるも、

「《サモン・リアクター・A I》のモンスター効果。このカードが80の効果ダメージを与えたターン、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にできます」

りんが言うと同時に、サモン・リアクターの両肩から再びトルネードが巻きあがり、機銃の雨を全て払いのける。

「ね」

私は、梓にいった。

「りんもりんで、手札消費たった2枚で、私の2回の効果破壊に攻撃まで防ぎきつたうえ、相手のターンなのにレベル8のモンスターをシンクロ召喚して1600点もバーンダメージを与えてきた。完全に私の制圧をいなした上、反撃までしてきたのよ」

「あ」

梓はハツとなる。恐らく私の手札消費とこの展開力だけを見て、私の圧倒的有利でデュエルが進んでるように見えたのだろう。しかし実際は、むしろりんのほうが盤面を支配してるのだ。

あの日、私が倒してしまったりんという元同級生は、ここまで強い決闘者だったのである。私は改めて思い知らされていた。

「でもって、相手ターンで色々してきたりんとは対照的に、こちらは相手のターンに備えた罠なんて1枚も握ってないって話」

どちらにせよ、スピードデュエルではメインフェイズ2は存在しない。

「ターン終了」

私はいった。

沙樹

LP2400

手札4

□□□□

「《幻獣機ドラゴサック》」「《幻獣機トークン》」「《幻獣機トークン》」

「《幻獣機アウローラドン（沙樹）》——「《ダーク・フラット・トップ

（りん）》

「《サモン・リアクター・AI》□□□□

□□□□

りん

LP4000

手札2

「私のターン、ドローします」

りんはカードを1枚引き、

「《ダーク・フラット・トップ》のモンスター効果を発動します。1ターンに1度、墓地のリアクターもしくは《ジャイアント・ボマー・エアレイド》1体を召喚条件を無視して特殊召喚します」

空母モンスターという特色から予感はしていたけど、完全にあの闇のフィール・カードはりん専用の効果を持っていた。

「私は墓地から《トラップ・リアクター・RR》を特殊召喚します。さらに手札から《リアクトライ・サモン》を発動。私の場にマジック・トラップ・サモンの3種のリアクターが1体以上存在するように、いづれか1体を手札・デッキ・墓地から特殊召喚します。私はデッキから《マジック・リアクター・AI》を特殊召喚」

そして、3種のリアクターを揃えるという本来なら相当大変なはずの作業を、今回もりんは接待なしのガチデュエルでいとも簡単にこなしてきた。

「いきます。私は《サモン・リアクター・AI》《マジック・リアクター・AI》《トラップ・リアクター・RR》の3枚を墓地に送り、デッキから《ジャイアント・ボマー・エアレイド》を特殊召喚します！」

こうして呼び出されるりんのエースモンスター。こいつを出されてしまうと色々と厄介だというのに。

「さらに私は《ブンボーグ004》を召喚」

ここで、新たなブンボーグがりんの場に姿を現し、

「バトルです。《ジャイアント・ボマー・エアレイド》で《幻獣機アウローラドン》を、《ブンボーグ004》で幻獣機トークンをそれぞれ戦闘破壊します」

《ジャイアント・ボマー・エアレイド》からミサイルが発射され、幻獣機の共通効果を持たないアウローラドンは爆破されてしまう。確か、以前のデュエルもジャイアント・ボマーの攻撃でアウローラドンが破壊されていた気がする。

沙樹 LP2400→1500

アウローラドンは攻撃表示だった為、ここで私は手痛い戦闘ダメージを受けてしまい、さらにブンボーグの攻撃によってトークンも1体消滅する。

「私はこれでターン終了です」

沙樹

LP1500

手札4

□□□

□《幻獣機ドラゴサック》□《幻獣機トークン》□

□—《ダーク・フラット・トップ（りん）》□

□《ブンボーグ004》□《ジャイアント・ボマー・エアレイド》□

□□□

りん

LP4000

手札1

こうして、再びターンは私に回ってきた。

「私のターン。ドロー」

言いながら、私はカードを1枚引き抜く。——よし、《バードストライク航空衝突》を引いた。

このカードは私の幻獣機と相手フィールドのカードを1枚ずつ破壊する魔法カード。しかも、このカードはトークンがいると破壊されない幻獣機の共通効果と組み合わせれば相手のカードを一方的に破壊する効果と化する。

このカードがあれば、りんの盤面を突破できる。

「まずは《幻獣機ドラゴサック》のモンスター効果。トークンをリリースし、《ジャイアント・ボマー・エアレイド》を破壊」

再びホログラムのデコイがドラゴサックに搭載され、射出される。今回は途中で妨害されることなくジャイアント・ボマーは胴体に風穴を開けられ、爆破四散。

「あっ」

そんな、って絶望にも似た顔をみせるりん。ジャイアント・ボマーは相手ターンでも動いてくる強力なモンスターだけど、耐性そのものは持っていないのが助かった。

「続けて手札からチューナーモンスター《幻獣機ブルーインパラス》を召喚。このカードを使ってシンクロ召喚する場合、手札の幻獣機を素材に使用できる。私は手札にあるレベル4《幻獣機ブラックファルコン》に、レベル3《幻獣機ブルーインパラス》をチューニング！」

ブルーインパラスがその場で3つの円に姿を変えると、上空からブラックファルコンが降下し、潜っては4の光となり混ざり合う。

「大空より降臨せよ鉄の翼！ その黒き暴風にて全てを焼き掃え！」

シンクロ召喚！ 発進せよ、レベル7《ダーク・ダイブ・ボンバー》！
直後、りんは強く反応し、先ほどまでとは一転、強い怒りを露にし、叫ぶ。

「《ダーク・ダイブ・ボンバー》!? また、ですか？ またあなたは、兄さんのカードを勝手に！」

「兄さん？」

ああ、なるほど。私はここで初めて、金髪ヤンキーを殺されてりんが憎悪を覚える理由を知った。

聞いた話だけど、りんには3つか4つ歳の離れた兄がいる。いや、いたらしい。りんは、兄にとっても懐いており、昔はとても仲睦まじい

兄妹だった。しかし、りんが小5か小6、ちょうど第二次性徴期や思春期に入り始めた頃に、兄がグレたそう。

結果、兄は陽光の高等部には入れず仕方なく近所の底辺高に入学するも中退。その後も悪い噂は尽きなかったらしい。もしかしたら、りんが陽光の高等部に入れなかったのも「あの兄にしてこの妹」というレッテルがあったのかもしれない。

りんは、兄をどう思ってたのだろうか。これは推測の範囲でしかないが、もしいまでも兄に懐いてたのだとしたら、兄に更生して欲しいと願ってたのだとしたら。私は、そんなりんの願いを踏みにじった事になる。そりゃあ、神様だろうと仏様だろうと、あのりん様であつても憎しみを抱くのは当然って話だ。

私は。

「ドラゴサックから最後のオーバーレイ・ユニットを取り除き効果を発動。私の場に幻獣機トークンを2体生成。そして、速攻魔法《バードストライク航空衝突》を発動。この効果で《幻獣機ドラゴサック》と《ダーク・フラット・トップ》を破壊する。消えろ！」

私は、つい暴力的な口調になりながら、《ダーク・フラット・トップ》にドラゴサックをフィールドを乗せて突っ込ませる。

途中、トークンがドラゴサックに搭載されると、トークンは巨大化してバリア装甲となり、ドラゴサックの機体に傷ひとつ付けることなく敵空母に激突。《ダーク・フラット・トップ》は横転し、まさに轟沈とばかりに煙をあげながら床に当たって砕ける。そして爆音をあげながら破壊された。

直後りんの体から闇のフィールドが弾け飛び、

「きゃっ」

と、りんは声をあげた。

やはり、りんから闇のフィールド・カードの影響は完全に抜けきつてはいないが、それでも本体を破壊することに意味はあるらしい。

「りん？」

「りんちゃん？」

私、そして梓は声をかける。

りんは頭を抱え、

「い、痛い！ 頭痛い、気持ち悪い、寒気がする」

突然覚えた体の不調に苦しみがいていた。

「りん、思い出して！」

私は叫ぶ。

「ついさっきまで、あなたは憎悪に囚われてなかったし幻滅だって乗り越えてたのよ。さつき温泉で言ったこと覚えてる？ 確かにりんは私をまだ憎んでたと思う。でも歩み寄ろうとしてたじゃない。私がりんの兄を殺した理由、聞こうとしてたじゃない」

「沙樹ちゃんが、りんちゃんのお兄さんを？」

後ろで梓が小声で驚く中、

「ましてや憎悪の矛先を梓に向ける理由がどこにあつたのよ！」

「やめて！ 頭に響く、耳に響く！」

りんは拒絶を口にし、

「何で私は沙樹さんと仲直りしようとしてたの？ 許せるわけない、まだこんなに憎くてたまらないのに」

「りん」「りんちゃん」

「思い出せない。どうやって私は、兄さんを殺して、私を裏切って、人生を潰してくれた人に向き合おうってできたの？ 自分のことなのに、正気の沙汰に思えません」

頭を抱え、半ば発狂した様子さえ見せながら、

「だ、《ダーク・フラット・トップ》のモンスター効果。このか、カードが墓地に送られた事で、て……手札からレベル5以下のき、機械族を特殊召喚。わた、私は《ブンボーグ002》を特殊召喚」

と、デュエルを続ける。

しかし、

「え、待って？ 何で？ どうして私デュエルを続けてるの？ 頭痛くて、気持ち悪くて、何も考えられないのに。《ブンボーグ002》のモンスター効果。このカードが特殊召喚された事で、《ブンボーグ・ベース》を手札に」

ここで初めて、りんが自分の意識とは別の所でデュエルをしている

事を半分自覚。やはり、りんは闇のファイルに指示されるままに物事を判断させられてたのだ。

そして余談だけど。

りんは先ほど、正気のときの自分が私と「仲直りしようとした」と言った。温泉でのりんの言葉を信用してないわけではないが、正直油断を誘われ寝首を搔かれても構わないという悟り込みだった。私は予想外の形でりんの言葉が真実だと確信を得るのだった。

「りんちゃん!」

叫ぶ梓。そのまま駆け寄ろうとするも、私が止めるより先に、りんが掌を突き出して制止する。

「来ないで! いま来たら、本当に友達を殺してしまいそうなんです」

「りんちゃん?」

「分かってるんです。あずちゃんに罪はないって。でも、あずちゃんがいなければ、私こんな目に遭わなかったんです。信頼してたのに、どうして信頼してた人に酷い目にあわされないといけないんですか? あずちゃんのせいにしないと納得しきれないんです」

りん……。

葛藤する中で、段々闇のファイルに歯向かった行動を取り始める彼女。しかし、直後再び彼女の胸の辺りから瘴気があがり、彼女を包み込んでいく。

「これは!? いや、これはイヤアアアアアアアアアア!」

りんが悲鳴をあげた。

「これは駄目。これは駄目なんです。いままでのショックもクスリも全部戻ってくるんです!」

ドラッグも!?

「思い出した。さつき私、これに心が擦り切れるまでトラウマ掘り起こされて。た、助けて兄さん」

りんの言葉に、私はハッと《ダーク・ダイブ・ボンバー》に視線を向ける。

このカードなら、りんを闇のファイルから救出できるかもしれない。私はいった。

「りん！ 少し強い気付けをブチ込むから、ちよつとだけ我慢して頂戴。トークンをリリースして墓地の《幻獣機デスヴァルチャー》の効果。自身を特殊召喚しレベルを1つ上げる。幻獣機共通の効果でデスヴァルチャーは合計して7になる」

そして、

「《ダーク・ダイブ・ボンバー》のモンスター効果。《幻獣機デスヴァルチャー》をリリースしてレベル×200の効果ダメージを与える。ダメージは1400！」

私が効果の発動を宣言すると、デスヴァルチャーはその姿を7つの爆弾に変え《ダーク・ダイブ・ボンバー》に搭載される。そのままダーク・ダイブはりんの真上に飛び上がった。私はモンスターにフィールを注ぎ込み、

「もし、このモンスターにあいつの思念が少しでも宿ってるなら。加えてりんに少しでも兄の情を残して逝ってたなら。ちよつと力を貸して頂戴、金髪！」

すると。

『チツ、しゃあねえな』

そんな声が、《ダーク・ダイブ・ボンバー》から聞こえた気がした。いや、ただの幻聴じゃない。

「いま」

梓。そして、

「兄さん？」

りん。この場にいるうち2人にも同じ声が耳に届いてたのだ。

「サンキュ」

私はモンスター越しに、金髪ヤンキーに感謝を伝えてから、

「ターゲットロック！ 射出準備完了。《ダーク・ダイブ・ボンバー》、爆撃開始！」『焼き尽くせやオラァ！』

私の声によく形で、ダーク・ダイブはハイテンションな男の声を響かせながら、真下のりんに7つの爆弾をぶちまける。

りん LP4000↓2600

りんは盛大な爆発に巻き込まれ、炎に包まれた。同時に酷い熱風が

私たちまで届いたので、フィールの防壁で梓ごと身を守る。とはいえ、辺りには引火どころか焼け跡ひとつ見当たらなかった。これが本物の爆発なら間違いないく旅館が大惨事になってる程の火力が出てたにも関わらず。

一方、爆炎が収まり中から姿を現したりんは、今回も衣服が焼け焦げ、再び半裸を晒していた。

「兄さん」

りんは、瞼から涙の粒を落とし、とても寂しそうな顔を見せながら、その場で倒れた。彼女の中に残留していた闇のフィールも、私の見立てでは全部消えてるように映った。

「りんー！」

私は彼女の下に駆けようとする。が、そこへ間に割って入るように《ダーク・ダイブ・ボンバー》が降り立った。勿論、私はフィールで指示なんかしていない。まるで金髪ヤンキーが、「まだ危険だ。近づくな」と言ってるようだった。

「無駄よ」

ここでミストランが指を鳴らした。すると、消えたはずの闇のフィールが復活し、三度めの黒い瘴気が再びりんを包み込む。それに伴って肌が死者のように青白いものへと変わっていき、地縛神の眷属モードに姿を変えると、りんはすつと起き上がった。

その瞳からは、意識らしきものを感じない。

「これ、この前の沙樹ちゃんと同じ」

驚く梓に、

「あれの劣化版よ」

私は返す。まさか、りんのこんな姿まで拝まされる羽目になるなんて。

「ミストラン？」

私は睨み、訊ねると。

「一部ドラッグは被害者の見当識を奪ってトランス状態にし、そこを闇のフィールで深層心理まで侵食して支配する。これってき、エロゲによくある催眠スマホとか洗脳ライトみたいとか思わなかった？」

どんな相手だろうと催眠術一発で思いのままってやつ」

突然、ミストランはいいだした。

「それがドラッグと闇のファイル併用の真価なわけよ。たとえ医学上クスリが抜けてると判断された体だろうと、魂や体にドラッグの記憶が刻まれてれば、闇のファイルなら心の闇として引き出してトランス状態にできる。さらに暗示や後催眠を深層心理に刻み込めば、さつきみたいにキーワードひとつで簡単に再支配できるわ」

「そんな！」

なら、幾ら私たちがりんを正気に戻しても、いつでも何度でも洗脳できてしまうって話じゃない。

「ま、そんなワケだからこいつを助ける事は不可能よ」

ミストランが絶望にも似た言葉を発した所、不意に彼女のデュエルディスプレイからドォゴォンボールGTの『D。DAN。DANッ 心魅ンかれてく』が鳴り、

「つと悪いちよつと電話」

つて、フランクなノリで一言断り、ミストランは通話に出る。つてどうか、GT世代なんだこの人。

ミストランは司令(37)のクローンなのだけど、仮に外見年齢当時の記憶を継いでると仮定したら、実はリアルタイムでGTが放送されてた時代の人間って可能性が浮上するのだ。

「ん？ 何？ いまその任務の途中だけど。……は？ え、ちよつ、待つ、今更言われても手遅れに決まってるじゃん！ ふぎけんなジジババア！」

なんか、あちらサイドで良くない事が起きたらしい。ミストランは通話先に怒声をあげた後、

「チツ、了解。その場合解決を優先して手段は選ばないけどいい？
ん、じゃあそれ言質って事で。この会話は録音してるから」

そういつてミストランは通信を終えると、こちらに向かって、
「事情が変わったわ。いまから、このりんって奴の洗脳支配を解く。協力して」

「は？」

あの、その洗脳しやがったご本人が何を。

「いや、言いたい事は分かるわ。私がアンタだったら間違いない『何言ってるのコイツ』って思っただろうし。ついさっき、プライドのやつが急に作戦中止を言い渡してきやがったのよ。何でもこいつは手を出したら駄目な奴だったみたいでさ。だから解き方教えるから代わりにデュエルで救出して欲しいのよ」

「さっき、りんを助ける事は不可能とか言わなかった？」

私が皮肉交じりにいうと、

「あれ？ ハツタリだけど何か？」

ミストランは当然のようにいった。しかし、言い回しが古い。

しかし、何だろう。こうして接すると、やっぱりミストランは若かりし日の高村司令なんだろうなというのがはつきり分かる。偉そうかつ高圧的にみえてフランクな所とか、こういう時の判断の早さとか、プライド高そうで投げ捨ててる所とか、妙に残念な所とかね。

「でも、闇のフィールはそっちで支配下に置いてるんでしょ？ なら、そっちで洗脳解除すればいいじゃない」

私が訊ねると、

「ああ、悪い。一度『ダーク・フラット・トップ』ぶっ潰された時点で不可能になった」

「は？」

「さっきのエロゲネタで例えると、その時点ですでにスマホやライトが破損したも同然なのよ。でも、現存してる暗示は残ったままだから、新たに内容を追加できないだけで、被害者は支配されたままだし、後催眠で再洗脳できる。でもって、今回は後催眠の中に解除ワードを入れてないから、被害者は洗脳されっぱなし。OK？」

「OK」

すつごくOKしたくないけど。

「なら教えて頂戴。どうすればりんを助けられるのか。それと、デスデュエルの解除方法も」

「デスデュエル？……ああ、あれね」

ミストランはいった。

「闇のフィールのほうは、ぶっちゃけ、闇のフィール・カードを駆除する。フィールを全損させる。自力で心の闇を脱却する。それらを可能な限り満たした状態でフィール・カードで後催眠を駆除すれば何とかなるわ。手間を考えると、まず何も考えずデュエルの勝利を優先するのを勧めるわ。闇のフィールが消えれば、連鎖的に心の闇からも脱却できる可能性も高いし。カードの駆除はさつき破壊したからすでに達成済だし、後催眠の駆除は《洗脳解除》を使うなり洗脳系のフィール・カードで後催眠を上書きするなりでたぶん問題ないはずよ」

何気にミストラン、今後も出会うであろう、りん以外の被害者にも対応できる形で教えてるって話だけど、気づいてるのだろうか。

で、

「地縛神のデュエルリングは、こっちは私が何とかするわ」

ミストランはいうも、

「もし、あなたが間に合わなかったときの為、一応私にも教えて頂戴」と、私はちやつかり手段の聞き出しにかかる。しかし、

「デュエルに支障がでるやつだから駄目」

そこは残念ながら断られてしまった。

「了解」

仕方ない。私は再びりんに対峙する。

「……」

りんは、全くの無反応だった。何度も心の闇を抜け出されたら困るので人格をオミットでもされたのだろう。

「デュエル続行。そしてバトルフェイズ！ 《ダーク・ダイブ・ボンバー》で《ブンボーグ004》に攻撃」

再び上空に上がり、爆弾を落とすダーク・ダイブ。しかし、

「《ブンボーグ004》のモンスター効果。デッキからブンボーグを墓地に送り、ダメージ計算の間、そのレベル×500だけ攻撃力をアツプします。私はレベル9 《ブンボーグ009》を墓地に送ります」

「な、ちよつ、え？」

私が激しく動揺する間に、

《ブンボーグ004》 攻撃力500↓5000

相手モンスターへの攻撃力は、さらつと5000に上昇。

(駄目！ 負ける)

《ブندوق004》は真上から落ちてくる爆弾を、カラーボールペンを模した銃のカラフルな光線で弾く。さらに、弾いた爆弾のひとつが《ダーク・ダイブ・ボンバー》に当たって爆発。

金髪ヤンキーの想いが籠ったモンスターは、いとも簡単に破壊されてしまった。しかし、不思議な事に私のライフは削られない。

「この効果を発動した場合、ターン終了時まで相手は戦闘ダメージを受けません」

りんがいった。なるほど、助かった。

「沙樹ちゃん、大丈夫？」

しかし、大型モンスターを対処された事を重くみたのか、梓が心配して声をかける。正直いうと、このミスは滅茶苦茶痛い。けど、私はなんとか、

「たかがモンスターが1体倒されただけって話よ。大丈夫。私はこれでターン終了」

と、強がってみせた。

沙樹

LP 1500

手札 2

□ □ □

□ 《幻獣機ドラゴサック》 □ 《幻獣機トークン》 □

□ — □

□ 《ブندوق004》 □ 《ブندوق002》 □

□ □ □

りん

LP 2600

手札 1

「私のターン。ドローします」

りんは、淡々とカードを1枚引き抜き、

「フィールド魔法《ブندوق・ベース》を発動します」

と、《ブンボグ002》の効果でサーチしたカードを使用。辺りの光景が、ランドセルをモチーフにした基地へと切り替わる。

「《ブンボグ・ベース》の効果でフィールドのブンボグの攻守は500アツプします。ですけど、私はここでスキル《ブンボグ脱出》を使用します。この効果で私のフィールドおよびEXデッキに存在するブンボグを任意の数だけ手札に戻します」

りんは宣言し、ここでわざわざフィールドに展開されていた002と004を両方とも手札に戻してしまう。

「そして《ブンボグ・ベース》第二の効果を発動します。手札のブンボグを任意の数だけデッキに戻し、その数だけカードをドロージャス」

「あ」

そういうことね。これで2体のブンボグがドローに変換され、りんの手札は3枚になる。

「チューナーモンスター《ブラック・ボンバー》を召喚」

出てきたのは顔のついた黒い爆弾。レベルは3。

「《ブラック・ボンバー》は召喚成功時に機械族・闇属性・レベル4のモンスターを効果が無効にして墓地から蘇生します。私は《トラップ・リアクター・RR》を蘇生」

これで、りんのフィールドにはレベル4とレベル3チューナーが存在。つまり、今度はりんがアレを召喚する番という話だ。

「私は《トラップ・リアクター・RR》に《ブラック・ボンバー》をチューニング。夜間襲撃、準備完了。爆撃機発進準備^{スリーツィワン}3、2、1、——ゼロ。作戦開始！^{ミッション・スタート}シンクロ召喚！ 舞い上がれ、レベル7《ダーク・ダイブ・ボンバー》！」

やっぱり。

推測通り私のモンスターと入れ替わりに、今度はりんのフィールドに《ダーク・ダイブ・ボンバー》が出現。

「さらに魔法カード《死者蘇生》。私の墓地から《ダーク・フラット・トップ》を守備表示で特殊召喚」

え？

「そして《ダーク・フラット・トップ》のモンスター効果。墓地から《ジャイアント・ボマー・エアレイド》を召喚条件を無視して蘇生します」

「げっ」「げっ」「うそっ」

私、ミストラン、そして梓。この場の三人が揃って顔を歪める。《ブラック・ボンバー》の時点で《ダーク・ダイブ・ボンバー》こそ私は推測できてただけけど、そこから更に《ダーク・フラット・トップ》と《ジャイアント・ボマー・エアレイド》を揃えてくるとは誰も思わなかったのだ。

特に《ジャイアント・ボマー・エアレイド》は通常的手段では召喚できないモンスターだしね。

「不味いわね、これ。《ダーク・ダイブ・ボンバー》の効果でどっちかをダメージに変換したら、鳥乃負けるじゃん」

ミストランがいった。

……。

……………。いや、確かにそうなんだけど。

（いま気づいたけど、ぶっちゃけ、ミストランが私を応援する必要って皆無よね？）

別にりんを救出するのは、私が負けてからミストラン本人がやったっていいわけだし。負けて私が死んだ所で、ミストランの立場的には全く関係ないやつじゃないの？ 読めない。ミストランの考えが。司令のクローンだけに、深い意味なくライブ感で味方面してる可能性もあるけど。

「《ダーク・ダイブ・ボンバー》のモンスター効果を発動します」

りんがいった。

「私は《ダーク・フラット・トップ》をリリースし、レベル×200、1600点の効果ダメージを沙樹さんに与えます」

やっぱりこつちを使ったか。ダーク・フラット・トップ 空 母は合計8つの爆弾に変化しダーク・ダイブに搭載されると、私の真上に飛び上がる。

「沙樹ちゃん！」

梓が悲痛な声を発する中、

「爆撃開始」

りんの声と同時に爆弾が投下される。このままだと間違いなく梓も巻き込まれる。私は手札を1枚墓地に送って、

「《幻獣機・ピーバー》を墓地に送りダメージの代わりにトークン生成」
モンスターが落した8つの爆弾は途中で光に包まれ、8体で1組の小型のデコイに姿を変える。

「おっ、耐えた」

ミストラランがいう。しかし直後、

「《ジャイアント・ボマー・エアレイド》のモンスター効果。相手がモンスターの召喚・特殊召喚・カードのセットのいずれかをした時、1ターンに1度、そのカードを破壊して800ダメージを与えます」

と、りんがいう。梓は悲痛な顔で、

「そんな。また執拗に効果ダメージなんて」

アテナバーン1キルの使い手が言っただけじゃない。

「それに、フィールドが埋まってピーバーの効果も使えないのに」

それも梓がいつてはいけない。メインモンスターゾーン5つのマスターデュエルで先攻1ターン目に12回アテナバーン^{USUAL参照}して《幻獣機・ピーバー》の効果^{USUAL参照}を5回使わせたうえで勝利した人がいつては。

幻獣機・ピーバー

星3 / 風属性 / 機械族 / 攻1500 / 守1200

(1) : このカードを手札から墓地に送って発動する。ターン終了時まで、自分が効果ダメージを受ける場合、代わりに自分フィールドに「幻獣機トークン」(機械族・風・星3・攻/守0) 1体を特殊召喚する。この効果は相手ターンでも使用できる。

(2) : このカードのレベルは自分フィールドの「幻獣機トークン」のレベルの合計分だけ上がる。

(3) : 自分フィールドにトークンが存在する限り、このカードは戦闘・効果では破壊されない。

(遊☆戯☆王THE HANGSオリカ。当時のカード名は《幻獣機・コウライデン》)

アテナ

効果モンスター

星7／光属性／天使族／攻2600／守 800

(1)：iターンに1度、「アテナ」以外の自分フィールドの表側表示の天使族モンスター1体を墓地へ送り、「アテナ」以外の自分の墓地の天使族モンスター1体を対象として発動できる。その天使族モンスターを特殊召喚する。

(2)：このカードが既にモンスターゾーンに存在する状態で、このカード以外の天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された場合に発動する。相手に600ダメージを与える。

(OCG)

「大丈夫よ」

地味に過去の痛い敗北を思い出したけど、私は何とか梓に伝え、

「ピーバーの効果。800ダメージを受ける代わりにトークンを発生」

「でも沙樹ちゃん、フィールドはもう」

「《ジャイアント・ボマー・エアレイド》の効果は、破壊して800ダメージを与える効果。たとえ処理は同時扱いでも、ダメージを受けるタイミングにはすでにトークンが破壊されモンスターゾーンに空きがひとつ空いてるから、ピーバーの効果は有効って話よ」

遊戯王wiki曰く《マテリアルドラゴン》の裁定がこのケースでも有効なら。

正解かはともかく、今回はデュエルディスクが感想より異論受け付けますこの裁定を採用したようで、《ジャイアント・ボマー・エアレイド》が射出したミサイルを光が包み、今回も新たなデコイに姿を変える。

「カードをセット。そして、《ダーク・ダイブ・ボンバー》と《ジャイアント・ボマー・エアレイド》でトークンをそれぞれ戦闘破壊します」

このターンのバーンはさすがに打ち止めのようで、2体のモンスターがホログラムのデコイをそれぞれ爆撃。

「ターンを終了します」

りんはいった。

(さてと)

私は思った。そろそろ無茶してでも決めないと、次はなきそうだって。

沙樹

LP1500

手札1

□□□

「《幻獣機ドラゴサツク》□□

□―「《ダーク・ダイブ・ボンバー（りん）》」

□□「《ジャイアント・ボマー・エアレイド》」

「《セットカード》□□

「《ブンボーグ・ベース》

りん

LP2600

手札0

「私のターン」

言いながら、私は指先にフィールを込め、オリジナルの闇のフィールを発生。

「沙樹ちゃん。それ」

梓も、この能力はアインスとのデュエルで見ている。

「もしかして、使うの?」

訊ねる梓に私はうなずいた。

「ただ、この力を使ったら私のフィールは殆ど空に近くなるわ。もし、仮にりんを助けられても、その後ミストランが攻撃してきたら」

私はデッキホルダーを開き、中から《強制脱出装置》を抜いて梓に手渡す。

「これを使って、梓は全力で逃げて」

本当は、ミストランと連戦に陥る可能性がある以上ダークドロローは使いたくなかった。しかし、ここでデュエルに負けたら元も子もない。

私の言葉に、梓は思い悩むように一度俯く。しかし、程なくして。

「大丈夫」

梓はカードを受け取りながらも、

「私、実はたったひとつだけ策があるから」

なんて、梓はいった。

それが強がりなのか真実なのか、私には分からないけど。

「ありがとう」

私は梓の頭を撫でる。

「えへへー」

ここで梓は天使の笑み。

「そこ、イチヤイチャするな」

会話が聞こえてたか否か分からないけど、ミストランが苛々を口にしたので、

「悪い悪い」

私はいって、

「じゃあ、ちよつと勝負に出るわ。スキル発動。暗き力はドローカードをも闇に染める！——ダークドロー！」

カードをドローする。こうして手札に加わったカードを見て私は、
(そうきたか)

と、思った。

「《幻獣機テザールフ》を召喚。効果により、トークンを発生」

私は、まず元々手札に握ってたヘリ型の幻獣機を場に展開。

「《ジャイアント・ボマー・エアレイド》の効果を使います」

りんはいった。いや、言うしかなかった。私がこのモンスターを出した時点で、ジャイアント・ボマーがこの効果を通すチャンスはここを逃せば無くなるのだから。

「召喚されたテザールフをトークン発生前に破壊して、800ダメージを与えます」

「また、バーンダメージ」

梓が反応する中、私に向かってミサイルが飛んでくる。今回はファイル残量の問題で防ぎきれない。

「梓、伏せて！」

私はいいながら、両手を広げ、負傷を覚悟して梓の盾になる。が、な

んと梓はここで自ら私の前へと踏み込んで、

「《ハンマーシユート》！」

いつも私を制裁してきたハンマーを出し、ミサイルに向けて振りかぶり、弾き飛ばしてしまったのだ。

ミサイルは減速しながら弧を描く軌道で天井を舞い、途中で爆発。衝撃が私たちを襲うけど、肉体にリアルダメージを負うほどではなかった。

沙樹 LP1500↓700

「あず、きゃっ！」

まさか、梓がこんな行動に出るとは思わず、私は目をぱちくり。

梓は笑顔で、

「たまには、私にも沙樹ちゃん助けさせてよー」

なんて言ってくれる。

私は嬉しさにふふっと笑い、

「ありがとう」

と、言いながら、たったいま発生したトークンをフィールドから取り除く。

「幻獣機トークンをリリースし、ドラゴサツクのモンスター効果を発動。1ターンに1度、フィールドのカード1枚を破壊する。私は

《ダーク・ダイブ・ボンバー》を破壊」

この時、りんが未だ先ほどの効果を使ってないようだったら、私は間違いなく《ジャイアント・ボマー・エアレイド》を対象にしていた。りんも、それを分かって先ほどジャイアント・ボマーの効果を使ったのだ。

再びデコイであるトークンがドラゴサツクの背に搭載。射出され、《ダーク・ダイブ・ボンバー》の腹に風穴を開けて破壊する。

そして、ダークドロウで引いたカードを私は使用。

「魔法カード発動。《RUMアストラル・フォース》！ このカードは私の場の最もランクの高いモンスターを対象に発動され、同じ種族・属性でランクが2つ高いモンスターにランクアップさせる」

「沙樹ちゃんのフィールドにいるのは、ランク7・機械族・風属性の《幻

獣機ドラゴサック』だから」

梓がいうと、ここでりんが、

「ランク9・機械族・風属性、……あ」

ここで、初めてりんが僅かな反応をみせる。どうやら、あのカードは思ったよりもりんの印象に残ってたらしい。あの日のデュエルで、目の前で発生した新たな天然のフィール・カードのことは。

「私はランク7『幻獣機ドラゴサック』でオーバーレイ・ネットワークを再構築」

天井に銀河の渦が出現すると、ドラゴサックの機体が巨大な靈魂となつて昇り、取り込まれていく。

「幾多もの幻獣機を搭載せし艦よ。いまここに舞い降り、禁断の力を解放せよ。エクシーズ召喚！ 発進せよ、ランク9『ミラージュフォートレス幻子力空母エンタープラズニル』！」

こうして銀河の中から降下してきたのは、一隻の空母。

実をいうと、誕生の瞬間が記憶にないクリアウイングにクリスタルウイング、ダークドロローで書き換えたモンスターを除くと、現在唯一最初から自分のカードとして誕生した天然のフィール・カードである。

「全く、運命って面白いわよね」

私はいった。

「りんの目の前で誕生し、その時はりんの人生を崩壊させる原因になったカードが、今度はりんを助けるために動いてくれるんだから」

あの時。

たとえ敗北しても、意識を飛ばされ気絶さえしなければ、りんは私にドラッグを打たれる事もなく、学園の信用を全損することも無かつたのだ。しかし、そんな過去の実績を持つエンタープラズニルなら、りんのライフを0にし、そのままりに刻まれた後催眠さえ除外できてしまうかもしれない。

だけど、とりあえずまず。

「『幻子力空母エンタープラズニル』の効果。自身のオーバーレイ・ユニットを1つ取り除き効果を発動。相手フィールドのカード1枚を

除外する。私が除外するのは《ジャイアント・ボマー・エアレイド》！」直後、空母から不自然に主砲のビームが放たれ、りんのモンスターが跡形もなく消滅。

「そして、バトルフェイズ！ エンタープラズニルで、りに直接攻撃」

私は攻撃宣言。直後だった。りの伏せカードが表向きになり、「兄さんを、兄さんの形見を返してください」

りは呟くのだった。まるで、またエンタープラズニルに意識を外される事を恐れるように。いましか私に伝えるチャンスがないと言いたげに。

伏せカードは《深すぎた墓穴》。発動時に自分か相手の墓地からモンスターを指定し、次の自分スタンバイフェイズに墓地から自分のフィールドに蘇生する罫カード。デュエルディスクから確認するに、選択されたのは私の墓地の《ダーク・ダイブ・ボンバー》だった。

私はいった。

「安心して頂戴。今日の夜にでも、ちゃんと返すわ。お互い無事ならね」

「今度は、消えたりしませんか？」

「りん？」

「会う資格がないとかいって、沙樹さんまで、私の前から消えたりしないでくださいね」

りん……。

「どれだけ憎くても、殺意を覚えても、幻滅しても。結局、私の最後のジョーカーは沙樹さんなんです」

「守るわ」

「ここでりんは、「二度と裏切るな」ではなく「二度と消えるな」と言った。その理由も。」

私は、りの言葉を強く胸に受け止め、

「エンタープラズニル！」

私はモンスターの主砲をりんに向けて発射。フィールドの籠った虹色の光が、瞬く間にりの全てを飲み込んでいく。

りん LP2600↓0

りんのライフポイントが0になった。

虹色のビームはまだ続いている。しかし、りんが立ってた位置から浮かび上がる光の粒子を見て、彼女が消滅しかけてるのがすぐに分かった。

「あれって」

梓が顔を青くして呟く。粒子の様子が、モンスターがリリースされるときの演出に似ていたので察したのだろう。

「ミストラン！ 本当に助けてくれるの？」

私は叫ぶ。もはや一刻の猶予もない。床の広がる光の模様も収縮を始めている。

「宇宙を貫く巨乳撲滅の雄叫びよ、遙かなる時をさかのぼり銀河の源よりよみがえれ!!」

ミストランは、自分を基点にフィールの光を渦巻かせながら、なにやら口上を演出していた。

モンスターの砲撃が終わる。

「顕現せよ、そしてバレンタインチョコを胸で挟む破廉恥巨乳は死ぬ

キャラクターアイズ・タキオン・ドラゴン

！ 銀河眼の時空竜！」

しかし、間に合わなかった。意味不明なバレン投稿日時参照タインネタは無視するとして。

一体のギャラクシーアイズが姿を現すのと入れ替わりに、半透明のりんが光の模様と一緒に消滅したのが、はっきり見えたのだ。

「そんな」

「りんちゃん」

梓、そして私が悲痛な声でいう。敵を信じた私が馬鹿だったのだけど、ショックで怒る気にもなれない。

「大丈夫よ。問題ない」

ミストランがいった。まさか最初から消すつもりで？

直後だった。タキオン・ドラゴンの体が光ると同時に、辺り一面がアニメや映画のタイムトラベルを思わせる流動する光の世界に飲み込まれる。そして、悲劇の瞬間が逆再生されるように光の模様が再び

広がり、同時に光の粒子が集まって消滅したりんが肉体を取り戻す。「タキオン・ドラゴンは光速を超え、時空をさかのぼり未来を創り直す。消えろ、デュエルリング!」

直後、りんを残したまま、光の模様だけがはじけ飛び、同時に辺りの光景は元々いた脱衣所に戻る。りんは、デュエル中焼き焦げたはずの浴衣を着た姿で意識を失い倒れていた。

「りんちゃん!」

梓が、りんの下に駆け寄る。

「地縛神の模様は、デュエル直後にフィール・カードの能力で破壊できる」

ミストランがいった。

「だけど、最低でも天然のフィール・カード以上の出力と膨大なフィールを消費しなくちゃいけないわ。地縛神を持つてる鳥乃なら効率がいいけど、それでもアンタの力だと、クリアウイングかシャチの地縛神を使い、ダークドロークらいのフィールをぶちこまないと破壊できないわ」

いまの私のフィール量だと、他にフィールを消費してなくてもダークドロークは2回が限度。むしろ少し足りないまである。なるほど。デュエル中ミストランがデスデュエルの解除方法を教えてくれなかったのは、情報漏洩の回避でもなく、本当に「デュエルに支障がある」からだっただ。

しかし、そんなミストランもデュエルしてないに関わらず、現在フィールが半分近く減っていた。ミストランは私とは比べ物にならないほどフィールを持つてたはずなので、そんな彼女でさえ地縛神なしでは2回が限度ということになる。しかも、普通のフィール・カードより高いフィールを所有する《No. 107 銀河眼の時空竜》を使つてこの結果なのだ。

結果的に私なしでデスデュエルは対処可能であると判明した。しかし、逆にいうと、私以外がデスデュエルの解除に回るのは現実的ではないことがこれで確定してしまったのだ。

まあ、それはともかくとして。

「一応言っておくわ。ありがとう。でも、いいの？ そんな事、敵サイドに教えてしまっても」

私が訊ねると、ミストランは。

「できれば、私がバラしたことは他所に漏れないようにしてくれると助かるわ」

言いながら、傍の自販機に小銭を入れ、瓶牛乳を買って飲む。

そういえばプライドの作品って最低限人間の生活を与えられてなかったんじゃない？

「給料。出るようになったんだ」

私がいうと、

「ロリコン軍人から非公式にね。本来の所属からは未だ貰えてないわ」

ああ。緒方おがた銃ライフルか。どうやら彼は、私が思ってる以上に敵組織の良心なのかもしれない。

「フェンリルとガルムは元気？」

今度はミストランが訊ねてきた。私はうなずき、

「元気よ。ガルムは、あの極上の女体を一度好きにしてみたいけど、いつもリアルファイトと勘違いされてボコボコにされるわ」

「しまったわ。ガルムをそっちに寄越す前に暗勁教えとけば良かった」

それ教えてたら、いまごろ私お空の上って話よ？

「フェンリルは、木更ちゃんって子に懐いてる。それに昨日、義妹もできたみたい」

「その妹には注意しておいたほうがいいわ」

「満智子のこと、知ってたんだ」

「まあ、ね」

ちよつと歯切れ悪く応えるミストラン。そういえば、元々デュエル兵士も作品もプライドが関わってる時点では同じなんだっけ。となると、組織内では似た立場に配属されてるのかもしれない。

それともうひとつ。

「ミストラン？ あなたも、ハングドに来てみる気はない？」

私はいった。この誘いをしたのは、ある意味これで二度目になる。

「メンバー殺した奴によく言えるわね。恨みとかないの？」

「ぶっちゃけ、すつごいある」

私は、はつきり肯定する。

「加えて私も一度殺されかけたし、恐怖も脅威も感じてる。正直、今日ミストランとエンカウントしたとき、『あ、詰んだ』と思ったって話だしね。正直、女性を前にしておいて、命の危機を感じるあまりレズの欲求覚えないの、あなたくらいって話よ？」

「なら」

「けどミストランには助けられもしたし、今回だって最終的には助けられたし、ぶっちゃけ敵対したくない。あなたがあつちで人間扱いされてないのも気に喰わないし」

「……」

ミストランは、数秒ほど無言だった。しかし、

「ごめん。私はプライドを見捨てれないわ。フェンリルとガルムが去った以上、余計にね」

ミストランは断る。それも、苦虫を噛み潰したような。間違いなく私の誘いに乗りたい心もあるのが分かる顔で。

「そう」

「私だってプライドは嫌いよ。人間と見てくれないのも気に喰わない。けど、どれだけ嫌っても結局最後には親は裏切れないものよ」

「親」

その言葉は、私にとってはすつごい不快なワードだった。けど、ミストランは続けて、

「結局さ。殺したいときえ思う親でも、いざ親が殺されかければ助けようとしてしまうのが子供なのよ。プライドは死んでないし、命の危機に遭ってもないけど、今回でそれを痛感した。アンタにも、分かる日がくると思うわ。きつと」

言ってから、背を向け歩き出すミストラン。しかし、のれんを潜ろうとした辺りで、ふと足を止め、

「あ、忘れてた。一応、鳥乃を脅威として討伐しろって命令も貰ってた

んだった」

さらつとやばい発言を口にする。

ミストランは、一回私に振り返って、

「とはいえファイル消費したから時間を改めて、大体本日、つか明日0時頃、人員集めて旅館襲撃しに行くわ。作戦会議とか諸々あるから時刻まで攻撃行動はなしの方向で。確か傍にハイキングに使われる山あつたでしょ？ 10分遅れくらいに私頂上にいるから」

とか、滅茶苦茶なことを言い残し、今度こそミストランは脱衣所を後にした。

私は、

「なにそれ」

言ってる意味が分からず、つい頭を抱えそうになる。

何故、わざわざ襲撃時間を伝えるのか。自分が何処にいるのか、そして10分遅れと時間までしつかり伝えてくるのか、分からない。しかも、それまで攻撃しないとか、時間まで休めといたげだ。

でも……。

段々、私は思えてきたのだ。ある意味、これは柵から牡丹餅なのではないかと。

思えば、私の不調はミストランとの一戦から始まったのだ。
MISSION5参照
あの敗北から立て続けに任務成功とは言い難い事態が続き、拳句の果てにまたもやミストランが動いたことで増田を失った。

私は、ミストランを乗り越えなければならぬ。ミストランとの因縁を解決しなければ、今回の旅行の目的である「私のメンタルの完全復帰」を成し遂げる事はできないのだから。

「沙樹ちゃん。りんちゃんが」

ここで、梓が私を呼んだ。

確認すると、りんはちようど意識を取り戻した様子だった。見た所、すでに闇のファイルは残ってない。加えて目を開けたりんは、ミストランに襲われる前の、私たちの知る人畜無害を絵に描いた顔をしていた。

「おはよう、りん。気分はどう？」

私は訊ねる。

「最悪です」

りんは、笑顔でいった。

「頭が痛くて、気分が悪くて吐き気がして、寒気もあって、昔のトラウマがガンガン脳裏に蘇ってます。気が変になりそうです。それと、嫌な夢を見た後みたいになんか寂しくて、妙に気が立って何でもない事に怒ってしまいそうで、ふたりがいなかったら絶対訳も分からず喚いてました。頭も正常に回ってなくて、上手く伝えることもできません」
少なくともありとあらゆる不快がりんを襲ってる。そう言ってるのは凄く分かった。加えて、そんな現状を正確に伝える語弊力が残ってないことも。笑顔でフレンドリーに言ってくれてるけど、本当はいま死ぬ程苦しい中にいるのだろう。

それでも、りんは無事生きてる。

妙子を死なせ、ロコちゃんの手を汚し、神簇の心に深い影を残し、増田も失った、そんな私が、ついに大切なものを助けることができたのだ。これで償えたなんて言う気はないけど。

「酷いですよ沙樹さん。一思いにやってくさってお願いしたのに」

「そんな約束、私が守ると思っただ？」

りんを殺してくれなんてね。だから、私は言っただけ。

「私は、りんのジョーカーじゃないって話だから」
って。

現在時刻17:30。

「お待たせしました」

脱衣所からりんがやってきた。私はマッサージチェアから半身起こし、

「もう平気なの？」

「はい。応急手当程度ですけど、何とか回復できました」

と、りんは笑顔をつくっていった。さらにくすりと笑って、

「まず、あずちゃんはどうしたとは聞かないんですね」

「いくら梓が一番大事でも、いま真っ先に心配すべき事の区別くらいつくわ」

「そうですか。ありがとうございます」

りんは嬉しそうに感謝を口にした。

あの後、りんは滋養といい梓と改めて温泉に向かった。曰く、あの温泉にはドラッグ抜きやフィールダメージ等にも効能が働くのだとか。

私は、ふたりの時間を与える為にも一度脱衣所を出て、休憩スペースに設置されたコイン式のマッサージチェアでゆっくり体を休めていた。先にりんが戻ってきたとき、丁度チェアのコインタイマーが終了した所だった。

梓はまだ温泉に入ってるのだろう。確かにりんは洗脳時に梓に危害を加えたが、同時にその洗脳が弱まったときの反応も知っている。だから、りんが梓に手をかける事はないはずだ。

「良かったわ。にしても、フィールダメージにも効く温泉って何って話だけど」

すると、

「実は、あの温泉にはフィール・カードを使ってるんです」

りんはいった。

「私がこつちに来たとき、温泉で効率的にドラッグの禁断症状を治せ

ないかなと思つて、専用の装置を導入して貰ったんです」

「専用の装置？」

「ポンプとかに特殊なデュエルディスクみたいなものを取り付けたんです。これで、汲み上げた温泉を《神の恵み》化させて、さらに《治療の神 デイアン・ケト》とか《洗脳解除》とかのフィールを溶け込ませながら流してるんです。そしたら、効能に即効性のある万能温泉になってくれて。天然のカードは《神の恵み》だけで、他のカードは全部養殖物ですけど」

なるほど、フィール・カードにそんな使い方があると。私はりんの発想に感心する。

ただ、疑問がひとつ。

どうして、りんはそんな技術を温泉に導入できたのだろうか。《神の恵み》の天然のフィール・カード版なんてものの出所も気になるし。「一度出てしまえば元の温泉の効能しか残らないので、慢性の症状には効果が薄いのですけど、怪我やその場限りの疲労には効きますし、ドラッグも物によっては効果があります。少なくとも沙樹さんに打たれたドラッグは効果がありました」

とはいえ、慢性の症状も浸かっている間は効果があるのだろう。木更ちゃんの妹の水姫ちゃんも、普段は体が弱いんだけど《No. 49 秘鳥フォーチュンチュン》を身に着けている間は元気でいられるように。

「そして、フィールの温泉ですから当然フィールが関係した症状には効果抜群です。だから闇のフィールの損傷にも効果があると踏んでみたら」

「まさか」

訊ねると、りんは満面の笑みで、

「はい。バツチリ効きました」

これは凄いと思つた。現時点でも闇のフィールに侵された被害者は腐るほどいるだろうし、今後この温泉の需要は高い。問題は、温泉がフィール・ハンターズに知られてしまったら間違いなく狙われるという点だけだ。

「そっか」

この件に関する相談はまたあとにするとして、私は素直にりんの回復を喜ぶ。……ただ。

「ところで、りん？　そういえば洗脳中の記憶は？」

私は意識して大した問題じゃなさそうに訊ねる。

先述の通り、りんが梓に手をかける心配はしてないが、逆にいうと、もし覚えてるなら、梓に暴力を振るった記憶をりに刻み込んでしまった形になるのだ。

「ごめんなさい。覚えてないんです」

「そう、ならいいわ」

良かった。私は内心でほっと安心したが、

「でも。やった事は想像ついてます。あずちゃんに酷いことをしたんですよね？」

「え」

そんな事は！　私はなるべく自然に嘘の否定をしようとしたけど、「大丈夫です。もう、先ほど温泉であずちゃんに白状させましたから」

りんは、笑みに少しだけ影を落とした顔で、

「実際、そう考えてたときもあつたんです。沙樹さんがあずちゃんしか見えてないって自力で気づいたときと、それを沙樹さんの口から改めて言われたとき」

やっぱり。

りんの梓への憎悪は、単に洗脳だけではない彼女の隠れた本音がみえていた。りん自身に後ろめたい感情があつたからこそ、洗脳中の記憶がなくても分かかってしまったのだろう。

「責めないんですね、沙樹さん」

りんはいった。

「私、素であずちゃんに憎悪や殺意を覚えた事があるって言ったんですよ？」

ああ。本当に憎悪や殺意だったのか。

正直な所、素の感情自体はもう少しだけ平和なもので、それが闇のファイルで歪められたものと認識していたかった。まあ、どちらにし

ても。

「他の人ならともかく、それでりんを責める権利。私、ある？」

その一番の原因な私に。

「権利の問題じゃないと思いますけど？ 大切な人を傷つけた相手なら、どんな理由があっても怒っていいと思いますよ」

「それをりんが言うの？」

大切な兄を殺した人と仲直りしたいとか、普通ありえない事してる人が。

しかし、当のりんは何故そう返されたのか本当に分かってなさそうに、

「どうして？」

なんて首をかしげる始末だった。

「あずちゃんにはもう少し長く温泉に浸かって貰ってます。お腹ですから、万一を考えて。ですね」

そういえば、あの温泉はフィールの効果で怪我にも効くんだったけ。

「ありがとう」

「勿論。私はすぐ自分の非は認めて謝りましたよ？」

にっこり。りんの笑顔の追い打ちが私を襲う。

「ごめん」

私はまだ、りに何一つ謝れてないのだった。

「ドラッグのことも勿論だけど。あの金髪ヤンキー、りんのお兄さんだったのね」

「はい。知ってたのですか？」

訊ねるりに私は、

「洗脑中のりんが言ってた。りんとお兄さんの関係は噂では知ってたし、そうでなくても肉親を殺されれば最悪の裏切りに見えるわよね？

酷い事したわ」

しかし、

「そうじゃないでしょうっ？」

「えっ？」

「謝るときは、格好もつけず“ごめんなさい”ですよ」

「っ」

私は、りんの言葉につい笑みをこぼした。そういう所よ、あなたが優等生とか真面目ちゃんとか言われ続けるの。

「ちよつと。どうして笑うんですか？」

「いや何でもないわ」

私は一拍置いて、

「ごめんなさい」

「はい」

満面の笑みで応じるりん。

……。やっぱり、これで解決って話は絶対ない気がする。

「ねえ」

私は、気づくといっていた。

「本音を聞かせてくれない？ りんは、いま私にどれだけ恨みや失望を残してるの？」

「え？」

りんの顔がきよとんとしたものに変わる。私は続けて、

「温泉のときは、結局、お互い金髪のことより裏切られたショックのほうが大きかったんだって思った。でも、そんな筈はなかった。肉親殺されて誰が許すって話でしょ？ その上自分の人生壊されて、誰が能天気になんて直りしたいって言い出すのよ。全部私に都合の良い言葉ばかり言ってるのよ、りんは。実際、洗脳されてた時のあなたも自分で言ったのよ？ どうして、相手を許そうとしたのか分からない。洗脳前の自分が正気の沙汰に思えないって」

「私が？」

「覚えてない話をぶり返すのはどうかと思うけど、正直私も同意見よ。償わせてよ、今日りんが言った言葉が全部本当だっていうなら、綺麗ごとばかりじゃなく憎しみも殺意も遠慮なく向けて頂戴。梓に殺意抱いておいて、私にはないって言わせないわよ」

それに、洗脳中のりんが最期にいった言葉もある。憎しみとか殺意を全部抱えたうえで、それでも尚、私を求めていたのだとしたら。今度は私からりんに向き合うべきなのだ。

「……あー」

すると、りんはバツの悪そうに視線をそらしていった。

「困りました。実は、お婆ちゃんや旅館のみんなにも言われてるんですよ。正気の沙汰とは思えないって。まさか私自身にも言われるとは思いませんでした。だって、本当に気分が落ち着いたら、お節介目線であの目を思い出して、沙樹さんのこと何も知らないって気づいて、知りたい仲直りしたいお世話焼きたいって思ったんです。おかしいですか?」

「おかしい」

特にお世話焼きたいの部分。

「でも、そこも含めて、わざと全部鵜呑みに信じた上で私はいまりんに訊ねてるつもり」

「わざと鵜呑みに?」

「そう。その結果、もし夜中に寝首を搔かれても、りんになら構わな
いって思ってるから」

「しませんよ。そんな事」

りんは苦笑いで否定するも、私が本気でそれを言い、それだけの覚
悟で相手と向き合おうとしているのに彼女は気づいたのだろう。

「怒ってますよ? いまも」

りんはいった。

「それこそ、ある日突然気がふれて本当に寝首を搔いてしまう自分
だって容易に想像できます。私は聖人じゃないですから、あれだけ酷
く裏切られて憎悪も失望も忘れるなんてできません」

「よね」

やっと、正気のりんからその本音を聞くことができた。

「でも、それはそれ、これはこれです」

「……は?」

「憎しみを晴らしたいなら、心の中だったたり夢の中で実行すればいい
だ? いやないですか? 何度だって、どんな方法でだって殺せますよ

??????????????

私は訊くも、

「いいえ。こちらに来てから自分で調べました。兄はあの日起きた爆破テロの犯人で、沙樹さんは被害者だったこと。沙樹さんが兄を殺す以前に、実は兄が一度沙樹さんを殺してたこと。そして、一度死んだことで地縛神の眷属になってしまい、沙樹さんの意志とは別のところで兄を殺したことも」

は？

「え、ちよつと待って。なんでそれをりんが」

「その後、ある研究施設に回収され噂の半機人として蘇生。現在はハングドって組織でレズの肌馬なんて名前で活動をしている。ですよね？」

「だからちよつと、なんでりんが」

直後だった。

「お嬢様」

私たちを部屋に案内した仲居さんが、慌てた様子でやってきた。しかも、りんをお嬢様呼びして。

「どうされましたか？」

そのうえ、返事をするりんも妙に板についてる。

「たったいま、名小屋のフィール・ハンターズ支部の方から連絡がきまして。本日泊まられてる『レズの肌馬』を確保するために協力を要請したいと。……あ」

ここで仲居さんは私に気づく。

「えつと、その」

しどろもどろになる仲居さん。私はりんにも、

「どういうこと？」

訊ねると、まずりんは仲居さんに、

「大丈夫ですよ。その要請を請ける気はありませんから。名小屋支部にお断りしますと伝えて頂けますか？ それと、総員に指示をもうひとつ」

そして、りんは私に向かって、

「改めまして。フィール・ハンターズ・ミハマ支部リーダーの赤司^{あかし}り

んです。これより、支部総出で沙樹さんとあずちゃんの護衛に入らせて頂きますね」

とんでもない事実を、一見、人畜無害な笑顔でのたまうのだった。

MISSION 31—それぞれの2nd stage e (前編)

私の名前は鳥乃トリノ 沙樹サキ。陽光学園高等部二年の女子高生。

そして、レズである。

「心が軽い。こんな気持ちでりんを視み姦かんれるなんて初めて。……もう何も恐くない!」

「本当に?」

「ごめんなさいハンマー怖いです」

懐からおもむろにカードを出そうとする様を前に、私は即座に正座した。

現在時刻18:30。夕食の時間である。

私たちの泊まる旅館は、食事を客室まで配膳してくれるシステムになっており、つい先ほど「失礼します」と入ってきた仲居さんとりんによって、海の幸を活かした豪華な料理の数々が部屋に並べられた。仲居さんは先に部屋を後にしたが、りんはこの場に残って「今晚のおしながきは」と料理の説明を始める。私は、そんな彼女を眺めてるうちに、ふと言葉に出したのだ。「心が軽い」って。

「ハンマーですか?」

何も知らないりんが、きよとんと私たちを見る。

「そうそう、助けてよりん。最近、梓つばきって私が変な言動を取るとフィール・カードの《ハンマーシユート》で殴なぐってくるのよ」

私はいうも、りんは笑って、

「またまた、ご冗談を。あのあずちゃんあずちゃんが暴力キャラに変貌するわけないじゃないですか。ねえ?」

「ねー」

カードを隠し、笑顔で返事する様。

「いや本当だって。いまじゃハンマー制裁がクラスの名物化してるって話だから」

「本当ですか?」

余程信じられないのか、ある意味私を心配する眼差しでりんは訊ねた。

現在、りんは旅館スタッフの姿をして、私たちの前で綺麗な正座姿を見せている。

脱衣所の時とは別の、仲居さんと同じデザインの着物に身を包み、髪はすべてオールバックの、お洒落なコームで夜会巻き。普段の無害な雰囲気に加え、落ち着いた和の雰囲気を醸し出しており、化けたと見違えたのかも無く、一目でりと分かるのに、違和感ひとつない和服美人へと昇華していた。

「そうそう、例えばさ」

と、なれば私はセクハラをしなければならぬ。

私はりんの隣に座り直し、

「こういう事とかすると梓がさ」

なんて言いながら、和服の襟から胸元へと手を差し込んだ。

「ぎゃっ」

と、りんが驚く。まさかとは思ったが本当にブラはしておらず、何枚もの襦袢の内側を潜ると柔らかな膨らみに到達。ハンマーで自分だけを狙えないよう、私はりんを抱き寄せながら肌色のマシユマロを堪能しようとしたが、

「あ、んっ」

りんから艶めかしい吐息が盛れた直後、
「まず」私の片足がハンマーで潰された。

「ツツツ!? ギャ」

その激痛に体が跳ね、飛び上がる私。そして、りんへの拘束が半分解かれた所を、

「はい《ハンマーシユート》」

本命の二発目のハンマーが脳天を直撃。私はいつものように潰された。

「あ、あへ……あへ」

私が仰向けのカエルみたいになる横で梓が、

「ごめんね。りんちゃん、大丈夫？」

「は、はい」

りんは言いながら《移り気な仕立屋》を発動し、手早く着崩れを直す。かなり本格的な着付けだった為、その場で元の状態に戻すのは難しかったのだろう。

「驚きました。本当に変わっちゃったんですね」

「あ、そっかー。うん、ごめんねー。いまの沙樹ちゃん、息を吐くようにセクハラするから」

梓はいうも、

「いえ」

りんは、乾いた笑みを浮かべていった。

「沙樹さんもあずちゃんも、両方です」

「え？」

と、梓が目丸くする中、

「ほら、いったでしょ？」

私はいいながら半身起こす。ちなみに、改めていうけど現時点私に外傷はないものの、潰された痛覚だけはしっかり残ってて、まだ滅茶苦茶痛い。副頭脳AIに体を無理矢理動かして貰って、ピンピンしたフリをしてるのだ。

何も知らない梓は半眼で、

「ねえ、沙樹ちゃん？ りんちゃんに負い目があるんじゃないよ？」
「今度こそ殺されても知らないよ？」

「その時はその時よ」

私はいった。

「むしろ、こんな綺麗な着物美人を前にして、据え膳食わぬはレズの恥でしょ」

まあ、当然そこもあるけど。正直なところ、りんを相手に負い目を引きずって接する必要はないと思ったのだ。

自分の罪を忘れる気はない。でも、りん自身が理屈はともかく仲直りしたいと思ってるのだから、それに応えないほうが相手を傷つける形になる。それに、あんまり私が負い目でいじいじしてたら、逆に慰めたいというお世話癖でりんが活き活きしそうだ。そこを突き詰め

ればベッドインまで行けそうだけど、ちよつと歪な関係過ぎてレズの信条から若干反するのである。

少なくとも、お互い瞳を曇らせて及ぶ一夜からは、りんの本当の魅力を感じなさそうだ。

「はあーあ」

梓は呆れたようにため息を出し、

「沙樹ちゃん、りんちゃんの裸を見ても反応しなかったから。さすがに今回だけはセクハラはないと思ったのに」

「あ」

ここで、顔を赤くするりん。

そのまま、もじもじと視線を逸らしながら、

「あのー沙樹さん？　もしかして、温泉のときも私、そういう目で見られ」

「ーてる、って状況を避ける為に全力で体を逸らしまくったって話だけど」

そういえば、デュエル中に裸を見られたのは覚えてないにしても、温泉のときはしつかり正気のときの出来事なのだった。

うん、そうよね？　りんって、あの時全力で私の前に立とうとしたしね。聞いた話じゃ、あの時点ですでに私がレズの肌馬なの知^{MISSION30.1}つてたはずなのに。

「何度か注意もしたのに。あ、もしかしてお節介で裸体みせてくれたって話？」

「そういうお節介は範疇の外です」

うん。りんのやつ、完全に顔真っ赤つかで恥ずかしがってる。可愛い。

「いいじゃない。私限定で下のお世話にも目覚めちやええ。げへへ」

「沙樹ちゃん。そろそろいただきます、しようよー」

ここで梓が割って入った為、

「あ、そうだった」

私も席に戻り、話は終了。

(あれ?)

普通なら梓、もう一度ハンマーで私潰してそうだったのに。すると、

「あの、あずちゃん？」

りんがいった。それも、ちよつと寂しげな顔で、

「もしかして、沙樹さん。さつき」

「うん。わざとゲスなこと言ってたよ」

不機嫌そうに梓が返す。りんは続けて、

「そこは変わってないんですね。たまに自分から好感度を下げにくい癖」

「根っこが人間不信だもん。程々に信用失ってないと調子が狂うみたい。元々苦手な子供にはそういう事しないのにな」

「私も9年間、手を焼き続けました」

「私なんて物心ついてからずっとだよ。最近、藤稔さんっていう共通の後輩ができたんだけど、あの子も沙樹ちゃんの手綱引くの大変みたい」

……。

ふたりの言葉に、私は居た堪れない気持ちに襲われる。

無自覚だったのだ。いや、中学まではりんが指摘するから、自分にそういう癖がある事を知ってはいた。でも、いまは指摘してくれる人が傍から消えたから、まだ癖が残ってる事に気づかなかつたのだ。しかも、木更ちゃんまで見抜いてたなんて。

「りんちゃん、陽光に戻ってきてよー。いまの沙樹ちゃん、レズが加わってパワーアップしてるから私ひとりだと抑えきれないよ」

「そうしたのは山々ですけど、いまだとミハマから気軽に通える距離でない」と

昔から自分の勝手知るふたりが、その愚痴で花を咲かせる。まさか、今回の旅行でこんな光景を目の当たりにするとは思わなかった。しかも、梓にりんといえ、どちらも親より昔の私を知ってるだけに、肩身が狭い。狭すぎる。

「梓、食べるんじゃないの？」

限界につき私が指摘すると、

「あ。そうだったよー」

なんて梓。彼女が食を忘れる位、相当盛り上がったのが分かる。
「では、火を点けますね」

りんはいつて、チャツカマンで小鍋ふたつの下に火を点す。続けて
りんは、空のグラスを私と梓にそれぞれ渡すと、瓶ビールを出して栓
を抜き、

「お飲み物をどうぞ」

と、目の前で注いでくれた。

「ありがとう」

私は受け取り、気を遣ってノンアルコールを用意してくれたのかな
？ なんて思って一口。

本物だった。

「り、りんちゃん!? これ本物」

同じく飲んだ梓も気づき、指摘する。しかしりんは、

「はい。あ、もしかしてエビスよりサツポロかキリンが良かったです
か?」

なんて言いやがる。

「いや、私たち未成年」

私も指摘するも、

「知ってますよ。同じ歳ですから」

なのに、りんは「それが?」とでも言いたげ。

梓がいった。

「驚いたよー。りんちゃんって、こういう規則とか気にするほうだっ
たのに」

「そうですか? 私自身はそこに拘りはないつもりでしたけど」

と、りんは首をかしげる。とはいえ、私も梓も、りんが掃除をサボ
る男子を注意したり、制服の着崩しや染髪など校則違反を指摘する姿
は何度か見てるわけで。

「あ」

「ここで私は気づいた。

「そうか、こいつ元から手段と目的が逆なのか」

「どういふこと?」

訊ねる様に、

「つまり、普通学校の委員長みたいなキャラって、風紀を守って欲しいからお節介に出る”じゃない。本当は話したくない相手にも接触して”

「うんうん」

「だけど、りんは反対で、お節介したいから風紀を口実に使ってた”のよ。それこそ、本人に拘りがなくても規則を引き合いに出せば公然と注意も心配もできるじゃない」

私がいうと、

「はい」

りんは、満面の笑みでいうのだった。

それから、ある程度食事が進んだ頃。

「沙樹さん。そういえば、少しよろしいでしょうか?」

水を得た魚のように、活き活きと接待していたりんが、本題に入るように訊ねてきた。

「0時の襲撃の件でしょ? いいけど」

私がいうと、

「いえ、実際あずちゃんとはどこまで経験したのかなって」

って、違うんかい。

つい心の中で自分のキャラと違うツツコミをしてると、

「さすがに、その話はもう少し時間を改めてからにします。それに、何ならこちらで全て解決させますから、おふたりはごゆっくり休んでくださいませますよ」

確かに。言われてみれば食事中に緊迫した会話をするほうが変だった。とはいえ、りんに全てを任せるわけにもいかないし、むしろ私の問題な以上できれば巻き込みたくはない。

「そう」

私は、言葉を濁してやり過ぎす。襲撃を忘れるわけにはいかないけど、せめて梓の手前もあるし、いまは好意に甘えて大人しく休ませて

貰お——。

「それで、あずちゃんにはどこまでやらかしたのですか？」

「ッ」

私はむせた。そこは改めて聞いてくるのかい。

しかも、りんは私と梓の間に何も無いことは知ってるはずだ。すでに温泉で、梓はノーマルだからこれ以上の進展は未来永劫ないって言ったはずなのに。

……ん？ やらかした？

「だって、私相手でさえもセクハラされたんですよ？ 昔から一緒のあずちゃんは、沙樹さんに一体どれ程のことをされながら責任取って貰えずにいるのになって」

にここにしながら、ぐいぐいと攻めてくるりん。

「いや、その」

何も無いって言ったじゃない。ほら、温泉でも「梓が大好きすぎて、レズの道に引き込まうとして傷つけるのが怖い。嫌われでもしたら余裕で死ぬるから何もできない」って。

(あ、言っていない！)

そこまでぶっちゃけるのは、恥ずかしくて言っていなかったのだ。まさか、伝えなかったせいで変な誤解からスタートのお節介を受けるなんて。

私は、観念していった。

「何もしてない、はず」

そして、梓に。

「よね？」

と、訊ねる。

「うん」

梓は肯定するも、何故か少し微妙な顔をしてたので、

「え？ もしかしてノーでもない感じ？ 私、自分で気づかない所で何かあった？」

「う、ううん。なにも」

梓はいい、

「むしろ。何も無さ過ぎて、私女の子って見られてないのかなーって思っちゃうくらいに」

「え」

私は、小さく呟き反応した。

いま梓はビールで少し酔ってる。だから、普段口に出さない言葉がぽろっと零れたのだろうか。初めて聞いた梓の心情だった。

「おふたりとも、まだ相手に言えてない本音があるんじゃないですか？」

りんがいった。直後、つい私は一度梓から目を逸らす。すると、りんがくすりと笑い、

「もう、見事にふたり揃って同じ反応しないでください」

「え」「え」

「また」

さらに、りんは笑う。二度も立て続けに同じ言動をとったらしい。私と梓は。

りんは私たちのコップにビールを注ぎ足し、いった。

「お食事が終わったら、酔い覚ましにふたりで温泉にでも入ってきてください。その間に、こちらでお布団を敷かせて頂きますから」

現在時刻19：45。

「沙樹ちゃん、いいかな？」

扉の先から梓の声が聞こえた。先に露天風呂に浸かってた私は、背を向けたまま、

「大丈夫。誰もいないから」

ミストランの一件もあったので、一応の警戒として梓にはりんが付いて貰い、先に私が浴室まで進んで安全確認していたのだ。

「うん、じゃあ、失礼します」

ガラガラと扉が開き、梓が入ってきた。足音はゆつくりとこちらに近づいてきて、

「ふう、あったかい」

温泉に入った梓が、私の隣に座っていった。

私は、梓に視線を向けないまま、

「しかし驚いたわ。梓がりんの提案に同意してくれるなんて」

「何のこと？」

「酔い覚ましに一緒に温泉に入れて話」

自分でいうのもあれだけど、肉食の狼と混浴するなんて。

すると梓はいった。

「私は、最初から沙樹ちゃんと一緒に入りたいたいなーって思ってたよ？」

「え？」

M I S S I O N 1 7 参 照

「だって、この前は入れる空気じゃなかったもん」

「あー。まあ」

確かに。木更ちゃんもいたし、私が興味ないとはいっても、ある程度育った中学生の子がいれば梓が警戒するのも分かる。ゼウスちゃん以外。実際、冥弥ちゃんとか凄く美人さんだったしね。

けど、今回だって身の危険を考えれば一緒のお風呂は避けるものと思ってたのに。

「あ」

突然、梓がいった。

「沙樹ちゃん。順調におっぱい大きくなってる」

で、触られた。

「ちよつ。梓」

まさか逆にセクハラされるとは思わず、私は激しく動揺。

「梓だって」

言い返そうとして、私は言葉を止める。梓も大きくなったとか、私がいようと犯罪にしかならない。

しかも、実際は顔を逸らして、梓の生乳見てないって話だしね。

「沙樹ちゃんのおっぱい、凄くハリがあって形も良くていいなあ。私なんて無駄に大きいだけだもん」

なのに梓は躊躇わず私の胸を触って、じゃれてくる。何だろう、世界一好きな子に胸を揉まれるとか、恥ずかしいような幸福のような。ただ、死ぬほど精神的にくすぐったい。

「ちよつ、あ、あ、梓やめて。ちよつと待って恥ずかしいから」

「沙樹ちゃんもたまには好き勝手にセクハラ被害に遭う気持ちを知ったほうがいいよー」

「ごもつとも。いや、じゃなくて。」

「あ、梓分かったから。分かったからその」

MATEE! なに梓、人の乳首吸ってるの? 私そこまでしてないから。する前にハンマーされるか警察呼ばれるかされてるから。」

「ん。い、いあ、ほんと、に、い。あず、さ……」

「だくめ。今日は存分に被害者の気持ちを知って貰うから」

「ち、違う。違うから。梓相手だと前提として被害者の気持ちに立ち会えないか——」

あ、その。

えつと。

……あーうん。私、イッた。

梓、さ。下のお豆さんまで触るもんだから、んんーっ、エクスタシー絶頂!しちゃった。……ごめん、ふざけた。表現ふざけた。でも分かって?

それだけ恥ずかしいの。ふざけて誤魔化さずにはいられない程ヤバいって話なのよ。

「あず、さ」

ビクンビクンした後、なんとか私は梓に訊ねる。

「もしかして梓、まだ酔ってる?」

「うん。酔ってるよー。じゃないと、こんな大胆なことできないよー」

しかも確信犯ときた。しかも、抱き着いてきたせいで豊満な乳房が当たって、当たって!!

「ねえ、沙樹ちゃん」

梓は訊いた。

「私たち、最後に一緒にお風呂に入ったの、いつだったかな?」

それも甘えながらの、突然シリアスな内容で、

「お母さんが駄目って言ってからかな? 思えば、もうずっと服の上からしかお互い見てなかったよね。見ようと思えば体育のお着換えでも視れるはずなのにねー」

体育の着替えは、私だけ名誉男子扱いで締め出されてるから。とは

野暮なことは言わない。ただ、私が行方不明になる前なら体育の着替えで互いに素肌を晒して会話はしてるから、それ以来だろう。

という話じゃないのも分かってる。梓がいたいなのは、もうずっと一番近くでお互いの変化や成長を感じあってないって話。

具体的な年月は関係ないのだ。

「いつだったかな」

私はとりあえず相槌を打つ。梓は続けて、

「沙樹ちゃん、すっごく綺麗になったね。それに、かつこよくもなった。私はどう？　ちゃんと、大きくなってる？」

「勿論よ」

言いながら、私は内心「いいのかな」とか思いつつ、数年ぶりに自分の意志で梓の生まれのままの姿をみた。

先ほど口先だけで勿論といったけど、実際こうして眺めると想像以上に梓が大人の女性になってるのに気づく。が、ここで梓は慌てて胸を隠して、

「あ、ここばかり見ないでね」

「分かってるわ」

確かに梓の胸は服の上から推測してた以上にダイナミックになってはいたが、それ以上に、肢体や体の肉付きが自分の中にあつた可愛い私の天使像と違い、より私好みの完成された大人の女性に変貌していたのだ。結果、普段から見えてたはずの梓の顔立ちさえ、思い出補正のフィルターが剥がれて、数年分の成長を一気に感じる始末。

「正直、驚いたって話。梓が、こんなに綺麗な大人の女性になってたなんて気づかなかつたわ」

「そう？　えへへ、よかつたー」

梓がだらしなく笑う。そう、つい数分前まで認識してた彼女の笑みでさえ、朗らかさの中に美女特有の品があつた事に気づく。

が、笑みはすぐに消え、梓は少し寂しそうにいうのだった。

「ずっと一緒にいたつもりだったのに、どうしてお互い気づかなかつたのかな？　いつの間にかそれだけ離れちゃってたのかな？　心の距離も体の距離も」

「私は、近すぎて気づかなかったって思いたいけど」
「そう、だったらいいな」

正直な所、正解は梓なんだろう。間違いなく、私と梓の間には心も体も距離ができていた。そう思えてしまうだけの要因が、私の中にあったから。

「実はね、聞いちゃってたの」

梓が、寂しげな顔を維持したまま、切り出した。

「アインズさんって先輩とデュエルした日。私がシャワーを浴びてるときに、沙樹ちゃんがフェンリルちゃんM I S S I O N 2 6 参照と話してた内容」
「えっ」

確かその内容って、私が梓をどう思ってるか、どうしたいか、それを実行しない理由まで全部語ってたはず。

「ごめんね。だから、全部知っちゃった。沙樹ちゃんの気持ち」
「そっか」

こういう時、どういえばいいんだろう。とりあえず、

「不快じゃなかった？」

幼馴染の同性に恋愛感情を持たれ、あまつさえ肉体関係を夢見られてるなんて。

「ううん」

梓は首を振り、

「でも、今度は盗み聞きじゃなくて、沙樹ちゃんの告白として聞かせて欲しいなって。今日を逃したら、二度と言って貰うチャンスも、返事をする機会もなくなりそう。そんな気がするから」

実際、墓まで持ち込む気だったしね。

「ごめん。無理」

だけど私は、梓の願いを断る。何故なら、

「梓にいうつもりはなかったけど、実は私、行方不明より前の鳥乃沙樹と本当に同一人物って保証はないのよ。前にも言ったけど、私って前に一度死んで、半分機械として蘇生されてるしね。もしかしたらクローンだったり、人格を移植した人造人間だったりしてもおかしくないのよ」

だから、鳥乃沙樹として梓に告白することはできないのだ。でも。

「そんな事ないよ」

梓はいった。

「ここにいるのは、間違いなく私の幼馴染で、ずっと一緒だった沙樹ちゃんだよ。もし別人だったら、誰も気づかなくても私ができるもん」

一点の曇りなく確信をもって、梓はいった。

「だから、お願い」

「分かった」

ここまで言われて断ることはできない。今度こそ私はうなずいた。

途端、心臓がバクバク高鳴った。一歩間違えれば命を落とす戦場の中より、ずっと大きな恐怖と緊張が私を支配する。

二、三回、深呼吸。

そして、私は梓の前を向き、その瞳を正面から見る。

覚悟はできてるよ。梓の目はそういつていた。

だから、私は覚悟を決めた。

「私、梓のことが好き。自分がレズって自覚するより前から、梓しか見えてなかった。高校に入ってからはレズを公言して絶えず他の女の子の尻追いかけてたけど、本当に心の中にいたのは梓ただひとりって話」

我ながら、初心で不器用な告白してると思う。緊張のしすぎで、勢い余って余計なことまで口走ってるし。

でも、もう止まれない。

止まったらいけない。

「梓を彼女にしたい。梓を私だけのものにしたい。心も体も滅茶苦茶に求めて梓を感じたい。これが、ずっと隠し通すつもりだった私の本音よ」

私は、胸の奥の気持ちをしっかりと伝えてから、

「梓の気持ちを聞かせて？　ここまで言わせて何の準備もしてないは無しょ？」

「うん」

梓は小さくうなずく。そして、嬉しそうに、とても幸せな涙を流しながらいった。

「ごめんなさい」

って。

それは、まさかの返事だった。いや、梓がノーマルなのは知ってたし、直前まではこう返事がくるのは分かってたけど。明らかに両想いを感じさせる顔で言われるとは思わなかったのよ。

「そう、よね」

私はなんとか顔に出さないようにしながら、心の中で激しく落胆。

「やっぱり、いまの私は沙樹ちゃんを恋愛では見れないみたい」

梓はいった。

「勿論、沙樹ちゃんのこととは好き。大好きだよ。沙樹ちゃんが一番でいたい、沙樹ちゃんを誰かに取られたくない、私だけを見てほしいって気持ちには、たぶん誰にも負けないつもり。だから、沙樹ちゃんが私を女の子と見てくれないって思ったら凄く寂しかったし、沙樹ちゃんの口から沢山好きって言うてくれたのは凄く嬉しいの。ただ、この想いが恋愛なのかなって思うと」

「違うのね」

「うん。私の白馬の王子様は沙樹ちゃん以外ありえないし、私たちがお婆ちゃんになってもずっと隣にいて欲しい。沙樹ちゃんとそれ以外の全てを天秤にかけられても迷わず沙樹ちゃんを選べるよ？ だから」

直後だった。私はしがみついてきた梓によって唇を奪われたのだ。

(あず、やっ?)

何が起きてるのか分からないまま、私は数秒間ほど梓の吐息を零距离で感じ続ける。

唇が離れると、梓は少し照れながらいった。

「沙樹ちゃんとなら、キスしても、女の子同士なのに全然嫌じゃなくて、凄く幸せだよ」

「梓」

「ずるいよね？　ここまで想いあつてるのに、恋心だけがないから、沙樹ちゃんの彼女には、まだなれない」

そして、梓はまるで自分が振られたみたいに泣きながら、

「ごめんね。でも、だからって私以外が選ばれるのも嫌なの。こんなの、すつごく酷いと思うけど」

酷いっていうより、正直えぐい。でも、冗談でも梓に言う気にはなれなかった。

たぶん、振られた私より、振った梓のほうがずっと傷ついているはずだから。

「だからね」

梓はいった。

「まだ私を想ってくれるなら、沙樹ちゃんの手で私をレズに変えて欲しいなあ。今まで、他の子にアプローチをかけても、私には何もしなかったんだもん」

全く。

一世一代の告白を断っておきながら、諦めずに自分を口説き落とせとか、とんだ悪女がいたものだ。

「了解」

私は、梓の要求を受け入れるのだった。

MISSION 31—それぞれの2nd stage
e (後編)

着替えを済ませ、ふたりで脱衣所を出ると。

「あ、沙樹さん。あずちゃん」

休憩スペースでガラの悪い二人組の大男と話し込んだりんが、こちらに振り返り近づいてきた。

「どうでしたか？ あの流れですから、告白されたんですよね？」

うわ。ド直球に訊いてきた。私は「ま、まあ」と一度たじろいでから、

「うん、見事に振られた」

「え？」

目を見開き、愕然とするりん。

「どうしてですか？ 間違いなく相思相愛だったのに」

「そこに恋愛感情だけが無いから、恋人にはなれないだってさ。そのうえ、諦めずに恋するまで口説き落とせとか、エグくない？」

「エグいですね。サレンダーを拒否して行い続ける八咫ロックのようなエグさです」

「だって」

りんから共感を貰った所で、私が梓にいうと、

「そうかなー？ 私も私で今までずっと、大好きな沙樹ちゃんが他の子に色目を使う様子を見せられ続けてきたからー」

「先攻ドグマブレードですね」

りんの比喻が、鋭利な刃のように私の良心を抉る。

「でも、そういう事なら丁度いいじゃないですか」

私たちの行動を極悪デツキで例えた後、一転してりんはいった。

「せっかく、お二人で旅行に来られてるのですから、今晚お布団の中でお楽しみになられたらどうでしょう？ 下手にアプローチを長引かせるよりはスマートだと思いますけど」

「え」

途端、顔を赤くする梓。その隣で、勿論私も顔を赤く目を泳がせながら、

「いや。さすがに手順が早すぎるって話じゃない?」

「そうですね? おふたり程進んでるなら、上手く空気を作って押し倒してしまえば何だかんだ許されると思いますけど。クスリより余程」

あのー、りんさん? いきなり強烈な毒を冗談に混ぜないでくれな
い? やっぱり、ドラッグを打った事自体は未だ許されてないのだ。
だから遠回しに責められる。りんが異常メンタル過ぎて、軽い気持ち
で共通の地雷を自ら踏み抜いてきた可能性は、加害者としては希望的
観測になるので否定しておく。

で、そのりんは更に梓に向かって、

「あずちゃんだって、年ごろですし、そういう事に興味のひとつやふた
つありますよね? 特に沙樹さん相手なら“レズの肌馬”の神髄を
期待できますし」

とかいって、もうガンガン攻める。

(あ)

ここで、見るとりんの頬がほのかに赤くなってるのを私は見つけ
た。羞恥のものではない。あの後、りんも食事でアルコールを嗜んだ
のであろうと私は察した。

つまり、いまのりんは悪質な絡み酒という疑惑が入る。

「と、とにかく」

となれば梓に助け船を出して、りんから距離を取らないと。私は間
に入っていった。

「悪いけど、今日はそんな予定はないって話だから。ここで嫌われた
ら今度こそ後がないんだから、もう少し慎重に行かせて頂戴」

続けて梓にも、

「だから梓も、大丈夫だから。ね?」

「奥手でスマートがないですね」

若干意味が分からない事をいうりに私は、

「なら、りんは今晚私にレから始まる3文字の性犯罪をされたら才チ

てくれるの?。」

「無理ですね。あずちゃんと違つて」

直後、

「まるで私なら堕ちるみたいに言わないでよー」

と、顔を赤くしたまま梓はいう。私は続けて、

「ま。そんな話だから。とりあえず他に用事がないなら、私と梓は部屋に戻るけど。健全は守る方向で」

「いえ、ごめんなさい実は用事がありました」

りんはいった。

「すみません、恋路の行方のほうが気になって。おふたりが温泉に入られてる間に、ハングドの方がハイウインドを名乗る組織と共にやってきました」

「いま、どこに?。」

訊ねると、

「玄関ロビーでお待ちです。ハングドからは藤稔さんという方と、コートとマフラーで全身防備した方。ハイウインドからはアインズという方に、髪の毛の長い和服の女性と、ボーイッシュな風貌の女性の3名、計5名がいらつしやいました」

「了解」

私はいって、

「ごめん梓、先に戻つて。あの馬鹿には会いたくないでしょ?。」

「あの馬鹿つて?。」

きよとんと訊ねる梓に、

「アンちゃんのお姉さん」

「あ、うん。ありがとう」

いまでも相当に嫌悪感を残してるらしい。誰を指してるか分かった途端、梓は即答の後、すぐにこの場を離れてしまった。

「仲のいい方ですか?。」

梓の姿がみえなくなった辺りで、改めて訊ねるりん。

「つていうより、りんも知ってる馬鹿よ」

私はいった。だって、神簇つてりんにも多大な迷惑をかけてたつて

話だもの。

説明を聞くに、すでに顔は見てるだろうに、現状あれが神簇だって気づいてないりんは、

「え？」

と、なるのだった。

りと一緒にロビーに向かった所、聞いていた通り、木更ちゃん、ガラム、アインス、シュウ、そして神簇の5名がお茶と抹茶スイーツで談笑に花を咲かせていた。

「お待たせ。でも、なさそうね」

言いながら私が近づくと、

「待つと思ったから束の間の休憩にしたのよ。急いで向かったこちらの身にもなりなさい」

と、神簇。

続けて木更ちゃんが、

「事情は赤司さんから伺ってます。せつかくの休暇でしたのに災難でしたね」

と、苦笑いで同情。ちなみに再記すると、赤司とはりんの苗字である。

「それはいいけど。ハイウインドまで巻き込んで。夜なのに悪いわね、アインス」

すると、アインスがちゃっかり王子様ポーズで、

「別にいいさ。個人としても組織としても、君には恩があるからね」

「ま。それにハングドから依頼料も貰ってるしな」

と、シュウが続く。

デュエルの後、M I S S I O N 3 0 . 1 参 照りんと梓が温泉に入ってる間に、一通りの報告はハングドに入れてヘルプを頼んだ。ただ、緊急の事案ですぐに動けるメンバーは少ないだろうと思ったのだけど、まさかハイウインドに助力を頼むなんて。

「ところで、その馬鹿」

私がいようと、勘違いして反応したガラムが、

「わふ？」

「いや、その和服着て髪の長いハイウインド代表の馬鹿のことよ」

「ちよつと。何で馬鹿なのよ、名前言いなさい名前を」

神簇が噛みついてくるけど、私はりんを隣に立たせて、

「この子を見て名前まで聞いたのに、何も分かってないから馬鹿って言ったのよ」

「そんな事言われても、ミハマに知り合いなんているわけないでしょ」

「りんは元陽光学園の生徒よ」

「え？」

驚く神簇。

「ここでりんが、

「あのー沙樹さん？ そろそろ教えてくれませんか？ あずちやんが、この方を嫌って、私とも面識のある方と言われても、私もさすがに名前を聞かないと分からないんですけど」

「ちよつと待って、もうちよいこの馬鹿弄らせて」

私はりん伝えてから、再び神簇に向かつて、

「赤司 りん。改めて、この名前に聞き覚えは？」

「やっぱり、分からないわ」

神簇はいった。うわあ。

「ここまでくると。神簇さすがにクズって話よ？ まあ、そうよね。

当時のあなたはガチでクズだったし、自分の非を責めて噛みついてきた口煩い下級生に、冤罪盛り盛り、でっちあげの悪行を死ぬ程押し付けて潰しかけたっていうのに、あーそう、覚えてないか。いつもの事だったものね」

「え？ いま、か、神簇って」

いち早く反応したのは、りんだった。私は笑みを漏らしながら、

「神簇 琥珀。覚えてるでしょ？ 小学校の頃にいた、あなたから正義感を根こそぎ奪った最低の上級生」

「嘘」

認識が追いつかず呆然とするりん。

対し、神簇は顔を真っ青にしていた。私は、そんな悪友の反応を愉

しみながら、

「覚えてない？ あの時は、あなたが提示した冤罪の数々を私が丁寧に全部実行してあげただけだ」

「さ、さすがに覚えてるわよ。名前は憶えてなかったけど、当時の関係者の顔とエピソードならしつかりと。私が昔やらかした最低の行いのひとつだもの」

神簇は言ってから立ち上がった、

「あの時は本当にごめんなさい。今更だけど、償えるものがあるなら全力で償います」

と、頭を下げた。

「良かったわ。これで知らないって言ったら軽蔑する所だったって話」

私は全力で愉悦してる反面、内心で一安心。一方、りんは、

「嘘。あのお嬢様が頭を下げてる、の？」

まず、神簇が自分の非を認めてる所から信じられないって感じだった。

シユウがドン引きしながら、

「なんつーか。知れば知るほどやべえよな。うちのトップの過去ってよ」

「よく、ここまで更生したと思いますよ。さすがは鳥乃の力ですね」

アインスがうんうんとうなずく。

りんが訊ねる。

「あの、沙樹さん。この外道、じゃなかった神簇のお嬢さんとはどんな繋がりだ」

りん、いましつかり外道って呼んだよね？ まあ、それはともかく。

「前に依頼の中で再会したのよ。神簇家の祖父が亡くなった際に色々あってね。結局、一度は没落しかけたけど立ち直って、新しく再スタート切った際に設立したのがハイウインドって話」

私はいつてから、りんの視線が一瞬泳いだのを見て、

「りん？ いま、このまま没落すればよかったのって思ったでしょ」
「あ、分かりましたか？」

凄く嬉しそうな笑みでりんはいった。逆に、神簇は頭を下げた姿のまま、いまにも自己嫌悪で倒れそうな様子をみせる。

「まあ、いまの神簇は性格反転薬でも飲んだみたいに善性に切り替わってるから許してあげて頂戴。と、そろそろ本題に入りたい所だけど。その前に」

私は言いながら、ちらつとガルムを見る。

りんは妙子と同級生だったし、助けなかった事を後悔してるひとりだ。もし、その後を知らずにいるなら、ガルムには作戦中ずつと正体を隠して貰う必要がある。でも、それはガルムにとつてストレスだらうし、何よりこの子は余計な心配なく思いつきリアルファイトで暴れさせてこそその人材だ。できる事なら身軽にさせておきたい。

私はいった。

「ひとつ確認取らせて、りん?」

「何ですか?」

「いま、名小屋のフィール・ハンターズは宗教組織『黒山羊の実』から離脱した一派閥を取り込んで異様な戦力を所有してるわ。その中に、ハングドがスカウトした結果、こっち側についた子が2名ほどいるんだけど」

言いかけた所、

「ガルムのことですね。鱒川さんの遺体から作られたっていう」

「知ってたんだ」

「支部は違えど同じ組織ですから。知ってすぐ、こちらで引き取りたいてって連絡を取ったのですけど、ハングドに先を越された後でした。正直いって、内心憤りを覚えていますね。鱒川さんが殺された後も冒流されたのは」

りんがいったので、私は、

「だそうよ、ガルム。顔、見せてあげて?」

「え?」

驚き、りんがガルムを見る。

「いいの? うん」

ガルムはうなずき、フード付きのコートを脱ぎ、マフラーを外す。

すると、首から下こそレースクイーンかグラビアアイドル並のプロポーションに変貌しつつも、間違いなく妙子の顔をしたそれが、りんの眼前に晒される。

「あ」

途端、りんは涙を流した。

「鱒川さん」

そして、ガルムにしがみつく。

「ごめんなさい。全部知ってたのに、助けようとしなくて」

「アナタも、タエコの友達だったのね」

言いながら、ガルムは一度目を閉じ、何かを考える、というより心の中で妙子に問いかけてるのだろうけども、

「ごめん。ざんりゅーしねん、だっけ？ 前はそういうのがタエコの

体に残ってたんだけど、いまはもう全部消えちゃったから」

「分かっています。あなたが鱒川さんじゃないのも。でも」

いまいち会話が成り立たないまま、りんはガルムの胸でわんわん泣く。私はガルムに、

「せめて抱きしめてあげて。妙子のかわりに」

「うん」

ガルムはうなずき、そつとりんを抱きかかえる。

「ところで」

ここで、木更ちゃんがふたりに気を遣ってか小声で、

「先ほど、赤司さんが同じ組織と申されてましたけど。意味を教えてくださいてもいいですか？」

ああ。そういえば、あの情報はまだ伝えてなかったっけ。アレ知ったの、ハングドと連絡を取った後だったしね。

「実はここ、フィール・ハンターズのミハマ支部」

私がいった所、

「はっ」

誰とはいわず、各々から愕然とした反応があがる。その中でアインスが、

「どういう事だい？ 鳥乃」

「言葉通りよ。私もその事実を知ったのは、ハングドに連絡を伝えた後だったし、現時点でうちの司令に伝えるとややこしくなりそうだから伏せてたのよ。ただ、現状この支部は敵じゃないのは確か」

私はいつてから、

「とはいえ、私も深くは訊いてないから。事情は本題に入ったときに改めてりに説明してもらおうわ。ただ、いまは」

私は、いまだダウン中の神簇と、泣き崩れるりんを順番に見てから、「ちよつとだけ、話は後にしたほうがいいと思う」

現在時刻20:20。

玄関ロビーにて、改めて私たちは席について、

「つて話だから。本題前にミハマ支部について少し教えて頂戴」

私が話を振ると、

「分かりました」

りんはいった。まだ目は少しだけ赤いけど、すでに涙は止まっている。神簇も一応のショックから立ち直っているので、本題に入るには頃合いである。

「改めてまして。私はフィール・ハンターズのみハマ支部でリーダーをさせて頂いてる、赤司^{あかし}りんといいます」

彼女がフィール・ハンターズ、しかもリーダー。この事実には、周囲は再びざわめきだす。

「皆さんもご存知の通り、フィール・ハンターズは日本各地に支部が存在しますが、支部^{M I S S I O N}ごとに方針^がばらばら^{参照}です。ですので、支部同士で連携しあう所もあれば、方針の違いで敵対することもままある組織なんです。特にこのミハマ支部は設立に至る経緯もあって、方針からして少々特殊かもしれませぬ」

「といますと?」

アインスが訊ねると、りんは、

「元々暴力団だったんです。それも、よく現実存在しない扱いされる『街を守る良いヤクザ』の類で、昔からこの温泉街と密着して生きてきました。ただ、時代と共に衰退の一途を辿ってまして。いずれ暴

力団が解散しても活動自体が残るようにと、一帯の地域おこし団体や各事業所を包摂した地域自治組織として生まれたのが、このミハマ支部です」

「つまり、この温泉街が丸ごとミハマ支部のようなもので、その中の代表組織が暴力団で、赤司さんがそのトップということですか？」

木更ちゃんが訊ねる。

「そうですね」

りんは肯定した。

「暴力団の組長はこの旅館の女将がされてるので別ですけど。私がミハマに越したことで、当時ミハマ支部長を兼任していた女将から現在の位置を譲り受けた形になります。といっても、未だ支部長は女将以外にはないって声も大きいので、非公式ながらリーダーって名乗ってますけど」

想像以上に大きな話だった。つまり、りんを敵に回すと温泉街ひとつと衰退したとはいえ暴力団を一組を丸々相手にする形になるのだ。恐ろしい。

という事は、先ほどりんと話してたガラの悪い男たちもフィール・ハンターズに所属する暴力団組員だったのだろう。あんなのを相手にするのはかと思うと、余計敵に回したくない。

「ですから、名小屋支部と違って、私たちは同じフィール・ハンターズでも悪事に手を染めた組織ではない事は断言させて頂きます。少なくとも私利私欲で違法行為に手を染めた事はありませんし、誓ってドラッグも手を出してません。組織MISSTION14参照の属性で話すと、どうしてもカオス寄りになってはしまいますけど」

「奇妙な話よね。昔散々悪事を働いた神簇がいまやロウ組織の代表で、そこに正義感で歯向かったりんがカオス組織の代表なんだから」

私がいようと、神簇が項垂れ、

「お願い。もう昔の汚点を穿るのはやめて」

「やめて欲しかったら、今度一緒にホテルに」

私がいかけた所、木更ちゃんが、

「事情は分かりました。ただ、現在ハングドは名小屋支部相手とはい

えフィール・ハンターズと敵対している身です。そちらに協力できるか否かは上からの判断を仰ぐ必要がありますけど」

「って、見事に話を軌道修正。」

「分かりました」

りんはいった。しかし続けて、

「ただ、観光客を守るのは私たちの使命ですので、ハングドがどのように判断をされたとしても、こちらは沙樹さんとあずちゃんを預かり、名小屋支部と徹底抗戦に入るつもりでいます。それこそ、ハングドがミハマ支部を敵と判断するようでしたら、名小屋支部とハングド・ハイウインド連合を同時に相手にしても構いません」

「な」

私が驚き、りんを見る。

りんは、いつもの人畜無害な顔で、

「カオス組織のやり方を舐めないでくださいね？ それに、私からお節介の趣味を奪おうとするなら当然じゃないですか」

とか言い放つ。

「まあ、先ほどのハングドが極端に敵対の態度を出したらの話ですけど、我々はその位の使命をもって観光に来てくださったおふたりを護ろうとしてる事はご理解ください」

何気にりんは、最後まで冗談ですとは言わなかった。

「分かりました。それを踏まえて、いまから確認を取らせて頂きます」

木更ちゃんは言い、席を立てて一旦持ち場を離れた。

話題が一時中断になったので、その間に私は、

「りんには悪いけど、私は旅館でずっと護られるつもりはないから」と、いった。

「え？ どうしてですか？」

訊ねるりんに対し、私は、

「私の手でミストランを倒す為よ」

と、はつきりいった。

「時間と場所まで指定してきたわけだしね。暗に決闘けつとうを申し込まれたと私は判断したわ。ミストランとはちよつと因縁があつてね、この先

の名小屋支部との闘いを生き残る為にも、ここで乗り越えておきた
いって話」

「分かりました。でしたら」

りんが言いかける。そこへ。

「戻りました」

木更ちゃんが通信を終え、再び席に座る。

「どうだった？」

私が訊ねた所、

「完全に信頼するつもりはないみたいですけど、一応、共闘を受け入れ
てもいいと鈴音さんから言葉を頂きました」

「あ、鈴音さんに連絡したの？」

「今回は鈴音さんが指揮を執ってますので」

木更ちゃんはいった。

「では、ミハマ支部・ハングド・ハイウインドの三組織で名小屋支部を
討つ方向で話を進めます」

りんがいった。

「お願いします」

木更ちゃんは一度頭を下げた。りんは改めて、

「先ほど、藤稔さんが席を立たれてる間に、沙樹さんからミストランと
戦うために戦線に出たいと希望を伝えられました」

「え？」

木更ちゃんが驚き、私を見る。

りんはいった。

「それで、私の意見なのですけど。敵勢力より先に、こちらから動いて
相手を殲滅してしまうのは如何でしょうか？ その後、敵がミストラ
ン単騎になった所を、沙樹さんに数名の護衛をつけたうえで、安全に
指定ポイントまで向かわせます。結果、ミストランが出陣前に撤退し
たならそれでよし、宣言通り0時10分頃に現れたら、沙樹さんとの
闘いの結果がどうであつても最終的にミストランを包囲できる形に。
勿論、別のポイントにミストランが現れても対処できるようにした上
で」

するとシユウが、

「つて事は、鳥乃を行かせるのは容認するのかよ」

りんは「はい」と肯定し、

「組織として容認したくない反面、私自身は沙樹さんの気持ちをバツクアップしたくて。それなら自分の気持ちに嘘をつかないほうがスマートですよね？」

「スマートって何だ？」

シユウが突っ込む。けど、その答えは私にも分からない。

ただ、ここで公ではなく私を選ぶのが、いまのりんである事は、今日一日で痛いほど思い知った。

「鳥乃を行かせるかはともかく、先に殲滅してしまうのは私も賛成よ」

ここで、神簇が口を開いた。

「むしろ護衛対象を万一でも危険に晒さない為にも、旅館付近まで敵の侵攻を許した時点でこちらの負けという気持ちで挑んだほうがいいわ」

「同感です」

りんがいった。神簇は続けて、

「今回の問題は、敵勢力がどれ程動員されてるか不明な所、加えてどのようなルートを通って旅館を襲撃してくるのか私たちが把握できてない所にあると思うのよ。正直、敵勢力が0時に襲撃するというのも信用できないわ。その点、この一帯が丸々ミハマ支部とするなら、その利点を活かさない手はないわ」

そして、まっすぐりんに向かって、神簇はいった。

「赤司さん。温泉街一帯に連絡を取って、夜間の外出禁止の注意喚起を伝えられないかしら？ そのうえで、外に不審な動きを見つけたらすぐ旅館に連絡が届くようにして貰う。この方法なら極力街に迷惑をかけずに、街全体で監視の目を光らせる事ができるわ。しかも、支部に籍を置いてない一般の方を避難させつつ、実質的な協力を貰う形にできるわ」

「驚きました」

りんはいった。

「他人を全て自分の下僕みたいに扱ってたあなたが、無関係者の安全まで視野に入れて提案されるなんて」

「それだけ価値観が変わったの。それに、体よく巻き込んでる以上、褒められた手段ではないわ」

まあ、まずここで褒められた手段ではないと評してる時点で昔の神簇とは違うのだけど。それより、

「いまの提案。まるでアンちゃんみたいね」

気になって、つい私は訊ねてみた。すると、

「実際、アンならどう作戦を立てるかと考えて出した案よ」

これは、本人が知ったら、また自己卑下に陥りそうだなと思った。

確かに神簇は、素のスペックがポンコツながら、抜群の成長力で努力ひとつで何でも一級品に達する才能を持っている。しかし、今回神簇が行ったアンちゃん特有の性格の悪い手回しは、本来直情的な神簇では到底真似できない代物だったのだ。

「分かりました」

りんは、デュエルディスクとは別にスマホを出していった。

「すでに支部のメンバーには希望者に警備の参加をお願いしましたけど、一般家庭も監視に使うまでは思いつきませんでした。すぐに手配します」

「悪いわね。昔の私みたいな横暴をさせてしまった」

「いえ。逆に私は無関係者に被害が及ぶ可能性に気づかなかったので感謝したい程です。それに、この方法なら警備には不参加だった支部のメンバーからも最低限の協力を得られます」

「そう言って貰えると助かるわ」

神簇の返事を聞きながら、りんは早速スマホで連絡を取り、その場で支部のメンバーに追加の指示を下す。

「あ」

私はここで慌てて挙手し、

「りん？ 悪いけど追加で指示をお願いしていい？」

「え？ はい」

りんが反応してくれたので、

「基本、今回の作戦に参加する人は最低二人以上の複数人の行動でお願い。加えて、天然のフィール・カードを1枚以上所有してる人を最低1名ずつ入って貰って、その人には一切フィールを使わずデュエルもしないよう配慮して欲しい。デスデュエルを解除してもらおう為に」

「それが不可能な方は？」

「残念だけど今回は屋内に避難して監視だけの参加でお願い」

デスデュエルの解除手段参照はすでにりんにもハングドにも報告済だ。しかし、必要なフィール量が並のデュエリストひとりのフィールを全損させまだ足りない可能性があり、正直いつて作戦に組み込むのは現実的ではない。

しかし、もし相手にデスデュエルでデュエルを挑まれてしまったら、負ければ即座に地縛神の生贄にされてしまう。人命を最優先に考えるなら非効率でも対策するしかないのだ。

が、りんはいった。

「こちらは、伝えはしますけど強制はしない方向で行かせて頂きます」
「どうして」

私が食ってかかるように訊き返すと、りんは、

「こちらもフィール・ハンターズですから。デスデュエルなんて介さなくても、負けたら殺される位には覚悟しています」

「さすが腐ってもカオス組織。殺伐としている」

アインスが感嘆しながらいった。続けて木更ちゃんが、

「とはいえ、私たちはペア以上で行動したほうが良さそうですね。名小屋のフィール・ハンターズは洗脳で一般の方も戦力に使ってきますから、勝敗は関係なくデスデュエルは解除するつもりで動いたほうがいいと思います」

すると神簇が、

「むしろ、アンがいうには洗脳の被害者ほどデスデュエルを仕掛けてくる可能性が高いそうよ。あれは自分で使う代物ではなく洗脳した相手に口封じを兼ねて使わせる代物だって」

それで勝てたら万歳、負けても生贄という形で行方不明にできるか

ら、洗脳が解けた際に情報を吐かれるリスクも最小限に回避できるか。

最悪な発想だ。

「そこについてはどうなの、りん？」

私は訊ねる。

「自分で体験したから分かっているとと思うけど、この街の人間だつてその場で洗脳されてファイル・ハンターズを名乗ってデスデュエルを仕掛けてくる可能性もあるのよ」

「その点も含めて現場の当事者に委ねます。私だつて、戦場でファイルを全損するリスクを考えれば救助を諦める事もあるでしょうから、そんな危険なことをメンバーに強制はできません」

そういえば、りんは、人助けやお節介といった趣味に人生捧げてる反面、趣味のキャパシティを超えたことはしない人だった。

「正しい判断だ。上に立つ者は、部下を守るために時に非情な判断もしないとイケないからね」

アインスはそういつて評価する。一方、シユウは顔をしかめて、「だが、被害者の気分を考えると釈然としねえな」

「最悪私たちが横から解除に入ればいいだけだ。その位の権利は頂いてもっ。」

アインスは訊ねる。りんはすまなそうに微笑んで、

「余裕があればお願いします。私も事前の準備で解除できる代物だつたら、幾らでも準備したい気分ですから」

「ありがとうございます」

アインスは頭を下げた。

りんは改めて、

「では、話が決まった所で、こちらは事態が動くまで各々待機と警備に入ります。他に伝えたいことはありますか？」

「はい」

ここで木更ちゃんは挙手した。

「すでに赤司さんの耳には入れて貰ってますが、鳥乃先輩にはまだ伝えてない事項がありましたので、追加報告を兼ねてもう一度お伝えし

ます」

「え？」

私が顔を向けると、

「こちらハングド・ハイウインドでは私たち5名の他に、立花 鈴音が指揮を執る別動隊が配備されています。改めて、現時点において人数不明・現在位置不明とお伝えします」

え、鈴音さん現場に出てるの？ 確かに、さっき指揮を執ってるって聞いたけど。

「加えて」

木更ちゃんは続けて、

「先ほど、連絡を取った際、話が纏まり次第、赤司さんとも連絡を取れるようにして欲しいと要望を受けましたので、今から連絡手段のデータを端末に送信したいと思うのですが、どちらの端末がよろしかったですでしょうか？」

「では、こちらでお願いします」

りんが指定したのはスマホのほうだった。

「分かりました」

木更ちゃんは自分のデュエルディスクにクリフオートのカードを差し込み、そのファイルで直接スマホにデータを送信する。

木更ちゃんはいった。

「現作戦において、現状、ハングド側の指揮と連絡が取れる人は私と赤司さんの2名のみになります。どうかご了承ください」

「神簇とは連絡しないの？」

小声で、ハイウインドサイドに訊ねると、

「アンの要望よ。私はハマしそうだから機密の連絡には関わらないで欲しいって」

「あー」

信頼されてるわね。愚姉ちゃん。

少なくとも、0時近くまで出番がない事が確定した私は、会談の後、一旦梓の待つ寝室に戻る事になった。

エレベーターのボタンを押し、上の階に移動しようとした所、

「あ、先輩」

小走りで木更ちゃんが向かってきた。

「私も、一緒にいいですか？」

梓に挨拶するつもりかな？

「勿論よ」

私はいつて、一緒にエレベーターに入る。

ドアが閉まり動きだすと、不意に木更ちゃんはいった。

「ごめんなさい、先輩」

「なにが？」

「先輩を立ち直らせる条件でハングドに入ったのに、結局私は、大事な局面で何もしてあげられませんでした」

ああ、そのこと。

「仕方ないって話よ。ゼウスちゃんがあんな事になったんだから。それに、木更ちゃんのおかげで十分助けられてるって話」

とは言っただけど、木更ちゃんの気は収まらない様子。

たぶん、木更ちゃんは自分がダウンしたことで、私まで調子を崩した事を知ってるのだろう。元はといえば、今回の旅行だって、そんな私を強制的にでも休ませる流れが巡り巡ってこうなったわけで。この事態を回避できなかつたことに責任を感じてるのが凄く伝わる。

木更ちゃんは本来柔軟な思考の持ち主で温厚な子だ。でも、重要な分岐点には誰より敏感で、途端に自分のキャパシティを無視した完璧主義者になる所があるのだ。今までは、それで自分の限界以上の結果を出して、ハングドに入り、色々拗らせたフェンリルさえも救った。しかし、今回はついに致命的なミスをした。

取り返しのつかない事をした。彼女の中では、そういう事になってるのだろう。

「なら、木更ちゃん。いまから抱かせ」

「あ、それ以外でお願いします」

言いながら、エレベーターが開いたので一足先に出る木更ちゃん。「残念。心が弱ってるから手を出せると思ったのに」

言いながら私もエレベーターの外に。木更ちゃんはくすつと声に出して笑って、

「だったら、完全にダウンしてる時にすれば良かったじゃないですか。あの時だったら、たぶん言葉巧みに誘導すれば手を出せましたよ？」

私

「とは思ったわ」

私はいった。

「抱きしめて甘い言葉で墮落させれば、最近の木更ちゃんなら容易に手に入るとは思ったわ。でも、木更ちゃんなら私の拘り、知ってるでしょ」

「抱くなら一番魅力的な状態を、ですか？」

「正解。木更ちゃんを抱きたいからこそ、目が死んでるときのあなたを抱きたくはなかったって話」

とはいえ、実際はフェンリルと共謀して寝込みを襲おうとした事がある、とは言わないでおく。

「本当。何だかんだ、先輩って大事な局面では誠実ですよね」

「レズの信条に従ってるだけよ」

すると木更ちゃんはぼそっと、

「今回ばかりは、手を出して欲しかったんですけど」

「え？」

さつき、木更ちゃん。

「ただの気の迷いです。気にしないでください」

「そう、了解」

私は難聴のふりをして返事した。

「あ」

突然、木更ちゃんはわざとらしくいって、

「ごめんなさい。少し用事を思い出して。皆さんの所に戻りますね」

って、エレベーターの下にUターン。ボタンを押し直す。結果、私たちは互いに背を向けあった状態に。

私はいった。

「その気の迷い、実現してたら、今頃どうなってた？」

すると、

「たぶん、先輩なしには生きれない体になってたと思います」

「そっか」

後ろでエレベーターが開く音がした。木更ちゃんが中に入るのを
気配で確認してから、私はいった。

「夜這い、失敗して良かったわ。私の相棒パディには、
馬MISSIONの鼻先にぶら下げた人参照2022でいてくれないと困るから」

木更ちゃんが返事をする前に、エレベーターは閉じた。

現在時刻23:50。

部屋で梓を護衛しながら、皆の無事を願っていた所。

「鳥乃、無事かい？」

部屋の外から、アインスがいった。

「時間だ。出撃しよう」

MISSION 32A―状況開始Side木更

私の名前は藤稔^{ふじみのり} 木更^{きさら}。 陽光学園高等部一年の女子高生。

そして、かすが様愛です。

現在時刻20:45。

「相棒、ですか」

鳥乃先輩を寢室の階まで見送ってから、ロビーに戻るエレベーターの中、私はひとり呟きます。

先輩は、私の自暴自棄を知ってて手を出さなかった。先ほどの会話で、私は改めてこの事実を知らされました。

ゼウスちゃんが行方不明になってから、私は飲食を惜しんで壊れたレコードのようにネット回線から従妹の行方を捜してました。思考が心の奥底に沈んで、まともに判断力も残ってない中で機械的にやってたので、効率性が全くなく、情報が目の前に現れもきつと気づかずスルーしてしまうような、そんな状態での作業。

というのも、食事や睡眠で体を休めることに心身が拒絶を起こして、無駄でも作業し続けてないと自分を保てなかったんです。勿論、当時は無駄って事も気づきませんでしたけど。

そんな中、たまに、いえ、結構な頻度で考えが過ぎつたんです。

鳥乃先輩に身も心を預ければ、少しは気が休まるんじゃないかって。――でも、先輩はしなかった。それをしたら最後、先輩に依存してしまい、姉を失ってからずっと自分を動かしてきた意志や覚悟が揺らいでしまうまで見抜いて。

代わりに、完治ではないかもしれないけど、“壊れたレコード”状態は抜け出した私に、先輩はいつてくれた。相棒^{バディ}って。

「良かった。先輩が、まだ私を必要としてくれて」

それなら、今度こそ失態を犯さないよう頑張らないと。

決意を新たにしました丁度良いタイミングで、エレベーターはロビーのある1階に到着しました。

ロビーに戻った私が見たのは、身支度を終え、いまにも宿を出そう

な様子の皆さんの姿でした。

「何があったのですか？」

私は小走りで合流しつつ訊ねると、

「早速動きがあったぜ」

と、シユウさんがいます。アインズさんが続けて、

「先ほど近くで売店を経営している支部のメンバーから連絡があったんです。ハイキング場の山に何台もヘリが停まったらしい。その報告を受けて、別動隊の人が撮影してくれたのだけど。見てくれますか？」

と、言いながら指をパチンを鳴らす。すると、壁掛けのテレビから、1枚のフォト画像が表示されました。

上空から暗視カメラで撮影されたのでしょうか？ 推測するに夜の山道。ヘリからフィール・ハンターズの人たちが降り、各々がハングレライダーの準備をしてる様子でした。

「ハイキング場の山というと、ミストラランも0時過ぎ出現するという」
私が訊ねると、

「ああ。赤司さんに確認を取ったけど、この辺りにハイキング場の山は1つしか無いらしい。恐らく奴らは、この山から空を飛んで旅館を襲撃するつもりなのでしょう」

「もしくは地上と両方から」

「可能性は高いね。それをされると、同時に対処は難しくなるうえ、上空の部隊は鳥乃の客室に直接侵入してくる可能性もある」

「いまの内に山を制圧する事を提案します」

「ええ。そのつもりです」

アインズはいった。直後、外に出ていたらしい神簇さんが屋内に戻って、

「出発の準備はできたわ。藤稔さんが戻り次第、すぐに向かうわよ」

「ごめんなさい。すでに戻ってます」

私がいうと、神簇さんは少し心配そうに、

「もういいの？ 鳥乃との話は済んだ？」

「はい。それよりも、急ぎましよう」

「分かったわ」

神簇さんは、続けて赤司さんに、

「赤司さん。鳥乃と徳光さんをお願い」

「はい。お嬢様もご無事で」

「神簇でいいわ」

「分かりました。琥珀先輩」

笑顔で、苗字どころかいきなり名前呼びに変える赤司さん。

「凄えな。あいつ」

とのシュウさんの眩きに、私は心の中で同意します。

「行きましょう」

神簇さんはいハンド・ハイウインド双方に向かっていいました。

旅館の外に出ると、すでに自動車一台と、Dホイールタイプのバイクが3台並んでました。神簇さんは自動車の運転席に移動します。

私たち5人は、神簇さんの運転する車で現地までやってきたのです。《封印の黄金櫃》でDホイールを異空間に収納した形で。

神簇さんが指示を下します。

「私とガラムは念のために駐車場を見つけて待機するわ。アインス・シュウ・藤稔はDホイールで突入、ミハマ支部のメンバーと協力して敵勢力を討伐。いいわね」

「分かりました」

アインスさんがいう間に、シュウさんが一足先にDホイールに跨ります。

「しかし驚いたよ」

アインスさんがいいました。

「まさか、藤稔さんがバイクの運転免許を持っていたなんて」

「いえ、無免許ですよ?」

私は苦笑いを浮かべながら、だけど不安を与えないよう努めて堂々といえます。

「え?」

って顔をするアインスさんに私は、

「召喚したモンスターに乗るのと同じ感覚で運転できるように、私用

のオートパイロットシステムをプログラムしたんです。ですから、高速や国道を通ったら一発でアウトですね」

「それは逆に普通に免許出されるより驚きだよ」

アインズさんがいいいます。さらにシユウさんが、

「しかも堂々といいやがって。さっきの赤司も凄かったが、蓋開けたらお前も同じくらいいやばいんじゃねえか」

「いえ、さすがに赤司さん程では」

と、私が否定と謙遜を兼ねた返事をしてると、ここで作戦会議が苦手ですつと黙ってたガルムさんが、

「うー。それなら私もキサラに作って貰えばよかった。突入側だったら思いつきり暴れられたのに」

と、悔しそうに言うので。

「ごめんなさい、でも私のプログラムはクリフオートあつての技術ですから、他の方の分は作れないんですよ」

「なら仕方ないわ」

ガクツとがっかりしながらガルムさんは諦めます。多分、戻ったら改めて作って貰おうと思つてたのでしよう。

「もしかしたら」

アインズさんがふと独り言を呟きます。

「鳥乃にとつて、藤稔さんの存在はかつての赤司さんの位置にいるのかもしれないな」

「え?」

私はつい反応。アインズさんは口に出す気はなかったらしく、少しづつが悪そうに、

「いや。直感で何となく思つただけだよ。気にしないでくれ」

と、いつてから。

「さて。無駄話はそこまでにしよう」

言つてから、アインズさんはDホイールに跨ります。

「分かりました」

私もDホイールに跨り、デッキの入ったデュエルディスクをセット。

《アポクリフオート・カーネル》と連動し、Dホイールは私のファイールによる脳波コントロールの制御下におかれます。

「状況開始」

神簇さんの声と同時に、私たちは山に向かってDホイールを走らせました。

現在時刻21:30。

実際に現場で殲滅作戦を行うと、最低1名はファイールを温存しろなんて不可能だと思いました。

「これでファイナレです。《ヴァレルロード・ドラゴン》で直接攻撃」「手札を1枚捨てて《剣闘獣ヘラクレイノス》の効果。テメエのミラーフォースは無効。これで終わりだアアッ！」

「《アポクリフオート・カーネル》の効果。相手モンスター1体のコントロールを奪います。そして、ごめんなさい。カーネルで直接攻撃」
「私たち3人のエースがそれぞれ直接攻撃を決め、相手のライフが0になります。直後、私たちの下に広がってた地縛神の模様が収縮を始め、相手の肉体と一緒に消滅していきます。」

「畜生。また護れなかった」

シユウさんが悔しげに呟きます。

結論から先にいうと、相手は私たちの予想を遥かに上回る形で積極的にデスデュエルを仕掛けてきました。移動で僅かにファイールを使ったとはいえ、作戦では私がデスデュエルの解除を担当するはずだったのですが、ふたりはすでに3回、私も2回、強制デュエルに捕まって仕方なくデスデュエルをさせられました。

勿論、解除する余裕はなく、先ほどを含めてこれで8名の犠牲者が出たことになりました。

現在、私たちはハイキング場の山の中。月の光が樹木に遮られ、Dゲイザーの暗視機能を頼りに互いを視認してる状況です。なので、近くならまだしも数メートル以上先になってくると、どれだけのファイール・ハンターズが私たちの周囲を囲んでるのかさえ分かりません。

「くそっ、次だ！ 次のデュエルで片付けるぞ」

間髪入れず、私たちの前に3人に新たなフィール・ハンターズが並び、強制デュエルの赤外線を飛ばしてきます。

息つく暇もなく私たちは避け、同時にアインスさんが二丁の散弾銃からフィール込みの弾幕を撒き、3人のデュエルディスクを破壊。ですが、その隙に私たちは右・左・後ろ、各所から強制デュエルを仕掛けられ、再び地縛神の模様が私たちの足元に広がります。

「きりがいな」

アインスさんが、僅かに疲労を顔に出しながら、いいました。

実は、これでも奇襲は成功したんです。

暗闇を利用し物陰に隠れる事に成功した私たちは、フィール・ハンターズの人たちが部隊長と思われる人の下に集まった所を、アインスさんが散弾銃の弾幕を張り、デュエルディスクを1名除いて全て破壊。さらに、弾幕を防いだ部隊長の下にシウウさんがとびかかって、リアルファイトで討伐に成功。

昏倒した部隊長のデュエルディスクも破壊した後、全員気絶させた後に拘束。と、ここまでは順調だったのですが、他にも部隊がいたのか、何割かが周辺警備で離れてたのか、想像を超える人数のフィール・ハンターズが後からぞろぞろとやってきて、いまに至ります。

私たちは、洗脳でデュエルさせられてるかもしれない人たちを相手に、ひとり、またひとりと、デスデュエルで葬るしかできませんでした。

一息ついた時には、時刻はもう22:05。

幸いにも相手は腕・フィール量共に大したことなく、私たち3人もフィール残量ならまだ余裕があったものの、精神的には疲弊しきってました。

「とりあえず。後続がやってくる前に、私たちは一旦撤退しよう。現在までミハマ支部の顔が見られないのも気がかりだ」

アインスさんがいいました。

「確かにそうですね」

私はうなずきます。ミハマ支部が敵側に回ってるとは思いたくないですけど。

とはいえ、シユウさんは、

「やつぱファイル・ハンターズだったか、信用できねえな」

「シユウ！」

アインスさんが注意するも、

「トップが信用できてても下が裏切った可能性があるだろ」

私も、恐らくアインスさんも一度は脳裏に過ぎりつつ口にしなかったことを、シユウさんは言っけてしまっています。

アインスさんは仕方なさそうに、

「勿論、その可能性も忘れていないさ。どちらにしても、私たち3人で作戦を続行するのは危険過ぎる。一旦、お嬢様の下に戻って作戦を立て直しましょう」

「倒れてる方々は？」

私が訊ねると、

「敵の部隊長だけ《ワーム・ホール》で旅館に送りましょう。全員を捕える時間は残念ながら」

と、アインスさん。

「分かりました」

私がうなずいた直後でした。

Dゲイザーの暗視で確認できない程の奥から強制デュエルの赤外線が飛んで、シユウさんのデュエルディスクが強制デュエルモードに移行したんです。

「シユウ！」

アインスさんの叫びに、

「大丈夫だ」

シユウさんは地面を指さし、いいいます。

「あの模様が広がって無え。今回はデスデュエルじゃないらしい」

逆にいうと、今回シユウさんにデュエルを仕掛けてきたのは実力ある本当のファイル・ハンターズである可能性が高いのですけど。

「アタシにデュエルを仕掛けてきたやつは誰だ？ 出てこい！」

シユウさんが叫びます。すると、それは静かに歩いてきました。

軍服を着て、某赤い彗星を思わせる仮面で顔を隠した、ひとりの少

女の姿を。

髪も仮面に隠れてましたけど、私はすぐに分かりました。

「ゼウスちゃん!？」

まさか、こんな所で。こんな形で再会するなんて。しかし、ゼウスちゃんはどこか余裕がなさそうに、

「次はお前だ。沈んで貰うのだ」

って、私を無視して言いました。もしかしたら、私を認識してないのかもしれない。

「ゼウスちゃん!」

私は叫びます。

「ゼウスちゃんですよね？ 私が分かりませんか？ 木更です、ゼウスちゃん!」

「ハングド、そしてハイウインドか」

どうやら私がハングドの構成員なのは認識してるみたいです。でも、やっぱり私の呼びかけに返事はなく、

「生かして帰すつもりはないのだ。お前たちには、奴ら同様ひとりでも多くここで消えて貰う」

「奴ら?」

シユウさんが訊ねます。そういえば、さつきもゼウスちゃんは「次は」って。

「ここに来る途中、ミハマ支部の奴らを何人かデュエルで殺してきたのだ」

「なっ」「なっ」「えっ」

驚く、シユウさん、アインスさん、そして私。

「マジで言ってるのかよ。おまえ」

シユウさんの問いに、ゼウスちゃんは、

「だが、何人か逃がしたのだ!」

って、怯えながらいます。

「このままだと罰でまた電球なのだ! だから、私はお前たちを逃すわけにはいかないのだ。たとえばハイウインドでも、ハングドでも。

……木更でも!」

私をちゃんと認識してる!?

そのうえで、ゼウスちゃんはいま、私を殺すって？

「ゼウスちゃん！ どうして！」

あなたの身に一体何があったの？ 私は続けて呼びかけようとしたけど、それより先に、

「上等だ」

シユウさんがいました。

「あつちから姿を見せてくれたのなら好都合だ。テメエが何に怯えて人殺しに堕ちたのかは知らないが、この絶対正義ジャスティスの名にかけて、ここでお前を助け出す！」

そして、ゼウスちゃんに指をさし、

「スキルあり。スピードデュエルでいいな」

「構わないのだ」

ゼウスちゃんがいった所で、ルールが決定。

『デュエル！』

ふたりは同時に叫びました。

シユウ

LP4000

手札4

□□□□

□□□□

□□—□□

□□□□

□□□□

ヘルゼウス

LP4000

手札4

デュエルが始まると、ふたりの前にそれぞれソリッドビジョンによる名前とライフが表示されます。

その記載されたゼウスちゃんの名義を見て、シユウさんが、

「なんだよ。ヘルゼウスって」

「何でもないのだ。いまの私は神ではなく邪神。ゼウスではなくヘルゼウスなのだ」

ゼウスちゃんが自ら蔑むようにいいます。その声からはただの厨二病にはない、本当に暗い背景と心の悲鳴を感じました。

「それよりも、先攻は絶対正義！ お前なのだ」

ゼウスちゃんがいうと、

「ああ。アタシのターン」

シユウさんはいって、最初の手札4枚を引いて、

「モンスターをセット。さらにカードを2枚セットしてターン終了だ」

と、手早くターンを終える。ターンはすぐゼウスちゃんのターンに。

「邪神のターンなのだ。ドロー」

ゼウスちゃんは、カードを引くと、

「1000ライフ払い、魔法カード《ゴズミック・サイクロン》！ 伏せカードを1枚除外するのだ」

この《ゴズミック・サイクロン》は、ゼウスちゃんが以前から使ってた魔法カード。彼女はこのカードで相手の魔法・罫を除去しながら、ライフコストをスキルのトリガーとして能動的に使う戦術が得意だったはず。

早速、上空の暗闇が渦をつくると、シユウさんの伏せカードの1枚が光の靈魂へと姿を変え、螺旋を描きながら渦に飲み込まれます。

「チッ、その伏せカードは《ハンディキャップマッチ！》だ」

ヘルゼウス LP4000↓3000

シユウさんは該当の伏せカードをディスクから引き抜き、除外ゾーンに置き直します。

ゼウスちゃんは続けて手札を1枚墓地に送って、

「手札から《サイバー・ダーク・クロウ》を墓地に送って効果を発動。デッキから《サイバーダーク・インフィニティ》を手札に加えるのだ」「えっ?」

サイバー・ダーク? 私はつい反応します。それは間違いなく、い

ままでのゼウスちゃんのデッキには入っていないカードだったから。

でも、鳥乃先輩から、私の記憶にないカードをゼウスちゃんが使ったという報告は上がってるので、もしかしてサイバー・ダークがそれなのでしょうか？

「魔法カード《サイバー・ダーク・インフィニティ》を発動なのだ」

続けてゼウスちゃんは、先ほどサーチしたカードを使用。

「このカードは、手札・デッキ・フィールドから融合素材モンスターを墓地に送り、ドラゴン族のサイバー・ダークを融合召喚するカードなのだ」

ドラゴン族?! 私には、さらに反応します。

「邪神は、デッキから《比翼レンリン》と《カイトロイド》を融合するのだ。プログラム起動、神ダウングレード。双頭の鳥竜よ、機巧の翼に身を墮とし、黒き罪星を潜り進め！ 融合召喚！ 邪神に従え、ユニオンモンスター《鎧刻竜―サイバー・ダーク・ドラゴン・ノヴァ》！」
現れたのは、まさに情報にあつた機械族かサイバース族と思われる黒くシャープな見た目のモンスター。攻撃力は2100です。

しかも、さつき地味にユニオンモンスターって。

「続けて邪神は《サイバー・ダーク・ホーン》を通常召喚なのだ！」

さらに、黒くシャープな見た目のモンスターがゼウスちゃんの場に出現。こちらは、どうやら機械族の模様。

「《サイバー・ダーク・ホーン》のモンスター効果。召喚に成功した場合、墓地からレベル3以下のドラゴン族をこのカードに装備。そして、このカードの元々の攻撃力は800だが、そこに装備したモンスターの攻撃力を加えるのだ。私は攻撃力1600《サイバー・ダーク・クロウ》を装備。従って攻撃力は2400なのだ」

「なっ」

シユウさんが驚愕します。ソリティアを重ねて上級モンスターを出したならともかく、通常召喚で出てきた下級モンスターが2400って数値をさらっと出してきたのですから。

ですけど、驚くのはまだ早かったです。

「さらに《鎧刻竜―サイバー・ダーク・ドラゴン・ノヴァ》のユニオン

効果を発動。《サイバー・ダーク・ホーン》に装備！ ユニオン状態のこのカードは、装備中、装備モンスターの効果によって装備されたカードとして扱うのだ。従って、ノヴァの攻撃力も《サイバー・ダーク・ホーン》の攻撃力に加算するのだ」

結果。

《サイバー・ダーク・ホーン》 攻撃力800↓2400↓4500

下級モンスターであるはずの《サイバー・ダーク・ホーン》が、《青眼の究極竜》と同じ攻撃力にまで到達。

「マジかよ、おい」

シユウさんが改めて反応する中、

「バトルである。《サイバー・ダーク・ホーン》でセットモンスターに攻撃なのだ！ そして、ダーク・ホーンには貫通能力が備わってる。切れ味を味わうのだ！」

攻撃力4500で貫通!?

「んなもん、喰らってたまるかよ」

シユウさんは伏せカードを表向きにして、

「罨カード《和睦の使者》を発動。このターン、アタシのモンスターは戦闘では破壊されず、自分が受ける戦闘ダメージも0になる」

「だが攻撃は行ったのだ。《サイバー・ダーク・クロウ》の効果。ダメージ計算時にEXデッキからモンスターを1体墓地に送るのだ。邪神は《サイバー・エンド・ドラゴン》を墓地に送るのだ」

いま墓地に送った《サイバー・エンド・ドラゴン》はゼウスちゃんがいままで切り札にしたカードだったはず。それを墓地に？

とはいえ、シユウさんのダメージは0になって、セットモンスターの正体だった《剣闘獣ダリウス》は破壊されずフィールドに残ります。そして、剣闘獣が戦闘を行ったのですから、

「《剣闘獣ダリウス》の効果。このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に、こいつをデッキに戻して効果発動。デッキから別の剣闘獣を特殊召喚するぜ。来い、《剣闘獣サジタリイ》！」

こうしてシユウさんの場に新たな剣闘獣が出現して、

「サジタリイのモンスター効果。手札から《剣闘獣ラクエル》を1枚捨

てて、カードを2枚ドロ―」

効果によつて、シユウさんの手札が肥やされます。

「ターン終了なのだ」

ゼウスちゃんはいいました。

シユウ

LP4000

手札2

□□□□

□□「《剣闘獣サジタリイ》」□□

□―□□

□□「《サイバー・ダーク・ホーン》」□□

□□「《サイバー・ダーク・クロ―(装備カード)》」□「《鎧刻竜―サイバー・

ダーク・ドラゴン・ノヴァ(装備カード)》」

ヘルゼウス

LP3000

手札2

再び、シユウさんのターンが回ります。

「アタシのターン。ドロ―」

シユウさんはカードを1枚引くと、

「自分フィールドに剣闘獣が存在する場合、こいつは手札から特殊召喚できる。来い《スレイブタイガー》！」

シユウさんは一匹の虎を場に出し、

「《スレイブタイガー》のモンスター効果。このカードをリリースし、さらに場の剣闘獣1体をデッキに戻す事で、デッキの剣闘獣1体を剣闘獣の効果扱いで特殊召喚。アタシはサジタリイをデッキに戻し、新たに《剣闘獣ムルミロ》を特殊召喚」

場の2体のモンスターが姿を消すと、新たに一匹の魚族モンスターが姿をみせます。

「剣闘獣の効果でムルミロを特殊召喚した時、フィールドの表側表示モンスター1体を破壊する。消えやがれ、《サイバー・ダーク・ホーン》！」

ムルミロが大きく口を開け、ゼウスちゃんのモンスターを飲み込もうとします。だけど、モンスターは咄嗟に装備中のサイバー・ダーク・ドラゴン・ノヴァを盾にして破壊を免れ、

「《鎧刻竜―サイバー・ダーク・ドラゴン・ノヴァ》のユニオン効果。装備モンスターが戦闘・効果で破壊される場合、代わりにこのカードを破壊するのだ。そしてノヴァが墓地に送られたことで効果発動。デッキから《サイバー・ダーク・ホーン》《サイバー・ダーク・エッジ》《サイバー・ダーク・キール》をそれぞれ1枚まで墓地に送り、さらに《サイバー・ダーク・インパクト!》1枚を手札に加える。邪神はエツジとキールを1枚ずつ墓地に送って《サイバー・ダーク・インパクト!》を手札に加えるのだ」

一気に肥やされるゼウスちゃんの墓地。しかも、手札まで肥やされます。

「ムルミロで《サイバー・ダーク・ホーン》が倒せないのは読んでたぜ。なにせユニオンだしな」

シユウさんはいいいます。

「だから、本命はこっちだ。手札から《剣闘獣ベストロウリイ》召喚。そしてアタシはベストロウリイとムルミロをデッキに戻す。いにしえに生きる猛禽の闘士よ！ 戦友との絆ここに束ね、いまこそ歴戦の勇者となれ！ コンタクト融合！ いくぜレベル6、《剣闘獣ガイザレス》！」

ベストロウリイが召喚されたと思うと、すぐムルミロと一緒にデッキに戻って、出現したのは1体の鳥人型の剣闘獣。攻撃力は2400。

「ガイザレスのモンスター効果！ こいつの特殊召喚成功時、フィールド上のカードを2枚まで破壊する。アタシが選択するのは《サイバー・ダーク・ホーン》そして《サイバー・ダーク・クロール》だ！」

これで、《サイバー・ダーク・クロール》にも身代わり効果があったとしても、場に残るのは攻撃力800になった《サイバー・ダーク・ホーン》。そこから攻撃が決まれば、けっして低くないダメージがゼウスちゃんに入るはず。

「ホーンとクローは墓地に送られるのだ」

「だけど、《サイバー・ダーク・クロー》は効果破壊による身代わり能力はなかったみたいで、ゼウスちゃんのカードは2枚とも破壊されて墓地に送られます。」

「よっしゃあ！ ならばバトルフェイズだ。《剣闘獣ガイザレス》でゼウスに直接攻撃」

「ヘルゼウスなのだ」

「そこ拘るのかよ」

「えー？ つて顔をシウさんは見せてから、分かったよ。ヘルゼウスに直接攻撃だ」

「勢いを削がれた状態でゼウスちゃんに攻撃宣言。しかし、ガイザレスの放った竜巻は突然浮かび上がった可愛らしいハングライダー型のモンスターが盾になって通りません。」

「ゼウスちゃんは、墓地からカードを1枚抜き取って言いました。」

「墓地の《カイトロイド》を除外して効果発動なのだ。ガイザレスの直接攻撃で受ける私の戦闘ダメージを0にする」

「防御まで考えてのデッキ融合かよ。畜生」

「シウさんはいって、」

「だが、戦闘は行っただけ。バトルフェイズ終了時、《剣闘獣ガイザレス》をEXデッキに戻して効果発動。デッキから《剣闘獣サジタリイ》と《剣闘獣ダリウス》を特殊召喚。それぞれの効果発動だ。まずサジタリイで《剣闘獣ウエスパシアス》を捨てて2枚ドロー。続けてダリウスの効果でウエスパシアスを特殊召喚だ」

「言いながら、シウさんはカードを2枚ドローして、」

「来たぜ。速攻魔法《団結する剣闘獣》発動。アタシの手札・フィールド・墓地の剣闘獣をデッキに戻し、新たな剣闘獣を召喚条件を無視してコンタクト融合する。アタシは場の《剣闘獣サジタリイ》と《剣闘獣ダリウス》そして墓地の《剣闘獣ラクエル》の3体をデッキに戻す。いにしえに生きる猛虎の闘士よ！ 戦友との絆ここに束ね、いまこそ英雄の皇となれ！ コンタクト融合！ いくぜレベル8、《剣闘獣ヘラクレイノス》！」

こうして、シユウさんの場には攻撃力3000の剣闘獣が出現。いままでを見るに、このカードはシユウさんのフェイバリットでエースのようです。

「ターン終了だ」

シユウさんはいいました。

シユウ

LP4000

手札1

□□□

「《剣闘獣ウエスパシアス》□□

□―「《剣闘獣ヘラクレイノス（シユウ）》

□□□

□□□

ヘルゼウス

LP3000

手札3

「私のターンなのだ。ドロー」

ゼウスちゃんがカードを引きます。直後、辺りの暗闇が再び渦を巻き、今度はシユウさんのヘラクレイノスとウエスパシアスを飲み込もうとします。

ゼウスちゃんはいいました。

「魔法カード《ブラック・ホール》を発動なのだ」

「なっ」

驚くシユウさん。あのカードは確か、フィールドのモンスターを全て破壊する魔法カード。いまでこそ無制限ですけど、かつては禁止カード入りした経験もある、デュエルモンスターズ界の初期にありがちな雑に強い凶悪カードの1枚。これも、以前のゼウスちゃんのデッキには入ってないカードだったはず。

「ヘラクレイノスを出せて良かったぜ。手札の《コンタクト・オブ・ファイア》を捨ててヘラクレイノスのモンスター効果を発動。その魔法・罫の発動を無効にして破壊だ！」

でも、シユウさんはヘラクレイノスの効果を使い難なく《ブラック・ホール》を対処。

「どうだ」

シユウさんはいいます。

その刹那でした。上空から巨大な雷が落ち、シユウさんの2体のモンスターが焼き払われたのは。

ゼウスちゃんが、いいいます。

「続けて魔法カード《サンダー・ボルト》なのだ」

あのカードは、歴代の元禁止カードの中でも最長の禁止期間を持つ、《ブラック・ホール》より更に雑に強い凶悪カード。

「《サンダー・ボルト》は相手フィールドのモンスターを全て破壊する魔法カードなのだ」

「嘘、だろ」

シユウさんが愕然とします。

そして、私も。

《ブラック・ホール》に《サンダー・ボルト》。こんなカードを使ってくるなんて。

「藤稔さん」

「ここで、アインズさんがいいいます。」

「敵の部隊長の捕獲は完了したよ。ついでにデュエルの際に何人か《ワーム・ホール》送りにできた」

「あっ」

そうでした。本来なら私もデュエルを見守るよりやるべき事があったのに。

「ごめんなさいアインズさん」

私が謝ると、

「別に構わないさ。デュエルが気になるのも当然だからね」

直後でした。

「捕獲だっつ」

ゼウスちゃんが反応します。

「しまったのだ。第三部隊の隊長がいないのだ。そのうえ倒れている

デュエル兵士の数も減っている!? な、なんという失態なのだ。あ、あ、あ、うわああああああああああ

そして、まるで発狂するみたいに、激しく怯えだしたんです。

「お仕置きは嫌だ。お仕置きは嫌だ。お仕置きは嫌だ。電球、また電球なのだ。助けて、助けて助けて助けていやだああああアアアアツ!!」

「ゼウスちゃん!」

たまらず私は駆けだします。でも、ゼウスちゃんはそんな私に拳銃で発砲。左足を撃たれた私は地面に転がります。

「ああっ」

フィールの防壁は張ったものの、軽減しきれず、銃弾は生傷こそ残さなかったものの、込められたフィールダメージが貫通した場合と同じ痛みを私の足に残します。

私は痛みには耐えました。

「藤稔さん!」

駆け寄るアインスさん。

「魔法カード 《治療の神 デイアン・ケト》を発動。大丈夫ですか?」

フィールの光が足を包み、鎮痛を施されたのが分かります。私はアインスさんの肩を借りて立ち上がり、

「ごめんなさい。何度も足を引つ張ってしまったって」

「引つ張られたなんて一度も思ってませんよ」

アインスさんは、努めて微笑んでくれました。

一方、デュエルのほうは。

「せめてこの場の3人だけは始末するのだ! スキル発動、《輪廻独断》!」

ここでゼウスちゃんはスキルを使用します。

「このスキルは私のライフが3000以下になつた後に1度だけ使用可能。デッキ外から永続罫《輪廻独断》を発動するのだ。このカードは発動時に種族を1つ選び、このカードが場に存在する限り、互いの墓地のカードを選んだ種族に変えるのである。神は、いや邪神はドラゴン族を選ぶのだ」

これで、シユウさんとゼウスちゃんの墓地のモンスターは全員ドラゴン族に。

「魔法カード《サイバードーク・インパクト!》を発動! 墓地の《サイバー・ダーク・ホーン》《サイバー・ダーク・エッジ》《サイバー・ダーク・キール》の3体を融合素材としてデッキに戻し、《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》を融合召喚するのだ!」

「さっきのノヴァの効果はその為か」
アインズさんがいます。

「プログラム起動、神ダウングレード。3体の機巧よ、いまこそ合身し、永遠にして終焉を担う邪神なる竜に罪化するのだ! 融合召喚! 地獄の天神に従え、《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》なのだ!」

こうして場に出現したのは、ホーン・エッジ・キールの3体がまさに合体して黒くシャープな竜を形どったモンスター。その攻撃力は1000、ですけど。

「《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》のモンスター効果。このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地から機械族モンスター1体をこのカードに装備するのだ。しかも、この効果はホーン・エッジ・キールと違ってレベル制限はないのだ。私が墓地から装備するのは《サイバー・エンド・ドラゴン》なのだ!」

「おい。サイバー・エンドは機械族だろ?」
シユウさんがいますけど、

「いま、邪神の墓地に眠る《サイバー・エンド・ドラゴン》は《輪廻断》によってドラゴン族扱いなのだ!」

ゼウスちゃんの言葉に、
「あつ、そうじゃねえか」

と、シユウさんは気づかされます。その間に、《サイバー・エンド・ドラゴン》はサイバー・ダーク・ドラゴンに装備され、

「《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》は自身の効果で装備したモンスターの攻撃力および私の墓地のモンスターの数×100の合計だけ攻撃力を上げる。そして、いま装備した《サイバー・エンド・ド

ラゴン』の攻撃力は4000なのだ」

結果、

《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》 攻撃力1000↓1200
↓5200

ゼウスちゃんのものスターはついに攻撃力5000を超えています。

「シユウー！」

アインズさんが叫びます。けど、

「大丈夫だ。アインズ」

シユウさんはいいます。楽観ではなく、努めて笑い飛ばした様子で、

「アタシのスキルを忘れたか？ 発動条件は満たしている。つまり、アタシはこのターン1度だけならライフが0になる事は無え」

そういえば、確かシユウさんのスキルは《根性》。

あのスキルはライフが4000以上で始まったターン、デュエル中1度だけライフが1未満にならなくなるスキルだったはず。

根性

スキル

(1)：ライフポイントが4000以上で開始したターン、自分のライフポイントは1度だけ1未満にならない。このスキルはデュエル中に1度しか適用されない。

(遊戯王デュエルリンクスのエラツタにつき、MISSION21以前と効果が変更されています)

「それはどうかな？ なのだ」

でも、ゼウスちゃんはいいました。

「さらに魔法カード《死者蘇生》を発動なのだ。墓地からユニオンモンスター《比翼レンリン》を蘇生し、サイバー・ダーク・ドラゴンに装備なのだ」

墓地から一見双頭の鳥獣とも取れるドラゴン族モンスターが特殊召喚され、サイバー・ダーク・ドラゴンに装備される。

「《比翼レンリン》を装備したモンスターの元々の攻撃力は1000に

なる。だが、サイバー・ダーク・ドラゴンの元々の攻撃力は最初から1000！ 関係ないのだ」

「一体何を」

シユウが言った所を、

「バトルフェイズ！ 《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》で絶対正義に直接攻撃なのだ！」

ゼウスちゃんが攻撃宣言。すると、サイバー・ダーク・ドラゴンの口にエネルギーが貯め込まれるのですけど、そこから感じるフィール量に私は、

「なんてフィール量」

と、痛みに耐えながら眩きます。

私の見立てでは、ゼウスちゃんから感じてたフィールは全快のときのシユウさんと大して変わらない程度だったのに、まるで全フィールを攻撃に注ぎ込んだかのような威力をサイバー・ダーク・ドラゴンから感じます。

アインスさんが、

「気を付けて、シユウ！ どうやら、相手は全フィールを注ぎ込んだ攻撃で、デュエルの勝敗を待たずして直接あなたを倒す気だ」

「分かってる」

言いながら、シユウさんが身構えます。

「喰らうのだ！ フル・ダークネス・バースト！」

わざわざ攻撃名まで叫んで、ゼウスちゃんは真正面からフィールでリアル化したビームブレスをシユウさんに放ちます。相当な威力なのでしよう。攻撃の余波で私は突き飛ばされ、

「ぎゃあっ」

と、アインスさんの肩から離れ、地面に倒れます。

「うおおおおッ！」

シユウさんは、真正面からあの威力のビームを受けながら、フィールの防壁で必死に耐えます。

ガリガリと減っていくシユウさんのフィール。それが鳥乃先輩のダークドロークくらいに消費された頃、やっと攻撃が止まりました。

ビームが消え、中からプスプスと焼き焦げた音を出しながら、何とか二本の足で立ってる様子のシユウさん。そんな彼女を、先ほどまで殆ど地面に届いてなかった月の光が照らします。見ると、先ほどの衝撃で辺りの樹木がなぎ倒され、この一帯だけ山が開けてしまったのです。

そして、シユウさんのライフは。

シユウ LP4000↓1

4000から1に。

「スキル《根性》を発動だ。この効果によって、アタシは1度だけライフが0にならないぜ」

シユウさんはいいます。でも、

「なら、連続攻撃で沈めるだけなのだ」

ゼウスちゃんはいいます。直後、アインスさんが、

「まさか?! あの時、意味不明に装備された《比翼レンリン》の効果と
いうのは」

「正解なのだ。《比翼レンリン》を装備したモンスターは1度のバトルフェイズで2回攻撃を行えるのだ。《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》の2回目の攻撃!」

再び、サイバー・ダーク・ドラゴンの口にエネルギーが貯め込まれます。しかも、フィール量は先ほどと同じ、いえ、それ以上。

「待てよ。さっきの攻撃にあれだけフィールを込めて、何でまだこんなで出力が出せるんだよ」

シユウさんが驚きいいます。けど、直後私は気づきました。

アインスさんが「攻撃に全フィールを注ぎ込んだ」って読む程の攻撃をしたに関わらず、思ったよりゼウスちゃんのフィールが消耗されてないことに。

「もしかして」

私はいいました。

「ゼウスちゃん。わざと、自分のフィールを調節して弱くみせたままデュエルしてたの? ド○ゴンボールで、気をコントロールしてスカウターに表示される戦闘力を低くみせたみたいに」

返事の代わりにゼウスちゃんはいいます。

「天国でこのヘルゼウスのフィールを見誤ったことを後悔するのだ。フル・ダークネス・バースト第二打ッ！」

サイバー・ダーク・ドラゴンから再び、巨大なビームブレスが放たれました。

「あ、あ」

シユウさんは、すでにボロボロでフィールの防壁を作り損ねた模様。このままだと。

「シユウ！」

アインズさんが叫び、庇おうと駆けだしますが、間に合いそうにありません。私に至っては、駆けだそうにも、自力で立ち上がる事も難しい始末。

ビームブレスがシユウさんを飲み込む。その直前でした。

不意に誰かがシユウさんの前に現れ、その誰かごとビームはシユウさんを飲み込みました。

「うわっ」「きやあ」

その余波で、私は更に遠くまで突き飛ばされます。しかも、さつきより威力が高いせいで、目も開けられられません。

「シユウ！ シユウウウウウッ！」

その中で聞こえるのは、アインズさんの嘆き叫ぶ声。

程なくして、余波は段々小さくなっていきます。目を開けた所、攻撃が終了しビームが段々薄くなっていくのが見えました。

そして、中から姿を現したのは3人の女性の姿。

ひとりとは間違いなくシユウさんでした。彼女自身も何が起きたのか分からず、茫然としてるのが伺えます。

残りふたりは、そんな彼女を庇うように立って、二人掛かりでフィールの防壁を張りビームを何とか防ぎ切った。私にはそう映りました。

その内ひとりはメイド服を着た小中学生くらいの子。そして、もうひとりの特徴を私の脳が理解した所で。

(え?)

と、私は愕然します。

それは、ボブカットの髪型をした物静かな子でした。表情筋が少し乏しいのですが、とても美人さん。歳は今年度15歳になる中学3年生。というのも、私は彼女をよく知ってました。

本来、この場には天と地がひっくり返ってもいるはずもない、私の大事な従妹のひとり。

MISSION17\20.5参照
「冥弥ちゃん！」

私は叫び、アインスさんもほぼ同時に、

MISSION11参照
「ヒロちゃん！」

と、呼びます。

シユウ LP1↓0

ソリッドビジョンがシユウの敗北を告げる中、

「皆様。ご無事でしたかー？」

辺りを照らすような、明るく天真爛漫な様子でヒロちゃんという方はいいました。冥弥ちゃんと並ぶと、まるで陰と陽。それでいて、横目はしつかりとゼウスちゃんに向けられ、見るに光学武器と思われる小型の機械を指と指の間に挟んで3本握ってます。

「た、助かったぜ。ヒロ助」

まだわずかに茫然としながらシユウさんがいうと、ヒロちゃんは、

「ヒロ助じゃありません。ヒロちゃんです」

「拘ってる場面じゃねーだろ」

以前から彼女との間でやってるやり取りなのでしょう。突っ込みを入れながらシユウさんは、やっと息をつき、茫然とした状態から抜け出します。

「で、隣の奴は一体」

シユウさんの言葉に、

「従妹です。私の」

と、私はいいました。

「私たちの中ではゼウスちゃんと一番仲良しだった子で、藤稔 冥弥 といいます。でも、ファイルは知ってても裏の世界には関わってなかつたはず」

やっと足の痛みが引いてきたので、私は軽く紹介を済ませながら立ち上がり、

「冥弥ちゃん。どうしてここに」

「合流……しました」

冥弥ちゃんはいいます。

「どこに？」

いえ、流れから別動隊とは思いますが。

ヒロちゃんという方がアインスさんやシユウさんの知り合いという事は、彼女はハイウインドの関係者と推測できますし、そんな方と一緒にですから、他に合流先は浮かびません。

「察して、欲しい」

冥弥ちゃんはいって、

「それよりも、いまは」

と、赤外線を飛ばして、ゼウスちゃんに強制デュエルを仕掛けます。

「な、冥弥!？」

驚くゼウスちゃん。

「本気なのか？」

「ここでゼウスを止めるのが、私の役目……です」

「地津の指示か」

ゼウスちゃんは、辛そうに俯き、いいます。

「私は、また大切な者を殺らなくてはいけないのか」

また。という事は、すでにゼウスちゃんは大切な人をひとり殺した後なのでしよう。多分、従姉の私よりずっと大切な誰かを。

「ゼウス。その時は……私を捕獲してください。ロストと、闇のフィールで駒になる以上。……殺すより、そのほうが利になります」
とんでもない事をいう冥弥ちゃん。でも、

「駄目なのだ!」

ゼウスちゃんは嘆きます。

「したくても、その許可は出てないのだ! 許可が出たら、いまのデュエルだって殺す気満々の攻撃なんてしてないのだ!……邪神に現場の判断をする権利はないのだ。私は、大依さんの言う通りに行動

しない」と

「大依さん？」

冥弥ちゃんの問いに、

「あっ」

びくつと体を震わせるゼウスちゃん。そして、怯えながら辺りを確認してから、

「無駄口は終わりなのだ」

と、ゼウスちゃんはいいます。

やっぱり、ゼウスちゃんの行方不明にはあの人が関わってたようです。無事に戻れたら、すぐに報告しないと。あと、地津ちゃんにも伝えたいほうが良さそうですね。ハングドとしては違反行為になりますけど。

「皆様」

ヒロちゃんがいました。

「彼女の足止めは私と冥弥さんで行いますから。シユウ様と藤稔様は直ちに安全圏に帰投、アインス様は一時お嬢様の下に合流をお願いします」

「あ、あれをお前たちふたりに任せろってのか？」

実際にデュエルして、実力を思い知ったシユウさんが言いますけど、

「分かりました」

アインスさんがいます。

「おいー！」

シユウさんが叫ぶ中、ヒロちゃんは続けて、

「あ、ですけどその前に、周りのフィール・ハンターズは全員回収しちゃってください。りん様が近くの集会場を手配してくれたそうで、医務、洗脳解除、尋問それぞれの人員が待機しています」

なおミハマ支部への疑いは、合流前にゼウスちゃんが殲滅してしまっただけという事実によって解決しています。

「分かりました」

私は率先してうなずき、倒れている他のフィール・ハンターズの下

に向かいます。

そこをアインスさんが、

「藤稔さん。無茶をなさらず」

「大丈夫です。もう、痛みは治まりましたから。それにフィールもまだ余裕がありますし、私も任務続行で神簇さんの下に合流します」

私が努めて微笑むと、

「分かりました」

アインスさんはすまなそうに、

「本当なら無理するなど言いたい所ですが、いまは猫の手も借りたい状況です。力を貸してください」

「はい」

私はいいました。

冥弥

LP4000

手札4

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

□□□□

ヘルゼウス

LP4000

手札4

そんなやり取りの間に、デュエルが始まりました。

しかし、ふたりが最初の手札を4枚引いて直後、

「えっ?」「は?」「なにを!?!」

私、シウウさん、アインスさんはそれぞれ驚き、反応します。

何故なら、冥弥ちゃんは先攻の確保、そして最初の手札に保有していたフィールを一気に全部注ぎ込んで、デュエル開始早々フィールを全損してしまっただからです。

「なにをする気なのだ、冥弥」

ゼウスちゃんが訊ねた所、冥弥ちゃんは、

「さつき、言った通りです。……足止めです」

と、

「私の先攻。私は……フィールド魔法カード《アンデットワールド》を発動します。フィールド・墓地のモンスターは……全てアンデット族になります。そして……私とゼウスは、アンデット族モンスターしかアドバンス召喚できなくなりました」

冥弥ちゃんのデッキは、この場にはないハイウインドのシルフィさんとまた違った、この《アンデットワールド》を使ったタイプのアンデットデッキ。

続けて、冥弥ちゃんは手札をディスクに置いて、

「《終末の騎士》を通常召喚。……《アンデットワールド》の効果で、このモンスターはフィールド・墓地でアンデット族になります。そして……召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した《終末の騎士》は、デッキから閻属性モンスターを墓地に送ります。……私は、《ゾンビキャリア》を墓地に、送ります」

さらに、冥弥ちゃんは手札を1枚今度はデッキの一番上に置きます。

「《ゾンビキャリア》の効果。……手札を1枚、デッキの一番上に戻して特殊召喚します」

これで、冥弥ちゃんの場合には2体のモンスター。さらに《ゾンビキャリア》はチューナーです。

「レベル4《終末の騎士》に、レベル2《ゾンビキャリア》をチューニング。口上自粛。シンクロ召喚。……きて、レベル6《アンデット・チャージ・ウオリアー》」

こうして召喚されたのは、《スターダスト・チャージ・ウオリアー》がアンデット化したモンスター。攻撃力も元のモンスターと同じ2000です。

「《アンデット・チャージ・ウオリアー》のモンスター効果。……このカードがシンクロ召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドロ。この効果は、フィールドに《アンデットワールド》が存在する

場合のみ処理される代わりに、1ターンの回数制限は、ない」

冥弥ちゃんは先ほど《ゾンビキャリア》でデッキトップに戻したカードをドローします。すると、

「ドローした《テイメンション・イニシャライズ》の効果。……このカードは、カードの効果によってデッキから手札に加わった時……エンドフェイズまで相手に公開し続ける事で発動可能。私は、この効果で除外されてる私のモンスターを、全て墓地に戻す。……その後、フィールド・墓地に存在するモンスターを可能な限りエクストラデッキに戻します」

結果、S召喚したばかりの《アンデット・チャージ・ウォリアー》はEXデッキに戻り、代わりに除外された《ゾンビキャリア》が墓地に戻ります。

「冥弥？ 一体、何をするつもりなのだ？」

訊ねるゼウスちゃん。ですけど、冥弥ちゃんは止まらず、

「《アンデット・チャージ・ウォリアー》がフィールドを離れた場合、自分・相手の墓地から素材モンスター1体を蘇生できます。私は墓地から《終末の騎士》を蘇生、効果は使わない」

再びアンデット化した《終末の騎士》がフィールドに舞い戻ると、冥弥ちゃんは公開していた《テイメンション・イニシャライズ》をデッキトップに戻し、いいました。

「手札を1枚デッキの一番上に戻し、墓地の《ゾンビキャリア》を蘇生。……レベル4《終末の騎士》に、レベル2《ゾンビキャリア》をチューニング。口上自粛。シンクロ召喚。……きて、レベル6《アンデット・チャージ・ウォリアー》。効果でドローします。そして、ドローした《テイメンション・イニシャライズ》の効果が発動」

ここでアインズさんが、

「まさか、無限ループか!?!」

「無限ループだって?」

シュウさんが訊ねます。続けて私も、

「でも、この無限ループだと単純に繰り返し同じプレイングを続けるだけです。それではゼウスちゃんに勝利することは」

「いや。それが目的なのだろう」

アインスさんはいいました。

「どういうことですか？」

私が訊ねると、

「まさに〃繰り返し同じプレイングを続ける〃事が目的なんだ。高速でプレイングを続ける事でタイムアウトまでの時間を限界まで引き伸ばす。その間、デュエルを請けてしまった相手はこの場を離れ戦線に戻る事はできない」

そんなアインスさんの解説に、ゼウスちゃんは「あ」となって、

「冥弥！ まさか、デュエルで足止めとはそういう事なのか？」

「墓地に戻した《ゾンビキャリア》を……シンクロ召か……ドロート

《ディメンション・イニシヤライズ》の効果を……」

冥弥ちゃんは、ゼウスちゃんの問いには応じず、ただただ同じプレイングを繰り返す。返事をする時間さえないのが分かります。

「恐らく彼女は最低でも0・i0過ぎ、まだ2時間も先の鳥乃とミストランのデュエルまで、このプレイングを続けるつもりだろう。……かの漫画の日の呼吸鬼〇の刃参照のように」

今日は不思議とジャンプ漫画を例に挙げる人が多い気がします。

「だから言いましたよー。その位の時間は確保できる予定ですって」

ヒロちゃんがいいました。隣で冥弥ちゃんも、プレイングを続けながら首だけ一回縦に振ります。

「助かります。おふたりとも」

アインスさんが言った直後でした。私たちの会話の隙について、ゼウスちゃんが串に挿した秋刀魚の造形をしたビームサーベルを抜刀。冥弥ちゃんに襲い掛かりますけど、ヒロちゃんが指の間に挟んだ光学武器から同じくビームの刀身を出してゼウスちゃんの一撃を受け止めます。どうやら、ビームクナイだったみたいです。そんな物が存在する事に私としては衝撃ですけど。

さらにヒロちゃんは、もう片方の腕から巻物を出すと、それが機関銃に形を変え、

「近代忍法！ 火遁・魔震丸の術！」

なんか変な事を言いながら、機関銃をゼウスちゃんに向けて乱射。ゼウスちゃんはフィールの防壁でダメージを防ぐも、銃弾の衝撃で最初の位置まで押し戻されます。

その間に、私たちは敵勢力を一か所に集め、再び発動した《ワーム・ホール》で全員の隔離に成功。最後に、フィールを全損してるシユウさんが自分のDホイールと一緒にゲートを潜って帰投した事で、私たちのここでの仕事は一旦終了します。

「ヒロちゃん。ふたりをどうかお願いします」

アインスさんはヒロちゃんに伝え、私も、

「冥弥ちゃん。どうか、死なないで」

言い残してから、この場をふたりに任せてDホイールで山を下ります。

その、途中でした。

山を下った辺りの位置から、紫色の光で宙に模様が描かれたのは。あれって確か。

「地縛神の模様!?!」

私が驚いて口になると、さらにアインスさんが、

「しかも鳥乃の地縛神の模様とも、今日散々見てきたフィール・ハンターズのそれとも違う。まだ誰も情報を持ってない、3人目の地縛神の所有者が現れ、召喚したらしい」

そう口にする間に、模様の下から出現したのは一つ目の巨大な地縛神のモンスター。

「急ぎましょう。神簇さんかガルムちゃんのどちらかが、新たな所有者とデスデュエルをしているのかもしれない」

アインスさんの言葉に私は、

「分かりました」

と、応えて、少し怖かったですけどDホイールのアクセルを踏み、全速力で向かいます。

道中、2・3回事故しかけました。